

バカとダ・カーポと桜色の学園生活

慈信

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文月学園2年Fクラス、吉井明久がいつも通りのとんでも日常を送っていた頃、彼の目の前にひとひらの桜が舞い降り、気がつけば周囲の景色が変化していた。そこから吉井明久の生活が変わっていく。

目次

プロローグ	1
第一話	6
第二話	18
第三話	33
第四話	42
第五話	51
第六話	60
第七話	71
第八話	81
第九話	92
第十話	102
第十一話	116
第十二話	128
第十三話	141
第十四話	152
第十五話	165
第十六話	180
第十七話	190
第十八話	204
第十九話	218
第二十話	231
第二十一話	242
第二十二話	253
第二十三話	267

第四十八話	621
第四十七話	609
第四十六話	593
第四十五話	580
第四十四話	565
第四十三話	551
第四十二話	540
第四十一話	527
第四十話	514
第三十九話	502
第三十八話	489
第三十七話	476
第三十六話	463
第三十五話	449
第三十四話	434
第三十三話	418
第三十二話	398
第三十一話	381
第三十話	365
第二十九話	350
第二十八話	334
第二十七話	320
第二十六話	311
第二十五話	296
第二十四話	284

第七十三話	972
第七十二話	960
第七十一話	949
第七十話	935
第六十九話	922
第六十八話	902
第六十七話	888
第六十六話	877
第六十五話	858
第六十四話	844
第六十三話	825
第六十二話	807
第六十一話	791
第六十話	781
第五十九話	770
第五十八話	757
第五十七話	740
第五十六話	718
第五十五話	703
第五十四話	690
第五十三話	681
第五十二話	670
第五十一話	655
第五十話	642
第四十九話	632

エピソード
第九十五話
第九十四話
第九十三話
第九十二話
第九十一話
第九十話
第八十九話
第八十八話
第八十七話
第八十六話
第八十五話
第八十四話
第八十三話
第八十二話
第八十一話
第八十話
第七十九話
第七十八話
第七十七話
第七十六話
第七十五話
第七十四話

127712521233121712001185117411621140112911171103109210821068105710481037102310121001 993 983

プロローグ

「はあつ、はあつ！ くっ……！」

僕、吉井明久は今ものすごいピンチに追われていた。具体的に言うとうと――

『待あて吉井いいい！』

『テメエ一人だけ彼女持とうなんて許されると思うんじゃないかねえぞおおお！』

『異端者は死あるのみだあああ！』

背後から徐々に迫る黒いマントに身を包んだ特異な集団、僕のクラスメイトである筈の者達ことFFF団。彼等は同じ信念を志し、一人でも裏切ろうとすればその卓越した団結力で異端者を誅戮し、この世全てのカップルを塵殺しようという信念を持つ凶悪な集団だ。

さて、何故今僕がそのFFF団に追われているかと言うと、事の始まりは朝のホームルーム前の話だ。

今日もなんてことない学生生活が始まり、いつものように友人であるFクラス代表の坂本雄二、僕らFクラスで数少ない女子の一人である木下秀吉、寡黙なる性職者（ムツツリーニ）こと土屋康太。僕の有人に今朝僕が見た不思議な夢の事を話した。

夢の内容は辺り一面に韶光の広がる小さな島にいる夢。そこでは本当に平和な生活があった。そして、その中で妙に可愛かったり綺麗だったりする人が大勢いたんだよね。しかもその人達と少数の男子に僕が混じって笑い合ってた夢。

その内容が何処から漏洩したのか、そしてどんな風に広まっていたのか、僕は今この状況にいる。

「アキいいい！ ウチに黙って女子と付き合うなんて許せないわよ！」

「明久君！ 待ちなさい！」

「明君、不純異性交遊は感心しませんよ！」

「ていうか、何時の間にか姉さんまで混じってるしいい!?」

美波や姫路さんがいるのはいつもの事だからと無理やりつつも納

得はできる。しかし、何故に姉さんにまで!?

「夕飯の材料を買っている最中、アキ君が逃げているのが見えてそれを追っている一人に事情を聞いたところ、明君が複数の女子達と恋人になつているという情報を聞いたしだいです」

「それ誤解だから! みんなが聞いたのは僕が今朝見た夢の話であつて、現実でそんな事になつてゐるわけが——つて、どわあああ!」

姉さんに必死で弁明してる最中、僕に向けてカッターナイフが飛んできた。見てみると、僕を追っている連中の中からとてつもない殺気を帯びているドリルみたいなツインテールの少女がいた。

「豚野郎っ! その他女性を傍らに置くだけでは飽き足らず、お姉様にまで手を出してタダで済むなんて思わないでくださいよ!」

「清水さん! それ誤解だから! 他の女子はともかく、美波とデートとかなんてそんな勇気のある人がいるなんてのはまずありえないから!」

「アキ、すぐに止まって目を閉じて歯を食いしばりなさい!」

「お姉様を侮辱しますか、この豚野郎!」

「なんか二人の怒りが更にヒートアップしてるしい!」

何故だろう? 普通に考えれば美波だけでなく、姫路さんや他の女子とデートなんてまずないと思うんだけど。

「よしっ! A班とB班は清水に続け! C班とD班は左右に別れて明久を追い込め!」

「雄二! 貴様は事の発端を知っているのに何故僕を追い詰める!」

何時の間にか雄二が指揮を取つてFFF団及び、女子達を誘導して迅速果敢と指示していた。

「明久、お前は忘れていると思うがな……俺はお前の幸せが許せないんだ!」

「知ってるよ! もう聞くまでもないから!」

「そしてもうひとつ」

「まだ何かあるの?」

「俺は……お前の不幸が心底楽しくて仕方がねえんだ!」

「外道! 鬼っ! 悪魔! お前は最低だ! もう友達ですらないよ

！」

揃いも揃って本当に最低ぞろいだ。友人であるはずのみんなはこんなだし、美波や姫路さんには関節技や殺人弁当、暴行を受ける日々だし、家でも姉さんから殺人料理に関節技に暴行にセクハラやら理不尽な毎日でもう心身共に限界が近い。

なんで僕ばかりこんな目に会うんだよ？　こんな毎日なんてもう嫌だ！

僕は消えようとしている命を守るために遁走した。

「せめて……夢の中だけでも幸せでいたいよ」

ほとんど覚えてないけど、今朝見た夢の世界が存在したらそこで生きたいと願ったそんな時だった。

僕の目の前に、桜の花びらが一枚降ってきた。おかしい。今はもう秋の季節のはずなのに、今桜が咲いてるわけがない。

僕の目の前に降ってきた不可思議な出来事に気を取られた間に辺りの空気が変わった気がした。僕は意識を戻すと途端に辺りが静かになった。

いや、静かになっただけじゃない。辺りの風景が変わった。今はもう放課後の時間帯で空は赤くなり始めてたというのに見上げた空は青いまま。太陽だってまだ頂点にあった。

しかも、僕が住んでいた町とは雰囲気が全然違っていた。なんだかさな町にポツンと立っていた。

「……あれ？」

いや、静けさや町の雰囲気が変わったことよりもっと不可解な事が起こっている。

「制服が……ダボダボ？」

そう。僕の制服が何故かサイズが合っていない。最近姉さんがいる手前、食事も取っているのだからそれなりに成長が進んでいるはず。

なのに制服の襟が肩に近いところまでいってるし、袖だって掌までいってる。まるで体が縮んでいるみたいだ。それに――

「これって……どう見ても桜だよな？」

そうだ。凧が吹いているし、ここから僅かに見えるディスプレイは秋の時期を示している。だというのに、どこもかしこも桜が満開の状態だった。

「……一体何がどうなってるの？」

その場でポツンと立ち尽くしながら色々考えてみるが、やはり何もわからない。

このままぼーっとしてはわからないの一点張りになりそうなので何処かここが何処なのかがわかる所へ行こう。そうだ、本屋か図書館ならどうだろうか。

僕はダボダボになってしまった制服の袖と足の裾をもしものために持っていた安全ピンでとめて適当に道路をぶらぶらした。十分かそこらで小さな本屋が見えたので真っ先にその本屋へと足を踏み入れた。

そこで適当な雑誌を見てみると妙な文字が目に入った。

「何これ？ えっと、『初音島 非公式新聞部が送るミステリースポーツ』？」

非公式新聞部って何だろうって思ったり、ミステリースポーツってそんなものが雑誌に普通載るかなというツツコミも入れたいけど、最初の部分の初音島っていう名前が気になった。

いくら成績が下位だからといって初音島という名前が日本の一部にあるなんてのは聞いたことはないと思う。僕が忘れているという可能性もなくなはないかもしれないけど。

僕は気になって他の雑誌も調べてみた。

30分もしてわかったこと。それはまずこの初音島の場所なんだけど、一応日本の一部であるのは間違いないようだ。ただ僕が興味なかったから記憶にないだけというのもあるだろうが、かといって……この雑誌に載ってる情報。桜が一年中咲いている島なんていくらなんでも聞いた事がない。

そんな摩訶不思議な現象がある島ならどの土地でも有名になって

るはずだ。それに念のため偶然近くにあった図書館にも寄って今度は文月学園の事も調べてみたけど、初音島とは逆に文月学園の事なんて何も載っていなかった。

うん。もう確定的だと思う。僕は――

「異世界……マジで来ちゃった」

僕は青空を見上げてそれしか呟くことができなかった。

第一話

「さて……異世界なのがわかったけど、それまでだね」

僕はいつもどおりFFF団やその他大勢に追いかけられたら秋だというのに何故か桜が満開の小さな島に来てしまったらしい。

騒動から逃げられたのは幸いと言えば幸いなんだけど――

「問題はこれからだね。一応海が見えるから、いざという時は塩水でどうにかやっていけるし、貝や魚だつてどうにかなるかも」

小さな島が故か、橋を除けば四方が海で囲まれているのだ。うまくやれば魚や貝に塩水、そこらの雑草も使えば僕なら何日も生きていける自信はある。伊達に貧乏暮らしが長いわけじゃない。

母さんからの仕送りが少ない時の暮らして鍛えられたハングリ―精神がここでも役に立つとは思わなかったけど。

「ともかく、このまま文無しってわけにもいかないよね。バイトとか……つて、今の僕には住所もないんだよね」

以前ラ・ペデイスでのバイトは店長がアレだったから書類とかはいらないけど、ゲームショップや他の店でのバイトは申請するのに身分証明の書類が必要になる。今の状態ではバイトすることすらままならない。

本格的に困った状態というわけだ。まさかこの歳でホームレスとは。かと言ってこのまま考えたって事態がいい方向に進むとは思えないんだけど。

「さてさて、本気でどうしたものか」

困りに困って首を捻りながら適当に歩いていると不意に僕に近寄ってくる女子が来た。

「ようこそ風見学園へ！ 文化祭、楽しんでくださいね！」

「へ？ あ、どうも……」

急に声をかけられて堅い態度のまま一枚の紙切れを渡され、じっと見るとそこには『風見学園 文化祭』という文字がくつきりと載っていた。

見るとそこそこ広い学校が目の前にあった。どうやらぼーっとし

てる間に僕は風見学園という学校へ足を運んでいたようだった。

どうしようかと一瞬迷ったけど、このまま考えても当分はいいアイディアなんて出そうにないし――

「……気分転換でもしようかな」

僕はこの学校の文化祭を楽しんでいこうと思い、風見学園へと足を踏み入れたのだった。

風見学園の文化祭は普通の学校よりもかなり凝ってるのか、屋台やら演劇やら普通の学校では味わえないようなものがたくさん並んでいた。

この学園の創立者が余程のお祭り好きなのかどうかはわからないが、ここまで賑やかだと色々回ってみたくなるよね。お金がないのがつらいけど。

なんて思った時だった。

『ねえ、いいだろ？ 特に誰かとなんて予定はないんだろ？』

『そ、それは……そうんだけど……』

「ん？」

校舎の裏辺りに足を運ぶと物陰から男女の話し声が聞こえてきた。

こういう所での男女との会話を聞くのは悪い気がするけど、こういう行事だと大事が起こりやすいからつい気になっちゃうんだよね。

そんなわけで僕はこっそりと件の男女の声に聞き耳を立てた。

「ねえ、なんでそんなに答え先延ばしにすんの？ 白河、いつもそうだよな？」

「え、えっと……」

男子の方は髪の毛の一部金髪に染めたチンピラに見えなくもない外見だった。その男子が白河さんと呼んだ少女と向かい合っただ喋っていた。

白河さんと呼ばれた少女は壁を背にしてずっと答えづらそうにしていた。しかしなんともものすごい容姿だな。

あれならあの男子がしつこく食いつくのも納得ができる。ピンク

の髪を結ってスタイルは姫路さんほどでないにしろ同年代の子からすればすごい成長の度合いだろうし、なんにしても外見がすごい。

あの男子は同じ学園の生徒みたいだけど、下手をすればこれが初対面の人で複数なんてこともありえたかもしれない。それだけ綺麗……いや、あれは可愛いという方が的確な表現かな。

「ねえ、いいだろ？ 俺と文化祭回ろうよ？」

「そ、その……」

白河さんが困ったように言葉を濁しながらどうにか上手に断れないかと言葉を選んでるみたいだけど、男子の方はそれがかえってつけあがらせる材料になっているのか、しつこく当たっている。

「な、俺と回ろうよ」

「や、その……」

果てには腕を掴まれて白河さんがどうしようかと切羽詰った表情をした。流石にこれ以上はまずい気がするな。……仕方がない。

「はいはい。そちらのお二人さん。男女でのお楽しみはそこまで！」

手をパンパンと叩いて僕は二人の前に出てきた。

「な、何だよお前？」

チンピラ風の男子が僕を見るとやばいと言いたそうな表情で駭魄して一歩後ろに下がる。

「二応風紀委員だね。生徒会の方からの要請があつて見回りをしていたのですが、何やら少々看過できないものが見えたので」

僕はチンピラ風の男子と白河さんを交互に見てから最後にチンピラ風の男子へと視線を移した。

「う……嘘つくくんじゃねえよ。テメエみてえなバカ面の風紀委員なんか見たことねえよ」

……こつちでもバカつて言われた。初対面の男子に。どこでも僕ってバカ呼ばわりされる運命なんだ。ちよつと涙が出そうだったけど、ここはぐつと堪えよう。

「まあ、それはともかく……あんまり彼女を困らせない方がいいですよ。でないよ——」

僕はチンピラ風の男子に近づき、彼の耳元まで顔を近づけて一言二

言告げると彼は青ざめた表情で、

「く……覚えてろ！」

そんな漫画にありそうな捨て台詞を残して去っていった。とりあえず悪は去ったと。

あ、ちなみにさつき言ったのは彼の行動を学校だけでなく、web配信も辞さずって言ってから姉さん直伝のセクハラ紛いの言葉を吹き込んだらあっさりとおの様な様だ。

うん。学校に知られたりするだけならともかく、web配信なんて恐ろしい事を言われて精神追い詰められた上に姉さんのトドメのセクハラ紛いの一言だ。並の人間が耐えられるはずがない。

彼の気持ちは少しわかる。僕だったらきつと問答する間もなく社会生命がああ世行きだっただろう。

「あ、あの……」

「ん？」

なんて事を考えていると、白河さん、だったか……が僕に声をかけてきた。

「あ、ありがとね。助けてくれて」

「ああ……ううん。流石に放っておくわけにもいかなかったし」

「本当にありがとね。あ、私白河ななか。よろしくね」

「うん、僕は吉井明久。よろしくね、白河さん」

「ななか」

「……はい？」

僕が首を傾げると白河さんがずい、と距離を詰めてきた。

「ななかでいいよ。さつき助けてくれたから」

「え、いや……でも、初対面で……」

「な・な・か！」

「えと……ななか、ちゃん……」

『ちゃん』付けもいらなただけど……ま、いっか♪」

なんとというか、すごい積極的っていうか、フレンドリーな娘だなあ。

さつきの場面を思い出すと、あまりそういうイメージがなかったけど、これを見ると彼のあの行動に出るもうなずけるよね。それだけ男

を惹きつける魅力がこの子にはある。

そんな事を考えていると不意にななかちゃんが僕の手を握ってきた。

「え？　ちよ、ななかちゃん!？」

いきなり手を握られると、なんというか……すごい照れる！

「明久君って、ここの生徒じゃないんでしょ？」

あ、さっきの事か。てことは、今は制服の種類でも確かめたのかな？

まあ、普通に見ればわかることだよな。

「ああ、うん。勢いで行けば少しはごまかせるかなって思ってた」

まあ、あの場面でいきなり第三者が入ってきた事態に彼は動揺していて制服を見るどころじゃなかったろうからどうにかうまくいったけど。

「ひよっとして、本島から来たの？」

本島と言われて一瞬何かと思ったが、ひよっとして島の外の事を言ってるのかと思ひ、

「うん。ちよっこの学校の文化祭に興味があつてね」

本当は違うけど、学園前まで来てから興味は出てきたからまるつきり嘘でもないんだよね。

「ふくん……でも、本島からわざわざ制服を着て？　それにサイズも合っていないし」

「う……」

鋭い指摘だった。確かにわざわざ遠くから来るのにサイズの違う制服で来るような奴なんていないだろう。

最初っから僕の説明は穴だらけだった。

「えと、その……」

「ん？」

困った。こういった時どう説明すれば納得してもらえるのか。色々迷った後、僕の口から出したのは、

「家出して来たんです」

うん。駄目だね。自分の口で言っというてなんだけど、まず納得でき

るとは思えない。

「家出?」

「そ、そう! 学校では毎日友人には命を狙われる日々だし、家では姉さんから折檻やらセクハラやらの毎日でもう我慢ならなかったから出てきたんだよ!」

うん、全部が全部嘘ではない。確かにあそこでの毎日にはもう限界が来ていたのだから家出というのも完全な嘘ではないはず。

「そう……色々、大変なんだね」

ななかちやんが苦笑して答えた。ていうか、今の話信じちゃったの!?

「そっか……そんな毎日送ってたら、それはねえ……」

「ん?」

何かボソボソと言っていたようだけど、聞き取れないなあ。彼女の言う事が気になっていると、

「いたぞー!」

「遂に見つけましたよ、白河さん!」

「え!! 何? 何なの!?!」

何時の間にか左右から複数の生徒が僕達を挟んで待ち構えていた。「あちやあく……今度はこっちかあ」

ななかちやんが額を手で抑えて頂垂れていた。何か心当たりがあるようだ。

「えっと、ななかちやん? この人達は?」

「うん、うちの手芸部の人達」

「手芸部?」

手芸部って、あの服や小物をつくる部活の事だよね? そんな人がななかちやんに声をかける理由は……なるほど。

「大方何か自分達のつくった服を着てくださってこと?」
「うん」

そう考えれば普通に納得がいく。これほどモデルとして相応しい女子などそうそういるもんじゃないだろうしね。

しかし、当の本人はあまり乗り気じゃなさそうだし。

「うう〜……どうしよう?」

「すごく困ってるみたいだし、これは助け舟出した方がいいかな?」

「ななかちゃん、嫌かもしれないけど……ちよつとだけ我慢して?」

「へ? ……て、きやつ!?!」

ななかちゃんがキョトンとしてる間に彼女の方を抱いて膝の裏を抱えて自分の胸元に寄せた。簡単に言えばお姫様抱っここの状態だ。

「ていうわけで、全力疾走! ダツシユ逃亡!」

「えええええ〜!?!」

「な!?! はや……じゃない! 全員急いで追うんだ!」

「りよ、了解!」

僕と彼等の鬼ごっここの時間が始まった。

「待つんだ! 我々の話を聞いてくれ!」

「君ならきつと似合う筈だ!」

背後からそんな声を聞きながら、僕はななかちゃんを抱えた状態で廊下を走っていた。

「ていうか、女子とはいえないなんで人ひとり抱えてあんなに速く走れるんだ?」

「化け物かよあの男……」

そりやまあ、こういった状況を体験したのは一度や二度じゃないからね。

「明久君、本当足速いよね。しかも女の子抱えて」

「まあ……正直言つて慣れかな?」

こんな事に慣れてる学生なんて普通はいないだろうけど。

「あはは! 明久君つて、面白いね♪」

この状況で面白いと笑っていられるなんて、随分とマイペースな子だなあ。

「それにしても、随分と追ってくるよね。そんなに自分達をつくった服を着てほしいの?」

「それはまあ……いよいよ今年の文化祭でミスコンが復活したのだから」

らな。手芸部としては自分達のつくった服を白河が着て出場、というのが何より重要なのだろう」

「なるほど、ミスコンか。それに手芸部がつくった服を着てなかなかちゃんが出れば宣伝の効果は抜群ってわけか。なるほどなるほど……って、誰君!？」

何時の間にか僕達と並行して走っている男子がいた。

紳士的に見えなくもないが胡散くさそうな雰囲気を出した河童頭の男子が僕らの真横にいた。

「おっとこれはこれは、お初にお目にかかります。私、杉並と申します」

「あ、吉井明久です。って、そうじゃなくて……なんで僕らを追いかけてるの？ しかも意外と速いし」

「おっと、警戒しないでいただきたい。俺は君達に危害は加えない」

助け船を出すだけだと言って杉並と名乗った男子は懐から一枚の紙切れを出して僕に寄越した。

「これは？」

「こういう時のために用意しておいた脱出経路だ」

「いや、ありがたいと言えはありますがたいけど、何か隠し通路みたいなものまで書かれてる気がするんだけど」

「おっと、それは我が非公式新聞部の本部の道筋だ。君達のはこちらだ」

本部って何!? 非公式新聞部って、何!? 部活っぽい名前ですってるけど何か秘密組織的な雰囲気がちらちら見えるんだけど!？」

「さて、これでも俺は忙しい身なのでね。君達の検討を祈ろう。では、アデューー!」

そう言って杉並は僕達とは別方向へ去っていった。

「……何なんだろう?」

「でも、いいものもらったよね」

「まあ、この状況を考えればいい助け舟だったね。とりあえず、急ごうか」

今更になって気づいたけど、女子をお姫様抱っこしてる状態で学園

の中を走り回っているのだから一目につきやすい。
そろそろななちゃんが下ろさないと後で彼女に対して何か誤解
が起これないとも限らないし。

杉並君からもらった紙を開き、そこに描かれた風見学園の見取り図
のようなものを見て一目につかなそうな場所に印がついてたので、そ
の内の一ヶ所に非難して僕らは休憩していた。

「ふう……とりあえずここで少し休んでいこうか」

「うん！ 結構面白かったよね！」

「こっちは必死だったんだけどね」

僕は休憩しながらも今も尚マイペースで楽しそうにしているなな
かちゃんと会話を広げていた。

この笑顔を見てると連中が自分達をつくった服を着せてミスコン
に出したい理由もよくわかる。

「ていうか、さつきからずつと逃げてるけど……なんでミスコンに出
ないの？ ななかちゃんならきつといいところまでいけると思うん
だけど」

これだけレベルの高い美人なのだ。ミスコンに出れば優勝も十分
有り得る。

「うくん……なんでって言われても、興味ないし……人前だと恥ずか
しいから」

「ふくん……。何かもつたない話だなあ〜」

僕ならななかちゃんくらいの美少女が来るとわかれば絶対に見に
行くって言える自信はある。

「……明久君は、私がミスコンに出ると嬉しい？」

ななかちゃんが僕の手を握ってそう尋ねてきた。なんか……何度
握られてもドキドキするよね。

しかし嬉しいかどうか。正直出るところを見れば嬉しいけど、あ
んまり下手な事言って呆れられても困るし。

「嬉し——写真が出たら1グロスほど買い占めたいと思う」

「……うん、明久君って、アレだよ。嘘のつけない人っていうか」

あれ？ 僕、言葉の選択肢を間違えた？

「そ、それにしても！ 中々追っ手が諦めてくれないね！ これじゃあ、ななかちゃんがゆつくり文化祭回れないよね！」

「あ、誤魔化した」

それは言わない約束だよななかちゃん。

「でも、本当に中々諦めてくれないね。うゝ……少しくらい小恋と回りたいと思っただけ」

小恋っていうのは多分ななかちゃんの友達なんだろう。しかし、このままじゃ本当にロクに回れないままななかちゃん文化祭を終えちゃうよ。どうしたものかな。

「いつそ、変装して回るとか……なんて？」

「それだよ！」

「ええ!？」

冗談で言ったつもりが、ななかちゃんは本気にしてしまったようだ。

「そうだよ！ 明久君が女子の制服を着れば！」

「何で僕が変装するの!？ しかも女子の制服とか、僕が社会的に消滅しちゃう結果になっちゃうから！」

僕が言ってるのはななかちゃんの変装の話なのに、なぜに僕が女装するなんて話に。

「冗談だよ明久君」

「ななかちゃん……笑えない冗談を言うのはやめようか」

その手の事で今までロクな目にあつた事がないんだから。

「は〜い。不純異性交遊はそこまで〜」

「へ？ って、誰!？」

不意に声が出したと思って振り返ってみると、何時の間にかななかちゃんとは違う色の制服を着た紫のショートヘアの女子が仁王立ちしていた。

「あなた、そこで何してるのかしら？」

「へ？ 何って言われましても……追っかけから逃げてきて今は休憩ですと——」

「追っかけからね。つまり、杉並の一味だと？」

「杉並？」

杉並つて、確かさつき紙を渡した男がそう名乗っていたような。

「ああ、この紙を渡した人だったっけ？」

「墓穴を掘ったわね！」

目の前の人が大声を出すと茂みや木の陰から大勢の学生が出てきた。

「つて、何時からそこにいたの!？」

「そうら！ さつきと薄情なさい！ 杉並は今何処にいるの!？」

「いや、何処にと言われましてもさつき僕に紙渡してさつきと行っちゃいましたから何処にいるかなんて」

「嘘はつかないことね」

「嘘なんてついてませんよ！」

一体何事なのか、どうやら僕を杉並君の仲間だと思ってるみたいだけど、なんでそこまで殺気立ってるのかがわからない。

僕が訳も分からずに混乱していると、

「ま、まゆき……その人、風見学園の生徒じゃないよ？」

「え？ ……あ、そういうえば制服が違うし。ここまで馬鹿面の生徒は見たことないわね」

「……………」

「ま、まゆき……その人、さめざめと泣いちやってるけど」

あれ？ 僕の目から大量の汗が吹き出てきたよ。

「まあまあ、明久君。明久君にだっていいところはあるんだから泣かないの」

ななかちゃんが僕の頭を撫でて慰めてくれた。

うう……君だけは僕を慰めてくれるんだね。

「で、それはそうと……なんで他校のあんたが学園のアイドルの白河さんと一緒にいるのかしら？」

学園のアイドルつて……本当にすごい存在なんだ、ななかちゃんつ

て。

「なんでと言うと、僕がこっちに来てから——」

僕は目の前の人——確か、まゆきさんだっけ？——にこの学園に入ってから事情を説明した。

第二話

「——というわけなんです」

生徒会メンバーの高坂先輩とその会長の音姫先輩を目の前にして明久君が私が告白を断ろうとした時からの事を説明しました。

「なんだ、それならそうと早く言いなさいよ。杉並の事知ってるっぽかったし、こんな所にいるから勘違いしちゃったじゃないの」

「いや、そもそもあなた聞く耳持ってませんでしたよね?」

うん。流石にさっきのは高坂先輩の早とちりだと思う。

「それで、最後に白河さんを連れて手芸部の追っ手から逃げてる間に杉並君がこの紙を渡して別の所に逃げていったと」

「はい、そういう事です」

音姫先輩が明久君から受け取った紙を眺めて確認を取った。

「くっ……なら、さっきの情報はガセだったってわけね。杉並が弟君意外にも誰かと組んで作戦はそいつに任せてるって聞いたから怪しいと思ったけど、とんだ無駄足だったわね」

あはは……。高坂先輩も毎年苦労してるなあ。

「あの……その杉並君って、何やってるんですか? なんかすごい問題児っぽいんですけど?」

ああ、明久君は知らないからそれは聞きたいよね。

「ぼいじゃなくて、問題児なのよ。しかも筆頭。入学してからこの手のイベントで必ず何かやらかすのよ。去年なんか一番酷いので色々な所から花火を打ち上げてたわ」

「? 別に、問題があるとは思えませんけど? その方が盛り上がりそうですし」

「生徒は確かに盛り上がったけど、その後近隣の方達から苦情が来たのよ。なんでアイツの尻拭いをあたし達がしなくちゃならないんだか」

「ああ……それは確かに……」

明久君が苦笑しながら目を逸らした。何か考えてるみたいだけど。

私はこっそり明久君の背中に触れてみた。

『近所からの苦情か。ま、僕の学園の校舎破壊よりはまだずっといいかな。あれは流石に大事件だった……』

明久君に触れると明久君の心からそんな声が聞こえてきた。学園の校舎破壊って……明久君何やったんだろう？

あ、なんで今明久君の心の声が聞こえたかっていうと……それは今は割愛かな。

「だから今年こそはって思ってるんだけど、中々捕まえられなくて」
音姫先輩が困った風に溜息混じりに呟いた。今年も杉並君、派手に行くのかな？

「ああ……僕がいうのもなんですけど。頑張ってください」
「あはは……。どうもありがとう」

明久君が同情混じりの言葉を送って音姫先輩が笑い返した。なんか見ててつままない気がするな。

「あ、いました！ 白河さんを発見したぞ！」
「げっ！ 見つかったちゃった！」

音姫先輩達と話し合ってるうちに手芸部の追っ手が追いついてきちゃったようです。

すぐに仲間も来てこちらに向かって走ってきました。

「ま、まずい……すみません！ 僕達はこれで！ ななかちゃん、逃げろよー！」

「あいさく♪」

明久君に言われて私はそのまま立った。

「……って、ななかちゃん？」

「さっきの逃げ方をお願いします♪」

「……えっと、それって……」

「はい！ さっきみたいに抱えて逃げてください♪」

さっきのお姫様抱っこ、ちよっと恥ずかしいけど慣れると楽しいんだよね。

「いや、流石にこの人達の前で……」

「白河さん！ どうかミスコンの件、もう一度考えてください！」

「えっと……ああ、もう！ それでは失礼します！」

明久君は私と追っ手を交互に見て最終的に私をお姫様抱っこの状態で抱えた。

「では、僕達はこれで！」

「あ、校舎ではあまり走っちゃ——」

「それじゃあ、再びダッシュ逃亡っ！」

そう叫んで明久君は再び猛スピードで駆け出した。

「……は、速い……」

「どんな脚力してんのよ……」

後ろから音姫先輩と高坂先輩の眩きが微かに聞こえてきた。

「はあ……2連続は流石にキツイよお……」

「あはは！ 明久君、お疲れ様♪」

15分かかってようやく追っ手を撒いた私と明久君は束の間かも知れないけど、文化祭を回る事にした。

「とりあえず、第一条件としてあの追っ手に見つからないようにしなきゃね」

「うん。ミスコンの時間ももうすぐだし、ミスコンが始まれば向こうも諦めてくれると思うよ」

時間を見ればもうお昼近くになる。ミスコンが始まるのは午後の1時だからその時まで粘れば私達の勝ち。

「さて、その時まで何処を回ろうかな？」

「折角の自由時間なんだし、色々回りたいよね」

「うん。えつと……そういえば、何処で何が出されてるのとか僕知らないんだ」

そういえば明久君、パンフレットとか持ってないみたい。

学園に入って早々トラブルに巻き込まれたからパンフレットの事忘れてたのかな。

「大丈夫。私が持つてるから」

風見学園の生徒は前もってパンフレットは配られてるからね。正直持っても役に立つかどうか不安だったけど、こうやって回れるよう

になったのはラッキーだったな。

「そっか。それじゃあ、何処から回ろうか？ 出来れば午後までは見
つかりにくい室内のやつ」

「そうだね。じゃあ、まずは中等部3年でやってる——」

『何処見てんだ！ 氣いつけろ！』

明久君と文化祭を回ろうとした矢先にそんな怒鳴り声が聞こえて
きた。

声が聞こえたのはそれほど遠くない、廊下を曲がった先からだっ
た。

気になって明久君とそこへ向かうと小さな女の子が膝を着いて涙
を浮かべていた。その近くでは人相の悪い他校の生徒らしい男子が
3人かいた。

多分あの3人のうちの誰かにぶつかったんだらうね。その女の子
の傍には壊れたストラップだっただろうものが落ちていた。

ぶつかった拍子なのか、踏まれたのか、もうボロボロに崩れていた。
余程大事なものだったのか、可哀想だった。

なんとかしてあげられないかと考えるけど、この状況の中ではあま
り頭が回らず、とりあえずあの子をどうにか慰められないかと思った
時だった。

「何やってんだ、テメエらあああああ！」

「お？ ぐぼあ!？」

誰かの怒鳴り声が廊下に響いたと思ったたら3人のうちの一人が猛
スピードで突っ込んできた誰かに殴られて数メートル後ろに吹き飛
んだ。

「て、テメエ！ いきなり何しやがる！」

「……お前ら、一体何をした？」

少しして、殴りかかってきたのは明久君だとわかった。けど——
「お前ら、その子に一体何をしたって聞いてんだよ！」

明久君の表情はさつきみたいにちよつと間の抜けたようなものと
は完全に異なっていた。

そして、さつきまでとは想像もできないような怒声を響かせていた

ので一瞬同一人物とは思えなかった。

「何って、そいつが勝手にぶつかってきたんだよ」

「なら、何であるの子は泣いてんだよ！ それに、あの子のストラップが壊れてるのは何だ!？」

「はあ？ 知るかなもん。別にストラップが壊れたって俺らにや関係ねえだろ」

自分達には全く関係ないと言った。でも、明らかにこの人達とぶつかった拍子か踏まれて壊れたというのが当たり前の発想だと思う。

周りにいる人達も何人が目撃してるかもしれないけど、この剣幕がすごいのか誰も言ってくる人はいない。

「テメエら……謝れよ」

「は?」

「その子に謝れって言ってるんだよ！ こんな小さな子の大事な物を壊したんだぞ!」

「何で俺らが謝らねえといけねえんだよ？ ぶつかってきたのはそいつだろうが」

もう何がなんでも自分達は関係ないと謝るつもりもないみたい。私も何だか怒りが吹き上がってくるような感覚を覚えた。でも――

「歯あ食い縛れえ！ この屑野郎っ!」

「うおおおおお!?!」

明久君がものすごい勢いで3人に向かって殴りかかってきた。

「お前ら、絶対ぶっ潰してこの子に土下座させてやらあ!」

「ちよ、何なんだコイツ!?!」

「ここで騒ぐのはちとマズイ……逃げるぞ!」

「待てお前ら!」

逃げる3人を追って明久君も追いかけるけど、途中はすごい人混みで明久君が中々進む事ができなかった。

これじゃああの3人を追うのは無理かと思った時だった。明久君が廊下の窓を開けて少し離れた。

「……ん?」

そこで私はおかしいと思った。私達が今いるのは何処だっけ？

さつきから手芸部の追っ手に追いかけてられて気にしてなかったけど、ここつて確か中等部棟の2階だったと思うんだけど？

そんな事を考えていると、

「いいいっしやああああああ！」

「ええええええええっ!？」

すごい事が起きました。何と、吉井君が、2階の窓から飛び降りました。

私は明久君が気になって窓の外を見ると明久君が着地した場面とそれを見て驚いている周囲の人が見えました。

『うおおお!? アイツ2階から飛び降りてきやがった!?!』

『どんな神経してんだコイツは!?!』

『化け物かよこいつ!?!』

『テメエら、覚悟しろおおおお!』

それからは明久君がああ3人を殴り倒す場面が広がっていた。

『こらあ! あんた達、何やってるのよ!?!』

すぐに生徒会のメンバーが騒ぎを聞いて駆けつけに来て早々に取り締まられたけど。

「で? 言い訳はあるかしら?」

「いえ。全くもって、申し訳ありませんでした」

場所は保健室。明久君は保険委員で音姫先輩の妹である朝倉由夢ちゃんから手当を受けながらまゆき先輩に頭を下げていた。

「一応……白河さんの証言も合わせてあんたの事情が事情だからこの程度で済みますけど、できればこの学園内で暴力沙汰なんて勘弁してほしいわ」

「すみません。本当に申し訳ありませんでした」

一応私からも事情を話して明久君への処分は説教だけで済んだけど、本当ならもつとすごい事になってたんだろうな。

ちなみに明久君が殴り倒したああ3人は現在は生徒指導室で風見

学園の教師が説教をしているようです。

後、あんな光景を見たのか、時折起こった他校生徒により問題が急減していったという情報が来しました。

明久君があれだけ暴れていたのが見せしめになったのか、問題を起こす事がなくなったようです。

その点に関しては生徒会の人が明久君に感謝しているようで、それが理由で明久君の処分も軽く済んだのかもしれない。

「はい、終わりました」

「あ、ありがとう。君もごめんね。折角の文化祭なのに」

「いえ。一応保険委員ですの」

明久君が手当を終えると由夢ちゃんに詫びの一言を送って立った。

ここまで来て他人に気遣いを見せるのは明久君のお人好しな性格故なのかもしれない。

「そういうえば、あの女の子の持ってたストラップって他のお店で売ってるかな？ どうにかして譲ってもらえればいいけど」

明久君がぶつぶつと考えにふけこんだ。どうやらまだあの女の子の事が心配だったみたい。

ここまで見知らない子のために親身になれる明久君がすごいと感心した。でも――

「明久君、多分あのストラップ……他の店じゃ売ってないと思うよ」

「え？ そうなの？」

「うん。あれ、ここでしか売ってないから」

私は文化祭のパンフレットを取り出して真ん中のページのある部分を指差した。

そこには可愛いキャラクターもののストラップを売ってるクラスがあり、パンフレットにも売ってるストラップのイラストが載っていた。

「あ、さっきの犬みたいなのストラップも」

「ああ……はりまおのストラップね」

明久君と同じくパンフレットを覗きこんだ音姫先輩が呟いた。

「はりまおっ？」

「ああ……この学園の学園長が飼ってる(?)犬(?)なんだ。ここでしか見たことのない犬(?)だから結構新鮮味があるんだよね」

「所々疑問形が見えますね……」

首を傾げた明久君に対して音姫先輩が説明した。

音姫先輩が疑問形になるのは無理もないかもしれない。私も少ししか見たことないけど、飼ってるにしては自由本棒な性格してるし、犬にしては掌サイズだし。

まあ、それでも可愛いからいいんだけど。

「あ、だったらこのクラスにすぐに事情説明すれば譲ってくれるかも！」

言うや否や、明久君がダツシユで保健室から出ていった目的のクラスへ向かって走り出していった。

「つて、だから廊下は走るなあ!」

高坂先輩がそれを追いかけていった。ていうか、高坂先輩もものすごいスピードで現在進行系で走ってます。

「私達も行くかうか?」

「は、はい……」

私と音姫先輩は苦笑しながら走り去っていった二人を追って保健室を去った。もちろん、歩きで。

「ええ!? 処分しちゃったああ!」

目的のクラスへ足を運んでいった私達を待っていたのはあのストラップが処分されたという事実だった。

「すまない……正確には出すはずだったものを誰かがゴミと間違えて一緒に捨ててしまったんだ」

「そんなあ……」

ここまで来てまさかの事態に明久君は膝を着いた。

「それに、そろそろゴミ収集車が来る時間ですし……このストラップは無理ではないかと」

落ち込んだ明久君にまた辛い事実が降り注ぐ。

すごく可哀想に思えた。あの女の子も、明久君も。あの子のために頑張ったのに。

何か明久君が元気になれる言葉がかけられないか、明久君に触れた。

『そんな……折角ここまで来たのに、処分されるなんて。ゴミ収集がもうすぐ……もうすぐ?』

そんな考えが明久君の中で浮かんとすると突然明久君が立ち上がった。

「あの! じゃあ、まだ収集車は来てないんですね!」

「え? あ、でも……今言ったとおり時間が……ほら。今裏に」

このクラスの生徒が窓の外を指差すと確かにゴミの収集車がゴミを積んで出ていこうとしているのが見えた。

「いや、まだ間に合う!」

明久君はそう言うと、再び窓を開けて躊躇いもなく飛び降りた。それも、今度は3階から。

「だりやあああああ!」

『ええええええつ!』

今度は私だけでなく、飛び降りを目撃した生徒全員が大声を上げて驚いていた。

窓の外を見れば当然のように明久君は着地を成功させ、収集車に向かって走り出した。

走り出した瞬間、収集車は明久君を裏切つてエンジンの音を響かせて走り出した。

「くっそおおおつ!」

明久君はものすごいスピードで収集車を追いかけるけど、徐々に離されてしまう。

「一応、あたし達も追いかけてみましょう。これ以上問題起こされても困るし」

「う、うん」

流石に悪さはないと思うけど、さっきの飛び降りを見ると私達じや想像もつかないような無茶を明久君は実行しちゃいそうだから高坂

先輩の心配もよくわかる。

私達も明久君を追って学園の外へ向かって走っていった。

どうにかまだ明久君を視界に入れてるけど、ものすごいスピードで離されようとしていた。

そこで今度は下り坂の前で明久君が止まった。見ると車はものすごいスピードで離れていくのが見えた。

この下り坂なら車は坂に沿ってスピードを上げられるのに対して人間の足じゃ走りづらくてとても追いつけない。条件は最悪だった。

ここまで来たのに、それでも手が届かない。そんな嫌な現実を受け入れるしかないと思つた時だった。

「ここまで来て、負けるかあああああつ！」

ここに来てまでまた明久君は飛び降りを実行した。しかも今度は車の目の前に向かって。

「ぎゃあああああ！」

それを見た音姫先輩が悲鳴を上げた。私はあまりの事態に声を上げる事すらかなわなかった。

多分、3階から着地してもへっちゃらだった明久君だから道路には着地したと思う。でも、そこから先は私は目を閉じた。

いくらなんでもあそこから更に猛スピードで飛び込んでくる車なんて避けられないと思つていた。

『うわあああああつ!』

そんな声と共に何かが転倒する音が聞こえた。

恐る恐る目を開けて見ると明久君が道路の脇に倒れていたのが見えた。

『き、君っ！ 大丈夫かい!?』

『だ、大丈夫です！ 大したことはありません!』

『し、しかし……君、今上から』

『大丈夫です！ 僕はこの通り平気ですし、事故というわけではありませんから!』

『そ、そこまで言われると……』

『それより、ちよつとお願いがあるんですけど!』

明久君が転倒してるのを見た収集車のドライバーさんが明久君の傍まで駆け寄って安否を確かめようとしていた。

収集車の表面にちよつとだけ泥がついていたのを見ると、どうやら明久君は収集車の上に飛び乗ったみたい。

それを見たドライバーさんが急ブレーキをかけてその拍子にバランスを崩して明久君は道路脇に転んだみたい。

ほ、本当によかった……。私は力が抜けそうになった。本当によかったよ。

『いよおっしやあああああ——っ！ 無事に手に入った——っ！』

私の心配なんてお構いなしと言わないばかりに明久君が手に入れたはりまおのストラップを振っている姿が見えた。

もう果てしないくらいにお人好しすぎるよ、明久君。

「あいたたた！」

「もう、1日に2度も同じ相手の手当をするとは思いませんでしたよ」

あの後、色々あつて僕達はどうにか無事にあの女の子にストラップを手渡す事が出来たけど、当然トラックの上から転倒した僕は無事に済んだってわけじゃないのでまた由夢ちゃんの世話になっていたのだった。

「しかも、今度は車に向かって飛び降りだなんて……。下手すれば死んでいたかもしれないよ」

「あはは……。いや、仰る通りです」

「笑い事じゃありません！」

僕が乾いた笑いを浮かべていると音姫さんが僕に向かって怒鳴ってきた。

「本っ当に心配したんだから！ いくら女の子のためとはいえ、あんな無茶は二度としない事！」

「す、すみませんでした！」

僕は痛む手足に構わずに床に伏せた。土下座で。

「そうだよ！ あの時私達がどれだけ明久君の事心配したと思ってるの!？」

「はい！ 本当に申し訳ありませんでした！」

ななかちゃんにまで怒られる始末だった。

「ま、まあまあお姉ちゃん。明久さんも反省しているみたいですし、結果としてはあのストラップを女の子に渡せたみたいですし。何より悪意あつての行動じゃないんですから」

「それとこれとは……」

「話は別です！」

「しっかりと反省してね！ 明久君！」

「はい！ ゆめゆめ！」

今度は二人同時に怒鳴られ、僕は床に頭を叩きつけるくらいに深く頭を下げた。

それから1時間くらいたつぷりと説教をされてようやく開放される事になった。

「ああ……もうそろそろ文化祭も終わりかな？」

「え？ もう？」

時計を見ると時間は5時半くらい。普通の学校の文化祭なら一般公開はもう終了の時間だろう。

「ああ！ 結局ななかちゃん文化祭回れなかったじゃん！」

なんてこった。女の子のストラップをどうにかできないかということにばかり気がいつててすっかり忘れてた。

約束していた人放っておくなんて、男として最低だ。

「ああ……それ、もういいや」

「へ？」

「今日はたつぷりと楽しませてもらったから♪」

何故だかわからないけど、ななかちゃんは笑っていた。許してくれるということだろうか？

なんて優しい娘なんだ。思わず涙が出そうになっちゃったよ。

「さて、明久君も行くのか」

「はい。……って、何処に？」

「私の家」

「……………は？」

今音姫先輩は何と言っただろうか？ 今自分の家に行こうと言いました？

「つて、何ゆえに!？」

「だって、明久君怪我してるし。流石にそのままじゃ帰れないでしょ？」

「いや、比較的軽傷なんですけど」

「あんだけ無茶やつといてその程度の傷で済むあんたつて…………何者？」

高坂さん、人間何事も慣れだと思えます。

「とにかく、そのまま帰るのは私が許しません。ご家族には私から連絡しますから」

「えっ!？」

そ、それは非常に困る。いや、普通なら別にいいんだけど…………僕はそもそも異世界だから今の家族がこの世界にいるわけがない。

流石にこの事態が知らればどうなったものかわからない。一体どうすれば？

僕が四苦八苦している間に、

「ああ、でも明久君つて…………家出してるんだっけ？」

「い、家出?」

ななちちゃんが先程言っていた僕の嘘を音姫先輩に言った。

「家出つて…………何で家出なんか？ お家で何かあったの？ ご家族とかは大丈夫なの？」

「え、いや……………いやあ、正直言うと…………あまり関わりたくないと言いますか」

寂しくないかと言われるば、突然のこの状況に困惑はしているけど…………普通に考えてあの家族と一緒にというのは僕にとっては地獄でしかなかった。

僕以外の人間だったらきつと発狂しているだろうと自信を持って言える程常識からかけ離れた家族なのだ。

「でも、ご家族の方だって心配を……」

「いや、あの家族の心配は別の意味ですから」

「はい？」

「だつてまず母さんが——」

「ここから30分くらいかけて僕の家族の人物像をこの場にいる皆さんに説明した。」

「——というわけなんです」

『……………』

僕の説明を受けると全員が啞然としていた。

「な、何？ その、実の弟を異性として愛しているとか……メイド服を弟に着せようとしているとか……」

「しかも、それを単なる愛情表現として放っておいてるご両親も一体……」

「音姫の過保護っぷりがまだ可愛く思えるわ……」

僕の説明を受けて全員が乾いた笑いを浮かべていた。うん。それが常識を持つ人の当然の反応だよな。

よかった。僕の考え方がおかしかつたわけじゃなかったんだよね。

「だから、その……できればもう戻りたくないと言いますか」

正直、世界が違うのだから戻りたくても戻れないという具合なのが、それをここで言う必要はないだろう。

言つたところで信じられる話じゃないし。

「う、うん……とりあえず、家に行こうか。後、さくらさんや弟君にも相談しておこうか？ 明久君を泊めてもらえないか」

「そうですね。なんだか、話を聞いたら明久さんの家出を全力で応援したくなっちゃいました」

「じゃ、じゃあ明久君。色々あつて今は辛いかもしれないけど、頑張つて」

「強く生きなさいよ」

ものすごい哀憐漂う目で僕を見た。自分で言つといてなんだけど、何だかものすごい罪悪感が。

とはいえ、泊まれる家ができたのは僥倖というものだろう。僕はそ

の後少し待機し、音姫さんと由夢ちゃんの2人についていった。
途中、周りの男達にストーカー呼ばわりされたのは余談である。

第三話

風見学園の学園祭が終わり、僕は朝倉姉妹について行ってこの人達の自宅へと向かって歩いていった。

うー……女の子の家っていうなら、以前霧島さんや美波の家にも上がった時もあるけど、その時とは違ってなんだかすごい緊張するなあ。

目の前にいるのはどっちもすごい美人だし。現に今も尚通りすがつていく男がほとんど視線をこの二人に向けるし。

中には勘違いを起こしてストーカー呼ばわりしてとんでもないことになってしまいそうだったし。

そんなこんなを思い出している間にどうやら2人の自宅に着いたようだ。

「……随分と和風な家なんですね」

昭和かちよつとした田舎にあるようなちよつと古い造りの家だった。

いや、2階の方は洋式っぽいけど、つい最近できたようにくつきりと色が別れていた。

「ああ……ひとつつ言うと、ここは私達の自宅ではありません。私達の自宅は隣の方ですし」

由夢ちゃんが指差す先には目の前の家よりは近代的な造りの家が建っていた。

「ここは兄さん……というか、学園長の家なんですよ。兄さんも少し前までは私達の家に住んでたんですけど、おじいちゃんがいきなり『そろそろお前達も年頃になってきたのだから、ひとつ屋根の下での生活はやめた方がいいんじゃないか』なんて言い出して、こっちに越したんです」

「それ以来、私達もこっちによく来るようになって……もう私達の家も同然になっちゃって」

よくはわからないけど、2人はこの家に毎日のように上がり込んでいて自宅も同然だと言っているのか。

「じゃあ、その兄さんていうのは……」

「正確に言えば実の兄弟というわけではありませんね」

ほとんど家族同然に過ごした幼馴染ってところか。……何処のラブコメ関係だよ。

「とにかく、ここには2人しか住んでる人がいないので明久さん1人を泊めるくらいは大丈夫だと思います」

「それでも、2人には相談くらいしておかないと」

2人というのはここに住んでる人の事だろう。片方が風見学園の学園長で、もう片方が音姫さんと由夢ちゃんの兄弟同然の幼馴染だね。

「じゃ、上がりますか。お腹も空いてきたし」

音姫さんが家の前の門をくぐって玄関を開けた。

「弟くーん！ 来たよー！」

玄関を開けた瞬間、そんな声が響いた。ご近所の方にも聞こえるのではないか？

「音姉？ 由夢もいるか。今夕飯を作ろうと思っていたところで……どちら様で？」

家の中から出てきたのは落ち着いた雰囲気の子だった。確かに優しそうな人に見えるね。

「ああ、初めまして。吉井明久です」

「あ、桜内義之です。……ん？ 何か、どっかで見たような」

義之君が僕の顔を見て首を傾げた。僕達は初対面の筈なんだけど。

「ああ……昼間のお姫様抱っこ事件」

由夢ちゃんが横から口を入れてきた。何その事件？

「あ、思い出した。白河を抱えて猛スピードで廊下を駆け回っていたな」

「その後は数回の飛び降り」

「げっ!? 2階や3階からだけでなく、車に向かって飛び降りた人間離れした野郎がいたって杉並の情報だから聞き流してたが……」

「事実です。実際、お姉ちゃんも目撃してたらしいですから」

「うん。アレは流石に大事件だったよ……」

疲れたように言う音姫さん。確かによくよく考えれば、あれは洒落じや済まないものだろう。

時間がたつとその行動がどれだけだいそれたものだったのか理解してくる。

「はあ……でも、なんでその人間離れした奴が？」

「最後の車に向かったの飛び降りて怪我をしたからここに泊めたいんだけど」

「ああ……それなら別にいいけどさ」

音姫さんの説明を聞いてすんなり泊まりを受け入れるあたり、本当にいい人なのかもしれない。

「とりあえず上がれよ。夕飯も作るし」

「じゃ、お姉ちゃんも——」

「あ、それなら僕も作るよ」

何というか、泊めてもらうだけでなくご飯まで作ってもらっただけっていうのも落ち着かないし。

「料理、出来るのか？」

「うん。家じゃ僕が料理担当だったから」

というか、母さんや姉さんに作らせたならそれこそ大変なことになってしまうから僕が作るしかないんだけど。

「別に客なんだからゆっくりしてもいいんだが」

「客だから何かしないと落ち着かないというか……」

「別にいいんじゃないですか？ 私達も客みたいなものですけど、もう自分の家みたいなものですし」

「それに対して由夢はもう少し手伝ってもいいだろ。いや、そうなたらそうなたらで後がまず——」

「兄さん？ 何か言いましたか？」

義之君が言葉を続けようとしたところで由夢ちゃんが笑顔を向けた。

でも何故だろう？ その笑顔がものすごい怖いんだけど。姉さんが僕に関節技をかけようと迫る時と似ている。

「い、いや……なんでもない」

その迫力に気圧されて義之君が言葉を引つ込めた。

「さて……とりあえず、夕飯作るか。悪いが、吉井も手伝ってくれと助かるかな?」

「あ、うん」

誤魔化すように義之君がそそくさと台所へ向かって歩いていった。とりあえず僕も夕飯の手伝いをする事になったのだった。

「さて、こっちの材料は鍋に入れて……その間にサラダでも盛り付けようかな?」

突然の来客である吉井が夕飯の手伝いをしてくると言って少し戸惑ったが、いぎ料理をさせてみるとなんとも要領がよかった。

普段から料理に慣れてるのか、動きは機敏だし腕も中々よかった。途中家具の位置を把握するのに手間取ってたが、それ以外は完璧だった。

「明久さんって、よく料理をするんですか?」

居間の方で正座の状態で待っていた由夢が明久に対してそう問うてきた。

いつもならジャージ姿でゴロゴロしながら待つてるっていうのに、他人が目の前にいると優等生の仮面をかぶるんだよな。

まあ、泊まるっていうならすぐにボロが出そうな気もするが。

「うん。大体5歳の頃からかな?」

「ご……相当昔からやってたんだな」

俺でも小学生の時にちよつとやってみようかって思ってたところだが、吉井は更にすげかった。

「へえ……そんな小さい頃から料理が好きなんですか」

「うくん……今はそうだけど、昔はそれほどでもなかったかな?」

「昔は違ってたんですか?」

「うん。我が家の家訓でね」

「小さい頃から料理を習う事がですか?」

「ううん。なんというか、僕の家ってすごく特殊で……つい最近まで僕、夕飯というのは家庭で一番立場が弱い人が作るものなんだって信じ込んでいたんだ」

「……………」

何もツツコめなかった。料理をしていた俺と音姉の手が完全に止まってしまった。

一体吉井、今までどんな家庭で育っていたんだよ？

「あ、義之君！ さかな、魚！」

「え？ あ、マズイ！」

吉井に注意されて危うく魚を焦がしてしまうところだった。

危ねえ……吉井の言葉に完全に思考が停止していた。

「危なかった……危うく食えなくなっちゃうところだったぜ」

「大丈夫だよ。魚が焦げたくらいじゃ食べられないうちに入らないよ。姉さんが作ったら、そんなレベルじゃ済まないから」

「ん？ 吉井には姉さんがいるのか？」

俺がそう聞くと音姉と由夢の表情が固まった。一体どうしたのだろうか？

「うん。その、僕の姉さんって料理に関してかなり常識がズレてるっていうか、いや、一般の常識もかなりその……」

吉井が言いにくそうにしているのを見ると、吉井の姉さんはかなり料理がマズイってことか。

どうやらその辺りお互い様のようだな。うちの妹も料理の腕に関しては何んでもないくらい駄目だから。似たような苦労をこいつも経験を――

「タワシをウニと間違えたり、トマトソースとかを豚の血と勘違いしたり……他には、ポン酢をコーヒ―と間違えたりして――」

「……………」

再び料理をする手を止めてしまう俺達。何だ、その豪快すぎる間違いは。

吉井……それは料理ができないなんてレベルじゃねえぞ。完全に料理という概念から逸脱してるぞ。

「ていうか吉井……その姉さんの料理、食べたことあるのか？」

ないと言っただけ。あると言っても、まだ食べ物を使っているものであってほしい。

「あるよ。その時は……本当に霊界があるって実感した瞬間だったよ」

吉井がものすごい遠い目でそんな事を言った。厨二臭い台詞だが、何故だか吉井の言葉が本気にしか聞こえないのが不思議だ。

由夢の料理のレベルがまだ可愛いくらいだ。上には上……いや、下には下がいるものなんだな。

「私も……もう少し頑張ろうかな？」

由夢のそんな呟きが聞こえてきた。今の話を聞いて自分は吉井の姉さんみたいにはならないようにという意識が芽生えたのだろうか。

それはそれで俺としては嬉しい事なんだが、由夢の料理のレベルの低さも相当だから改善できるのだろうか。

「あれ？ 由夢ちゃんはあまり料理はしない？」

「え？ あ、いや……私はその、そういう機会がないだけです」

ほう？ 機会がないねえ？

「な、何ですか兄さん。その目は？」

「いや、何時になったらそういう機会が来るのかなってな」

「う……」

俺の言葉を聞いて由夢が目を見送った。

「じゃあ、今度機会あったらやってみようか？ 僕も一緒にするから」

「あ、ありがとうございます」

吉井が由夢のアドバイザーになるつもりのようにうなづいた。できるなら本当に頼むぞ吉井。由夢の腕を少しでもマシな方に持って行ってほしい。

「さて、こうしてる間にサラダはオツケー。後は煮物だね」

色々ともない会話を交わしているうちに夕飯が粗方できたよ。うだ。

それから料理をテーブルに並べ、5人分並べたところでやっと夕飯にありつけた。

「「いただきます」」

俺はまず煮物へと箸を伸ばした。そしてじやがいもを取って口に入れた。

……美味しいな。小さい頃から料理やってただけあって美味しい。

「お、おいしい……」

「おいしいんだけど……なんだか」

由夢も音姉も吉井の作った料理を食べて呆然としていた。やはり相当美味しいもんだった。

「何か、味付けとか好みじゃありませんでした？」

「う、ううん。すつごく好きなんだけど……ここまでのレベルを見せられると」

音姉が軽くショックを受けていた。音姉も料理はうまい方なんだが、これは音姉のと同等かもしくはそれ以上か。

吉井の料理の腕に素直に感心したのだった。

「ただいま〜♪」

そんな中、玄関の方から明るい声が響いてきた。ようやく帰ってきたか。

「うわ〜。いい匂い♪ 今日も美味しそうだね！」

部屋の戸が開くと、そこから腰まで伸ばした金髪と碧眼という日本人離れた女の子の姿が目に入った。

「あれれ？ そっちにいる人は初顔だね」

「あ、こんばんは。吉井明久です。君も隣に住んでる子？ 音姫さん

や由夢ちゃんの親戚かな？」

などと目の前の女の子に対して明久が尋ねた。

いや、吉井。お前がそういうのも無理はないんだが……その人は、

「明久さん、その人が……この家の家主で、風見学園の学園長です」

「あ、この人がそうなん………バカなっ!？」

間を置いて明久がすごいリアクションで驚いた。流石にそこまで驚いた奴は初めて見た。

「にやはは♪ いいリアクションするね！ あ、僕は芳乃さくら。よろしくね♪」

明久のリアクションも対して気にかけて、いつもの調子でさくらさんが自己紹介をした。

「それにしてもいい匂いだねえ。今日はサバに煮物と味噌汁にサラダかあ。でも、煮物の臭いがちよつと違うね」

「あ、煮物は僕が作ったんです。流石に夕飯まで世話になるのもどうかと思つて」

「あ、そうなんだ。じゃ、いただきます！」

さくらさんは空いた席に座つて目の前に置いてある料理へ手を伸ばした。

そして吉井がつくつた煮物を口に入れると一拍おいて、

「おいしくい♪ 明久君、料理上手なんだね」

満足の表情で吉井の料理を褒めていた。この人がハイなりアクションをするのはいつもだが、ここまで喜ぶとはやはり吉井の料理はかなりのレベルなのだろう。

「あ、おいしかった♪」

「お粗末様です」

「そういえば、明久君はどうしてここにいるのかな？」

「あ、すっかり言うの忘れてました」

それから音姉が吉井のここにいる理由を説明した。

どうやら吉井は自分の周囲の環境が特殊すぎてそれに耐えられなくなつて家出をしたらしい。それでどうにかここに住まわせる事ができないか相談しに来たようだ。

確かに、友人からは常にバカ呼ばわり。ちよつとした事で暴力を振るわれ、家に帰れば実の弟を女装させるような変人の姉に対して苦勞の連続。

俺じゃあ恐らく一週間と保たないだろう。

「ふくん……そういうことか」

事情を全て聞くとさくらさんは指を顎に当てて考える仕草をして数秒待った。

「うん！ 流石に放つておけないし、明久君は今日からここに住むことにしよつか！」

この家に住むことを許可した。吉井も流石に二つ返事で許可されるとは思っていなかったのか、驚いていた。

「じゃ、これからよろしくね。明久君♪」

「あ、その……よろしくお願いします。それと、ありがとうございます！」

まるでお見合いでもしているようにお互い正座して頭を何度も下げていた。

「じゃ、これから色々準備しなくちゃね」

「準備？」

「ここに住むんだから、生活用品とか学校とか色々考えなくちゃね」

「ええっ!? いやいやいや! 学校に行けるだけでもすごく嬉しいのに、流石にそこまでお世話になるのも……」

「遠慮しないの。もうここに住む事が決まった時点で明久君も家族みたいなものなんだから。君は子供で僕は大人なんだから、大人の優しさは甘んじて受け入れるべきだよ」

さくらさんはやんわりと、そして有無を言わずに吉井を説いてこれからの事を話し合った。

子供っぽく見えてこういったところではすごく大人の雰囲気を感じて不思議な人なんだよな、さくらさんって。

吉井もさくらさんのそういった雰囲気にもまれたのか、そのまま学校やこれからの生活について話し合っただけで夜が更けていった。

第四話

文化祭が終わり、土日が明けて週の始まりの学校だった。文化祭が名残惜しいのか、いまいち勉強に対してやる気のない奴が目立っている。

まあ、俺は元から勉強に対してそれほどやる気があるような真面目な人間でもねえけど。それに、文化祭の後だからかいつもより勉強に対するやる気がでない。

けど、今日からはまたいつもと違った学校生活が来るのを楽しみにしている。その理由というのが

「ようよう、義之！」

……人が楽しみにしている事を思い返そうとしたところで声がかかった。

振り返ると、そこには悪友の一人である板橋渉がいつも通りのハイテンションで登場してきた。

「渉か……。何だ？」

「いやいや、なんでそんなに露骨に嫌そうな顔すんだよ？」

「後ろから耳元で囁かれたら誰だつて引くわ」

悪い奴ではないんだが、時々ちよつとウザったくなる時があるんだよな。

「なんだよお……この俺のフェロモンたつぷりの声聞いたら悩殺モンだろ？」

「確かに死にそうだな。気持ち悪さで」

「ひどっ!？」

それとコイツ、根っからの弄られキャラっていうか……からかうと面白い。

ウザイと感じながらも時折俺達はコイツをからかって暇潰しもしたりする。ある意味学校生活には欠かせない存在だったりする。

「って、忘れるとこだったわ。お前知ってるか？ 今日このクラスに転校生が来るの」

「知ってる」

「ありや？ 知ってたのか。ちよつとつまんね。ついさつき杉並に聞いたばかりだけどな」

俺の場合は別に杉並ルートからじゃなくてもわかる。転校生がアレだからな。

「お前がそこそこテンション高いというからには女子か？」

でも俺はあえて転校生が来るということだけを知ってる事にして惚ける。

「いや、男子だぜ」

「ならなんでそんなに面白そうにしている？」

「ほら、お前もまだ覚えてると思うけど……お姫様抱っこ事件の事は知ってるだろう？」

「ああ、白河が誰かにお姫様抱っこされて小恋が大慌てだったな」

「そう！ あの、学園のアイドルの白河をまるで白馬の王子様のようにお姫様抱っこして学園の廊下を猛スピードで走り回ったあの男！

そいつが転校生らしい」

「へえ……」

それも、まあ知ってる。

「後、2階や3階からの飛び降り……しまいにはトラックを追って更にそいつに向かって飛び降りても軽傷だけで済んだバケモンときたもんだ。

「ほお……」

その件については音姉や由夢に詳細を聞いたから知っていた。

「怖い人じゃないといいんだけど」

そしてまた横から別の声がかかってきた。

「オッス、月島！」

「おはよう、渉君……義之」

「ちやお」

「やっほ〜♪」

来たのは俺の幼馴染の月島小恋。そして両脇にいるのはその親友の雪村杏に花咲茜。

この3人の少女はそれぞれの苗字の頭文字を取って雪月花と呼ばれている。かなり仲のいい奴らなんだが。

「その転校生だけど、怖い人の方がむしろ小恋としては嬉しいんでしょ?」

「ええ!? どうして!?」

「どうしてって、それは……小恋がそういうタイプの男の子が好きだからでしょ?」

「うえっ!?」

「うんうん♪ お姫様抱っこされながらあつという間に別の空間へ連れていかれ、二人っきりの密室であくんな事や、こくんな事をされて小恋ちゃんはあるという間に快樂の世界へ」

「つ、月島はそんなことで喜んでりませんか!」

仲がいい筈なんだが、杏と茜はことあるごとにこうして親父紛いのセクハラを小恋に浴びせていた。もう慣れてしまった光景である。

小恋も小恋でよくこいつらと一緒にいられるなと思うよ。

「何っ!? 月島にそんな趣味が……だったら俺が月島をつ!」

「渉君は……」

「色々な意味で危険だから駄目ね。小恋が穢れきっちゃうわ」

「何で!? ていうかそんな状況になった時点で月島は穢れてるだろ!?!」

「大丈夫。その人もきつと、義之と同じフィンガーテクの持ち主だから」

「うくん……果たして、その人と義之君のフィンガーテクはどちらが上か」

そう言っただけ杏と茜がこちらを向いて軽く下ネタを飛ばしてきた。この光景も変わらずだった。

何も変わらない日常が繰り広げられる中、朝のホームルーム前のチャイムが鳴った。

この会話は中断して全員自分の席へとついて丁度教師が教室に入ってから朝のホームルームが始まった。

「ええ……もう知ってる奴は知ってるだろうが、今日このクラスに転

校生が来ます」

教師の言葉にひそひそとクラスメートが転校生の話題を出してき
た。

知ってるのは俺を除いて涉や雪月花の3人くらいだったか。まあ、俺達は杉並からの情報があるからその手の話が早いつてだけで、他はあまり杉並からの情報を好きこのんで仕入れる事は少ない。

大半眉唾もの真実少数の情報だからな。

「では、その転校生を紹介します。入りなさい」

教師から指示が出ると教室の戸が開き、そこから茶髪で少々癖つ毛の少年、明久が入ってきた。

「初めまして。今日からこのクラスに入ることになった吉井明久です。お気軽にダーリンと呼んでも構いませんよ?」

「ダーリイイーン!」

明久の言葉に涉が応えた。

「……失礼。忘れてください」

明久もその返しを予想していなかったのか、精神的にかなりダメー
ジを負ったようだ。

まさか男からあんな仕草でダーリンなどと呼ばれたらたまったも
のではないだろう。

あ、ちなみに明久という呼び方は土日間に自然と出たのだ。何か
明久とは色々と話が合うんだよな。

料理に関しても結構会話が弾むし、ゲームの話も結構たくさんした
な。今度何かで対戦でもしてみるか。

そして紹介が終わったのか、明久は空いている席に座ってホーム
ルームが移行する。ホームルームが終わると早速明久の方へ向かう
奴がいた。俺もその1人だけだ。

「よう! さっきのは面白かったな吉井!」

「あ、さっきの……ごめん。本当、さっきのは忘れて」

「自己紹介でダーリン呼ばわりを希望だなんて……ある意味強敵ね、
義之」

「何で俺に言う?」

そしてどういう意味だよ杏。

「さっきのは面白かったよね、ダーリン♪」

「……本当に忘れてください」

「あ、茜え……流石に可哀想だと思うよ」

ダーリン呼ばわりに明久のダメー지가酷くなるのを見かねた小恋が止めに入った。

「あ、ありがとう……えっと?」

「あ、月島小恋。よろしく、吉井君」

「うん、よろしく」

「で、雪村杏と、花咲茜、板橋渉……俺の友人だ」

「ふくん……楽しそうだね、義之の友達って」

確かに、飽きない連中ではある。

「ん? 義之、お前コイツと知り合いだったのか?」

「ああ……今俺ん家に居候してるからな。訳あって」

「ええええええ!?!」

俺の言葉に一番驚いたのが小恋だった。一体どうしたのだ?

「訳って、具体的にはどんな?」

「え? んっと……簡単に言うと、家出だね」

「家出? 家で何かあったのか?」

「何かってどうか……殺されそうだった。リアルに」

「……………は?」

明久の言葉に涉が間拔けな声を発した。まあ、普通そんな事を言われれば冗談で流す事なんだが。

「殺されそうって……?」

「具体的に言うと、低いレベルで指を何本か折られる。高いレベルでカッターの飛び交う状況の中、大群で金属バットで殴られたり、ノーロープバンジーさせられたり、十字架に縛られて火祭りになったり――」

「……………義之、これ……マジで言ってる?」

「……………(コクッ)」

俺も殺される状況を述べられた時は冗談だと思ったが、状況の述べ

方が具体的すぎるし、何より目が本気だった。

「小恋ちゃん、これは思わぬ伏兵が来たよ」

「ふえっ!? な、何のこと!？」

「ひとつ屋根の下で二人つきり。ここで何か手を打たないと義之が遠い存在になっちゃうわよ?。」

「ならないよ!? それに音姫さんや由夢ちゃんもいるんだし、二人つきりなんてことには——」

女子は女子で訳のわからない議論を広げてるな。

「あ、そうだ吉井君」

「ん?」

「えっと……文化祭の時なんだけど」

「文化祭?」

「えっと、ななかを抱えて走った時の……」

「ななかちゃんを?」

「……ななかちゃん?」

「ななかちゃん? 白河をそんな風にか呼べるほどもう仲進んでるのか?」

「いや、ななかちゃん本人が名前で呼んでって」

「……へえ、アイツがねえ」

「初対面で名前を呼ばせるなんて……」

白河は小恋の昔からの親友だと文化祭で聞いたが、涉も白河と顔見知りなのは意外だった。

「で、ななかちゃんがどうしたの?」

「あ、うん。あの……お姫様抱っこした時の」

「ああ……あの時はななかちゃんが手芸部に追われてて、困ってたから僕が抱えて走ったんだよ。あの数を一人で撒くのは無理があるだろうし」

「手芸部か。そういやこの間の文化祭でミスコンがあったもんな。それに出場してほしいって頼まれてたんだろう。確かに白河は学園のアイドルだけに優勝候補だもんな」

「そうだったんだ」

あのお姫様抱っこ事件の動機については納得したのか、その場に
いる全員が頷いた。

「じゃじゃじゃ、あの2・3階からの飛び降りの理由はなんでしょう
か？　飛び降り隊長殿」

「と、飛び降り隊長？」

「あんだだけ大騒ぎしてりや、目につく奴は大勢いるだろう。目撃した
4組の奴らが目の前でリアル飛び降りしても平然としてる姿を見て
騒いでたぜ。そんで、色々噂が広まってお前に飛び込み隊長って名が
ついたんだ」

飛び降り隊長……単純だけど、納得いく名だ。実際目撃したわけ
じゃないが、見た奴は大多数で生アクションを見た連中は憧憬の念を
抱く者もいたそうで。

「で？　何度も飛び降りした理由ってというのはなんだよ？」

「ああ、それは——」

それから明久は飛び降りの理由を説明した。

「一度目は女の子のストラップを壊した不良を追いかけるため……」

「二度目は新しいストラップが紛れたゴミ袋を回収しようとストラック
を追いかける」

「最後はトラックを止めるため……」

「よく生き抜く事ができたわね」

「いやはや、自分でもそう思ってます」

俺も事情を聞いた時は面食らったぞ。行動力がすごいとかそんな
言葉じゃ言い表せないほどぶっ飛んだお人好しだった。

「女の子のストラップをどうにかしようとしてトラックを追いかけて……
滅茶苦茶だけど、勇気あるよな」

「うん。何か、絵本から出てきたヒーローみたいだね」

まあ、ヒーローという割にはなんとというか……明久には悪いが、顔
に締りがない感がある。

「何だか、その辺りは義之君と似てるわよね」

「ええ。色々似通ってる部分が多そうね」

「何言ってるんだ。俺には明久みたいに飛び降りできる度胸はねえ

ぞ」

「そうじゃなくて……て、言ってもわかるわけないか。義之だもの」
杏が意味不明な事を言った。何の事だか。

「ん？ そういや、今まで流してたけど……義之の家に居候ってことは、お前！ 音姫先輩や由夢ちゃんとも食事を共にしてるのか!？」
「へ？ うん、そうだけど……」

「くっそおー！ 羨ましすぎるぜ！ 俺も家出して義之の家に転がりこみてえ！」

「来んな」

渉がハイテンションで阿呆な事を言ってきた。

「くそお……何でこんなに差があるんだ？ 一体俺とこの2人とでどんな違いがあるんだよ？」

「知るか。ていうか、お前の考えてるような状況じゃねえぞ。明久はともかく、俺と2人は姉弟みたいなもんだし」

「いいの！ それでもいいの！ 俺も弟くんや兄さんと呼ばれてみたいのー！」

渉が腰をくねくねしながら力説してきた。正直キモイ。

「あの、板橋君の考えてるような事はないけど……気持ちにはわかるよ。確かに音姫先輩って、理想のお姉さんそのものっていう感じがするし……僕の姉さんが姉さんだけに、余計にね」

「だろ!? そう思うだろ!? 正直その理想のお姉さんの傍にいられるのが羨ましいぜー！」

「あのなあ……音姉とはあくまで姉弟みたいなもんだし、そんな特別視するようなもんじゃ……」

「羨沢言うなよ！」

怒鳴られてしまった。しかも、明久も一緒になって。

「お前は贅沢すぎんだよ！ いつも男が羨ましがらる状況に溶け込んでるから感覚が麻痺してんだよ」

「そうだよ！ 音姫さんが姉ポジションにいるなんて、あんな風に優しくされて、楽しそうに笑い合って……羨ましいよ。僕なんか……僕の姉さんなんて……ちよつと女子と一緒にいただけで拷問じみたス

キンシップかけてくるわ、妙なコスプレする上に、僕に女装まで押し付けるような人なの！」

明久の怒鳴り声が教室内に響き、教室が一瞬で静寂に包まれた。

というか、明久からとんでもない言葉が出てきた気がしたんだが、女装って何だ？

「音姫さんは義之を本当の弟みたいにかわいがってるけど、僕の姉さんなんか……異性として僕の事を好きなんて言ってくるんだよ！しかも、友人達の目の前で！それに暑いというだけでバスローブだけの姿になって迫ってくるし、料理に関する常識持ち合わせてないし、それに何度姉さんの理不尽な関節技を受けたか……うう……」

叫ぶだけ叫んで明久が泣き出した。

「……何か、スマン」

思わず謝ってしまった。そして周囲からものすごい同情の視線が明久に集中していた。

というか、明久の家族については大体は聞いていたんだが、改めて言われるとなんとも言えない気持ちになるな。

家族の事に関する会話はできる限り話題には出さないようにしよう。また明久が泣きそうだからな。

こんなで吉井明久が風見学園に転校して新しい生活が幕を開けたのだった。

第五話

昼休みになって、僕達は学食へと向かおうとしていた。お弁当も作っておこうかと思っただけど、転校の手続きばっかで正直作る暇がなかった。

これというのも音姫さんがやたらと気を利かせてあれこれ用意した方がいいとか、これは流石に必要なという義之や由夢ちゃんの口論が続いたからだ。

音姫さんは確かに世話好きなんだけど、必要なさそうなもので用意してしまう。学校に行く前なんか包帯やら非常用の飲料水なんかまで用意するくらいだったからね。

とと、そんなことより学食だ。そう思って僕と義之が学食へ足を向けようとした時だった。

「よよよ！ お前ら、今から学食か？」

「あ、板橋君」

僕らの後ろから板橋君が小走りて駆け寄ってきた。

「うん。今朝は弁当を作ろうかと思っただけど、少々事情が込み入りまして……」

特に音姫先輩の説得にかなりの時間を要してしまったからね。

「でも間に合うか？ 今日4時限目が理科で長かったから今から間に合うか？」

「うっ……」

板橋君の言葉に義之が苦い顔をした。確かに先の授業の終わりまでの時間が長く感じた。

その所為で昼休みの終わりの時間が少しだけ短くなった。

別に少し終わるのが遅くなったからといって学食がそこまで混むとは考えられないと思っただけど、よくよく考えればここは中・高一貫性だから生徒の数は相当だろう。

どれだけの頻度で学食を利用するのはまだ入りたての僕にはわからないけど、きっとかなりの人が使うだろう。

「杉並は、昼どうするんだ？」

「うーむ……外のコンビニにでも行くか」

板橋君が振り向いた先には若干河童頭の紳士に見えなくもないが、それ以上に胡散臭い空気を纏った男がいた。ていうか――

「あ、君……確か、文化祭で会った！」

「ははは。ご無沙汰だったな吉井明久よ。改めて自己紹介するが、俺は杉並だ。そしてこの2人は永遠の絆で結ばれた同志なのだ」

「明久、本気にするな。コイツの冗談だ」

「あ、そうなの？」

やはり第一印象の通り、杉並君は謎の多そうな人物だった。

「しかしコンビニか……。妥当ではあるが、行くのがちよつと面倒だな」

「ふふっ。ここはひとつ、アマダで決めるといっはどうだろうか？」

「そこは普通ジャンケンじゃないの？」

「というか嫌だよ。お前が作ったアマダ……ロクなものじゃねえだろうが」

「確かに」

杉並君の案に義之と板橋君が許否の意を示した。

本当にどんな人なんだろう、杉並君って？

「照れなくてもいいぞ？」

「なんでお前のアマダでテレなくちゃいけないんだよ」

しかし、このまま口論しても昼休み終了の時間が迫るばかりだ。どうにかならないものかなと悩んだ時だった。

「欲しい？」

「ん？」

急に目の前に蓋の開いた弁当箱が差し出された。

お人形みたいな容姿に潤んだ瞳でその小さな手に持ってた弁当箱からカラフルなものが見えた。

「あ、雪村さん。ていうか、雪村さんの弁当……いいの？」

「くるしゅうない」

何だろう？ 彼女がものすごく天使に見える。僕が雪村さんの恩

藉な行動に涙を流そうとした時だった。

「もく、杏！ 私のお弁当持って何処行ったの〜!？」

雪村さんの名前を呼んで月島さんが走り回るのが見えた。

「おい杏。これ、小恋の弁当だったのか？」

「ええ。だからくるしゅうない」

雪村さんの言葉に僕もちよつと苦笑いしてしまった。

「お前はくるしゅうないかもしれないねえが、あいつはくるしいだろ」

「流石に他人の弁当をっていうのは……」

これでは月島さんが午後の授業に耐えられないだろう。

「あく！ 杏、何やってるの！ 私のお弁当持って行って！」

「あら、見てわからない？ 小恋のお弁当をお腹を空かせた哀れな子

羊に与えてやってるの」

子羊って……でも間違っていないから反論もできない。

「あ、あのね……」

雪村さんの言葉に月島さんが溜息をついた。

「別にいいじゃない。どうせ、義之達に分けようと思つて多めに作つてあるんでしょ？」

「あわわー！」

「え？ マジで!？」

「ほほう……それはありがたい」

「あ、あわわ……そんな、あの……あんまりおいしくないと思うし」

慌てた様子で月島さんが否定しようとしてる感じにも見えるが、本当に義之達に分けようと作ってきたらしい。なんて優しい娘なんだろう。

「何やってるの？ あ、もう義之君達に分けちゃってるの？」

後から花咲さんもやってきて、その花咲さんの手にもかなりの量と見てとれるお弁当箱があった。

わざわざ水筒や人数分の紙コップを持っているあたり、本当に義行君達に向けて作っていたようだ。

「えつと……まだなんだけど、その……」

「お弁当も持つてこないでお腹を空かせた挙句、中庭の芝生も食べ出

すって——」

確かにお弁当を持ってこなかったからどうしようかと思つたけど
芝生までは食べないよ。

「——そう……小恋が言つてたわ」

「あわわ！」

「俺達は牛かよ」

「だだだ、だつて……そんなの庭を管理してる用務員のおじさんが困
るでしょ？」

「食うこと前提かよ!？」

「そうだよ。流石に芝生なんて食べられ……いや、夏の熱さもまだ
残っているなか、たつぷりの水に漬ければもしかしたら……」

「……………」

「はっ！」

マズイ。義之達の前であの頃のひもじい時の事は言わない方がい
い。

普通はそんな食の摂り方をしてる人なんていないんだ。僕らが特
殊すぎただけで。

「とまあ、こんな人達を心配する小恋ちゃんの気持ち、わかんないか
なあ？」

「わかる！ すんげえわかる！」

花咲さんの言葉に板橋君が強く頷く。その際僕を見ていたのは気
の所為だと思いたい。

「じゃ、皆で食べよ。私も杏ちゃんもいっぱい作ってきたんだから」
どうやらみんな男子に向けて手料理を作ってきたらしい。男とし
てはなんとも嬉しい事なただけど。

残念なことに、以前僕の周囲にいた人の手料理が特殊すぎて……そ
の時の光景が頭に浮かんでどうにも素直に喜べなくなっている。
とりあえず、僕達は適当に机や椅子を一ヶ所に寄せて座った。

その上に月島さん達が作ってきてくれたお弁当を広げて披露した。

「おおー！」

「うまそ〜」

「お花見弁当みたいだな」

「うごっ！ 月島の弁当がすげえうまそうだ！」

「確かに、みんなすごいよね」

まず、花咲さんのお弁当がミックスサンド。カラフルな材料を挟んでその横にはおかずとしてフルーツサラダ、ウィンナーの炒め物が入っていた。

ちよつとしたピクニックに出そうなメニューだった。

次に雪村さんのは2段重ねの重箱に赤飯や煮物と、お花見弁当みたいなメニューだった。

そして月島さんの三角おにぎり、肉団子、唐揚げとお弁当おかずの定番だが、ものすごく美味しそうなものがぎっしりとタッパに詰まっていた。

「これは、1人ずつの方が食べやすいかなって」

僕達の事も気遣って人数分のタッパまで用意している。

「お、俺は今……モーレッツに感動している……」

それを見て板橋君が身体を震わせて呷然と声をあげて泣き出した。

「い、板橋君、どうしたの？」

「俺は今、月島の料理にもものすごく感動している……」

確かに、女の子の料理が出るのは感動ものだよね。僕だったらそれを見たFクラスの連中からの制裁が来るから素直に喜べないけど。

「別に、これが初めてではないだろう」

「俺達は結構小恋達の弁当に世話になってるだろ」

「い、いいんだよ！ 毎回作ってくれる度に感動してんの！」

どうやら3人も月島さん達からの手作り弁当を結構な頻度でもらってるらしい。

それを知ってなんとなく嫉視してしまう。女の子にももらえるだけでなく、ゆつくりとそれを堪能できるんだから。それも、何度も。

「難儀な奴だよな。お前も」

「難儀でもいい！ 俺は今、月島のお箸になりたい！」

板橋君がお昼の賑わっている教室でとんでもない事を言った。それを聞いた全員が哄笑した。

「なんだよそれは！ そりやお前、変態過ぎるぞ！」

「馬鹿者。己の変態さをここでアピールしてどうする。そういうのはここぞという時に取っておくものだ」

「ここぞってどんな時だろう？」

「変態ね」

「あ、杏に変態って言われると、ゾクゾクする！ もっと言って！」

「この変態豚野郎。私のお弁当がそんなに欲しいのかしら？」

「欲しい……欲しいです！ 女王様！」

板橋君も雪村さんもかなりノリノリだ。ムツツリーニと工藤さんのやりとりをオープン方向に向けた感じだ。

「わく。渉君がおかしいよ」

「おおいみんな、渉の傍に寄ったら変態が感染るぞ」

「きやく」

「避難が必要ね」

雪月花の娘達が僕達の後ろに隠れるように身を寄せていた。

「な、なんだよ？ 変態でもいいじゃんかよ。遅しく育つてんだよ」

その言い分はよくわかる。人間そういった正直さも大切だと思う。

「俺は応援しよう。お前が今後、更にディープな変態さんになっていく様を克明に記録してやる」

「おお、杉並！ さすが我が心の友よ！」

それから板橋君と杉並君が熱い抱擁を交わし、それを見た女子が黄色い声援が上がった。

この黄色い声援の意味に2人は気づいているのだろうか？

杉並君が気づいているっぽいけど、正直板橋君の方が心配だ。この手の噂って、何故か広まりやすいから対処に困るんだよね。

「あんな友は流石に嫌だ」

「やだやだく」

「やだやだく」

「みんな、板橋君なんて素直に言葉にしてる分まだいいよ。前の学校じゃ女子更衣室やロッカー。ありとあらゆる場所に盗撮用カメラ仕掛ける奴だっていたんだから」

誰かというと言ううまでもなく、ムツツリーニだ。僕がいなくなつた今も、嬉々として女子の盗撮に命をかけていることだろう。

「わー。そんな友達もいやだ〜」

「いやだな」

「やだやだ〜」

この状況で言ってもただの冗談だと思つているのか、笑つて流した。ま、そう思わせておくのがいいか。言わぬが仏だっけ？　こういうの。

こんなやり取りがしばらく続き、15分を要してようやく昼食にありつけるのだった。

「っは〜！　うまかつたぜー！」

「うむ。おいしく頂いた」

「お粗末様〜」

月島さん達のお弁当を食べて満足した僕らは満面の笑みで背伸びをした。

「美味しかったでしょ〜？」

「よきにはからえ」

「うん。本当美味しかったよ。花咲さんのサンドイッチも具の揃え方がいいし、雪村さんのお弁当も落ち着くし、月島さんのお弁当も、みんなそれぞれの好みに分けて作つてあつたし」

「ふえっ！」

僕の評価を聞いて月島さんが驚きの声を上げた。

「ほ〜？　明久君中々鋭いですな〜」

「ふふっ。明久には小恋が誰に愛を向けているのか、全て知られてしまったようね」

「は、はわわ！　別に誰も愛してなんか！」

先のように花咲さんと雪村さんにからかわれて大慌ての月島さん。

あれ？　この様子を見るとひよつとして月島さん……。

「……………」

「ん？　何だよ、明久。こっち見て？」

「ううん。なんでもないんだ」

「? そうか」

なるほどね。これはなんとなく予想していたが、なんともねえ。

「月島さん」

「ふえ? な、何ですか?」

ポンツ。↑小恋の肩に手を置いた。

「色々大変かもしれないけど、頑張つて。応援してるから」

「ふえ〜!?!」

僕の言葉に月島さんは顔を真赤にした。珍しく初々しい反応が見れてちよつと得をした気分だ。

それをしばらく堪能して昼休みを過ごしたのだった。

放課後になり、僕は荷物をカバンに詰めた。

流石にここに来てまでダラダラ過ごすのもどうかと思えてくる。住んでる家が他人のというのものもあるけど、この島の人達はいい人達でいっぱいだからなんとなくそうしたくなってしまう。

そんな風に思えるくらい以前の暮らしが滅茶苦茶だったんだろう、自然と何かしたくなる。

「さて、土日は結構冷蔵庫の材料使って食材少なくなってるから帰りはスーパーにでも寄ろうかな」

僕は支度を終えて教室を出ていった時だった。

「あ、明久君〜♪」

後ろから聞き覚えのある明るい声が玲瓏と響いた。

「おひさ〜♪」

「ななかちゃん」

「あ、覚えててくれたんだ」

「そりゃあ、まあね」

あれだけ衝撃的な状況にいたのだからたったの3日で忘れる事はない。

「えへへ〜。明久君が転校してきたって聞いたから様子見てきたんだー。本当はお昼休みにも行きたかったけど、事情がありまして」

「そうなんだ。まあ、こうして転校してきたわけだから……今日から同じ学校の生徒同士だし、よろしくね」

「うん。よろしく、明久君♪」

そう言っただけで、明久君の手を握ってきた。

もうこれが彼女なりのスキンシップだというのはなんとなくわかってるつもりんだけど、やはり色々期待みたいな感情が込められてきてしまうわけで。

「はっ！」

背後から殺気を感じて後ろを振り向くと、後ろには既に何人もの男子集団が僕に敵意を向けていた。

Fクラスメンバーほど危機迫るレベルではないが、それでもプレッシャーをかけるには十分だ。

「明久君？」

「ごめん、ななかちゃん。僕は夕飯の買い出しをしないとイケないんだ。話はまた明日昼休みについてこと」

「……うん！　じゃあ、明日は私がお弁当作ってきてあげるからね♪」

「さらばだ！」

「逃すな！　あの野郎をとっ捕まえてしばき倒せ！」

ななかちゃんのとんでもない言葉で背後にいた男子集団の怒りが一気に爆発して僕に襲いかかってきた。

Fクラスほどじゃないけど、やはり可愛い娘からの手作り弁当を作ってもらうのが殺したい程羨ましいのは全世界共通か。

そんな僕で僕の転校初日の学校生活はこうして幕を閉じた。

あ、ちなみに夕飯は逃げながらもちゃんと買えたよ。Fクラスメンバーに比べれば追跡のレベルは比較的低めだから。

第六話

「ふう……疲れた」

芳乃家に戻って第一声から溜息混じりの一言を呟いた。

「どうしたんですか？ 帰ってきて早々。何があつたんですか？」

芳乃家に戻り、食卓へ足を踏み入れるとそこにはジャージ姿と眼鏡という良く言えばリラックスしきつた。悪く言えば少々ダラケた感じの姿の由夢ちゃんが座っていた。

この姿にもだいたい慣れてきた気がする。最初この姿を見た時は学校でのイメージと余りにもギャップが激しかったので戸惑ったが、由夢ちゃんにだってリラックスする権利くらいはあるのだから気にしないようにした。

「うん。放課後にななかちゃんと会って、弁当の話になって追いかけられた」

「はあ……大変でしたね」

今の一言で僕の身に何があつたのか察してくれたようだ。こういう時頭のいい人は理解が早いから助かる。

「音姫さんと義之はまだ帰ってない？」

「お姉ちゃんは生徒会の仕事です。兄さんは、何処かは知りませんがエツチな本でも探しに行ってるんじゃないですか？」

義之、あまり信用されてないのかな。ひどい言い様だった。

「そっか。じゃあ、少し早いかもだけど夕飯の準備でもしておくか」

「あ、あの……」

「ん？」

僕が台所へ入ろうとすると少し遠慮するような声で由夢ちゃんが声をかけてきた。

「あの……邪魔じゃなければ、お料理の手伝いしてもいいですか？」

そういえば、ここに来た当初に由夢ちゃんに料理を教えるなんて事を言っていた気がする。

由夢ちゃんも誰かに……というか思い浮かぶのが一人しかいないけど。その人に向けて作ってみたいという気持ちがあるのだろう。

うん。誰かに喜んでもらいたいという気持ちは大変良い事だと思う。自分の料理を食べてそれがおいしいと言われればもつと上手に作りたくなる時だってあるし。

由夢ちゃん、料理が苦手とか聞いたけど頑張ればきつとその料理を食べた人が喜んでくれるようになれるはず。決して姉さんや姫路さんのようにはならないと……そう思いたい。

「うん。じゃあ、まずは材料切るところから始めようか？」

「は、はい。お手柔らかに」

「うん。それはもちろん」

由夢ちゃんに一言告げると夕飯の準備に取り掛かった。

さて、料理を作ることになるからには――

「ストップ！ 由夢ちゃん！ 包丁の持ち方が違う！」

「え？ あ、えつと……」

「その握り方はアウト！ 手を添えるようにして、空いた手は猫のように丸めといて――」

もちろん、料理をつくることになるからには一切の甘えは無用だ。

流石に姫路さんや姉さんみたいなレベルではないものの些細な見逃しで料理を粗末にするのは僕のプライドが許さない。

料理に間違った常識は禁物だ。なのでここは心を鬼にして由夢ちゃんにちゃんとした料理を教えなければならぬのだ。あんなダークマター暗黒物質を再来させてたまるか。

「こ、こうですか？ んん、難しいなあ……」

由夢ちゃんは慣れない手つきで必死に材料を切っている。

普段やってないからか、元々がちよつと不器用な娘なのかはわからないがひとつひとつの動作が遅く、手もすごく震えている。

多分ちゃんと作らなきゃと緊張しているからだろう。それが理由で今までも大事なところで料理を失敗しちゃったのかもしれない。

でも、ここは僕がしっかり見て由夢ちゃんをサポートするのが僕の使命だ。

「ん……しょ」

「と、あまり力を入れしないで。ノコギリで木材を切るイメージで包丁を動かせば綺麗に切れるから」

「え、えと……」

危うく野菜が潰れてしまうところをすんでのところで回避し、由夢ちゃんに正しい切り方を教える事ができた。

「うん。少しずつ綺麗に切れるようになってきたね」

最初は玉ねぎを切らせてみたけど、玉ねぎが切ったのではなく、潰れたと表現した方がすつきりするような形になった時は驚いた。

そこから更正するのはちよつと骨だった。まあ、姫路さんや姉さんみたいに自分の意見を譲らない人でなく、元が素直な娘だったのが救いか、2人の時みために疲れる事はない。

「げっ！ これはっ!？」

由夢ちゃんの料理を見ていると居間の方から驚きと恐怖の混じった声が聞こえてきた。

「あ、義之。お帰り」

「お帰りじゃねえだろ……何なんだ？ この状況？」

「この状況って……」

今日の前にあるものと言えば、念のためと思って大量に用意した野菜や、煮込みの最中の鍋。そして、用意した野菜を切っている由夢ちゃん。これを見て出せる結論はただひとつ。

「由夢ちゃんに料理をさせてるんだけど？」

「お前正気か!？」

「兄さん、それどういう意味ですか？」

義之の動揺っぷりを見て由夢ちゃんが包丁を持ったまま震えていた。

「いや、由夢が料理をして今まで酷い事にならなかったためしがないだろ」

「義之、由夢ちゃんだって頑張ってるわけだし。それに僕が見てるから早々大変なことにはさせないよ」

「いや……それでも油断すれば——」

「大丈夫。油断なんてこれっぽっちも……由夢ちゃん！ 鍋が吹いている！ すぐに消して！」

「え!? あ、えと……」

いきなり大声を上げたのが失敗だったのか、由夢ちゃんはどう行動すればよいのか躊躇した。

このままでは危ないと思い、動揺している由夢ちゃんの横から手を伸ばしてコンロの火を消した。

「鍋が吹いた時はすぐにコンロの火を消して温度を下げるのが吉だよ」

「は、はい」

「とまあ、こっちは僕に任せて義之はそこで待ってて」

「本当に大丈夫なのか？」

「大丈夫。絶対に失敗はさせないから」

世間一般とは異なる生活を経てこの手の事に関しては一切油断する隙もなかったからね。そう、料理とは戦争だという言葉の重みを常々痛感していたから。

だからどんな些細な失敗も決して見逃しはしない。その料理を食べる人全員の尊い命を守るために。

「あ、由夢ちゃん！ 材料は一気に入れない！ 材料を入れるにも順番はあるから！」

「ひゃい!？」

「ていうわけだから義之はゆっくりね」

「……マジで頼んだぞ」

義之は心配そうな目でこちらを見ながらゆっくりと居間へと去っていった。

「さて、続けようか？」

「は、はい……」

「それじゃ、まずは肉を入れて炒めてね。そして、炒めた後で野菜を入れてから——ストップ、由夢ちゃん！ 調味料入れるのはまだ後！ それにそれはポン酢だ！」

「え？ あれ……」

一切の油断も許さない。絶対に。

「……うん。大分いい感じになってきたかな？」

明久と由夢ようやく夕飯づくりも終盤へと入ったところだ。2人の料理をしているのを見たところから今この時まで大体一時間半といったところか。

結構時間を食ってたな。まあ、あれだけ明久に注意されながらオロオロと料理をしていたからな。

「それにしても、明久さんって……意外と厳しいんですね」

「そりゃあね。料理で間違った知識は命を左右する時だってあることは既に体験済みだったからね」

「私の料理も、そのレベルだと？」

「いやいや。食べた事ないけど、由夢ちゃんのはまだ可愛い方だよ。姫路さんなんて玉水っていうのを使って大変だったから」

玉水？ 明久の口から聞き慣れない単語が出てきた。聞いたことない名称だな。

その時、玄関から戸が開く音が聞こえてパタパタと音を立ててこちらに向かってくる気配を感じた。

「ただいま〜！」

「あ、おかえりなさい」

「おかえり」

「おかえり、音姉」

ちよつと疲れ気味の音姉が居間へ入ってきた。

「生徒会の仕事でしたっけ？ お疲れ様です」

「うん。ちよつと忙しかったけど、どうにか………えっと、明久君？ 何を？」

音姉もこの光景を見て固まった。そりゃそうだ。由夢が台所に立つのを見て事情を知ってる人間が恐怖しないわけがない。

「ああ、由夢ちゃんに料理教えてたんですよ。僕が見ていますからご安心を」

「あ、そうなんだ。それなら安心かな」

明久が傍にいながらというのがわかるとホッと胸をなでおろした。まあ、俺も心配していたが、明久の指導を見て大事には至りそうになかった。今では安心できるが。

「そういや、明久。さっき言った玉水っていうのは何だ？ 何かの水の名称か？」

少なくとも俺は聞いた事がない。由夢はやはり知らないみたいだし、音姉なら……知ってるようだな。

しかし、何故か顔面が蒼白していつてるが、どうかしたのか？

「えっと、明久君……それって、王水のこと？」

「……あ、そっちでした」

なんだ、明久の勘違いか、玉水じゃなくて、王水な。しかし、どっちにしても聞いたことがないな。

「王水ですか。聞いたことありませんね。お姉ちゃん、わかります？」

「えっと、確か……塩酸と硝酸を混ぜることで出来る薬品で。金やプラチナなんかも溶解しちゃう程の強力な酸の筈なんだけど……」

「なるほど、それをその姫路って人が……」

……待つてほしい。さっき明久はなんて言った？

姫路が、玉水もとい王水を、料理に、混ぜた？ 金やプラチナを溶解する程の強力な酸を？

「あ、明久……それはマジか？ マジでそんな料理を作った奴がいて、それをお前が食ったのか？」

「って、そんな事より由夢ちゃん、確認確認。最後の仕上げとしてちゃんと味見をして必要なら最後の調整ね」

「そんな事じゃねえ！ 王水入れた料理がどうなったのかがものすげえ気になるんだが！ どうなんだ明久！」

まだまだ明久には驚倒させるほどの出来事が山積みだったらしい。いったい後どれだけの驚愕情報があるのやら。ある意味、杉並率いる非公式新聞部の情報よりも気になる。

翌日、今日は時間があつたので弁当を作る時間が十分に取れた。

昨日は月島さん達の弁当にも世話になったからお礼もかねて彼女達にも作った。みんな作ってる感じだから量は少なめだけど。

そして時は過ぎ、午前の授業が過ぎて昼休みに入った。

「義之、吉井。今日お前ら、学食行くか?」

「あ、そうだ。板橋君にも」

ちやうどいいところに板橋君が来たので僕は今朝作った弁当を差し出した。

「いや、そろそろ俺達のこととも名前で……って、お? 何だそれ?」

「僕が作った弁当。昨日月島さん達に作ってもらったからそのお礼にと持って作ったやつ之余り」

「うお!? これ吉井が作ったのか!」

「うん」

「ちなみに言うが、明久の料理は音姉と同等かそれ以上だ」

「マジでか!」

「いやいや義之、流石に音姫さんの腕には敵わないと思うんだけど。

「ほう……吉井の手料理か。これは楽しみなものだ」

いつの間にか僕の傍にいた杉並君が僕の弁当を見て興味を示していた。

「とと、君達にもあげるけど本命はあの3人だからね。月島さん?」

「え? えつと、何?」

月島さんと呼ぶとすぐに反応してくれて駆け寄ってきた。

「今日もみんなでお昼にしようか? お弁当作ってきたから」

「お弁当? 義之が?」

「違う違う。作ったのは明久だ」

「あれ? 吉井君って、料理できたの?」

「一応、家でよく作ってるからね」

というより、僕以外に作らせたならマズイことになるから僕が作らなくちゃならないんだけど。

「それで、昨日作ってもらったわけだから。そのお礼にと思って月島さん達にも作ったんだ。ちよつと量は少なめだけど」

「え？ いいの？」

「いいもなにも、昨日のお礼だからね」

「へえ……吉井の手作り弁当」

「手料理で小恋ちゃんにアタック大作戦と来ましたかあ。小恋ちゃん、明久君のこの想いをどう受け取るか？」

「ふえ〜!？」

そして後ろから月島さんをからかいながら雪村さんと花咲さんが登場してきた。

「あ、2人もよかつたらどうか？ 僕の弁当でよければあるから」

「小恋だけじゃなく、私達も纏めて手に入れようとまずは餌付けから。シンプルだけど、女の心を掴むにはいい手ね」

「でも、明久君のお料理で私達の心が掴めますかな〜？」

「ははは。それは食べてからのお楽しみに」

2人のからかいはこのようにサラつと流して僕達は昨日と同じく適当に机を集めて席に座って昼食にした。

「んじゃあ、吉井のお手並みを拝見させてもらうか！」

ハイテンションの板橋君を始め、全員が僕の作った弁当を食べ始めた。

そして、義之と杉並君を除いた全員の顔が驚愕の色を浮かべた。

「え？ アレ？ これ、本当にお前が作ったのか？」

「うん。そうだけど」

そんな僕って、料理できないってイメージがあるのだろうか。

「うう……カルチャーショック……」

「すぐく、すぐくおいしいんだけど……すごい敗北感」

「意外とやるじゃない」

そして月島さんと花咲さんが何かショックを受けて落ち込んでいた。料理を趣味とする女の子にしてみれば何か複雑な事があるのだろうか。

「しかし、驚いたぜ。お前にこんな特技があったなんて」

「まあ、家じゃ大体僕がみんなの食事作ってたからね。姉さんや母さんに作らせたなら命が危ないから」

「へえ、お前の姉さんや母さん、料理苦手なのか」

「苦手なんてレベルじゃないよ。あの2人、レシピを見せても材料間違えてひどいことになるから」

「一体何をどうすればあんな人を殺せるような料理を創れるのだろうか？」

「あ、いたいた！ 明久くん！」

突然現れたななかちゃんを見て姉さんと母さんの料理の映像が一気に払われた。

「あ、ななかちゃん。どうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょ。もう、教室の外でずっと待ってるのに出てこないんだから」

ななかちゃんが頬を膨らませて何やら怒ってるみたいだ。

「えっと……どうしたの？」

「……お弁当」

「え？」

「お弁当。昨日作ってくるって言ったじゃん」

「……あ、そういえばそんなこと言ってたなあ」

あの後、ななかちゃんを狙う男子生徒の集団に追いかけられたのですっかり忘れてた。

「む。折角明久君に作ってきたのに」

あ。ななかちゃんが不機嫌になっちゃったよ。流石に忘れた僕の方が悪いんだろうな。

「ごめん。でも、ななかちゃんも料理できたんだ」

「うん！ 今回は明久君のためにと・く・べ・つに、愛情込めて作ってみました！」

そう言っとななかちゃんが弁当箱を出して中身を披露した。いやはや、なんとも――

「うお！ 白河の料理、滅茶苦茶うまそうだぞ。ちくしょう！ なんで、なんでこんなにも差が開くんだ!? 料理か!? 料理の出来るでき

ないの差が戦力の決定的な差か!？」

「ななかちやんの弁当を見て板橋君が興奮しだした。うん。確かにものすごく美味しそうだ。」

「ほ、本当に美味しそうだよ。食べていい?」

「うん! ただし、明久君のお弁当と交換ね!」

「あ、うん。僕のでよかったら。食べかけだけ!」

「いいよ。自分のお弁当を少し分けてもらおうから」

「そう。それじゃ、遠慮なく」

「僕はななかちやんから弁当を受け取って中にある唐揚げに箸をつけた。」

「ど、どう?」

「……うん! 美味しいよ! この唐揚げよく出来てるよ!」

「でしょでしょ? 下味も私」

「うん。いい味付けしてるし、文句なしだよ」

「本当に美味しかった。いやはや、今の僕の周りには料理の上手な人が多くて夢みたいだよ。」

「よかったく……」

「うん。本当においしいよ。ななかちやん、いいお嫁さんになれるよね」

「え、お、おとおお、お嫁さん!」

「ん?」

「何かななかちやんがすごく驚いてるけど、どうしたんだろう?」

「わお! ここで白河さんにプロポーズ!」

「自然に口に出すあたりが策士っぽいわね」

「はわわわ!」

「雪月花の娘達は何を言ってるのだろうか? プロポーズって……はっ!」

「わわわ! ごめん! そういう意味で言ったんじゃない、純粋にななかちやんなら将来いいお嫁さんになれるんじゃないかってだけの話だよ!」

「何かものすごい言い訳くさい気もするけど、僕の言葉に偽りはない」

んだし。

「あ、その……えへへ。わ、私が一生懸命つくったお弁当が食べられて嬉しいでしょ。この果報者」

そう言っつてななかちゃんが照れくさそうに肘をつついてきた。

「そ、それじゃあ……明久君のお弁当は如何程かな？」

そう言っつてななかちゃんも僕の弁当を口につけた。そして、落ち込んだ。

「……何？ この美味しさ……。反則だよ」

「あれ？ ななかちゃん？ どうしたの？」

「明久君、今はそつとしておいてあげよう」

「へ？ 何で？」

「いいから。今はななかに声をかけない方がいいよ。ショックを受けてるから」

「ショックって、何に？」

「自分の胸に聞いてみて（みなさいよ）」

2人に不満そうに言われた。そう言われても全く心当たりがない。そんな事よりも……

「なあ、なんでアイツばかり白河と話を？」

「それに白河から弁当だと？」

「それになんだか白河、落ち込んでるぞ。アイツ、一体白河に何をした？」

「殺っちゃうか？ もう殺っちゃうか？」

まずはこの状況からどう生き延びるかだ！

昼食を食べ終えた後、僕は昼休み終了まで命懸けの鬼ごっこをしていたのだった。

第七話

バン！

「静かに！」

教室内で教卓を叩く音が響き、その直後このクラスの委員長である沢井麻耶さんが声を響かせた。

沢井さんの声を聞いてクラスメート全員が静まった。

「それでは、間近に迫った体育祭の出場競技を決めたいと思います」

教卓から聞こえてきた会話の内容が耳に入るとダルイ気分が少し飛んだ気がした。

「体育祭かあ。確かに秋だからそろそろやる時期だよな」

「ああ。正直かつたるいんだがな」

「まあ、確かに義之……というより、このクラスのみんなって、あまりこういう行事に熱中しそうな人がいないよね」

「そりゃあな。運動神経だつて2組と比べればかなり劣る上に、年に何回も開かれちゃ正直まいるよ」

「年に何回も？ 体育祭って、年に1回だけの行事じゃないの？」

「ああ。明久はまだ入って間もないから知らないんだろうけど……この学園って、とにかく行事に富んだ所だな。体育祭も何回かやるし、文化祭の他にもクリスマスにも卒業にもパーティがあるし、修学旅行は全学年でやるし、とにかく行事の数がすごいんだよ」

「へえ〜。なんだか他の行事がちよつと楽しみになつてきたな」

「ま、その際に問題が起きやすいんだがな。ある問題児がこのクラスにいるからな」

「問題児っていうと——」

バン！

「そこっ！ 無駄口叩かないで、さっさと出場する競技を考えなさい！」

「明久、とりあえず行事の話は置いて自分の出る種目だけを考えろ。自分が楽できそうな所を重点的に選んだ方がいいぞ」

「そ、そう……うん」

義之に言われて僕は黒板に書かれている競技の種目名を確かめた。うんうん。『パン食い競争』に『100mリレー』、『三人四脚』に『借り物競争』と色々種目も多いようだ。

これだけの競技、相当運動神経がないと全部をこなすのはキツイだろう。

クラス全体の競技もありそうだけど個人でやるとなると、このクラスの間をの事を考えると1人でいくつもの種目に出る人も出てくるだろう。

さて、僕はどうしたらよいものか。すると、ふと目に入った種目があった。

『障害物リレー』。最後の方に書かれている種目。全員障害物の方に出ようとする意識が全く見えない。他の競技の方は何となくみんな意識はしてるみたいだけど、あの競技だけみんな意識を向けようとしてない感じがする。

一体あの種目には何があるのだろうか？ 何の障害があるのかは知らないけど、ちよつとやそつとの障害なら文月学園で散々慣らしたんだ。

これがただの学園の体育祭の競技程度のものなら負ける気がしない。僕は早速挙手した。

「はい、吉井。あんたは何に出るの？」

「僕は……障害物リレーに出たいと思います」

そう言うと教室の空気が一気に変わった。というか、教室全体に輝が入ったような音が響いた気がした。

「へ？ どうしたの、みんな？」

「いや、吉井。それは……」

沢井さんが言いにくそうに目を泳がせていた。

「しまった……そっちの説明してなかった」

「吉井、かわいそうに……」

義之と渉が何故か遠くに行ってしまう人を見るような目で僕を見ていた。

『おいおい……障害物リレーって言ったたら、アイツが……』

『けど、このまま吉井に任せるのがいんじゃないやねえか？ だってアイツ、2・3階から飛び降りても平気な奴なんだろ？』

『ああ。だったらあの障害物リレーもなんとかなるんじゃないやねえか？』

『吉井君なら、きつと大丈夫……だと思っう』

『吉井君、大丈夫かな？』

あちこちから聞こえる会話。一体この競技には何があるのだろうか？

「と、とりあえず……吉井が障害物リレーを希望という事でいいかしら？」

「あ、うん。それでいいです」

「そ、そう……」

沢井さんが目を反らすように黒板に視線を移し、『障害物リレー』の種目名の下に僕の名前を記した。

みんなは何をそんなに心配そうな目で僕を見るのだろうか？ そんなにあの障害物リレーは怖い競技なのだろうか？

とにかく、僕は障害物リレーに参加して残りは様子見という事ではばらく挙手もせずに傍観していた。

「えつと……残る競技は男子100mリレーに、三人四脚、借り物競走……つて、全部男子じゃない。誰かいなの？」

どうやら余りが出てしまったようだ。それも、全部が男子。

沢井さんが誰か出場してくれる人がいないか質問するが、誰も挙手しようとする者がいなかった。

「全く、仕方ないわね」

それから沢井さんがやれやれと言う風に黒板に名前を記す。

それぞれの競技に書かれた名前は……『桜内義之』と、『桜内義之』、また『桜内義之』。

「つて、ちよつと待て——い！」

「何よ桜井？」

沢井さんが文句でもあると言いたげな目で義之を見た。

「何じゃねえだろ！ なんてどれもこれも俺が出るんだよ!？」

「仕方ないでしょ。他の男子も複数出るんだから。あんたはまだひとつしか挙げてないでしょ?」

「杉並なんかそもそもゼロじゃねえか!」

「杉並はそもそも数に慣れてないわ。この会議始めてからもう何処かに行ってるし……あいつがそもそも体育祭に熱入れてくれるとは思えないわ」

「た、確かに……」

言われてみればこの教室内に杉並君の姿が見当たらない。サボリなのだろうか?

そういえば、文化祭の時高坂さんが杉並は問題児筆頭だって言っていた気がする。今度は体育祭で何かするのかな?

「とういか、明久もまだ出場種目がひとつじゃねえか」

「吉井はいいのよ。多分、障害物リレーで全て使い切っちゃいそうだし」

「た、確かに……」

「ん? 別に大丈夫だと思うよ? 借り物競争なら判断が速ければそれなりになんとかなりそうだし、三人四脚も運動力よりもむしろコンビネーションだから一人で全力よりはまだ体力の消費はなさそうだし」

「そうは言うが明久よお。障害物って言ったら杉並が必ずと言っていいほど手を出す競技のトップクラスだぞ? お前、多分そこで力尽きるんじゃないか?」

「ん……杉並君がどんな細工をするのかわからないけど、盛り上がるならそれでいいし……ちよつとやそつとの細工によるハンデなどで向こうじゃ毎回背負ってたようなもんだから問題はないと思うよ」

向こうでの日常なんか常に障害物リレーやってるようなもんだしね。鉄人との追いかけてつこだとか、美波や姫路さんからの追いかけてつこだとか、FFF団の追いかけてつこだとか、清水さんの追いかけてつこだとか、姉さんの料理の阻止だったりと毎日が障害だらけなのだ。

こういう平和な学院でやる障害物のレベルなど、アレらと比べたら大したことはなさそうなんだけど。

まあ、多少レベル高くても多少のインターバルさえあれば大丈夫だ
と思う。回復力は向こうで相当鍛えられたから。

「ん〜……別にいいんじゃないか？ これでも明久、滅茶苦茶タフな
ところがあるし……正直俺もその数は辛いぞ。それに明久なら常日
頃から走り慣れてるらしい事言ってたし、適任だと思うぞ」

義之が沢井さんにそんな事を言った。多分自分が少しでも楽し
いがためだと思うけど、流石にあの数を義之一人でこなすのは難し
いだろう。

「たく……しょうがないわね。それじゃあ……」

しばらく話し合い、僕は障害物リレーの他に2・3ほど別の競技を
やることになった。

風見学園での体育祭かあ。文月学園の時よりは平和になりそうだ
ね。

「というわけで、僕は借り物競争、障害物リレー、クラス対抗リレーに
出ることになりました」

「そうなんですか。よくやりますね」

「しかも障害物リレーかあ。怪我しないように気を付けてね」

芳乃家に戻り、夕食を食べてる最中僕達は今日クラス内で行なった
競技の出場決めの事を話した。

「そういえば思ってたんですけど、みんな障害物リレーに関してかなり
警戒してましたね」

杉並君が関わってるらしいけど、あの警戒レベルは尋常じゃないと
思う。

「ああ……うん。聞いてないかな？ 障害物リレーは杉並君が一番手
を出す競技だった」

「それはクラス全員から聞きました」

「杉並君が色々細工をしていたおかげであちこちで大暴走だったんだ
から。流石に怪我をするような仕掛けはなかったけど」

「けど……相手の動きを妨害するような仕掛けつくつたり、泥だらけにさせたり、敵味方問わず大惨事だった時もあつたぜ」

「ふくん。その程度ならやってやれない事はないね」

「いや、明久。油断はしない方がいいぞ。杉並の事だから、お前に対しては特別な仕掛けを施す可能性だつて考えられるぞ?」

「そうかな? 別にそこまで大掛かりな仕掛けられるほど脅威な人間じゃないと思うけど?」

「2・3階から飛び降りても平気なタフな人が脅威じゃないとも思えますか?」

由夢ちゃんに言われたが、あまり脅威だとは思えなかった。

いや、僕の実感がおかしくなってるだけか。とはいえ、2・3階から飛び降りなんて、雄二でもやるんだから僕がやっても当然としか思えないんだよね。

脅威と言ったらFFF団や美波の方がよっぽどだと思う。

「まあ、今までが今までだったからたかが体育祭の障害物くらいで大事にはならないと思うよ」

「けど、やっぱり心配だし」

「大丈夫ですよ、音姫さん」

些細な事でも命に関わる事はここら辺に蔓延っているものなのは重々承知している。

だから例えこういう平和な場所でも準備は欠かさない。だから――

「みんなが言うから、もしものためを思ってAEDや輸血の準備は万全ですから」

「二」一体何処から仕入れてきたんだ(の)(ですか)、そんなもの!」「二」救急病院から」

「いや、そんな事を聞いてるんじゃないよ。普通そんなもの仕入れて……というか、簡単に手に入るものか?」

「とりあえず法螺吹きでも事情を述べれば大抵は手に入るよ」

まあ、向こうでは法螺では済まない事態が多々あつたからこそこちらも簡単に手に入ったけど。

「そんな簡単でいいのか……ていうか、明久は今までしょっちゅう輸血なんてやってたのかよ」

「向こうじゃ流血沙汰が絶えなかったからね」

主にムツツリー二の鼻血や美波と姉さんからの暴行によるものかね。

「まあ、確かにこれだけあれば多少の事故でも命は助かりそうですけど」

「ところで、これ……弟君の血液型もあるかな？」

「いや、音姉。気にするところが違うぞ」

「まあ、もしものためを思っつてRh―意外は揃ってますけど」

「どんなもしもを想像してんだよお前は」

「義之、体育祭は……危険なものがいっぱい潜んでいるんだよ」

「何だそりゃ？」

義之もすぐにわかると思うよ。僕の予想が正しければ、流血するのは何も障害物リレーだけじゃない事を。

こうして体育祭前夜を過ごした。

体育祭当日、風見学園のグラウンドには各クラスの観覧席や立て看板があった。

そしてグラウンドには幾つもの白いラインが引かれてある。

うん。まさに体育祭っていう感じが伝わってくるよね。

「というわけで、今日は風見学園第六十回体育祭です！」

そして、壇上からはさくらさんからの開会の言葉が始まっていた。

「まあ、難しい話は抜きで……スポーツと言えば、恋愛に並ぶと言われる青春の代名詞。思いつきり楽しんじゃってね！」

さくらさんの言葉でなんとなく和んでしまう。

いやはや、同じ学園長でも片やその外見とは裏腹にどこか大人っぽいさくらさん、片や生徒をバカにすることなしで会話することができないのではないかと思えるババア長とはまさに雲泥の差だ。

つくづく以前の僕の周囲にいた人っていうのは何処かおかしな人ばかりだったよね。

「おい、明久。俺達も観覧席行くぞ」

「あ、うん」

どうやらぼーっとしてる間に既に開会式は終了してクラスは全員それぞれの観覧席へと向かっていつてるようだ。

「あ、弟くーん！」

僕達も自クラスの観覧席に行こうとしたところで音姫さんが義之の名前を大声で叫んで駆けつけてきた。

「音姉、勘弁してくれ。さっきだって壇上で俺の事思いつきり名指しで叫んでたろ」

どうやら僕がぼーっとしてる間に音姫さんが義之の名を叫んでいたようだ。

普段は真面目な人なのに義之の事に関しては妙に子供っぽく……いや、子煩悩？とも違うな。

とにかくやたらと構ってくる。ある意味姉さんと音姫さんって似てるよね。愛を向けるベクトルが違うけど。

「ま、あんた達にはしつかり釘を刺しておかないと大変だからね。諸悪の根源3人組のいるクラスなんだから」

「あ、高坂さん。ご無沙汰です」

「やつほ、吉井。こうして対面するのは文化祭以来だったかしら？」

「ええ。多分そのくらいかと」

「まゆきさん……俺はもう騒動は起こしませんって」

「どうだかね〜？」

「俺はそういうのはもう卒業したんですよ。ですから杉並が何しようが知りませんよ」

「そうかしらね〜？」

「はあ……」

どうやら義之って、以前は杉並君と何かしてたみたいだけど……その様子じゃもう騒動は起こす気はないのかな。

ドンー！ ドンー！ ドンー！

そんな時、太鼓の音がグラウンドに響いた。周りを見てみると、3年2組の方で選手を応援する姿が見えた。

2組の観覧席の前では先頭にななかちやんと、その後ろに数人の男子が学ランを着て応援していた。

「フレ——っ！ フレ——っ！ 2・く・みっ！ それっ！」

『『フレツ、フレツ！ 2組！ フレツ、フレツ！ 2組！』』

ななかちやんの透き通った声に合わせて2組の応援合唱がグラウンド全体に響きわたっていた。

「ななかちやんか。すごいいい声してるよね」

「まあな。あいつ、軽音部にちよくちよく顔出して歌ったりしてるからな。めっちゃうめえぜ」

「へえ〜」

「白河さん、かつこいいよね」

「本当にすごいよね、ななかつて」

「あれ？ お前らって軽音部だっけ？」

「も〜……私と渉君は軽音部だって何度も言ってるでしょ〜」

小恋ちゃんの顔に慍色が広がっていた。どうやら義之が覚えていない事が不満だったようだ。

義之も、流石に幼馴染の部活くらいは覚えておこうよ。

「明久く〜ん！」

「ん？」

「お〜い！ あ・き・ひ・さ・く〜ん！」

「あ、えと……どうも、ななかちやん！」

ゾクッ！

ななかちやんに返事をした瞬間、全身をものすごい寒気が走った。

理由は言うまでもなく、ななかちやんのクラスメートやその周囲にいた男子の殺気によるものだ。

「へ〜……あんたら、ファーストネームで呼び合うほど仲いいんだね〜？」

高坂さんがニヤニヤした顔で僕を見つめた。高坂さん、わかってて言ってます？

「違いますよ。誤解を招く言い方はやめてくださいよ。あれは単なる挨拶ってただけで——」

『借り物競争に参加する方は、速やかにスタート地点まで集まってください』

「おい、明久。借り物競走はお前が出るんだろ？」

「あ、そうだ。それでは行つてきます。そしてもう一度言いますが、あれは単なる挨拶で——」

「フレ―！ フレ―！ あ・き・ひ・さ！」

「……………」

「ふくん？ にしては、随分と親しまれてるじゃない？」

ななかちゃんが何故か敵である筈の僕を応援して高坂さんが余計面白そうに僕を見た。

「それでは！」

とにかく逃げないと僕の身が危うい事になりそうなので早々にスタート地点へと向かった。

『おい、何でアイツばかり応援されてるんだよ？』

『俺だつて借り物競走の参加者なのに、なんでアイツが？』

『あの野郎、絶対このままじゃ済まさねえ』

本当に危うい事になりそうだ。僕、このまま無事に体育祭乗り切れるのかな？

第八話

風見学園体育祭。その最初の競技、借り物競争。

僕はスタートラインに立って軽くアップを済ませる。リレーとは違うからスポーツマンらしいアップまではいかないけど、場合によっては全力で走らないと間に合わないものもありそうだからな。

懸念すべきは僕の手元にどんな借り物が出てくるのかにかかっているな。

運による要素の強いものだとは用意できなかつたり実行できなかつたりというまではいかないけど、内容が濃いというか……僕の社会的信用を失いかねないものが多いんだよね。僕の場合。

どうにかこの平和な世界では社会的な死は免れそうだけど、恥ずかしい思い出としてみんなの心に刻まれはするだろう。

そうならない事を祈るけど。

「はいはい！ 借り物競争の出場者はこちらに集合してください！」

入場門で待機していた高坂さんが出場選手の呼び出しをしていた。

「どうも、高坂さん」

「あ、吉井。出場するんだ？」

「はい」

「ひとつ聞くけど、ズルなんてしてないわよね？」

「できるわけないじゃないですか。まだ走ってもいないですし、どんなズルができるんですか？」

「でも、杉並に頼んでこっそり借り物が書かれたカードをすり替えるとか……」

「なんか、杉並君なら簡単にできそうな気がしてきます」

確かに普段から神出鬼没。背後から出てきたかと思えばちよつと目を離れた隙に消え去る。

ムツツリーニでもあそこまで存在感を感じさせないでいられるかどうか。

「まあ。吉井じゃそんな頭の使うような事できるとは思えないか」

「だったら聞かないでくださいよ。そしてさり気な僕を馬鹿にしないでください」

「あはは。っと、時間だ時間。出場者の選手はここに一列に並んでください！」

高坂さんの呼び掛けで選手みんなは一列に並んだ。僕もその中に入ってグラウンドへと入場した。

そして高坂さんの引率の下、入場を済ませた後スタートラインへと横一列でスタンバイしていた。

「位置についてー！」

そして高坂さんがどこから出したのか、スタート合図用のピストルを構えた。

「吉井ー！ 頑張りなさいよー！」

「明久！ ここは気楽に行け！」

「明久君！ ファイトー！」

「よっしゃ、明久あ！ 序盤からトップ狙っていけー！」

「明久、ファイトー」

「明久君く！ 頑張つてー♪」

3組の観覧席からみんなの応援の声が聞こえてきた。

そして周りにいる選手を見ると、見た限りはあまり足の速そうな選手はいない。

運動量で決まる競技ではないから基本文科系の男子を集めたって感じかな。これならなんとかなるかもしれない。

「よーいー！」

パーン！

ピストルの音がグラウンドに響くと同時に僕は軽く地面を蹴り上げてスタートした。

うん。他のみんなもスタートは緩いけど、同じやり方じゃ運動量によつては差が出やすい。

そのおかげで軽いスタートにも関わらず僕がトップに躍り出た。さて、まず目の前に立ちはだかるのは何枚もの封筒が置かれていた複

数の机だった。

とりあえず僕は真ん中に置かれている机の前で立ち止まり、その上に散らばっている封筒を眺めた。

何枚もある封筒にはそれぞれ一文字ずつ漢字が書かれていた。何かの心理戦みたいなの要素も含めていろいろだろうか？

書かれている文字は『竹』、『川』、『草』、『桜』、『杉』というものだった。

どれにしたものか？ 僕が悩んでいると後からやってきた選手達はどこにかく速攻、目に入った封筒を適当に手に取って開いていた。

『げっ!? こんな持つてる奴いるか?』

『ああ、これどうしたもんか?』

『うわ……なんて頼みづらいものを』

封筒を開ければ皆顔を歪ませてオロオロと右往左往していた。

どうやらどれも難易度の高い借り物が書かれていたようだ。

やはりここに書かれている文字には何の意味もないのかな？ み

んな難易度の高いものばかりだし、ここは僕も勘で選んでみるか。

そして僕は『杉』と書かれた封筒を手に取り、封を破って中にある手紙を広げた。

「えっと、なにになに？」

手紙を広げて読むと、そこには恐ろしい事が書かれていた。

『女子の制服を着てゴールへ来い。女子の制服を着てのゴールイン、楽しみにしているぞ！ by杉並』

「杉並——っ!!」

本当に裏で杉並君が動いていた。

よりにもよってなんて借り物を指名してくるんだあの男は！

もうこのまま時間切れまで往生するか？ いやしかし、このまま何もせずに終わってしまうのも学園のみんなに失礼だと思う。何より、

『吉井——！ 書かれたものはなんでも用意してやつからなんとしても一位を取れ——！』

『頑張って吉井君——！』

『ファイター』

『ガンバ〜♪』

『慌てるな明久！ 落ち着いて探せ！』

ここまで応援してくれてるといいうのに最下位になるのは失礼なんでもんじゃない。

クラスの友人達が応援してくれている中でぐだぐだとして最下位になった日には顔向けができない。

友人の喜ぶ顔が見れるなら、1回や2回くらい、全校生徒の前で羞恥を晒すくらいなんてことないさ！

そう決心し、僕は付属2年の観覧席へと向かった。観覧席に着くと僕は辺りを見回して目的の人物がいないか探した。

数秒もするとその目的の人物はあっさりと見つかった。

「あ、由夢ちゃん！」

「明久さん？ どうかしましたか？」

「由夢ちゃん！ 今すぐ君の制服を着させてほしい！」

「……何があつたんですか？」

つて、しまったー！ 言い方を間違えた！ これでは僕が女装趣味の変態みたいじゃないか！

羞恥のひとつやふたつくらいなんてことないと決心したばかりだけど、これは僕の社会的にマズイことにしかならない！

その証拠に由夢ちゃんに続いて他の生徒からの視線が冷たいものになって忌避しようとしてるし。

「ごめん！ 端折りすぎた！ 借り物に女子の制服があつたから、お願いします！ クラスメートのみんなのために協力して！」

「や、私達のクラスだつて優勝を目指してないわけじゃないので……」

「体育祭終わった後でなんでも言うこと聞くから！ なんだつたら何か驕ってあげるから！ お願い！」

「ああ……わかりましたから、土下座までして頼まないでください。貸してあげますから」

「本当!? ありがとう、由夢ちゃん！」

とりあえず制服の問題は解決できそうだ。ただし、本当に問題なのはこの後だ。

スタートの合図が響き、明久達がスタートした。

スタートの瞬間から明久はトップに躍り出た。運動量に左右される競技でないのだからそこまで全力出さなくていいと思うのだが、明久の様子を見るとほとんど軽目のスタートらしい。

軽くであれだけのスタートとは、流石2・3階から飛び下りるほどの男。脚力に関しては並の人間を越えてるな。

そして一番に問題の借り物の書かれた紙の入った封筒のある机の前に立って何にしようか迷っているようだった。

何か気になる部分があるのか、明久が気になってる間に次々と他の選手が借り物の書かれた紙を手にとって表情を歪ませていた。

どうやら借りづらいものが書かれている奴が多かったようだ。

明久もその様子を見て軽く呼吸を整えて一枚の封筒を手に取り、身を取り出した。

『杉並——っ！』

そして、何故か怒濤の叫びをグラウンドに轟かせた。一体何が書いてあったんだ？

杉並の名前を叫んでいたが、杉並が何か暗躍してたのか？

「吉井——！ 書かれたものはなんでも用意してやつからなんとしてみも一位を取れ——！」

「頑張つて明久君——！」

「ファイター」

「ガンバ〜♪」

「慌てるな明久！ 落ち着いて探せ！」

とにかく俺達は明久を応援した。何が書かれているかはわからな
いが、決して用意できないものではないはずだ。

例えばそれがいやらしいものでも杉並の所為だと理解すれば誰も明
久を責めはしないだろう。

そして明久は真剣な顔つきで2年の観覧席へと向かった。

数秒もすると由夢と話しているのが見えた。そして土下座をして

まで何かを頼んでいるようだった。

更に何秒かすると明久は由夢と共に校舎の方へ向かっていったよ
うだ。

「明久、一体何を借りていくように書かれていたんだろうな？」

「うん。由夢ちゃんが一緒に行ったから、女の子の日用品だとか？」

「もしかしたら、制服だったり？」

「いえ、下手をすれば下着なんて？」

「や〜ん♪」

「何!?! 由夢ちゃんの肌に吸い付いた下着! くっ! だとしたら、

羨ましい! 羨ましいぞ、明久の奴!」

「アホか。んなもんが借り物に出されるかつつの」

しかし、アレを書いたのが杉並というのなら、多少のラフなものを
要求してもおかしくはない。

何を書かれているのかは知らないが、少なくとも男子にとっては恥
ずかしい事が書かれていたのは間違いないさそうだ。

そして、数分もすると――

『ちくしょう――っ!!』

そんな叫びと共にグラウンドに飛び込む影が見えた。

「お、明久が戻ってきたみたいだ……ぜ?」

「……ふえ?」

「あら?」

「……うそ」

「マジか?」

俺達は目の前に広がる光景に言葉が出なかった。

何故か、明久が由夢の制服を借りてきた。言葉だけなら借り物競争
で命じられたものを持ってきたように思えるだろう。

しかし、明久の場合は借りたは借りたでも……借り物を身につけた
状態で。つまり、女装状態でグラウンドを走っていた。

しかも何故かものすごい様になっていた。

「え? あれ、明久なのか? 何故だ? 男の筈なのに、ものすげえド
キドキしてる自分がいるんだけど?」

「うう……男の子なのに、なんで女の子の私より可愛いの？」

「なんだか……シヨック」

「中々のレベルじゃない」

明久を見る目が驚愕や羨望に染まっていくのがわかった。なんで男があんなに女の服を着こなせるんだよ？

そんな事を考えてる間に明久がゴールした。

『はい！ 3年3組一着！ ていうか吉井、あんた何やってるの？』

『好きでこんな格好してるんじゃないやありませんよ！ この紙に書かれてる通りにしていただけで！』

『紙？ ああ、見せなさい。……なるほどね。吉井も、わざわざ紙の指示通りにしなくてもいいのにな。どうせ杉並のいたずらなんだから』

『わかってるんですけど……指示に従わなかった場合、後でどうなるか』

『まあ、気持ちはわかるんだけどねえ』

やはり杉並の指示だったらしい。だからと言ってよくあんな恥ずかしい格好ができたものだ。

「いやはや、ものすごい光景だな」

「おわっ!？」

噂をすれば杉並だ。俺の背後からいつものように突然現れた。

「杉並、あれお前の仕業だろ？ 借り物の書かれた紙をすり替えておいてあんな事させたの」

「書いて一部すり替えたのは事実だが、誰に当たるかについてはランダムだ。吉井に当たったのは偶然だ。いやしかし、まさかあの指示を実行して……こうも見事な着こなしぶりを披露するとは流石に予想外であつたぞ」

杉並は瘻笑を浮かべていた。どうやら実行したのが予想外というのは本当のようだ。

そして明久の女装姿に呆然としながらもゆったりとした具合で二着、三着とスローペースだが、借り物競走が進み、15分が過ぎてようやく終わった。

『三人四脚に出場する選手は、スタート地点に集合してください』

「あ、今度は俺達の番だな。行くか」

「ええ」

「う、うん……」

俺は杏、小恋と一緒に becoming 三人四脚出場のためにスタート地点へと向かった。

明久、大丈夫なのだろうか？

「うう……こんな大衆の前で」

「だ、大丈夫です！ 私達、何も見てませんから！ ですよね？」

澹然と泣いている僕に由夢ちゃんの見聞さいつぱいの言葉にクラスメートが頷いた。

うん。やっぱりこの学園の人達はいい人ばかりだよ。由夢ちゃんの人徳というものもあるだろうけど。

とりあえず、特殊な趣味を持つ変態というレッテルを貼られずには済んだようだ。

杉並の奴、今度見つけたら文句を言ってやる。

『それでは、位置に着いて！』

「あ、明久さん！ 兄さん達が走るようですよ！」

「ん？ ああ、そういうえばこの競技は義之達が」

確か、月島さんと雪村さんと組んで出るって言ってたね。

月島さんが目に見えて緊張してるけど、ここはなんとか頑張ってるらしいところだ。

『よーい！』

パーン！↑合図の音。

ドサツ！↑義之達が倒れた音。

スタートと同時に義之達が転んでしまった。

「何やってるんでしょうか、兄さんは？」

「多分、些細なすれ違いで右足と左足を出す順番を間違えたんじゃないかな？」

スタートする前に義之が何か指示をしたっぽいし、雪村さんは問題ないと思うけど、月島さんが義之の指示を間違って受け取ってしまったのだろう。

義之が右足からという言葉を自分が左足を出せばいいと間違えたとか。人一倍他人に思いやりを与える月島さんなら十分考えられる事だ。

そしていざりスタートするかと思えば……

『うわっ!?!』

『わっ! ととと!』

また転んでしまった。しかも、今度は義之の顔が月島さんの胸に埋もれた状態で。

「兄さん、何やってるんですか」

「ははは……なんともすごい……」

義之って、ラッキー体質っていうか……本当にラブコメの主人公みたいな人だよな。

『よ、義之……顔どけて?』

『わ、悪い! わざとじゃないんだ!』

『そ、それはわかってるから、早くどけて〜!』

『わ、わかった。……あれ?』

『よ、義之?』

『すまん。何だか後頭部から何かで固定されて動かない』

『せっかくだから、もうちよつと感触を楽しんでおきなさい』

何故か雪村さんが義之の頭を押さえ込んでいた。

『何? 何が起こったの?』

『あ、杏が……俺の頭を押さえやがる……』

『ええ〜!?!』

『こういうハプニングは中々ないから、いい経験でしょ?』

『そういう問題じゃねえだろ! いいから頭上げさせてくれ!』

『そうだよ〜! どいてよ〜!』

目の前で桃色の光景が広がっていた。それを羨望の眼差しで見つめるものもいれば……

「兄さん……そんなに胸の大きな人がいいのかしら？」

「ゆ、由夢ちゃん？ 一応、あれは事故なんだよ？」

隣にいる由夢ちゃんのように嫉妬する人もいる。

というか、直接こちらに向けているわけでもないのに由夢ちゃんから発せられる嫉妬のオーラが怖い。

『あ、杏どいて〜！ 義之が死んじやう！』

『う……………ぐぐ……………ふう』

『よ、義之？』

『あら？ ………………窒息してるわね』

『そんな冷静に言ってる場合じゃないよ！ なんか痙攣起こしてるし！』

「まずい！」

どうやら義之がまずい状況にあるらしい。いや、それは見ればわかるけど。

とにかく急がなければ義之の生命が危険水域まで下がってしまう。そうなる前に急いで手を討たなければ。

僕は大きく自分のクラスの観覧席へ向かい、そこから必要な物を持ってすぐさま義之の下へ駆けつけた。

「義之っ！」

「あ、明久君！ 義之が〜！」

見れば義之の痙攣が酷くなってる気がした。僕は急いで義之の容態を診た。

「……………うん。これくらいなら。二人共、ちよつとごめん」

僕はハサミで二人の足をつないでいる手拭いを切つて義之の体を仰向けの状態にしてシャツをめくった。

「きやつ！」

「ひゅ〜」

流星に女子の前で他人の男の裸体を晒すのは申し訳ない気もするけど、今は命を左右する緊急事態だからそんな些末事を気にしてる場合じゃない。

僕は持ってきた物を足元に置いて準備を始めた。

「あれ？ 明久君、それって何？」

「……AEDね」

「二人共、危険だから下がって！」

僕はAEDからコードを伸ばしてシートを義之の体に貼り付けた。

「このくらいなら……100ちよつとでチャージ！ 3・2・1！ ほ
いっ！」

「ふおぶあ——っ!？」

「よしっ！ ふっかーっ！」

どうにか義之の命を救う事はできたようだ。

「よ、義之く……」

「へえ。手馴れたものね」

「伊達に死線を毎度さまよっていかないから」

「……明久君って、どんな日常送ってたの？」

今までに幾度も死地へと去って行こうとする人がいたからもうこの程度の蘇生ならお手のものだった。

「あのか、一命取り留めたのはいいけど……」

「はい？」

目の前にスターターをやっていた生徒会の人が出てきて……

「もう、みんなゴールしちゃってるよ？」

「……………あ」

こうして、三人四脚は最下位という結果に終わってしまった。

第九話

「はあ……まさか、最下位だなんて」

三人四脚の競技が終わり、僕達は観覧席へ行くと沢井さんは溜息をついていた。

「違うわ。委員長」

「ん？」

「最下位じゃなくて……失格よ」

「同じじゃない！」

「違うわ。余計悪いよ」

「……頭が痛いわ」

杏ちゃんと口論するうちに沢井さんは頭を押さえていた。

杏ちゃん……その失格になった原因が言っていない言葉じゃないと思う。

「はあ、苦しかったぜ……」

隣ではどうにか死地から連れ戻したものの窒息した時の苦しみがまだ体に残っている義之がくたびれた顔で立っていた。

「いやあ、しかし……明久のあの救命っぷりときたらすごかったなあ。

義之が電気一発で復活したもんな」

「ああ。俺もあの時本当に死ぬんじゃないかって思ってたぞ。まさか、明久が用意したAEDがこんなところで役に立つだなんて思いもしなかった」

準備はしつかりしないと、こういう時に何もできなくなるからね。

「ふう………どうにか今のところは2組といい具合に拮抗してるけど、これからもあんな事があつたらたまらないわ」

「大丈夫よ。義之と明久がなんとかしてくれるから」

杏ちゃんが僕と義之を見つめてそう呟いた。

「そりゃあ、僕も頑張るけどさ」

「俺達だけでなんとかなるか？」

「ふふ……義之はさっきのハプニングで充分充電はできたでしょ？」

この先小恋の胸の感触を思い出しながらその興奮でこれからの競技を乗り越えると信じてるわ」

「杏〜！」

杏ちゃんのセクハラ紛いの一言に当の被害者である月島さんが涙を浮かべながら雪村さんの口を塞ごうとした。

まあ、小恋ちゃんには悪いけどいいものを見せてもらいました。

『午前中最後の競技、障害物リレーの参加者の方は、スタートラインにお集まりください』

「お、いよいよ障害物リレーか。明久、油断するな？」

障害物リレーの開始の報せが放送され、それを聞くと義之が僕の肩に手を置いて忠告する。

「大丈夫だよ。多少の障害くらい乗り越えてやるさ」

「月並みな事しか言えないが、頑張れよ」

「うん！ 行ってくる！」

僕は障害物リレーに参加するためスタートラインへと急いだ。

いよいよ始まる午前中最後の競技、障害物リレー。

スタートラインには明久と他のクラスが一列になって並んでいる。

しかし何故だろうか？ スタートラインに立っている人間が明久や一部を除いて女子が多い気がするな。

2組からは白河が出てるし……お、よくよく見れば由夢もいるし。

「い、位置について……」

そして、今回のスターターらしい音姉が合図用のピストルを構えていた。

だが、あまりに腰が引けているのが情けないというか……いや、見方によってはそれは可愛らしいと受け取る奴も多いだろう。

「よ、よーいー！」

パァン！

「きゃっ！」

選手達よりも音姉が一番びっくりしている間に選手達が一斉に走り出した。

『だああああ!?!』

と思ったが、スタートの瞬間明久の悲鳴が上がった。

見ると明久の足元が地面にめり込んでいた。小さな落とし穴みたいな。

恐らく杉並の仕業だろう。本当に敵味方問わずどんな罠が待ち受けているかわかったもんじやない。

『こんのおおおおお!』

しかし、明久はそんなハンデなどお構いなしに怒濤の速さで他の選手に追いついて最初の障害物である跳び箱を楽々飛び越えた。

その向こうでは第二障害の平均台が待ち構えていた。

この辺りは順調に進む事ができたようだ。しかし、最初のハンデがあつたのでまだトップには出ていない。

トップメンバーは……お、意外な事に由夢か。意外と走れるんだな、あいつ。

その後ろでは白河もいいスピードでついていた。意外といい勝負になっている。

そして、平均台の次は麻袋が待ち構えていた。これは麻袋を履いて一定の距離まで跳ねればいい競技だ。

「……………」

「やっー… ほっー!」

俺は目の前の光景に唾然とした。

由夢は黙々としながらもトップをキープしている。しかし、その後ろで白河が跳ねる度に胸が……後は言わずもがな、それは健康的でダイナミックな光景であつた。

なるほど。毎年何故かこの障害物だけはある理由が今になってわかった。そして、どうしてこの競技に限って男子の出場者が少ないかがよくわかった。

こういう光景を見たいがために男子は自クラスから目の保養になりそうな女子を選んで自分達は観戦をとことん楽しむというシステ

ムか。

3年間もこの競技があつたというのに一向に気づけなかつた自分が憎いぜ。

ドカーン！

『ぎやああああ!?!』

「な、何だあ!?!」

「よ、吉井の足元が爆発したぞ!?!」

「爆発う!?!」

本気で何考えてるんだ杉並の奴!?! 下手すれば怪我どころの騒ぎじゃねえぞ!

『何の、負けるかあああああ!?!』

「あ、でも……明久なら心配なさそうだな」

「……マジかよ」

爆煙の中からボロボロに変わり果てた明久がボロボロになった麻袋を持って必死に跳んでいる姿が見えた。

多分少量の火薬だったからとはいえ、ペースも崩さずによく走り続けられるな。

直に明久の頑丈っぷりを見るのは今回が始めてだが、本当になんつうタフさだよ。

他の選手も明久の頑丈っぷりに動揺しながらも目の前の障害を切り抜けようと走り続けていた。

四つ目の障害物は……泥プール越えの棒高跳びかよ。ていうか、何時の間に泥プールなんてあつたのかよ。

これは中々にシビアな競技だぞ。

由夢は……緊張気味だったが、どうにか越えることはできた。白河も、順調に越えたな。

『たりやあああああ!?!』

明久は……言わんでもわかるな。2・3階から飛び下りるような奴がこの程度で脱落するとは思えない。ていうかあいつ、棒なんていらねえだろ。

泥プールに落ちた選手も出たが、ここは危険な障害がないようなの

で順調に進んだ。

そして最終障害でハードル走だった。

選手達の前には5つほどのハードルが置かれており、選手達はそれを飛び越えて後はゴールへと一直線だ。

『うおおおおおお！』

一直線のコースの前の障害に明久はトップスピードを保ったままハードルを次々と飛び越えていく。

圧倒的なスピードでトップメンバーの由夢や白河に追いつき、いざ一位に躍り出ようかと思つた時だった。

びよびよくん！

『わああああああ！』

「飛んだ——っ!？」

そう、飛んだ。ハードルどころか、屋上までをも飛び越えようというくらいに飛んだ。というより、飛ばされた。

明久の足が地面に着いた瞬間に地面が下からびっくり箱のように飛び出してその勢いで明久を空中へ放り投げた。

放り投げられた明久は重力に従つて垂直に落下していった。

『こん、のっ！』

何度も言うように明久は2・3階から飛び降りするような人間。この程度でリタイヤなんてするようなヤワな奴じゃない。

地面に着地した衝撃に耐えて明久は残りのハードルを越えてここから先は一直線。

ラストスパートをかけて明久は猛スピードで由夢や白河に追いつき、越した。

『おおおおおお!!』

明久の数々の障害の乗り越え、一位に躍り出た状況に外野集団は驚嘆の声を上げていた。

そして、明久がいざゴールのテープを切ろうとしていた。

『ぎやあああああ!？』

しかし、最後の最後……ゴール前に落とし穴が仕掛けてあった。

明久が落とし穴にはまった隙に由夢と白河は申し訳なきように

ゴールインした。

穴から出てきた明久が酷く弱々しく見えたのは仕方のない事だろう。流涕した状態での潰敗は哀れ過ぎた。

「ごめん、一位……取れなかった」

僕は障害物リレーを終えて観覧席へ戻り、クラスメートに頭を下げた。

「いや、いいって。ていうかむしろアレだけの障害物を前に3位は十分すごいって」

「だなんだな。俺だったら多分ビリになってたぜ。いや、それどころか退場になってたかもな。怪我で」

「うんうん。吉井君はよくやってくれたと思うよ」

「そうね。むしろ賞賛を送ってやりたいわ」

みんなは僕を責めることなく、むしろ僕を褒めてくれる人達が多かった。

本当にこの学園の人達は優しい人間ばかりだ。思わず涙が出そうだよ。

「うむ。吉井の頑丈さはやはり並の人間を遥かに越えてると……よいものを見せてもらった」

涙を浮かべている僕の傍でメモを取っていた杉並君の姿があった。

杉並君も雄二と同じで厚顔無恥の気が強いようだ。全く悪びれるという様子がない。

『はろはろ〜！ 学園長の芳乃さくらです！ 皆さん、体育祭を楽しんでますか〜？』

そこにさくらさんの放送が流れてきた。

『そろそろお昼休みの時間です！ ゆっくり休んでもりもり食べて、午後の競技に備えてくださいね！』

そういえばもうお昼の時間だったね。

「はい、注目〜!」

放送が終わると沢井さんがパンパンと手を叩いてクラスメート達の視線を集めた。

「それでは、13時まで自由行動にします。お昼は何処にいても構いませんが、後半開始の5分前までにはここに戻ってくるようにしてください。では、解散!」

沢井さんの号令で全員が早速昼食を食べようとバラバラになった。

さて、僕はまず教室に置いてある弁当箱を取ってきてからだね。

「さて、僕は教室に弁当置いてるから」

「あ、俺もだ」

「ああ、俺も俺も」

義之も涉も同じようなので3人で同じく教室へと向かっていった。

「あれ? 弟君」

「音姉」

「どうも」

昇降口のところで音姫さんとバツタリ出会った。

「おお、音姫先輩の体操着姿。スポーティーで素晴らしいですね」

「え〜? やだなあ板橋君。そんなお世辞なんて」

「いえいえ、お世辞じゃありませんよ〜」

「それで、弟君達は揃ってどうしたの?」

「ああ、俺達は弁当を教室に置いているからな。それを取りに」

「ふ〜ん。だったら、私達とお昼食べない?」

「音姉達と? う〜ん……」

音姫さんの提案に義之は首を捻って悩んでいた。

「おいおい、音姫先輩からの誘いだぜ? 何悩んでるんだよ?」

「いや、俺元々クラスのみんなと飯食おうと思っていたし」

「だったら、音姫さんや由夢ちゃんも交えてみんなでお昼食べない。賑やかな方が楽しいし」

「あ、その手もあるか」

「明久、ナイスだ! その案採用!」

僕の言葉に涉がグツ、とサムズアップのサインを送った。

「そうだ。どうせならななかちゃんも誘おうかな？」

「おお、それいいね！ さて、そうと決まったらさっさと弁当取ってきて可愛い女子共に囲まれて昼休み堪能するか！」

板橋君はテンションの高さを最高潮に保ったまま教室まで走っていった。

僕と義之はやれやれと軽く呆れながら教室へ弁当を取りに行った。

弁当を取りに行ってから数分もすると僕達は校庭の角にある桜満開の木の下で少し広めのレジャーシートを広げ、そこでお昼タイムと洒落こんでいた。

こうして見るとまるでお花見をしているようにも見える。

「ん〜、やっぱりよっぱり義之と明久のコラボ料理はうめえな。お前等、いい主婦……いや、主夫？ になれるな」

僕と義之の弁当は2人の共同作業によってできたものだ。

今朝さくらさんからお弁当作ってと頼まれ、どうせ朝作るならついでに弁当もそれぞれ役割分担して作ったのだ。

「あ、この卵焼きは義之だね？ 義之の卵焼きって、すごいこだわってるから」

「そうだね。流石に僕もこの味が出せるかどうか」

義之の作った卵焼きは本当に美味しかった。どんな隠し味を使っているのかちよつと気になる。

「まあ、卵焼きは好きだからな。結構作る回数も多かったし」

「弟君の卵焼きって、本当においしいんだよね」

「いやいや、音姫先輩の料理も最高ですよ。本当に美味しいですよ、このサンドイッチ」

「今朝、由夢ちゃんと2人で作ったから」

「え、由夢と？」

義之が疑念の籠った目で由夢ちゃんを見た。

「し、心配しなくても材料とパンの耳を切って挟むだけです」

「よかった〜」

「むう……これでも、少しは成長してますよ」

確かに。このところ義之に内緒で僕に頼み込んで料理の特訓をしてたんだっけ。

まだ実戦投入まではいかなくとも、最初と比べればよくなってきている。少なくとも変な行動を起こさなきゃサンドイッチくらいならちゃんと作れるようにはなっている。

「あ、そのコロツケ美味しそう。いただき♪」

「あ！ ななかちゃん、それ僕のお気に入りなのに！」

ななかちゃんが横から僕の弁当のコロツケを取って食べた。それ結構自信作なのに。

「あはは！ ごめんごめん。ていうわけで、明久君には私のおかず分けてあげる♪」

そう言っとななかちゃんは自分の弁当箱からエビフライを箸で掴んで僕の口元へ持ってきた。

「……えと、ななかちゃん？」

「あくん」

「……え〜と？」

「あくん」

「いや、だから……」

「あくん♪」

これは……女子から男子へ弁当を食べさせる際の最高の食べさせ方。伝説の『はい、あくん』か!?

「な、ななかちゃん……流石にそれは……」

「あくん♪」

何を言ってもあくん意外に何も言わない。これはもう食べなければキリがなさそうだ。

仕方ない。僕も男だ。このシチュエーションが嬉しくないわけないし、これは午前中頑張った自分に対する褒美だと思っただい！

「あ、あくん……むぐ」

「おいしい?」

「はい、とつてもおいしいデス」

「恥ずかしさでほとんど味なんてわからないけど。」

「ぬおく! 学園のアイドルから直々に『はい、あくん』だど!? ちきしよう! 明久の奴、羨ましい! 羨ましすぎる!」

「わお、白河さんったら大胆♪」

「これは負けてられないわね。小恋、この流れに乗ってあなたも義之に『はい、あくん』を実行するのよ」

「ふえく!?!」

「お、弟君! 私のサンドイッチあげるから! はい、あくん!」

「つて、音姉も乗らないで! 本気で恥ずかしいから」

「……なんだか、ものすごい甘いですね。デザートもスイーツもないのに」

「周りでは僕達の空気に毒されて一部すごい状況になっている。」

「そして、この状況を見ていた一部の男子生徒がものすごい殺気を僕に送ってきた。」

「何時でも何処でも殺気があるのが当たり前になっちゃってる僕の日常つて。」

「そんなこんなで甘ったるい昼休みを終えて午後の競技へと構えたのだった。」

第十話

午後に入ってから風の風見学園体育祭はいつそう盛り上がっていた。盛り上がればその波に乗って選手は普段以上のペースで競技に出ようとする者も多いだろう。

そして、その人の熱意などに当てられ、燃える者もいたり途中で気分が悪くなったりもすれば……

「涉っ！ しっかりするんだ！」

「う……明久……俺は、今のままでも……満足、してる……ぜ……」

「涉？ 死んじゃ嫌だよ……涉——っ!!」

「……あの、熱血ドラマのような場面展開してるところ悪いんだけど……準備が出来たならさっさとその鼻血垂らしまくってる男子を日陰にでも連れていきなさい」

このように、とある事情にて血を流す者も存在する。

「しかし……AEDだけならず、輸血パックまで活用する時が来るなんて思いもなかったぞ」

「まあ、あくまで保険だったけど……まさか使う時が来るとは僕も予想してなかったわけじゃなかったけど、驚いてるよ」

「いや、保険でもそんなもの用意する奴は普通じゃないと思うぞ」

現在、僕は板橋君に対して輸血作業を行っていた。

何故かと言えば午後の競技にパン食い競争があり、そこには茜ちゃんが出場していた。

ここまで言えばわかる人はわかるだろう。パン食い競争の際、茜ちゃんが物干し竿に吊るしたパンを取ろうと跳躍した際、茜ちゃんの成長しきった部分がこれでもかと言うぐらいに揺れていた。

その時点では涉もまだ耐えていたんだけど、やっとパンが取れたかと思った時に運悪く物干し竿が倒れてしまい、花咲さんはそれに巻き込まれて地面に倒れ込んだ。

そしてその時に花咲さんのジャージが捲れ、彼女の上半身が彼女の成長しきった部分の下半分まで見えてしまい、その時に色々想像して

いたのか、渉が大量の鼻血を噴出して倒れ込んだ。

本当、彼の想像力はムツツリーニといい勝負なのかもしれない。

「でも……本当に明久君って、こういうの慣れてるって気がするよね。お医者さんでも目指してるの？」

輸血作業を続けていると小恋ちゃんが僕の作業を感心した風に見ていた。

「いや、そういうわけじゃないよ。ただ、こういう作業をする機会が向こうじや多かったから自然と慣れただけだよ」

「そんな機会がわんさか流れ込んでくるって、あんたはどんな日常を送っていたのよ？」

少なくとも、沢井さん達が送っている日常とは全く違うとだけは言える。

さて、ここまで作業を進めれば30分くらい寝かせればすぐに起き上がれるくらいにはなるはずだ。

「で、あんたの方は体調とか大丈夫なの？」

「うん。僕はどうにかね」

「ならいいけど。いざって時にヘマしないようには気を付けなさいよ？」

「わかってるよ」

「じゃあ、後でね」

「うん」

そう言って沢井さんは小走りで去っていった。恐らくはアップのつもりなのだろう。

「さて、僕もそろそろ始めようかな」

僕は軽く柔軟をすると小走りで校庭を走り回った。

僕を含め、沢井さん、小恋ちゃん。そして義之の4人で体育祭最終競技であるクラス対抗リレーに出るのだ。

どの競技も色々あったけど、杉並君の報告によればウチのクラスは2組とかなり得点が近い位置にいる。

この最終競技で2組に勝つ事ができればウチのクラスが1位になるのも可能だ。

体育祭というからには、そしてここまで盛り上がればこの波に乗って優勝を目指したいものだ。

そして、時は過ぎて……校庭は荒涼とし、砂塵が舞っていた。

周囲から僕達選手が注目を浴びているのが肌でわかってしまう。

この競技で全て結着がつくんだ。泣いても笑ってもこれが最後。何としても勝ちたい。

僕はいてもたってもいられず、その場でストレッチを繰り返していた。

「随分とやる気だな、明久」

「うん。ここまで来たらもう優勝してみたいなって」

「確かに、俺もここまで2組と僅差を保つなんて予想していなかったぞ」

体育祭が始まる以前、杉並君の情報でななかちゃんがいるクラスは大抵運動部の生徒が集まる傾向があり、そのクラスがいつも体育祭を制しているらしい。

しかし、今年の体育祭は3組のみんなも随分と頑張ってくれたおかげもあって2組と僅差でいられたようだ。

「ここまで来たらとことん優勝しなきゃな、小恋」

「ひゃうっ!?!」

義之が横に視線を向けて言うと、その傍にいた小恋ちゃんがびくりと体を震わせた。

「ていうか小恋ちゃん、いたの!?! 完全に背景と同化してたよ!?!」

義之が声をかけなきゃ全く気づけないほどに見事に背景と同化しつつあった小恋ちゃんだった。

「なんだ、緊張してんのか?」

「う、うん……」

緊張してるからとはいえ、あそこまで背景と同化してしまうほどとは余程この環境からなるプレッシャーがこたえてるんだろう。

正直いつ僕もこのプレッシャーはキツイところだった。

「はう〜……このまま背景の中に溶けてなくなったらいいのに……」

「そんな事になったら参加者がいなくなつて僕らのクラスが参加するまでもなく負けちゃうからね」

「それに、放課後散々練習しただろうが」

練習と言つても大体はバトンの受け渡しの主だった気がするけど。

まあ、下手に走る練習よりはそつちの練習をした方が効率的なのも確かだ。

なにせ小恋ちゃん、義之にバトンを渡そうとする度に意識して、手を止めたりバトンを渡し損ねて地面に落としたりが何度もあつたら。

「そ、それはそうなんだけど……」

「大丈夫！ 小恋ちゃんだつてあんなに頑張つたんだ！ きつとうまくいけるさ！ 義之との絆を信じるんだ！ 君ならきつとできる！

自分を信じるんだ！」

「何でそこで俺の名前が出てくるんだよ？」

全く、鈍い人はこれだから困る。

「わ、わかった。月島も頑張る」

義之の名前を出したのがうまく作用してくれたのか、小恋ちゃんがやる気になってくれた。

「お？ 大きく出たね、二人共」

「ななか……」

「ななかちゃん……」

後ろからななかちゃんがツインテールの髪を揺らして声をかけてきた。

ここにいるということ、ななかちゃんもリレーに出るということか。

「いくら小恋や明久君がいるからつて、手加減はしないからね♪」

ななかちゃんは楽しそうにそう言った。

「ふふつ。望むところだよ、ななかちゃん。僕達だつてそう簡単に負けたりはしないさ」

「うん、ななかには絶対負けないもんね！」

人の倍温厚な月島さんもなかなかちゃんに対抗意識を燃やしてそう言った。

ちよつと珍しい光景だった。

『それでは、いよいよ血で血を争う世紀のメインイベント！ 風見学園秋季体育祭クラス対抗リレー、始まりま〜す！ 選手の皆さんは、スタンバってください〜！』

放送でさくらさんが楽しそうな、それでいて気合の籠った声が校庭に流れた。

いよいよクラス対抗リレーの開幕だった。

「小恋、出番だぞ」

「小恋ちゃん、頑張つて」

「うん！ 頑張りますっ！」

小恋ちゃんは目に炎でも映らんばかりのやる気を纏ってスタートラインへと向かった。

そして、第一走者が全員スタートラインへと並んだ。

その中では小恋ちゃんは真剣な顔つきのまま今か今かと開始の合図を待っていた。

『小恋ちゃん！ 頑張つて〜！』

『フレ〜！ フレ〜！ つ・き・し・ま！』

『無様な格好だけは見せないで頂戴』

『月島——っ！ 俺がついてるぞ——！』

クラスメートの応援を耳に……いや、あの様子じゃ入ってないようだ。

さつきから一心不乱に何かを呟いているのか、口を動かして賢明に足を小刻みに動かしている。

そして、いよいよスタートの合図を前に高坂さんが壇上の上に立つて合図用のピストルを構える。

合図用のピストルを宙へ掲げ、その瞬間周囲が緊迫した空気に包まれた。

「位置について！ よーいー！」

パァン！

合図用のピストルから銃声が鳴り響き、いよいよクラス対抗リレーによる戦いの火蓋が切って落とされた。

小恋ちゃんやその他の選手達が一斉にスタートした。

そして、小恋ちゃんはスタートダッシュで思いっきり前に出るわけでも集団から遅れるでもなく、無難な位置をキープしながら走っている。

「いいぞ小恋！ そのまま走りぬけ！」

第二走者である義之は小恋ちゃんが第四コーナーを走ってる時には既にスタンバっていた。

現在の順位は3組が4位。2組には今のところ負けているが、まだまだ挽回するチャンスはある。

「義之！」

「おう！」

練習の成果は十二分に発揮され、小恋ちゃんはベストな形で義之にバトンを繋ぐ事ができた。

バトンを受け取った義之は一気に加速して1と3位の選手達を追っていく。

「月島さん、お疲れ様。いいスタートだったよ」

一旦義之の走りから視線を外し、完走した月島さんに労いの言葉をかけた。

「うん……ごめんね。私もう少し足が速ければ……」

「何言ってるの。十分いい走りしてたよ。こっからは義之がなんとかしてくれるから」

「う、うん。義之なら大丈夫だよ」

『ファイト！ ファイト！ よ・し・ゆ・き！』

『義之君、頑張って——！』

『ファイト、ファイト、よ・し・ゆ・き。ファイト、ファイト、よ・し・ゆ・き』

「義之——っ！ 頑張って——！」

『弟く——ん！ ガンバ——！』

『兄さん！ ファイトです！』

数多い応援者の声が背中を押しているのか、義之が徐々にトップ集団に追いつき、最終コーナーで3位の選手を抜きそうになった。

「よし委員長！ 後は任せたぞ！」
「任せてっ！」

そして第三走者の沢井さんが既にスタンバっていた。

「平賀く〜ん！ 急がないと3組に追いつかれちゃうぞ〜！」

その隣ではななかちゃんもスタンバっていた。

義之のおかげで2組とはかなり僅差の順位についているようだ。

「よし、ななかちゃん！ 後は頼んだ！」

「アイサー！」

義之より少し速い時間差で2組のバトンがななかちゃんに渡され、ななかちゃんはスタートした。

「委員長！」
「っ！」

数秒遅れて沢井さんにバトンが渡され、沢井さんは口を一字に噛み締め、疾風の如くその場を駆け抜けていく。

「ふうっ！ ふうっ！」

「お疲れ義之。いいタイムだったよ！」

「義之、お疲れ様」

「ああ……それで、順位はどうだ？」

「おかげで3位のクラスとほぼ同着。そんで今沢井さんが……速い」

視線を沢井さんに戻すと沢井さんは女子にしてみれば圧倒的な速さで3位、2位の選手を抜いていくのが見えた。

そして、1位のななかちゃんを射程範囲内へ収めつつあった。

「すごい……」

「委員長、意外と足速かったのな」

「これなら、2組に勝てる！」

沢井さんの意外な底力を見てこれはいよいよ3組の優勝も有り得る構図に変わっていた。

「明久、ぼーっとしてないで早くスタンバっておけ。最後はお前だぞ」
「あ、うん」

沢井さんの走りに見とれてたところを義之に注意され、僕はスタートラインへとついた。

「ななかちゃん！ こっちー！」

僕の隣ではななかちゃんを待つてる2組のアンカーがいた。

杉並君の話だと、アンカーも運動部の人間らしい。それも、陸上部だど。

視線を第三走者の方に戻すと、沢井さんも頑張ってるけどななかちゃんも頑張ってるのか、中々差が縮まってくれない。

そのままななかちゃんが委員長の数メートル前をキープしてバトンを前に突き出す。

「一ツ橋君！ 後はお願いね！」

「任せろ！」

2組の方でアンカーが走り出し、数拍遅れて沢井さんもバトンを僕に向けて突き出す。

「吉井！」

「了解っ！」

沢井さんからバトンを受け取り、僕は地面を思いつき蹴り上げてスタートした。

「吉井——っ！ 後は頼んだわよ——！」

沢井さんの激励を背に受け、僕は2組のアンカーに向かって加速していく。

『よし、行け——！ 明久——っ！』

『明久！ 頑張りなさい！』

『明久くくん！ いてこましたれ〜！』

『それ、チャツチャツチャ！ それ、チャツチャツチャ！』

『明久君、フアイト〜！』

『明久さん、頑張ってください！』

『明久君、頑張っ！』

『吉井、頑張りなさい！』

『抜けえ！ 明久あ！』

みんなの声援を受け、僕は更に加速する感覚を味わう。

僕は肉体の限界を振り切る勢いで足を動かし韋駄天となって2組のアンカーを追っていく。

その差がどんどん縮まっていくのが目に見えている。錯覚じゃない。

そこで第3コーナーを回る頃には2組のアンカーの背中にくっついていた。

第3コーナーはカーブ。普通ならここで勝負を仕掛けるのは得策じゃないと誰もが思うだろう。

だから目の前にいる2組のアンカーも100%の力を出し尽くしているわけじゃないとすぐにわかる。

でも、僕は散々鉄人やその他大勢から追いかける日々を置いていたんだ。

こんな状況なんて日常茶飯事。この程度で走りに支障が出るような鍛え方はしていない！

僕はあえてこのコーナーで更に足腰に力を込めて2組のアンカーを追った。

2組のアンカーの横を並び、隣に立つと相手は僕の行動を予想していなかったのか、驚愕の色を浮かべ、負けるまいと僕の隣で加速した。

だが、カーブが終わる近くで加速を行えば直線コースの走りに切り替えるのにタイムラグが生じやすい。

それを狙って僕は一気に勝負を仕掛けた。視覚も聴覚もほとんど機能を停止したように目の前の光景もみんなの声援もシャットアウトしたように何も感じなくなった。

そんな中でただ僕はひたすら直線に走っていた。

そして数秒後、気がつくや僕は既に校庭の端っこまで走っていた。ゴールはもう遙か後方にあった。

ゴールしたみたいだけど、あまりに熱中しすぎてどちらが先にゴールしたのかわからなかった。

そのまま緊張すること数秒、クラス対抗リレーの結果を知らせたのは高坂さんだった。

「1位………3年3組っ！」

高坂さんの結果発表を耳に入れて数秒、

「……………いいよっしやあ——っ!!」

僕は拳を握り締め、肺から空気がなくなりそうな程に叫んだ。

それから校庭の中心へ走るとクラスメートから祝いの言葉、労いの言葉、時に激しいスキンシップなどが待っていた。

こうして僕達3年3組の優勝が確定した瞬間だった。

体育祭が終わってから夜、芳乃家ではお疲れパーティーを開いていた。

体育祭で疲れた体に鞭打って義之や音姫さんと組んで今日は特別だと腕によりをかけて豪華な料理を作った。

「はいは〜い！ 今日には体育祭お疲れ様でした〜！」

さくらさんがはにかんだ笑顔でガラスのコップを掲げ、乾杯をした。

「今日は弟君す〜ごかつたね〜」

「や、それ以上に明久さんがとんでもなかったですね。色んな意味で」

「それを思い出させないでよ由夢ちゃん」

女装に爆発に落とす穴に、平和に似つかわしくない要素が多々入り込んで踏んだり蹴つたりの一日でもあった。

ここまで疲れたのは鉄人やFFF団による危機から脱した時以来だよ。

「にやはは〜。明久君って、本当に面白いよね〜。本から飛び出してきたドジなヒーローを見てるようだったよ〜」

「まさに不幸体質の主人公って感じだったよな」

「さくらさんに義之まで……………」

そんな話を話し合いながら僕達は笑いあって夕食を取っていた。

「そういえば明久さん。約束は覚えてますか？」

「約束？」

由夢ちゃんと何か約束なんてしてたっけ？

「ほら……借り物競走の時」

「借り物……ああ」

思い出した。確かに約束していた。今度何か奢ってあげる事を言っていたっけ。

「約束ですからね。きっちり奢ってくださいね♪」

笑顔でしっかりと念を押された。

「明久、お前由夢とそんな約束してたのかよ。コイツとの買い物は大変だぞ？」

「まあ、そこは女の子なんだからね」

女の子との買い物などが大変な事は向こうでも十分経験済みだ。地獄のような絵が多かったけど。

「じく……」

「ん？ どうした音姉？」

「由夢ちゃんは明久君にかあ……。お姉ちゃんも誰かに何か奢ってほしいな」

音姫さんは何処か催促するように義之に視線を送りながら呟く。

「ええ!？」

義之は自分が巻き込まれるとは予想してなかっただろう驚愕の声を上げた。

「じゃあみんなで行こっか？ 商店街からちよつとはずれた所に新し

いケーキ屋ができたんだ」

「ホントに？ わあ、楽しみ」

「あ、なら僕も僕も！ 2人に奢ってもらいたいな」

「さくらさんまで!？」

僕と義之は同時に驚いた。

「（おい、明久。流石にまずいぞ。2人だけなら1人ずつ奢ればなんとかなっただろうが、さくらさんまで入ると正直キツイ。お前、今懐はどれくらいある?）」

「（今のところはどんなゲームがあるかまだ確認中だから最初に収入

してからそんなに使ってない筈だけど……ケーキの他にも何か奢ってなんて言われたら……)」

「俺達だけの資金で足りるか……)」

非常にマズイ。このままでは最悪僕がまた今までのように塩水や砂糖水などで飢えを凌ぐ生活も覚悟しなきゃならないかもしれない。

「じゃ、5人で今度ケーキバイキングで決まりっ！」

「やったー！」

「楽しみですね」

「既に行くのが決まってるかのように話が進んでいる!?!)」

「(耐えるんだ義之! 彼女達は今バイキングと言った。バイキングならその前に他の店を見る時間がある。その間に新たな作戦を立てるんだ!)」

「(そ、そうだな。どうにかあの3人を無難なところに誘導できるかどうか……問題はそこだ)」

「(よし、そうと決まれば今夜から情報収集だ。あの3人が気に入りそうな店をどうにか避けられないか徹底的に商店街のデータ洗い出そう!)」

「(合点だ!)」

「(そう、これは……男のプライドの闘いだ!)」

僕と義之は頷きあつて手を握りあつた。

体育祭の後でも闘いはまだ続くのだった。

体育祭が終わって一週間後の事……。

「ん? 何だか随分と人混みがすごいね」

「お? 確かにそうだな。何かイベントでもやってるのか?」

学校に登校すると昇降口の前で人混みができていた。

「おー! 義之に明久!」

「渉、この人混みはどうしたの？」

「えらい人数だが」

「ああ、体育祭の写真が貼られてるんだよ。今回は雪月花や音姫先輩に由夢ちゃんに白河と美人がたくさん出場したからな。ファンが殺到してるぜ」

「ああ」

渉の言葉に僕は頷いた。

体育祭で写真を取ってたのか。僕はわかんなかったけど、あれだけ大盛況なら思い出作りにと撮りたいと思う人も多かっただろう。

そしてこの学園も美人が多数揃っているんだ。男子なら大量の写真を仕入れたい要素満載だ。その気持ちはよくわかる。

「今回はかなりの売上が予想されるな」

「わっ!？」

相変わらずの神出鬼没っぷりを発揮して背後から杉並君が現れた。

「売上って、アレお前が張り出したのか？」

「ああ。そして……この数時間のうちにアンケートを見た結果、かなりの確立である人物の写真が買い取られた」

「かなりの確立っていうと、それくらい？」

「この学園の全校生徒のゆうに8割だ」

「すげえな……一体誰の写真だ？ 音姫先輩？ 白河？ それとも月島か？」

「慌てるな板橋。そのN O 1を勝ち取った人物の写真とは……」

杉並君の前置きに僕と義之、板橋君は数秒の間緊張した。

「……………アキちゃん、もとい女装姿の吉井明久だ！」

「……………」

僕の女装写真を目の前に突き出しながら叫ぶ杉並君を前に、世界が崩れるような音を聞いた気がした。

「よかったではないか吉井！ 男女問わず人気N O 1を勝ち取ったその才能！ 今ここで胸を張れっ！」

「……………」

「おい、明久？ 大丈夫か……？」

「何か、明久が停止してるんだが……」

「……い」

「……い」

「いやああああああああああああああああああああ!!」

僕の魂の叫びが登校時の学園全体に響いた。

第十一話

俺は坂本雄二。文月学園2年Fクラスの代表を務めている極普通の――

『くおら坂本――っ！ 霧島さんと自宅でお見合いとあどういう事だあ！』

……普通の――

『しかもそれだけでなく、姫路さんや島田を愛人にだとお!?』

『許さん！ ぶっ殺す！』

『いや！ むしろ殺す事すら生ぬるい！』

……平凡な――

『雄二、浮気は許さない』

……だあもう！ 何がどうしてこうなってるんだ!?

明久が居なくなってもう一ヶ月半くらいは経っている。

あいつがいなくなったことで姫路や島田が悲し……まず、何故か何処か人知れずに女と仲良くなってるのではと怒り全開の毎日だ。

噂じゃアイツは家出したって事になって今行方不明になっていた。

それであるの2人や明久の姉ちゃんや家族もその行方を追っているが、そんなもんは普通警察に任せるものだと思うんだが、あいつらは何としても明久を見つけ出して制裁を加えたいと意気込んでいる。

それで見つけられた日には俺もその光景を是非とも見てみたいところだ。

『雄二……浮気をした罰として私の家で泊まり。今夜は帰さない』

『霧島さんの家で泊まりだと!? そして帰さない………坂本！ 貴様、遂に霧島さんの身体をその毒牙で!』

『『ゆるくさくん!!』』

って、んな事より今はこの状況をどう逃げ延びるかだ！ 翔子の所為で状況が更に危うくなりやがった!

俺は全力で走って今最も隠れるのに向いている場所へ向かった。ほんのちよつとの時間稼ぎにしかならないかもしれないが、あそこなら逃げるための道具だって多少は揃えられる筈だ!

そして俺は曲がり角で一気に加速して目的の場所の周囲を見回した。

しめた！ 窓に隙間が出来ている！

俺は迷わずその窓の隙間目掛けて跳躍し、一瞬のうちに窓を開け、身体を通ると足を使って勢い良く窓を締めた。

そして気配を絶つ事数秒間。窓の外を警戒するが、どうやら奴らは俺が近くに隠れてると知らず別の所へと走り去ったようだ。

よし、これで難は逃れたな。後は……

「雄二、何をやつとるのじゃ？ ここはAクラスじゃぞ？」

ここAクラスの連中に納得するような説明の仕方なんだが。

「その言葉そっくり返すぞ、秀吉。というか、何でメイド姿で縛られてんだお前は？」

見ればAクラスのロビースペースに設置されてるソファアの上で親友の1人、木下秀吉がメイド姿で縛られている光景が目の前に広がっていた。

普段は男らしく男らしくなんて言っておきながら平気で女装をやっておいて、本当に男として見られたいのだろうか。

その所為で翔子がお前に敵意を抱き、更に近づけば浮気だのなんだの勝手な事言っつて理不尽な御仕置きを受けるのだから。

とはいえ、最近俺もこいつが本当に男なのかどうか自信がなくなっできてきつつあるのは余談だ。

「うむ……クラスの連中が演劇部の連中から借りてきたからと儂にメイドの演技を披露して欲しいと言われている。それでメイド姿で演技しているところを姉上に見つかってしまつての」

それで木下姉に捕まり、連行されて今に至るってわけか。事情は理解した。

「……（カシヤッ！ カシヤカシヤ！）」

「ムツツリーニ。お前は当然のように秀吉の写真を撮ってないで秀吉の縄解くなりしろ」

「っ!?!（ブンブンブン！）」

その傍では既に見慣れた身体中黒タイツ姿のムツツリーニこと土

屋康太が秀吉のメイドコスチューム束縛プレイの瞬間をとらえている姿があった。

性に関することに置いて一切の妥協を許さず、底が見えない実力を発揮し、しかしその変態っぷりを決して表に出さない（しかし周囲にはバレバレだが）寡黙なる性職者、ムツツリー二の名で有名な俺の親友だ。

「しかし雄二、お主がここに来たということは……大方クラスの連中か霧島から逃げてきたのかの？」

「……両方だ」

たくつ。あいつらは他人の話を全く聞かないから質が悪いぜ。

「全く……少しは静かにできないのかね、君達は？」

俺が頭痛で悩まされているところに声をかけたのは学年次席の秀才、久保利光だった。

「ふう……君達Fクラスは、姫路さんといい島田さんといい……問題を起こす生徒が多過ぎる」

「それはスマンな。明久の不始末の所為で」

「それと吉井君は関係ないだろう。彼がいなくなってもこの有様。いや、彼がいなくなったことで更に悪化しつつかあると言っている。ああ……吉井君、僕は君の苦しみを理解してあげられなかった。そのため君を失う事になるなんて……許してくれ吉井君っ！」

「おい……話が脱線してんぞ」

聞いての通り、こいつは明久の事が好きである同性愛者でもある。

明久が同性愛が似合いそうではあるのは事実なのだが、あいつの何処をそんなに気に入ってるのかが俺には理解できない。

しかし、明久が行方不明になったという点については少し気がかりな事がある。

俺は胸ポケットにしまっておいた物を取り出した。

「うむ？ 雄二よ、それはなんじゃ？」

ムツツリー二に開放してもらった秀吉が未だにメイド服の姿のままで俺に近寄ってきた。

「……何に見える？」

「……桜、かのう?」

「そうだ。桜だ。造花じゃなく、本物の……な」

「造花じゃないじゃと? しかし、今は秋……いや、冬になろうというこの季節に……」

「そうだ。不自然極まりない。だが、これは明らかに桜の花だ。しかも、一ヶ月半も経つつうのに向に枯れる気配もない」

「一ヶ月半……明久がいなくなった日かの?」

「ああ」

そう。明久の姿を見失った時、偶然この桜を見つけた。

つい今の時期に桜なんて珍しいと思つて拾つたまましまつておいたんだが、こう何時まで経つても枯れないとなるとどうしても不思議に思える。

そして、もうひとつ気になることがある。

「お前ら……あの日の朝、明久が夢を見たつてのは覚えてるか? それはどんなだった?」

「うゝむ……綺麗な女が大勢おつたという話かの?」

「夢とはいえ……羨ましい」

「違う! その夢の舞台だ!」

俺の持つてる物を見せているつていうのに、なんでこいつらはそつちに話を持つていく?

「舞台……確か、周囲が桜色の光景……というところじゃつたかの?」

「そうだ。桜の咲き誇る小さな島……明久はそう言つてた」

「しかし、それは夢の話じゃないのかの?」

「だが、明久がいなくなった後でこんなもんを落としていったのがどうにもな……」

普通なら夢は所詮ただの夢だと笑うが、何時までも枯れない桜をこの目にするると明久の夢の話がどうしても頭から離れなくなつちまう。「何っ!? それは吉井君の落し物!」つまり、それは吉井君が肌身離さず持つていた大切な……それを手放してでも吉井君はこの学園を決別して——」

「さて、俺はもう帰るとしよう」

久保が何か言ってるが、正直付き合ってたられん。くれたきやくれてやりたいところだが、俺にはこいつの実体が妙に気になる。

しばらくはこいつをじっくり観察してみるとするか。

俺はAクラスを出ていく前に翔子の鞆を漁った。たく……予想通り俺んちの実印とスペアキーを揃えてやがる。

犯人はおふくろの仕業だろう。息子の人生何だと思ってるやがるんだ。

それを回収すると俺は辺りを警戒しながらAクラスを出ていった。

「あ、おつきなお兄ちゃん！」

「ん？ ああ、チビッコじゃねえか」

Aクラスを出ると茶髪にツインテールを垂らした少女、島田の妹の葉月がぴよぴよこと可愛らしい擬音がでるような足取りで俺に近づいてきた。

「何だ？ 島田にでも会ってきたのか？」

「いえ、馬鹿なお兄ちゃんがいなかどうか来たんですが……やっぱりいませんか」

「わりいな。未だに行方不明だ」

明久の行方を探している者の中で最も純粹に心配しているというならこの子だけだろうな。

明久の事を未来の婿だとか言ってる辺り、純粹に明久の事が好きなんだろう。流石は小学生以下の知能レベルを持つ馬鹿。ガキにはモテモテだな。

「はう……馬鹿なお兄ちゃん、何処にいるんでしょう？」

「そうだなあ」

俺はチビッコの頭を撫でながら適当に答える。何の手掛かりもない今の状態じゃ手のだしようがないし、探す気にもなれない。

ムツツリー二の情報網でもあれ以来、明久の姿が消えたように誰からも明久の事を見たという奴はいなかった。

町中世界一馬鹿な男として有名な明久が誰にも覚えられずに町を抜けるなんて事ができるはずがない事実がある以上、不可解な点多い。

本当に明久の夢の話が何か関係してんのか？

「ふう……やつと普通の制服に着替えられたのじゃ。お？ 葉月ちゃんではないか」

「……久しぶり」

「あ、演劇のお姉ちゃんにカメラのお兄ちゃん！ お久しぶりです！」
「うむ。お姉ちゃんに会いに来たのかの？」

「……今はFクラスの教室」

「いや、チビッコは明久が戻ってるんじゃないかと見に来たらしいぞ」
「……そうか。スマンのう。儂らも探しておるのじゃが、一向に見つからんのじゃ」

「……すまない」

「はう……」

秀吉とムツツリーニの報告にチビッコは肩を落とした。

「お姉ちゃん、家でも馬鹿なお兄ちゃんの事を心配してたです。馬鹿なお兄ちゃんが何処にいるのかとか……見つけたら話す事がいっぱいあるとか」

2つとも恐らく、明久を殺す気満々の状態で言った台詞だろうが、まだ邪悪な世界に踏み込んだ事のないチビッコにとってはそれが明久を心配しているように見えるそうだ。

まあ、そう思わせておいた方が幸せだろう。俺にとつても。

「しかし、本当に明久は何処におるのじゃろうか？」

「……摩訶不思議」

「ああ、吉井君……」

やはりこの2人も明久の行方不明には不安があるらしい。最後の1人は余計な気もするが。

「ていうか、何でお前がここにいるんだ久保」

「いや……やはり吉井君を探すなら君達と行動を共にしていた方が見つかるかと思つてね。彼の親友である君達なら」

「……勝手にしろ」

「そこで違うと言わんあたり、雄二も明久の事を心配しとるわけかの」
「……素直じゃない」

「おつきなお兄ちゃん優しいです」

うつせえ、一言多いんだよお前は。そんな事を心の中で呟いた時だった。

「雄二、浮気の罰で婚姻届に判を……」

「さらばっ！」

何時の間にか背後に立っていた翔子の存在を確認するや否や、俺は早速逃走した。

「……逃がさない」

「だあ!? 翔子の顔が小さい子にお見せできねえ形相に！ 秀吉、ムツツリーニ！ チビツコの目を覆ったまま逃げろ！」

「む、承知した！」

「……異端審問会は他人の幸せを——」

「後で聖典（エロ本）を何冊か譲ってやる！」

「……交渉成立」

「毎度の事ながら君達はどんな間柄なんだい？」

そんなのはもう今更だ。俺は秘蔵のコレクションの一部を犠牲にムツツリーニを味方に引きずり込んでそのまま逃走を心掛ける。

「木下だけでなく、土屋や久保、島田の妹を囲んでの浮気……許さない」

「お前の目は節穴か！ これをどう見たら浮気の現場に見えるんだよ！ そしてお前とは付き合ってすらいねえだろ！」

何で俺の周囲はどいつもこいつも俺を同性愛趣味の変態にしたがるんだよ。

忌々しいが、明久の気持ち痛い程にわかる。

くそっ……俺は俺の野望を実現したいってのに、俺の周囲の人間は染心だらけの馬鹿に、勉強ができるだけの馬鹿揃いだし、常識もへつたくれもないし、他人の話なんか聞きやしねえ。

一体全体何で俺がこんな目に合わなきやいけねえんだよ。

「くそっ……何処か遠くの小さな島国にでも行ってひっそりとできりゃあ」

そう愚痴ったところで現状なんて変えられる筈がないと思った時

だった。

俺の目の前で、桜の花びらが舞ったような気がした。

「……………んおっ？」

目が覚めると、俺は何時も通りベッドの上で寝ていた。

「ん……………ふあ……………」

俺はベッドの上で背伸びをするとだるい身体を動かし、ベッドから離れた。

「ふう……………今朝はこれまた妙な夢だったな」

ついさつきまで見た妙な夢を頭に浮かべながら窓の外を眺めた。

ここで言うところ、俺には他人の夢を見る力がある。何故そんな力があるのかはわからないが、とにかく俺は他人の夢を見る事ができる。

それは誰かがヒーローになったり、その人が主人公になったの恋物語語だったり、どんな夢かは見る人によって異なる。

そしてそれは俺が望んで見れるものではなく、他人の意識が勝手に俺の中に流れ込んでくるようで、そして俺はそれを他人の夢だと実感しながらただ観賞するだけ。

最後に、その夢を見た後はひどい眠気とだるさが身体を覆うという特にこれといった使い道もない力だった。

『義之……そろそろ朝ごはんだから下りてきなよ！』

ベッドから起き上がってからぼーっとしてたところに明久から声がかかった。

「おう、すぐ着替える」

俺は適当に返事をしてから制服に着替え、何時も通りの朝ごはんを食べてから全員で登校した。

「それじゃあ、この前のテストの結果を返すぞ」

午前の授業の終わりの頃、担当教師からテストの結果の返却ときた。

俺達はいこの間中間テストを終えてその結果が発表されるのが今日だった。

「だあく……やっぱ駄目かあ」

「あ、渉も結果悪かった？」

「ん、明久もか？」

「うん。歴史以外は」

「ん？ どれどれ……うおっ！ 歴史はすごい高得点なのに、それ意外が俺よりちょっと高いレベルだな」

「でも、全体的に駄目な渉よりはずっとマシよね」

「……（ずくん）」

全員が自分のテストの結果を見て落ち込んだり平然としたりほつとしたりと反応は様々だった。

「義之君は……いつもよりはいいけど、それでも低めね」

「覗くなよ」

横から茜が俺の答案用紙を覗き込んできた。

「ははは……音姫さんから教わったっていうのに、この結果じゃねえ……」

「何っ!? お前、音姫先輩からの個人授業を!? まさか、同じ家に住んでいる義之もか!?!」

「お前が言うと、イヤらしい意味にしか聞こえないから黙れ」

さっきまで落ち込んだっていうのもう復活してやがるし。切り替えの早い奴だ。

「俺は正直あまりやる気なかったが、明久はそれなりにやる気出たからどうにかこの結果につなげられたんだ。最初なんかすげえ酷かったぜ」

「酷かったって、どんな風にだ?」

「三角形の面積の求め方を長方形の面積の求め方とごっちゃにするくらゐ」

「……………」

「見ないで！ そんな目で僕を見ないで！」

全員から可哀想なものを見る目で見つめられ、明久は涙目でのたうち回っていた。

「明久君、流石にそれは……」

「なんとというか……」

「そんなの俺でもわかるぜ」

「あら、渉にはわかるかしら？」

「馬鹿にすんなよ！ 底辺×高さだろ!？」

「ええ。そこに割ることの2を付けければ完璧ね」

「……………」

「見ないで！ そんな目で俺を見ないで！」

渉も当初の明久と同レベルだったようだ。

「俺はいいんだよ！ このワイルドなルックスがあるんだからちよつと勉強ができないくらいなんてことねえ！」

ちよつとなのか？ そして、お前の見た目の何処がワイルドなんだよ。

「明久なんて、そこらの小学生に馬鹿なお兄ちゃん呼ばわりされそうじゃねえか」

「全く失礼な！ そんな呼ばれ方なんてされたことなんか——」

『馬鹿なお兄ちゃん、いらっしやいますか!?!』

「……………」

「されたことない、と……思いたい」

本当に呼ばれた事あんのかよ。なんかちよつと明久が可哀想に思えてきたな。

……あれ？ 何か、引つかかる所があるんだが。

「…………あれ？ 今の声、何処かで……」

明久も今の馬鹿なお兄ちゃん呼ばわりした声の事が気になったようだ。何故か外から聞こえたみたいだが。

俺達は外を見ると、校門辺りでツイントールに縛った髪を垂らした小さな女の子がぴよこぴよこ飛び跳ねていた。

その傍には何人かが何処かの制服を着ていた。しかも、全員制服がダボダボと来たもんだ。まるで最初に出会った明久の格好みたいだ。「何なんだ？ あれは……」

「葉月ちゃん!? それに雄二達まで!」

校門の人影を見ると明久が声を上げて驚いた。

「明久、知り合いなのか?」

「う、うん。親友と友人の妹……ごめん! ちよつと行ってくる!」

「あ、おい明久!」

明久は教室を出ると猛スピードで駆け出し、十秒もすると既に校庭まで出ていた。

「あ、馬鹿なお兄ちゃん!」

「ぐふつ!? あ、久しぶり葉月ちゃん。でも、どうしてここに?」

校庭に出ると小さな女の子が明久にタツクルをかませてきた(本人は抱きついたつもりなんだろう)。

「ぬ、本当に明久なのか!」

「吉井君!」

「……見つけた」

「おう、明久!」

「雄二! みんな!」

明久が後ろに控えてる人影を確認すると爽やかな顔で駆け出した。

「雄二……!」

「明久……!」

雄二と呼ばれた男も爽やかな顔で明久に向かって駆け出てきた。

「なんか明久君、すごい喜んでる」

「事情はさっぱりだが、そりゃあ親友と久しぶりの再開だもんな」

別れてから一ヶ月半は経ってるんだ。そりゃあ、喜びもするだろう。

そう思ってから窓の外を眺めると――

「雄二! 貴様よくもあの時僕を死地へと追い込もうとしやがったな!」

「黙れ! テメエがいなくなったおかげで俺の身が危うい事になった

「んだぞー！」

『自業自得だろ！ この赤ゴリラがっ！』

『誰がゴリラだ世界一のバカがっ！』

さっきの爽やかな雰囲気は何処へ行ったのやら、急に喧嘩が始まっていた。

『テメエのおかげで俺は翔子に危うく無理やり婚姻届に判を押してアイツの家に転がる事になったところで——』

『嫉妬が可能にした暗殺拳の極致を思い知れえ！』

『うおっ!? テメエ、何しやがる！』

『黙れっ！ 人が殺されそうになっている時に呑気に美人と同棲の話を進めやがって！』

『ふざけんな！ アレは翔子が勝手に言ってるだけだ！ 俺はまだ何もしていいええ！』

『そんなんだから同性愛の似合う変態なんて噂が流れるんだろ！ いつもそれに僕を巻き込みやがって！ おかげで姫路さんや美波だけでなく、数多の生徒から誤解を受けてるじゃないか！』

『その言葉そっくり返してやろうじゃねえか！ 同性愛だけじゃない、根本並みに女装趣味の変態の癖しやがって！』

『貴様、言ってはいけないことを……こうなったら積もりに積もったこの恨みをここで晴らしてやろうじゃないか！』

『上等だ！ こうなったら本気で相手してやろうじゃねえか！』

『ふわあ、馬鹿なお兄ちゃん達……相変わらず仲良しさんです』

それから何故かストリートファイトみたいな喧嘩をおっぱじめやがった。うわ、明久達の動きが全然見えねえ。

下手すればプロ級だぞ、あれ。

「義之……あれ、親友……なのか？ 本当に？」

「……俺に聞かないでくれ」

一体何がどうなってるのやら。俺達はただ明久達の喧嘩を遠くから眺めるだけだった。

その喧嘩は音姉とまゆきさんが駆けつけてくるまで続いたのだった。

第十二話

「それで？ 何であんな騒ぎになったのかな？」

僕は昼休み、何故かこちらの世界に来ていた雄二達と共に学園長室で説教を受けていた。

「すみません。久しぶりに親友達を見たのと同時に日頃の恨みが一気に爆発してしまって。本当にすみません」

「全くだ。少しは抑えようっていう心掛けはないのか？」

「お前も少しは反省しろよ！」

自分も騒ぎの原因の一端だという自覚があるのだろうか、このゴリラは。

「坂本君、他校に来てまで騒ぎを起こし、そこに全くの反省がないのはどうかと思うよ。原因や状況が何であれ僕らがこの学園に迷惑を懸けたのは事実なのだから」

「久保君の言う通りだよ。少しは反省しろこのゴリラ」

「誰がゴリラだあ!？」

「お前以外に誰がいるんだよ！」

「貴様ら、いい加減にせんか！」

「~~~~っ！」

耳元で野太い怒声……まるで鉄人のものだ。

「やれやれ、少しは頭が冷えたかの？」

やはり今のは秀吉の声真似だったか。流石に鉄人までこちらにはいないとわかっていつも全く同じ声だったので体がつい反応して大人しくなってしまう。

「昼間の件については謝罪する。どうか2人を許してやってはくれませんか？」

「僕からもお願いします。元々は僕達が勝手に学院に入り込んでしまったのが原因ですから」

秀吉と久保君が学園長であるさくらさんに頭を下げ謝罪した。

僕も申し訳なくなつた2人と一緒に頭を下げる。

「にやははく。気にしなくていいよ。それより、みんな明久君を探し

てたんだよね？ この後はどうするの？」

「いや……探してたには探してたんだが……俺達全員巻き込まれただけつつうかなんつつうか……」

雄二が言いにくそうにしていた。それはそうだろう。

僕も雄二達もこの島に来たくてきたわけではなく、どういうわけか気がついたらここにいたというだけだ。

「(雄二……わかってると思うけど、ここは僕達のいた世界とは違うから僕達の家には連絡なんてつかないよ?)」

「(んなことは携帯見た瞬間からわかってしていることだ。ところで、お前はどうかやってこの島で生活してる?)」

「(一応僕は事実も織り交ぜながら家出っていう形で今日の前にいる人の家でお世話になってるけど……雄二達はどうかしよう？ 流石にこの人数まで面倒を見ろっていうのは無理だろうし)」

「(とにかく考えるのは後だ。ここで俺達も家出っていうわけにもいかないだろうから、仲間のお前を追いかけて資金を失ったっていう感じで誤魔化すぞ)」

僕と雄二はアイコンタクトで会話をしたあと、さくらさんと向き合った。

「そうだな……ここに来たはいいが、何日も探し続けた所為で資金が底をつきつつあるからなあ。何処か今の状態でもこの人数で泊まれる場所があればいいんだが」

全く顔色を変えることもなく堂々とそんな嘘を言い放った。流石、

汚い手に関しては右に出る奴がいないよ。

「うくん……葉月ちゃんの方は、音姫ちゃんの家で面倒見てもらえばいいとして……それでもまだ4人かあ」

「いえ、できれば秀吉も朝倉家の方でお願いできません？ 流石に女の子と同じ屋根の下っていうのは……」

「明久よ、じゃから俺は男じゃと言うに」

「え？ 君、男の子だったの?」

「……(ずくん)」

さくらさんの純粋な疑問の言葉に何故か秀吉が目に見えて落ち込

んでいた。

「諦めろ秀吉。実際問題、お前を同じ屋根の下でっていうのは色々面倒が起きやすいからな」

「何故俺は男として見てはもらえぬのじやろうなあ……」

「同情するよ、木下君」

しかし、秀吉を抜いてもまだ3人もいる。さくらさんの家は結構広めだから無理して一部屋に2人ずつでいけそうだけど、それでもまだキツイかな？

「……俺なら大丈夫だ。宿の手配は済んでいる」

「うわっ!?! ムツツリーニ！ 今まで存在すら感じなかったんだけど!?!」

「それは俺が今さっきまでいなかったから」

相変わらずに神出鬼没ぶりだった。久しぶりだな、この感覚。

「にしても、手配って……ムツツリーニお金持ってないでしょ？ 宿なんてどうやって？」

「それは俺がとある場所を提供したからだ」

「うわあ!?! 今度は杉並君!?!」

ムツツリーニと同様、気配も悟られずに現れるその神出鬼没っぷりは本当にムツツリーニといい勝負だ。

「いや、先程そこで同志土屋と対面したのだが、彼は実に面白い。その卓越した隠密行動、行動力……彼こそ我が非公式新聞部に必要な人材なのだ!」

杉並君が両手を広げて恐ろしい事を言った。この2人に組まれたらこの先の行事はどうなるのだろうか？ ものすごく不安で仕方がない。

「よって、これより彼は我が非公式新聞部が丁重にもてなすことにした。後はそちらでじっくり考えたまえ!」

「……邪魔をした」

そう言ってムツツリーニと杉並君は学園長室から去っていった。

「……………」

「明久……今の胡散臭え雰囲気漂う奴は何だ?」

「杉並君。苗字以外ほとんどが謎に包まれた人……としか言えない」
「ある意味、ムツツリー二といい勝負をしそうな奴だな」

「うん。この学園の女子が安全に暮らしていけるかもものすごく不安だ」

きつと、彼のことだからこの学園にもマイ監視カメラなんかあちこちに仕掛けるだろう。

一応この事は音姫さんに帰ったら相談する事にしよう。流石に文月学園のような事はごめん被りたい。

ムツツリー二の写真が購入できないのは痛いけど……。

「さて、1人は宿が決まったようだし……2・3人は大丈夫か？」

「うくん……僕はそれでもいいけど、一応義之君や音姫ちゃん達にも相談したいから話はそれからだね」

「ああ、ひとまず考えてくれるだけでもありがたい」

とりあえず泊まれるかどうかは今は置いてその話は今夜改めてという事で雄二達はひとまず学園長室で大人しくさせ、僕は午後の授業に出たのだった。

「——というわけだから、音姫さんや由夢ちゃんにも今夜辺り相談でことごと」

「……そうか。正直、色々話が飛んでて理解できんが、俺は別に構わな
いぜ」

明久から聞いたのは昼休みに校門で明久と騒いでいた赤毛の男とその他の4人を俺達の家に泊めてほしいという話だった。

なんでも家出した明久を追いかけた方がいいが、資金が途中で尽きて宿に泊まるどころか食事にすらありつけないほど金銭面が厳しいらしい。

「じゃあ、放課後夕飯の買い出しだな。あの人数だと材料も相当買い込まないといけないだろうし」

「うん。特に雄二はかなりの大食いだからね」

「なら、今日はカレー盛り沢山といくか」

「うん。でも、葉月ちゃんもいるから甘口にした方がいいかな？」

「そうだな。由夢もどちらかと言えば甘口の方が好きだった気がするし」

そうして明久と夕飯の相談してるうちに次の授業が始まり、夕飯について考えてるうちに何時の間にか放課後の時間となった。

買い物に行く前に明久が5人を迎えに行くと言い、学園長室へと向かっていった。

「あ、馬鹿なお兄ちゃん！」

「ぐふっ！ ははは……葉月ちゃん、ちゃんと大人しくしてた？」

「はいです！ 早く馬鹿なお兄ちゃんに会いたかったですけど、我慢しました！」

「そう。偉いね葉月ちゃん」

「ふみゅ〜」

扉が開いて早々ものすごいタツクル（多分抱きついただけだろう、本人は）をかましてきた葉月ちゃんという少女を明久はなんでもないので受け止め、頭を撫でていた。

撫でられてる葉月ちゃんは気持ちよさそうに目を細めていた。相当あの子に好かれてるみたいだな。

「あ、義之君も来たんだね」

「はい。明久とこれから夕飯を買い出しに行く前に5人を迎えに」

「ああ、案内だね。偉い偉い」

「この人数だし、今日はカレーにでもと思うんですが」

「義之君のカレーかあ。楽しみだな〜」

「かなり多めに作るつもりなので楽しみにしてくださいね」

「うん、また後でね〜♪」

さくらさんと挨拶を済ませ、俺達はまず買い出しに行く事になった。

「あ、そういえば雄二達の着ているの風見学園の制服だね」

「ああ。流石にいつまでもあのダボダボの服でいるわけにはいかないからな。学園長からありがたく制服を貸してもらった」

「明久と言い、なんでお前らはダボダボの服のまま初音島にくるんだか」

「それは気にしないで（するな）」

2人同時に言われて俺は気になるが、あんまり追求するような事でもないかととりあえず納得する事にした。

「あれ？ 明久くん！」

そこで今度は白河と出会った。白河は明久の姿を認識すると駆け寄ってきた。

「ん？ 今日は随分と大勢だね。……その人達って、昼間のだよね？」

「ああ、うん。本当から探しに来てくれた僕の親友達」

「その割には昼間その赤毛の人と思いつきり喧嘩してたよね？」

「それは……気にしないで」

などと、いつものようになってこない事だが、楽しそうに会話をしていた。

「桜内と言ったかの？ あの女子は誰なのじゃ？」

あの2人が楽しそうに会話しているのを見て木下だったな。男なのか女なのか……制服は男子用なのだが、容姿はどう見ても女にしか見えない。どちらかと言えば女子寄りの中性的な奴だった。

「ああ、白河ななか。うちの学院じゃアイドルと言われてるよ」

「そのような者が何故明久と？」

「ああ、文化祭の時にな（事情説明中）く……というわけだ」

「ふむ……お姫様抱っこして追っ手から逃げ回った、か。明久らしいのう。こちらでもその行動力は健在じゃったか」

「てことは、そっちでもそんな感じだったのか」

「うむ。毎日が大騒ぎじゃったぞい。じゃが、俺はそんな馬鹿騒ぎが気に入ってるがの」

その時の木下は本当に楽しそうに言った。

「ところで、白河だったか？ そいつは既に何人もの女に手を出しているぞ？」

「こら、雄二！ ななかちゃんに変な嘘を吹き込むんじゃない！」

「ああ、すまん。実は既に手を出されてたな」

「だから変な嘘を吹き込むなあ!」

「手を出されたという点に関しては間違っではおらんのか?」

「出されたのか?」

「主に、暴力的な意味合いでの」

「……なるほど」

何故か話が変な方向に進みつつあった。

「ななかちゃん! 今のは雄二の真つ赤な嘘だから信じないで!」

「えく……明久君もう私以外の女の子とあんな事とかこんな事を?」

「誤解だつてばあく!」

「なんて冗談だよ明久君。ちよつとした悪戯だよ!」

「い、悪戯でもそういう質の悪い事をいうのはやめてほしいんだ。僕の

社会的生命が危うくなるから」

「あはは! ごめんごめん♪」

「……ふくん」

楽しげに会話をしている明久と白河を見て坂本は不思議なものを
見る目で眺めていた。

「物好きな奴もいたもんだな。あの明久にとは」

「ふむ……雄二もそう思うかの?」

坂本と木下が何かこそこそと話していたが、何の話なのかはよく聞き取れなかった。

「むく……馬鹿なお兄ちゃん! その可愛いお姉ちゃんとだけじゃなくて葉月ともお話してほしいです!」

そう言つて頬をふくらませた葉月ちゃんが明久の制服を引っ張る。

子供らしい微笑ましいヤキモチの場面だな。

「うわっ……ああ、ごめんね葉月ちゃん」

「明久君、その子誰? 妹さん?」

「ああ、ううん。僕の妹じゃなくて友人の美波って人の妹」

「島田葉月です。よろしくです」

「うわあ、可愛いね」

そう言つて白河は葉月ちゃんに抱きついて頬ずりしていた。やは

り可愛い子には目がないと言ったところか。女の子だしな。

「吉井君……楽しそうに会話してるところ申し訳ないのだが、そろそろ買い出しにいかなくては夕飯に間に合わないのではないかい？」

「ああ、そうだった。ごめん。というわけだからなかなかちゃん、僕達はこれから夕飯の買い出ししなくちゃいけないから」

「僕達って……この人数で夕飯を？」

「うん。僕を追いかけてここに着いたばかりだから泊まる所の事とか色々ね」

「ふくん……」

そう言つて白河は明久の手を握つてきた。それから何度か頷くと、

「うん！ 楽しそうだね！」

「え？ うん……多分これからもそうなりそうだけど」

「じゃ、また明日ね！ 明久君！」

「うん。また明日」

明久と白河が互いに手を振つて別れ、明久が俺達の方に向き直つた。

「明久、さっきの白河とやらとはどんな関係だ？」

「へ？ 友達だけど？」

「それにしてもあの白河、やたらとスキンシップが激しいと思うのじゃが」

「そう？ 大体いつもあんな感じだったと思うけど」

いや、本当のところはどうかは知らないが、俺の知る限り、明久に対するスキンシップはいつそう激しいと思うぞ。

そんな会話を繰り返しながら俺達は夕飯の買い出しにと向かったのだった。

「……というわけだからさ、葉月ちゃんの方は音姉達の方でなんとかならないかな？」

「そっかあ……」

夕飯の時間になると音姫さんと由夢ちゃんがいつものように芳乃家に訪れ、居間に入るとあまりの人数に事情を知らない由夢ちゃんが一瞬驚いた。

そして夕飯になると同時に雄二達の事を説明すると音姫さんと由夢ちゃんも事情を飲み込み、音姫さんはどうしたものかと考えているようだ。

流石にこの人数な上に小さな女の子とはいえ、音姫さん達の家で迷惑をかけることになると言っているのだから悩むのはしょうがないだろう。

最悪の場合、僕が出ていく事になっても葉月ちゃんはちゃんとした家で寝泊まれるようにしないと。

「……うん。当分の間は葉月ちゃんはうちで預かる事にするね」「本当ですか!？」

どうやら音姫さんは葉月ちゃんを泊める事を許してくれたようだ。「うん。そういう事情なら仕方ないと思うし」

「世話になる俺らが言うのもなんだが、こんだけの人数の面倒を見るのも大変じゃないのか？ あの学園長がどれだけの人は知らんが、大人一人でこの人数は流石にな」

「確かに……多少はバイトなどを考えたいところだが……」「今の農らにはそれがかなわぬからの」

確かに、一応来年になればバイトもできるけど……それまでこの人数で今年を乗り越えられるかも不安だよ。

「……その件については心配いらない」

「(ぶふう——っ!?)」↑(ご飯を吹き出した音。)

「うわっ! 汚えな明久!」

「(ご、ごめん……それより何時の間に何処から入ってきたんだよムツツリーニ!」

何故か僕の背後にムツツリーニが立っていた。全く気付かなかつたよ。

「わわっ! 何時の間に!？」

「ど、何処から入ってきたんですか? そして、何で忍者みたいな服装

で……」

音姫さんや由夢ちゃんもムツツリーニの突然の登場と格好に驚いた。

「ところでムツツリーニ、問題ないってのはなんだ？」

「その男が突然入ってきた部分は指摘しないのか？」

義之、その事は問い詰めても恐らく無駄だと思うんだ。

「……早速仕事を始めて売れ筋はうなぎのぼりなので資金が盛り沢山」

「何だ？ その資金の一部を俺達に譲ってくれるのか？」

「(コクツ) 貸しひとつ」

ムツツリーニの貸しというのが若干不安だが、これは願ってもいない話だ。

多分こつちにもムツツリ商会の網を広げているのだろう。流石にこの平和な島でそれは遠慮願いたかったけど、今は生活のためにムツツリーニの協力は欠かせないだろう。

せめて僕達が本校に上がるまでムツツリーニには生活費の収入に尽力してもらおう。

「わかった。いつかお前が気に入りそうな聖典を譲ってやる」

「僕も。折角協力してくれるんだからそれくらいはね」

「(コクツ) 交渉成立。さらば」

それからひゆん、と風を切るような音と共にムツツリーニの姿が消えたのだった。

「……今のも、明久君のお友達？」

「あ、はい。土屋康太ことムツツリーニです」

「明久よ、紹介の順序が逆じゃと思うのじゃが……」

「何？ そのムツツリーニって？」

「名前を聞くからに嫌なイメージしか浮かばないのですが」

「2人も今ので察しただろうがアイツは俺達の学校じゃ本名よりもその渾名、寡黙なる性職者。ムツツリーニの名で知名度が高いムツツリスケベだ」

「えつと……」

「……………」

雄二の紹介で音姫さんと由夢ちゃんが微妙な顔をした。どういう反応をすればいいのか非常に困っているようだ。

「まあ、生活費についてはひとまずアイツに一任するか。俺達は来年までのんびりさせてもらうとしよう」

「坂本君、泊めてもらうのだから最低限の礼儀は身に付けておいた方がいいと思うんだ」

雄二が無遠慮に寝転がると久保君がそれを注意した。

「はう……馬鹿なお兄ちゃんと離れるですか？」

「うん。流石に女の子と一緒にってわけにはいかないからね」

「儂は男じゃというに……」

葉月ちゃんと一緒に朝倉家で世話になることになった秀吉が居間の隅で落ち込んでいた。

「まあまあチビッコ。今までとは違って家が隣にあるんだ。学校帰りになればいつでも馬鹿なお兄ちゃんと遊ぶ時間はできるだろう」

「そうだよ。明日からはたっぷり遊べる時間はできる。今日はひとまず朝倉さん達の世話になった方がいい」

「うう……できれば馬鹿なお兄ちゃんと一緒に泊まりたかったです」

「ふふ……明久君って、モテモテだね」

「随分と好かれてるな、明久」

「人気者ですね」

音姫さん、義之、由夢ちゃんから冷かし……いや、この3人だから純粋な褒め言葉が来た。どっちにしても悪い気はしなかった。

「ただいま〜♪」

その時、ようやくさくらさんも帰宅してきたようだ。

「うわー！ いい匂いだねー！」

「こんばんは、さくらさん」

「こんばんは〜♪ あ、みんなも集まってるね！」

「おう」

「お邪魔してます」

「泊まりについては感謝してますぞい」

「学園長さん、こんばんはです!」

異世界組も全員さくらさんにあいさつし、僕は義之とさくらさんの分の夕飯を用意した。

するとちよつと気になるものがあった。

「雄二、胸ポケット……何入ってるの?」

雄二の胸ポケットが僅かに膨らんでいるように見えた。

「ん? ああ、そういえばこいつの事なんだが……わかるか?」

雄二が取り出したのは小さな枝……そしてその先には小さな淡い紅色の花が咲いていた。

「……桜?」

「そうだ。桜の花だ」

「っ!」

雄二が桜の花を僕に向けるとそれを見ていたさくらさんが一瞬顔色を変えた気がした。

「ん? それ枯れない桜の一部じゃねえか?」

「枯れない桜?」

「ああ、この島の桜って……枯れない桜って大きな桜の木を中心に咲き誇っているんだって」

「ふくん。で、こいつがその一部だったのか?」

「多分そうじゃないかな? 枝が折れてるのに花は咲いた状態のままならそうなんじゃない?」

「ふくん……それが何で明久がいなくなった後に出てきたんだか」

「え? それ、僕がいなくなった後に出てきたの?」

「ああ。(お前の姿が消えた場所だな)」

雄二が頷くと同時にアイコンタクトで一言僕に説明する。どうやら僕がいなくなった直後に出てきたもののようにだ。

何でこの島の桜の一部が僕の世界に出てきたんだろう?

「うくん、不思議な事もあるもんだね。ささ! いつまでもわからない事を考えても始まらないし、今はおいしい夕飯を楽しもうか!」
さくらさんがパンパンと手を叩いて話を終わらせ、夕飯を食べ始める。

……何だろう？ あの桜を見た時のさくらさん、いつもとどこか違ってたように見えたけど。

「秀吉、さっきのさくらさんの様子……どう思う？」

「む？ さくらさんがどうかしたかの？」

「いや……雄二の持つてる桜を見たらちよつと何か様子が違った気がするんだけど」

「うむ？」

僕の話聞いて秀吉はさくらさんの方を見つめる。演劇に関しては右に出る者のいない秀吉ならさくらさんの様子の違いにも気づくかもしれない。

「うむ……確かに何かある気はするのじゃが……儂からはこれ以上の事はなんとも言えんおう」

「そっか」

「ところで、その桜とあの人が何か関係あるのかの？」

「ううん……なんでもない」

秀吉でも何かあると、漠然な事しかわからなかったらしい。

さくらさんの事は気になるけど、今ここで問う事ではないだろう。

僕はこの考えは一旦頭からはじき出してみんなと夕飯を楽しんだ。

第十三話

「坂本雄二だ。俺の事は坂本だろうと雄二だろうと好きに呼んでくれて構わない」

「久保利光です。この時期に転校というのが珍しいとは思いますが、どうか皆さんと仲良くできればいいと思います」

俺達がこの世界に来てから一週間が過ぎた。

そして今日この頃、俺と久保は明久も通っている風見学園付属3年1組に転校したのだった。

俺も明久達も本来は高校2年だっというのに中学3年というのも妙な話だが、この世界に来てから俺達の見え目が退化したから外見年齢相応の学年に入ることになったのだ。

ちなみに秀吉とムツツリーニは2組の方に転校することになった。そしてあのチビッコはあまり見た目が変わってないのであつちでも同じ小学5年で近くの小学校に通わせた。

その事についてあのチビッコからも自分も学年を下げたいと言ってきたが、小学5年のままなら近いうちに明久と同じ学校に通える期間ができるから我慢だと言ったらあつちと受け入れてくれた。

余程明久に対しての好意が大きいのだろう。何故かはイマイチわからんがな。

「というわけで、よろしく頼むぜ」

まあ、俺らは俺らでいつまでになるかはわからんが、折角訪れたこの平和な時間を堪能させてもらおうとするか。

こうして俺達の新たな生活が幕を開けた。

「さて、学食学食と……うわ、なんじゃこりゃ」

「いやはや、ものすごい行列だね。しかも、席がかなり埋めつくされてるね」

午前中の退屈な授業が終わり、こうして学食へと足を運んだわけだが利用者がかなりいやがる。

まあ、ここは付属と本校……普通に言えば中等部と高等部の人間がほとんど同じ場所にいるんだ。利用者だって相当の数だろう。

しかし、これではうまく注文できたとしても席を見つけてそこでゆっくり食べるのは不可能に近いだろう。俺がそんな風に辺りを見回して考えてると、

「あ、雄二に久保君」

「吉井君っ!」

何処かから聞こえた明久の声に久保が敏感に反応した。

久保の反射的な対応のおかげで明久が何処にいるのかがすぐになかった。

「2人も学食なんだ」

「そりやあな。購買のじゃ足りないしな」

「僕も、一回見てきたけど購買はもう既に人混みでね」

「ああ、ここの購買ってかなり人気があるらしいからね。あ、2人がよかったら近くの席空けるけど? みんなにも2人を紹介したいし」

「お、そいつは助かるな。じゃあ俺達は注文取るから席の方は頼んだぞ」

明久のありがたい提案を素直に呑んで俺と久保は注文を取りに行った。

んつと……日替わり定食にラーメンにカレー、スパゲッティに炒飯、素うどん、カツ丼、スペシャルメニュー……ま、学校じゃこんなもんか。

しかし、このスペシャルメニューってのは何だ? 他と比べるとちよつと高めなんだが。

とりあえず俺はちよつと休めのカレーにチャレンジでスペシャルメニューのボタンを押して食券を買って窓口まで行った。

窓口で食券を差し出し、カレーはすぐに出てきたがスペシャルメ

ニューの方が少し時間がかかっている。

数分もするとカレーとは別のトレイが出てきてその上には……うおっ!? 大きめのオムライスにデザートパフエかよ。

オムライスは意外とポリウムあるし、デザートパフエも中々豪華な見た目だった。こりやいい食券だな。

ま、流石に毎日じゃすぐに金欠になりかねんから注意はしねえとな。

久保も注文を受け取ったみたいで俺達は明久の待つてる席に向かった。

行くと明久の周りには桜内とこっちでつくった友人らしい奴が4人ほどひとつのテーブルに固まって座っていた。

「あ、来たみたいだね。って雄二……相変わらずよく食べるね」

「うわっ!?! カレーとそれはもしや、スペシャルメニューか!?!」

明久の次に出てきた制服を全開にして耳にピアスをはめてる野郎が俺の持ってきた昼食を見て驚いた。

「うわ、オムライスにデザートパフエ……今日は当たりだったのか。シェフの気まぐれで作るから出るまで何が来るかわかんないんだが、よくそんなの頼んだな」

桜内が言うには俺が頼んだスペシャルメニューはシェフが気まぐれで作るため、何が出るかわからない特別メニューらしい。

このメニューを頼むのはほぼ博打に等しいらしく、今回のような豪華なものもあれば不味い料理が出てくる時もあるらしい。んなもん学校のメニューに出すなと思ったと同時に今回が当たりでよかつたと思った。

「で、こちらが明久君と大喧嘩した人と……」

「久保利光だよ。吉井君とは友人だ。よろしく頼む」

俺の顔はあの日校門で明久と鬨りあっていたのをきっかけにほんどの生徒に知られたらしい。

まあ、そこに関しては別にどうでもいいがな。

「ああ、その学校一の女装趣味及び同性愛者の主人の坂本雄二だ」

「こら雄二! 人様に誤解を与えるような事を言うんじゃない! こ

れだと完全に僕がその手の趣味の人間だと誤解されちゃうじゃないか！」

「あら、吉井は女装が好きじゃないの？ 借り物競争の時のアレは」「アレだって好きで着たわけじゃないからね！」

横からロリ体型の女が出てきて明久の女装癖について問うてきた。なんだろうか、こいつとは何か気が合うような感じがするが。

「そのところどうなのかしら？ 坂本君……だったかしら？」

「ああ、前の学校じゃことあるごとに俺に寄ってきてな。俺は何度も断っているんだがな」

「いい加減にしろよ馬鹿雄二！」

「へえ、流石……男子の大半の視線を釘付けにただけあるわね」

「雪村さんも更に誤解を与えるような事を言わないで！」

やっぱりこいつとは結構気が合いそうだった。明久のからかい方を多少は知っているみたいだな。

「2人共、人の集まる場所でそういった会話をするのはやめるんだ。このままでは吉井君が不登校になってしまったらどうする？」

「うう……ありがとう、久保君」

「礼はいらないよ。困った時はお互い様だ」

ちっ……そういや今は久保がいるから明久をからかう楽しみが減りつつあるんだよな。

仕方ねえ。今は昼食だし、明久弄りはここで中断すつかと。

「なんていうか……俺ものすげえデジャヴを感じるんだけど、何でかな？」

「きつとそれは気の所為よ、渉」

「そ、そうか？ 何だか俺、いつもこんな感じの風景を見てる気がするんだけど」

「何言ってるの？ 私達が誰かを苛めた事なんてあったかしら？」

「それは……あるな。主に俺が！」

どうやらこの板橋とやらも相当の弄られ役みたいだな。リアクションがいちいち面白い。

こいつは明久の次に弄り甲斐のありそうな奴だ。こいつのからか

い方もあのロリ女に聞いてみるとするか。

「なんていうか、何処か杏に似てるよね。あの人」

「ああ、主に腹黒い部分かな」

桜内とその目の前の席に座っている大人しそうな女がヒソヒソと何か話してたが別に気にすることもない。

とりあえず明久弄りも終えて俺達は多少の自己紹介をしてから昼食を口にし始める。

食事が半分辺りまでいった時だ。

「あ、明久く〜ん！」

食事中だと言うのに大声を上げながら明久の名前を呼んで駆けつけてくる女が来た。確か、白河とか言ったっけか。

「うむ、本当におったの」

「……（コクツ）」

その後ろからは秀吉とムツツリーニもついてきた。どうやら白河が案内していたようだ。

「あ、ななかちゃん。それに秀吉とムツツリーニ」

「うむ、そつちも学食であったか」

「……購買は人がたくさん」

「うん。弁当なしの時はほとんどがこつちだね」

「ふむ……僕達の前が空いてるみたいだからそこに座るといい」

「そうか。では、お言葉に甘えましょう」

「……感謝」

そして秀吉にムツツリーニ、白河も混ざって昼食になった。

「そういえば、みんなはどう？ 転校してきて」

「ふむ、得にこれと言った事は……多少前の学校の事を質問されたくらいだよ」

「……変わった事なし」

「俺も特にないな。興味ねえし」

「俺もそんな大したことはないの。何故かガールズトークの方が多かったのじゃが」

「まあ、秀吉の場合……外見が美少女そのものだから性別が男と言っ

てもあまり信じられない人が多いんだよ」

「うーむ、納得がいかなのじゃが……ん？ 明久よ、お主今儂を男として見てくれたかの？」

「そーいや、いつもこーいうところなら秀吉は美少女なんだからガールズトークくらい普通だろとか言うと思っただが。」

「いやあ、こーいう平和なところで暮らしてたからかな？ 大分秀吉の性別に関して正常な認識ができるようになったというか」

「明久……っ、遂に儂の事を男として見てくれたのかのう」

「つい一週間前はこいつの事を女だと思ってた奴がな。」

「では、これにて儂も芳乃家で……」

「いや、それはマズイと思うよ。世間の視線的な意味で」

「……（ズーン）」

秀吉が見るからに落ち込んでるな。ま、実際秀吉の外見じゃ女と同棲していると見られてもおかしくないからな。

「あれ？ 何その会話？ ひよっとしてそいつ、男？」

「どうやら既に秀吉の性別を勘違いしてる奴が出てるみたいだな。ま、秀吉の場合は見た目が見た目だしな。」

「へえ、確かに制服は男子のものだけど」

「すごい美少女にしか見えないよね」

「女なのに何か負けた気がするよ」

「だよね。私も自己紹介された時は驚いたよ。こんなに可愛いものになって」

「……………」

秀吉の周囲の空気がどんどん冷たくなっていくな。こっちでも秀吉の扱いは変わらないようだな。

「そ、それで雄二に秀吉、久保君の事はみんなにも話したね。後は、ムツツリーニだね。君だけ僕達とは別の所で暮らしてるからね」

「明久がみんなの意識を逸らそうとしているのか、ムツツリーニへと話題の意識を向ける。」

「……非公式新聞部は最高」

「本当に非公式新聞部の下で暮らしてるのかよ……」

「てことは、杉並の所か？　へえ、どんな暮らしをしてるか興味あるなあ。どんな暮らしなんだよ？」

「……企業秘密」

渉と言ったか。そいつの質問にムツツリーニはたった一言呟いただけ。

「はあ……やっぱそれか」

「とは言っても、ムツツリーニ個人の暮らしは大体予想できるけどね」
確かに。どうせあちこちにカメラを仕掛けてそこから送られる映像を鼻血を垂らしながら見ている姿が容易に想像できる。

「そういえば、何でみんな土屋君の事をムツツリーニって呼んでるの？」

白河がムツツリーニという渾名の由来を知らないのか、そう尋ねてきた。

「ああ、そいつは前の学校じゃ覗きの常犯でな。それでも必死に自分のエロティックな面を隠そうとしている事から、寡黙なる性職者。通称ムツツリーニという名が付けられたんだ」

「証拠があっても、本人は必死に隠してるつもりだからね」

「そういえば、前にそんな奴がいるって話があった気がするな」

「あれ、本当の話だったんだ」

「……そんな事実はない（ブンブン！）」

ムツツリーニの否定の言葉は毎度の事ながら今更だと思ふ。

「ようするに、重度のムツツリスケベってわけね」

「……っ！（ぶんぶんぶん！）」

「やくん、私どんな目で見られるんだろう？」

「……89, 55, 90」

突然ムツツリーニが変な数字を口にした。

「何だ？　今の数字は？　小恋、わかるか？」

「ううん。全然……」

「……今の、茜のスリーサイズの数字ね。それも、以前の数値そのまま」

どうやら今のは花咲のスリーサイズだったらしい。ちよつとスタ

イルすげえなとも思った。

「何っ!? 茜のスリーサイズ!? おま、あの短時間にそんな……ていうか、1cmも狂いもない!」

「……こんなの、一般技能」

決してそんな事はないだろう。

「じゃ、じゃじゃじゃ! 月島! 月島のスリーサイズは!」

「渉君! いきなり何を言って「86, 54, 87」——って、土屋君も普通に答えないでえ——っ!」

月島のスリーサイズまでもはつきり答えて月島が涙目でムツツリーニを止めようとしていたが、もう遅いと思う。

てか、本当に当たってたのかよ。

「す、すげえ……土屋、俺はお前を尊敬するぜ!」

「ていうか、すげえ技能だな」

「前の学校でもこんな具合だったよ。しかも、盗撮技術もすごいし……」

「盗撮で……」

「……ちなみに」

ムツツリーニが胸ポケットに手を入れてあるものを取り出した。それは、

「うおっ!?! 月島に茜に杏、白河や音姫先輩に由夢ちゃんの写真まで!?! しかも、いいアングル盛りだくさん!」

「……一枚2000円。二次配布は禁止」

「ぜひ……是非ください!」

板橋が財布を取り出してムツツリーニの写真を買おうとしていた。早くもムツツリ商会の常連候補が出たな。

「ていうか、何処であんなもの撮ったんだ? 自クラスにいる白河ならともかく」

「ムツツリーニの盗撮技術って、すごいから」

「うわ、すごい技術。自分で見てもいい写真だって思うよ」

「白河、写真の評価よりも盗撮の事に関して怒れよ」

ムツツリーニの写真を見てこの場にいる奴が色々な感想を出し

合っていた。

「ちなみに明久」

「何？」

「……お前が不在の間に撮った姫路と島田、その他大勢の女子の写真」
「言うと思ったけどいらぬよ。もうそういうのはおさらばするって決めたから」

「本音は？」

「音姫先輩が姉さん並にこういうのに煩いから」
なるほど。あの姉ちゃんなら確かにそういうのには煩そうだな。

「……雪月花の写真も」

「駄目だからね」

「……朝倉姉妹のも」

「ふざけないの」

「……白河のジャージ姿」

「可哀想だと思いなよ」

「明久、普通に本音が出ておるぞ」

「あれ!？」

どうやら無意識に本音が出たようだ。というか、今まで出た女に反応なくて白河には条件反射か。

「ふくん……明久君ってば、そんなに私の写真がほしいの？」

「是非と……コレクションにしたいです」

「明久、誤魔化そうとしたのじやろうが、普通に欲望をカミングアウトしとるぞい」

「あれえ!？」

「お前は本当に嘘がつけぬ奴だな」

その正直さには少しばかりだが感心を覚えさせられる。

「あらあら。吉井つたら、そんなに興奮しちゃって」

「そんなに白河さんに欲情していたの？」

「いや、だからそういうんじゃない……僕は純粹に「ななかちゃんの色んな姿が見たい」——って、今の秀吉でしょ！ 僕の台詞に同じ声で被せないで！」

「ハツハツハ！ いやあ、これに乗らない手はないじやろうと思っ
な」

「え？ 今のお前だったのか？」

「そうだけど、それがどうかしたか（義之の声まね）」

「うわ、俺の声そのものじゃねえか」

「土屋も土屋だけど、こっちもすげえ！ なあなあ！ その声まねと
土屋の写真使って月島の喘ぎ声をBGMにした画像保存したDVD
とか作ったらすぐくねえ!？」

「マズイ！ その話題は——」

「待つんだ涉！ ムツツリーニの前でその手の話題は！」

「喘ぎ声のBGM……艶姿……（ブシャア——ツ!）」

明久の制止の声も虚しく、既に板橋の言葉がムツツリーニの耳に入
り、ムツツリーニはあの一瞬で色々な想像をしただろう、大量の鼻血
を噴出した。

「うおわ!? ムツツリーニがものすげえ勢いで鼻血出してるぞ!？」

「いけないよ涉！ ムツツリーニの前で、それも公衆の面前でその話
はマズイ!」

「え!? おい、土屋の鼻からものすげえ血が溢れ出してるぞ！ しか
も出血量がもうペットボトル何本分だよ!？」

「くそっ！ 油断した!」

「明久！ すぐに2組の教室に戻って輸血パックを用意するのじゃ！
輸血用のバックは常に用意しとる筈じゃからすぐにわかる!」

「わかった！ ムツツリーニ、死なないでね!」

「っ……板橋……その案、最……（ガクツ）」

「土屋!? 死ぬな！ お前はこんなところで死ぬような奴じゃねえだ
ろ!」

「何か、すげえデジャヴだな」

「吉井君達って、いつもこんな日常を送ってたの?」

「ああ。賑やかな日常なのは間違いないよ」

「おもしろいね。明久君のお友達って」

「毎日がより楽しくなりそうね」

「土屋君、大丈夫かな？」

そんなこんなで転校初日から慌ただしい学生生活が始まっていた。
とはいえ、向こうにいた時よりは平和だから別にいいんだが。

第十四話

「……ん、……よく……き……」

「ん……」

今は……朝だろうか？ 閉じている目の向こうがやけに明るいし。誰かの声が聞こえるけど、なんか寒い。このまま温々と布団の中で微睡んでいたいと思った。

「むく……こらく！ 明久君！」

まだ誰かが僕を起こそうとしているけど、生憎と僕は睡眠に敗北してしまったので起き上がる事はできない。

しばらくすると諦めたのか、その誰かは僕に声をかけることはなくなった。睡眠の勝利かと思った時だった。

「たー！」

ドスっ！

「ぶふおあつ!？」

突然、腹部に何か落ちたような衝撃が一気に僕の身体を走った。一体何事かと思つて掛け布団から身を乗り出した。

「やつほく♪ 明久君♪」

犯人はさくらさんだった。

「……何やってるんでしょうか、さくらさん？」

「うにや？ もちろん、明久君を起こしにきてあげただけど？」

「……珍しいですね。いつもなら僕が義之が起こしに行くのに」

「僕だって週に2回くらいは起こしにくるよ」

できれば毎日起こしてほしいと思うのは僕だけだろうか。

「毎日僕が起こしにくるなんてのはないよ」

などと、まるで僕の心を見透かしたかのように言ってきた。

「それは何故でしょうか？」

「だって、誰かに起こしにきてもらうのって幸せな気分なんだ。そのまま楽しい一日が始まって……家族みんなでわいわい騒ぎながら過ごす時間がたまらないんだよね」

「わいわいじゃなくてもいつも騒ぎまくりなんですけどね」

主に僕や雄二の口喧嘩が毎日だし。

「だから、僕が起こすのはたまになんだよ」

いまいちよくわかんない理屈なんだけど、まあ別に起こしに行くのは構わないんだけどね。

そもそも僕がこの家に住まわせてもらってるわけなんだし、食事は毎日取れるから睡眠も以前と比べると比較的良好だ。

それに、さくらさんは何気ない感じで言ったのだらうけど……こういうのが一般的な家族の図というものではないだらうかと思う。

「わかりました。起きます、起きますよ」

「うん。それじゃあ、楽しい一日を始めるためにおいしい朝食を作ってね♪」

「了解しました」

もう12月に入って寒い季節だというのにさくらさんは相も変わらず元気いっぱいの子供みただった。

「ふう……寒いなあ」

「ああ、マジさぶいぜ」

「うむ。もう12月じゃし……冬も頂点に達してる頃じゃな」

「まだまださ。一月辺りになればもっと寒くなると思うよ」

「マジかよ……ああ、さむ……」

「こら、みんな揃って背中を丸めない。ちゃんと背筋伸ばして」

「そうは言うが、音姫先輩よ……都会の方なら建物から来る照り返しがあるから以前はまだあったかい状態だったが、こっちはそれが内分余計寒く感じるんだよ」

「確かに……照り返しがない分、寒さも倍に感じるのお」

「うむ。流石にここまで寒さはあまり経験がないから平然としてると言われると、少々辛い」

確かに、Fクラスの教室もボロボロですきま風が寒い時もあったけど、こっちは目立った建物が少ない分余計寒さを感じる。

あまり経験したことのない寒さに僕達が背中を丸めてもそれは仕方のない事だと思う。

「俺も同感。早く学校行って暖房に当たりたい」

「もう、弟くんも情けないよ。あ、でも……寒いっていうならお姉ちゃんが手だけでも温めてあげようか?」

「ぶっ!? な、何言ってるんだ音姉!」

「えく? そりゃあ、手袋持ってきてないから私の手も冷たいと思うけど、しばらく繋いでいれば……」

「そういう意味じゃないよ! こんな大勢の目の前で手を繋ぐのがマズイって言ってるんだよ!」

「え? 何で? 私達姉弟じゃない」

「……………」

学校に行く前から義之が疲れきった表情をしていた。

「ほうほう、羨ましいじゃねえか。こんな美人と手を繋げるんだからな」

「桜内は相も変わらず音姫先輩に好かれておるのう」

「うむ、いい姉弟愛じゃないか」

「ちよつと義之が羨ましいよ」

ちなみにこれが僕の姉さんだったら手を繋ぐのを通り越して体にくっつけ合うなんて言いかねない。

……やばい。想像したら眩暈がしてきた。この考えは早々に捨てていこう。

「本当に勘弁してくれ……みんなの視線とかの所為で余計寒く感じる」

確かに音姫さんは良かれと思って温めようとしてるんだろうけど、義之にはかえって逆効果になりかねないよね。

主に、周囲にいる男子生徒からの殺気の籠った視線によって。

「えく? 弟君はお姉ちゃんと手を繋ぐの嫌?」

「うぐ……………」

おーっと、音姫さんが泣きそうになって義之が非常に困った顔をしているぞ。

「あ、いや……その……手を繋ぐのが嫌じゃなくて、周囲に人がいるこの状況では——」

「じゃあ、いいよね♪」

義之の弁明は最後まで繋げられず、すっかりご機嫌になった音姫さんが義之と手を繋いだ事により、周囲でこの状況を目撃している男子生徒の殺気が渦巻き始めた。

うわあ、直接こちらに向けられてるわけじゃないのに余計寒くなってきた感じがするよ。

「兄さん……何ヘラヘラしてるのよ」

そしてすぐ後ろでも由夢ちゃんの嫉妬の視線が義之に向けられているのが顔が見えなくてもわかってしまう。

「やれやれ……随分と恵まれてるっていうのに、当の本人は全く知らない顔でいい気なもんだ」

「うむ。あれだけモテモテだというのに、一向にその思いに気づく様子がないのう」

「本当、モテモテだっていうのに鈍感にもほどがあるよね」

「(いや、お前「お主」が言えたことじゃないからな「の」)」

何やら雄二と秀吉が呆れたような顔でこちらを見ているのだが、何でだろう？

「おーい！ おっはよー！」

冬だというのに元氣いっぱい挨拶してくるこの声は。そう認識するや否や、背中にバン、と衝撃が走った。

「おっはよ吉井！ あとその他大勢も！」

「俺達はその他大勢かよ」

「一々その場全員の名前言うのもメンドイし」

やはりというか、こんなアグレッシブな挨拶をかます人はまゆきさんしかないない。

「おはようございます、高坂さん」

「うん。おはようさん。音姫は……うん、相変わらずだね」

高坂さんが手を繋いだ状態の義之と音姫さんを見て呆れたように溜息をついた。

「あ、まゆき。おはよう」

「まゆきさん、おはようございます」

「おはよう。音姫は相変わらず弟君にベツタリかあ」

「うん、姉弟だもん」

「いや。普通姉弟でそこまで密着する奴なんていないから」

「もつともです。」

「そう？ 昔からずつとこんな感じだったけど？」

「……………」

「昔から何言ってもこんなですから」

「全く……………」

「どうやら音姫さんの義之への依存っぷりはかなり昔からだったよ
うだ。」

「ちよつとより親近感を感じたりするけど、同時に嫉妬したりもす
る。」

「音姫さんにくつつかれてるのが羨ましいというのもある。だが、一
番は傍にくつついてる人が比較的安全な人だという事だ。」

「これが姉さんだったら冷かしを受けるどころじゃない。僕の社会
的寿命が完全に根絶する事間違いないだろう。」

「血が繋がってるわけじゃないのに…………いや、繋がってないからこそ
余計羨ましい。」

「あらゆる嫉妬、殺意などが渦巻く中、僕らは学校へと歩んだのだっ
た。」

「本題に入りますっ！」

「そんな声と共に教卓を叩いているのは我が3組の委員長、沢井麻耶
さん。」

「皆さんもご存知の通り、来週の23日から25日までの三日間、我が校でクリスマスパーティーが開催されます」

クリスマスパーティー。通称クリパとは読んで字の如くクリスマスに行われるパーティーで一年の中でもかなり盛り上がり期待される祭らしい。

文化祭でもそれなりに盛り上がりつつあった気もするけど、今度は僕も風見学園の生徒としてそのパーティーに参加して楽しみたい気持ちもあるんだけど。

「クリスマスパーティーですが、言ってしまうえば文化祭と何ら変わりありません。各クラスでの催し物が義務付けられていきます」

ちなみに今この話をしているのは僕達が催し物を決めるためLHRでそれを決めようと沢井さんが意見したから。

「しかあし！」

バン、と教卓を再び叩くと共にそれを見ていたクラスメートの何人かがびくりと体を一瞬震わせた。

沢井さんがギリギリと忌々しそうに拳を握って僕らを睨んでいた。

「残念なことに、私達のクラスの出し物は未だ何も決まっていません！この議題、11月からしているのですが……にも関わらず、現在までずっと引きずったままなのですが」

こ、怖い。沢井さんが異様なまでに殺気を漂わせてるよ。

決まっていなと言っても、11月から色々意見は出ているのだがいつも却下されたり脱線したりが多いために今日まで決まらずにいるのだ。

僕もポピュラーに喫茶店でもどうかという意見を出してみたのだが、沢井さんに具体的な内容は聞かれ、僕が悩んでるうちに女子のみんなが色々口論して脱線したので喫茶店も却下になった。

「明久、明久」

「ん？」

隣で義之に呼ばれ、そのすぐ近くでも板橋君や杉並君がこちらを向いていた。

「委員長、相当殺気だってるぞ」

「それは、見ればわかる」

「何かまた意見でも言ってくれないか？ 喫茶店以外で」

「無茶言わないでよ。喫茶店ってだけでも結構知識絞ってようやく出した意見なのに」

僕……というより、ほとんどの学校では文化祭なんて秋にやるくらいなのに、冬でもそういうった祭をやる学校ではできる事がかなり限られてしまう。

冬で何かできそうな事といえば喫茶店とかしか思いつかない。他に冬でできそうな催し物に関する知識は僕の中にはない。

「そういうなら義之も何か意見出してよ。僕より風見学園にいるんですよ？」

「そうは言うが、色々文化祭でやった感があるからなあ」

「ふむ。我が校は非常にイベント好きだからな。まあ、それでこそ俺も張り合いがあるというものだが」

何の張り合いだか気になると同時に杉並君が懐から手帳を取り出した。

「何なの？ その手帳」

「ネタ帳だ」

「お笑い芸人か、お前は」

「そのネタをどういった事に使うかは聞かないでおくよ」

体育祭の事を鑑みるに、十中八九祭を滅茶苦茶にするためのネタとしか思えない。

「あ、俺も手帳持つてるぜ」

「へえ……って、なんで表紙にプリントシールばっか貼ってんだよ？

女子かお前は！」

「うわ、見事なまでにプリクラが表紙を埋め尽くしてるよ」

「可愛いだろ？」

「いや……なんていうか渉、これは……」

「キモイ」

僕がどうにかオブラートに包んで何か気の効いた事を言おうとしたところに義之がストレートに言い放った。

「うわ、キモイはちよつと酷くね？ お前はもうちよつと俺に優しくするべきだ！」

「お前こそ、もつと環境に優しくなれ」

それは板橋君が汚染物質と言っているのか。

「か、環境？ 俺は環境を汚染してるのかよ？」

「環境どころではない。今や板橋は地球規模で汚染存在だ」

杉並君も杉並君で規模を大きくしてるし。

「うわあああ！ 許してくれ地球っ！ てか俺ってすごくね？」

もうこのお笑いやらコントやらな光景も見慣れてきた気がするよ。

「ちよつと、その悪の根源3人組！ ちゃんと会議に参加しないと、

あんた達に決めてもらうからね！」

「え？ 悪の根源3人組って……俺も入ってるの？」

義之が心外だと言わんばかりに驚いた表情で尋ねる。

「当たり前でしょう！ ふたりがボケであんたがツツコミ！」

その役割は的を射ていると思う。

「心外だ……」

「ならいつそ3人一緒にボケはどうだ？」

「うむ。新しい世界が拓けそうだ」

「それだとツツコミ役がいなくなつて収集つかなくなるからやめてね」

そんなお笑いみたいな光景を見てクラスメート達が騒ぎ始めた。

「静かにー」

そこに再び沢井さんの教卓叩きが教室に響いた。

「今決まらないのなら、放課後決まるまで残ってもらうけど、それでもいいかしら？」

クラスメートが沢井さんの言葉を聞いて再びシーン、と静まった。

しかし、このままじつとしていても堂々巡りだ。みんなどんな意見を出したらいいのか悩みっぱなしだ。

全員がどうしたものかとうんうん唸っている中で、

「……人形劇」

静まった教室に幼くも抑揚のないような声が響いた。

「人形劇なんてどうかしら?」

杏ちゃんが変化のない表情で一言いうと、教室内でどよめきが上がった。

「人形劇?」

「折角のクリスマスなんだし、ファンタジーっぽい出し物なら文句ないでしょ?」

「……なるほど」

沢井さんが腕を組んで頷いた。

「はいはい! 私も人形劇がいいと思いまーす♪」

茜ちゃんもそれに乗って挙手しながら杏ちゃんの意見に賛成した。

「クリスマスだし、こーう……ロマンチックな物語とかがいいんじゃないかなあ? 聖なる夜を盛り上げるラブロマンスとか!」

茜ちゃんが中学生には不釣合いな放漫な身体をくねらせ、男子生徒に振りまいていく。

後は言わずもがな、男子生徒のほとんどが目を光らせて賛成意見を飛び交わしていた。

しかし人形劇かあ。そしてラブロマンス……葉月ちゃんとか好きそうだよなあ。

「ついでに提案なんだけど……人形劇のヒロイン役に小恋……なんてのはどうかしら?」

ガタ——ン!

椅子が派手にひっくり返る音が聞こえ、クラスメートの視線がその音の聞こえた場所へと向けられる。

「あい……たたたた。な、何言い出すの、急に……」

名前を挙げられた小恋ちゃんが痛そうにお尻を摩りながら杏ちゃんに対して反論する。

「そんなのできないよ」

小恋ちゃんは反対してるが、彼女は容姿もいいし、性格も至って優しい方。そして何より料理が上手(ここ非常に重要)。

なので小恋ちゃんがヒロインという意見に反対する人は本人を置いて他にはいなかった。僕も含めて。

「大丈夫」

「うんうん。小恋ちゃんならできるって」

「な、何を根拠にそんな」

「でも、ラブロマンスっていうなら相手もいるの？」

心から思った事をそのまま口に出すと待つてましたと言わんばかりに杏ちゃんと茜ちゃんが口の端を上げて笑った。

「それはもう……」

「相手役は義之で決まりでしょ」

「賛成です。相手役は義之君がいいと思いまーす！」

「はえ？」

名前を挙げられた本人は間抜けな声を出して驚いていた。

「ええ!? 俺じゃねえの!?!」

渉が講義してるけどクラスメートのみんなはガン無視だった。

「で? 小恋ちゃんの相手役は義之君ってことで」

「特に問題はないと思うけど……」

「ちよ、ちよつと待つて〜! そんなの無理、無理〜!」

うくん。僕としても小恋ちゃんの相手役は義之がピッタリだと思うけど、確かに本人の言う通り無理がある気もする。

だって、小恋ちゃんは義之の事が好きで……更に小恋ちゃんはこういったことに緊張しやすい人なのだ。

本番で義之の間近で人形劇なんて事になったらどんな事になるか。顔真赤にしすぎて熱が出ちゃったり、声が裏返ったり……なんてなってもおかしくない。

「ふむ……お化け屋敷か」

「はいっ。」

今までの会話に上がりもしなかったワードが聞こえ、僕も間抜けな声を出した。

「ふむ、お化け屋敷。なるほど、催し物をお化け屋敷にすれば……ここをこうしてと、そうだな……アレは科学部の連中から拝借すればいいとして……うむ、これならばあの計画も……」

杉並君が手帳を見ながら何かぶつぶつ呟いている。ていうか、

「杉並君、何がどうしてお化け屋敷なんて話が出てくるの？」

彼は今の話を聞いていたのだろうか？

「聞いていた。月島と桜内が人形劇を通じて、不毛な疑似恋愛をするという話だろうか？」

非常に身も蓋もない発言だった。

「それは小恋ちゃんに失礼だよ。ていうか、なんで冬なのにお化け屋敷なわけ？」

「季節など関係あるまい。真冬でも桜満開のこの島で季節外れの催し物を出すのに何を躊躇う？」

それを言われると何故か納得してしまう自分がいる。

確かに冬だというのにいまだに桜が満開というこの初音島自体が季節外れの代表格っぽい感じがする。

「でも、なんでお化け屋敷なんて出してどうするんだよ」

「要は、気になるあの子を誘って、暗闇で告白できる！ 2人の密着度、MAX！ そんなすうばらしいお化け屋敷を作ること何の異論があると言うのだ！」

杉並君の密着という言葉に大半の男子生徒が歓声を上げた。

しかし、杉並君が色恋沙汰を問うなんて、

「何を企んでいやがる？」

「やだ、何のこと？」

普通に何か企んでるとしか思えないんだけど。ていうか汚れを知らない天使のようなおとぼけ顔しても杉並君じゃ怪しき満点だよ。

しかしお化け屋敷……正直個人的にはやりたくないというのが僕の意見だ。

お化け屋敷だとかそういったホラー物に関してロクな目に会ったことがないもん。

文月学園でのオカルト召喚獣とか、美波や姫路さんからのオカルト召喚獣絡みでの攻撃に、坊主先輩のゴスロリファッションとか……うえ、思い出したら吐き気が。

「ちよつと吉井！ 聞いているの!?!」

「へ？」

「へ、じゃないでしょ。あんたで最後なんだけど」

「はい？ 何が？」

「何がって……あんた、話聞いてた？」

「人形劇とお化け屋敷という2つの意見が出てきた」

「はいはい。そこに現在多数決を行なっているを付け加えれば完璧ね」

「多数決？」

黒板に視線を移すと『正』の文字がいくつも書かれていた。どうやら今はさつき上げられた2つの出し物について多数決を行なっているようだ。

そして何故か綺麗にまっぶたつに別れていましたと。

「もうあんたしか意見だす人がいないの」

「つまり、どっちを出すかは僕の票しだいと」

「そう」

どうやら僕の一存で出し物が決まるようだ。

しかし、どっちにしたものか……なんて、答えなんて決まっていた。

「人形劇」

「意外と即答ね。あんたならもう少し迷ってたと思ったけど」

「正直お化け屋敷は個人的にやりたくないの」

「明久君って、オバケとか苦手？」

小恋ちゃんが不思議そうに尋ねてきた。

「いや、幽霊とかそういうのは別に怖くないけど………こういうのでロクな目に会った事がないから」

この学校に限ってあんな恐ろしい事になるとは思えないけど、それでもあんなトラウマに近い出来事はあまり掘り起こしたくなかった。

「やったね♪」

「当然ね」

杏ちゃんや茜ちゃんを中心に、人形劇に賛成の人達は歓喜の声を上げていた。

「えええ。はあ……今日の占い、凶って出てただけけど。これのことだったんだ……」

「何言ってるの小恋ちゃん」

「主役に選ばれたんだから大吉じゃない」

「あのねえ、勝手に変なこと言わないでよ」

「じゃあ小恋ちゃん、こう考えたらどうだろう？」

「何、明久君まで？」

「好きな人の傍にたっぷりいられる時間ができたんだからむしろ大吉だと。何しろ恋人役なんだから」

「……………ふえくくく!?!」

今頃気づいたのか、小恋ちゃんが顔を真赤にした。いや、なんとも面白い反応だね。

「それでは、我がクラスの出し物は人形劇とします。準備期間があまりまいですが、皆さんがんばっていきましょー」

こうして僕達のクラスの出し物は人形劇に決まったのだった。

第十五話

「おい、次全校集会だぞ。体育館」

「あー、俺。パスパス」

昼休みが終わりに迫った時刻、僕達はそろそろ教室を出ようとしていた。

今日は体育館で全校集会があるようだ。何故朝じゃないのだろうかとか疑問もあるけど、授業が潰れるのは何となくラッキーな気がする。

まあ、理由は十中八九クリパだろうけど。

「アホな事言つてないで行くぞ」

「腹が減って動きたくない」

ぐったりと机に突っ伏したまま力なく呟く義之。

「そういえば義之、昼休み杉並君と何処に行つてたの？ 食堂ではムツツリーニが途中で来てイキイキしてたし、教室に戻れば杉並君も興奮してるし、何故か義之は頬を腫らしてるし」

そう。食堂ではなかなかちゃんや秀吉と一緒に昼食を楽しんでいる最中、ムツツリーニが輝いた顔で僕達と同じテーブルに座ってきた。そして昼食を終えて戻ってくれば杉並君が輝いた顔で何かぶつぶつ言ってるし、義之は何故か頬を腫らして机に突っ伏してそのまま。

「……思い出したくもない」

そう一言呟いてすっかり力をなくしたように机の上から腕をぶら下げた。

どうやら本当に空腹がキツイようだ。

「何があったのかは興味あるけど、今はとにかく起きろ。いい加減、先に行くぞっ」

「……わあつたよ」

顔を上げると同時に義之のお腹からきゅるゝ、と情けない音が響いた。

最早立つのも辛いのだろう。そんな時だった。

「あ、何故かこんな所にお昼の残りの焼きそばパンが」

杏ちゃんがどこからか焼きそばパンを手に持って義之の目の前にチラつかせる。

「しかも私はお腹いっぱい。さて、どうしたものかな？」

わざとらしく、小悪魔的な笑みを浮かべて義之に焼きそばパンを近づける。

明らかな挑発だった。

「ふっ……俺を見くびるなよ雪村杏」

「おっ」

義之も強がりの笑みを返しながらゆっくりと立ち上がる。

「わたくしとて、幼少から帝王学を仕込まれ、いずれは日本を背負って立つ男として育てられた身」

そんな話、聞いたこともない。

「そんなわたくしを、焼きそばパンごときで挑発しようなどと、片腹痛いわ！ はっはっはっはっ！」

義之が何処ぞの悪魔だか大王様が上げるような高笑いをした。

「犬とお呼びください」

そしてすぐに杏ちゃんの前に膝まづいて両手を差し出した。

切り替え早すぎるよ。

「犬……」

「わん！」

しかも従順になりきっちゃってるし。

「……お前にはプライドつてもんがないんか？」

「バカヤロウ！ プライドじゃ腹は膨れねえんだよ！ 資本主義舐めんな！」

「いや、資本主義は関係ないんじゃない？」

しかし、プライドで腹は膨れないという点に関しては気持ちはわからないでもない。

「お手」

「ハウッ！」

完全に犬になりきっちゃってるよ。杏ちゃんも面白い玩具を見つ

けたように楽しそうに笑ってるし。

「お代わり」

「ハウッ！」

「待て」

「ハッハッハッ」

駄目だ。義之が何処か遠くへ行っちゃいそうさ。そろそろ戻しておかないと。

「ちんちん……」

「……………」

教室でわいわい騒いでいた生徒達が一瞬にして静まった。

……………待つてほしい。この幼い容姿の女子は今何と言ったのだろうか？

ち……女の子が口にするに相応しくない単語が聞こえた気がするのですが？

き、気の所為だよな？

「ほらあ……ちん・ちん・ちん」

「やっぱり気の所為じゃなかったああああ!!」

ていうか杏ちゃん、何言っちゃってるのおおおお!!?

「う、うおおおお!!」

隣では渉が身体をくの字に折つてのたうち回っていた。

「も、もう、杏！ 駄目だよー!!」

そこに小恋ちゃんが顔を真っ赤にして雪村さんを叱ってきた。

やはり彼女はこういった話題には耐性がないのだろう。ものすごい恥ずかしそうにしている。

「そうだよ杏ちゃん。ちんちんとか言っちゃ駄目!」

「「茜（ちゃん）も言わないの!」」

「えく? なんて?」

茜ちゃんがニヤニヤした顔で僕達に詰め寄ってくる。

「だから、ちん——」

「小恋ちゃん! 君まで言っちゃ駄目だから!」

「あ、あわわわ! い、言わないよ! そんな言葉!」

危うく小恋ちゃんまで女の子が言うに相応しくない単語を発して人生を踏み外してしまうところだった。

「小恋が何を想像してるのかわからないけど、犬の芸の事だから」

「うん。小恋ちゃんは想像力豊かだからね」

そんな風に想像させる原因となってるのは君達の言動だと思うのだけれど。

ぐくくく。

僕らがからかわれてるところに情けない音が義之のお腹から響いた。

もう流石に限界らしい。

「さあ、お食べ」

そう言つて杏ちゃんが手に持っていた焼きそばパンを義之に手渡す。

「食べていいんか？」

「うん。元々小恋のだったし」

「小恋ちゃんが義之君のために買っておいただよ。もしかしたらつて」

流石義之君の幼馴染と言うべきか、義之に対する気遣いが普通の人に対するものの何倍もすごい。

「サンキューな、小恋」

「うううく……もう知らない」

当の小恋ちゃんは2人からかわれて義之の言葉も耳に入らないくらい顔を真っ赤にして涙目で恥ずかしがっていた。

教室から出ていき、体育館に移動すれば溢れんばかりの人混み。

これが本校と付属全てを合わせた生徒と教師が一ヶ所に集まるのだからとんでもない人数になるのは必然だ。

「で？ 今日は何のための全校集会だ？」

義之がそんな疑問を口にした。

「ふ、決まっておろう。クリスマスパーティーに向けての連絡事項だ」
「もう、来週になるからな。クリパ」

「なるほどね。で、杉並は今回何すんだ？ どうせ裏で色々動いているんだらう？」

「今のところは企業秘密だ。ただ、過去最大規模の祭になるとだけは言っておこう。今年は頼もしい助っ人がいるからな」

その助っ人は間違いないくムツツリー二なのだろう。

「暴れるのはお前の勝手だけど、俺を巻き込まないでくれよ」

「俺も勘弁してくれ」

「ならば吉井よ、今年はお前も俺の同志として——」

「悪いけど、僕も断るよ」

流石にもうその手の騒動に首を突っ込む気はないから。大体アレらだつて本位で起こした騒動じゃないんだから。

『ただいまより、全校集会を開会します』

体育館の両サイドにあるスピーカーから高坂さんの声が聞こえ、全校集会が始まった。

『まず初めに、先生方から幾つか連絡事項があります』

何でこういう全校集会のところで長くなりそうな事するんだらう。

それから幾人かの先生が一言二言話して連絡事項を告げる。中にはやたらと長話の人もいたから眠気が襲ってきたりした。

『はい。では次に、クリスマスパーティーについての連絡事項があります。生徒会長の朝倉音姫さん、お願いします』

高坂さんが告げると共に館内中が一気に静かになり、全員の視線が壇上へと移った。

そこにゆつくりとした動作で壇上へ上がる音姫さんの姿があった。

『それでは、私の方から連絡します。例年通り、12月23日から25日にかけての3日間、我が風見学園ではクリスマスパーティーを開催します』

凜とした声ですらすらと連絡事項を述べる音姫さんは綺麗だった。

普段も真面目な人なのだが、こういうところでは彼女の魅力がより

引き出されるといふか、まさに大人の女性という感じがする。

「やっぱ音姫先輩っていいよな？　もう、たまんねーよっ！　ルックス良し！　成績良し！　性格良し！」

後ろで渉が音姫先輩に対する感想を次々と述べている。

「優しくしてしつかり者でその上料理も美味い！　しかもすげーいい匂いがするんだよな。俺、音姫先輩の匂いでメシ3杯はいけるね、これマジで」

「うるせーぞ、渉」

「んだよ、別にいいじゃんかよ。俺はお前と違って遠くから眺める事しかできねーんだからよ」

一応僕や雄二達もいるわけだけど、言っても面倒事しか起きないのは流石に僕でも目に見えてるくらいなので何も言わない。

「あー、俺も音姫先輩みたいなお姉ちゃんが欲しいよ。義之、やっぱてめー羨ましすぎんぞ！」

「姉って言っても別に本当の姉ってわけじゃないし」

「義之、普通の人からすればそれはより羨ましい要素なの自覚しなきゃ」

「その通りだよ！　畜生！　俺も美人姉妹のいる家に居候してーなあ」

後ろでは地団駄を踏んでいる渉の姿があつた。

「それでは皆さん、楽しいクリスマスパーティーにしましょうね」

音姫さんが笑顔で一言言い終えると壇上から下りる。

その際、館内から溜息が聞こえた。主に男子生徒の溜息が。

「畜生！　近くにいるお前が羨ましすぎんぞ！」

「痛っ！　なんで殴んだよ!？」

「うるせえ！　お前はこれくらい甘んじて受ける義務があんだよ！」

「「「そうだそうだ!」」」

「意味わかんねえよ！」

それから全校集会が終わるまで義之は渉や近くにいた男子から叩かれたり蹴られたりしていた。

全校集会が終わって僕達は教室へと向かっていた。

「やっぱり憧れるなく、音姫先輩」

「だよな！ なんつーか、最高のお姉ちゃんって感じ？」

「うん。頼り甲斐あるし、優しいし、綺麗だし」

それについては僕も同感だ。

「あー、本気で羨ましいな、この野郎は！」

「まだ言うか」

「まあ、仕方ないよ。僕でさえ時々それ関連で義之に嫉妬覚えちゃうし」

「明久までもかよ……」

「だってあんな姉しか姉弟を知らない僕からすれば義之と音姫さんの関係って、羨ましいといしか言えないもん」

「だよな！ 明久もそう思うよな！」

「はあ……」

「つて、噂をすればだね」

茜ちゃんが指差した先には音姫さんとその周囲に沢山の生徒を囲んでいた。

「会長っ！ 一般来場者に対する誘導と安全確保のための人員について——」

「その件に関しては明日の会議での議題とします。時間までにたたき台の作成をしてください」

「はい、わかりました」

「音姫先輩、パーティー期間中の円滑な案内放送を行うため、放送部との——」

「あ、放送部の部長さんと話をつけてありますので、後は現場再度で打ち合わせを行なってください」

「了解です、音姫先輩」

などなど、色々な質問が来てもそれぞれ即座に答えて対応している。

「相変わらず大変そうだな」

「そうね。クリパまでもう時間がないもの」

「でもすごいよね。てきぱきと仕事をこなしていつて」

「なんつーか、完璧？ 理想？ 最強？」

「全然気取ったところとかないしね」

「うん。誰に対しても平等だし、ほんとかつこいいよね」

「例外はあるけどね」

「ああ……」

「何で明久は俺を見ながら納得するんだよ。まあ、わかるけど……」

そんな時だった。音姫さんが僕達の方に視線を向けた。正確には、義之に。

そしてパツチリと瞳が開いた後、にっこりと笑顔をつくってこちらへと向かって歩いてきた。

「あ——っ！ 弟君、みつけえー！」

「うっわー！」

「えへへ〜」

音姫さんは素早く人混みをかき分けて一気に義之との距離を詰めた。

そして、とろけそうな程の笑顔で義之の目の前に立つ。

「あー、ほら、ちゃんとホックする」

更に距離を詰めて義之の制服のホックを直そうと手をかけた。

「こ、これは苦しいから……」

「駄目だよ。服装の乱れは心の乱れだよ。ちゃんとしないと」

だったらその傍にいる涉はどうなのだろうか？

明らかに制服全開にピアスの普通の中学校ではバリバリ校則破りの格好なんです。

それをわかっていて気づいてもらえない板橋君がちよつと悲しそうにうつむいているのが痛々しい。

「はい、これでよしー！」

音姫さんは満足そうな顔で義之のホックをなおした。

「ん〜、後は〜」

「だ、大丈夫！ 無闇に探さなくていいから！ それよか、朝倉先輩の方は大丈夫なの？ 仕事の途中でしょ？」

「大丈夫、大丈夫♪」

いえ、全然大丈夫じゃないと思います。周りの空気がとんでもないことになってますから。

(畜生！ あの野郎、羨ましい！)

(ねえねえ、あの2人ってどんな関係なの?)

(噂では姉弟らしいけど)

(えーっ!? 姉弟なの!? なんかやばくない?)

(くうーっ！ 俺の音姫先輩をつ！)

(音姫先輩さえいれば俺は何もいらぬ！)

周囲からヒソヒソしてるつもりだろうが、かなりはつきり2人に対する噂が聞こえていた。

というか、中に1人何かおかしな事を言っていた人がいた気がするんだけど。

「あ、そうそう。弟くん、この後なんだけど時間ある？」

音姫さんの言葉に周囲の人達が一斉に耳を傾ける。

そして男子生徒からはわかってるよな殺気の籠った視線を義之に向けていた。

(わかってんよな?)

というより、実際に言っていた人がいた。すぐ傍に。

「ご、ごめん……ちよっと忙しいから」

「そっか、じゃあしようがないよね。残念」

音姫さんが落ち込むと同時に周囲の男子生徒の殺意が更に強まった。義之も非常に困った顔をしている。

「ほれー、音姫。仕事するよ」

殺気が渦巻く中でただ一人、平然とした顔で音姫さんの傍に歩み寄る人がいた。

「あ、まゆき」

やはり高坂さんだった。

「愛しの弟君の世話を焼くのもいいけど、仕事の片付けもしないと」

「あ、でも……」

音姫さんは義之と離れるのに抵抗があるのか、何か言葉を探していたが、

「でも、じゃない！ほら、みんな待ってるんだから。そんなわけで、音姫借りてくね、弟君」

「はい、どうぞどうぞ」

義之の言葉を最後に高坂さんが音姫さんの襟を掴んで引きずっていく。

「あ、弟くん！ 今日も晩ご飯作りに行くからねー！ 一緒に食べようねー！」

音姫さんとしては単に義之と食べたいだけだろうが、この公衆の前で言ったのがまずかった。

「義之、時間はたくさんある。たつぷりと話し合おうじゃないかなあ？」

「あ、明久！ 助けてくれ！ このままじゃ俺は地獄の一丁目に引きずり込まれる！」

「義之………ごめん」

「裏切り者——っ！」

「ごめん義之。流石に君の後ろにいるあの数には勝てないと思うんだ。」

「そーいや明久は、ちゃんと決まったのか？ クラスでの出し物」

「ああ、うん。今日でようやく決まったところだよ」

夜になり、僕達は大人数で食卓を囲みながら音姫さんと義之の作った料理を食べていた。

「ふむ、明久と桜井のクラスは何にしたのかの？」

「葉月も知りたいです」

隣から葉月ちゃんが身を乗り出して僕に尋ねてきた。

「人形劇だよ。杏ちゃんの意見で決まったんだ」

「人形劇か。これまた随分と子供らしいものを持ち出してきたな」

「そうなの、弟君？」

「ああ。確か、既に物語は頭で出来ているらしいが」

「すごいよね、杏ちゃんって」

「これであの毒舌と恥じらいのなさをなんとかしてくれりやあな」

「あはは……」

それは否定できなかった。

「へえ……人形劇ですか。以外ですね……兄さんの事だから、てつきりメイド喫茶とか、うさぎ耳の喫茶とか、チャイナ服を来た喫茶とかと思いましたか」

「お前は普段俺をどんな目で見てんだよ？」

でもほとんどが義之の好みであるのは確かだ。義之の部屋からそう言った類の衣装を着た人が写った本もあったから。

「それでそれで、どんなお話ですか？」

「確か、ロマンチック物だって言ってたっけ？」

「ああ。観客が号泣するほどの脚本を作るって意気込んでいたな」

「へえ。それを聞くと面白そうだな」

「そういえば、みんなのクラスは何を出すの？」

「僕達のクラスは綿菓子屋だったね。坂本君が提案したんだよ」

「一応祭と言ったら綿菓子だろ。普通な夏だって思いだろうが、この島自体季節はずれの筆頭だし、コストもいいし、何より面倒臭い作業が少なくて済む」

なんとも雄二らしい動機だった。

音姫さんが雄二のやる気のなさを注意するが、雄二は準備よりも見て回る方がいいと断固として譲らない。

見て回る方が好きなのは僕も一緒なんだけどね。

「僕のクラスはサンタ喫茶じゃ。女子の皆がサンタのコスチュームを着て喫茶を開くのじゃ」

「じゃあ、秀吉も着る事になったんだね」

「僕も何か演劇物にしたいと意見したのじゃが、男子が譲らぬし、女子

が儂を見ながら盛り上がったの。納得がいかんのじゃ」

「木下がサンタ喫茶……………滅茶苦茶様になつてる気がするな」

義之が秀吉のサンタコスチュームを想像したようで。そしてその言葉もよくわかる。

そこらへんの女子よりも女子らしい容姿だから何故か女子用の服が様になつちやうんだよね。

「でも、2組の方は女子の方が人数が多いですし……………衣装を用意するのが大変そうですね」

「いや、由夢ちゃん……………その心配は無用じゃ。うちのクラスにはその手に関してほとんどでもない実力を発揮するプロがおるからの」

「へえ……………誰です?」

「二十八九、ムツツリーニだね(な)」

そんな事が出来る人間など、彼以外に思いつかない。

「ムツツリーニって……………土屋君、だったっけ? そんなに衣装作るのが上手なの?」

「こと女物に関するものは特にな」

「前に葉月ちゃんが僕らの学校で喫茶の手伝いをしてくれた時にムツツリーニがものの数分で葉月ちゃんの衣装を一から作って用意したことがあつて」

「子供用とはいえ、一着の服を数分かよ……………」

「プロも顔負けの技術ですね」

「へえ……………土屋君って、手芸の名人なんだ」

手芸の名人つてのとはちよつと違う気もするんだけどね。ただ、女物に関しては底が見えないってくらいに色々なものが卓越してるから。

「馬鹿なお兄ちゃん。馬鹿なお兄ちゃんはどんな役をするですか?」

「え? 僕? 役はまだ主役とヒロインしか決めてないんだよね。ちなみに主役が義之でヒロインが小恋ちゃん」

「え? 弟君が?」

「え? 兄さんが主役ですか?」

僕の言葉を聞いて音姫さんと由夢ちゃんが同時に驚いた。

「杏と茜の奴が勝手に決めた事だけだな」

「でも、2人なら結構似合いそうだけどなあ」

「幼馴染同士のラブストーリー、か。面白そうだな」

「その部分だけ強調して言うなよ」

「でも2人共、エッチなのは駄目だからね」

音姫さんが人差し指を突き出して言った。

「いや、音姉……学園の祭でエッチも何も……」

「大体、人形劇なんですから」

「だって弟君達だもん」

僕までさりげなくカウントされている事にちよつと流涕した。

「そうだね、兄さん達ですし」

「明久達だしな」

「明久達じゃからの」

「みんななんて嫌いだ!」

何で僕達こんな扱いなの!? 少なくとも僕は雄二と違ってこの世界に来てから何も悪さなんてしてないよ!

「ま、でもお姉ちゃん的には助かるんじゃない?」

「ん?」

「兄さんがそれで忙しくなれば今回は悪さしないだろうし」

「失敬な」

「うくん。そうだね、戦力を杉並君に集中できるのは大きいね。それになんか楽しみだな」

「見に来なくて「絶対に見に行くね♪」いいか……」

義之の台詞に音姫さんの台詞が被った。

「……だからそんな面「絶対見に行くね♪」白い——」
再び被る。

「あの「絶対見に行くね♪」……駄目だこりゃ」

どうやら断固として譲らない。音姫さんの頭の中に義之の人形劇を見ないという選択肢はないようだ。

「私も冷かしに行こうかな?」

「来なくていい」

もうこの姉妹は何がなんでも義之の人形劇を見たいようだ。

ていうか、さつきからずつと言い忘れてたけど。

「音姫さん。さつきの話……杉並のみに戦力を注ぐのは得策じゃないと思いますよ」

「え？ 何で？」

「まさか、明久さんまで何か悪さしようなんて？」

「違うよ。今回はムツツリーニが杉並君側にいるって教えようと思っただのすっかり忘れて」

「土屋君が？」

「ああ……」

「なるほど。最近何やら忙しそうにしていたのはその所為じゃったか」

「彼なら確かにやりそうだな」

「土屋さんがですか？ ですが、生徒会のみなさんなら……」

「甘いよ由夢ちゃん。ムツツリーニはこと隠密行動に関してはとんでもない能力を持っているから。逃げることに關しては下手すれば杉並君を上回るかもしれない」

彼の隠密行動は文月学園でも非常に有名だからね。

「土屋君がねえ……うん、ありがと。生徒会の方でも彼の事をマークするように言うから」

「それで止まればいいけど……無理な気がする」

「彼だしね」

「ムツツリーニじゃからのう」

「たかだか生徒の集まりだけでアイツを抑えられるわけがない」

「そ、そんなにすごいんですか？ 土屋さん」

「……それはもう、とんでもないまでに……」

僕達が声を揃えて言った。それだけ彼の隠密行動の実力は底が知れないのだから。

「……本当に大丈夫かな？」

流石の音姫さんも先行きが真つ暗に思えてきたのか、頭を押さえていた。

僕からは御愁傷様としか言えない。

第十六話

「お弁当が欲しいんだったら、前の日にちゃんと買ってほしいよねー」
学校へ登校する途中、音姫さんが最初に口を開いた。
ちなみに今音姫さんがそう言ったのは今朝学校に出掛ける前に義之が弁当を忘れたなんて言ってるね。

最初は音姫さんも時間がないからと言ってたが、義之が冗談半分で音姫さんを持ち上げたら何時の間にか立場逆転して音姫さんがお弁当作ると言い張り、義之がそれを止めるようになった。

このままでは収集がつかないと思った僕と由夢ちゃんの2人でどうにか音姫さん達を止めて登校したのだった。

「いや、無理。俺ってインスピレーションに従って生きる男だからさ。その時の気分で変わるし」

「それって単に行き当たりばったりって言うよね」

「駄目だよ、計画的に生きないと」

「兄さんにそんな事言っても無駄だよ。いつもテスト前になると慌てて一夜漬けしてるような人だもん」

「お前だってそうだろうが」

「や、私は成績いいですから」

「やれやれ。今日も今日で微笑ましいのう」

「まあ、仲良しなのはいいことなのだが」

そんな風に僕達は義之と由夢ちゃんの兄妹喧嘩(?)を眺めていた。

「おはよ」

「ハオハオ〜」

後ろからかかってくる声に振り返ればそこには杏ちゃんと茜ちゃんが歩いてきた。

彼女達はバスでの通学らしい。どうやらその時間と重なってたようだ。

2人が音姫さん達にも挨拶すると義之に歩み寄った。

「はい、これ」

「ん？ 何だ？」

杏ちゃんが鞆から本のようなものを取り出した。

「台本。まだ途中だけど」

「義之君と小恋ちゃんのラブシーン満載のね」

「すごいよ、濡れ場」

ブシャアアアアア！

何処かで底なしにムツツリな男が鼻血を噴出させてたような……
気の所為だよな。

しかしこつちもこつちでその手の冗談の通じないのが2人いるんだよね。

「……………」

「えと、音姉……由夢？」

音姫さんと由夢ちゃんがにっこりとしながらも瞳からはとんでもない程の怒気が感じられる。

「んじゃ、適当に読んでおいて」

「期待してるよ。義之君の迫真の艶技^{えんぎ}♪」

何やらえんぎという言葉に当てる字が違っていたのは気の所為だろうか。

いや、あの2人なのだから決して気の所為ではないだろう。

「で？」

「見せてごらん？ 弟君」

殺気を放っている2人に義之が返事をするまえに奪い取ってページを捲る。

「何やってんだか……」

「流石にアレは2人の冗談じゃろうに」

「まあ、何とかは盲目と言うだろう」

「だね」

僕達が呆れてる傍で2人は必死にページを捲って義之の出てくるシーンを見ていた。

「えっと」

「うくん」

数分もすると2人共ホツとして台本を閉じて義之に返す。

「うん、面白そうだね」

「そだね」

「ますます楽しみになってきたな」

「兄さんがあんな台詞をね……あはは」

「はあ……」

2人から本を返され、短く溜息をつきながら義之も台本をペラペラ捲り、校門へと足を運ぶのだった。

「ういーっす！」

そしてまた後ろからややテンションの高い声と共にこちらへ駆け寄る足音が聞こえた。

「あ、渉」

「おお！ 全員おはようさん！」

「オツス」

「おはよう、板橋君」

「おはようじゃ」

「おお！ ていうか、義之？ おくい！」

「……何だよ、こっちは今台本見るのに忙しいんだが？」

「台本？ ああ、人形劇のか。お前主役になったんだよな……羨ましい」

それは小恋ちゃんと一緒になれないからだろう。彼には悪いが、この組み合わせが妥当だと思う。

「テンション低いなあ。俺なんか今日、朝からすげーわくわくしてめっちゃ早起きしたって言うのに！」

「何だ？ 今日は何かあったっけか？」

雄二がダルそうに板橋君に問う。

思い返してみるけど、板橋君がテンション上げるようなイベントなんてなかった気がするけど。

「ああ、転校生だよ転校生。今日、うちの学校に転校生が2人来るって聞いているだろ？」

『いや、知らん』

その場男子全員で即答した。

「転校生ですか？ お姉ちゃん、知ってました？」

「ううん。そんな話は聞いてないけど……」

「おいおい、板橋。本当に転校生なんて来るのかよ？」

「何言ってるんだよ、お前ら非公式新聞読んでないのか？」

「読むわけねえだろ」

「マジで!? 明久達もか？」

「そもそもどんな新聞なのかも何処に貼られてるのかも知らないし」

「その転校生という話自体本当かどうかも疑わしいぞ」

「第一それだったら生徒会長であるあの人に何か連絡くらいは来るのではないかね？」

「学園長もそのような話はしとらんかったぞい」

「しかし、明久達といい……随分と転校生の多い時期だな。もしかしたら今度はお前らの女友達が転校なんてなったりしてな」

「恐ろしい事を言わないで（言うな）！」

「うわ、ハモった」

義之は冗談半分で言ったつもりだろうけど、僕達にしてみればそれほど恐ろしい状況は他にないだろう。

この平和がいつまでも続くとは思ってないけど、この学校での状況を知れば姫路さんや美波は絶対僕に御仕置きとして海に投げ捨てるくらい、躊躇いもないだろう。

「この2人がここまで震えるって、そんなに怖い娘達なの？」

「うむ……儂も人の事は言えんが、この2人は特に姫路達にロクな目に会わされとらんからの」

「ところで、その2人ってうちのクラスにでも来るの？」

「いや。2人共付属だけど、1人は2年、もう1人は1年だったさ」

話題を転校生の話に戻すと件の転校生は2人来るようだ。

それは僕もこの場全員も知らないよね。でも、何で渉はそこまでテンション上がるのか。

「なんでも2人共かなりの美少女らしいぞ」

ま、そうでもなければ渉が舞い上がるわけがないか。

「あのさ……その情報源はどっから来たんだ？」

義之がため息混じりに渉に問うた。

「非公式新聞部」

「他は？」

「ない」

「……………」

義之が呆れたように渉を見た。それもそうだろう。杉並君が率いる非公式新聞部。

結構な情報網を持つてるようだけど、適当な事も書いてあるらしく、それを聞いて僕もあまり読まないようにしてるんだよね。

となると、転校生の話自体本当かどうかも疑わしくなってきた。

「な、何だよその目は？」

「いや、別に……………」

「本当に転校生が来るのかよ？ ガセかも知れねえだろうが」

「その情報を出したのは杉並君だったかな？ ならガセだという可能性もあるのではないかね？」

「それとも、他にそういった情報を流した者がおるのかの？」

「いや…………ただ、その情報を持ってきたのが土屋って情報が載ってただけで」

「…………どうやら本物のようだな（ね）（じやの）…………」

「ええ!? お前らあっさり信じるのかよ!？」

義之があっさり疑いの意見を掌返しにした僕達に驚いた。

「いや、そういった情報を持ってきたのがムツツリーニならすぐく納得できちやうんだよね」

「特に美少女ってくだりがな」

「転校生が男じゃと言うのならその転校生という情報自体その非公式新聞には載らないじやろう」

「女性に関する情報を集めるのは彼の専売特許なのだからね」

「彼の事を知ってるだけに、信憑性高いんだよね」

ムツツリーニなら転校するのが女子だとわかれば即行動に移すだろう。

もしかしたら既にその転校生の素性も調べ上げてる可能性だつて有り得る。あいつの情報力なら既に風見学園の女子の個人情報を知り悉知したつて不思議じゃない。

「わかつたんならさっさと行こうぜ」

「行くつて何処にだよ?」

渉の言葉に義之が問う。

「何処つて、もちろん見学。職員室に決まってるじゃん」

「見学つて、お前な……」

「美少女かあ……」

「面白そうじゃねえか。行ってみようぜ」

「明久、坂本まで……」

「……俺も行こう」

「わあ!? ムツツリーニ、何時の間に?」

「気配なぞ、微塵も感じなんだぞ」

「相変わらず無駄にすごい才能だね」

「おっし。てなわけで、新たな出会いに向けてレッツゴー」

渉を先頭に、僕と雄二とムツツリーニがついていき、職員室へと向かっていった。

「明久……」

「儂を男とようやく認識してくれたのはいいのじやが、根の部分は変わらないのう」

「吉井君……」

後ろで何人が溜息をついていたけど、転校生の事の方が気になるので後にした。

「ありや、誰もいない」

職員室前に着いたところで板橋君が室内をキョロキョロと見回した。

「おっかしーな。俺の予想だと、職員室前は転校生を一目見ようと大勢の生徒でごった返しになってるはずなのに」

「……非公式新聞部も全員が見てるわけじゃないが、この殺風景な現状はおかしい」

「別に男が皆お前らと同じ思考してるわけじゃねえだろ」

「なんだかんだ言って、義之達も来たんだね」

「まあ、転校生が誰かは気になるしな」

「俺も義之と同意見じゃ」

後から来た義之や秀吉も転校生の事が気になるらしく、一緒に職員室まで来た。

「んなこたあねえだろ！ 男って言うのは美少女転校生が来るって聞けば職員室まで見に来る生き物なんだよ」

「……美少女をその目に収めんがために行動。それが男の在り方だ」

「さいですか」

「ま、実際は1人も来てねえがな」

「おつかしくな」

板橋君はそのまま職員室のドアの隙間から中を覗き込み続けた。

「それらしい奴はいるか？」

「いや、何の変哲もない職員室風景だな」

「……校内の網を探しても今のところ該当する者は登校していない」

「何時の間にかこっちでもカメラ仕掛けてやがったのかよ」

ムツツリーニお得意の隠しカメラを使ってもまだ転校生が登校してきたという形跡はないようだ。

流石にHRの前には来るんだろうけど、

「とりあえずここは教室に戻ろうぜ。その転校生が来るのか判断つかないし」

「……俺の情報にミスはない」

「さいでつか」

「俺はもうちよつとここに在るぜ」

「……俺も」

渉とムツツリーニはしばらくここから動く気はないらしい。

しかし、時間も時間だし……流石にこんな理由で遅刻というのも恥ずかしいという問題じゃない。

「仕方ない。僕達は一旦教室に戻ってるか」

「そうだな。転校生も気になるが、こんな所で遅刻はしたくねえしな」
「そうじゃの」

「じゃ、俺達は先に戻ってるぞ」

「遅刻はしないようにね」

そう言っ僕が先頭となって歩きだした瞬間だった。

「きゃっ!」

「え? うわっ!」

急に胸元に衝撃が来たと思うと、そのまま体勢を崩してしまい、背中から床へと倒れ込んでしまった。

「うごっ!」

そして視界が暗くなり、どうしたものかと手を動かすと、ふによん。

……………ふによん? 僕の掌に何やら柔らかい感触があった。

僕がどうか視界を確保しようとするか、掌にあるそれを押すとそれは手の動きに合わせて形を変えていった。

「うっ……………ふあ!」

やっと視界が元通りになったと同時に僕は目の前の現実には身体が固まった。

「……………」

目の前には金色の髪を下ろした美少女がいた。

一目見れば誰もが見とれてしまうだろう綺麗な容姿。ムツツリーニが懸命に情報を仕入れてきた理由が納得できるほどの美少女だった。

「……………」

「……………」

「……………で、あなたはいつまで私の胸を触ってらっしゃるおつもりなのかしら?」

「え? あ、ごめんなさい!」

僕は慌てて手を離し、どうにか起き上がろうとするも今僕の身体の上には美少女が乗ってるために身動きが取れない。

更に目の前にいる美少女は僕を睨んでいた。

「……あ、あの……こんなこと言っても許してもらえないのはわかってるんだけど、これは事故です。わざとじゃないので許してはもらえなくてもできればまずお話を聞いてもらえると——」

「こんのおおおお！ スケベ男おおおお！」

「べふあ!？」

僕の願いも通じず、怒声と共に一瞬のうちに彼女は右手を振りかぶり、風を切る音と共に僕の頬に痛みが走った。

しかも、彼女が上に乗つかって身動きの取れない状態だったから受身もできず、思いつきり頭を床に叩きつけられるオマケつきの結果になった。

「はあ、はあ、はあ……もう、最っ低！」

その怒声と共に少女は姿を消した。

「だ、大丈夫か？ 明久？」

「随分派手にやられたのう」

「うう……痛い。頬と頭蓋が2倍痛い……」

「おいおい、ラッキーだったな。吉井」

「女の胸を触った挙句、ビンタを喰らうとは随分と幸せものだな」

「……殺したいほど、妬ましい」

「だから事故だってば！ だからムツツリーニ、その手に持つてるスタンガンをしまっうんだ」

「どっから出したんだよ、そのスタンガン」

「しかし、随分と怒らせてしまったのう」

秀吉の言う通り、アレはちよつと謝ったくらいでは決して治まりそうにはないだろう。

それに僕は彼女のクラスさえまだ知らない。あの制服を見るからに、付属なのは間違いないだろうけど。

「……あの女、今日1年の方に転校する予定の女だ」

「へえ……あの女がな。確かに情報通り、美少女だな」

確かにムツツリーニの情報は決して偽りの部分がなかった。あんな状況でもつい見とれちゃうほどだったし。

「ちなみに名前はエリカ・ムラサキ」

「外見は如何にも外人なのにファミリーネームが何で日本人臭いんだよ」

「……それは情報に出てこなかった」

「まあ、妥当なところで父親の方が日本人か何かじやろう。それよりも時間じゃ。ここは戻った方がよからう」

「そうだな。とりあえず明久がああ娘に謝るにしてもまず時間を置いた方がいいだろう」

「……うん、そうだね」

「くそ、ラツキーな野郎だぜ」

「だから板橋君、さっきのは事故だからね」

「いまだに痛む頬と頭蓋を押しさえながら僕達は各教室へと戻るのだった。」

第十七話

昼休み……。

朝はエライ目に会った。転校生らしい美少女とぶつかり、事故とはいえ姉さんに聞かれれば死刑は免れない事をしてしまい、頬にピンタを受けた。

今度あの娘に会ったら謝っておかなきゃね。さて、今その話は置いといて僕達は食堂へと足を運んだ。

「なんつーか、大盛況だな。相変わらず」

「超人気だよ。この学園の食堂って」

「所詮、我々学生は経済ヒエラルキーの最下層に位置しているわけだからな。安い！ 早い！ 美味くない！ の三拍子揃った学食に人が集まるのは自然の流れだよ」

「切ない話だな」

「ていうか最後のひとつはあまりにも食堂の人に失礼だと思うよ」

いくら早く安いものでも味がよくなきゃ人はこないでしょ。

しかし、ごく稀に高いメニューや遅いメニューもあるし、天文学的確率で雄二が以前取ったような超美味なメニューだつて出る時もあるといえはある。

そんな人間の感情のように移ろいやすい、気まぐれな人間味あふれるこの食堂が人気な理由はそこにあるのかもしれない。

「あく、たまには職人技を遺憾なく発揮した薄切りのじゃなくて、ジューシーな肉が食いてー！」

「だったらバイトでもしたらどうだ？」

「そんでもって焼肉屋とか行つてさ」

「学生の本文は学問です」

「お前が言っても何の説得力もねえな」

「授業でも『地球の温暖化について』ってタイトルだったのに、君が述べたのはたこ焼き屋のことだけじゃん」

午前中の戯矢利尊先生から『地球と温暖化について』というレポー

トを課題に出され、渉は失礼ながら小学生にも劣るのではないかというほどのレポートだった。

先生からはC-という評価を出された。ついでと言ってはなんだが、杏ちゃんも杏ちゃんでもないレポートだった。

言ってる事は正論なんだけど、どこか脅迫じみたものだった。そのおかげか、クラスみんなはあの授業をきっかけにささやかなエコロジーを心がけるようになったとか。

「うっせ。それよか、お前ら今日は何にすんだ？」

「素うどん」

渉の質問に僕と義之が同時に答えた。

「うっわ。学食の中でも最もお買い得プライス商品かよ。わびしい奴らだなー」

「学園の学食が安いと言っても頻繁に使えばそりやお金だつて減るよ」

お弁当を作るのもアリかもしれないけど、最近は雄二達も住み着いてるわけだから弁当を作ろうとすればもちろんみんなの分も作らなければならなくなる。

義之や音姫さんも手伝えばできないことはないだろうけど、それでもかなり手間はかかるだろう。

おまけに食費だつて馬鹿にならない。特に雄二の食欲には驚かされる。

「で、そういうお前は何だ？」

「スープ ウイズ ウ・ダンヌ」

「何なの、ウ・ダンヌだつて？」

「めちゃくちゃ発音が変だつてことくらい、勉強してない俺でもわかるぞ」

巻き舌でよくわからない単語を発した。まあ、スープと素うどんだつてことはわかるけど。

「つうわけで、素うどんみつつ用意してくるから、お前らは席取つてくれ」

「了解」

「3人分の席かあ」

そんなに大勢座れるようなスペースがあるかどうか。これだけの
大盛況なわけだからね。

そんなで僕と義之は左右に分かれて席を探しに。板橋君はメ
ニューを取って行きにと役割分担して作業をはじめ。

短い昼休みなのだから、効率よく過ぎさないと時間が勿体無くなる
からね。

「んつと、どこか空いてるかな？」

キヨロキヨロと辺りを見回しながら人ごみを避けて空席を探し回
る。

本当に大盛況な事で。一人分の席はあるにはあるのだが、元々集団
活動する人間が多いのか、そこに座ろうとする人はあまり見当たらな
い。

どうにか3人分座れる席がないかな？

「……あ、ラツキー。一箇所見つけた」

ちようどいい所に4人分はあるスペースを見つけることができた。
僕は急いでそちらへと歩いていった。

「あら、明久さん？」

「ありや、由夢ちゃん」

「こんな所でお会いするなんて、奇遇ですね」

「そうだね。普段はこんな所で会うことなんてないから」

まさか由夢ちゃんこんな所で会うとは思わなかったよ。

「あつと、席の確保が先だった。相席いいかな？ 義之と渉も来るけ
ど」

「はい、どうぞ」

僕は由夢ちゃんの隣を確保してから義之を視線で探し、

「いたいた。義之、席確保したよー」

義之を呼んで数秒もするとやや駆け足でこちらへと駆け寄ってき
た。

「おお、マジで見つけるとはな——ってか、由夢の隣かよ」

「あら、私が隣では何か不満ですか？」

義之のつまらなそうな口調に由夢ちゃんが口調を刺々しくして言う。

「いや、そういうわけじゃねえが。とりあえず相席させてもらうぞ。後は渉がこっちに来るのを待って——うげっ!？」

義之が由夢ちゃんの隣に座ろうとする、正面——正確には由夢ちゃんの向かいに座っていた少女と目が合った。

「ちっ—」

隣から聞こえてくる舌打ちの音。隣を見ると、青いショートヘアに牛柄の帽子を被り、長く紅いマフラーを首に巻きつけた少女が座っていた。

その少女は義之の姿を認識すると顔中に嫌悪感が広がっていた。まるでかたきでも見るように。てか、よく見たら僕にも同様の視線を向けているような。僕この娘に何かしたっけ？

「あら？　もしかして、お二人はお知り合いでしたか？」

そういえば、義之もこの娘を見てまずったと言ったような反応をしていた。

「あ、いや、知り合ってわけじゃないけど、一度会った事があって。名前だってまだ知らないし」

「どうやら一度会ったみたいだが、名前までは知らないようだ。にしても何か妙な反応だな。」

「そうですか。えっと、こちらは天枷美夏さん。今日、私達のクラスに転入してきたの」

「どうやらムツツリーニが仕入れてきた転校生のうち2年の方に入ってきたのがこの娘のようだ。」

「……………」

「で、今天枷さんの隣にいる方が一学年上の3年生の吉井明久さん。そして、私の隣にいるのが同じく3年生の桜内義之。私の兄みたいなものかな」

「……………」

天枷さんは無言で無視を決め込んでいた。なんだか、彼女の纏っている空気がものすごく冷たい。

「あ、あははは……」

由夢ちゃんもどうしたらいいかわからず、乾いた笑みを浮かべていた。

それから義之に寄りかかって耳元で会話を始めた。

「(ちよつと兄さん、一体天枷さんに何したのよ?)」

「(い、いや……特に何も)」

「(じゃあ、何で天枷さん、あんなに不機嫌そうなのよ?)」

「(そ、その件に関しては何コメントとさせていたただきたい)」

「(じゃあ、原因知ってるってことじゃん。一体何したの?)」

「(……聞かないでくれ。頼むから)」

それから義之は何を聞いても口をつぐんだまま何も答えなかった。どうやらこれ以上は話す気はなさそうだ。

しかし、どうすればいいか。義之と天枷さんの間に何があったのかは知らないが、このままこの冷たい空気の中で食事しなきゃいけないのかな。

どうにか場を和ませる事はできないかな?

「明久がそのブサイク面を詫びて自殺すれば少しは改善されんじやね?」

「なるほど。それなら早速屋上に——つて、なるか馬鹿雄二!」

僕が真剣に考え事をしていたというのに、横からバカバカしい言葉を投げかけたのは雄二だった。

「よっ。どこか座れる場所がないかと探してちよつどいいところここが空いてたからな。それに、見慣れない奴もいるしな」

そう言つて雄二は天枷さんを一瞥した。天枷さんは雄二の視線を受けて不愉快そうに顔を歪めた。

まあ、こんなゴリラ顔に見られていい気分にならない気持ちはわかる。

「で、こいつは?」

「天枷美夏さん。ムツツリーニが言つてたもう一方の転入生だよ」

「ああ、なるほどな。……で? 何でこいつはこんなに不機嫌そうなんだよ?」

「それがわかればそもそもこんな気まずい状況にはならないと思うんだけど」

一体何故彼女はあんなにも不機嫌そうな顔をしているのだろうか？ 理由がわからないだけにどう対処すればいいかわからない。

「おおー 待たせたな！ ちゃんと席確保してきたか？」

僕のそんな悩みを他所に渉が素うどん3つを乗せたトレイを持って歩いてきた。

「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」
「……………」

ただ黙々と食事を続ける僕ら6人。この場には食器を鳴らす音しか聞こえない。

食事を始めてはや10分。それまで一言も会話はなかった。なんというか、気まずいことこの上ない。

いつもなら美少女相手に会話盛りだくさんの渉もどうにか場を盛り上げようと天枷さんにアタックを試みたが、ことごとく無視され、常時ハイテンションの彼もすつかり諦めて気落ちしている。

義之も気まずそうにただうどんを啜っている。由夢ちゃんはなんとかしてと言いたそうに義之を見ている。雄二はいつでもよさそうにただ食事を進めている。

駄目だ。とても居たたまれないというか、これ以上こんな冷たい空気の中にいたらどうになつちやいそうだ。

とりあえず、食事後でも何か一言くらい喋ればと僕は手の動きを早めて1秒でも早く食事を終わらせようとした。

それと同時に天枷さんが箸を置いた。

「うちそうさま」

礼儀正しく両手を合わせて一言。それから脇に置いてあった鞆を引き寄せて中からバナナを取り出した。

……ていうかバナナ？ 何故にバナナ？ 自前でバナナを持ってくるって。

「あの、天枷さんって……バナナ好きなの？」

ビシリッ！ と、空気に罅が入った音が聞こえたような気がした。

あれ？ なんか余計空気が重くなつた気がするんだけど？

「……貴様、今なんと言った？」

気の所為じゃなかった。確実に重くなっている。天枷さんの声にもものすごい怒気が籠っている。

あれ？ なんで彼女さつきよりも険悪な表情をしているの？

「え、えと……バナナ、好きじゃないの？」

「……貴様」

何で!? どうして彼女こんなに怒ってるの!? 僕何かマズイことでも言った!?

そんな頓敵な事を言ったつもりはないけど。

助けを求めようと視線を移すが、義之も由夢ちゃんも板橋君も視線を泳がせて我関せずな態度をとっているし、雄二に至っては面白そうに僕を眺めている。

駄目だ。この場に味方はいない。

「どこの誰がバナナなんぞを好き好んで食べようかあつ！」

バンッ！

天枷さんはテーブルを叩きつけて僕を睨みつけてきた。

ええええええ……。何で僕怒られてるの？ そしてそんな事いうならなんでこの場にバナナなんかを持ってきてるの？

「貴様は知らないようだから一度だけ言ってやる。美夏にはな、この世界で嫌いなものがふたつだけある。たったふたつだけな」

そう言っで一泊置いて僕と、義之に視線を移しながら、

「ひとつはもちろん貴様達人間。そしてもうひとつが……バナナだ」

右手に握っているバナナを恨めしそうに睨みつけながら言った。「できることならこの世界上からバナナなんてものを——」

——ピコン、ピコン、ピコン。

突然、彼女の腕時計からアラームのような電子音が鳴り響いた。

「ちいっ！ バナナミンがつっ！」

彼女は舌打ちするとバナナの皮を剥いてすごい勢いで齧り付く。

「「「「……………」」」」

一心不乱に。ただひたすら。不機嫌な顔をしながら。バナナを食べている。

「(えつと、雄二。これ一体何？ 何で嫌いとか言いながらバナナを食べてるの？ それにバナナミンって何？)」

「(知るか。どっかの電波な奴じゃねえのか？ 人間が嫌いって、自分人間じゃないとでも言いたいのかって話だ。それにバナナミンなんて単語、俺は聞いたこともねえ)」

雄二も彼女の取る行動には若干引いているようで口の端が時々ぴくりと動いていた。

「(おい、由夢。天枷ってどんな奴なんだ？)」

「(わ、私に聞かないでよ)」

「(だってお前クラスメイ——)」

——ピンポンパンポーン。

『えー、2年1組の天枷美夏さん、3年3組桜内義之君。至急保健室まで来てください』

天井に設置されたスピーカーから保健室の水越先生の声が聞こえてきた。

『繰り返します。2年1組の天枷美夏さん、3年3組桜内義之君、至急保健室まで来てください』

明らかに狙ったように放送を流して義之と天枷さんとはある事情で関係有りという事を公表していた。

「ふんっ！」

放送を聞いて天枷さんは不機嫌そうに、仕方ないように立ち上がって保健室へと向かっていった。

「おい、お前も呼ばれてるぞ」

「わかってるよ」

「また何かやらかしたんですか？」

由夢ちゃんがジト目で義之を睨んだ。

「大体、兄さんと天枷さんの間で一体何があつたんです？ 天枷さん、

明らかにおかしかったし」

「確かに。お前一体何やったんだ？」

「べ、別に何も無いよ」

「そういえば、全校集会の前に妙な痣作ってきた時あつたけど、それと何か関係あるの？」

「何だ？ 面白そうな情報持ってるな。どうなんだ？ 桜内」

「そういえば、杉並と戻ってきた時痣つくってたよな。土屋も杉並も妙にイキイキしていたし」

「じゃあ、俺は呼ばれてるからな」

義之は僕らから逃げるように保健室へと向かって去っていった。

うくん。やっぱりの態度、何かあつたんだね。

「で、今回は何をやらかしたわけ？」

「はっ」

その日の夜、俺達は芳乃家で鍋を食べていた。

それなりに大きい鍋ふたつ用意していつものメンバーで食卓を囲い、熱くなった野菜や肉を器に移して食べる。

そして夕食を食べながらクリパについて盛り上がっていたところに音姉が話題を変えてきた。

「お昼よお昼。水越先生に呼ばれてたよね？」

「あ、いや……別に音姉が心配するようなことはしてないよ」

別に音姉が思ったような事はしていない。事情はかなり複雑では

あるが。

「……………」

「……………」

音姉と由夢も疑わしそうな目で俺を見てる。こりや完全に信じてないな。

「そういえば放送で桜内の名前の他にもうひとりおったようじゃが、その者と何かあったのかの?」

「ああ、あの天枷って女か」

坂本の余計な一言に音姉が過敏に反応した。

「坂本君、その天枷さんって誰?」

「今日、私のクラスに転入してきた可愛い女の子」

何故か可愛いという部分を強調していた。おま、音姉にそういう事を言ったら。

「可愛い女の子……ね。へへ」

ほらみろ、音姉が不機嫌になったじゃねえか。

「なんか、2人共知り合いっぽかったよね」

「知り合い? 今日転校してきたのに? 不思議だなく?」

2人のプレッシャーが強くなって明久達は巻き込まれないように黙々と食事をすすめていた。この薄情者共が。

「で、なんで」

「天枷さんと一緒に」

「水越先生に呼び出されて」

「仕事を頼まれたわけ?」

「いや、あの、その……」

2人の息の合ったコンビネーションと強いプレッシャーに俺は完全に気圧されていた。

怖えよ。音姉だけでも相当のプレッシャーなのに、由夢も加わって相乗効果生んでやがるし。地獄だ。

「そ、その……彼女は帰国子女だから、面倒見て欲しいって頼まれて」「何で弟君に?」

「そ、そりや、ほら。俺、英語の成績いいからさ。英国紳士並に」

「Could you pass me the soy, please?」

「……………」

「はい、お醤油」

「ありがとう」

「……………」

これだから頭のいいやつって嫌いだ。こういうところで逃げ場所を崩してくんだから。

「ま、別にいいけどね。兄さんと天枷さんが内緒で何しているようが、妹の私には関係ないし」

こいつ、自分から言い出しやがった癖に勝手に勘違いして話を切りやがった。

まあ、このまま地獄の時間が伸びるよりはマシなだけどさ。

「でも、兄さんの妹だって事が恥ずかしくなるような真似だけは勘弁してね」

「いや、そもそもお前ら実の兄妹じゃねえだろ」

「あれだよ？ セクハラは犯罪だからね？」

「しないよー！」

「ただ信用がないんだ俺は。」

「義之、色々大変だね」

「そういうんなら、さっさと助けてほしかったぜ」

「はあ……………ダルい」

俺は部屋に戻ってすぐにベッドで横になった。

話が終えてからしばらくしてさくらさんが帰ってきてあれこれ好

き放題言われることになった。

嘘をつくときの癖とかあったのか、俺って。今度由夢あたりにバレないように練習しておくか。

「さて……」

ベッドにうつぶせになった状態で鞆から書類を取り出して目を通す。

昼休みに呼び出された時、水越先生から渡された天枷の取り扱い説明書だった。

『HM-A06型 Minatsu』。

拍子にはそんなタイトルがでかかど書かれていた。これと目次にある写真を見ればロボットなんだなって思うが、脳裏に浮かぶアイツの姿は人間と全く相違がない。

あのむつとした表情に睨みつける視線に怒鳴り声。笑った所は見えないが、あれがロボットだなんてとつても思えなかった。

ロボットなら市販で売られているμなどしか知らない。人間そっくりではあるが、あまり感情のない目に機械的な作業のこなしぶりからまだロボットだとわかる方だ。

それから俺はぺらぺらとページを捲って天枷のことを調べた。そこに書かれているのは天枷のスペックや注意事項など。

「えつと、身長が151cmで体重が36kg」

ふくん。ロボットの癖して軽いんだな。あの体の中身はどんな素材で出来てるんだろうな。

ここまで軽いんだから鉄とは違うんだろう。特に皮膚の部分。

それで、スリーサイズが上から72、50、75と。

「なんか、すごくいけないことをしている気分だ」

「確かに」

それで、動力がソーラーパワーとゼンマイ……。

「って、ゼンマイ!?!」

「ゼンマイってあのゼンマイか?」

「ブリキのおもちゃ?」

ソーラーパワーならまだわかるが、ゼンマイって。ま、そっちはあ

くまで緊急用の補助動力源だろう。いちいちゼンマイ自分で巻いて歩くアイツの姿が想像できない。

それから一番重要なのが、バナナミン。……バナナミンって何だ？ 確か、昼休みにも明久に対してそんな言葉口走ってた気がするが。

「えっと、人工頭脳を効率よく作動させるために必要なエネルギーであり、それはバナナから摂取することで安定することができる」

「ようは人間でいうブドウ糖みたいなものかな？」

んで、バナナミンを切らせると、脳制御機能に負荷がかかり、熱暴走を起す可能性がある。

そのために、8時間に一回はバナナを摂取する必要がある……か。

「なるほど。だから昼休み嫌いだとかなんだとか言いながらバナナを食べていたんだ」

「あのわけのわからないワードはそういうことだったわけか」

「うむ。儂はその場にいなかったから知らぬが、よもやこれが桜内の挙動不審の理由じゃったか」

「ん？」

待て。さつきから俺以外に誰かの声がちらちら聞こえてくる気がするんだが。

まさか……。俺は恐る恐る後ろを振り返った。

「よっ」

「ごめん」

「桜内の行動がえらい気になったの」

「のああああああ!？」

そこにいたのは明久に坂本、木下の3人だった。こいつら、今の全部見てたのか!?! 聞いてたのか!?!

「ま、ままままま、待てお前ら! これはだな!」

「これは？」

「こ、これは……50年くらい前のゲーム攻略本であって——」

「嘘ならもう少しまともな事を言え」

「明久でもそこまでバレバレの嘘はつかんじやろう」

「秀吉、僕でもって何? 僕だって嘘ならもう少しまともな嘘をつく

よ」

「どの口が言うか」

「……………」

駄目だ。完璧に退路を絶たれた。こいつらにはもう下手な嘘は通じねえ。

「ともかく義之。あの天枷さんはロボットで、君はそれがバレないように水越先生に頼まれた。そういう感じ？」

「……………」

もうこうなったら絞つちまうか。どつちみちここまで見られたらごまかしはきかねえ。俺は明久達に天枷の事情を説明した。

「うむ」

「なるほどな」

「嫌いなものを食べないと生きていけない身体。その身体は彼女の嫌いな人間によって作られたもの。そりゃあ人間嫌いにもなるよ」

「まあ、そういうわけだからさ。この事は……………」

「わかってる。誰にも言わないよ。こんな事知られたらまた同じ事の繰り返しになつちやうし」

「うむ。儂らも出来る限りの助力はするぞい」

「まあ、あの女が下手なこと言わなければいいが」

そんな感じで、明久達が味方になって共に天枷の秘密を守りぬくという誓いを立てた。

その後で水越先生に明久達にバレた事を報告して小一時間説教を喰らったのは余談だ。

第十八話

「……………にい……………ん！　ば……………な……………ちゃ……………！」
「ん……………」

耳元で何か聞こえる気がする。けど、肌寒い上に瞼がほとんど開けず、眠気は全身を回っているためにその正体を確かめる気にもなれなかった。

僕はそのまま夢の世界へ駆け出そうとした時だった。

「むく……………馬鹿なお兄ちゃん！　起きてくださいですう！」
「ふ……………」

な、何かお腹の上でもものすごい衝撃が……………。何か重たい一撃がずどんと落ちてきて僕は一瞬で目が覚めた。

一体何事かと自分の腹部へと視線を送らせた時だった。

「……………葉月ちゃん？」
「ですう！」

僕のお腹に衝撃を与え、今もなお僕のお腹の上でのしかかっているのは葉月ちゃんだった。

相変わらず天真爛漫という言葉をそっくり再現したような純粹無垢な笑顔と行動力だ。

「えつと、どうしたのかな？　今日は土曜日だけど」
「はいです！　ですから今日は馬鹿なお兄ちゃんといっぱいお遊びするです！」

どうやら僕と遊ぶために芳乃家のこの部屋にまで起こしに来たらしい。

思えば確かにこここのところ葉月ちゃんと食事をしたりお話する事は多くなっただけど、遊びに行くなんて事はなかったな。

たまには思いつきり遊びに行くのもいいかもしれない。

「うん、そうだね。今日くらいは思いつきり——」
僕が葉月ちゃんと遊びに行こうと頷こうとした時だった。

「明久っ！　起きてるか!?!」
ドアが勢いよく開き、そこから随分と慌てた様子の義之が入ってきて

た。

「義之？ どうしたの、そんなに慌てて？」

「うわわ、優しいお兄さんどうしたんですか？ 葉月びっくりです」

「あ、葉月ちゃんおはよう。じゃねえ、明久！ 今日何やるか知ってるか?!」

「今日って、特に予定は……」

言われてからアレ、と頭を捻って記憶の流れを遡る。

確か、昨日人形劇の練習した時、沢井さんが練習時間が足りなくな
るから休日も使って練習するとかなんとかって――

「あああああっ！」

すっかり忘れてた！ 今日は朝から集合して土曜をフルに使って
の練習だったじゃん！

「やっぱりお前も忘れてたか。ついさっき俺も小恋や杏に言われるま
で気づかなかった。お前のところには？」

言われて僕は慌てて自分の携帯の画面を見た。確かに一件だが
メールが届いていた。

そのメールの内容は、

『件名 早く来い』

いつまでグースカ寝ているの？ もし昼までに来なければ
……どうなるのかしらね？ いつそのことあんたが女としてしか生
きられないように体育祭の写真をばらまいてあることないことあん
な噂やこんな噂を……』

杏ちゃんからそんなメールが届いていた。

ていうか本格的にマズイ！ 体育祭の女装時の写真もそうだけど、
あれをひらひら見せびらかしながらあることないことを吹き込まれ
たら僕の社会的信用がこれまでもかというくらいにガタ落ちだ！

「とりあえず、まずいメールが来たっていうなら間に合わないまでも
急いで行った方がよくないか？」

「そうだね！ とりあえず急ごう！ すぐに着替えるから！」

僕は急いで制服に着替えて学校に向かおうとしていた。しかし、

「馬鹿なお兄ちゃん！ 葉月と遊びに行かないですか！」

そうだ。葉月ちゃんのこともあるんだ。しかし、僕は人形劇の練習があるからな。役はないけど。

「ごめん、葉月ちゃん。僕はこれから大事な用があるから」

「葉月と遊びに行く事よりもですか？」

「うぐつ……」

まいった。学校の行事だから大事だけど、だからと言って葉月ちゃんをこのまま放っておくのもどうかと思う。

僕と遊びに行くの、相当楽しみにしていたみたいだし。

でも、やはりクリパの人形劇は成功させたいから。だから、ここは年上として葉月ちゃんに事情を説明して今日のところは引いてもらおう。

「わー。すごいお家ができてるです」

「だはは！ 俺の腕にかかりや、こんなくらい楽勝だぜ！」

「へー、ピアスのお兄ちゃんすごいです」

「で、何か言い訳でもあるのかしら？」

「申し訳ありませんでした」

僕は杏ちゃんの眼下で土下座真っ最中だった。

あの後、葉月ちゃんに事情を説明してみたものの、中々引いてもらえず、結果僕が折れる結果になってしまい、学校に連れてきてしまった。男とは、無力だ。

「この忙しい時にあんたって奴は……」

「いや、本当にすみませんでした」

沢井さんにまで怒られる始末だった。しかし、みんなそこまで怒っている様子はない。

というか、みんな小さな女の子が来たことで空気が和やかになってるというか。やはり休日に学校に来たのがストレスだったのか、葉月ちゃんがいいマスコットになったように。

「ていうか、何であんな小さな女の子連れてきちゃったの？」

背後から杏ちゃんがいつもどおりの無表情で問うてきた。いや、なんとなくだけど……怒りのマークが額に浮かんでるような気がする。結構怒ってるようだ。

「いや、なんというか……すっかり今日の劇の練習のことを忘れていた時に葉月ちゃんが僕の部屋に来て——」

「遊びに行くとか約束しておいた手前断りきれずに連れてきたってわけ？」

「……はい」

「……ヘタレ、グズ、バカ」

「ぐはっ！」

無表情での罵倒の三連打。かなり精神的にダメージを受けた。

やめて……僕のライフはとづくにゼロなんだよ……。

「ま、来ちゃったものはしょうがないか。連れてきちゃったからには責任を持ってあの子を見ておきなさい」

「はい。肝に銘じておきます」

どうにか葉月ちゃんを置く許可はもらえたようなのでまずは一安心だ。

「まあ、幸いというのか、あんたは照明の担当だけだからあの子を見る時間は腐るほどあるでしょうね」

まあ、秀吉とは違って僕は演劇なんてできるほどの技量はないのだからこの配役が妥当か。

他にはヒロインであるサンタ女の子のお父さんにお母さん、ヒロインに迫ってくるお金持ちの貴族。村人AとB、サンタのボス——サンタ女の子のおじいさんらしい——、後はナレーションに照明、音響、大道具に美術担当。色々あった。

秀吉だったら、ひとり人形劇くらい楽勝にこなせるんじゃないだろうか。だって色んな人の声色を普段から使い分けているんだから。

「で、暇ついでにちよっとお使いを頼まれてくれないかしら？」

「お使いいっすか？」

杏ちゃんは懐から封筒を取り出して僕に差し出した。

「……これは？」

「今回の劇の計画書と許可書。まだ生徒会に申請してなかったから」
「そう言えばそもそもこの劇が決まったのだから本當にちよつと前
のことだったのだ。生徒会に申請書出す暇などなかっただろう。」

「ていうわけで、頼むわね」

「うん、了解」

僕は一言いって教室を抜け出し、生徒会室へと足を運んだのだつ
た。

「さて、と」

杏ちゃんのお使いで生徒会室まで赴いた。僕は生徒会室の扉の前
でひと呼吸してノックをする。

『はい』

コンコン、とノックの音がしてから1秒もたたずに返事がかえつて
きた。

それから扉を開け、中へと入っていった。

「あ、吉井じゃないの。珍しいわね」

中に入るとちよつと生徒会の仕事をしていたのか、音姫さんと高坂
さんが机に向かって作業の真つ最中だった。

「どうしたの？」

「ああ、これ。うちのクラスの出し物が決まったので」

「ああ、そういえばまだだったね。弟君のクラスの出し物」

「で、何か企んだりはしてないわよね？」

「してませんよ。ただの人形劇なんですから」

「人形劇？」

「はい」

高坂さんに言って手に持っていた封筒を音姫さんに渡した。

すぐに封筒から紙を出して高坂さんも横からちらちらと文面を見
ていた。

「ふくん……人形劇ね。まあ、見たところ普通ね。でも、杉並がいるんじゃないねえ」

「確かに……否定できませんね」

杉並君なら確かに劇であろうなんであろう抜け出して何をしでかすかわかったもんじやない。

体育祭の時やそれより以前にも多大な前科を持っているように生徒会も教育者達も杉並君を警戒している。

更に今回はムツツリー二も非公式新聞部に加盟したために今回のクリパで何をしでかすか全く予想がつかない。

「ま、それに関しては出し物を見ればわかるわね。ちようどここらでキリにしてそれぞれのクラスの出し物見ていくところだったから」

「クリパが近いからどこも休日を使って出し物の準備をする生徒が多いからね」

「どうやらこんな時にゆっくり休日を過ごそうとしたのは僕と義之と雄二だけだったようだ。」

雄二は当たり前のように家で寝てるかクリスマスシーズンで賑わっている商店街にでもいるのだろうかことは予想できる。

「こういうった学園での行事にはとことん無関心な奴だから。」

「ていうわけで、早速行きましょう」

「そう言つて高坂さんが腰を上げた時だった。」

「あ、ちよつと待ってー」

扉が開くと共に元気な少女の声が聞こえた。

「あ、学園長。おはようございます」

「はろはろー、まゆきちちゃん、明久君」

入ってきたのはさくらさんだった。相変わらず元気いっばいで僕らの癒しの源である。

「はあ、ちようどいいところだったよ。ちよつとまゆきちちゃんにお願いしたいことがあつてね」

「あたしに……ですか?」

「うん」

さくらさんが高坂さんをお願い事とはこりや珍しい。

「まゆきちゃんも知ってると思うけど、昨日うちの学校に転校生が来たの。でね、その子を生徒会の役員として働かせてほしいんだ」

へえ〜……転校早々生徒会に入りたい生徒なんてこれは珍しい。

「研修みたくないな感じでね。で、その面倒をまゆきちゃんに見てもらいたくないと思うてるんだけど」

「それは、別に構いませんけど」

「本当!? よかった〜！ じゃあ、早速自己紹介をしないとね。ほら、エリカちゃん」

「はい！」

さくらさんに呼ばれて凜とした声が帰ってくると生徒会室にひとりの少女が入ってきた。

綺麗な金髪、猫のようなつり目がちの青い瞳。ちよつと近寄りがたい雰囲気を持っているが貴はかな佇まいがそれを軽減しており、それ以上にその容姿が整った――

「すいませんしたあああああつ！」

そう。つい先日僕が衝突して胸を触ってしまった例の転校生のひとりだった。

その姿を見た瞬間、僕は条件反射で土下座をしていた。

「あつ！ あなたは！」

「あれ？ 何なに？ もしかして、もう2人は知り合いだったの？」

「えつと……その……」

「こんなスケベ男の事なんて、私は何も知りません」

そう言つて転校生の少女が顔を背けた。とほほ……スケベ男ですか。まあ、あの時の事を思い返せば否定のしようがありません。

「……あはは」

「……………」

「……………」

さくらさんや音姫さん、高坂さんが探るような視線を僕に向けてきた。

ていうか、転校生という部分で気がつくべきだった。ムツツリーニの情報で転校生のことはもう知っていたはずなのに。

いや、気づいたところで僕には何もできるまい。だって初日の出会いが衝撃的すぎたんだもん。

「えっと……それじゃあ、自己紹介しようか」

さくらさんが場の流れを変えようと自己紹介を始めさせる。転校生の少女はさくらさんに促され、前に出て自己紹介を始める。

「はい。今回、特別留学生として風見学園にお世話になることになりましたエリカ・ムラサキです。よろしくお願ひしますわ」

そして転校生、ムラサキさんは優雅にお辞儀をした。まるでよくできた貴族の令嬢だ。

「ちなみに、エリカちゃんは正真正銘のお姫様だからね。失礼のないように」

「……………は？」

「へ？ お姫様？」

「はい。東ヨーロッパの、とある王国の第一王女となっておりますが、ここでは私はただの1年生なので先輩の方が目上にあたります。私の身分については気になさらず、普通に後輩として接していただくと助かります」

「そう？ よかった。あたしもかたっ苦しいの苦手だから。あたしは高坂まゆき。本校2年3組で、一応生徒会の副会長ね。よろしく」

「エリカで結構ですわ、高坂先輩」

「あ、私は朝倉音姫。生徒会の会長です」

「はい。よろしくお願ひしますわ、朝倉先輩」

「……………」

えっと、僕なんだか蚊帳の外っていうか……すごい空気なんでしょう。

「そんで、こっちは吉井明久で付属の——」

「ふんっ！」

「……………」

僕の紹介に入った途端、ムラサキさんは不機嫌そうに顔を背けた。相当根に持ってるようだった。

「そんな男のことなんかに興味はありません！」

びしりと一言。まいった。これは想像以上に尾を引くかも……。

「明久君、ムラサキさんに何をしたの？」

音姫さんの質問に言葉を詰まらせる。まいった。これはどう言っただものか。

何しろ彼女が僕に怒りの念を抱いている理由が転校初日にぶつかって胸を触つちやいましたなんて言ったら、音姫さんがどれだけ怒るか。

この人の怒りは体罰的な意味はないけど、それ以上に精神的に来るものがある。本気で死ぬよりもつらい地獄を長時間味わうことになる。

しかし、このまま彼女の事を放っておくわけにもいかないだろう。僕の話なんて微塵も聞くんもりはなさそうだけど、それでも音姫さん達がいればなんとかなるかもしれない。

なのでここは正直に言ったほうがいいだろう。説教なんていくらでも聞いてやる。

「あの……実は彼女とは廊下でいやらしいことをぶるうああ!？」

「あなたは、何を言ってますの?」

事情を説明しようとしたところで僕の顔面に重いものがぶつかった。

どうやらムラサキさんが僕に向けて何かを投げかけてきたようだ。痛い……何故こうなった?

「明久君、それじゃあエリカちゃんも廊下で(検閲削除)をしてるって取られちゃうよ?」

「ぶっ!？」

マズった! そんな風に取りられるような一言だったのか今のは!

ていうか、さくらさん! あなたの外見でそんな言葉を使うのはどうかと思えます!

「ち、ちちち、違います! えっとですね! ムラサキさんが転校してきた時、だったかな? その時——」

それから数分間の事情説明をして3人はこの発端を理解して、

「吉井……」

「明久君。悪気はなんだろうけど……」

「エツチなのは駄目だからね」

「はい」

呆れ、苦笑い、怒りと三者三様の反応を前に僕は正座真っ只中だった。

そりゃあ、いくらわざとではないし事故だとはいえ、僕のやったことが許されることだとは微塵も思っちゃいない。

「……っ！ ねえねえ、音姫」

高坂さんが突然何かを閃いて音姫さんと何か相談していた。数分もすると音姫さんも合点とったように微笑み返した。

そして高坂さんは僕に歩み寄ってきた。

「吉井、ちよつといいかしら？」

「はい」

「単刀直入に言うけど。吉井、あんた生徒会の仕事、手伝ってみない？」

「……………」

はて、この人は今なんとおっしゃったのだろうか？

「その表情、あたしが何を言ったか理解してないわね。いわゆるヘツドハンティングってやつ？ 吉井の力を生徒会にかしてほしいの」

「へ？」

「は…？」

高坂さんの言葉に僕だけでなくムラサキさんまでもが間抜けな声を出した。

「ちよ、高坂先輩!? 何故こんな男を!?!」

予想外な事態に僕よりもムラサキさんの方が高坂さんの言ってる事が理解できないのか、声を荒げていた。

確かに……この流れでなんでそんなことを言い出すのか。

「なんでって言われても、基本的にあたしは認めてるのよ。弟君を筆頭に杉並、板橋、雪村や花咲、吉井のいる付属3年3組の連中の能力の高さを。でも、だからこそ厄介なのよ。その能力の使い方を徹底的に間違ってるし」

義之を筆頭につていうのがよくわからないけど、杉並君に関してはかなり同感だ。

ていうか、なにげに僕の事もカウントしておりませんでした？

「まあ、何が言いたいかっていうと、正直手が回らないのよね。今の生徒会のメンバーじゃ。数はそこそこいるけど、総合能力じゃ杉並達には敵わないから。だからまず吉井を手懐けようよね」

「それは何故？」
「そりゃあ一番落としやすいからに決まってるでしょ。あんたバカだし」

「それを聞いて入ると思いますかあなたは」

今の一言で入るような奴がいればその人こそ相当のバカか有興人だけだ。

「まあ、それと同時にあんたも結構なお人好しだしね」

「はあ？」

「知ってると思うけど、通常業務だけでも音姫にかかっている負担は相当大きいでしょ？」

僕にしか聞こえない声で高坂さんは言った。確かに、クリパが近づくとつれ、音姫さんを尋ねてくる人間の数は計り知れない。

その上生徒会の仕事までやっているのだから負担は相当のはずだ。

「更にクリパでは色々問題が起きやすいからね」

確かに。体育祭で実感したけど、杉並君の起こす騒ぎは僕らといい勝負なのかもしれない。

その上今回はムッツリーニがいるからあのコンビが何をしでかすのか全く予想がつかない。

「更に向こうにはなんだっけ……土屋だったかしら？ あの男も杉並と同じで秘密裏に事を進めるのを得意としている奴がアイツのところにいるんだってね。で、そいつがあんたを利用しようとするかもしれないの。あんた、ちよつとしたことで騙されそうだし」

それはない……と言い切れないのが痛い。実際雄二の口車に乗ったことでもかなりひどい目にあつたことがあるし。

「で、気がつけばあんたが知らぬ間に計画の中心に仕立てられてる可

能性も否定できないの。弟君やあんたみたいな人間の影響力って、バカにならないものだからね。本人に自覚あるなしに関わらず」

はて、僕がいたところでそんな影響があるとは思えないけどなあ。「んで、生徒会としてはその可能性がある限りあんた達のマークを外すわけにはいかないのよねえ。ランクもかなり高いからそれなりの人員の割り当てが必要だし」

「はあ……」

「だから、人員を当てるくらいならあんたをこっちに取り込んじゃった方が安心でしょ？」

言いたい事はなんとなくわかったんだけど、

「なんで僕を生徒会に？」

「まあ、あんたが本来こっち側の人間だから今のうちに色々教えて学園のために頑張ってほしいってのもあるけど……ま、半分はあんたとムラサキの事ね」

僕とムラサキさんを交互に見て高坂さんは小声で言った。

「このままちぐはぐなままなのはあんたとしても避けたいだろうし、あやし達も見過ごせないんだよね。学園の生徒には楽しい時間過ごしてほしいから」

確かに、このまま彼女と険悪なムードで居続けるのは少々というか、かなり辛い。生徒会に入れば彼女と話す機会は増えるかもしれないけど。

「ですが高坂先輩、こんな男、いても役に立つとは思えません」

彼女がそれを許すとはどうしても思えない。というか酷い言われようだ。まあ、実際生徒会の仕事なんてわからないからこんな迂腐な僕が役に立てそうにないのは事実だけど。

「そうはいうけどエリカちゃん、明久君だっつてすごいんだよ。杉並君の罨なんて目じやないくらい頑丈な人だし、きっと私達の助けになつてくれるから」

音姫さんが邪気のない顔でそんな照れくさい事を言った。いや、確かに体育祭の時の罨はどうにか切り抜けられたけど、向こうがそのレベルに留まってくれるか。

おまけにムツツリー二もいるから今後どんなえげつない罫を仕掛けるか。

「まあ、仲良くやれとまでは言わないけどさ、少しは協力的になつてくれると助かるかな。吉井の人間としての成りは見ればすぐにわかるだろうから」

「……その男の態度次第ですわ」

ムラサキさんは納得できないが先輩の言葉ならと渋々従った。

「で？ 吉井はどうなの？ 生徒会に入ってくれないかしら？」

最後に本題に入った。さて、生徒会に入るや否や。

確かにムラサキさんとは仲良くとまではいかないまでもどうにか怒りを沈められればと思う。

それに音姫さんの負担だつてこれを機会に少しは減らせればいいし、杉並君の行動も正直見過ごせないし……うん。

「わかりました。入ります。生徒会に」

「ありや、手伝うか」

自分から言ったことなのに高坂さんが一番驚いてるよ。

「いや、まさかこんなすぐに快諾してくれるとは思わなかったから……まあ、入ってくれるなら助かるけどね」

「うん。期待してるよ、明久君」

「これ以後は弟君が入ればなく……と思う音姫でしたと」

「ちよ、まゆきく。誰もそんなこと言ってません」

「でも、顔にはつきり出てたわよ。弟君も入ったらなくつて」

「あう……」

「あはは♪ 可愛いな、音姫ちゃん」

義之か……。まあ、彼についても音姫さん達が近いうちに声をかけるだろう。

そして入つたらきつと……というか、絶対に生徒会みんな、特に音姫さんが大喜びだろう。

既に生徒会メンバーに入った義之に音姫さんが抱きついて長時間行動を共にして、なんてシチュエーションが頭に浮かんでいた。

「ま、そんなわけで頼むわ、吉井」

「わ、わかりました。頑張ります」

これで彼女とも少しは良好な関係になれたらいいけど、

「あの、どうかよろし——」

「ふんっ！」

「……………」

……………その日はかなり遠いのかも知れない。

第十九話

「く……ふあ……」

部屋の窓の隙間から溢れる冬の朝日が暉々と僕の瞼の上へ注がれ、目が覚めた。

外を覗けば太陽が炫耀としていた。うん、いい朝だなあ。とは言っても冬だから寒いけどね。

自分の傍に置いてある時計を見てみると時刻は8時ちよつと過ぎたところ。休日にしては早いけど、目が覚めたのだから起きるか。

せつかくの日曜日なのだから暇つぶしにどこかに出かけようかな？ と、その前に朝食でも作ろうかな？

僕はベッドから下りて服を着替え、一階へとおりた。

そして居間に入るとちよつと香ばしい匂いが漂い、目の前では由夢ちゃんがコタツに入って朝ドラを見ていた。

「あ、明久さん。おはようございます」

「おはよう。朝早いね、由夢ちゃん。こんな早くからどこかいくの？」

「ああ、今日はお姉ちゃんと買い物に行くので」
なるほど。それでいつもならこつちに来る時ジャージなのが、今回は私服なのね。

「あ、明久君。おはよう」

「おはようございます」

台所から香ばしいベーコンエッグの匂いを漂わせながら音姫さんが入ってきた。

「はい、どうぞ」

「いただきますー！」

早速僕は目の前に出されたベーコンエッグと焼きあがったばかりのトーストを食べ始めた。

「それで、明久君は今日どこか出かける？」

「僕ですか？ うーん……」

特に予定と言えるようなことはないけど、暇ではあるな。

葉月ちゃんは今日友達と遊ぶ約束をしてたらしいので昨日のお詫
びは来週に持ち越しだし、久保君は朝早くから図書館へ出かけたみた
いだし、秀吉は日課のランニングをしてからどこかで演劇の参考にな
るものがないか歩き回ってる。

最後に雄二だが、あいつは多分家でこのまま寝るだけだろう。義之
は……多分目の前の2人が買物に連れて行くだろう。

だとすると僕ひとりがフリーということになるか。同伴もいか
もしれないけど、家族の時間の邪魔しちや悪いから。

うん、僕はひとりで街をうろうろしよう。

というわけでのんびり商店街を歩き回っていた。

音姫さんと由夢ちゃんは義之が起きてから案の定、誘ったのをやは
り義之は渋っていた。

邪魔者の僕はさっさと家を出て行った。去り際に義之の助けを求
める声が聞こえた気がするけど、聞こえなかったことにした。

やはり家族サービスというものは大事なのだから。頑張りなよ、義
之。

さて、ひとりでうろうろしているが、やはりすることがないのでど
うしたものかわからない。

辺りはクリスマスが近いからかなり賑わっている。周りの店はツ
リーやイルミネーションがいくつも飾られてすっかりクリスマス気
分だ。

休みの日だからかなり人が混んでいるし。ん？ その人ごみの中
に1人だけ周囲の倍は存在感を醸し出しているであろう人がいた。

「……………」

太陽に反射して輝いている金髪に、整った面持ちと高貴な貴族のよ
うな立ち振る舞いをしている人物は紛れもなくムラサキさんだった。

いや、貴族のようなというか普通に貴族なんだけどね。しかもただの貴族じゃなく、王族のお姫様だつて言うんだから。

そんな所で育ったからなのか、その存在感が強くて周囲よりよっぽど目立つのでつい注目してしまう。

「……困りましたわ」

どうしたのだろうか。いらに窮状な雰囲気だった。

よくよく見ると、ムラサキさんの正面に初老の婦人が同じように困り顔でムラサキさんを見つめていた。

「わかりませんか？」

「申し訳ありませんけど……私もまだここには慣れていなく」

どうやら道でも聞かれているのだろう。婦人も持っている荷物に土産用のものもあることからこの島の住人じゃないのだろう。

運がなかったなあ。彼女もまた初音島に越してきたばかりなのだからどこに何があるのかなど、まだ把握できてないだろう。

僕が案内しようかと思つて出てこようとしたが、ムラサキさんが周囲を見てどこかに視線を向けて頷いたのを見て足を止めた。

「仕方ないですわね……少々お待ちください」

そう一言言い残しておく、ムラサキさんは婦人を置いて近くにあったコンビニへと入つていった。

目を凝らしてみると、ムラサキさんが店員さんに声をかけて何かを話していた。恐らく婦人に聞かれた場所への道筋を尋ねてるのだろう。

数分もするとムラサキさんはコンビニから出てきて婦人のもとへと戻つていった。

「よろしいでしょうか？」

そしてムラサキさんは何度も丁寧に繰り返して説明をしたのだが、婦人の表情を見ると理解しきれない部分があるようだ。

「えっと……おわかりになりました？」

「え……ええと……はい、ありがとうございます」

ムラサキさんに一揖してから婦人は歩き出すのだが、

「ちよっ!? そっちではありませんわよ!」

婦人の向かった先が見事に反対だったらしく、ムラサキさんが慌てて呼び止めた。

「仕方ありませんわね……ついていらして。私が案内してさしあげますわ」

そのまま婦人の手を取ってムラサキさんはゆつくりと婦人のペーすに合わせて歩き出した。

すごく親切な人なんだなあ。本国じゃお姫様の人があそこまで人に尽くすなんて。

王族自体が庶民の味方なのか、ムラサキさん自身の優しさなのか。きつと本当にいいお姫様なんだろうな。

そんなことをぼんやりと考えながら今も優しく婦人に話しかけるムラサキさんを目で追っていた。

そしてふと気がつく。ムラサキさんと婦人の後ろからゆつくりと後をつけてくる妙な男がいた。

安物のジャケツトに野球帽子、顔の真ん中ほどまで覆ったマフラーとサングラス。なんというか、怪しすぎる。

明らかにこれから犯罪をおかしていきますと言ったような格好だった。ていうか、ここまできてよく通報されなかったな、あの格好で。

そんなアホらしい事を考えた時にはその男は走り出していた。危ない、と言おうとしたが、遅かった。その男は、

「ぎゃつ!？」

怪しい男はムラサキさんと老婦人を突き飛ばすようにぶつかり、通り過ぎた時には婦人が手に持っていたバッグを奪っていた。

あれは明らかにひったくりの現行犯だ。追いかけるかと足腰に力を入れた時だった。

「お待ちなさいー!」

誰もが突然のひったくりの現行犯に啞然とする中、僕よりも早く状況を理解したのか、ムラサキさんは短く叫んで猛然と駆け出した。

その華奢な体つきからは全く想像ができない、短距離選手が韋駄天のどとく走る様を見せてあつという間にひったくり犯との距離を縮

めた。

「っ!? このっ!」

ひったくり犯がムラサキさんを見て、女と見て取ったら乱暴に突き飛ばそうと手を伸ばしてきた。だがそれも、

「甘いですわ!」

ムラサキさんはその手を逆に掴み、優雅な動きで男を宙に浮かせて思いつきり引つ張り、投げ飛ばした。

ひったくり犯はそのまま数秒宙を舞って地面に叩きつけられた。

「ぐっ!」

どすん、と低く鈍い音と共にひったくり犯が苦しげな呻き声を漏らした。

「く、くそっ……!」

「ご婦人のバッグを奪うとは! あなたそれでも男ですか!」

逃げようとするひったくり犯の前に立ちふさがったムラサキさんが鋭く叱咤した。

「弱い者を虐げ、あなたは何とも思わないのですか? 嘆かわしい。恥を知りなさい!」

商店街に響き渡らんほどの叫騒で啖呵を切るムラサキさんをひったくり犯は忌々しげに顔を歪め、再びムラサキさんへ襲いかかってきた。

「ふんっ……往生際が悪くてよ!」

だが、それも無駄だった。再びひったくり犯は彼女に軽々と投げ飛ばされる。

ムラサキさんの体捌きは姉さんや美波や霧島さんといい勝負をするのかもしれない。しかし、3人の動きとも似てない。

彼女の国のものか、王族ならではの武術を習っていたのだろうか。流石に2度も投げ飛ばされて観念したのか、ひったくり犯は踵を返して逃げ出そうとしたのだが、

「逃しません!」

ムラサキさんはそれを見逃さず、瞬く間にひったくり犯に詰め寄り、その腕を取って3度目の華麗な投げ飛ばしを喰らわせた。

流石に限界だったのか、ひったくり犯はその場で動くことはなかった。

「ふんっ……」

見下したような視線を男に向けてからスカートを払い、先程の優雅な立ち振る舞いに戻った。

いや、さつきも十分華麗だったけど、ひったくり犯をやっつける時のムラサキさんはなんというか、すごいとしか言い様だなかった。

手際が鮮やか過ぎて見入ってしまい、助けに行こうという考えも何処かに行ってしまった。

「すごい……」

僕が呟いてから周囲からもすごい数の拍手が彼女に向けて送られていた。

「え？」

拍手の音に気づいてムラサキさんは周囲を見回した。

「え？ あ、あのっ!？」

周囲の拍手が自分に送られていることを知ると一瞬うろたえたムラサキさんだったが、普段から王族としてこういう賛美を受けることに慣れていたのか優雅にお辞儀をしてひったくり犯の盗ったバッグを抱えて婦人に渡した。

なんというか、本当にすごかった。さつきの体捌きといい、啖呵を切ったあの度胸といい、王族が故か護身術も必要なのだろう。

あれ？ そう考えると、僕がビンタで喰らったのは板橋君と言うとおり、ラッキーってことにならない？

美波や姉さんの暴力で慣れているとはいえ、ムラサキさんのアレを喰らって無事でいられる自信がない。うん、本当によかったかも。

そんな事を考えていると、ふと僕の視線は別のところに向いた。

先程投げられたひったくり犯がブルブルと体を震わせながら起き上がるのが見えた。周囲のみんなはムラサキさんに完全に視線がいつて気づいてないみたいだ。

そしてひったくり犯が起き上がると同時に懐から何かを取り出した。そして、それを弄ると右手に強く握り、ひったくり犯の手にある

ものが太陽の光に反射して煌く。

それを見て反射的に、

「ムラサキさん！ 危ないっ！」

大声を上げて、それに饗応するようにムラサキさんのもとへ駆け出しました。

今日は初音島を歩き回って楽しむはずでした。

こちらにはまだ越してきたばかりですから何処からどこまで何があるのかは今のところ学校の周囲何キロか程度にしか把握できていない。

ですからこの休日を使って初音島の半分くらいは見て回ろうと散歩を楽しんでいましたが、初老のご婦人が目的地への道筋がわからなく、困っているのを見かけました。

そしてご婦人は私に歩み寄ってその道を尋ねてきました。あいにく、私もまだこちらに越して間もないのでその場所への道筋がわからなかった。

どうにか近くの小さな店の店員さんに道を尋ね、道筋を聞いてそれをご婦人に説明したのですが、理解ができないのか、全く反対側へと向かおうとした時は慌てました。

あまりに見ていられなくなり、私が案内を務めてご婦人を案内しようとした時だった。あろうことか、私よりも傍にいたご婦人のバッグを略奪する不届き者が出ました。

一瞬驚きましたが、私はどうにか不届き者を成敗することに成功してご婦人のバッグを取り返す事に成功しました。

その際、周囲のみなさんからの拍手を受けて少しばかり恥ずかしかったのですが、嬉しいものでした。

私も自国では同じようにこのような喝采を受けましたが、小さな島で受けるのも故郷にいる時と同じくらい嬉しく感じます。

そんな風に故郷を思い出した時だった。

「ムラサキさん！ 危ないっ！」

私の後ろからそんな声が聞こえたと同時に。何か刺さるような、不気味な鈍い音が聞こえたのと私を押し出す衝撃が襲ってきた。

何事かと後ろを向いた時、私は驚きを通り越してその場に固まってしまった。

「あ、ムラサキさん……大丈夫？」

私の背後に来たのは吉井だった。

何故彼がここにいるのか、何故私の後ろに来たのか、そんな事は疑問に沸くことすらなかった。

そんなことよりも私の目がいくのは彼の左腕だった。私を庇うように右手は私の方に向けられていた。恐らく、私を突き飛ばしたのは吉井なんだろう。

しかし、彼の左腕には……私が何度も投げ飛ばした不届き者の手にある何かが突き刺さっていた。

その吉井の腕に突き刺さっているのがナイフだとわかったのは彼の左腕から流れる血を見てからだだった。

何も考えられなかった。私はただ今日は初音島を見て回ろうと思った時にご婦人が困っていたのを見過ごせず、案内を務めた。

そしてご婦人のバッグを不届き者が取り上げたのを取り戻して安心して油断してしまった。

ただの一踏で気に入らないとはいえ、ひとりの人間を危険にさらしてしまった。その事実だけが私の頭の中で渦巻いていた。

「それでさあ……」

私が彼を巻き込んで自己嫌悪に陥っている中、ふいに彼の声が耳にうるさく聞こえてきた。

その声質は今までの緊張感とは程遠いと思っていた彼のものとは違っていた。

「今、お前……彼女に何をしようとしたの？」

不届き者の服を掴んでドスの効いた声を吐き出す。

「こいつで、ムラサキさんに……何しようとしてたんだ、ごらあ!？」

叫びながら不届き者の腹部に強力な蹴りを一発入れて不届き者は数メートルも突き飛ばされた。

「ぐっ……テメ……」

不届き者は吉井を恨めしそうに見つめてからたまたま足元に転がっていたクリスマスフェアというタイトルが描かれていた旗を拾い、そこから旗を抜き取って棒を構えた。

そして、不届き者はすぐさまそれを吉井に向けて振り回してきた。いけない、と思った時は遅かった。

吉井はそれを避けもせず頭に棒の直撃を受けた。

「……………」

「な……………」

その場に突っ立ったまま不届き者の攻撃を受けた彼に言葉を失ってしまった。

何故避ける素振りも見せなかったのか。あんなの、素人だって回避しようと思えばできたはずだった。

にも関わらず、吉井はただその場に立っただけで何も行動しなかった。一体何故だといつも私ならわかるはずのこともこの時はわからなかった。

「…………お前さ、今これ僕が避けたらどうなったと思う？」

「はあ？」

「これ避けて…………後ろにいる2人に当たったらどうなったと思ってんだよ？」

「…………あ」

ここまで来てようやく気づけた。吉井は避けられなかったのではなく、避けなかった。彼は後ろにいた私達を気遣ってわざと避けなかったのだった。

「お前、未遂とはいえ、女の子に手を上げようとしたんだ。それなりの覚悟はできてんだらうなあ！」

「ぐおっ！」

「これで、トドメだあ！」

「ぐはっ！」

最初に頭突き、そしてトドメの顎打ちを放って不届き者は再び飛ばされ、地面に倒れてそれから動くことはなかった。

「今度こそ完全に意識を失ったようだね。」

「ふう……あ、ムラサキさん！ 大丈夫だった!?!」

不届き者が動けなくなつたのを確認すると吉井が前と同じ緊張感の抜けたような……いえ、私を気遣うように若干声を強めて私の安否を確かめに来た。いえ、それよりも——

「大丈夫、ですって？ それはこちらの台詞よ！ あんた、今自分がどういう状態かわかつてるの!?!」

左腕を刺されたり、頭を殴られたりして血を流して、これでよく自分よりも他人を優先できるわよ。

他人を気遣う優しさがあるのは褒めてあげるけど。

「へ？ 別に頭を殴られて左腕をちよつと切られたくらいだけど。それより君達は大丈夫なの!?!」

「……」

絶句というのはこういう時のことを言うのでしょうか。

目の前の男は、あろうことか、ナイフに刺されたり頭を強打されたのを道路で転んでしまったのと同様に考えてるような答え方をした。

「と、とにかく、無事なら急いで道案内しておいた方がいいよ。僕はこいつを警察に叩き出してくるから」

「警察の前にはまず病院に行きなさい!」

「うわっ!?! いきなりどうしたのムラサキさん!?! 何でそんなに怒ってるの!?!」

「どうしたのじゃありませんわよ！ あなたの現状を放っておいてこの場を離れるなんて絶対に許しません！ 警察の前に救急車呼んで病院に行きますわよ!」

「ええ!?! いや、こんなの大した傷じゃないし、すぐに治——」

「そこまで怪我しておいてよくそのような台詞が言えますわね！ いから病院に行きますよ! というかさっさと行け!」

「ちよ!?! ムラサキさん！ 口調が変わってる！ どこかキャラが変化しつつあるよ！ ていうか、ひったくり犯！ 逃げちやう！ 逃げ

「ちやうからー！」

「そんなこんなで目の前のバカを説得するうちに救急車と警察が同時にやってきた。」

「どうやら吉井の様子を見てどなたか救急車と警察に連絡をくださったようです。ともかく、これでこのバカを病院に連れていけます。」

「それよりも、こちらの病院は怪我と同時に頭を治すことはできないのでしょうか？」

「はあ……疲れました」

「もう、本当に。今日一日で何日分の労働をした気分だわ。」

「吉井を病院に連れて行くのに20分。ご婦人を案内しようとした吉井を説得して治療させるのに1時間。」

「そしてご婦人を案内するのに30分。そして吉井が安心して治療に専念させたのがつい10分前。ここまででほぼ2時間も時間をくってしまった。」

「人ひとりを治療させるのにここまで時間がかったなんて世界中どこに行っても彼だけだと思っわ。」

「あ、ムラサキさん」

「私のそんな憂鬱な考えをしているのも知らず、当の本人である吉井は前と変わらない緊張感のない口調で話しかけてきた。」

「怪我人なのはわかっているけど、この緊張感の欠片もない表情を見ていると苛立ちが募ってきてしまいます。」

「ん？ ムラサキさん、どうしたの？」

「どうしたのもなにも……それはこちらの台詞です。あなた、何故あそこに行ったのですか？」

「いやあ、何でって言われても……ただ散歩したらムラサキさんを見かけて、それからひったくり犯捕まえた時のかつこいい姿見れて――」

「かつ!? いきなり何を言ってるのあなたは!」

いきなりかつこいって……いや、女の子に対してその言葉はどうかと思うけど、何でこんなに熱くなるのかしら?

苛立ちが募ってるからか、さっきの不届き者を捕らえるのに体力を使ったか、きつとそのどちらかよ。ていうかそうじゃなく、

「私が聞いているのは、何故私を助けたかよ!」

何で不届き者が下手すれば殺人に発展するかもしれない状況だからと行って私を庇ったのか。

100%吉井が悪いのだけど、私は彼を邪険にしていた。彼に向けて態度はあまりいいものではなかったはずなのに。

それでも吉井は私と不届き者の間に入って私を庇ってこんな大怪我をした。私への罪の償いのつもりなのかしら。そう思ったけど、吉井の言葉は全くの見当違いで、

「へ? だって、あのままじゃムラサキさんやおばあさんが大変なことになってたじゃん。そんなの放っておけるわけないじゃん」

そんなことを平然と言った。

いえ、確かに吉井の言ってることは人として正しいことなんですけど。とてもいいことなだけけれど。

「それは、私に対してはたらいた無礼を帳消しにしようという考えでかしら?」

何故か私はそんな意地の悪い言い方をして問うた。そんな言い方はあんまりだと自分でも思ったけど、それでも疑問に感じていた。

本当にそうだったたらそれはそれでいい根性してると褒めてあげるところだったけど、

「へ? 無礼って……ああ、そういえばまだちゃんと謝ってなかったんだっけ? あの時は本当にごめんなさい!」

吉井はたった今思い出したように言って頭を下げてきた。

これを見て今度こそ私はわけがわからなくなってきた。この男の中身がまるでわからない。

私に対して無礼をはたらいたと思ったら、急に勇ましい行動を起こ

したり、間抜けな態度を取ったり、本当にわからないことだらけだ。ただひとつわかることと言えば、この男はただのバカとしか言い様がなかった。

「あなた、今の今までそれを忘れてたんですか？」

「うぐつ！ すみません……いや、本当は覚えていたんですよ。でも、今の今まで結構壮絶な事件に出くわしたりおばあさんの道案内大丈夫かなと心配したりで思いことばかりが頭に詰まってその時の記憶が一時的にはじき出されただけというか——」

そんな感じで長い言い訳をしていた時の吉井はやはりバカとしか思えませんでした。

色々なやらしい考えばかりの男かと思ってましたけど、いざ話してみれば中身がからっぽのただのバカ。私は一体この男に対してなんであそこまで怒り心頭にしてたのか不思議に感じました。

けど、ただひとつ言えるとしたら——

「——だから決してムラサキさんにしたことを忘れたわけではなく、ここに来るまで衝撃的な事が多かったからして——」

この男は、バカはバカでも大バカ。今はただ、それだけで十分な気がします。

何故だか、それがあまりにしっくり来て思わず笑ってしまいそうになった。

第二十話

「よし、こんなもんか」

俺は一旦コンロの火を止め、鍋に蓋をして手を洗ってから台所から出る。

居間にまで美味そうなカレーのにおいが漂ってるな。

「後は一時間くらい寝かせればいいかな」

俺はそのままカレーを置いて居間へと視線を向けた。

「お腹すいた〜」

「開口一番それかよ」

コタツに入りながらテーブルにうつぶせ状態になっていた由夢が腹減ったと呟いた。

「うん。私もお腹空いたなあ」

「葉月もお腹空いたです」

「俺も、そろそろ空腹だな」

「雄二よ。お主は昼間も相当食べておって午後もずっとこの家に居座って尚空腹か」

「相変わらず、ものすごい食欲だね」

「いつもに比べてまだ早いほうだろ。明久もまだ帰ってきてねえし」
見れば時計の針は6時を回ったところだ。

「だって、おいしそうなにおいがするんだもん」

「そうだよ。カレーなんて作る弟君が悪い」

確かにカレーのにおいって食欲をそそるけどさ。

「せめてあと一時間くらいは待ってやれよ。明久ももうすぐ帰ってくるだろ。それにカレーはちよつと時間を置いたくらいがおいしいもんだって」

「や、そんなに変わらないですって。食べたい時に食べるのが一番おいしいんです」

「だよ」

「それに、明久の分まで平らげても時間に遅れたあいつが悪いんだし

な。帰ってきて美味そうなカレーがなくなった時の絶望した顔と久々の塩水で餓えをしのぐ明久も見てみたいしな」

「お前は鬼か」

時々本当に明久と坂本は親友なのかと疑いたくなる。

どうしたものかと頭を悩ませていた時だった。

——ピンポーン

玄関の方でチャイムが鳴った。

「誰か来たみたいです」

「誰だ。こんな時間に」

俺は居間から出て玄関へと向かった。

「はいはい、どちら様ですか」

玄関のドアを開けると、

「……来ちゃった」

玄関を開けてみればそこには微かに頬を赤く染め、伏し目がちな杏が立っていた。

……いや、来ちゃったって……それに、そして、なんだこのシチュエーションは。

「義之、あの……」

上目遣いで見つめられ、杏が口を開いた。

「あの……私、本当はずっと……」

「——って、杏！ 何言ってるのよー！」

「だめだよ小恋ちゃん。これから面白いところだったのに♪」

「だ、だって〜」

「まあ、小恋の義之君が取られちゃったらって思ったら気が気じゃないもんね〜」

「ふえっ！ そんなこと……そんなことより、義之もデレデレしない〜」

「えっと……」

この場合、デレデレではなくポカンとしているという方が正しいと思う。

というか、みんな俺に何の用だ？

雪月花とも別に約束とかした覚えはないし、白河に至っては俺とは接点すらも……いや、明久の方だろうな用があるのは。

「ああ、うん。約束とかはないよ。ちよつと明久君の方に用事ができたからついてきちゃっただけ」

「あれ？ 俺、口に出してたか？」

「ううん。そんな顔してた感じだし。約束してたかなうって、顔に出た」

「義之、すぐ顔に出るからね」

「私達は、ほら。人形劇の本番まで時間ないじゃない？ というわけだから、打ち合わせとかしようと思つて」

「と言うのは建前で、義之の手料理をご相伴に預かろうと思つて」

人形劇建前かよ。一応脚本家はお前だろうに。

「まあ、他にも用事がある人もいるけど」

小恋がそう言つて道をあげると、入れ替わつて天枷が姿を現した。

「これを由夢に」

ぐい、と俺の体に叩きつけるように本を押し付けられた。

「それじゃ」

そしてそのまま立ち去ろうとしていた。

「つて、待った待った」

「何だ？」

「これをどうしろと？」

「はあ」

「何だよ、その溜息は」

「全部説明しないとわからないのか、この馬鹿は」

その言葉にちよつとカチンと来た。この本をどうすればいいかわからないわ。

「その本を由夢に返しておいてくれ。感謝の言葉といっしょにな」

「だったら俺じゃなくて直接本人に言つて渡せよ。由夢なら夕飯つくったから今うちにいるし」

「夕飯？」

「もしかして、義之の？」

「ああ、そうだけど」

「そういえば、美味しそうな匂いがするよね」

「この匂いは……カレーね」

「義之の作るご飯って、美味しいんだよね」

「それを言ったら明久の方が美味いだろ」

「あ、あれは……絶対敵わない」

まあ、流石に明久の腕前を再現するのは難しいかもな。

「なんだかこの匂いかいだらお腹空いたな」

「カレーか。うむ、カレーは嫌いじゃない」

言いたいこと言って10の瞳がじつと俺を見つめていた。

『……………(ジー)』

ま、カレーだし、坂本がいるからかなり多めに作っておいたけど。

明久、カレーがなくなるまでに帰ってこれるか？

「まあ、とりあえず飯食ってくか？」

「わ、ラッキー」

「悪いね。なんか催促してみたみたいで」

「じゃあ、ありがたくご馳走になるわ」

「わ、楽しみ♪」

「カレーは嫌いじゃない」

「ま、とりあえず入れ」

俺は玄関に立ちっぱなしの5人を中へ招き入れる。

「おじやまします」

「ども」

「わ、なんか義之の家に入るの久しぶりだな」

小恋は幼馴染だからともかく、他の4人はもう既に知ってましたといった感じで居間の方へ歩いていく。

カレーもご飯も、こんな人数で果たして、足りるのか。そして明久が夕飯にありつけられるのだろうか。

とりあえず、せめて一杯分くらいはとっておいてやるか。

「じゃ、ただご飯食べさせてもらうのも悪いから手伝っちゃおうかな」
俺が台所へ移動してカレーを用意しようとしたところで茜が手伝おうとしていた。

「あ、じゃあ私もやっつくよ」

「私もやるよ。流石にこの人数じゃね」

小恋も白河も準備を手伝おうと俺についてく形で台所に足を向けた。

「そうか。まあ、もうカレーは作り終わったから後は皿を並べたりするだけなんだが……」

——ピンポン。

準備をしようとしたところで再び玄関のインターホンが鳴った。

「今度は誰だ？　悪い、ちよっくら見てくる」

3人にことわって再び玄関へ向かい、戸を開けた。

「あ、ただいま。義之」

「お、ようやく帰ってきたか明久。……ところで、何だ？　後ろの大所帯は？」

「何だとは何よ。生徒会の打ち合わせに來ただけなんだけどな」

「私は高坂先輩と一緒に打合せです。それとついでに吉井を送ってきただけです」

明久の後ろからまゆきさんとムラサキが一緒になって玄関前に集合していた。

まあ、生徒会の打ち合わせってんならまゆきさんとムラサキの組み合わせは理解できるな。

「とりあえず、入ってください。ちょうど今夕飯を作ったところなんで」

「おろ？　作ったって……弟君が？」

「ええ」

まゆきさんが意外そうに俺をじつと見つめていた。

「お、この匂いはカレーかな？　ちょうどお腹空いたところなんだよね」

「かれー……？」

ムラサキが首を傾げた。カレーのこと知らないのか？

まあ、王女ならそんな庶民が口にするようなものはあまり見聞きしないだろう。

それから3人を家に入れて今度こそ夕食をはじめのだった。

「うわー、おいしー」

「だよね。私、義之のカレー大好き」

「でしょ？ だって、私の弟君が作ったんだから」

「ほんとおいしく♪」

「……美味」

「う、こんなもの……うちの宮廷料理人達にも出せないですわ」

「お、弟君！ あんたあたしの弟にならない？ 今よりもいい待遇で歓迎するよー」

「こ、こらまゆき！ 私の弟君を取らないの！」

「……悪くない」

「おく、こりやうめえな」

「うむ。プロ並みの腕前じやのう」

「うん。中々いい味してるよ」

「お兄さんのお料理も美味しいです」

吉乃家の居間で現在ものすごい人数で夕食を取っていた。

帰ってきてみれば大所帯でテーブルを囲んでたからびっくりしたよ。おかげで居間がかなり騒がしくなってる。

まあ、みんなでおいしそうに食べながら賑わうのもたまにはいいもんだよね。

「お代わり」

「って、お前、まだ食べるんかよ？ もう4杯目だぞ」

「カレーは嫌いじゃない」

天枷さんが口の周りにご飯粒をつけながら、皿を義之に差し出していた。

よほど義之のカレーがお気に召したようだ。

「桜内が作ったというのがちよつと引つかかるけどな」

「だったら遠慮しろ」

俺が上がりさせたとはいえ、人の夕飯を馳走させるといふ厚遇を前によくそんな言葉を吐けるな。

「桜内、俺もお代わり」

「お前も少しは控えろよ。お前にいたってはもう六杯目だぞ」

雄二も相変わらずの食欲で次から次へとカレーを平らげていく。

「……ん？」

天柳さんがふいに別の方向を向いた。彼女の視線の先にあるのは、テレビだった。

「こ、この薄くて四角い物体は何だ？」

「ん？ これはテレビですけど」

「ば、馬鹿な！」

天柳さんが大げさに驚いてテレビを凝視していた。

「テレビって、こんな薄いのがか!？」

「はい」

「こ、こんな薄いのが……」

天柳さんは物珍しそうにテレビの周りをうろろうしてあちこちからじつと見ていた。

「なんか、天柳さんって変わってるよね？ テレビにびっくりしたり」

「（そ、そうだね。確か、あまり産業が発達してない国から越してきた帰国子女だって話……だったよね？ 義之）」

「（え？ あ、うん。そんな感じだ）」

「（ふくん）」

「（へく、美夏ちゃんって外国から来たんだ）」

「（その割には普通に日本語しゃべれるんだね?）」

「（そ、そりや……一応、日本人だからな）」

実は、彼女がロボットだなんて言えるわけがない。そんなことになつたら日本どころか世界中が大騒ぎだ。

「…………へ？」

「(ん？ どうしたの、ななかちゃん?)」

「…………あ、なんでもないよ。それにしても…………えいつ！」
「ぎよわ〜っ！」

ななかちゃんがテレビのリモコンを操作すると画面にアイドルが映し出され、スピーカーからはポップな歌が流れ出した。

それを見て天枷さんが錯愕した。

「ほ、本当に映った！」

「そりやあまあ、テレビだかな」

「こ、こんな技術が…………、この薄さで…………」

「帽子のお姉ちゃん、面白いです」

にしても、テレビでここまで驚くなんて…………義之の話じやかなりの期間洞窟で眠ってたらしいけど、どれだけの年月を洞窟で過ごしていたのか。

ちよつと興味が出てきたり。

「ごちそうさまー。とつても美味しかったよ！」

「ごちそうさまでした〜」

「ご馳走になった」

「義之君、美味しかったよ」

「…………中々ね、義之」

「うんうん、すごく美味しかった」

「中々良いものをご馳走になりました」

大分時間がたってから夕飯を食べ終え、訪問者のみんなを男子全員で見送りに出た。

「おお、さむ」

義之が自分の身を抱いて呟いた。

言われてみれば周囲は夜なので当たり前だが、既に真っ暗。しかも季節は冬。

冷たい空気がますます冷え込んでくる時間帯だ。

「弟君達、もう夜なんだし、誰か送っていきなよ」

確かにもう夜の9時。女の子をこのまま帰すというのも危ないだろう。

ここは高坂さんの言うとおりに、それぞれが何人か送っていった方がいいかもしれない。

「じゃあ、誰が誰を送っていく?」

「そうだな。俺は天枷を送っていくよ。バス停までと言っても流石にそこまでとなると暗がりもあるしな」

「何を言っているのだ。美夏に護衛など必要ない。そもそも美夏は口ポ……むぐつ!」

「(バカ! だから心配なんだよ!)」

天枷さんがとんでもないワードを口にしきる前に義之が彼女の口を塞いだ。

確かに、ある意味一番危険なのは彼女なのかもしれない。どんな事態から彼女がロボットだってバレるかわからない。

「ならば、俺は花咲を送ることにするかの」

「あ、私は杏ちゃんと同じ方向だから」

「うむ。ならば2人同時に送る方がよいじゃろ」

「いいけど……襲われる危険性が高くなった気がするわ」

「安心せい。俺はお主らを襲うようなことはせん」

「そうじゃなくて……傍から見れば3人の女が夜道を歩いているようにしか見えないから」

「じゃから俺は男じやと言うておろうに!」

とりあえず、秀吉は茜ちゃんと杏ちゃんを送ることになったようだ。

まあ、杏ちゃんの言う通り……若干危険性が高まった感がある気がするけど。

「それなら僕は高坂先輩を送りますよ」

「大丈夫？ あたしの家、団地の方だけど」

「あら？ 高坂先輩もですか？ 私もですけど」

「え？ ご近所だったの？」

「そのようですね……」

「それなら、2人を同時に送るとしましょう」

「なら、俺は送る必要ねえな。ああ、さみ……さっさと入ってコタツ入るか」

久保君も高坂さんとムラサキさんを送ることに決定して雄二は自分を送る必要がないと家へ入っていった。

「じゃあ、僕はななかちゃんと小恋ちゃんを送ることになるかな」

「うん。しっかり送り届けてくださいな♪」

「はは、頑張ります」

僕はななかちゃんと小恋ちゃんを送りに道を歩いていた。

「ごめんね明久君、夕飯遅くまでご馳走してもらった上に送ってもらって」

「いいよ。流石にこんな遅くに女子2人だけで帰したらそれこそ男としてどうかと思うし」

「うん！ だから明久君、好き〜」

誰もが見惚れるほどの笑顔を見せて僕の腕に抱きついてきた。昼間刺された左腕の方に。

「ぎいやあああああ！」

「ちよ、明久君、大丈夫!?!」

「な、ななか、何やってるの〜」

激痛が走る前に何か柔らかい感触があった気もするけど、今は激痛でそれどころじゃなかった。

完全に油断していた。ななかちゃんがちよつとばかり抱きつき魔

の気があるからせめて左腕くらいは警戒しておくべきだった。

抱きつかれた事だけなら慶喜だったけど。

「ご、ごめんね明久君。大丈夫?」

ななかちゃんが僕の左腕を取って慌てた様子で問い詰めてきた。

「だ、大丈夫だよ。ちよつと昼間左腕を怪我しちゃったけど、大したことはないよ」

とはいえ、女の子相手にナイフで刺された怪我というのは流石にま
ずいのでそこは黙っておこう。

「ええ!」

すると何故かななかちゃんが驚いた。

「ななか?」

「……あ、ううん。なんでもない」

ななかちゃんは首を振って今度は月島さんと腕を組んだ。

「じゃあ明久君、私達はここまででいいから」

「え? いや、ちゃんと家まで送るよ」

「大丈夫だから。怪我人は家で大人しくしてること。ちゃんと刺し傷
治してね」

そう言ってななかちゃんは月島さんとじゃれるようにして遠ざ
かっていった。

なんだか、送っていく意味がなくなっちゃったな。

「……あれ?」

そういえばななかちゃん、僕の傷を刺し傷って言ったっけ?

僕、これが刺し傷なんて言ったかな? ……………ま、いつか。なな
かちゃんの言うとおり、さつさと家に帰って療養して傷を塞がなきや
な。

僕は反対方向を向いて家へと戻っていき、音姫さんと由夢ちゃんと
一緒に夕飯の後片付けを手伝った。

第二十一話

「いや、お祭りムードたっぷりですな」

週末明けの学校の昼休み、僕は義之に渉と一緒に階段の踊り場で他愛もない話をしていた。

そして、そこからクリスマスパーティー用に飾り付された廊下を見渡した。

壁にはポスターや装飾が一部つけられ、そのしたには引越しを進行しているようにいくつものダンボールが置かれていた。

更にクリパで使用する飾りや小道具などの入ったダンボールを抱えた生徒やクリパ用の衣装を着た生徒が行き交っていた。

「もうすぐクリパ。そのクリパが終われば冬休みで……」

「あつという間の3学期が終われば、俺らは晴れて本校の生徒となるわけだ」

「早いですな」

「そうだな」

「僕はほんの数ヶ月だけだね」

それでも時間がたつのは本当にあつという間だ。

あの衝撃的な始まりからもう数ヶ月もたつのか。平和だったり楽しい時間というのは本当に早く感じるものだ。

「なんとかしないとなく」

僕がここ数ヶ月の思い出に黄昏ていると渉が真剣な面持ちになっていた。

「……何をなんとかするんだ？」

「恋人」

義之の質問に渉が即答した。

いや、確かにクリスマスは絶好の告白チャンスのひとつなわけだけど。

「い、いきなりだな」

「ほんの少し前はそこまで気にした感じじゃなかったっばいけど」

僕達の言葉に渉が握りこぶしを作ってワナワナと震えていた。

「いきなりじゃないって……もうこのお祭りムードに触発されて、すんごい焦ってんだってのー!」

「お祭りムードと恋人と、どう関係があるんだよ?」

「早い話が、一刻も早く彼女が欲しいってこと?」

「間違っではないけど、そうじゃねえよ! バカ!」

「な、なんだよ……」

「本校にまで持ってくつもり?」

「な、何を?」

「恋人いない歴〓年齢なんていう、不名誉な称号を!」

こ、「恋人いない歴〓年齢」か……確かに、それはちよつと嫌かも。

僕は実際の年齢が義之達より上だから……本校に上がれば、実際の年齢を考えて……18歳なのに恋人がいない。

「そ、そりゃ……仕方ないんじゃないか。チャンスが来ないんじゃない」

義之の言葉にちよつと芽生えてきた焦りが冷めてきた。

そりゃそうだ。彼女も何もチャンスもないし、そういった相手もできるわけがないのにこんなこと考えたってね。

それに今は僕も若返ってるわけだし、今までと違ってきつとチャンスはどこかで巡ってくるはずだ。

「ああん、もう、バカア!」

「キモイってお前、身体くねらせるなよ」

「チャンスは自分で作るもんでしようが! そんなでもって!」

渉がビシツ! と、指を立てて、

「その絶好のタイミングがクリスマスパーティーでしょうが!」

「な、なるほど……」

「まあ、こういった日に気になる相手を誘ってイベント回って告白……あわよくば、そのまま恋人に。ってのは誰もが叶えたいことだろうし」

「ふむ」

「このチャンスを逃すでないぞ、お二方」

「え? 俺もか? 明久でなく?」

何でそこで僕の名が出てくるのか。

「当たり前だ！ いいのか？ 2人だけ独り身生活を続けたままの本
校入学でも！」

「2人……って、ちよつと待て。まさか、杉並はもう？」

「……あいつの場合、とつくに彼女がいても……というか捨てても不
思議じゃない」

「……………」

未確認だということにほつとした気もするけど、確かにそんなこと
になつても不思議じゃない。違和感なさすぎる。

なんかちよつとホストっぽいイメージがあるし。

「未確認だからわかんねえけど、理不尽だ！ なんであの野郎が彼女
持ちなんだよ！」

「だろ？ だとして、これで次俺が彼女を作ったら、お前ら！」

「俺達だけ……………」

「取り残され…………？」

渉が急に憐れんだ表情になつてコクリと頷く。

「よ、よせよ縁起でもない！」

「い、いや、ちよつと待つて。まだ2人だけと決まったわけじゃない。

雄二やムツリーニだつてまだ彼女いないはずだし」

雄二が女の子にモテるわけだろうし、ムツリーニだつて。

仮にムツリーニが寡黙のままのイメージによつてそれが要因で
女子に告白され、来るべき時になつてもアイツなら鼻血の海に沈んで

結局未遂で終わるのが容易に想像できる。でも——

「それでも、俺達に彼女ができなかったら……………」

「…………そんなのあんまりだ——」

嫌だ！ いくら仲間がいるからつて、彼女いない歴〓年齢の称号を
いただくのは嫌だ！

「だからこのイベント。やるしかないつて！」

「や、やるつて……………」

「好きなあの娘にモーレッツアタック！ どうか約束にこぎつけて
パーティーが済む頃には！」

「な、なるほど……」

「それならやらない手はないよね!」

「そういうこと! ちなみに聞くけどさ……お前らが狙ってる娘って、誰?」

「……………は?」

……………。言われて義之と互いに見合って考える。

言われてみれば、僕の気になる娘って……一体誰なんでしょう?

考えればそもそも可愛いとか綺麗だと思うことはあっても意中のって言われると、そんな娘がいたかどうか。

「えっと……渉はそういうのいないのか?」

「そうだよ。僕達ばかりに質問してさ」

「え? お、俺か? お、俺は……俺はやっぱ……月島かな」

夷垣な表情を浮かべて言った。

……ちよつと意外だった。

渉の今までのことを考えたら結構多くて困っちゃうみたいなこと言うかと思っただけ。

でも、この場ですぐに小恋ちゃんの名前が出てるあたり、彼女に対する愛慕は相当純粋なものなのだろう。

「わ、わかってると思うけど、内緒だぜ?」

「ああ」

「うん」

でも、渉の思いが叶うかと言われると……返答に困ってしまう。

彼の人間像がどうかでは無い。普段はこうだけど、彼もいざというときはきつと頼れる人なんだろう。

けど、肝心の小恋ちゃんが好きなのは――

「ん? 何だよ?」

「……………なんでもない」

なんとも妙な三角関係。渉の好きな小恋ちゃんは彼の好意に気づかない。更には義之のことが好きで仕方がない。

義之は友人のことを応援してるけど、小恋ちゃんの好意に全く気づかない。

鈍い人が1人でもいるとこここまで複雑な関係になってしまいうもんだなんて。鈍感な罪だつてつくづく思うよ。

「さつきから何だ、明久」

「いや、鈍感ていうのは……死刑に値するんだなつて」

「なら、お前はきつと死刑になるだろうな」

何をいうか。死刑になるのは義之だろうに。

……まあ、他人の僕が彼らのことをとやかく考えることはないだろう。

いざとなつたら周りのみんなでどうにかすればいいだけだ。今はただ彼らを見守るだけ、ということだ。

「で、明久はどうなんだ？ 気になる娘とか」

「え？ 僕？」

渉に聞かれて僕は考える。けど、やっぱり気になる娘つて言われると。

「白河とはどうなんだ？ 結構仲いいだろお前ら」

「そういえば、昨日だつて小恋達が来た時、結構楽しそうだったじゃねえか」

「うん。なんで昨日月島達が義之の家に来たかという理由は後で聞くとして……どうなんだ？」

「ど、どうなんだつて……確かに楽しかったけど、でもななかちゃんなら誰にだつてあれくらいは楽しくなれると思うけど」

「いや、それはねえよ。白河つて、アイドルと言われてモテモテだったりするけど、結構奥手な奴なんだよ。こと、恋愛沙汰においては」

確かに、モテモテで告白してくる回数は結構なもの、同じくらいの回数を断つてるよね。

「なのにな、明久」

「ん？」

「お前は、白河の事なんて呼んでるよ？」

「ななかちゃん」

「それだよ」

「は？」

渉の言いたい事がよくわからない。

「白河の事ファーストネームで呼んでるの、お前くらいだぞ」

「言われてみれば、確かに白河の事ファーストネームで呼んでるの、小恋くらいだったな」

「そうそう。男で呼んでる奴は俺が知ってる中でも1人として存在していない。明久を除けばだ。つまり、お前特別」

「と、特別って……」

「そういえば、少し前にも僕とならクリパ回ってもいいよって言われた事もあつたっけ？」

「……うわ、なんだかすごい意識してきちゃったよ。」

「そういえば、ムラサキともそれなりに仲がよくなってきたよな」

「ムラサキって……1年に転校してきた娘だったっけ？ 明久が胸揉んだ」

「だから揉んでないから！ ちょっとした事故で……」

「まあ、ともかく。昨日の夕飯の時でも結構楽しそうにしてただろ、白河と同様」

「う、うくん……まあ、確かに許してもらえたかは知らないけど、前よりは……」

「ひったくりの時からかな。確かにちょっと距離が短くなった気がするけど。」

「あんな事があつたからね。異性としての好きなんてまずないはずだと思うけど。」

「……で、そろそろいいか？」

「ん？」

「何で義之の家に大勢の女子が転がり込んできたかって理由についてだ」

「渉の背後から何か黒いものが見え隠れしている。」

「ちなみに、来たのは誰だ？」

「だ、誰って……音姉と由夢はもちろん、雪月花の3人に、天枷に白河、まゆきさんにムラサキ、くら——モゴッ！」

「義之、それ以上は……」

慌てて義之の口を塞いだけど、時既に遅しだった。

「お前ら、俺が休日をつルに使って、運命の出会いを待っていたついでうのには……お前らは……」

渉がワナワナと身体を震わせていた。これは、ちよつとマズイかも。

渉の睨目が怖い……。

「仕方ない……お前らの皮を奪ってお前らになりすまして俺もハーレム生活を送ってやる」

「逃げよう義之！ 今の渉は危険だ！」

「な、なんでか知らんけど確かに怖い！ とにかく逃げるぞ！」

「待てお前ら！ お前らだけ幸せな時間を送るのは納得いかねえんだよう！」

昼休み、僕と義之は渉と命懸けの鬼ごっこをしていた。

放課後、僕は義之と廊下を歩いていた。

「さて、放課後になったわけだが……特にすることないな」

「うん。じゃあ、商店街行こうか。最近ちよつと気になるゲームがあるんだよね」

「お、それはいいな」

そうして僕達が商店街へ向かおうとしていた時だった。

「あ、いたいた。弟くーん！」

後ろから甘えるような声が聞こえてきた。

「音姉……」

後ろから声をかけてきたのは音姫さんだった。その後ろには高坂さんもついてきている。

「うわあ……本当に見つけちゃったよ。相変わらずすごいよね、音姫

の『弟君リーダー』って」

「えっへん」

何さ、弟君リーダーって。ふと見ると、音姫さんのアホ毛がふいふんと動いている気がした。

まさか、アレがリーダーになってるなんて言わないよね。

ていうか、義之に関してほとんどでもない索敵能力だよ、音姫さん。やはり義之に対する愛のなせる業か。

「それで、何の用ですか？」

「ん？ ああ、吉井もいることだし、ちようどいいか。ちよつと2人に頼みたい事があるんだよね」

「頼みですか？」

「うん。これ」

そう言つて高坂さんが僕と義之に大量の紙の束を手渡してきた。ていうか、どこにそんなもの持つてたんですか？

さつきまで存在が全く見えなかったんですけれど。

「えつと……これは？」

「鈍いわね。それを配るのよ。商店街で」

「生徒会メンバーになった明久はわかりますけど、何故に俺まで？」

「たまたまその場にいたから」

義之からすればたまたまのものではないだろう。

「それとも、弟君用事あつた？」

「う……」

「お姉ちゃんと一緒にじゃ、嫌？」

「く……」

音姫さんの上目遣い。これはまず断れる奴なんていないだろう。

増してや、弟であり、同時にお人好しの義之だ。

「……わかつた。引き受ける」

断れるはずなど、微塵もないだろう。

「ありがと！ 弟君！」

子供のような笑顔で嬉しそうに言った。よほど義之と仕事したかつたのだろう。

音姫さんと高坂さんに捕まって僕達は商店街でポスター配りを始めた。

風見学園のクリスマススパークティーはかなりの人気なのか、ポスターを手に取る人は大勢いた。

風見学園の制服とポスターを抱えている姿を見ただけでクリスマスパーティー関連だと感づいた人もいて一目見た瞬間、僕達のもとへ歩み寄ってポスターを取ったりもした。

そして時には店の外の壁に貼り付けて人目につきやすいようにしたりもした。なのに――

「お、おい……大分回ったと思うんだが……」

「うん。ポスター……全然減る気配がないね」

もうかなりの部分を回ったと思うんだけど、それでもポスターは全く減る気がしない。

「学校で見た時と量がほとんど変わらないし。」

「あれえ？ おかしいな。あたしの計算じゃもう配り終わってると思っただけだなあ」

「あはは！ まゆき、計算苦手だもんね」

「これはそういう問題なのだろうか？」

「義之も同じことを思ったのか、微妙な顔をしていた。」

「しかし、確かに結構回ったもんだしね。じゃあ、今日はここまでにしてあそこ行きますか」

「うん。賛成♪」

「あそこ？」

高坂さんの言葉に僕と義之は首を傾げた。

「うーん。やっぱり労働の後は甘いものだよね」

「うん、おいしいよね〜♪ 『甘味処』の和菓子」

僕は和風な雰囲気のお店、『甘味処』というところに足を運んだ。音姫さん達の様子から察するにどうやらここは生徒会の仕事の後でよく来ているようだ。

いやしかし、本当にこの店の和菓子は最高。

僕はあるみつを頼んで今食しているところだが、もう最高としか言い様がなかった。

甘さは控えめなのに香りが口の中に広がって、しつこくもなく、食べ後も口に残るこの味はなんとも。

「あ、弟君。そっちの白玉頂戴」

「ん？ ほら、あくん」

向かいの席で義之が自分の注文したものを音姫さんに食べさせてる姿があった。

「ん〜、おいしい。あ、お姉ちゃんのもあげるよ。あくん」

「ん……ああ」

今度は音姫さんが自分のを義之に食べさせていた。

……うん、なんていうかさ。

「えっと……あんたらってさ、本当に仲がいいよね。ていうか、よすぎ」

うん。愛念が半端じゃないっていうか……。

「うん？ そりゃあ、姉弟だし」

「いや、普通姉弟ってそこまで仲良くないから」

うん。普通そんなに行く姉弟はいない。

姉さんはよく絡んでくるけど……うん、あれも普通はないよね。ていうか普通であってほしくない。

「う〜ん、でも昔からこんな感じだったから」

「……ふ〜ん。じゃあ、弟君も？」

「え？ まあ、昔からずっとそうでしたし」

「……ふ〜ん」

義之達の言葉に納得したのか、高坂さんは頷いて食べかけのくずきを口に入れる。

「さつきからどうしたの、まゆき」

「いんや。ただ……それはそれで幸せなのかなって、思っただけ」

高坂さんの言葉に義之と音姫さんは首を傾げた。

「弟君、意味わかる？」

「さあ？」

知らぬは本人達だけ。

この姿を見て昼間渉が言っただ言葉を思い出す。気になる娘はいないのかってやつ。

義之はどうなんだろうか。いないとは言ったけど、音姫さんや由夢ちゃんとかなり仲いいし、雪月花の3人とも親しい。

本人にとっては当たり前すぎることなのか、全く興味を示さない。

この関係がこれからどういう風に変化するのか……そして、義之は誰を選ぶのか。その答えは神のみぞ知る、かな。

「あゝ、くずきりおいしい」

「ですね」

まあ、しばらくはそつとしておくとするか。これからを決めるのは人それぞれだし。ただひとつ、言いたいことは――

「義之、いつかきつと刺されるか地獄に引き釣り込まれるかの二択を迫られそうだよね」

「一体全体何不吉な事を呟いてんだ!?!」

晩暉が指す頃、義之の叫びが茜色の空に響いた。

第二十二話

「俺さ、ずっと考えたんだけどさ」

移動教室の途中、昨日と同じく真剣な面持ちをして渉が切り出した。

また何かのナンパ技術の話でもするのかな？

そう思ったが、今回は違うようだ。何か、僕達に対して羨望のような、それでいて怒りも含めた視線を送っている。

「お前らつてき……すんご——つく、贅沢な奴だよなあ！ 思わず殺気を覚えちゃうほどにさ」

にこやかな笑顔で拳を握り、震わせていた。というか怖いよ渉……。

「はあ？ 何がだよ？ いきなり何言ってるんだ？」

義之、彼の言葉を聞いて自分に該当するものがないと思ってるの？ 僕だって君ほどじゃないにせよ、かなり贅沢と言える日々を送っているのは自覚しているのに。

「くあーっ！ 何がとききましたか何がと！ このラブルジョワ野郎っ！」

「何だよ、ラブルジョワって？」

恐らく、ラブとブルジョワをかけたのだろう。

「だってよ！ 家に帰ればお前らは朝倉姉妹と同棲生活だろう！」

「同棲じゃありません！」

「確かによく家にはくるけど……」

「似たようなもんだらう」

うん、否定できないね。

「そして、義之は音姫先輩には弟君と甘やかされ、由夢ちゃんには兄さんと慕われる。かあー！ 羨ましいー！」

渉のテンションがややマズイ方向へと突進している。

「んないいもんじゃねえつてば。ほんと兄弟みたいなもんなんだから」

そして義之、それがいかに幸せなものなのか全く理解していない。

涉じゃないけど、確かに殺意を覚えてしまいそうだな。

「いいの！ それでもいいの！ 俺も弟君とか言われたいの！ 兄さんって呼ばれてみたいんだよー！」

声高らかに力説する渉。ならば是非とも僕に変わって姉さんに甘えてほしいものだ。

かなり大変だろうけど、渉ならきつとなんとかできそうな気がする。

「しかもしかも、教室では雪月花3人娘と仲良しだろ！」

「それは君もじゃないの？ 僕だってそれなりに仲いいと思ってるし」

「そうだけど、違うだろ。義之と俺らのは何か違うだろう。 ころ、

ジューシーさっていうかさ、とにかく違うんだよ！」

「わけわかんねーよ！」

「要するに、親密度っていうか……甘さが足りない？」

「はい正解！」

「はあ？」

「アンド、明久！ お前は最近転校してきた1年の可愛い女の子とも仲いいらしいじゃねえか！」

「ムラサキさん？ うーん……仲がいいかって言われると……確かにある程度関係は修復しつつあるって感じはするけど」

流星に渉が考えてるような関係ではないと思う。

「それで、おまけにあの学園のアイドル『白河ななか』のお気に入りだったりするわけだろ」

「ななかちゃんは誰に対してもあんな感じだと思っけど」

昨日名前については議論されたけど、それ以外では僕も周りのみんなもそんなに変わりはないものだと思うけど。

「ちげえって。俺が見た感じ、お前に対する白河の態度は他とはちよつと違うぞ」

「そうなの？ ちなみにどのへんが？」

「あのなあ……とりあえず、共通としてお前ら、2年の転校生とだって仲いいじゃねえか？」

「いや、どこが？」

アレは流石にない。どちらかといえば、僕らは嫌われてる方だ。

「俺はあの娘がお前ら以外の男子と話しているところを見たことがない」

それは、まあ……他とは比べて話しているとは思うけど。それでも彼女の態度を見ると、とても仲がいいとは言えないだろう。

ていうかこの場合、僕ら以外に話せる人がいないって事じゃないかな。だって、彼女ロボットだし。

「とにかく、片や全校生徒の憧れ、優しく完璧なおねえちゃん、音姫先輩に弟君と溺愛され！ 密かにファンクラブまで設立されてる可憐で清楚な由夢ちゃんには兄さんと慕われ！ 我がクラスが誇る雪村杏、月島小恋、花咲茜の萌えキャラ3人娘とは親密な関係！」

よくもまあここまで説明を入れて力説できるよ。

「更に片や可憐な美少女転校生とはいつの間にか親しくなってる。そして学園のアイドルと称されてる白河ななとは学園で唯一ファーストネームで呼び合う仲！ そして共通して強気な態度が魅力の転校生とも仲がいい！ な？」

「な？ って何だよ？」

「殺されても文句の言えない状況だろ？」

確かに。FFF団がここにいれば確実に僕達を殺しにありとあらゆる殺害方法を行使するだろう。

「もう義之なんか選び放題の羨ましい限りだ」

「いやいやいや！ 全然違うから！ 全部お前の考えてるような関係じゃねえからな！」

義之も見苦しいよ。ここまで幸せな状況に身を置きながらそれを否定しようとは。

「それに、お前だって女友達多いじゃねえか」

「俺が？」

「ああ」

「確かに、僕達と同じくらい女の子に縁があると思うけど」

少なくとも付き合いの短い僕よりはクラスメートのみんなとは仲が

いいと思うけど。

「俺の場合、キヤラじやん？　そういう。一緒にいると楽しい男の子どまりみたい。それに……おれはそのおく……」

ボサボサの頭をかきながら間を置いてほそりと、

「……いつでも、月島一筋なわけだからさ」

まあ、それも昨日聞いたけど。その様子を見る限り、本当に彼女が好きなんだね。

「ま、なんちゅーかあれだ。お前らは学園が誇るヒロイン達を独り占め状態なわけだ。精々刺されないように気をつけろよ」

「勘弁して（くれ）」

笑顔で言った渉の不吉な言葉に僕達は頭を抱えた。

「お待たせ」

無表情で杏ちゃんがコビー用紙の束を掲げた。

どうやらここまで来てようやく台本が完成したとのこと。クラスのみんなが拍手で彼女を労った。

「よくがんばったね。うんうん」

「お疲れさま」

「疲れたけど、楽しかったわ」

杏ちゃんが出演者と照明、音響担当にそれぞれ台本を配って回る。

僕にも照明としての役割と、どのタイミングで照明をつけるのかがバッチリ載っていた。

「お疲れ」

「頑張ったね、杏ちゃん」

「ん」

杏ちゃんが少し俯いて頬を染めて頷いた。

「それじゃあ、出演者は一旦通して読み合わせね。それで雪村さん、人形の方はどうなのかしら？」

「茜、報告お願い」

「はい。とある助っ人のおかげでほぼ全部仕上がってます」

「どうやら人形も問題なさそうだ。しかし、

「その助っ人って誰？」

小恋ちゃんも僕と同じ事を思ったのか、茜ちゃんに尋ねた。

「だって、これ学生が作ったにしてはすごく精巧にできてるもん。」

「うん。ちよつと小恋ちゃんのエッチな写真渡したらすぐに取り掛かって30分もしないうちに完成したんだよ」

「ちよつと待って！ 私のエッチな写真って何!? いつの間に!? ていうかどんな写真を!？」

「どんな写真かはともかく、その助っ人とは十中八九ムツリーニであらう。」

流石。女が絡んだあいつの辞書に不可能という文字などありはしないだろう。

ともかく、これで大体の準備は整ったとして、出演者のみんなは教壇の前に集まって打ち合わせをしていた。

「小恋、曲は？」

「は〜い」

小恋ちゃんが家で一晩かけて編集したという曲をみんなに聴かせた。

大道具や美術係も手を止めて月島さんの編集した曲を聴いていた。

クラスメート全員からかなりの好評を得られたようだ。これで人形劇はどうか形になったようだ。

「それじゃあ、合わせてみる？」

沢井さんの言葉に全員が頷いた。台本を読みつつ、人形の動きを見て練習が始まった。

僕も照明のタイミングを計りつつ、照明器具の操作の練習をした。まだみんなぎこちないものの、本番までには絶対慣れてやるという意思が見えていた。

「次、義之の台詞だよ」

「お、おう……」

なんとしても本番みんなでいい人形劇にしてやるさ！

放課後になって……。

僕は本日、生徒会メンバーとしての初仕事のために高坂さんからのお呼ばれを受けて生徒会室へ足を運んでいた。

「あのさ、なんで俺までここに？」

義之も一緒になって。

高坂さんに声をかけられたのは義之と一緒に歩いていた時で、高坂さんが義之を見ると義之も一緒にと彼の腕を掴んで生徒会室に引張ってきたのだ。

「えつと、なんでまたここに？」

義之は突然生徒会室へと引つ張られたために状況が飲み込めなかった。まあ、何のためについていうかは何通りかは予想できるけど。

「ちよつと弟君に大事な話があつてね。ま、単刀直入に言つとくわ。弟君、生徒会の仕事に入らない？」

「……………はあ？」

高坂さんの突然の言葉に義之は間抜けな声を出した。

うん。僕も最初は同じような反応をしたよ。

「いわゆるヘッドハンティングってやつ？ 弟君のちからを生徒会に貸して欲しいの」

「いや、明久がいるでしょ。わざわざ俺がいなくても……」

「吉井は土屋の方を中心に頼みたいの。杉並の事を大して知らない奴をアイツに当てても大した成果は得られそうにないしね」

確かに。僕じゃムツツリーニの方は対処できても杉並君についてはまだよく知らないのだ。

体育祭の時を考えればとんでもない罣があるとは予想できるが、逃走ルートなどは少しでも付き合ひの長い人に任せるべきだろう。

「基本的にね、あたしは認めてるのよ。弟君を筆頭に杉並、雪村や花咲達付属3年3組の連中の能力の高さにはね」

まあ、多少独特な感性を持つてる人も多いけど、杉並君はその行動

力と情報力。杏ちゃんは記憶力と、能力が高い人間が多いのは事実だ。

「だからこそ厄介なのよ。その能力の使い方徹底的に間違えてるし」

「いや、そう言われても……ていうか俺を筆頭にしないでほしいんですけど」

「まあぶっちゃけ、手が回らないのよね。今の生徒会のメンバーだけじゃ。吉井も含め数はそこそこいるものの、能力的にはあんたたちに敵わないから。だから弟君に目をつけたわけ」

「……なんで俺が？」

「そんなもん決まってるじゃない。一番落としやすいからよ」

それは言える。

「音姫が苦勞してるのは弟君だって知ってるでしょ？ 知つてのとおりに、通常業務だけでも音姫にかかってくる負担てのは相当大きい」
確かに、クリパの準備のためのセッティングの件だって音姫さんがどれだけアドバイスしていたか記憶にあるだけでもかなりある。

「更には、クリパで色々と問題が起きるからね」

高坂さんがジト目で義之を見た。

「だから、俺は音姉に迷惑をかけるようなことはしませんって」

「それじゃあ意味がないのよ。弟君自身はそう思っても、杉並や雪村は弟君を利用しようとするわ」

「それは……まあ……」

確かに、杉並君や杏ちゃんの話術で義之が落ちる……十分にありえる事態だ。

「気がついたら、知らぬ間に弟君が計画の中心に仕立てられている可能性も考慮できる。なんだかんだ言つて弟君の影響力つてバカにならないからね。本人にその気も自覚もあろうとなかろうと」

うん。義之つて、結構クラスの中心つてイメージがあるよね。クリパの準備でも指示は沢井さんや杏ちゃんがしていたものの、彼の言葉で動いている人間も少なくはなかった。

「んで、生徒会としては、その可能性がある限り、弟君のマークを外す

わけにはいかないのよねえ。それも危険ランクAだからそれなりの割り当てが必要になるし」

彼は以前までどんな騒動に巻き込まれていたのか。

「ていうわけで、あたし達の出した結論。いつそのこと、弟君をこっちに取り込んだ方が安心だつてね。基本的能力が高い上にランクAの人物達とも接点が多い。言ってしまうば、首輪の鈴としては最適な人材なんだよね」

「……………」

「それに、弟君。音姫のために騒ぎを起こさないつて言ってるけど……本当のところさ、少し物足りなさを感じてるんじゃない？ 本来あんたはこっち側の人間なんだし」

そう言つて高坂さんは挑発的な笑みを浮かべた。

「……………」

「義之、もう腹をくくれば？ 敵に回してもロクなことにならないそうだし、入れば音姫さんだつて大喜びじゃない？」

「明久……………」

音姫さんの名前を出して義之の表情が揺らいだ。これはかなり効果がありそうだ。

「確かに、すつごく甘つたるい笑顔で『弟君、一緒に頑張ろうね♪』なんて言いそうだし」

義之の頭の中でも今まさにその映像が思い浮かんだことだろう。

陥落までもう一步といったところか。

「まあ、強制はしないわ。吉井と同様クリパの期間だけでいいから。生徒会に入ってみない？」

義之は数分間悩んでようやく結論が出たのか、高坂さんを見て結論を述べる。

「わかりました。手伝います」

「およう？ マジで？」

「何ですかそのリアクション？ 手伝えつて言ったのはそっちでしょうに」

「いや、まさか弟君まで手伝ってくれるとは正直思わなかったから

さく」

誘ったのはあなたでしように。

「んでも、なんで手伝ってくれる気になったの？」

「ん〜……気まぐれ、ですかね？」

「気まぐれ？」

「なんとなく面白そうだったので」

「なんとも義之らしい理由だった。」

「ふうん。ま、正義感に燃えてって言われるよりは全然信用できるか。ま、これで音姫も喜ぶだろうし。じゃ、詳細は後で音姫含め、生徒会メンバーに話すとしますか。これからもよろしくねくん」

「はい」

すっかりご機嫌の高坂さんの言葉に返事をして数分もすると音姫さんも含めた生徒会メンバーが入室してきた。

音姫さん達に義之も俊改っしてメンバーに加わる事を伝えると予想通り音姫さんが大喜びで義之に抱きついてきた。

それを見て少し笑った後、高坂さんが始めてすぐにみんな真面目な顔になって杉並&ムツツリーニ討伐会議が始まった。

「ほんじゃ、クリパに向けての対策会議を始めます。本年度は前回に比べて熾烈になると予想されます」

「そこで、効率よくトラブルを防ぐため、今後二人一組のチームを作って見回りたいと思います」

生徒会長モードに入った音姫さんの言葉の後で高坂さんが端っこにある机の上から穴の開いた箱を持ってきた。

「公平を期するために、チームはくじ引きにて決めたいと思います。同じ色を引いた者同士がタッグを組む。いいわね」

「はい」

「弟君、同じ色引くよう頑張ろうね〜」

「いやいや、こんなの頑張りようがないでしょ」

確かに、これ運試しだし。

「青色ですー！」

ムラサキさんが早速引いていた。どうやら色は青のようだ。

「次、私ね。んくと……………これだ！」

「……………」

音姫さんの色も…………青だった。

「あ、あれ？」

「お、同じ色ですわね、朝倉先輩」

「そ、そうだね…………よろしく、ムラサキさん」

「ほほほ…………」

なんだか微妙な空気が流れている気がする。

「さて、次はあたしね。……………お、赤か」

高坂さんが赤、と。

「んじゃ、次が俺か」

「弟君、青引いてね」

いや音姫さん。青はもうあなたとムラサキさんがひいちゃったんですから無理ですよ。

「ん…………赤か」

義之は高坂さんと同じ赤だった。

「後は、僕か…………」

誰と組むことになるのか、ちよつとわくわくしてたり。

ごろごろと、中にある玉を転がしながら数秒。これだ、とひとつの玉を握って取り出した。

「…………はずれ」

何故かはずれという文字の書いてあった玉が出てきた……………なんでだよ！

ひとりでやれということなのだろうか。しかし、誰と組むかと思いつながら引いたためにこの玉が出てきてちよつと苛立ちが募ってきた。

「ああ、そういえば色つきの玉追加するの忘れてたあ。まあ、引いちやったものはしょうがないし、今更やりなおしもあれだね」

高坂さんの言葉に音姫さんの表情が一瞬明るくなったと思ったらまた暗くなった。

義之と組むチャンスかと思えば実は違ったとわかって落ち込んだのだろう。

「てなわけだから吉井、あんた音姫達と組みなさい」

「僕はいいですけど……」

お二人はどうかかと視線を移すと、

「あ、明久君と一緒にか。頑張ろう、お〜」

「吉井ですか。まあ、女2人だけよりはまだマシかと思いますが、組むからにはきちんと役にたつてもらいますよ」

音姫さんはやはり若干テンション低めだけど、ムラサキさんはちよつとだけ明るさが出てきたような。気の所為？

「じゃあ、あたしと弟君は杉並討伐。音姫と吉井、ムラサキは土屋の方をお願いね」

「はいー」

そうして僕と音姫さん、ムラサキさんの3人はムツツリーニの討伐に当たることになった。

「さて、チームを組んでムツツリーニの担当になって探しているわけだけど……ムツツリーニの奴、今どこにいるのかな？」

「明久君、土屋君の行動パターンってわからない？」

「友人なのだから、少しくらいはわかってもいいものでしょ？」

ムツツリーニを討伐するにあたり、まずは奴の行方を探すところから始まっているが、肝心のムツツリーニの現在地がわからない。

「行動パターンなら簡単に予想つきますけど、どこにいるかまでは」

「ちなみにその行動とは？」

「あらゆる女子更衣室で盗撮だとか——」

「すぐに警察を呼びましょう」

「それは学校としても勘弁願いたいだろうから早まらないであげて」

僕の言葉を最後まで聞かずに携帯を取り出して通報しようとしたムラサキさんを止める。

普通の人からすれば至極正しい行動なんだろうけど。

「あなたの友人は一体なんなのですか？」

「それは……隠密に長けた犯罪者？」

駄目だ。ムツツリー二のイメージに合う言葉がそれしか見つからない。

「と、ともかく……盗撮にしてもなんにしてもまずは土屋君を捕まえなきゃね」

音姫さんがフォロー(?)をいれてムツツリー二搜索を再開した。

「それで、どうすれば土屋君を捕まえさせるかだけど……何かいい手はないかな？」

「捕まえる方法ですか。それなら……いや、なんでもないです」

「ちよつと、何ですか？ 言いかけておいて途中で切らないでもらえますか」

「い、いやあ……」

あいつを誘い出すのはひどく簡単だ。だが、その方法というのが簡単なようで難しい。

「何かあるの？」

「いや、その……誘い出すだけなら簡単なんですけど、その……」

「何ですか？ 土屋を捕まえるためなら多少の怪我くらいなんてことはありませんわ」

「いや、怪我はないよ。ただ……ちよつと恥ずかしいというか……」

「恥ずかしい？」

「一体なんですか？ 怒りませんから正直に述べなさい」

「そ、その……2人がちよつとでもスカートを捲ってくれば頭が割れるように痛い痛いいいいいい！」

「ふざけているのですかあなたは！」

嘘つき！ 怒らないって言ったじゃないか！

ていうか頭蓋が痛い！ この世界の女の子もこういった技能が卓越しているのか!?

「ム、ムラサキさん落ち着いて。それで、何でスカートを捲るのが土屋君をおびき出す手段なの？」

音姫さんがムラサキさんを止めてくれて助かったが、見れば笑顔なのに目が笑ってない。

ふざけた言葉を口にすれば間違いなく僕は死よりも恐ろしい目にあうだろう。

「いや、ムッツリーニは性に関しては一切の妥協を許さないって言いますか……そこにエロがあればどんな状況でも食らいつく愛執の強い奴で。スカートが3cmでも捲れば即座にその中身を殊死してカメラにおさめようとする奴で」

「あのですね、たかだかスカートをちよつと捲ったくらいでそんな食いつくほどの馬鹿なら——」

カシャカシャカシャカシャカシャツ！

ムラサキさんが自分のスカートを指で掴んでヒラヒラ揺らした途端、何処からかカメラのシャッター音が聞こえた。

この反応速度、見えるか見えないかのスカートの中身に執着するこの気迫、間違いない。

「そこか、ムッツリーニ！」

「……っ！ 迂闊……！（シュツ）」

「逃がすか！」

「ほ、本当に出ましたわ……」

「あはは……」

僕はムッツリーニの姿を見ると即座に追いかけた。

向こうもかなりの軽快な速さで校庭を駆け巡っていく。速さなら僕かだがムッツリーニの方が上。

流石数多の修羅場をくぐり抜けてきた百戦錬磨。その実力は伊達じゃない。

ムッツリーニとの距離が徐々に離されようとしているその時だった。

「あ、おーい！ 明久くん！」

麗らかな金声が聞こえて、僕らの十数メートルほど前方にななかちゃんの姿があった。

「おーい！ 何してるのかなー？」

ななかちちゃんが僕達の追いかけてこを見て先回りしたのか、偶然通りかかっただけなのかは知らないが、僕達の姿を見て声をかけてきた。

そして僕らにむけて手を振っていた時だった。

ヒュー

「きやあつー！」

前方から、ななかちちゃんにとっては背後から風が吹いてきた。

この風見学園の女子の制服のスカートつて、ちよつと短めだったりするんだよね。

そしてちよつとでも風の影響を受ければ自然と捲れてしまうわけ
で――

ブシャアアアアアア!

こんな風に大量の鼻血を噴出してしまふ奴もいるわけで。

「つて、ムツツリーニイイイ!!」

「きやあああああ! 土屋君、すごい血が出てるよ!」

「ど、どうしたというのですの!」

「ムツツリーニ! 気をしっかり持つんだ!」

「く……死して尚、一片の悔いなし……」

「ムツツリーニイイイ!!」

「ちよ、土屋君大丈夫!?! い、急いで救急車!」

鼻血でプールがでकिनばかりの滞流の出血をおこしたムツツリーニに応急処置を施し、救急車を呼んでギリギリ彼の一命を取り留めた。

ついでに杉並君の方は脱出ルートのひとつを見つけたものの杉並君には逃げられてしまったらしい。

彼らを一網打尽にできるのは当分先だろう。

第二十三話

「ふわぁ……真っ白だ」

少し遅めに起きた僕は通学路を歩いていた。

次ぐ悪路は昨日の夜中あたりから降り出したのか、今朝はもう街が雪で真っ白に覆われていた。

静かに降り続く雪と、風に煽られて雪の中に紛れて舞う桜の花びら。ギャップというか、妙な光景だ。

まあ、普通見ることのない景色でこれもありかなという思いも出てくる。幻想的というべきなのか、僕個人は好きなんだけど。

「明久君」

「へ？ あ、ななかちゃんと小恋ちゃん」

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう。でも、小恋ちゃんは珍しいね。僕よりは結構早い方だと思っただけど」

「遅いって言っても、まだ十分間に合う時間だよ」

「まあ、そうなんだけど」

「それにしても雪だね」

「うん」

「雪だね」

2人共雪が降っているのが嬉しいのか、結構浮かれて見える。

僕も近年ここまで雪が降るところを見たことがないので雪合戦をしたくなってくる。主に雄二に目いっぱい投げつけて雪だるま状態にしたいくらいだ。

「このまま振り続けて、ホワイトクリスマスになればいいのに」

「だよ。そうすれば雰囲気もバツチリだもんね」

「それはロマンチックだね」

そう言つてななかちゃんが僕の隣に歩み寄ってきた。

僕達は静かに降る雪を堪能しながら登校した。

門の近くまで来ると、楽しそうに会話をしていたななかちゃんが止まった。もちろん、会話もここで切れた。

どうしたのかと尋ねようとして門前の方に視線を移すと、そこには数人の生徒。以前ななかちゃんを追い回していた手芸部の人達だった。

「あれって、手芸部の……」

「諦め悪いなあ。まだななかを追いかけてるんだ」

「まだって……また追い回されてるの？」

「うん。ちよつと前にも軽音部の方まで転がりこんできて練習できなかったんだよ」

「はあ〜」

小恋ちゃんの言葉に思い出したのか、ななかちゃんも暗い表情で溜息をついた。

「どうする？ ななかちゃん」

「……もう、いい加減追い掛け回されるのも飽きたよね」

「そりゃ、毎回逃亡すればね……」

「最初は面白かったんだけど」

「じゃあ、ミスコンに出るの？」

「ううん」

「へ？」

観念するかと思えばまさかの否定の言葉に僕と小恋ちゃんは揃って間抜けな声を出した。

そしてななかちゃんはツカツカと待ち構える手芸部の生徒の前に向かっていった。

万が一があると困るから僕達もその後が続く。もしものことがあれば生徒会メンバーとしての権限を使おう。

まあ、そんな権限がある覚えはないけど、メンバーなのは確かだからなんとかなるだろう。

「白河さん。観念してくれましたか？」

「ううん。でも、今日は逃げないよ」

「どういう意味です？」

「ミスコンに出場する件、考えておく」

「え？ いいの？ ななかちちゃん」

「ふふ。一応、考えるだけだけどね」

あ、そういうことか。

「ほ、本当ですか？」

「うん。ただし、出るかもしれないし、出ないかもしれない」

「いや、もう考えてくださるだけで、大きく前進ですよ！」

手芸部はそう言い残して仲間を連れて早々にその場を去っていった。

あれ、ななかちちゃんが出ようが出まいが衣装を持って待ち伏せているような気がする。

「ふふ、やれやれ」

「くすくす。確かにああ言えば、しばらく大人しくしてくれるよね」

「考えたね、ななかちちゃん」

「まあね」

「でも、一時しのぎでしかないだろうから近いうちにまた別の対策考えた方がいいよ」

「うん、そうだね。あ、それじゃあ小恋も出てみれば？」

「へ？」

「だって、小恋可愛いもん」

「そ、そんなこと！ 月島は全然全く無理です、ハイ！」

ななかちちゃんの突然の提案に小恋ちゃんが若干テンパっていた。

すると去っていったはずの手芸部の1人が戻ってきた。

「無論、月島さんにもオファーを出していますがまだ色良い返事ももらえてないのです」

「あちや……」

「小恋ちゃんも頼まれてたの？」

「なんだー。そうだったの」

「あ、いや、あの……でも、キツパリ断ったんですけど」

「我々は、ミスコン当日まで、諦めませんからー！」

手芸部の1人は声高らかに宣言すると爽やかな笑顔で去っていった。

た。

まあ、考えてみれば小恋ちゃんも美少女だし、誘いが来ないとは思えない。ちよつとしつこい気がしないでもないけど、美少女が舞台で華やかになる瞬間がみたいのは男なら当然だ。

だから実を言えばあの手芸部の根性は正直嫌いじゃない。

「やるねー。流石小恋」

「いや、だから、断ったんだってばく。そ、それに、ななかの時みたい
に追い掛け回されたり、しつこく言われてないもん」

まあ、小恋ちゃんだったら下手すれば留置所まで送られそうだもん
ね。ななかちゃんはちよつと楽しんでる節があるから遠慮なしに追
い掛け回してたんだらうけど。

「それは私が逃げてたから」

「ううん。それにしたって、あんなにしつこくは勧誘されてないもん」
「でも当日まで諦めないって言ってたよ」

「確かに、また来そうだね。ななかちゃんに対する執念を考えると」
「だ、だから、私は出ませんし、ハードルが高すぎて出られません」

あくまでななかちゃんの方が人気があつてモテるということを強
調して逃げたいようだ。

「そっかあ。残念」

ななかちゃんも流石にこれ以上はというのと、小恋ちゃんの性格を
知ってるからか、説得を諦めた。

キーンコーンカーンコーン

そして、ななかちゃんが説得を諦めたと同時にチャイムが校庭に響
いて――

「つて、しまった!」

「ふあゝ、予鈴がく!」

「結局ギリギリになっちゃったね」

僕達は教室に向かって一斉に駆け出した。

クリパの準備は大分いいところまでいった。

かなり切羽詰っていたものの、みんなの頑張りがあってどうにか本番には間に合った。

義之も、毎晩音姫さん相手に練習もしていたからね。僕は同じクラスだからと巻き込まれそうになったけど、そこは音姫さんの性格を利用して逃げました。

まあ、演劇部のホープたる秀吉も交えて練習した甲斐があつてか義之の演技はかなりいいところまでいつてる。

この調子ならクリパは大丈夫だろう。ただし、杉並君やムツツリー二の動向が非常に気になるが。

まあ、だから現在も彼らの行方を探しているんだけど。それが中々見つからない。とりあえず生徒会室へ行こうかと思つた時だった。

「――聞こえなかつたのですか?」

唐突に僕の耳に少々刺を含んで、そしてどこまでも届くような鋭い声が聞こえてきた。

「――なさいと言っているのが、聞こえないのですか?」
「何だろう?」

気になつて声の聞こえた方へ足を運ぶとムラサキさんの姿が見えた。

苛立っているのか、ムラサキさんの表情にかなりの慍色が浮かんで見えた気がした。

「――いいだろう?」

「――いこうよ。な?」

そしてムラサキさんの正面には何人かの男子生徒が立っていた。

「……不愉快ですわ。何度も申し上げております。私は、あなた方と一緒にゆくつもりはありません」

「まあまあ、そう言わないで。楽しませてあげるからさ」

「そうそう。俺達が初音島のいい所を、いや、日本のいい所を、いくつぱい教えてあげるからさ」

「どうやらナンパのようだ。何年かはわからないけど。」

まあ、ムラサキさんの容姿ってかなり男を引きやすいからね。どの学年でもムラサキさんを誘いたい人も出てくるだろう。

「んじゃ、明日どう？ 明日のクリパ！ 俺らと一緒に回らない？」

「あ、いいねそれ！ それに決まり！」

男達はムラサキさんの話などまるで聞いていなかった。そんな中でムラサキさんの表情がどんどん険しくなっていく。

「いくらでも奢っちゃうから、期待しててよ」

「お前、なくに言ってるんだよ。エリカちゃんはお姫様だぞ？ 金持ちなんだから、お前なんか奢ってもらわなくても大丈夫だろ」

そして馴れ馴れしくもちゃんづけ。お姫様だってわかってるなら少しは態度に気をつかいなよ。

「あはは、そっかそっか！ では、エリカ姫、お手をどうぞ……なんてな！」

貴族か王子様の真似事だろうが、あれは酷すぎる。秀吉が見たらどんな苦情を出すことやら。

そしてその態度がムラサキさんの琴線に触れてしまったのか、ムラサキさんの身体が怒りに震えていた。

「……低俗な方には、何を言っても無駄ですわね」

「え？ なになに？ どっか行きたいところとかあるの？」

あの男は何を言っているのやら。今の台詞が聞こえなかったのかな。すっごい無神経。

「お断りします」

「何で？ 誰かと回る予定とかしてるの？」

「別に……誰とも予定しておりません」

「じゃ。フリーってことだろ？ だったらいいじゃん。俺らが相手してあげるから」

「ふんっ……何様のつもりかしら？」

「うん？ 何だよそれ」

今度の言葉は聞こえたのか、ムラサキさんにナンパした男子生徒達が不快げに眉をひそめた。

「とにかく、私は結構です。あなた方と遊びに行くつもりもありませんし、クリスマスパーティーもあなた方の案内は必要ありません」

「何だよ……せつかく誘ってやってんのに」

なんだかちよつと逆ギレしてるな。まるで誘いを断ったムラサキさんが悪いように言ってるし。

「あなた方の誘いなど、ただかなくて結構です。わかったら、お引き取りください」

「お嬢様だか、お姫様だか知らねーけど、何すました態度取ってんだよ」

「ふん。高くとまりやがって」

「お黙りなさい、野蛮人」

「……は？」

「今、なんつった？」

ムラサキさんの一言にナンパ生徒の顔色が変わった。

「聞こえなかったのですか？ 私はあなた方のような野蛮人と付き合いうつもりはない。そうはつきりと申し上げたのですわ」

あれは流石にマズイ。ここまで来たらああいったナンパ男はどんな行動をとるか。

「それとも、あなたの顔についているその耳は、ただの飾りですか？

でしたら、そんな無駄な物など、さっさと取り除いてしまいなさい。邪魔です」

「何だと！」

「その空っぽの頭でも理解できたのなら、さっさと私の前から立ち去りなさい！」

強く言い放ったムラサキさんだけど、見れば少し肩が震えていた。

最初は怒りによるものかと思ったけど、いくら強気な態度でいても、ひつたくり犯を投げとばすほどの強さを持って、彼女はあくまで女の子なんだ。

こんな状況に不安を感じないなんてことは決してないんだ。

「テメエ……」

ナンパ男の方はムラサキさんの言葉で頭に血が上ったのか、かなりヤバげな状態だ。

いくらなんでもこのまま放っておけばそれこそマズイことになるな。流石にこれ以上の傍観はやめだ。

「あ、ムラサキさん。こんな所にいたんだ」

かなりわざとらしいけど、僕はムラサキさんのもとへ姿を現した。

「なっ!? 何だお前」

第三者が来たからなのか、僕を驚いた表情で見るナンパ男達とムラサキさん。

「えっ!? あ、あなた……吉井……」

「ああ、やつと見つかったよ」

「んだよ、お前には関係ねえだろ。向こう行ってろ」

すぐにナンパ男が表情を険しくして僕を睨みつけてきた。

「そうは言っても、流石に彼女困ってたわけだし。なんかまずそうだったから」

「べ、別に私は——」

「それに、クリパの誘い断られたみたいだけど。それでも彼女に何か話でもある?」

ムラサキさんの言葉を遮ってキツイ一言を放った。

しつこく誘って断られた挙句、野蛮人と罵られたのだ。その事実が全員が複雑そうな表情を浮かべる。

「テメエ……」

「ああ、これ以上しつこくつきまとうなら僕が相手になるけど?」

「何だと……テメエには関係ねえだろうが」

「関係あるよ。だって……僕も生徒会のメンバーだから」

「はあ? テメエみたいなバカ面な生徒会役員がいるかよ」

……うん。もうバカって言われるのには慣れたよ。

「まあ、入ったのはつい最近だからね。でも、これ以上何かやるような生徒会権限つかってそれ相応の罰を受けてもらうよ」

「ふざけんな。テメエにそんな権限があるかよ」

うらむ、これで怯んでくれると助かったんだけど。流石にこのハツタリは無理か。

「じゃあ、いつそここで話でもつけようか？ それとも、物陰でする？ 僕は一向に構わないけど？」

あとで音姫さんや高坂さんにひどく怒られそうだけど、こういった輩には実力行使もやむを得ないと思う。

「そうかよ。なら遠慮なく——」

「ま、待て」

いざ荒事がと思うと、ナンパ男の仲間が止めに入る。

「何だよ。お前、コイツにビビってるのか？」

「い、いや……コイツ、どっかで見た気がしたんだが。3年の吉井先輩だ」

「吉井……げっ!? 2・3階から飛び降りても平気な面して不良をボコして、トラックに轢かれてもかすり傷程度で済ましたあの化物か!?!」

一体あの噂にどんな尾ひれがついたのか。まあ、そのおかげで向こうは躊躇ってくれたようだ。

ナンパ男のひとりが僕を恨めしそうに睨みつけてから、

「ちっ、行くぞ」

そう言っただけのナンパ男を連れてその場を去っていった。とりあえずは難を逃れたようだ。

奴らの姿が完全に見えなくなったところで僕はムラサキさんの方へ向き直る。

「えっと、大丈夫？」

「えっ!? あ、なに？」

まだ僕がこの場にいたという状況についていけなかったのか、僕が声をかけるとびっくりして視線を合わせた。

「ん、大丈夫かなって。途中からだっただけけど、さっき以上の事はなかったかなって」

「だ、大丈夫に決まってるでしょ。べ、別にあなたの助けなど必要あり

ませんでしたわ。あんな低俗な方々など、私ひとりでもできませんでした。ええ、もちろんですとも」

すごい強がつてるけど、かすかに震えてる肩が彼女の言葉とは反対方向へ訴えていた。

考えてみれば異国の地にたったひとりで頑張っているのだ。不安になるなんてのが無理だろう。それゆえの強がり。

なんか誰かと似てるんだよなあ。

「……な、何よ?」

「いや、何かムラサキさんって……僕の友達と似てる気がするんだよね」

「友達って……誰ですか?」

「いや、誰っていうと……」

海外から日本に来て知音もいなく、慣れない日本で四苦八苦して……それでも頑張ってる女の子。

……あ、そうか。

「美波に似てるんだ」

「ミナミ?」

「うん。君と同じく海外から来た娘でね。やけに強がりなところとかソックリだよ。なんというか、ツンデレっていうの? そんな感じ」

うん。この勝気な表情といい、強がりな面といい、結構美波と似てるところが多いんだ。

だからなんとなく姫様だというのを知る以前から友達感覚があったわけだ。

「ツンデレ……というのは誰の事を指すのか。教えてくださいませんか?」

背後からいい笑顔で……しかし、目が笑っていないムラサキさんが迫って僕を諦視する。

ああ、この手の女の子には目の前で言うのはアレだった。うむ、どうしたものか。

「……さあて! 今日杉並君とムツツリーニを探し出すぞ!」

「ちよっと待ちなさい! そのツンデレというのが誰を指すのかちや

んと説明なさい！ 説明しろ！」

後ろからムラサキさんの声が聞こえたが、今の彼女を相手にしたらなんとなく怖い目に合う気がする。というか、絶対に痛い目を見る。僕は適当なところでムラサキさんを撒いて逃げた。

「ふう……どうにか逃げ切った」

僕はムラサキさんから逃げ出し、現在3階の校舎で一休みしていた。

「にしても、みんな気分はすっかりお祭りって感じかな？」

見れば意味不明の飾り付けをしている教室や、妙な着ぐるみを着て走り回っている生徒達。

そして所々でクリパの誘いをしている姿やその手の話題で盛り上がっている生徒達が多くいた。

「……そういえば、ななかちゃん、クリパと一緒に回るみたいなことを言ってた気がしたけど。どうなんだろう？」

あの時はナンパした男を退けるためについた嘘だけど、ななかちゃん自身はどうなんだろう？

もし、本当に僕と回ってるくれるなら……それはどれだけ夢心地なのか。

「調子に乗りすぎなのよ」

「すみませんした。自分、調子くれてました」

誰かからツツコミを受け、条件反射で謝った。……あれ？ 今のは？

「あいつ、いつもあんな調子でしょ」

「いい気味だっつーの」

「ていうか、あたし、元々あいつ嫌いだったのよねー」

近くで女子が何やら怖い会話をしていた。どうやら僕に向けて言った言葉じゃなかったようだ。

「今頃下心ある男子に慰めてもらってるんじゃないの?」

「あははー。ありえるー。媚び媚びの笑顔作ってさー」

「ムカつくー。学校やめて水商売でもすればいいのよ、あんな奴」

なんとというか、誰に対しての言葉かは知らないけど、ああいうのは見てていい気分にはなれないなあ。

せっかくのお祭り気分を台無しにはしないでもらいたい。

できればクリパ当日は控えてほしいものだ。

「ん?」

音楽室の前を通ると扉が開いて、中から人の気配がした。

僕はそつと中を覗いてみる。

「……………」

中にいたのはななかちちゃんだった。いつもと比べてえらいおとなしい気がする。

なんだか、落ち込んでるようにも見えてしまう。何かあったのだろうか?

「ななかちちゃん?」

思わずノックもなしにドアを開けて一声かけた。

「あ、明久君!」

一瞬びくりと肩を震わせたと思うと、笑顔で振り返ってきた。

おかしいな。さつきはどこか辛そうにしていた気がしたけど。

「どうかしたの?」

「うーん。ちよつと音楽室通ったらななかちちゃんが見えたから」

「そうなんだ……」

なんだか、ななかちちゃんが妙に落ち着かない気がする。

「ななかちちゃんはここで何してたの?」

「別に。外の雪眺めていただけ」

見ればまた雪が降り出していた。こりゃあ、明日積もるかもしれない。外で店を開く生徒は大変だろうなあ。

積雪量によってはテントが壊れる、なんて事があってもおかしくない。

「そっか」

それにしてもやっぱりどこかおかしい。なんだか、喋り方がすごいよそよそしい。

いつものハキハキとした態度とは打って変わってる。

「あ、それじゃ、私帰るから」

「え？ うん、うん……」

「じゃあ」

そう言っとななちゃんが机にあった鞆に手を伸ばした。

「あっ！」

ななちゃんが手を滑らせて鞆を床に落とした。その拍子に中の教科書やノートなどが散らばっていった。

「ああ……」

「あちゃあ。大丈夫？ 手伝うよ」

「あ、いいの、やめて、触らないで！」

「……………何これ？」

落ちたノートの中を開いたものがあり、それには何ページかが破か
れていた。

ノート1冊だけじゃない。他のノートや教科書も、同様に何ページ
か破られていた。

「……………ねえ、これななちゃんじゃないよね？ 自分で自分のノート
を破くなんてしないよね？」

「…………」

さつき通りすがりの女子生徒達の事を思い出した。まさか、さつきの
会話の対象は…………。

「…………あ、あはは。私つてば色々目立つからー」

少し間を置いて出てきたのはいつもと変わらないよう装ったなな
かちゃんの言葉。

「なんていうか、有名説？ そんな感じ」

「…………なんで？ 何でそれでななちゃんがこんなイジメを受けない
といけないわけ？」

「さ〜？ 私にもわっかんない」

「そんなのないよ。おかしいでしょ」

「そうかな?」

「そうでしょ。ななかちゃんは何もしてないじゃないか」

「あはは。もういいじゃん。こんな事しよっちゅうで……」

「ふざけんな!」

許せない! ななかちゃんが何をやったっていうんだ!

仮に何かやらかしたとしても、こんな悪質な悪戯をはいそうですかと見過ごせるかよ!

「いくらなんでも、やっていいことと悪い事があるだろう!」

「明久君!」

僕が行こうとするとななかちゃんが僕の手を握って止めてきた。

「いいって。別に誰かが困ってるわけじゃ……」

「ななかちゃんは? ななかちゃんはどうかの? こんなことされて、どう思ってるの?」

「私は別に。それよりこのあと……」

「ななかちゃん!」

思わず大声を上げてしまった。本気で……女の子相手に本気で怒鳴りつけた。

ななかちゃんの身体がビクンと、すくんだ。言ってからしまったと思っただ。

「ご、ごめん……大声出して」

「う、ううん」

それからは2人共黙りこくった。でも、なんで……。

「何でなんだよ。ななかちゃんは純粋で、素直で、優しいのに、なんでこんなことになるんだよ」

「明久君……」

「こんなの間違ってるよ! なんでななかちゃんが妬みを買わなきゃいけないんだよ! ただ、人一倍男友達が多いだけで、男子がななかちゃんを好きになっただけで、ただそれだけのことなのに!」

「……………」

「何でななかちゃんなんだよ! あの子達だって、妬まれるようなことがないわけじゃないのに……いや、そもそも妬まれない人なんているわ

けないのに！　なんでなんだよ！」

駄目だ。頭に血が上って何が言いたくて、何を言っただけか、わからない。

言葉が、見つからない。落ち着かなきゃと思っただけなのに、出てくる言葉は怒りまかせのものばかり。

でも、ただひとつ思い浮かぶのは。悔しいという言葉だけだ。ななちゃんを慰めたい。でも言葉が見つからない。

あの子達を見つけて叱る。でもどうやってななちゃんの事をわからせる。仮にわからせたところでそんなもの一時しのぎでしかない。

それにこんなことをななちゃんが喜ぶとは思えない。

何もできない自分が悔しい。

「……ありがとう」

そつと呟き、ななちゃんが僕の手を握ってきた。

「そんな風に、心から怒ってくれて。私に、真面目に怒ってくれて」

「僕は……ななちゃんが怒ってるんじゃないよ……」

「ううん、怒ってくれたよ。笑って嘘ついて、誤魔化そうとした私を、

明久君は怒ってくれた」

「……………」

違う。僕が怒ってるのは廊下で見た彼女達に対してだ。そう言いたいのに、何も言えない。

否定したいのにできない。

「こんなことした人達にも、今怒ってる。普通はね、こんなことした人達みたいに、誰でも嫉妬や下心はあるんだよ」

それはわかる。文月学園ではそういった負の感情が渦巻いていた。いや、というよりもその中心みたいなものだ。

特にFクラスのみんだ。僕だって、あの学園にいた頃は嫉妬や下心満載だった。今だって少しは落ち着いた気もするけど、時々はある。

「でもね、明久君には。そんなのがないの」

「へ？」

なのに、ななかちゃんは僕にはそんなものなどないと言った。

「何言ってるの？ 僕にだってその……下心とか——」

「あっても……明久君の場合、それはまつすぐで、綺麗なんだ」

「へ？」

「綺麗で……一緒にいると、本当に落ち着くっていうか、安心するんだ。明久君は、私に……ううん。誰にも嘘をつかないんだって思えるから」

そう言ったななかちゃんはいつもの笑顔だった。なんてことない日常の中で見せる、綺麗な笑顔。

「……本当はね、こんなことされて、すごく腹が立って、悲しくなって……辛くなって思ったよ。でも、明久君が声をかけて、怒ってくれて、私……辛くなくなった」

「ななかちゃん……」

「だから、ありがとう」

僕の手を握った自分の手に少し力を加えて、笑顔で、そう一言。その一言でなんか全身から力が抜けるようだった。

わかんなかった。ななかちゃんはずっと笑顔でいた。これまでもずっと。

そんな中で、好意の数だけ妬みもあったはずなんだ。そんな中を、ずっと笑顔でひとつで生き抜いてきたんだ。

こんなイジメを受けても、何に対しても、ずっと……今僕に見せてる、その笑顔で。

「……本当に、ななかちゃんって、可愛くて優しくって、強いなって思うよ」

「うわ。偶に明久君って、普通だったら絶対恥ずかしくて言えない事を平然と言うよね」

「え？ そんなに恥ずかしい事だった？」

ただななかちゃんのイメージをそのまま言っただけでもりなだけで。「くすくすくす」

「うわあ、何でか知らないけど恥ずかしくなってきた」

良くも悪くも、僕とななかちゃんの調子がいつもの状態に戻った気

がした。

「じゃ、明久君。一緒に帰ろ？」

「え？ あ、僕は生徒会の用が……」

「行こう♪」

「あ、ちよっ!？」

僕の答えも聞かず、ななかちゃんは僕の手を引っ張って音楽室を出て行った。

ふと横からななかちゃんの笑顔を覗いて、仕方ないなと思った。音姫さんには今夜謝っておこう。

今のななかちゃんの笑顔を見たら土下座の1回や2回など安いものだ。

第二十四話

学校帰り……。と言っても、途中でななかちゃんを送ったので結構遅めの帰りとなった。

放課後色々あつて、ななかちゃんの事は心配だったけど、まああれだけ元気が戻ったのなら大丈夫だろう。

そして僕は吉乃家の食材がそろそろ底を尽きそうだということを感じ出してスーパーに寄ろうと商店街へ向かっていた。

入れば商店街はすっかりクリスマススムードが高まっていた。所々にクリスマスツリーが飾られており、多量のイルミネーションがあちこちの店で装飾されていた。

街中にはジングルベルのBGMがループして流れてクリスマス気分は更に高々となってくる。

加えてここぞとばかりに甘い空気を出すカップル達も見かけられる。中にはうちの学園の生徒もいる。

あそこまでピンク色の空気に当てられるとちよつと迷惑だと思わないこともないけど。そんな妬みが頭の中に浮かんでくる。

自分の中から込上がってくる嫉妬の感情を抑えて買い物に行こうと歩行を早めようとした時だった。

横目である一点を見た。そして見知らぬ横顔を見つけた。集中して見ようとしなければ見つかりそうにないほどの影になってる部分に。

揺れる綺麗なアッシュブロンドの髪の毛。真珠のように艶のある白い肌とルビーのような紅い瞳。思わず見惚れてしまうほどだった。

僕はそこに用なんてないのに思わずそっちへ足を向けて歩いて行った。

「こんにちは」

僕は影に敷いたレジャーシートの上にちよこんと座っていた女の子に声をかけた。

「えっ？」

女の子は僕が声をかけたことに驚いたのか、キョトンとした表情で

声を上げた。

そして、その整った顔がこつちを振り向いた。うん、影でもすごいのに、真正面を向いたらより可愛いと思えてしまう。

綺麗なアッシュブロンドの髪の毛を揺らしながらそのルビーのよ
うな瞳で僕を見つめた。

「あのう……吉井明久です。よろしく」

第一声で自分の自己紹介ってどうかと思うけど、なんとなく言っ
てしまった。

「あ、あたしはアイシア。よろしくね」

綺麗な女の子、アイシアさんは僕の自己紹介に素直に笑顔で自己紹
介を返した。

「えっと、アイシアさんって学生？」

見た目からして僕らとあまり変わらない、というか年下にも見え
る。

「ううん。こう見えても、学校はだいぶ前に卒業したから」

ていうことは少なくとも4つは年上ってことか。失礼ながらちっ
ともそうは見えない。

流石に姫路さんのお母さんまではいかないけど、それでも結構幼く
見える。それに、そのギャップが前者とさくらさんを連想させるな。

「ところで君はあたしに何か用？ もしかして、ナンパ？」

ちよつと悪戯っぽい笑みを浮かべて僕に尋ねてきた。

「ち、違いますよ。ちよつと珍しいものを見かけたから興味本位で見
に来たって感じですよ。えっと……アイシアさんって呼べばいいで
すか？」

「アイシアでいいよ。そつちの方が気楽だし、敬語も使わなくていい
から」

見た感じ、北欧系の女の子だし。外国人ならではのフランクさなの
か、その辺りはリンネ君を連想させた。

外国の人って、基本的に気さくっていうか……フレンドリーなの
かな？

「じゃあ、アイシアちゃん」

「うん。えっと、あたしは明久君って呼べばいいかな？」

「うん。好きに呼んでくれればいいよ」

「じゃあ、明久君で。よろしくね」

にっこりと微笑んでアイシアちゃんが僕の名前を呼んだ。

「それで、アイシアちゃん。今更なんだけど、これは何かかな？」

僕はアイシアちゃんの周りに置かれてるいかにも手作りな玩具などを並べていたものを指差して尋ねた。

「え？ 見てわかんない？」

いや、多分そうなのかなって思うところはあんだけど、イマイチ自信が出てこない。

「えっと……フリーマーケットですか？」

「うん♪」

まあ、普通はそうだよ。値札とかないけど、こんなところでこんな大量の手作り玩具を見れば普通はフリマを想像するだろう。ただ、その――

「それ、売れます？」

「……うう」

「うわあ〜！ ごめんなさい！ でもこれ、ほら。可愛いと思うよ！」

「この羊とか！」

「羊じゃなくて馬です……」

一瞬にして泣きそうなほどアイシアちゃんの表情が曇って僕は手近にあった玩具を手にとって必死に慰める。失敗しちゃったけど。

「せっかく、もうすぐクリスマスだって言うのに、誰も玩具に興味を示さないんだよ〜」

「そ、それは……困ったな〜」

目を泳がせながら適当な事を言った。この時代の子供なら大体はゲームとかそういうものを欲しがるとね。僕もそのひとりだし。

外国の、機械的な技術が発達してない所なら多少は売れるかもしれないけど。

「北欧や南米だと、いっぱい子供達が集まってきたのにな〜」

アイシアちゃんが少し寂しそうに木でできた車を手で動かす。

うくん。僕もあまりこういった玩具には興味ないけど、この手作り感とか見た目の可愛さとかはなんとなく目を引くものがある気がする。

「へ〜……色々あるんだね」

車とか、人形とか、家とか、動物など色んな形の木でできた玩具を見て、時々手に持ったりしてじっくり観察する。

なんだか、どの玩具も見れば懐かしい感じがするし、手に持てば温かさが流れるような感じがした。

「あ、それ……」

僕が馬の玩具を手にとると、アイシアちゃんが声を上げた。

「ん？ これがどうかした？」

「あ、なんでもないよ。それ、気に入った？」

気に入ったっていうか、持つてるとなんとなく心地いい気がするんがよね。

「まあ、そんな感じかな？」

「じゃあ、買ってくれる？」

うくん……あまりこういう玩具を買う気はないんだけど、これだけの手作りの玩具を作ったのはアイシアちゃんなんだ。

これだけ作るのに一体どれだけの時間と労力が必要としていたのか、そしてそれを売る時の大変さはどれほどなのか。

これだけのものを一生懸命作ったのだからアイシアちゃんもできれば買ってほしいだろう。

「えつと……いくらかな？」

「えへへ。300円になります」

笑顔を浮かべてアイシアちゃんが掌を差し出した。僕はその上に100硬貨を3枚のせて馬の玩具を買い取った。

「まいどあり〜♪」

弾んだ声と共にアイシアが300円を握った。

「大切にしてね。それ」

「うん」

あ、そうだ。彼女も都合もあるだろうけど。

「アイシアちゃん。明日から風見学園でクリスマスパーティーやるの知ってる？」

「え？ うん、知ってるよ。あたし、風見学園に通ってたことあるもん。といっても、1年だけだけどね」

「あ、じゃあ先輩なんだ」

「うん。それで？」

「明日からクリパだからアイシアちゃんも来てみればって思ってた。まあ、都合悪いなら無理にとは言わないけど、よければ僕も案内するから」

「うくん……」

アイシアちゃんは少し考える素振りを見せて、

「うん、考えとくね」

すぐに笑顔でアイシアちゃんは答えた。

「それじゃあ、僕は買い物があるから」

「うん。またね」

手を振ってアイシアちゃんから離れる。見えなくなるまでアイシアちゃんは僕を見つめていた。時折僕も振り向いてその姿が見えた。

クリスマスパーティー、来てくれるといいな。

俺、土屋康太の放課後は忙しい……。

日中では授業もあることから、よほどの急用がない限りは大人しくしている。

しかし、休み時間や放課後になれば校内を歩く美少女などを写真におさめようと日々努力を怠らず、修行もかねて写真撮りに明け暮れていた。

しかし、本日の土屋康太の仕事は残念ながら女を写真に撮ることで

はなかった。

実は数日前、我が盟友、杉並からの依頼があった。

『同志土屋よ。お前には今回、ある任務を頼みたい。今学園中で怪談が流行っているのは知っているな？ 同志土屋にはその怪談をすべて聞き、それぞれの怪談の真相を探ってもらいたい』

なにゆえに怪談の聞き込みなどしなければならぬかと億劫だったが、杉並の話では――

『その怪談に出てくる幽霊と、それに巻き込まれた生徒というのがほとんど美少女の生徒だという。故に、ほとんどの怪談が女子の間で流行っている。だから同志土屋よ、全ての真相をあばき、しかとその目で噂の幽霊をその写真におさめてみせよ！』

美少女という単語が入り、思わず俺はふたつ返事でその依頼を引き受けてしまった。

こんなものは俺の専門職ではないが、依頼料として別の学園の美少女のリストも取ってくれるそうなので後のデータ収集のために今回はと協力していた。

そして、数日前から女子の集団の死角から写真を撮りつつ手近にある盗聴器も使って女子達の会話を盗み聞きし、情報収集を始めた。

どんな怪談かと言えば、『血まみれの旋律』、『トイレの開かずの扉』、『呻く人体模型』、『旧焼却炉の怪』、『屋上のA子さん』、『昇降口の子供達』、『姿見の噂』。

大体がどこの学校にでもあるようなものもあるが、内容はやたらとグロイ。俺でも割と怖いと思うくらいだった。

そして最後に、この七不思議の内容を全部聞いた者は幽霊に会えるという噂もある。

そのために、迷信だと思いつつも女子は怪談の情報を集めるが、たいていは2つか3つで内容が濃いあまりに挫折してしまう。

頑張っても最高6つ目で挫折してしまう者もいた。俺はそのような妄言など女子が校庭で着替えているという言葉に比べれば信じるに値しない。

なので七つの怪談を全て聞いたが、幽霊などやはり見えることはな

かった。なので所詮は噂かと嘆息した。

とにかく、これで杉並の依頼は果たした。俺は杉並に報告しようとして非公式新聞部の部室へと足を運ぼうと怪談の踊り場を通った時だった。

「……………」

ちょうど角の所でしゃがみこんでいる少女がいた。外見だけなら中々の美少女だ。

しかも、しゃがみこんでいるから……………見え、見え……………見え……………などと言ってる場合じゃない。

この時間はもうほとんどの生徒は残っていない筈。その上、この少女のことは見たことがない。

これだけのレベルならこの俺が忘れるはずもない。覚えている限りの全校重要レベルの美少女のリストを脳内で検索するがヒットするものはなかった。

一体この女は何者？　そして何故こんな所にいる？　単に体調が悪いただけなのか。そうなら一応家か保健室に送ろう。

このまま部室に戻る姿を見られても後で困ることになる。

「……………どうかしたのか？」

「……………」

俺は声をかけるが、少女からの返事はなかった。

「……………何をしている？」

今度は耳元で声をかけた。

「……………へ？」

ようやく反応した少女の声はかなり幼げなものだった。

少女が顔を上げるとパツチリとした大きな瞳と、アイスグリーンの髪が揺れた。

「……………」

「……………」

互いにしばらくの間見つめあった。

「……………大丈夫か？」

俺は体調を診るために肩に手を置いた。

「わわっ!？」

少女は驚いたのか、肩に置いた手を見てから俺の顔をじつと見た。

「あの、私が……私が見えていますか？」

「ん？」

何のことかわからなかった。何か視覚を欺くための仕掛けをしたつもりだったのか？

にしては何もそれらしい仕掛けなど見当たらない。少女の言っている事がわからなかった。

「だから、あなたに私の姿が見えていますか？」

「……見えてなければ声などかけていない」

これが率直な感想だ。するとぐいっと、身を乗り出してきた。

そして俺の腕を掴んでまるで逃がさないようにしているようだった。

「……うわ〜」

少女は何か感動したように自分の手が触れてる俺の手をじつくりと見つめていた。無邪気な笑顔、この手が塞がっていないければ是非とも写真におさめたい。

「あ、あのー！」

「ん？」

「私、小鳥遊まひるって言います！ 付属の1年生です！ 小鳥が遊

ぶって書いてタカナシに、平仮名でまひるです！」

「……付属3年、土屋康太」

「つてことは、先輩なんですね。先輩って呼んでいいですか？」

「……好きにすればいい」

やたらと人懐っこいやつだ。しかも、控えめではあるが、いい感触が俺の腕に。工藤といい勝負のくつつき具合だ。

邪気がないぶん、工藤よりも強敵かもしれない。

「それで、小鳥遊は……」

「まひるでお願いしますー！」

「……まひるは何をしていた？」

「はあ、よかった〜。先輩に会えて」

会話のキャッチボールができていなかった。さつきから何を喜んでいるのだ。

こちらとしてはこの愛嬌たっぷりの少女の行動ひとつひとつが撮影するに値するものばかりなので嬉しい限りなのだが。

「もう一度聞くんが、ここで何をしていた？ 何か困っているのか？」

「はい。もう困りまくりですよ。例えるなら……お財布の中に500円玉があると思って、意気揚々と（中略）だった事に気がついた時くらい困りまくりです！」

いやに長い例え。そして異常に高いテンション。見ていて飽きることはない。撮影対象として1・2を争うほどだ。

「あの、実はですね、先輩」

「何だ？」

「私、幽霊なんですよ！」

……………。

「もう、会う人、会う人、誰も私に気づいてくれなくて。だから、先輩が私に気づいてくれて、本当に嬉しいです！」

「……幽霊？」

「はいー」

俺の疑問にまひるが笑顔で答える。

何故に自分を幽霊だと自称する。怪談が流行っているからそう言うてからかう少女が出始めたか？

「あ、信じてませんか？」

「……証拠がない」

「私は嘘がつけない性格です！」

「……」

物的証拠にはなりえないが、何故かその言葉には説得力がある気がする。

「……壁をすり抜けるとかはできないのか？」

「できますよ？」

「……是非」

これでもしこの女が壁をすり抜けるという現象を見せれば幽霊と

認めざるをえまい。

「へっへっ。それでは、今からこの壁を通り抜けます！　と言っても、手だけですけど」

少し頬を染めてまひるは壁に手を当てて、力を込めた。

「ん、んんん」

意識を集中させ、数秒もすると手がゆっくりと壁の中に入り込んだ。

手品でもなんでもない。コンクリートの壁をまるで粘土のごとく手をずぶりとめりこませた。

「えへへ、どうですか？」

「……怪奇現象」

確かにこれならば幽霊と認めざるをえまい。これでこの少女が幽霊だという確証が持てた。

このような業は流石の俺でも無理だ。

「えへへ。私に恐れおののいてもいいですよ？」

「……それは無理」

「うわ。即答ですね」

ここまで邪気のない幽霊を怖がれというのは無理な話。いや、例え邪気があるうと幽霊であろうと、相手が美少女なら俺はいつでも大歓迎。

「ふう……あれ？　あれれ？　うわわ！」

「……どうした？」

「う、うう……手が、手が抜けません。どうしよう」

「……………」

俺は元々寡黙な方なのだが、この状況を見て更に口を閉じた。

ここまで能気な幽霊がいるのだろうか。いや、今日の前に存在しているのだが、これを幽霊と表現していいものか。

「うう、大ピンチです。大ピンチですよ先輩。例えるなら、飛び乗った満員電車の中で（中略）つてくらい大ピンチですよー！」

またも長い例え話を聞いて本当に幽霊なのか再び疑わしくなっていく。

「……とにかく手を入れるために力を込めたならその時と同じようにして反対のイメージを浮かべればいい」

「あ、そうですね。ん、ん〜!」

それからまひるの手が抜けたのは10分後だった。この力、盗撮に使えまいかと思ったが、タイムラグが激しいために実践では使えないと判断して断念した。

「ふう……抜けました〜」

ようやく抜け出したまひるは床にへたり込んで肩を揺らしていた。

「それで、さっきから聞こうとしたが、お前は何に困っている?」

「あ、そうでした! その、出会ったばかりの方にお願ひするのは厚かましいと思うのですが……その、私を成仏させてください!」

ぐつと、力を込めて俺に向かって言った。

「……成仏?」

「はい!」

「……何故成仏なんてする?」

「へ?」

ぽかんとした表情でまひるが首を傾げた。

「未練があるからそれを探したい。成仏したいなどというからにはそれが理由なのはわかる。だが、それを成し遂げた先に何がある?」

死んでるからと言って天国や地獄に行かなければならないなどという決まりなどけっしてない。

俺も幾度か死線を彷徨っていたことがあるからわかる。本当に死ねば、その先は果てしない無だ。

「死んだからと言って天界に行かなければならないなどという法はない。死んだからといってやりたいことが全部なくなるわけではない。触れることはできずとも映画を楽しむなり色んな国に行ったりやれることはいくらでもあるだろう」

「……………」

「それでも成仏を頼みたいのなら引き受けてやらないでもない。まずはお前の本当にしたいことを見つけて。明日はクリスマスパーティーだ。たくさんの人間を見て自分をみつめる機会もあるだろう。

その時にでも答えを見つければいい」

俺はそれだけを言い残してまひるを置いていき、踊り場を去った。

あいつがどんな道を選ぼうと、俺はまひるの手伝いをしたいと思っ
た。そうすることで、俺の中でまた何かを満たされる気がしたから。

第二十五話

『というこで、本日の14時からクリスマスパーティーが開催されます。パーティーには一般のお客さんなど学院外からの来訪者もたくさん訪れます。なので、風見学園の生徒として恥ずかしくない行動をするよう心掛けてください』

本日12月23日。待ちに待ったクリスマスパスパーティーが本日開催される。

体育館の壇上でさくらさんがクリスマスパーティーの注意事項を述べている。

ようやくクリパが始まろうとしてみんな一気に気持ちが高ぶっているみたいでざわざわと騒いでいる。

「おい、お前ら……今日の放課後、どうすんだ？」

「僕自身も高揚を覚えていると、渉が声をかけてきた。」

「放課後？」

「んあ……特に決めてはいないけど」

「アホかお前らは！ せっかく彼女ができるチャンスなんだぞ！ 今日頑張らなくていつ頑張るんだ！」

拳を力いっぱい握り締めながら宣言する。なんとなくかっこいいと一瞬思った。

しかしどうしたものか。パーティーの間にやることは少しは考えてるけど、放課後はどうだろう。

アイシアちゃん、今日ちゃんと来れるかな？

「ん？ あ、そういうことですか？ もう余裕ってことなんですね、この明久様と義之様は」

「いや、別に余裕ってわけじゃないけどさ」

「僕らの場合、生徒会のこともあるし」

「そーいやお前ら、生徒会に入ったんだったな。ああ……てことはお前ら、始まりから終わりまでずっと音姫先輩や噂の美少女転校生のムラサキと一緒にわけか」

「いや、四六時中一緒ってわけじゃ……」

「というか、ムラサキが生徒会に入ってるの知ってたのかよ」

「土屋に聞いた」

「なるほど」

流石はムツツリーニ。生徒会の美少女メンバーも既にチエツク済みということか。

チエツクといえ、小恋ちゃんは大丈夫なのだろうか？ 練習の時も時々体調が悪い感じだし、少し前にも風邪で倒れそうになって義之が自宅まで送った時もあったし。

今日だって少し調子が悪そう。杏ちゃんも無表情のようどころか落ち着かない感じがする。自分のつくった脚本が人前で演じられるのも少なからず緊張するもんだろうし。

「でも、お前らの中には何人か候補がいそうな感じだけどさ」

「候補？ って何のだよ」

「んなもん、決まってるんだろ。恋人候補よ」

「はあ？」

渉の言葉に義之は間抜けな声を出した。

「アホかお前は。そんなんじゃないって」

「そうだよ」

「ふくん。なんかいやに真剣な顔してたからってつきり誰かの事考えてるかと思ったが」

「そういうお前はどうかなんだよ？」

「俺か？ 俺は……まあ、なんだ」

いつもの渉にしてはえらい歯切れの悪い言い回しだ。

「なんつーかさ、今回ばかりはちよつと真面目に決めてみようと思ってるさ」

いつもの渉を見る人なら何言ってるんだと思うだろうが、今の彼の目は真剣なものだった。

「そろそろさ、俺もちゃんとした彼女ほしいわけだしな。ま、お互い頑張ろうぜ」

にやりと笑みを浮かべて手を差し出し、僕達はそれに手を乗せて頷

いた。

しかし彼女ねえ。僕の場合、どうなんだろう。僕と恋人になろうなんて人がいるとは思えないけど。

でも、もし彼女ができるとなれば……例えばそうだな。ななかちやんとか……？

……あれ？　なんで今真っ先にななかちやんのことを思いついたんだろう？

こういったのは身近な友達から考える事なのに何故か真っ先にななかちやんのことを思い浮かべた。

なんでだと思ってる間にクリパの開会式は終わりまでいっていた。

開会式が終わってから僕達は午後の本番に向けて午前中も練習を重ねていた。

かなり遅めに決めて配役もついこの間決まったばかりでハードなのは必須だったが、どうにかみんな形になったようでよかった。

「ふい……喉カラカラだぜ」

「お疲れ様。ほい、スポドリでいいなら」

「サンキュ」

義之にスポーツドリンクを手渡して休憩がてら廊下を歩く。中ではまだ杏ちゃんや沢井さんが相談してるのが見える。

どうやらまだ何か気になる点とか色々あるのだろう。監督役としては。

さて、気分転換で廊下に出てみたけど、やっぱりどこもクリパ同日だからか、すごい賑わってるな。

午後から一般の来客もあるのだからその時の騒がしさはこれの何倍になるのやら。そう思って僕は窓の外を見た。

そういえばアイシアちゃん、今日はちゃんと来てくれるかな？

「どうした明久？　何か気になるか？」

「ん？　ああ、昨日ちよつと綺麗な人と会ってね」

「綺麗なの？」

「うん。銀色の髪にルビーのような瞳の、北欧系の女の人だった。確かこの学校に1年くらいいたことがあるみたいだね。そしてここに戻ってフリマやってたところを見かけて色々話してるうちにここを案内することにして」

「なんだ。涉じゃないが、お前は既に予定埋めてあったってか？」

「そんなんじゃないよ。なんとなくそうした方がクリスマス楽しめるかなって思ってた」

「正確には今日はイヴイヴなんだが」

「それは言わない約束ってことで」

「とりあえず注意しとけよ。生徒会としての見回りだってあるし、涉に見られた日にはお前だって俺と同じ地獄を味わうことになるぞ」
「怖いこと言わないでよ」

そんな会話を繰り返している時だった。スピーカーから校内放送の合図が鳴り、スピーカーからさくらさんの声が流れ始める。

『付属3年3組の桜内義之君、付属3年3組の桜内義之君。至急、学園長室まで来てください。繰り返します。付属3年3組の桜内義之君、付属3年3組の桜内義之君。至急、学園長室まで来てください』

「ん？ さくらさん？」

「どうしたんだろう？ 呼び出しだなんて。それもこんな忙しい時に」

「よくはわからんが、さくらさんからの呼び出しなら行くか。ひとまず俺はさくらさんのところ行くって言うから、委員長に言っておいてくれ」

「了解」

そう言い残して義之はさくらさんのいる学園長室へと向かっていった。さて、義之が来るまでとりあえず教室で時間潰すか。

僕を混ぜての生徒会の見回りは午後からだし。高坂さんの意見でも杉並君達が本格的に動き出すのは午後だと予想したようだ。

なので午前中は思いつき練習に打ち込むとするか。見回りの時は僕の代わりに照明やってくれる人も小恋ちゃんが確保してみた

だから。

だからと言ってサボるのはよくないので練習は続ける。

教室に戻り、僕は再び台本の方に目を通し始めた。

自分の担当する照明を当てる場所とタイミングはすっかり覚えておかないと。

「あれ、桜内はどこかしら？ まだ注意してほしい部分があるんだけど」

あ、そうだ。義之の伝言すっかり忘れてたよ。

「あ、沢井さん。義之なら今用事で出てるよ」

「用事って、この忙しい時に何処行ってるんのよあいつは」

「学園長室だよ。さつき放送で流れてたでしょ？」

「放送？ そんなの流れてたかしら？」

「へ？」

沢井さん、あの放送聞いてないのかな？ 僕も義之も同時に聞こえたのだから聞き間違いはないと思うんだけど。

「とりあえず、義之がさくらさんのところで用事済ませるまでは練習しておこう」

僕の言葉に沢井さんが溜息をついてその場を離れ、みんなと同じように台本を読み始めた。

他のみんなも必死に台本を読んで自分の役割を頭に叩き込んでいくようだ。

それが20分くらい続いた時だった。

「よ、よう……」

「あ、戻ったんだ。義之」

「遅いつ！ 何やってたのよ！」

義之が戻つてくると沢井さんは冠状態になって怒鳴りかかってきた。

「いや、学院長に放送で呼ばれてたから……」

「本当にそんな放送流れてたかしら？」

「んあ？ 聞こえなかったのか？ ちゃんと流れてたはずだけど、集中してて聞こえなかったんじゃないかねえのか？」

「もう、そういうことにするわ。それで、何？ また何か悪さでもしたの？ 呼び出しなんて受けて」

「俺が呼ばれたイコール俺が悪事を働いたって方式を成立させないでくれ。これでも善良な一般市民を自負している身だぞ」

「どの口が言うのかしら。それで、結局何だったわけ？」

「いや、それが呼び出した本人であるさくらさんが不在でさ」

「はあ？ 何それ？ だって呼ばれたんでしょ？」

変だな。呼び出した本人が不在だったなんて。悪戯？ まさか学園長であるさくらさんが悪戯なんて……ないとも言い切れないか？ さくらさんだし。

「ああ、もういいいわ。さっさとスタンバってくれないかしら。ちよつと色々言いたいことあるし」

「悪い。まだ他にも用事があるんでな。明久も一緒に」

「あ、もうそんな時間——って本当に急がないと遅れちゃうし！」

時計を見て時間に遅れそうなのに気づき、僕と義之はダッシュで教室から走り去っていく。

「あ、ちよつと待ちなさい桜内！ 話はまだ残ってる——」

走り際に沢井さんの引き止める声が聞こえたけど、こっちも本当に忙しいから構ってられない。

僕らはそのままある所へと向かっていった。

「2人共遅いつ！」

生徒会室へ足を運び、扉を開けると同時に高坂さんの一喝が飛んできた。

「午後からいよいよクリパ本番だって時に最終対策会議に遅れるなんて気合が入ってない証拠だぞ」

「すいません」

高坂さんから叱咤を受け、僕と義之は同時に頭を下げた。

しかし、流石というかなんとか、高坂さんは他の人の倍は気合入っているな。

「全く。だから吉井なんか当てにするのは不安と申したのです。今からこれでは先が思いやられますわ」

「随分だな、ムラサキ。こつちだつて色々あるんだよ」

ムラサキさんにも駄目出しされる始末だし。

「すみません。実は来る途中で不思議なことに巻き込まれてしまいました」

僕がちよつと落ち込んでいるところに義之が不可解な事を言った。不思議な事って何？

「はいはい。言い訳は後にして席につく。時間もほとんどないし、会議を始めるから」

「つて、もう少しくらい興味を持ってくださいよ！」

あつさりと流す高坂さんに義之が全力でツツコミを入れた。

「高坂先輩の言葉が聞こえませんでしたの？ 今の私達にはあなた方の言い訳を聞いている時間はないのです」

「達つて、僕言い訳するつもりはないけど」

いや、練習の方に熱中しすぎたつてのは本当なんだよ。それは決して言い訳じゃない。断じて。

「あの……生徒会としてはアレのことは知っておいた方がいいと思うんですけど」

「生徒会として知っておいた方がいい事？」

義之の言葉によろやく興味を示したのか高坂さんは義之の方を見つめた。

「ええ。アレをそのまま放置しておいていいものかどうか、俺には

ちよつとばかり判断がつきかねますので」

「アレって、一体何ですか?」

ムラサキさんも義之の言うアレなるものに興味を示したのか、首をかしげる。

「何があつたの? 弟君」

そこに音姫さんも加わってきた。そして周囲のみんなも義之の話に興味があるようで耳を傾けてきた。

それから義之は苦い顔をしながらも話を始めた。

そして、10分ばかり義之の話を聞いてみんなが怪訝な顔になった。

それからすぐに高坂さんがうんうんと頷いて携帯を取り出してプッシュボタンを数回押して耳に当てた。

「あー、もしもし? 救急車、一人前。大至急で」

「気が狂ってるわけじゃありませんからね!」

高坂さんが電話で呼びかけたのは救急車だった。いや、アレを聞いたら普通だったらそうなるだろうけど。

「いや、過去に通じている扉が学園長室にあるなんて……ねえ。いや、弟君を疑ってるつもりはないけど」

まあ。確かに普通だったら過去に通じる扉が学園長室にあるなんて話、誰も信じないだろうけど。

「で、どう思う? お三方は」

「ふくん、過去に繋がる謎の扉かあ」

「そういう現象が全くないとも言切れない……ですけど」

「空間を繋げる扉って、どこにでも出るものなのかあ」

「ありや? 音姉や明久はともかく、ムラサキも信じるのか?」

「別に何から何まで他人の言葉を否定するつもりはありませんわ。根拠もなく物事をYES、NOで片付けるのは科学的ではないと思っただけ」

義之の言葉を意外にもムラサキさんが信じたことに僕もちよつと驚いた。

「吉井も弟君の言葉が本当だと思ってる?」

「まあ、あってもおかしくないんじゃないかってくらいには」

過去ってわけじゃないけど、僕だって世界の壁を越えてきた人間なんだし。過去に通じる扉があったってもう驚きはしない。

「まあ、弟君の言うことが本当だったとしたら、放っておくのもマズいわね」

「午後からクリパも始まるし、生徒会としてはできるだけ不安材料は残したくないしね」

「では、調査に向かいますか？」

「百聞は一見にしかずって言うし、こういうのは自分の目で確認するのが一番ね」

そんなことで僕達は義之の言う過去へ通じる扉を調べに学園長室へ向かうことになった。

それから生徒会の事はもうひとりの副会長に任せて義之を先頭に僕、音姫さん、高坂さん、ムラサキさんの5人が生徒会室を出て廊下を歩く。

そんな時に見知った顔が出てきた。

「あれ、兄さん……それにお姉ちゃん達も」

「あ、由夢ちゃん」

「お、由夢。お前もサボりか？」

『『も』ってのが誰を指すのか気になるにや〜』

義之の言葉に反応した高坂さんが拳を作って尋ねてきた。

義之の言ったサボり魔も見つけたらその拳で殴りつけるのだろうか？ だとしたらそのサボり魔、ご愁傷様。

「私を兄さんと一緒にしないでください。こう見えても忙しいんですから」

「それは保健委員の仕事でってこと？」

由夢ちゃんは保健委員だし。こういうお祭りでは怪我人だって少なくないだろうし、色々準備も必要だろう。

「それもありますし、クラスのお手伝いも色々。いよいよ本番なんですから」

「お〜、感心感心。姉妹揃って働き者だねえ」

「本当です」

「ところで、こんな大人数でどうしたのですか？ 巡回か何かで？」

「うん。そんなところかな？」

「実はさつき俺……」

「うむ？ 明久ではないか。どうしたのじゃ？ こんな大勢で」

「あく、義之君もいる。やっほ」

「ちやお」

「お、大人数じゃねえか。どうした？ 揃いも揃って」

後ろの方から声が聞こえて振り向くと、秀吉に雄二、杏ちゃんと茜ちゃんがいた。

「そっちもその人数でどうしたの？」

「うむ。雪村からちよつとばかり人形劇のことについてアドバイスがほしいというての。演劇部として少しは役にたつかと相談に乗っておったのじゃ」

「俺はまあ、出し物が出し物だから後は連中に任せてちよつと他が何やるのか見て回ってただけだ」

秀吉の言葉には納得がいく。何百通りの声を真似ることができ、演技はもはやプロ並みと言っても過言ではないほどの腕前を持つ秀吉なら人形劇でもその演技力は発揮されるだろう。

なので杏ちゃん達が秀吉に相談に行くのは納得がいく。

「ほく、坂本お。みんなが忙しい時にひとりサボリとはいい度胸だにや」

「げっ……。生徒会まで連れてたのかよ」

義之の言つてたサボリ魔を見つけ、高坂さんが獲物を見つけた猛獣のようなオーラを出してジリジリと雄二に近づいていく。

「それで、何か言いかけてましたけど。一体なんなんですか？ こんな大勢で」

「ああ、実はさつき学園長室で……」

「弟君、弟君。その話、あまり軽々しく話さない方がいいよ。万が一、由夢ちゃんや他の人に危害が及んだら大変だし……」

「あ、そうか」

義之が由夢ちゃんに例の扉の事を話そうとしたのを音姫さんが止めた。

確かに過去の扉なんていうのが他の人に知られたらどんなことになるかわかったもんじやないしね。

「確かに、まだ未確認事項だし、タチの悪い悪戯の線もある。もし弟君の言つてた事が事実だとしたら、それはそれで慎重に対処しなきゃだし」

「ここから先は生徒会の役目という事ですわね」

「その言い方、何か余計に気になるんですけど。兄さん、また何かやかしたんですか?」

「何だ? 何やらおもしろそうな話をしてるじやねえか?」

「学園長室つて言つてたわね。何かそこにあるのかしら?」

だがここで話したのがまずかった。ここには好奇心旺盛な人間が知ってるだけで3人いるのだから。

そんな話をここですれば気になって、

「二ついていきます (いこうじやねえか)」

「はっ」

当然こうなるわけで。

「だから兄さん達についていきます。ここまで気になること言つておいて内緒と言われても納得できません」

「オマケにもう場所はわかつてるんだ。駄目と言われようが、納得するまで帰るのは性分じやねえんでな」

もうここまで来たらこの2人は譲るつもりはないだろう。もう何を言つても無駄そうだ。

「じゃ、茜。小恋と涉、後は……白河さんと呼んでおいて」

「あいさ〜」

それに他にも人連れてきちゃうみたいだし。ここはもうこの人達を止めるよりはいつそ戦力増強という形で連れてった方がいいと思う。

「ああ、なんかどんどん増えていつちやうよ」

「もうこうなつてはここに来る人全員連れていくしかないわね」

「下手に突き放してこの話を広げさせるのもマズイですし」
「はあ……」

いつの間にか人が増えていったことに生徒会メンバーは溜息をついた。すみません、こんな友人達で。

で、数分もすると杏ちゃんやんの予告通り、小恋ちゃんと渉、ななかちゃんが到着して僕達は大勢で学園長室へと向かった。

「そーういや、学園長室に一体何があるんだ？」

「いや何って言われると……」

「そーういえば、まだ聞いてませんでしたね。結局学園長室に何があるのですか？」

渉の一言に全員が義之に迫っていく。そーういえばまだ話してなかったね。

「いや、何がっていうと……学園長室で、過去の世界へ繋がる扉を見つけたんだ」

「カコ？ カコって、あの過去？ 時間の前後のうちの前の時間帯の」

「その過去で間違いない」

「えつと……兄さん、ひよつとして熱とかありますか？ だったらすぐに保健室で治療してあげますから——」

「そのリアクションはもういい」

「しかし過去って……なんか嘘くさいんだけど……」

「ああ、お前ら……いくら突拍子もないことだからって、端から疑うのはよくねえぞ」

「うむ。一年中桜が咲いていることも普通ならありえんことじゃからの。時間の違う場所に繋がったっておかしくはないぞい」

「あれ？ 木下はともかく、坂本はこの手の話信じねえ奴だと思ったけど」

「ああ、まあなんつうか……なあ」

まあ、雄二も秀吉も僕と同じで異世界から来た人間だし、一年中桜の咲いている島を見たんだし、試験召喚獣に関しても色々あったからもう今更過去未来に行こうとそれくらいじゃもう驚く僕らじゃない。

「ま、なんでもいいけどよ。面白ければ」

「そういうこと。みんなで楽しめば怖くない♪」

「あのねあんた達。一応これ生徒会としての調査だかね」

「ふっ。遅かったな」

「……待ちくたびれた」

「うおっ!？」

学園長室に入るとそこには杉並君とムッツリーニがいた。

「何してんだよ。しかも土屋まで一緒に……。ひとりで過去の世界に行ってたんじゃないのか?」

「ひとりで行ってもよかったのだが、ここで待っていれば同志桜内が必ずみんなを連れて戻ってくれると確信していた」

「……俺は杉並に呼ばれて来た。面白いことが起こっていると」

「どうやらムッツリーニは杉並君に誘われてこちらに来たようだ。」

「とかなんとか言つて、ホントはひとりで行くのが怖かったんじゃないの?」

「ふふ、板橋よ。貴様がどう解釈をしようが、俺がみんなの到来を待っていたという事実は変わらないぞ」

「へいへい」

渉のツツコミをいつも通り澄ました態度で軽く流す。

「ていうか杉並。学園長室の扉つてのもあんたの作業なんてことはないでしょうね?」

今まで後ろで控えていた高坂さんが手を鳴らしてジリジリと杉並に近づいていった。

「まあ、そう急くな高坂まゆき。その台詞は扉の向こうを見てからでも遅くはないぞ」

杉並君に誘われて全員が視線を移すと掛け軸のある壁に鉄製の扉があった。

「これが、兄さんの言つてた例の扉?」

「こんなの、いつの間に作ったのかな……」

「わく、本当に扉がある」

みんなが例の扉を前に観察したり直に触って感触を確かめていた。「うくん……。確かにこれは悪戯レベルで作れる代物じゃなさそうね」

「それに、こんな所に扉を作る目的もメリットもよくわかりませんわ」
「第一この扉、どこに繋がってるわけでもないぞ。この壁の向こうに隠し部屋が作れるスペースなんてありやしねえはずだ」

「そう。この扉はこの学園の教室、屋根裏、地下……。そのどれも繋がっていない。俺とて、こんな無目的な工作などしない。得られる対価があまりに少なすぎるからな」

「……こんな目立つ物を置く理由がない」

「杉並でも、土屋でもない。いよいよ厄介ね」

全員まつとうな答えを得られず、四苦八苦していた。

「なあなあ、細かい事は置いておいてとにかく入ってみようぜ。扉つてのはくぐるもんだろ?」

「うむ……。大丈夫なのかの?」

「大丈夫だろ。義之が一度くぐったんだから。じゃ、一番乗り! ひゃっほー!」

「では、いざ未知なる世界へレッツラゴー!」

「……参る」

渉と杉並君、ムツツリーニが先に例の扉をくぐっていった。

「あ、こらちよつと、待ちなさ〜い!」

「高坂先輩! 単独行動は危険です!」

後を追うように高坂さんとムラサキさんが扉をくぐっていく。

「何だか面白くなってきたね〜♪」

「私達も行きましょう」

更に杏ちゃん和茜ちゃんが扉をくぐる。

「ど、どうしよう……。弟君」

「みんな、行っちゃいましたね」

「けど、放っておくわけにもいかんし……」

「このままこの扉を放置しておいてどうなるかもわからんしの」

「まあ、面白そうだし行ってみようぜ」

「なんだかワクワクするね」

「そ、そうかな？」

「とりあえず……追った方がいいよね」

僕達も扉へ向かっていく。

「あ、音姉達は無理しないで戻ってもいいぞ」

扉を潜る前に義之が音姫さんと由夢ちゃんを置いていこうとするが、

「だめだめ、一緒に行くって！ お姉ちゃんがついていないと、弟君にもしものことがあったら大変でしょ」

義之にとってはむしろ音姫さんの方が心配なんだろうけど、聞かないだろうな。この調子じゃ。

「私は、2人が心配だからついていくよ。保健委員だからみんなが怪我した時くらいは役に立つだろうし」

こうしてメンバー全員がこの扉をくぐることになった。

僕も深呼吸してからいざ、過去に通じる扉へと足を踏み入れた。

第二十六話

学園長室にあった謎の扉をくぐり、僕達は風見学園の廊下に立っていた。

ていうか、風見学園なんだよね……ここ。

「これが、過去の世界？」

「なんか、今とあまり変わらないですね」

「だよな」

みんな今の風見学園と雰囲気あまり変わらないのを確認すると拍子ぬけしたような声を上げた。

「あ、でもでも、なんかあちこち新しい感じもするよ。匂いもちよっと新しい物の匂いって感じだし」

茜ちゃんが深呼吸して学園の匂いを確かめて言った。

僕は風見学園に長くいた事がないからわからないけど、確かに空気の質が向こうよりちよっとすつきりしたような感がある。

「へ？　ここって、過去でしょ？　過去なのに新しいの？」

「小恋……過去だから新しいのよ」

「でも、昔のものの方が普通、古いでしょ？」

「……よく考えなさい」

「え？　ええ？」

「あのな、月島……俺達のいた風見学園じゃ創立50年はあったぞ。でもこっちでは……何年だ、桜内？」

「えっと……たしか、向こうが56年で、こっちじゃ7年だったっけな……」

「とまあ、こんな具合にだ。56年前に作られた花瓶とほんの7年前に作られた花瓶……どっちが古いかなんてわかるだろ」

「……………ああ」

向こうではちよっと天然の入った会話もあった。

というか小恋ちゃんって、結構頭いいはずんだけど……その天然なところがちよっと姫路さんに似てたり。

「まあ、建物が明らかに新しいのは同意だ。それに随所に違いが見受けられる。廊下の幅、壁面の塗装、蛍光灯の配置、タイルのデザイン等々、数え上げればキリがない」

流石は校舎のどこで活動しているのかも読めない暗躍者か。僕達にはわからない違いもすぐに看破した。

「こっちは開校から7年……そりゃあ新しい筈だわ」

「開校から7年じゃと……儂らがいた時代からはどのくらい前なのじゃ?」

「ざつと50年くらい前ですね」

「おお! つてことはあれか? 本場のメイドさんに会えちゃったりするわけか!」

「……是非とも写真に」

「それは時代も、そもそも国が違うだろうが。そして土屋も涉に乗るな」

流石はムツツリーニと涉。時代を超えてもその行動原理は変わらないか。

「50年前かあ……。数字で聞くと実感ないけど、まだ私達は生まれてないんだね……」

「やっぱり、今とは違う時間が見えちゃうのつて、複雑な気分ですね」

「なんか、50年も昔つて想像つかないよね。だって、まだお父さんもお母さんも生まれてないんだよ?」

「そうなんだ……ていうか、こっつてこんな昔にも桜が咲いてるんだね」

窓の外を見ると、向こうと同じように冬なのに桜が満開だった。

一体この島の桜は何年前からここまで咲き乱れていたのか。

「と……ころでお主ら……」

「ん? 何、秀吉」

「杉並とムツツリーニに板橋、雪村に花咲がおらんのじゃが」

「え?」

見れば確かに秀吉の挙げた5名の姿が消えていた。

「さ、さっきまで一緒にいましたのに……」

「あいつらは……」

5人の姿が消えてるのに気づき、ムラサキさんと高坂さんが溜息をついている。

「あの馬鹿共……こつちじや携帯通じないつうのに」

「え？ あ、本当だ。圏外になってる」

みんなが確認するのを見て僕も自分の携帯を見て圏外なのを確認した。

ていうか、僕の携帯は向こうについた時点で使い物にならなくなつてたんだっけ。

「連絡が取れないのは不便ですわね」

ムラサキさんも自分の携帯を確認したため息混じりに呟いた。

「ど、どうしよう？ 迷子になつてないかな？ 何処探せば見つかるかな？」

「小恋落ち着いて。時代は違つても初音島なんだから」

そわそわしだした小恋ちゃんをななかちゃんがなだめていた。

まあ、確かに時代は違つても場所は同じ初音島だから地形でも変わつてない限りは大事にはならないと思うけど。

それにしたつて、黙つて歩き回るのは崖端歩きもいいところだ。

「どうするの？ 無闇に動くのは危険だよね」

やつぱり時間の移動というのは未知数で何が起こるかわからないのだから軽躁な行動はなるべく制限する方がいいだろう。

「やつぱ、放つておけないだろ」

「遠くに行かないうちに、連れ戻すわよ！」

「全く、世話がやけますわね」

「由夢ちゃん、はぐれないようについてきて」

「わわ、みなさん、待つてくださいつてば」

「たく、面倒臭え」

「やれやれじゃ」

「あわわ、置いてかないでください」

「なんか面白くなつてきたね、明久君」

「そんな呑気な……」

とりあえず、姿を消した5人を探すべく、僕達は集団で搜索を開始した。

離れ離れにならないよう気をつけながら僕達は校内を探し回る。5人がいないか、教室の扉から中を覗いて回る。

「ここも違うみたいだね。どこまで行つたのかな」

「あいつらにとつて、この世界は巨大な遊園地みたいなもんならうねえ。犬みたいに飛び出していつて、探すのも一苦労だわ」

まったく……こつちに来てまでも杉並君&ムツツリー二搜索とは。オマケに涉や杏ちゃん、茜ちゃんまでも姿を消してるときだ。

こりや探すのは相当の骨になるかもしれない。

それから僕達は中庭の方へ移動した。やはり時代は違えど校舎の基本的な造りはほとんど同じだというのはわかった。

これなら学園内で迷子なんてのはなさそうだ。まあ、結局見つからなければ同じだけど。

「みんな、見つからないね……」

「こうなつたら、いつそのこと誰かに訊いてみるのはどうですか？」

「できればこの時代の人間との接触は避けたいんだけどな」

義之の言う通り、未来の人間が過去の人間に接触して未来にどんな影響を及ぼすかわかったものではない。

「けど、闇雲に探したところであいつらは中々捕まらないし。ここは妹君のその辺の生徒に訊いてみるのもいいんじゃない？」

「たかがすれ違つたり人を探す程度で未来に影響があるとは思えないしな。自分達が未来から来たつてことを打ち明けない限りは」

「うむ。この際贅沢は抜きにして誰かに尋ねた方がよからう」
「でしたら、あちらの方に訊いてみましょう」

ムラサキさんが指差した先には読書をしていた綺麗な女の子がベシに座っていた。

周囲に話しかけられそうな人が他にいないっぽいし、ここはあの人に訊いてみるべきか。

「で……誰が行くんだ？」

義之が僕達を見ながら聞く。このメンバーで一番うつつけなの

は音姫さんか高坂さんが……」

「吉井に桜内先輩、お二人で尋ねてください」

「な、なんで俺達だよ？　こういうのは普通女同士でやるもんじゃねえのか？」

「そうだよ。僕達より音姫さんとかの方が遥かに——」

「明久よ、それは無理じゃろう。周囲を見てわかったのじゃが、農らの時代とこの時代の女子の制服は見た目にかなり差異があるようじゃ。じゃから女子では他校の生徒と怪しまれる危険性があるぞい」

秀吉に言われてベンチに座っている少女の制服も付属のものだとわかるが、今の付属とは確かに違いがある。

となると、本校の方もやはり制服は違うのだろう。比べて男子のはほとんど同じ外見だ。怪しまれる確率は男子の方が低めだろう。

なんとなく男子の制服を改良するなんていう考えが今までなかったのかとどうでもいい事が頭を過ぎる。

「はあ、わかったよ。なら行くぞ、明久」

「うん。じゃあ、行ってくる」

「明久君、フアイト」

「うん、それじゃあね」

僕と義之はみんなを待機させ、ベンチにいる女の子に近づいていく。

「あの、ちよつといいですか？」

義之が声をかけると女の子は顔を上げてこちらを見た。

「はい？」

「えつと……この辺に男子が3人と女子2人が通りかからなかった？」

「うーんと、スケベそうな顔で女子に片っ端から声をかけそうな人と、何を考えてるかわからない怪しそうな人、無表情だけどカメラを持って女子を見ればシャッターを押しまくる怪しい感じの男子」

「それと、その……かなりスタイルのいい奴と、すぐく背のちっこい人形のような女子なだけだ」

「えつと……」

やっぱりいきなりこんな断片的な情報は無理があるかと思った時だった。

「女子の方は知りませんが、先程元気そうな男の子に声をかけられました。一緒にお茶でもどうですかって」

僕と義之は互いを見合った。間違いない。その男子は涉だろう。

「丁重にお断りしておきました」

「な、なるほど……それで、その変質者はどちらに？」

「また他の女の子に声をかけながら、校舎の方に向かいましたね。あと、それを追ってカメラを構えた人もいましたし……植え込みで何かを調べてる方もいたような……」

そのカメラを構えた人はムツツリーニ、植え込みで調べ物をしていたのは杉並君だろう。

目撃者1人目でいきなり5人中3人の手がかりを見つけるとは。

「ありがとう、助かったよ。読書の邪魔して悪かった」

「それじゃあ、ありがとうございます」

僕は軽く頭を下げてその場を去ろうとした。

「あの、あなた達は？」

「えっ?」

えっと……何? まさか、僕達が風見学園の生徒じゃないってバレた?

いや、風見学園の生徒だけど……この時代とは違うし。

「え?」

「へ?」

向こうがいきなり疑問符を浮かべた。一体何だろう?

「あ、いえ……ごめんなさい。なんでもないです」

「えと、そう? じゃあ僕はこれで」

よくはわからないけど、これ以上会話をするのは危ないかもしれないのでさっさと退散だ。

僕は駆け足で待機しているみんなのもとへ戻った。

「明久君、お帰り〜」

「お帰り。どうだった、義之」

「おまたせ。収穫ありだった。杏と茜はわからんが、他の3人はまだ学園内をフラついているらしい」

「流石に外に出るほど軽率な真似はしてないか」

「杏と茜はどうかはわかりませんがね」

もし学園から離れたら見つけるのはもはや絶望的だっただろう。

「とりあえず、フラフラ歩き回るより最初の場所で待つべきだろ。流石に用が済めばみんなそこに戻るだろう」

「うん、坂本君の言う通りだね。帰るにはあの扉をまた通らないとならないんだし」

「じゃあ、ひとまずあの扉の方へ向かうか」

僕達は最初にこの時代へやってきた場所へ向けて移動する。

「いよう。遅かったではないか」

さっきの扉の近くまで来ると探してた顔が全員分あった。

「珍しいからって、はしゃいじやって。どこ行ってたんだ？」

「もう待ちくたびれたよ」

「結構時間かかったじゃない」

「……急いでコンピュータにアップしたい」

「……お前らを探しに行ってたんだよ」

拳を震わせながら義之が怒り混じりに呟いた。

うん、その気持ちはわかる。君達が心配でみんな必死に探し回ったっていうのに、その態度はないんじゃないかな。

「やれやれ、戻ってきて正解だったわ」

「まったく、人騒がせですわね」

「でも、見つかってよかった」

高坂さんもムラサキさんも小恋ちゃんも、見つかってほっとしていった。

「ははは、悪い。つい本気を出しちゃってさ。でも誰も相手にしてく

れなかったんだよお！ こっちの時代ならイケると思ったのに！」

渉のその自信はどこから出てくるのか。ていうか、君は今回は小恋ちゃんにのみ全力を注ぐみたいなき事を言ってますんでしたっけ？

「俺も、この時代の貴重な情報が収集できたぞ。こいつは検証結果が楽しみでたまらん」

杉並君は一体何のデータを集めていたのやら。

「とりあえずそろそろ戻るぞ。あんまり長居するもんじゃねえだろ」

「そうだね。生徒会のお仕事も途中だし」

「あ、私も保健委員のお仕事が……」

「というわけだし、一旦戻ろうか」

「えく。私はできることなら、もうしばらく残りたいんだけどな」

「ななかちゃん、これ以上は流石にマズイと思うんだけどね。時間保護法的に」

「そんなのあるの？」

「ゲームじゃよくあるんだけどね……」

そんな会話をしながら明るいまま扉へと向かっていった。

けど、そんな空気がこの後すぐに崩れるとはこの時の僕達は思ってもみなかった。

『……………』

長い沈黙が場を支配していた。

扉のあった場所に戻ってきたはずの僕達だが、その場にはあるはずのものがなかった。

「えと……ここだったよね？」

「扉……消えていますね」

音姫さんや由夢ちゃんの言う通り、あったはずの扉がただの壁になっっていた。

「えつと……ここだっけ？ 扉あったの……」

「そ、そのはずだと思っただけ……」

第二十七話

扉が消えたという絶望感漂う事実が立ちはだかつて小一時間過ぎ
て、僕達は再び中庭に集結した。

「あわわわわわわ……え、えと……これってどういうこと？」

その中でひとり、完全にパニックになっている少女がいた。その少
女とはもちろん小恋ちゃんのこと。

「だから、扉が消えたのよ」

パニックになっている小恋ちゃんに杏ちゃんが冷静な口調で伝え
る。

「え、えと……それで、何がどうなって……」

「扉が消えたつてことは俺達の元の時代に戻る手段がなくなったつて
ことだ」

「つまり、俺達は帰れない状態にあり、この時代に取り残されたのだ」
「簡単に言えば船が壊れて誰もいない小さな無人島に取り残されたよ
うなもんだ」

「はうっ!？」

普通なら言いたくないはずと雄二と杉並君がいやな例えで平然と
言つてのけた。

「ど、どどど、どうしてみんなはそんなに落ち着いてるの!？」

「こういう時、大事なものは落ち着くことだからね」

「慌ててたら見つかるものも見つけられないし……」

「こういう時こそ落ち着くのは、人の上に立つものとしては当然です
わ」

中々に肝の座っている生徒会メンバーの言葉。

「だって、小恋ちゃんがあんまりにも慌ててるから……」

「なんだか自然と俺らの方が落ち着いちゃってな……」

「なんだか小恋のためになんとかしようって使命感が強くなって
……」

「冷静になっちまうんだよな」

小恋ちゃんの友人達の言葉。

「別に命の危険があるわけじゃねえからな」

「元の時代から取り残されたとはいえ、簡単に人が死ぬわけではないからの」

「本当の無人島ならともかく、ここは人がいっぱいいるからね」

「……こんな事態、文月学園で鉄人に追われる時と比べればなんてことはない」

これが、僕達文月学園メンバーの言葉。

「どうせ焦っても変わらないですし」

まったくとしていた由夢ちゃん。

「では、まず現状の打開策から検討といこうではないか」

この中で唯一心底楽しそうにしている杉並君。

「ひとつ聞きたいんだが、これお前の仕業じゃねえよな、杉並」

義之が疑わしいものを見る目で杉並君に尋ねる。

「何を馬鹿な。俺ならもつと堂々と派手にやるさ」

「聞いた俺が馬鹿だった」

あまりにいつも通りの杉並君に脱力した義之。

「ともかく我々は、人知を超えた何らかの超常現象に直面しているのだ。そして、それに打ち勝たねば、元の世界への生還は果たせない。小手先だけの手段で簡単にどうにかなるものではないと覚悟すべきだろう」

時間移動なんて現象がある時点で僕達どころか、どれだけ頭のいい人が揃って検閲したって手に負える話じゃないしね。

「今こそ、人類が超自然に挑む、歴史的に偉大な時となるのだ！ そして、我々はその選ばれた——」

「はいはい！ 御託はいいから、具体的に何をすべきか考えるわよ」

杉並君の話が長くなりそうだと見て高坂さんは杉並君の言葉を遮って全員に言い聞かせる。

確かに大事なのは現在進行形で立ち塞がってるこの状況だしね。

「まず、一番大事なのは現状把握ね」

一番冷静な杏ちゃんの意見。

「確かにそうだな」

「何にしてもまずは現状を知るのが鉄則だ。その後で対応策だな」
「待て、一番大事なのが対応策の方じゃないのか？」

「いいえ、義之。今の状態じゃわからないことが多すぎるわ」

確かに、対応も大事だけど、それにはまず現在自分の置かれてる状況を知らないことには始まらないし、無理に対応しようとしたところで余計に深い溝に入ってしまう危険性もある。

「けどさ、現状を把握って言っても、具体的には何を把握すりゃいいんだ？」

「把握しなくちゃいけないのはいくつかあるけど、私が一番知りたいのは扉のことね」

渉の疑問に杏ちゃんが意見を出す。

「扉？ 扉の何？ 杏ちゃん」

「そうね。まず学園長室の入口……なかったはずの扉がいつの間にか出現していた。そうよね？」

「あ、ああ……少なくともさくらさんから聞いたことはないぞ」

「ふむ。少なくとも俺も学園長室で改築工事みたいなものをしていたという情報は入ってないな」

「そうなの？」
「というか、その情報は如何にして非公式新聞部に行き渡っているのだろうか。」

「そして、廊下にあった出口側の方。あったはずの場所から綺麗さっぱりなくなっていた」

「つまり、扉は何らかの条件で出現したり消えたりするもの……そう言いてえのか？」

「ええ」

杏ちゃんと雄二が互いを見ながら頷いていた。

「んなこと有り得るのか？」

「知らないわ。実際に与えられた条件だけで考えてるだけだもの」

「それで雄二、扉の出現したり消えたりする条件とかがって……わかる？」

「そうだな……今のところ俺の予想しているのはこんなところか」

雄二は指を一本立てて説明に入る。

「まずひとつ……あの扉は一日のうちに決まった時間に出て、また決まった時間に消えるだとかな」

まずひとつは決まった時間帯に出現するパターン。

「ふたつ……扉は時間とともに場所を変えて出現する。さっきはたまああの場所だったが、今は別の場所にあるとかな」

「その可能性もあるわね」

「考えられなくはないな」

雄二の言葉に杏ちゃん和杉並君が頷く。

「まあ、どれも仮説でしかねえな。何しろ、現状じゃ判断材料が少なすぎるんだ」

「だからこそ、私達は現状把握のために情報収集が必要な」

「白河、吉井、杏の言ってる事……わかるか？」

「ううん。全然」

「一応、ゲームのクエストみたいに条件があったりとか情報収集しなきゃだつてことくらいは」

「とりあえずその考え方でいいわ」

言ってる意味はあまりよくわからないけど。

「こうなると、扉をくぐる以外の方法を試す必要もあるのでは？」

「それもいいがムラサキ、その方法がわかるとでもいうか？」

「えっ？ えっと……それは……」

ムラサキさんが案を出すも、雄二の一言で崩れてしまった。

「もし、坂本君の言つてた二つ目のパターン……扉が移動したつていうなら、それを見つければいいんじゃない？」

「なるほど。朝倉姉の言うことも一理ある。だが、あの扉が学園の中だけを移動するとも限らない。島の外までとなれば、この人数ではとても捜索などできないだろう」

「……そうなれば、俺の網を広げるのにも相当の時間がかかってしまう」

どうやら時代が違う所為でムツツリー二の情報網も十全の力を発

揮できないようだ。

「いつそのこと、同じ場所にまた扉が現れるのを待ってみるとか？
何かの条件で出たり消えたりするならそれを特定できれば早いと思います」

「それが一番安全と言えば安全な策だけど、扉が再び現れるかどうか
がわからないわ。それに、待つと言っても、周囲の視線があるから2
4時間体勢で立ってるわけにもいかないわ」

「確かにそうですね……それが何年に一度の周期とかだったら、正直
やっつけられないです」

由夢ちゃんの意見も杏ちゃんによって却下。確かにRPGでアイ
テムとか探す時に同じ敵何度も相手にして倦憊する事もあるからな
あ。

どれも一理あるものの、決定的なものとは言えない。

「……あのさ、色々意見出してる所悪いですけど、もうこうなっ
たら行動あるのみのの方がよくないですか？」

みんなが話し合ってる中、僕は口を挟んでみんなに言った。

「もうみんなが考えられる限りのこと全部試して、涓埃ほどしかない
かもしれないけど、可能性あるなら尽きるまでとにかく実行してみま
せんか？ 駄目なら駄目でまた考えれば。どうせ慌ててもなにもな
らないし」

「なるほど、流石は吉井。いい心構えだ」

「俺も明久の意見に賛成だな。どうせいつ戻れるかわからないんだ。
時間をかけてでもやるか」

「俺も明久に賛成じゃ」

「行動第一か。あたしも、賛成ね」

「期待を裏切らないでほしいところね」

「頑張ろうね、弟君」

「そうだな」

「兄さん、男らしいところ見せてください」

とりあえず、これからの行動方針は定まったようだ。

「それでは諸君、これより作戦を開始する」

「もうじき日没だからな。行動できる時間は限られてる。効率的に行動するにはチームを分けるのが一番だな」

「まずは、扉をくぐる以外の方法を試すチームだな」

雄二と杉並君が指示を始め、チーム分けが始まる。

「次に、扉が移動したと仮定し、搜索するチーム。最後に、廊下で再び出現を待つチームだな」

この人数だと、できる人数にも限りがあるのでその3パターンのチーム分けが妥当だろう。

「さて、まず吉井……共に行動する相手を選ぶがいい」

「え？ 僕が？」

いきなり言われても困る。今この場にいるのは僕を含めて14人。

3チームに分かれると……4人と2人余るな。まあ、余る2人は雄二と杉並君でいいか。

杉並君はむしろ単独で動かした方がよさそうだし、雄二はこういうの面倒臭そうだし。そうなる……

「ななかちゃん、ムラサキさん、ムツツリーニでいいかな？」

「ほう……。その心は？」

「ただ、このメンバーなら心強いかなって」

ななかちゃんはどんな時でも明るさを忘れないからこつちも普段通りでいられるし、ムラサキさんは頭もいいしリーダーシップも強いからいざという時に的確な指示を出してくれそうだ。

残るムツツリーニはこういう事態ではどうかは知らないけど、五感はかなり優れているので探索ではうってつけだ。

「なら、吉井のチームは扉が移動したかどうかを確かめるために島の、なるべく広範囲の探索を頼む」

「了解。じゃあ、ちよつと急ごうか。日没までもう間もないし」

「はいはい♪」

「しっかりと働いてほしいものですわ」

「……女子以外の探索など、つまらない」

そうして僕のチームは学園外へと足を運んでいき、搜索を開始した。

「ふんふんふん♪」

「ななかちゃん、随分と楽しそうだね?」

結構大変な状況下なのにも関わらず、ななかちゃんはいつも通りどころかご機嫌な様子だった。

「え? だって、楽しいじゃない」

「そつすか?」

「だって、過去の世界に取り残されちゃったんだよ? こんなの中々体験できることじゃないでしょ」

「それはいくらなんでも呑気すぎなのでは……」

「というか、本当に帰れなかつたらとか、思ったりしない?」

普通こんな状況に陥ったら、そういった不安がまず最初に表に出てくるものだと思う。

ムラサキさんでさえ、気持ちを落ち着けてるようできて多少の不安があるのはわかるのに。

「まあ、そりゃ帰りたいたいけど、帰れなかつたとしても大丈夫だよ」

「何で?」

「こつちでもきつと生活できるよ。小恋だっているし、明久君もいるし、今までのように楽しく過ごせると思う」

「……そう。……うん、そうだね」

なんだか、それを聞くと悩んでるのがバカバカしく思えてくる。

これが気を遣つての言葉なのか、空元気なのか、天然なのかは僕にはわからない。でも、その言葉が今の僕達にはありがたいものだと思う。

これだけ明るい子がいると自然と自分もそれに釣られて前向きになるような気がする。

後でみんなにもななかちゃんの言葉を聞かせたいものだ。

それから僕達は校門を離れ、まずは商店街へと向かった。

「ここが半世紀前の商店街ね」

「なんか、雰囲気は現代とあまり変わらないね」

「そうだね。出てる店の名前とかが若干違うだけで印象は僕達の時代とあまり変わらないよ」

「この時代でも、みんなクリスマスを盛大に祝っていたのですね」

「……女子もたくさん。(カシヤカシヤカシヤッ!)」

「なんか、一応僕達って……この時代の人から見れば未来人で技術も発達したところから来たのに、ここまで雰囲気変わらないのも不思議だよ」

「まあ、見た目は技術とかより、デザインとかセンスの問題だしね。初音島魂は不滅って事なんだよ、きつと」

「なるほど。……って、それはつまり……この島の人達のセンスが全然成長してないと言ってるのでは?」

「あはは、伸びない街ってことで♪」

そんな和気藹々と会話を交わしながら街の中を歩き回っていた時だった。

「うううつく……ううええええええん……」

大体4・5歳あたりの小さな女の子が道の真ん中で泣いているのが目に入った。

「ん? ねえ、あれ……」

僕が声をかけるとみんな女の子に気がついたようでそちらに視線を集中させた。

僕らと同様、女の子のことを気にしている人はいるのだが、みんな声をかけずそのまま通り過ぎる人ばかりだ。

「えつと……みんな、ちよつとごめん」

僕はそう言い残して女の子のもとへ駆け寄って声をかける。

「えつと……どうしたのかな?」

「おかあさん……いないの……」

「そっか……お母さんとか」

予想はしてたけど、やはりというか迷子のようだ。クリスマスシーズンのこの街はかなり人が多いのだから迷子になる子も出たって不思議じゃない。

「うつく……おかあさくらくん……」

「わわわ！ 泣かないで、大丈夫大丈夫！ きつとすぐに見つかるよ！
！
というか見つけるから！」

「見つけるって言っても、どうするのですか？」

「……迷子センターもない」

「どうする？」

すると僕の後ろでみんなが相談しあっていた。どうやらみんなこの子の事が放っておけないらしい。

こちら都合があるのだが、それでも泣いてる子供を放っておけるほど人でなしじゃない。

「商店街振興組合の事務所で放送を流せば確実だと思うけど……お母さんにあわせてあげたいしね」

「振興組合……ですか？」

「……場所、わかるか？」

「多分……もし、僕達の時代と同じところであれば。とりあえず、振興組合を探しつつ周囲に呼びかけてみようか？ もしかしたらそれでお母さん見つかるかもしれないし」

「なるほど。その方が効率がよさそうですね」

「……ナイス」

「そうだね。明久君、珍しく頭いいこと言う♪」

「珍しくはないでしょ」

とりあえず方針は決まった。

「ねえ、私達と一緒にお母さんを探してあげるよ」

「ホント？」

「ほんとほんと。だから、お姉ちゃん達と一緒にしよう？」

綺麗な微笑みで泣いている女の子に手を差し伸べるその姿はまるで天使に思えた。

いつもの明るい雰囲気を出すのとはちよつと違う。見た者全てを安心させるような、そんな笑みだった。

「……うん」

女の子も少しは安心したのか、ななかちゃんの言葉に頷いてななか

ちちゃんの手を取ってぎゅつと握った。

それから僕らは迷子の女の子の母親探しと商店街振興組合の事務所探しを同時に行っていた。

「そういえば、君のお名前は？」

「……よしこ。あらいよしこ」

「よしこちゃんか。いい名前だね」

「名前もわかったし、本格的に探してみますか」

「うん。よしこちゃんのお母さ〜ん！ よしこちゃんはここですよ〜！」

「あらいさ〜ん！ いらっしやいませんか〜！」

ムラサキさんとムツツリー二には僕とななかちゃんの呼びかけに反応する人がいるかを見てもらっていた。

そして僕らが呼びかけて10分かたつというのに、よしこちゃんのお母さんは中々現れてくれない。

建物の中にいるのか、この賑やかな音響の中じゃ聞こえてないのか。

「……よし」

突然ななかちゃんが女の子の手をぎゅつと握った状態で頷いていた。

「ねえ、やっぱりこっちに行こう」

「え？ でも、事務所はこっち側だけど？」

「う〜ん……でも、よしこちゃんのお母さん、こっちにいる気がするの……」

「気がすると言われましても……今は事務所へ向かって放送で呼び出すのが先だと思えますわ。情報もなしにあてもなく歩き回るのは得策じゃありませんわ」

「……何故急に？」

「ん〜つと、勘？ とにかく、こっち。みんなも来て」

「ちよ、白河先輩!？」

「……行ってみよう。ああ言ってるけど、ななかちゃんにも考えがあるんだよきつと」

根拠も何もないけど、今はななかちゃんに任せた方がいい気がした。

なんとなく、ななかちゃんなら本当に見つけてくれそうな、そんな予感がしたから。

「うう……」

ななかちゃんのおかげで和らいだとはいえ、その効果もしいに薄くなっけていき、よしこちゃんは不安に負けて涙目を浮かべる。

「ああ、泣かないで。……そうだ、お姉ちゃんが面白いお話ししてあげるから」

「おはなし?」

「そうだなあ……明久君、何かない?」

「ええ? そんなこと、急に言われても……」

「……おしゃれと写真の話なら——」

「はいはい、ムツツリーニ。今は真面目な話をしてるからね」

おしゃれはおしゃれでもそれは決して子供には聞かせてはいけないなものだろう。

そんなものをこんな純真無垢な子供に聞かせてはいけないだろう。年上のお兄さんとして。

「ん〜つと……実は私にはね、よしこちゃんと同じくらいのお友達がいるんだよ?」

「こどものおともだち? おとななのにな?」

「お友達に大人も子供もないよ。私のお友達のその子はね、重い病気でずっと病院に入院してるの。でもね、それでもいつも明るく笑ってる子なんだ」

それは初耳だった。ななかちゃんの様子を見る限り、作り話ではないようだ。

重い病気が……。普通なら泣きながら毎日を送るだろうその状況をずっと笑顔で過ごしてるだなんて。

この時代から出る事ができたらその子のお見舞い行ってみようかな。戻ったらななかちゃんに相談してみようと思った。

「ふうん、すごいね〜」

「でね。その子はね、プリンが大好きなの。よしこちゃんは？」
「あたしもプリン、だいすき！」

よしこちゃんの顔に笑みが広がった。いやはや、流石ななかちやんと
言うべきか。もうこれは才能だよ。

「ねえ、おねえちゃんとおにいちゃん、こいびとどうしなの？」
「え？」

泣き止んで明るくなったと思ったら突然とんでもないことを聞か
れた。

それから一瞬ななかちちゃんと顔を見合わせてどうしたらいいもの
かと苦笑いしてしまった。

「あ、あはは……どうなのかな？　ね、ねえ、明久君」

「こそ、そうだね……なんて言えればいいものか」

よしこちゃんの純粋な質問に咄嗟に答えることができるような解
答を僕達は持ち合わせてはいなかった。

「う〜ん……それは、神のみぞ知るって感じかな？」

なんとなくよしこちゃんの言葉を否定するのもどうかと思い、なな
かちちゃんはそんな言葉を呟いた。

「ともだちいじょう、こいびとみまん？」

ぶっ!?　思わず、吹き出しそうになってしまった。いやはやなんと
もまあ……。

「む、難しい言葉を知ってるのね。よしこちゃんってば」

「あはは……最近の子供は進んでるよね」

「違うでしょ、明久君」

「あ、そうか」

半世紀も前なのだから最近のというのは違うか。いやあ……この
時代からこんな小さな女の子がそんな言葉を使うのか。

なんてことを思っていると、

「善子！」

人ごみの中から血相を変えてよしこちゃんのお母さんらしい女性
が近づいてきた。

「あ、あれって——」

「おかあさん!」

よしこちゃんのお母さんじゃないかと聞く前によしこちゃんは駆け出してお母さんの胸に飛び込んだ。

「ごめんね。お母さん、買い物に夢中で」

「わああああ……ん、おかあさああん」

お母さんに会って今まで僕らと自身で抑えこんでいた感情が爆発したのだろう。

大粒の涙をその目からこぼしながらお母さんと抱き合っていた。

「よかったね……」

「うん」

「見つからないでいたらどうしようかと思いましたが……」

「……一件落着」

「あのね、あのおねえちゃんたちが、いつしよに、おかあさん……さがしてくれたの……」

「あ、ありがとうございます! 目を離れた際に、この子とはぐれてしまつて!」

「い、いえ。無事に会えてよかったです。こんな人ごみの中でしたから、会えなかったらどうなるかと思いましたが。見つかって本当によかったです」

「ありがとうございます」

「よしこちゃん、元気でね」

「今度ははぐれないよう手を繋いでね」

「おねえちゃん、おにいちゃん、ありがとうございます!」

見えなくなるまでよしこちゃんは何度も振り返って手を振り、同じくよしこちゃんのお母さんも何度も振り向いては感謝の意を込めてお辞儀をしていた。

2人が見えなくなるまで僕達も手を振ったりお辞儀を返したりと別れた。

「……じゃ、帰ろうか」

「へ?」

「だって、もうすぐ集合時間だし」

「……タイムリミット」

「あ……」

そうだ。僕達は例の扉の手がかりを探していたんだ。

よしこちゃんのお母さんを探すのに必死ですっかり忘れてた。

「ありやりや……結局手がかりのひとつも見つからなかったよ」

「しようがないよ。人助けをしてたんだし……」

「それはそうなんだけど、みんなになんて言おうか」

義之達はともかく、高坂さんや雄二あたりが文句なり罵倒なりを飛ばしそうだと思うながら僕達は学園へと引き返した。

第二十八話

僕達が中庭に集合した頃には既に日は落ちていた。

結局収穫も何もなかったからどうしようかと思っただけど、それはみんなも同じようだった。

手掛かりゼロ。情報もゼロとなっちはやはり僕らの捜索では扉のどの字も見える日はどれほど遠いものか。

集合した一同はかなり疲れた表情を浮かべていた。

「そうか……桜内チーム、吉井チーム、雪村チーム……全チーム成果はなし、と」

杉並君はメモ帳にペンを走らせて冷静に状況を記した。

「こつちも何時間待っても扉は現れなかったぜ」

「オマケに私達って、この時代の人達から見れば外部の人間だから……」

「色々目立ってやりづらかったです」

「緊張したよ〜」

「こつちでも3人の人気はすごいものじゃの」

「いや、注目してた奴らの何人かはお前も見てたぞ。ついでに、俺には殺意に満ちた視線が……」

どうやら義之は死と隣り合わせの中で扉が現れるのをずっと待っていたようだった。

「ご愁傷様だったね。」

「こつちも成果はなし。身体張って、ありとあらゆる方法を試したつていうのに」

「全く成果なし〜」

「残念だったわ」

「あの、身体を張ったのは、主にわたくしなんですけど……」

別の条件がないかを探していたメンバーの中で渉はその身に水、泥、草、枝、果てにはゴミなど、色んな物を付着させ、ボロボロになっていた。

「一体何を試してきたんだ、お前らは……」

「渉の……そのボロボロの状態になった仮定は？」

「漫画やアニメ、映画に小説とかで用いられた時空移動のキツカケとなる定番を一通り試してみたの」

「落ちたり、飛んだり、走ったり……」

「すごかったよね、板橋君」

「……………」

渉がボロボロになっている意味が理解できた。

「渉、よく生きてたな……」

「君のその生命力……褒め称えるよ」

「だろ？俺もそう思うぜ……それと、できれば……吉井に変わってほしかった、ぜ……」

その一言を最後に渉は沈んだ。合掌……。

「さて諸君。我々の第一段階は、残念ながら失敗と言わざるを得ない。しかし、諦めるわけにもいくまい。こちらの世界に永住したくなければな」

「まあ、ともかく今後の方針をどうするかと言うと——」

「ちよつと待ってください」

雄二が今後の方針の説明に入ろうとしたところに由夢ちゃんが待ったをかけた。

「何だ？ 朝倉妹」

「今後の方針の前に、そろそろお腹が空きませんか？」

「そうだね。もう、お夕飯の時間だし」

今僕達は食料を持ってないし。このまま飢えるのも嫌だな。

「わかってる。今からそれを話そうとしていたんだ」

「腹が減っては戦はできん。次の手を打つ前にまずは食料の調達だな」

「おつしやー、じゃ、ごはんごはん！」

「いや、待て」

動き出そうとした高坂さんを杉並が止めた。

「ちよつと、なんで邪魔すんのよ」

「迂闊だぞ高坂まゆき。残念ながら我々には買い物をするだけの資金

がない」

「何ですよ？ あたし、結構持つてるわよ？ 今月はあまり使っていないし」

「あのな、お前ら……ここがどこだか忘れたか？」

「へ？ 風見学園だろ？」

「板橋……お前は明久か」

「ちよつと雄二……何でそこで僕の名前を出すのさ」

「……この時代の紙幣と私達の時代の紙幣はデザインが違うわ」

「あ、そつか」

杏ちゃんの言葉に全員が頷いた。

「あ、でも……いくら時代は変わっても小銭なら。小銭ならデザインも変わってないと思いますし」

「おう、由夢ちゃんあつたまいい！ 小銭でもみんなの分かき集めればそれなりのものは変えるぜ！ そおら、みんな財布だせい！」

それから全員懐から財布を取り出して小銭を取り出した。小銭なら結構たくさんある。

「ああ、言つとくがデザインが同じだとしても年号には気を配っておけ。じゃねえと当然紙幣と同じ結果を辿るからな」

「誰も年号なんてわざわざ確認するとは思えないけど……」
「……要注意」

「だね。ひとつの油断が死に直結する時なんて多々あるものだから」
「ふ、不吉な事を言わないでよ明久君」

「けど、明久の言うとおりだな。万が一気づかれて厄介なことになったら困るし。極力安全作は取っておかないとな」

それから全員自分の小銭の年号を確認して古いものをかきあつめた。

「えくつと、全部かき集めて……ひゃ、146円……」

「菓子かジュースひとつでペアになる金額じやのう」

「だあく！ 結局こうなのかよ！」

「お腹すいたねえ……」

結局絶望的な状況にいるのは変わらなく、どうしたものかと雄二と

杉並君以外が膝をついた時だった。

「あの〜……」

絶望感漂う中、声をかけてきた人物がいた。

「ひよつとして……何かお困りですか？」

見ると綺麗な顔立ちの女の子が立っていた。というか、この人……僕が最初に声をかけた女生徒じゃないか。

「あの……まあ、その……かなり」

「ていうか、君は？」

「ああ、すみません。私、白河ことりって言います」

「ああ、これはご丁寧に。僕は吉井明久です」

………しらかわ？

「っは〜！ 食ったくった！」

「まさか、ここでもまともな飯にありつけるとは思わなかったぜ」

空き教室の机に並んだ焼きそばやフランクフルト、イカ焼きにたこ焼き、お好み焼き、その他お菓子やドリンクなど、たくさん食料の入っていたケースが一気にカラになった。

「ごめんなさい。これくらいしか用意できなくて」

「いやいや！ むしろここまで集めてもらって本当に助かったくらいだよ！ でも、その……お金の方は……」

「ここままでしてもらったというのに、いくらなんでもタダで済みますのは申し訳ない。」

「大丈夫ですよ。明日からのクリパの前に、飲食系のお店が試食をやっているんです。その時の残りをちよつともらっただけですからタダなんです」

「そうですか」

「どうやらこの世界の時間はクリパの前日みたいだ。こつちの日にちを知らなかったからちよつと助かった。」

「ところで、ちよつと気になることがあるので、聞いてもいいでしょう」

か?」

「はいはい、何でも聞いてください♪」

渉が白河さんの言葉に機嫌よく答える。

なんとなくどういう聞き方をするのかは想像できちゃうけど、その受け答えができる範囲のものかどうか……。

「あの……皆さんの着ているそれ……風見学園の制服に似てますけど、ちよつと……違いますよね?」

「あちゃあ……」

やはりそう来た。

「へ? これ、風見学園の制服だけど……って、あ! ちよつと違う!」

「あちゃー、自然すぎててすっかり忘れてたわ」

「えつと、これは、その……どうしよう」

小恋ちゃんがようやく自分の制服と彼女の制服の違いに気づき、高坂さんは頭をおさえ、音姫さんは若干動揺した。

付属の方は制服の上のラインが少しばかり違うだけだからあまり気づかれないけど、本校の方の制服はかなり差異があるので気づかれやすい。

彼女が疑問に思うのは当然のことだろう。

「あの、ひよつとして姉妹校か何かですか?」

「ああ……いや、そういうわけじゃないけど……よし、こういうのは義之に任せた」

「俺かよ」

「だつてお前、こういうの得意だろう?」

「いや、そういうのが得意なのは杉並か杏だろう」

「しかし、彼女には一飯の恩義がある。ここで嘘をついて後々厄介なことになつても困る。ここは素直に真実を伝えてしまつてはどうだ?」

「そうね。こうなつたら下手な言い訳しても同じだし。親切にしてくれた彼女に嘘をつくのは良心が咎めるわ」

杉並君と高坂さんが正直に話すことを薦めるが、

「でも、信じてくれるかな？」

「なにぶん、下手な嘘よしも今のこの状況が最も信じ難いからの」

音姫さんや秀吉の言う通り、この事実がまず信じられないからなあ。

「あ、なんでも言ってください。こう見えても私、結構信じやすいタイプなので」

その周りを和ませる雰囲気を見ると確かになんでも聞いてくれそうだけど……果たして、この時空レベルの話に耐えられるか。

「義之、どうしよう?」

「どうするたってな……」

「こつち側の人間に味方をつくっておくのは、悪くないアイデアだと思おうわ」

「私も杏ちゃんにさんせうい♪」

「私も賛成♪」

「……仕方ないか」

義之は意を決して白河さんに僕達の事、これまで僕達の身に起こった事を説明した。

「——て、いうことなんだけど」

「そうですか。みなさん、大変だったんですね」

『え?』

予想に反して白河さんのリアクションはかなり普通のうものだった。

「やつぱり、違う時代から来るなんて普通は経験できませんからね」

いや、こんだけ非常識な事言ってるのにその態度……もしかして、話を合わせてるだけ?

「あ、その……大丈夫ですよ。嘘だとは思ってませんから」

「えと……じゃあ、信じてくれるの?」

「はい、もちろんですよ」

僕の問いかけに笑顔で答えた。いや、なんとというか……

「なんか、あつさりしすぎな気が……」

「い、いいのかな……?」

高坂さんや音姫さんの言うとおりで、むしろ僕達の方がそれでいいのかと聞きたいくらいだった。

「この島には枯れない桜というものもありますし。それに、もうじきクリスマスですからね。そんな不思議なことが起こってもいいと思います。なんか、ドラマチックじゃないですか」

「いや、そういう問題ではない気がするのじゃが……」

「最初に知り合った人間が、物分りのいい生徒で助かったじゃない」

「いや、物分りすぎだろ。逆にからかわれてるって思えるぞ」

雄二の言うことはなんとなくわかるが、この様子だからかかっているようには思えない。

まあ、杏ちゃんの言う通り、信じてくれる人ができたのは今の僕らにはありがたいけど。

「ともかく、みなさんが困ってるのはわかりました。私に何ができるかはわかりませんが、力になりますよ?」

「え、本当に? 大助かりだよ! ありがとう——」

僕が嬉しくて彼女と握手しようとして手を差し出そうとした時だった。

「ねえ、あなた、白河って言うんでしょ?」

そこにななかちゃんがわくわくした様子で入り込んできた。

「はい、ことりです。白河ことり」

「私も白河なんだ。白河ななか。よろしくね」

そういつてななかちゃんがいつものように白河さんの手を握った。その瞬間だった。

「え?」

「あら?」

それから何故か2人は手を握り合った状態で顔を見合わせた。

それから何分か黙ってお互いを見つめ続けていた。

「何やってんだ、あいつら?」

「随分見つめ合ってるのう」

「……これで5分」

「白河同士、何か通じるものがあるのかな?」

「……ふう、びっくりしたあ」

「私もです。こんなことが起きるなんて思いもしなかった」

「あのく……2人で盛り上がりつつあるところすみませんが、何が？」

「アイコンタクトだよ。目と目で通じ合うこと、ね？」

「はい」

「お前らは超能力者か」

2人の言葉に雄二がツツコミを入れた。

「でね。しかも私達、どうやら親戚同士みたいなんです。ね？」

「うん」

「なんで見つめあっただけでそこまでわかるのですか」

「で、親戚って、どういう感じなの、ななか」

「あ、わかった。お婆ちゃんと孫の関係？」

時間的に言うなら茜ちゃんの言葉が一番説明つきそうだけど、

「違う違う。うちはお父さんの代で初音島に移り住んできたからね。

お婆ちゃんは本島にいるの」

「じゃあ、母方の婆ちゃんはどんなんだ？」

「白河は父方の性だよ。でも、初音島に親戚がいるって話は聞いたこ

とがあっただけど」

「へえ……じゃあ、それがその？」

「そうみたいです」

「雄二、わかりやすく説明プリーズ」

「あのな……要するに白河の少し遠目の親戚と覚えとけ」

むう……結構この2人、似てる気がするんだけどな。

「改めて挨拶させてもらおうわ。私は雪村杏。白河ななかさんのお友達よ」

それから杏ちゃんから自己紹介が始まった。

「同じく、茜。花咲茜です」

「え、えと……私は月島です。月島小恋」

「小恋はね、私の子供時代からの親友なんだ」

「ちなみにこの杏、小恋、茜の苗字を取って、3人合わせて雪月花とも呼ばれてるんだ」

「へえ、よろしくね」

「私は朝倉音姫。よろしくね」

「妹の朝倉由夢です」

「で、俺は桜内義之」

「あたしは高坂まゆき。よろしく」

「エリカ・ムラサキですわ」

「初音島一のジェントルマンこと板橋渡つす。何卒お見知りおきを」

「俺は杉並だ。質問は受け付けないぞ」

「朝倉……杉並？」

「白河さん？」

「あ、いえ……私にも、同じ名前のお友達がいたもので」

「へえ、そっちにも。偶然だな」

「ななかちゃんと白河さんの例があることだし、また親戚とかじゃない？」

「かもな。ちなみに俺は坂本雄二だ」

「儂は木下秀吉。演劇部に未来の風見学園の演劇部に所属しておる」

「……土屋康太。特技は盗さ……今のはなし」

「僕は吉井明久。よろしくね」

「はい。ともかく、未来から来て困ってるのが私の遠い親戚とそのお友達だというのなら、協力しないわけにはいきませんよね。困ったことがあつたら言つてください」

なんていい人なんだ。最初に出会ったのが白河さんでよかったと心の底から思った。

「そ、それでですね——」

それから白河さん……って、さつきから心でそう呼んじやってるけど、ななかちゃんもいるから名前の方がいいかな。

で、ことりさんが少し言いにくそうに苦笑いを浮かべる。

「そちらに協力する代わりに、私の話をちよつと聞いてほしいな……なんて思うんですけど」

「話？」

「はい。もしかしたら、みなさんと関係があるかもしれませんし」

「えつと……僕達と関係があるつていうと？」

「それが……これもまた聞けばおかしな話なので。他の人達だとちよつと言いづらかったので……」

もしかして、時間関係だろうか？ それなら確かに僕達に関係あるかもしれない。

話を聞かなければなんとも言えないけど、既に時空の壁を越えた経験のある僕はちよつとやそつとのことで驚くことはない。

「まあ、なんでも言いなよ。これだけしてもらっておいて、話を聞くだけじゃ足りない気もするけど、僕達でよければいくらでも」

「はい。実はですね……」

ことりさんから聞いた話はこれまた妙なものだった。ことりさんの話を聞いた一同は微妙な表情だった。

「時間の感覚が違う……かあ」

「昨日と同じことが毎日毎日繰り返されてるような奇妙な感覚ですか」

「うーん……そつちもそつちで厄介だなあ」

状況がはつきりしてない分、僕達よりも信憑性が低い。

「俄かには信じ難い話だな」

「なんだよ、タイムスリップしてきた俺達だって人の事言えないだろ」
「でも、彼女が私達に話す以上は、決定的な証拠はあるかしら？」

杏ちゃんの言葉にことりさんは僅かに頷いて、

「ええ。そろそろだと思うんですけどね」

「そろそろって、何が？」

「クリパの設備が、何者かに破壊されるような気がするんです」

「破壊？」

「荷物が崩れるとか、看板が落ちたり倒れたりとかいうものではないのかの？」

「ええ。何日も何日も……こう、何かで破壊されてる気がして……そう、この時間帯に大きな音がして——」

ドオオオオオオン!!

ことりさんが言いかけた時、少し離れたところから爆発音が響き渡る。

「な、なんじゃ!？」

「……爆発音」

「映画とかそんなじゃねえ。マジモンの爆発音だぜ」

それから一同が廊下に出て窓からグラウンドを見ると一角に設置されてるステージから煙が上がっている。

周囲に人影はなく、また怪我人などは出ていないようだが、グラウンドにかなりの人数が集まっていた。

なんというか、アクション系の映画とかでこういうシーンを見た気がする。こう……最初の爆発で人を集めて本命に当たるような感じの。

「やっぱり……これです。これを何度も見た気がします」

「やってくれるじゃないの。今に見てなさい!」

「ちよつとまゆき! 何処行くの!？」

「決まってるでしょ! 不逞の輩をとっ捕まえに行くのよ! 時代は違えど私達は風見学園の生徒会。祭りをめちやくちやにする悪を叩くのが使命よ」

「高坂先輩の言う通りです。ただ黙って見てるわけにもいきませんわね」

正義感に火のついた高坂さんとムラサキさんが校庭へ走ろうとするのを杉並君と雄二が止めにはいった。

「やめておけ。学園を守る正義の味方もいいが、少しは頭を冷やせ」

「どきなさい2人共。早くしないと逃げられるわよ」

「犯人ならとつくに逃げてるに決まってるだろ。どう考えてもあれは遠隔操作か時限式で爆発されたものだ。今あそこに行つたところでこっちの人間とは全く面識のない俺達が犯人扱いされるのがオチだ」
「うむ。坂本の推測通り、あれは高性能セムテックス火薬によるものだ。遠隔起爆も時限式にもできるものだ」

「それにあの爆発の規模、かなり小さいだろ。ご丁寧にステージの足元だけを潰して壊してやがる」

見ると雄二の言う通り、ステージを支える足の部分の接触する地面が少し窪んでいた。

これを見れば確かにちよつとした悪戯ではなく、ステージを壊すためだけに計画したと推測できる。これを難なく実行した犯人はひどく計算高く、用意周到な奴だろう。

「……破壊というより、混乱を誘うのが狙い」

「てことは、やっぱり悪戯なのか？」

「にしては随分正確さが出てるけど。あんな風に周囲に被害を出さずに目的のものだけを壊すなんて」

「でも、誰がこんなことを……」

『おい、どうしたんだ？』

『爆破だ爆破！ クリパに使うステージが破壊されたってよ！』

『また非公式新聞部の仕業か？ あいつらも懲りないなあ』

窓の外からそんな会話が聞こえてきた。

『……………』

「なんだ、その視線は。当然のことながら俺の仕業ではないぞ。そもそも俺の使命は祭りを盛り上げる事だ。無用な破壊など好まん」

「悪い。ついお前の方を見ちまった。お前が犯人じゃないのはわかってる」

「なんか、杉並が2人になった気分ね」

高坂さんが脱力していた。

「杉並、あなたこの時代から生きてたんじゃないでしょうね？」

「ああ、お前ならありえる」

年代的にまず無理だと言いたいけど、杉並君だと何故かそう言い切れないのが不思議だ。

「しかし、どうやら相手は結構なやり手っぽいぞ。相手のことがわからねえうちに動くのは賢明じゃねえ。その上俺達はこっちの時代の奴らから見れば部外者だ。犯人だと疑われて捕まるのが関の山。ここはひとまずどこかでひっそりとやり過ぎるのが吉だろ」

雄二の言う通り、今僕達が何をしようとしたところでことりさん以外の人に出くわせば疑いの眼差しを向けられるのは確実だ。

ここはひとつ、どこかに隠れて休息を取るのが正解だろう。

「そうですね。お気持ちは嬉しいですが、今は様子を見た方がいいと

思います。それに、みなさん今日はお疲れでしょうし、あまり無理はしないでください」

ことりさんの言葉で全員今日の疲れを思い出したのか、一気に脱力する者も出た。

過去の世界に迷い込んで搜索のためはかなり体力を使ったからね。

「で、ことりさん」

「はい」

比較的、疲れを見せない杏ちゃんがことりさんに尋ねる。

「私達、今泊まれる所がなくて困ってるの。どこかい場所はないかしら？」

それが今一番の問題だ。お金がないから宿系は無理。知り合いもないからどこかの家に泊まるのも無理。

これでは休息を取ることさえままならない。

「ああ、任せてください。それなら——」

「よっこらせつと」

僕達はことりさんの指示である場所から布団を持ち運び、音楽室へ持ち込んだ。

「板橋、桜内、吉井……しっかりと働けよ」

「きちんと場所は考えてなあ」

「二お前らも働けよ！」

一部だらけたままの奴もいたけど。

「なるほど、音楽室とは考えたのう」

「はい。クリスマスパーティーの前夜は、学校に泊まり込む生徒も多いので特に不自然なことはないです」

木を隠すなら何とやら。女子達をうまく隠すことができれば男子の僕達を見ても凝視しない限りはごまかすことは可能だ。

「でも、いいの？ 勝手に使つて。というか、こんなところよく難なく入れたね」

「ああ、学校側には中央委員会の名前で手続きを済ませておいたので、心おきなく使ってください」

「中央委員会？　音姉、そんな学園にあったっけか？」

「確か、開校当初は生徒会のことをそう呼んでたって、前に宮代先輩が言ってたね」

「つまり、彼女はあたしらの大先輩ってことになるんだね」

「そんな、普通にしてきてくれていいですよ。それにしても、50年後の生徒会には、みなさんのような頼もしい方々がいるいんですね」

「それと同じくらい困った奴もいるけどね」

高坂さんの視線が僕と秀吉、雄二を除いた男子メンバー全員に注がれる。

「はて？　誰のことやら」

「……意味がわからない」

この2人の言葉は無視して僕達はそのまま寝具の準備を整えた。

「では、今日のところは私は帰りますね」

「うん。ほんとうにありがとう。今日だけでいっぱい世話になっちゃって」

「いえいえ。困った時はお互い様です」

「じゃあ、もし気づいたことがあったら教えるな」

「はい。よろしくお願いします。それではまた」

ことりさんはペこりと頭を下げてから教室を去っていった。

それにしても、今日だけであれこれ衝撃的なことだらけだったよ。過去に繋がる扉をくぐるわ、帰れなくなるわ、お金も使えないわ、ハチャメチャな日だった。

「協力があるとはいえ、泊まることになるなんてね」

「なんか、お泊まり会みたいだね」

「音姉、そんな呑気な」

「まあ、よいではないか。このような体験、滅多にできるものではないぞ」

「そうだよ。こんな体験、普通はできないよ」

「うんうん。それにこうやって泊まるのだって、合宿みたいで楽しそ

うだよね〜」

「ななか、茜……すごいポジティブだね」

ところどころ楽しんでる人もいるようだ。まあ、僕もななかちゃん達ほどでないにしろ考えはポジティブな方だと思う。

別に今のところ命を左右するような事態ではないのだから生きている限りはなんとでもなる。

「お気楽ね、あなたたち。でも……もっとお気楽なのは、渉ね」

「あ？ 渉がどうかし——」

「ガ~~~~~……スピ~~~~~……ん~~~~~……」

音楽室の一角で渉は既に熟睡していた。

「こいつ、ある意味大物だな」

「よもやこの状況下でもここまであつさりと眠りにつけるとは……」

「逆にちよつと感心を覚えるかも」

「とりあえず、今日のところは体力温存や鋭気を養う意味でも寝たい方がいい。明日も調査することは色々あるしな」

「そうだね。細かいことはまた明日話し合おう」

「そうですね。流石に今日は疲れてしまいました」

「さんせ〜！ あ、でもでも、その前に……小恋、花咲さん、雪村さん、そつちお願い」

ななかちゃんが指示をすると雪月花の娘達を加えて4人で渉の寝ている布団の四隅を持って運び始めた。

そして4人は渉を布団ごと音楽準備室の中へと放り込んで扉を閉めた。ご丁寧に鍵までかけて。

「ほう……中々やるな」

「いい仕事をした。確かに、あのいびきはかなわないからな」

「そうね。近くであんないびきを聞いてたら寝ようにも寝つけないわ」

「あはは……」

確かに、別の部屋に置いたことはいびきのうるささは軽減できたけど……渉、悲しいね。

僕は心の中で渉に合掌した。

「さて、準備もできたことだし。いびき対策も万全になったところで寝るとするか」

「そうだね」

そうしてみんな自分の寢床へとつき、全員が布団に入るのを確認して部屋の照明を落とす。

「じゃあ、みんなおやすみ」

『おやすみなさ〜い』

これが本当にお泊まり会だったらもうしばらく色々な話題が上がつてただろうけど、みんな今日は疲れたのか、すぐに寝入っていくものが続出していく。

僕も布団に入ってから意識が遠くなるのを感じた。

でも、この眠気……疲労によるものじゃない気がするけど、意識がはっきりしない今の状態じゃ思考もままならない。

僕のそんな疑問も眠気によって露と消え、視界が真っ暗に、意識は遠くなっていった。

第二十九話

「明久君、起きて。起きてよ……」

「ん〜……」

ここに来て一日が過ぎた朝、ななかちゃんの声で目が覚めた。僕はだるい身体をゆっくりと起こして背伸びをする。

「ふあ〜……」

「うわ、すごい眠そう」

「実際眠いし。ていうか、まだ結構早い時間じゃん。どうしたの?」

音楽室の壁にかかっていた時計を見ると生徒が登校するよりも結構早い時間帯だ。

「馬鹿ね。早めに起きておかないと、この時代の生徒が登校しちゃうでしょ」

「あ、なるほど」

「ぎよえええええええ!!」

「んごあああああ!!」

「な、何事?!」

突然悲鳴が聞こえてきて見ると雄二と渉が小刻みに震えたまま床にひれ伏していた。

「ひ、秀吉……今、何があったの?」

「うむ……雄二と板橋が中々に起きなかつたので、高坂先輩が目覚まし代わりの一撃を入れての」

「ああ……」

となると、もし僕がななかちゃんの声で起きなかつたら最悪の目覚めが待っていただろう。

今日覚めてよかったあ。ありがと、ななかちゃん。

「ところで、杉並の姿が見当たりませんわね」

「そうなの〜。私達が起きたら、もういなくて」

「どこに行ったんでしょね?」

「ムツツリー二もないのう……」

見れば杉並君とムツツリーニの姿がなかった。

「杉並君なら起きてすぐに視察だつて言つて出て行つちやつたけど」

「まあ、あいつらしいけど」

「土屋君は、大事な下準備があるからつてどつか行つちやつたけど」

杉並君はこういう状況だからこそ面白がつて色々回つてるからだろうけど、ムツツリーニ……は怪しい。まさかとは思うけど、こつちでも盗撮をしようとしてるのだろうか。

「さて、俺達も行くかな」

「行くつて、どこに？」

「とにかくこの教室出て、登校してきた生徒に紛れながら扉に関する調査をしていこう」

「そうだな。過去の方の白河の言ったこともちよつと気になるしな」

「まずは手掛かり第一だね」

それから僕達は登校してくる生徒が音楽室前を通るのを見計らい、それに紛れて二日目の搜索を開始した。

しかし、昨日がクリパ前日だつていつたから、今日搜索できるのはこの午前中だけだ。

それまでにどうにか扉の手掛かりひとつくらいは入手したいものだ。

「生徒会の役員が不在だなんて、やっぱり不安だよね……」

「杉並達もこつちにいる分、手間は省けるだろうけど、運営への影響は避けられないね」

「ああ、着任早々よろしくないイメージが……」

生徒会メンバーのみんなは向こうの方が気になつて搜索どころじゃなくなりかけている。

確かに、生徒会の主力メンバーがこつそりいなくなったからには混乱は免れないだろう。

いかに生徒会やほとんどの生徒の大半が音姫さんや高坂さんに依存しているのかが見て取れる。まあ、この2人が困つてる人を放つておけないというのもあるだろうけど。

「流石にこれだけの人数が一気に行方不明なら何かあると思うだろ

う」

「戻ってきたら色々面倒事が目白押しでしょうね」

「委員長、怒ってなければいいけどな」

「う……委員長のカミナリって、怖いもんね……」

「クリパの進み具合よりもむしろそっちが心配になってきたぜ」

「委員会になんて説明したらいいんですかね……」

みんな向こうでの心配事もあるようで、捜索に力が入りづらくなっている。

「まあ、向こうの事なんか気にしても始まらねえだろ。間に合わなかったら間に合わなかったでこっちのクリパの方を適当に楽しめればいいだろう」

「向こうの生徒会とて、そう簡単に混乱する者ばかりではないじゃろう」

「今はこっちに集中しないとね」

「明久君達、よくいつも通りでいられるね。人のこと言えないけど。それにしたって、すごい順応力だね」

そりゃあ、適応力がなければ文月学園じゃ生きていけないからね。

「……なあ、こいつらおかしくね？」

先程から準備中の出店を眺めてる渉が呆れたような、不思議そうな顔つきをしていた。

「おかしい？」

「なんつうかさ……やる気あるのかって感じなんだけどよ」

「へ？」

渉に言われて周囲を見回した。

よく見ると、みんななんというか……準備が初期段階って感覚が強い。

「あれ？　ほんとだ。まだほね組だけのお店もあるね」

「看板が壊れてるのは、失敗作だから？」

「え？　でも、こっちのクリパの開催は午後からのはずよね？」

「ちよつとこれ、全然間に合わないじゃない」

「ていうかこれ……」

「なんていうか……」

「クリパの、前日準備ね」

杏ちゃんの言う通り、これじゃあまるでクリパの前日の光景だ。

校内を一通り周り、僕達は中庭に集まった。

そしてそこにはことりさんが昨日と同じようにベンチに座って待っていた。

「あ、みなさん。おはようございます」

僕達が来るのを察知すると爽やかな笑顔を向けて歩み寄ってきた。

「昨日はよく眠れました?」

「うん、おかげさまで。あ、そうだ。ことりさん、ちよつと聞いていいかな?」

まず、先程感じた疑問を解消しなければいけない。

「はい、なんなりと」

「その……クリパって、今日の午後からだよね? でも、なんかみんな準備がゆつくりすぎるって気がするんだけど……」

「へ?」

僕の言葉にことりさんが心底不思議そうな顔をした。

「クリパは明日からですよ? 知りませんでした?」

『は?』

ことりさんの言葉に、僕だけじゃなく、その場全員がポカンと口を開けて間拔けな声を出した。

あれ? なんか、噛み合っていないっていうか……認識がどこかズレてる。

「ちよつと待つのはじゃ。まさか、延期になってというわけではあるまいか?」

秀吉がことりさんの言葉に誰もが思ったであろう疑問を投げかけた。

「いえ、予定通りですよ。クリパは明日の午後から開催です」

ことりさんの言葉の意味がわからなかった。秀吉にアイコンタク

トを送ってみると、首を振って答えた。

「ことりさんが嘘をついているわけでも、増してや冗談を言っているわけでもないということだ。いよいよわけがわからない。」

「えっと、白河さん？ 私達の時代では、23日から25日にかけて3日間、開催するんだけど」

「ええ、私達も同じです。なので明日ですね」

「じゃあ、明日に延びたってこと……」

「いえ、予定通りに……」

「ちよつと待てお前ら！ これじゃあ埒が明かねえ。率直に聞くぞ、白河（過去）。昨日あんたはクリパ前日、22日だと言った筈だ。だったら今日は23日。クリパ当日のはずだろ？」

「へ？ 昨日は21日ですけど？」

雄二の言葉にことりさんが不思議そうに返した。

ちよつと待って。いくらなんでもおかしい。

「杏ちゃん、昨日は……」

「23日。間違いないわ」

常人とかけ離れた抜群の記憶力を持つ杏ちゃんがこう言うのだ。昨日が22日で今日がクリパ開催の23日なのは間違いないはず。

なのにことりさん。それだけでなく、学園の生徒全員がクリパ前日の雰囲気を出している。これらが意味するのは……

「まさか、雄二……」

「ああ。恐らく、明久の考えてることで間違いないな。だとしたら、昨日の白河（過去）の言葉も納得がいく」

「あ、あの……一体何を？」

「ことりさん、昨日のことをよく思い出して聞いてほしいんだけど……昨日僕達に食事を分けてくれたのは覚えてるよね？」

「はい。みなさん、お腹空いてたみたいですから」

「で、それは開催前日の試食用だから分けてもらえた。そう言ったよね？」

「へ？ ……はい、確かに……」

ことりさんの認識が一部合致した。

「なら、音楽室で布団を貸してくれたのも覚えてる？」

「はい」

「それも、前日間に合わなかった人が泊まれるようにというためのものだって言ってたよね？」

「はい……確かに。変ですね……私、どうしたんでしよう。どこか時間の感覚がおかしいとは思ってましたけど……」

「雄二、やっぱりこれって……」

「ああ、今ので確信した。白河(過去)だけじゃねえ。この世界の時間そのものがループしてんだ」

雄二の一言で全員が納得いった表情で頷いた。

「なるほど。誰もがクリパ前日だと思っている。ならば当然、翌日間に合うよう準備を進めている」

「じゃあ、学園の生徒全員がことりさんと同じような状態になってると？」

「だろうな。しかも、大半の生徒は異変に気づいてすらいないみたいだぞ」

「ええ、でも……一体何で？」

「ふふふ……面白くなってきたじゃないか」

「のわあ!?! 杉並っ!?!」

「あんた、何やってたのよ!」

「……俺もいる」

「って、今度はムツツリーニ!?!」

「お主ら今までどこにおったのじゃ?」

一体何処から現れたのか、全く気配を感じなかった。

「なあに、一足先に事態を把握させてもらったまでのこと」

「……同じく」

ムツツリーニの言葉は嘘だろう。ただひたすら女子の着替えだとかなんだとか盗撮していたに違いない。なぜなら、彼の持つてるカメラのレンズに血がついているから。

絶対に女子の着替えシーンやらパンチラやらを見て鼻血を吹いたのだろう。

「どうやら、諸君も一定の結論に達したようだな」

「あなた、やたらと楽しそうですね」

「無論だ！ 過去の時代に迷い込み、しかもそこが時間が繰り返される世界と来た。一級のミステリーとして釣りが来る上に特典までついてきたのだからな」

「楽しいのはお前だけだろう」

「まあ、聞け。ここに至ってカラクリがひとつ見えてきたと思わないか？」

「カラクリ？ って……どんな？」

「俺の推測では、まず我々がこの時代に取り残されたこと。繰り返す22日。このふたつの事象は決して偶然ではないだろう。例の扉はこの世界のループに作用し、その逆もまた然り」

「……それってつまり、この時間の繰り返しをなんとかすれば扉の手掛かりを掴むことにもなる……っていうこと？」

「うお!? 明久が、珍しくまともな意見を!? 今日には槍の雨か……」
失敬な……。

「とにかく、確かに見当のつかない扉よりも現在進行形で私達の目の前に広がってるこの繰り返し現象から攻めた方が望みはあるかもね」

雄二の言葉を遮って高坂さんが頷いていた。

「そういうことだ」

「んで？ よくわかんねーけど、結局どうすりゃいいんだ？」

「渉……」

「まさか、明久よりも馬鹿な奴がいるとは思わなかったぜ」

だからなんで雄二はことあるごとに僕の名前を出すんだ。

「ともかく、ワシらが未来に帰れない理由と、繰り返しの現象には少なからず関連性があるということじゃな。となれば……」

「その辺りをもう少し調べる必要はあるわね」

「えく……また情報収集？」

杏ちゃんの言葉に小恋ちゃんがため息混じりに言った。

まあ、昨日も情報収集に行って疲れたのを今日もまた繰り返すのだ

から気乗りしない気持ちはわからないでもないけど。

「小恋ちゃん、そんな顔しないで。また、昨日みたいにあちこち探検しなきゃ」

「探検じゃなくて捜索でしょ？」

「それで、また昨日のように手分けでいきます？」

「そうね。集合するのはこの場所にして、またチーム分けだね」

「というわけだ。行くぞ、月島、花咲！」

「おっ♪」

「え？ え？ チーム分けは？」

「だから、俺と月島、花咲の3人で聞き込みを行うというわけだ！」

「え？ や、だから、せめてじゃんけんで……」

「そうつれないことを言うな、月島よ」

「そうそう。何も気にせず、小恋ちゃん。GO、GO〜！」

「あ、ちよ、引きずら……義之、助けて。義之い〜」

「……………」

「行っちゃったね、明久君」

「うん……」

杉並君と茜ちゃんに引きずられた小恋ちゃんがすごい不憫に思える。

「なんだよ、今回は月島と一緒に回ろうって思ってたのに」

「きつと、杉並君には杉並君の考えがあるんだよ」

「いや、きつとあいつは何も考えちゃいない」

残念ながら、僕も義之に同意だった。

「さて、残ったのは12人だから……また3手で別れますか」

「で。どういう風に分かれるのかしら？」

「そうね……」

「あの、すみません。私も動向させてもらっていいですか？」

「え？ それは構わないけど……」

「聞き込みとかの調査というのなら、私も力になれると思いますし。自分のことでもありますから、やっぱり気になって」

確かに、この世界の住人であるからことりさんだって当事者に違い

ない。

それにこの世界の人だから聞き込みの際、彼女の存在はありがたいものだろう。

「一緒に来てもらおう。こっちの時代のことはことりちゃんの方が詳しいし」

「私達が帰りたいのと同様、ことりさんだってループから抜け出したんですよね」

「朝倉姉妹の言う通りだ。こっちの時代の人間に味方してもらうのは正直ありがたい」

「うむ。聞き込みも楽になるじやろう」

「困った時はお互い様。一宿一飯の恩は返さないよね」

「みなさん、ありがとうございます」

「いや、それいうならむしろこっちの方が……」

「まあ、お礼に関しては解決の時まで、とっておきましょう。お互いに」

「さて、新しくメンバーも入ったところで、チーム分けといくか」

「で、結局どう分ける？」

「グーチョキパーでいいんじゃない？ それで、ことりさんが出した手と同じメンバーに同行してもらって聞き込みを」

「それでいくか」

「んじや、適当に3人で組んでグーチョキパーで分かれるか！」

渉の言葉でそれぞれ三人一組になってチーム分けを始める。僕は義之と渉だ。

「んじや、お二方。準備はいいか？」

「ああ」

「いつでも」

「じゃあ、行くぜ！ グツチョツパで、ほーほーほー！」

渉がグー。義之がチョキで、僕がパー。

「うし！ 俺がグー、義之がチョキで明久がパーな。おーい！ 他は決まったかー？」

「決まったよー」

「えつと、グーのメンバーは？」

「あたしね」

「俺もだ」

「後、私」

「なんだよ。坂本以外同じメンバーじゃねえかよ！」

「渉の癖に、不満そうな顔しないでよ」

「そうよ。さて、今日も張り切って行こう！」

「あの、できれば、わたくしに危険がない方向性で……うおおおおお
!？」

高坂さんが渉を引つ張って先頭にたち、あつという間にその場を去っていった。

「えつと、チヨキは……」

「やった！ 弟君と一緒に！」

「……俺もチヨキ」

「私も、桜内と一緒にですか」

義之の方には音姫さんとムツツリーニ、ムラサキさんの4人か。となると、

「今回は、明久と一緒にか」

「よろしくお願いします、明久さん」

「よろしく、明久君」

「よろしくお願いします」

秀吉に由夢ちゃん、そしてW白河。癒されるメンバーが多いな。こつちとしては嬉しい限りだけど。

「では、私達も行くとしますか」

「とりあえず、どこを巡ってみましょう？」

「どうします？」

「とりあえず、中の方は義之達に任せて僕達は学園の近くを見て回ろう」

「そういえば……」

「はい？」

「ことりさんとななかちゃんって、親戚……なんだよね？」

「ええ。そういうことになりますね」

「えと……図で表すと、どんな感じ？」

「うむ、それはちよつと気になるのう」

「え？ えつとく……」

ななかちゃんが頭の中で家系図を描きながら指を空中で動かしていた。

「あれがああで、ここでもこうなるかた、えくくくつと……駄目だ。こんながらがつてきた」

「そ、そんなに離れた関係なの？」

「そんなことはありませんよ。簡単に言うなら、ななかさんは私の親戚の子孫……として将来生まれる予定、なんだと思います。……多分」

「えつと……その、親戚の辺りをもう少し詳しくできない？」

「うくん……もつと細かく言えば、私の父方の方の祖父母の玄孫——つまりは孫の孫……のひとりに当たるのがななかさんということかと」

「……わからない」

「うむ、中々に難しいのお……」

「えつと……いとことかとはとことか叔母だとか、そういった言葉にはできないかな？」

「えつと……多分、そのものを指す言葉はないかと」

「……うん、複雑な関係ということにしよう」

「じゃあ、それで……」

「あはは……言うほど複雑でもないと思うんですけどね」

「なんだか、理解力がないのが本当に申し訳がない」

「……」

隣で由夢ちゃんは何か複雑そうな顔をしていた。ことりさんを見て。

何か聞きたいけど、どうしたものかと言った感じの表情だった。

「あ、あの……」

意を決したのか、由夢ちゃんがななかちゃんに尋ねる。

「はい」

「ことりさんは昨日、朝倉っていうお友達がいるって言っていましたけど……」

「ああ、そうですね」

そういえば、自己紹介の時にそんな感じの反応をしていたな。

「それって、どんな方ですか？」

「同じ学園の男の子ですよ。とても面白い人です」

「男の子ですか……もっと何か特徴とか、ありませんか？」

由夢ちゃんがいつになく積極的に尋ねている。何かことりさんの言う朝倉に心当たりがあるのだろうか。

「特徴ですか。そうですね……よく口癖みたいに『かったるい』って言いますね」

「あ……」

ことりさんの言葉を聞いて由夢ちゃんが確信を得た表情をした。

「えと……その人の名前って？」

「はい、朝倉純一です」

「やっぱり！」

由夢ちゃんが大声を上げて驚いた。

「あの、由夢ちゃん。その、朝倉純一って、由夢ちゃんとどんな関係で……？」

「あ、はい……朝倉純一というのは、私やお姉ちゃんの……おじいちゃんなんです」

「おじい!?!」

衝撃の事実。まさかななかちゃんの親戚に留まらず、由夢ちゃんのおじいちゃんまでいるとは。

まあ、確かに50年くらいなら今の僕達のおじいさんおばあさんが若い頃だろうから不思議でもないだろうけど。

まさかここまで身近な人間に縁のある人間がこの時代に集まって

いるとは。

「あ、驚いてるところすみません。ちよつと、クラスに寄ってもいいですか?」

ことりさんがある教室の前で止まって言った。どうやらここはことりさんのクラスなのだろう。

「いいよ、自分のクラスの準備だつてあるだろうし、僕達はここで待つてるから」

「ごめんなさい。すぐに戻りますから」

それから本当に数分で戻つてきて僕達は搜索を再会した。

「さて、ここなら人も多いし、聞き込みならもつてこいかな」

僕達は食堂の方へ顔を出した。見れば看板の準備やらテーブルで設備の配置する場所を相談したりという生徒が大勢いた。

「クリパだからいっぱいだというのもあるじやろうが、この人の多さは昔も一緒なのじやな」

確かに人の多さは僕達がいた時代と大差はない。

「でも、販売機は違うよ」

「そりゃあ、半世紀もすれば紙幣も機械も変わるでしょ」

「紙幣が未来で変更になつてるなら、なおさらでしょうね」

「あ、そっか」

「それで、どこから聞き込みしましょう?」

「そうだね。とりあえず見た感じ暇そうな人を優先して……え?」

「む? 明久よ、どうしたのじや?」

「……………メイドさん?」

「いきなり何を言うとのじや、お主は」

「いや、現物があるんだけど。ほら、あそこ」

僕が指差す方向を他のみんなも見ると、そこにはあたふたと慌てていたメイドさんがいた。

しかも、何故か頭に猫耳を生やして。

「……………メイドさん?」

「しかも、猫耳……………」

「何の出し物の衣装なののお」

「あの……どうかしました？」

ちようどことりさんが戻ってきた。

「あ、その……今、メイドさんがうろうろして、ね？」

「うん。頭にお耳が生えてた」

「不思議な方でしたね」

「そうかの？ 人間、生きていれば猫耳メイド服など着ることもあるじやろうに」

秀吉、決してそんなことはないと思う。

「はあ、メイドさん……ですか。まあ、本校の方ではメイド喫茶なども開くそうなのでその予行演習じゃないでしょうか？」

そ、そういうもののかな？ そんな事を考えているとことりさんの携帯が鳴った。

「あ、ともちゃんからだ。すみません、ちよつと出ますね」

「ああ、どうぞお構いなく」

「はい」

それからことりさんが携帯電話を操作して出た。

「あ、うん。手が空いたんだ。2人共？ ……わかった。じゃあ、後で」

友達なのだろうか？ 僕達に対するですます口調とは違ってちよつとくだけた感じの話しぶりだった。

それからことりさんは通話を切ってこっちに向き直った。

「今のは？」

「あ、友達です。手が空いたら手伝ってほしいって伝えてあったんですけど……」

「え？ それって、ほかにも僕達を手伝ってくれる人が？」

「はい。ちよつと迎えに行きますので、みなさんは先に中庭に行ってください」

「あ、うん。案内ありがとう」

「はい」

ことりさんはにこやかに手を振ってその場を去った。

「友達って、誰だろう？」

「さあね？ でも、ことりさんの友達が味方に入ってくれるのはありがたいよ」

「そだね、楽しみ」

「味方が増えるのはいい事ですし」
「うむ」

ことりさんの友達なら、彼女と同様この時空レベルの話にも耐性があるのかもしれない。

そんなことを考えて僕達はひとまず中庭に戻ることにした。

第三十話

「じゃあ、この人達がこどりの言ってた……」

「未来の風見学園からやってきた人達なの……？」

「そうなの」

こどりさんが連れてきた2人の女子生徒が物珍しそうに僕達を見る。

「えつと……どうも」

「ふくん……」

「大変だねえ」

「いえ、それほどでも……」

「あ、紹介しますね。こちら、私のお友達で森川知子ちゃん。通称『ともちゃん』です」

「よろしく」

「それから、こつちが同じくお友達の佐伯加奈子ちゃん。通称『みつくん』」

「よろしくね」

「よろしく……」

ともちゃんの方はなんとなくわかるけど、みつくんと呼ばれてる少女はなんでその愛称なんだろう？

本名とは一文字も関係ない気がするけど……。まあ、こつちにもムツツリーニなんて本名とはなんの関連もないあだ名で呼ばれてる奴もいるから別にそこに触れることはないか。

「じゃあ、こつちも一通り紹介するか」

「そうだね」

「お願いね」

それから現代……て、こつちの人達から見れば未来から来たのだから未来組ということ。で、未来組のメンバーの紹介が始まった。

「えつと……まず、俺の名前は桜内義之。未来の風見学園じゃ付属の3年な」

「タメか。こういう場合、同い年として扱うべきなのか、年下として扱うべきか……」

「もうタメ扱いでいいんじゃない？ 実際にはみんなまだ生まれてないんでしょ？」

生まれてないというか、年の数からすると義之達の両親だつてまだ存在してない。

「まあ、とにかく普通にしてくれた方がいいかな？」

「だよ。私達も、お婆ちゃん扱いされたらたまらないし」

「そりゃくそうだ」

僕達と同じ年のお婆ちゃん……改めて見るとシニールだよねえ、今のこの状況って。

「まあ、時代についてはこの際置いといて……次行くか」

「うん。あ、僕は吉井明久。義之とはクラスメートだよ」

「よろしくね」

「で、手っ取り早く、まずは僕の親友の、木下秀吉」

「木下秀吉じゃ。クラスは2組じゃ」

「変わった喋り方をするわね」

「女の子にしては結構珍しいわね」

「何度も間違えられとるが、僕は男じゃぞ」

「えい！ 男の子だったの!？」

「……………」

2人が同時に声を上げて驚くと秀吉が膝を落として落ち込んでいた。

「ともちゃん、みつくん……」

「ああ、ごめん……」

「工藤君以上に女の子っぽい容姿してたからつい……」

「えっと……秀吉の方は後でなんとかかするとして、次行こう。同じく

親友のムッツ……もとい、土屋康太」

「……………よろしく」

「えっと……今明らかにムッツリって言いかけてなかった？」

「気の所為です」

どうせムツツリーニの本性はすぐバレるだろうけど、自己紹介の段階でわざわざそれを明かすことはないだろう。

「そして、最後に坂本雄二」

「おう。その世界一のバカの世話役みたいなもんだ」

「誰が世界一のバカだ：、このゴリラ」

「誰がゴリラだ、女装マニア」

「うっさいよ拷問専門のドMが！」

「あはは……結構、仲いいね」

「よ、よろしくね……」

ほらみろ。お前のゴリラみたいな容姿で2人が若干引いてるじゃないか。

「さて、日も暮れそうだからどんどん行くか。俺達の時代の生徒会長の朝倉音姫と妹の由夢。俺の姉弟みたいなもんかな」

「よろしく」

「よろしくお願いします」

「ん？ 朝倉……？」

「で、生徒会副会長の高坂まゆきさんと、王女のエリカ・ムラサキ」

「やっほー」

「初めまして、エリカ・ムラサキです」

「王女様って……」

「未来の風見学園って、どんな所なんだろう？」

王女様が出た辺りで2人がひそひそ話しました。まあ、流石にこっちにまで王女様が転校なんてことはないか。

「んで、俺の友人メンバーに入って……ことりさんの親戚に当たるとしい、白河ななか」

「白河ななかです。よろしく」

「おお、言われてみれば、どことなくことりに似てるような」

「そうかな？ 雰囲気とかは全然違う気もするけど」

「えへへ、なんか照れますな」

「次に、俺の幼馴染の月島小恋」

「つ、月島です。よろしく」

「よろしく〜♪」

「それからうちの作戦参謀的な存在の雪村杏」

「よろしく」

「うわ、ちっちゃくて可愛い！ 色白い」

「清楚って感じるよね〜」

「ふふ、ありがと」

「……第一印象ってのは、あくまで第一印象でしかないよな」

渉の呟きに同意して頷いた男性陣だった。

「それから、こつちの……色んな意味で豊満なのが花咲茜」

「ちよつと義之君、それどういう紹介？」

「弟君？」

「兄さん……不潔です」

「つて、うわ……これ、本物？」

「と、とりあえず、拝んだ方がいいんじゃない？」

「そ、そうだね」

ともちゃんのみつくくんは神社のお参りみたく茜ちゃんの胸に向かって2回拍手を打って頭を下げる。

「うむ、くるしゅうない」

「はは〜」

なんのコントだっと思うなあ。

「で、こいつは板橋渉」

「ともー！ 風見学園のジェントルマンこと板橋でっすー！」

若干舞い上がった状態で渉が自己紹介した。ていうか、彼がジェントルマンって……。

渉の性格を知ってるみんなは微妙な顔をした。

「よ、よろしく」

「また、えらくテンションの高いのが来たね……」

「自分、軽音部に所属してドラムなどを叩いております。以後、お見知りおきをー！」

「へえ、ドラムを？」

「ある意味、典型的かも……」

何だか2人が渉のドラムという言葉に食いついた感じだ。ひよつとしたら彼女達も音楽をかじったりするのだろうか。

「で、最後に——」

「杉並だ」

「す、杉並？」

「なんだか、そっくりすぎるんだけど……ひよつとして、あの杉並君とも何か関係が？」

「さ、さあ……そこまでは……」

こつちの時代にも杉並君がいるのか。こつちの杉並君はどんな感じなんだろう？

「そんな奴のことなど知ったことではない。俺の前に俺はなく、また後にも俺というものはない。俺は俺だ。以後、よろしく」

「はあ……」

「と、ともかくよろしく」

とりあえず、これで全員分の紹介は終わった。

「それで？」

「え？」

「ことりからは大雑把に聞いてはいるんだけど、何が起きたとか、詳しくは……」

「だから、その辺りを詳しく教えてくれないかな、なんて」

「ああ、うん。実は——」

義之がこれまでの事を簡潔に説明した。

「——というわけで、俺達は未来に帰れなくなってしまったというわけだ」

「なるほどねえ」

「なんか、可哀想」

「え？ 信じてくれるの？」

流星にことりさんのようにはいかないと覚悟していたのか、義之が意外そうな顔をした。

「まあ、ことりからはなんとなく聞いてたし……」

「それに、ことりが嘘なんてつくはずないし」

「どうやらことりさんはかなりの信頼を得ているようだ。こういった時には本当にありがたい人徳だ。」

「みんなの力になれるかどうかはわからないけど、協力させてもらおうね」

「食べ物とか持つてきてあげるから」

「本当に!？」

「ありがたい。最大の問題である食べ物の問題が一気に解決できた。」

「ありがとう」

「いい人達だね」

「ことりの親戚なら家族も同然。困った事があつたらいつでも言つてね」

「不安だつたでしょ？ 私が同じような立場だつたら多分、すぐにくじけちゃつたと思うし」

「おお、なんか百万の仲間を得た思いだぜえ」

「渉が拳を震わせながら感動していた。こういう人達が協力してくれるのは僕としても嬉しい限りだ。」

「では、早速だがこの2人にもこの時代の事を色々聞かせてもらわねば」

杉並君がともちゃんともみつくんに色々聞くうちに夜になり、僕達は音楽室へと入った。

「ここに来るまでに軽く調査活動もやつたけど、やはり解明に至るものはなかった。」

「だが、今回はどうしても試してみたいものがひとつあつた。」

「それは、この繰り返し原理だ。同じ日が繰り返すというのなら日付が変わる瞬間はどうなるのか。それを調べることになった。」

「そのために、こつちの時代でこの時代をおぼろげにだが把握している数少ない人間のことりさんも一緒に泊まってもらうことになった。」

「この時代の人間がループする時の感覚がどうなってるのか、今夜実

証されるということだ。

「悪いな。こんな時間まで」

「えっと、ところでことりさんのご両親とか、心配してないかな？」

「はい。クリパの準備で泊まると言っておきましたから」

それから沈黙が続いた。全員少し緊張した様子で音楽室で無言の時間を過ごした。

「んがくくく……ぐおおくくく……」

……睡魔に負けた渉を除けば。

「暢気な奴なだ、あいつ……」

「あはは……」

なんていうか、こういう時に大物だなんて思うよね、渉って。

「それにしても、携帯が使えないのって不便ですね」

「まあ、一応時計代わりには使ってるけど」

「こういう時、いかに俺達が現代文明の利器に依存してるか思い知らされるよな」

「確かに、これだけで原始時代に戻った気分になるよね」

……ここが過去の世界ならなおさら退化した気がするよ。

「やっぱり時代が違おうと使えないんですかね？」

「そりやあそうだろ。契約してる会社にもよるが、俺達がいた時代はほとんどコンパクト化してるものが多いからこつちじや対応してる機種がないんだろ」

ことりさんの言葉に雄二が答える。確かに、まだ未確認の携帯を認識するものがこの時代になんじやね。

「ひとつ言うと、俺の携帯は見事に通信が可能だぞ」

「そっか……それはすごいね。………は？」

今、杉並君はなんて言った？ 自分の携帯は通信可能？

はつとして杉並君の手にある携帯を覗くと本当に圏外の文字はなく、アンテナマークが立っていた。

「杉並、これ、どうやって……？」

「特殊な方法でこの時代の電波をキャッチし、適合変換した信号を送っているのだ。簡単に言えば、小判鮫のように電波へ便乗している

わけだな」

「すごい……よくわからないけど、普通に使えるってこと？」

感心した音姫さんが杉並君に問う。

「無論、通話やメールなどお手のものだぞ」

「……ちなみに俺も」

こういう時のムッツリーニと杉並君はものすごいハイスペックなんだなと実感するよ。

「ということは、私達の時代の携帯とも連絡が可能なわけですか？」

「……そうもいかない」

ことりさんの言葉にムッツリーニは首を振って否定した。

「何でさ？」

「うむ。やはり機種が問題なのか、通信相手は我々の時代の端末に限られるわけだ」

要するに現在圏外になっている僕達の携帯しか使えないというわけか。意味ないじゃん。

「ん？ 待って、ムッツリーニ。それなら僕達の携帯も通話可能になるんじゃないの？」

「……可能ではある」

「なら、頼むよムッツリーニ。せめて僕達の間だけでも通話できるように」

「確かに。ずっと飾りとしてつけておくのもな」

「うむ。是非とも頼みたいのじゃが」

「……少し時間はかかるが、待ってろ」

そう言つてムッツリーニは僕達の携帯を持って別の部屋へ移動した。

「それにしても、みなさんの時代の携帯って、とても薄いんですね」

「そう？ これくらいは普通……って、それは僕達が未来の人間だからか」

そういえば、こっちは大体平成が始まって間もないんだっけ。

逆に義之達のいる時代は僕達にとっては未来だけだ。

「それに、スライドとか回転もするなんて、いかにも未来って感じがし

ます」

「機能も、パソコンがそのまま入ってるようなものですよ。大抵のことではできますから」

「携帯にパソコンが？　なんか、すごすぎて想像できません……」

「まあ、今は圏外なので、ほとんどのサービスの受けられませんけど」

「こういう時人間の技術の進歩というのを痛感するよね。」

「……とと、そろそろ時間だな」

「え？　まだ日付が変わるまで時間はあるけど？」

「吉井、変わらないのは日付だけではない。耳を澄ませ」

「へ？」

杉並君に言われるがまま耳を澄ませると、突然校舎の外から爆発音が響いた。

「ば、爆発!」

「何があつたのじゃ？」

「ふむ……やはり、昨日と同じ時間だな」

「昨日……そうか。そういえばそうだった」

「そういえば、よく思い出すと昨日もこの時間に爆発が起きた気がする。」

「やっぱり気の所為じゃなかったんですね。毎日、クリパの設備が破壊されてる気がするって感じたのは」

「いや、昨日ことりさんだつてこれ確認したはずじゃ？」

「え？　……あ、そういえば。ごめんなさい、やっぱりその辺りの記憶がどうも曖昧で。不思議なことなんですけど、昨日だったのか今日だったのか、それとも夢だったのか、夜明けになると自信がなくなつて」

「まあ、普段でも人の記憶というものは頼りにならないものだからね。」

「それにしても……こんな無粋な真似をする輩とは、何者なんでしよう？」

「そうね。こういう時、真っ先に杉並を疑いたくなるんだけど……」

「あいにくだが、俺はずっとここにいたぞ」

確かに、こんな奇怪な行動するのは杉並君以外考えられないが、実際彼はここにいたのだからこの時代の誰かということになる。

「私、やっぱりあれは杉並君の仕業だと思っんです」

「は？　しかし、杉並はずっとここにおったぞい？」

「いえ、そうではなく……この時代にもいるんですよ。杉並君が」

「は？　この時代にも？」

「……………じゃあ、ひよっとして」

「義之？」

「実は……最初この時代に来た時、妙に杉並にそっくりの男に会ってさ。顔はそれほどじゃねえが、雰囲気とか性格はまさしく杉並そのものだったぞ」

「え？　じゃあ、本当にこの時代にも杉並君が？」

まさか、この時代の風見学園にも杉並君の血縁がいたとは。それも、寸分も変わらない性質を持って。

「なあ、この時代の杉並も、ああいう芸当が得意なのか？」

「はい。私達の知る限りじゃ、杉並君以外ありえません」

「うわ、なにそれ……杉並が2人って、冗談じゃなくなつたわけ？」

「考えただけでも目眩がしますわ……」

杉並君が2人……確かにとんでもない事態だ。更にこちらの杉並君は僕達の敵と考えるべきだね。

まあ、向こうの時代でも立場上、杉並君は敵なんだけどさ。

「見てなさいよ、こっちの杉並！　必ずとっ捕まえてやるからね！」

「ええ、杉並はひとりで十分ですわ」

高坂さんとムラサキさんがこちらの時代の杉並に対する対抗心を燃やす中、ななかちゃんもポケットから携帯を取り出して画面を見る。見る。

「ねえ、そろそろ時間だよ」

全員がそれぞれ携帯を取り出して画面にある時刻に注目する。

「……………明久、雄二、秀吉。こっちも終わった」

ちようどいいところに僕達の携帯も通話可能にできたのか、ムツツリー二が僕達の携帯を渡してきた。

僕達もそれぞれ携帯を取って時刻を見る。

「ことりさん、今何日の何時何分かわかる？」

「えっと……12月22日の11時59分です」

今のところことりさんの時間に対する認識が変わる様子はないようだ。

「もうすぐ1日が変わるよ。……10秒前」

「9……」

「8……」

「7……」

ななちゃんや雪月花のみんながカウントダウンを開始する。

「6……」

「5……」

「4……」

生徒会メンバーも続いてカウントダウンする。

「3……」

「2……」

「1……今！」

「よし、ことりさん、今は何日ですか？」

「はい、22日になりましたね」

義之の質問にことりさんがはつきりと答える。

「あ……」

「これは……」

うん。これはもう間違いないだろう。

「えっと、ことりさん……さつきは何日だった？」

「ですから、21日でしたよね？ みなさんもそう言ってたじゃないですか？」

「え？ 本当にそう思ってるの？」

そう言っってななちゃんがことりさんの手を握った。

「……ちよつと心配」

手を握ってから数秒、苦い顔をして首を振った。

「では、白河ことり嬢と一緒に昨日の出来事のおさらいというごう」

杉並君が仕切って昨日のおさらいを始めた。

「ええ、覚えてます」

「でも、22日が繰り返されるってことで、ことりさんが俺達に相談してきたんですよ？」

「そんな気はするんですけど……ごめんなさい、やっぱり実感がなくて」

「では、一昨日の話もしてみるか……」

それから一昨日の出来事についてもおさらいした。

「はい。でも、それって確か、昨日の出来事のはずじゃ……？」

「でも、ことりさんと会ったのが昨日なら、昨日の昼間ともちゃんとみっくんと会った時のはどうなるの？」

「それもそうですね。変だなあ、とは思ってますけど」

「これ……どうなってるの？」

「とりあえず、日付が変わった瞬間に認識が変わってしまうみたいね」「記憶も意識も連続してるのに、認識だけが変わってしまう、というわけか」

「記憶があるつつうのに、日付の認識だけは変わるんだな」

杏ちゃん、杉並君、雄二がうんうんと頷きながら呟いた。

「でも、それだと昨日や一昨日の出来事はどうなるの？ 昨日や一昨日も同じ昨日の記憶になったら色々ややこしいことにならない？」「明久の言うとおりじゃ。どれもこれも昨日の出来事と記憶しては、色々矛盾が生じるのではないの？」

「いや、認識そのものがすり替わっちゃってるから、特別思い返そうとしない限り、記憶の時系列に矛盾があること自体気づけないんだろ」「おかしいなと思ってても、それ以上考えることはなくなるってこと？」「自覚してるこっちの時代の白河ですらこれなんだ。ほとんどの連中は気づいていないだろ。多少おかしいなと思ってる奴もいなくはないだろうが、所詮そこ止まりだな」

なんとなく、桜が年中満開という事実を不思議なままにしている島の人間特有の考え方も影響している気がするんだけど。

まあ、不思議だなと思うことを考えないようにしてそのままにして

おくことに關しては僕らも他人のことは言えないんだけど。

「でもでも、なら何で私達はすっかり覚えてるの？」

「そうね。私達はこっちに来てから3回目の22日だって認識してるのね」

「不思議ですわ」

確かに、そんなすごい力が何で僕達に降りかかってこないのか。

「確証はないが、俺達が他の時代からやってきたということと関係があるのだろうか」

うん。やっぱりそうなるよね。今のところ特別な力もない僕達に共通するのは未来から来たってことだから。

「でも、やっぱり今日は22日だと思います。それで、昨日が21日で……」

「ほう……。して、その根拠は？」

「今日が本来なら23日だった、というなら、クリパの準備はみんなほとんど終わってるんじゃないですかね？」

「あのな、それはさっきのあの爆発が……ちよつと待て」

ことりさんに何か言いかけた雄二が怪訝な顔をした。

そして杉並君と杏ちゃんも顔を見合わせた。どうしたのだろうか？

「なるほど」

「そういうことか」

「……だとすると、色々と納得いくぜ」

杏ちゃん、杉並君、雄二が納得したのか、笑みを浮かべていた。当然、ほかのメンバーはわかるはずもない。

「納得って、一体なんのことよ？」

高坂さんが3人に問いかけた。

「わからないか？」

「えつと……音姉、わかるか？」

「う、ううん……」

「昨日の夜、そして先程……ことり嬢の話によればその前の日も続いていた破壊活動。それに今のことり嬢の言葉」

「言葉？　言葉って何？」

小恋ちゃんが首を傾げながら杉並君に尋ねる。

「クリパの準備が終わっていないから22日。そう言っていたらう」

「正確には『今日が本来なら23日だった、というなら、クリパの準備はみんなほとんど終わっているんじゃないですかね？』よ」

杉並君の言葉に記憶力のいい雪村さんが一字一句変わらずに補足した。

しかし、その言葉に一体何があるのだろうか？　23日ならクリパの準備がほとんど終わってるんじゃないかって言われても、サボってる人がいればまだかかることだってあるでしょう。

そうでなかったら誰かが妨害でもしない限り……っ！

「そうか、一日が繰り返される原因と繰り返されるといいう結果……因果の逆転！」

「お、明久の癖にいい所が気がついたな」

「え、どういうこと？」

「言葉の通りよ」

「杏ちゃん、わからないから聞いてるんだけど」

「要するにだ。クリパの準備が終わってないから22日……逆に言えば準備が終わらなければ23日になりえないってわけだ」

「けどさ、坂本。準備は毎日続いているし、認識が変わるだけで、品物は変わるわけじゃないんだから、いつか準備は終わるだろう？」

「義之、そんなことには決してならないよ」

「は？　どういうことだよ？」

「準備をいくら進めても多分無駄。どれだけ準備したところで時刻が変わる少し前には……」

「時刻が変わる前……あつ！」

そこで義之や他のメンバーも思い至ったようだ。

そう。時刻をリセットするための一番のキーは、22日が繰り返される前のあの爆発による破壊活動だ。

「どうやら全員理解したようだな。そう、22日が続くことを望み、準

備を妨害している人間が確実にいる」

「そういうことになるな」

「私も杉並の意見に賛成ね」

「けどさ、準備が終わらないから日付が変わらないなんて……」

「そんなありえない話って思うだろうけど……実際こんな不可思議としか言い様のない状況なんだ。もうこの際みんなのいう常識は捨てた方がいいと思う」

「吉井の言う通りだ同土桜内。もう少し柔軟な発想を持って」

義之も渋った顔をしたが、やがてわかったよとため息混じりに呟いた。

「あの、とりあえず話を纏めると……クリパの本番を迎えたくない人がいるからあんな破壊活動が起こってるってことですか？」

「うむ、朝倉妹。そうかもしれないということに過ぎんが、もしくは……」

「準備期間だけを延々と楽しんでいる人間がいるか、か」

「そういうことだ、同土桜内」

「こんな変な世界、誰が好きで望むっていうんでしょうか？」

「パーティーは本番よりも準備している時の方が楽しいという人間もいるだろう？。別にそれほどおかしな感情でもないさ」

「確かに、本番は始まってしまえば後はただ終わりに向けて歩んでしまっただけですからね。みんなでパーティーの準備をしている時が一番楽しいという感情は理解できますわ」

文月学園じやただ面倒くさいから真面目にやることはなかったけど、昨年・中学……その頃の学園祭を控えた準備期間は確かに楽しいと感じていた。

だからそういった感覚が決してわからないわけじゃない。

「まあ、結局のところこれは単なる仮説でしかねえけどな」

「でも、そうなれば僕達がこれからやることは、決まってるよね？」

僕は自分でもわかるくらいニヤけた顔で全員を見た。そして、全員がコクリと頷いた。

「そうと決まれば……」

「じゃの」

「……（コクツ）」

いつものメンバーとも顔を合わせて、拳を握り、

「明日は……ゲリラ戦だ！」

決意を言葉にして僕は声高らかに宣言した。

第三十一話

3回目の12月22日の朝。僕達は目覚めて早めに登校してきたともちゃんのみつくくんが用意してくれた朝食を取った。

「よっし！これで今日も1日戦えるぞお！」

僕は貴重なカロリーを大量に摂取できたことに喜びを感じて叫んだ。

「うわ……いつにも増してすごいやる気だね、明久君」

「当然！」

ようやく僕達のやるべきことがはつきりしてきたのだからテンションも高くなる。

オマケに相手が限定されてるとはいえ、携帯も繋げることがなかったし。

「あれ？」

「ん？ どうした、明久」

「いや……充電もしてないのに昨日より何故か電池が回復してるみたい」

「そりゃあ、ムツツリーニが色々弄ったからだろ？」

「……機器につなげたのはほんの数分。そんな程度じゃ大した回復はできない」

たった数分で僕たちの携帯を繋げられたのかと思うと、改めて感心を覚える。

「ひよっとして、回復したんじゃないやなくて、昨日の状態に戻っただけじゃないのか？」

「あ、なるほど……」

義之の言葉に納得がいった。時間や人々の認識までもがリセットされるのなら、電子機器だって1日前の状態に戻ってもおかしくはない。

「まあ、繰り返しと言っても起きた出来事や記憶などが電子機器のよ

うに完全にリセットされるわけでなく、曖昧に昨日の続きが今日とい

う感じに続いているのが現状だな」

杉並君の言葉はイマイチよくわからない。

「雄二、それってどういうこと？」

「あのな、記憶だつて単なる現象に過ぎねえんだ。完全に同じ日を繰り返すならこつちの白河の記憶だつて俺達が会う前に戻らなきゃ辻褄が合わねえだろ」

「では、単に皆が22日と思い込んでるだけなのか？」

「それも違うだろ。認識だけなら地球は通常通りに動くはずだから気候も変化するはずだ。この島は年中桜が咲いてるからわかりずらいかもしれないが、それでも気温とかに何らかの変化は起きるはずだ」
「けど、昨日も一昨日も太陽のコースは一切、変わってなかったわ」
「げ、すげえな杏。そんなことまでわかるのかよ。観測でもしたのか？」

「正確に観測したわけじゃなくても影とかを見れば前日とのズレは大体わかるわ」

「たつたの1日2日の些細な変化をも記憶するとは、恐るべし『雪村流暗記術』といったところか。」

「あの、なんでそこまでハッキリ言い切れるんですか？」

杏ちゃんの記憶力を知らないことりさんや後ろにいたともちゃんともみつくくんも首を傾げていた。

「ああ、杏はどんなことでも正確に記憶していられるっていう特技があるんだよ」

「そ、それってすごいですね……」

「どんな些細なこともつて、例えば木の葉っぱの数とかも？」

「そこまで記憶できたら本当にすごいよ」

「まあ、信じる信じないは勝手だけ」

「信じますよ。雪村さんが嘘をついてないってことだけはわかりますから」

あつさりと信じた。なんとなく、どっかタチの悪い男に騙されなにかちよつと心配になったり。

「ご心配なく。その手に関しては敏感な方ですから」

「え!? 僕、声に出してた!？」

「いえ。ただ、吉井君は顔に出やすいので」

うん。どうやら本当に異性の心には敏感みたいだ。これだとうっかり——

「心の中であんなことやこんなことを考えるわけにもいかなかったか？」

「うん、だから気をつけなきゃ——って、人の心の声を勝手に捏造するな! ムツツリーニじゃあるまいし!」

「……失礼な」

僕達がコントみたいな会話を止めて杏ちゃんが続ける。

「それに、老化に関してはどうなるの? 1日程度じゃ気づかないかもしれないけど、みんなの細胞だって昨日と今じゃ違ってるはずよ」「あ、そっか。細胞だって日に日に変化するわけだし、それがずっと続く……」

「うくん? みんなおじいちゃんおばあちゃんになっちゃうのかな?」

「ずっと同じじゃない? 電子機器だって1日前の状態に戻ってるんだし」

人体にまで影響するかどうかは知らないけど、あらゆるものが1日前に戻ってるわけだし。

「言われてみれば、体が不快になる様子がないな」

「でも、お風呂に入らないっていうのもなんか嫌ですね」

風呂好きの由夢ちゃんがため息をつく。

「でも、それだけ色んなものがリセットされてるにも関わらず、私達の記憶は今も尚継続している。色々と不自然なのよ」

「そう。だから『曖昧』という表現を使ったのだ。我々は、今極めて曖昧な時空にいると理解しておいてもらえると助かる。そうだな、例えるなら『時間が止まった世界』というのと同じくらい主観的で曖昧な世界なのだ」

「は? 全然意味がわからないのですけど」

渉が首をかしげる。当然、僕もよくはわからない。

「雄二、つまりは？」

「ああ、要するにこの世界が一冊の本と仮定するな。それを俺達はずっと同じものを読み続けているようなものだと思っておけばいい」
「なるほど」

「で、具体的に何をするか、ということだが——」

「まずはこの時代にいる杉並って名前の生徒の動向を探ればいいんじゃないの？」

「そんなことは片手間にもできるであろう？」

「こつちの時代でも杉並という名前を知らない奴はいないみたいだからな。通りすがりの奴にちよつと聞くくらいにする程度でいい」

「なら、僕達はどこで何をすれば？」

「吉井、俺達は昨晚、繰り返し原因が終わらないクリパにあるという仮説を立てた。覚えているな？」

「うん、まあ……」

正確には杉並君、杏ちゃん、雄二がだけど、そこは今指摘するところじゃない。

「そうなれば次の疑問にぶち当たるだろう？」

「どんな？」

「果たして、例の破壊活動を止めればクリパはちゃんと終われるのかという疑問だ」

「要するに、保健？」

「うお……ここに來てからお前、えらく理解力が上がってねえか？」

「でも、保健って言ってもどうするんだよ？」

「準備が終わらないなら、終わらせる……つまりはそういうこと？」

「……ああ、なるほど」

「ようやく俺の思考に追いついたか、同土桜内に吉井。俺達は例の爆弾魔の行方を追いつつ、学園中で繰り返し広げられているクリパの準備をゲリラ的に手伝う。それが俺の提案するミッションだ。異論はあるか？」

「要はみんなでクリパの準備のお手伝いってこと？」

「そういうことね」

「それなら月島もわかる。はいはい、異論はありません♪」

「なんだか楽しそうだね」

「うんうん」

「だが、手伝った先から妨害されたら同じ結果にしかならねえ」

雄二の言う通り、向こうがクリパの本番を先延ばしにするのが目的なら僕達の行動をよしとはしない。

必ずどこかで妨害工作を起こしたって不思議じゃない。

「でだ。手伝いとパトロール……これを2グループに分けて同時に行おうと思っている」

「そうですね。いくら完成させたところで、壊されれば最初からやり直しですわ」

「実際、向こうも破壊活動を行っておるしの」

「あたしはそっちの方が得意分野かな。不審者を捕まえるのは慣れているし」

高坂さんが杉並君をじろりと睨む。

「ふっ。捕まえるではなく、追いかけるの間違いだろう、高坂まゆき。誇張表現はよくないぞ」

「うっさいわね」

「つまり、誰にも妨害されずに、全ての準備を完了させて今日を終えようということですか？」

「だろうな」

「やってみる価値ありそうだね」

みんな俄然やる気になった。やはり昨日のうちに目標を固めておいたのは正解だ。

「けど、どこを手伝えばよいのじゃ？ 端から端を手伝おうとすればこの人数でもかなりの時間がかかってしまうぞい」

「それについては心配ない。同志土屋よ、例のものはできてるな？」

「……既にコピーも作ってある」

ムツツリーニが懐から出したのは学校の見取り図のようなものだった。

「これを見たまえ。準備に手伝いを必要としている箇所を昨日のうち

に同志土屋にリストアップさせてもらった」

よく見れば所々印のようなものがあつた。該当クラス、準備の進行状況、妨害を受けている箇所など、各所の状況が細かく記されていた。

「すごいです……そちらの杉並君も、只者じゃなかったんですね」

「それについていつてる土屋君もすごいよね」

「未来の風見学園がどんなところかますます気になるよ」

「いつもこういう方面にパワーを使ってくれれば大助かりなんだけどもねえ」

「はっはっは！ それは言わない約束であろう」

「とにかく、これをもとに準備が芳しくない部分を優先して手伝えばいいんだな？」

時代は違えどほとんど風見学園のクリパの勝手を知っているメンバーばかりだ。やってられないことはないはず。

「これなら、私は自分の担当を進めますね。もう少し時間がほしいので」

「ああ、ことりさん達は自分のクラスを優先してほしい」

「じゃあ、また手分けして行った方がいいね」

「では、班分けを始めよう。戦力差を考慮して、このように分担してみせた」

まず、クリパの準備の妨害を阻止するメンバーに高坂さん、杏ちゃん、茜ちゃん、ムラサキさん、杉並君、雄二、ムッツリーニだ。

そして、クリパの準備を手伝う、メンバーに僕、義之、音姫さん、由夢ちゃん、ななかちゃん、小恋ちゃん、渉、秀吉といった具合に別れた。

「まあ、これが妥当か」

「では、早速各々の活動に取り掛かるとしよう！」

「そうだね」

いざ、僕らの時代に帰るために頑張りますか。

「では、皆の衆！ 行くぞ！」

「あ、こら杉並！ 勝手に出るな！」

「先行き不安ですわ……」

杉並君達のチームは音楽室を出て行った。

「じゃあ、俺達も行くとしますかね」

「まずは何処に行くかだね」

「そんなの行き当たりばったりに決まってるじゃねえか」

「えー、渉君ってばやる気ないー」

「いいじゃんいいじゃん、とりあえずあちこち行ってみよう、小恋」

「とりあえず、この人数でひとつひとつ当たるのは効率悪そうだから、2チームに分けて行動した方がいいかな」

「私もそれに賛成です」

「僕もそうした方がよいと思うぞ」

音姫さんの言う通り、ここはチームを分けてそれぞれの箇所を手伝った方がいいだろう。

「じゃあ、チームはどう分け……」

「じゃあ、まずはここから行こうか、弟君」

「兄さん、とりあえずここから行きましょう」

「え？ あれ？ 音姉、今チーム分けようと言ったばかりじゃ——おい？ おくくくい！」

「……………」

音姫さんと由夢ちゃんに引っ張られて義之は音楽室から去っていった。

「うむ……あつちには一応僕がついていこう。あのままでは双方桜内にべったりついてばかりではかどりそうにないからの」

「うん。お願い、秀吉」

「承知した」

秀吉は義之達の方へついていった。ちゃんと手伝ってくれればいいんだけど。

「あはは、モテモテだね。義之君って」

「うくく……今度こそ義之と一緒にと思ったのにく」

「くそ、羨ましいぜ。義之の奴」

「まあまあ、とりあえずこのチームでクリパの準備手伝おつか」

それから僕達は色々な教室を回った。

いきなり出し物の手伝いなんて提案したら見たこともない顔が多かった所為か、最初は非公式新聞部のスパイか工員かと思われたのだが、なかなかちゃんの実顔と渉の話術のうまさにより、割と簡単にこたを運ぶことができた。

僕と小恋ちゃんはそんな2人に感心しながらクリパの準備を手伝っていた。

「ふう、疲れたねえ」

「もう10箇所くらい回ったんじゃない?」

「おう、そんならいだな」

「うん」

ムツツリー二に渡された図を見て僕達が回った場所にバツ印をつけて確認を取った。

これでようやく付属の校舎の半分くらいはいった。

「でも、意外とこっちの杉並君の情報は集まらないよね」

「そうだねえ。色んな人に聞いても、神出鬼没だとか迷惑人間だとか、そんな話ばかりだったよね」

「あと、朝倉君って男子生徒と仲がよくていつもつるんでいるとか。あと、成績とか運動神経とかはいいみたいだね」

「なんか、総合すると俺達の知ってる杉並と大差ないぜ。もう、あいつ本人ってことにしているんじゃないかね?」

「うん、僕も……いつそそういうことにした方がいい気がしてきた」
どの情報も僕達が知ってる杉並君の特徴ばかりだもん。一体どれだけ共通点が多いのやら。

それから音楽室の方まで戻ると中から軽快な音楽が聞こえてきた。

「ん? 誰か、音楽室使ってる?」

「この時代の軽音部かな?」

「てことは、ひよつとして俺達の大先輩ってことにならないか、月島?」

「そうだね」

同じ軽音部として血が騒ぐのか、興奮気味に渉と小恋ちゃんが顔を合わせた。

「こりやあ早速、クリパの準備を手伝わなきゃな」

それから板橋君はノックもなしに無遠慮にドアを開けた。

「どもども〜」

「あら?」

「明久君、渉君、小恋ちゃんにななかちゃんだ」

「どうしたの?」

「いや、君達こそここでどうしたの?」

中にいたのはことりさんとともちゃん、みつくんの仲良し3人だった。

「見てわからない? バンドの練習してたんだ」

「え!? 君達、バンドやってたの!」

「うん」

ともちゃんは、アコースティックベースを手に持ち、みつくんはピアノの前に座っている。

ことりさんは楽器らしいものを持っていないからヴォーカルなのだろう。けど、ちよつと以外だったな。3人とももう少し静かというか、控えめな音楽をしそうな印象だったけど。

「一応、卒パのステージで何か披露しようと思ってね、練習してたんだけど——」

「みつくん、クリパでしょ? 卒パじゃなくてクリパ」

「ああ、そうだった。あれ、何で間違えたんだろう?」

「てことはひよつとしてみんな、軽音部に所属してるのか?」

「けいおんぶ?」

軽音部の意味がわからないのか、3人共首を傾げていた。

「軽音楽部のこと、略して軽音部。板橋君と小恋は軽音部なの」

「あれ? ななかちゃんは違うの?」

「ななかは暇があつたらちよつと私達の音合わせに歌う程度だよ」

「ふくん」

「ああ……でも、私達は違いますよ」

「バンドは有志で組んでるだけなんだ」

うくん……愛好会みたいなもののかな?

「それで、どんな曲をやるの?」

「今回やろうとしているのはJ A C U L A^{ジャックラ}っていうイタリアの30年くらい前の古いバンドの曲ですけど……知ってます?」

全く知りません。

「板橋君達、知ってる?」

「名前は聞いたことあるけど……」

僕の場合は世界が違うから聞いたことないし、こちらの時代で古いって言ったら涉達がいた世界じゃもう古いどころじゃない。

「ほら、四人囃子の方がいいって言ったのに」

「よにんばやし?」

「あ、知らない? 結構有名なバンドだと思ったんだけど。こないだ最新のアルバム出たばかりなんだけどなあ」

「いや、聞いたことはあるけど、俺達にとっては半世紀以上前のバンドだからなあ……」

「50年後に伝説になったりはしないんですか?」

「おじいちゃんの影響で、お父さんはたまに聞いてたりするんだけど……」

「そっかあ。残念」

まあ、流石に時代が違いすぎるもんね。

「でも、なんか本当にみんな未来から来たんだね。なんか、今の会話でちょっと実感湧いたよ」

「板橋君と月島さんが軽音部ということは、ひよっとして楽器得意だったりするんですか?」

「一応3人でよくセッションしてるんだけどな。ちょうどこの場所
で」

「渉君がドラムで、私がベース、ななかにヴォーカルをやってもらってるんだよね」

「この場所? 50年後の? へえ……なんかすごいね」

「あれ? ギターはいないんだ」

ともちゃんが発言に渉が急に苦い顔をした。

「あちやあ……」

「ああ、それは……」

「へ？ あれ？ 私、何かマズイこと言った？」

ともちゃんがあたふたと渉を見た。

「実は……秋まではいたんだけど、遅刻が多いからって渉君がクビにしちゃって……」

「え？ そうなの？」

「し、しようがねえだろ。真面目に音楽やらねえ奴は、俺は嫌いなんだ」

渉からそんな言葉が出るとは、相当音楽に情熱をかけてるんだな。

「ああ、せめてギターがいりやあなあ〜」

「あれ？ 義之が扱ってるの聞いてない？」

「え？ ちよつと待て明久。それ本当か？」

「うん。義之の部屋にギターがあるの見たし、義之が偶にいじってるの見たことあるから」

「え〜!? 聞いてないよ!？」

「あんの野郎、そんな大事なこと今まで隠してたのかよ、水臭え！」

どうやら全く聞いてなかったようだ。義之、戻ったらきつと質問攻めに会うだろうな。

「あの、一応僕もギター……というか、軽音楽に使う楽器は一通り覚えてるけど」

「は!?! おま、それも聞いてねえぞー！」

「しかも、一通りって……」

「いやあ、雄二と張り合って色んなゲームや楽器、スポーツで競ったことがあってね。ある程度のものできちやうんだよね〜」

スポーツなら、バスケットでスリーポイントを何連続入れられるとか、野球で150kmの剛速球を何連続ホームランにできるとか、色々やったなあ。

「あく、畜生、惜しいよな。ここに俺達の楽器が人揃いあれば、義之や吉井も交えて時代を越えたセッションができそうだったのに」

「渉、今はそれどころじゃないでしょ?」

「そうだった! ゲリラで各団体のクリパ準備の手伝いしてたん

だったぜ！」

「それなら、クリパの準備ってことで私達のお手伝いをしてくれませんか？」

「へ？ あ、クリパでバンドとして出場するのならことりさん達の手伝いもありか」

「でも、何をすればいいの？」

「それもそうだ。バンドの手伝いと言っても、楽器を扱って一緒に演奏ってわけじゃあるまいし。」

「これから私達が一曲演奏するんで、意見を聞かせてもらえたらなっと思うんですけど」

「へ？ それでいいの？」

「お安いごようだ。いくらでも聴いてやるぞ」

「僕達は適当な場所に腰掛けると、ことりさん達がスタンバイするのを待った。」

「準備はいい？」

「うん」

「大丈夫」

「では、いきます」

それからみつくんのピアノから始まり、ともちゃんのベースが音をうまい具合に震わせ、そこにことりさんの綺麗な歌声が響いた。

ななかちゃんの歌声だって相当だが、ことりさんの声はそれはそれで違った透明感があった。

外国語だからどんな意味なのかはわからないけど、それはそれでとてもない神秘性を帯びていた。

僕達はただ黙って、彼女達の演奏、歌声に聞き惚れていた。

それから数分後、演奏は終了した。

「…………どう、でした？」

「途中、ちよつと間違えちゃったけど…………」

「いや、全然すごかったよ！」

「なんか、聞き入っちゃったね…………」

「うん…………」

「ブラボー！ いや、俺感動しました！ 不肖板橋渉、感動いたしました！ ブラビツシモ！」

「そ、そこまで言われちゃうと照れちゃいますね」

それからしばらくの間、音楽に通ずる者同志の意見交換やらアドバイスやらが続いた。

当然のことながら僕はあまり音楽に詳しくないので蚊帳の外だった。

「あ、そうだ。手伝うついでに話なんだけど……」

「ん？」

「クリパ当日になっても帰れなかったらさ、私達と一緒にステージに出ない？」

「で？ 俺達？ でも、俺ら楽器ないし……」

「あ、そうじゃなくて、女の子2人」

そういつともちゃんはななかちゃん達を指差した。

「へ？」

「私達？」

「あ、ひよつとして、あれ？」

「え？ あれは……」

「えつと、何の話？」

「実はね、クラスの友達に手伝ってもらうつもりで衣装用意したんだけど、結局断られちゃって」

「衣装？」

「ああ、実はですね……バンドのバックダンサーをお願いしてたんですよ。でも、やっぱりできないって言われちゃいました」

「なんか面白そう。それで、どんな衣装だったの？」

「実はね、サンタの格好なの」

そう言ってみつくくんが荷物の中から赤い服を取り出した。

なるほど。クリスマスのはうってつけの衣装だろう。

「わあ、可愛い……」

「で、よかったら、これ着て一緒にステージに立ってもらえないかなって。帰れなかったらでいいんだけど」

「どうする？ 小恋」

「え？ ……でも、これちよつと恥ずかしいよ」

「とりあえず、今は着るだけ着てみたら？」

「ど、どうしよう？」

そう言つて月島さんは助けを求めるように僕達を見た。

2人のその衣装着た姿、是非とも見たい
「別に無理しなくてもいいよ」

「吉井君、本音がダダ漏れですよ」

「へ？」

しまった。ついつい癖が。

「まあ、俺も2人がその格好してるとこ見たいんだが」

「え、えつと……わかった」

「あは、決まりね。じゃあ、これ」

そう言つてもちちゃんが嬉々としながら衣装をななかちちゃんと小恋ちゃんに手渡す。

「それじゃあ、2人共、お願いします」

「らじゃ〜♪」

それからしばらくして――

「ど、どうかな？」

サンタ姿の小恋ちゃんは、想像通り可愛かった。

「お〜！」

「月島さん、可愛い……」

「うんうん」

「よく似合ってるね」

「うん、もう食べちゃいたいくらい」

「ええ？ ああ、その……」

ともちゃんの言葉に小恋ちゃんがあたふたと慌てた。

「な、何だろう？ 小恋ちゃん見ると、いじめたいような衝動がふつふつと湧いてくるんだけど」

「みつくんも？ 実は、私もなんだよね。どうしてだろ？ 私、そんな属性ないはずなのに……」

どうやら月島さんの存在、立ち居振る舞いは色んな人の嗜虐性を目

覚めさせてしまうようだ。

杏ちゃんや茜ちゃんのアレは元からだと思うけど。

「うう……ななか、早く出てきてく……」

「そういえば、ななかちゃんどうしたんだろ？」

「中々出てこないね」

「ちよつと見てきた方がいいかな」

流石にみんなも着替え終わってると思ったからか、誰も止める人はいなかった。

だが、それが間違いだったと数秒後に気づくのだった。

「ななかちゃん、どうし——」

「……………」

扉を開けてから自分の馬鹿さ加減に呆れる間もなかった。

「…………へ？」

ななかちゃんは何か考え事をしていたのか、まだ着替え途中だった。

まさか結構時間がたってるにも関わらず、まだ着替えに手間取ってるとは思ってもみなかった自分を殴ってやりたかった。

「えと、その……………これは……………」

「え？ わわ…………あ、明久君、何で!？」

「ああああああ！ ご、ごごご、ごめんなさい！ その、ななかちゃんが遅かったからつい気になって……………」

「て、ていうか……………か、固まってないで出てって！ じゃないと着替えられないでしょ！」

「すいませんし——どあああああ！」

僕は慌てて出て行ったが、運悪く足に何かが引っかかってものすごい勢いで反対側の壁まで激しく転がり、壁に激突した。

「いったあ〜…………やっちゃったあ……………」

「ていうか、何昔のコメディーみたいなことやってるの……………」

「これが噂の役得ってやつですか？」

「勘弁してください！ 決してわざとじゃないんです！」

僕は女子の前で土下座した。

「吉井君、わざとじやないのはわかってますけど、ちよつとあれは減点
1ですよ」

「すみませんしたー!」

減点という言葉に一瞬姉さんのことを思い出したけど、姉さんに比
べればずつと優しい方だ。

「明久君……」

小恋ちゃんの目がすごい冷たいものになつてるのが肌で感じる。

「お前、ナチュラルに羨ましい奴だなあ……」

渉は何故か羨望的だった。

「はあ、びつくりしたく……明久君つてば、いきなり入ってくるんだも
の」

やつと着替え終わったのか、サンタ姿のななかちゃんが出てきた。

想像以上に可愛らしい姿だった。

「その、さつきは本当にごめんなさい」

「んもう、明久君つてば、見たいなら見たいって言うてくれればいいの
に。ああいうのは駄目だよ。心の準備ができてないんだから」

「はい、本当にすいませ——あれ? あんなことしといてなんだけど、
ななかちゃんの説教のポイントがどこかズレてる気がするのですが
?」

「うわ、ななかちゃんつてば大人……」

「え? そう?」

「そうだよ。ああいうのは、キヤーエッチー、バチーン! つてパター
ンじゃない」

「うん、僕も思った。そんで、地面に叩きつけてから関節外し、トドメ
に鈍器でドカン! だと思っただけど」

「明久君、流石にそこまでは……ていうか、発想がグロイ」

「でも、優しく包み込むように男の子を諫める。なるほど、その手が
あつたかつて感じ」

「目から鱗だよね」

ともちゃんとみつくくんが腕組みしながらうんうんと頷いていた。

僕もそういう説教の仕方もあるのだなとちよつと思つた。

「うんうん。世の中関節外して鈍器で殴るのだけが説教じゃないんだなって大変勉強になったよ」

「よ、吉井君……それはもう説教じゃなくてただの暴虐だと思っんですけど……」

「でもよ、多分、日頃の行いがマシな明久だからあの程度で許されたんだろ？ もしあれが俺だったら今頃明久が言ったように……考えただけでも恐ろしいぜ」

「どうやら日頃の行いがマシではないという自覚はあるようだった。だったらこれからでも日頃の行いを改めようよ。」

第三十二話

ことりさん達の練習の手伝いを一通り終わらせて僕達はまた別の団体の手伝いをするために音楽室を出て行くことにした。

「色々ありがとうございます。みんなの前で演奏して自信もつきましたし、これで無事にクリパを迎えられそうです」

「やっぱり音楽やってる人のアドバイスとかあると違うよね」

「色々刺激になったよ」

「僕は違うけどね……」

でも、何度も繰り返してるうちにみんなの演奏が上達したのは僕でもわかった。

「後は無事に23日が来てくれるのを祈るだけなんだけどね」

「そのためにも他の団体の準備もバンバン手伝わないとね」

「そうだね」

それに、あの爆発の実行犯の最大容疑者であるこつちの時代の杉並君のこともね。

「でも、何か不思議だよね」

「うん」

「え、何が？」

「みんなが未来から来たのは納得できたんだけど、でもやっぱりまだ22日がどうのってのは実感湧かなくて……」

「そうそう」

「それについてはしようがないよ。どうも認識まで変わっちゃってるっぽいから」

最初に疑わしいと思ったことりさんですら昨日一昨日の記憶にズレが生じてるんだ。

というより、君たちがこんな事態を理解できただけでもすごいことだ。

「ともかく、みなさんも準備の方、頑張ってくださいね。杉並君の動向がわかりしだい、私達からも知らせますから」

「よろしくね」

「おつしやあ！ 月島、白河、明久、次行こうぜ次！」

「うん、そうだね！」

「今度は渉君のドラムも見せてよね」

「おうよ。今度来る時があったら、ちゃんとドラムセットも運んでくるぜ」

「それはちよつと無理があるんじゃないかな？」

「どうせなら、今度は私達が54年後の風見学園のクリパに押しかけちゃおうか」

「あは、それいいね」

「あの扉をくぐって未来に来る？」

「歓迎するよ」

「でも、それだと今度はこっちの時代のみんなが帰れなくなっちゃわない？」

「そ、それもそうだね……」

「だったら、このまま54年すぎるのを待つ方が楽しいかな」

「それじゃあ、みんな婆ちゃんになってるじゃねえか」

確かに50年もたてばもうみんなお婆ちゃんになってるだろう。

いや、しかしなあ……若干年齢不詳の人をひとり知ってる僕としては若いまままだという可能性も捨てたくない。

「ふふ、ドラムを叩いている渉君を応援する元気なお婆ちゃん達がいたら、それは私達だと思ってよ」

「期待してるから！ その時は渉君ファンになってチャホヤしてあげるね♪」

「そ、それは……喜ぶべきことなのか？」

お婆ちゃんにチャホヤされてる渉を想像する。やばい……ちよつと吹き出した。

「おい、明久！ お前、今50年後のこの2人にチャホヤされてる状況想像して笑ったろ!？」

「ぐ、ごめん……ついね……」

「あら？ 歳とった私達じゃ不満だっというのかしら？」

「失礼しちゃうなあ」

「大丈夫だよ。2人共可愛いんだから、あと50年くらいは若いままでいられるんじゃない？」

実際さくらさんとか、姫路さんのお母さんとか、年齢に似合わない外見をした人と会ってるからこそ言えることだ。

「か、可愛いって……」

「明久君って、時々ジゴロって言われることない？」

「ほえ？」

いきなり何のことだろうか？

「ううん……言われることはないけど、明久君って、自覚ないから」

「ほえ？ 何が？」

ななかちゃんまで、一体何なのだ？

「……これだもん」

なんか、ななかちゃんが膨れてるかど、どうしたのだろうか？

「あはは……なるほど」

「ななかちゃんも苦勞するね……」

2人は理解してるみたいだけど、僕には何のことかさっぱりなんだけど。

「もう、みんな遊んでないで行くよ」

「うん、そうだね」

「あ、はいはい！」

「おい、置いてくなよ！」

「後で私達も合流しますね」

「うん、後だね！」

僕達はことりさん達と別れて再びゲリラ戦へと赴いたのだった。

僕達はクリパの準備を終え、中庭に戻った。

パトロール隊は既に待機しており、後は義之達のチームだ。

何分か待つとようやく義之達も戻ってきたようだ。

「ただいま。弟君チーム、帰ってきたよー」

「ああ、お帰りなさい——」

ここで言葉を詰まらせてしまった。他のみんなも同様のようだ。

それもそうだろう。戻ってきた義之達のチームの女子陣が……サ
ンタコスチュームの姿で来たのだから。

「あ、朝倉先輩……」

「音姫さん、その姿は……」

「ほう、まずは形から入るとは」

「あら、いいですね」

「へへ、音姫も中々やるにや〜」

全員の視線が音姫さんと由夢ちゃんに注がれていった。

「ん？ みんなどうしたのかな？」

「さあ、一体な……お姉ちゃん、私達、まだ……」

「お、音姫先輩っ！ 由夢ちゃんっ！ なななな、なんというセクスイ
くなサンタさんにいいっ！」

2人のコスチュームを見て渉のテンションが最骨頂に達した。

渉の言葉でようやく音姫さんも自分の格好に気づいたようだ。

「ああっ!? 何これ〜!? さっきの衣装のままだよ!? 何で教えてく
れないの、弟君〜！」

「いや、教えようとしたんだけど……周りの視線が怖くてな……」

一体義之達に何があったのか。

「そう恥ずかしがることもあるまい。2人共よく似合っておるぞ」

「い、いいよ〜！ 私の制服はどこ〜!?」

「い、一応両方持つてる……」

「もう、恥ずかしいよ〜！」

「兄さんのバカ〜！」

2人は制服を持ってさきつと物陰に逃げ込んでいった。

「義之、一体君達は何やってたのさ？」

「ああ、最初『被い屋』ってところに行っただ。そこには本物の巫女
さんがいてな」

「うん。それで？」

「クリスマス限定の巫女さん衣装つてのがあつて言つて、巫女さんが2人に勧めたんだけど、それが何故かサンタコスチュームだったんだ」

「似ているのは色だけじゃないか」

なんて豪快な間違いなのだろうか。

「それから、手伝っているうちに2人共自分の格好を忘れていつてな。俺も途中で止めようとしたんが、2人に近づこうとすると男子達の視線が……」

「ああ……」

なるほど。ただでさえ、可愛い女の子2人があんな格好をすれば相乗効果で更に可愛く見えたのだろう。

義之を睨んだ男子達の気持ちはよくわかる。

昼休み、僕達は食堂でミーティングを開いていた。

「諸君らの活躍により、今日1日でクリパの準備は目覚しく進展した」

「おうよ！ かなり頑張ったぜ。な？」

「うんうん」

「ここまでではみんな順調に進んでいるみたいだね」

それぞれの学校内にある準備の進み具合の記された図面を広げて確認した音姫さんが感心したように言った。

うん。もう半分以上も完成間近の場所が出てきた。

「じゃあ、午後からの行動についてだけど……」

「それについては午前中とほぼ同じだ。だがもうひとつ……」

「準備を妨害されぬよう軽快し、妨害者の撃退及び捕獲を試みる。午後はこちらにも注力していこう」

「日没に近づけば、それぞれの準備も進んでいくからな」

そう。時間がたてばそれなりに準備の整う場所も多くなるだろう。

「つまり、完成した状態で破壊すれば、妨害の効果が高いということですね」

「その通り。敵にとって、完成した出し物の全てが美味しい獲物となるろう」

「午後から……特に夕方以降は妨害の発生率は高くなるだろうな」

「上等よ。それって、犯人を捕まえやすくなるってことじゃない」

高坂さんが手をポキポキ鳴らして言う。

「そう簡単に行くか。犯人は神出鬼没。オマケによほど警戒心が高いと見た。まともなやり方じゃまず捕まえられないだろう」

「故に、我々も対抗して広範囲に監視網を展開すべきだろう。よって、ここからは個人で行動し、怪しい者を発見したら連携して追い詰めるのだ」

「おい、ちょっと待ってくれ。どうやって互いに連絡するんだよ？俺達の携帯は圏外に役立たずだぞ」

一応僕達文月学園メンバーのは例外だけど、みんなのはまだ無理だから個人で動くのは危険だろう。

「ふふ。それについては問題ない。例のブツを」

杉並君が指をパチンと鳴らして言った。

「はい」

「……既に」

ことりさんとムツツリーニが出したのは人数分のトランシーバーだった。

「携帯の代わりにこれで連絡を取りましょう。校内ならどこでも通じるはずですよ」

「……もしもの時を考えて常備している」

「すげえな。これならすぐに全員と連絡が取れる」

「流石ムツツリーニ！」

ことういう時は本当に頼りになる。

「何かさ、刑事ドラマみたいでかつこいいな。尾行とかしてさ」

「どちらかと言えば、板橋は捕まる方だがな」

「しかも真犯人の囷にされて、あっけなく消される、みたいな？」

「ひどいっす！」

しかし、その姿が容易に想像できてしまうのが悲しい。

「半分は中央委員会から拝借したものですので、壊さないように注意してくださいね」

「助かるよ!」

それからそれぞれの配置について相談しあった。

「あれ? 義之もひとりで?」

「そりゃあ、ここからは個人でいった方がいいだろう」

「ええ!?! ひとりじゃ不安だよ」

「だったら数人で行動すればいいだろ?」

「えつと……」

「私は個人で動きたいから。気になることもあるし」

「私も♪」

「ななかは?」

「私もひとりでお散歩したいな〜って思ったところ」

「ええ!?!」

「ふふ、月島……」

「はう〜、ひとりで行動かあ〜。不安だなあ」

「あ、あの、月島さん?」

「はあ〜……」

消沈している小恋ちゃんの耳には渉の声が聞こえてないようだ。

渉の存在を有りなむようにため息混じりにうつむいていた。

「月島さんは私と一緒にこ王道しましょう」

「え、いいの?」

「私は携帯持っていますから、いざというときは、ともちゃんと電話でも連絡できますし、その方がいいでしょ?」

「う、うん。ありがとう」

「あう……」

渉、哀れすぎる。認識すらされてもらえなかった。すっかり意気阻喪としてしまった。

「渉君は私達と行動しよう?」

「え? いいの?」

「なんか渉君の話、面白そうだし」

「行きます。行かせてもらいます！」

渉が一気にご機嫌になった。渉、この時代ならそれなりにいい人生を過ごせたんじゃないだろうか。

そして、それぞれのポジションを決めあって、

「よし、クリパ準備進行ゲリラ戦。夜の部、始めるわよ！」

高坂さんが声高らかに宣言した。

「さてと、どうしたものかな？」

個人のパトロールはいいけど、何処からどこまでを視察すればいいものか。

クリパの準備の手伝いは問題ないとしても、問題は妨害の阻止だ。

怪しそうな奴といっても、この時代からとんでもない出し物をする奴も多いらしいので判別が難しい。

更に多少妙な格好をしたところで出し物のパフォーマンスと言われれば納得してしまうような状況だ。

これじゃあ、ただ見回るだけじゃ妨害者を特定するのは難しいだろう。

「でも、犯人はほぼこの時代の杉並君だっていうし……」

もし僕の知ってる杉並君と共通する部分が多いとしたらただ巡回するだけじゃまず見つからないだろう。こっちの杉並君も隠顕として行動する人みたいだから。

だとしたら、この時代でもどこか隠し通路のようなものがあるのかもしれない。

そう思っ僕は中庭の方へ向かった。

外に出ればもう辺りは暗くなっていた。

もう時間はかなり遅めだった。夢中で時間がたつのも忘れてしまったようだ。

もう少ししたら一旦みんなに連絡入れるかと思った時だった。ふいに、目の前を金色の何かが通り過ぎたような気がした。

「……………」

この時代に来てから時間を繰り返したり、妙な感覚を味わったけど、今度のはそれとは全く違う。

どこか、妙に懐かしい感じがした。

ここは僕が生きた時代でなければ僕の住んでた世界でもない。なのに、懐かしい感じがした。

何故こんな感情が湧いてきたのか。不思議に思った僕は気づけばそれを追っていた。

「何処だ？ 何処に……………」

僕は夢中で追っていた。はつきりと姿を見たわけでもないのに、僕はアレを知っている気がするような依稀有な感覚をおぼえた。

十数分も探すと、僕はようやく見つけた。

「いた……………」

僕の正面には綺麗な金髪をなびかせた少女が歩いていた。

やっぱり懐かしい。初めて見る後ろ姿のはずなのに、僕は昔からあの子を知っている気がする。

「待って……………」

僕はその子呼び止めようとして駆け出した。

僕と彼女の距離がもう少しでゼロになろうとした刹那、

「ぎゃんっ!!」

僕の体に衝撃が走った。思わぬ衝撃に僕は吹っ飛んで地面に倒れた。

「あやややく、す、すみません!」

「い、いや、僕の方こそ……………」

顔を上げた瞬間、とんでもないものが視界に飛び込んできた。

差し出された手は毛がふさふさしてて、その顔はまん丸で、頭の上に丸っこい耳が生えていた。

「ク、クマ——っ!」

そう。僕にぶつかってきたのは巨大なピンクのクマだった。いや、

正確にはそのぬいぐるみだったのだ。

しかも、何故かその上に風見学園の制服（女子の）を着て。

「あや？ 私クマに見えるんですか？」

「むしろそれ以外にどう見えるって言うのさ!？」

「へ、変ですな……」

「いや、変って……普通だったら警察を呼んでいたかもしれないけど、明日クリパなんだからその格好するのも当然だと思うよ」

「いや、そうではなく、私がクマに見えること自体変と言いますか……」

「それより、どこか壊れたりしてない？ 結構衝撃来たと思うけど」

「あい、このくらいなら大丈夫です」

「そっか、よかった。でも、よく出来てるね」

僕はクマのぬいぐるみをじっと見た。うん、どうやってここまで手の込んだ作り物を創作したのだろうか。

「あや……そんなにじっくり見ないでくださいまし」

「クマが何照れてんじや~~~~っ!」

もじもじとしてるから恥ずかしいのはわかるけど、何故かクマのぬいぐるみ自体が赤くなっているのが妙にムカついた。

これじゃあまるで僕がクマを口説いているような光景じゃないか。

「あやや、違います。私はクマじゃないです」

「って、しまった!」

目の前のクマにびっくりしすぎてすっかりあの子の存在を忘れてた。

ふとクマの後ろを見たが、既にその姿はなかった。

「ああ、見失っちゃったく……」

「あの、どうかしたんですか？」

「いや、ちよつと人を探してたんだけど、見失っちゃって……」

「な、なんだかよくわからないですけど、ご、ごめんなさい……」

「いいよ。立ち止まっちゃった僕が悪い——」

ドカ——ン!!

「なっ!？」

「ひゃあああああ!?」

「今の、まさか!」

「な、何が起こったんですか!」

僕は慌てて校庭に駆けつけると、いたるところで煙が立ち上がっていた。

どうやらいくつかの模擬店のテントが破壊されてしまったらしい。でも、前日までとは規模がまるで違う。

これまではステージのみの破壊だったはずなのに、今度はその周りのテントまで破壊されてしまった。

やはりこれは、クリパ当日を迎えたくない思いがこんな事態を?

それに、さっきの子は一体誰なんだろうか?

夜の音楽室にて、僕達は遅めの食事をしていた。

もうじき日付も変わる。しかし、来るのは23日ではなく、4度目の22日だ。

みんなが持ってきてくれた弁当でお腹は膨れたけど、何人かはかなり気が落ちているのが感じられる。

「あく、また同じ日の繰り返しか……過去の時代もいいけどさ、そろそろ俺達の時代が恋しくなってきたぜ」

渉のようにホームシックになる人もいれば、

「お風呂に入りたいなあ……入らなくても大丈夫ってわかってても、入浴という行為がしたい……。誰かの家にお邪魔して入らせてもらおうかな」

「やめとけ由夢。不法侵入で捕まるぞ」

普段の生活の一部とも言える行為ができないがための禁断症状の出る子だっている。

「で、音姉は何やってるの?」

「ん? ああ、弟君のシーツや毛布のシワを伸ばしてるの」

「いいよ、そこまでしなくて」

「駄目だよ。寝心地が悪いと睡眠不足になっちゃうからね」

普段の生活を崩さない人だっている。

「空は鳥達の世界だった当時に、成層圏を飛ぶロケットを誰が想像しただろうか。つまり、人類が遥かなる宇宙へ到達できたのは、軍用技術を平和利用した結果と言えるだろう」

「なるほど……地球と宇宙の歴史には、そういった関係があったのね」
「では次に、地球に飛来した未確認生物との遭遇記録などはいかがかな？」

「それも是非お聞かせ願いたいわね」

「はっはっは、お任せあれ」

「こっちはこっちで異世界感たっぷりの話題が広がっている。あの中には流星に入れない。」

「また、22日が始まっちゃうね」

「僕がボーッと案じ膨れてみんなを眺めているとななかちゃんが隣に入ってきた。」

「うん……みんなもそろそろ気力が尽きかけている頃だよ。ようやく元の時代へ戻れる手段を見つけたと思って頑張ったのが、あんな結果だもん」

「でも、坂本君も言ってたでしょ？ 今回の昨日までとは規模が違うって」

「うん。爆音だって昨日までに比べるとかなり大きかったし」

「それって、私達のやり方は決して間違っていないってことでしょ？ 少なくとも糸口はつかめたってことじゃん」

「まあね」

「だから、明日も頑張ればいいんだよ」

「……そうだね」

「うんうん♪」

ななかちゃんの言葉でちよっと元気が出た。

爆発のことも気になるけど、今はできることをやらなきゃ。

でも、今日見たあの子のことがどうしても気になる。

「……………」

「明久君、何かあった？」

「え？」

「なんか、心ここにあらずって感じだもん」

「うくん……実は巡回してる時——」

僕が今日のことを話そうとした時、バン！ と、勢いよく音楽室の扉が開いた。

「とっつけきっつ！」

「な、何事おっ!?」

突然飛び込んできた少女の叫びに思わず飛び上がってしまった。

「御用だ御用だ！ 全員、神妙にしてください！」

まるで時代劇のようなテンションで僕達に警告すると同時にもうひとり音楽室に入ってきた。

「風紀委員です！ みなさん、動かないでください！」

「ふ、風紀委員!?!」

「ちっ！ とうとう見つかったか……」

くそ、繰り返しだけの世界だと思つて甘く見ていた。

僕達のことを怪しんで音楽室に飛び込んでこないと誰が保証したか。

「学園の征服を狙う悪の軍団は、この天枷美春が押さえましたー！」

天枷？ これまた聞き覚えのある名前が出てきた。

「さて、どうする？ 一戦交えるか？」

「アホか。ここで騒ぎ起こしたら元も子もないだろうが」

義之の言う通り、ここで余計な騒ぎを起こしたら明日からの行動に制限がつくどころじゃない。

繰り返しで認識が変わるのはクリパに関することだけ。決して僕達の記憶がリセットされるわけじゃないのはことりさんで実証済みだ。

ここは派手な行動は謹んだ方がいいだろう。

「残念。この時代の風紀委員とやらの実力を拝見するのも、面白いと思つたのだがな」

「杉並君、そんな呑気な……」

「へえ、こつちの風紀委員には、威勢のいいのがいるじゃない」

「ま、まゆき……そんな感心してる場合じゃないよ」

「ここは、やっぱり逆らわない方がいいんでしょか？」

「だろうな」

すると、風紀委員を名乗る2人のうちの1人が僕達の前に来た。

「みなさん、ここで何をやってるんです？」

「何って、お泊まり？」

「前日準備に、音楽室の使用許可は出ていないはずですが」

「あれ？ でも……」

「俺達は確かに許可が降り立って聞いたが」

「……ひとりさんは一昨日から僕達にこの部屋を貸して……あ。」

「ひよつとして、その辺りの記憶が曖昧になって許可がなかったことにされてたんじゃ……」

僕の言葉にみんなが納得して頷いた。

「あ、あの、俺達はその、深い理由があつてここにおりまして、決して騒ぎを起こそうとしてるわけでは……」

義之がどうにか説得を試みるが、

「言い訳は署で聞きましょう。バナナ井くらいなら出してやらんこともないですよ」

天枷と名乗った子が義之の言葉を遮った。ていうか、バナナ井って？

カツ井ならまだわかるけど、バナナ井って……ご飯の上にバナナが大量に乗ってるってこと？ どんなあいしらい方だつて言いたい上にあまりほしいとは思えない。

「それにしても、いい仕事してるじゃん。あんたらとは一緒に組みたいわね」

「設備が爆破される騒ぎがあつたので、私達は校内を巡回していたんです。どうせ杉並君の仕業だと思って見回ったのが、ここにも怪しい人達を見つけたので」

だから踏み込んできた。うん、その判断は決して間違いではない

けど、僕達の状況を考えると放っておいてほしかった。

「だが、爆破の犯人なら俺達じゃねえ。というか、俺達もその犯人を追っていたところだ。俺達もその杉並を探してるんだからな」

雄二の言葉に風紀委員の1人が驚いた表情をした。

「ということは、みなさんも委員会の関係者ですか？」

「ま、立場的には近いかもね。ただし、かなぐり先の年代だけど」

うん、それは決して嘘ではないけど。

「わわ、となると、これは誤認逮捕!?! しかも仲間とは、美春はとんでもない大失態を〜!」

「何か怪しいですね。念のため、身分を明かしていただけます? 見たことない方ばかりですし、制服も偽物っぽい気がするんですけど」

「み、身分を……?」

ど、どうしよう。一応学生用の身分証明書はあるけど。知つてのとおりそれは未来のものだ。

そんなものを見せたところで余計混乱を招くだけだ。

「どもども、3年3組の板橋渉で〜す!」

「だから渉、それは未来のでしょ? そんなのをこの時代で言っても意味ないわ」

杏ちゃんの言葉を聞いた相手は更に怪訝な顔になった。

「さつきから年代だとか未来だとか、一体なんのことを言ってるんですか? まさか、未来から来た未来人だとも言うんですか?」

その通りです。

「まあ、実際そうなんだよな……」

「はっ」

義之が肯定したために目の前の女生徒がポカンとした表情を浮かべた。まあ、当然だよな。

「兄さん、どうします? 下手に言い訳したところで余計に怪しまれるだけですし」

「そうだけどなあ……」

「本当のこと話しても疑われるだろうし、下手をすれば救急車呼ばれても文句は言えないしね」

さて、この状況をどう乗り切ったものか。

「あ、私がお話します」

「ことりさん!」

僕達が絶体絶命の状況でことりさんが手を差し伸べてきてくれた。

「あれ、あなた……白河さん?」

突然のことりさんの乱入に風紀委員の女生徒は驚いた。

「はい、白河です。お勤めご苦労様です、音夢さん」

「音夢?」

音夢、というのが彼女の名前のようだ。その名前を聞いて3人が反応を示した。

「ねむ……って、え? もしかして、音夢さん?」

「なのかな?」

「え、まさか……」

義之と音夢さんと由夢ちゃんが顔を見合わせた。そして、義之が恐る恐ると音夢さんに尋ねていく。

「あの、もしかして、朝倉音夢さんですか?」

「え? ど、どうして私の名前を……」

「えーっ!! てことは、お婆ちゃん!」

「お婆あ!」

なんと、どうやら彼女は音夢さんと由夢ちゃんのお婆ちゃんだというのか。

確かに、お爺ちゃんが若い時代だというのなら同時に若い頃のお婆ちゃんがいっても不思議ではない。

まさか、ここで朝倉姉妹の祖母と対面することになるうとは。

「ああ、ちよつと由夢ちゃん、それは失礼だよ」

ああ、驚いて気にする間もなかったけど、音夢さんから言い知れぬ迫力がひしひしと伝わってくるよ。

今のお婆ちゃん宣言でかなりお怒りのようだ。

「ええと……誰が、お婆ちゃんなのかしらね?」

音夢さんの笑顔が素敵に怖いと思った瞬間だった。説教モードの音夢さんや姉さん並みに怖い。

「あわわ……これは、その……」

「由夢ちゃん、いきなりお婆ちゃん呼ばわりはお婆ちゃんに対して失礼でしょ?」

「音姉、それじゃあ火に油……」

残念ながら義之の忠告は一步遅かったようで、音夢さんの額に青筋が立った。

「何なんですかこの人達? まだ学生の私に向かって、お婆ちゃんを連呼する……この人達は誰なんでしょう? 説明していただけます?」

「そそ、そんな、音夢先輩がお婆ちゃんだったなんてー! ですが安心してください。たとえ何歳であっても美春は音夢先輩を好きでい続ける自信があります!」

「こら、美春まで……」

何か、余計こんがらがってきたかな。

「さうて、グラウンドで夜トレでもしよっかな」

「ご一緒しますわ」

「あわわ、ど、どどど、どうしよう?」

「小恋ちゃん、落ち着いて。深呼吸よ」

「え、えつと……すくすく……」

「それから胸を張るのも忘れずに」

「そして、小恋の突き出た胸を揉む」

「って、何言ってるの!」

もう事態は収集がつかなくなりつつあった。

「あの、白河さん、この人達は?」

「ああ、今説明しますので」

それからことりさんが一連の流れを音夢さん達に説明していった。

「……と、いうわけなんですよ」

「な、なるほど……それで、お婆ちゃんというわけですか……」

「まあ、無理に信じてくれとは言いませんけど、それが事実なもので

「いいわ。とりあえず信じるから」

「いいんですか?」

「だって、そうしなきゃ頭がどうにかなりそうなもの……」

まあ、普通の人にこんな状況は頭痛の種にしかならないよね。

「じゃあ、本当にこの人がお婆ちゃんなんだね」

「ちよつと由夢さん？ 事実だとしても、その『お婆ちゃん』はやめてくれないかしらっ？」

「は、はい、音夢さん……」

音夢さんの迫力に由夢ちゃんは逆らうことができない。

「でも、昔のお婆ちゃんなんて、どう接したらいいのかわからないよ」「別に普通でいいだろ。今の音夢さんにとって俺達はまだ存在すらしていない相手なんだしな」

「そうは言われても普通って難しいよ。お婆ちゃんはお婆ちゃんだし」

「ゆ、由夢ちゃん、その言葉はもう……」

見ると音夢さんはこめかみを押さえた後、脱力したようにため息をついた。

「はあ、音姫さんに由夢さんか……自分より年上の孫娘を見るって、すごい複雑な気分……」

それについては同感だ。こんな状況、普通じゃまずありえないし。

「すごいですね、まさに感動の再会というものですか！」

彼女の側近らしい女の子、美春ちゃんが言った。

「だから、再会じゃなくて初対面なの」

「でもですよ、音夢先輩。ここにお孫さんがいるってことは……みなさんは、音夢先輩の将来の結婚相手を知ってるってことじゃないですか？」

「わ、駄目よ美春！ それ、ちよつと考えたけど、言わないようにしてたんだからー！」

「え？ お爺ちゃんのこと？」

「言わないで、お願い、言わないでー！」

音姫さんの言葉に音夢さんが耳を塞いだ。これ以上未来の話を彼女の前でするのはやめた方がいいのかもしれない。

「そういえば、美春ちゃんだっけ？」

「はい！」

「苗字は、天枷なんだよね？」

「はい、天枷美春です！」

「義之、やっぱり……」

「ああ、この流れからいくと……」

「確実にあの天枷関係だな」

「あの……何のお話ですか？」

美春ちゃんが首を傾げた。

「ああ、実は、僕達の時代にも天枷って娘がいるんだよね」

「はわは、なんと！ それって、美春の親戚なんですかね？」

「え、えっと……どうなんだろう？」

それについてはどう言ったものか。彼女はロボットだからなあ。

「元気なところは似てるけど、君と違ってバナナが嫌いって言ってた……」

「な、なななな、なんですと〜!? 今あなた、何と仰いましたかっ!？」

「え、だから、バナナが嫌い……」

「バナナが嫌いだなんてありえません！ いえ、あつてはいけないことです！」

「そう。未来の天枷はそんなテンションでバナナを否定してたぞ」

「いけません、それは大問題です！ 今すぐに会いに行きましょう！」

そちらの天枷さんに！ そして、バナナの素晴らしさをわかっていただくまで、美春は帰ってきません！」

「いや、その前に僕達は向こうに帰る方法を探してるんですけど」

「あ、そうでしたっけ。それは困りましたね。音夢先輩、こうなったらこの人達に協力しましょう！」

未だに頭を押さえていた音夢さんを揺すって説得を試みる。

「はいはい、わかったわよ……手伝いますっつて」

「本当に!？」

「だって、帰れないと私はいつまでも自分の孫と同じ世界で生きることになるんですよ？ だけど、それって、何か違う気がするし。2人共、あなたたちの知ってる音夢お婆ちゃんの世界に帰るべきよ」

まあ、そうだよね。

「音夢さんが協力してくれるなら、無事に帰れそうな気がするね」

「お婆ちゃんだもんね」

「お婆ちゃんじゃありません！」

色々問題は多そうだけど、とりあえず彼女達と協力関係を結ぶことができた。さて、明日からも色々大変そうだ。

第三十三話

4度目の22日の朝、僕達は昨日と同じようにクリパの手伝いを進めていた。

流石に同じことをしているだけあるのか、今日は一段とクリパの準備が効率よく進行していた。

午前中だけでもう3分の2はクラスの準備を片付けることに成功した。

流石は杉並君の用意した計画書だ。優先すべき場所が書かれているし、内容も昨日よりしつかり把握している分よりわかりやすい。

「おまたせ、俺達は目標数クリアだ」

義之達のメンバーも順調にクリアしたようだ。

「いやあ、相手が野郎でも褒められるってのはいいもんだな」

渉も大工系の仕事を主軸に手伝って褒められていたしね。なんと
いうか、兄貴肌っていうか、結構男子からは尊敬されていたね。逆に
女子からは敬遠されやすいけど。

「今度はもつと女の子が多いと頼むぜ。かつこいいとこ見せちゃう
からな！」

あの真剣さが普段から出てれば女の子に避けられるようなことは
ないと思うんだけど。

「では、女子柔道部の屈強なお姉さま達と健康的な汗を流してくるの
はどうだ？」

「できれば、もつとお手柔らかかに頼む」

「でも、順調なのはいいですけど……」

「行く先々で売り子をお願い、なんて頼みばかりだったもんね……」

「何故か儂にまでもな」

義之チームの女子プラスアルファはこの時代でも注目の的みたい
だ。

「私達は目標数よりも多い、合計7件クリアいたしましたわ」

「ほほう、エリカのチームもやるじゃん。ちなみに、あたしらは12

件、サクツと片付けてやったわ」

「片付けたのは主に男の俺だろ。そっちはサルみてえに高みの見物ばっか……」

「何か言ったかしら、坂本おっ？」

「いえ、なんでもありません」

高坂さんの莞爾に雄二は縮こまった。どうやら雄二は高坂さんに相当使われていたようだ。

「ふむ、見込みが出てきたぞ。我々の活躍により、重要度の高いポイントは全て押さえた」

杉並君がリストを見ながら機嫌よくしゃべる。

「だが、現状では敵の方が一歩リードと言えよう。一点返すだけでは俺達の勝利とは言えん」

「どうせなら、完膚なきまでに叩きのめしたいでしょ」

確かに、いくらクリパの準備を進めてもそれを破壊されては向こうの逆転勝利だ。

結局破壊活動の実行犯を捕まえないことにはどうにもならない。

「だが、そういつまでもやられっぱなしの俺達じゃねえ。昨日の爆破の規模のでかさには驚いたが、場所についてはワンパターンだ」

「そこで同志土屋には、これまでに爆破された箇所を全て調べ上げてもらった」

「……これくらい、造作もない」

なるほど、道理でさっきから姿が見えなかったわけだ。

「なるほど、早い話が待ち伏せ作戦ってわけね」

「確かに場所さえわかれば捕まえるのも難しくはないの」

「ああ。俺達が全ての爆破予定ポイントで張っていれば敵は何処かに現れるはずだ」

「んでもって、爆破される前に捕まえようってわけね」

「でもさ、それってこの人数でできるのか？」

昨日音夢さん達も入ったことで20人になってるけど、それでも全校になると範囲は広い。

「恐らく敵はひとりだ。流石にこの学園全てを回るのにも限界はあ

る。そして、爆破予定ポイントの数は、我々が2人1組になって対応しても十分にカバーできる数だ」

「よかったあ。連携すれば、なんとかなるよね」

「うん。ひとりだと不安だしね」

ともちやんとみつくくんがほっとした。

いくらスペックが高いからと言っても、これだけの数が邪魔をすれば落ちていて妨害工作だってできまい。

「へ、上等上等。来やがれってんだ。野郎には容赦しねえぜ」

「では諸君、迎え撃つに当たって、それぞれ相棒を決めてくれたまえ」

「なら、あたしは音姫と一緒にね」

「うん、まゆきが一緒なら心強いよ」

「では、私は由夢さんと組みます。下賤の者とは組めません」

「はい、頼りにしています」

他の人達はどんどん自分のパートナーを見つける。

「じゃあ、義之。今回は一緒に組まない？」

「お？ そうだな。いい加減男子とくみたいし」

「桜内よ、お主も儂を女子として見ておるのか？」

「でも、どうしたんだ、突然？」

「……………」

「いやあ、なんとなくね…………聞きたいこともあるし」

「は？」

「あの、杉並、俺は1人なのですが？」

「お前は女子と組ませることで暴走する危険性があるからな」

「かあく！俺も背中を任せられたかったぜ！」

とりあえず、ベアになる人は決まったようでも全員が準備を整え、午後の行動を開始する。

「で？ 何なんだ、聞きたいことって」

「え？ ああ、それね…………うん、なんかさ…………このクリパの準備を進め

ると、クリパの妨害を阻止すること。この時代を脱出するのって、本当にそれだけなのかなって」

「は？ それってどういうことだよ？」

「僕にもよくわかんないや」

「何だそりゃ……」

義之は呆れたように僕を見る。

「それと、昨日……何か妙に懐かしい雰囲気をした子を見て……」

「懐かしい？」

「うん。この時代の人とは面識なんてないはずなのに、どうしてか、あの子に対してはすごい懐かしさを感じたんだ」

「それって、どんな子だった？」

「うん。金髪の……青いリボンでツインテールを結んだ子だった」

「金髪に青いリボンでツインテール……あれ？ 確かに、何か覚えがある気がするな。その特徴」

「あ、やっぱり？」

「でも、誰だっけな？」

義之も思い出すには至らないようだ。そんな時、トランシーバーが誰かの持っていた端末の電波を受信したようだ。

『もしもし、桜内君、吉井君』

「えつと……どちら様で？」

『音夢です。朝倉音夢』

「あ、すみません。なんとなく、その名前で呼ばれるの違和感あって、咄嗟に音夢さんだって気づきませんでした」

『そう……未来じゃ、義之君は私になんて呼ばれてたの？』

「その……義之君と」

『そう。もうここまでできたら毒食わば皿までよね。で、義之君、そっちは何か進展あったかしら？』

「ああ、いえ。今のところは……そうだ、音夢さん、少し訊いていいですか？」

『いいけど、内容にもよるわね。お願いだから未来関連のことは言わないでね』

念のためか、義之の言葉を先回りしてガードしていた。

『あの娘達と出会っちゃっただけでもショックだったのに、これ以上何か聞く勇氣はないわ』

まあ、流石に自分の未来を全部知っちゃったらこれからどうすればいいかわかんなくてまいっちゃうよね。

僕だってあのババア長の実験でてきた未来の自分を見てすつごく腹が立ったし。

「わかりました。じゃあ、未来のことは抜きにしてこの時代のことについて」

『まあ、それなら一応聞くけど……』

『さくらさんや、純一さんは……どんな人だったんですか？』

『……兄さんとさくらちゃんを、知ってるの？』

そういえば、さくらさんだってこの時代じゃ学生だったんだ。

さくらさんは、年齢がわからないからどうなのか知らないけど。音夢さんの様子だと彼女はこっちでは音夢さんと非常に歳が近いのだろう。

音夢さんはちよつと驚いた様子で義之に尋ねた。

「ええ、とある関係で知っているんです」

今ので音夢さんもしかしたら家族じゃないのかと予想しているかもしれない。でも、今は何も言わない方がいいだろう。

『そう、2人を……。どうと言われると、返答に困るわね……』

「そうなんですか？」

『だって、毎日のように見てる光景だから、改めて訊かれると……当たり前で、なんでもない、でも賑やかな毎日がそこにあるだけよ』

それは、僕達の時代でも同様だった。彼女は、当たり前のように、僕達にいつも笑顔をくれる、そんな優しい人だから。

『兄さんはかったるいが口癖で、世話がやけるし、変なこと言つて私を困らせて……』

どうやら由夢ちゃんのかったるいという口癖はお爺ちゃんの遺伝だったようだ。

『気づいたら、知らない女の子とやたらベタベタしてることもあるし

……』

気の所為だろうか。彼女の声色に怒りが籠ってる気がする。

「純」さん、そんな過去があったのか……」

なんか、義之と似てるな。その純一さんって人。

『さくらちゃんは、そうね……いつも兄さんと一緒にいることが多いかな。もうあれは甘えね。もつとも、兄さんの方は困ってることもあるみたいけど』

さくらさんが甘えてる、ねえ。想像できないことはないな。失礼だけど、見た目子供だし。

『まあ、簡単に言うなら……』

「言うなら？」

『2人共、元氣すぎるくらい元氣、といったところかしら』

「そうですか」

もうそれ以上は話す気はないと言った風に会話を切った。

やっぱりさくらさんは謎だ。この時代から生きていたようだけど。思えば僕達は彼女については何も知らない。

それを改めて実感すると、何故か胸が苦しくなってくる。なんだから、非常に落ち着かない感じ。

それに、何かすごい大事なものが欠落している気がする。さくらさんのことを考えてから。一体……あ。

「そうだ！ さくらさんだ！」

「うわっ!? 何だ、いきなり？」

「さくらさんだよ！ 昨日見かけた金髪ツインテールに青いリボン……雰囲気は若干違ったけど、あれは間違いなくさくらさんだよ！」
「さくらさんが？」

『さくらちゃん？ そういえば、ここしばらくさくらちゃんを見てない気がするわ。だから、かな……何で気づかなかつたんだろう？』

音夢さんもさくらさんがいないことに今まで疑問が持てなかった。というより、記憶から外れていたようだ。

まるで、この繰り返しによってクリパに関する日にちに対する認識が変わった時のように。

「……明久、悪い。俺、ちよつと抜け——」

「待つて、義之。多分、僕も同じこと考えてると思う。行こう」
「……ああ」

僕と義之が頷きあつてある場所へ行こうと駆け出した瞬間だった。

『おい、明久。ポイントβ地点から杉並らしい奴を目撃したつて情報が入つた。お前たちもすぐに……』

通信してきたのは雄二だった。どうやらこつちの時代の杉並君を目撃した人達がいたようだ。でも、

「ごめん、雄二！ 僕達はしばらく学園を出る！」

『は？ ちよつと待て！ 外に出るつて、こんな時に何処に行く気だ!?!』

何処に行くかつて？ 決まつてるだろ。

「さくらさんの家だよ！」

言い終えて僕はすぐに通信を無理やり切つて義之と共にさくらさんの家へ向かつて駆け出した。

何十分かして、ようやくたどり着いた。

「ここが、50年前の、俺達の、住んでた場所か……」

「あまり、変わつてないね……」

僕も義之も肩で息をしながら僕達の住んでいる場所を眺めた。

朝倉家は50年後とほとんど変わり映えしてない様子でそこにたらずまっていた。

そして、隣にはご存知、僕達の住んでいる芳乃家が、

「あれ？ こつちは一階建て？」

「本当だ。しかも、典型的な昭和造りの……」

対して芳乃家の方は50年後とは全然違ふ。2階もないし、なんだか……雰囲気全然違つている。

なんていうか、僕たちのいた時代のこの家はすごい開けてるつてい

うか、明るいイメージがあるのに、こっちは妙に寂しいというか……
一種の孤独感が滲み出てる気がする。

「とりあえず、入ってみるか」

「入れるの？」

「鍵は一応あるしな。未来のだけど……」

こうして僕達は芳乃家にお邪魔しようとする門の鍵を開けようとした
ところで、

「あれ？ 開いてる？」

「ともかく、入るよ」

僕達は門をくぐって庭へと入り込んだ。

そして、縁側から無用心に開いていた部屋の中を覗いてみた。

中には最小限の家具と机に旧式のパソコンがあるだけだった。未
来の芳乃家とは全く違う。

ここは未来では居間として使われている部屋だ。未来ではテレビ
を前に、コタツに入りながらみんなでワイワイやっていた。

でも、ここは長い間たったひとりといった雰囲気の漂う部屋だ。さく
らさんが住んだにしてはすごい寂しい空間だった。

「いないね。出かけてるのかな？ いや、それにしちやあ無用心だし」

「さくらさーん！ いませんか？」

「さくらさん！ 返事してくださいー！」

僕達の呼びかけに応じる声は返ってこない。

「やっぱり、留守っぽいね」

「だな……」

誰もいないというのならいてもしかたない。僕達が出ようとした
時だった。

「うにゃくん」

突然、縁側に白い生物が現れた。

「ね、猫？」

猫っぽいけど、その姿はまるでぬいぐるみのようだった。

なんか、手足がない。代わりに独特な目としっぽを持っていた。な
んか、はりまおと通じるところがあるな。

もちろん、犬や猫には見えなく、ぬいぐるみとしか思えない外見という点が。

「えっと、これも……さくらさんが飼ってるのかな？」

多分、そうだと思う。はりまおという犬っぽいものを飼ってるからには同じように飼ってると思うけど。

「……こいつ、見たことある」

「え？ どこで？」

「俺が最初に1人で扉をくぐった時にこいつがいたんだ」

「へえ〜」

「お前、さくらさんを知らないか？」

「つて、猫（？）に聞いてもね……」

「にや」

応答した。

「知ってるのか？」

「うにや〜」

どつちだかわからない。

「ああ、肯定と受け取るか。どこだか教えてくれるか？」

「いや、だから……」

「うにや〜」

すると、猫っぽいのがぴよんぴよん跳ねて移動を始めた。

「うにや〜」

何か、僕達を待ってるような仕草だった。

「あれ？ 何か、本当に案内するつもり？」

「みたいだな。とりあえず、ついていこう」

「う、うん……」

猫に案内される人間って、シユールな絵だなあ。

猫の案内に従い、夕方までかかってようやく桜公園に辿り着いた。

「随分歩いたけど、合ってるのかな？」

「うにやにや〜」

それから猫は再び移動を始め、桜公園の奥へと進んでいく。

「この先って……」

「ん？　どうかした？」

「ああ、この先は……枯れない桜のある場所だ」

「枯れない桜……見たことないけど、この島で一番大きい、あの桜を中心に他の桜も枯れずに咲き誇ってるって言うあの？」

「ああ。この先にあるのがまさにそれだ」

道から外れ、桜の林の中を進んでいく。

見上げれば空が隠れてしまうほどに覆い尽くされた薄紅色が僕の視界に覆いかぶっている。

こんな場所があったんだな。花見する時なんか大盛況なんだろうなど思った。

そして、数分もすると周りのものよりもひとときわ大きい桜の木が目の前に現れた。

その存在感は圧倒的だった。静かで、見る者を引き込むような、そんな神秘的な雰囲気を持ったものだった。

「これが、枯れない桜……」

「うにゃ」

すると、猫は何か気づいたようにぴよんぴよんと木の根元に向かって跳ねていく。

そこには、人が倒れていた。というか、あれは……

「さくら、さん？」

そう、あそこで倒れてる……というより、眠っているのはさくらさんだった。

「さくらさんー！」

義之がさくらさんだと認識すると同時に駆け寄って彼女の体を揺すった。

「さくらさん、起きてくださいー！　さくらさんー！」

しかし、いくら揺すっても叩いてもさくらさんは起きない。

何故だか、心というか……魂そのものがこの身体に収まってないといった予想が頭をよぎった。

「義之、これって一体……」

「俺が知るか。とにかく、目を覚まさせるしかねえだろ」

「無駄だよ」

義之が再びさくらさんの体を揺すろうとしたとき、背後から声が出た。

振り返ってみると、いつの間にか人影があった。

「夢の世界に、ようこそ」

立っていたのは小さな女の子。金髪を青いリボンでツインテールに結んだ女の子。僕が昨日見た子だ。でも、その姿は……

「さくら、さん？」

どう見ても昔のさくらさんと言っても差し支えない姿だった。

「え？ さくらさんが、2人？」

そこに倒れているのはさくらさん。僕達の前に立っている子もさくらさん。どうなってるの？

「ここに来るの、思ったより早かったね。もう一周くらいはするかと思っただけ」

「……………」

「……………」

「あれ？ 無反応？ ああ、そういえば自己紹介がまだだったね。お控えなすって！ 手前、遠くアメリカからやって参りました、芳乃さくらという不束者でやんす！」

その任侠映画のようなノリは僕達の知ってるさくらさんと重なる。でも、何かが違う気がする。

「あれれ、また無反応？ せっかく名乗りの口上をあげたっていうのに、つれないなあ」

「あんた、誰なんだよ？」

「にやはは、だからさくらだったって。芳乃さくら。この世界に住む正真正銘の芳乃さくらだよ」

この時代のさくらさん。でも、何か妙だ。

「この世界のさくらさんだっというなら、そこにいるさくらさんはどうして、こんな状態に？」

「だから、彼女がそう望んでいるからこそだよ」

わけがわからなかった。

「それってどういうことなの？ 何でさくらさんが、義之達を置いてそんなことを。それに、なんでこんな繰り返しだけの世界に」

「あれ？ ひよつとして、君達、大きな勘違いしてない？」

「え？」

「ここはね、過去の世界っていうわけじゃないんだよ。過去を懐かしんだ僕が見た、懐かしい懐かしい夢の世界」

「過去の世界じゃない？」

「ああ、それは正確な表現じゃなかったね。ここにこうやって存在し、観測されている以上、ここだって立派な過去の初音島だ。でも、君達の住んでいる未来に続く過去じゃない」

彼女の説明の所為で尚更わけがわからなくなった。

「うーん、まだ理解できないかな。じゃあ、実際の話をしようか。実際は、この年のクリスマスパーティーの頃、僕はまだ風見学園には編入してなかったんだ。付属3年のクリパ前じゃなくて、確かバレンタインが過ぎてからだったかな」

風見学園に来たのが、まだ先の話？ じゃあ、なんで彼女はここにいる？

「ほかにもまだ風見学園に存在しちやいけない人が何人かいるし、関係性だって微妙に違う。例えば、白河さんとか。彼女はまだお兄ちゃんとも音夢ちゃんとも、知り合いになつてすらいはないはずなんだよ。本当は」

そうなのか。傍目からではよくわからないけど。

「ここはね、僕が風見学園の学生として過ごした日々の思い出が凝縮された、理想の世界なんだよ。まさしく、夢の世界って感じだね」

「つまり……よく人が過去を美化して思い描いたような、そんな感じ？」

「(名答)」

僕の予想にこの時代のさくらさんが拍手して肯定した。

「でも、何でそんな世界が存在するんだよ？」

「にやははは、わからない？ それはね、そこで眠っている彼女が、そう願ったから」

「さくらさんが？」

「うん、そう。彼女……未来の僕は今、色々無理をしているみたいだね。精神に相当のストレスを溜め込んでいるのがわかる。かわいそうに……」

さくらさんが無理を？ ひよつとして、仕事の色々立て込んで？

確かにそんな感じのことを言っただけ、彼女が言っているのはそれとは別のものようだ。

それにストレス……そんな言葉とは無縁と言っただいようなきくらさんが、そんなものを溜めてまで無理をするって。

義之も、彼女の言ったことが信じられないと言いたい表情をしている。

「だから、ほんの少し……ほんの少しだけ、昔を懐かしんでしまったんだ。そこを付け込まれたんだね、きつと」

「どういうことだよ？」

「一瞬、生まれてしまった心の隙を付け込まれて、夢に取り込まれてしまったんだよ。木を制御している最中だったみたいだからね。抵抗のしようがなかったんじゃないかな？」

「何言ってるのか全然わからねえぞ。木の制御？ 心の隙間？ 無理って一体何のことだよ!？」

彼女の言うことがわからないのか、義之は怒鳴った。

「あれれ？ 一緒にいて気づかなかった？ 彼女が無理に笑ってるって感じたことはない？ 悩みを抱えているようには？ わからない？ ずっと一緒に暮らしてきたんでしょ？」

彼女の言うことは、いちいち刺がある。それが僕や義之の胸に突き刺さってくる。

でも、さくらさんが無理に笑ってるなんて、わからない。僕の中のさくらさんはいつだって笑顔だった。

不審者と言っても過言ではない僕をずっと昔から一緒に住んでいた家族のように受け入れてくれて、僕を芳乃家に置いてくれた。

それが無理をしていたとも言えるのか。違う。絶対に違う。

「君は一体さくらさんの何を知ってるの？ さくらさんは未来で、僕

達の知らないところで何をしていたの？」

「それは言えないよ。もう、言う必要もない。僕は今、僕の望んでいることをしてあげてる。この夢の世界で、悲しみの訪れない世界で、ずっと暮らしていくんだ。大好きなみんなと一緒に、楽しい時間だけをね……」

それは魅力的な言葉に聞こえた。悲しみも何もない世界。誰もが望んでやまない願望。

「だから、もっと一緒に楽しもうよ。楽しいだけの、この理想の世界を」

自分の願いがこの世界にはある。だから楽しい時間をずっと続けよう。そんな気持ちが溢れ出そうになる。でも、

「……それは違うよ、さくらさん」

僕が反論しようとしたところで、義之が口を開いた。

「準備を繰り返すクリパの、どこが楽しいんだよ？ 同じ日を繰り返すだけの世界なんて、楽しくもないだろ」

「そんなことないよ。お祭りはね、準備をしている時が一番楽しいんだ。本番を迎えてしまったら、次は終わりが来ちゃうから。でも、こなら終わりはない。ずっと、楽しい時間が続くんだよ」

「いや、駄目だ。さくらさんを、この世界に置いてはいけない。俺の知ってるさくらさんはそんなことを本心から望んだりはいしない」

そう言って、義之は踵を返す。

「明久、手伝ってくれ。さくらさんを、一緒に連れて帰ろう。俺達の世界に」

「……うん、そうだね！」

僕も手伝ってさくらさんを抱き起こそうとした時だった。

「無駄だって言ったはずだよ。彼女は起きない。何故なら、彼女自身がそう望んでいるから。その理想を邪魔する人がいるなら、僕は止めないといけないよ」

「そんなの関係ねえだろ。さくらさんは、こっちにいるべきじゃないんだ」

「さくらさんが抱えているものが何かは僕達は知らないけど、さくら

さんは僕達の大切な人だから。こんな間違った世界に居続けさせるなんて、できない」

「どうしても君達は、楽しい時間を、幸せな時間を終わらせようとするんだね。だったら今すぐ、出てって」

刹那、頭に妙な衝撃を感じると同時に目の前が急に真っ白になった。

「ぐああっ!?!」

「があっ!?!」

……………。

「くっ……………」

「明久……………無事か?」

「ど、どうにか……………って、ここは……………学園の屋上?」

「な……………」

気がつけば、僕達は学園の屋上に倒れ込んでいた。

いつの間にやら意識を失っていたようだ。外は既に暗くなっている。

「さっきのは、一体……………」

僕たちをここに放った光の所為でいまだに眩暈している。

「わからない。ただ、この世界のさくらさんの手によつて排除されたってことだろうな」

「何か……………すごいことになったね」

まさか、この世界がさくらさんの夢の世界だなんて。そして、誰もが考えるように、不都合な事が起きたりすれば、記憶から放り出そうとするように不思議な力で排除されるとききた。

「厄介なことになったね」

「でも、だからこそ希望も見えてきたぜ」

義之が拳を握って言った。

「夢のような世界だからこそ、夢のような現象が起きる。だったら……」

「だったら?」

「その夢を見ている人間を起こすことができれば、この夢からは確実に覚めることができるはずだ」

確かに考えれば単純だ。さくらさんが夢を見てこの世界があるならさくらさん自身が目を覚ませばこの世界が存在する理由はなくなるわけだけど。

「り、理屈はわかるけど……そもそもその夢を見ている本人のさくらさんをどうやって起こすのさ? さくらさんの傍にはあの子がいるし、さつきみたいにはんてやられたら手も足もでないよ」

「そうだな……とりあえず、みんなと合流しよう。行動はそれからだ。ここからは確実にみんなの協力があるだろうからな」

「そうだね……って、義之」

「何だ?」

「今気づいたんだけど……外がこんだけ暗いってことは、時間は……」「っ!」

義之はハツとして携帯を見た。

「やべえ……もう日付が変わるまで時間ねえぞ」

「義之、急ごう! なんとしても今日で終わらせるんだ! さくらさんを……絶対に連れ戻すんだ!」

「ああ、わかってる!」

僕達は急いでみんなのもとへと駆け出していった。

第三十四話

中庭に行くと、みんなが俺達の姿を認識すると同時に駆け寄ってきた。

「おい、義之達だ！ 戻ってきたぞ！」

「弟君、今までどこに行ってたの!？」

「兄さん、心配したんですよ！」

「こんな時間までどこほつつき歩いていたんだ、このバカは」

「一体何があったのじゃ？」

「……もうすぐ日付の変わる時間」

全員がいつぺんに話すのでちよつと混乱しちまう。

「ごめん。実は、桜公園の方でさくらさんを見つけたんだ」

その中で落ち着いていた明久はさくらさんの事を話した。

「え？ さくらちゃんを？」

「うん。桜公園の更に奥の方だった」

「じゃあ、あの枯れない桜の？」

「あそこは私もよく行きますね」

「あー、あそこですか。美春も知ってますよ」

「そんなところに。道理で見つからないわけだ」

「でも、またどうしてそんなところに？」

「えつと……確か、さくらさんは夢を見てる状態で、その夢が今僕達の

いる世界で……」

「明久、言ってることがわけわからん。一言で説明しろ」

「この世界を脱するにはさくらさんを起こすしかない」

「桜内、説明頼む」

本当に一言で説明した明久だが、容量を得ないのか、坂本が俺に向かって説明を要求してきた。

俺は今さくらさんの身に起こっていること、そしてこの世界の仕組みを説明する。

「さくらちゃんが、そんなことを……?？」

「それで、準備の日だけ繰り返されてると？」

「でも、それって楽しいんですかね？ 美春にはちよつと醍醐味が伝わってきませんが」

だが、さくらさんは確かに準備を楽しむ人だ。祭り当日の前の準備にはいつも学園中を見回って準備している学生の様子を楽しそうに眺めていた人だ。

みんなが祭りを盛り上げようと頑張っている姿を見るのが好きなんだろう。

「けど、だからって何でさくらさんがそんなことを？」

「よくはわかんないけど、さくらさんにも何か辛いことがあって、そこから逃げ出そうとしちゃったんだろう」

「さくらさんが？ 信じられませんね……」

由夢の気持ちはよくわかる。俺だって未だに信じられないんだ。

だが、人間なら誰だって現実から逃げ出したくなるような、そんな気持ちになることはあると思う。

それが今回、こんな形で叶った。それがクリスマスが起こした奇跡なのか、魔法によるものなのかはわからないけど。

「けど、やっぱりこれは間違ってるって思うから」

「なんとかさくらさんを起こすことができれば」

「さくらさんを、私達の世界のさくらさんを起こしてあげないと」

きつとそれは、ここにいる俺達でないとできないことだ。

「だが、どうするんだ？ 正直この戦力でも難しいぜ」

「芳乃先生に不都合なことがあればそのもうひとりの芳乃先生が儂らを排除するのじゃろ？」

「……オマケに肝心の夢見ている本人は深い眠りにについている」

全くの八方塞がりという奴だった。だが、こうしている間にも時間は刻一刻と過ぎていく。

一体、俺達に何が出来る？ どうやったらさくらさんに起きてもらうことができるんだ？

「やることなんて決まってる。さくらさんのもとへ行つてとにかく義之がさくらさんを起こす。それだけだ！」

明久の言葉にほとんどが呆れていた。

「あのね吉井……あんたも言つてたでしよ。芳乃先生を起こそうとすれば私達がもうひとりよりの芳乃先生の手によって排除されるのよ」

「だからもうひとりのさくらさんごと説得する」

「それが簡単にできると思つてますの?」

「義之ならできるはずだよ!」

明久がそんなことを大声で言った。

「けどな、俺にそんなことが……」

「できるはずだよ。さくらさんだつて、義之に起こされる事を望んでいるはずなんだ」

「さくらさんが、俺を?」

「だつて、そもそもこの世界に来たのは義之がさくらさんに呼ばれたことから始まったことじゃないか」

「……あ」

そうだ。あつちで人形劇本番を迎える直前、さくらさんに呼ばれて学園長室に行つて……。

だが、当のさくらさんは不在で、あの扉を見つけて、この世界を見たんだ。

それはまるで俺がこの世界に来るように仕組まれたように、こつちの世界に来たんだ。

そして、ついさつきさくらさんを見つけた。

「何である時放送で義之を呼んだのか……そんなの、義之に来てほしかつたからじゃないか。そもそも、これが夢で全部がさくらさんの思い通りになるなら……自分に不都合なもの全てを排除するなら、何で僕達は今もこうしていられると思うの?」

明久の言葉は、俺の胸に溶け込んでくるようだった。

「それは、俺達を必要としているからこそ、俺達はこうして?」

そうだ、本当に夢の世界だけを求めているなら、そもそも俺達を呼ぶ必要はなかったはずだ。

さくらさんはこの世界を望んでいっつも、それが間違いだつてことをちゃんと理解しているんだ。

「さくらさんだって、義之と、みんなと暮らしている未来が大切だよ。そりゃ、誰だって現実に苦しんで、蹉跎して、過去を美化して懐かしんだり、やりなおしたりなんて思うのは人として当然のことだよ。ただ、今回はそれが偶然こうして叶っちゃっただけ。偶然叶っちゃったこの世界にいながらも、さくらさんは義之のいる世界に帰りたいんだよ」

「そういえば……言ってたな、さくらさん。俺や、音姉に由夢、風見学園の生徒はみんな、自分の子供みたいに可愛いつて」

「うん。だからさ、それを義之の口で、さくらさんに言っただけ。義之の気持ちと、これからのことを」

「……ああ、伝えよう」

「この言葉は、きつと眠っていても、さくらさんに伝わると思うから。うん、伝えよう」

「きつと聞いてくれますよ」

音姉も由夢も頷いていた。そこに渉も前に出てきた。

「義之、俺は細かいことはよくわかんねえけど、ひとつだけ言えることはあるぜ」

「何だ？」

「この時間になっても、どこにも爆破なんて起きてねえだろ？」

「あ、そういえば……」

「すっかり忘れてましたわ」

「そういえば。さくらさんのことばかりですっかり忘れてたが、今の時間はいつものようにクリパの準備の妨害が起きるはずだ。」

「どうなんだ？ 現地組のみなさん？」

「ええ、ずっと校内にいましたが、確かに妨害はどこにも起こってないですね」

「そういえば、こつちも散々巡回したのに、どこにも異常はなかったわね」

「……爆弾はいくつか処理したが、畏らしいものもなにひとつない」

学園内を担当していたみんなが言うのなら間違いはないだろう。

「逆に不自然だな。まるで、嵐の前の静けさだな」

「諦めたとは到底思えんの」

「……だが、保健としてそこらじゅうに罨を張ってる可能性もある」
「でもさ、これって……同時にチャンスじゃない？」

明久の言葉に全員が頷いた。

「そうだよね。もうやるなら今しかないよ」

「う、うん。やろう、義之」

「ああ。学園内の妨害さえどうにかなれば、残るはさくらさんだけだ」
「よし、やろう義之」

「ああ。それで、方法なんだが……」

方針が策定しそうなところで気づいた。みんなの姿が変だ。

「あれ？ 義之、何か半透明になってない？」

「そういう明久も、半透明になってるぞ」

「え？ でも、雄二だって……ていうか、この場にいる未来組みみんな！？」

「え？ これ、何なの？」

「どういうことなんですか？」

「一体何が起こつとるのじゃ？」

「……見えない」

俺達未来組の姿が、薄くなっていた。

「ふむ……これは我々の存在が薄らいでいる、ということかな？」

「え？ そ、それってどうなるの？」

「このまま22日が繰り返される、ということは、未来には繋がらない。そんな中、未来の存在である俺達がいるのはおかしい。何故なら、このまま世界が続いても、俺たちが生まれることはないのだから」

「つまり、俺達はこのままじゃ世界からいつ排除されてもおかしくな
いってことか」

「うむ、そういうことだな」

「そ、それって……放っておいたら私達は消えちゃうってこと？」

「そうなるな。まあ、あくまで俺の仮説だが」

「それって、もう余裕はないってことじゃん！ もし強制的に僕達が

いた未来に戻るならまだしも、このまま未来まるごとなくなったら僕達だけじゃなく、未来にいるみんなだつていなくなっちゃうんじゃないの!？」

「ま、まさか……いくらなんでもなあ」

「いや、吉井の言うことも存外的外れでないかもしれないぞ。世界というのは、観測者に観測されて初めて存在する、極めて危ういものなのだからな」

「それに、さくらさんだけを残した状態で消えるなんて絶対ごめんだ！」

明久の言う通り、それだけは絶対に避けなければならない。俺達だけが帰れたところで、さくらさんがこの世界に取り残されて眠ったままでは意味がない。

「はう。私、消えたくないよ。どうしたらいいの？」

「えっと、明久君、どうする？」

「もう余裕はないね。こうなったらもう先手必勝。意地でもさくらさんのもとへたどり着いてループを終わらせるぞ！」

「して、桜内。作戦はどうするつもりなのだ？」

明久の先手必勝も悪くはないが、例の妨害もまだ完全に止まったとは限らない。保健は必要だろう。

「まずは学園で妨害を阻止するんだ。破壊工作を完全に排除する。杉並、設置が得意なら排除もできるな。やってくれるか？」

「ふっ、それは愚問というものだ。引き受けたぞ、任せておけ！だが、もつと戦力は必要だ。恐らく、スピードが勝負の鍵だろう」

「なら、ムツツリーニを加えよう。スピードならこの中でダントツだろうから」

「……任せておけ」

「それと、この時代のみんなにもお願いしたいんだけど」

「はい、任せてください」

「風紀委員でも、こんな大仕事なんて初めてだけど」

「音夢先輩の背中、その他いろいろもまとめて美春が引き受けました」

「私たちの学園だからね」

「うん、この世界の私たちがやらないと」

この時代の人達も協力してくれるなら学園内の方はなんとかなるだろう。

「桜内、一応これも持っておけ」

杉並が寄越したのはトランシーバーだった。

「ちよつと失敬して通信距離を島全体に広げてやった。お前が司令塔になるのだ」

「あく、学園の備品を……杉並君、後で始末書をプレゼントしますね」
「ハツハツハ。緊急事態だ、これくらい許容しておけ」

「よし、頼むぞみんな！」

「はい、ではまた後で」

「できれば、ループが終わった世界でね」

それからすぐに妨害阻止チームは学園の中へと直行した。

「さくて、こつちも行こうじゃないの！」

「いよいよ正念場という奴ですわね」

「へっ。結構楽しめたが、そろそろゲームは終わりだ。一丁叩きのめしてやるぜ」

「うむ。繰り返しの世界も今日で終わりじゃ」

「いっちょがんばりますか♪」

「完膚なきまでに叩きのめすわ」

「杏ちゃんすごいやる気〜」

「うう、大丈夫かな〜……」

「頑張ろう、弟君」

「絶対に伝えましょう、さくらさん」

「おっしや、おっぱじめようぜ！ 義之、なんでも言ってくれ！」

「では隊長。指示を」

「俺達は、さくらさんを起こしに向かおう。厳しいとは思うけど、杉並チームがうまく行けば望みはある。それに、あのさくらさんだ。俺達の言葉を聞いてくれる、きつと」

「うん、そうだよ。さくらさんだもん」

「信じてるよ。兄さん、さくらさん……」

みんながこんだけ背中を押してくれるんだ。あとは実践躬行……突っ走るのみだ！

「じゃあ、行こうぜ！」

『おー!!』

学園を飛び出してあの枯れない桜へと向かう。

ここまで来た以上、もう後戻りはきかないだろう。22日は今日で最後にするんだ。

同じ日、同じ時間は2度もあつてはいけない。俺達は未来に帰らなければいけない。

通り慣れた学園、よく知る仲間達、住み慣れた未来の初音島に。無限に分岐する未来のなかの、ただひとつのあの世界へ。

「ま、まゆきく、早いよー。ちよつと待って〜！」

「よ、義之も、みんな早すぎ……」

「わく、久しぶりだね。こうして明久君に引っ張られるの」

この中で脚力の優れている明久、坂本、まゆきさんには遅れ気味の音姉、由夢、小恋、ななか、杏、茜を引っ張ってもらっている。

「兄さん、もう時間がないです！」

時計を見て慌てる由夢。

「くそ、正直マズいな」

俺も走りながら自分の携帯で確認するともうすぐ日付が変わろうとしていた。

「くっそお！ 文月学園で鍛えた体力、甘く見るなああああ！」

「こんなもん、翔子の拷問や鉄人の追っかけに比べればなんてことねえぜえええええええ！」

「「ひやあああああああ!!」」

「速あ!? 改めて思うけど、あいつら人間か？」

「言ってる場合じゃないでしょ！ あたしらも急ぐのよ！」

「ちよ、まゆき！ もう、足限界〜」

ようやく桜並木を通り越して桜公園に辿り着いた。

休む間もなく、俺達は走り続ける。そして、あの大樹へと続く入口が見えた。

「この奥ね……!」

「おし、ここまで来りや、あと一息だ!」

気合を入れて渉が先頭を切っていく。

「っ！ 駄目だ！ 戻るんだ、渉!」

「へ？ どわっ!? な、何だあ!?!」

明久の制止が間に合わず、渉は網に入って木からぶら下がった状態になった。

「みんな気をつける！ そこらじゆうに罨が仕掛けられてるぞ!」

「全員、足元に気をつける!」

かくいう俺も、足に何か引つかかる感覚を覚えた。

「くっ……うおっと!」

咄嗟に身を屈めてすんでのところで飛んできた網を回避することに成功した。

「てえい!」

「しゃあ!」

「おらあ!」

近くではまゆきさんや明久、坂本が網を難なく回避した。

「ほう、よくぞ避けたな」

何処からか男の声が聞こえた。

「当然! こんな程度、なんてことないさ!」

「ほう……ならば、これはどうかな?」

直後、頭上からヤカンやら金ダライが大量に降ってきた。

「うおおおおお!?!」

どうにか後退して回避した。

「きやあっ!?!」

「わっと!」

「や〜ん!」

「ふふ……」

「わわ……」

「やつー!」

女子達も気になるが、生憎金ダライが気になってそれどころじゃない。

「はっ! とう!」

「甘いですわ!」

まゆきさんとムラサキは華麗に躲していた。

「ふっ!」

「んなもんが効くか!」

明久と坂本は回避行動だけでなく、飛んでくるヤカンや金ダライを次々と払い除けていく。

「ははは、やるじゃないか。大したものだ。特にその男子2人、相当場慣れしていると見るが?」

「当然! 伊達に不意打ちでナイフやカッターを投げられるような状況に身を置いてきたわけじゃない!」

「それに比べりや、こんな程度の罠なんか取るに足らねえ!」

「あんたら、本当にどんな環境で生きていたのよ……」

俺は暗がりに向かっていい放つ。

「で、そろそろ出てきたらどうだ、杉並」

「ふ、バレてしまったては仕方ない」

すると、近くの木の上から男が飛び降りてきた。

「こんばんわ、お嬢さん方。それと、外野4名も」

「のう、お嬢さん方に何故か儂が含まれてる気がするのは錯覚じゃないののう?」

「つて、あなたが杉並君!」

「うわ、結構そっくりさん」

「わわ、本当に似てる」

「制服の着方や顔は若干違うけど……」

「ほとんど私達の知ってる杉並君とそっくり」

「というより、本人だったりして」

「心外だな。杉並はこの俺様だけだ。異論は認めないぞ」

「そういう発言も本当にそっくり」

「おっと、戯言はここまでにしてもらおう。仮に諸君が別の杉並を知っていたとて、それは俺が似てるんじゃない。そいつが俺に似てるんだ」

「どっちでもいいわ、そんなもん！」

思わず叫んでしまった俺は悪くない。

「何か、僕達の知ってる杉並君と接している時と同じくらい疲れる……ていうか、義之！ 時間！」

「ぐ、そうだった……」

「ふむ……諸君には俺と歓談を交えている余裕はないと見えるな」

どの面でもそんなことが言えるんだ。そういうところも本当に杉並そっくりだ。

「当たり前だ。こっちだって急いでいるんだ」

「そうだろう、そうだろう。つまり、この時点で俺様の遅滞作戦は成功しているというわけだ」

「悪いけど、君の言葉をいちいち聞いてるつもりはないから」

「まあ、そう急くな。ここにいればすぐにお前達が来ると予想して迎え撃つ体勢を取っていた」

「ほう。それでこんな罠を仕掛けたってか。用意周到じゃねえか」

「だが、おかげで俺達の作戦勝ちだ」

「ほう？ その根拠は？」

「ここに俺達が来ると予想してお前は迎え撃つハメになった。おかげで破壊工作はできず、この時点でどこにも被害は出ていない」

「全くだ。せっかく今日は特別派手に行こうと思っていたのだが。だが、それで勝ちを確信するというのは些か早計というものではないか？」

「どういうことだ？」

「この俺が何の仕掛けもなく学園を離れると思うのかね？ 破壊工作のための仕掛けなら既に設置済みだ。もちろん時間制限作動なのだから、ほうっつおいてももうじき一斉にドカンとなるだろう」

「だが、それも想定済みだ。今頃俺の仲間がその仕掛けを見つけ出してさ」

「なにせ、こういう技術に富んだミステリーマニアとムツツリスケベがいるんだからね」

「うむ、確かに今ここにいる諸君の人数は少ないようだな。だが、分散戦術も予想の範囲内だ。あれだけの仕掛け、諸君の仲間は撤去しきれるかな？」

「当たり前だ。なにせ、こっちにも杉並がいるからな」

「なんだかんだ言つて、こういう時のアイツは頼れる存在だからな。」

「ほほう、それは是非ともあつてみたいが、爆発までもう1分もないぞ？」

「ふん、そうして余裕ぶっこいていられるのも今のうちだ」

「こっちの勝ちには既に見えている」

「やれやれ、君達にはキチンと勝敗を見せないと気がすまないようだ。」

「ここはサービスしてカウントダウンをつけよう。3……2……1……」

くそ、駄目なのか？

「0!」

その瞬間、トランシーバーから連絡が入った。

『こちら杉並。桜内、応答を』

「杉並！ 聞こえるぞ！ どうなった!?!」

『同志よ、それは愚問というものだ。この杉並様を信用していない証拠だぞ?』

「いいから教えろ！ どうなった!?!」

『やれやれ、少しは勝利の余韻を味わいたかったが、まあいい。爆発物の排除は全て完了！ これより準備の防衛に移る!』

その報告と同時に全員が飛び上がった。

「でかしたあ!」

「しゃあっ!」

「よくやったぜ、杉並！ ムツツリーニ!」

これで無限ループのキーは壊すことが叶った。

「な、バカな！ あれだけの仕掛けを全部見破ったというのか!? そ、それに、解除スイッチは俺にしか反応しないはずだ！」

『ちなみに解除スイッチについていた装置は俺をご主人様と誤認したらしく、素直に言うことを聞いてくれたぞ。詳しい理由は不明だが、不思議なこともあるものだな。ハッハッハ！』

「あんたら、ほんつと似た者同士ね〜」

「機械ですら間違えるほどとは……」

「もうこいつら本気で同一人物じゃねえのか？」

「まあ、とりあえず作戦は成功だね」

「ふふふ……ハーツハツハツハ！」

突然、目の前の杉並が高笑いを始めた。

「何だよ、負け惜しみか？」

「いや、そうではない。今のは諸君の腕前を笑いで賞賛したものだ」

「嫌味にしか聞こえねえぞ」

「まあせっかくだ。そちらの杉並に賛辞を贈りたい。よろしいかな？」

「……ほらよ」

俺は持ってたトランシーバーを目の前の杉並に寄越した。

「いよう、未来から来た同志よ。ご機嫌いかがかな？」

『悪くない。おかげで楽しませてもらったぞ』

「そうかそうか。それはよかった。この俺と対等に渡り合える者がいたとは驚きだった」

『ふ、そちらこそ。今回は俺の勝利だが、校内の攻防戦では貴様に軍配が上がっているからな』

「これで一勝一敗、実力の程は互角としておこうじゃないか」

『よかろう。いつか貴様とは、また合間見え、戦う日が来る予感がするぞ』

「奇遇だな、俺もだ。では、その日と楽しみに待っていていよう」

『うむ。精々貴様も、この世界で風見学園を盛り上げてやってくれ』

「任せておけ、同志よ。それが我らの使命なのだからな」

『ふ、そういうことだ。では、さらばだ！』

何か、嫌な方向に意気投合しやがったな。

「で？ まだ何かあるのかな？」

「いや、俺もそろそろこのゲームを終わらせようと思っていたところだ」

「ゲームだど？」

「そうだ。元よりこのルール自体は俺の目的ではない。まあ、中々に面白い研究ができたという点では大いに感謝はしているがな」

「面白いって……それだけのためにこんなことに協力を？」

「ふっ。人間とは常にももしろさを求めるものだ。貴様とてそうであらう？」

「僕の求める面白さと君の求める面白さは根本的に違うよ」

「まあ、故あって芳乃嬢に協力していたが、そろそろ潮時かと思つていたところだ。やはりゲームには終わりが来なければ面白くないし、何より祭りというのは本番あつてのものだからな」

「なんだお前、わかつてたんじゃねえか」

「無論だ。楽しむとはそういうものだろう？」

それなら話は早い。

「なら、お前はもう何も行動を起こす気はないと、そう思つていいんだな？」

「ああ」

「だったら……」

「わかつている。彼女に会いに行くのだろうか？ ならば行けばいい。

ただし、条件がひとつあるが」

「条件？」

すると杉並はふっと穏やかな笑みを浮かべた。

「その、なんだ。芳乃さくらを幸せにしてやってくれたまえ」

「……は？」

俺と明久が同時に間抜けな声を出した。

「そ、それが、条件なの？」

「そうだ。それが条件だ」

全く……こいつは。

「んなもん、お前に言われるまでもない。さくらはさんは、俺が……いや、俺達が幸せにするさ。必ずな！」

「そうかそうか。では、頼んだぞ諸君」

俺の答えに杉並は満足そうに頷いた。

「さて、俺はこの辺で失礼しよう。明日のクリパに向けて準備が残っているのだな」

「どうせロクでもないものでしょ？」

「おっと、それは言ってくれな。ハッハッハ！」

杉並は高笑いしたまま去っていく。

「追伸、そろそろ木の上の彼を下ろしてやってもいい頃だと思うがね」

「あ……」

「いけね、すっかり忘れてたぜ」

「罨と杉並君のことばかりで……」

「完全に忘れてたわね」

「お前ら〜！ この、薄情者共〜！」

「まあまあ、事態は進展しましたから、尊い犠牲ということだ」

「由夢ちゃん、板橋君はまだ生きてるよ」

とにかく、これで道は開けた。もう残り時間は少ないけど、きつと大丈夫だ。

必ず、さくらさんを救ってみせる。

「じゃあ、行こうか」

「ああ」

第三十五話

杉並君の罨を見事くぐり抜け、桜の林を駆け抜けてあの枯れない桜のもとに辿り着いた。

風が吹き抜け、桜の花びらが舞い、暗闇に僅かに桜の木の枝から漏れる月光が注がれ、幻想的な光景が浮かんでいた。

そして……そこには眠っているさくらさんと、この時代の芳乃さくらがいた。

僕達の存在に気づくと、静かに振り返った。

「また来たんだね。無駄だって言ってるのに」

「無駄じゃねえよ。俺達はさくらさんを起こして、正しい世界へと帰るんだ」

「もう、どうして君達は楽しい時間を終わらせようとするのかな？」

「どうして君達にはこの世界の楽しさがわからないのかな？ 本当に残念だな。君達が一緒なら、もっともっと楽しい時間になっただろうに」

さくらさんは本当に残念そうに、困ったような表情をして首を振る。

「眠っている僕だって、きっと喜んでくれるよ。君達とずっと一緒にいたいって思ってるよ」

「そうだな。でも、それはこの世界でのことじゃない。同じ日は二度と来ない。楽しい時間だって、いつかは終わる。それが俺達の生きていく世界だ」

「駄目だよ。この世界は終わらせない。楽しい毎日がこれからも続いていくんだ。ずっと、このままさよならのない世界が続いていくんだ。これは、誰にも邪魔はさせない」

「悪いけど、邪魔をさせてもらいます。このループ世界は今日でおしまいです」

「どうして、そんな意地悪なことを言うのかな？」

「だって、さくらさん自身がそれを望んでいるんですから」

「え？」

「君も同じさくらさんだっというなら、もう気づいているんだろ？」

「このままじゃいけないことに」

「ほ、僕は……」

「俺達がこの世界に呼ばれた。ループを認識できてしまう俺達をさくらさんがこの世界に招いた。それってつまり、さくらさん自身がこのループを止めてほしいと願ったから」

うん。そうじゃなかったら認識できる僕達とはつくの昔にこの世界から排除されてたはずだ。

「そ、そんなことない！　だって、この世界が終わっちゃったら……」「辛い未来が待ってるのかもしれない」

「そうだよ！　辛くて、悲しくて……胸が痛くて」

彼女は、この時代のさくらさんは僕達の知るさくらさんのどこまでを知っているのか。

僕達にはそれを知ることができない。だけど、

「でも、楽しくもあるはずなんだ。辛くて、悲しいだけだなんて、そんなことは絶対ない。だって、さくらさん……笑ってたから。そりゃ、無理して笑った時もあったかもしれないけど……でも、さくらさんが俺達と一緒に過ごした時に見せてくれた笑顔が全部嘘だなんて、絶対に思えないから」

「……………」

「だから、さくらさんを連れて帰ります。俺達の、さくらさんのいるべき世界へと」

「それが僕の……芳乃さくらの、幸せだっというの？」

「はい」

「辛い事がいっぱいあるのには？」

「はい。それ以上に、楽しい時間をいっぱい作りますから。この世界にいるよりも、ずっと楽しい時間を、たくさん作りますから」

「本当に？」

「ああ、約束しますよ。さくらさんは、俺達が幸せにしてみせるよ」

これが義之の、僕達の気持ち。それを全て聞いたこの時代のさくら

さんは、

「そっか」

ふっとその顔に微笑みが浮かんだ。

そして、強い風が吹き荒れ、僕の視界にたくさんの桜の花びらが舞った。

それが晴れた時には、もうそこに彼女の姿はなかった。ただ、当たり前のように枯れない桜が佇んでいた。

「消えた……あの子、どこに？」

「さあな。でも、これでよかつたんだと思う」

「ねえ、こっちのさくらさん……わかつてくれたかな？　僕達の気持ち」

「だどいいな。ていうか、もしかしたら最初からわかつてたのかもしれない。さくらさんが本当に望んでる世界がどっちなのか……ただ、それを誰かに言っただけじゃなかったのかもしれない」

「そっか……」

僕もそうだどいいなと思った。

「弟君、もう時間がないよ！」

「さくらさんを起こさないよ」

「そうだった」

「じゃあ義之、頼むよ」

「ああ」

それから義之はさくらさんの傍へ歩み寄った。

枯れない桜の根元で、さくらさんは今も尚深い眠りについていた。

「さくらさん……」

さくらさんの耳元で、義之が静かに口を開いた。

「聞こえますか？　義之です」

しかし、まだ反応はない。

「そろそろ起きてください、さくらさん。夢は、いつか覚めるものですよ。楽しい時間も、いつかは終わってしまうんです。でも、終わりがあるからこそ楽しいと思うんです」

それでも義之は、彼女に呼びかける。

「俺だって、お祭りを待ちわびる気持ちはよくわかります。だって、好きで、楽しいから。賑やかで、バカ騒ぎできて、仲間とはしゃぐ。そんな時間が待ち遠しいです。もちろん、終わってしまうのは寂しいですよ。だけど……それでもいいと思えるんです」

義之はそつとさくらさんの手に自分の手を重ねる。

「だって、次はもつと楽しいことが待っていると、そう思えば……さくらさんもよく知ってるでしょう。うちの学園って、やたらとイベントが多いんですよ。そのせいか、お祭り好きな連中ばかりです。このクリパが終わっても、イベントはたくさん待っています。それに、イベントじゃなくなっても、楽しい時間はいくらでも作れます。俺なんか、毎日が楽しいくらいです。それは……さくらさんが、いるからです。それに、音姉や由夢、純一さんも……明久や、みんなだって……みんながいるあの場所が、あの世界が楽しいんです」

義之の言葉に、音姫さんが続いた。

「そうですね、さくらさん。私も同じです。賑やかで、暖かくて、心から落ち着ける……あの時間が楽しいです。あの場所が好きです」

そして由夢ちゃんが続く。

「寝るなら、あったかいお布団がいいですよ。それかコタツに入りますよ。テレビを見ながらゴロゴロするのもいいですよ」

「うん。みんなで食卓囲んじゃって、鍋とか作ったりして、さくらさんの好きな時代劇とか見たりしてさ……」

「正直、あの空気はかったるいが、まあ翔子のあの部屋よりはずつといもんじゃないねえの」

「うむ。明久や桜内、音姫先輩の料理は絶品ばかりじゃぞ」

「ああ、いつかのカレーパーティーは楽しかったわねえ」

「あのような料理があるのは、驚きました」

「うんうん。明久君のお弁当だって、すごい美味しかったもんね」

「女の子のプライドに傷をつけるくらい……」

「でも、それがわかってもつい食べたくなる時があるよね」

「ええ」

「そうそう。楽しいことを食い物に生きてるみたいなおれらにかか

りや、嫌でも笑えますって。こつちより向こうの方が断然面白いって、俺らが証明してみせますよ」

それからみんなも思い思いにさくらさんに語りかける。

「だから、さくらさん……賑やかで、楽しいあの場所に……楽しい毎日へ、帰りましょう。俺達の世界に」

みんなで待っていた。じっと見守りながら、大事な人が目覚めるその時を。

「……………ん……………義之……………くん……………？」

そして、さくらさんの目が覚めた。

「おはようございます、さくらさん」

「……………ああ……………そうか……………きて、くれたんだね……………」

さくらさんが僕達を見て、微笑んだ。

「俺達の世界で、待ってますから」

「ありがとう……………みんな……………」

その一言を残すと、さつきの子と同じように、突然桜の花びらが舞い、晴れるとさくらさんの姿はこの場から消えていた。

「あ、また……………」

「消えましたね」

「いや、帰ったんだよ」

「そうだね……………。あ、そうだ！ 日付は!？」

「もうすぐ変わるよ!」

全員が緊張して携帯の画面を見つめる。

「い、いよいよだね……………」

「もう無限ループなんて冗談じゃねえからな」

「叶うとよいがのう」

「あと5秒……………」

「4……………」

「3……………」

「に、2……………」

「1……………」

「……………0」

途端に全員が目を閉じた。それから恐る恐る目を開いた。さつきまでと同じ光景は続いている。ならば、時間は。

「……12月……23日」

ディスプレイには、確かに12月23日と表示されていた。更には僕たちもいまだにこの世界に戴天している。

「か、変わった……」

「ということは……」

「無限ループから脱することに成功したということじゃない」

「ひゃっほ〜う！ やったぜ——っ！」

渉のテンションの高さに同調して全員がその場で大慶し、舞い上がった。

ようやく終わった。この無限ループを。ようやくクリパの当日になったんだ。

「あう〜、よかったねえ、みんな〜！」

「やったよ！ 兄さん！」

「わ、わかったから、抱きつくな！」

もうみんな手放して喜んでいられる。当然だ。待ち焦がれたクリパの日がようやく来たのだから。

「それではみなさん、無限ループ脱出を祝して！」

「そうね、ちよつと早い気もするけど……」

「うん！」

「それじゃあみなさん、せうの！」

『メリークリスマス！』

『ただいまより、クリスマスパーティーを開催します！』

瞳々とした朝日を浴びる学園の中、クリパの始まりを告げる放送が流れる。それと同時に校内に響き渡る歓声とクリスマス定番のBG

M。

学園は一気にお祭りモードに突入。

「わあ、まさに始まったって感じだね〜」

「いやあ、盛り上がってまっせ〜」

「何か、本当この学園って、お祭り好きだよね」

「学園にイベントが多いから生徒は自然とお祭り好きになったのでは？」

「え？ お祭り好きだからイベントが多くなったんじゃないんか？」

「なんだか、鶏が先か卵が先か論みたいだね〜♪」

「で、実際はどうなんです？」

「え？ あたしに聞かれても知らないわよ」

「生徒会長の私もそこまでは〜……」

「まあ、どうでもいいだろそんなもん」

「そうだね。ところで雄二、その口に啞えているものは？」

「あ？ ああ、これならクリパを手伝った礼だと言って俺らが手伝った出し物売ってる奴らからもらったもんだ」

「何っ!? おお、それなら俺もちよっくらもらってくわ！」

「渉、そんなことしてる暇はないわよ」

「ちえ、少しくらいは楽しんでいこうぜ〜」

気持ちにはわからないでもないけど、雪村さんの言う通り僕達にそんな余裕はない。

クリパの雰囲気とその身に受けながら僕達はある方向へ向かっていた。

「お、ここじゃねえか？」

「うむ、間違いない。始まりの地だ」

そこには僕達未来組がこの世界に降り立った場所。

そして元の世界へ帰るための場所でもある。その出入り口も、しっかりある。

「おおっ！ 例の扉だぜ！ 復活してらあ！」

「これで帰れますわ」

「ようやくって感じですね……」

「こつちで色々濃い体験したもんね」

「うんうん。何回も同じ日を繰り返したから余計にね」

「そういえば、ここで暮らしてたの、何日間だっけ？」

「5日間よ」

「長いようで短かったな」

「さて……これで不思議の世界ともお別れ、だな」

「……この時代の女子の姿は丁重に保存せねば」

「では諸君、心残りはないか？」

「そういうお前が一番名残惜しそうにしてる気がするんだが」

「ふむ、では今一度、この世界で大冒険の第二幕と行こうか？ この扉を爆破すれば、しばらくは再び強制的にスペクタクルな時間を約束できろぞ？」

「やめんかい!!」

杉並君なら本気でやりかねない。流石にそんな濃い体験は二度とごめんだと思った。

しかし思い残すことか……。あるといえば、結構あつたりするなあ。約束も色々したし。

過去の風見学園の人達も、僕達の時代の人間達に負けなくらいお祭り好きだったし、たくさん友達だってできた。

22日をループさせた大きな力にだって、この時代みんなの協力があったからこそ乗り越えられた。

「けど、やっぱり自分の世界が一番だと思う」

義之の言う通り。名残惜しいのはみんな一緒だけど、僕達は未来の人間。自分のいるべき時代に戻るべきだ。

って、これは僕が言うことじゃないかな。

「だな。帰る場所があつてこそ、夢の世界だ」

「ちよつと寂しいけど、やっぱり自分の時代で生きて、出会って、別れて、でもまた会って騒いで……それが一番だよね」

みんなが頷いた。

「さて、行くか」

義之が最初にこの扉に手をかけようとした時だった。

「できれば、最後にお婆ちゃんに会いたかったな」

そうだ。僕達はこの時代のみんなとまだ会ってない。

できることなら会って、色々お礼を言いたかったけど、元々僕達はこの時代の人間じゃないんだ。

今まではファンタジックな展開で緊急事態なこともあったから仕方なかったけど、ようやく動き出した時間の中ではもう干渉しない方がいいとみんなで決めたことだ。

「あゝあ、これでも一応俺達、この世界を救ったヒーローなんだがな」「でも、この世界はどうなっちゃうんでしょうか？　ここは元々さくらさんが作り出した夢の世界。このまま、消えちゃうのかな？」

「いえ、それはないでしょう。この世界は独立したひとつの世界なのですから。無限に分岐する、可能性の世界のひとつですわ」

「ふむ。我々の住む世界に繋がりはしないだろうが、違う道に向かって進んでいくことだろう。そして、50年後には、同じように我々が誕生しているかもしれん、ということだ」

きつと続く。僕達の世界と同じように、義之達がいた世界のように……違う存在でも、ひとつの世界は無限に続く。

ただ前へ走って、曲がって、時々違うものとすれ違って、また別れ……そんなこんなが無限に続いていく。

「じゃあ、誰が最初に入る？」

「そこは板橋でしょ。最初に飛び込んだ元凶だし」

「いや、俺は杉並に誘われただけだぜ？」

「ていうか、最初に見つけたのは桜内じゃなかったか？」

「いや、調べに行こうと言ったのは生徒会の……」

扉をくぐることに遅疑して、結局誰も最初に行こうと言う人達はいなかった。

それだけみんなこの時代が好きになっちゃったんだ。そんな言い合いが続くと――

「あゝー！　ターゲットはつけくん！」

この元氣いっぱいワンコタイプ満開の声は……。

「あ、あれって確か……」

廊下の向こうからもものすごい勢いで美春ちゃんが走ってきた。

「現場は押さえました！ 全員、動かないでください！」

「みなさん、そこで何をしてるんですか？」

更にその後ろからは音夢さんが来た。

「ていうかこの状況は何だろうか？」

ひよつとして、繰り返しによる影響がなくなったのと同時に僕達の出会ひもなかったことになったのか？

だとしたら、今の彼女達からすれば僕達って、不審者以外の何者でもないじゃん。

「説明していただけます？」

音夢さんの言い知れぬ迫力に全員が若干後退した。

「そ、その……俺達は……」

「どういうことですか？ 私達に何も言わずに行ってしまうなんて」

「……え？」

「はい？」

「そうですよ。おかげで必死に探しちゃいました」

「お土産のバナナも受け取らずに行ってしまうなんて、ひどいですよ」

「未来の人達はせっかちでよくないですね」

「未来じゃなくて、別の世界でしょ？」

「あ、そうだったっけ」

「この時代の仲間達が勢ぞろいだった。ていうか……」

「みんな、僕達のこと覚えてるの？」

「それはそうですよ。こんなに印象深い人達のこと、忘れたくても無理です」

「それに、あれだけのことがあればね」

「ことりさんの言葉に感慨深く思い返す音夢さん。ていうか、覚えてたんだ、みんな。」

「お帰りの前に、挨拶する時間くらいはありますよね？」

「おかげでこうしてクリパも無事に始まったからね」

「みなさん、本当にありがとうございました」

「あ、いや、僕達はその……」

「ふ、礼には及ばないぜ。なにせ俺達は……」

「当然のことをしたまでだしな」

「つて、坂本！ お前俺の台詞パクってんじゃねえよ！」

「お礼なら、俺達からも言わせてもらうよ」

「そうそう。みんなのおかげで僕達も無事に帰れるんだから」

「じゃあ、間を取ってお互い様ってことで」

「では、両世界の友好の証に、はい、拍手拍手」

美春ちゃんが仲間達の手をとっていった。

その中でそれぞれ関係の深い人達が別れを告げていた。音姫さんと由夢ちゃんが音夢さんと、ななかちゃんがことりさんと。

それぞれが言いたい事を言い合って、最後の会話を広げていた。そんな光景を眺めていた時だった。

「おにいちゃん！」

「ふーあ!？」

義之の背後から誰かが飛びついてきた（本人はただ抱きついたつもりなのだろう）。

ていうか、あの小さな女の子。

「さ、さくらさん!？」

「うにや？ さん付けなんて気味が悪いなあ。お兄ちゃん、何か変なものでも食べた？」

そこにいたのはこの時代のさくらさんだった。頭にはあの時の奇妙な猫が乗っかっていた。

「さくらちゃん、この人は兄さんじゃないわ」

「あれ？ ほんとだ。音夢ちゃんと一緒にいるからお兄ちゃんかと思っちゃった。で、こんなところでみなさん大集合して何やってんの？」

「ああ、他の学園から来た人達を案内してたところよ」

「ふくん。音夢ちゃんのお仕事も大変だね」

それからさくらさんは僕達に向き直って楽しそうに笑った。

「ども、こんちわ♪ まあ、狭いところですが、ゆっくりしていつてく

だせえ。んじや、僕は人を待たせてるんで、ばいび〜」

時代劇で使うような台詞を残してさくらさんはその場を去っていった。

「うたまる〜、お兄ちゃんのクラスはそっちじゃないよ!」

「うにゃ〜ん」

さり際に、なんとなくあの猫がこっちを向いてお辞儀したような気がした。

「さて、みんな行くぞ」

義之が扉に手をかけて言った。

「さて、クリパは俺達を待ってるぜ」

「あ、そうだ! 今頃運営が大変なことになってるよ〜」

「あつちやく、どうしたもんかねこりや。混乱は必至だわ」

「生徒会が不在で開催なんて、考えるだけでも恐ろしいですわ」

「わわ、委員会のお仕事、どうしよう……」

「みんな落ち着けよ。まだ向こうの時間が進んでは限らないだろ」

「むう、開催と同時に発動する予定だった仕掛けがオシヤカになってしまうのは痛い……」

「くそお、まだ見ぬ可愛い子にアタック大作戦が遅れてしまったあ〜」

「あはは……もしクリパが進んでいたらどうしよう〜?」

「委員長、大激怒間違いないわね」

「きつと、物理的にドカンと来るでしょうね」

「うわ〜、ちよつと怖いかも」

「ていうか、そもそもこの扉の先はまた別の時間だったりな」

「もしくは、地球ではない他の場所へ行ってしまうことも……」

「え〜!? そうなの!?!」

「そ、その可能性は想定していませんでしたわ」

「雄二、杉並君、あまり煽らない!」

雄二と杉並君の言葉に小恋ちゃんとムラサキさんが本気になりかけていた。

「じゃあ、今度こそいくぞ」

義之がいよいよ扉を開いた。

「じゃあ、みんな、ありがとね」

「達者でなく」

「もし向こうで会えて、覚えておったら色々話そうぞ」

「……美少女を見つける自信はある」

「みんな、バイバイ」

「元気でね」

「まったね〜」

「元気で」

「みんなの事、忘れねえぞ〜」

「皆の者、さらばだ!」

「世話になったわね」

「みなさん、お元気で」

「それじゃあ、さようなら」

「また、未来で会いたいですね」

「お世話になりました」

僕達は一礼して順番に扉へと入っていった。

「さようなら」

「向こうに帰っても、お元気で」

「未来のバナナ、食べたかったです〜」

「みんな、またね〜」

「渉君、未来でバンドしてるの見たら、応援してるからね〜」

去り際に、みんなの別れの声が聞こえた。そして僕達は扉の中をくぐっていき、夢のような空間のトンネルを抜けた。

その先が、まさか地獄の一丁目に繋がってるとも知らずに。

第三十六話

12月23日……。あの日から始まった、54年程前の12月22日のループした世界。

色々苦難はあったものの、ようやく脱出が叶った僕らは自分達の世界に帰れる。そう思っていた。

「……………」

そう思ったのだが、目を開けた時はそんな想像を上回る事態にみまわれた。どこかの空き地で僕達は寝ていたようだ。

「ん…………あれ？　ここは？」

「目覚めたか、吉井」

「へ？」

目が覚めるとすぐ近くで杉並がふむふむと頷きながら辺りを見回していた。

「あ、バカなお兄ちゃんお目覚めですかー！」

「ぐふっ!？」

ここ、この腹部に容赦なくくる、最早Gが込められてるのではないかという衝撃は…………。

「や、やあ…………葉月ちゃん」

「はいです！　バカなお兄ちゃんが目覚めてよかったです！」

「あ、あはは…………そっか。ようやく戻ってきたんだ…………」

「感激してるとご申し訳ないのだが、吉井よ、そういうわけではないらしい」

「へ？」

「ん…………お？　ここは…………」

そこに僕の近くで寝ていた義之が目を覚ました。

「ん…………あ、ここは…………」

「は…………戻って、来たんでしょうか？」

それに釣られてみんながようやく目を覚ました。

「どうやら、みんなも起きたようだね」

「あれ？ 久保君まで？」

「く、久保……何でここにいる？ つて、いや……そもそも俺達が移動したんだっけか？」

「いや、坂本よ。その解答は正しくない」

「は？」

「そういえば、さつきも言ってたけど。僕達は、初音島に戻ったんじゃないの？」

「おう！ そうじゃねえかよ！ ようやくあの無限ループから脱したんだ。ビバ、俺達のクリパへ——」

「残念ながら、また俺達は別の世界に来たようだ」

『……………』

渉の台詞を遮って杉並君がとんでもないことを言った。

「……………は？」

一泊遅れて渉が間抜けな声を出す。

「聞こえなかったか？ ここは俺達がいた初音島でも、増してや俺達がいた世界ですらない」

「はあああああ!!」

渉がこれ以上ないまでの奇声を上げて驚いていた。その気持ちはよくわかる。

「ちよ、ちよちよちよどういうことだよ!! 俺達、あの世界から脱出できたんじゃねえのかよ!!」

「え、え？ ちよ、これ……何かの冗談だよね？」

「多分、本当ね。以前と同じように、私達の携帯が使えないもの」

「あ、ほんとだ」

「また別の世界に来ちゃったんだ」

「だからなんでななか達はそんなに落ち着いていられるのおお!!」

「いや、だって……小恋が慌てるどむしろ落ち着いちゃうんだよね」

「右に同じく♪」

「以下同文」

小恋ちゃんの慌てぶりに若干落ち着きは取り戻せたけど、これまた別世界だなんて、もうやってられない。

「けど、前の世界のように消えたりはないみたいだぞ」

義之の言う通り、この扉は前と違って消える気配がない。試しに雄二がそこらに落ちてあった鉄パイプで殴ってもビクともしなかった。「うむ。お前達が目覚める1時間も前からここで張り込みを続けていたが、以前と違い、この扉が消える様子はない。しかし、同時に開く気配もない」

「つまり、何かの条件を揃わないと開かないってか……たくつ、面倒臭いぜ」

雄二がもううんざりだという風に頭をかいた。

まあ、以前のようにあてもなく彷徨うよりはずっといいかもしれないけど。

「うゝ、今度こそ絶望的だゝ。知り合いもいなければ風見学園すらもないなんて、どうやって1日を過ごせば……」

そうだ。そっちも問題だ。扉が開く条件ともなれば前と同じように情報を集める必要がある。それも、今度は1日2日で手掛かりを見つけられるかどうかも怪しい。

その上こっちは更に未知の世界。知り合いがない限り、僕達が1日を乗り越えるのは困難だ。そんな時だった。

ピリリリリリ！

僕、そして雄二の携帯がその場に鳴り響いた。

「お、悪い。俺の携帯が」

「あ、僕にも」

「ん？ ちょっと待て、何でお前らの携帯が鳴るんだ？ 俺達のは繋がらないまままだぞ？」

あれ？ そういえばそうだ。しかし、このまま切るのもどうかと思うし、うまくすればこの世界で1日を過ごすための助けになるかもしれない。

そう思った僕は通話ボタンを押して携帯を耳に当てる。その瞬間、僕の携帯がなったのは何故かという疑問が一瞬にして打ち砕かれた。

「はい、もしもしっ！」

『アキ君、今どこに——』

「人違いですっ!!」

ブツッ!

僕と雄二、数コンマ1秒もたがわず、同時に通話を切った。

「おい、今明久の名前呼んでなかったか?」

「マ、マサカ……キノセイデスヨ」

「何でカタコトなの?」

「ていうか、今坂本のことも名指ししてなかったか? しかも、割と綺麗な女の声がしたような」

「い、いや……そんな筈はねえ。この世界に、アイツがいるなんて……」

「坂本君、すごい震えなんだけど……」

「ていうか雄二……さつきから僕、すごい嫌な予感がするんだけど……」

「き、奇遇だな、明久。実は、俺もなんだ……」

僕と雄二が最悪の予想を頭に浮かべていた矢先だった。

「はい! バカなお兄ちゃん達も一緒です!」

そんなところに葉月ちゃんの陽気な声が聞こえた。見たところ、葉月ちゃんも誰かから電話があったみたいだ。

「は、葉月ちゃん? 今のは……」

「はい! お姉ちゃんです! ぬいぐるみのお姉さんと綺麗なお姉さんと一緒にこちらに来るそうです!」

「二よりもよって最悪の展開だああああああ!!」

「おわっ!? どうしたんだ、2人共!」

さ、最悪すぎる……まさか、ここが……ここがよりもよって……駄目だ、ここから先は口にしたくない!

しかし、これは現実だ。現に僕の胸に渦巻くこのどす黒い感覚。

これは僕達の世界では当たり前前のものだ。そう、これが渦巻いている時といえれば決まって僕の命が危険にさらされている時に限る。

つまり、もうこの近辺に敵が潜んでいるということだ。何処だ?

何処にいる?

僕は警戒態勢バツチリ状態で辺りを見回した。くそ、前は気配で

バカ共が何処にいるかなんて把握できたのに、これも平和な世界に入り浸った結果か。

とにかく、僕は辺りを見回す。周りには特に不自然なものは見当たらない。

周囲には普通の家が並んでおり、時々だが人が通っている。時折電車の音が耳に入り、空には小鳥達が飛んでおり、あの子達が止まった電柱の影からは鎌の切っ先と思われる部分がキラリと――不自然すぎるもの発見。

「全員、ダッシュで逃げろおおおおお!!」
『は?』

僕達の大声に全員が一瞬呆けた時だった。

「逃がすと思うかああああああ!」

『『殺っ! 殺っ! 殺っ!』』

「って、何か出たあ!」

やはり出てきたか、FFF団め。

「搜索を始めて数ヶ月、ようやくターゲットを見つけました!」

「捕らえろ! 我らが異端者を――っ!」

「くったばれえ――っ!」

『『くったばれえ――っ!』』

須川君と横溝君の号令でFFF団が僕達に向かって駆け出してきた。

「何なんだああああああ!」

「いいから、みんな逃げてええええええ!!」

僕の声にようやく我に返ったみんなが踵を返して僕達についてくる。

「逃がすかああああああ! 我らが異端者、吉井明久と坂本雄二を捕らえろおおお! ついでにその美少女達と戯れてる男共も死刑だああああ!!」

『『異端者には死を!!』』

「って、何か関係のない俺達まで標的になってないかあ!」

「ていうか、何なのアレ!」

「新しの宗教か何かですか!？」

「残念ながらただのバカ達です!」

色々言いたい事はあるだろうが、残念ながら説明している暇はない。

「ていうか、あいつら一体何なんだ!? なんか鎌なんて物騒なもの持ってんですけど! あれ本物!？」

「本物だ! だが、これだけで驚いたらあいつらに捕まった後なんかお前ら絶対に死ぬぞ! 物理的に!」

「一体捕まったら俺達の身にどんな不幸が!？」

「ふむ……できるならあの者達のことを詳しく知りたいものだ」

「残念だけど杉並君、命が危ないから馬鹿な真似はやめるんだ」

「ていうか喋ってる時間はねえ! どうにかしてあいつらを突き放せえ!」

雄二の言う通り、ここであいつらを引き離さない事には落ち着いて話もできない。

「こうなったら……ムツツリーニ! 今の手持ちは!？」

「……残念ながら殆どがまだバックアップを取っていない。あるのは、念の為に持っていた風見学園のミスコン有力候補の女子の写真と、アキちゃんの——」

「オツケー。なんで念のためと称して僕の女装写真も持っているかどうかはこの際置いておくとして、その写真であいつらを!」

「……貸しひとつ」

「わかった! この件が終わったら聖典をひとつ譲ってあげるよ!」

「……ふっ!」

ムツツリーニが素早い手つきで写真を四方八方へと飛ばした。

「そ、そんなものであの輩達が引つかかるなんて——」

「ふおおおおおおお! なんじゃこれはああああ!？」

「み、見たこともないけど……なんて可愛らしいお嬢さん達なんだ!」

「どけえ! この娘は俺のものだ!」

「俺だ!」

「テメエら邪魔くせえんだよ!」

目の前に広がるのはローブに身を包んだ集団の醜い争い。戦争つて、この延長戦のようなものなのかな。

「ほ、本当に引つかかってますわ……」

「なんていうか、馬鹿ばかりね……」

「あんなんですみません……」

とりあえずは奴らの気を引くことはできた。今のうちにこの場を去ろう。

僕達はどうにかFFF団のみんなを撒いて安全な場所まで走った。

「はあ……はあ……ど、どうにか逃げ切れたみたいだね……」

僕達は近くの公園の穴あきのドームの中に避難した。

「て、ていうか明久……あいつらは、一体何なんだ？」

「ああ、あれは異端審問会。通称FFF団」

「な、何なの？ その異端審問会って……」

小恋ちゃんがガクガクと震えながら尋ねてくる。震えるのは無理もないだろう。

あんなそこらの犯罪者も脱兎の如く逃げ出すだろう邪悪な雰囲気
を醸し出す集団に追いかけられたのだから。

「えっと……なんていうか、男は愛を捨てて哀に生きるといふ心情を
掲げて……その、可愛い女子と一緒にいる男達を滅殺する、というか
……」

「要するに、自分達に女子が近づかないからいい思いをしている男子
を嫉妬に狂って殺すような連中だ」

身も蓋もない言い方だけど、悲しきかなこれ事実。

「な、何それ……」

ここにいる女子メンバー全員が絶句した。まあ、常識的に考えてあんな集団がいるとは思えない。

「とにかく、奴らがいるってことは、間違いなくここ……僕達の故郷だよ
ね」

「ああ……となるとやはりあの翔子からの電話は幻聴じゃなかったか……」

「てか、ちよつと待て。ここがお前達の故郷って……ひよつとしてお前ら、異世界人だったのか？」

「え……その……うん。もうこうなつちや、ぶつちやけるしかないけど、そういうこと」

僕の告白に全員が驚いた表情をした。いや、杉並君と、ななかちやんはあまり驚いた様子はないね。

「はあああああ!? ちよつと待て! えつと、過去の人間に会ったり、全く別の世界に行ったり、吉井達が異世界人だったり……何がどうなってるんだあああああ!?」

渉が許容量オーバーしたのか、頭から煙が出てるように見える。

「ほう……まさか、最高級ミステリーの結晶がこんな身近にいるとは。水臭いではないか、同志土屋」

「……説明がややこしかったから」

「そ、それで……吉井達はどうやってこの世界に来たのですか？」

「吉井達もあの扉を通って帰れなくなったってやつ？」

高坂さんが過去の世界のこともあってか、そういう予想をした。

「えつと……いや、違いますね。僕の場合はさっきのFFF団や姉さん達に追われてもういよいよ殺されるかって時に初音島に飛んじやってたって感じで……そういうえば、雄二達は？」

「俺達も似たようなもんだな」

「うむ、気がついたらあの島にポツリ状態じやったぞ」

「ふむ……吉井達が異世界から来たというのも、あの扉が今度はこの世界に繋がったのも……無関係ではあるまい」

「それはそうと、これからどうしようか？」

「ここが僕達のいた世界だとわかってても、結局崖つぶちだというのは変わらない。

「何言ってるんだよ。ここがお前達のいた世界なら、お前達の家は何人か泊めれば住む話だろ」

「う……」

やっぱ、普通はそういう話になるんだろうな。でも……

「やめてくれ。涉（お前）は僕（俺）達に死ねというのか」

「なんでそんな話になるの？」

小恋ちゃんが首を傾げて聞いてくる。何でって、そりゃあ……

「僕の家には、姉さんがいるから……」

「明久の姉さん？　姉さんがいるからって……あ、そーいや明久の姉さんって、確か……」

「うん。義之達には以前言ったけど、姉さんって、かなり珍妙っていうか常識がないっていうか……」

最大の理由は女子をひとりでも連れて来ようなら僕の命は確実に海の藻屑だ。

「俺の家は、駄目だ。お袋のこともそうだが、これが翔子にバレた日には……」

「うわ、坂本君がすごい震えてる〜」

「珍しい絵ね」

雄二も雄二で霧島さんにバレれば同じく海の藻屑……いや、下手をすれば火山口に投げ捨てられるなんて事態も考えられる。

「儂の方はなんとかなる……と、言いたいところじゃが、姉上に説明するのが難しいの」

「……こつちも。ワケありと言えぱなんとかなるだろうが、人数が入りきらない」

「僕の方も、薄情というわけではありませんが、流石にこの特殊な事態となると……」

残念ながらみんなの家もこの人数を泊めるには足りなさすぎるよ
うだ。

「あ、それじゃあお姉ちゃんに……」

「葉月ちゃん、気持ち嬉しいけど、やっぱこの人数はちよつと無理があると思うんだ」

携帯に伸ばそうとした葉月ちゃんの手を止めてやんわりと断つて
おいた。

危なかった。このまま美波にみんなの事がバレてたら姉さんにも

情報が直行して僕は死よりも恐ろしい目に会っただろ……っ!?

「ん？ どうしたの、明久君？ 何か、すごく震えてるけど……」

こ、この強烈にヤバ気な気配は……。恐る恐るドームの穴から顔を出して外の様子を見た。するとそこには、

「アキ……知らない土地で知らない女の子と仲良くなった上にウチの妹にまで手を出すなんて……。オシオキガヒツヨウネ」

「落ち着いてください、美波ちゃん。お仕置きはひとまず置いて……。オハナシヲシナケレバイケマセンネ」

「雄二、見つけたら……。今度こそ徹底した調教を」

何か、既に話し合いがどうかの次元を超越している。というか、やはり美波と姫路さん、そして霧島さんだった。

「あ、おね——むぐつ」

「は、葉月ちゃん、お願い。僕は……。僕はまだ死にたくないよ……」

「頼む、ちびっこ。俺も……。まだ平和を満喫してねえんだ……」

「あ、明久、坂本……。どうしたんだ、そんなマジ泣きして。そんなにあの3人は恐ろしいのか？」

「ていうか、2人の震え方が尋常じゃないし……」

「軽く地震が起きそうなほど震えていますね」

だ、駄目だ。今見つかったら、間違いなく僕らの命はない。

「おい、吉井。別に女の子から嫉妬されるなんて、ちよつと怖いかもしれないけど、男としちゃ嬉しい限りじゃ——」

「アキったら、何処行っちゃったのかしら？ 見つけたらロープで全身を縛って屋上から落とさなきゃ……」

「……………」

「なんだって？」

「スマン……。俺が間違ってたぜ」

渉も自分の発言の愚かさに気づいたのか、それつきり黙った。

「で、結局どうするんだ？ お前らの家もダメとなると、俺たちは本格的にやばいぞ？」

「そ、そうは言っても……」

話の途中で僕の携帯が震えた。念のためマナーモードにしてあつ

ただ。

「えっと、メールか……姉さんから」

姉さんからのメール……こりやあ冗談抜きでやばいかもしれないな。

「とりあえず見た方がいいんじゃないか？」

「そ、そうだね……」

恐ろしいけど、義之に促され、僕はメールの中身を見た。

『アキ君……。この数ヶ月、何の連絡もなしに姉さんはとても心配しておりました』

何の連絡もなかった点についてはこっちとしてもしようがなかったんだけどね。

『これ以上、家を空けるようなら、メールに添付してある画像をネットにばら撒きます』

……嫌な予感しかしない。震える手で、僕は恐る恐るとメールに添付されている画像を開いた。

僕の……睡眠時の……姉さんに着せられたのか、ものすごく際どい女物の水着を着用していた画像。

「それだけはいやあああああ!!」

「バカ、明久!」

「いたわアキイイイ!!」

「吉井君——っ!!」

「……雄二、見つけた」

「うわあ! 来たよ!」

「明久あ! テメエの所為で見つかったろうが!」

「マジでごめんなさい! 今回ばかりは僕の所為だ!」

「て、こんなことしてる場合じゃねえ! 全員逃げるぞ!」

義之の言う通り、今は逃げることに専念だ!

「待ちなさいアキ! その女子達は誰なのよ!」

「明久君……ジジョウヲキカセテクレマスヨネ?」

「雄二……結婚と調教、好きな方を」

「ひいひいひい! 姫路さんと美波の目が完全にイツちやつてるよ

！」

「ていうか、翔子！ それどつちも俺に未来はねえだろ！」

「……なんていうか、俺達……生きて帰れるか？」

義之の呟きに答える者は誰もいなかった。

第三十七話

「ぜえ……ぜえ……ど、どうにか撒けたかな……？」

つい先程まで俺達を追っていたあのおっかない雰囲気を纏っていた女子3人を振り切って何処かの影道で息を整えていた。

「ムツツリーニ、追手はどう？」

「……FFF団は偽情報に釣られて反対方向に誘導している。ただし、女子の方は引つかからなかった」

「くそ……やっぱり霧島さんがいるのが大きいかな。彼女、雄二のことになればかなりの嗅覚を發揮するし。……待てよ、それなら雄二ひとり置いていけば……」

「そんなことをすれば、あいつらに多数の女子を囲んで桜内の家に居座っているとはいふらすぞ」

「やめて！ ただでさえとんでもない誤解があちこちで広まってるんだから！」

「だったらお前もこの状況どうにかすることだけを考えろ。このままじゃ、俺達は共に言葉通り破滅を迎える」

「そ、そうだね……」

隣では明久と坂本が何やら物騒な相談をしていた。同時にこいつらの友人関係に若干の疑問が沸くが。

「というか、お前らは一体何をやったらあの女子達をあそこまで怒らせて追いかけられるんだ？」

「そんなのむしろこつちが聞きたいよ（聞きてえ）！」

当の2人には全く心当たりがないようだ。

「うむ……2人の鈍感さはさておき、このままでは1日乗り切るところか、下手をすれば今日で全てが無に帰す可能性も否めないぞい」

「怖いこと言わないでよ」

「おい、明久……あの3人だけでもどうにか説得できないのか？ 正直俺でもあの3人は怖えけど、どうにか事情を話せば……」

「甘いよ、渉。霧島さんが雄二に制裁を与えるのは雄二の自業自得だとしても、あの2人が事情を話して許しを請ったところで彼女達を止

めるのはまず無理だ」

「そうだ。明久がああ2人に殺されるのは当然として、翔子がそんなことで手を止めるとは思えねえ。結局行き着く先には婚姻届か拷問器具しかないだろうからな」

一体こいつらとあの3人の間で何があったんだ。

「それに何より……」

「何だよ？」

「あいつらは……」

明久と坂本が一拍置いて――

「二人の話を聞かない（ねえ）」

「確かに、それが一番大きいよね」

確かに、追いかける途中でも何度か説得を試みたが、ああ3人は全く人の話を聞こうとしなかった。

ていうか、何故か明久達の話を変な方向に傾けて俺と明久の関係がどうの寒気がする話が飛び出た気もするが、この辺りは思い出したくない。

「でも、どうするの？ このまま逃げても、彼女達を説得するのと、ああFFF団だったかしら？ アレをなんとかしないと私達、文字通り死ぬわね」

「ふえく!? し、死んじやうの、私達!?!」

「小恋ちゃん、落ち着いて」

「そうだよ。過去の……あ、過去じゃなかったんだっけ。前の世界だってみんなでどうにかなったじゃない」

「それとは全然状況が違うでしょー!」

「確かに……下手をすれば、俺たちにまで被害が来そうなんですけど……」

「ふふふ……ここまで邪悪という名を体現したような世界は体験したことがない。この世界はまだまだ俺を楽しませてくれそうだ」

あいつらも今のところはいつも通りの会話を続けているが、それがいつまで続いてくれるか。

「はあ……ようやく戻れるかと思っただら今度は更に別世界。しかも、

吉井達が異世界人だったって……」

「オマケにあの集団といい、あの3人といい……頭が痛くなりますわ」
まゆきさんもムラサキは根が真面目な分、みんなより精神的疲労があるのだろう。それ故か、まだ体力が回復しきってないようだ。

「弟君、お姉ちゃんが守ってあげるからね」

「あ、ありがとう……」

音姉が言ってくれるのは嬉しいんだが……

「お姉ちゃんが守っても、その分あの人達の怒りが倍増するだけじゃない？」

由夢の言う通り、多分それはあいつらの怒りを煽る材料に他ならぬい。

その辺りは初音島の時と変わらない。いや、更に酷い方向にパワーアップした状況だ。

というか、この状況で本当に俺らが生き残れるのか、本気で不安になってきた。

「まあ、ここでじっとしても何も始まらねえ。得策があるわけじゃねえが、可能性がないわけじゃない」

「それって？」

坂本の言葉に全員が耳を傾けた。

「この人数とはいえ、大半が女子となると、あいつらはまず俺達の言葉に耳を傾けることはねえ。その前に俺達が消されるだろうからな」

消されるという単語がさらっと出てくる辺りがすげえ怖いんだが、今は気にしてる場合じゃなかった。

「なら、嫌でもあいつらの耳に俺達の言葉を聴かせるとなれば、方法はひとつしかねえ」

「そっか、文月学園の放送で」

「正解だ。こっちが何曜日なのかはわからねえが、文月学園なら勝手がわかってるからまだ交渉の可能性はある」

「もしそれでみんなの誤解が解けたら？」

「どうにかこいつらを翔子の家で世話してもらえるかどうか掛け合ってみるだけだ」

「確かに、霧島さんの家ならこの人数くらい、余裕で養える気がするよ」

話を聞く限り、その霧島さん——あの3人の中の誰かだろう——はかなりのお金持ちのお嬢様かなんかだろう。

「しかし、学園に逃げ込んだところで、先回りされとる危険性があるじやろう。あの霧島もいるのなら、待ち伏せされとる可能性は大きいじやろう」

「それも考慮しての策だ。もし休日だったとしても学園には常に教師がいるはずだ」

教師がいるからなんだろう。教師の前なら暴力はできないって言いたいのだろうか。

しかし、あの妙な集団のことといい、あの3人の事といい、とてもそれで止まるとは思えない。

坂本の様子から見てもそれが目的ではなさそうだ。

「あ、そっか……召喚獣」

「しようかんじゅう?」

明久が発した単語に小恋が首を傾げた。

「召喚獣って、あのゲームとかに出てくるアレか?」

「ああ、渉が考えてるのはちよつと違うかな?」

「召喚獣というのは、正式名称『試験召喚獣』。我が文月学園では、世界でもかなり注目されるシステムがあつてね。その最大の特徴が試験召喚システムというもんだ」

「その、試験召喚システムというのは?」

「まず、我が学園では成績ごとに6つのクラスに振り分ける。A, B, C, D, E, Fと言った具合に分けられる」

「久保はトップのAクラス。俺達は最下層のFクラスな」

「最下層って……そんなに分ける必要があるわけ?」

まゆきさんが最もな疑問を口にした。

俺達の学園でも大抵は3クラス。時々4クラスくらいだ。いくらなんでもクラス数が多いと思つた。

「その質問の答えはこうだ。俺達の学園のテストには、上限がないん

だ」

「上限？　つまり、問題は無数にあるってこと？」

音姉の質問に坂本はそうだと言って更に説明を続ける。

「この学園のテストは1時間という時間制限の中で無数にある問題をどれだけ解けるかによって成績がどこまでも伸ばせるっていうわけなんだが」

「そして、そのテストが終わった後でいよいよ試験召喚獣。科学とオカルト、そして偶然によって成り立った『試験召喚システム』によってテストで示された成績に応じた強さを持つ試験召喚獣が出てくるってわけ」

「ただし、それは教師の許可の下でしか呼び出せないものじゃがの」

大体召喚獣というのがどういうものなのかの説明は少しは理解できた。

「でも、そんなもんを出してどうすんだよ？」

「戦わせるんだよ」

渉の言葉に坂本が一言で答えた。

「僕達の学園が注目を浴びてる理由は、そのシステムを使って行われる『試験召喚戦争』。略して『試召戦争』ってのがあるのね」

「学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試みの中心さ」

「その戦争で重要になるのがテストの点数なんだけど、AクラスとFクラスの点数じゃ、文字通り桁が違うから普通なら相手にならないんだけどね」

大体はわかったが、それだとFクラスの明久達相手じゃ荷が重すぎじゃねえのか。

「大体理解はできたけど、それだと結局あんた達が不利なのは変わらないじゃない。あの3人がどのクラスかは知らないけど、最下層のFクラスのアんた達じゃ勝てないじゃない？」

俺の疑問を杏が代わりに代弁してくれた。そもそもそのテストを受けてない状態でどうやってその『試召戦争』を実現させるのか。

「それについては心配いらん。学園に行って待ち伏せがいたとして

も、女子達が足止めをしてあそこに行く時間を稼いでくれればいい」「あそこ……って、雄二。それって……」

「俺も正直行きたくはないが、今俺達が生き残るにはもうそれしか手がねえんだ」

「そ、そうだね。確かに、ある意味あそこが一番安全なのは間違っていないしね……」

明久達というあそこがどういう所なのかは俺達には知る由もないが、どうにか作戦はあるようだ。

「とりあえず……明久達がそのテストを受ければまだ可能性はあるんだな？」

「ああ。そうと決まればすぐに行動だ。全員、ここから先は本気で命を賭けろ」

「おう！」

こんなことに命を賭ける意味がわからないが、明久達は本気みたいだ。

とりあえず、この世界のことをよく知ってるこいつらを信じるしかないな。

明久達が影道から勢いよく飛び出し、俺達はそれについていった。

「来たわね、アキ」

「吉井君、ここまでです」

「雄二……覚悟して」

俺達が文月学園らしいところにたどり着くと、そこには既に先客がいた。

例のあの女子3人だ。

「く……姫路さん、美波……」

「翔子……」

明久と坂本は魔王にでも出くわしたような雰囲気である。向こうも言葉では言い表せないオーラを纏っている。

ついでに言うとう、葉月ちゃんにはそれを見せないよう木下が目を覆っていた。

まあ、それはともかく――

「なんか……更に人数が増えてないか？」

3人の後ろにはさっきの、FFF団とやらに匹敵するほどの人数の女子がいた。

「くそ……まさか、増援を呼んでいたとはな」

どうやら増援のことは予想外だったのか、坂本の額に汗がにじみ出ている。

『あの、島田先輩……。あの人達、今行方不明って噂されてる人達ですよね？』

『うん。行方不明だった吉井先輩達が戻ってくるなんて……。なんか見たことない子達までいるけど』

『何かあったんですか？』

後ろの女子達がそんな話をしているのが聞こえていた。

「ああ、ちよつと遠いところで羽目はずしすぎたからちよつとお仕事置きをね」

こっちの世界のお仕事というのは屋上からノーロープバンジーさせるものなのかというツツコミが喉まで出かかった。

「く……これはマズイ。もう、色んな意味でマズイ状況だね」

「ああ、下手をすれば……」

「……雄二」

明久と坂本が相談しあっている中、坂本を呼ぶ女子が両手に1枚ずつ紙を持ってそれを突き出した。

「選んで。ここで婚約するか……結婚するか」

「それ、どっちも同じ意味だろう！」

おかしい。何かの色々とおかしい。

「えつと……こっちじゃ婚約と結婚って、どう扱われてるんだろう？」

「音姉、何も考えない方がいいと思う」

一々あの3人の言葉を真に受けたら色々ときりが無い気がする。

「アキ……色々ポツキリ話を聞かせてもらおうよ?」

「ポツキリ!? そこは普通じっくりとか言うところだよね!? ていうか、これ前にも言った気がする!」

「ああ、間違えたわ。じっくり全身の骨を一本ずつ折りながら話し合いましよう?」

「おかしいよ美波! 話し合う気がするのならそもそも骨を折ろうとしないはずだ!」

こっちは更にバイオレンスな雰囲気が増してるな。ていうか、明久はこっちでどんな酷い目に会っていたんだ。

「明久君、どうしてなんですか? どうして私達の所じゃなく、その人達のところに行ったんですか?」

「姫路さん? 何でって、それは僕の意味じゃなくて……成り行きっていうか、偶然っていうか……」

別に嘘ではない。どういうわけか、あの扉で俺達がこの世界に来たように、明久もいつの間にか初音島に来てたっていうし。

「そんなに……そんなに男の子と屋根の下で暮らしたかったですか!? 坂本君とベッドを共にして!」

「全員動くなああああ!!」

あの姫路さんという子がとんでもないことを言った瞬間、明久と坂本が叫んだ。

その叫びにあの3人の後ろにいた女子達がびくつ、と体を一瞬震わせた。その手に携帯を持ちながら。

「さあ、みんな……余計な動きは見せないように。そして携帯を地面に置いて手を後ろに組むんだ」

「妙な真似をしても無駄だ。こっちにはムツツリーニがいるんだ。大人しくした方が身のためだぜ」

『くっ……』

何やら女子達が悔しげに携帯を地面に置いた。

「ふう……危なかった。僕達が制止してなかったら、僕と雄二、そして

義之と寝屋を共にするほどの関係を持っているという噂が学校中に広まっていたところだったよ」

何故そんな噂が学校中に知れ渡る場面を想定しているのか非常に気になるが、そんな疑問も許さず、あの美波という子が更に口を開く。「そうよ！　何で女子じゃなくて男なのよ！　そんなに坂本やその男の子と過ごす方がいいって言うの?!」

カチカチカチツ

「誰が動いていいと言った!!」

あの美波とか言う子の言葉で携帯に手をかけた女子達を明久達が再び制止する。

ていうか、何でそんなことになるんだよ。明久達が言うにはあの3人のうち2人はAクラス……つまりは学年トップレベルの実力者らしいが、全くそんな感じがしない。

というか、下手をすれば俺や渉以上に馬鹿な気がする。

「もう駄目だわ……頭が痛くなってきたわ……」

「わ、私もです……。一体あの方達は何を仰ってるのやら……」

まゆきさんやムラサキもかなりの頭痛を患い始めた。俺も同様だ。

あの2人は何がどうなってそんな発想に至るのやら。そして後ろの女子達もどうしてそんなくだらない話を鵜呑みにするんだよ。

「雄二、吉井とその男の子と屋根の下で色々してるって……ホントウ?」

「一緒に暮らしてるのは否定しねえが、お前の考えてることになんて未来永劫なつてたまるか!」

「そうだよ!　何で雄二なんかと恋人にならなきゃいけないんだよ!

それだったら僕は断然ななかちゃんを選ぶよ!」

「ふええええええ!?!」

明久が同性愛を否定する勢いのままとんでもない爆弾発言を投下した。

「うわ、明久君……すごい」

「明久さん……意外と、大胆ですね……」

「へ?」

しかし、当の本人は全く自覚がないようだが。

「わくお、明久君だいたくん♪」

「ふふふ、よかったじゃない、白河さん」

「ふえ〜……吉井君がななかと……お、お似合いだと思ってるけど……う〜」

茜と杏は面白がり、小恋は明久の突然の爆弾発言に顔真っ赤にしてうつむいていた。

「あ、あれ？ みんな、どうしたの？」

「明久、お前の今の発言をもう一度頭の中で整理してみろ」

「へ？ ……はっ！ だあああああ！ 違うんだ、ななかちやん！ いや、違うっていうのは雄二との同性愛の噂に関してってことで、ななかちやんが嫌いじゃなくて、むしろ好きの部類に……って、何言ってるんだ僕はああああ!!」

明久が白河に必至に弁明しようとするが、更に墓穴を掘っていた。こんな時になんだが、明久の反応は見てておもしろいな。

「アキ、どうやらじつくりと言わず、盛大に骨を折ってあげようかしら？」

「明久君……そんなにお仕置きを受けたいなら言ってください〜」

向こうも向こうで更に負のオーラが増してる。さつきまで同性愛がどうか言った癖して、あんたらは明久にどんな答えを求めているんだよ。

カチャカチャカチャ

「だから誰が動いていいと……いや、同性愛よりはむしろいいんじゃない？ でも、ななかちやんに迷惑が〜」

いや、明久。俺から見ても白河とお前の組み合わせは結構いいんじゃないやねって思ってるぞ。白河も満更じゃなさそうだし。

「よし、いいぞお前ら！ そのままメールで噂を広めて俺と明久の噂を解消しろ！ ついでに明久と白河の噂に真実味を持たせろ！」

「雄二！ 貴様余程僕を地獄に落としたいらしいな！」

地獄どころか、むしろ天国じゃねえかと思うんだが。

「アキ〜」

「明久君」

違った。明久の言う通り地獄一直線のようなのだ。

「さらばっ！」

あの2人の殺気が強まったのを認識した瞬間、更に後ろに控えている女子たちのピンク色の空気に耐えられなくなった明久はその場から猛スピードで逃げていった。

『待ちなさい、アキ——っ！』

『明久君！』

『駄目よ、アキちゃん！ あなたには坂本君という大切な人が！』

『なんで玉野さんまでこっちに来てるの!? そしていい加減僕をアキちゃんと呼ぶのやめて！ そして僕を同性愛者に仕立て上げないで！』

『吉井いいいい！ 今噂になっている不純異性交遊の件、じっくり聞かせてもらおうぞおおお!!』

『鉄人!? もう噂になってるの!? ていうかお願い、話を聞いて！』

『黙れ！ ようやく戻ってきたと思えばまたくだらん騒ぎを起こしておつてからに！ 指導室でじっくり話を聞かせてもらおうぞ！』

『なあしてええええええ!』

明久が筋骨隆々の教師らしい人に連れていかれ、見えなくなった。

「よっし！ 大半の障害は明久の犠牲で消え去った！ ついでに鉄人もあつちに集中がいつてる。残るは翔子だけだ！」

連れていかれた明久をあつさりと見捨てる坂本は本当に明久の親友なのか。

「雄二……私は、雄二のことを大切にしたいと思ってる。傷つけたくない」

「そうかそうか。それはいいことだ。なら、ここは大人しく俺を補習室に——」

「だから選んで」

坂本が最後まで言い切る前に翔子さんが両手に拷問器具とスタンガンらしいものを持って突き出した。

「厳しく躰けられるのと、一緒の部屋で寝るのと」

「どちらにしても俺に未来はないのか!？」

駄目だ、のつけから全く会話になっていない。これじゃあ、収集がつかない。

「じゃあ、翔子さんだったかしら? 取引しましょう」

そんな時、杏が前に出てきた。

「……あなたは?」

「雪村杏。出身がどこかは今は伏せるけど、向こうじゃ坂本と同級生ね」

「……雄二とは?」

「友達という点以外はそれほど深い関係はないわ。まあ、生憎……証明するものはないけど」

「……何を求めるの?」

「実は私達、ちよつと事情があつて宿が取れない状態にあるの。そこであなたがお金持ちだつてことを聞いて少しの間、私達を泊めておしいの」

「……その対価は?」

「やつぱりそうなるわよね。そうね……今の私達の歳でも結婚できる国を教えてあげる、というのはどうかしら?」

「よせ、雪村! そんな事を翔子に言えば、俺は今日中に外国人にされてしまう!」

「馬鹿ね。そうでもしなければ私達を取り巻くこの状況を解決できないんだから、この程度でガタガタ言わない」

「この程度じゃねえだろ! 俺の将来が大ピンチなんだぞ! とにかくそれ以上何も言うな! だから——ギャバツ!」

坂本の後ろから翔子さんがスタンガン突きつけて坂本を気絶させた。

「……本当に?」

「ええ。だからひとまずは坂本達を補習室に連れてって、回復試験とやらを受けさせてあげてくれないかしら?」

「……ありがとう。雪村は良い人」

それから翔子さんが坂本を引きずつてその場を去っていく。

「すげえな、杏……」

「ああ、あそこまで簡単に事を運べるとはな」

色々頭の痛い事態だったものの、杏の咄嗟の機転でどうにか俺達の取り巻く問題のひとつが解決できたようだ。

「とりあえず……次は明久の方だな」

俺達は精神的に疲れを残したまま明久のいる指導室に向かって歩いていった。

第三十八話

「ふむ、つまり吉井の不純異性交遊というのは単なる噂に過ぎず、ただ吉井がこの学園を案内しようと君達を連れてきた。そういうことかね?」

「はい。ですから、明久君が不純異性交遊がどうのこうのというのは、あの人達のただの勘違いです」

「ふむ、そうか。いや、すまん吉井。どうやらその噂については俺の誤解だったようだ」

「いいえ、誤解が解けたのなら助かります、鉄人先生」

「ふむ。久しぶりに言うが、西村先生と呼べ」

「わかりました、文月最恐の西村先せつ!」

何か変な二つ名みたいなものをつけたからか、明久君が殴られました。

「余計な枕言葉を付けるな。そして『さいきよう』の字に若干違和感を覚えたのだが」

「気の所為です」

坂本君達のが補修室に行っている——約一名は引きずられていった——間に私達初音島メンバーは明久君のいる指導室へ足を運んだ。

中では明久君の必死の弁明も中々聞いてもらえず、どうにか音姫先輩達が目の前にいる明久君のいたFクラス担当の西村先生に事情を聞かせてどうにか明久君の信用を取り戻せました。

「しかし、この数ヶ月も連絡もなしに何処に行ってたんだ? 見たところ、ほとんどが年下のようだ?」

そういえば、ここに来てから明久君がやけに年上に見えるなあ。

それと、何処に行ってたのかについてはちよつと話じづらいかも。

「あ、ちよつとその辺を語ると長くなるので今は置いといてくれませんかね?」

明久君の言葉に西村先生は一瞬疑わしそうに私たちを見るけど、すぐに何かを察したのか、小さいため息をついた。

「はあ、そうだな。坂本達も補回復試験を行っているからお前も一応補習室へ行っておけ。前回のテストでお前達はいなかったのだからお前達の現在の持ち点は0だからな」

「はあい。じゃあ、みんな……ちよつと行ってくるね。それと……これは後でちゃんと説明するから、年齢や学年に関する言葉は一切伏せてほしいんだ」

最後の方は声を小さくして私達に言った。よくはわからないけど、明久君が言うならそうした方がいいと思う。

私達は明久君の言葉に頷いて明久君は補習室へと向かった。

「ふう……さて、君達はしばらくの間そこに座ってなさい。回復試験を受けてる間暇だろう」

「あ、ありがとうございます。では、お言葉に甘えて」

音姫先輩が代表して言うと、全員西村先生の正面の席に座った。

なんか、これはこれで熱血教師の授業を受けてる気分になるなあ。

「さて、今まで吉井が何処に行ったのか……何をしていたのかについてここで問うのが普通だろうが……」

西村先生の言葉にみんなどうしたものかと頭を悩ませていた。

「……まあ、君達にも事情があるようなので、ここでは不問にしよう。吉井も、君達という場所が心地よいと見える」

……失礼だけど、見た目に反してこの先生はいい人なんじゃないかって思った。

「いやあ、学年一の馬鹿と言われてるあいつがここまで女子に縁があるのも実に不思議なものだ。学園内にいた時のあいつとくれば問題を起こしてばつかだった。いや、そんなあいつがなあ……」

西村先生が明久君の過去を懐かしむように頷いて私達を見る。

「あの、問題って……あの明久がそんなに問題起こしてたんですか？」
「無論。奴は学園の中でもトップ3に入るほどの問題児だ。学園の校舍を破壊するわ、覗き騒動を行うわ、俺の私物を売り飛ばすわ、全国でも稀に見るとんでもない問題児だ」

義之君の言葉に西村先生が間髪いれずに説明した。ていうか明久君……そんな問題起こしてたんだ。

ていうか、そんなにやってよく警察沙汰にもならなかったね。

「まさか、杉並に負けるとも劣らない問題を起こしてたなんて……」

「それも、覗きまで行つてたのですか、あの人は」

「吉井……なんて漢気あふれる奴だ……」

「明久、そんなことまでやってたのかよ……」

なんか、明久君の評価がかなり下がってきてる気がする。かくいう私も、覗きという言葉にちよつと怒りを覚えちゃったけど。

「あ、でも……明久君だって、好きでやったわけじゃないと思います。その……それは誰かのためにやった結果が、たまたま悪い方向にいったんじゃないかっていう、その……」

言葉が思いつかない。確かに、西村先生が言うからには、本当に明久君がそういう騒動も起こしたんだろうことは間違いないと思う。

でも、明久君がとんでもないことをするのは誰かを助けるため……文化祭の時もそうだったから、私はそう信じたい。

「それは俺もわかりきつてることだ。だからこそ観察処分者に奴を入れたのだから……」

西村先生が私の言葉をため息混じりに肯定した。

「そもそも……これだけ問題を起こしているのに、観察処分者以外の処分が本来ないはずがなからう。こんなこと、学校を追い出されるどころか、警察に突き出されてもおかしくないだろう」

「え？　じゃあ、何で明久は今までどおりの学園生活を？」

西村先生の言葉に全員が疑問をもつただろう言葉を義之君が口にした。

「うむ……奴を観察処分者にしたのは……あいつが入学して間もない頃だったな。その時に俺のロッカーが勝手に開けられ、その日に没収した物と共に俺の私物が盗まれた事件だ」

その言葉を聞く限り、明久君だけじゃなく、多分他の誰かがグルになつて行つたことだと思う。失礼だけど、明久君ひとりで教師を欺いてそんなことができるとは思えない。

その上で処分が明久君ただひとりとなると……考えられるのは坂本君が明久君ひとりに罪を着せたとしか思えなかった。

「それで、その犯人を突き止めようとその売り飛ばされた店で色々聞き込みを行った結果、吉井だというのがわかった。俺は今度こそ奴にふさわしい処分を下そうと思った時、その店員がアイツのことを話してな……」

それから明久君が観察処分者になるキツカケを西村先生が語り始めた。

「すみません、少々お尋ねしたいのですが」

吉井明久が盗難を行った日、西村が明久が行ったと思われる店を片っ端から当たっていた。

「何でしょう?」

「この品を、売却した人に、心当たりはありませんか?」

西村は元々自分の私物だった古本を差し出して店員に尋ねた。

「は? その古本ですか? 少々お待ちを………ああ、吉井明久君でしたかね。彼が持つてくるにしては珍しい物だったよ、ハハハハ!」

「ほう……やはり吉井だったか」

犯人が明久だとわかったからには処分は確実。どのような処罰を与えるべきかを悩んでいた時、

「しかし、本当に珍しかったよ。まさか名前も知らない女の子にぬいぐるみを渡すために自分のお気に入りのおゲームまで売り飛ばすんだから」

「……………は?」

店員の突然の言葉に、西村は目を点にした。

「あ、いやね……明久君があのゲームを売り飛ばした時なんだけどね」

『すみません、これ売りたいんですけど』

『はいは……って、明久君じゃないか。これ、ついこの間買ったばかりのゲームじゃないか。この短期間で全クリしたわけ……ないよね』

『ああ、はい……実は、女の子にぬいぐるみを買わなきゃいけない事情がありました……』

『ほう……ぬいぐるみねえ。おいおい、彼女にでもプレゼントする気かい？ お前さんも意外とやるねえ』

『いえ、小学生の女の子ですよ。つい昨日会ったばかりですけど』

『……は？』

『いや……昨日その女の子がお姉ちゃんのためにぬいぐるみを買ったかったらしいんですけど、値段が高くて……小学生のお小遣いじゃ手が届かなかったようで。それで、僕のゲーム関係売ればなんとかいきそうなんですけど……』

『……』

『あれ？ どうかしました？』

『……君は、何で名前も知らない女の子のためにそこまでするのかね？』

『え？ だって、目の前で泣いてる子がいるんですよ？ 放っておけないじゃないですか』

『……』

『あの、僕何か変なこと言ってます？』

『……いや。ちなみに、買取価格なんだけど……ゲームは……新作とはいえ、君の希望通りとはいかんが、この古本は中々お目にかかれなものだからかなりいい金額で買い取れるから……合わせて1万と5千ちよつとになるね』

『本当ですか!? やったあ！ これであの子にぬいぐるみを渡せるよ！』

『本当に自分の事のように嬉しそうに笑うね。まあ、君の目標金額に届いたようだから、さっさとその子にぬいぐるみ買ってやりなさい』

『はい！ ありがとうございます！』

『って、君い！ 嬉しいのはわかったが、お金を受け取らくちや買った

い物も買えないよ!』

「——と、いやあ……あの時は本当にびっくりしたよ。あのようなまつすぐな少年がいたなんて……この代の若者も捨てたものじゃないと思っただよ」

「……………」

「ところで、明久君がどうかしましたか?」

「……いえ、ご協力、ありがとうございました」

西村は店員に頭を下げ、店を出て行った。

「……………吉井」

西村は再びこの店で売却した後で行ったと思われる店を片っ端から尋ねていくと、3件目で明久の事を覚えていた店員を見つけた。

「ああ、この少年か。うん、最近流行りのマスコットキャラのノインというキャラクターのぬいぐるみが欲しいという女の子が来てね、お小遣いが足りなかったようだが、それでも売ってくださいと言ったんですが、私としても商売ですからそういうわけにはいかなかったんですよ。でも、そこにその少年が割り込んできてその子から事情を聞いたんですよ。そしたら彼は——」

『ぬいぐるみを半分に裂いて右半身だけ売ってください』

「——なんて言うもんで、その時は目を疑ったよ。本当に高校生なのかいつて。それからどうにか1日だけでも待ってもらえないかって言われて、それで私もそうしたんですよ。そして今日、ついさっきその少年が来て約束通りこのぬいぐるみの代金を持って大急ぎで来たよ。約束は約束だから私もちゃんとその少年に渡したよ。あの様子じゃ、今頃あの女の子にぬいぐるみを渡してお互い大喜びだろうな」

「……………そうですか。ありがとうございました」

西村は再び頭を下げ、店を出て行った。

「……………うゝむ、どうしたものか」

西村は頭を悩ませていた。確かに明久のやった行為は犯罪そのものだが、それがただひとりの女の子を喜ばせたいがための行動だ。

普通なら警察に連絡するところだが、明久の優しさと行動を知った今となってはただ処分を下すだけでは明久だけでなく、その女の子の折角の笑顔も全て水の泡となってしまうだろう。

そこで西村は決めた。学園から追い出すわけでも、警察に渡すわけでもなく、ある処分を職員みんなに提案した。

「それから奴は観察処分者という肩書きを得た。あれを聞いた時は俺も驚いた。まさか、奴がそのためにあんな行動を取るとはな」

西村先生の話の聞いて唾然とする部分もあったが、同時に明久君らしいと思った。

やっぱりどんな時でも明久君は明久君だった。

「奴は行動こそ滅茶苦茶だが、その優しい心は誰にでもあるものではない。誰かの笑顔を守るために自ら汚名を被る。時にはその覚悟だって必要な時もある。だが、大抵の人間はそこから逃げてしまう。しかし、吉井はそこになんの躊躇いもなく踏み込んでひとりの少女の笑顔を守った。だからこそ俺もどう処分したものかと迷った」

西村先生は言葉こそ困ったように表現したけど、その顔はどこか嬉しそうだった。

「あいつは馬鹿だ。確かにその心は立派だが、あいつは笑顔を守るためには手段を選ばない。一步間違えれば逆にその笑顔を崩す危険性だってあるにも関わらずだ。だからあいつに人を助けたくば何が正しく、何が間違っているのかを教えていく必要がある。それを教えるために俺は奴を観察処分者にすることを選んだ。人のための行動とというのがどういふものかを肌で感じさせるためにな」

そっか。明久君の観察処分者って肩書き……周りからは馬鹿の代表格として呼ばれてるらしいけど、明久君に対してはそんな意味を含

めてたんだ。

「む……ああ、この事はアイツには内密にしてくれると助かる。何分、アイツは調子に乗りやすいところもあるからな」

「はい。明久君には内緒にしておきますよ」

そうは言っても、西村先生自身照れくさいところもあるのか、顔が若干赤い気がする。

「はあ……やっと終わったよ」

「久々の回復試験……懐かしかったが、やはり疲れるの」

「……前と変わらない」

「まあ、とりあえず緊急時のための回復としちゃあ、結構できてたと……げっ?! 鉄人!」

「む、戻ってきたようだな。それと坂本、西村先生と呼ばんか!」

「ごっ?! ぐ……この、暴力教師め……」

回復試験というものが終わったのか、明久君達が戻ってきた。

「あ、みんなお待たせ。この時間まで、暇じゃなかった?」

「ううん、西村先生から面白い話を聞いたし」

その面白い話が明久君の事だっことは内緒だけど。

「ふくん……どんな話かは知らないけど、まあなかなかちゃん達が暇じゃなかったっていうならいいか」

「うんうん」

「あ、もうこんな時間だ……今日はみんな霧島さんの家に泊まるんだって?」

「うん。どんな家か楽しみだなあ」

「言つとくと、本当にすごいよ。あんな大ききで中にいるのがほんの数人だっ話だもん」

「へえ……」

明久君は以前に行つたことがあるみたい。どんな家なんだろうなあ。

「ま、見ればわかるよ。じゃあ、早速行こう」

「何を仰ってますの? 吉井には自分の家があるじゃないですか」

「……………」

ムラサキさんの言葉に明久君が固まってしまった。

「ど、どうしたんですの?」

「ごめん、ムラサキさん。できれば、僕の家にはもう戻りたくないんだ」

「何故ですか? セつかく自分の世界に戻れたのですよ? ご家族に顔を見せないでどうするんですか?」

事情を知らないムラサキさんは一般的な事を言ってるけど、この世界に来てからのことを考えると、それが必ずしも最善とは思えなかった。

「あら、ようやく来ましたか、アキ君」

「……………」

突然女の人の声が聞こえた。明久君は全身から汗を流して、顔面蒼白になっていた。誰なんだろう?

なんか、すごく綺麗な人だけど。

「ね、姉さん……………」

『姉さん!』

明久君の言葉に私達は驚いた。いや、お姉さんがいたのは聞いていたけど、まさかこんな美人だなんて思わなかった。

でも、同時に残念だと思った。何故なら、

「……………なんでメイド姿での登場なんだよ!」

明久君の言う通り、何故か明久君のお姉さんらしい女性はメイド姿だった。

「あら? だって先程電話とメールでメイド服を着てご奉仕しなさいという電話を受けたから——」

「嘘だ! こんなことになるかと思って僕は一度目の電話も即切ったし、メールの時だって返信もしなかった! 僕から姉さんに連絡を寄越した覚えは一度たりともない!」

こんなシチュエーションを想像できる明久君って、実は頭いいの?

「何ですかアキ君、その言い方は。まるで私が常識の欠片もないみたいじゃないですか」

「みたいもなにも、まさにその通りじゃないか! 見なよみんなの顔

！ その格好が常識だと言いたいような表情か!？」
うわ、すごい怒鳴ってる。いつもツツコミで大きな声をあげること
はあるけど、今の明久君、メーター振り切ってる。

「あら？ こちらの方達は……アキ君？ これはどういうことでしょうか？」

「しまった！ 常識を認識させることに気がいつてて、みんなのことを誤魔化す言葉を考えてなかった！ 言っとくけど、この子達は――」

明久君は簡単に私達の事を紹介した。流石に異世界から来ましたというのを伏せてるけど。

「そうですか。どうも愚弟がお世話になってるようで。私はアキ君の妻の吉井玲と申しま……」

「姉だからね！ みんな、絶対本気にしないで！」

「あら、すみません。つい流れで」

「嘘だ！ そんな紹介になる流れなんて少しもなかったはずだ！」

「ところで、アキ君……アキ君の好物のナース服が部屋の何処にもないのでが」

「さも僕がナース服を愛用しているかのように振る舞うなああああああ！」

……うん、明久君の言ったとおりの人だった。

「えっと、どうしよう義之。あの人のこと……どう鼻真目に見ても変態っていう言葉しか浮かばない」

「小恋、それは至極当然の評価だと俺も思う」

あの小恋ですらそういう言葉を出すくらいだもん。

「もう色々ハッキリしてもらいたんだけど、やっぱり姉さんは僕の事が嫌いなんじゃないの!？」

「何を言ってるのですか、アキ君。もちろん好きに決まってるじゃないですか。……異性として」

「そんな風に見られるならむしろ嫌いになってくれたほうがいいよ！」

「それよりもいい加減に実の弟を弄るのはやめてあげてください！」

流石に耐えられなくなったのか、音姫先輩が玲さんを止めに入っ

た。

「そうですか。それはともかく、アキ君。数多の女の子に囲まれて蹂躪やら『ピー』やら『ズギューン』に『ザッパーン』などを——」

「こんの、馬鹿姉がああああああ！ 公衆の面前でなんてこと言うてるんだあああああ！」

「明久さん、玲さんの言ってることは否定しないのですか？」

「しまった！ ち、違うよ由夢ちゃん！ 今のはあまりに姉さんのボケがあれだったからツツコミが回らなかつたけど、僕は姉さんが言ったのに興味はない……とは言い切れないけど、そんなことするつもりは毛頭ないからね！」

「そうですか、興味はあるんですね？ でしたらすぐに母さんから父さんに躡けた時に使ってた拷問器具を——」

「あんたはいい加減黙つてろよ！ つて、やっぱりちよつと待った！ 今聞き逃せない重大な事を口にしてなかつた！ 母さんが父さんになんだったって!? 父さん、向こうでどんな扱いを受けてるの!?!」

「ご心配いりません。父さんはずっと健康体を保って元気よく暮らしています」

「ほっ……なんだ、冗談か」

「毎朝起きる時は、『母さん、そして玲……いつもいつもいい女王様っぷりで。あつし、この家にもらわれて本当に感謝しております』という挨拶を心がけてくれますから」

「拷問じゃなくて洗脳!? 母さん、本当に何やったんだよ！ クスリでも服用させたの!?! もう父さんのソレ、何かの末期じゃないの!?!」
「いいえ……ただ単にうちでは誰がどのように位置づけされているのかを再教育しただけです」

「結局は暴力か！ 再教育が必要なのはむしろあんたと母さんだよ！」

「大丈夫です。父さんはそれが真実だと疑ってませんから」

「哀れだ！ 父さんがあまりにも哀れすぎるよ！ 本当になんで母さんと結婚しちゃったの!?!」

「それはあなたが気にすることではないでしょ?」

「気にするよ！ 子供としてすごく気になるよ！」

「アキ君、そんなに怒鳴って喉乾きませんか？」

「随分今更だし、怒鳴らせてるのはあんただよ！」

「よければジュースを持ってますが？」

「一応いただくよ」

「私の飲みかけで媚——」

「なんて危ないものを渡すんだ、この姉は！ とりあえず、僕は心配いらないからみんな行こう！」

「お待ちください。そちらの方々の紹介がまだです」

「ちっ！ 覚えてたか」

「で？ アキ君、その方たちは？」

「え？ あ、この人たちは……うくと……」

明久くんはなんて紹介するか悩んでいるようだった。

「……………苦楽を共にした仲間たち？」

「歯を食いしばりなさい」

玲さんがいきなり明久君に暴力を振るい始めた。

「ちよ、いきなり何やってるんですか!？」

……ここまで来ると傍観に徹した私も前に出ざるをえなかった。

「何って、明久君が蹂躪に興味があつたようなので」

「そんな態度見せてませんし、そうだったとしてもいきなり暴力を振るうのはどうなんですか！ じゃなくて、明久君大丈夫!？」

「な、ななちちゃん……大丈夫だよ、いつもの事だし……」

「……アキ君、不純異性交遊の罰を与えます。歯を食いしばりなさい」

「え!？ 僕まだ何もしてないのに!？」

「まだ？ ……天に祈りなさい」

「何の弁明もさせてくれないの!？ ていうか今のはそういう意味じゃぐふっ！ うぐっ!？」

「あ、明久君!？」

「ちよ、明久!」

「あわわ、明久君が……明久君が……」

「ですから実の弟に対して何やってるんですか!」

流石に見てられなかったのか、その場にいた全員で10分かかってようやく玲さんの明久君に対しての暴力を止めることができた。

第三十九話

「……姉さん」

「何でしょう？ アキ君」

「……お願いですから僕の目の前につきだしているその女子用の制服をしまつてくださいー！」

「それよりもいい加減に明久君をいじめるのをやめてくださいー！」

「いじめてませんよ？ 私はアキ君に似合う服を厳選して……」

「厳選するならまず服を男子用にすべきですー！」

現在、俺は白河、渉と共に明久の家を訪れていた。

玲さんの明久への暴力を止めた後、明久が連れていかれそうになるのもこれまた全力で止めた。

明久から聞いた以上にこの人の非常識っぷりには驚かされたので、家で明久がどんな目に合わされるからわからなかったからだ。

しかし、玲さんも家族と一緒に住むのはおかしいですかと真顔で聞いてきたので反論が難しかった。

確かに普通なら家族と一緒にいるのは当然なんだが、この人の場合だとそれが命を左右するのではと思い、なんとしても2人だけにするわけにはいかなかった。

そこで真つ先に白河が明久と吉井家に行くと言い出した。しかし、明久はそれを断固拒否した。

白河が明久の事を思つての行動なのはわかるのだが、あの人はどうやら弟が異性を家に上げようものなら明久を死刑にしてもおかしくない俺の本能が告げていた。

あのままでは明久はただ死に向かつて一直線に進んでいきそうだったので、俺と渉も一緒に行つて男子率を上げて明久に向けられる殺気を少しでも抑えられるようにした。

しかし、押さえたところで玲さんは玲さんだ。ご覧の通り非常識の度合いは全く変わらなかった。

「ふう……ななかちゃんのおかげでどうにか九死に一生を得た。まっ

たく……相変わらずだな、姉さん。行動と発想が過激だよ」

「過激で済ませていいレベルじゃないと思うぞ、アレは」

「流石の俺も、あれについていくのは無理だ」

桜公園で放送禁止コードに引つかかりまくってる渉までもが無理となると、あの人の相手をまともにもできるのは身内の明久だけではないかと思う。

「あはは……ごめんね、みんな。姉さんの非常識っぷりに関しては……あまり考えない方がいいと思うんだ」

『アキ君、お風呂の件で少々困ったことがあるのですが。スクール水着（女子用）を着てこちらに来てくださいますか？』

「ま、あんなだから……」

「玲さんのことについてはもうツツコみたくないが、そんな風に割り切れる明久が何倍もすごいぜ」

どんなギャグマンガでもあそこまで酷い性格のキャラクターなんかそうはいないだろ。

「でも明久君も。困ったら他の人に頼るとかした方がいいよ。普通の人達から見れば酷い有様なんだから、明久君のためにもお姉さんとの中を修繕させたほうが……」

「え？ 僕、別に姉さんと喧嘩とかはしてないよ？ 嫌いってわけでもないし、母さんに比べれば姉さんの素行の方がまだマシだよ」

「……………」

「ただカオスに満ちているんだよ、お前の一家は。」

「あ、ごめん。ちょっと姉さんのところ行くね。もちろん、スクール水着は着ないけど」

「そう言つて明久は玲さんのいる風呂場へと向かっていった。」

「……………えっと……………どうしよう？ 2人共」

数秒の沈黙の後、白河が口を開いた。何を言わんとしているかはわかってる。

「そう、だな……正直、明久をずっとここにいさせるのは、色んな意味でマズイだろうな」

「あの姉さんですらマシな方つて……後に控えている母親はどんだけ

なんだよって話だよ」

家の外でもあのFFF団や女子2人に殺されかける日々、家でもあの人によつて精神はガリガリ削られる。

そんな環境に明久を置いておけば近い将来、精神が壊れたつて不思議じゃない。いや、むしろ今までよく壊れなかつたと賞賛を送りたいところだ。

「私は……明久君を、初音島に連れて行きたい。このままじゃ、明久君が壊れちゃうよ。本人はいつも通りだと言ってるけど、こんなのが一生続くなんて……」

「それは俺も同感だ。恐らく、説得なんて通じないだろうから、強奪してみたやり方だろうと明久を連れていった方がいい気がする。別にこっちは何も悪いことはしてないしな」

「ああ……。家族のことに口を出すべきじゃない……とは思うが、こればかりはあいつの命事態危険だからなあ。いくら美人でもあんなもの見せられちゃ、黙ってるわけにもいかねえしな」

「まあ、問題はまずあの扉をなんとかしなくちゃいけないんだが」

「そういや、今度はどんな条件で開くんか？ こっちでは別に何も異常事態が起こってる気配はねえし」

「以前の無限ループがあるわけでもなさそうだな。そうすると、原因を見つけるのもかなり難しくなる」

どっちにしろ、まずあの扉を開けるために何をすべきかというのを探るのが先だ。

明久に対しての暴力を止めるのも全力を尽くすつもりだが、こっちも大事なことからかな。

「ん？ みんな、何の話をしてるの？」

「え？ ああ、あの扉のこと、これからどうしようかなって話し合ってたところ」

白河が明久の登場に一瞬同様したが、すぐにいつも通りの笑顔で誤魔化した。まあ、扉の事を話してたのは本当だが。

「ああ、扉のことかあ……結局、今度はどんな条件があるんだろうかね？」

「まあ、その辺はひとまず杉並に情報収集を任せよう。どんなところでも好き勝手動ける奴だからな」

「まあ、そうだね。わかんないところとかあつたら言つてよ。僕の故郷だから」

「本当にお前、異世界から来たんだなあ」

「まあね」

「そういえばずっと疑問だったんだけど……なんでこっちに来て明久君は大きくなつたの？」

白河の質問で思い出した。そういえばこっちに来てから明久がやけに年上に思える。

「あ、ああ……実を言うところちが本来の年齢。こっちじゃ僕は17歳なんだ」

「17!? え、なに? お前、俺達より年上だったのかよ!」

「う、うん。あ、別に年齢は気にしないでいいから。こっちがどうだろうがあつちでどうだろうが、僕と君達は友達。今まで通りでいいから」

「あ、そうか……じゃあ、このまま明久つてことで」

「うん。そうしてもらえると幸い。あ、このことは他のみんなにも伝えて、その上で年齢に関する話はタブーつてことにしといて。こっちの人達に説明してもややこしいことになるだけだから」

「そうだな。一応後で音姉達にも電話で伝えとくか」

明久の衝撃の事実がまたひとつ転がってきたところで用事が済んだのか、玲さんが戻ってきた。

「ああ、お待たせしました。そろそろ夕飯の時間帯ですし……今日は私が——」

「姉さんは座つてて! 今日の夕飯は僕が作るから!」

玲さんが台所に入ろうとしたところで明久が大声を上げて阻止する。

「何ですかアキ君。今日はお客様もいることですし、ここは私が……」
「客がいるからこそ僕が作りたいんだ。今まで心配かけた詫びも含めてさ」

「……アキ君、あなたはまだ姉さんの腕を疑ってますね。私もこの数ヶ月でまた一步成長しましたよ」

「……そうか。そこまで言うならまた料理クイズを出そう」

まるで死闘を繰り広げようというような雰囲気醸し出して明久が玲さんと対峙する。

「じゃあ、問題。『きんぴらごぼう』を作るためにはまず何をすべきでしょうか?」

きんぴらごぼうか。どちらかといえば基本の料理だな。最近の由夢の作れる料理のトップ3に入る料理だ。

明久がいて本当によかったと思っただけで、おかげで由夢が殺人犯にならずに済んだのだから。

「明久君……あなたは姉さんを侮ってますか?」

「決して侮ってない!」

「全く……何でいちいちそんな初級の問題ばかり出すのやら」

「以前お米を研ぐのに『砥石』を用するなんて言った人の腕を信じられる人なんていないと思うけど……」

お米を研ぐのに砥石!? 俺たちは明久の言葉にいつそう驚いた。

いや、確かに研ぐ石で『砥石』と書くが、あれは包丁用の道具だった筈だ。

「とにかく、答えてよ。はい、まず何をやる?」

「最初にやると言ったら下ごしらえですね。必要な材料は金鋏にヒラメとごぼう……」

「金鋏を入れてる時点でアウトだあああああ!!」

うん、駄目だ。こんな人を台所に入れるのは危険すぎる。

「あ、玲さん……ちよつと色々話をしませんか? ほら、明久の昔のこととか」

「そ、そうだね! みんな僕のこつちでの暮らしを気にしてたみたいだから。僕はある程度話したけど、客観的な部分も聞きたいって言ってたから! それじゃあ、夕飯は僕がやるね!」

俺はすぐに玲さんを台所から遠ざけようと適当な事を言った。明久も俺の真意に気づいて乗っかってすぐに台所に逃げた。

「アキ君の話ですか……そうですね。言葉では足りないところもあるでしょうから、アルバムを見ながらお話しましょうか？」

「アルバムですか？ 楽しみ〜」

白河が真つ先に乗り出した。しかし、明久の昔かあ。俺もちよつと気になるな。

「えつと……まず、こつちが2歳の時お風呂に入って遊んでいた時の写真ですね」

「うわ〜、ちつちゃ〜い。可愛い〜」

「へえ……今と比べるとかなり女に近い容姿だな」

「渉、それは明久に失礼だぞ」

確かに体育祭の時の女装も妙にピッタリだったが、本人にとっては溜まったものじゃないだろう。

「それで、こつちは4歳の時のお風呂の写真ですね」

「あはは！ 明久君、溺れてる〜」

「結構間抜けなんだな」

「そうだな……ん？」

何やらちよつと違和感を感じるんだが。

「そして、こつちがアキ君の7歳の時のお風呂の写真ですね」

「小学生入りたてか〜」

「3年も間を取ったからかなり大きく見えるな〜」

「……さつきから思ったんだが、なんで風呂ばかりなんだ？」

「それで、こつちがアキ君の10歳のお風呂の写真です」

「え？」

「おい、さつきから風呂ばかりじゃね？」

「今頃気づいたのか？」

「待つんだ姉さん！ またそれか！ また僕の風呂づくしのアルバムか！」

「それで、こちらは私が帰郷した当時のお風呂の写真です」

「こ、これが……」

「てか、どつから撮ったんだ？」

「この馬鹿姉がああああああ！ またその写真を！ いい加減それを

焼き捨てるんだ姉さん！」

「ちよつと待て明久っ！ フライパンを取ってどうするんだ!？」

「離すんだ涉！ 僕はこの姉の頭をがち割って綺麗に洗わなくちやいけないんだ！」

「待て待て！ お前染まつてる！ 染まつてきてるぞ！」

「……駄目だこりゃ」

これは本気で明久をこの家から……いや、この世界から切り離してあげるべきだと思った。

この世界は明久に厳しすぎる。とりあえず、俺は明久が途中で放棄した料理を作るとするか。

お、これ確か……パエリアって奴か。結構マニアックな料理をするなあ。レシピあったか？

「ふわあく……おはよう、義之」

「ああ、おはよう……あくああ……」

翌朝、俺と涉が廊下でバツタリ会って互いにあくびをした。

結局、昨晩は玲さんの暴走がひどく、それを止めるのに思いつきり体力を使った。

誰が何処で寝るかを決める際、玲さんが明久と寝ると言い出し、それを明久が拒否した。

その後で信用できるや否かを問うた時に明久があっさりとノーと答えて玲さんが暴力に走ってそれを止めるのに時間がかかった。

それから白河が一緒と言い出し、それも明久は却下した。そんなことになれば玲さんの暴力性が更にひどくなるからだろう。最悪、命を散らしかねない。

そんなとんでもない悪循環を夜中まで彷徨って俺達は寝不足だった。

「あ、おはよう……」

「おつす、白河」

「よく。随分と髪乱れてるぜ?」

「んく……色々あったから」

本当にな。

「後は、明久と玲さんだな。後で起こしに——」

『つて、姉さん!? 何で僕の上に乗っかってるの!?!』

『あら、起きてしまいましたか。いやですね……これから大人の起こし方を実行しようとしていたのですが。まあ、目を覚ました後でも別のやり方がありますし』

『ちよつと待って! どうして僕のシャツを脱がそうとするの!? ていうか、何処に手を伸ばしてるのさ!?!』

『どうしてと申されても……ただ明久君を大人にするために姉である私が一肌脱ごうとしているだけです?』

『変態だあああああ!! 誰かこの変態姉を止めてえええええええ!!』

「……とりあえず、助けに行こう」

俺達は明久の部屋に駆け込んでYシャツ一枚だけの玲さんを無理やり引き剥がしてどうにか最悪の事態はまぬがれた。

「はあ……ありがとう。おかげで命拾いました」

「いや、俺達も油断してた。まさか朝っぱらから明久に仕掛けてくるとは思わなかった」

あの人の本気を甘く見た俺達の失敗だからな。

「まったく……姉さん、勉強はできてなんで常識があんなにも欠落しているのやら」

「勉強が? 頭はいいのか?」

「う、うん……そのはず、なんだけど……」

「どれくらいなの?」

「うん。確か、ボストンの……ハーバートって大学を卒業するくらい

……」

「「ハーバート!?!」」

ハーバートって、確かアメリカの、滅茶苦茶頭いい奴が通ってるって学校だよな？

あの非常識の塊そのものと言ってもいい人がそんな大学を卒業？
言っちゃなんだが、全然そうは思えねえ。

「それなのに、なんでお前は勉強できねえんだよ？」

「いや、渉。ここは玲さん風に染まらなかっただけ幸いだと思うぞ」

もし明久が頭がよくて一般常識に欠けてたらと思ったら……やめよう。想像するだけで恐ろしい。

「いたわアキ！」

「明久君！」

……これまた面倒臭い事態が……。

「……姫路さん、美波」

俺達の後ろから大声を上げたのは明久のクラスメートらしい姫路さんと美波さんだった。

「さあ、アキ……大人しく腕を差し出さない」

「既に戦闘態勢に!?!」

「ちよ、昨日から一体何なんですか!?! 明久君が何をしたんですか!?!」

「外野は黙ってなさいよ!?!」

「そうです!?! これは私達の問題です!?!」

「な、ななかちゃん、落ち着いて。とりあえず、まずは美波の胸のように平静に話し合いをし手がトリックアートのようにいいいいいい!!」

あ、明久の腕が変な方向に捻れてるぞ!?!

「あ、明久君!?!」

「吉井!?!」

「おい、大丈夫か!?!」

「く……もう何ヶ月も受けてなかったから、かなりくるく……」

「そんな問題じゃないよ! 早く病院にいかない、と……」

「よつと(ゴキッ! パキン!)」

明久がその場で捻れた腕を元の方向にひねり、外れた関節を嵌めた。

「……なんか、慣れてるね、明久君」

「まあ、日常茶飯事だったからね」

「そ、そうなんだ……」

今見た光景が日常茶飯事って……普段からどっただけ関節外されて骨折られたんだよ。

「……って、そんなことより、何なの急に！ 明久君に酷いこととして！」

「そんなのアキが悪いんじゃない！」

「何が!? 急に出てきて人の関節外して、下手をすれば明久君が大変なことになってたんだよ！ 大体明久君があなたたちに何をしたの！」

「アキがウチらに黙ってどこかに行ったからよ！」

「それは全くの偶然で明久君の意思じゃないよ！ それに、例え明久君が自分の意思で行ったと言っても、それをクラスメート以外の関係もないあなたにどうのこうの言う権利があるの!？」

「ふ、2人共、落ち着いて……」

「明久君、まだ事情を聞いてません！ 一体何処で何をしてたんですか!？」

「その説明は後にして！ こっちもこっちでこれから大事な話もあるから！」

「駄目よアキちゃ——吉井君！ 君は女子ばかりの環境じゃなく、坂本君の下に行くべきよ！」

どこからか、いきなり第三者が現れて余計ごちゃごちゃはじめた。

「玉野さんもどうしてこうカオスな時に現れて余計な事しか言わないの!?! 君実は狙ってるよね!?! 一体何の恨みがあって!?!」

「……行こう、明久君」

「へ? ちょ、ななかちゃん?」

しばしの沈黙の後、白河が明久の手を取って歩き出した。

「ちよつと！ 待ちなさい！」

「まだ話は終わってません！」

「いい加減にしてください！」

2人がなおも食い下がろうとしたところで白河が大声を上げた。

「人の話も聞かずにいきなり関節外したり暴力振るつたり……これ以上明久君に酷いことするなら近づかないでください！」

「ちよ、なかなかちゃん!？」

言うだけ言つて明久を引つ張つて白河は去っていく。珍しい光景だった。

「な、何なのよあの女……」

「明久君……」

「はく……あの白河があそこまで怒鳴るとは思わなかったぜ」

「俺も、ちよつと意外だったな……」

普段が普段だけにあそこまで怒る白河は新鮮に感じた。

「まあ、白河の言うことももつともだと思うぞ。あんたらも少しは明久の事を信用したらどうかかな？」

「何よ……あんたらにアキの何がわかるって言うのよ！」

「なら、逆に聞くけど……君達は明久の何を見てた？ あいつは馬鹿だけど、それなりに優しい奴だと思うぞ？ それに俺達の学園じゃあ、風紀関連の仕事してるし、仕事だつてそれなりにできるぞ」

あくまでこの人達とタメと言った感じで話しかける。向こうでは明久とはクラスメートだが、こつちでは年上になつてるからな。

「嘘です！ 明久君が何も問題を起こさない筈がありません！」

……これは、いい加減怒つてもいいところじゃないだろうか？

「こつちで明久がどれだけ問題を起こしてたのかは知らないけど、少なくともあつちじゃかなり人望はあるぞ。元々根がいい奴だしな」

悪名が広がった原因は主に坂本の厚顔無恥な部分が大きいと俺は見た。

「大体、君達もなんで明久に突つかかるんだよ？ そりゃあ、明久の言葉の配慮のなさもあるとは思うが、いくらなんでも暴力が過ぎると思うぞ」

昨日のことといい、今回といい、あんなものを常日頃から受けていたとしたら、よく今まで友人という扱いのまま生き残れたな明久は。

「だ、だってあれは……」

「あれは？」

「明久君がエツチなことばかり考えるからです！」

……もう駄目だ。

「だからウチらがお仕置きを——」

「ふざけんなよ！」

美波さんが何か言いかけてたが、俺はそれを遮って怒鳴った。

「明久はあんたらの何なんだ？ 所有物か？ ふざけるのも大概にしるよ！ あんたらにアイツをどうこう言う権利なんかねえだろ！」

「な、何よ！ 急に怒鳴って！」

「自覚もなしか……ああ、もういい。悪いが、明久をこれ以上あんた達と一緒にさせるつもりはない。あいつの周囲の状況がこれ以上悪化するようならこっちにも考えはある」

俺はそう言い残してその場を去っていった。

途中後ろからあの2人の叫びを聞いた気はするが、それらを見殺して明久を追った。

第四十話

「さて、これより第2回異世界脱出会議を始めようではないか！」

場所は文月学園の屋上。会議をするにはここがうってつけだと言う坂本のお墨付きで俺達はここで会議することになった。

しかし、ここにその坂本はいない。杏に聞いたところ、今まで一緒にいられなかった時間の埋め合わせだとかで霧島さんにスタンガンで気絶させられて何処かに連れてかれたという話だった。

まあ、色々ツツコミ所は多いが、こつちの世界で一々ツツコンでばかりいたら気力体力が保たない。

「で、この世界の脱出とは言うが杉並、今回は別に異常やしいものが見当たらないんだぞ。何かの条件を揃えろとか言われてどうにかなるものか？」

「ふむ。それについてはまだよくわかってはいないが、可能性としては2つ程の予想があるな。まずひとつ目に、あの扉がある程度時間を置いて開くかどうかだ」

「まあ、前は条件が揃うまで消えていたのに、今回は残ったままだしね」

「……ちなみに今朝扉が残ってるのかは確認済みだ」

土屋がデジカメを操作して俺達に見せつける。

表示されてる時間を見ると、どうやらまだ残ったままのようだ。

「ふたつ目に、また条件を揃えなければならぬかどうかだ。今回は世界の異常と言えるようなものがないのだからその条件を探すのは前回よりも遥かに厳しいだろう」

「確かに。あのFFF団とやらがいること以外は平和そのものだしだろう」

「あれが平和の一部とは到底思えないがな」

あのFFF団といい、明久の姉さんといい、あの2人といい、色々問題の多すぎる世界だった。

「その条件というのがこの世界の住人である吉井達を置いていく……」

となれば、些か寂しいものだがな。折角の最高級ミステリーの結晶を目の前にしてそれを置いて帰りたくはないしな」

「そうだよ！ それは絶対に嫌！」

杉並の言葉に白河が声を上げて同意した。まあ、昨日今日であんなものを目の前にしちやあ、明久をこの世界に置いていきたくはないだろうな。

外でも暴力による地獄。家でも姉によるDV。そしてその後は更に力オスな母親だっている。

あんな奴らが説得でどうこうできるとはとても思えなかった。

「確かに、それはちよつと嫌かな」

「それに……あんな問題だらけの環境に放っておいたら、今度こそ死んじゃうかもしれませんし」

「ていうか、あの環境で今まで生きていたことさえ不思議だわ」

「あはは、本当にね」

「明久、お前の事だぞ」

その地獄の渦によって一番被害を受けてるのは多分明久だろう。

「というか、お前もなんとかする事を考えた方がいいと思うぞ。あんなされるがままに暴力を受けてばっかで、少しは主張してもバチは当たらないと思うが」

ていうかむしろバチが当たるべきなのは明久に暴力を振るってる人達だと思う。

「ん〜……姉さんのはともかく、美波や姫路さんに関しては、僕にも悪いところがあると思うから。結構2人を怒らせてばっかで……まあ、女の子の前で他の女の子に目移りしたりなんんだりしたらそれはね……」

「……お前、本気で言ってるのか？」

「え？ 違うの？」

明久は心底不思議そうに首を傾げた。

いや、いくら友達だからって、ただ他の女子と一緒にいるだけであんな理不尽な暴力受けて、それを毎回受けて自分に非があると思ってるのか。

……明久も明久でこの世界に毒されてる気がする。

「……とりあえず、前と同じように手掛かりがないか調べてみよう。何グループかに分けてその中にひとりずつ文月学園の人を入れよう」「そうだね。こっちの事知ってるのって、この中じゃ僕と秀吉、ムッツリーニと……霧島さんに連れてかれた雄二くらいだし」

「では、諸君。次こそ我らが故郷へ戻れるよう頑張ろうではないか。では行くぞ同志土屋。この世界のミステリーを是非とも」

「……任せろ（グッ！）」

土屋がガッツポーズを決め、杉並と共に猛スピードでその場を去っていった。

ていうか、チームはチームだが、もう少し人数の割り当てを考えるとほしかった。

「さて、僕はどのチームに入ろうか……」

「じゃあ吉井。あんたあたしらの方入りなよ。ここら辺なら色々知ってるそうだし、いざとなれば体張って色々してくれそうだから」

「え？ 体を張って……一体何に対して……」

「ほら、行くわよ。今は一分一秒も惜しいところなんだから」

「いや、ちよ……できればお手柔らかに」

明久は高坂さんに引きずられ、そっちに杏や茜、白河にムラサキが行った。

「……明久、強く生きろよ」

渉が明久に向かって合掌をしていた。以前は自分が同じ目にあつたがために明久に同情したようだ。

「……さて、俺達も行くか。……と、その前に木下、聞いていいか？」

「ぬ？ 何じゃ？」

「いや、あの2人の事なんだけどき……」

「あの2人……姫路と島田のことか？」

「そう。あの2人……明久のこと何だと思ってるんだ？」

「ぬ？ あの2人は明久に惚れておるのじゃが……わからんかの？」

それを聞いて俺を含め、その場にいる全員が信じられないといった表情をした。

「惚れ……好きってことか？」

「うむ。明久は全く気づかんがの」

「いや、たかだか他の女子といるだけで関節外したり殴殺しかけたり、正直お前が言わなきゃ……いや、例え言ったところで端から見れば明久を憎んでるようにしか見えないぞ」

「……すまぬ。言われてみれば儂も否定できん」

あの2人の日頃の行いを思い出したのか、苦い顔で謝った。

「それに明久もなんだが……あいつ、あんな酷い仕打ちを受けても自分に非があるって思い込んでるのは？」

「むう……まあ、島田に関しては普段からぼろりと痛烈な本音を出してる結果なのじゃが、姫路に関しては……うむ、よくよく思い出してみれば姫路も似たりよったりじゃの」

多少女子にとってダメージな言葉を発したことはあるみたいだ。

「だが、それを入れてもあれは明らかに暴力が過ぎるだろ。教師は何も言わないのか？」

「むう……教師に言っても恐らく無駄じゃろう。元よりFクラスでは日常茶飯事じゃし、島田はともかく、姫路は優等生として通っておるからの。対して明久は観察処分者じゃ。誰も明久の意見を聞こうとはせんじやろ」

「な……」

絶句してしまった。もう悪循環しかないじゃねえか。

「あの、教育機関としてその待遇はおかしくない？ 成績が優秀なだけで優遇を受けて、その……下位の人ばかり……というか、明久君ばかり痛い目を見て」

「うむ……それがこの学園のシステムじゃからの。それに何故かこの学園では女子の方が力関係が勝っておっての」

木下が遠くを見るような目をして呟いた。

「女尊男卑の学校って……よく教育委員会で問題になりませんでしたね」

由夢がため息混じりに呟く。もう狙ってるかのように明久にとって悪い地獄ばかりじゃねえか。

しかも、好きだとかなんだとか言いながらあの過剰暴力。

「えつと……とりあえず、その話は後で考えるところとして、あの2人が吉井を好きになった理由は？」

渉が話題を変えて木下に尋ねた。それは俺も聞きたいと思っていた。

好きになったからには何か理由はあるはずだ。

「むう……大部分がただの予想でしかないものであれば話すか……」

「頼む。ついでにこれまでの明久のこの学園での生活も含めて説明頼む」

「うむ」

それから木下が入学してから2年の秋までの明久の生活を説明した。

「……と、俺がわかるのはこれくらいかの」

「……なるほど。美波さんの方は帰国して間もない頃に明久が国境問題関係なく接したのがきっかけ。更に清涼祭で誘拐まがいの事件で助けってもらったり告白に近い言葉をくれたりして明久に好意を寄せてる。それで、姫路さんが小学生の頃から明久を好きだった。……ますますあの暴力に訴えるのがわからん」

これだけ明久に優しくされて返すのがほとんど暴力つて……報われないにも程があるだろう。

まあ、時々いい雰囲気だったところもあったにはあったが……大部分が暴力の連続で本当に明久を好きなのかますますわからん。

「理由はわかったけど……それなのにまるで自分の物のようにしてる限り、いつまでたつても同じことの繰り返しなんじゃ？」

小恋が恐る恐る木下に言った。

「むう……姫路ならまだ交渉できるかもしれないが、島田共々となるとまず無理じゃのう。自分の非をわかっておらんようじゃしの」

「そう……」

「はあく……どうにか少しでも明久の望む方向に傾いてくれないかねえ？ あの2人に明久に手を出さなつて約束とか……」

「しても守る気ゼロだと思うぜ。あの調子じゃ」

ななかと一緒にいるというだけで骨を折ってくるような人だ。約束ごときで止まるとは思えない。

「でも、このままじゃ明久君の毎日が地獄になっちゃうよ……」

「いつそのこと、転校でもできればいいんだけど……」

「あのお姉さんがとても許すとは思えませんね」

確かに。転校しようにもまず家族に相談をしなければならぬ。

あの玲さんを説得するのもレベル1で最終ボスを倒そうとするくらいに難しいのに、更に後には玲さん以上に酷いと思われる母親もいるんだ。

そんな人達に転校を促すなんて不可能に等しい。

「八方塞がりだ……。こりや是が非関係なく無理やりにも明久を連れていった方がいいんじゃないか？」

「いや、方法はなくもないと思うが？」

「……久保？」

明久の周囲の環境に改めて呆れているところに久保が扉を開けて出てきた。

「いや、吉井君達がここにいると聞いてね。今は吉井君はいないのかい？」

「ああ、今俺達が元の世界に戻るための手掛かりをな」

「ああ、そうだったね。しかし、何も手掛かりのない状態ではかなり難しいだろう。と、それより吉井君が暴力を受けてると言ったね？」

久保がメガネを指先で持ち上げ、鋭い目つきで木下に尋ねた。

「う、うむ……。あまりにもそれが日常的になっておって本人も諦めるとのか、誰にも言わんかったが……」

「そうか……。何故……。何故それを僕に相談してくれなかったのか？」

君は僕が吉井君に対する愛情を知らないのかい？」

久保の言葉に一瞬寒気のようなものを覚えた瞬間だった。

「い、いや……。お主が明久のことを考えておるのは知ってるぞい。その、決して仲間はずれにしようということではないのじゃ」

「うむ……。まあ、それについてはまた今度聞き出そう」

「う、うむ……。そういえば、久保はさっき何を言いかけておったのじゃ

？ 明久の窮地を救う方法があったかの？」

「む、そうだったな。いや、ここに来る前に校舎の壁にこの紙が張り出されていたのでね。全校生徒に配布されていたものらしいので、僕も先日一枚もらったんだ」

そう言つて久保は一枚の紙を俺達に見せた。

そこに書かれていたのは――

『『新・試召戦争 ドキドキ・ワクワクすごろく大会』？』

僕は高坂さん達と手掛かりを探しにまず校舎を回っていると廊下の壁にあつた張り紙が目がいった。

そこに書かれていたのは新しいルールが追加された試召戦争の大会が後日開かれるというものだった。

「試召戦争って、確か召喚獣を使って戦うって言つてたアレよね？」

「はい。でも、新しいルールかあ……」

目先の事も大事だけど、なんとなく気になつちやう大会だった。

あのババアが主催者なのだから、きっとまた何か自慢するためのものなんだろうなあ。

「えつと……召喚獣と召喚者をひとつの駒として扱い、それぞれに架空の通貨を与える」

「なんだか人生ゲームみたいな感じだねえ」

杏ちゃんがルールを読み上げて茜ちゃんが呟く。

確かに今の一言だけだとまるで人生ゲームみたいだ。だが、あのババアのことだからそれだけじゃないはずだ。

「その架空の通貨で各備品を集めていき、また……その備品は召喚獣を戦わせて奪うこともできます」

次にムラサキさんの説明。その辺りは前の試召戦争と変わらないみたいだね。

「ちなみに、今回の試召戦争はクラス対抗ではなく、4人組の個人戦になります」

「個人戦かぁ……なら、クラスは関係なしってことだね」

「更に、トップを3回連続で取れば賞品がもらえるらしいですわ」

「賞品?」

ムラサキさんの説明の中にひとつだけ気になるワードが出てきて僕は張り紙の文を凝視する。

「えっと……賞品はトップを取った者の望むもの。つまり、何でも好きなものをもらえるってこと?」

「だとしたら、随分太っ腹な学園長だね。生徒の望むもの……だなんて」

「これで自分の世界へ帰れるように……なんてできたら最高だったんだけどね」

「でも、やらない手はないよね。もしかしたら、試召戦争をやってるうちに手掛かりが転がりこんでくるかもしれないしね。元々オカルトな要素も入っているだけに、何が起こるかわからないし、もしかしたら試召戦争がああ扉を開けるきっかけになるかもしれないしね」

「ま、聞いたところ科学の範疇じゃおさまらないものと聞かれれば今のところこの学園の試験召喚システムくらいだし……いいんじゃないかないかしら?」

杏ちゃんも僕の意見に賛成してくれてるみたいだし、そうならばこの大会に出てみる価値はある。

それに、個人的に賞品というのも気になるし。

「そうと決まれば、早速聞いてみるとするか」

「聞くって……誰に何を?」

「もちろん、学園長にこの試召戦争のことをさ!」

僕はみんなを案内して学園長室前までやってきた。さて早速、

「学園長!」

聞き込み開始といきますか。

「って、明久君……ノックは——」

「やれやれ、このバカが。入る時はノックをして返事を待てと言っただろ?」

学園長室に入れば以前と変わらない妖怪の姿をした老婆が机と向

かい合っていた。

「……って、あんたかい。随分見なかったが、突然どうしたんだね？
それに、あんただけじゃないね」

学園長が後ろにいるななちやん達を見る。

「あはは……」

「こ、こんにちは……」

「……で？ 雁首そろえてどうしたんだい？ まあ、ここに来る理由となれば、後日開かれる試召戦争の賞品のことだろうけどね」

「その通りです！ で、早速なんですけど……もらえるのは、本当にその人が望むものならなんでもってことですか？」

「学生に分相応なものならね」

「聞きますけど、それって物以外じゃ駄目ですか？ 例えば、観察処分者を取り消すだとか……」

「それは無理な話だね。アレはあんたのような大バカのための処分なんだ。おいそれと取り消すなんてできるわけないよ」

「まあ、今のは例えっただけですけど……だったら、あるものを調べてもらいたいですけど……それじゃあ駄目ですか？」

僕が言うと、学園長は意外なものを見る目で僕を見つめた。

「へえ……てつきりあんたは観察処分者独特のフィードバックをなんとかするかと思ってたが……どういう風の吹き回しだい？ 大体、何を調べろっというのさ？」

「それはまたいずれっことで……どうなんですか？」

「それくらいなら、考えてやらんでもないが……この大会はバカが勝ち抜くのは無理さね」

確かに。クラス規模の試召戦争とは違って個人戦ともなれば点数の高い人の方が圧倒的に有利だ。

「やってられない事はない。どんだけバカだっつて、勝機はある筈！」
自分より点数の高い人を相手なんて今までだっつて何度も経験してるんだ。今更上位クラスの生徒と当たっつたっつて怖気づくなんてことはない。

「ふくん……。まあ、あんたがそういうなら勝手にやりな。参加は自

由だしね」

いつものように興味もない風に言つて学園長は机に向き直つた。

「それじゃあ、聞くことは聞けたし、明日に備えて僕は勉強でも——」

「見つけたわよアキ！」

「明久君！」

「……………」

いざ明日に備えて勉強しようとした矢先にまたしても地獄が向こうから駆けつけてきた。神様、あんた僕のこと嫌いだろ。

「アキ、いい加減正直に吐きなさい！」

「明久君！」

いまだに僕と一方的な話あいをしようと鬼も閻魔も真っ青になつて逃げるだろう形相で僕に近づいてくる姫路さんと美波。

やつぱり僕は相当2人にも神様にも嫌われてるみたいだ。

姫路さんと美波が僕に襲いかかろうとしたが、僕と2人の間にななかちゃんが割つて入ってきた。

「また……そこをどきなさいよ。ウチはアキにお仕置きするのよ！」

「どいてください、明久君にはお仕置が必要なんです！」

「お仕置きおしおきつて、あなた達がやってるのはただのイジメだよ！ 明久君はあなた達のものじゃないんだよ！」

「何よ！ あんたには関係ないでしょ！」

「あるなしとかそんな問題じゃないでしょ！」

「わあ〜！ 2人共落ち着いて！」

「やめなバカ共っ！」

また3人が喧嘩になると意外なことに学園長が阻止に入った。

「あんたら、ここを何だと思ってるんだい。あたしゃ、忙しいんだよ。喧嘩なら他所でやりな」

うん、決して暴力を止めようとしているわけではなかった。

「学園長！ それよりも先に2人の暴力に関して言うことはないんですか！」

ななかちゃんが学園長に向かって2人の行動について大声で問うた。

「知らんさね。こんな些事にいちいち付き合っつてやる義理はこつちにはないさね。それよりあたしも忙しいんだよ。さつきと出ていきな」
本当、なんでこんな妖怪が教育界で生きていけるのだろうか。

「……じゃあ、私もその試召戦争に参加します！ 自由なら私が参加してもいいですよね！」

ななかちやんがとんでもないことを言いだした。

「ちよ、ななかちやん!? 君はそもそもこの学園の生徒じゃないし、第一中学3年……」

「ほう、それはいい考えさね。うん、構わんさ」

「いいの!?!」

何故か許可出してるよ、このババア長は！

「どうせ年齢が違ったってテストの範囲は学年相応に組み立てるんだ。中学生だろうが、小学生だろうが、大したハンデはないさね」

確かに、学校全体でやる以上学年の違う人達だって大勢いるはずだ。ならばそこにななかちやんを入れてもある意味問題は、ないのか？

「それに、学園外の生徒が召喚獣を使うというのもいいし、そのジャリン娘の外見ならいい宣伝になるからちようどいいさね」

結局本音はそれか。

「じゃあ、私がトップを取れば、明久君の周囲の問題をどうにかしてくれますよね?」

「考えてもいいが、それにはトップを取らなきゃいけないよ」

「構いません」

「ちよつと待ちなさいよ！ いきなり勝手なこと決めて、何なのよ!」
ななかちやんの参加も決まったかと思うと、再び美波が怒鳴りかけてきた。

「勝手なのはそつちだよ。明久君の言葉も聞かないで勝手に変な結論を出して明久君に暴力を振るって。明久君は優しいからなんにも言っていないみたいだけど、私……あなた達のことには許せない」

「っ！ 偉そうにしないでよ!」

ななかちやんの言葉に美波の堪忍袋の尾が切れたのか、ななかちや

んに向けて手を振り上げた。

「パァ——ン！」

学園長室になんとも見事だとしか言い様のない音が響いた。

「……つう」

「あ、明久君？」

「なによアキ！ 邪魔しないでよ！」

ななかちゃんを庇って僕は美波のビンタを受けた。関節技ほどじゃないにしろ、やっぱり攻撃力は高いなあ。

「美波、とりあえず落ち着きなよ。それと、みんなに対して暴力はやめてくれない？ 彼女達だって、僕の友達だから、そういうの嫌なんだよね」

「何よ……いきなり出てきて、アキと馴れ馴れしくして、アキはその人達に騙されてるだけでしょ！」

「……あのね、美波」

今のは流石に聞き捨てならない。

「そうです！ 明久君の周りに女の子がいっぱいだなんて、何かの陰謀でしょうかありません！」

「……姫路さん」

「そうよ！ アキをこれ以上変な奴らの傍には置けないわよ！」

「……してよ」

「もうこれ以上明久君を変な——」

「2人共、いい加減にしてよ！」

僕が怒鳴ったのに恐怖したのか、意外に思ったのか、どっちかはわからないけど、2人も後ろにいるみんなも、あの学園長も驚いて無言状態になっていた。

「僕のごとは別にいいよ。そりゃあ、みんなに何も言わずに消えた僕だって悪いと思ってるよ。でも、彼女達だって僕の大切な友達なんだよ！ まだ大して話もしてないのに勝手な想像でそんなこと言わないでよー！」

言っただけからかなり息があがった。女の子に向かって怒鳴るなんて慣れないことをしたからだろうか。

とにかく僕はこれ以上この場にいたくなかった。

「…………ごめん。失礼しました、学園長。みんなも行こう。義之達にも明日のこと相談しなきゃだし」

「あ、そ、そうね…………行きましょ」

僕の言葉に一瞬遅れて高坂さんが頷き、僕達は学園長室を後にした。

途中で後ろから恨みがましい台詞が聞こえた気がするけど、正直今はどうでもいいとすら思っていた。こんな感情を女子に吐き出すなんて、初めてだよ。

第四十一話

学園長室を出ていき、僕達は義之達と合流に向かっていた。

旧校舎まで行くと秀吉とムツツリーニが先頭のチームと合流した。もちろん、義之達もいる。

「よう、明久。そっちは何か……って、どうしたんだその頬は？」

「ああ、ちよつとね……」

頬の腫れた僕を見て秀吉達が心配そうに見た。

「もしか、島田達かの？」

「うん……ちよつとトラブルだね。まあ、そんなことよりちよつと学園長と話しててね」

心配してくれるのはいいんだけど、今は正直あの2人のことは聞きたくないし、口にしたくなかった。

「なあ、杏。何があつたんだ？ まあ、十中八九あの2人だろうけど……」

「(ええ。正確には白川さんが叩かれそうになったのを吉井が庇ったわけだけど。あの2人、私達の言葉はおろか、吉井の言葉にも全く耳を傾けなかつたわ)」

「(まつたく……本当にあの2人は明久の事が好きなのかよ?)」

「(あら……気づいてたの?)」

「(ついさつき木下に聞いた。今でも信じられないがな)」

「(まあ、普通はそう思うわね。どっちにしろ、私はあの2人を応援する気はないけど)」

義之と杏ちゃんが何か話しているみたいだけど、こっちはこっちで言っておかなくちゃ。

「で、話というのは、これのことかの？」

秀吉が廊下に貼ってあったあの貼り紙を見せた。

「うん。僕もそれに出ようと思ってるんだ」

「目的は3連続トップを取った際の賞品かの？」

「うん。これに勝って学園長にどうにか扉のことで協力してもらえな

いかなって」

「うゝむ……あの扉のことが学園長にわかるかの？」

「正直わからないけど、まあオカルト要素満載のアレなら学園長も何も聞かず振り払うことはないと思うし、やってみる価値はあると思う」

「ふむ。まあ、お主が言うのであればいいのじゃが……ならば、今日は家に戻って勉強をすべきではないかの？」

「うん。そうするつもり」

「儂も参加したいところじゃが、得点の低い儂ではあまり見込みはなさそうじゃから今回は観戦といくかの」

「そういえば、ななかちゃん……試験どうするんだろ？」

「む？ 何故白河の名が出るのじゃ？」

「ああ、なんかなかなかちゃんも出るみたいで。その場の流れというか、なんていうか……」

「む……白河も出るかの。……まあ、十中八九明久のためじゃろうて」

なんか、最後に何か呟いた気がするけどよく聞こえなかった。

「さて、3連続トップを目指して僕も勉強しよう」

「ほう……俺を差し置いてトップを取れると思ってるのか？」

「雄二……なんて格好してんの？」

「好きでこんな格好してんじゃねえ！」

突然出てきた雄二は上半身裸で下はトランクス一丁、そして何故か途中で切れてる鎖が首輪から垂れ下がっていた。

「きゃ——っ！ ちよ、坂本君！ なんて格好してるの!?!」

「わ、わわわわ！」

この手の状況に耐性のない音姫さんと小恋ちゃんがオロオロとしていた。

「で？ どうしてそんな格好なんて？」

「翔子の仕業だ！ もうちよつとで俺は本気で破滅するところだったぞ！ 二重の意味で！」

どうやら霧島さんがまた新たな調教方法を見つけたようだ。

ほとんど素っ裸に鎖で繋いでいるのを見ると、ペットにして遊ぶつ

もりなのだろうか。

「と・に・か・く！ 俺は、俺はこの大会でなんとしても自由を勝ち取らなくちゃいけないんだ！ 邪魔するなら容赦はしないぜ」

「いや、こっちもこっちで勝たなくちゃいけないからね」

みんなの帰郷がかかっているんだから。

それに、勝つても負けてもいずれば同じ運命辿っちゃうと思うんだけど。

それならこちらとしても最初から遠慮する必要なんてない。

「でも……試召戦争ね。……中々面白そうだし、私も出てみようかしら？」

「それはやめて（やめろ）」

杏ちゃんが相手になれば僕や雄二なんかでは全く相手になるとは思えない。

霧島さんと同等かそれ以上の記憶力を有している彼女なら中学どころか、高校レベルの問題だってスラスラ解けそうで怖い。

そんな娘の召喚獣を僕が相手なんてしたらフィードバックで腕の1本や2本じゃ済まなくなる。

「そう……ひどいわね。白河さんの出場は許可しておいて……そんなら2人の世界を作りたいのならまあ、今は出しやばることはしないわ」

「ちよつと待って！ 僕はそういうつもりで言ったんじゃないよ！ ななかちゃんの出場だって予想外だったし！」

「ま、そういうことにしといてあげるわ」

「しといてあげるわけじゃなくて！ 本当に違うからあ！」

「ま、助言くらいはしといてあげるわ。客観的に見た方がわかりやすいゲームもあるだろうし」

「まあ、それくらいなら是非お願いしたいけど……あまり助言する隙はないと思うよ」

「？ 明久君、それってどういうこと？」

僕の言葉に音姫さんが首を傾げて尋ねてくる。

「だって、あの妖怪ババアが考えたゲームだもん。絶対に口クなゲー

ムじゃないと思う」

「妖怪ババアって……仮にも学園の長になんて暴言を……」

「芳乃学園長には普通に接していただきましたのに……」

高坂さん、ムラサキさん。あのババアとさくらさんを比べるのは失礼というものだ。

さくらさんを天使とするならあのババアは断然悪魔だ。いや、魔神と言ってもいいかもしれない。とにかく光と闇、善と悪、白と黒、月とすっぽんと正反対の2人だ。

「まあ、それはともかく、ババアが開発したものにロクなものはないんだよ。本当ならななちゃんも参加させたくはなかったけど……」

「まあ、それに関しては同感だな。ババアの新開発したものでロクなものを見た覚えがねえ」

あの地獄の苦しみは当事者にしかわからないだろう。

「お前らがそれほどもでに罵倒するようになった事件って、どんななんだ？」

「まあ、それは明日になれば見れるかもね。ともかく、決まったのならとつと帰って勉強でもしてれば？ 吉井なんて中学レベルもキツイじゃない」

「うぐ……もちろん、頑張ります」

帰ったらとにかく得意の歴史系を中心にせめて他の科目も中学レベルはスラスラ解けるようにしないと。

僕はみんなに一言挨拶して帰路を駆け、家へと戻って早速勉強に取り掛かった。

……結局、大半が姉さんに世話と称した邪魔が入ったのは皆の想像に難くないだろう。

「さあ、明久君。覚悟してください！」

「……吉井。手加減はしない」

大会当日、早速一回戦が幕を開き、ランダムで選ばれた結果、対戦者の中に姫路さんと霧島さんがいた。

「く……まさか序盤からこの2人が来るなんて。マトモに戦ったらマズイ」

「でも、私もいるよ」

ちなみに僕と上記2人を除いて最後の対戦者はななかちゃんだった。

「あはは……ルール上、自分以外みんな敵なんだけどね」

「でも、明久君がいたから少しだけ気が楽になったかな。困った時は助けてくれるよね？」

「あはは、もちろん。ルール関係なく、困ったら言ってよ。試召戦争に関しては結構やってたからそれなりにアドバイスはできるかもしれないし」

『ほら、クソジャリ共。くだらないお喋りはそこまでさね』

僕とななかちゃんの会話に割って入ってきたのはババア長の放送だ。

更に屋上から巨大なディスプレイが見え、その画面にはババア長のドアップが見えた。

うん、こうして見ると本当に妖怪そのものだ。

『さて、始める前に簡単にルールの復習だね。まず全員には小さな端末は行き渡ったね？』

ババア長に言われ、僕はポケットからその端末を取り出した。

受付で参加登録をする際、教師達がこれに参加者に一機ずつ配っていた。どうもこの大会に欠かせない物らしい。

『その端末で自分の現在の所持金、持ち点数、所持設備、そして自他の現在地を知ることができるさね』

試しに端末を操作すると確かに金貨のようなマークの欄には500ソルという数字があり、菱形のマークがある欄に僕の現在のもち点数が表示されていた。

その下に何か星マークがあるけど、それが多分所持設備の欄だろう。そしてここ、中庭ステージの僕の位置もみんなの位置もしっかりチェックされている。

『そして、駒を進める時にはその端末画面にルーレットが表示されるからそれをタッチしてルーレットを回し、再びタッチして止め、出た目の数だけ進める。後は止まったマスに表示された指示に従えばいいだけさ。更にこのゲームには時間制限を設けてある。マスによっちゃあ厄介な指示もあるからいちいちゴールまで待つつもりはないから大体35ターンでキリにするさね。さて、簡単なルールは説明した。順番もルーレットで決められるから、しっかりやんな、クソガキ共』

教師らしからぬ台詞を置いてババア長の映ったディスプレイの電源が切られ、学校中に開始合図のアラームが鳴り響いた。

それから端末からも何かのアラームが響き、見ると4つに分けられたマスに僕達の名前が書いてあり、それが回っていた。

なるほど。ババア長の言う通り、これで順番を決めるってわけか。ちなみに結果は僕がトップバッターとなった。

「よしー、トップを目指して、頑張るぞー!」

準備は整った。ここから大会の始まりだ。

「さあ、ルーレットスタート!」

僕は端末を操作してルーレットを回した。止まった目は……5。まずまずのスタートだ。

方向は……お、いきなり2択に分かれてる。別にどっちに行っても大差はなさそうだから……うん、左から行こう。

僕は左へ進み、表示されているマスを5つ進んだ。

止まったマスは、

『このマスでは机を買うことができます。あなたはこの設備を買いますか?』

マスに止まると、端末から音声の流れ、画面に『Yes』、『No』の文字が表示された。

どうやらここで設備を買うや否やを決めるらしい。うん……一

応安そうだし、ここで買っておこう。僕は『Yes』のボタンを押した。

『机を買いました。設備レベルがひとつ上がりました』

「設備レベル？」

画面を見ると星マークの欄の数字が0から1になった。

『ちなみに設備レベルというのはこのゲームの主な勝利条件さね。この数字が一番大きい奴がこのゲームの勝利者となるのさ。その設備はこうして買い取るなり、試召戦争で奪うなりして自分の設備レベルをあげるんだね。ただし、買い取るなら自分の所持金に常に気を遣いな。設備の画面の下にある星マークの数……それが多ければそれだけ価格も上がるからね』

僕が首を傾げていると、端末からババア長の音声の流れ、設備レベルとやらのことを簡単に説明した。

なるほど。設備を多く所持すればそれだけ勝利に近づくというわけだ。もちろん、所持金のこと常にも常に気にしなくちゃいけない。

もう本当に人生ゲームのようなすごろくだった。

まあいい。ゲームはまだ始まったばかりだ。一丁やるか！

俺達は明久と白河の対戦を見ていた。

いや、見てるだけなら結構面白そうなゲームだなと思う。

ちなみに現在、各々が設備を買い取って星マークを増やしていた。しかし、もう8ターン目。

そろそろ仮想の金の残高が切れる奴も出てくるかもしれない。

「よし……姫路さん！ この設備を賭けて勝負だ！」

「負けません！」

「む……どうやら明久の奴、姫路の設備を奪うために勝負する気じやな」

「……いよいよ本当の試召戦争」

「どうやらいよいよ生の試召戦争が始まるようだ。」

『ちなみに、このゲームで行われる試召戦争の教科はランダムで決められるさね。ちなみに、今回あんたらは数学さね』

「よし。では吉井と姫路！ 数学承認！」

始まる直前、ディスプレイで学園長が説明するとそれを受けて西村先生が合図を出すと先生の周囲に妙な空間が発現した。

「サモン召喚」

明久と姫路さんが同時に掛け声を発すると2人の目の前に数字と記号の並んだ幾何学模様が描かれ、その中心からおよそ3頭身の2人をキャラクター化させたようなものが出現した。

「あれが召喚獣って奴か……」

「なんか可愛い〜」

「なんだか、あの2人がゲームキャラクターになった感じですね」

「見た目はああじゃが、召喚獣は人間の何倍もパワーがあるからの。そして、今回は姫路とじゃ。明久の奴、かなりキツイ戦いになるじやろうな」

木下が説明しながら2人の召喚獣を指差すと、各召喚獣の頭上で数字が表示されていた。

『科目：数学 Fクラス 吉井明久 93 VS Fクラス 姫路瑞希 413』

「って、413!?!」

「えっと……あれは、この学園の人達から見ればどんな感じ？」

「一応、明久も勉強しておるから少しは上がつとるようじゃが……姫路も本来ならAクラス上位の学力を持つておるからの。Aクラスでも200取ればいい方じゃが、姫路のは驚異的じゃからの」

「……それに、姫路の恐ろしさはそれだけじゃない」

「え？ それだけじゃないって？」

「……吉井のは普通だけど、姫路さんの召喚獣は腕輪をしてるわ」
「うむ」

杏の言う通り、確かに姫路さんの方の召喚獣は妙な腕輪をしていました。

「あれは点数が400点を越えた者のみが有する特別な能力が込められた腕輪での。ある程度点数を消費することで特殊な能力を發揮できるのじゃ」

「……ちなみに俺も腕輪持ち。保健体育で」

「それで、姫路さんの腕輪の能力っていうのは？」

「それは見ればすぐわかるはずじゃ。……つと、もう始まったの」

「勝負です！」

姫路さんが先制して召喚獣を走らせた。同時に召喚獣が腕を前に突き出すと、そこから炎が放射された。

「こ、光波熱線!?!」

「なるほど。姫路さんの召喚獣の腕輪の能力は『熱線』というわけね」

「なんだか、本当にゲームが実体化したような感じ」

「見た目は可愛いんだけど」

「ていうか、アレを相手にして吉井、大丈夫か？」

「なんの！」

明久は放射された熱線を召喚獣をサイドステップで大きく躲させ、すぐに体勢を整えて前進させた。

そして、互いの剣による鏝迫り合いが始まった。いや、互いの剣とこののは違うか。何故か明久の召喚獣の装備は木刀だし。

それでも、点数に大差のある姫路さんと互角に渡り合っている。

「すげえな、明久。点数に大差があるっていうのに、互角だぞ」

「うむ。明久は学年でトップレベルであろう操作技術を持っておるからの。いくら点数に差があれど、簡単にあやつが倒れることはなからう」

「学年トップクラスか」

確かにゲームに強いからなのか、操作に関してはまさに自由自在と聞いた感じだ。

「せいー」

回避に専念しながら、小さな隙を狙って一発一発慎重に攻撃を当てていた。

『科目：数学 Fクラス 吉井明久 93 VS Fクラス 姫

路瑞希 306』

姫路さんの召喚獣は徐々に点数を失っていく。ヒット&アウェイのスタイルを通す明久に対して姫路さんは召喚獣を見ての通り、特攻型のパワー系だ。

姫路さんの召喚獣攻撃が一直線的で明久の召喚獣はそれを紙一重で躲しながら攻撃を当てていく。

明久の召喚獣の点数では大したパワーが出ないのか、姫路さんの消費する点数は少ないが、そんなものが気にならないくらい明久の召喚獣を操る技術はすごいと素人の目でもわかる。

『科目：数学 Fクラス 吉井明久 93 VS Fクラス 姫路瑞希 241』

姫路さんの召喚獣の点数が半分近くまで下がっていった。このままいけば明久が勝利するかもしれない。

「よっしゃあ！ そこよ、行けえ吉井！」

「うおおおおお！ 見てるこつちまで燃えてくるぜえ！」

体育会系のまゆきさんやこういつた祭り事に燃える涉が召喚獣同士の戦いを見てかなり興奮し、気づけば大声で明久を応援していた。

俺も声には出さないが、胸の内はかなり高揚しており、手には汗を握っていた。

よし、勝てる。そう思っていた時だった。

「そこまで！ 両者引き分け！」

「「え？」」

突然試召戦争を中断させられ、俺達は一齐に疑問の声を上げた。

何故だ。確か、試召戦争はどちらかの点数が0になるか、降参などをするか、敵前逃亡でもない限りは止まることはないと思いた。

「何ですか鉄人！ 折角ここから大逆転できるかと思っただのに！」

「西村先生と呼べと言ってるだろうが！ ちなみにこの試召戦争は時間制限があるんだ。ルール説明の欄にも載ってるだろうが」

「え？」

明久は自分の端末を操作して確認をした。

「………本当だ」

確認を終えて明久は膝を着いた。漫画に出るような不完全燃焼の様だな。

「わかったなら次に備えて作戦でも立てておくんだな」

「は〜い……」

西村先生に言われ、明久は持ち場に戻って次の自分の出番を待つ。

「しかし、これはちよつと危ないのう。今ので姫路の点数はかなり減っておる。霧島が姫路の設備を奪いに戦争を起せば確実に姫路は負けるの」

「……断然、霧島が有利になった」

「せめて、何か状況を一変させるような条件のあるマスに止まればわからないけどね」

杏の言う通り。ちよつとルールを確認してみると、各ステージの何処かには特殊なマスがあつて、そこに止まると時に自分に有利な展開になるものもあれば、相手にもチャンスが与えられるような条件もある。

そういつたマスに止まれば展開はわからなくなるだろうが。

♪♪♪♪??♪♪♪♪

急に何か妙なメロディーが流れた。ステージを見ると、どうやら白河が例のマスに引つかかったようだ。

一体どんな展開が起こるか、ちよつとわくわくした。

いざ辺りに視線を配ると、屋上のディスプレイの画面内に『学園長降臨』の文字が浮かんでいた。そして、すぐに画面が学園長に切り替わった。

『うむ。ようやくそのマスに来たかい』

「ババア！ 一体何しにきたんだ！」

突然の学園長の登場に明久の慇懃無礼な言葉。明久、よく学園の長に対してそんな言葉が言えるな。

俺だつたら多分無理だ。まあ、相手がさくらさんだからというものもあるが。

『さて。今回はあたしの出番が来たようだね。時々こうやってあたしが出てくる時もある、しばらくの間はこのステージをあたしが好き

に弄ることができるとのさ』

「好きに弄る？」

学園長の言葉に白河が首を傾げた。

『ま、要するに……誰かの設備をあたしの意思で売り飛ばしたり、あんなららの位置を別の場所に移すことやその他もろもろ、なんでもあたしの思い通りさね』

「なんだと!? 人の真剣勝負にそんな横暴が許されるのか!」

『生憎と、しばらくの間はあたしがルールさね。さあ、早速いくさね。まずは……吉井、あんたの召喚獣を特別仕様にするさね』

「ぐ……今度は何なんだ？」

『西村先生。試召戦争直後に悪いが、吉井の周囲に召喚フィールドを張っておくれ』

「わかりました。教科はどうしましょう？」

『そうさね……ま、適当に現代文にしとこうじゃないか』

「はい。では、現代文承認!」

西村先生の合図で再びステージ内の空気が変わった。

「吉井、さつきと召喚しろ。でなければ、即退場になるぞ」

「くうく……ババアのいう仕様って、嫌な予感しかないんだけどなあ。でも、みんなのためにも、ここは我慢だ。召喚^{サモン}!」

再び明久の足元に幾何学模様が走り、その中心から明久の召喚獣が出てきた。ただ、明久の召喚獣の姿が先程と違っていた。

「あれ? 明久の召喚獣の姿、変わってねえか？」

「うん。さつきとは違って明久君と同じ制服」

「まるで、明久さんをそのまま小さくしたような感じですね」

由夢の言う通り、まるで明久の子供バージョンといった感じだ。

「なんか、ちよつと可愛いかも」

「うんうん。なんか、小さい頃の明久君って感じだね」

「ま、今でも精神年齢はアレと変わらない気もするけど」

「杏、お前酷いな」

「これが仕様なのか。まあ、見ている分には和むんだがな。

「……のう、ムツツリーニ。あれはもしや……」

「……恐らく」

しかし、隣の2人は苦い顔をしていた。学園長の言っていた仕様は心当たりがあるのか。

『ふう……ババアの奴、今度はどんな厄介な仕様にしたんだろう?』

「全くだよ。一体今度は何を………あれ?」

「ん?」

何だ? 今どこからかやけに幼い感じの声が聞こえた気がするんだが。

「お姉ちゃん、今のは一体?」

「うん、子供の声……だったよね?」

「一体何処から?」

俺達は辺りを見回すが、子供の姿など見えないぞ。

「うくん……子供の姿なんて見えないなあ」

「ええ。葉月ちゃんでもなさそうですし……一体何処から?」

「……違うわ。明久の召喚獣よ」

「え?」

杏が明久の召喚獣を指差して言った。見ると、

『あのババアめ。また酷い目に会ったら今度こそしばき倒してやる』

明久の召喚獣の口が動くと同時にそれに合わせて言葉が出てきている。

「ていうか、あの召喚獣の言っていること……」

「なんか、明久君の生き写しというか、それ以上に……」

「すごい本音が……」

「ムツツリー二よ、やはりこれは……」

「……間違いない」

木下と土屋が互いを見合わると同時に、

「本音召喚獣、キチャったあああああ!?!」

明久が頭を抱えて絶叫していた。ていうか、本音召喚獣って何だ?

第四十二話

『だああああああ！ どうしよう!? このままだと僕が自分の部屋にこっさり秘蔵の——』

「ストップだ！ それ以上は僕の社会的生命が危機に晒される！」

『ああ……もしこれがみんなに知られたら本当に……』

「駄目だ！ 黙らせようとしても次から次へとマズイことを言ってしまいたいになる！」

『くそっ！ それもこれも全部ババアの所為だ！』

「よし、ギリギリなんとかなったね」

『後はみんなにバレないように秘蔵の本のことを考えないよう——』

「ノオ——ッ！ だからマズイのに！ ハッ！ そういえば前は……よしっ！」

『……………（ひしっ）』

ステージでは明久と召喚獣が妙なコントっぽいものを繰り広げ、明久が座禅を組んで静まると同時に召喚獣も同じ姿勢で停止した。

「で、木下。アレは何だ？」

「うむ……どうやら明久の召喚獣は設定を操作されてある程度の自我を持ってしまったようじゃ」

「自我を？」

「うゝむ……難しいことはわからんのじゃが、あの召喚獣は召喚者の無意識領域の一部を読み取ってそれを口にし、体面よりも欲求を優先させた行動をとる、じゃったかの？」

「えゝつと……？」

木下の言葉はよくわからなかった。えつと……要するに？

「つまり、召喚者の本音を口にしつつ、幼児程度の行動原理を持った自立型の召喚獣と言ったところかしら？」

「すまん、杏。もう少しわかりやすい言葉で頼む」

「要するに本音をそのまま口にする吉井自身の子供の姿みたいなのころね」

「ああ……」

そういえば、さつきから明久の秘密が召喚獣から漏れつつあった気がするな。

自室の秘蔵の本……音姉に見つからずにまだ残っているってところか。

明久、もう少しでそれらを集めた苦労が水の泡になるところだったな。幸い、音姉は気づいてないみたいだし。

「しかし、自分の本音を喋る召喚獣とは……観察してる側としては面白いが、自分がとなるとんでもなく恐ろしいな。自分の考えてることがそのまま召喚獣の口から出るんだもんな」

もし俺の本音をバンバン喋られてもしたらどんな状況になるか……考えただけでも恐ろしいぜ。

それと同時にみんなの本音も知ってみたくなってきた。特に杏や杉並の本音とか。

「でも、今は随分と静かになってるわね」

確かに。座禅に集中しているのか、明久自身も召喚獣もその姿勢のまま動かなくなっている。

「まあ、下手に何かを考えて慌てるよりもああやって心を落ち着けた方が召喚獣も余計な行動はしないからの」

「なるほど。なら、召喚獣が消えるまでああしてれば安心か」

「そうなればよいのじゃがの」

木下が不安げな表情をしてステージを見ていた。

明久が本音召喚獣を呼び出してからもすぐろくは進んでいく。

明久も自分の番になればルーレットを回す前に深呼吸をして出来る限り何も考えないよう落ち着いて行動していた。

ゲームに集中していたから召喚獣が口にすることもゲームに関することだけだった。心理戦においては不利になるだろうが、このゲームが心理戦によるものじゃないのが幸いした。

そしてそのまま4ターン程過ぎたところ、

「お、明久君と合流だ♪」

明久と白河が同じマスに来了。これは、明久にしてみればマズイ状

況かもしれない。

「明久君、ちよつといいかな？」

「な、何かな？ 僕に聞いても別に面白くなんて……」

『ちなみに僕の部屋の本棚の裏にこっそり壁を二重にして至高の一品を——』

「ノオオオオオオ！」

まだ何も聞いていないというのに明久が盛大に自爆していた。

ていうか、そんな隠し方もあったのか。今度明久にご教授願おうか。

「明久君……終わったらたっぷりお話聞かなきゃね」

隣では音姉が怖え顔で明久を睨んでいた。明久、せめて生き残ってくれ。そしてもし他に隠す方法があるなら是非ともご教授願いたい。

「さ、さあさあ！ ゲームはまだ半分もいつてないんだから、油断しないように！」

明久は誤魔化すようにすごろくの方へ話を持っていこうとしたが、白河は新しい玩具を見つけたような顔をしていた。

あれはまだ明久をからかおうとしている顔だな。まあ、相手が嘘をつけない状況なんてあまりないし、相手が明久だからな。

白河としてはおいしい状況なんだろうな。
「本当に本音を喋るんだ。なら、ちよつと確かめたいことがあるんだけど……」

白河がニヤついた顔で明久に質問する。

「明久君の好みって、どんな娘かな？」

直球だった。しかし、明久の好みのタイプもちよつと気になるな。

「タ、タイプって、別に——」

『タイプ？ 僕の好きなのはポニーテールに胸が大きい娘が——』

「ぶっ飛んでいくことボールの如く——っ！」

『みぎやああああああ!!』

「ぎいやああああああ!!」

明久が致命的な発現をする召喚獣を蹴り飛ばすと同時に何故か明久も同様に痛がった。

「何やってんだ、明久の奴？」

「なんで明久君まで痛がつてるんだろう？」

「しかも、明久さんが蹴飛ばした召喚獣と全く同じ場所」

「なんで明久まで痛がつているのか全員首を傾げていた。」

「ああ、明久は観察処分者じゃからの。観察処分者の召喚獣はこれまた特別仕様での。召喚獣が受けたダメージの何割かが召喚者にフィードバックするのじゃ」

「フィードバック？」

「召喚獣が腕を痛めれば明久も同様の痛みを受けるということじゃ」

「うわ、そんなもんを背負ってるのかよ、明久」

「そんなものを背負って今まで試召戦争を繰り返していたってことか。」

「ちよ、大丈夫？ 明久君」

「白河が痛がつている明久に駆け寄った。」

「だ、大丈夫……ちよつと召喚獣のフィードバックが……」

「フィードバック？」

「明久が白河に木下と同じような説明をした。それを聞いて白河は、」

「それなのに自分の召喚獣蹴飛ばしたの？」

「いや、そうしないと僕の社会的生命が……」

「あはは。ちよつと遊びすぎたかな」

「白河は反省して明久に肩を貸して立ち上がらせる。ただその際、かなり近くに寄ってるから、2人の体が接触してしまってる。」

「その証拠に、明久の顔がかなり赤くなっていた。」

『ななかちゃん、本当に胸大きいよね』

「そして、本音召喚獣は臆することもなく明久本人の本音を漏洩していた。」

「おらあ！ 次は焼却炉だ！」

「明久君！ いくらなんでもそんなことしたら明久君も焼け死んじやうよー！」

「離してななかちゃん！ この召喚獣は今すぐこの世から消し去るべきなんだ！」

「でも、ステージから離れたら明久君失格になっちゃうよ！」

「ここで僕の社会的生命が消えるくらいなら一勝くらい譲ってやる——っ！」

もう明久には勝利という概念が見えなくなっていた。

まあ、あんな目に会えば誰だって勝利を投げ出したくもなるだろう。下手をすれば一生のトラウマになること間違いなしだ。

とりあえず、しばらくこんなグダグダな状態ですごろくが進んだ。

『さて、そろそろ吉井の特別仕様も終わりにするかね。西村先生、召喚フィールドはもういいよ』

「はい。では、召喚フィールド解除！」

西村先生が叫ぶと同時に召喚フィールドも消えて明久の本音召喚獣も消えた。

「や、やっと消えてくれたよ……あのままだったら僕は取り返しのつかないことになってたよ」

十分取り返しがつかなくなってると思うが……まあ、明久の本音の本音まではギリギリ口に出さずに済んだな。

その本音の本音とは姫路さんが遠くから『好きな人は誰ですか』という質問に明久の本音召喚獣が危うくその人の名を口にする寸前で明久が再び召喚獣を蹴飛ばして事無きことを得た。

まあ、そんなことをせずとも明久の好きな人というのは大体絞れてくるんだがな。

それはそうと、あれから合計28ターン。このすごろくももう最終章へと入っていた。

ちなみに現在の順位は1位が翔子さん、2位が白河、3位が姫路さん、4位が明久だった。

やはり明久はあの本音召喚獣のこともあってほとんどゲームに集中できなかったので順位は芳しいものではなかった。

明久の召喚獣がいる間は試召戦争を仕掛ける奴はいなかったが、各

箇所に設置されたチェックポイントで回復試験というものを受けていて明久以外はある程度点数を補充していた。

白河の学力は不明だが、Aクラス上位の学力を持つてるというあの2人が万全の状態になっている今、明久や白河には荷が重いだろう。何かここらで一発逆転の瞬間でも出ないものかと淡い期待を抱かずにはいらなかった。

そしてゲームが進み、今度は白河のターンだった。出た目は5だった。白河は5マス進むとこれまた特殊な条件の出されるマスに入った。出た条件は、

『プレイヤー全員の点数を1番低いプレイヤーと同一にします』

条件が出されると、ディスプレイに明久達の点数が表示されていた。

『科目：総合 Fクラス 吉井明久 1267点 VS 来客

白河ななか 814点 VS Aクラス 霧島翔子 4562点

VS Fクラス 姫路瑞希 4367点』

これが今までの4人の点数。しかし、先のマスでみんなの点数は、

『科目：総合 Fクラス 吉井明久 814点 VS 来客 白

河ななか 814点 VS Aクラス 霧島翔子 814点 VS

Fクラス 姫路瑞希 814点』

4人共一番低かった白河と同じ点数に統一された主観だった。

「ナイスだよななちゃん！ 全員が同じ点数ならまだ勝機はある！

流石風見学園の天使だ！」

そして、明久の中で白河がアイドルから天使に昇格された瞬間でもあった。

「明久君、狙ってああいうこと言ってるのかな？」

「いや、音姫先輩よ。明久は素でとんでもないことをサラリと言う奴じやからの。いいことも悪いことももの」

そういうえば、普段でも時折ものすごいことをサラリという節があるからな、明久の奴。

「え!? えっと……どう、いたしまして。で、いいのかな？」

「もちろんだよ！ やっぱり持つべきは良き友達だよね！」

「……うん、そうだね」

「あれ？ どうしたの、なかなかちゃん？」

「ううん、なんでもないから……」

明久の友達発言に白河が若干落ち込んでいた。

あれで気づかないとは、どこまで鈍感なんだよ明久は。

「……あなたも人のこと言えないわよ」

「ん？ なんかつたか、杏？」

「いいえ、何も」

杏が何か言っただけの気がするが、とりあえずこれで勝負はわからなくなった。

この分なら2人が逆転するチャンスもある。

そう考えていると、すぐに明久の出番が来て、

「よっし！ 点数が統一された今がチャンスだ！ 今度は霧島さん！

君に一番上位の設備を賭けて勝負してもらおう！」

「……その勝負、受諾する」

ゲームのルール上、挑まれた相手は勝負を断ることができないそうなので翔子さんは明久の挑戦を受ける以外に選択はなかった。

「では、教科は保健体育！ 承認！」

「^{サモン}召喚！」

例のワードを口にし、2人の足元から召喚獣が出現した。

翔子さんの方は鎧武者のような姿をした召喚獣だった。そして、2人の頭上に点数が表示された。

『科目：保健体育 Fクラス 吉井明久 89点 VS Aクラス 霧島翔子 89点』

先の出来事で明久と翔子さんの点数は同じになっていた。文字通り全くの同点。

召喚獣の力自体は五分五分なのだが、この場に限っては明久の方に軍配が上がっているだろう。

「いや、尋常に！」

明久は召喚獣を呼び出した瞬間に突撃させ、翔子さんの召喚獣へと飛びかからせた。

「……………」

翔子さんはそれをサイドステップで躲し、明久はそれを追っついてく。

「いつけええええええ！」

今まではヒット&アウェイのスタイルだった明久だが、全くの同点というのもあつて攻撃に遠慮がなくなっていた。

「くっ……………」

翔子さんは刀を振るって応戦するが、

「効かない！」

明久はそれを軽々と避けてカウンターを仕掛けた。

『科目：保健体育 Fクラス 吉井明久 89点 VS Aクラス 霧島翔子 65点』

明久のカウンターを受けて翔子さんの召喚獣の点数が僅かに減った。

翔子さんもなんとか一撃を入れようとするも明久の得意の操作により、その攻撃は軽くないなされ、更なる反撃を受ける。

『科目：保健体育 Fクラス 吉井明久 89点 VS Aクラス 霧島翔子 48点』

翔子さんの点数が当初の半分近くに減った。このままいけば明久の勝利だが、生憎とこの試召戦争は時間制限だ。

なのでどうにかして早々に決着をつけなければ勝負は引き分け。更に翔子さんのすぐ近くにはチェックポイントがあった。

このチャンスを逃せば翔子さんの勝利は確実なものとなる。

「ふっ！」

「くっ！」

翔子さんも負けるまいと必死に抵抗する。刀を高速に振るって明久を無闇に近づかせないようにした。

不利と判断して持久戦に持ち込んできたか。時間が過ぎれば翔子さんは再び万全の状態に戻って勝利を確実なものへと変えてしまう。

「なら、これでどうだ！」

明久は自らの左腕を差し出して翔子さんの攻撃を防ぎ、全力の一撃

を注いだ。

『科目：保健体育 Fクラス 吉井明久 56点 VS Aクラス
ス 霧島翔子 25点』

「つうー！」

「明久君!？」

音姉が思わず席から立ち上がる。

そうだ。明久の召喚獣は特別仕様で召喚獣のダメージが本人にも伝わるようになってるんだ。

召喚獣自身ほどでないにしろ、刀による斬撃の痛みはかなりのものだろう。

「く……」

「逃がすかあー！」

明久は翔子さんを逃がすまいと翔子さんの召喚獣の足を掴んだ。

しかし、足を掴んだがために地面に転がる形になっていたので翔子さんからすれば格好の的だろう。

翔子さんは容赦なく明久に刀を連続で突き刺していく。

『科目：保健体育 Fクラス 吉井明久 31点 VS Aクラス
ス 霧島翔子 25点』

「がつー！」

「吉井！ お前、もうやめろよ！ これ以上はお前の身が保たねえだろー！」

渉も明久の現状を見てられなかったのか、熱血漫画にあるようなテンションでステージに向けて叫んでいた。

それはそうだろう。いくら学園の決定でそういう設定になってるとはいえ、必要以上の痛みは体罰にも等しいと思う。

俺達のためにやってるのは感謝するが、明久が必要以上に痛みを受けることはない。

俺だって渉が言わなければ叫んでいたと思う。

「この……負けるかあああああー！」

明久は自身に刀が刺さった瞬間、刀身を握って相手の武器を封じ込め、更に追撃を与える。

『科目：保健体育　Fクラス　吉井明久　11点　VS　Aクラス
霧島翔子　16点』

現在は僅かに翔子さんの方が点数が勝っている。
「く……」

翔子さんも武器は封じ込められてもまだ手足が片方ずつ残っていた。その空いた手足で明久の召喚獣を攻撃する。

『科目：保健体育　Fクラス　吉井明久　4点　VS　Aクラス
霧島翔子　12点』

駄目だ、もう後がない。せめて時間切れになって生き残れないかと
淡い希望も抱くが、

「駄目ね。あと30秒……タイムアップの前にやられるわ」
杏が時間がまだ先だという言葉で砕かれた。

具体的な時間は言っていないが、先の明久の試召戦争の際の時間を記憶していたんだろう。

もう駄目かと思ったが。
「いつけえええええええ！」

明久が必死の一撃を翔子さんに向けて放った。対して翔子さんも
全力で明久を踏みつけた。

そして沈黙。明久達の召喚獣はどうなったんだろうか？　俺達は
明久達の召喚獣の点数に注目する。

『科目：保健体育　Fクラス　吉井明久　1点　VS　Aクラス
霧島翔子　0点』

ギリギリで明久が勝っていた。その事実を受け止めるのに何秒か
かっただろうか。

俺達は脱力し、
「つしやあああああああ!!」

明久はやつとの勝利に感動しながら力いっぱい叫んでいた。そう
か……勝ったのか、明久。

まあ、ゲームはまだ続いているのだが、翔子さんの設備を手に入れ
たから順位はかなり上にいった。

それからまたゲームが続行し、すぐろくが進行された。

『ゲーム終了。トップとなったプレイヤーは、Fクラス所属、吉井明久です』

「よっしゃあああああ！」

明久が最初のトップを取って再び明久の勝利の叫びが学園に響いた。

第四十三話

「う〜……体が滅茶苦茶痛い……」

「そりゃあな……フィードバックとやらを背負った状態であんな攻撃を何度も喰らえば、そりゃあそうなるに決まってるだろ」

僕の隣で義之が呆れたように僕を見下ろしていた。

僕は今保健室で全身に湿布を貼った状態でベッドに寝転がっていた。

すごろく大会の1回戦。どうにかギリギリでトップを勝ち取ったものの、代償が大きく、僕は所々炎症や切り傷を作った。

オマケに召喚獣が激しく動いたことの疲労や打撲も多かったので全身ボロボロの状態だった。

「人間以上の身体能力であちこち動き回り、人間以上の身体能力を誇る召喚獣の打撃、斬撃……普通の人間だったら死ぬわね」

「杏ちゃん、そんな他人事みたい……」

「ええ、他人事なもの」

杏ちゃんはいつものように冷ややかな言葉をかけてくる。

「でも本当にすごいよね〜、明久君って」

「そ、そう?」

茜ちゃんが前に出てきて僕を褒めてくれた。それだったら、頑張った甲斐があったかな。

「うん。後先考えずにただ走る姿、かつこよかったかな?」

「ねえ、これって褒められてる?」

「いや、ほぼ馬鹿にされてるぞ」

「……………」

前言撤回。頑張ったというのに、僕に降り注がれる幸が少なすぎる。

「でも、茜の言う通り、明久君は後先考えなさすぎだよ。そりゃあ、私達のために頑張ってくれてるのはわかるけど……それで明久君がこれからも大怪我するかと思うと心配で」

「うん……嬉しいんだけど、観察処分者だから多少の怪我は仕方ないと思うんだけどね」

僕だってできれば怪我なんてないようにしてくれればいいと何度も思ったことあるけど、こればかりはもう学園の措置なので僕個人の意見ではどうにもならないのだ。

「それでも、明久君の場合が過ぎます！ 今後はあんな無茶な戦い方をしないことー！」

「いや、ああでもしなくちゃ高得点の人には勝てな……」

「い・い・で・す・ね？」

「……はい」

音姫さん、誰もが見惚れるくらい笑顔なのにすごく怖い。

こういう顔をしている音姫さんには決して逆らってはいけないと本能が警報を鳴らしていた。

「まあ、幸いというべきですか、明久さんの次のゲームまでは間がありますからしばらく休めますね」

「うん。……あ、そういえば、ななかちゃんは？」

「白河なら、もう次のゲームが始まる頃じゃないか？ ついさつきここに寄る前にすぐ次のゲームが始まりますって教師が報告しに来たから」

「ありやりや……休む暇もないなんて」

ついさつきゲームしたばかりだというのに、もう次のゲームか。

ただのすごろく大会ならともかく、これは召喚獣を使った大会だからね。召喚獣を使うのは結構集中力がいるからかなり精神的な疲れが残りやすい。

僕の場合は心身共にだけど。ななかちゃんもまだ初心者なので精神的な疲労の度合いは同級生の何割増というくらいだろう。

「まあ、そっちの方は涉やまゆきさん達が行ってるから」

「うん……ここで見っとしてるのも落ち着かないから、僕達もななかちゃんの応援行かない？」

「いや、お前体……」

「歩くくらいならなんてことないよ。それに観戦は基本座るだけだ

し。それならね」

「…………どうする？」

義之は音姫さんに尋ねる。

こういう時に一番過保護なのは音姫だ。だから音姫さんから許可さえもらえればいいんだけど。

音姫さんは少し考えてから、

「…………うん、それくらいなら。でも、あまり無理な運動はしないようにね？」

絶対だからねと指を突きつけて念を押された。まあ、僕が無茶した結果だから仕方ないんだけどね。

「わかりました」

とりあえず無茶しないと約束して僕達はなかなかちゃんの観戦へと向かっていった。

『じゃあ、第2回戦…………ちやっちゃと始めるよ』

学園長先生のアナウンスで第2回戦が始まった。

もちろん、私も既に位置についている。今回のステージはこの学園のプールだった。

そして、私の相手になる人…………うち2人は見ない顔だったけど、最後のひとりには…………

「絶対…………負けないんだから」

島田さんだった。

島田さんは私を親の敵でも見るような目でじつと睨んでいた。

多分、明久君絡みだと思うけど、この人や、明久君の周囲の人達の彼に対する暴力をなんとかしたい。

そのためにこの大会に登録したんだから。勉強は辛かったけど…………。

だから、私もなんとしても3連続トップを目指してる。明久君にかかる負担が軽くなるように。

『さて、早速2回戦開始だ。全員ルーレットを回してちやつちやとゲームを進めな』

学園長先生が再びアナウンスでゲームを進行させ、ルーレットが回った。

うん。最初は私だった。私は早速ルーレットを回してルートを進んでいく。

止まって設備を買うかどうかを聞かれたけど、最初の半分は設備を買わずに進めていくことにした。

まずはここで全員がどうやってゲームを進めていくのかを見る方針で行くとゲーム前に決めた。

他のみんなはまず安い設備に手を伸ばして着々と設備レベルを上げる方針でいくみたい。

それで高い設備を買った人がいたら試召戦争で奪いに行く感じかな。私はあまり点数もないし、明久君のような操作技術もないから今はみんなと同じく安い設備を揃えることにする。

そうやってゲームを進めていき、時々チェックポイントで補充試験を受けてどうにか万全の状態を作って今は凌いでいる。

そうしてゲームはもう半分も進んでいった。未だに誰も試召戦争を仕掛けてこない。更に設備のレベルも今の所どの参加者も差はない。

それに、1回戦で私がかかったミステリアスな条件にはまだ誰も引つかかっていない。所々でルーレットの目が特定の数字になったり倍になったりという程度のものでゲームに多大な影響を及ぼすような条件は出ていない。

そんな状態でここまで僅差のままゲームが進行していた。でも、ここから一気に空気が変わった。

「じゃあ、白河だっけ……アンタに勝負を仕掛けるわ」

私の名前が呼ばれ、振り向くと島田さんが私を睨みながら勝負を仕掛けてきた。

とうとう来た。この大会で初めての試召戦争。そして、初めてこの人と戦うんだ。

一応、この大会が始まる前に召喚獣の操作の練習をしていたから多少は形になってると思うけど、試召戦争の経験はこの人が圧倒的に上だ。

普通なら経験のない私は逃げた方がいいだろうけど、この大会じゃ逃げることは許されないから私は戦うしかない。ううん。元々逃げる気なんてない。

「……受けます」

「よろしい！ 教科は選択、承認！」

西村先生が教科を決めて召喚フィールドを展開した。

「召喚！」

ゲームによくあるワードを自分の口で言うと、目の前に幾何学模様が描かれ、そこから3頭身ほどの私の生き写しのような生き物が出てきた。

ちなみに私の召喚獣の装備はゲームに出る白魔道士のような服と手には宝石が散りばめられた杖だった。

自分の分身みたいなものだけど、見ててなんとなく和むと思ったけど、今はそんな感想を抱いている余裕はなかった。今は目の前のことに集中しないと。

深呼吸して前を向くと召喚獣の真上には明久君の時のように点数が表示されていた。

『科目：選択 来客 白河ななか 176点 VS Fクラス

島田美波 89点』

どうにか今回点数では勝ってるみたい。選択では私は音楽を選んだから割と問題が多く解けた。

明久君が言うからには、この点数はBクラス並みって言うってたから結構高めだと思う。

「行くわよー」

でも、島田さんは点数差に全くひるまず、速攻を仕掛けてきた。

咄嗟のことで反応が遅れ、どうにか島田さんの攻撃を躲したもの

の、点数が削られてしまった。

『科目：選択 来客 白河ななか 131点 VS Fクラス

島田美波 89点』

「ん……」

更に追撃をかけようとした島田さんの攻撃を明久君から聞いた回避方法、サイドステップや空中への回避などで避ける。

明久君からは無理に攻撃していかず、まずは回避に専念した方がいいって言ってた。相手は島田さんだから、この戦法は正解だと思う。

「チョロチョロすんじゃないわよ！」

島田さんは私の回避行動に腹をたてながら召喚獣を突っ込ませるけど、動きが素人の私から見てもあまりに一直線的なので私でも簡単に回避できる。

私は召喚獣を縦へ横へと移動させ、時々弱めの攻撃を当てて島田さんの点数を削っていく。

『科目：選択 来客 白河ななか 131点 VS Fクラス

島田美波 62点』

「……何で、何でアンタはウチの邪魔をすんのよ！」

戦っている最中、島田さんが怒鳴りながら聞いてきた。

「アンタとアキは別に何の関係もないでしょ！ それなのに……」

島田さんの言葉に私は友達だからと返そうと思ってやめた。

友達だからといって、あまり人の深い所には踏み込むのは本当に友達なのかという疑問もだけど、それだけでこの人が納得するとは思えなかった。

明久君も、島田さん達に日頃から暴力を振るわれ続けてもそれでも友達だと認識している。

どれだけ酷い目に会っても明久君は友達だと思っているのに、みんなは明久君にずっと暴力を振るい続けている。

私達の世界でも、そりやあふぎけて追いかけたり時々スキップと称しての叩き合いもあったりするけど、この人達のはもうそんな次元じゃない。

どう見ても明久君を心底殺したそうに見えるこの状況を止めたい

と思ってる。でも、この人達は残念だけど言葉で止まるような人達じゃない。

この大会が始まってから人通りの多い中を色んな人達に触れて気持ちを読んだけど、この学園のみんなに共通するのは思い込みが激しいこと。

特にこの人達は勝手に変な結論を述べて、その後は理不尽な理由による暴力。いくら他人が止めてもあそこまで一直線になるともう誰が何を言っても無理だと思う。

そんな人が納得する答えなんて、今の私には見つからなかった。

『科目：選択 来客 白河ななか 106点 VS Fクラス
島田美波 62点』

「っ……！」

島田さんの言葉に気を取られてしまった所為で召喚獣の動きが鈍り、島田さんの攻撃が当たってしまった。

私は再び目の前の戦いに集中して回避行動を中心に島田さんに攻撃を加える。

「大体アンタはアキの何なのよ！ アキが突然いなくなってからようやく戻ってきたかと思えば、アンタ達が傍にいて！ アンタ、アキの何処を見て傍にいのよ！」

最後の言葉はむしろこつちが言いたかった。そつちこそ、明久君の何を見て勝手な結論をつけているのか。

それと考えた。私が明久君の何を見て傍にいるのか。

最初は……私が文化祭に誘われた時のことだった。突然知らない人がうちの男子を止めて出てきたから驚いちゃった。

制服も違うのに、風紀委員と誰でもわかる嘘を言ったり、突然妙な行動を取るから最初は変な人かと思った。

でも、最初に挨拶した時点で明久君がいい人だってなんとなく感じた。いつもなら一言二言話して相手に触れて、その人の中身を知ってから接し方を考えるんだけど……。

明久君の場合は、最初から考える必要がなかった。明久君の中身を考えるまでもなくいつも小恋という時と同じ……ううん、それ以上に

自分の中身を出したつもりだった。

その後で時々明久君の中身を見ても、それは表裏ほとんど関係ないくらいひとつに纏まっていた。

私と手芸部の人達から逃げる時も、女の子のストラップを壊した人達に襲いかかった時も、そのストラップを取り戻そうとした時も、その他日常でだって、明久君は心にある言葉を何一つ偽っていないかった。

もちろん、偽ろうとした時もあるみたいだけど、大抵は自爆という形で口に出しちゃうから面白いと思っただ。

誰よりも徹底して正直で、まっすぐで、強くて、何より優しさを持った彼ともっともっと楽しい日常を送りたいと思っただ。

明久君と一緒にだから毎日が以前よりもずっと楽しく思えた。全部、明久君がいたから。

「ななかちゃん！ その調子！」

「え……」

気づけば、ステージの外で明久君が応援しているのが見えた。

1回戦のフィードバックによるダメージが残って保健室に行っただけだけど、見に来てくれたんだ。

自分が怪我してるっていうのに、それがまるで何もないように振舞っている。

文化祭の時もあんなだったな。誰かのために、自分が傷つく道を選んで、その後はなんてことない顔をしていつも通りに振舞う。

自分に限ったことじゃないのがわかってても、それが明久君だから。それを見てるのが自分のことのように嬉しくなる。

「アキ……キツチりお仕置きする必要がありそうね……」

「何度も言ってるけど、絶対にさせないよ！」

私は再び気を引き締めて召喚獣を操作してまた一撃入れる。

『科目：選択 来客 白河ななか 106点 VS Fクラス

島田美波 56点』

「っ……何よ……何でアンタはウチの邪魔すんのよ！」

再び来る……島田さんの問い。ちよつとした言葉でも言えば襲い

かかってくるかもしれないと思うほど怖い空気があの人の周囲を囲んでいる。

それでも、迷うことはない。ただ一言、自分の本音を言えばいいだけ。

「私は……私は、明久君が好きだから！」

言った。そして、周囲を一瞬の沈黙が支配した。何処か遠くで『え？』と誰かが声を漏らした気がしたけど、そんなことを気にするつもりはなかった。

ただ、自分の口で、自分の心にあつた言葉を声にしただけだから。

「な、ななななな、なんですってえ!？」

私の言葉に島田さんはワナワナと震えて叫んだ。

「だから、絶対に勝ちたい！ これ以上明久君に傷ついてほしくないから！」

「な、何よ！ アレはアキが悪いんですよ！ 大体、アキが好きだっていうなら何でアキが他の女といっても普通でいられるのよ！」

「……私は、明久君が笑ってくれればいい。ただ正直でいてくれればいいよ。明久君が、これからも自分を偽らないで、私に笑ってくれるなら……それでいいから」

これは本当のこと。もちろん、好きだから自分と結ばれてほしいとも思っている。

でも、明久君が決めた人なら……誰であっても邪魔をするつもりもない。明久君が今までどおり、何の偽りもない笑顔で接してくれるなら、私もそれに釣られて正直でいられるから。

だから、私は明久君に幸せになつてほしいから、この大会で勝つて、少しでも力になってあげたいから。バカだけど……まっすぐに優しい、彼の助けになりたいから。

「行つてー！」

私は召喚獣を突撃させ、島田さんの召喚獣を突き飛ばした。それにより、更に召喚獣の点数を減らす。

『科目：選択 来客 白河ななか 98点 VS Fクラス 島田美波 32点』

「もう、少し！」

後少しで島田さんに勝つことができる。時間切れを待つつもりはない。

島田さんとは今回の勝負で決着をつけたい。勝って、明久君に対する暴力を止めてもらわないと。

「つ……負けるわけ、ないでしょ！」

『科目：選択 来客 白河ななか 54点 VS Fクラス 島田美波 32点』

追撃を入れようとしたところに島田さんの思わぬ反撃でかなり点数が削れてしまった。

オマケに体勢が崩れてすぐには立て直せそうにない。

「隙だらけよ！」

『科目：選択 来客 白河ななか 29点 VS Fクラス 島田美波 32点』

「う……」

「これで、形勢逆転よ」

私の召喚獣の目の前で島田さんの召喚獣が自分の勝利は揺るがないとアピールするようにサーベルを突きつける。

このままじゃ負ける……ここで負けたらまた明久君の状況は悪くなっちゃう。

でも、ここで立ち上がろうとしても島田さんの召喚獣は容赦なく私の召喚獣にトドメを刺そうとする。

なら時間切れ？ 駄目。それじゃあ自分の本当の気持ちを言ってみて必死に頑張った意味がない。

なんとしてもここで勝たなくちゃ何も変わらない。

「トドメよー」

島田さんの召喚獣がサーベルを振りかぶって私の召喚獣にトドメを刺そうとした。

振りかぶりが大きいものの、武器がサーベルだからか、島田さんの召喚獣の力が元々高いからか、かなりの速さで刀身が私の召喚獣に迫ってきた。

このままじゃ私の召喚獣は戦死してしまう。かといって、これを避けきる自信はない。ここで取れる行動となると、

「なっ!？」

『科目：選択 来客 白河ななか 11点 VS Fクラス 島

田美波 0点』

一瞬で決着がついた。

「なん……………何で?」

「召喚獣って……………身体づくりも人間のものを再現してつくってたんだって。だから、人間と同じように急所だって存在する。心臓や頭を貫かれれば一発で戦死も有り得るんだよ」

私の取った行動は『肉を斬らせて骨を断つ』。召喚獣の体を少しだけずらして致命傷を避け、最後の一撃に全力を注いで島田さんの召喚獣の心臓目掛けて杖の先を突き立てた。

それによってギリギリの勝利を取った。1回戦の明久君の行動を見習って見よう見まねでやっただけけど……………やっぱり思ったことを行動してみるもんだね。

「アンタ……………何で召喚獣のこと……………」

「あ、これ教えてくれたの……………明久君なんだ」
「……………」

「そのね……………島田さんの気持ちはわからないでもないよ。明久君って、誰に対しても優しいから……………オマケにすっごく鈍いし。これでも結構アピールしてたつもりなんだけどな」

それでもちよつと恥ずかしがるところ留まりだからなんだかなあと思う。

「でも、それが明久君だから。すごくバカだけど……………純粹で、優しいんだ。だから……………もう明久君に酷いことをするのはやめて」

「……………ふん!」

しばらく間を置いて島田さんはそっぽを向いたまま離れた。

少しは……………わかってくれたかな?

「この勝負! 白河ななかの勝利!」

この後もすぐろくゲームは進んでいった。

結果だけいうと、私は2位で終わっちゃった。

最後辺りまではいいところいつてただけど、最後にBクラスの人と運悪く対戦することになってしまった。

教科は数学。もちろん、私の苦手科目のひとつなので点数は低い。対して向こうはBクラスだから結構点数が高かったために勝負にならなかった。

その勝負で一番いい設備を持って行かれたのが要因で私はトップを取ることはできなかった。

「あ、ななか……」

ステージを出ると小恋達が駆け寄ってきて私を見た。

「あはは、ごめんね。結局負けちゃった」

「う、ううん！ そんなことないよ！ すっごくかっこよかったよ！」

「ほんと、今日のななかちゃん、しびれたわ〜」

「ええ。あそこで学園のアイドルである白河さんが大声で告白をするんだもの。みんな驚いてたわね」

「う……」

今思い出してみると本当に大胆なことしちゃったな、私。

穴があつたら入りたいたって言葉が脳裏に浮かんできた。本当にそうしたいくらい恥ずかしいよ。

「まあ安心して。私達は応援してるから。……だというのに、当の本人と言えば……」

当の本人。そういえば、明久君はどこにいるんだろう。

「……あそこよ」

明久君を探していることに気づいた高坂先輩が観客席の方を指差した。

「……………」

「おい！ 明久よ！ いい加減目を覚ますのじゃ！」

「おい！ 明久！ ……駄目だ。完全に意識がないぞ」

「オーバーヒートを起こしたのじゃな。全く……明久はこういう不測の事態に弱いからの」

「いや、だからってここまでなるか？」

「むう、こうなると……ス……いい加減に起きんか馬鹿者！」

「うわ！ 鉄人!! わわ！」

「ようやく気づいたのかの？ 明久」

「あれ？ 秀吉？ ここは？」

「忘れたのか？ お主はここで白河の勇姿を眺めておったじやろう」

「勇姿……く……く……！」

「明久!? これでもかかってくらい顔が赤くなってるぞ!? オマケに頭から煙出してないかお前！ そんな調子で大会大丈夫か!？」

「だ、だだ大丈夫だよ！ 今僕かなり頭の回転早くなってる気がするしー！」

「それは錯覚というものじゃ。その前にまず現実を目を向けて——」

「えっと……まず物質中の光の速さを求めるには $c \dots \dots$ つまり $3 \cdot 0 \times 10^8 \text{ m/s}$ 。そこに n 、すなわち波長の……」

「マズイぞ！ これはとんでもなく重症じゃ！」

「え？ でも、正解だと……」

「それじゃあ、僕は今のうちに補充済ませとくから！」

「ちよ、明久!？」

明久君はそのまま逃げるように補充試験へと向かっていった。

「……………」

「全く……やっこの思いで白河さんが告白したっていうのに、あのバカ」

「明久君って、意外とヘタレだったんだ」

「吉井君……」

「……私の必死の告白って」

やっこの思いで自分の本心を告白したのに、当の本人は逃げちゃって。

でも、これはこれで脈はあるって考えてもいいのかな。うん、もう告白しちやっただから、近いうちに絶対答え聞かせてもらおうか。

絶対に逃がさないからね、明久君。

ちなみに、その後で明久君が3回戦に出て、今までにないくらいの点数を持って圧勝し、2連続でトップを取ったようです。

第四十四話

「はあ……」

家に着いてから僕は翌日の戦いになんとしても勝つために勉強をしていた。残り1回勝てば3連続トップを取ったことにより、望みをひとつ叶えてもらえるからだ。

今日の2回戦の戦いぶりは中々手応えバツチりだった。オマケに点数もいい具合に伸びたし。

その調子で勉強をすれば明日もいい点数を出せるかと思い、勉強することにした。歴史系はもちろん、他の教科も大分いい具合に進んで高1後半くらいのもも理解できるようにはなった。

だが、今日は勉強があまり進まない。手が動かず、ため息ばかりが溢れる。

その理由は今日のアレだ。

『私は……私は、明久君が好きだから!』

今日のななかちゃんの2回戦。その試合中、ななかちゃんが叫んだ僕に対する告白。

「……………!!?」

駄目だっ! 思い出したらまた顔が熱くなってきた。僕はベッドに飛びついていたうち回っていた。

……うん。これ以上はやめよう。見る人が見たら変人だと思われるてしまうような奇怪な行動だ。

ていうか、アレは夢なのではないかと未だに実感が沸かない。いや、なんというか、現状を受け止めきれないというか。

「……痛い」

試しに自分の頬を抓ってみたら痛かった。いや、今は現実でも、昼間のことは夢だって可能性も……

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

あ、メールが来たみたい。差出人は……杏ちゃん? 要件は……現実を見る?

なんだかピンポイントで今の僕の心境を察してメールを送ってき
たようだ。

要件の下の本文は………音声だけ？　僕は携帯を操作して音声
を再生する。

『私は……私は、明久君が好きだから！』

「ふおおおおお！」

危ない！　こんなのが姉さんに聞かれた日には僕の存在はこの世
から塵ひとつ残さず消されてしまうだろう。

しかし、同時に昼間のアレが現実だと認識した瞬間だった。本当に
僕は聞いてたんだ……ななかちゃんの告白。

『私は、明久君が笑ってくれればいい。ただ正直でいてくれればいい
よ。明久君が、これからも自分を偽らないで、私に笑ってくれるなら
……それでいいから』

正直言って……ああ言ってくれたのは本当に嬉しかった。僕のコ
とをそんな風に思って、口に出して言ってくれる人がいたのが。

今まで僕の周りの女の子の子と言えば、僕を嫌っている人が大半だった
からなあ。まあ、嫌ってる原因を作ってるのが雄二時々僕の行動つて
なわけだから仕方ないんだけど。

好きって言った人と言えば玉野さんもいたけど……うん、アレは数
に入らないよね。僕自身を好きでいる感じじゃないし、正直思い出し
たくない。

ともかく、色々身の毛がよだつほどのことを思い出したおかげで頭
も冷えて冷静な思考もできるようになった。

昼間の告白は現実。ななかちゃんは僕を好きだと言ってくれた。
これは杏ちゃんのメールのおかげで事実だというのはわかった。

……けど、本当に僕でいいのか？　それに、ななかちゃんは本当に
僕が好きなのか？

ななかちゃんは優しい娘だ。だから、アレは僕を美波達の暴力の手
から逃れさせようとしてああ言ったのではないか？

だから公衆の面前でもああやって叫んでわざと自分に周囲の視線
を集中させて僕を助けようとした。……うん！　きつとそうだ！

♪♪♪

おつと。今度は電話だ。相手は……また杏ちゃんか。

僕は通話ボタンを押してスピーカーを耳に当てた。

『ちやお、明久』

「あ、杏ちゃん。どうしたの?」

『ちよつと勉強の進み具合がどうかを聞きたいのと……昼間の白河さんの告白を思い出してのたうち回っていたかを是非とも聞きたいわね』

「後半のが絶対本音だよね!? ていうか、なんでわかるの!? ひよつとして何処かから見てる!? それとも僕の部屋に監視カメラか盗聴器でも仕掛けてる!?!」

『ただの予想よ。ま、当たってるみたいだし……あんたの行動って、わかりやすいから』

「うく……僕って、そんなにわかりやすい?」

『ええ。恐らく、園児でもあんたの行動パターンは3日と立たないうちに把握されるくらいね』

そこまで単純じゃないやい。

「ああ、そういうえば昼間の件なんだけど。ななかちゃんにお礼言っておいて」

『あら。そういうつてことは、白河さんの好意に……』

「うん。僕を助けるためにあんな大それたことを言ってくれたんでしょ? 相当の勇気だったんだろうね、僕を助けるためとはいえ、あんなことを本気みたいに大声で言うんだもん」

『……何の話をしてるの?』

「え? だからななかちゃんのアレって、僕をみんなの暴力から助けるための芝居でしょ? いやあ、理解するのにやたら時間かかったよ。僕なんかアイドルと謳われている彼女が告白なんてありえないよね」

いきなりの事だったから状況を把握するのに滅茶苦茶時間がかかったよ。

「だから、ななかちゃんにお礼言っておいて」

『……………』

「ん？ 杏ちゃん？」

『……茜、そこにあるの。そう……それ持ってきて』

『え？ ちよ、杏!? そんなもの何に使う気!?』

電話の向こうで杏ちゃんが茜ちゃんに何か指示を送っているようだ。同時に小恋ちゃんの慌てる声も聞こえた。

一体何だろうと待機して何秒かたった時だった。

ギイイイイイイイイ!!

「ぎいいやあああああ!!」

耳元で奇怪な轟音が鳴り響いていた。僕の鼓膜もスピーカーも爆発するのではないかと思うくらいとんでもない音だった。

「あ……か……」

『……つくづく思ってたけど、あんたって本当にバカなのね』

その言葉を最後に杏ちゃんは通話を切った。い、一体何だったのだろうか？

僕、杏ちゃんを怒らせるようなことでもしたんだろうか？ 心当たりはないけど、明日謝った方がいいかな？

とりあえず、この調子じゃ電話をかけても無視されそうだし、義之達の手を煩わせるわけにもいかないからこのことは自分でどうにかしよう。

さて、頭も冷えたことだし、明日に向けて勉強でもするか。

『アキ君。もしよければ私が睡眠時間を削ってでも裸の個人授業でも』

――』

「断固拒否します!」

まずは安全地帯を作らなければいけないようだ。

「おい、どうした杏？ なんか、滅茶苦茶でかい音が響いていたんだが」

今日も翔子さんの家で泊まっていた俺達だが、俺と渉で暇つぶしに将棋を打っていた際、ものすごい轟音が響いたので何事だと思つて杏のもとへ駆け寄つた。

そして、来てみれば杏の手には携帯とドリルがあった。

「……何でドリル片手に携帯を操作してるんだ？ ていうか、誰かへ嫌がらせでもしてたのか？」

携帯持つてドリルを……考えられるのは通話中にドリルを間近で作動させたという事以外想像できない。

きつと受信側は相当の苦痛を味わつただろうな。

「義之……えっと、その……」

「ああ、明久がバカな勘違いしてたからお仕置きしただけよ」

「明久が？」

どうやら電話の相手は明久だったようだ。しかし、明久がどうかしたのだろうか。

「明久がどうしたって？」

渉も気になつて杏に問いかけた。

「……昼間の告白の件よ」

「ああ、白河の……」

今思い出してもアレは相当のものだったな。数は少なかったとはいえ、観戦していた奴らの前であんな大それたことを言つたのだから。

「アレか……くう〜！ 吉井の奴、一丁前にリードしてやがって〜。」

これで独り身は俺とお前だけだな」

「くつつくな、鬱陶しい」

渉が身体をくねらせながら近づいてきた。正直ウザイ。

「……あのバカ、白河さんの告白を自分を助けるための芝居だって勘違いしてるわ」

「「……………は？」」

え？ 今杏はなんて言つたんだ？

「杏？ もう一度言つてくれないか？ 明久は何だつて？」

渉も信じられないという風に再度杏に尋ねる。

「だから、明久……あのバカは勘違いしてるのよ。白河さんの告白を、自分の理不尽な暴力から助け出すための芝居だって」

「し、芝居?」

ちよ、あの必死の告白が芝居だと思ってるのか、明久の奴……。

「あんの野郎……白河に告白されたのも許さねえが、その告白をよりにもよってなんて方向に勘違いしてんだ。明久の奴、一発ぶん殴っておくか!」

「わ、渉君、落ち着いて!」

拳を力いっぱい握って今にも明久のもとへ駆け出しそうな渉を小恋が必死に止めていた。

しかし、流石の俺も呆れるの一言だ。あの状況下でも白河は目いっぱい勇気を振り絞って告白したっていうのに、まさかそれをただの人助けの芝居だと勘違いしてやがるとは。

「まったく……女心に鈍感なのにも限度があるだろう」

「……今回はあえてツツコまないでおくわ。それよりあのバカをどうするかね」

杏の前半の一言が気になるが、事態が事態だけに今はその事を追求する時じゃない。

俺も杏の言葉に頷いて真剣に明久の勘違いをどう正すかについて考えることにした。

「いつそ何発か殴ってわからせるか?」

「渉君、それじゃああの人達のやってることと変わらないよ」

まったくもって小恋の言う通りだ。あの人達と同じことをやったら本末転倒というか、明久を更にバカにさせるだけなのでは……。

「あ、ひよっとして……」

「義之君? 何か思いついたの?」

「あ、いや……そういうわけじゃないんだが、明久のその勘違いって、明久の今までの日常が深く関係してるんじゃないかね?」

「……ああ、そういうこと。確かに考えられるわね、あのバカなら」

「え? 何? どういうこと?」

俺の言葉に杏は理解したようだが、その他3名は首を傾げていた。

「これは俺の予想に過ぎないんだが……多分明久は今まで姫路さんや美波さん、それに玲さんから数々の暴力や暴言を受けた所為で『自分を好いてくれる女の子はいない』、『自分はどうかあつても女の子に嫌われる生き物なんだ』と根っこの深い部分まで思い込みが浸透しているんじゃないかって思ってるんだが」

「……ああ」

ここまで言つて小恋や茜も納得したように見合わせた。

「こんなところにまであの3人の影響が強くなるって……今までどれだけ暴力を受けてたんだアイツは」

美少女に目がないはずの涉でさえ、この状況にひどく呆れていた。

「でも、結局どうするの？ これじゃあ……」

「そこは、どうにかして明久に理解させるしかないな。とにかくまずはアイツにどうやって理解させるかを考えるべきだ」

俺の言葉に全員頷き、白河を除いた他のメンバーを集わせてどうやって明久に白河の気持ちを理解させられるかの会議を始めたのだった。

「ふあ〜……」

翌日、僕は眠気を抑えながら学園へと来ていた。

昨日は姉さんを部屋に入れなかったための対策をしている所為で時間をロスしたから徹夜で勉強していた。

おかげで睡眠時間が若干足りないため、結構眠気がきている。

まあ、補充試験でも手応えは割といい方だったので、多少の眠気は我慢して今は大会に集中しよう。

さて、いよいよ3回目のすぐろく。今回の対戦相手は誰かなと。

「アキちゃ——吉井君！ 今日は何んとしても勝たせてもらいます」

「……………」

かなりキツイ戦いになりそうだ。よりもよって玉野さんもこの大会に参加していたなんて。

えつと……あとの2人は……。

「げっ！ 吉井?!」

「テメエ、行方不明じゃなかったのかよ！」

「あ、へんた……常夏変態でしたっけ？」

「響きが似てるからって先輩と変態を間違えんな！ それとまとめてんじやねえ！」

うるさいなあ……この2人の怒鳴り声でも目が完全に覚めない。むしろ不快だった。

「ん？ 待てよ。お前がいるってことは、ここに木下……俺の太陽が!?!」

モヒカン先輩……確か、常村って名前だっけ？ まあどうでもいいけど。僕がいるからには秀吉も来てるだろうと観客席を見回した。

「いた！ よう、木下！ 俺の愛しの太陽！」

モヒカン先輩が秀吉にラブコールを贈るとそれを受けた秀吉は吐き気を催した。

ああなるくらいなんだからいい加減諦めたらいいのに。それと、秀吉は男ですよ先輩。

『さて、集まったね。それじゃあ、各ステージの試合、始めるよ』

ババア長のアナウンスが切れると同時に試合の合図が学園内全域に鳴り響き、2日目のすごろく大会が始まった。

そういえば、さつきからすごい視線を感じるよね。主に観客席から。見ると、観客席からななかちちゃんを除いた全員がすごい僕を睨んでいる。僕、みんなに何かしたかな？

ななかちちゃんは……うん、いつも通りだね。杏ちゃん、ちゃんとお礼伝えてくれたのかな。

いやあ、ななかちちゃんには感謝感激雨あられだよ。僕を守るためにあんな風に言っただから。

まあ、後でFFF団からの制裁という名の処刑が待ち構えているだろうけど、女子からの感心は少しは軽減できるだろうから前よりはちよつとマシになれたかな。

「……い……よ……し……」

FFF団の方に関してはこれまでと変わらないだろうから、あつちの対策さえなんとかすれば後は姉さんだけだろう。

これが終わって、みんなをあつちの世界に帰すことができたらゆつくり考えておこう。

「おい、聞いてんのか吉井!」

「ん? 夏川変態でしたっけ? どうしました?」

「だから先輩と変態を間違えてんじゃねえ! さつきからお前に勝負を申し込んでんだろうが!」

「え?」

「吉井君。早く呼び出してくれないと敵前逃亡とみなして失格にしななければなりません!」

「え? あ、はい。やりますやります!」

どうやらぼうつとしてる間にオートパイロット状態でゲームを進行させてたようだが常村変態の呼びかけに気づけなかったようだ。

今になって自分の設備を確認すると……ありや、いい具合に設備が揃ってるな。オマケに一ヶ所高ランクのエリア占拠に成功してるのがあるし。

どうやら常村先輩は高ランクのエリア占拠を崩そうと勝負を仕掛けてきたっほいな。

「おい、さつきと始めるぞ!」

「はいはい」と

「では、教科は日本史でいきます。試召戦争承認します」

日本史か。僕の得意科目だ。日本史は特に重視して勉強したからな。

もちろん、受験生だからには常村先輩も結構勉強したはずだ。点数がどこまで伸びてるか。

「それじゃ俺から行くぜ。召喚!」

ポン、と弾けるような音と共に先輩の足元から召喚獣が現れた。

『科目：日本史 Aクラス 常村勇作 316点』

予想通り、先輩もかなりの力をつけてきた。以前は200ちよつとだったのが、100も力をつけて再び立ちはだかつてきたのだ。

「おら、どうした？ さっさと召喚しろよ。ビビっちまったか？ まあ、無理ねえよ。お前の200手前の点数と違ってかなりの差だからな」

先輩が何か言ってるな。まったく……こつちだっていつまでも同じ状態ってわけにはいかないんですよ。

「こつちだって……」

「あ？」

「こつちだって、どうしても勝たなきゃいけない理由があるんですからね！ 召喚^{サモン}！」

僕の足元からも召喚獣が現れ、その頭上に点数が表示される。

『科目：日本史 Fクラス 吉井明久 408点』

「なっ!? 何だその点数は!? テメエ、ついにカンニングでもしたか！」

「んなわけないでしょ。正真正銘僕の点数ですよ。日本史は特に勉強しておきましたからね。大体、補充試験の監督は鉄人なんですからカンニングなんてできるわけがないでしょ」

「くっ！ 嘗めてんじゃねえよ、Fクラスが！」

「じゃあー！」

僕と常村先輩の死闘が始まった。

点数でも勝ってるし、操作技術にも割と自信はある。まずはじっくり点数を減らしにかかるぞ。

『科目：日本史 Fクラス 吉井明久 408点 VS Aクラ

ス 常村勇作 265点』

すごい。ちよつと隙を突いて一撃喰らわせただけでかなり点数を減らせてる。

召喚獣の点数が高いだけでこうも攻撃力が違ってくるとは。先輩の召喚獣が反撃しようとしてチャクラムのような武器を振るってくるけど、そんな単純な攻撃法じゃ僕を捕らえることはできない。

僕は召喚獣を紙一重で躲せるように位置を微妙にずらし、先輩の召喚獣が通り過ぎた瞬間を狙って反撃する。

『科目：日本史 Fクラス 吉井明久 408点 VS Aクラ

ス 常村勇作 212点 』

いける。この分ならじつくり構えれば確実に勝てる。

「くっ！ テメエ、やっぱり反則してんじゃねえのか！ どう考えたってそれがお前の点数なわけねえだろうが！」

「自分の思い通りに事が進まないからって、見苦しいですよ。先輩」

怒鳴りながらも召喚獣を操作して攻撃を加えてくるが、誰かと話しながら避けるくらいは造作もない。

「……そういえば、聞いたんだけどよ」

「ほえ？ 何です？」

常村先輩が気持ち悪い笑みを浮かべながら僕に話しかけてきた。今度は何を企んでるのだろうか？

「お前、何処の生徒かはわからねえが、中学生に告白されたらしいじゃねえか！」

「なっ!？」

「そらよ！」

『 科目：日本史 Fクラス 吉井明久 327点 VS Aクラス 常村勇作 212点 』

「くっ！」

マズった。一瞬の隙を突かれて点数をかなり削られてしまった。

「所詮噂だと思っただが、その様子じゃ本当みてえだな。随分なもの好きがいたじゃねえか。お前のどこに惚れたんだか」

「く……この！」

『 科目：日本史 Fクラス 吉井明久 314点 VS Aクラス 常村勇作 199点 』

僕も負けずに反撃をし、先輩もさっきのような一直線な動きでなく、ヒット&アウェイの戦法をとってきた。

「あくあ……あの女もどんな神経してんだか。このバカに惚れたただあ？ 一体このバカのどこがいいんだか」

「……………」

それに関しては別に反論する気はない。

僕のようなバカに惚れる人なんているわけないし、アレはななか

ちやんが僕を助けるための芝居なのだから。

でも、そう考えるとなんだか妙に胸が苦しくなる。ななかちやんの行為は嬉しい筈なのに、なんでかアレが芝居だと考えると息苦しくなる。

「ハッ！ お前が好きだとか、そいつも相当のバカなんじゃねえのか！」

「っ!」

今こいつ、なんて言ったんだ、あのモヒカン野郎は。ななかちやんが……バカ？

「カスの仲間はカスってか？ 一丁前に見た目はよくても中身は空っぽじゃあ、特に手を出したくもねえな。ていうか、『私は、明久君が笑ってくれればいい』？ どのメルヘンだよ！」

「……おい」

「あ？ なんだ——って、おおう!」

モヒカン野郎が僕を見て一瞬驚いたようだけど、そんなことはどうでもいい。

「デメエ……これ以上その汚え口を開くな。すぐにカタをつけてやるよ！ 二重召喚^{ダブル}！」

久々に使う。この白金の腕輪。この腕輪は召喚獣に二重召喚という特殊な能力を与えるものだ。

『科目：日本史 Fクラス 吉井明久 314点×2』

このように、自分の召喚獣を2体に増やすことができる。ただし、自分の召喚獣が2体出るからには両方自分で操らなければならないため、かなり使い勝手の悪いものだ。

でも、僕にはその2体の召喚獣を両方操れるほどの操作技術がある。

「喰らえー!」

『科目：日本史 Fクラス 吉井明久 314点×2 VS A

クラス 常村勇作 127点』

「ぐ……くそー!」

モヒカン野郎は2体の召喚獣に攻めあぐねており、防御するだけで

手いっぱいの状態となった。

「う、嘘だろ！　なんで俺がこんなクズに！」

「……先輩、あんたの最大の敗因はただひとつだ」

「な、何がだ！」

「……僕の……僕の大切な人を侮辱したことだ！」

そうだ。今気づいた。僕は、ななかちゃんが好きなんだ。

アレが例え演技であろうと、あの言葉は本当に嬉しかった。僕のことを思っ言ってくれたのが、僕のために勇気を出してくれたのが嬉しかった。

だから、そんな人を侮辱したこのモヒカン野郎だけはどうしても許せない！

「くっ……の、野郎！　Fクラスの癖に！」

「これで終わりにしてやる！　武器具現！」

リアライズ

これが僕の召喚獣の腕輪の能力。点数を消費することによって別の武器を具現化し、それを利用することができる。

『科目：日本史　Fクラス　吉井明久　246点　VS　Aクラス
常村勇作　127点』

僕の召喚獣、主獣の方には槍と片手剣を持たせ、副獣の方には少し小さめのバックラーと棍棒を持たせてモヒカン野郎の召喚獣へ突っ込ませる。

モヒカン野郎の攻撃は主に副獣の方に防がせ、武器を封じさせたところに主獣の方が重い攻撃を仕掛けるというシンプルな戦法だ。

「ぐ……この！　Fクラスのクズ野郎の分際で！」

「トドメだあああああ！」

モヒカン野郎との試召戦争は呆気無く終わった。

『科目：日本史　Fクラス　吉井明久　211　VS　Aクラス
常村勇作　0点』

「ええ……この勝負、Fクラス吉井明久君の勝利です」

モヒカン野郎は敗北を知るとその場で地団駄を踏んだ。

「くそ！　俺がこんなバカに負けるとは！」

「さて、この勝負は僕が勝ちました。この勝負では出してませんでし

だが、できれば僕の言うことをひとつ聞いてくれませんか？」

「な、何をさせる気だテメエ……」

「別にやばいことはさせませんよ。ただ、これが終わった後でななかちゃんに向けて言った言葉を訂正してくれればいいだけですよ」

「そ、それだけでいいのかわよ？」

「ええ。あんたに対する罰は先生達が考えてくれるでしょうから」

「あ？ どういうことだテメエ」

「……このモヒカン野郎……僕でもわかることに全く気づいていないのか。」

「先輩、聞いてませんか？ この大会は他の教育会の方達にも見せるためのものだって」

「それが何だ？」

「そのためにこの学園中の先生達がこの大会を見ているんですよ」

「だから、それがどうだってんだ!？」

「まったく……要するに、あんたの内申点はほぼゼロになったと言ってもいいってこと」

「なっ!？」

「そりやそうでしょ。教育者が周りにいるこんな所であれだけの暴言を吐いたんだから、ひとりくらいそれを聞いている教師がいたって不思議じゃないよ。現にそこに福村先生がいるし」

「ぐ……テメエ……」

モヒカン野郎が僕を睨んできているけど、どうでもいい。

「言っておくけど、これは先輩の自業自得ですよ。前の清涼祭での妨害といい、お化け屋敷の件といい、今回といい、これは先輩が起こしたことなんですから、自分で責任を取るの当たり前ですよ。」

そもそも僕の大切な人をあれだけ侮辱しておいたんだ。この程度で済んだだけで感謝すれこそ恨まれる覚えはないよ」

「ぐ……」

「じゃ、勝負に負けたんですから先輩は1回休みですね。じゃ、次は僕の番なんで」

その後もゲームは続き、僕の日本史の点数を見たからか、無闇に試

召戦争を仕掛けることがなくなり、他のプレイヤーは買取を中心
に設備を集めた。

僕はこれ以上ないくらいにポテンシャルが高まっているので買
取られた高い設備のマスに来たら即戦争を仕掛け、その設備を勝
ち取った。

それを何回か繰り返し、僕の設備レベルが一定値を越えたので
ターン制限が終わる前に僕の勝利によってこのゲームは幕を切った。

うん。やっと自分の気持ちに気づいたわけだから……ダメ元で
試してみるか。僕はそう決心してみんなのもとへ駆け出していった。

第四十五話

「——というわけで、よろしくお願いしますね。学園長」

「ああ、希望を叶えるのが賞品なわけだからきっちり調べてみるよ。それにしても、妙なこともあるもんだねえ」

一時間ほど前の試合で3連続トップを取った僕はその賞品として学園長に例の扉を調べるよう依頼したのだ。

学園長も快く引き受けてくれるようだし。そこで僕は例の扉の写った写真を渡した。

「今スキャンして熱感知や超音波を働かせた時の映像を見たけど、物質構造については別段普通の扉と変わらないのに、驚いたことに妙なものを発生させてるね」

「妙なもの？」

「具体的なことは調べないことにはわからんが、召喚獣を実体化させる際の召喚フィールドに似たようなものさ」

「召喚フィールドと？　じゃあ、アレも何か召喚するような役割があるんでしようか？」

「それも、調べないことにはなんとも言えんさ。まあ、何かわかったら連絡してやるよ。早速調査をしておいてやるから、邪魔しないでさっさと出て行きな。これから忙しくなるんだからね」

「はい」

相変わらずの口の聞き方だったが、まあ忙しくなるのは間違ってたないだろうし、用は済んだのだから僕は学園長室から出て行った。

「ふう……さって、みんなは何処にいるかなって」

試合が終わった直後に会おうとしたんだけど、みんなが何故か用事ができたからと言って僕から避けるように行ったんだよな。

だから僕は先に学園長室へ行って用事を済ませたんだよね。一体何でだろう？　僕、みんなを怒らせるようなこと言っただらうか？

とにかく、まずはみんなを見つけて学園長に言ったこと報告しないとね。それと、ななかちゃんに……今の僕の気持ちを。

「あ、いたいた。明久君！」

「ん？ ななかちゃん！」

考えた傍から向こうから来てくれた。ちようどよかった。今なら2人キリだし、言うならこの瞬間しかない。

「ななかちゃん、実は——」

「おい、明久」

「ん？ 義之？」

ななかちゃんに気持ちを告白しようとしたところで義之が飛び出してきて僕の腕を掴んできた。

「悪い、ちよつと来てくれ。話があるから」

「え？ ちよつと待って。僕は今ななかちゃんに言っておきたいことが……」

「あれ？ 小恋、どうしたの？」

「あ、その……ごめん、ななか！ ちよつとついてきて！」

「え？ 小恋？ どうしたの!?!」

ななかちゃんも小恋ちゃんに引っ張られてどこかに連れて行かれた。

「とにかく、来るんだ！」

「ええ!?! ちよ、義之!?!」

「とりあえず、連れてきたようね」

「あの……どうしてここに？ というか、何で僕縛られてるの?！」

僕は義之に屋上へ連れて行かれ、何故かそこで待っていたみんなに縄で縛られたのだ。

「うくん……何でっていうと、拷も——調教のために」

「ちよつと待って！ 今、拷問って言いかけてなかった!?! 僕これから何をされるの!?! ていうか、僕は君を怒らせるようなことした!?!」

「改めてわかったけど、明久君って……本当に乙女心に鈍感だよな」
「その辺り、兄さんと似通ってますね」

「だから何が!? ていうか、音姫さんも由夢ちゃんもどうしたんですか!? こんな状況放っておくんですか!」

「まあ、恨むなら恨めばいいわよ。出来る限り早く済ませられるよう努力はするから」

「高坂さん? その、手をボキボキ鳴らしながら近づかれるととても怖いのですが」

「はあ……あまりこういうのは気が進みませんが、あなたのそのバカな頭を治すことが出来るなら我が国の拷問方法を使っても……」

「今拷問って言った! 完璧拷問って言った! ていうかムラサキさん! その手に持つてる鞭って何!? 柄の方に何やらいくつものポタンが見えるんですけど! どんな機能が付いてるのそれ!」

「吉井……今こそお前の頭をかち割ってバカな方向に考えがいかないようにしてやっから。ついでに可愛い少女に囲まれてることについての恨みも晴らさせてもらおうぜ」

「涉に至ってはもう隠す気ないよね! 普通に嫉妬で僕を殺す気だよね!」

「一体本当にどうなってるんだ!? 僕、みんなを怒らせるようなことしたの!」

そして涉、君はFFF団に染まりかけてるよ!」

「ちよ、ちよつと待って! 僕、ななちやんに言っておきたいことがあるんだけど」

「明久、それはこれが済んだ後でもいいだろ?」

「義之までどうしちゃったの!? みんな僕を殺そうとしてるんだよ! ていうか早く言わないともう2度とこんな機会訪れそうにないのに!」

ななちやんが向こうに帰ってしまうからかということもそうだけど、何の邪魔も入らずに言えるのがいつになるのかわからないというのが大半だ。

「……ちよつといいかしら? 白河さんに何を言うのかしら?」

「え？ えつと……昨日言った通り、ななかちゃんにお礼と……ちよつとね」

最後のあたりで目線を逸らす。流石に告白してきます、なんて言える筈がない。

「……はあ、取り越し苦労だったみたいね」

「ほえ？ 何のこと？」

「義之、もう放していいわ」

「え？ でも、これから……」

「いいから」

「お、おう……」

何かよくわからないけど、杏ちゃんが義之に指示して僕の縄を解いてくれた。

「ふう……いきなり拉致して拷問しようとするからびっくりしたよ」

「そりゃあ、あんたが変な勘違いをしてたからね」

「勘違いって？」

「……もういいわ。それより、白河さんなら小恋と体育館裏にいるはずよ。すぐに行つてきなさい」

「あ、うん。それじゃあ」

「ええ。幸運を祈ってるわ。……あなたに春が訪れるといいいわね」

「それじゃあ行つてきます！」

見破られてる！ 杏ちゃんには完全に見破られてる！ 流石は雪村流暗記術の使い手！ 僕の嘘は全てお見通しだったか！

僕はこれ以上掘り下げられたくないのでダツシユで屋上を後にしてななかちゃんのいる体育館裏へと向かっていった。

明久が屋上を去る前に、杏が妙なことを言ったな。

「杏……今の言葉って、どういうことだ？」

さっきのはまるで明久が誰かに告白しようとしているかのような感じだったか。

「よくはわからないけど……あのバカもようやく吹っ切れたっぽいわね」

「え？ 何々？ それって、もしかしてもしかして？」

「ええ。そのもしかしてね」

杏と茜が盛り上がってるが、こっちは状況についていけない。

「えっと……それって、明久君……」

「ようやく、気づいたんですか？」

「え？ 明久が、気づいた？ 白河の気持ちに!？」

まさか、とてもそんな風には見えなかったぞ。

「いいえ。相も変わらず気づいてないでしょうね。あのバカ」

「え？ じゃあ、なんで……」

「勘違いはそのままだけど、どうやらどこかで白河さんに対する気持ち特別な方向に切り替わったみたいね」

「いや、どこで!?! いつの間に!?!」

「知るわけないでしょ。あのバカの考えてることなんて。ま、何にしても後はいつがちやんと白河さんに告白すれば万事解決ね」

「そ、そうか……」

俺達のここまでの苦労を返せとあいつに言いたいところだが、あの2人が両思いだというのがわかったのは幸いだ。

後はいつがこのまま白河に告白して、ずっと2人一緒に暮らすことを決意してくれればもう言うことはない。

「さて、行くわよ」

「へ？ 何処にだ？」

杏が何処かへ行こうと促すが、何処で何をする気だ？

「決まってるでしょ。このまま告白したとしても、あの2人やFFF団が邪魔しないとも限らないでしょ。いいえ、高確率で来るわね」

「ああ……」

確かに。あの3人やあのFFF団とやらしい集団が何処から明久の告白を聞きつけて現れるのか全く予想がつかない。

「だから、それを防ぐための人員は、必要よね？」

「おい、杏。それって、あいつらのボディガードを称したただの覗きじゃねえか？」

「人聞きが悪いわね。用心のためよ」

「いや、わからなくはねえが……人の必死の告白を覗き見するのはな……」

「何言ってるのよ。既に白河さんの告白を目撃してるんだから、今更1人や2人の告白を覗いたって変わらないでしょ」

「今あつさり覗きって認めたよな」

「いいから。なんとしてもあの2人に邪魔が入らないようにキツチリ監視するわよ」

「いや、だからって……」

「い、行こう弟君。絶対にあの2人をくつつけなきや」

「そ、そうですね……明久さんが逃げ出さないとともに限りませんし……」

「2人も何言ってるんだよ」

音姉も由夢も既に興味津々だった。駄目だ。乙女モードになったこの2人を止める術が俺にはない。

「よくっし！ 吉井と白河がくつつくように俺らでサポートするぜえ！」

「はいはい。肝心な所でヘマをしないよう気をつけなさいよね」

「おうよ！」

「……もういいよ」

駄目だ。もうやじうま根性丸出しのこいつらを止めることは俺にはできない。

すまん明久。この件が終わったら俺が詫びをしておくよ。

「えつと……体育館裏だったね」

僕は杏ちゃんの言った通り、体育館裏へと向かっていった。

だが、油断はしない。問題は常に僕の後を追けている。

まずは誰にも見つからないように行動する。特にFクラスのみん
なには絶対に目撃されないよう細心の注意を払う。

僕の姿を目撃されて妙な勘ぐりでもされたら下手をすれば二度と
告白するチャンスが来ないかもしれない。

もちろん告白する時の光景を目撃されても一緒だ。ひとりでも目
撃されればそれがたちまち他のメンバーにも広がって僕は死よりも
恐ろしい目に会うだろう。

だから行く時も言葉を口にするのにもかなりの慎重さが必要にな
る。

ともかく、ここまでは誰とも会っていない。どうやらほとんどの人
は大会の方が気になって席をはずせないようだ。

賞品が賞品なのだし、参加者が多いのも理由だろう。観戦だけの人
も恐らく華のある女子のいる方へ向かってる人も多いだろう。

参加者の中に割と美人な人も多かったわけだし。それに、美波が女
子の人気を集中させてるから女子の通行者も少ない。

本人は嫌がるだろうけど、美波の人気に感謝しよう。

僕はななちゃんがいるだろう体育館に着いた。そこでは小恋
ちゃんと会話しているななちゃんの姿が見えた。

相変わらずやたらと激しいスキンシップで小恋ちゃんにくっつき
ながらアレコレ話をしているようだ。

ああいう姿を見ているとほっとする自分があるって改めて実感す
る。ようやくわかった、自分の気持ち。

それを改めて自覚しながら僕はななちゃんのもとへ向かって歩
んでいった。

「あ、明久君」

向こうが僕の存在に気づいたのか、手を振っていた。

「あ、明久君。今はその……」

「ごめん、小恋ちゃん……ちよつとばかりななちゃんに言いたいこ

とがあるから」

「私に言いたい事？」

ななかちゃんは首を傾げ、何故か小恋ちゃんはどうしようかという風に慌てていた。

何か僕に言われたらマズイことでもあるのだろうか？ 小恋ちゃんにとって都合の悪いようなものはないと思うけど。

それからしばらくオロオロしていたが、ある方向を見ると急に動きを止めた。

何かあるの？ 僕は小恋ちゃんの視線を追ってみるが、特に怪しいものはないと思う。

「あ、えっと……じゃあ、私は席を外すね」

「え？ ななかちゃんに用があつたんじゃないの？」

「あ、あく……うん、今なくなつたみたいだから」

「はい？」

小恋ちゃんの日本語がちよつと変な気がする。一体どういうことだろうか？

「じゃ、じゃあ……私はこれで」

小恋ちゃんはそのまま何処かへと駆け出していった。なんかやたらと速いな。

「で、明久君。話して何？」

「あ、そうだった……」

そうだ。僕の本来の目的はこっちだ。今こそ言うんだ。僕の気持ちを。

僕はななかちゃんと向き合った。最初に出会ったのは僕が初音島に来たばかりの時だった。

当時はなんとなく明るくて、マイペースで、なんとも楽しそうな娘だなと思っていた。親しくなつた今でもそんな風に思っている。

しかし、ななかちゃんにだって僕達の知らない顔だつてあるだろう。ななかちゃんのモテっぷりに嫉妬した女の子の虐めのこともあつて、そこでななかちゃんが見せた顔。

あの顔は今でも覚えている。普段は心の底から楽しそうに過ごし

ているけど、彼女だつて普通の女の子だ。悩みくらいあつてもおかしくない。

アレを見るまでは僕も全く気づいていなかった。彼女の悩みに。そして、僕は何もできない自分を憎いと思った。

それでも、ななかちゃんはそんな僕の心境を知っていつもの笑顔で振舞つて、僕に接してくれてた。

その時からどうかななちゃんがずっと笑顔で過ごせるように頑張りたいと思ひ始めたのかもしれない。

だから、その第一歩のために……例えば、断られても、僕は君のために何かしたい。それを、今言葉に……。

「な、ななかちゃん」

「ん？」

ななかちゃんが無垢な表情で首を傾げる。

もう少し……もう少しで口に出せそうなんだ。耐える僕。そして今こそ告げる、この気持ち。

「僕、僕は……」

「うんうん」

くっ……さっさと出ろ、この言葉。

「僕は、ななかちゃんのことを——」

『吉井！ 少々来てもらいたいのだが！』

『『『ななかちゃんのことを本気で好きです!!』』』

……あれ？ 何か僕の声にエコーがかかっていたような気がしたけど？ それに、鉄人の声が聞こえたような……。

「え？ その、明久君……？」

その疑問の前に、目の前のことだ。僕は今やっと告白することができた。

後はななかちゃんの気持ちなんだけど……。

「えと……本当に、私でいいの？」

「も、もちろんだよ！ 本音を言えば、僕はななかちゃんを笑顔にした
い！ 傍にいたい！ これは心の底からの言葉だよ！」

「えつと……あの人達じゃなくて、私？」

「あの人達って……姫路さん達のこと？ 何で姫路さん達が出るかわからないけど、僕はななかちやんのが好きだ！ だから、僕とお付き合ってください！」

僕は頭を下げていた。告白で願望形で言うのはどうかと思うけど、願わくばと思わずにはいられなかった。

果たして、ななかちやんの答えは……。

「その……っ」

ななかちやんの瞳からは、涙が出ていた。

「え!? な、ななかちやん!? 何……ひよつとして泣く程嫌だった!?」
なんてこった！ 笑顔にするどころか泣かせるなんてバカか僕は

！

「ち、違うよ……だって、嘘みたいだもん……」

「な、何が……?」

「明久君が……私と、付き合ってくれ……なんて」

……付き合って、くれる? なんか、ななかちやんが僕と付き合うことを望んでいたというような言い方だ。

「えつと……言っておくと、嘘じゃないよ。その……今までなんとなく楽しいなって思っただけだと思っただけ……今日のゲーム中かな? ちよつとムカつくことがあつて。ななかちやんのこと、友達のこと……侮辱した奴がいたんだ」

もちろん、あの常村変態だ。

「その時に、自分の本当の気持ちに気づいた。でも、なんとなく……言葉にするのが怖かったんだ。断られるんじゃないかって」

「断る、わけないよ。ていうか、昨日のゲームでも告白してたじゃん。

私……」

「へ?」

ちよつと待つてほしい。今聞き捨てならない言葉を聞いた気がする。

「えつと……昨日のゲームでつて……アレって、モノホンの告白だったの!」

ええええええ!? アレって、ホンマもんの恋愛シチュエーション

だったのお!?

「ぷっ！ 何だと思ってたの？ 明久君てば」

「ああ、その……」

まさか、アレが僕を氣遣ってとかじゃなく、本当の告白だったとは思わなかった。

でも、その事実を改めて知ったら、恥ずかしいと同時にすごく嬉しくなった。

「あ、その……じゃあ、僕と、その……付き合ってくださいか？」

「うん。どうか、よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ、よろし——」

『『吉井いいいい——っ!!!』』

っ!?! い、今は、FFF団の嫉妬の咆哮!?!

『吉井の奴、あんな可愛い娘に告白した挙句、付き合うだってえ!』

『ふぎけん！ ジェントルマンの俺を差し置いて何でブサイクの吉井の告白が通るんだよ!?!』

『俺、密かに彼女を狙ってたのに……』

『キヤア——っ！ こんな所で、大胆!』

『駄目だよ！ アキちゃ——吉井君には、坂本君という素敵な人がいるのに!』

な、何故か僕の告白が一気に全校中に広がってFFF団からは嫉妬の言葉が、女子からは羨望の言葉が。最後のは若干違うけど。

「ていうか、ちよつと待って！ 何でいきなりバレてるの!?!」

『あく、その……なんだ、吉井。スマン』

「へ?。」

真上から声がしたかと思って視線を上へ向けると、体育館の屋上のディスプレイに鉄人が映っていた。

「って、何で鉄人が!?!」

『西村先生と呼べと言っているだろうが。いや、その……愛しき娘への愛の告白を叫ぶのはいいが、それはもう少し遅めの時間を選ぶべきだと思うんだ』

「ていうか、何で僕の告白が全校に!?!」

『いや、学園長のお達しでお前を呼ぼうとディスプレイを通信機代わりに使ってお前を呼ぼうとしたのだが、その際にまさかその子に告白しているとは思わなかった』

「そんな機能あるわけ!? ていうか、何でピンポイントで僕が体育館裏にいるのがわかるの!?!」

『ああ、お前の召喚獣だけは観察処分者仕様だからな。その使用者の位置情報を知るためにと召喚大会中はお前の情報がこっちにわかるよう学園長が改良したのだ』

「ババアの仕業かああああ!!」

あのババアが! こんな大事な時まで僕が邪魔をするとは、やはり僕を不幸のどん底に陥れる気かあの妖怪は!

『ああ、とりあえず……観察処分者のお前にやってもらいたいことがあるので、至急中庭の方に来てもらいたい』

「待って! その前に僕の保身を! このままじゃ僕は死よりも恐ろしい目に会ってしまいます!」

『むう……まあ、それも高校ならではの青春だ。頑張つて出来立ての恋人とその困難を乗り越つてこい。ま、頑張ることだな』

その言葉を最後にディスプレイの画面が消えた。最後に見た鉄人の今までにないくらいニヤついた顔が印象に残った。

「おのれ鉄人! 僕が苦境にいると知つての狼藉か! やはり卒業式の日伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つてやる!」

「斬新な告白だね」

「怖いと言わないでよ! 僕の好きなのはななかちゃんだけだよ!」

「はいはい。わかったからさっさと行きなさい」

「へ?」

いきなり第三者の声が聞こえたかと思うと、そこには何故か杏ちゃんや義之、他のみんなも揃っていた。

ていうか、いつから? まさか……。

「まさか……みんなして、覗いてたの?」

僕が言うのと音姫さんと由夢ちゃん、小恋ちゃんが目を逸していた。

ていうか、全員で覗いてたのか。

「スマン、明久。最初は俺も止めたんだが……」

「やっぱさ、気になるじゃん？」

渉がお茶目な仕草で舌を出しながら言うけど、ハッキリ言っただけで気持ち悪かった。

「ま、とりあえず告白は成功したんだからあんたはさっさと行くべきところに行っただけで、その後は青春をたっぷり堪能しなさい。あんたの行動で取りこぼしたものは私達がなんとかしておくから」

色々言っておきたいことはあるけど、このままここにいるのは危険すぎる。

ここは杏ちゃんの言う通り、まずは鉄人の所に行って速攻用事を片付けてからななかちやんと色んな所に行こう。

「じゃあ、行こう！ ななかちやん！」

「うわっ！」

僕はななかちやんをお姫様だっこの状態で抱えながらその場から駆け出していった。

これからの生活が更に前途多難になった気がするけど、今までのような不幸感はもうなくなった気がする。

第四十六話

「ぐお……」

「く、吉井の奴……」

「絶対に……殺す……」

明久が告白し、白河と両思いになれたことは本当に幸이었다。

これで問題のひとつ目は解決したのだが……まだ問題はほかにも色々ある。

まずひとつ目に、目の前で撃沈しているこのFFF団だ。ちなみに撃沈している理由はまゆきさんだ。

まゆきさんが翔子さんの家からスタンガンやら警棒やらを拝借してそれをFFF団のみんなに向けて使用した。

もう戦っている時のまゆきさん、完全に無双状態だったな。FFF団がひとり、またひとりとどんどん宙へ向けて殴り飛ばされたり投げ飛ばされたりだったし。

ていうか、まゆきさんどれだけ強いんだよ。それと、まゆきさんに渡したスタンガンやら警棒やらが何故霧島さんの家にあっただのかすごく気になる。

「ふう……とりあえずこんなところかしら」

まゆきさんは手に持つてるスタンガンと棒をしまつて満足げな表情をしていた。

こういう問題児を撃破している時のまゆきさんは水を得た魚状態というか、滅茶苦茶輝いてる。

とりあえず、FFF団の方はなんとかあった。残る問題は、

「明久君、何処に行ったのデスカ？」

「アキィ……もう腕を折るだけじゃすまないんだから」

あの2人だ。さつきから黒いオーラ背負って明久を探していた。ていうか、目が完全にイってる気が……。

「あ、あんたら！」

そして、向こうがこっちを見ると颯爽と駆けてきた。ていうか、姫

路さんは病弱って明久が言っただけだったか？

あの足の速さを見るとそんな設定がまるで嘘のように思えるのだが。

「あんたら、アキを見なかった？」

「みなさん、明久君を見ませんでした？」

「さつき西村先生の所に行ったのは知ってるが、あの様子じゃもう用事は済んで別の所に移動したんじゃないのか？ それに、例えば知ってたとしても、殺人事件が起こりそうだから絶対に言いたくない」

この2人ならそんな事件に発展してもおかしくはない。

「失礼ね。屋上から縄で縛り付けたアキを突き落とすだけよ」

「それはもう、十二分に殺人事件だから！」

本当……この人達の傍について今までよく生きてたよ、明久。

ともかく、これを聞いたなら尚更この2人を明久に近寄らせるわけにはいかない。

近づけた瞬間、白河もろともタダでは済まないのは目に見える。どうかこの2人を止められないかとアイディアを模索していた時だった。

「ふう……お困りのようなら、助けてやるが？」

「どわあ!? 杉並、お前今までどこにいたんだよ！」

何処からかいつものように手品の如く最初からその場にいたかのように杉並が現れた。

「いや、この文月学園のことを色々調べててな。うむ、ここが中々セキユリテイが固くてな。情報を集めるだけでも苦労したぞ」

「お前の経験談はいいから、この状況なんとかしろよ」

「ふくむ……あまり女子を傷つけるのは良心が咎めるが、まあ同士桜内の頼みであればしようがない」

では、と杉並は2人に向き直っていつもの振る舞いを始めた。

「な、何よあんた？」

突然の杉並の登場に2人が警戒心を抱いていた。まあ、初対面じゃ誰だって警戒心は抱くよな。

「ふむ……まず、姫路瑞希と言ったかな？」

「は、はい？ えと、何で私の名前……」

「先日から始まったすごろく大会の出場者の顔と名前とある程度の経歴は粗方調べさせてもらった。そして、俺は杉並だ。さて、自己紹介はここまでにして、姫路……君は振り分け試験の際、高熱を出して途中退席したらしいな？」

「何でお前がそれを知ってるんだよ？」

「それくらい、調べようと思えば誰だって調べられる」

「こいつは単体でどこまでの情報力を誇るのやら。相変わらず謎の多い奴だ。」

「さて、その試験で君は途中退席をしたが、その時に同士吉井と一緒にあって保健室へ連れていったそうだな？」

それは聞いてなかった。木下から聞いたのはあくまで姫路が途中退席してFクラスに落ち、更に体調不良な彼女をAクラス相当の設備の中で勉強させるのが理由で試召戦争を始めたっただけだからな。

「は、はい……」

「そして、その後でFクラスに入り、早速同士吉井は試召戦争を起こした。その理由は君がFクラスの環境に合わないから君のレベル相応の設備を用意しようという吉井の優しさあってこそだ。わかっているな？」

「はい……」

「それから、清涼祭で姫路。君の転校を阻止するために同士吉井も必死だったようだな」

木下の話では、その時は姫路さんのお父さんが娘の体調不良を心配して転校を勧めていたんだったな。

それはまあ、親としては当然の発想だと思うが。

「そして、清涼祭で誘拐まがいの事件があったそうだな」

そんなことまで知ってるのかよ。確か、表沙汰にはなってなかった筈なんだが。

「清涼祭で君達と島田妹が攫われ、不良達の魔の手が迫った時、間一髪で同士吉井が駆けつけ、その後も援軍が来てどうにか無事に切り抜けたようだな」

その事件について聞いた時は俺も危なかったなと思った。下手をすれば警察沙汰なのだから。

「その他にも色々あったな。お化け屋敷の時や2回目の試召戦争の時も。君達は幾度も同士吉井に助けられたようだが？」

「そ、それは……」

「それがどうしたのよ！」

「……ふう、ここまで言って尚わからんか」

杉並が呆れたようにため息をついて再び姫路さんと美波さんに向き直る。

「ハッキリ言っておこう。君達に、同士吉井にお仕置きする権利などはない」

杉並の言葉に2人は驚いたような表情をした。いや、普通に考えて当然だと思うのだが。

「な、何でよー！」

「何でもなにもないだろう。あの2人は互いに告白し、気持ちを伝えた上で付き合うことを決めたのだ。そこに他者が踏み込むのはルール違反というものだ」

おお、今回の杉並は何だか輝いて見えるぞ。

「それは……」

「でもー！」

「でも、何だ？ 吉井には女子と付き合う権利がないとでも？ それとも、自分と付き合わなくてはならないという決まりでもあるか？」

ここまで言ってもまだ勘違いをしているようならハッキリ言った方がよさそうだ。今ここに告げよう、君達は……君達の想いは最後まで同士吉井には届かなかったということだ。そして、白河が告白した時点で君達は既に負けていたということだ」

杉並の言葉に2人がショックを受けた。

「まあ、こればかりは俺からは自業自得としか言えんな。島田、君は普段から同士吉井に暴力を振りすぎたのが原因だ」

「な、何よー！ アレはアキが……」

「確かに、聞いたところ吉井は君を女として扱ってない時もあるみた

いだな。ただ、それはそもそも君の行動が原因だ。その暴力さえなければ少しは変わったかもしれないのだがな。それから姫路、君も同様だ。自分の気持ちを伝えていないわけでもないのに吉井が他の女子といるだけで暴力を振るったばかりに吉井は君達に恋愛感情どころか、一種の恐怖心を持ってしまったのだ。そうなのは君達の行動の結果だ。そうしてスタートラインを下げたのは君達なのだから誰かが応援したところで恐らく無駄だっただろう」

「……………」

「まあ、そういうわけで……あの2人はようやく互いの気持ちに気づき、今幸福な状態なのだ。邪魔をすれば余計に君達の地位を下げる結果になるぞ」

「……………」

2人は何も反応がない。杉並の言葉が相当堪えたようだ。

「ふう、ひとまずはこんなところか」

「杉並、お前すげえな……」

「今回は素直に感心しましたわ」

「いつもこれくらい人助けをしてくれば生徒会としても大助かりなんだけどねえ」

「ハッハッハ！ それは言わん約束であろう！」

口に出したらこいつは調子に乗りそうだが、今回ばかりは素直に感謝しておく。

「で、この人達はどうするんだ？」

「しばらくは放っておけ。下手に何か言っても逆効果になるだけだ。今は自分で考えさせるべきだ」

「そうか……」

「まあ、今回は杉並に賛成ね。あの子達も今回の反省してくれればいいんだけど……」

まゆきさんは元より考える時間を与えるつもりだったようだが、不安は隠せないようだ。

まあ、あの人達の行動がアレだったのだから無理もないんだが。

「とりあえず、障害はなくなったのだから吉井達にも報告するわよ」

「お、そうだな。それで、せめて明久にアレコレ質問攻めして恥辱の制裁を与えてやるぜ」

「渉、その手をやめろ。折角幸せの絶頂に辿り着いたというのに台無しにさせる気か」

とりあえず、障害の大半を駆逐した後、俺達は明久達と合流した。

すぐろく大会で3連続トップを取った翌日、僕は霧島さんの家で目覚めた。

何故霧島さんの家で寝泊まっていたかというのと、昨日3連続トップを取った祝いとして霧島さんの家でパーティをすることになったのだ。

出来れば我が家でやりたかったけど、予算の都合と姉さんの事と家の広さが十分でないためと姉さんの事があつて霧島さんに頼み込んでやらせてもらったのだ。

姉さんについては大事な事だから2回言わせてもらった。

パーティの時はななちゃんとカレカノになった時のこととか、僕がななちゃんを特別視した時の詳しい事とか色々質問攻めにあつた上に、ななちゃんと一緒にアレしろコレしろとか色々恥ずかしい注文もして騒がしい夜だったよ。

まあ、楽しかったからいいんだけどさ。

とりあえず、幸せなのはいいんだけど……

「姉さんとか、姫路さんとか……色々問題が山積みなんだよな」

そうだ。ななちゃんとか両想いになれたことにはしゃいでて忘れてたけど、最大の難関がまだ残ってたんだ。

主にあの3人が僕に彼女ができたと知れば確実に僕を殺りに来るのは明白だ。

どうすればいいものかと悩んでいた時だった。僕の携帯に誰から電話がかかってきた。

「はい、もしもっ……」

『吉井かい？ ちよつと頼みたいことがあるんだが』

「何の用でしょうか？ ババア長」

『はあ……いい加減その呼び方をやめてくれないもんかねえ。まあ、今はそこを指摘する余裕がないんだ。今すぐ学園に来な』

「は？ 一体何で……」

『いいから来な。3度も言わないよ』

そう言つて僕の疑問も聞かずにババア長は電話を切つた。

「……一体何だろう？」

何やらいつもと違つてちよつと慌ただしい感じの声音だった気がするけど。

色々疑問に思うことはあるけど、アレでも一応学園の長なのだから来いと言われたからには行くしかあるまい。

僕はすぐに身支度を整えて学園へと向かつていった。

「それで、僕を呼び出したのは何故ですか？」

「その前に、あたしが呼んだのはあんただけの筈なんだけどねえ……。何でこいつらまで連れてきたんだい？」

学園長は俺達に視線を向けてため息をついていた。

明久が学園長に急に呼ばれたというからもしかしたらあの扉のここかと気になつて杏達が率先して着いていった。

そして今に至るといふわけだ。

「それで、何で呼び出されたんですか？ もしかして、扉の事ですか？」

明久の言葉に学園長はあく、と微妙な表情を浮かべながら視線を泳がせていた。

「まあ、半分はそうさね。あの扉についてはもう少しでどうにかなりそうなどこまでいったんだが……」

「本当ですか!？」

学園長の言葉に俺達の周囲の空気が一気に明るくなりかけたのだが、

「その扉の解析に後一步のところまでいった反動なのかどうなのか、この学園の試験召喚システムに異常が発生したんだよ」

「……はい？ 試験召喚システムに？」

学園長の言葉に明久が疑問で返した。

「ああ。吉井には言ったが、あの扉から出る奇妙な反応は試験召喚システムが発生させる召喚フィールドと似たものさね。それがわかっているから試験召喚システムに基づいたあらゆる方法を試して、今回ようやくあの扉の解析が完全に終わるかと思っただけにあの扉から出る反応が試験召喚システムに侵入して異常を発生させてしまったんだよ」

「その、異常っていうのは？」

音姉が学園長に問いかける。

「召喚獣の暴走だよ。召喚フィールドがあちこちで展開したりしてその上物理干渉のオマケ付きだから危険なものに成り代わってね。だから吉井、あんたにはこれから暴走した試験召喚システムを止める手伝いをしてもらわなくちゃならないんだよ」

「手伝いって……僕はこのシステムのことなんてロクに知りませんよ？ 修理なんか無理ですよ」

「あんにそんな高度で繊細なことはさせやしないよ。あんたは暴走召喚獣をかいくぐってサーバルームの扉を開けてほしいのさ」

「サーバルームの扉を？」

「ああ。暴走した際、学園中のセキュリティシステムにも異常が発生したようでサーバルームの扉が開かなくなったのさ」

「でも、それだったら誰かに手伝ってもらうよりも電源を落としたり多少の危険を承知で壁を壊すかでもすれば……」

音姉がもつともな意見を言ったが、学園長は首を横に振って音姉の意見を否定する。

「残念だが、電源を落とそうにも無停電電源装置があるから主電源を落としても一ヶ月は稼働するさね。それに、壁破壊の案もただけな

いね。来週には先日のすごろく大会のPVと試験召喚システムを紹介するために、お偉いさん方が来訪するから派手なことは極力控えた
いんだよ」

「なるほど。お披露目の時に壁に穴が空いてるなんていくらなんでも
非常識だもんね」

確かに。お偉いさんの前でそんな失態をさらしたらこの学園の存
続は危ういことになるだろうな。

「だからその修理のためにあんたを呼んだのさ。システムのコアに近い
教師用召喚獣は完全にフリーズしきって召喚が不可能な状態に
なってるんだ。でもその点、観察処分者の召喚獣はシステムの別領域
で走ってるから他の生徒達と違って暴走の影響を受けなかったよう
だよ」

「なるほど。その上僕の召喚獣は物理干渉があるから」

「その通りさ。不具合のある教師フィールドを使っても、まともに召
喚することはまずできないだろうから——」

「俺が呼ばれたってわけか」

学園長の台詞の途中で第三者の声が聞こえ、振り向くと学園長室の
扉から坂本や木下、土屋、翔子さんに姫路さん、美波さんが入ってき
た。

「雄二、みんな」

「話は途中からだが聞かせてもらったぞ。とにかく俺の白金の腕輪を
使って召喚フィールドを発生させ、明久の召喚獣を使ってシステムの
回復を謀るってわけだな」

「ああ。すっかり頼んだよ」

「はい。あ、その前に回復試験受けさせてくれませんか？ 大会後か
ら一度も受けてないので」

「そうだね。しっかり点を取って作戦を実行しな」

「ういーっす」

明久は学園長室から出ていき、回復試験へと向かっていった。

『よし、早速作戦スタートだね』

『それはいいが、どうやってサーバルームまで向かうんだ？ 確かサーバルームへ続く扉は堅く閉じてるんだろ？』

視聴覚室にある大型モニターの向こうで明久がやる気になっていると、坂本が学園長に問うた。

言われてみれば明久の召喚獣は物理干渉とやらで他の召喚獣と違って壁を通り抜けることができないとか言ってたっけな。

「それは扉の前にある通気孔を通っていくんだよ」

『なるほど、召喚獣ならあそこは簡単に通れるね。でも、召喚獣だけ行かせても何処に何があるかさっぱりじゃ——』

『これを使え』

『つて、ムツツリーニ！ いつの間にも!? ていうか、これは？』

『送信機とカメラ。カメラは召喚獣の頭に取り付けておけ』

『了解』

「相変わらず、土屋は何処からあんなもんを購入してるんだよ」

まあ、その用意周到さがここで発揮されてるから何も言えないんだが。

「それで、私達はどうすればいいの？」

「何もやることないじゃくん」

「まあ、召喚獣とかさっぱりだもんな、俺ら」

俺達は召喚獣のことはてんで何も知らないので何をどうすればいいかなどわかるはずもなかった。

「あんた達はそこにある端末を操作してあいつに道順などを教えて先に進ませてやりな。何しろ通気孔からサーバルームまでは迷路のように入り組んでるからね」

「わかりました」

学園長に指示され、俺達も机の上に並んであった端末を開いて画面を見た。

でも、難しい言葉ばかりで何がなんだかさっぱりわからん。

「えつと、これどうすればいいんですか？」

「別に大した操作はいらないよ。それぞれの端末に載っている生徒の召喚獣がどこにいるかを見てやればいい。案内の方はうちの生徒にやらせるよ」

「は、はい」

とりあえず、ここからは気を引き締めていかないな。

「で、吉井。ちゃんと聞こえてるかい？」

「え〜……あ、うん。聞こえてます」

「なら坂本、召喚フィールドを起動させな」

『あいよ。起動！』
アウェイクン

画面の向こうで坂本が召喚フィールドを発生させた。

『それじゃあ、召喚！』
サモン

明久は召喚獣を出現させ、土屋からもらったカメラを召喚獣の頭に括りつけると召喚獣は通気孔の中へと入っていった。

「……明久、調子はどうだ？」

『えつと……うん、中はちゃんと見えてるよ』

どうやら土屋からもらったカメラはうまく作動してるみたいだ。

『それで、この後はどうすれば？』

「後は他の奴らが案内するから、そいつらの指示に従って進みな」

『了解』

それから明久は召喚獣を操作して通気孔を進んでいく。

「召喚獣、通気孔へ入りました」

「進路……クリアね」

「よし、明久。そのまま直進だ」

『了解』

俺達は通気孔に入った明久の召喚獣の進路を見ながら召喚者の明久に指示を送って導いていた。

「3m先を右に曲がって、次の十字路を左じゃ」

「あ、明久君。そっちだと別の空間に出ちゃうよ」

『ああもう、ややこしいな。なんでこう迷路みたいになってるわけ？』

「セキュリティの一種さね」

ビー！　ビー！　ビー！

「つて、何だ!?　なんかいきなり警報が鳴ったぞ!」

突然警報らしいものが鳴り響いた。まさかエマーゼンシー!?
何かあったのか!?

『だあああああ!?!　何か……何か体が痺れるんだけど!?　ていうか、召喚獣の点数が徐々に減ってるんだけど!?!』

「どうやらそこ……毒の沼地みたいよ。早く出ないとすぐに0点になっちやうわよ」

『何でそんなのがあんだよ!?!』

「セキュリティの一種だよ」

「こういった危険地帯も迂回した方がいいね。明久君、次の角を右に行って」

『りよ、了解……』

明久は痺れた状態で召喚獣を操作して別の通路を歩かせた。

『あ、何か明かりが見えてきたよ!』

「よし、いいぞ明久。そのまま進んでいけ」

『うん。………あれ?　何だろ?』

「どうした?　明久」

『何か、急に空間が変わったような……』

明久が正面に何か異常を見つけたようだ。一体なん……っ!?

「明久!　EクラスとDクラスの召喚獣、2体ずつ来るぞ!」

言うや否や、明久の召喚獣の正面で幾何学模様が展開して召喚獣が現れた。

『科目：現代国語　Fクラス　吉井明久　84点　VS　Eクラス　93点&85点　&　Dクラス　112点&98点』

明久の召喚獣の正面に4体の召喚獣が現れ、明久の召喚獣に襲いかかった。

「吉井!　4対1は不利よ!　今は退避——」

『いや、いける!』

明久はまゆきさんの言葉を無視して4体の召喚獣に向かってまっすぐ突っ込んでいった。

そして一瞬のうちに木刀をひと振りふた振り、更に回数振って通り過ぎた時には4体の召喚獣を倒していた。

「す、す……」

「自分より点数が勝っている召喚獣4体も相手に、すごいですね……」
由夢の言う通り、明久の召喚獣の操作技術はなんともすごい。上級のゲーマーの腕を見ているみたいだ。

「よし！ 召喚獣撃破！ そのまま進め！」

『了解！』

「待つて！ まだもう2体召喚獣が……これって!?!」

音姉が驚いていると、明久の正面に更に2つの幾何学模様が描かれ、そこから更に2体召喚獣が現れた。その召喚獣は、

『科目：現代国語 Fクラス 吉井明久 84点 VS Fクラス
ス 姫路瑞希 432点 & 島田美波 9点』

『ひ、姫路さんに美波!?!』

「気をつけて！ 攻撃が来る！」

音姉が叫んだ瞬間、姫路さんの召喚獣が明久の召喚獣に向けて大剣を振り下ろしてきた。

『うおおおおお!?!』

「姫路！ 島田！ コントロールは出来ねえのか!?!」

「駄目！ 無理！」

「逃げてください！ 明久君！」

『くっ！ このお!?!』

明久はどうかにか姫路さんの猛攻を回避するが、その先には美波さんの召喚獣が待ち構えていた。

美波さんの召喚獣が鞭を振るい、明久の召喚獣を縛って床に叩きつける。

『があー！』

「明久！」

明久の召喚獣は縛られたまま、美波さんの召喚獣の攻撃になす術もなくただ受けるだけだった。

『ぐう！ があっ！』

「吉井!」

「吉井君!」

「明久君!」

更にそこに姫路さんの召喚獣も加わって今度は大剣でなく、鈍器で明久の召喚獣を痛めつけていた。

『があああああ! や、やめて! 美波! 姫路さん!』

「……あのさ、アレ……本当にコントロールできないんだよな?」

渉が疑惑の籠った目で姫路さんと美波さんを見ていた。

「ちよつと! 何よその目は!?!」

「そうです! 冤罪です!」

「と、言ってもなあ……」

「普段の行動とデジヤヴがありすぎるぞい」

木下の言う通り、あの2人が明久に暴行を加えてる現場を見たことはないが、実行すればあんな感じじゃないと思えてしまう。

というより、木下が言っていることが本当なら、あの2人は普段から明久にああいった暴力を振るってたということか。

「ちよ、姫路さんの召喚獣の腕輪が光ってる!?!」

「げっ!?! ありやあ、熱線を打つ気か!?!」

「熱線!?! ただでさえ姫路さんの点数がかなり高いのに加えて熱線、それに明久はフィードバックが!」

「明久君、逃げて!」

「……駄目ね。身動きが取れないわ」

『そ、そんな! ねえ! やめて、やめてよ! 姫路さん……姫路さあ
ああああん!!』

明久の懇願の声も虚しく、姫路さんの召喚獣は熱線を放ち、明久の召喚獣は塵に還った。

「……明久の召喚獣、戦死」

『戦死者は補習く』

『こんな扱い、あんまりだあああああ!!』

「あ、何か生き返ったっぽい」

「フィードバックで相当やられた筈だよな? 明久の奴」

「ま、回復力だけが取り柄だからな。あのバカは」

坂本が辺り前のように言った。フィードバックを体験してない俺にはわからんが、見てるだけで相当痛そうだったと思うが。

「にしても、作戦失敗ね」

「はあ……仕切り直しさね」

杏の言葉に、学園長がため息混じりに呟いた。

「で、明久が補習を終えるまでどうするんだ？」

「とりあえず……さっきまでの戦闘を改めて確認して次の作戦でも決める？」

小恋の言葉に全員が頷いた。とりあえず、何もしないよりはその方がいいだろう。

「あ、でしたら……ついでに食事にもしましょうか？」

「お、なんかうまそうなサンドイッチ」

俺たちが作戦会議をしようとしたところに姫路さんが結構な量のサンドイッチを出してきた。

「今朝学園長が緊急事態だからといって、もしかしたら時間がかかるかと思ひまして、サンドイッチを作ってきました」

「おっしやラッキー！ 女子高生の手料理い！」

渉が嬉々として姫路さんの手作りサンドイッチを手にとって口へ運ぼうとしていた。

………待て。姫路さんの……手作りサンドイッチ？

明久の話だと、確か姫路さんは……。

「ま、待て板橋！ その手を止めろ！」

俺が姫路さんの料理の腕の事を思い出すと同時に坂本が渉を止めようとしていた。

だが、時既に遅く、渉はサンドイッチを口に含んだ。

「なんだよ坂本、大声出して……ふくん、パンを使ってるくせにザラザラした触感にレモンのような強烈なすっぱさとんでもない辛味が混ざり合い、ドロドロした野菜のようなものの香りが口の中で独特のハーモニーを——ごはあ!？」

「涉うううう!？」

「きやあああああ！ 渉君が、渉君が倒れたああああ！」

姫路さんのサンドイッチを口にし、聞いただけで気持ち悪くなるような感想と共に奇妙な声を上げて渉が倒れ込んだ。

「まずい！ 秀吉、ムツツリーニ！ 急いでAEDと点滴だ！ 急げ！」

「もう持ってきておる！」

「……殺菌用のお茶も完璧！」

「よし！ すぐに蘇生にかかる！ 始めろ！」

「承知した！」

「……合点！」

それからすぐに坂本たちが渉に治療を施し、一命を取り留めた。いや、下手なレスキュー隊よりもすごいんじゃないかね、お前ら。

『姫路さん……あのサンドイッチは何かしら？』

『え、あの……音姫さん？』

『あのサンドイッチ、何を入れたのかな？』

『え……その、隠し味に硝酸と塩酸を……』

『姫路さん……薬品は調味料じゃないんだよ？ それに、味見だつてね？』

『あ、味見はその……太るので……』

『……姫路さん』

『……は、はい』

『ちよつとそこに正座なさい！』

『はい！』

向こうでは音姉が姫路さんを叱ってる姿があつた。相手を正座にした状態での音姉の説教は恐ろしいからなあ……。

まあ、今回は姫路さんの自業自得だけど。それにしても、ああも簡単に人の命を奪いかねない料理を明久たちは口にしていたのか。

何度も思っただけど、あいつら……今までよく生きてたな。

第四十七話

「ふっ……地獄を見たぜ……（ガクッ）」

「久々の鉄人の鬼の補習、相当堪えたようじゃのう」

「……合掌」

「あの、西村先生の補習ってそんなにすごいのか？」

「ああ、あんな牢屋みたいなどころであのしごき……もう拷問だろ」

「拷問って……」

明久が補習から帰ってきて力尽きていた。

姫路さんの召喚獣による攻撃をフィードバック付きで受けた上に補習、この後は補充試験。精神的にかなりキテるだろうな。

「しっかし、まるで狙いすましたかのような猛攻だったわね、アレ」

「見ていて痛々しいことこの上ありませんわ」

まゆきさんとムラサキの言う通り、アレは見ているだけで体中が痛くなる。

片方がAクラスの中でも上位に位置する点数らしいからFクラス相当の明久はかなりの痛みを感じただろう。

「……ハッ！ 僕は一体……」

「あ、気がついたんだ。明久君」

「あれ、なかなかちゃん？ 僕は確か……ああ、そうか。姫路さんの召喚獣に焼かれて鉄人の補習を受けたんだっけ？」

「うん……」

「あの、明久君、大丈夫ですか？」

「大丈夫なの？ アキ」

「……う、うん。一応」

「……何でウチらから距離を取ってるのよ？」

「そりゃあ、あんな目に会えばトラウマになったって不思議じゃないわね」

「見てて私達もすごい震えたよ」

「う、うん……」

「何でこんなことになるのよ」

「せめてお友達として挽回したかったのに、どうしてこう裏目に出るんでしよう?」

雪月花の3人に言われ、膝を着いた姫路さんと美波さん。同情はするが、それはあなた達の普段の行動が祟っているんだと思う。

「さて、色々キツイだろうとは思いますが、さっさと回復試験を受けて再び作戦続行するんだよ」

「ちよ、明久君はついさっきまで戦って疲れてるんですよ!」

「それに、姫路さん並みの点数を持った召喚獣が何度も来たら、正直いつ成功するか」

「まだ出てきてませんが、そんなのをいちいち相手にしていたら正直やってられません」

確かに、いくら明久が召喚獣の操作がうまいと言っても立て続けに姫路さん並みの点数を持った召喚獣が来たら勝目はない。

よほどの高得点を持ってなければ成功するのはとても難しい。

「……今から勉強しても、すぐに効果がないと意味がない」

「そうじゃのう」

「それなら、いい方法があるぞ」

「「え?」」

坂本の言葉にその場にいた全員が疑問符を浮かべた。

「おい、坂本。本当にすぐに効果の出る方法があるのか?」

「いや、そんなもんはない」

「じゃあ、一体どうやって高得点を取るんだ?」

「そんな難しいことじゃねえ。勉強もする必要もないからな。既に手配は済ましてある」

「へ?」

俺が首を傾げると学園長室の扉が開いてひとりの女性が入ってきた。

「坂本君、言われた通りのものは用意しましたが、こんなもので何を?」

「来たか、高橋先生。いや、この作戦を成功させるための大事なもの

だ。おい明久、すぐに回復試験しろ」

「え？ う、うん……いいけど」

明久が用意された机に座り、高橋先生が明久の机にテスト用紙を広げる。

「……あれ？ これって……これならいけるかも！」

「では、回復試験……始めてください」

「よっしゃあー！」

回復試験の合図を聞き、明久は猛スピードでテスト用紙の解答欄を埋めていく。

何だかこれでもかかってくらいに解答が速い気がするんだが。

「おい、坂本。手品のタネは何だ？ もったいぶらないで教えろよ」

「別に大したことはしてねえよ。ただ、問題のレベルを変更しただけだ」

そうやって坂本はテスト用紙の一枚を俺達に広げて見せた。

「……これ、小学1年の問題？」

音姉の言う通り、これは明らかに小学生の問題だった。

「なるほどのお……小学生の問題ならば、明久でも簡単に解けるとい
うわけじゃな」

「……高得点を取るには手っ取り早い方法」

「ちよつとチート臭えけどな」

なるほど。小学生の問題なら簡単に大量の点数を取ることができ
るというわけか。

これなら確かに大した勉強は必要ないわけだ。

「よつし。これでいけるー！」

明久が回復試験を終えてペンを起き、準備を整えた。

「それじゃあ、作戦続行だね」

「はいさー」

こうして、再び作戦が実行されるのだった。

「こっちは準備万端じゃ。いつでもよいぞ」

「……オールオツケー」

『よっし。行くぞ明久。起動！』
アウェイクン

『よっし……サモン！』

明久が呼び出すと、足元から召喚獣が現れた。

『科目：総合　Fクラス　吉井明久　79834点』

「おお、明久が見たこともない点数を誇っておるぞい」

「これならいけんじゃね？」

『よっし！　今度こそクリアしてみせるぞ！』

それから再び作戦が開始された。

『よし、明久。その先の角を左に曲がれ』

『了解』

「え？　坂本君、そっちは——」

ビー……ビー……ビー……

『ぎゃあああああ！　また痺れがあああああ!!』

『強くなっても痺れるんだな……』

『試さないでよっ！』

「ていうか、真面目にやれよ……」

折角の高得点だつつうのに台無しにする気か坂本は。

「うん、その先の十字路を左に行つて」

『了解。……ん？　アレは……』

明久が進路の先に何かを見たようだ。モニターには……、

「来た！　Fクラスから召喚獣3体！」

報せた瞬間、明久の正面に幾何学模様が3つほど展開し、そこから

は——

『雄二！　ムツツリーニ！　秀吉！』

「農らの召喚獣か……」

「……姫路たち同様、コントロール不能」

『このまま押し進むのみだ！』

「気をつけてください！」

「土屋もいるわよ！」

『大丈夫！ 回復試験でかなり点数取ったし、今回の科目は現代国語だから——』

『科目：現代国語 Fクラス 吉井明久 8694点 VS Fクラス 坂本雄二 147点 & 木下秀吉 112点 & 土屋康太 6点 』

『——保健体育の使えないムツツリーなんて、敵じゃない！』

明久の召喚獣が通り際に木刀を一閃し、一瞬で決着がついた。結果だけ言えば、もう圧倒的だった。

「0点になった戦死者は補習——っ！」

「り、理不尽じゃ！」

「……不条理」

「問答無用！ 坂本、お前も事が済んだら補習だ！」

「冗談じゃねえ！ 召喚獣が勝手に負けたんだぞ！」

「黙らんか！ いいな！」

『くっそー！ 事が済んだ瞬間、絶対逃げ切つてやらあ！』

坂本が逃走を決意した瞬間だった。

『うおおおおおおお!!』

モニター越しでは明久の召喚獣が突っ込みながら次から次へと出てくる召喚獣を片っ端から片付けていた。

もう完全に明久無双だな。今の明久は最早無敵だ。

「オーケー、吉井。後はその十字路を右に行つてまっすぐ進めばサーバルームよ！」

『了解！』

明久はまゆきさんの指示に従って召喚獣を進め、正面に見える光へと猛スピードで進んだ。

『見えた！ 出口！』

勢いよく光に飛び込むと、だだっ広い空間に出てきた。恐らく、あそこがサーバルームなのだろう。

『学園長！ 着きましたよ！』

「わかってるよ。まずは扉の方だ。近くにモニター画面とそれを操作

するためのキーボードらしいものがあるはずだよ」

『えつと……あ、ありました!』

「まずはそこで緑のボタンを押すんだ。それは非常用のスイッチでそれで扉がこつちの意思で開閉できるようになるのさ」

『了解』

「待って、明久君! そつちは危な——」

ななかが最後まで言い切る前に明久の召喚獣の眼前で爆発が起きた。

『な、何?!』

明久の召喚獣が直前まで立っていた場所にはクレーターができていた。そこから土煙が舞い、その中から2体の召喚獣の影が出てきた。

『くそつ! ここに来てまで姫路と島田か!』

『でも、大丈夫! いくら姫路さんでも今の僕の点数なら——つて!』

『科目: 日本史 Fクラス 吉井明久 15682点 VS F

クラス 姫路瑞希 12934点 & 島田美波 9985点』

『姫路さんと美波の召喚獣の点数が異様に高いんだけど!』

『……多分、他の召喚獣の点数を吸収してる』

『そういうことか! 道理でここに来るまで敵との遭遇率が低かったわけだ!』

翔子さんの予想に坂本が地団駄を打った。なるほど、それならあの2人の点数も納得がいく。

そう考えてる間に2人の召喚獣が明久の召喚獣に襲いかかってくる。

『このっ!』

明久は召喚獣の攻撃をギリギリ回避して反撃しようとするが、2人の召喚獣が予想を遥かに上回る動きに一瞬隙が生まれ、そこを突かれて召喚獣に縛られた。

『えっ!? ちょ、何で2人の召喚獣がここまで動きがいいの!』

『そりゃ、人の考えで動くよりは自動化の方が動きに迷いがなからな』

『く、ついつい普通の癖で……って、痛あああああ!』

明久の召喚獣が2人の召喚獣によつて再びリンチにあう。倒そうと思えばいつでも倒せそうなのに何故かその姿を楽しんでるように見える。

「あのさ、もう一度聞くんだけれど……本当にコントロール不能なのよね?」「だから違うって言ってるでしょ!」

「私達だつてできればやめさせたいです!」

2人は無実だと言ってるが、あの様を見てみると本当なのか疑わしくなつてしまう。

『ぐっ! あぐっ! くっそおおおお!』

いや、そんなことを考えてる場合じゃない。早くなんとかしないと明久の召喚獣が再びやられてしまう。

どうにかできないかと考えていた時だった。

ビー!… ビー!… ビー!…

「こ、今度は何だ!?!」

『おい! まだ召喚獣が1体残ってるぞ!』

「こんな時にもう1体!?!」

「暴走召喚獣1体……Dクラスの召喚獣!」

『あ? Dクラス……まさか——』

すると、明久の召喚獣から少し離れたところからドリル頭の召喚獣が出現した。

「お姉さま~~~~!」

「み、美春!?!」

いや、召喚獣だけじゃない。こつちにもドリル頭の少女がモニター越しの召喚獣と同様、美波さんに抱きついてきた。てか、誰?

「ちよつと美春! 何であんたがここに居るのよ!?!」

「例え召喚獣同士といえど、豚に抱きつくなんて許せませんわ!」

「ちよ、放して! ウチにそんな趣味はないから!」

何だか入つてはいけない空気が俺のすぐ近くで展開されているのだが。

『チャンスだ!』

明久はこれを好機と見て美波さんと美春と呼ばれた少女の召喚獣を一気に片付けた。

「0点になった戦死者は補習——っ！」

「いや——っ！」

「お姉さま、愛しております」

「……………何だったんだ？ アレ」

「さあ…………？」

アレには深く関わらない方がいいのかもしれない。

『よしっ！ 残るは姫路さん！』

明久は今までの分を全て姫路さんの召喚獣に返し、最後の一闪で姫路さんの召喚獣を派手に吹き飛ばした。

『やった！』

『よくっし、後は扉を…………いや、待て明久！ まだだ！』

『え？』

見ると倒れた筈の姫路さんの召喚獣が再び立ち上がってきた。しかも、姫路さんの召喚獣の姿が先程と異なっていた。

鎧からは黒い羽のようなものが生え、大剣も禍々しいデザインに変わり、悪魔の尻尾のようなものも生えてきた。

『科目：日本史 Fクラス吉井明久 418点 VS Fクラス

姫路瑞希 15000点』

『さ、更に増えている!』

『まずい！ 逃げろ、明久！』

坂本が指示を飛ばすも既に遅く、姫路さんの召喚獣が明久の召喚獣に猛攻を仕掛けてきた。

『があー!』

明久は召喚獣を通して姫路さんの猛攻によるダメージを受けてその場に蹲る。

「明久！」

「明久君！」

「無理です、明久君！ 逃げてください！」

『だけど、ここまでできてそんなこと——ぐあああああ!!』

明久の言葉は最後まで紡ぐことはなく、再び姫路さんの特攻を受けて明久は悲鳴を上げた。

「明久君！」

「学園長！ もう無理です！ すぐに引かせるべきです！ 生徒に無益な苦痛を強いるのは、教育者のすることではありません！」

「……………」

高橋先生が学園長に講義するが、学園長はただ沈黙して現状を見ていただけだった。

『まだだ！ まだ僕の召喚獣はやられてない！』

「無茶言ってるじゃねえ！ お前、立ってるのもやつとじゃねえか！ オマケに吉井の点数は残り少ないじゃねえか！ そのままで勝てるわけねえだろ！」

渉の言う通り、今の明久の点数では姫路さんの召喚獣に勝つのは無理がありすぎる。

例え遠回りになろうともここは一旦引くべきだと思う。

「彼の言う通りです！ あなたと姫路さんとは実力が違いすぎます！ 今すぐに引き返しなさい！」

『だけど、だからって……………実力？』

突然、明久が思案を巡らせるような顔をした。

『……………そうだ！ 僕の召喚獣のように、実力が点数差になるとは限らないんだ！』

『は？ お前、何を……………そういうことか！ おい、姫路！ 今すぐ回復しけんを受けろ！』

「え？」

「何言ってるの坂本君！ 今回復しけん受けたらどんな風に変化するか——」

『受けるだけでいいんだ！ 試験を受けて、用紙に名前を書いてさえくれれば！』

音姉の制止の声も無視して明久が姫路さんに対して懇願する。姫路さんは明久の言葉が何を意味するのがわかったような顔をした。

「そういうことですね。わかりました！ 高橋先生！ 回復試験を

！」

「これ以上あなたが点数を増やしたら吉井君に勝目はありませんよ？」

「お願いします！」

「……わかりました。すぐに」

姫路さんと高橋先生はひとつの机に集まり、回復試験を始めた。明久も坂本も何を考えてるんだ？

「……ふっ。中々やるじゃないか、クソジャリ共」

「え？」

学園長がにやけた顔で何か呟いていたが。

『明久！　なんとしても持ちこたえろ！』

『わかってる！　はあああああ！』

姫路さんが回復試験を受けてる間に明久と姫路さんの召喚獣の攻防はいつそう激しくなっていた。

明久は主に回避に専念して姫路さんの召喚獣の攻撃を見事に流していた。

「先生！　採点お願いします！」

「え？」

まだ始めて何分もたっていないのに、姫路さんが解答用紙を高橋先生に渡していた。

『明久！』

『よっしやあああああ！』

坂本の声に応え、明久は姫路さんの召喚獣に突っ込んでいった。2体の召喚獣の武器の矛先が互いの身体に直撃した。

「明久！」

「明久君！」

2体の攻撃がぶつかり合った中、この戦いはどっちが勝ったのか。2体の召喚獣の頭上の点数表示に視線を泳がせた。

『科目：日本史　Fクラス　吉井明久　4点　VS　Fクラス

姫路瑞希　0点』

「回復試験の結果……姫路瑞希、0点」

点数の表示を見るのと高橋先生の回復試験の結果の情報が同時に俺の頭に入ってきた。

同時に高橋先生の言葉に俺だけでなく、その場にいる全員が目を見開いた。

姫路さんはAクラスの中でも上位に位置する学力を持つはずが、試験の結果が0点なのに驚きを隠せるわけがない。一体何故だ。

「…………この解答用紙、名前を書いただけ」

翔子さんの言葉に納得した。そうか…………回復試験を受けさせたのは名前を書かせて解答用紙を出すということだったんだ。

解答欄を埋めることなく、名前だけを書いて用紙を出せば実力云々関係なく、誰でも0点を取ることができる。

明久がやった小学生の問題を大量に取るのとは逆のパターンの作戦だったわけだ。

『ふう…………学園長。扉のスイッチは入れました。これで、終わっ…………』
ドサツ、という音が聞こえ、モニターに視線を移すと、明久が扉の前で倒れていた。

「明久！」

「明久君！」

倒れた明久を見てなかなか一目散に駆け出していった。

「さて、あたしはすぐに修理にかかるとするか」

「お供します。まったく…………学園一の問題児にこんな重要な仕事を任せるなんて、分の悪い賭けもいいところですよ」

高橋先生の言葉に流石にちよつと腹がたつた。それが今回一番の功労者に対する言葉かと言おうとした時だった。

「別にあたしは賭けだなんて思っちゃいけないよ」

「え？」

「何だい、あんたはすぐろく大会を見て何にも思わなかったのかい？」

ちよつと点数と素行を見るだけじゃ、あいつの本来の姿なんて一生わからないよ。そのうち、あんたにもわかるさ。バカとの付き合い方が」

「はあ…………」

学園長はモニター越しでななかに運ばれる明久を見ながら言うと、学園長室を後にした。

とりあえず、これで暴走召喚獣の件は片付いたのだった。俺達も明久の様子を見に行かないとな。

第四十八話

「ん……」

「あ、明久君!? 目覚めた!？」

「ん……あれ? ななかちゃん? 僕は……」

僕が目を覚ますと、何故かベッドの上だった。何で僕、ベッドの上で寝てるんだろ?

「あれ? 明久君、覚えてない? 作戦が成功した後でフィードバックの痛みとか疲労とか蓄積したのが原因だって……それで気絶したんだって」

「あ、そういえば……」

よくよく思い出してみたら確かに学園長の言う通り、扉を開けるところからの記憶がなくなっている。

それ以前の記憶も少しずつハッキリしていった。姫路さんに美波の召喚獣と戦った事、拷問されたこと――

「あ、明久君! 目が覚め――」

「アキ! ようやく――」

「ごめんなさ〜い!」

姫路さんと美波が入ってきたと同時に僕は保健室からダッシュで逃げ出した。

「――ましたか……って、明久君!? 待ってください!」

「――目が……って、アキ! アレは違うってば!」

2人が何か言ってるけど、今は正直言ってあの2人がすごく怖い! 知らずのうちに身体が逃げろと警告している!

僕は本能の赴くままあの2人から逃げていった。

「アキ――ッ!」

「明久君!」

召喚システムの修理も終わったところで明久の見舞いに行こうと来てみれば明久があのだの2人の入室と同時に痛みと疲労の蓄積で寝転がった者とは思えないほどの速さで保健室から離脱していった。

マジでとんでもない速度だったぞ。

「明久君……すごい速さで逃げていったね」

「もう、あのだの2人に対してトラウマができてしまったようですね」

「まあ、今までならなかったこと自体が奇跡的だと思うが」

今まで遅れたのが今回になって発症してしまったということなのだろう。

2人は明久を追って保健室から出て行ったが、今追いかけたところで多分明久は逃げ続ける一方だろうな。

「自業自得ではあるけど、流石に今回はちよつと同情するかな……」

どうにか仲を取り戻すくらいはしてやりたいところだが、流石に今回ののは以前と同じくらいハイレベルな事態だぞ。

「む……君達か。吉井はいるか？」

後ろの方から声がして、振り返ってみるとそこには西村先生がいた。

「あ、西村先生でしたか」

「うむ。ところで、吉井はいるか？ そろそろ目が覚めてる頃だと思っただが」

「ああ、明久は今……」

「全力で姫路さんと美波さんから逃げてる最中です」

俺が言う前に杏が淡々と説明した。ストレートに。

「姫路と島田から？ 何故そんなことになる？」

「そりゃあ、あんな事になれば……というより、西村先生は見てなかったのですか？」

「ああ、俺はFクラスのバカ共の補習で手が離せなかったからな。吉井が随分活躍したそうだが」

「まあ、確かにそうなんですけど……途中があまりにも悲惨で」

決して児童に見せてはならない……下手すればR指定のホラー映画にしてもいくらいのとんでもない光景だったな。

「む〜……よくはわからんが、それはまた聞くことにしよう。まあ、吉井でなくとも君達も関係者のようだから学園長室まで同行してくれるかい?」

「学園長室ですか?」

西村先生の言葉に音姉が問う。

「ああ。召喚システムが復興したと同時に君達が知りたかったものの正体がわかったと言ってたが」

「本当ですか!?!」

あの扉の正体がわかったのか。

「そうらしいな。そういうわけだから、まずは君達だけでも学園長から聞いた方がいいと思うが……」

「わかりました!。ありがとうございます!」

「うむ。さて、俺はFクラス連中の補習の続きがあるのでこれで失礼する」

そう言っつて西村先生は廊下を通り過ぎていった。

ようやくあの扉のことがわかったか。言われなくてもなんとなくわかるが、とりあえず聞いておこう。

「みんなはどうする?」

「もちろん行くぜ、学園長室!。ようやく帰れるんだろ、俺達の輝かしい学園に!」

「まあ、まだ帰れると聞いたわけじゃないけどね」

「せっかくのところは水刺すなよ杏!」

「まあ、あの扉のことがわかればそれだけ帰れる日も近いってことだから素直に嬉しくはあるわ」

「とりあえず、みんな行くってことでいいんだな?」

俺の言葉に全員が頷いて学園長室へと向かっていった。

「ああ、やっと来たかい。おや?。吉井はいないのかい?」

「ああ、明久は……ちよつと、とある事情によつて逃げてる最中です」

「何だい。あの2人から逃げてるってことかい。まったく、女に対してはとんちキン野郎だね」

「いや、あれは仕方ないのでは……」

というより、自分の学園の生徒をチキン呼ばわりするのはどうかと思う。

たまに明久もこの人をババア呼ばわりしてるけど、一番の理由はこの人の態度にあるのかもしれない。

「まあ、あのバカがいてもいなくても別に支障はないからこのままあの扉についてわかったことを話すよ」

「はい」

それから学園長の口からあの扉について聞かされる。

「ああ、まずあの扉なんだがね。アレからは試験召喚システムが発する特殊な波長と似通った波長が出てたのさ」

「それは、前に聞きましたね」

「それを細かく調べようとして暴走事件が起きたんですよ？」

音姉の言葉に苦い顔をしながら学園長は頷いた。

「ああ。あの時は本当に焦ったけどね……。まあ、吉井が暴走を止めたおかげであの扉の調査も順調に進んだけどね」

「それで、あの扉のことについてはわかったんですか？」

「ああ……とりあえずあの扉は——」

「既に開くようになったというわけだ」

「どわあ!？」

横からいきなり杉並がしやしやり出てきた。本当に突然だったから驚いて大きく後退した。

「いきなり出てくるな！ ていうか、何処に行ってたんだお前は？」

「無論、あの扉にだ。あの暴走事件は扉を調べて起こったのだろう？」

ならば解決後がどうなったのかたつた今調べてきたが……既に扉の鍵が開いてあの扉の向こうに行くことが可能となった。どうやらあの扉の鍵となる条件が試験召喚システムにあったようだな」

「そ、そうなのか？」

「はあ……何処から現れたのか。それと人の台詞に割って入るんじや

「ないよ、クソジヤリ」

「ハツハツハ。とまあ、そういうわけで我々はいつでも向こうへ帰れるようになった。喜べ諸君！」

あの扉に関してもう少し悪戦苦闘するかと思っただが、意外とあっさり解決して喜ぶ気もちよつと薄れちまうな。

「向こうへ……とは、どういうことだい？　まるであんた達があの扉をくぐってきたという感じだが？」

「あ……」

杉並……ここに学園長がいるの忘れてやがったか。学園長に今の話を聞かれて怪しまれてる。

「いやいや、実はわたくし共は別の世界から来たのです。以上」

「ストレート過ぎだろう」

杉並は隠す気もない風に学園長に言った。

「ほく……にわかには信じがたい話だが、あの扉に執着していたことといい、あんた達の名前が日本の戸籍に残ってないのも納得がいったよ」

だが、学園長は疑うでもなく笑うでもなく、納得した風に頷いた。

「えつと……信じるんですか？　こんな話」

「普通だったら笑い話で終わらせてるだろうが、召喚システムを逆に侵食するとかあの扉が全く動かないとか普通じゃありえない要素が盛られてるんだからね。そんな普通じゃありえない話が来たって今更驚きはしないよ」

俺達から言わせてもらえばこの学園の試験召喚システムも普通じゃありえないものに分類されるんですけどね。

ともかく、信じてくれたならそれはそれで話も進みそうだからいいんだけど。

「えつと……まあ、そんな感じであの扉が開かなきゃ永久にこの世界彷徨ってたんで」

「そうかい。ま、あたしとしてはいいデータが入ったことだし……それについては感謝するよ。あんた達のお仲間のおかげで企業
の奴らにもいい見せしめができたしね」

学園長は特に気にした風もなく、データが載っているらしい書類に目を通しながら呟いた。

まあ、口は悪いものの、ここまで調べて俺達が帰れるきっかけをくれたのだから感謝はしている。

俺が学園長にお礼を言おうとした時だった。

「学園長——っ!!」

突然学園長室の扉がものすごい勢いで開き、そこから明久が駆け込んできた。

「なんだい、またあんたかい。入る前にはノックをしると何度言ったら——」

「そんなのはどうでもいいですから! とりあえずこれ!」

バン!、とこれまた勢いよく一通の封筒を机に叩きつけて差し出した。

その封筒の表面には、『吉井明久 退学届』と書かれていた。

「退学届? 何でいきなりこんなもの出してくるんだい?」

「本格的に家出するためです!」

言い切った。たったの一言で重大なことを言い切った。

「何で家出なんてする……ああ、あんたの彼女のもとへ行きたくなくなっただってことかい?」

学園長がニヤニヤしながら明久に問うた。まあ、明久と白河が付き合い合ったというのはもう周知の事実になったからな。

そういう理由が思いつくのもわかるのだが、明久の場合はな。

「それもあります、何よりもこの世界にいたらもう命がない!」

うん。大半の理由がそれだと思った。

あの3人の暴力に苦しむ毎日、更にあの2人に対してトラウマもできてしまったのだ。

この世界から逃げたくなるのも無理はない。だからこそ退学することを決心したんだろう。

「またわけのわからないことを言うね。まあ、あんたが退学してもこっちは損はないしね。というかむしろ大助かりだよ。学園の器物を損壊させる存在が消えてくれるのはこっちとしても嬉しいしね」

学園長がこれまた教育者とは思えない一言を履きながら明久の退学届を受理した。

「まあ、退学するならあなたの腕輪は返してもらおうよ」

「ええ……まあ、退学になるなら当然ですよね」

そういつて明久は自分の腕につけていた腕輪をはずして学園長に手渡した。

「ま、あんたがどうなろうが知ったことじゃないが、向こうでも精々迷惑をかけないよう気をつけな」

「それくらい気をつけますよ。ただこっちにそんな気をつかう必要がなかっただけで」

それはそれでどうかと思う。

「……あなたはこの学園に対してどんな感情を持つてるんだい？」

「妖怪ババアが設立して自分の趣味のために生徒を実験台にして自分は高みの見物をしていて主に僕にアレコレ押し付けて——」

本当に明久はこの学園で何を体験していたのだろうか。

そんなことを考えていると再び学園長室の扉が勢いよく開いて複数の影が飛び出してきた。

「ババア——ッ！ 頼む！ 今すぐ俺を退学にしてくれ！ 今すぐだ！」

「学園長！ 俺も頼む！ このままでは俺の命が保たん！」

「……俺も退学」

そう叫んで入ってきたのは坂本、木下、土屋の3人だった。

「雄二、秀吉、ムツツリーニ……3人共どうしたの？ そんな血相変えて」

「当たり前だ！ このままこの世界にいたら俺は本格的に破滅してしまおう！」

「帰ってきて早々やたらと男子からの告白が押し寄せてきての……それを聞いて姉上からの折檻が以前より一段と酷くなって……そろそろ本格的に命の危険を感じての」

「……この世界でできることはこの数日でやれた。これ以上この場所に居座るつもりはない」

「それで、3人も退学届を？」

「も、って事は明久もか？」

「うん。姫路さんと美波に本格的に殺されそうだし、さつき家に帰ったらどこから聞いたのか、なかなかちゃんと付き合ってるのがバレて……本格的に命がヤバかったから」

そっか。ついに玲さんにもバレてしまったのか。うん、その判断は懸命だと思う。

「そういうわけでババア、さつきと俺も退学にしてくれ！」

「俺も頼むぞい」

「……受理願う」

「ああ、わかったわかった。受理してやるからさつきと出て行きな。あたしはこれから大忙しなんだよ」

本当に面倒臭そうに言いながら退学届を受理した。こんな軽くて大丈夫なのかと思ったが、手間がかからないのは幸いだった。

「よし、受理はできた！ さつきとあっちの世界に逃げるぞー！」

そう言つて坂本は例の扉のある場所に向かって駆け出していった。

「とりあえず、俺達も行くか……」

色々展開がすつ飛んだ気がするけど、とりあえずメンバーは揃ったようなので俺達も扉に向かっていく。

誰かを忘れてる気もするけど、初音島組は全員揃ってるので問題ないはずだ。

例の扉の前に着いて俺達はいざ扉を開こうと気持ちを落ち着けていた。

「い、いよいよ帰るんだよね？」

「本当に帰ればいいんですが……」

俺の両隣で音姉と由夢がくっついていた。まあ、不安になる気持ち

はわかるけど、若干くつつきすぎやしないか？

「ああ、この後もまた別の世界つてのはマジ勘弁してほしいぜ……」

「ふははは！ よいではないか。むしろ心躍ると思わんか？」

「それはあんただけよ」

「今度こそ無事に帰れることを祈りますわ」

そうなつてほしいぜ、本当に。

「よっしゃ！ いぎ、俺達の自由の都へ！」

坂本が率先して扉を開け、中へと飛び込んでいった。そんなに翔子さんから逃げたかったのか？

「そういえば、秀吉は大丈夫なの？ 木下さんの方はともかく、ご両親は？」

「む？ それは大丈夫じゃ。親には男を磨くために旅に出ると言ってきたからの」

「さぞ、泣いていたんだらうね。秀吉の両親」

「何故わかるのじゃ？ 何故か両親共に泣いておったのじゃが」

「まあ、気持ちはわかるよ。以前の僕にもそれを聞かせたら血の涙を流しただらうね、ムッツリーニのように」

「……………（ドバドバドバ）」

明久の言う通り、土屋は血の涙を流していた。ご両親が涙した理由もなんとなく納得できる。

外見はどうみても女の子にしか見えない奴が男らしくって言われたらそりゃあ……………なあ。

「して、明久の方はどうなんじゃ？」

「う……………とりあえず、置き手紙していったよ」

「なんと書いたのじゃ？」

『「幸せをつかむために、家出をします」って」

「それはなんとも直球じゃのう」

今頃玲さんはそれを読んで怒り心頭だらうな。

「では、儂らも行くかの」

「うん！」

「……………いぎ、新たな地へ」

そして明久達も扉の中へと入っていった。

「……ちゃんと戻ってくれよ」

俺も祈りながらみんな一緒に扉の中へと入っていった。同時に、目の前が真っ白になった。

「……………ん？」

「あ、目が覚めた？」

目を開けると、目の前にはさくらさんの顔が見えた。

そして周りを見ると、どこことなく和風な雰囲気漂う学園長室……間違いなく風見学園だ。

となると、俺達は帰ってきたっていうことか。

「あの、さくらさん……今何日なんですか？」

「12月23日。クリパが始まったばかりだよ」

「え？」

ちよつとおかしく感じた。俺達が過去の風見学園に行ってから随分とたっている。

更に明久のいた世界にも行った日を含めると一週間はいなくなつたはずだ。向こうに行つた時間とこっちの時間の流れは同じくらいだったはずなのに、ちよつとおかしかつた。

ひよつとして、アレは……全部夢なのか？

「夢じゃないよ」

俺の心を読んだかのように、さくらさんが呟いた。

「あれは僕の見ただけ……あれもまた、義之君たちにとっての、ひとつの現実。無数に広がる可能性のうちのひとつだよ」

「えつと……」

さくらさんの言葉はイマイチよくわからない。

とりあえず、あれはあれでまた現実に起きたことってことかな？

「まあ、いいか」

こちらではどうあれ、あれは俺達が体験した物語のひとつなんだ。俺はそれを忘れてなければいい。

「そういえば、俺がいるってことは、明久達は怎么样了らう?」
「多分、別々の場所で目が覚めてるはずだよ。どんな状況下で覚めたかまではわからないけど」

「そうか。俺が今こうして目が覚めたのなら多分あいつらもそのうち――」

『ちよつと明久君! 今の台詞の真意を聞きたいんだけどー!』

『明久君! この娘が一体誰なのか話してくれるよね!』

『だー! お願いだからまずは話を聞いて! 腕がちぎれるから!』

『……雄二、今すぐデート』

『何故だあああああ!?! 何故翔子がこつちに來てるんだ!?! 影ひとつ見当たらなかつたはずだろー!』

『愛さえあれば私は世界でもなんでも越える』

『俺に安息の地はないのかあああああ!』

『……………』

とりあえず、ちゃんと明久達も戻ってきているようだ。若干予想外の人物もいた気がするけど。

『……とりあえず、俺は教室戻るか』

あまり時間がたつてないとはいえ、委員長機の嫌が悪くなってる可能性が否めない。

ほんの少し時間が空けたからといって、本番前にうろついてたら真面目な委員長が何も言わないはずがない。

「あ、そうだ。さくらさん」

「ん?」

大切なことを言い忘れてた。俺はすこし溜めてから一言、
「……ただいま」

家族である、大切な人への……一言を。

第四十九話

「さて、どういうことか……説明してもらおうかな？」

目の前には僕の恋人であるななかちゃん。そしてアツシユブロンの髪をきらびかせているアイシアちゃんがいる。

そして現在僕はななかちゃんに頭を下げた状態……ハッキリ言えば土下座だ。

何故こんなことになつてるかというと、答えは簡単。約束通り僕がアイシアちゃんとクリパ回ろうとしていたところをななかちゃんに見つかり、ななかちゃん怒り心頭。

いや、僕が悪いというのは理解しているんですけどね。でも、しょうがないじゃん？

だって、アイシアちゃんと約束したのはななかちゃんと恋人同士になる以前の話なんだから。

「ふくん……明久君ってば、一丁前に不倫しようとしてたんだ？」

横ではアイシアちゃんが僕達の関係性をわかった上でにやついた笑顔で僕の苦境を眺めていた。

ていうか不倫じゃない。決して、全くもって、下心あつてのことではない。

もちろん、僕はななかちゃん一筋でいるし……ちよつと目移りはないこともないかもだけど、それでも絶対浮気とかそういうのはない。雄二とは違うんだ。

『雄二、浮気は許さない』

『だから誤解だつて言つて——ぎやああああああ!! 頭蓋があるけど?』

あれ? 何故か雄二の悲鳴の前に霧島さんの声が聞こえた気がするけど?

まさか、霧島さんの雄二に対する愛が本当に世界の壁をぶつ壊しちゃったとか?

「明久君、聞いているのかな？」

「はい。本当にすみません。決して下心はないんです」

「って、そんなことよりまずは目の前のことだ。」

「えっと、ななかちゃん？　これは本当に浮気とかそんなんじゃないんだ。なんか、折角のクリスマススシーズンだっというのにひとりっなのは寂しいものじゃない？　だから、ちょうどクリパもあることだからアイシアちゃんにもクリスマス気分味わってほしいって思ってる……」

「彼女の私より先に誘った」

「そ、それは君と恋人になる前の話だし……」

「ぶ……」

「まずい、ななかちゃんが本格的にヤキモチ焼いてる。結構可愛い……じゃない。今はななかちゃんに思いっきり謝らないと。」

「本当にごめんなさい！　埋め合わせは絶対にするから！　お願い！」

「今日だけ……今日だけ、アイシアちゃんのためってことで！」

「……（ボソツ）本当、明久君ってお人好すぎ」

「へ？」

「なんでもなくいい。本当に埋め合わせする？」

「はい！　全力で！　なんでもいたします！」

土下座の状態のままななかちゃんに叫ぶ。随分と情けない姿だと思うが、この際くだらないプライドなどいくらでも捨ててやる。

「……じゃあ、明日は絶対私と回ってよね」

「え？　それだけ？」

「……」

「わかりました。絶対に約束は守ります」

疑問に思ったことを言っただけで冷ややかな目で見られた。今のななかちゃんには絶対に逆らってはいけない。

「じゃあ、私は小恋と回ってるから。明久君はアイシアちゃんと楽しく回ってればいいよ」

ななかちゃんは頬を膨らませて踵を返し、校内へ向かった。やつちやっとなさ。

「いいの、明久君？　可愛い彼女を放っておいて」

終始ニヤついていたアイシアちゃんが横から尋ねてきた。いい

のって言われても……

「まあ、埋め合わせはするって約束したし……ななちやんのことは自分でなんとかするよ。今はアイシアちゃんの約束も大事だし」

「ふくん……ななちやんも苦労するだろうな」

それは僕が浮気性だと思われてるからだろうか。

「まあ、約束通り僕が案内するから。今日はクリスマス気分といこうか」

こうして僕はアイシアちゃんとクリパ初日を楽しむことになった。

さて、クリパを回るとは言ったものの……何処を攻めるべきか。

ルートもかなり気をつかっておかないと、後で色々酷い目に会うだろう。

特に杏ちゃんや茜ちゃんに会った時だ。あの2人のことだから僕がななちやん以外の女子と歩いているのを見たら例え事情があつてもからかわずにはいられないだろう。

だからなんとしてもあの2人に会うのだけは絶対に避けなければならぬわけなのだ。

「うわ、賑やかだね」

アイシアちゃんはあちこちで開いている露店を見ながら跳ねるように歩いている。

「わく。あつちは焼きそば売ってる。こっちは、たこ焼き♪」

全身を使ってわくわくやらうきうきなどの言葉を表現している。こういうのを見ると純粹に可愛くなって思うなあ。

いや、本当に純粹にそう思っただけ。決して浮気とかそんなでは断じてない。

まあ、僕がどんな立場であれこういうのを見ていると微笑ましいものだと思うずにはいられないだろう。

「明久君？」

「あ、はい」

「アレ……いいかな？」

アイシアちゃんがチョコバナナ屋を指差した。

「アレが欲しいの？ 他にも何か希望あれば奢るけど」

「まずはチョコバナナからだよ。一気に買っちゃうとなんかもつたいない気がして。お祭りはゆっくり楽しまないとね」

その意見は一理ある。何事も欲張りすぎはいけないってことで。

「ん、了解」

僕はアイシアちゃんについて行ってチョコバナナ屋に足を運んだ。

「んくつと、あたしはどれにしようかな？ ミントにいちごかあ。う

ん……でも、ノーマルにはノーマルのよさもあるしなあ」

店の前まで行くとアイシアちゃんは何の味にしようか迷っていた。

何分か首を捻って悩んでいるとようやく決まったのか、ぴよこんと飛び跳ねて手を打った。

「よし、決めた！ あたしがノーマルで、明久君がいちご」

「ノーマルといちごひとつずつですね」

「はい！」

「あれ？ さりげなく僕の間も上乘せ？」

「うん」

無邪気な笑顔で頷いた。

「ま、いいか」

僕も僕で楽しみたかったし。たまにはチョコバナナも悪くないかもね。

「はい、では2本で400円になります」

「ほい」

僕は財布から100玉を4枚出してそれを店員役の生徒に渡した。

「ありがとうございます」

僕達はチョコバナナを買ってベンチのある中庭に移動した。

ちょうどベンチが空いているみたいだし、僕達はその腰掛けてついさつき買ったチョコバナナをほおばった。

うん……いちごっていうのも悪くないなあ。

「おいしく」

アイシアちゃんもノーマルのチョコバナナをほおぼって幸せそうな表情を浮かべる。

「久しぶりだなく。チョコバナナ、食べるの。昔はすごい食べてたんだけどね」

「昔っていうと、アイシアちゃんが風見学園に通ってた時？」

「うん。その頃にね、すごいバナナが好きで娘がいてね。いつもバナナバナナ言ってた。すごい元気な娘で。懐かしいなあ」

「……………」

その時、僕の脳裏に腕いっぱいバナナを持ってそれを幸せそうに口に詰めるワンコ娘が浮かんだ。

まさか、アイシアちゃんも……なんてことはないよね？

「どしたの、明久君？」

「え、ううん。なんでもないよ」

気の所為だ、気の所為。頭に浮かんだ考えを捨ててチョコバナナを食べる。

「ところで、明久君の学園生活は楽しい？」

「…………うん、今は本当に楽しいよ」

少し前は地獄ばかりだったけどね。主にFFF団とか姫路さんや美波、姉さんの折檻とか……ああ、思い出したら震えが……。

「明久君？　なんか、マズイこと聞いちゃった？」

「あ、いや違うよ。風見学園の生活は本当に楽しいよ。ただ、ここに来る前がちよつとね」

あまり言いたくはないけどね。

「そっか、よかった」

まるで自分のことのように嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「青春は大事だぞ。学生時代にしかできないことはたくさんあるからね。後悔しないように毎日を楽しく生きる。これ、とても大切なことだよ」

その言葉には何故かすごい重みを感じる。彼女はこの学園に通ったときに何を感じたのだろう。

「うん、わかってる」

今は聞くことではないだろう。それにアイシアちゃんの言葉の意
味はきちんと理解しているつもりだ。

「あ、でも……学生でしかできないこともあるからって、あんまり行き
過ぎたことはしないようにね。ななかちゃんが保たないかもしれないな
いんだから」

「しないよ、そんなことー!」

にやついた顔でとんでもないことを言った。いくら恋人になった
からって、そこまでハードなものは求めたりはしないよ。

「それじゃあ、次は何処に行こうか?」

チョコバナナを食べた後、僕とアイシアちゃんは校内の方に足を運
んだ。

「うくん……何処に行こうかなあ?」

「今日しかやってないものもあるみたいだよ。生徒自作の映画とかも
やってるっぽいし」

「ああ、それもいいかな?」

「……私達も行く」

「そっか、霧島さん達も行くんだ」

「……吉井は、あの娘と一緒にじゃないの?」

「あの娘って?」

「……白河って娘」

「ああ、今日はアイシアちゃんにクリパを楽しんでもらいたいから。
随分前に約束してね」

「……浮気は駄目」

「うん、わかってるよ。今回の約束は恋人になる前にしちやって」

「……それなら仕方ない」

「うん、だから霧島さんは雄二と楽しんで——って、霧島さん!?!」
随分かかって驚いた。何故霧島さんがこっちに!?!

「……私も驚いている。まさか扉をくぐったら冬なのに桜が満開の島に来てた」

「扉……まさか、姫路さんや姉さんも!？」

「僕は辺りを見回した。」

「……いない。私しか通ってない」

「そ、そうなんだ……」

霧島さんの言葉にちよつとほつとした。

「……というか明久……この状況を見てなんとも思わないのか？」

「ん？ 別にどこも変わったところはないけど？」

「手錠で繋がれて引っ張られているこの状況を普通だと思ってるのか!？」

「雄二に限っては当たり前前のことですよ？」

何を今更……。

「えつと、この人達は？」

「ああ……僕の友人で、こつちの手錠で繋がれているのは坂本雄二」

「なんでこの人、手錠で繋がれてるの？」

「そういうのが趣味な人だから」

「ふくん」

「ちよつと待て！ これは決して趣味ではない！ それだけは言わせてくれ！」

雄二が手錠で繋がれた両手を必死に振りながら弁明する。まあ、趣味なのは流石に冗談だけど。

「それで、こつちの娘が……」

「雄二の妻の霧島翔子」

「誰も結婚してねえ！ ていうかそもそも恋人ですらねえだろう！」

相変わらずだなあ、この組み合わせのこの光景は。

「それより雄二、映画行こう」

「その前に……この手錠は外さないのか？」

「駄目。雄二を傍に置くためだから」

相変わらず雄二への愛が半端ないなあ、霧島さんは。

「疲れるなら、傍で寝てていいから」

そう言いながら霧島さんが懐からスタンガンを取り出す。

「つて、それは気絶だ——ぎゃばばばばば!!」

スタンガンを首元に突かれ、感電して気絶した雄二を霧島さんは引きずって映画を開いている教室へと向かった。

「……とりあえず、僕達は別の所に行こうか」

「……そうだね」

流石にあの2人の邪魔をしてもはまずいだろう。僕とアイシアちゃんは別の場所に行くことにした。

雄二が霧島さんと映画を見に行った後僕達は映画は後回しにして色んな露店を回っていた。

所々で知り合いにバツタリ出くわしそうになつちやったものの、全てギリギリ回避できた。

「はく、おもしろかったな」

そして僕達はたった今漫才を披露しているクラスを見に行き、そこでかなり笑ってきた。

いやあ、学生の出すものなのに笑う要素がすごかった。ああいう日常的なお笑いはFクラスとかのことがあって耐性があると思っただけで、結構レベルが高く、僕も大笑いした。

アイシアちゃんなんて涙を浮かべるほどお腹を抱えて笑ってたし。楽しんでくれて何よりだ。

そしていくらか歩くとサンタコスチュームの女の子が客寄せをやっているのが見えた。

やっぱりクリスマスシーズンの定番というか、お決まりなのか、サンタコスチュームは結構見かけるものだった。

「……………」

アイシアちゃんは神妙な顔でサンタコスチュームの女の子を見て

いた。サンタ服が気に入ったのかな？

確かサンタって、北欧からの奴だっけ？ よく覚えてないけど。

「……ねえ、明久君ってサンタって信じてる？」

「ん？ サンタを？」

突然サンタの話を振られて少し考える。

「……まあ、いても不思議じゃないってくらいには」

これが正直な話。枯れない桜やら過去に行った体験があるやらで
そういった話も完全否定ができない。

「そっか」

「アイシアちゃんは信じてるの？ サンタクロース」

「信じてるっていうか……実際にいるのを知ってるからね」

「実際に？」

北欧出身だからサンタを見たことがあるとかかな。

「まあ、今の世の中に広まっている話の中のサンタクロースとはちよつ
と違うけど。でも、本当にいるんだよ、サンタクロースは」

笑顔のままアイシアちゃんが続けていく。

「みんなのためにあっちこっち飛び回って、みんなに笑顔を分けられ
る……そんな人。私の憧れなんだ」

「憧れ……かあ」

なんとなく、アイシアちゃんの笑顔に寂しいものが見えた気がし
た。

「ひとつというとね……あたしのおばあちゃんも、サンタクロースなん
だ」

「アイシアちゃんのおばあちゃんが？」

「うん。色んな国を飛び回って、色んな人達に笑顔を分けてあげられ
る。私も、そんな力が流れてるんだ。とはいっても、私はまだまだ力
不足なんだけどね」

アイシアは何処から出したのか、スリーマーケットで売り出してい
た木彫りの馬を出した。いや、あれはトナカイだっけ。

「私のおばあちゃんはもつと色んなことができたんだけどね。もう、
いないけど。おばあちゃんの夢だったんだ。世界中の人が笑顔で暮

らせる世界をつくること」

そう言いながらアイシアちゃんは学園中を見渡す。

「あたしはその意思を継いだようなものなのかな」

アイシアちゃんはひとりで何を見てきたのだろうか。ここに来る前は色んな国を回っていたのかな。

そう考えるのが自然だと思う。今までアイシアちゃんのような女の子は見たことなかったし。

多分ここにくるまでに色んな国を見てきたのだろう。だからこそそんな言葉が出てくるんだろう。

僕だつて考えないことはない。世界中の人々のこと。こんな平和なところもあればそうでない国だつてあるだろう。

それこそ、アイシアちゃんの作つてる玩具が嬉しいと思うくらい貧しい国だつてあるだろう。アイシアちゃんは、そんな人に笑顔を与えるために色んな国を回つてるんだろう。

「さ、次行こうか！」

さつきとは違う、心の底からの笑顔に僕はただ引つ張られるだけだつた。

……向こうじゃあやふやなままだったけど、僕も将来のこと……考
えるべきだろうか。

第五十話

「……………」

目が覚めた。見渡すと僕の部屋……というのはちよつと図々しいかな。

正確にはさくらさんの家の空き部屋を僕用にしたものだ。日付は……12月25日。

うん、この日にち……この場所にいるということは、ちゃんと帰ってきてるといふことだね。

少し前までは過去の世界だったり自分の住んでいた世界で地獄巡りだったりと大変な時間を過ごしていた。

昨日はようやく帰ってきてくれたはいいけど、クリパの人形劇本番直前で小恋ちゃんが風邪で倒れ込んでしまつて人形劇に出られなくなつた。

まあ、あんだだけ濃い時間を過ごしたのだから心身共に限界が来つておかしくはなかつた。それから小恋ちゃんの代わりに義之と練習していた音姫さんが小恋ちゃんの代役として人形劇に出たのだった。

結果はもちろん、上々。音姫さんの台詞にかなり気持ちも籠つてたからか、お客さんの中にはマジ泣きした人もいたくらいなんだから。

それから小恋ちゃんを涉が送つたり僕はアジアちゃんの案内したりその後でななかちゃんに謝つたり、芳乃家に戻つてからはようやく戻つてきたことを祝して小さなパーティーなども。

雄二は霧島さんと一日中イチャついてたけど。

ちなみにあの濃い日々のことはみんなも大体覚えてるみたいだ。とはいつても、僕ら文月学園メンバーに義之、朝倉姉妹以外はほとんど夢を見たんじゃないか状態だったが。

まあ、あんまり深く考えてもしょうがないので夢ということでしょう結論でそれ以上その話に触れることはなかつた。

でも、ななかちゃんは僕と恋人になつたという事実があるからか、他の人よりあの出来事をハッキリ覚えてるっぽい。本人はみんな

が覚えてないことがちよつと不満ぽかったけど。

こつち側での23日……僕らにとつては一週間近くの間起こつた結果はこれくらい。これからは平和な日々が続くんだ。

そう思いながら背伸びをした時だった。僕の部屋の窓に何か当たる音がした。

一体何だろうと僕は部屋の窓のカーテンを引き、窓を開けた。

「おはよー」

外にいたのはななかちゃんだった。こんな寒い中、笑顔で手を振っている姿が太陽よりも眩しかった。

「ていうか、どうしたのこんな朝早くから？」

「今日クリスマスイヴじゃん？」

「うん、知ってるけど」

「それで早く起きちゃって……そしたら、明久君起きてるかなーって思つて来てみました♪」

時間は普段ならもう少し寝てるって言うくらいの時間帯。僕が寝ていたらずつと外で待つてるつもりだったのだろうか。

「ひよつとして、わくわくして眠れなかったらって感じ？」

「あたり々。ね、今日こそはパーティ、一緒に回つてくれるよね？」

そういえば、昨日は約束だったからとはいえ、恋人であるななちゃん以外の女の子と回ったからなあ。

今日こそは恋人として、クリパを回ってあげなきゃね。

「うん。約束したしね」

「うん。それじゃ、私先に学校に行ってるね」

「今からって、流石に早くない？」

流石にこの時間帯じゃまだ準備している頃だと思うけど。

「そんなことないよ。週番の時と同じくらいの時間だよ」

そういうものですか。

「じゃあ、二度寝して遅刻ないようにね」

「了解」

ななかちゃんは笑顔で手を振ってから颯爽と学校に向かって駆け出していった。

「……さて、僕も急ぐかなつと」

本来なら急ぐべき時間ではないが、男として可愛い恋人さんを寒空の中待たせるわけにもいかない。

なので、僕は急いで制服に着替えて食パン一枚を口に啣えて学校へと向かった。

終業式が終わった。

忘れてた。そういえば何故かクリパの最中に終業式なんてのがあつたんだよな。

濃い時間が多かったのと僕達の学園じゃなかったことだからすっかり頭の中から抜けていた。

まあ、これで思う存分冬休みを堪能できるようになったわけだけど。短い間だけどここでも色々あつたなあ。

今年最後の学園のイベントとなるとなんというか、ちよつとね。

「まあ、とりあえず今はななかちゃんの方だ」

今日のクリパはしっかりと楽しませてあげないとね。恋人としては。

しかも今日はクリスマスイヴなのだ。1年の中でも重要なイベントで、その日に恋人とデートなのだ。

「明久くん!」

おっと、噂をすれば本人のお出ましだ。

廊下の向こうから小走りで僕の方へ走ってきた。待っている僕に向かつて笑顔で走ってくる、ななかちゃん……嬉しい展開だ。

「白河さん、発見しました!」

「白河さん! ミスコンの件、どうになりましたかあ!？」

……後ろに控えている余計な邪魔者さえいなければ。

ていうか、あれは手芸部の人達じゃないか。何故かななかちゃんを

追いかけている状態だ。

ななかちゃんも今気づいたようでハッと後ろを振り向いて驚いていた。

「ええ？ う、うそー」

「ミスコンは、もうすぐしたら始まりますよー！」

「あっちゃく……」

一瞬手芸部の迫力に引いたが、ななかちゃんは走るペースを落とさずに、

「逃げるよ、明久君！」

僕の手を引っ張っていき、逃走劇の始まりだった。

「つて、こんな日に限って——っ!!」

「あはははー！」

せつかくのデートだというのに、何故に手芸部の追っかけに付き合わなくてはいけないのか。

まあ、FFF団よりかは何倍もマシな方だけど。

「どいて、どいてー！ ごめんねー！」

廊下を走り、教室を巡る生徒達で混雑している中、ななかちゃんは器用に過ぎ抜けてく。

この動き、僕とは違う意味で相当場慣れしているな。その華麗な動きはもう注目の的だ。

「お？ 明久、何やってんだお前？」

「ごめん、義之！ 説明してる暇がない！」

義之と会い、一言言い残しておいてすぐに逃走を続行。

「あれ？ ななかに明久君？」

「やつほー、小恋！ 元気になったー!？」

「こ、小恋ちゃんおはよう！ それじゃあ、また！」

小恋ちゃんに会ってはまたすぐに逃走。

「あれ？ 明久君に白河さん？」

「あ、音姫さん！ すみません、今ちょっと私用で！」

「私用って、ひよっとしてデー……つて、こらー！ 廊下は走っちゃ駄目ですよー！」

「無茶言わないでください！ 追っかけられてるんですから！」
音姫さんと会ってまた逃走。

「む？ 明久かの？ 今日には白河とデートかの？」

「その筈だったんだけどね！」

「白河さん！ ミスコンの件のこと、考えてくれましたか!？」

「こういうこと！」

「ふむ、なるほどの。ま、頑張るのじゃぞ〜」

秀吉とも会ってすぐに別れて逃走。

「雄二、今度はこれ」

「つて、これ昨日も見ただろうが！ しかも今度は2回連続鑑賞だと!？」

「退屈なら、寝てていい」

「だからそれは気絶だ——ぎゃばばばばば！」

こっちはもういつも通りすぎるから省略。

「白河さん、是非付き合って——」

「ごめん、無理ー！」

（ガーン！）

途中で告白しようとする人もいたが、一瞬で撃沈した。

ななかちゃんに告白してきた輩を沈めたいところだが、後ろの追っ手のこともあるので実行に移せない。

ていうか、そういうえば僕がななかちゃんの恋人だという事実は一部の人が知らないんだっけ。

なんだかスッキリしないというか、ちよつとモヤモヤしたものが胸の中で渦巻いている。

他の男がななかちゃんに近づいているからだろうか。いや、それとは何かちよつと違う気もするけど。

「……………こうなったら、もう……………」

「ん？ どうしたの……………つて、とつとと!？」

ななかちゃんがいきなり急ブレーキをかけてその場で止まった。

「ど、どつたの?？」

いきなり止まるからびっくりして危うくコケそうになった。

そして後ろからは息が上がった状態の手芸部の人達が追いついてきた。

「はあ、はあ……よ、ようやく追いついた……」

「こ、こちら、付属校舎の廊下……し、白河さん、止まってくれましたあゝ」

へろへろになりながら手芸部の人達がトランシーバーで他の人達と連絡を取り合っていた。

なんでミスコンに女子を出すだけでそこまで行動力があるのか。まあ、気持ちはわかるけど。

「ていうか、どうしたのななかちゃん？ 追いつかれちゃったけど？」

「うん、そだね」

「いや、そだねって……」

「なんか、気が変わった」

「へ？」

「このまま何も知らないでっていうのもアレだから、いつそのこと……」

何か咳くとななかちゃんは手芸部の方を振り返って、

「私、ミスコン、出てもいいよ」

「……………え？」

「え？」

あまりに突然の言葉に手芸部の人達も僕も驚き、数秒その場に沈黙が訪れた。

「……………え？ ええええええ!?!」

「ほ、本当ですかあああああ!?!」

「うん」

「や、やややや、やりましたあああああ! 白河さん、ミスコンに出てください——っ!」

「緊急連絡っ! 白河さんが遂にミスコンに出てくれることを決意してくださいっ! 至急白河さん用の衣装を用意しろ! 今すぐに!」

手芸部の人達はななかちゃんがミスコンに参加することを知らずすぐに連絡してななかちゃん用の衣装を用意させる連絡を取った。

この行動力はムツツリー二に及ばないものの、流石だと賞賛しよう。ていうか、

「ちよつとななかちゃん、ミスコン出てもいいの?」

「なんか、出ないともう気がおさまらなくなっちゃって」

「え、えと……どういう事?」

「うふふ……まだ内緒♪」

そう言つて誤魔化した。よくはわからないけど、ななかちゃんがミスコンに出たいというのならまあいいけど。

「絶対見に来てね」

「そ、そりゃもちろん」

「絶対だよ。来なかつたら酷いからね」

「わ、わかりました」

「うん!」

一体何がななかちゃんを奮い立たせたのだろうか。

「じゃ、明久君。死なないようにね」

「へ?」

別れ際に突然変なことを言うななかちゃん。微笑んでから踵を返すと手芸部の人達についていった。

残された僕は呆然とそれを見送ることしかできなかった。

「えつと……一体、何だったんだろう?」

それから僕はデートもできないままひとりでブラブラと時間を潰した後、ミスコンの会場である体育館へと集まった。

「うお——!」

中に入るとそこは既に何百人もの観客がいて、大盛り上り。ものす

ごい熱気に包まれていた。

ミスコンはもう始まつてるっぽいけど、ななかちゃんの出番はま
だっぽいね。

「お、明久じゃねえか。見に来てたのか!」

「あ、渉。君も来てたのね」

入口の近辺で渉が飲み物片手にミスコンを鑑賞していた。

「今回は優勝候補ひとりもない分、大穴狙いで白熱してるぜ」

「ミスコンでトトカルチヨはまずくない?」

「とは言っても毎度のことだからな。まあ、固いこと言いつこなしだ
ぜ」

「そう……………ていうか、優勝候補がない?」

「ああ。優勝狙えそうな女子には片っ端から声かけたけど、全て断ら
れたって手芸部が嘆いてたらしいぜ」

それで手芸部の人達、あんなに必死だったわけか。そこまで自分達
の作った衣装を着させて優勝させたかったのか。

「ちなみに、今んとこトップ人気で本命馬なのは隣のクラスの大家あ
ゆ」

確かにステージにいても結構可愛らしいと思える娘がいた。

「大穴も大穴は一個学年下の化也萌子」

「えつと、誰?」

「あのステージの一番右端。ちよつと小太りでブルマ姿の」

「……………なんというマニアック」

「まあ、ブサ可愛いって感じの顔立ちと肌が秋田美人並にキメ細かく
て白いらしい。ああいうのが好きな男もいるわけよ」

見れば確かに彼女にエールを送っている男子も見受けられる。

「それで、明久は誰に賭けるよ?」

「へ? いや、僕賭けは…………」

「まあ、賭けつつつても、大体みんな昼飯一回分だけだな」

「な、なんだ……………そういうこと」

それなら大体みんな運動とかで提示する条件だし、許容範囲か。
ていうか、ここまでできてわかったけど、みんなやっぱりななかちゃ

んが参加するの知らないんだ。

まあ、ななかちやんが参加するって決まったのはついさっきの話なんだから無理もないだろうけど。

「じゃあ、僕はななかちやんに賭けるよ」

「……同じく」

「って、ムツツリーニ！ いつの間にも!」

「お前、杉並ばりに気配を感じねえぞ。っていうか、何いつてんのお前から。白河は今回エントリーしてない——」

明久が台詞を言い切る前に会場アナウンスが流れる。

「さーて、盛り上がってきたところでここでサプライズだ！ なんと、今大会に、超優勝候補、白河ななかが登場だ——っ!!」

『『『……ええええええええええええええええ!!』』』』

ななかちやんの名前が出た途端、会場内が一気に大興奮となった。

ななかちやんファンの男子達が野太い声を上げてななかちやんの名前を連呼した。

「おおっと、すごいななかコールだあ！」

『『『ななか！ ななか！ ななか！ ななか！』』』』

「いやいやいや、ちよつと待てよ。こんなの賭けにならんじゃねえか——!」

渉があまりの事態に唾然としてステージを見た。

会場が一瞬暗くなってスポットライトがステージに当たる。

「こんにちは〜!」

『『『うおおおおおおおおお!!』』』』

ななかちやんが手芸部の丹精込めて作ったドレスを身に纏つての優雅な登場に会場内が再び大興奮の嵐に。

すごい。他の候補者とは雰囲気が全く別物だ。ちよつと物足りなかつたなあつて空気が一気に華やかなものに変わっていく。

「それでは、ここで恒例のインタビューに参りたいと思います。白河さんは今回、ギリギリまでミスコン出場を渋つたと聞きましたが？」

「あ、はい。散々悩んだんですけど、やっぱり出ようかなつて」

「ほほう。それは何か考えがあつてのことですか？」

「はい」

「つて、ええええええ!? な、ななな、なんですこの意味深な微笑みは——っ!？」

『『『おおおおおおおおおお!!』』』

「は、ははは……なんともすごい人気っぷり」

改めてななかちゃんの大人気に脱帽するよ。

「ていうかお前ら、白河が出るなんて情報どこで掴んだんだよ?」

「さつき廊下を往来した時に手芸部がななかちゃんを追いかけてて突然ななかちゃんがミスコン出るつて言い出したからね。僕の目の前で」

「……新しい情報を逐一仕入れるのは当然」

「え〜? 土屋はともかく、明久……それ反則だろ?」

「ふふふ、これで見んなから昼食をおごってもらえるんだね」

僕は余裕の笑みを浮かべながらななかちゃんのいるステージに視線を移す。

ステージ上ではななかちゃんが困り笑顔を浮かべながらインタビューに答えていた。

「さ、さてさて。ここで男子生徒達が気になって夜も眠れないという……不眠症を続出させた、気になる一言を聞いちゃうぜ——っ!」

『『『しゃあああああああ!!』』』

漫画に出るミスコンでの王道、『好きな人をこの場で告白しちやえコーナー』か。まさか実際目にするとは思わなかったけど。

まあ、流石にこんな大会場の前でいきなり好きな人の名前を言うのはないよね。

「ズバリ! 白河さんの意中の相手は……!？」

あれ? ここで思った。僕はななかちゃんと付き合っている。そして、去り際に残したななかちゃんの気になる一言。

「それは……」

瞬間、僕は嫌な予感がした。まさかななかちゃんは……!？」

「……明久君」

「……は？」

「吉井明久君です！　そして、現在お付き合いしてます！」
「がはあ!？」

「やっぱりだった！　ななちゃん、この場で僕と付き合ってること
暴露する気だったんだ！」

『『………』』』

しんと静まった会場内では僕の吐血した音だけが響いていた。

「お、おい……やばいんじゃないか、明久？」

「……嵐の前の静けさ」

「そ、そのようだね……」

ステージを見るとななちゃんがしてやったりって顔しながら僕
に向かってVサインを出してから一目散と逃げ出した。

さっきの去り際に残したななちゃんの言葉の意味はこれだった
のか！　こ、これは本格的にマズイ……僕もとっとと逃げなくては！

「な、なんですと——っ!？」

『『ありえね——っ!!』』』

「マズイ！　正気に戻られた！」

「に、逃げろ明久！」

「そ、そうだね！　そ、それじゃあ！」

『あ、おい！　アイツだ！　吉井だ!』』

『吉井いいいい！　貴様絶対に殺おす!』』

「さらばだ!」

会場内に雷が落ちたかのような怒涛が木霊し、僕はそこから逃げ出
した。

また逃走劇が始まるのか。しかも今度は嫉妬に狂った男子達に
よって。

「よっ！　ほっ!」

僕は嫉妬に狂う野郎共の目をかいくぐってようやく学園外に出ることができた。

「ふうく……危なかった」

本気で危なかった。校舎内の至る所に包囲網が敷かれていてそれをかいくぐるのは一苦勞だった。

「まさか、あそこで付き合ってます宣言するとは……」

「わっ!」

「ぴやあああああ!」

「あははは! 今、ビクーツってなった! エビみたいにビクーツって!」

突然聞こえた声に振り返るとそれはななかちゃんだった。

「はあ、はあ……ななかちゃん、心臓に悪い冗談はやめてよ」

「あはは。もう、ようやく来たんだ。私ずっと待ってたんだよ、明久君が戻ってくるの」

「そりやあ必死で逃げてたからだよ! ななかちゃんの発言によって嫉妬全開になった男子達から!」

「あ、そうだったんだ」

この娘、絶対ワザとだ。それから数歩先まで笑いながら歩いて振り返って、

「でも、これでみんな知らないなんてことはないよね?」

「何が?」

「私と明久君が……こ・い・び・と、だつてこと」

「……………」

まあ、これで前よりかは告白する人は激減するかもしれないけどさ。

そう考えると、僕の頬に冷たいものがひらりと落ちてきた。

「あ、雪だ」

空を見上げると真っ白な雪が風に乗って桜に混じって舞っていた。

「……ホワイトクリスマスだね」

そういつてななかちゃんが微笑みながらくつついてきた。

「メリークリスマス」

「……うん。メリークリスマス」

「じゃ、行こっか！」

「へ？ 行くつて、何処に？」

「決まってるでしょ！ デートの続き！ 今日はずっと回る暇なかったんだから！ せめて商店街目いっぱい回ってやる〜！」

ああ、昨日はアイシアちゃんと。そして今日は嫉妬に狂った男子達の所為で全く回ることができなかつたからなあ。

「そうだね！ じゃあ、今日は店締まるまで思いっきりクリスマス満喫しちゃおうか！」

「お〜！」

僕達のクリスマスは、ここからだった。

第五十一話

「……いた」

俺はあの扉を潜って何故か屋上にいた。それから少しの時間をかけて現在の情報を調べたところ、ここは初音島で、クリパが始まったばかりの時間帯。

確かに俺達は初音島の元の時間帯に戻ってこれたようだ。若干才マケもついていたようだが。

それからは1日をかけてクリパに来た客達を撮影し、クリパの思い出を写真に収め、1日目を終了させた。

そして今日2日目……。俺は階段の踊り場へと足を運んだ。

そこには、あの少女がいた。誰にも気づかれず、そこにポツンとただひとり……。そこに座っているだけの少女、まひるがいた。

「……あ、おはようございます、先輩！」

俺が目の前に来るとまひるは気づいて笑顔であいさつをしてきた。

まさに真昼間の太陽のような少女だった。今ここで写真を……。

「先輩？ カメラを構えてどうしたんです？ とうか、まひるは写真に映るんでしょうか？」

「……俺の技術を舐めるな」

相手が幽霊であろうがなんであろうが、この美しき瞬間を見逃す俺ではない。

俺はカメラを出してまひるの笑顔撮った後、データを確認した。

「……よし」

「わっ！ 写ってます！ まひる、写真に写ってます！ これって心靈写真!? とうか先輩すごいです！」

「……これくらい、一般技能」

これくらいでなければ男ではない。

「……ところで、決めたのか？」

「はい？」

「……前に言った。別に死んだからと言って、成仏しなければならな

いなどという決まりはない。そんなのは人間の空想が勝手に決めたことだ。お前がそれに従う必要などない。成仏するにせよ、その前に思い出を作ってもバチは当たらない」

「……」

「それで、どうするんだ？」

「……やっぱり、まひるは成仏したいです。やっぱり……死んだ人間がいつまでもこの世にいるっていうのはアレですし。だから、まひるを……成仏させてください」

「……そうか」

一瞬悲しそうな表情になったが、それでもまひるは自分は成仏したいと言った。

ならば、俺はそれを手伝うしかない。

「……それで、これからどうする？ 成仏するからには未練を探すと言ってたが、具体的にどうすればいい？」

「ああ、そういうええまひるも未練に関して、具体的に何をすればいいかわからないんですよ。まあ、とりあえず私と一緒に校内を回ってくれませんか？ そしたら何か思い出すかもしれないし」

「……そうか」

「じゃあ、行きましょう！ 先輩！」

結局、具体的な方針がないまま俺はまひると校内を回ることになった。

理由はどうあれ、これはデートではないかと俺は一瞬鼻血が出そうになったが、ギリギリ堪えた。

「理科室に到着ですー！」

テンションの高いまままひるに引つ張られ、辿り着いた先は理科室だった。

「……何故に理科室？」

俺は頭に浮かんだ疑問をそのまま口にした。

「わかんないですけど、一応」

ぐるりとまひるは理科室を見渡すとある一点に視線を集中させた。その視線の先にあつたのは人体模型だった。

人体模型とまひると見比べて思い出したが、こことあの人体模型はこの学園の七不思議のひとつだったな。

「……そういえば、人体模型の七不思議、知ってるか？」

「……………」

人体模型という単語を発した瞬間、まひるは両耳に手を当てて震えだした。

確実に聞きたくないと言った風だった。幽霊の癖に怖がりなのかというツツコミもしたかったが、涙目になっている少女を相手にそれは言えなかった。

「……別にあの話をしたいわけじゃない。知ってるかどうかを問うてるだけだ」

「本当ですか？」

「……………（コクッ）」

「ふう……………」

「……………というより、何故幽霊が幽霊を怖がる？」

「幽霊って言ったって、怖いものは怖いですよ！ 夜中にあの人体模型が動き出すかもしれないって考えただけでもう……………」

それからまひるは若干青ざめた表情で語りだす。

「あの人体模型は元々は生きていた人間なんて、想像もしたくないですー」

「……………内容は知ってるのか」

「聞きたくありませんでしたが、勝手に耳に入ってきたんです」

まあ、俺と会うまですつとあそこで動かない日々を過ごしたらしいから他の生徒の噂話を聞くことは何度もあつたんだろう。

その話を聞く度に相当震えていたのだろう。今この時みたいに。

……………今になって思い出したことだが、階段の傍にある鏡を覗くと死

んだ女性との幽霊が見えるというのがあったのだが、その原因はこいつではないかと思えてきた。

「もう行きましよう、先輩。ここにいたらきつと呪われますよ」
「……………」

幽霊が呪われるのかというツツコミはしないでおう。
俺達は理科室を出ていき、また別の場所へと移動した。

「ふう……………疲れましたよ」

「……………幽霊が疲れるのか？」

「気分の問題なんです」

あれから何時間か校内を回ってみたが、未練らしいものは何も見つからなかった。

そもそもまひるに未練があるのかどうかすら怪しく思えてならない。見た感じ全てにおいて全力で生きているような少女だ。

そんな子が未練という言葉を使うのがとても想像できない。それでもこの世に固執しているのは何かしらの理由があるはずだ。

「未練については、何か思い出したことはないか？」

「ん……………何もわかりませんね」

「……………そうか」

結局のところ、何も進展はなかった。どうしたものかと迷っていた。

「……………まひるは、生前何をしていた？」

「はい？」

「まひるは生前どんな生活を送っていた？ それがわかれば、少しは未練についても何かわかるかもしれない」

「……生前の生活ですかあ」

まひるは思い出すように空を仰いでいた。そして、懐かしむように話し出す。

「ミキちゃんって言うんですけどね。私にとっては一番のお友達でした」

笑顔のまままひるは自分の生前の友達のことを口にした。

「私……実はほとんど学校に行けたことないんですよ。随分長いこと、病気がちで……ほとんどって言えるくらいの時間を病院で過ごしていたんです」

「……………」

聞くところ、どうやらまひるは幼い頃より病気を抱えていたようだ。

学校に行けた期間もあつたにはあつたが、どちらかと言えば病院で過ごした時間の方が長かったようだ。

少しの間、この学園にも通つたことはあるようで、その少しの間にひとりの女友達ができたという。それがそのミキという女のようにだ。

だが、結局また病気が身体をまわり、入院することになり、ただ何も無い時間を過ごす日々に戻ってしまった。

病気なのだから病院で過ごさなければいけないのはわかる。そうしなければ病気は治らないのだから。

だが、ただ病院で過ごすだけの時間の中で、目の前の少女はどんな思いをしながらそんな時間の中にいたのだろうか。

恐らく、入院した時にこの少女は悟ってしまったのだろう。自分がもう長くないと。

そんな、ただ自分の死を待つだけの時間をずっと生きていたんだ。そして、遂にその命が燃え尽きてしまった時、まひるはこうして幽

霊になっていた。

「……………」

全てを話してからまひるは黙った。

だが、収穫はあつた。なんとなくわかつた。まひるの未練が。

「……デートだ」

「……………へ？」

一拍遅れてまひるは間抜けな声を上げた。

「……………お前は確かその友達に自分が学校に行けた時にどんな生活を送りたいとか、理想の恋愛だとかを話したんだっただな？」

「は、はい……………」

「……………恐らく、その友達に話した生活と理想の恋愛に沿っていけば、恐らくその未練も……………」

そして、もしそれが本当にまひるの未練……………まひるが思い描いた学生人生だとすれば、それが実行された時、まひるは……………。

「な、なるほどです！ そういうことでしたか！ 先輩、ひよつとして天才でしょうか!? 頭いいですよ先輩！」

だが、まひるは明るい表情のまま驚き、俺を褒めていた。

今言ったことはつまり、まひるをこの世から消すために俺と短い時間を過ごせということだ。

自分が消えることがわかってても、この少女は笑顔を絶やささない。ずっと病気の中、自分の死を待つだけ待って、最後に死んだというのに、幽霊になった今でもその笑顔は崩れない。

「それでは、早速行きましょうー！」

「……………その前に、お前はこういう生活をしたかったんだ？」

「え？ えつと……………それはあく……………」

それからまひるは目を泳がせていた。

「……………早くしてくれ。未練を解消するんだろ？」

「そ、それはそうですね……………うう、こんなことならもつと違う過程を言えばよかったよ〜」

まひるは若干後悔したように呟いていた。ということはつまり、デートの過程の中にまひるの苦手なものがあるということ。

そして、ついさっきまでのことを考えると……………

「ならば、俺が決める」

「え？ どこですか？」

俺が言い出すとまひるが笑顔をこぼしたが、

「お化け屋敷」

「……………えぐ」

俺が目的の場所を言った瞬間、涙目になった。やはりお化け屋敷を入れていたのか。

「先輩、意地悪です！ 鬼です！ 幽霊に出会っちゃったらどう責任取るつもりですか！」

「……………そもそも俺は既に幽霊と出会っている。今日の前にいる」

「……………」

俺が反論するとまひるは反論できないのか、口をつぐんだ。

「……………行くぞ」

俺はまひるの手を取って目的の場所へと向かう。

「あ……………」

「……………何だ？」

「いえ……………なんだか、こうして手を繋いで歩くと、恋人同士みたいだなんて」

「……………」

俺はまひるの言葉に何も返さなかった。今はただ、この少女の望んだ学園生活を過ごしたいと思った。

「えう……………」

「……………大丈夫？」

「怖かったです……………何で、何であんなにもリアルなものを用意したんですか？」

「この学園の生徒はやると言ったら徹底的にやるといような奴だからな。……………ちなみにこのお化け屋敷は俺がプロデュースしたものだ」

「先輩のクラスの出し物だったんですか!?! ショックです！ 非常にショックです！ 例えるなら可愛いフィギュアが出るからと言って

いざ買ってみてちよこつと弄ってみたなら（中略）みたいなシユールかつグロテスクな見た目になってしまったことに衝撃を受けたようなものです！」

お化け屋敷を出したのが俺のクラスだったとわかるとまひるは涙目で久々の長い例えを出しながら俺の体をゆすりにきた。

俺は体を揺すられながらもまひるの明るい表情、行動をカメラにおさめる。それと同時に、まひるの体に変化が訪れた。

まひるの体が、少しだが薄くなっていた。

「……………」

「先輩？」

「……………まひる、自分の身体を見ろ」

「へ？ ……………ああ、なんだか本当に幽霊っぽくなってきました。これって、やっぱり未練がひとつ解消されたからでしょうかね？」

「……………」

「じゃあ、やっぱり先輩の推理は正しかったわけですね。じゃあ、このままデートを続けていけば私は成仏できるんですね」

自分の存在が少しずつ消えていくという事実を突きつけられても、尚まひるは笑顔を絶やさず、未練を解消することを選んで進んでいく。

何故こうも自分の存在が消える方向へまっすぐ進むことができるのか、何故毎日幸せでいようという道が選べないのか。

ここでやめろというだけなら簡単だ。だが……………この少女の笑顔、まっすぐさ、行動を見るとそれを口にすることができなかった。

「あれ、ムツツリーニ？ 何やってるの？」

そこで声をかけられ、振り返ると声をかけてきたのは明久だった。

「……………明久こそ、ひとりでどうした？ デートじゃないのか？」

「ああ、その筈だったんだけどね。ななかちゃんが用事で……………で、午後まで暇ができちゃって」

「……………そうか」

やはり、隣にまひるがいるということにも気づいていない。改めて自分の傍らにいる少女が幽霊だという事実を突きつけられた。

「じゃあ、僕はどこかのクラスの出し物食べてようかな。お腹空いちやったし」

そう言つて明久は外の屋台の方へ向かつて去つていった。

「そういえば、そろそろお昼なんですよね。私達もどこかで食べていきましようか」

「……そうする」

俺はまひるに引つ張られるがまま適当な喫茶店で食事をする事になった。

………ところで、幽霊は食べ物を食すことができるのか？

午後になってからはあちこちのクラスの出し物を回つたりミスコン会場に足を運んだりしてクリパを楽しんだ。

夕方くらいの時間帯になって俺達は屋上に足を運んだ。

「はあく……堪能しましたね、先輩」

「……当然だ」

「あはは、先輩。どつちにガッツポーズを送つてるんですか？」

「………」

屋上に着いた時、俺は既にまひるが見えていなかった。

あれからデートらしいことを積み重ねていくうちにまひるの姿を捉えることができなくなつていき、外に出て神社、商店街、枯れない桜の順に回つていき、海を見た辺りで完全にその姿を視認することができなくなつていた。

「……だが、心配無用」

俺はまひるの声がした方向にカメラを構えてシャッターを切つた。

「……俺の撮影技術は完璧」

「わっ！ 本当にまひるが写ってます！ やっぱり先輩って、天才ですか!?!」

「……こんなもの、何の自慢にもならない」

「いえいえ！　こんなプロでも絶対に取れませんよ！　例えるなら

——」
それからまたあの長い例えを語りだした。本当にこの少女はよく笑う。

カメラの保存データを見てもそれがわかる。俺にももうその姿が見えていないのに、写真の中のまひるはよく笑う。

「——という感じですよ！　……それで話は変わりますが、先輩の将来の夢って、何ですよ？」

「……将来？」

「はい」

「……写真家」

「あ、やっぱりそういう方面ですか。先輩らしいです」

そう。俺の夢は写真家（ヌードカメラマン）。その手にカメラを持ち、最高の瞬間を探求し、データを取るのが俺の生きる道。

いつか学園長が設けた未来の姿のシミュレーションによつて出てきた未来の俺は夢は形を変えるなどとはぎいていたが、俺は今の信念を決して曲げない。

「……それで、まひるの夢はないのか？」

「私の夢、ですか？」

俺の質問にまひるは少し考えるように間を置いてから呟く。

「やっぱり今日みたいに、誰かと手を繋いだりして、デートして、お化け屋敷で抱きついちゃったりして……一緒に食事して、笑い合つて、こういう高いところとかで夕日を見て……」

最後にまた間を置いて、声を寂しそうなものにして、

「……最後には、自分の気持ちを打ち明けてから、お別れ……ですね」

「……………何故、自分の気持ちを言つて別れる？　それも、理想の恋愛で。恋人になる……という願望はないのか？」

「ほら、初恋は実らないって言うじゃないですか。ですから、初めての恋は……やっぱりお別れなんですよ」

「……………」

もう、時間は……ない。恐らく今夜ここで、まひるは完全に存在が消える。俺の、傍で。

「……自分のやってきたことに、後悔はないのか？　自分が消えてしまうことに、恐れを抱かないのか？」

気づけば俺は……心にある疑問をそのまま口にする。

「後悔なんて、してませんよ。だって……私は、幸せだったんですよ。ほんの一日の、短い時間だったんですけど、本当に楽しかったんですよ。今までで一番、幸せでした」

「……他にしてほしいことは、なかったのか？」

俺はカメラを握り締めたまま、そう呟いた。

俺は、まだ足りなかった。まひるの明るい言動、表情、その全てをまた十分に撮れていなかった。

まだ、まひるとの時間を十分に過ごしたとは言えなかった。だから、まだ消えないで欲しいと思った。

「そんなの、たくさんありますよ。たくさんありすぎて、困りますよ。多分、全部言ったら……何日あっても足りません」

「……何日でも付き合ってる。だから……俺とずっと一緒にいろ」

俺は……まひるを、目の前に見えていなくても感じる、この温かさを持った少女のことを、いつの間にか好きになっていた。

「……では、最後にひとつだけ」

俺の言葉に、まひるはただ一言、そう口にした。最後……それが答えだった。

「キス……して、くれませんか？　最後に、キスを」

恋人なら、絶対にするであろう行為を……最後に。

こんなところで、こんな時に、そんな大事なことを……今この時に。

「……どうやって、そんなことを？」

そもそも俺にはもうまひるの姿が見えない。どうすればまひると触れ合えるのかすらもうわからない。

「顔を……こっちに向けてくれれば」

「……わかった」

俺は、まひるの声のした方向へ顔を向けた。

「あの……」

いぎ、その時かというところで、まひるが声をかけてきた。

「先輩も、幸せでしたか？ 私と出会ったこと、後悔してませんか？」

「……美少女と出会えたことに関して、一度も後悔したことなどない」

「あはは……先輩、浮気性なんですね。先輩は、まひるの彼氏ですよ？」

「……今さっきなつたばかり」

「でも、よかったです」

それから、俺の目の前に僅かな光の輪郭が見えた気がした。

「先輩、バイバイ」

まひるの、別れの言葉と共に、唇の感触があった。

そんな時、奇跡が起きたと思えた。この世界にやってきた時や、過去に行った時、俺が写真を撮るどの瞬間とも比べ物にならない。

本当に、心の底から奇跡と思える瞬間だった。

「……まひる、やはり泣いている」

俺の目の前に、涙を流して、今にも崩れてしまいそうな、まひるの笑顔があった。

「そりゃ、泣きますよ……泣くに決まってるじゃないですか。先輩と、別れたいわけないじゃないですか！ 大好きなのに！ 本当に、大好きなのに！ 成仏なんてしたいわけじゃないじゃないですか！」

今こぼれ落ちた、まひるの本音。それが当たり前なんだ。

「それに、先輩だって……泣いてるじゃないですか」

「……違う。これは、目にゴミが入っただけだ」

強がりだった。我ながら無表情で通ってる筈の俺が、泣いてるのを認めたくなかった。

こんな時だからこそ、いつも通りでいたかった。

「結構、私達って……似た者カップルだったんですね。もう、別れちゃいましたけど……」

「……………」

「……先輩、そろそろ、本当にお別れです」

そして、まひるの身体が、再び見えなくなっていく。いや、なくなっ

ていく。

俺の目の前から、ゆつくりと。本当の別れが、間近に迫っていた。

「……………まひる」

「はい」

「……………笑顔でいろ。その瞬間を、カメラにおさめる」

俺は、そう言った。

「最高の笑顔を、見せてくれ」

こんな時に、そんなことを頼むのは人としてどうだと思う。だが、せめて最後に、俺のカメラで……………まひるの姿を撮って、見送りたい。

「……………はい。でも、その代わりにひとつだけ、お願いがあります」

「……………何だ？」

俺はカメラを構えたまままひるの言葉に耳を傾ける。

「先輩……………」

カメラのシャッターを切る体勢をとって、いつでも撮れるようにした。

「……………幸せに、なってください」

最後に見せた、安らかな笑顔を見せたところで、シャッターを切った。

そして、シャッターを切ってから、完全にその姿は見えなくなった。同時に、存在も感じなくなった。

「……………」

わかっていた筈だった。彼女が幽霊だと聞いた時から、こういう別れがあることはとづくに覚悟していたと思っていた。

だが、いざ時が来てみれば、俺は格好悪かった。結局最後まで、強がってみせたただけだった。

「……………まひる……………撮ったぞ。お前の……………最高の瞬間を」

俺は、最後に撮ったまひるの笑顔ののったデータを見て、そう呟いた。

初恋は実らない……………または、初めての本気の恋は涙味だと何処かの誰かが言ってたか。それは、本当なのかもしれない。

カメラの画像データ越しで笑っているまひるも同じことを思っ

いたのか、俺の流した涙がまひるの瞳の上に落ちて、泣いているように思えた。

もう日が落ちた時間、俺は校外に出ていた。

今日でクリパは終わりだ。俺は自分のクラスの後始末の手伝いにもいかず、通学路でカメラのデータを確認していた。

今日過ごした、まひるとの時間を記録した、このカメラを。

「む？ ムツツリーニではないか」

カメラのデータをチェックしているとところに秀吉が来た。

「……クラスの後始末は？」

「それはお主も言えることではないかの？ 儂は、男子達が女子はもう自由にしていいと言われている。何故か儂も含まれている」

秀吉を出すのは当然だと思うが。

「ところで、何かあったかの？ お主……随分と泣いておるように見えるが」

「……別に」

勘の鋭い秀吉にこんな強がりには意味をなさないかもしれないが、それでも今は強がらずにはいられなかった。

「そうか。言いたくないのなら儂からは何も言わん。何かあったかは知らんが、少しは慰めてやらんでもないぞい」

「……無用だ」

俺はそう言ってまた歩き出す。

「むう、今日はまたいつも以上にカメラを気にしとるのう。何かよいものでも撮れたか？」

「……撮れた。今までで最高のものを」

俺の初めて恋した少女の写真……。

「……………秀吉」

「む？ 何じゃ？」

「……俺は、写真を撮り続ける。良い瞬間を、これからも撮り続ける」
「そうか……まあ、頑張るのじゃぞ」

「だから……ムツツリ商会は今日をもって終了とする」

「そうかそうか。ま、犯罪者にならん程度にの………は？」

秀吉の驚いた表情というレアな場面にカメラも向けず、俺は空を見上げた。

「……俺は、最高の写真家になってやる」

悔しいが、あいつの言った通りだった。夢は形を変える。今日この瞬間、確かに変わった。

「命散るその時まで、写真を撮り続けて……見る者の心を打ち抜いてやる」

カメラを握りしめて、そう誓った。俺の、これからの幸せを目指して。

第五十二話

クリパが終わり、暮れも押し迫ったある日の事。

「寒〜……」

「何で休日に僕ら、学校に来てるんだろ？」

「そりゃあ、折角温々とした部屋で昨日のゲームの続きしようとしたところで突然のまゆきさんからの呼び出しがかかったからだな」

「あ〜、そうだったねえ」

もう冬休みに入っているわけだから僕達は家でのおんびりゲームをして休みを過ごしていたのだが、そこに僕達の携帯に高坂さんから電話がかかってきて、

『今すぐ学校の生徒会室に集合。わかった？』

——と、僕達の返事も聞かずに一方的に要件を言って電話を切った。

そんなことがあつて僕達は学校に来ていた。ていうか、なんで僕達が生徒会に？

確かにクリパとかで一時的に生徒会のメンバーに入つてはいたけれど、あれはもう期限を過ぎたのだからもう僕達には関係ないんじゃないの。

「は〜……せつかく新ステージ突入しそうってところで」

「あ、義之そこまでいったんだ。僕はセカンドのボスの攻撃パターンが中々あれでちよつと手こずつてる最中だった。」

「ああ、そうか。なら、さっさと要件済ませて家帰つて続きといくか」「そうだね。このまま寒空の下でアレコレいってもどうしようもないし」

「だな」

とりあえず僕達は生徒会室へと向かって歩き出したのだった。

「どーも」

「こんちやーつす」

「あ、2人共！」

「遅い！」

「いらつしやーい」

入れば生徒会室にはお馴染みの生徒会メンバーが集まっていた。

「どしたの、ぼんやりして？」

「さあさ、中に入って」

「早く閉めてくれないと寒いんだけど」

「あ、ごめん」

僕は生徒会室の扉を閉め、義之と共に空いてる席へと移動した。

「さて、弟君達も来たところで、本題に入りたいと思います」

「はーい」

「待ちくたびれました」

何故か説明もなしに会議が始まっていた。説明はないの？

「それでは只今より、今年最後の反省会を行いたいと思います」

「ちよつと待ってください」

「ん？ 何、弟君？」

「それ……俺達も参加っすか？」

「当たり前じゃない。少し前まであんた達も生徒会の一員だったわけだし」

「や、それはそうでしょうけど……」

「まあ、他にもあんた達は……人身御供？」

「は？」

人身御供……要は生贄ってこと？ 何で僕達が？

「今年の生徒会の渴仰結果ね、まあ、野球で例えるなら打率不振。投手はよかったんだけど、得点を上げられなかったというか。対杉並関連で要所要所は抑えられたんだけど……豪快な逆転ホームランとまではいかなかったのよ。逆にクリパでは、弟君達のクラスにおつきな火花を打ち上げられる始末」

「うぐっ」

高坂さんの視線に僕達は後ずさる。そうだ……クリパの2日目

僕が追いかけられ、学園から出た後で杉並君が夜に大きな花火を彩らせたらしい。

それを仕組んだのが杉並君やムッツリーニ、他は渉や杏ちゃん、茜ちゃんに3組のほとんどが参加してたらしい。

生徒会に叱られる覚悟で仕込みを頑張った甲斐があつてか花火自体は好評だったようだけど、ゲリラ打ち上げだったために生徒会は付近の住民からの苦情処理に四苦八苦だったらしい。

その結果、うちのクラスには嚴重注意が言い渡されて冬休み中に処分が発表されると言っていたが。まあ、僕と義之は生徒会メンバーだからと思つて記憶から外していたのだが。

「エリカも生徒会に正式に入ってくれて新緑は確実にUPしてるんだけど、やっぱりまだコマ不足な感は否めないのよねえ」

「で？」

「それがどう……」

「まあ、つまり……あたしや、腹が立つてるのよ！」

「それが本音ですかー！」

ガンツ、と机を叩いて怒鳴った高坂さんに僕がツツコミを入れた。

「最終的には現場を取り押さえられたけどクリパは杉並や雪村達にいい様にやられてしまったわけだしね。んで、目をつけたのがあんたら2人」

「……はい？」

「やっぱり目には目を、歯には歯を、問題児には問題児を、だよね」

「失礼な、僕（俺）はそんなに問題を起こしてませんよ！」

「今まで散々杉並と好き勝手やってた弟君がそんな事言うんだ？」

「それと、吉井は文月学園の方で相当やってた癖に？」

「うぐ……」

言い返せない。確かに向こうじゃ相当やらかしちやつてたからなあ。

「ていうか、それで俺達を呼んだんですか？　俺達の意味表示とかないんですか？」

「別にYES、NO唱えるのはあんた達の自由だけど……ここでのあ

んた達の選択があんた達のクラスへの処分に大きく関わっていくからね」

「うわ、きたな！」

義之の言う通り、やり口が汚い。それは脅迫というものではないだろうか。

「だから最初に言ったじゃない。あんたら2人は生贄だつて」

「く……」

僕と義之はただ黙つてこの人の言うことを聞くしか選択肢が残つていなかった。

「つて言つても、ずっとお手伝いしてつてわけじゃないんだよ。生徒会合宿の期間だけでいいから」

「……生徒会合宿？」

音姫さんの言葉に義之が聞き返した。

「うん」

「ちなみに明日から」

「明日!？」

「目的はこれまでの反省と今後の対策の検討。他、生徒会面々の親睦、慰労などなど。ま、その合宿にあんた達も参加してもらおうけど」

「ちよ、ちよつと待つてくください！ 明日からつて……期間はどれくらいですか？ 大晦日には帰りますよね？」

「お正月明けるまでよ」

「そ、そんなにいいいいいいいい!？」

「生徒会の仲間と一緒に年越し！ イエー！」

「イエー、じゃなくて！」

「ん？ 吉井はまだ文句あるのかにや〜？」

「文句大アリですよ！ そんなに長い間なんですか！ それじゃあ折角の年末年始のななかちゃんとの楽しい時間327通りまで練つた僕のデート計画はどうなるんですか！」

「むしろ327通りまで考えられるあんたの脳に感心を覚えるわ」

くうく……このままこちに残れば僕達のクラスの処分は重くなる。かといつて行けばななかちゃんとのデートはなくなる。どっち

にいつてもその先にあるのは凶だ。

「生徒会と一緒に旅行に行くだけで、弟君達のクラスの処分が軽くなると思えば安いもんでしょ」

「今、旅行って言った！ 反省会だとか親睦会だとか言ったのに今あんた普通に旅行って言いましたよね！」

ああだこうだ言っても結局結果を覆すことはできなかったわけ……明日午前7時に芳乃家に集合ということになってしまった。

うゝ……僕とななかちゃんの素敵な年末年始があゝ。

ピピピピピピピピピ！

「うゝ、うゝん……」

ピッ！

「……はあゝ」

目覚まし時計の音で僕は目を覚ました。同時に欠伸でなく、ため息をついた。

今日は生徒会合宿のためにスキー場へ行くことになった。ななかちゃんには悪いことしてしまったなあ。

ななかちゃんには昨日連絡して年末年始を共にできないことを謝ったのだが、彼女は電話の向こうで笑って――

『まあ、一時的にとはいえ、生徒会メンバーになってみたいだから当然だよな。うん、私のことは気にしなくていいから、そっちはそっちで楽しんでいきなよ。こっちはこっちで小恋達と年末年始楽しく過ごすから。あ、でも帰ってきたらお土産と埋め合わせ楽しみにしてるから♪』

——と、許してくれた。本当、僕には過ぎた彼女さんだなどしみじみ思うよ。

僕は昨日あらかじめ準備しておいた荷物を軽く確認して下へおりました。

「む？ 明久か。早いではないか」

「おはよう、秀吉。秀吉も随分早いじゃん。僕はこれから生徒会合宿へ行くから早く起きたけど」

「僕は、まあ……演劇部での用事もあるからの。明久と、桜内に由夢ちゃんもじゃったな」

「うん。義之も……そろそろ起きるかな？」

「うむ。それでもって、由夢ちゃんも既に起きて……」

秀吉が指差した先には……

「フッフッフ♪」

鼻歌交じりに荷物の準備を行っている由夢ちゃんの姿があった。

「えっと、あれ持ったこれ持った……後は、後は。あ、そうだ。あれも持っていった方がいいかな」

「……なんていうか由夢ちゃん……」

「楽しそうだな」

「はうっ!？」

突然聞こえてきた第三者の声に由夢ちゃんが驚いて飛び上がった。

「おはよ〜」

声を出していたのは義之。今起きたところかな。

「お、おはよう兄さん。遅いですよ」

「俺んちの前で集合なんだからちようどいい時間帯だろ。にしても、随分と楽しみにしているんだな」

「べ、別に楽しみになんかしていません」

「そうか？ 今めっちゃ楽しそうに荷物の準備をしていたが」

「こ、これは、その……行くなら準備万端の方がいいし、こういうのって準備している最中が楽しいんであって」

「子供の遠足か。ていうか、結局楽しんでると告白しているぞ」

「むっ!」

義之がにやけると由夢ちゃんは眉を釣り上げて不機嫌になった。

「そういう兄さんは随分荷物が少ないじゃない。それでいいの？」

「たかが生徒会の合宿だぞ？ 着替えだけありやそれでいいんじゃないの？」

「ふくん。行きのバスや船の中で、お腹がすいてもお菓子とかいらな
いんだ」

「うぐ！」

「暖かいお茶もいらないんだ」

「し、しまった！ それは確かにいるかも！」

「ふふくん♪」

由夢ちゃんの反撃を受けて義之はたじろいた。

「ゆ、由夢様！ このわたくしめにも少しばかり、お裾分けを！」

「ふーんだ。こういう準備をしないってことは、食べないってことで
すよね」

「食べる！ 食べます！ 全然気が回りませんでした！」

「ふうん？」

「ゆ、由夢さま！ なにとぞ、なにとぞ」

「兄さん、そんなクネクネしたら気持ち悪いだけです」

「俺もバスや船の中で食べたいであります」

「しようがないなあ。じゃ、このお菓子が詰まったバッグ、兄さんが
持ってくださいね」

「それくらいお安い御用——って、重おっ!? たかがお菓子なのに
重っ！」

義之が笑いながらお菓子の入ったバッグを持ち上げてみるが、予想
以上の重さにぎっくり腰にでもなりそうなほど全身の筋肉が一瞬引
きつった。

「合宿中、みんなで食べるお菓子がはいつてるの。重くて当然」

「さ、流石だね由夢ちゃん。みんなの分も気遣ってなんて……」

「弟くん、お姉ちゃんの荷物もお願い」

「音姉も？ まあ、いいんだけど……って、ちよっと待て音姉！ あん
た、何処に引っ越すつもりだよー！」

「え？」

「え、じゃなくて！ 何なんだ、そのうず高く積まれた荷物は!?!」

義之の言う通り、音姫さんが持ってきたのは何処かに引越してもするのかもしれない高く積み上がった荷物だった。

「何って、合宿行くのに必要最低限の荷物だけど？」

「必要最低限でどうしてそんなに高く積み上がるんだよ！ もうこの量は完全に引越しレベルだぞー！」

「お、お姉ちゃん……私も、それは流石に多すぎかと……」

「ええ？ だって、色々必要でしょ？ 着替えでしょ？ お風呂セツトでしょ？ もしもの時の救急箱に、ドライヤーに、紫外線防止クリームに、お肌感想防止のクリームに、ボディローションに」

「いや、そりゃそうかもだけど……それ以外でしょ、この荷物の多さは！」

「い、一体何が入ってるの？ お姉ちゃん」

「えく？ 大体が着替えなんだけどお」

「二そんないらん（いりません）（いらないよ）!!」

音姫さんの言葉に僕達3人が同時にツツコんだ。

「何で合宿する分じやない着替えまであるんだよ？」

「だって、何が起るかわからないじゃない？ パーティーとか、遭難とか……いきなり夏になっちゃうとか！」

「二絶対はない！」

「はうっ！」

「ていうか、音姉……まさか、水着まであるなんて……」

「うん！ 3着！」

「アホかー!？」

音姫さんの水着姿……個人的には興味あるが、この場においては必要はない。

「はう〜」

「置いてきなさい」

「やだやだ〜。これでもすごい厳選したんだよ？ これ以上は無理〜」

「いや、それは全く必要とは思えませんけど……」

「いきなり夏になることなんか、絶対ありえないのに……」

「私の、お菓子詰め合わせバッグの方がまだマシだよね」

「それは俺も同意だ。帰りには確実に減ってるしな……って、まさかお前も水着なんて?」

「お姉ちゃんと一緒にしないでください」

由夢ちゃん、君もちよつと酷いこと言ったよね、今。

「やほ〜! 来たよ〜!」

ちようど高坂さんが来たようだ。

「お、来た来た」

「それじゃあ、行きますか」

「待って〜! 弟くん、運ぶの手伝って〜! ああ、由夢ちゃんも明久君も〜!」

「……あゝ、明久……悪いが、運ぶの手伝ってやってくれ」

「了解」

ため息つきながらもそういう義之も、結構優しいよね。

「おっはよー!」

「おはようございます」

「おはようございます、高坂先輩」

「おはようございます、お早いですね」

「おはよ〜」

「うんうん、みんな揃ってるねえ」

玄関を出たら門前にはマイクロバスが到着していた。

まずこのバスごと船に乗り込み、本当に渡ってからまたこのバスで移動、という方針だ。

中には既にムラサキさんやその他生徒会メンバーが乗り込んでいた。

「そんじゃ、荷物はこっちの方にポイポイと詰めちやってね」

「ういーっす」

「了解です」

マイクロバスの荷物用スペースには既にたくさんのポストンバッグがあった。かなりいっぱいあるなあ。

中には複数のバッグを詰めてる人もいるんだろ。明らかにメン

バーの数より多いし。

「あ、兄さん。お菓子バッグは車内持ち込みですからね」

「わかってるって」

「うんしょ、うんしょっ」

後ろでは大荷物を引きずってくる音姫さんの姿があった。ちゃん
と入るかなあ、あの荷物。

「たく、音姉、貸して」

「ありがとう、弟君」

「ちよつと音姫？ なにこの荷物」

まあ、これ見れば流石の高坂さんも驚くだろうなあ。

「ちよつと少くない？」

「「えええっ!?!」」

高坂さんの言葉に僕と義之、由夢ちゃんが声を上げた。

「うん、今回はそんな滞在期間がないから」

「え〜？ それ大丈夫なの？」

「厳選したから問題ないよ」

「いや、ちよつと待ったー!」

ナチュラルに言ってるけど、ものすごい発言の嵐に僕と義之が割つ
て入る。

「ん?」

「こ、これって、いつもっ..」

義之が音姫さんの荷物を指差して尋ねる。

「そうだけど？ 毎年生徒会の合宿にはこれ以上の荷物になるよね
?」

「うんうん」

「まあ、色々必要なのよ。あたしも、ほら」

高坂さんは荷物用スペースを手で差して言った。ていうか、ちよつ
と待って。まさかとは思うけど。

「まさか.....あの大量のポストンバッグはほとんど高坂さんの？」

「あつたり〜」

「「.....」」

僕と義之、由夢ちゃんは絶句して顔を見合わせた。

「そういえば、毎年合宿でいないときのお姉ちゃんの部屋は、全く物がなかったなあ」

「そ、そうだったのか。てか、まゆきさんも一体何持ってくんのだ？」

「類は友を呼ぶ……ってやつだね」

「みんな、荷物詰めたわね？ 忘れ物ない？」

「「はーい」」

「そんじゃ、しゅっぱーっ！」

こうして僕達は生徒会合宿へと足を運ぶことになった。

「……うむ、行ったぞい。それじゃあ、儂らも行くぞい」

明久達が芳乃家を去った後、また門前に別の車が到着し、秀吉はその車に乗って芳乃家を出た。

第五十三話

「さ——っ！ 着いたわよー！」

「着いた〜」

「着きましたわ〜！」

「着いた〜！ うおー、一面銀世界〜！」

「やっぱ冬と言えば雪山でスキーだよね〜！」

「あー！ 気分爽快だぜー！」

「全くだよー！」

「ハハハハハハハハ！」

僕と義之は目の前に広がる銀世界を視界に収め、笑いあつた。

「——って、ちよつと待てえ!!」

「ん？」

「あの、ここってどこですか？」

「合宿場」

「スキー場……にしか見えませんか？」

「そうだよ？」

高坂さんは何を当たり前な事を的な視線を向ける。

「ていうか、言ってなかったっけ？」

「何を？」

「生徒会の合宿はスキー場でやるよって」

「全くもって初耳ですよ」

今までの事を振り返ってもスキーなんて単語はひとつも飛び交ってなかった筈だ。

「あはっ！ そうだっけ？ でもまあ大丈夫だよ」

「何がですか!？」

「僕達何も知りませんから本当に必要最低限のものしか用意してませんよ!？」

「ていうか、由夢は聞いてたか？」

「一応……昨日寝る前にお姉ちゃんから。ギリギリだったから、今朝

ウェアだけで他は全部レンタルですけど」

「……………」

「兄さんと明久さん……本当に聞いてなかったんですね」

「う、うん……」

「全然聞いてないよ」

「まあまあ。由夢ちゃんの言う通り、一式揃うレンタル店もあるから。弟君は結構滑れるんでしょ？」

「ま、まあ……」

「僕も、それなりに」

「ていうか、本当にここで生徒会の合宿なんてするんですか？」

「ほんとほんと。堅苦しい、耳の痛い話をしなきゃならないでしょ？」

「だったら、その合間で楽しいこともしなくちゃね。折角の貴重な冬休みを潰してまで来てるんだからさ」

「はあ……それはそう……なんででしょうけど」

「それならやっぱ僕、初音島に残ってもよかったんじゃないんですか？」

「男が過ぎたことをグダグダ言わない」

誰だつて言いたくなると思う。

「まあそれに、何を始めるにせよ、基礎体力は大事じゃない？ 冬休み中、食つちや寝してたらいぎつて時に動けないから」

「まあ、それはわかりますけど……」

確かに堅苦しいばかりで動かなかつたらいぎつて時に動くこともままならないかもしれないけど、それ僕達必要なのかな？

風見学園でも結構嫉妬で追いかけられることが多いから運動に関しては特に問題はないと思うけど。

「ほらほら、レンタル屋行こう」

それにしても、高坂さん、生き生きとしているなあ。

はあ……いくら愚痴つても来たものはもう後戻りできないだろうし。こうなつたらこうなつたら楽しんでやる。

「さて、俺達もスキー道具揃えるか」

「うん。はあ……何も言ってくれなかったから、全部自腹……せつか

くななかちゃんとのデートの為にゲームも我慢したのに」
「まあ、同情するぜ。俺も何も聞いてなかったからな」

僕と義之は肩を抱き合ってレンタル店へと歩き出した。

レンタル店で道具一式をレンタルした後、僕達はレストハウスへと移動した。

結構長い旅だったからまずは腹ごしらえといったところだ。

「うくん、迷うなく」

「私も。けんちんうどんも美味しそうだけど、こっちのカツカレーも」

「あたしは、この田舎蕎麦セットにしよう」

「私も」

「弟君は？」

「俺もそのセットで。明久、お前は？」

「僕は、うどんの方で」

「あくん。決まらないく」

「ならいつそ、全部頼むとか」

「そんなことしたら太っちゃやうじやないく」

「大丈夫だよ。たくさん滑ったら痩せるから」

高坂さん。あなたはどれだけ滑るおつもりなのでしょうか？

それにしても、なんというか……。

「なんだか、全く生徒会の合宿とは思えねえな」

「激しく同感」

僕達、完璧にただのスキー旅行の客としか見えない。こんなところで生徒会の反省会なんて必要？

「くすくす。あんた達、不安になってる」

「いや、だって。まさかスキー場に来るなんて思ってもみなかったか

ら」

「国民合宿みたいところで、滞在中ずっと反省会だと思った？」

「はい、正直」

僕も正直、文月の学力強化合宿みたいなあれかと思ってたよ。

「私も、なんとなくそうではないかと。全員正座で、肩とか叩かれながらの反省かと」

「ムラサキさん、それ禅寺だよ。ていうか、何処からそんな知識を？」
「なら、そっちの方がよかったかしら？」

「いえいえいえ、とんでもない」

「私は、そっちの方も興味はありますが」

「流石は外国のお姫様。まあ、それはまた別の機会にでもしましょう」
「まあ、後でしっかり反省や今後のスケジュールを決めていくから楽しめる時には楽しんでおきなよ」

「いや、今後って言われても僕（俺）達は全く関係ないですよね？」

期間過ぎたんですし」

「何か言ったかしら？」

「……いえ、なんでも」

高坂さん、あなたが笑顔で手をポキポキ鳴らすのは反則だと思うんですけど。

まあ、そんなでちやつちやと食事を済ませて、全員がスキーウェアに着替えてゲレンデに集合した。

「うっしやー！ 兎にも角にも滑るかー！」

「わーいー！」

「……………」

もう何もツツコまないよ。本当に生徒会の反省合宿なのかとか、結局先に滑るんかいだとか。

「……………」

ん？ なんだか、ムラサキさんの様子が変だ。

「あの、ムラサキさん、どうかした？」

「いえ、何でもありません」

「そう？」

「い、一応……念のため聞いておくけど、吉井は滑れるのかしら？」
「僕？ まあ、スキーはとうか……スポーツならある程度できるけど。って、ああ……」

そっか。まさかとは思ったが、ムラサキさん……。

「ひよつとして、滑れない——」

「す、滑れるに決まってるでしょ！ ただ……頭ではわかってるけど、実際試したことがないから」

それって、滑れないのと同義では？

しかし、思った通り。ムラサキさん、スキーの経験がないと見た。まあ、お姫様がそんな俗っぽいことをやらせてもらえとは思えないが。

「じゃあ、最初はみんなでファミリークース、滑ろっか？」

「それじゃあ、まゆきは物足りないんじゃないの？」

「大丈夫大丈夫。まずは準備運動ってことで」

「いえ、ご心配なく。私は大丈夫です！」

「けど、ひとりじゃ心配だしなあ」

「確かに」

「大丈夫だよ。私と一緒にいてるから」

「私もお供します」

「え？ いいの？ 音姫達もちやんと滑りたいんじゃないの？」

「まだたくさん日にちあるからいいの」

「そうですよ」

「ん〜……そっか。じゃあ、お言葉に甘えて、私は自由に滑らせてもらうよ。あんたら2人はどうするの？」

「俺は……とりあえず、みんなについてます」

「僕もそうします」

何よりムラサキさんの方が心配だ。

「何で私の方を見てるのかしら？」

「いや、なんていうか……」

そもそもスキーのルール自体しっかり把握できてるかどうか不安だから。などとは言えない。

しばらくして、僕達はゲレンデの……麓辺りでムラサキさんの練習を見ていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………何でしょう?」

ムラサキさんのボーゲンをチェックしているところなんだけど、なんていうか……。

「様に、なつてないな……」

「……………」

義之、容赦ないよ。しかし、その通り。ムラサキさん、体のあちこちに余計な力を入れてるせいで猫座なのに膝に力が入っていない。

しかも手足が落ち着いておらず、滑る方向も安定していなかった。

「こりゃ……先は長いんじゃないか?」

「えつと……なんていうか……」

「……………何です? 言いたいことがあるのならハッキリとおっしゃってください」

その笑顔と丁寧な口調が何故かすごく怖い。正直に言っても嘘を言っても地獄しか見えない。

もうどつちにしろ地獄ならいつそ素直な感想を。

「その……中々身体に馴染まないのかなって」

「要するに、飲み込み悪いっていうことか」

「えつと……」

「……………」

「ま、まあ……ムラサキさんはスキー初めてなんだし、仕方ないんじゃないかな?」

「いや、それにしたって……これはないだろ。初めての音姉や由夢よ

り酷いぞ」

義之の言葉に悔しそうに唇を噛み締めるムラサキさん。そしてそのままエツジを立てながら横歩きで上に昇る。

「きやつ!？」

——のだが、慣れていないのか、バランスを崩して横に倒れた。

「ちよ、大丈夫?」

「だ、大丈夫に決まっていますわ」

ムラサキさんはエツジを杖のように使ってどうにか立った。

「んあ〜……とりあえず、また基礎の基礎から一から説明いれるか」

それから義之の口と手足でボーゲンの基本を教え、しばらく練習させてから初心者用のコースへ来た。

「え、ちよ! お、降りる時はどうすればいいのよ!」

「お、落ち着いて! まずスキーの先端を上げて、踵の部分が地面に着いたらエツジを立てて力を入れて、それで滑るんだよ!」

「えつと……こう?」

「そうそう……」

リフトを使う際、色々危ないところだったが、どうにか無事に降りられた。

やはりムラサキさんはスキーに関しての知識が圧倒的に足りない。下手をすればもう一周なんてこともありえたかもしれない。

「それじゃあ、早速練習通りにやってみようか」

「……なんか、偉そうですね」

「別にそんなつもりじゃないけど……」

ムラサキさんに睨まれるけど、こっちは経験者だから仕方ないし。それからムラサキさんはエツジを立てて坂に入って滑り出した。うん、どうにか形になり始めたボーゲンで滑っているのだが。

やはりまだ速度がないなあ。まあ、そこは徐々についてことで。

「でも、もう少し速度がなあ……」

「う、うるさいですわよー!」

途中から口に出しちやっただのか、ムラサキさんが僕に怒鳴った。それがまずかったのか、

「あ、あら?」

怒鳴ったことで集中力が切れちゃったのか、ムラサキさんの身体が徐々にコース外へ向かって滑っていく。

「お、おい! そっち行くな! さつき言ったように片足に体重を——」

「え、ええ……えつと、こつち? って、更に外に!」

駄目だ。突然の事態に頭が混乱して思うように体重もかけられないようだ。

「ムラサキさん、エッジ! エッジ立ててブレーキ!」

「い、言われなくてもわかってるわよ!」

そう言いながらエッジを立てるが、力が偏っていたのか、今度は重心が後ろに流れて後ろ向きになって加速してしまう。

「ふわっ!?! と、止まりません……止まりませんわっ!」

「バカ! 横に倒れる!」

「え、えつと……」

「駄目だ、完全にパニックってる!」

義之がムラサキさんに指示を出すも、混乱してまともに思考も働いてない。

それに、自分から倒れるというのも割と難しいものなのだ。僕はエッジに力を入れて一気に加速してムラサキさんと並んで、

「ムラサキさん、エッジを捨てて力を抜いて!」

「え、な、何……きやあ!?!」

僕はムラサキさんの横から飛びかかってなるべく怪我のないようにムラサキさんの足を保護しながら倒れ込んだ。

「ふう……大丈夫?」

「だ、大丈夫……ですわ」

僕の胸の上で羞恥によって顔を赤らめていたムラサキさん。うん、どうにか無事だったようだ。

「ムラサキさん、大丈夫?」

「うう……申し訳ございません。こんな、無様な姿を……」

「まあ、初心者なんだし、しょうがないよ。そこは少しずつ——っ!?!」

僕がムラサキさんを抱き起こすと同時に何故か気温による寒さとは異質の悪寒を感じた。

「ん？　どうかしましたか、明久さん？」

「い、いや……何か、どこからか殺気が……」

「はっ！」

「……う、うん。なんでもない……多分、気の所為」

それから再びムラサキさんのスキーの練習に力を入れ、夕方までかかってどうにか初心者卒業まで至った。

「むう……」

「おい、アレなんとかしてくれない？　見てるこっちが寒さで凍りつきそうなんだけど」

「無理。アレには関わっちゃいけないよ」

「ま、女の嫉妬は嵐の海よりも恐ろしいってね」

「やれやれ……こつちに来てても相変わらずじゃのう」

「……アイツも、いつか後ろから刺されるかもしれない」

「ていうか、お前らそつちばつか気にしてないでこつちの方も何とかしてくれ！　このままじゃ俺は身も心も破滅しちまう！」

「……動かないで。うまく手をかけられない」

「手をかけるって何処にだ!?　お前の手が俺のある部分に直行してきてるぞっ！」

「……こつちも相変わらずじゃのう」

「……お楽しみは夜、2人きりでやってほしい」

「わかった。じゃあ、今夜続きを——」

「そんなことになってたまるかああああ!!」

第五十四話

スキー場での生徒会合宿1日目も終盤になったこの夜。

午後からスキー目いっぱい楽しんでからの夕食も中々美味しかったなあ。

しかし、ムラサキさんは慣れないスポーツをやったからか、筋肉痛でもう仕草がお年寄りっぽくなっちゃって見てるこっちがかなり心配したくなるくらいだった。

そして食事が済んでからすぐにペンションの食堂を借りて合宿の目的でもあった生徒会の会議が開かれた。

まあ、僕達はもうあまり関係ないので一番端の席に義之と由夢ちゃんとで座らせてもらってる。

「じゃ、順番にこのプリントを回して」

高坂さんが議題内容の書かれたプリントを回していく。

「そこに書いてある通り、今回の議題は本年度の反省と来年3月の卒業パーティーにおける運営、それと非公式新聞部への対策です」

そういえば、新学期になれば今度はそっちに向けてうちのクラスもまた何か出し物考えるようになるんだったな。

それに、今度は僕達の学年が付属を卒業するわけだから今年の付属3年のメンバーの事を考えると今まで以上の盛り上がりで非公式新聞部によるトラブルが予想される。

元々僕達の周囲のメンバーはお祭り騒ぎが好きだから杉並君が筆頭になって予想外の事態を起こすことは容易に想像できる。

「前回のクリパの反省点と、今後も活かすべき点をレクチャーしてきたと思います。まず、反省点ですが……」

それから音姫さんが反省点を述べていく。

前のクリパで発生した事件と事故の数々。更にその原因と対抗策、当時に使用した作戦による成果や反省点などなど、数々の言葉の羅列が続いていく。

いやはや、普段はのほほんとしているというか、のんびりしているからあまり考えてなかったけど、こうして見るとやはり音姫さんや高

坂さんの存在感がすごい。

生徒会はこの2人を中心に行っているからこそあれだけ行動できるわけだ。

ただ、それが同時に弱点を晒している状態にあつてあの2人を抑えれば簡単に生徒会は非公式新聞部を前に敗北するだろう。

音姫さんなんか、義之を餌にすれば簡単に釣られそうだし。高坂さんは……闘争心が激しいところがあるから、ちよつと罍の難易度を上げればあえてそこを通るといふ習性がありそうだからそれでおびき出せそうな気がする。

こうなるとムラサキさんがいるとはいえ、戦力不足な感が否めないよね。

「んで、非公式新聞部のアジトは、今抑えているのがこの箇所と、この箇所。でも、ここを使う可能性はもう低いわね。今後はどこに奴らが新しくアジトを作るか、目を光らせておく必要があるわね」

「今のところ、怪しいのはこの箇所と、3階のこの部分で……」

今あの2人がとんでもない予想をしていたけど、本当にあれ以上のアジトを作るつもりなのだろうか？

色々あつて、大半のアジトは臆げだけど覚えているからそこは簡単に抑えられるけど、僕達の知らないアジトだつてまだ結構あるはず。それでもまだ作ろうとする気があるのならもう捕まえられるかどうかかわかったもんじゃやない。思うんだけど、杉並君はあのアジトを作る予算をどこから収入してくるのか。

最近じゃムツツリーニがムツツリ商会を開いて商売していたからそれなりに資金は集まったんだろうけどさ。その前はどうしてたんだろう？

「……ま、そんなわけで、今後また弟君や吉井の協力が必要になるかも」

「へ？」

あ、途中から聞いてなかった。でも、僕達の協力が必要になるかもつていうから、また僕達が生徒会に関わることになるかもしれない。

たどり着けば何故か義之が高坂さんの胸にダイブして、その高坂さんに殴り飛ばされて部屋中転がりまわっていた。

「お、弟君！ エッチなことは駄目でしょ！」

「ご、誤解だあああああ！」

「えつとさ……一体、何がどうなってるの？」

「あ、明久さん」

「明久！ 生霊！ マジもんの心霊現象だ！」

「はい？」

義之が随分慌てた様子で僕にいうけど、意味がさっぱり伝わらない。

何かとんでもないものを見たか聞いたかしたかかっていうのはわかったけど。

「ところで、高坂さん達はどうしたんです？ それに、その大量の荷物みたいなもの」

「ん？ ああ、決まってるでしょ？ 遊びに来た」

そう言つて高坂さんは部屋に入って僕が使用するベッドの上にお菓子を広げていった。

「えつと？ というか、ここ男子部屋なんですけど？」

「堅いこと言わないの。流石に四六時中ずっと重い空気なんてないから、少しくらいは楽しみなって！」

まあ、楽しむというのは大切なことなんだろうけど。

「ところでまゆきさん。そのダンボールは何なんですか？」

「お？ よくぞ聞いてくれました、弟君」

高坂さんがニヤケ顔で笑った。そこまで付き合い長いってわけじゃないけど、こういう顔した時って、大概面倒なことに巻き込まれる時の前兆なんだよね。

一体何を始める気なのだろうか？

「じゃっじゃじゃーん！ これよ、これっ！」

高坂さんが取り出したのは、ボードゲームのようなものだった。

「ツイストゲーム？」

「ふっふっふっ、パーティーゲームの定番と言えば、これでしょ」

ツイストゲームか。これはまたマニアックなものを。

「なんででしょうか、これは？」

見たことがないのか、首を傾げていたムラサキさんに由夢ちゃんが説明する。

「赤や緑の色の上に手足を置いて、誰が先に体勢を崩して倒れるかっていうゲームです」

「どの色に手足のどの部分を置くかって指示は……これ、スピナーっていう指示盤の針が差した部分に従うってわけ」

由夢ちゃんの説明に僕が補足を入れる。

「お前ら、よく知ってるな」

「あ、うちのクラスの男子が、これで女子を無理やり誘って遊んでいたのを見たので……」

「僕は、以前雄二達を家に連れてこれ使って遊んだりしていたから」

あの時は雄二も中々しぶとかったから苦労したんだよね。

「由夢は、参加したのか？」

「しませんよ！ こんなエッチな遊び……」

ああ……確かに異性同士でやるにはちよつとねえ。

「わー！ わー！」

高坂さんが慌てて由夢ちゃんの口を塞ごうとしていた。

「由夢ちゃん、今なんて？」

「いえ、だから……」

「なあんでもない、なんでもない！ ねっ？ 妹君っ!？」

高坂さんが由夢ちゃんの言葉を遮って肩を力強く掴んでいた。

「は、はい。そうですね」

「ほら〜」

由夢ちゃんも高坂さんの雰囲気吞まれて思わず頷いた。

「えつと、これひとりで遊ぶの？」

「まさか。そんな味気ないものだったら持ってこないって。じゃあ、試しに弟君と音姫、エリカと吉井も」

「え〜？ 僕もですか？ ていうか、そんなにいたらとんでもないことに……」

「まあ、いいからいいから」

「これまたすごいニヤケ顔で無理やりおっぱじめようとしていた。
「やらなきや白河さんに今日のエリカとの練習のこと一部始終話すわよ?」

「うわっ! 卑怯だ!」

なんて汚い真似をするんだ。

そして僕達は高坂さんに言われるがままじゃんけんで順番を決め、最初に音姫さん。そして義之、僕、ムラサキさんの順になった。

「この針をルーレットみたいに回せばいいの?」

「そゆこと」

「よっ」

音姫さんが指示盤の針を回し、差したのは……『右手を赤』か。

部屋の真ん中に広げたシートには丸く赤、緑、黄色、青と4色が一列に並んで塗られている。

そして、今の指示で音姫さんは右手をこのシートにある赤のどれかに置くのだ。

「じゃあ、こっちの赤で」

音姫さんはしゃがんで赤い丸に右手を添えた。次いで義之が指示盤を回して、『左足を緑』を出した。

「次は、僕だね」

僕は『右足を黄色』だった。更にムラサキさんの出番で、『左手を青』だった。

後は高坂さんが各自に代わって指示盤を回すことになった。

「ほいほい、次音姫。右足を青に」

「え? ちょっと、腰捻らないと届かないんだけど?」

「うしし、頑張れ」

音姫さんが苦戦する光景を高坂さんは楽しそうに見ていた。

「お、弟君、ちょっとどいて?」

「そ、それができないんだな」

「ええ?」

「目の前にいる障害。もとい、人をうまく避けながら指示された色に

置くんだよ」

「え〜？ よ、よっ！」

どうにか音姫さんは足を伸ばして青に触れる。でも、おかげで……音姫さんの白い足が裾から……。

「兄さん？」

「仕方ないだろ！ 目の前なんだぞ!？」

「あ、あんまり見ちゃだめなんだよ、弟君」

「無理です！」

「お、弟くん」

「はいは〜い。次に、弟君は……右手を黄色！」

義之は指示された通りに右手を黄色に向けて伸ばしていく。

「や、やだ、ちよつと弟君っ！ 迫りすぎ！」

「しようがないだろ。こうしないと届かないんだって」

どうにか義之も黄色に触れることに成功する。

「はいは〜い。今度は吉井……左手を緑に〜」

「それって、ムラサキさんを通らなきゃいけないんですけど!？」

「うしし、頑張れ〜」

「吉井……触れたらタダでは済みませんわ」

「そんな無茶なく」

それからしばらくして……。

「こ、この体勢、無理があるよ〜」

「あ、明久……もうちよい、膝……上げられないか？」

「ご、ごめん……これ以上は足が離れそうだから……」

「お、お尻が……着いちゃいます……あっ」

でんっ！ と、音を立ててムラサキさんが倒れ込んだ。

「あうっ！」

「はい終了〜！ エリカの負け〜！」

「見てみると、意外と面白いんですね」

ムラサキさんの転倒により、第一ゲームは終了になった。同時にみんなその場に倒れこむ。

「はあ、はあ……中々、ハードな遊びね。そ、それに、なんかちよつと

エッチ……」

「ですから、そういうゲームなんですよ、これは」

「それでもってこれ、実は審判する人が一番楽しむためのシステムだった」

「いや、本当すごかったよみんな。よくわかんないけど、曼荼羅って感じだった」

「むく、まゆぎずるゝい」

「まあまあ。これからが本番ってことで」

言うが高坂さんはあらかじめ用意していたのか、くじ引きの棒を差し出した。

「先っぽに赤い印がついた棒を引いた人が審判ね」

「ごくり」

「絶対審判ですわ」

「むむゝ」

「でもって、負けた人は、このミニサイコロを振って、出た面のことを暴露すること」

それから色んな命令が書かれていたサイコロを出した。

「は、恥ずかしかった話？」

「何だ？ この恋愛ごっこで告白って」

「誰でもいいから、恋愛ごっこをして好きです、とか何とか言うの」

「ええ？ でも、圧倒的に女子の方が多いのですけど？」

「そういうのも、アリよ。アリ。うしし」

「僕、この人生で恥ずかしかった場面は言いたくない」

心当たりがありすぎるもん。

「はいはい、じゃあ引いてゝ」

もう、みんな必死だなく。まあ、さっきのでこのゲームの大変さが身にしみただろうし。

それから全員一斉にくじを引いた。

「あ。私が審判ですわ」

「あ、私もですわ」

「うそっ!?!」

「ああ、またこの上に身体を乗せるのね〜」

「マジかよ……」

「絶対に負けたくない」

「じゃあ、じゃんけんしてくださいね〜。誰が先に指示盤を回すのかな？」

「由夢の奴、2回も特等席だからって……」

それから、第二次ツイストゲームが開かれるのだった。

「あああん、やっぱり無理があるよう、この体勢〜！」

「っーか、まゆき先輩と明久、めっちゃ余裕じゃね？ さつきから」

「これでも毎日柔軟やってるからねっ！ 身体の柔らかさには自身があるのよ〜！」

「僕は、まあFクラスとのやり取りで——」

「OK、わかった。もう言わなくていい。この状態でもうイチイチツッコみたくない」

「うわ〜、絶景だ〜」

「見ると意外と気持ちの良いものですね」

「か、感心してないでお前ら！ さつきと次の指示を！」

「も、もう駄目〜！」

でんっ！

「きやんっ！」

音姫さんが倒れ込んだために、第二次ツイストゲームは幕を閉じた。

「やったー！ 勝ったー！」

「お、音姉が負けた〜」

「ふえ〜ん！」

「終了〜！ はい、じゃあお姉ちゃん、サイコロ振ってくださいね」

「由夢ちゃん、楽しそうね」

「審判は楽しいですから♪」

「はう〜」

それから音姫さんはサイコロを転がし、壁に当たって止まった。

「えっと、何々？」

「恥ずかしかった話……」

「つまりは……」

「略して〜」

「「ハズバナ〜！」」

「ええええええ〜！！」

人のこと言えないけど、みんなノリがよさそう。

「さあさあ、音姫！」

「朝倉先輩の恥ずかしい話……ごくん」

「どんなことがあったんですか？」

「いやあ、楽しみだ〜」

僕もちよつと気になる。

「あうう〜……え、えっと……通学路にマキタさんっておうちがあるの、知ってる？」

「ああ、知ってます。すごい大きな犬がいるところですよね？」

「「それで！」」

高坂さんとムラサキさんが積極的だ。

「い、いつもあの犬の頭を撫でていくんだけど、その日は朝から忙しくて、撫でられなかったのね。そしたら……」

「追っかけられたと？」

「うん。それでびっくりしちやって……無我夢中で走ってたら、電柱に思いつきりぶつかっちゃったの」

「うわ、それは痛そう……」

「アハハハハ！ マ、マジでっ!？」

「なるほどっ！ だからあの日、何故かおでこが赤く腫れたわけだっ!？」

確かにそれはかなり恥ずかしいことだ。

「そう。しかも、ぶつかったところを、幼稚園のバスを待ってる子供達に見られてえ……すごい笑われたあ〜！」

「……………ぶっ!？」

「明久君っ！」

「ご、ごめんなさい……でも……」

「マズイ！ その光景、想像しやすすぎて……笑いがつ！」

「ギャハハハハ！ は、腹いてえ〜！」

「だ、駄目ですわ！ お腹がつ！」

「ひくっ！」

「ひどいく、みんな笑いすぎ〜っ！」

それから僕を含め、みんなが面白がつてツイストゲームが更に盛り上がっていき、第三次ツイストゲームが始まった。

ちなみに今回の審判者は義之と音姫さんだった。

「ほれ、次の奴、左足を青だ」

「よ、よっと！」

義之の指示に従って僕は左足を青に伸ばす。

「ひやっ！ あ、明久さん！ 何処触ってるんですか!？」

「ご、ごめん由夢ちゃん！ わざとじゃないんだ！」

「へ〜……こうして見ると結構面白いんだ〜」

音姫さんは今までの仕返しのもりか、結構活き活きとしていた。

「くっ……ちよ、流石に、無理かもおおお！」

「おお!? 無敗のまゆき先輩、ついにダウンかつ!？」

「まゆきが倒れたら、どんな命令が来るんだろ？」

「ぐ、なんの！ 根性——っ！」

「も、持ち直したあ!？」

「高坂さん、すごいです！ でも、出来れば早く着いちやって欲しいかなって？」

「よ、吉井こそ……さっさと倒れたら？」

「そうはいきませんよ！ なんとしても生き残るんだ！」

絶対に恥ずかしい話は避けたいところだ。

「そんなこと言って……あ、エリカ。服はだけてるわよ？」

「へあ!？」

「何っ!? って、ああ！」

ズデンツッ！

別の方向へ気を取られたせいで集中力が途切れ、一気に力が抜けて倒れ込んでしまった。

「終了っ！ 明久の負けだ〜！」

「高坂さん、ズルいですよ！」

「ふっふっ。勝負の世界は常に残酷なものよ」

ドヤ顔で言われた。ちよつと腹が立つ。

「はいはい、明久君。ルールに従って、サイコロ振ってね♪」

音姫さんも、今は思いつきり楽しんでるし。え〜い、ままよ！

「でりやつー！」

僕はやけくそで思いつきりサイコロを振った。出た目は？

「あつ」

「出たっ！」

「な、何？」

「「恋愛ごっこで告白——っ！」」

「ちよ——っ!? それマズイでしょ!? 僕、既に彼女いるんですけど!」

「そんなの関係ないわよ。一応これ罰ゲームなわけだし」

「さあさあ、吉井!」

「まあ、ここは無難にお姉ちゃんに告白じゃないですか?」

確かに由夢ちゃんの言う通り、音姫さんが由夢ちゃんの方が告白する側としては楽に済みそうだ。

ぐ……色々罪悪感こみ上げる罰ゲームだけど、やらなきゃ今度はどんな罰がのしかかるかわからない。

「で、では……すみません、音姫さん」

「は、はい!」

呼ばれた音姫さんは背筋を伸ばしてベッドの上に正座をした。僕も音姫さんの正面に立って、

「お、音姫さん。その……好きです。是非、お付き合いください!」

「「ひゃあああああ!」」

告白して部屋中に女子の歓声が響いた。

「よくやったな、明久。面白いものを見せてもらった」

「まったく……自分は審判で罰ゲームないからって——ひい!？」

「お。どうした？」

「な、なんか……また寒気が」

部屋の中で、暖房が効いてる筈なのに、何故かすごい悪寒が。一体何なんだ？

それからまたツイストゲームを続行し、後は僕の本ズバナ罰ゲームが多かったけど。なんで、こういう時って、僕標的になりやすいのかな？

「むむむむ〜」

「おい、あれなんとかしてくれ！ ていうか、いい加減盗聴はやめようぜ？」

「何か……もう鬼に見えちゃうよ〜」

「ふふふ……明久、後で大変なことになるわね」

「やくん、修羅場？ 修羅場なの？」

「まったく、お主らは。しかし明久も、罰ゲームだから仕方ないとはいえ、大変じゃの〜」

「……そろそろ抑えるのにも限界が近い」

「落ち着くのじゃ。こんなところでスタンガンは色々問題が多すぎるのじゃ」

「だったらこいつの所持物も全部没収してくれ！ ていうか、何であの黒魔術の本がまだあるんだよ!？」

「前に人格入れ替わりが成功したから。今度はもっと高度なものに挑戦する」

「お前がやると本当になりそうで怖えんだよ!」

「ふっふっふ。そろそろ行動に移すべきか。明日が楽しみだな、ハッハッハ!」

第五十五話

スキー場での生徒会合宿一日目を明けた朝。つまりは二日目の朝。僕達は今日も朝からスキーをするため、食堂でエネルギー補給をしていたのだが……。

——ドタドタドタ！

「ふ、副会長！」

すごい慌てた様子で生徒会メンバーのひとりが高坂さんのもとへ駆け寄っていく。

「一体何なんだ？」

「さあ？　すごく慌ててるみたいだけど……」

「どつたの？」

「た、大変です！」

高坂さんが訝しげな表情をし、それから僕達を見るとこつちへ来いと合図した。

「なんすか？」

「なんか、随分慌ててるみたいですが」

「何かあったのですか？」

「じ、実は、今入った情報なんです。どうもこのスキー場近辺に、杉並が出没したらしいのです！」

「ええっ!？」

「何っ?!　じゃあ、昨日のはやつぱり！」

「昨日？　何かあったの、弟君！」

「いや、何かここに来た時からチラチラと杉並の気配を感じたんですけど……昨日は俺の部屋で杉並の声が聞こえて」

「ああ、それで昨日あんな悲鳴あげたのか」

あの慌て様はそういうことだったわけね。

「それ、本当なの？」

「まあ、気の所為だと思つて今まで忘れてたんですが……でも、他に見た人がいたっていうのなら、気の所為じゃなかったってことですかね

？」

「うーむ……そうなるとその情報、デマじゃなさそうね」

「でも、杉並って吉井達のクラスの人でしょ？ 今頃初音島で軽い関係なく、なんらかの処罰を受けてる筈じゃ？」

「まあ、あいつは気まぐれだからな。そんな理屈が通用する相手じゃないよ」

「それと……実は他に傍らに男女が何人かいたらしいです」

「複数？ ひとりにはムツツリーニだとして……他は？」

「誰と誰がいるかは知らないけど、これはあたし達に対する挑戦かもね」

「はい？」

「へ？」

「あたし達がここにいるのをわかっていて、何か煽るようなことをしでかそうとしているのかも」

「あはは、ありえる話だよー」

「もうこうして話している会話内容も既に盗聴されてる可能性も高いよね」

「つくづく好戦的だな、あいつは」

「よし。食事が済んだら早速杉並達の搜索をしましょう！ 生徒会の人間は大至急ここに集まるようにと通達して」

「は、はいー！」

高坂さんの指示を受けて情報を持ってきた人が早速通達へと駆け出していった。

しかし、まさかここに来てまで杉並君とは。でも、なんか大事なことを他にも見落としているような。

何か、水面下でとんでもない事態が進行してしまってるような……。

その後しばらくして、生徒会メンバーが揃い、いくつかのチームに分けて杉並君の搜索を行うことになった。

「——というわけなんだけど、弟君、どうする？」

「どうするって？」

「この後の行動。基本的には2人1組になって行動しようって思ってるんだけど、弟君は誰のパートナーになるかなって。つっても、パートナー決まってないの、もうあたしとエリカ、吉井だけなんだけど」
「じゃあ、2人が組んで俺が明久ってことにしとけばいいじゃないですか」
「うくん……そうはいってもねえ。吉井と組ませても、吉井ならともかく、弟君を放っておくのもなあ。相手は杉並だし……杉並相手に最も効果的な弟君だからね。なんたって、あんた達通じ合ってるんだから」

「それ、俺にとっては激しく不本意なんですけど！」

「まあ、この際いっつか。とりあえず、このチームで杉並を搜索。くれぐれも気を抜かないようにね！」

それから杉並君搜索任務が開始された。

ゲレンデに出ると人工の雪が太陽光を反射して眩く輝いていた。

「さて、何処から探したものか」

「普通に考えて上級コースに行った方がいいんじゃない？ 杉並君ならあそこか、それよりもっと上にいそうなんだけど」

「まあ、確かに……」

あの杉並君のことだからまともにスキーで滑ってるかどうかすらも怪しいところだ。

下手をすればスノーモービルで滑ってる可能性だってある。というか、その可能性の方が大な気がする。

「そうなるよ、まずは上級者コースから当たった方がいいか」
「そうだね」

そうして僕と義之はまず上級者コースから軽く滑りながら探すことにした。

視界を遮るゴーグルを外して、少しゆっくりめのスピードで滑りな

がら左右を見たり、時々コース外を見たりして探してみるが、それらしい姿はなかった。

「うくん……やっぱいいないっばいね」

「そうになると、マジで上級者コースよりも更に上のどこかにいるってことか」

「ここからもつと上にあつて普通の人がいかなそうな場所というところ……」

僕は念のためと高坂さんに渡されたパンフレットにあるこのスキー場と近辺が描かれた地図を見て該当しそうな場所を探す。

「……この、八ツ脚岳の頂上辺りかな？」

「まさか……いくらなんでもそこまで行くか？」

「でも、あの杉並君だし……」

「……それを言われると否定できないのがなあ」

「まあ、ものは試しで。それにそこからならいなかったとしても、滑りながら探せるし」

「そうだな」

それから僕達は杉並君を見つめるべく、上級者コースから更に上にいった八ツ脚岳の火口付近まで行った。

「あのさ、本当にここにいると思うか？」

「でも、杉並君だし……」

「わからなくはないんだが、確実に足場が悪すぎるだろ」

「まあ、杉並君なら自前のスキー板魔改造して色々やりそうだし」

「アイツなら本当にやりそうで怖えよ。まあ、気長に探すしかないよな……」

「そうだね。じゃあ、早速搜索開——」

「どうした明久？ 急に立ち止まつ——」

「あ……」

「大変、見つかったっちゃったわね」

「あらら……逃げなくちゃ」

「……………」

「杏に茜?! それに、小恋に白河まで、なんで!？」

「ええええええ!?　なんで4人がここに!?!」

「ていうかお前ら、杉並に加担していたのか!?!」

火口に着くと、そこには何故か杏ちゃん、茜ちゃん小恋ちゃん、ななかちやんがいた。

「とりあえず、杉並に報告ね」

「らじゃ」

「あはは……ごめんね」

「……………」

杏ちゃんと茜ちゃんが頷きあい、小恋ちゃんも苦笑いしながらついていく。

「ちよ、ななかちちゃん!?　なんで君がここに!?!　ていうか、気の所為かなんか怒ってない!?!」

さつきからななかちゃんはいつもの笑顔じゃない。むしろ若干不機嫌になっている気がする。

「……楽しそうだったね」

「え?」

「スキー教えたり、ツイストゲームしたり」

「なんで君がそれを知ってるの!?!　ていうか、昨日から感じたあの悪寒はもしかして君が!?!」

昨日のあれらを知っているのも驚いたが、この4人がいるとなると、他にも何人が来ている可能性もある。

そうになると、十中八九ムツツリーニが何処からか僕達を常に監視していたということだ。

恐らく、ロツジやゲレンデのあちこちにマイカメラを大量に仕掛けていたことだろう。

「ていうかななかちちゃん、誤解だから!　あれはその場の流れとか、仕方なかったんだよ!」

僕の叫びも虚しく、ななかちちゃんはプイ、と踵を返して逃げていく。

「ななかちやああああああん!」

「うわ……これが修羅場ってやつなのな」

「感心しないで義之もなんとか言つてよ!」

「いや、そうしてもいいが、まあ……お前が頑張るしかないな」
「薄情者お！」

なんて言ってる場合じゃない。僕達も4人を追って駆け出すのが、元々足場が悪い上に、念のためスキー板を脱いだとはいえ、スキー用のブーツだと走りづらい。

「待て！」

「お願いだから待って！」

「待てと言われて待つ人はいませくん」

「逃げる女を追い詰めていく男……ふふつ、なんか背德的」

「えく？　じゃあ私達、あの2人に襲われちゃうのく？」

「そう……捕まったらきつと、酷いことに——」

なんだか、逃げながら器用に呑気な言葉を交わし合ってる。というか、何か他の人が聞けば僕達の社会的地位がやばいことになりそうな会話をしないでくれない？

「そして、人気のない雪山では助けを呼ぶことも逃げることもできず、私達は——」

「わくわく」

「こらその2人！　変な言いがかりをつけるな！」

「それより、ここに居るのは君達だけ!?　他にムツツリーニや秀吉、雄二は!?!」

「ひ・み・つ♪　捕まえられたらあ、教えてあげてもいいよおく？」

「きつと人には言えないような方法で口を割らされてしまうのね。義之、吉井、スケベ」

「だから変な言い掛かりをつけるなあ！」

それから徐々に引き離されていき、向こうは時々こつちを振り向きながら余裕をもって逃げている。

「くつそお！　走りづれえ！」

「全然距離が縮まらない！」

「やっぱブーツじゃ走りづらいし、向こうには杏がいるからなあ……」

多分、この辺りの地形は完全に頭に入ってるはずだ」

「これじゃあ、確実に僕達は不利ってことじゃん」

「とにかく、出来る限り追うしかねえ」

「だね！　お願い、待ってななかちやあああああん！」

「……なんだか、夫の浮気に耐えられなくなった妻を情けなく追うシーンみたいだな……そして、最後は結局破綻と」

義之、それ笑えないからやめてくれない？

夕方になって、僕達は肩で息をしながら上級者コースまで降りた。

「ぜえ……ぜえ……完全に、見失った……」

「はあ……はあ……まあ、向こうは見つかるの想定して普通の靴だったみたいだから、当然といえば当然……なのかな？」

僕達は情けない姿勢でススス、とゲレンデを滑る。

「とりあえず、戻るか。そろそろ視界が……」

「そうだね」

今になって周りを見れば、天気が崩れ、吹雪き始めたのだ。

どうにか滑れる程度には視界は安定しているが、このままでは視界が真っ白になるくらい吹雪く可能性もある。

義之の言う通り、今日は諦めてさっさと戻った方がいいだろう。そう思った時だった。

「……あれ？」

「どした？」

「あれって……小恋ちゃんじゃ？」

「なに？」

見ればコース外で小恋ちゃんがキョロキョロしているのが辛うじて見えた。

「迷った……のかな？」

「かもな。まあ、この吹雪だからな。とりあえず、ひとり確保とどうか」

僕は月島さんのもとへと滑っていった。

「おい、何やってんだ？」

「よ、義之!？」

傍に来てようやく気づいたのか、小恋ちゃんが声を上げて驚いた。

「お前ひとりか。杏達は何処かって聞きたいところだが……まあ、それは後で聞くとして——」

「そ、それより!」

義之の台詞に小恋ちゃんが割って入る。なんだか、随分と慌てるみたいだけど。

「な、ななかが……」

「ななかちゃんがどうかしたの？」

「そ、その……さっきまでいたんだけど……吹雪き始めて、みんなのところに戻ろうとして、途中からいなくなつて……」

「……え？」

小恋ちゃんの言葉が一瞬わからなかった。

「な、ななかちゃんが……いなく、なつた？」

「それって、一大事じゃねえか!？」

「さ、さっきから探してるけど、どんどん視界が悪くなつてくるし……」

「携帯は!?! 携帯で連絡取れないのか!?!」

「無理!・ ここ圏外だから!」

携帯も圏外。更に視界の悪いこの吹雪の中で遭難……かなりマズイ状況じゃないか!

「義之は小恋ちゃんとロツジに戻つて! 僕はななかちゃん探して来る!」

「え? お、おい明久! この吹雪の中じゃかえつて危険——」

義之が止めようとしたけど、最後まで聞かずに僕はコース外を滑つてななかちゃんの捜索を始める。

「……はあ」

薄暗く、視界もままならない吹雪の中で私は地面に座り込んでいた。

明久君達を撒いてからしばらくして吹雪き始めちゃったから杉並君達のところへ戻ろうとしたけど、途中で足がコースを外してしまい、更にそこは急勾配となつて、体勢を崩して悲鳴を上げることができずに転がり落ちちゃった。

それから今までずっとこんな体勢。やっちゃったなあ。

「……はあ」

さつきから大声も上げることができず、ため息ばかりついている。

明久君はどうしてるかな？ ロッジに戻つて……また楽しくやつてるかな？

……わかつては、いるんだけどね。明久君はいつも楽しそうにして……ただそこにいるだけで、空気が暖かくなるっていうか。

だから、みんな楽しそうに明久君と接して、誰とでも親密になれちゃうんだよね。頭ではわかつているんだけど……時々、明久君の優しさが恨めしい時もあるんだよね。

私と違つて……誰にでも正直でいられる明久君が羨ましい。私は……本当の友達と言える人が少ない。

ほとんどの男の子つて、自分勝手に、女の子を自分のものにするみたいな考えばかりだから、私は差し障りのない程度に話して一定の距離を置くばかり。

だから、明久君がすごく羨ましい。好きなのに……他の女の子と一緒にいる時も、色んな人と楽しそうに過ごしている時の明久君を見ると、嫉妬しちゃう。

ただ嘘を並べて、距離を置き続けてる私がそんな感情を抱くなんて、間違ってるのに。

「……明久、君」

明久君……怒ってるかな？ 明久君は何も悪くないのに、私が変わ

意地を張って突き放しちゃったから。

嫌いに、なつちやつたかな？ そうなったら、自業自得だよ。私
が変に意地を張らなければこうやって遭難もしなかったかもしれな
いの。

全部、私が悪いから……。

「……やだ」

悪いのは、私だけ……それでも、明久君と別れるなんて、できな
いよ。

「……明久、君」

会いたい。会って……謝って……仲直りして、また一緒に……。

「明久君！」

私は叫ぶけど、吹雪の中じゃ声が遮られてしまう。

「明久君！」

それでも、叫ばずにはいられなかった。

「……ちや……！」

「え？」

吹雪の中で僅かに聞き覚えのある声が聞こえた。

「ななかちゃん！」

気の所為じゃなかった。とても懐かしい声だった。

「ななかちゃん！」

私の、大切な人の声……。

「明久君！」

「ななかちゃん!? 何処!?!」

「明久君! こっち——わっ!」

「ななかちゃん!」

私が雪の積もった地面に倒れ込んだところに明久君が出てきた。

「ななかちゃん! 大丈夫!?!」

「だ、だいじょうぶ……」

なんでだろう、明久君が来ただけで……さっきまでの暗い気分が
ふっとんだ気がする。

「助かったあ……」

「よかったね。運良くロツジが近くにあって」

「うん。電気もついてるし……暖房もあるね」

僕はななかちゃんを見つけ、流石にこの吹雪の中ではもう歩くことも難しいので何処かに避難できないかと思ったところ、ななかちゃんが近くにロツジがあることを知っていて、僕達はすぐにそこへ向かった。

そして数分後、ロツジは見つかり、中に入ってほっと一息つく。いや、本当に助かった……。

「ああ、本当に運がよかったよ。例え知ってたとはいえ、もうちよつと暗くなつてたら危なかったよ。でも、何でななかちゃん、このロツジのこと知ってたの？」

「うん。スキー場に来る前に杉並君がアレコレ言ってた時に、ここは電気と暖房があるものの、生活感が足りないのでアジトには向いてないとかなんとか……」

「なるほど」

杉並君からの入れ知恵でしたか。まあ、そのおかげで助かったわけだからいいんだけどさ。

「とりあえず、せめて吹雪が止むまではここで大人しくしていた方がいいかな。電話とか風呂とか生活に必要なものはないけど、非常食みたいなものはあるみたいだし」

「そうだね……」

まったく、酷い年末になったもんだ。

「……絶対、見ないで?」

「りよ、了解……」

現在、僕達は互いに背を向けたままいそいそと服を脱いでいた。

何故こんなことになつてゐるかというのと、とりあえずここで一晚過ごすわけだから体調管理はしっかりしないと思ひ、まずは身体の汗を拭おうということから始まつたわけだ。

ここには風呂がないので、堅く絞つたタオルを使つて身体を拭くことしかできないのは仕方ないと思う。だが――

「何で一部屋しかないわけ……?」

「まあ、ここで生活するわけじゃないとわかつててもねえ……」

せめて空きの倉庫みたいなのがあれば僕がそこに言つてお互い何も気にせずに身体を拭けるけど……部屋がここ一室しかないわけだからここでしか拭く事ができない。

だったら僕は外で身体拭こうかと思つたが、すぐにななかちゃんの止められた。だからせめてこうして互いに背を向けて身体を拭いているわけだ。

「……………」

「……………」

僕達はただ黙々と身体を拭いていた。時々僕とななかちゃんの腕がそれぞれの背中に当たるのを感じた。

この感触からして、本当に服を脱いで身体を拭いているんだ……。

……………いかん。ムツツリーニじゃないけど、想像しただけで鼻血が吹き出そうだ。

「……今、エッチなこと考えたでしょ?」

「め、滅相もございません!!」

僕は全否定して全力で身体を拭きまくつた。

「何もそんなになるまで拭かなくても……」

「そっちだって……」

僕とななかちゃんの皮膚が若干赤くなっていた。ちよつと擦りすぎてしまったようだ。

お互い、狭い空間の中で見なかったとはいえ、一時的に裸になっていたわけだからかなり意識してしまったようだ。

「……………」

「……………」

その所為か、さつきから無言のまま時間がどんどん過ぎていく。

まいった。どうしたものか……。ななかちゃんの彼氏なんだから、ここは何か気の効いた台詞をと思ってるけど、どうしたらいいか全くわからない。

だって、ななかちゃん以外の女の子とロクな会話をした試しがないんだもの。

姫路さんや美波に姉さん？ 姫路さんはまだいいけど、美波とは会話が続く前に関節を外されるのがほとんどだし、姉さんに至っては会話ひとつひとつが異常だからカウント外。

「……えつと、明久君？」

「なに？」

どうしようかと思ったところでななかちゃんの方から声をかけてきた。

「えつと……その、ごめんなさい……」

「へ？ 何で急に？」

ななかちゃんが謝る要素なんて……うん、ないと思うけど。ひよつとして……昼間の事を言ってるのかな？

「いや、それは仕方ないんじゃない？ 確かに僕、ななかちゃんほつたらかしくしてみんなと楽しんじゃったから……」

申し訳ないという気持ちもあつたけど、それでもななかちゃんを放っておいて楽しんだのは事実なわけだし。

「ああ、そっちじゃなくて。いや、そっちもなんだけど……。でも……それは、生徒会のお仕事とかで……」

「いやあ、正直僕なんて来る意味なかったんじゃないかってくらい軽

「気がしたけど……」

初日の夜の会議以外は本当に軽い感じがしたんだけどなあ。

「そういえば、そもそも何でななかちゃん達はこっちに来たの？」

「そもそもななかちゃん達は生徒会にも僕達のクラスメートでもないからクラス関係ですらないと思うけど。」

「明久君が生徒会合宿行くって連絡が来る前に杉並君から電話があつてね。そこで明久君達が生徒会合宿行くだろうから、それに便乗して楽しむ気はないかって聞かれて」

「それで便乗したの？」

「うん。普通に年末を過ごすよりは楽しそうだったから。まあ……今はこんなになつてるけど」

「ごめんなさい」

「ううん。明久君は悪くないから……」

「でも、せめて年末くらいはななかちゃんと楽しみたかったからなあ。そのためにゲームまで我慢したのに……」

「そんなにまで我慢してたんだ……」

「だって、折角の年末デートだったのに」

「まあまあ」

「なんだか、だんだん自然体に戻ってる気がするな。」

「……はあく。吹雪が止んでくれたらまだ挽回できるかもなの」

「せつかく恋人になってから初めての年末だっていうのに、何も無いのは非常にもつたいない。」

「……じゃあ、何か特別残しておく？」

「特別を？　どんな？」

「……例えば……ファーストキス？」

「……」

確かに、僕達はまだキスもしていなかった。確かに特別な日にはなり得るけど。

「……えっと、なし？」

「……」

さつきとは違った沈黙が訪れる。

「えつと……目を閉じてくれないかな？　流石にそう、マジマジ見られると、恥ずかしいから」

「あ、えと……」

ななかちゃんの顔が徐々に迫ってくる。うわあ、すごい緊張してきた。

僕は来るべき時のため、かたく眼を閉じて――

『明久あ！　無事かあ!?!』

『明久！　大丈夫か!』

「え?」

妙に聞きなれた声が聞こえた直後、突如扉が開き、数人の影が入ってきた。

背筋に冷たい風が流れ込んできた。

「君達、大丈夫かい!?!」

その後でまた別の影が入ってきた。外からスノーモービルらしい機体のエンジン音が響いてきたので、多分救助隊に頼んだのだろう。

「お主ら、大丈夫……か?」

その中で秀吉が僕達の姿を確認すると呆然とした。

「お、お前ら……その……すまねえ！　もう少し時間をやるから、ゆっくり楽しんでろ!」

「そ、そうじゃな！　儂らとしたことが、少し間が悪かったようじゃ!」

そう言つて義之と秀吉が救助隊の人を連れて外に出て行った。

そして僕は現状を確認。スキーウェアを外して薄着の状態の僕ら。そして狭い密室の中、顔を近づけている。ここから連想されるのは………ノウ。

「待ったあ！　義之、秀吉！　これは、誤解じゃないけど、誤解なんだああああああ!!」

それから義之と秀吉を説得して僕達がロツジへと向かうのに20分も労した。

第五十六話

「ええええええええ!？」

ロツジに戻り、ななかちちゃんの姿を見た小恋ちゃんが泣きながら抱きつき、感動の再会を眺めた1時間後のこと。

僕は驚愕の真実を知ることとなった。

「いや、だからね。ぶっちゃけ、今回の合宿って……実戦訓練だったわけよ」

「じ、じじじ実戦?」

「何だ、実戦訓練の意味もわからないのか? 演習などとは違う、実際に起こる事態を想定して——」

「言葉の意味くらいわかってるよ! そうじゃなくて! 一体全体なんぞ!」

「あ、その……杉並君や雪村さん達に協力してもらったの訓練だったの。つまり、実際の追いかけてっこを想定したもので」

「休みの間に体力が衰えないよう、トレーニングと追いかけてっこをやってたってわけ」

「と、そういうことだ」

協力者である杉並君が前に出て頷いた。その後ろでは杉並君に協力していた雄二やムツツリーニ、秀吉やななかちゃん、雪月花の3人や天枷さんに涉もいた。

「え? ってことは、俺達は杉並達を相手に訓練してただけなんですか?」

「ピンポン♪ ご名答」

「でもって、それ知らなかったの、俺達だけ?」

「そのとおり」

義之の問いにまゆきさんがニヤケ顔で答える。

「な……」

義之が絶句した。わかるよその気持ち。

「そういうのがひとりかふたりいないと、みんな本気になれないでしょ?」

「え？　じゃあ、非公式新聞部のメンバーって話は……」

「この件はあくまで俺個人で請け負った仕事。非公式新聞部の面々の手を煩わす必要はないからな」

「結構楽しめたわね」

「義之君達に見つからないよう行動するのって、結構大変だったんだから」

「あはは。結構楽しかったり」

「ごめんね、明久君」

「いや、スマンの。明久」

「……割といいデータを得られた」

「何のデータなのだ？」

「……………マジかよ」

「ごめんね、弟君」

「すまんなあ、同士桜内に吉井よ。これも司法取引というものだ」

「そうそう。これに協力してくれば補習に出る必要はなくなるって高坂先輩が言うからついね」

「じゃあ、由夢！　由夢は知ってたのか!？」

「昨日の晩に聞かされました。不意ながら、私もみんなのやる気を引き出す人材として利用されたわけです」

「のうっ！」

由夢ちゃんの言葉を受けて義之は膝を着いて崩れた落ちた。

ようするに、これまで非公式新聞部の仕業と思われたことは、全て生徒会と杉並君が仕組んでいたものだったというわけか。

「や、やっとなん……」

「ま、まあまあ。でも、そのおかげで本番さながらの訓練ができたんだよ?」

「うん。流石弟君だね。あんなに頑張ってくれたのは正直驚いちゃった。ありがとね」

「「桜内君、ありがとう!」」

「嬉しくねえ！　おい明久！　お前も何か言えよ！」

「……………」

「おい、明久？」

「そういえば、さつきから黙ってるわね？ まあ、おかげでいい訓練できたわけだし。後の時間は何しようかと自由だから色々楽しんじやいなよ」

高坂さんが笑いながら僕の肩をバンバン叩いた。うん、訓練だというのに驚いたし、僕達がマリオネットみたいに利用されたのにもまあ、文句がないわけではないけどそこは百歩譲って許すでしょう。しかし——

「なつにが、楽しんじやいなさいよですか！ 笑い事じゃないですよっ！」

僕が目いっぱい怒鳴ると、場がシン、と静まった。

「そりゃあ、訓練だったっていうならそれはそれでいいですよ！ お互い納得してのことならそれはそれで！ けど、今回の件！ 一步間違えば遭難の危険があったんですよ！ 僕だったらまだ生き残れる自信はありましたけど！ そういった知識も何もないなちやん達まで巻き込んでおいてそれではいそうですかって納得できるわけではないでしょうが！」

「う……………」

「その、ごめんなさい」

「まあ、それについては何も言わなかったお姉ちゃん達に非があるわけですから、私からは弁護はできませんね」

「はい……………」

由夢ちゃんに言われ、音姫さんはしゅんと落ち込んだ。

「まあ、結果として助かったからこれ以上何も言いませんけど……………今度からこんな心臓に悪い事態は勘弁してください」

「その、今回は本当にごめん」

高坂さんからも謝罪の言葉を受け取ったんだ。これ以上僕が言うのもアレだろう。

ここはさつきとこの話は切って、残りの時間を楽しむことにしよう。

「じゃあ、せつかくの年末だし……………新年が来るまで何かして遊ぼつか

？」

「お！ それじゃあ、高坂先輩が持ってきたツイストゲームを――」

「却下」

「アウチ！」

渉がツイストゲームを提案するも、女子軍に一斉却下されて呆気無く崩れた。

さて、僕も色々楽しむとしますか。

「と、いうわけで」↑雄二

「まずは――」↑僕

「第一回年末のお過ごし用お遊び第一弾、Fクラス式ダウトゲームを始めたと思う！」↑僕と雄二

「イエー！」↑秀吉とムツツリーニ

僕達Fクラス組、いつもの仲良しグループやそこに更に音姫さん、由夢ちゃん、高坂さん、ムラサキさんを加えたみんなでゲーム大会をすることになった。

「ダウトゲームか」

「えっと、どんなゲーム？」

あらら……小恋ちゃんはダウトを知らないようなのでここらで説明を入れなければ。

「そうだね。ここで説明を入れようか。まず、スペードのAを持って人がAと宣言しながらカードを伏せて場に出すんだ」

「ただし、わざわざ本当にAを出す必要もない」

「え？ Aを持つてる人が出すんなら、出すのがルールじゃないの？」
「それがダウトゲームで重要な駆け引きじゃな。とにかく、そうやって場に出してから2、3、4、と順番に宣言しながら自分のカードを出すのじゃ」

「そして更にここからが重要。その場に出すカードは宣言通りである

必要はないけど、『ダウト』と宣告され、そこに出したカードが嘘だった場合、場のカードが全部嘘をついた人の手札になるんだ」

「そうやって駆け引きして、自分の手札をなくしていくのが本来のルールなんだが……」

「ここからがFクラス、ローカルルール！ 本来なら手札がなくなるまでのところを残り2枚のところまでゲーム終了とする。こうやると早く終わるんだよね」

「4枚目の駆け引きが重要なポイントじゃな」

「迂闊な数字を言くと、自分の首を締める事になるからな」

「へえ……なんか面白そうね」

「というわけで、まずは僕達がお手本を見せることにします」

「じゃあ、始めるぞ」

雄二が持つてきたトランプを切って僕達にカードを配った。さて、いよいよスタートだ。

「では儂からじゃな。A」

まずは秀吉からカードを出した。秀吉が相手だと、自分に特定の数字が4枚揃ってないと確証がつかないんだよな。

秀吉は得意の演技で場に出すカードを本当に見せかけたり、嘘に見せかけたりすることに長けているからな。

秀吉相手には迂闊にダウト宣言はしないほうがいいだろう。

「……2」

次にムツツリーニ。ムツツリーニも表情が堅いから駆け引きでは油断ならない。ここも慎重にいったほうがいいだろう。

次は雄二だけど……前じやいきなり嘘をついてるし、今回も僕相手に嵌める可能性が高い。いくら枚数が少ないからといって、いきなりダウト宣言がはずれたら

嫌だけど、被害は少ない方がいいからなあ。いきなり仕掛けてみよう。

「3だ」

「ダウト！」

「残念だな」

「くそお！」

「ここで正直に来るか、雄二。」

「バカが。お前がいきなり仕掛けてくるのは予想済み……というか、顔に出過ぎなんだよ」

「うむ。いきなりいつてみるかという考えが丸分かりじゃぞ」

「……やはりトランプに向いてない」

「言ってくれるな。くそ……前の連敗続きの僕とは違うというのをすぐに証明してやる。」

「そう心に決めて場のカードを手札に加える。そしてそのカードの数字は……4、6、3。」

「……いい加減思っただけど、みんな結託して僕を攻撃してない？」

「何か今までのことを思い返しても、みんなが寄つてたかってピンポイントで僕に精神的攻撃を加えてる気がするんだよね。」

「いいからさっさとカードを出せ」

「わかったよ。ほら、4」

「今、場に出たカードを加えて僕の手札には4と6の数字が4枚入っている。」

「適当なところでダウト宣言をすれば僕の手札は一気に減って勝負を仕掛けやすくなるだろう。」

「そうして年末お過ごしของเกมは続いていく。」

「ダウト！」

「残念じゃな、明久」

「くっそお！ また負けた！」

「お前、顔わかりやすすぎなんだよ」

「う……トレーディングカードゲームなら結構自信あるんだけど」

なあ」

「お主はポーカーは絶対に向かんの」

「その手で儲かることは絶対に不可能」

「ちくしょう……」

さつきから連敗はどうにか免れたところもあるものの、結構負けが続いている僕。

周りの人も僕達に続いてもうひとつ用意していたトランプでダウトをして回数やっていた。

「さて、ここいらで別のゲームで楽しむことにするか」

「あ、そうだね。あとこういつた場で楽しめそうなものと言えば……」

「ここはひとつ……王様ゲームなんてどうかしら？」

「お、お、おとおおおうさまげええええええむう!!」

王様ゲームという単語が出た途端、渉がいつになくハイテンションになった。

「お、おうさまげーむ?」

「何なのだ、それは?」

「おや、月島はともかく、天枷も知らなかったか?」

「うむ。何やら血湧き肉躍る名前のゲームだな。王侯貴族となって民を従え、他の諸侯を蹴散らすゲームか?」

「ふむ、言っていることは無茶苦茶だが、大きくはずれてはいないな」

随分と物騒な方向に勘違いされている模様。

「王様ゲームというものはだな、くじを引いて王様となって者が、他の者に命令できる、という20世紀のパーティーゲームなのだ!」

「こりやまたオーソドックスなもんを出したな」

「うん。まさに王道なものを出してきたね」

「明久はやったことあるのか? 俺は聞いたことくらいはあるが」

「うん。僕達の間じや結構やってたなあ」

「ギリギリな命令も山盛りじゃったがの」

「……(こくこく)」

「まあ、吉井達がいた世界じゃ私達よりかは王様ゲームが広がった時期に近いから若い集団でやる人も多かったようね」

「それでそれで！　今、俺達の間でもあの伝説のゲームが蘇っていくううううう！」

渉は王様ゲームをやると聞いて滅茶苦茶乗り気だった。

「ところで、他に知らない人はいるかしら？」

杏ちゃんが問うて小恋ちゃん、天枷さん、音姫さんにムラサキさんが手を上げた。うん、大体予想通りのメンツだ。

とりあえず今手をあげた4人に王様ゲームのルールを簡単に説明する。

「まあ、聞いた感じじゃなんか楽しそうだし」

「そうね。これなら加減を間違えなければそんなに酷いことにはならないかな？」

「うむ。面白そうだ」

「庶民の間ではこういったゲームもあるのですか」

「ま、小恋みたいに性根の底からエロい人のえっちな命令には注意しなきゃいけないけどね……」

「ええ!?　私えっちなじゃないよお……」

「どうかしら？　ねえ、茜」

「うんうん。小恋ちゃんの命令には注意が必要だね。何されるかわかったもんじゃないし」

「なんでそーゆーこというのお？　も〜」

雪月花3人はいつも通りに盛り上がっていた。まあ、盛り上がればそれに伴って命令のレベルも上がってくる場合もあるから確かに注意は必要だね。

特に雄二の命令には要注意だ。下手をすれば一生の恥になりかねない命令も飛ぶかもしれないし。

「特に異存はなさそうね。それじゃあ、すぐに始めましょう」

「だが、この人数は些か多すぎるな。即席のくじをつくって人員を二分割して交互にゲームを試してみようではないか」

杉並君が紙でつくったくじを床に置いて指示する。

「よっしやー！　女子と、是非女子と！」

渉がはりきってくじを引き、それに続いてみんながくじを引く。僕

は……1と書かれているな。

「それでは、1と書かれている番号のくじを持つてる者は手をあげよ！」

杉並君の言葉に僕を含め、雄二、霧島さん、ななかちゃん、音姫さん、高坂さん、ムッツリーニ、ムラサキさんだった。

「じゃあ、残りの私達は後でね。じゃ、早速始めましょう」

そう言っつて杏ちゃんは何本もの割り箸が入ったカップを取り出した。最初から王様ゲームを計画してたっぽいね。

「さ、早い者勝ちよ」

「おっしやー！ 来い、王様ー！」

「絶対に当てるやらあ」

「……私が王様」

「……………」

「何だか、ドキドキしますわ」

「……引き当てる」

「うー、王様きますように」

僕もみんなと一緒に何も考えずにくじを引く。

「じゃあ、行け。せーの！」

「王様だーれだー！」

「な、何?！」

「いきなり何を叫んでおりますの?」

「あ? 王様ゲームと言ったらこれが普通だろ?」

「うん。大体こうやってくじを引くんだけどね」

「……(こくこく)」

「それは知らなかったわね。それで、誰が王様なのかしら?」

「へへっ。俺だ」

「げっ！ 雄二か！」

いきなり厄介な奴に王様くじが回ったもんだ。

「じゃあ、そうだな……5番とー！」

「う……」

「6番が！」

「む……」

「杉並に！ 『好きです、付き合ってください』と、告ってこい！」

「貴様ああああ!!」

僕とムツツリーニが同時に叫んだ。どうやら僕は5番でムツツリーニが6番のようだ。

「何て命令出してくれるんだ！ もう少し加減でものを考えろよ！」

ていうか、僕にはもうななちゃんという恋人がいるのに！」

「不名誉な！」

「駄目よ吉井……」

「王様の命令は！」

高坂さんが続いてギャラリーが一斉に王様ゲームの最大のルールを口にする。そうだ、王様の命令は……

「ぜ、絶対……ちくしょう——っ!!」

僕とムツツリーニは意を決して杉並君のところへと駆け寄った。

「くっ……2回戦！ 行くぞお！」

「イエエエエエエ！」

「相当必死じゃのう」

「まあ、あの告白場面は、見るに耐えなかったからな」

さっきの明久と土屋の告白場面は……いや、あいつらのために何も言うまい。

一言いえば、杉並が悪乗りしてとんでもない場面に切り替わってしまった。あれは見てることしかも酷いと思えるほどだった。

明久と土屋が血涙を流してるよ。

「行くぞ！ せえのお！」

「王様だーれだ！」

明久の号令と共に、全員がくじを引いた。

「あ、あたしね」

今度はまゆきさんが王様か。なんだか、厄介な人に王様が行きやすいな。

「じゃあ、3番と、5番が……30秒間抱き合うってことで」

「また僕う!? えっと、5番は……?」

また明久が当たったっぽい。今日はとことん厄日だな、明久。ちなみに相手は……。

「あ、私♪」

「そ、そう……よかったあ」

白河だった。よかつたな、明久。今回は恋人で。

「なんだ白河さんか。ちよっとつまんない」

対してまゆきさんはちよっとつまらなそうに言う。もしこれが男同士だったらどうするんですか。

そして明久と白河がまゆきさんの命令を実行して抱きつきあった。

「うわあ……」

「なんか、すごい……」

音姉と小恋が口を開いたまま2人の抱き合う姿を見つめていた。なんだか、見てるこっちが恥ずかしくなるな。

「そこまで! 2人共、いいものを見せてもらったぞ!」

「っはあ! き、緊張したあ……」

「あはは! 明久君、すっごいドキドキしてた! 心臓バクバクだったのこっちにも伝わったよ!」

「そ、そりゃあ……いくら恋人だからって、緊張するものはするんだし……」

緊張したのはこっちだったの。これみよがしに見せつけやがって。

「んじゃあ、3回戦いくか。せえの!」

「王様だーれだ!」

色々と緊張感を抱いたまま3回戦が始まった。

「王様は、誰だ?」

坂本が問うが、中々答える者がいなかった。一体誰なんだと緊張感が漂う中、霧島さんがそっと立ち上がり、自分のくじを見せる。

そこには王という文字が――

「スマンが急用が――」

「逃がすかあ!」

霧島さんのくじを見た瞬間、坂本が逃げようとしたところを明久と土屋が取り押さえる。お前ら、すごい反射神経だな。

「さあ、王様。ご命令を」

「は、放せ! 俺は、俺はまだ死にたくねえ!」

明久が坂本を取り押さえながら霧島さんに命令を促す。さっきの相当根に持つてるな。

「……じゃあ、雄二は私に何をされても抵抗しない」

「ちよつと待て! お前、俺に何をするつもりなんだ!」

「……そんなの、恥ずかしくて言えない」

霧島さんが赤い顔して俯きながら呟く。一体何をするつもりなんだ?

「こいつ、変態だあ!」

「ムツツリーニ! まだ具体的な方法言ってるわけじゃないのに鼻血を出すのは早すぎる! 大丈夫だ! まだ傷は浅い!」

土屋は霧島さんの言葉に何を想像したのか、既に鼻血でダウンしている。

「あの、霧島さん……その命令は無効じゃないかな。だって、きちんと番号を宣言しないとルール違反になっちゃうでしょ?」

「そ、そうだ……。番号さえ外れていけば……」

音姉の注意に坂本が若干落ち着きを取り戻したが、

「じゃあ、4番」

「……………」

一瞬で静まった。マジで4番だったのか。ていうか、何で霧島さんは坂本の番号が正確にわかるんだ?

「……………くそお!」

「逃がすかあ!」

再び坂本が逃走を試みるが、明久と土屋の連携であっさり捕まり、その後で霧島が別室に坂本を連れて消えた。

「むく！ むむくっ！」

「何だか拷問の跡みたいね……」

「一体、どのような目に会ったのですか？」

「何だかすげえ光景だ……」

「まさに、女王様の躰ね」

霧島さんが戻ってきたと思ったら、何故か坂本はロープで縛られ、猿轡を噛まされていた。一体別室で何があったんだ？

「それじゃあ、僕らのグループはこれでラストにして、そろそろ義之達のグループに回すか。じゃ、せえの！」

「「王様だーれだー！」」

そして、明久達のグループの最後の王様ゲームが開幕した。

「よし、僕だー！」

最後に明久が王様になった。

「さて、1番から7番全員……足りなくなったお菓子と飲み物を買っておいでね！」

「最後の最後で無難な命令が来たな」

「ま、この人数ですし……そろそろお菓子も足りなくなるところですからね。ちようどいいタイミングだったんじゃないですか？」

「確かに、このままゲームして待つだけってのも味気ないものだし。ちようどよかったんじゃないか」

「く……王様ゲームを使ってパシリとはやるわね……」

「まあ、過激な命令じゃなくてよかったかな」

と、明久以外のみんなが不足した菓子と飲み物を買うという形で王様ゲーム第一弾は終わった。

「じゃあ、次は私達ね」

そう言っただけで早速杏がくじの入ったカップを差し出した。いよいよ俺達の番だ。

「よっしや、いよいよ来たあ。テメエら、覚悟はいいな？ 行くぞ……せえの！」

「王様ダーレだ！」

渉の号令に合わせ、俺達はくじを引いた。

「ふむ……最初は俺のようだ」

「早速かよー！」

杉並が王様とわかると同時に渉が膝を着いた。

ていうか、本当に厄介な奴に王様くじが回りやすいな。

「ふっふっふ……安心しろ皆の衆。この杉並、空気を読む男。こういうのは徐々にエスカレートしていくからこそ面白い、ということも重々承知している。今後の盛り上がりには期待してる、控えめな指令を出してやろうではないか」

「さて、どんな命令が来るのやら」

「ドキドキするね〜♪」

杏と茜は楽しそうに言うが、俺としては杉並の命令がどんななのかわからなくて緊張している。杉並の最初の命令は何だ？

「では……3番が5番をビンタする！」

「何処が控えめなの!？」

杉並の命令に外野から明久がツッコミを入れた。全くもって同感だった。

「うわ〜ん、5番だあ〜！」

危ねえ……7番に回ってこなくて助かった。流石に女子は殴れねえよ。ちなみにビンタする側の3番はというと、

「お、俺が、3番……」

渉が恐る恐る挙手をした。どちら側も災難だな。

「おお、なんだかバイオレンスな展開だな！」

「だが、ちよつと物足りなくねえか？」

「そうね。もう少しキツめにしてもよかつたんじゃない？」

天枷、坂本、まゆきさんはバイオレンス展開大歓迎のようで。後半2人はもつとキツめを希望らしいだ、こんなところでそんな血なまぐさいことは勘弁してくれ。

「ふえー、女の子じゃないのお？」

「ふっふっふ、俺は手なんか抜かないぜえ、月島あ」

「うううー、怖いよお」

渉が手をパキポキ鳴らしながら小恋に近づいていく。まるで蛇に睨まれたカエル、美女と野獣という言葉が頭に浮かんだ。

「いくぜ、とりやあああああ!!」

そして渉は小恋に向かって思い切り手を振り上げ、

——ペチン。

滅茶苦茶ソフトに頬に手をつけた。

「……はれ？　これで終わり？」

「……ちっ、手元が狂ったぜ。命拾いしたな、月島」

「ふう、ドキドキした〜……」

渉から来たのが超ソフトなビンタだったことに安堵して小恋はほっと胸をなで下ろした。

「ふん……意気地のない男ね」

「へタレめ……」

「つまらねえな」

「板橋、あんた真面目にやりなさいよ」

「な、殴れるかあ！　勘弁してくれよ！」

まあ、渉に小恋を殴れるはずもないわな。

「まあいいわ。次、行きましょう」

杏がくじを元に戻してみんなで引き直す。

「じゃあ、次行くぜ。せえの！」

「二王様だーれだ！」

「あら、今度は私ね」

マジでさつきから危険人物ばかりに王がいくなあ。誰か細工してらんじゃねえのかって疑いたくなる。

「じゃあ、行くわよ……」

「杏先輩！　ここは一発、盛り上がるヤツを頼む！」

「そうね……じゃあ、1番が2番と、3番が4番と、5番が6番と……」

7番を除いた全員に命令が行くようだ。一体何を命令するんだ。

「見つめ合い、抱き合いながら愛の言葉を囁きあう」
「ぶはっ！」

と、とんでもない命令をしゃがった、こいつ……。

「ほう、俺は6番か」

「ぶはっ！ お、男と!?!」

どうやら渉は運悪く杉並と当たってしまったようだ。

「わ、私……1番」

「あ、じゃあ俺とか」

「よ、義之と!?!」

「美夏は……当たらなかったか」

「ということは儂は、花咲とじゃな」

「よろしくね、秀吉君♪」

「お互い、パートナーが誰かわかったようだし、早速始めなさい」

「ま、まままま、待て杏！ おま、男同士だぞ!?!」

渉が杏に抗議した。

「仕方ないでしょ。適当に番号言ったらそうなったんだから。ま、大丈夫よ。一部の人には需要あるから」

「ここにその一部なんていねえよー！」

渉の言葉に明久、坂本、土屋が強く頷いたのが横目で見えた。

「うるさいわね。王様の命令は絶対よ」

杏にキツパリと言われ、渉は命令に従う他なかった。そして……

「で、この距離でいいのか?」

俺は杏の命令に従って小恋を軽く抱きながら尋ねる。はあ、ゲームの命令とはいえ、やっぱり恥ずかしいな。

「ほらほら、まだよ。もう少しくつつきなさい」

「たく……」

杏の奴、カメラまで持ち出しやがって。絶対楽しんでるな。

とりあえず、俺は小恋を胸元まで抱き寄せる。同時に音姉や由夢からキツイ視線が飛んできてくるような気がするが、何でだ?

「ほら、さっさとする」

「えっと……小恋、俺は——」

「む、無理！　いくらなんでも無理！」

俺が杏の命令通り愛の囁きを始めようとしたところで小恋から拒絶された。まあ、流石にこのゲームは恥ずかしすぎるだろうけど。

「ちっ……」

なんだか杏が舌打ちしていたが、気にしないことにした。とりあえず、他はどうなってるかちよつと気になるな。

俺はまず渉の方に視線を送るが、

「……………」

既にグロッキー状態だった。

「わ、渉君!」

渉の状態に小恋が驚いて声をかけると反応して渉が杉並から逃れようと必死にもがいていた。

「は、放してくれ杉並っ！　月島の、月島の声が…………！」

「幻聴だ。そうツレないことを言うな板橋よ。夜は長いのだから、ゆっくり楽しもうではないか」

「嫌だあ！　だ、誰か助けて！　犯され…………」

渉がどんどん遠い存在になっていく気がする。渉が杉並に全てを奪われるかもしれないと思った時だった。

「あらら、秀吉君ってば本当に男の子なのかな〜？」

「は、花咲よ!?　何処を触っておるのじゃ!?!」

「こんなに肌すべすべで、ほっそりしてて、羨ましいな〜」

「ちよ、ちよつと待つじゃ!　何だかお主、少々悪乗りが過ぎるのではないか!?!　というより、少々人格が——」

「ところで下半身はどうなってるのかな〜？」

「何をするのじゃあああああ!!」

あつちはあつちで綺麗な百合が咲き乱れていた。いや、木下は男だから百合ではないのだが、ああいうのを見ると木下が本当に男なのかどうか疑いたくなるなあ。

見ててすごい絵になってるし。

「おお…………」

その光景をみて渉は目をキラキラさせながらガン見していた。復

活早いな。

「ほお、ああいうのがいいというわけだな」

「へ？　ちよ、杉並、何を……？　何を——ああ！」

そして渉は杉並に連れ去られ、ベッドの上で………いや、これ以上は何もいうまい。

「………そういえば、みんながアレコレやつてる間にそろそろ新年を迎えるよ？」

ゴォーン！

明久が時刻を言うと同時にどこからか除夜の鐘が鳴り響いてきた。

「そういえば、そろそろだな」

「そろそろカウントダウンでもするかの」

「………準備は万全」

「あの、渉は？」

「………放っておいてやれ、明久。アイツのことは………今はひとりにしてやるんだ」

「………そうだね」

部屋の隅では渉が完全に枯れ果てていた。まあ、あんだだけやられりやそりゃ枯れるわ。杉並、お前やりすぎだ。

「では、カウントダウンに入るぞ！」

「カウント10秒前！」

「10！」

「9！」

「8！」

「7！」

「6！」

「5！」

「4！」

「3！」

「2！」

「1！」

「10！　明けましておめでとーびびらーまーすー」「」

カウントダウンを終え、俺達は新年の挨拶を交わしあつた。

こんな人数でこんな賑わつて大丈夫なのかと思つたが、よく耳を済ましてみれば他の場所でも同じように賑わつてる所も多いようだ。

まあ、新年を迎えたのだし、当たり前と言えば当たり前か。

ドォーン！

「な、何っ!？」

「こりや、花火か?」

「年越しのイベントでもやつとるのかの?」

「そんな話、聞いてないけど?」

「ハツハツハ！ それはこの不肖杉並が新年を祝うためにあちこちに花火をセツトしておいたのだ。本来なら宇宙生物との交信を目的としたのだが、みんなのことも考え、今回は花火にしたのだ!」

「ふえー、杉並君すごい……」

「相変わらず無駄にすげえな」

「ていうか、こつちでもそんな真似してたの?」

「言つておくが、スキー場の運営スタッフの方々からも既に許可はとっている。文句を言われる筋合いはないぞ」

「よくそんな根回しができたな」

まあ、これなら確かに盛り上がるか。窓からゲレンデを見下ろすと花火を見に来た客が何十人もいたのが見えた。

色々あつた一年。明久達が来てから色々不思議な体験が目白押しだつた去年。

そして、そいつらが今こうして一緒になつて新年を迎えた。今年も色々おもしろおかしい一年になりそうだな。

「お姉さまあああああ！ さあさ！ 私と一緒に最高の楽園へ
！」

「いやあああああ！ いい加減にしなさいよ美春！ ウチはあなたと付き合うなんてこれっぽっちも思っていないわよ！」

「嘘です！ お姉さまは美春を愛している筈です！」

「なんで人の話を聞かないのよあんたは！」

「お願いです学園長先生！ 明久君の居場所を教えてください！」

「知らないよ。退学届を出してからあいつは音信不通さ。今あいつが何処にいるかなんて、あたしは知らないよ」

「そんな！」

「吉井君！ 一体何処にいるんだい!? はっ！ まさか既に初音島に行ってるのでは？ 何故僕に言ってくれないんだ！ どうか！ どうか枯れない桜よ！ もう一度僕を吉井君のもとへ連れていってくれ！」

「はうく……バカなお兄ちゃんどこでしょう？ 初音島はどこですかと通行人に聞いてもみんな知らないと言ってます」

「吉井いいいいいい！ 俺達を差し置いて美少女と交際とは、万死に値する！」

「「YES！ サーチ&デス！」」

「む？ 須川会長！」

「何だ!？」

「あれは一体何でしょう？」

「何って、あれはどう見ても桜………桜?」

「……………あれ？ ここ、何処ですか？」

「瑞希!? いつの間に？ ていうか、ここ何処!？」

「美波ちゃん？ あ、あれ？ ここ何処でしょうか？」

「日本の風景ですが、見たことのない土地ですね」

「玲さん!？」

「あ、どうも、姫路さんに島田さん。何故かお料理をしている最中に目の前が真っ白になったと思ったら、ここに」

「あ、お姉ちゃん！」

「葉月!? あんたまで!」

「む、こ、ここは……初音島ではないか!? 僕は、帰ってきたのか!」

「久保君まで……」

「おや、あれは吉井君ではないか?」

「あ、本当だ! バカなお兄ちゃんです!」

「アキ!」

「明久く……美波ちゃん」

「ええ……恐らく、ウチも瑞希と同じ考えだわ」

「手伝いましょう、お二人共」

「ありがとうございます、玲さん。では、明久君……オシオキが必要で
すね」

「アキい……覚悟はいいわね?」

「アキ君。姉である私に内緒で不純異性交遊とは……死刑ですな」

「見つけたぞ吉井いいいいい!」

「しかもあの女の子と手を繋いで歩いている!」

「いぎ! 吉井を殺す!」

「くつたばれえええええ!」

「くつたばれえええええ!!」

「アキイイイイイ!」

「明久君!」

「アキ君、おしおきです」

「え? 何? 何でみんなが!? ていうか美波! 僕の関節はそつち
には曲がらな……姉さん! その鈍器をどうするの!? そして姫路
さん! 君はそんなグロテスクなものを何処から!」

「死ね! 吉井イイイイイ!!」

「ぎやああああああ!!」

「ハッ!」

みんなと年越し祝いでワイワイ騒いだ次の日の朝、僕は目が覚め

た。

「……………夢だったのか」

そりやそうだよね。僕達だけならともかく、みんながいつぺんにこっちに来るなんて、ありえないよね。

でも、一言言えば……………

「みんなと幸せな年越し後だっていうのに……………なんて初夢だ」

ありはしないだろうけど、不吉な予感しか覚えない新年の朝だった。

初夢は正夢になりやすいというが、絶対にならないでほしいと思う今日この頃だった。

第五十七話

「はあく……やつと帰ってきたあ」

正月初日の夜、僕達は初音島の芳乃家に到着した。

生徒会メンバーとななかちゃん達を交えた生徒会合宿は滞りなく終わりを告げ、今ここに終結した。

「滅茶苦茶疲れたなあ……」

「ラストだからとはしやぎすぎしてしまったの」

「……滑りすぎた」

僕達はバスから降りて身体を大きく伸ばして深呼吸する。ううう……スキー場ほどでないにしろ、冷たい空気が体内に入ってくる。

「ほらほら、早く荷物を降ろした降ろした！」

高坂さんが元気いっぱいに指示を出す。こういう時って、高坂さん本当にタフだよな。

「無事に着いたな。結構疲れたぜ」

「そうですね。身体もすっかり固まっちゃったといえますか……」

「ほくら、弟君も妹君も荷物荷物！」

「……かったるいです。兄さんお願い」

「あのなあ、由夢。俺だって疲れたんだよ。自分の荷物くらい自分でやれ」

「や、力仕事は男性担当ですから」

「たく……」

あれこれ言いながら由夢ちゃんの方も降ろすあたり、結構兄バカ？

とりあえず僕の荷物もおろしておくか。何も聞いてなかったから本当に軽い荷物だけだったから結構楽チンだった。

「えへへ、楽しかったねえ。温泉もすごく気持ちよかったしい、大満足」

「大きな露天風呂で、女同士裸の付き合い……有意義だったわ。義之にも見せてあげたかったわね」

「ダメだよそんなの！ 義之も、想像しちやダメなんだからね！」

「当たり前だ」

「お前らなあ……特に花咲。お前が月島や白河にいろいろちよつかいだした所為でこっちはムツツリー二の蘇生にどんだけ手間かかったと思っただよ。オマケに風呂上りにはお前らの影響を受けた翔子の待ち伏せ及び襲撃を喰らって……いや、これ以上は思い出したくねえ」

「そういえば、スキー場の温泉はしきりがひとつあるだけで、同じ空間だったからな。」

「想像力豊かなムツツリー二なら話し声だけで女湯でどんな展開が繰り広げているか鮮明にその絵が浮かんだことだろう。」

「そして、鼻血の海に沈んで雄二が蘇生。ムツツリー二と同じ空間にいた以上、当時の女子達の恥も外聞もない会話を聞いた雄二が霧島さんにおしおきされる。簡単に想像できる。」

「そして、何故か儂は別風呂に連れて行かれたのじゃ……」
「そっか。どんまい」

「こつちでも秀吉は女扱いされて色々苦労したようだ。」

「文月学園でも秀吉の裸を見た男子なんてひとりもない。一体同じ空間で着替えできる日が秀吉に来るのだろうか。」

「うー、でももつとスキーの練習したかったなあ」

「そうね。温泉にばかり入っていたんじや、身体がふやけてしまうわね」

「私も、ちよつとのぼせそうになった」

「小恋も花咲さんも、フラフラしてたもんね」

「まあ、ななかちゃん達はスキー場にいるあいだ、顔を合わせないようにほとんどの時間をペンションで過ごしていたらしいね。」

「まあ、参加費無料だから文句は言えないけどね」

「え？ みんなの分も生徒会持ちなの？」

「当たり前であろう。何を当然のことに驚いているんだ？」

「協力に見合うだけの報酬はもらわないと」

「あんなあ……」

「義之には迷惑はかけてないけど？」

「そういう問題じゃないだろ……」

みんなで色々言い合っているあいだに、全員がバスから荷物を降ろし終わった。

「皆さん、お疲れ様でした。無事に今年の生徒会合宿を終えることができました。この後はゆっくり身体を休めて、また新学期に元気な姿で会いましょう」

生徒会長としての挨拶として、音姫さんは定番の家にとどり着くまでが合宿という台詞でまとめた。

「んじゃ、解散！ お疲れ様でした〜！」

「「お疲れ様でした〜！」」

高坂さんの号令で生徒会合宿は終結した。

「さて、俺らも帰るか」

「そうじやのう。流石に今回は疲れたぞい」

「……俺もさっさと戻る」

「じゃあ、帰るか」

「そうだな」

僕は芳乃家へと足を向けて歩き出した。

「はろはろ〜！ みんな、お帰り〜！」

「「ただいま戻りました」」

玄関を開けるとそこにはさくらさんが笑顔で僕達を迎えてくれた。

「こういう笑顔を見ると帰ってきたなあって感じがするよね。」

「それと、明けておめでとうございます」

「おめでとう♪ さあさあ、みんな疲れたでしょ？ もうオコタも温

まってるから温々とした環境で疲れをとってとって」

「ありがとうございます」

「では、お言葉に甘えて」

僕は早速居間へと入り、暖かくなった部屋へと入って背伸びした。

ん〜……やつぱりあつたかい部屋は落ち着くなく。

「みんなお疲れ様〜♪ ほら、お茶入れたから飲んで飲んで」

「お、助かるぜ」

「ちようど喉が渴いてたところじゃ」

「ていうか、お茶くらい僕が入れましたから」

「まあまあ、みんな生徒会合宿で大忙しだっただろうから」

「さくらさんだって忙しかったんじゃないですか？ 学園長って、結構忙しいんじゃない？」

「うん、まあね。ここのところ事故が多発してるところがあるみたいで、それについて我が学園も今後の方針をどうするかとの会議が結構長続きして」

「だったら俺達よりもさくらさんが休まなきゃいけないでしょ」

「まったくだ。とても僕達の相手をしている余裕があるとは思えない。」

「まあ、いいじゃん。珍しく明日はお休みなんだから、今日はいなくなつた分、たつぷりみんなとお話させてもらうから〜♪というわけで、早速みんなでこれ見よっか！」

そう言つてさくらさんはテーブルの上に大量のDVDを置いた。

「えつと……『水戸黄門』、『風林火山』、『新選組』」

「見事に時代劇づくしだね……」

「うへえ……ただでさえ疲れてるのに、また眠くなるようなもんを……」

「いいじゃんいいじゃん♪ 面白いよ〜♪」

「はあ……結局見るしかねえか」

「……退屈なら、寝てていい」

「そうだな。というわけで布団用意するか」

「……私の膝の上で」

「断固拒否する！」

「うむ。俺もお言葉に甘えて、演技の参考物として見せてもらうかの」

「時代劇かあ……最近、見てなかったなあ」

「さくらさんが家にいる時はよく見てましたけど……最近あまり一緒

になれませんでしたもんね」

「そうだな」

そうして正月初日の夜はさくらさんおすすめの時代劇をたっぷり
と見て夜を過ごしたのだった。

「というわけで、これからみんなで力を合わせ、年末分の大掃除を始め
たいと思いますー！」

翌日の朝から、音姫さんが気合の入った声で宣言した。

「はあ……かつたるいなあ」

「朝倉妹に一票だ。ていうか、なんで年末分の大掃除をこの日にしな
くちやいけないんだよ？」

「そんなこと言ったって、こと……あ、いや、去年は弟君達も合宿に参
加して、さくらさんも忙しかったからほとんどまともに掃除なんてで
きなかつたんだし。休みがあるうちに綺麗にしておかなくちや」

「や、そもそもこの家を汚したのは、私でもお姉ちゃんでもないし」

「いや、待て待て。何ひとり逃げようとしてんだ。お前達も十分汚し
てるだろうが。一年の大半ここで飯食いに来たりテレビ見たり」

「や、それは……そうかもしれないけど」

「はいはい。そういうことで、大掃除を始めます。これは決定事項で
す」

「マジかよ、面倒臭え……」

心底ダルそうに雄二は立ち上がった。まあ、気持ちはわからないで
もないけど、去年は合宿に行くことが決まったのが急だったから、口
クナ掃除ができなかったというのも事実なわけだから、音姫さんの言
う通り、できることなら今日中に済ませておきたい。

「じゃあ、全体の作業順番と各人の役割分担なんだけど……」

そういつて生徒会会長モードの音姫さんがしきり始めた。

「まずは居間のお掃除からだね。えっと……弟君や明久君、坂本君の

男子達は家具を動かしてもらって畳を拭きましよう」

「まあ、確かに結構重たいものも多いし……流石に女子達には持たせられないよね」

「何故か儂が男子陣から除外されとるのじゃが……」

「秀吉……ドンマイ」

「でも、わざわざ雑巾がけする必要あるの？ 掃除機でもいいんじゃない？ そんなに汚れてるようには見えないし」

「見えるところはね。見えないところには意外とホコリが溜まってたりするものなの。ホコリとか溜まったまま放っておくと色々危険なんだよ。喘息やアレルギーを起こす原因になったり、火事の原因になることだってあるんだから」

「そ、そうなんだ……」

「そういえば、ここんところ事故が多いとか聞くしな」

「そういうこと。だから、用心も兼ねてきちんとお掃除しないとね」

というわけで、早速居間の掃除を始めるのだった。

居間の雑巾がけを終え、僕達は家具を元の位置に戻し始めていた。

「じゃあ、次はこの食器棚お願いね」

「了解」

「はい」

僕は義之と協力して食器棚を動かしていく。そういえば雄二がないけど。アイツサボってるか。

または、自分の絶対領域に踏み込まれないよう自分の部屋の掃除をしているかだな。

まあ、僕は絶対領域は徹底的に隠してあるからなんとかなるけど。

「って、換気扇まで掃除してくれるのか？ なんか悪いなあ」

「大丈夫、ついでだから。あ、これ持ってきてくれる？」

「了解」

「うわ、ベトベト。あの、そこ僕がやりましようか？ 流石にこんな油まみれのところに女子が入るのは危険だと思うんですけど」

主に美容的な意味で。

「大丈夫だって。髪の毛はちゃんと気を遣ってるから」

ん〜……本人が言ってるなら大丈夫だろうけど。今度からはママに僕達で掃除した方がいいんじゃないだろうか。

義之も同じことを思っていたのか、僕の顔を見ると頷いていた。

「あ、ラッキー。プリン発見♪」

その時、冷蔵庫を開けていた由夢ちゃんが嬉しそうな声でプリンを手元を持っていった。

「あ、こちら！ それは俺が取っておいたやつだぞ！ ちゃんと元の場所に戻せ！」

「や、そんなこと言っても、どこにも兄さんの名前なんて書いてないし。ここは公平なルールにのっとって、第一発見者の手に委ねられるべきでしょ」

「勝手なこと言うんじゃない！ ていうかここ俺の家だから！ くら、元の場所に戻せ！」

「兄さんのじゃなく、さくらさんの家でしょ？」

「ぐ……それはそうなんだが……」

ひとつのプリンをめぐって義之と由夢ちゃんが争い始めていた。

「明久！ 我が妹を止めてくれ！ このままでは俺のプリンが！」

「あ、明久さんどうです？ 今なら半分はあげますが」

「いや、どうと言われても……」

「こちら、喧嘩しないの。プリンなら今度買ってあげるから」

「いや、そういう問題じゃなくてな……由夢が勝手に俺の所有物をだな——」

「いいじゃない。由夢ちゃんは妹なんだから」

「いや、妹だからってこの暴挙を許すべきなのだろうか？」

「まあまあ義之。プリンのことは同情するけど、後でどうせ買い物するだろうからその時にでもして、由夢ちゃんは休憩にしてください」

「流石明久さんですね♪」

「お前は女子に甘すぎるぞ……」

「お主らは何をやっておるのじゃ」

「あ、秀吉。風呂場は終わった？」

風呂場担当の秀吉が台所に入ってきた。風呂場だったからか、服の所々が湿っていた。

「うむ。霧島も窓ふきが終わりそうじゃし、これで1階はほぼ終わりじゃな」

「それじゃあ、これ終わったら次は弟君達の部屋だね。あ、弟君、ファンお願い」

「了解」

義之が換気扇のファンを洗い流し、換気扇の掃除を終えると同時に霧島さんも窓拭きが終わったようで、これで1階は終わった。

「って、何ですと!?!」

「いきなりどうしたのさ?」

これから2階が上がって掃除というところで突然義之が叫んだ。

「どうしたの、弟君? 早く弟君の部屋を掃除しましょ?」

「いや、いいから! 俺の部屋までやらなくていいから! そここはちゃんと自分でやる!」

バタバタと手を振って音姫さんの好意を断っていた。ああ、まだ義之のトップシークレットが片付いてないのか。

まあ、普段そこまで音姫さん達が踏み入ることがないから完全に油断してたんだろうね。

「弟君、なんでそんなリアクションなの?」

義之がそんな行動を取れば流石に音姫さんも不審に思うだろう。

「いや、その……」

「お姉ちゃんに見られたらまずいものとかあるからでしょ?」

「はうっ！」

由夢ちゃんがいきなり核心を突いた。容赦がない。

「私に見られたらまずいもの？」

音姫さんがジト目で義之を見る。義之は慌てて否定した。

「ないないないない！ そんなものあるわけないじゃないですか！」

「ふふくん」

由夢ちゃんがにやりと笑い出した。確実に何があるか予想できたのだろう。

「じゃあ、別に掃除しても大丈夫だよな？ 兄さんの部屋を」

「い、いやいや……流石に自分の部屋まで掃除してもらうのは悪いだろ。音姉達だった自分の部屋がまだあるだろうし」

「そんな、遠慮しなくていいよー。それに、男の子のお掃除って細かいところまで綺麗になってないことが多いから、大掃除の時くらいは隅々までしないとねそれに弟君の性格上、細かいところまで気が回ってなかったり、あれこれ色々整理がつかないかもしれないし」

善意100%の笑顔で言う音姫さん。その理由がエロ本によるものだとは想像もしてないだろう。

流石にこれは助け舟を出した方がいいのかな。自分のコレクションが消える時ほど悲しいことはないのは僕も体験してることだし。

「えっと、弟君……どいてくれないかな？」

「いや、ここは大丈夫だから。自分でできます、はい」

「あの、音姫さん……そっちは僕が——」

「明久さん、こっちの本棚をどかしてくれませんか？ 私じゃ重くて」
「あ、うん了解」

じゃなかった！ 義之の手助けに行こうと思ったら、うまく由夢ちゃんの誘いに乗ってしまいました！

由夢ちゃん、恐るべし……。義之は義之で自分の絶対領域を守るこ

とに必死でそこから動こうとはしなかった。

「そんなこと言つて、さつきからその辺りの掃除が進んでないじゃない」

「この辺は後でやるから大丈夫だ」

「どうして後回しにするのかな？　今一緒にやつちやえばいいじゃない」

それが当然だと言わんばかりに、無邪気な笑顔で言う音姫さん。それが普通なんだけど、男の子としてはそれは死刑宣告に等しい。

「だって、そこに隠してる、とても白日の下には晒せないものが出てきちゃ困るもんね。特にお姉ちゃんの前では」

由夢ちゃんが義之を崖つぶちへと追い詰めていく。

「ちよ！　何を言ってるのかな我が愚妹は！　俺がそんなものを隠したりするわけないじゃないか！　いくら休みだからって、脳みそまでだらけすぎてるんじゃないか!？」

「……………」

義之、それは自殺願望者の言葉だと受け取っていいのかな？　由夢ちゃん、今ので完全に頭にきたよ。

「お姉ちゃん、ベッドの下」

ぼそりと一言、由夢ちゃんが呟いた。

「え？」

「ちやんと、ベッドの下もお掃除しないとね。ホコリとか溜まってるはずだし。きつと、色んなゴミが出てくるよ」

悪魔の笑みで残酷なことを言った。哀れ義之。

「うん、そうだね。というわけでどいて、弟君」

「ちよ、ちよつと待った、音姉！　ここは俺と明久が協力してやるから！」

「そ、そうだね。ここは僕が——」

「明久さん、今度はそのケースお願いします」

「ああ、はい」

「つて、乗っかるなよ！」

「あ……………」

しまった。女子に頼みごとされるとつい身体が動いてしまう。こういう時には悲しい習性だよね。

「はい、隙あり」

「うおっ!」

僕に気を取られてる隙を狙って由夢ちゃんが義之を引っ張って部屋の間へと追いやる。

「っし!」

そして、義之がベッドから離れたところを狙って音姫さんが義之の絶対領域へと侵入した。

「ちよ、ちよつと待った音姉!」

義之が慌てて音姫さんを止めようとするが、

「ぎやあああああ!?!」

時すでに遅し。音姫さんがベッドの下に手を入れていた。もう何をしても遅いだろう。

義之はここで、終わってしまう。

「義之……」

「……何だ?」

「……骨は拾っておくよ」

「……せめてここから助け出してくれ。足が、動かないんだ……」

そうしてやりたいのは山々なんだけど、

「……僕も、動けないんだ。由夢ちゃんに止められてるから」

「すみませんね、明久さん」

「お前かあ!」

僕は由夢ちゃんに拘束されて動くことができない。これでもう詰みだ。僕達の負けだよ、義之。

「さて、ここで最後つと……ん? 何だろ、これ? ダメだよ弟君。

ベッドの下に物なんて置いちゃ——」

軽く叱る声と共にベッドの下から女子の目には決して入れてはならないものが出てきてしまった。

「……………」

瞬間、ぴきりと音をたて、音姫さんと周囲の空気が固まった気がし

た。

「……………」

何だか、音姫さんの背中からものすごい気が溢れているような気がするよ。ものすごいプレッシャーが部屋中に満ちてるよ。

「…………巨乳アイドル・恵梨香のヒミツ、あなたにぜひ見せてほしい…………弟君は、どんなヒミツを知りたいのかなあ〜?」

「あの…………いや、その…………あははは」

つらい！ 僕に向けられてるわけでもないのに、音姫さんの怒気が滅茶苦茶つらい！

下手すれば姫路さんや姉さん以上に怖いよ！

「魅惑の巨乳女教師・淫らな特別個人授業…………どんな特別個人授業なんだろうね? ね? 弟君」

「そ、その…………数学…………かなあ? あ、あははは…………」

「爆乳レースクイーン・危険なナビシート…………危険なナビシートね。ナビシートって危険なものなの?」

「いや、その、助手席って、事故の時一番死亡率が高いって言うじゃん? だから危険なのかな、なんて…………」

「うふふふ…………」

こ、怖い…………背中越しにいる由夢ちゃんまでもが震えてるのがわかるよ。

「…………弟君」

「はい」

「ちよつとそこに正座なさい!」

「は、はいい!」

音姫さんが怒鳴ったと同時に義之はその場に正座した。

「…………それと、由夢ちゃん、明久君」

「は、はい…………」

「これ」

急に指名されたと思ったら義之のベッドの下にあった本を僕達に手渡した。

「…………え、えつと」

「これ、何を？」

僕に渡すならともかく、女の子の由夢ちゃんにまで渡してどうするのだろうか？

「燃やしなさい」

僕の疑問に一言、残酷な判決を下した。義之がその残酷な判決に心で叫びをあげてるのが見てわかるよ。

「何か問題でも？」

「いえ、ございません」

音姫さんに言われ、一瞬で縮こまった。

「あ、あははは……じゃ、じゃあ私達はこれを燃やしてくるんで」

「あ、後は、ごゆっくり……」

それから僕達は部屋を出て行った。義之が裏切り者と言いたそうな表情が最後に見えたが。

恨みでもなんでも、後でたつぷり聞いてあげるよ。生きていれば。

「……さて、僕のマイコレクションも一緒に捨てようかな」

「いいんですか？ いや、あつても困るんですけど」

「うん……もし、これがななかちゃんに見つかって、あんな状況になったらと思うと」

「……ああ」

義之の二の舞にならないよう、僕もここで苦渋の決断をくださねばならない。僕の、命を守るためにも。

そして、地獄とかした遅めの大掃除が午後まで続くのだった。

「じゃあ、明久君のお部屋を掃除したら次は私達の家をお願いね、弟君」

「はい……」

1時間にも及ぶ音姫さんのお説教を受けた俺は心身共に消耗し

きった状態で明久の部屋の掃除を始める。

「義之、大丈夫？」

「ダメだ……しばらくは立ち直れそうにねえ……」

「そうだ。俺の宝物が……マイベストコレクションが全て水の泡……いや、塵となつて土に還つてしまったのだから。」

「その気持ちはわかるよ。でもね、数があればいずれは見つかつてしまうのが運命なんだよ」

明久が遠い眼をして呟いた。お前も、大切なものを失ったことがあるのか。

「まあ、明久には既に白河がいるわけだからもうそれは必要ないから……羨ましいぜ」

ただのエロ本じゃわからない女子の身体の魅力をいつでも観察できようになるのだから。

「あはは……それが理由つてわけじゃないけど、なかなかちゃんに見つかるのは怖いから……全部、義之のと一緒にして燃やしたよ」

「一緒!?」

バカな……いくら恋人ができたからと言って、自分の魂の一部とも言えるものを燃やしたというのかこいつは。

「流石に……義之みたいな目には会いたくないから……」

「……なるほど」

まあ、音姉のアレを見ればそう思うのは無理ないかもな。

白河が怒るところなんて想像もできないが、エロ本が見つかった関係が悪くなつたなんて話はごめんだろうしな。

「まあ、過ぎた災難は忘れてさつきと大掃除を始めよう」

「そうだな」

明久の言葉に頷いて俺達は明久の部屋の掃除を始めるのだった。

だが、明久の部屋はゲームや漫画が主なので他の部屋と比べて比較的片付けやすいな。

この調子ならここは短時間で済みそうだ。

「……おっ？」

本棚の整理をしていると、薄いノートが目に入った。そして、その

表紙には『……日の日記』と記されていた。

前半の部分がマジックのインクが滲んだかして読めなくなっているが、これが明久の日記であることは予想できた。

まさか明久が日記なんてものをつけるのは以外だった。

いちいち細々としたものを記すのを面倒臭がると思っていたのにな。俺もだけど。

明久がどんな風日記をつけているのか非常に気になった俺は失礼ながら中身を見せてもらおうことにした。

日記を開き、ページをめくるとそれぞれのページに空色のペンで一言二言の文が綴られていた。

『5月17日 火曜日 この日より、僕達は空色のペンを使い、ここに思い出を増やすことにした。理由はなんでもいい。ただ今を生きている。それだけで僕らは今日というかけがえのない一日を記念日にできるのだから。カレンダーとこの日記にある空の色は僕らにとって思い出の——生還を味わった時の世界の色なのだから』

「……………は？」

この文章を見て俺は一瞬わけがわからなかった。

生還の記念？ 一体何を言っているのやら。俺はそんな疑問を抱えたまま次々とページを捲っていく。

『5月24日 今日から学力強化合宿の始まり。電車の中で美波の激辛料理の上に姫路さんの殺人級の料理を食して三途の川を初めて渡りかけた。そんな中で生還できた記念をここに記しておく』

『6月15日 姉さんが帰ってきて、その姉さんのパワーアップした料理を久しぶりに食べて、また三途の川を渡りかけた。そして、また生還できたことに感謝したい』

『7月1日 最近、姉さんが料理を作る機会が多くなった。その所為か、だいぶ姉さんの料理に耐性ができた気がするけど……やっぱり臨死体験は免れないままだった。それでも、生き抜いていられるんだ。生きているというこの感覚を、決して忘れてはいけけない。僕達以外に死んでしまった数々の人間のためにも』

「……………」

「ここまで読んでパタン、と日記を閉じた。

「……お前は今までどんな人生を歩んできたんだあああああ！」

「うわっ!? 何、義之!? 急に大声出したりして!」

「何じゃねえ! 一体何なんだこの日記は!? お前、本当にここまでの数臨死体験をくぐり抜けてきたのかよ!」

「え? ……ああ、懐かしいなあ。僕の『臨死体験生還記念日記』。この日は……ああ、そんな事もあったなあ」

「その前にひとつ聞かせてくれ! そこに書いてある事って、みんな真実なのか!」

「え? 当然でしょ。そうじゃなかったら日記の意味がないじゃん」

「いや、そんな臨死体験の数々を当然で片付けられてもなあ!」

一体この世界に来るまで何回臨死体験してきたんだよ。

その日記に記されてるだけでも一ヶ月のうちの大半を占めてるぞ。そんなにポイズンクッキング食べてよく初音島に来るまで生き残れたな。

「まあ、これを見たのなら義之……生きてるっていうことは、とても大切なことなんだってことを、忘れちゃダメだよ?」

「なんとなくわかるが、こんな日記を見てから言われてもなあ!」

確かに生きているというのとはとても大切なことだと思うが、こんなくだらない理由で生死の狭間を彷徨った奴に言われてもな。

こいつの事は文月学園に行つて大体は理解できたかと思つたが全然甘かつた。まだまだこんなところでネタを隠していたとは。

ていうか、空色の印がついてる日が週に……少なくとも3日。多くて6日も……ほとんど毎日じゃねえか。

そんだけの数の死線を今まで本当に越えてきたのかよこいつは。

「まあ、過去の思い出は傍らに置いてさっさと掃除済ませておこうか。これ終わつたら次は朝倉家の掃除だし」

「そ、そうだな……」

明久の臨死体験日記をパタリと閉じて部屋の隅に置き、掃除を再開する。

うん。アレのことについてはもう記憶から消しておこう。深く考

えたら負けだ。アレは永久に目に届かないように後でどうにかしよう。

第五十八話

「ふう……終わったあ〜」

「結構疲れたね〜」

僕と義之は肩で息をしながらソファーに座った。

いやはや、本当に疲れた。芳乃家とは違ってほとんどが洋式だから棚とか結構大きい物が多くて運ぶの大変だったよ。

「2人共、お疲れ様。そろそろ喉渇いたし、紅茶でも入れようか？」

「ああ、できればミルクティーにしてくれると嬉しい」

「あ、僕もそれで」

「はいはい」

音姫さんは頷いてキッチンの方へと向かった。

「ふう……これでようやく一息つける——ん？」

僕がソファーの端っこによりかかるとテレビの前に厚い本が何冊も束になって置いてあった。

「義之、これってアルバムじゃないの？」

「ん？ ああ……随分古そうだし、だいぶ前のものなんじゃねえの？」

義之がそう呟きながら本をめくっていく。

「あ、やっぱりか。随分と懐かしいものを」

「どれ？へえ……義之も音姫さんも由夢ちゃんも随分小さいねえ」

見れば普段のみんなとは印象も異なっているのがわかるなあ。

義之は……まあ、普通に無邪気な感じだね。ただ、かなり印象が違うのは音姫さんだな。

一時期がかなり無表情な写真があった。まあ、何処かを境にして今のような雰囲気になったみたいだけど。

「由夢も……昔は素直で可愛かったんだよな」

「そう？今でも結構素直だと思うけど？」

「そうか？」

「うん。多分、わかってないの義之だけだと思うよ」

「何故？」

「全く、どんだけ朴念仁なんだか」

「それ、お前にだけは言われたくねえよ」

それからまた次々とページを捲っていく。結構写真撮ることが多いみたいだなあ。

僕ん家なんかこんな平和な写真が一枚もないもん。僕の女装写真は何故かいっぱいあるのに……。

「お、これは由夢の10歳頃の誕生日の写真か」

「へえ……由夢ちゃんの誕生日……1月2日なんだあ。じゃあもう今日だね」

「ああ、そうだな」

「……………え？ 今日？」

僕と義之は互いを見つめ合って30秒程硬直し、

「つて、今日おおお!!」

「やっべえええええええ！ 大掃除のことばかりですっかり忘れてたぞおー！」

「ど、どうしたの、2人共？ 大声出して？」

「いや、やべえよ音姉！ 今日由夢の誕生日だった！」

「え？ 弟君、ひよつとして……忘れてたの？」

「……………すつかり」

どうやら音姫さんは覚えてたようだけど、かなりマズイ気がしてきた。

「で、でも義之！ 今まだ3時なんだし……今から買い物すればまだ間に合うかもよっ！」

「なら今すぐ行くつきやねえだろ！」

「あ、弟君!?!」

「すみません！ 僕もお供していきます！」

「え、明久君も!?!」

音姫さんが慌てた声を出す、僕達はそれも聞かずに一直線に朝倉家から駆け出した。

まずった。まさか今日は由夢ちゃんの誕生日だったなんて。てい

うか義之、仮にも兄妹なんだから覚えてなよ。

「……で、大慌てで買い物に来たものの」

「一体、何をプレゼントしてあげればいいんだろう？」

由夢に誕生日プレゼントを買うことを意気込んだはいいが、所詮頭張りの行動。

いざ商店街に着いたところで何をプレゼントしてやればいいのかに迷ってしまった。

「そういえば、僕達……女の子に何かを奢ったりすることはあっても、プレゼントなんてあげたことないよね」

「確かに……」

たまに杏や坂本の悪ふざけなどでゲームし、その罰ゲームとして購買のパンなどを奢ったりすることはあってもこうやって、妹とはいえ異性にプレゼントなんて送ったためしがない。

いや、音姉や由夢にプレゼントしたことがないわけではないが、今まではぬいぐるみとか可愛い髪飾りだけで特別考えてプレゼントしたことがない。

今まではそれでいいと思っていたが、流石に由夢もいい年頃なんだ。少しは気の利いたプレゼントを用意した方がいいかもしれない。ていうか、今日になって思い出して簡単なプレゼント、なんてことになったらあいつの機嫌が斜めになって後々がつらくなる。絶対にだ。

「とりあえず……由夢ちゃんはお風呂が好きだから、入浴剤でも見てみる？」

「そうだな……」

まあ、このまま何もしないよりは由夢の普段の生活のことを考えて

プレゼントを選んでみるのもいいかもしれない。

俺達は入浴剤の売ってそうな店からあたることにした。

「えっと……バラ、すみれ、桜、その他フルーツ系……入浴剤なんて、あまり興味はないが、こうして見ると結構種類あんだな」

「うん。ちなみに、由夢ちゃんがいとも使ってる入浴剤の種類とか、わかる？」

「わかるか……」

んな覗きみたいなことしたら犯罪だろうが。

「……朝倉由夢はシャンプーがさくら、入浴剤にバラの香りを使っている」

「おおっ!?!」

由夢がどの入浴剤を使っているかに悩んでいたところで後ろから土屋が現れた。

お前、本当に何処から出てきてんだ。

「ムツツリーニ、一体何処から？　ていうか、こんなところで何してるのさ？」

「……取材」

「記者かお前は」

「ていうか、例のごとくムツツリ商会のネタ集めとか？」

「……まだ言ってなかったが、俺はムツツリ商会を永久封鎖することにした。そして、今後そういった系統の写真を撮るのもやめた」

「何い!?!」

土屋の言葉に俺と明久が同時に驚いた。

まさか……土屋が自ら女子達の写真を撮ることをやめるのを宣言したのだ。驚かない方がどうかしてるだろう。

「ど、どうしたのさムツツリーニ……あれほど性に関して魂を尽くしていたのに……」

「……夢は、いずれ形を変えるもの。クリパの時、それがわかった」
「一体クリパで何があったのさ!？」

全くだ。一体クリパで土屋は何を見たのだろうか？

「それで、女子の事じゃなかったら、何を取材していたんだ？」

「……ここ最近起こってるという、初音島での事故の数々だ」

「ああ……」

そういえば、さくらさんもこここのところ初音島での事故が多発しているって言ってたな。

「それで、何かわかったの？」

「……全くだ。共通点と言えば、どれもこれもが原因不明ということだけ。中には小さな少女を目撃した例もあるが、それが本当のことかどうか今のところ不明だ」

「少女？」

「金髪でリボンをした少女……手がかりはそれだけだ」

「それ、そこらにいっぱいいるじゃん」

確かに。今では少なくなってきたとはいえ、その手の外国からの観光者が多いわけだし、それだけじゃ一体誰が目撃された少女なのかわからない。

「それで、どんな事故が起こったの？」

「……調べてみればかなりの数がある。下り坂でブレーキが効かなくなり、電柱に衝突した件。不良がナンパをしている最中、目の前の店の看板が落下した件。他にも色々あるが、どれも奇跡的に死亡者がいなければ、大した怪我也負ってない」

「うわ、それは本当に奇跡的だね」

確かに。それだけ多発しているにも関わらず、どれも大した怪我をしてないというのは奇跡としか言い様がない。

「……だが、その事故の発生する時間の間隔が、年末を境に徐々に短くなってきている」

「それは、怖いね……」

「……そのために、この島から出て行く者も少なからずいると聞く」

「そりゃあ、そんだけ頻繁に起これば不安になる奴だっているだろう」

な」

「……俺の知ってることは以上だ。お前達は何も気にせず、朝倉由夢の誕生日に行つてこい」

そういつて土屋はシュツ、と音をたてて消えた。

ていうか、そんなシリアスなことを聞いて気にするなというのは無理な話だろう。

「……とりあえず、由夢ちゃんが使ってるのとは違った入浴剤をいくつか買って、他に何かひとつ買っておこうか？」

「そうだな……」

俺達は適当な入浴剤を数個買い、近くにあつたファッションセンターで買い物をし、由夢のプレゼントをかうことができた。

「ふう……とりあえずはこんなところか」

「うん。どうにか間に合つたみたいだね」

「ああ、一時はどうなるかと思つたが、これならあいつも文句はないだろう」

「うん。でも、ファッションセンターに行つて買ってきたのがアレつていうのは、どうなの？」

「何言ってるんだ。少しでも女らしさを身につけさせようという兄の優しさがわからんか。お前だつて、家にいる時の由夢を見てそうは思わんか」

「そ、それは……」

それ見ろ。お前だつて同意見じゃねえか。

さて、しゃべるのはこのくらいにして、さっさと家に帰るとするか。そう思つて芳乃家に行こうとした時だつた。

ジリリリリリリリリリリリリリリリ!!

「なっ!?!」

「何だ!?!」

突然非常用のベルがショッピング通りで鳴り響いた。

すると、ショッピング通りの出入り口のシャッターが突然下がっていった。

「ちよっ!?!」

「まだ中にいるんだぞ?!」

俺達は慌てて出入り口へと向かって駆け出していったが、間に合わず、シャッターは締まり、俺達を阻んだ。

「お、おい! 反対側も!?!」

通行人のひとりが叫び、振り返ると反対側のシャッターも勢いをつけて締まった。

「ちよ!?! 一体何なの!?!」

突然の事態に明久が大慌てだった。落ち着けと言いたいところだったが、あまりに突然起こったことで俺も状況についていけなかった。

しばらくするとシャッターの向こう側から声が聞こえてきた。

『失礼! 中にいる方! 大丈夫ですか!』

「大丈夫なわけではないですよ! 一体何があったんですか!?!」

シャッターの向こう側から聞こえた声に明久が返した。

『すみません! どうやら、セキュリティシステムに誤作動があったようです!』

「誤作動?」

「ということとは、すぐに開くんですよね?」

『そ、それが……』

シャッターの向こうで、歯切れの悪い声がする。

『どういうわけか、シャッターの開閉スイッチがロックされてまして……現在、原因を調査中ですので、今しばらくお待ちください』

「何だっつて!?!」

そんなバカなことがあるかよ。これから由夢の誕生日会があるのにだぞ。

「そんな! 何とかならないんですか!?!」

『すみません! 早急にシャッターを開けますので!』

「そんなに待ってられるか!」

そう叫んで明久は辺りをキョロキョロと見回した。何とか脱出を試みようとしているんだろうが、もちろん出入り口はここと反対側のシャッターしかない。

店に入つて別の場所から出ていこうにも、出入り口付近の店は既に閉店しており、まさに八方塞がりだった。

「こっくなったらー!」

明久が何をするつもりなのか、近くにあった旗を安定させるためのブロックを拾い、そして近くに置いてあつた仕切り用のロープを拾つた。

それからロープを切り、片方は短く、もう片方をかなり長めにしてそれぞれをブロックにくくりつけた。

……ああ、今までのパターンから言つて明久がこれから何をしようとしているのか、臆げにだがわかつちまった。

「さあ……イッツ、ショータイム!」

短めのロープでくくりつけたブロックをショッピング通りの上にあるガラスへ向かつてハンマー投げの容量で投擲した。

ガシャーン!!

もちろん、あれだけの勢いがつけば窓ガラスは割るだろう。

「てか、何やってんだお前は!?!」

「そんじゃ、次は義之!」

「いや、まさかあそこから出ろつていうんじゃねえだろうな!? 無茶言うなよ! どんだけ高いと思つて——つていうか、このロープはなんだ!?!」

いつの間にか俺の腰には先程切つた長めのロープが巻かれていた。この巻きつけられたロープ、割れた窓ガラス、さっきの投擲の場面を考えると……嫌な予感しかしなかつた。

「そんじゃ、行つてこいやあ!」

「ちよつ、マジかよお!?!」

明久が反対側の先にくくりつけた小石を投げて天井の柱から通し、そこから落ちたロープを思いつきり引つ張ると見事に俺の身体が

引つ張られ、先程割れた窓ガラスに向かって放り投げられた。

俺の身体は見事外に出られたはいいが、外に出てからシャツタの上の壁にぶつかり、更に割れたガラスによってロープが切れ、地面に落ちた。

「ぐぶつ！ つゝゝ……！」

め、滅茶苦茶痛え！ 何考えてんだあのバカは！

『義之い！ 無事に行けた!?!』

「無事に行けた!?! じゃねえよ！ 危うく死ぬかと思ったわ！」

『ごめん！ とりあえず出られたんなら先に帰って由夢ちゃんの誕生日祝ってあげて!』

「んなわけに行くか！ お前ひとり残して！」

『どうせ窓ガラスの件で残ることになりそうだし、それなら義之が先に帰って誕生日を祝ってあげたほうがいい!』

「いや、けど——」

『いいから行け！ 目の前のことに気を取られてばかりで大事なことを見失うなよ!』

それはむしろこっちの台詞だった。目の前のことばかりで周りが見えず、自分のことも省みずに無茶ばかりするお前には。

『さっさと行け！ 由夢ちゃんだって、自分の誕生日なのに何も言わなかったけど……本当は義之に一番祝ってもらいたいに決まってるよ!』

でも、気骨がすごい。一番他人のために頑張るお前の姿は、危なっかしいが結構憧れたりもする。

お前のいた世界じゃその行動が報われることが少なかったが、せめてこっちではその報いはあつてほしいと思う。

だからこんなところにひとり残しておきたくはないが、

『早く行け！ 由夢ちゃんをひとりにしてやるな!』

こいつは……どんな状況でも他人のために行動している。今こゝで残っても、それは明久はもちろん、今日が誕生日である由夢の心にも何かしらの傷が残るだろう。だから、

「……悪い！ プレゼント渡したらすぐに戻る！」

『できれば渡した後も祝ってあげてほしいけどね!』

あいつが攪取したこの機会を逃すわけにはいかない。せめて、あいつにプレゼントしてやらなきゃあいつに申し訳が立たねえ。

だから俺は、明久を残して芳乃家へ向かって全力で駆け出している。

「……はあ」

わかっていたことだった。別に私から言ったことでもない。こんなことしたって意味がないのはわかっているのに。

「遅いなあ……」

それでも、そんな言葉が出てきちゃう。

私の目の前にはいくつもの料理が並んでいる。けれど、お姉ちゃんじゃない。兄さんのでもなければ明久さんのでもない。

私が、この日のために練習して作った料理。時々明久さんにも見ってもらって、練習して、ようやく人並みになった。

私が作った料理を食べて、賑やかな誕生日にしかつたけど……この事は誰にも言っていない。

もちろん、私の誕生日をお姉ちゃん覚えてくれて、突然生徒会の都合が入って学園に行く前におめでとうと言ってくれた。

木下さんは演劇部に呼ばれて今日は遅くなると言い、霧島さんと坂本さんは2人でどこかへ出かけた。

だから残ったのは兄さんと明久さんだけだけ。例え誕生日を思い出したとしても……ここには来れない。私はそれを知っているから。

ただ、私が勝手に期待して、誕生日だからってバカみたいにはしゃいで……でも、全部わかっているから。

わかっているから……ずっと、嘘をついていた。

「何、期待しちやっってたんだろ……」

今置かれてる状況を見てつい自嘲気味の言葉を吐いてしまう。時

刻は6時をちよつと過ぎたところ。

何やってるんだろ……約束したわけでもないのに。勝手に待つちやうて。

「……疲れたなあ」

多分、今日は誰も戻ってこない。だから、今日は戻ってさつきと寝ちやおう。

慣れないことやって、疲れちやったし。そうやって家に戻ろうとした時だった。

「ただいま！ 由夢、いるか！」

「……え？」

ありえない声が聞こえた。そんなはずがないと思った。

だって、今日はもう誰もこないはずだったのに。だからあの声が聞こえてくることなんて、ありえないはずなのに。

「由夢！」

でも、現実が……運命が変わった瞬間が今、目の前にあった。

「お、遅れてすまねえ！ ちよつと不測の事態があつて、不本意ながら足止め喰らつちまつて、とにかく、スマン！」

目の前で、兄さんが息を乱して、呼吸も整えないまま声を荒げて謝罪してきた。

そして、脇に抱えていた紙袋を乱暴に掴んで、私の前にズイ、と出してきた。

「これ！ 誕生日プレゼント！ 明久と選んできた！」

嘘じゃないかと……夢じゃないかと思つてた。来るはずなんて、ないと思つてたのに……実際はこうして、私の誕生日を祝いに来てくれた。

「だから、これで機嫌なおして……つて、由夢!? いや、誕生日の事忘れてたのは謝るから！ 何も泣かなくても」

「え……？」

兄さんに言われて、目元に手を添えると、確かに私の眼から涙が出ていた。

無意識のうちに泣いてたみたい。そりゃあ、仕方ないでしょ。だつ

て……本当なら、兄さん達は帰ってこれなかった筈なんだから。
ピリリリリ!

「あ、スマン由夢!」

兄さんの携帯からメロデーが流れ、兄さんが慌てて電話に出た。
「もしもし? あ、明久か! 出られたのか!? ……うん、出られたならよかった。……出たはいいけど、ガラスを破った件について警察で事情聴取って、そりや当たり前だな。……ああ、ちゃんと渡せたよ。……そうか。まあ、怪我もないんならそれはそれでいいか。……え? 土屋が? ……そうか。道中気をつけとけよ」
それから兄さんは通話を切って携帯をしまった。
「悪い。明久も祝う予定だったんだが、さっきも言った通り、不測の事態があつて明久は遅れて来るそうさ。それまでは俺達だけで祝つておくか」

よくわからないけど、運命が変わった。何で変わったのかはわからないけど、今はこの運命に感謝したかった。

「あれ? そういえば、音姉達がいなくて、どうしたんだ?」

だって、おかげで最高の誕生日になったから。

「お姉ちゃん達はそれぞれ都合がきちやったから今は私と兄さんだけです」

「そうなのか。あれ? じゃあ、この料理は?」

「私が作りました」

「……え?」

「何ですか? そのえ、は」

「いや……だつてお前、料理……」

「明久さんに教わりましたからそんなに心配しないでください。ここまでできるのに随分時間かかっちゃったんですから」

だから、この日だけでいい。一生分笑えるような誕生日にしたいから。

『ええ、昨日……また原因不明の事故がありました。商店街ショッピング通りのシャッターが誤作動を起こして締められ、何人から数時間閉じ込められた件。及び、複数の交通事故がありました。その交通事故で、同一人物が幾度も車に撥ねられましたが、特に大した怪我はないもよう。その人は、目撃者の話によると風見学園の生徒であるようです——』

「へえ、また交通事故か」

「最近はやはり物騒じやのう」

「……道筋注意」

「だね。でも、奇跡的に助かったなんて、一体誰なんだろうね？」

「……それは、ツツコミ待ちなのか、明久？」

「へ？ 何が？」

「このニュースを見て、何も思わないんですか、明久さんは？」

「え？ 由夢ちゃん、それって一体？」

「これ、絶対明久君だよな？」

「え？ まさか」

「なら聞くが明久……その体中の包帯はどうしたんだ？」

「ああ、こつちに急いで戻ってくる間に色々ぶつかっちゃったみたいで。何にぶつかったかは必死で走ってたから覚えてないけど」

「このニュースの情報を総合して、十中八九お前しかいないだろう！」

由夢の誕生日の翌日を境に、風見学園に『飛び降り隊長』改め、『不死身の走者』という異名が初音島中に広がることになった。

そのことを知らないのは本人だけである。

第五十九話

「ん〜……」

珍しく早起きしたものの、すごく眠い。

しかし一応ちゃんと起きなくてはいけない。なぜなら、今日から新学期なのだから。

「う〜……休みボケかなあ……」

大掃除、そして少し遅れて由夢ちゃんの誕生日を祝ってからは今までの遅れを取り戻すために3日間死ぬ気で冬休みの宿題やって後はななちちゃんとデートに行ったりした。

残りの冬休みをほとんとななちちゃんと一緒に過ごした所為か、まだ余韻が消えない。

「あ、やっと起きたんだ」

「ふにや、さくらさん？」

「おはよう」

「おはようございます」

「義之君は？」

「多分、もうすぐ起きてくるかと思いますが」

「このところ姿を見せなかったさくらさんが台所で朝ごはんを作っていた。」

さくらさんが朝ごはんを作るのを見たのは今回が初めてかもしれない。いつもは僕か義之か音姫さんのローテだったし。

でも、いつの間にか帰ってきたのかな？

「はい、ごはんできました。それじゃあ、僕学校に行くから」

「もうですか？」

「うん。新学期だから学園長も忙しいのだよ」

「そうですか、いつてらっしゃい」

「いつてきま〜す」

さくらさんはパタパタと音を立てて支度をし、家を出て行った。

なんだかなあ……最近学園の行事やら初音島の事故の対策会議と

やらで家にいない時が多くなってきてるよなあ。

「なんとかならないものかなあ……」

僕が頭を捻つていたところで呼び鈴の音が聞こえた。

一体誰だろうか？ 音姫さんか由夢ちゃんなら鳴らす必要なんてない筈だし。

「はいはい」

とりあえず、確認のために玄関へ行つたところで、

「おはよう、明久君！」

笑顔いっぱいなのななちゃんが待っていた。久しぶりだなあ……制服姿のななかちゃん。

「ところで、どうしたのななかちゃん。こんな朝早くから」

「どうしたのって、もう」

僕が尋ねるとななかちゃんが頬をふくらませた。あれ？ なんか怒らせるようなこと言った？

「一緒に学校に行こうと思って来たんじゃない」

「……あ、ああ！ そういうことね！」

なるほど。恋人になったのは文月学園で、こっちの時期でいえばクリパの時だったから一緒に登校なんてことはなかったもんね。

「……ダメ？」

「そんなわけないでしょ！ ちよ、ちよつと待ってて！ すぐに支度するから！」

「うん！」

それから僕はジェット機も真つ青だろウスピードで身支度を終え、朝食を口の中に詰め込んで一気に飲み込み、玄関へと飛び出した。

「お、お待たせ！」

「うん」

身支度を終えた僕はななかちゃんのもとへ駆け寄り、学校へと出発する。

「それにしても、休みもあつという間に終わっちゃったね」

「そうだね。まだデートしたりないっていうか……」

「うん。もうちよつと遊びたかったよね」

「うんうん。でも、新学期初日って、休みにはしゃいだ分怠くなっちゃうよね」

「今朝は早かったね」

「まあ、新学期になったらまた次の祭に向けて色々話し合うっていうからちよつと楽しみで」

「ああ、卒パだね」

「うん」

3月には卒業パーティーが控えているわけだから今のうちに準備するクラスも出てくるだろう。

今度は色々派手にやってみたいことだってあるし。具体的なものはまだ浮かんでないけど。

卒業パーティーをどうしようかなと考えながらななかちゃんと通路を歩いていった。

「ほいじゃ、ワン・ツー・スリー・フォーア！」

「じゃあー！」

放課後、僕は音楽室にて涉、小恋ちゃん、ななかちゃん、義之と集まってセッションをしていた。

ちなみに義之がギターで僕がキーボードやったりする。

「♪♪♪♪」

メロディーに合わせ、ななかちゃんの綺麗な歌声が音楽室に響いていく。

ちなみに、僕達が何で音楽室でセッションやってるかと言うと、少しばかり時間を遡る。

「うん……」

「どうした、明久？ さつきから首を捻ったりして」

「いやね……今日も言ったんだけど、卒パは何をしようかなって」

「あ……うちのクラスで何を出すかったのか。またギリギリまで難航するかもしれないな」

「うん。クラス単位でやろうとするとみんなと協力してやらなくちゃいけないしね。それもそれで色々盛り上がるんだろうけど……」

「何か不満なのか？」

「いや、クラス単位でやりたいこともあるっつていえばあるんだけどさ……なんか、クラスでじゃなくて、何か個人的なパフォーマンスがな
いかなって」

「何だそりゃ？」

僕の言葉に義之が首を傾げる。まあ、僕の言ってることがよくわからないってことだろう。

自分でも何を言ってるのかイマイチわからない。

「いや、ただ……こんだけ祭好きな人が多いんだから、もう少し何か盛り上がる要素が欲しいっていうか」

「まさか、杉並みたいの花火あげるとかか？」

「ん……それは向こうが勝手にやってくれるだろうから、別にいいんだけど。なんていうか……こう、友人同士の集まりで何かしたいんだよね。劇だとかそういうの……個人的に」

「ああ、付属最後だから友達同士で何かはっちゃけたいつてか？」

「うん。そうだなあ……バンド、なんて？」

「バンドなあ……別にそこまで興味があるわけじゃ——」

「いい事言うじゃねえか、明久あ？」

義之が最後まで言い切る前に背後から渉が僕達の肩に手を置いてきた。

「わ、渉？」

「どうしたの？」

「いやあ……今日も帰りどっか遊びにいかねって誘おうと思ったら面白え話が聞こえてきてな。卒パで最後の思い出としてバンド、か。い

いじやねえか！ いやあ……俺や月島も白河と一緒にってたまに
合わせたりするけど、バンド組んで今までイベント出ることなかった
からさ！ そしたらお前ら面白え事言ったじゃん！ ちようど明久
も楽器使えるって言ってたし、義之だつてギター使えるんだろ？」

「あれ？ 言つてなかったか？」

「明久に言われるまで聞いてなかったつつの！」

「ところで、それがどうかしたの？」

「お前が今言つただろう。卒パにバンドしてみないかって」

「ああ、ちよつとそんなアイデアどうかなつて感じのつもりだつた
けど……」

「いいじゃんいいじゃん！ 卒パに俺らがバンド組んでライブ！ ク
リパじやメンバーいなかつたからできなかつたけど、今から練習すれ
ばきつといいライブできそうだぜ！」

渉は卒パでライブするのが楽しみで興奮しているようだった。

「と、いうわけで！ お前ら早速合わせていこうぜえ！」

「え？ ちよつと!?!」

「待て、渉！ 合わせるって何の曲をだよ！」

と、まあこんな感じで急遽音楽室へ連行され、渉がななかちゃんと
小恋ちゃんに話を通してその場の流れで僕や義之も一緒になつて
セッションすることになった。

ジャジャジャ——ン♪

とりあえず、初めてのセッションだったんだけど、それなりに音は
なつたと思うけどなあ。

……………。

曲を弾き終えるとしばらく無言の状態が続いて、

「ぶっ！ あははははは、お前ら、最高だ！」

渉が笑い出した。

「はははは、本当、すごいよー！」

「特に途中のギターのソロなんて、天才的だろ！」

「明久君のキーボードも、変わり方がもう！」

「は、腹痛え！」

「ていうかなんだあのソロは！ うによよよってなって、急にメタルっぽくなつたし！ アンプにギター擦りつけて何やってんだか！」
「んでもって、その後、こんなん？ って感じの顔、面白かった！ もう、お腹痛い〜！」

「明久君も、ちよつとクラシック的な音だと思ったら急にポップな音になってたし！」

「笑わないでよ、セッションなんて初めてだったんだから！」

それからしばらく僕達は笑い続けていた。なんだか、こういうのも悪くなかったり。

「も、もういつかい！ もういつかい行くぞ！」

「おっしや、任せとけ！」

「今度こそうまくやってみせるよ！」

それから僕達はこのデタラメなセッションを小一時間続けたのだった。

「いや〜……盛り上がったなあ」

「うん。誰かとこうして音楽楽しむなんて今までなかったから、いい経験だよ」

かなり盛り上がった所為か、最終下校時刻になるまでセッションを続けていたのだった。

もう色々楽しすぎて何曲もぶっ通しで演奏しちゃったよ。

「はあ〜……初日でここまで出来ればいい方だ。もう卒パまでが楽しみでたまんねえぜ」

「気が早すぎだろ」

渉は久々にセッションできたのが嬉しいようでドコドコとドラムを叩いていた。

「そういえば、もう付属卒業まで近いんだったね」

「うん。僕がここに入ったのが去年の秋辺りだったから僕にとっては本当にあつという間だったよ」

「明久君よりも坂本君達とかの方があつという間だっただろうね。特に霧島さん」

「うん。あ、そういえば霧島さんどこのクラスに転入したんだっけ？」

「坂本君のクラスだよ。久保君と入れ替わりでね」

「ああ、そういえば久保君を置いてきちやったもんね」

色々あつたから久保君と葉月ちゃんはあつちにおいてけぼりになつてたんだっけ。

まあ、久保君ならあつちでも普通に暮らしていけるだろうし、葉月ちゃんは家族のもとで暮らした方がいいに決まってる。

「それで、坂本君のクラスじゃ早速霧島さんが坂本君にベタベタで色々あつたみたいだよ。拷問じみた行動も含めて」

「ああ、そういえば雄二の叫びがうちのクラスまで響いてたな」

授業中に雄二の叫びが聞こえたからどうせ霧島さんの前で迂闊な真似をしたからオシオキを受けたんだろうと僕は気にしなかった。

「まあ、これはこれでまた楽しい学園生活が始まるだろうからいんだけどね」

「うん。後は付属最後の思い出のために練習あるのみだね♪」

もう既に僕達がバンドを組んでライブという意見は崩れそうにないな。まあ、ななかちゃんも一緒だからいいけど。

「おおー。この調子で練習して、それでそんで！ライブでは義之がギター弾きながらワイヤーであつちこつちいきながらのライブ！これは行ける！」

「ワイヤーアクションで、どこのアイドルライブだよ！」

「ワイヤーって、ホームセンターとかで売ってるのかな？」

「いや、白河も乗っからないでくれ！」

「そういうのは専門業者に頼まなくちゃ手に入らないよ。人を釣るわけだから強度はかなりいるしね」

「マジか!？」

「じゃあ、ホームセンターとかじゃ売ってないかも」

「まあ、その手の業者なら心当たりあるから頼んでみれば意外となんとかなるかも」

「いらねえよ！ ていうか、何で明久はそんなに詳しいんだよ!？」

「ん？ 文月学園じゃワイヤーなんて使うのは当たり前——」

「ああ、わかった。もう理解した。だから言わなくていい」

僕が説明しようとするのと義之がそれを遮って話を切った。結構面白そうな話だったんだけどな。

「あ、あの！」

「「ん？」」

僕達がワイヤーアクションの話の切り終わると月島さんが遠慮気味に声をかけてきた。

ああ、僕達がさっきの話に夢中になってたから話しづらかったのかな。

「何だ？」

「あ、あのね……ちよつともものは相談なんだけど……」

「ん？」

「じ、実はね……その、付属最後の思い出なんだけど……卒パの前に、『オンエアコロシウム』に出てみないかなって」

「……………」

オンエアコロシウム？ なんぞそれ？ 義之も同様に首を傾げていた。

逆にななかちゃんとは渉は知っているのか、すごい驚いた表情をして、

「え——っ!？」

「オ、オオオオ、オンエアコロシウムだって!? いや、けど……アレはもう抽選が——」

「実は、前のギターが抜けてからも何か思い出欲しいなって……なんとなくオンエアコロシウムの抽選に応募してみたら、エントリーできちゃいました」

「マ、マジかよ、月島!？」

「うん！」

渉が興奮してるってことは、相当すごいことなのかな。

「えつと、いいかな？」

「はい、明久君」

「その……オンエアコロシアムって、何かな？」

「え？ お前知らないのか？」

「全然」

「俺も知らん」

「義之もかよ！ 音楽好きなら知っておこうぜ！」

「それで、結局何なの？ その、オンエアコロシアムって」

「この島で音楽やってる人なら、絶対誰でも一度は聴いたことがあるラジオ番組だよ？」

僕の疑問にななかちゃんが答えてくれた。ラジオ番組ねえ……。

僕はテレビしか見てないからラジオ番組なんて全く興味もなかった。

「それで、そのラジオ番組が？」

「うん、この番組はね、『初音島放送局』が流してる番組でね。抽選で10組アマチュアバンドを決めて、スタジオ内にある会場で演奏するの。会場にはお客さんが100人ほどいてね、それぞれ評価してもらうんだ」

「んでもって、評価の高かった順に5組が選ばれて実際に番組から曲が流れるんだよ」

「ああ、なるほど……って、それちょっとしたアイドルライブのようなもんじゃん！ それに当選したってこと!？」

「そうなんだよ！ 応募しても門が狭くてさ、なかなかまず抽選で選ばれることは少ないんだけどさあ……」

「で、今回、その抽選で受かったちゃいました」

小恋ちゃんがその豊満な胸を張ってどうだとアピールした。

「す……すげえ」

「すごい運がよかったね、小恋ちゃん」

「けどさ、何でそんなところに応募を？」

「さつきも言った通り、ちよつとした思い出作りに貢献したくって

……それにせつかく音楽やってるわけだし、『オンエアコロシウム』は、そんな私達の夢の番組でもあるわけだから」

「確かになあ。あ、ほら、義之が好きなオレンジランチも、ここ出身の優勝者なんだぞ?」

「そうだったのか!?!」

「とまあ、それくらい音楽をやってる奴にしたら登竜門みたいな番組なんだ」

「それで、どうかな、2人共?」

「どうかなって?」

「よかったら、義之もななかも、明久君にも手伝ってほしいんだけど」
小恋ちゃんの言葉に僕達3人が顔を見合わせた。

確かにななかちゃんがボーカルをやれば優勝も夢じゃなさそうだな。しかし、ななかちゃんにはひとつ問題があったんだよね。

「でも、私人前で歌うの好きじゃないんだけどなあ」

そう。ななかちゃんは歌は上手なんだけど、あまり大勢の人の前で歌うことを好まないのだ。

「それもわかってる……」

「わかってて、お願いしてるの?」

「あう……だって、できればななかがいいんだもん」

「頼む! 白河がボーカル、義之がギター、明久がキーボードのポジション、是非!」

そうやって渉が直角に頭を下げてきた。相当出たいんだろうなあ。そんなこと言われたら、

「くすくす。しょうがないなく。付属最後の思い出、か……いいかもね」

「え? じゃ、ななか!」

「私も出るよ。それで、キーボードは明久君が、ギターが義之君でいいと思ってるから。2人が出るっていうならいいよ」

「え? 俺も?」

小恋ちゃんと渉の視線が僕達に向けられた。

「僕はもちろんいいよ。そういうのも楽しいだろうし、絶対思い出に

なるから。義之は？」

「え？ えつと……」

義之は未だ悩んでるのか、首を捻っていた。

「義之！ 頼む！ 俺達といい思い出作ろうぜ！」

「義之、お願い」

「……………よし、わかった。俺も出てみるか」

「やった——っ！」

小恋ちゃんが大喜びでななかちゃんに抱きついた。ななかちゃんも嬉しいのかお互いに抱き合う形になっていた。

「おおおおおおお、義之い！ ありがとな！ お前はやっぱり俺の心の友だ！」

「わかった！ わかったから抱きつくな！ キモイから！」

こうして、僕達はオンエアコロシウムに出場することが完全に決まったのだった。

第六十話

「そういえば明久君、まだ時間ある？」

「時間？　ちよつと遅めのデートでも大歓迎です」

放課後、練習を終えた僕達は帰路を歩いていた。ちなみに義之達は別方向へ。

なんでも、2人きりの邪魔しては悪いということ。流石にそこまで露骨に気を遣われても困るのだが。

「あはは。それもいいんだけどね……ちよつと、付き合っしてほしい所があるの」

「それは、別にいいけど。ちなみにどこへ？」

「ん、ちよつと」

それだけ言って特に答えも言わず、ななかちゃんは方向を変えていき、僕もそれについていった。

場所は変わり、どこかの病院へと着いた。

「病院？」

「うん、水越病院。今日ここに行くって、女の子と約束してたから」

「女の子？」

「うん、小日向ゆずちゃんっていうの」

「ゆずちゃんかあ……可愛い名前だね」

「うん。顔もすごく可愛いの♪」

「へえ……でも、僕も同伴でいいの？」

「うん。きつとおもしろいよ」

「おもしろい？」

何故におもしろいなんて言葉が出てくるのだろうか。可愛いとか微笑ましいとかならわかるけど。

病院に入院している子がそんな面白そうなものを持つてるものなのだろうか。

それから病院へ入り、ななかちゃんのいうゆずちゃんの病室へと向かった。

「こつちこつち」

ななかちゃんが笑顔で手招きする。どうやらここが噂のゆずちゃん病室のようだ。

それも、個室だった。扉には『小日向ゆず』という札があった。普通患者なら共同スペースに思うのだけれど。

金持ちなのか。それほど重い病気なのか……どうなんだろう。

「だれだー?」

中から幼くも態度の大きそうな女の子の声が聞こえてきた。

「私だよ、ななか」

「ななかっ!」

それからななかちゃんが扉を開けると、

「ななか——っ!」

ドゴツ!

「ぶふう!」

突然、腹部に衝撃が来た。それは、葉月ちゃんと同等かそれ以上の威力だった。

「ゆずちゃん、私こつち」

「お? だれだ、このひとり?」

ゆずちゃんらしい小さな女の子が顔を上げてきた。

見た目5・6歳くらいだろうか。丸っこい顔に大きな赤いリボン

……ななかちゃんの言う通りとても可愛い子だった。

「こ、こんにちは……」

「こんにちは——っ!」

ゆずちゃんが僕から離れると元気よく挨拶してきた。

「それと、ななか——! きてくれたのか——!」

「うん、約束だもんね」

「やった——!」

そして、今度はななかちゃんに抱きつこうとして、
ドタツ!

途中で転んだ。

「ノオオオオオオオ!」

なんてことだ! 元気だからといってもこの子は患者さんだ!
転んで何かの病気が悪化なんてあったらどうしよう!

「だ、大丈夫、ゆずちゃん!」

「あははははははは!」

「つて、笑ってる?」

えっと……入院患者、ですよ?

「あ、えっと……紹介するね。私のお友達の小日向ゆずちゃんです」

「ゆずです!」

「それで、こちらは吉井明久君」

「よろしくね、ゆずちゃん」

「よろしくな! あきぴたくん!」

「あきひさです」

「あちきた!」

「あ・き・ひ・さ」

「アッキー!」

「あはは……もうそれでいいです」

のっけから思ったのだが、なんというか……ものすごい元気な子供
だった。

入院している理由が全くわからない。

「なーなー、ななか」

「なあに?」

「アレやってー、アレー」

「アレー?」

「ななかちゃん、アレって?」

「じゃ、ちよつとだけだよー」

「うわ——いっ!」

僕の言葉に答えず、ななかちゃんはゆずちゃんの傍に寄った。

「アツキーはなにもしないのか？」

「うーん、明久君は歌はうたわないかな？」

「ふーん。いがいとやくにたたないなー」

「そんなあ!？」

まさか、子供に役立たずと言われるとは思わなかった。

だが、流石にここまで言われて引き下がったら男がすたるというものだ。

考える。今僕がここでできる事と言えば？

「……………よし、今からその窓からヒーローばりに飛んでやろうじゃないか！」

「お———!」

「つて、明久君!?! ここ2階なんだけど!?!」

「大丈夫! 散々FFF団との追いかけてここで鍛えられたんだ! 今更2階程度ならなんてことない!」

「ああ、そういえばそうだったね……………じゃなくて!」

ななちちゃんが微妙な表情を浮かべて呟いた後ツツコむが、構うか。

「アツキー! はやくはやくー!」

ゆずちゃんが期待に満ちた眼で僕を見つめた。ここまで期待されて下がる僕じゃない。

僕は病室の窓を開けて、窓から少し離れてその場でぴよんぴよんと準備運動をして、

「いぎー 自由の彼方へ!」

僕は病室の窓から跳躍した。そして、ヒーローっぽく4回転3回捻りを入れて飛び降りた。

「すげ———っ!」

ゆずちゃんが僕の跳躍を見て大喜びだった。いやいや、FFF団で培ったこの身体能力で子供を喜ばすことができたのだから僕としても喜ばしい限りだ。

……………もちろん、あまりにも馬鹿げた行動だったので、このパフォーマンスがすぐに病院にバレてゆずちゃん担当の看護師にこっぴどく

怒られました。

「にしても、面白い子だったな〜」

「でしょ。すごく良い子なんだ」

ななちゃんもゆずちゃんの事を思い出す度に笑顔を浮かべている。

本当に見てて勝手に笑顔が浮かんでくるくらい可愛い子だった。

「私ね、学校で嫌なこととかあると、すぐにゆずちゃんに会いに行くの。そうすると、帰る頃にはすっかり嫌な顔して、笑っていられるんだよ。もう、ゆずちゃんから毎回たっぷりパワーもらってるんだ」

「うん。それはよくわかるよ」

僕自身、あの子に会って滅茶苦茶活き活きしているのが自分でもわかる。

まさに天使と言っても過言ではない子だった。

「よかった。まだ一緒に行く?」

「もちろん。すごい楽しいし」

それから僕達が別れる地点に行くまでずっとゆずちゃんの話で持ちきりだった。

「ふう……本当に楽しかったなあ」

僕はななちゃんと別れてからも今日あったことを頭の中に思い浮かべていた。

ゆずちゃんか……。あんだだけ元気なのにどうして病院なんかで入院しているんだろうかって疑問は今でも残っているけど、良い子だなとつくづく思う。

入院しているにも関わらず、ずっと明るい空気を醸し出して周囲の人達までも明るくしてくれる、なんていうか……太陽のような子だった。

「……また、行こうかな。そしたら、今度はオンエアコロシアムの事も教えてあげようかな」

「そうだ。今度行ったらオンエアコロシアムに出場する事を報告してあげよう。」

病院ならテレビもあるし、ラジオだって許してくれるかもしれない。

彼女には是非僕達の演奏を聞いてほしい。そう思ったら俄然やる気が出てきた。

ああいう子にはなんとでもいい曲を聞かせてあげたいって気になるよ。そうやる気を胸に秘めながら帰路を歩いた時だった。

ド——ン!!

「な、何っ!？」

いきなりものすごい音が響いてきた。結構距離はあると思うが、それでもここまでハッキリ聞こえてくるくらいの音に僅かだが、衝撃も伝わってきた。

何かが少し距離のある所で思いっきり衝突したようだ。僕は気になつて急いで爆音の発生した場所へ向かって駆け出していた。

少し走ると、桜公園の近くの交差点ですごい人ごみがあった。何やらパトカーの音も聞こえるけど、ここからじゃよく見えない。

「あ、あの……何があったんですか?」

気になつて僕は一番後ろにいた人に何があったのかを尋ねた。

「ああ……車が塀を越えて家に衝突しちゃったらしいんだよ」

「家に衝突!?! その家の人は!?」

「いや……幸い、家の人は留守だったから、家が半壊した以外は大事な
いよ」

「そ、そうですか……」

本当に不幸中の幸いだった。いや、家が半壊したんだから不幸以外のなんでもないけど、もし人がいたらと思うと交通事故どころの騒ぎ

じやなかっただろう。

僕はほっとすると同時に家に衝突した車があるだろう方向を向くと、妙なものが目に入った。

「ん？」

人ごみの中に何やらひらひら金色に輝くものが見えた。それと同時に由夢ちゃんの誕生日の日にムツツリーニが言っていた言葉を思い出さいた。

『……全くだ。共通点と言えば、どれもこれもが原因不明ということだけ。中には小さな少女を目撃した例もあるが、それが本当のことかどうか今のところ不明だ』

『金髪でリボンをした少女……手がかりはそれだけだ』

金髪……そして、よく見ればリボンもしている。間違いない……。あの人がムツツリーニの言っていた人だ。

う……人ごみが邪魔で顔がよく見えない。どうにか僕は一瞬でも見ようと人ごみを必死にかきわけようとした。

そして、人ごみの中に入ったところで金髪の人が横を向いてその顔が見えた。

『……え？』

そして、眼を疑った。何故なら、ムツツリーニが言っていた噂の金髪の人が……まさか、

「さくら……さん？」

さくらさんだった……。なんで、あの人がこんな所にいるんだろう？

「うわっ!？」

あまりに突然の出来事にぼーっとしたところに人ごみが動いて僕はバランスを崩しそうになり、急いで人ごみから外に出た。

それから慌ててまた人ごみへ視線を戻すが、もうさくらさんらしい人はどこにも見当たらなかった。

「……………何で、さくらさんが？」

わからないことだらけだった。なんでさくらさんがここにいるのか。しかもどうして、さくらさんがあんなにも……悲しそうで、苦し

そんな表情をしていたのか、全くわからなかった。

第六十一話

「……………」

僕は昨日からあることが気になって仕方がなかった。

何が気になるかって言うと、夕べの事故の事だ。車が一軒の家に派手に突っ込んだやつで、幸いその家の人は留守だったのでそこまで大事にはなっていなかった。

だからあの事故に関してはどうそこまで気にはしていなかった。

僕が本当に気になっていたのはその事故の現場にいた人だ。

芳乃さくらさん……。今じゃ僕らの保護者な人だ。あの事故現場にいたからって別に不思議でもないかもしれない。

さくらさんは忙しいって言ってたし……。会議以外にももしかしたら色んな場所を見回りに行ってただけかもしれないし。

そんなに変な事でもないと思うのに……。昨日からさくらさんの事が妙に気になる。

何故あの現場にいたのか……。そして、何で事故現場を見た時にあんな悲痛な表情を浮かべていたのだろうか。

あれは物が壊れて悲しいとかじゃなくて、なんていうか……。罪を感じているような感じだった。

「……………おい、あ……………」

今度会ったら確かめたいけど、最近のさくらさんは家にいる時間が極端に短くなってるからな。

そういえば、よく思い出してみたらさくらさんが家に帰る回数が少なくなってきたているのは年明けの……。それも事故が多発を始めてからだった気がする。

「あき……………」

あの事故とさくらさん……。ムツツリーニが聞いた噂の人が本当にさくらさんだっていうなら、この島で多発している事故とどういった関係があるんだろう。

さくらさんはなんでいつも事故現場にいるんだろう。

「おい、明久！」

「……え？」

「え？　じゃねえよ。お前、またミスってるぞ」

「え？　………あ」

しまった、忘れてた。今僕は音楽室でオンコロに向けてバンドの練習をしている最中だったじゃん。

朝っぱらから昨日の事が気になって全く集中していなかった。

「ご、ごめん………ついぼーっとして」

「はあ……もうミスったのこれで何度目だよ？　お前どうかしたの？　見てて滅茶苦茶悩んでるって顔してたが」

義之がギターを肩から外しながら聞いてきた。

悩んでるのはどうやらみんなに筒抜けのようだ。だけど、昨日のアレが何だったのかもわからないからあまり言わない方がいいだろう。

それに、義之もさくらさんの家族みたいなものだ。さくらさんの事がわかるまで余計な事は言わない方がいいだろう。

「いや、ごめん。昨日遅くまでゲームしてて、どうにも攻略しづらいダンジョンがあったからどう攻略したものかだったので頭いっぱい」

僕がそういうとみんながその場でコケた。

「おいおい……ゲームに熱中するのはわかるが、今はこっちの方に集中してくれよ。オンコロまでそこまで時間あるわけじゃねえんだからよ」

「あはは………本当、ごめんって」

「頼むぞ、明久」

「ははは………」

僕は乾いた笑いを浮かべ、再びオンコロに向けて練習を始めた。

だが、やはりいつまでたっても昨日の事が頭から離れず、今日の練習は失敗の連続だった。

「はあ……」

「元氣出して、明久君。たまにはああいう日もあるよ」

帰り道のこと……。僕は校門を出た瞬間から溜息の連続だった。

結局今日の練習は思うようにいかず、更に失敗の連続で渉にかなり怒られてしまった。

義之や小恋ちゃんは何かあったんじゃないかと心配してくれたけど、あの事はやはりまだ言うわけにはいかないだろう。

「ねえ、やっぱり何かあったんじゃないの？」

「うう……」

いくら彼女とはいえ、ななかちゃんにも簡単に教えられないんだよなあ。

僕もさくらさんがどうしてあそこにいたのか理由がまだよくわからないし。やっぱり言うわけにはいかないよね。

だから、どうにか無理やりにも誤魔化せれば……。

「ああ、昨日夜——」

「嘘はもういいから」

「——遅くまでゲーム……まだ何も言ってないよね？」

「隠しても明久君の場合、表情に全部出てるんだもん。自分は今絶賛お悩み中ですって」

「うう……そんなに表情に出してる？」

「うん。子供でもわかるくらい」

そんなに悩みが顔に出ているのか……。

「私にも言えないの？」

ななかちゃんが悲しそうな瞳で僕を見る。

正直、ものすごい罪悪感がこみ上げてくるけど、やっぱりアレの事は今は僕の胸の中にしまっておく事にしよう。

「ごめん……今は自分で考えてみたいから。ちょっと色々あるかもしれないけど、近いうちに答え見つけるから」

「……………そっか。じゃあ今は待つてあげる」

「ははは、ありがと」

正直、答えがいつ見つかるかなんてわからないけど……きつと探し

出してみせる。

「じゃあ、今日も行くか」

「今日も? ……あ、ひよっとしてゆずちゃんのこと?」

「うん♪」

「いいかもね。あの子と会えば少しは道開けそうだし」

今のは僕の心からの言葉だ。あの子の前だと悩むのが馬鹿らしいって考えになる。

今の僕の心も洗ってくれるかもしれないし、もしかしたら何か答えを見つけてきつかけになるかもしれない。

「じゃあ、行こっか」

「うん」

僕達2人は手を繋ぎ、水越病院へと足を運んでいった。

「ゆずちゃん、今日も飛び出してくるかなあ?」

「あはは、どうかな」

初対面の時から彼女の特攻で僕の胃袋が一瞬ピンチになったくらいだからなあ。

また挨拶と一緒にドカンなんて事があってもおかしくない気がする。

そんな予感を頭に浮かべた時だった。

「ですから、その遊びはダメだって言ったでしょうお父さん!」

「え?」

「何だろ?」

ゆずちゃんのいる病室から誰かが怒鳴る声が聞こえてきた。

僕とななかちゃんは互いを見合ってそろりと扉をちよこつと開けて中を覗いた。

「何度言ったらわかるんですか!」

「いや、本当にすいません」

中では看護師に怒られて頭を下げている青年がいた。
見た感じ、すごく人は良さそうだな。

「あ——！——。 ななか——っ！」

大人2人の間からこっちに気づいたのか、ゆずちゃんが元気よく飛び出してきた。

「こ、こんにちは」

「こんにちは——！」

相変わらず元気なぐい挨拶だ。

「ん？ あれ、ななかちゃん」

「どうも、えつと……お邪魔でしたか？」

「あ、いえいえ」

「ところで、一体どうしたんですか？」

「いや、それがね……」

「まったく。部屋ではバスケもバレーボールも野球もしないでくださいよー！」

「はい」

全部球技じゃないですかい。なるほど……よく見れば窓ガラスも割れている。

この状況から予想するに、病室でゆずちゃんとかこの男の人が野球か何かをして窓ガラスを割ってしまったということか。

それに、看護師さんの言葉から察するに、結構な回数やってるっぽい。

ゆずちゃん、結構やんちゃな子に育ちそうだ。それからも何十分か看護師の説教が続いたのだった。

「いや、まいったまいった」

「あの、室内での球技は大変危険なのではありませんか？」

「いや、そうなんだけどね。ゆずに野球セット買ったもんだから、使い方を教えて。……ていうか、君は一体？」

「ああ、そういえば明久君とは初めてでしたね。吉井明久君です。この間、初めて一緒にお見舞いに来たんですよ」

「ああ、君か！ 病室から飛び降りたスーパヒーローのおもしろい

馬鹿なお兄ちゃんことアツキー君というのは！」

「こつちでも馬鹿なお兄ちゃん呼ばわり!? そして僕は明久です！」
まさかこつちの子供にまで馬鹿なお兄ちゃん呼ばわりされるとは。

「ああ、失敬失敬」

「で、こちらがゆずちゃんのお父さんの慎さん」

「あ、お父さんだったんだ。どうも、初めまして」

「初めまして、小日向慎と言います。なんか、うちのゆずがお世話になつちやっただみたくて」

「いえ、そんな大した事なんてしてませんよ」

「それに、ななかちゃんもいつも悪いね。遊びに来てくれて」

「ううん、ゆずちゃんと会うのすごく楽しいですから」

「やった——！」

ななかちゃんの言葉を受けてゆずちゃんが大喜びだった。

「さ、どうぞ。立ちっぱなしで話すのもなんだし」

慎さんに案内され、病室のパイプ椅子に座る。ゆずちゃんも大人しくベッドの中へと移動した。

「今日は、朝からずっと父ちゃんがいてくれたんだ！」

「そうなの？ よかったねー、ゆずちゃん」

「うん！」

「仕事がちょうどキリがよかったんで、それで朝からね」

「へ〜……」

どんな仕事をしてる人なのかな？ ジャージを着ているのを見ると、工場に務めているイメージが浮かんでくるなあ。

なんてことを考えてると、

「とーちゃん、プリン！」

「お、そうだそうだ」

ゆずちゃんが言うのと慎さんが思い出したように冷蔵庫を探つてプリンを出した。

その時に冷蔵庫の中身が見えたが、えらいたくさんプリンが入っていた。以前来た時は飲み物くらいしか入ってなかったけど。

「いや〜、ななかちゃん達が来るからって、置いといてくれて頼まれ

「たんですよ」

「そう言って僕達にひとつずつプリンを手渡してくれる。」

「すみません」

「ありがとうございます。では、いただき……」

「じ——」

「プリンを口に入れようとしたところで、ゆずちゃんが僕のプリンを凝視していた。」

「……………」

「じ——」

「……ゆずちゃん、よだれ出ちゃってるよ」

「え？ わ、本当だ！ ゆず、よだれ拭きなさい」

「あ、らじゃ」

「ゆずちゃんが慌てて手の甲でよだれを拭う。」

「えっと、ゆずちゃんは食べないの？」

「うー……ゆず、もうそれ3つもたべたから、ダメなんだー」

「お腹壊すといけないからな」

「うん。だから、きにせずどんどんたべれ！」

「そ、そう……？」

「とは言われたものの。」

「じ——」

「視線が気になって滅茶苦茶食べづらいんですけど。」

「はあ、物書きだったんですか」

「いや、物書きと言っても、雑誌に小さなコラムを載せる程度だけだね」

「それでもすごいじゃないですか。慎さんの書いたものが出るんですから。今度チェックしてみようかな」

「ははは、どうも」

「なるほど。会う時間が朝だったり夕方だったり昼だったりと時間帯がバラバラなのがちよつと変だなって思ったら、そういう事だった

わけね。

それで、今日は仕事のキリがついたから朝からいてあげられたわけだ。

「つぎ、ななかー」

「よーし、じゃあワンちゃんを描いてあげちゃおうかなあ〜」

「ワンちゃん!」

向こうではゆずちゃんとななかちゃんが絵かきの描き合いをしていた。

ゆずちゃんの横の机に画用紙いっぱい書かれた色とりどりの動物達がたくさんあった。

「なあ、ななかー」

「なあに?」

「アツキーとこいびとどうしなのか?」

——パキッ

ななかちゃんがクレヨンの先を割った。なんてわかりやすいリアクション。

「え? な、なに、急に」

「だって、いつもはなしてたにいちちゃんって、アツキーのことだろう?」

「わ、わわわ、ゆずちゃんっ」

ななかちゃんが慌ててゆずちゃんの口を塞ごうとしたが、もう聞こえてしまった。

「そういえば、そうだね。ななかちゃん、いつも誰かの話をしていただけ、アレ明久君の事でしょ?」

「や、やめてください、慎さんまで!」

一体何の話をしていたんだろう? ちよつと気になる。

「なー、アツキーは、ななかのこいびとー?」

「ゆ、ゆずちゃんっ」

「うん、まあね。えっと、ゆずちゃんって恋人ってのが何か知ってるかな?」

「すきなひとー」

「まあ、そうだね。僕は、ななかちゃんのことが好きで、ななかちゃんも僕を好きでいてくれるから、恋人。ね？」

「わわっ……」

何だかななかちゃんが茹で蛸みたい我真っ赤になっていった。

「ハハハハ！ 青春だねえ！ うん、本当にななかちゃんの言った通りの人だよ！」

「う〜……明久君、恋人になってから素でものすごい事言うところに磨きがかかってるよ」

「む〜……しかたないな〜」

「ん？ 何が仕方がないの？」

「なんでもなーい！ あれ？ ななか、ぜんぶまっかつかになってるぞ？ おひさまっ！」

「え？ つでえ!? ななかちゃんが真っ赤になってる！ 何事っ!？」

「あ……あう……はわわ」

「大丈夫、ななかちゃん!? って、熱う！ 真面目に熱いんですけど！

ななかちゃん、今表面温度何度!? 軽くお湯を沸かせそうなくらい熱いよ!？」

「あはははは、マツカチンだな!？」

「あうう」

「ななかちゃん、しつかりしてえ！」

「あははは、ななかちゃんの照れてる姿は初めて見るけど、可愛いねー」

「ななか、おもしろーい!？」

「呑気な事言っでないで、お2人も助けてくださいよ!？」

それからななかちゃんの表面温度を下げるのに随分と時間をロスしてしまい、ゆずちゃん達をまともにお話できたのはたったの30分程度だった。

あれからななかちゃんの表面温度をどうにか下げ、話題を切り替え

ることでもうにか通常状態に戻せたが、病室から出た時はフラフラ状態だった。

なので僕はなかなかちゃんを家まで送っていき、少し遅めの帰路を歩いていた。

結構遅くなっちゃったな。多分もう夕飯を食べ始めてる時間だろう。ちよつと急いでいこうかなと思つた時だった。

「……………」

「ん？」

桜公園の方で、誰かの話し声が聞こえてきた。

「誰だろう？」

こんな時間に散歩……は、そこまで珍しくもないか。でも、何だか聞き覚えのある声に思えたんだけど。

「……………気になるなあ」

大した事はないかもしれない。でも、僕の勘があそこに行けと言つてる。

僕は自分の勘に従つて公園へと入つていった。

「……………変わつてないね」

「さくら、元氣そうで何より」

「え？」

あれつて、アイシアちゃんとさくらさん？

珍しい組み合わせだった。アイシアちゃん……クリパ以来見てなかったけど、どうしてここに。

それと、何でさくらさんとアイシアちゃんがこんな所で？ ていうか、2人共知り合いつばいんだけど。

「それで、話つて何？」

「……………多分、さくらの予想している通りの事だよ」

対峙する2人から何やら言葉じゃ言い表せない雰囲気漂う。喧嘩……とは違うみたいだけど、少なくともプラス方面のものではないと思う。

「……………何のことかな？」

「さくら」

アイシアちゃんが咎めるような声を出す。

「……………」

「……初音島の枯れない桜。あの桜を咲かせたのは、さくらなんでもしよ？」

「……………」

え？ 今アイシアちゃんは何て言った？

咲かした？ さくらさんが、あの桜を？ というか、あの桜は人の

手で咲かせたものだったのか？

僕が軽く混乱している最中で、

「……うん、そうだよ。僕が、咲かした」

さくらさんが観念したように呟いた。

「人の想いの力を集めて願いを叶える魔法の桜。魔法は使い方を間違ったら危険なんだ。それをあたしに教えてくれたのはさくらじゃない。なのに、どうして？」

「……それは」

あの2人の話はイマイチよくわからないけど、ひとつ納得できたことがある。

魔法の桜……。人の願いを叶える枯れない桜の木……。アレは伝説ではなく、ただの実話。

アレは本当に魔法の木だったんだ。ちよつと考えれば当たり前的事だったんだ。一年中枯れない桜なんて、魔法以外にどう説明しろってんだよ。

クリパの時にあんな経験しておきながらそんな結論に至れなかった自分を殴りたい気分だよ。

「……明久君や、一緒にいた……。あの、義之君って子の事も」

「っ！」

アイシアちゃんの言葉に、さくらさんが動揺した。

「……そっか、全部わかってるんだね」

「……うん」

「そう。全部アイシアの予想通りだよ。僕は、義之君のために桜を咲かせた」

義之の、ため？ どういう事だろうか？

「ううん、違うか。正確には僕自身のため。僕の我が儘のために枯れない桜を復活させたんだ」

「……どうして、そんな事をしたの？ さくらは、あの桜の危険性を知ってるのに、どうしてそんな！」

アイシアちゃんのそのルビーの瞳が怒りを表現するように更に赤みが増していた。

「……寂しかったんだよ」

「え？」

「全部、僕のエゴ。そして言い訳でしかないんだけどね……寂しかったんだ」

さくらさんが、見たこともないような寂しい、そして弱々しい笑顔を浮かべた。

「あの後……アイシアが自分の存在と引換に桜を枯らした後で、僕はひとりアメリカに渡ったんだ。そして、ずっと魔法の桜の研究をしていた」

「………」

「願えば叶う。祈れば通じる……ひとりひとりの力は足りなくても、たくさんの心があれば、みんなハッピーになれる。あの時点ではゆめ物語だったけど、いつかその夢を叶えられるかもしれない。全ての人が幸せになる世界は無理だろうけど、困っている人が笑顔になれる世界はいつか作れるはず。そんな夢を見て、あの枯れない桜を改良するための研究をずっとしていたんだ」

「……さくら」

「……でもね、そうやって僕がこの桜の研究をしてる間にも、外の世界では時間がどんどん流れちゃって……急にね、寂しくなったんだ」

そう言ったさくらさんの背中は何もすごく小さく感じた。

「僕の大好きだった人達は、どんどん結婚して、子供を作って幸せになっていくのに……僕は、一体いつまで独りぼっちでいなきやならないんだろうって。そんな風に思ってしまったんだ」

「………」

「だから、初音島に戻ってきて魔法の桜を植えた。そして、願った。僕にも、家族が欲しいですって。『もしかしたらあったかもしれない現在の、もうひとつの可能性を見せてください』って。そう願ったの」
「……………」

そうか……色々納得がいったよ。

クリパの日、過去の……さくらさんの思い出の世界でもうひとりのさくらさんの言っていた言葉。今まで知らなかったさくらさんの過去。さくらさんの願い。

そして……何でさくらさんがあの事故現場にいたのか。大体予想がついてきた。さくらさんが言っていた願い……その結晶が、

「その願いから生まれたのが、あの……明久君の友達のもの——」

「そう。義之君」

「……………」

そうか。さくらさんはただ、守りたかったんだ。

ようやくできた、自分の心を埋めてくれた家族を……。そして、その周りの人達を。けど、

「でも、それは……いけないこと。だって、義之君は本来この世界に存在してはいけないものだから。それに、明久君達も」

まさか、ここで僕の名前まで出るとは思わなかった。そうだ。考えてみれば当然だ。

さくらさんの願いによって生まれた義之でさえ存在してはいけないと世界に認定されているのに、異世界出身の僕達なら尚更だ。

「うん、だから義之君達は本来、あの桜の魔法が届く範囲でしか存在できない。桜の消滅。それはつまり、義之君達の消滅」

その言葉には衝撃を受けた。この島でしか存在を維持できない。

でも、この前のスキーはどうなんだ？ あそこは初音島からかなり離れてたと思うけど……いや、違う。確かスキーに行く前に僕らはさくらさんから……。

『義之君、明久君。はい、これ』

『ん？ 何ですか、これ？』

『これはお守り。合宿に行っても、何事もなく過ごせますようにって』

『お守りですか』

『でも、ひとつ約束。それは決して外しちゃいけないよ。絶対、だよ』
『はい』

『大事にします』

あのお守り……あれは恐らく、あの桜の一部が埋め込まれてあったんだろう。だから僕達の存在が揺らぐことはなかったんだ。

まさにさくらさんからのお守りだったってわけか。

「だからね、アイシア。僕はこの桜を枯らせるわけにはいかないの」

さくらさんは決意を込めた眼でアイシアちゃんを見る。

「でも、それが、この枯れない桜が初音島のたくさんの人に迷惑をかけるんだよ！ さくらだってわかってることでしょ！ この桜は完璧じゃない。このまま放っておくと大変な事になるって！」

「……………」

「……最近の初音島で起きている事件や事故。全部、この桜が無差別に人の願いを叶えた結果なんですよ？ 良い願いも、悪い願いも。この桜が無作為にその願いを叶えてしまう。だから、初音島ではおかしな事件や事故が続発している。そういうことなんですよ？」

「……………」

なるほど……………本来なら純粋な願いだけを叶えるはずが、悪い願いさえも簡単に叶えてしまうようになってたってわけか。

だからその悪い願いが現実には作用して、様々な事故を引き起こしちゃったってわけか。

もしこの世界にFFF団が来ていたら、今頃死人なんか急増していたかもしれない。そんな恐ろしい予想が頭に浮かんだ。

「桜は急速にその力を大きくしている。もう、僕だけじゃ制御しきれなくなってきたている」

「だったら……………」

「ごめんね、アイシア」

「え？」

「君に、偉そうな事を言っておいて……………結局、僕も同じ過ちを犯している。そのために、君を……………ううん、みんなを傷つけてしまってる。義

之君も、音姫ちゃんも、由夢ちゃんも、明久君も……みんな」

「……………」

「でも、大丈夫だよ。桜は、枯らせない。ううん、義之君達は、僕が守る」

「でも、それじゃ——」

「もちろん、桜の暴走も放っておかないよ。方法はあったんだ。最初から。ただ、僕が弱くて、決心がつかなかっただけで」

「方法って……？」

「桜との融合。枯れない桜の欠陥を埋めるために僕が桜とひとつになる」

その言葉に衝撃を受けた。それって、さくらさんが……。

「でも、それじゃあさくらはっ！」

「自分で撒いたタネだからね。自分でケリをつけないと」

「……………」

「そんな顔しないでしょ、アイシア。僕は、幸せだったんだ。って、たくさんの人に迷惑をかけたのに、こんな事いっちゃダメかな」

「……………」

「それでも、やっぱり僕は幸せだった。義之君と出会えて、本当に毎日が楽しくて。だから、自分のこの選択に絶対後悔なんてしない」

嘘だと叫びたかった。決心してるのに、さくらさんの瞳にはまだ悲しみが拭えてなかった。

本当はずっと一緒にいたいはずじゃないのか。そう思ってるはずなのに、彼女は桜と一体になる事を選んだ。

「準備には、もう少し時間がかかるけど、枯れない桜は僕が、必ずなんとかするから」

そう言って、さくらさんはその場を去っていった。

僕は、そんな中でただ呆然と空を眺めていただけだった。

何もできない。僕は魔法使いじゃない……。それでも、何かできるんじゃないのかって思いたい。

思いたいけど……結局のところ僕なんて、こんな時に何の役にも立てない、何も言えない、ただのバカだから。

「ああ、寒……」

こんな大事な時なのに、涙を流す事しかできないのかよ！

第六十二話

「♪~~~~♪~~~~♪~~~~」
「……………」

今日も僕達は音楽室にてオンコロに向けての練習を行っていた。みんな回数練習しているだけあって上達は早い。……ただひとりを除いて。

「っ！ またか明久！ もうこれで何回目だ！」

「ご、ごめん……」

「大体お前、昨日から何か変だぞ？ そんなで何度も何度もバンド失敗……お前、やる気あるのか？」

僕がもう何回目かわからない失敗に耐えられなかったのか、渉が叱りつけてきた。

「ごめん……」

「ごめんじゃねえよ、お前今日は一段と変だぞ。学校に遅刻、授業における珍回答も、それに俺達の話も全然聞いてねえ。なんていうかもう煮え切らねえにも程があんだよ！」

それから渉は僕の胸ぐらを掴んでくる。

「一体お前昨日からどうしたんだよ！ 今日のお前明らかに痛いって顔してるぞ！ お前に何があったんだよ！」

「渉、落ち着け！」

すごい剣幕で迫ってくる板橋君を義之が横から手を入れて力いっぱい引き離してから僕をじっと見た。

「明久……涉じゃねえが、お前の今の顔を見たら俺だって色々言いたくもなるぞ。お前一体どうしたんだよ？」

義之はただ純粹に僕の事を心配してまっすぐ僕の顔を見た。

でも、今の僕にみんなの……特に義之の顔をまっすぐ見ることはできなかつた。だって、知ってしまったから。

昨日の夜……枯れない桜の事、さくらさんの事、そして……義之の事を知ってしまったから。

ただでさえ枯れない桜の事を理解するだけで手一杯だつていうのに、そこに更に追い打ちをかけるようにさくらの事や義之の事が頭から離れられなくて、頭混乱して、もう何をどうすればいいのか全然わからない。

「……………ごめん、言えない」

それだけしか言えなかった。

もちろん、そんな言葉にみんなが納得するはずもなく、

「ふざけるなよ、テメエー！　ここまで悩んでおいて何で友達の俺達には話せないんだ!？　それとも何だ!？　違うつていうのか!？」

「お、落ち着いて渉君!」

「抑えろ、渉!」

渉が激昂して掴みかかろうとしたところを義之と小恋ちゃんが止めた。

渉が怒るのは当然だと思う。僕だって自分のような態度を取る友達がいたらきつと怒っていただろうさ。

でも……いくら君達でも、今回ばかりはこの事を簡単に話すわけにはいかないんだ。

もし枯れない桜がこの島に悪影響を及ぼしているのを知ればあの桜をどうにかしようとして行動するだろう。

でも、桜を枯らせば、義之と僕達の存在がこの世界から完全に消えてなくなってしまう。

僕達だけならまだいいよ。例えこの世界から消えてもあの地獄ばかりの世界に戻る程度で済むだろうし。

でも……さくらさんの願いによってこの世に存在を確立させた義之は？

元々義之はこの世界に存在するはずのない人間。僕達のように異世界から来た人間でもない。

もし義之がこの世界から消えたら後はどうなるの？　僕達のように別に別の世界に行っちゃおうの？

例え消えても生きていればまだ僕も義之達に事情を話して桜を枯らそうとする決心をつけていたかもしれない。

けど、もしそうじゃなかったら？ 義之の存在がどこにも属することできないとなったら？

そんなの嫌に決まってる！ 異世界に飛ばされるならまだしも、その存在自体がなかった事にされるなんて、そんなの嫌だよ！

そう思うと、あの桜を枯らすわけにはいかない。でも、このままじゃこの島の事故がどんどんエスカレートしていく。

今はまだ怪我人がいくら出られる程度で済んでるけど、さくらさん達の話だといつ死人が出るような事故が起きても不思議じゃないだろう。

だけど、だからと言って義之の存在を犠牲にしたくはない。

でもそうすれば今度はさくらさんがあの枯れない桜と一体になって暴走を止めようとしている。

どれを選んでも誰かが消えるような選択肢しかない。最悪も最悪な分岐点だった。

「……………っ」

ダメだ。考える程どうすればいいかわからなくなって、無力感が込み上がってくる。

「あ、明久君……………」

ななかちゃん心配そうな表情で僕に触れようとしてきたけど、

「……………ごめん！」

「あ……………」

僕はななかちゃんに触れられる前に身を翻し、荷物を手にして音楽室を後にした。

後ろで渉が叫ぶ声が聞こえたけど、正直止まりたくなかった。

今止まったら……………この感情を抑えられそうになかったから。

「はあ……はあ………」

学園から抜け出し、砂浜まで休憩も取らずに走った所為か、すごい息が上がっていた。

「はあ………本当、どうすればいいんだろう………」

僕は砂浜で座り込み、頭を落とす。

やっぱり無理だ。どれかを選べなんてできっこない。僕達が異世界から消えるだけなら喜んでこの島の人達を助けるよ。

だけど、なんで僕の周囲の誰かを犠牲にしなきゃならないんだよ。なんだってこんな事になっちゃったんだよ。

「はあ………いっそ、やり直してできないかな？」

願わくば、僕が生まれたのが枯れない桜が咲き乱れる前の時代に飛ばされたかった。

そうすれば、誰が生まれるかわからない状態だったなら、さくらさんの行動を止めることができたかもしれない。

そして、さくらさんの寂しさを埋められたかもしれない。こんな、悲しい選択を迫られずに済んだかもしれない。

「はあ……やり直したい。……ん？」

突然、横から僕と全く同じ台詞が聞こえてきた。ふと振り向いたら、

「あ、ブサイクゴリラ」

「殺すぞ、テメエ」

僕の横にいたのは雄二だった。

「何やってるの、こんな所で？」

「お前こそ、何やってんだよ。柄にもなく陰鬱な様になりやがって」

「はあ……雄二にはわかんないよ」

今の僕が、どれだけ苦しいかなんてわかりっこない。

「それで、雄二の方は何なの？ また霧島さんを怒らせて逃げてきたわけ？」

「し、仕方ねえだろ！ たかだか買い物に帰った時行きつけの店の看板娘と世間話しただけで婚姻届と釘バット手に持って追われたんだぞ！ どっちにしろ未来がない選択肢を迫られたんだぞ！ そんな

地獄の味がお前にわかるか!」

「……ああ、わかんないね。そんな程度の地獄」

「んだと!」

「だって……」

今僕が悩んでるのは……そんなものが可愛く見えるくらいなの、先のない選択肢だから。

「……お前、本当にどうした? 気味が悪いくらいだぞ。いつもの間の抜けた行動はどうした?」

「誰が間の抜けた行動をしたって?」

「お前だ、お前。文月での鉄人への攻撃、屋上での花火の爆発、覗き騒動……数えあげようとしたらキリがないだろ」

「それ、大半が雄二の考えで起きた事じゃないか」

まったく、自分の行動棚に上げといて他人の所為にするなっつもの。

「……お前、一体何があつた?」

「何が?」

「何が、じゃねえだろ。昨日から家でもずっと溜息ついてばつかじやねえか。そして今日は更に陰鬱な雰囲気纏って……これで何も無いと言われて信じる奴はお前以上のバカだ」

「何さ、それ」

「で、本当にどうしたんだ、お前?」

雄二がいつもと違って腹黒い感じのものでなく、本気で心配だという気持ちの籠った声で尋ねてきた。

こんな雄二を見るのは初めてかな。

けど、雄二でもあの事を話すことはできない。

下手すれば厨二病と言われて精神科を勧められるのがオチだ。相手にするだけ無駄だと何も言わずにその場を去ろうとした時だった。

「明久! ……ここにおつたか!」

「……秀吉?」

雄二を置いていこうとしたところで秀吉がこちらに向かって駆けつけてきた。

「……一体、どうしたの?」

「それはごっちの台詞じゃ。昨日からお主がどうにも様子がおかしいと思つたのじゃが、このまましばらく様子見しておこうかとしたところで桜内達がお主を探しておつたのを見かけての。どうやらお主、バンドの練習をすっぽかして行つたようじゃが、どうしたのじゃ?」
「う……………」

秀吉相手は、流石にマズイ。秀吉にはまず嘘なんて通じるはずがない。

「……………やはり何かあつたようじゃの」

「そ、それは……………」

困つた。どう誤魔化せばいいものか…………。

いくらなんでもこんな話は信じられないし…………いや、秀吉の事だ。この話が本当か嘘かなんてわかるだろう。

でも、わかつたところでどうしようもない事だし……………どう話したらいいものか。

「……………お前が悩んでいるのは、芳乃さくらの事か?」

「うわあ!?!」

どうしたらいいものかと考えたところで背後からムツツリーニが声をかけてきた。心臓に悪すぎだよ、今回に限っては。

「ムツツリーニ、それはどういう事じゃ?」

「……………ここ最近、芳乃さくらが学園にも自宅にも戻つた様子がない」

「確かに、学園でも家でも見かけんが……………」

「……………それが気になって調べたところ、今まで初音島で起こつた事故についての情報を見直し、再び聞き込みをかけたところ、目撃された少女というのが芳乃さくらだというのが判明した」

「何じゃと!?!」

「それ、マジなのか?」

「……………確信はないが、情報を総合するに、芳乃さくらが一番の有力候補だ」

そっか……………年始からほとんど姿を見なくなったと思つたら、情報をいっぱい集めていたんだね。

「……………驚いてる様子がない辺り、お前もそれを知つてたつて事か?」

「む、そうなのか、明久？」

「……………」

これは、もう無理かもね。流石にごまかせる状況じゃない。

「……………うん。実は、一昨日の夜に水越病院の近くで事故があったんだ」

「……………確かに、一昨日の夜、住宅地で車が家に衝突した事件があった」

「テレビでもやっておったのお。一歩間違えば死人が出てたところじゃ」

「幸い、その家の人は出かけてたらしいがな。で、それから？」

「うん……………その時、人ごみの中にさくらさんを見たんだ」

「……………それは確かか？」

「うん。すぐにまた人ごみに紛れちゃったけど、あの横顔は間違いなくさくらさんだったよ」

「では、ムツツリーニの仮説は正しかったという事じやの」

「だが、お前の持つてる情報はそれだけじゃねえ。だろ、明久？」

どうやら雄二には全てお見通しのようにだ。

「うん……………これまた昨日、水越病院から帰ろうとしたところで、桜公園を通った時だった……………」

そこから先は、衝撃的なものでしかなかった、あの時の出来事を全て話した。

ここまで細かく言えたことがないのではないかと言えるくらいに細かく、余すことなく昨日のあの光景、あの会話の事を全てみんなに話した。

「……………なるほど。この島の多くの事故は、その枯れない桜が無差別に人間の願いを聞き入れた所為で起こったものだ、と」

「そして、その桜を枯らしたところで、儂らはこの世界から消える。更に、芳乃学園長の願いから生まれた桜内は存在そのものが文字通り消

滅してしまおう」

「……何もしなくてもいずれこの島の住人の中から死人が出る可能性が高い。枯らせれば俺達が消える。芳乃さくらが桜と一体になってもハッピーエンドにはなれない」

「これまでもかというくらいバッドエンドしか見えんの。ようやくわかった……お主が悩んでいたのはこういう事だったのじゃな」

「……うん」

事の全てを知った雄二達は意外にもそれら全てを受け止めて考えてくれた。いた。

「いくらなんでも……こんなの、物理学者並みの頭を持っても答えなんて見つけられないよ。何でみんな助けるって答えにたどり着けないんだろう？ 何で、どれかひとつしか選べないんだろうなあ……もし神様なんて存在があるとしたら、殴ってやりたいよ」

そんな愚痴を言ったところで、何もならないのはわかってるけど、そう言えずにはいらなかった。

だけど、このままじゃ結局現状は変えられないまま。いつさくらさんが枯れない桜との融合を果たしてもおかしくないというのに、僕には何もできない。

考える時間すら与えてくれないのか……。なんて思っていると、

「明久……歯あ食いしばれ」

「へ？ 何を——ぐがあ!？」

僕の頬にかなり強い衝撃が伝わった。予想もできなかった突然の衝撃をまともに受けて、僕は受身もできずに地面に倒れこむ。

へ？ 今のは、何？ ふと顔を起こしてみると、拳を固く握り締めた雄二が立っていた。

今のは、こいつが殴ったのか？ 現実を理解すると頬の痛みが倍増した気がした。

「くくくつ！ いった——っ!?! 何すんだ、テメエ！」

「雄二！ お主、何のつもりじゃ!？」

「……くだらねえ」

「はっ。」

「正直、失望したって言ってんだよ。クズが」

いきなり殴りかかってきた上に、何を言ってるんだ。

「お前さ、そんなにお利口さんだったか？」

「な、何を……」

「お前さ、ここで平和に暮らした所為で随分と変わっちゃまったな。中学レベルだが少しずつ成績を上げ、品行方正になりかけ、更には恋人もできたと来た」

「だ、だから何なのさ……それは成長や進歩ってやつじゃないか。ていうか、何か話が……」

「何を頭で物事計ろうとしてんだ？ テメエのない頭で考えられる事なんてたかが知れてんだよ」

「んだと、テムエー！」

「よさんか、お主らは！」

秀吉が僕達の喧嘩を止めようとしてるけど、僕と雄二は睨み合ったままだった。

「テムエが何か考えたところで現状なんて変えられるわけねえだろ。俺達は魔法使いなんかじゃねえからな」

「んなもんわかってんだよ！ でも、だからって無視できるような事じゃないだろ！ どっちに転がっても、誰かがいなくなっちゃうんだぞ！ でも、何もわからないんだよ……僕なんて、無力な、ただのバカじゃないか！」

「いや、違うぜ明久」

「え？」

「お前は……救いようもない、宇宙の広さよりも理解できない至高のバカだ」

「んだと、ゴラア！」

「じゃからよさんか！」

こいつ、一発殴っておきたい！ 人が必死に全部救おうと考えてる時に！

「そんなバカが頭なんて使ってどうにかなるとでも思うのか？ お前ができることなんて、ただ捨て駒のように死地へ突っ走るだけじゃね

えか」

「この……散々死地へ追い込んだのは誰だと思って——ん？」

今、僕の中で何か引つかかったような気がした。

頭で考えるな……僕にできることはない……ただ捨て駒のように死地へ首を突っ込む……？」

「……あ」

わかった。今僕にできそうな事が。

「は……は、はは………はははははははははは！」

「あ、明久!?! お主、とうとうおかしくなったのか!?!」

「……急に高笑いしでした」

秀吉とムツツリーニが病人を見るような目で僕を見たけど、気にならない。

そうだ……簡単じゃないか。今の僕にできることは、現状を整理することじゃない。

この状況を打開する事を考えることもなく、魔法について考えることでもなく、僕にしかできない事。

「はははは………うん、そうだよ。何やってるんだろう、僕の頭なんかじゃ、大したことなんてできる筈なんてないのにな」

そう。今までこんなことがなかったか？

「島の住人が大変だから桜を枯らす？ 義之が消えるから枯らすのはやめましょう？ さくらさんがいなくなっちゃうから止めよう？

結局どれかしか選べない？ ふざけんなよ！ そんな理不尽な条件ばっか並べやがって何が願いを叶える桜だよ！」

「あ、明久？ 一体、何があつたのじゃ？」

「ん？ いや、なんでもないよ。ちよつと枯れない桜に対する怒りが爆発したの……自分のやるべき事が見えたから」

「……それは？」

「それは内緒。はあ……本当、何やってたんだらう僕。あんまりにも幸せだったから、随分と考え方がおバカさんになってたみたいだね」

「いや、それは元からじゃろ」

「……明久は元々取り返しがつかないバカ」

決してそんな言葉など聞こえない。

「ごめん、みんな。僕、行く所があるから」

「む、どこへ行くのじゃ？」

「ちよつとね！」

「……桜の事は？」

「それもあそこに行ってから考える！」

そうだ。そんなものなんか後回しにすればいい。枯れない桜がなんだ。どれかしか選べないからなんだ。

こうやって誰かがいなくなるかもしれない時に、僕は何をしていた？

そんなもんは決まってる！

「……そうだよ。アレがああだ、コレがああだとか関係ない。そんな結末が嫌なら、ただそうならないようにすればいいだけだ！」

そう、細かい事なんて考える事はしない。ただ感じるままに走っていけばいい。

僕には魔法も使えない、この状況でどれが一番なんて考える頭もない。でも、だからどうした？

今まで僕のない頭をフル回転させて状況を打開できたことがあったか？ 大切なものを守れたことがあったか？

違う。結果としてはどうにかなった事はあるが、それらは全てただ考えなしの行動によって出たものだ。

結局最後にものを言うのはいつも僕らの行動だけだった。

だから、今回も何も考えず、ただひたすら走っていく。障害があれば自分を使えばいい。

「だって……僕は、世界一のバカだもんね！」

不思議なことに、今までの不安や悲しみが嘘のように僕の中から消え去っていた。

僕は桜並木を通つてある所へと向かつて駆けていた。大切なものを、守りにいくために。

「はあ、はあ……絶対に、絶対に守る！ この島の人達も、義之も、さくらさんも！」

そうだ。この島で起きた事が枯れない桜の所為……どの選択をしようとも必ず誰かひとつは失つてしまう。

だけど、それがどうした！ 先に上げたもの、なにひとつとて失つてはならない大切なものなんだ！

全て守り抜いてみせる。そうなるようにしてみせる。

そうなる算段があるわけでもなければ、そうなる根拠だってどこにもない。

けれど、僕はどの選択も選ぶつもりなんてない。だって、どこにいつても幸せになる要素なんてないのだから。

そうだ。僕の周りにいる人達は皆幸せであるべきなんだ。そうでなきゃならないんだ。だから、誰かが消えなきゃいけない、悲しまなきゃいけない選択肢なんて糞喰らえだ！

『あれれ？ 一緒にいて気づかなかつた？ 彼女が無理に笑つてるつて感じたことはない？ 悩みを抱えてるようには？ わからない？ ずっと一緒に暮らしてきたんでしょ？』

以前、さくらさんの夢の世界の住人の昔の姿をしたさくらさんに言われた言葉を思い出す。

何故僕は気づけなかつたのだろうか。さくらさんは今までずっと苦しんできたつていうのに。

彼女は苦しいのに、それでも綺麗な笑顔を崩さず、影でずっと僕達を守ってくれていた。それなのに、僕はずっとそれに気づけなかつた。

気づけなかつたけど、時間はかかつたけど、ようやくさくらさんの苦しみを知る事ができたんだ。

全く望んだ展開でじゃないけど、それでもさくらさんの胸の内にある闇を見たんだ。その中身を見た今、もうただ守られるばかりじゃないられない。

さくらさん、あなたが僕達の事を大切に思ってくれてるのと同じように、僕達だってあなたの事が大切なんだ！

だから、だから……！

「はあ、はあ……！ 待って、ください……！」

「……へ？」

だから僕は……絶対に、あなたも、義之も、この島の人達も全員助けてみせる！

「はあ、はあ……！ 待って、ください……！」

「……へ？」

私は今日、この桜の致命的な欠陥を埋めるために一体になろうとしたところに、明久君が駆けつけてきた。

駆けつけてきた明久君は、相場の距離を全力で走ったのか、息も上がって、呼吸もすごく乱れていた。

なんで、ここに？ そして、どうしてそんな姿で、真剣な眼で僕を見ているの？

「……ようやく、会えましたよ、さくらさん……」

明久君は私をまっすぐ見てそう言った。

「さくらさん……ひとりで行くとうししないでください」

「っ!？」

突然の言葉に驚く事しかできなかった。

明久君は、僕がこれから何をしようとしてるのかを知ってるの？

「……実は、聞いちゃったんですよ、昨日……さくらさんとアイシアちゃんが話していたのを……。この島で起きてる事故の事、枯れない桜の事、そして……僕達の事も」

……そうか。聞いちゃったんだね。

「そっか……もう全部知ってるんだね。最初に言っておくと、ごめんなさい。元はと言えば、全部僕の所為なんだ」

そう、全部僕の所為。こうなる事を知っていながら、それでも僕は過ちを犯してしまったんだ。

「ちよつと長くなるけど、少しお話に付き合ってくれる？」
「……………」

明久君は黙って僕を見ていた。真剣に僕の話に耳を傾けてくれるみたい。

僕はそのまま昔話を始める。

「昔もね、ここに枯れない桜が咲いていたんだ。それも、本当に人の願いを叶える力があつたんだ。正真正銘の魔法の木。人が人を大切に想う力を集めて、困ってる人のために奇跡を起こす。願えば叶う。祈れば通じる……ひとりひとりの力は足りなくても、たくさん心があれば、みんなハッピーになれる。そんな夢みたいな桜の木があつたの。でもね、その桜は枯れちゃった。……ううん、枯らしちゃった人がいたんだ」

そう。あの時は、それが正しかったからと、桜を枯らしたんだ。

「その桜の木にはね、致命的な欠陥があつたんだ。だから、枯らさないといけなかつた」

確かに純粋な願いを叶えてくれる木ではあつた。……けれど、その力が間違つた方向に働いてしまった。

だから、あの時はそれが正しい選択だと桜を枯らした。

「そもそも、そんな力なんて間違つてるのかもしれない。願えば叶う世界なんて、夢物語だもんね。でも、僕はそんな夢があつてもいいって思った。世の中には本当に困ってる人がいるから、そんな人達の力になればいいって。欠陥を直せば、ちゃんと正しく動作すれば、きつとみんな幸せになれると、そう思つたんだ」

あの時は、本当にそうなれたらと思つた。

だから、僕はアメリカに行つてずっと枯れない桜の研究を進めていたんだ。

「本当は、いけない事だつてわかつてたんだ。アメリカで作つたこの

『枯れない桜』のサンプルを、初音島に持ち帰って……願ってしまった。僕にも家族が欲しいですって」

「それが、義之なんてすよね？」

「うん。実はね、君達がこの世界に来たのも……多分、僕が願ったからだと思うんだ」

「え？」

「義之君や音姫ちゃん達と一緒にいながら、また願ってしまった。もっと、楽しくいたい……もっと明るい家族を作りたいって」

「……………」

「そんな事を考えた矢先だったかな。明久君がこの世界に来たのは。それから、本当に幸せだった。明久君達が来て、前よりも明るくなって、楽しかった」

「……………」

僕の言葉を聞いても、ちよつと驚いただけで明久君はすぐに表情を戻して僕の話聞いていた。

「……でもね、この桜は、オリジナルとは違う。願いを叶えるルーチンが不完全だったんだ。純粹で、ささやかな願いだけじゃなくて……誰の、どんな願いでも無差別に叶えちゃうの。例え、どんなに汚れた願いでも……」

その性質の所為で、この島で多くの事故が起こってしまった。

「最初はほんの一枝だけだったけど、この桜は人々の夢を集めて、地面に根を張って……どんどん大きくなる。今まで僕が桜の力を制御してたけど……結局、制御しきれなくなっちゃって……不幸な事故が起こるのを、一生懸命止めようとしたけど……僕の力だけじゃ、防ぎきれなかった」

僕の身勝手な理由で、多くの人にも、大切な人達にまで迷惑をかける結果になってしまった。

「今はまだ、小さな事故で済んでるけど、制御するものを失ったら、もっと多くの願いを無差別に叶え始めてしまう。そうなってしまったら大変な事になってしまう。だから、桜を枯らせないといけないんだけど……けど、桜を枯らせちゃったら、義之君も、明久君達も……」

「……………」

「…………ごめんね。全部僕が悪いんだ。僕のわがままで島みんなに……迷惑をかけて。音姫ちゃんも、明久君にも……」

「音姫さん？ 音姫さんも、この事を……？」

「うん。音姫ちゃんも、理由あってこの桜の事を考えてくれてたんだけど……結局、音姫ちゃんを悲しませてしまった」

「……………」

「ごめんなさい。僕が余計な事さえしなければ……！」

いくら明久君だって、怒るだろうな。だって、僕の勝手でこの世界に来て……そして、枯れない桜によって消えようとしてるんだもの。

「……………さくらさん」

しばらくの沈黙の後、明久君がいつもより低い声で僕の名前を呼んだ。

やっぱり、怒ってるよね。当たり前だよ、僕が……僕の勝手で明久君の全てを奪ったようなもんだから。

「……僕は、いえ……僕も、雄二も、秀吉も、ムツツリー二も……義之だって、感謝するはずですよ」

「…………え？」

急に優しい声が変わって言った。感謝してる？ 僕に？ 僕の勝手で存在が危うくなってる身なのに？

「僕達、すっごい幸せですよ。この世界に来て……義之と、音姫さんと、由夢ちゃんと、ななちちゃんと、色んな人達と出会えて……すごい幸せなんですよ。そして、それを与えてくれたのは、さくらさんだから。本当に、ありがとうございます」

明久君は僕に向かって頭を下げながらそんな事を言った。

何で、そんな言葉を言えるの？ だって、僕は……

「それと、いきなり話を変えちゃいますけど……さくらさんは、無理しすぎなんですよ」

突然のその言葉が、僕の胸に深く刺さった気がした。

「ひとりで抱えすぎなんですよ。優しすぎなんですよ。ひとり苦しんでるのに水臭いんですよ。勝手すぎるんですよ。僕達、もう家族だっ

ていうのに何の相談もなしに色々決めないでくださいよ。そんな風に思うのなら何で義之や僕達を呼んだんですか？ 幸せでいたかったからじゃないですか？ 一緒に笑い合いたかったからじゃないんですか？ 今までずっとひとりだったから……ずっと孤独に苦しんでいたから、自分の傍にいてくれる人が欲しかったんじゃないんですか？ じゃなかったら、何のためにこの桜を咲かせたんですか？」

「そ、それは……僕が、家族が欲しかったからで……」

「ええ……でも、元はと言えばこの桜は困ってる人を助けるためのものなんでしょ？ そんな人が幸せにいられるようにってさくらさんが植えたものなんですよ？ だったらいいじゃないですか。さくらさんだって幸せになる権利があるんですよ。確かにこの桜を植えてみんなの幸せを取り戻したところで、そこにさくらさんがいなくてどうするんですか？ いくら僕達が生きられるようになったところで、さくらさんがいなきや何も楽しめませんし、幸せになる事だつてできませんよ。もし、みんながさくらさんのしてる事を知ったら、みんな悲しんじゃいますよ。みんな、さくらさんを好きなんですから」

「……………」

明久君の言葉に何も返せなかった。そんなこと、考えてなかった。確かに、みんな優しい子だ。僕や枯れない桜の事を知ったら、音姫ちゃんと同じように義之君も、由夢ちゃんも、お兄ちゃんも、音夢ちゃんも、みんな悲しむと思う。

ずっと独りぼっちで寂しいと思って、家族が欲しいと桜に願い事をしてから、今度は義之君、明久君達の事ばかりだった。

自分がそこにいようと考えなかったわけじゃない。でも、いつも自分をないがしろにしていたかもしれない。

「だから、これからはもう何も抱えないで、全部僕達にも話してくださいよ。僕達は魔法使いじゃありませんけど、さくらさんを笑顔にできるならなんだつてしますよ。手料理だつて出しますし、どこかへ旅行に行けるよう努力しますし、時代劇だつていくらでも見ましようよ」

「……………」

「だから今度は、さくらさんが幸せになる番ですよ。今までずっと独りぼっちで寂しかった分、僕達がさくらさんを幸せにしますから」
「……………うっ……………ひ……………」

「ですからもう……………涙を堪える必要なんてないですよ。今だけでも、思いつきり……………貯めてた分、泣いてください。涙を乾かす魔法とかそんなのはありませんけど……………胸を貸すくらいなら、僕でもできますから」

「う、うう……………明久、くん……………あああああああああ！」

明久君の言葉に、僕はもう堪える事ができなかつた。

幼い頃のように、ただ明久君の胸の中で、今までの悲しみを全て吐き出すように涙を流した。

第六十三話

あれから15分ほど、さくらさんは泣き続け、ようやく涙は止まったようだが、まだ眼は赤くなつたままだった。

本当に今までずっと、こんな小さな背中重いものを背負い続けていたんだね。

でも、さくらさんのこの涙は……これで最後にしてやるんだ。

「それじゃあ、きつちり決着つけるとしますか」

「……へ？」

「へ？　って、僕は元々そのつもりでここに来たんですけれど？」

「いや……それって、枯れない桜をなんとかするつもりで？」

「うん」

どんな未来になるにせよ、まずは行動あるのみだ。

「で、でも……どうするつもりなの？」

「わからない」

「……え？」

「いや、そもそも僕、魔法使いとかじゃないから何をどうすれば桜に干渉できるかなんてのはてんでアレなんで……。でも、一応コレも願いを叶える桜なんだし……義之を桜の力関係なく存在できるようにってできないかな？」

「そ、それは無理だよ。明久君達はともかく、義之君は魔法の桜から生まれた子なんだよ。魔法の桜による支えがなくなっちゃ……」

「そっか……。そういうえば、さくらさんはどうやってこの桜を制御してたんですか？」

「えつと……この桜の中にある色んな人達の汚れちやつた想いを徐々に鎮めていた。でも、桜の中にある汚れちやつた想いが大きくなって……それも難しくなったから」

「ふくん……なら簡単じゃん」

「え？　それって……」

「うん。この桜の中にある色んな人達の想いを一気に説得する！」

「……………」

あれえ？ 何か間違ってた？ 何か、さくらさんの目がものすごい可哀想な子を見るそれになってるんですけど？

「あの、明久君……そんなに簡単な問題じゃないんだよ。人の想いつていうのはそういう方向の方が意外と強いものなんだよ。それを説得っていうのは……」

「で、でも……今まではさくらさんひとりだったけど、そこにひとりかふたりくらい加われれば——」

「確かにひとりでやるよりはずっといいかもしれないけど……この桜の中にある想いの数はものすごいんだよ。そこにひとりやふたり加わったところで桜の中に眠るその想いの数に飲み込まれる事だって……」

どうやら思った以上に相当厄介な問題のようだ。

「でも……誰かがやらなくちゃ何も変わらない！ 少しでも可能性があるなら全員幸せになれる道を進まなきゃ！」

「けど……そんな事をすれば、下手をすればそこで明久君の存在がなくなっちゃう可能性だってあるんだよ？」

確かに、さくらさんは魔法使いだから多少の事があってもなんとかなるだろうけど、僕が手を出そうものなら相当のリスクが待ち受けている事だろう。

「だけど……僕は諦めたくないから！ 義之も、さくらさんも、この島のみんなも……誰だって欠けちゃいけないんだ！ だからどんな危険があつたって、僕は立ち止まりたくない！ だから、お願いします！ 僕を、枯れない桜の中に連れていってください！ 本当にダメなら、はじき出しても構いません……でも一度だけ、ほんの一度だけでいいから！ 僕にも、できることをやらせてください！」

僕はさくらさんに向かって土下座した。助けに来た奴が助けようとしている人に土下座するのはどうかと思うけど、今はそんな事を言ってる場合じゃない。

例え僕の存在が危うくなろうと、この人達を助けたいから。

「……………わかったよ」

「え……本当に!？」

「うん。でも……本当に危なかったら、すぐにやめて桜の外に出るからね。一瞬でも気を抜いたら、本当に明久君の存在がなくなっちゃう可能性だってあるから、それと……君の大切な人がそれを望まないってことを、忘れないで」

「あ………はいー!」

さくらさんに言われて気がついた。他人にあれだけ言っておいて僕が忘れてどうするのだ。

そうだ。僕にだって大切な人がいる。僕の事を好きでいてくれる人だっているんだ。だから、なんとしても成功させてやる。

「それで、これからどうすれば?」

「うん。まずはとにかく桜の中に入る事が先だから、枯れない桜の幹に触れて心の中で念じてみて。僕が明久君と一緒に入れるようになるから」

「はいー!」

僕はさくらさんの指示に従って枯れない桜に触れ、目を閉じた。

視界を閉じた中、僕の手にはさくらさんの手が重なる感触が伝わり、僕の傍でさくらさんが何か呪文のようなものを口にするるとふわっと身体が浮かんだような感覚に包まれた。

「……もう、入ったよ」

「ん……」

目を開けると、そこには枯れない桜と、真っ暗な空があった。

「……あれ? さっきの場所と変わってないような?」

「一目見ればそう見えなくもないかもね。でも、ここは確かに桜の内部分なんだよ。周りを見ればわかると思うよ」

「周りを……っ!?!」

さくらさんに言われて周囲を見回すとそこは恐ろしい光景だった。夥しいほどの桜の木が並んでいた。それだけなら対して驚きは無い。だが、その桜からはまるで憎しみや悲しみを言い表すような、黒いモヤのようなものが漏れ出ているのだ。

これは……Fクラスが放つ殺気なんかが可愛く思えるくらいおぞ

ましいいものだった。ただこの場で息をしているだけでもう吐き気をもよおしそうだ。

流石に負の感情も目いっぱい溜め込んでいるからか、とんでもない醜態さだ。

「明久君、大丈夫?」

「だ、大丈夫です……これくらい!」

そうだ、こんな所で立ち止まっている場合じゃない。僕は今からこれらを説得しなくちやいけないんだ。

僕はその場でゆっくり深呼吸して心を落ち着け、さくらさんに向き直る。

「心の準備ができました。やりましょう」

「……うん。でも、この願いの制御にはかなり神経使うから……下手をすればあの夥しい数の願いに飲み込まれる危険性もあるから——」

「お——い! あんたらあ! いい加減、桜とかに頼ってばかりじゃなくて自分で何とかしようとかできないのかあ!」

「——って、明久君!」

僕がとにかく腹の底から叫んでみると周囲の桜を纏っていた黒いモヤのようなものが一気に舞い上がり、一塊になっていく。

どうやら僕の言葉に触発されてそれらが一気にそれぞれの汚れた願いを遂行しようとするのを標的にしたつてところかな。

「あ、明久君! 君は急いでここから——」

「いいえ! まずはこいつらと真正面から向き合ってみます!」

「無茶だよ! あんな数の汚れた願い、明久君が飲み込まれちゃうよ!」

「大丈夫です! 今回だけでいいから、僕を信じてください!」

僕がそこまで言い切ると汚れた願いの塊が僕に向かって飛来してきた。

そして、その汚れた願いが僕を包んでいった。

「明久君?!」

視界の外でさくらさんの叫びが聞こえた気がしたが、正直そつちを気にする余裕はなかった。

『憎い……悲しい……消えろ……うざい……恨めしい……殺せ……消したい……いなくなれ……なんで俺だけ……ふざけるな……邪魔だ……アレは俺のだ……来るな……許さない……なら殺すか……やっちまえ……消えろ……殺せ……ころせころせころせコロセコロセコロセ殺せ殺せ殺せ殺せえ!』

僕の脳裏に色んな人の憤りや嫉妬や怨嗟の声の流れ込んでくる。

これが多分、初音島にいる人達の抱えた汚れた心の内なのだろう。流石に心の中で抱えているものだからなのか、とんでもない醜悪さだ。

さくらさんは、こんなものを今までずっと押さえ込もうとしていたのか。こんなものを見て、普通でいられるとはとても思えない。

そのはずなのに、さくらさんはずっと、僕達に対して笑顔を崩す事なんてなく今まで通りに過ごしていたのか。

『寄越せ……お前が欲しい……俺に従え……殺させろ……こつちへ来いよ……』

くつ……ダメだ。嫌な感じが身体中をまさぐって、意識が遠のいていく……。

なんだか……気の所為か、妙に見知った顔も多数そこにあるような気がする……。

それなら、大丈夫かな。そつちに行けば、楽になるんだよね。それなら、このまま眠ってもいいよね。

………つて、

「なつてたまるかああああああああ!!」

腹の底から気合を入れ直して叫ぶと、僕を纏っていた黒いモヤのようなものは弾けて消えていった。

あちこちに散在しているモヤもそれに触発されたようにどんどん消えていく。

「はあ……はあ……どうにか、なつたかな……?」

「明久君、大丈夫!」

黒いモヤが晴れるとさくらさんが青ざめた表情で僕のもとへ駆け寄ってきた。

「あ、はい………どうにか………」

「ほ、本当に大丈夫？ どこか、痛いとか苦しいとか………」

「ああ、大丈夫です。あんなの、僕のクラスメイトの怨嗟の声と同じかちよつと上つて程度ですから」

うん。島中の人の怨嗟の声に少しばかり飲み込まれそうになったものの、憎しみや嫉妬の念を当てられるなんて文月学園じゃよくあることだ。

その分だけその手の事に耐性がついていたのだろう。手段も算段もあつたわけじゃないが、あそこでの日常がこんな所で役に立つ日が来るとは思わなかった。

「よ、よかったあ………」

さくらさんが安心してきつたのか、その場に膝を着いた。

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないよ………いきなり汚れた願いの塊を自分のもとへ呼び寄せちゃつて………どうしてかその願いを霧散させたからよかつたけど、下手をすればあのまま明久君の存在が消されてたかもしれないだよ」

「あはは………すみません。ところでさくらさん………桜の方はどうすれば？」

「うん………明久君が汚れた願いを消してくれたおかげでしばらくは保ちそうだけど、いずれはまた汚れた願いが増え続けてあつというまにさつきと同じか、それ以上の大ききで育つ可能性があると思う」

結局、根元をどうにかするか、義之の存在がどうにか留まれるようにでもないかと結局さつきと同じことの繰り返しか。

流石にさつきのをもう一度やれと言われても出来るかどうかなんて怪しいものだ。

だからといって、これ以上さくらさんに負担も与えたくない。義之の事もどうにかしたいけど、魔法使いじゃない僕ができることなんてない。

ここまで来てただ汚れた願いを消してさよならなんてぬるい結果で終わりたくない。最高のハッピーエンドになり得るものが欲しい

ところだ。

だが、そんなものなんて何処に……、

「……ん？」

僕はある一点を凝視する。

「明久君、どうしたの？」

「いえ……なんか、あそこで……」

さつきまではあの黒いモヤが邪魔して見えなかったけど、それが晴れた今、周囲の桜の木の中に一箇所煌く光のようなものが見える。

「あれ、何でしょう？」

「……わからない。でも、汚れた存在じゃないのは確かだと思う」

「……とりあえず、行ってみますか？」

「うん。なんだか……すぐく大切なものの気がする」

僕とさくらさんはひとつの光に向かって歩んでいった。

そして、目的の光のもとへ歩み寄るとその光はまるで生きているかのように鼓動を伝え、光を点滅させている。

「これって……？」

「……これ、義之君」

「義之……って、ええ!? っていうことはまさか、これが義之の存在を支えているものってことですか!？」

「うん……」

「ということは、これを義之にあげれば？」

「……うん、義之君の存在は確固たるものになる。この世界に存在する、ただひとつの命として生きられる……」

「………いやああああああ!!」

これは思わぬ収穫だよ！ 正直どうすればいいかなんてわからなかったけど、こんなところでまさかの幸運がやってきたよ！

やっぱり普段の行いだよね！ こういう引きの強さは！

「じゃあ、早速それ義之に渡してやりましょうよ！」

「……うん」

「……さくらさんっ！」

「……ごめんね。これはちゃんと渡すから、明久君は先に行つて」

「え？ さくらさん？」

「うん。本当によかったよ……正直、僕ひとりじゃ無理だったろうけど……明久君が来てくれて、協力してくれて……そしたら、こんなにいい事が起こったよ」

「う、うん……だから、早く戻りましょうよ」

「……ううん。ごめん、僕はまだしばらく戻ることはできないんだ」

……一瞬、わけがわからなかった。

「な、何で!? 義之の存在はちゃんとここにありますがし、悪い願いももうなくなつた！ 後は桜を枯らせれば万事解決じゃないんですか!?!」
「ううん……明久君は魔法使いじゃないから、この手の事は理解できないだろうけど……何かの存在を無理やり確固たるものにさせたり、元々ここにいないはずの世界から誰かを呼んだり、過去に影響を及ぼすようなことはね、普通なら真つ先に世界そのものによつて修正の力が働くの。でも、この初音島には枯れない桜があったから例外的にその力はなかったけど……もし桜が枯れて支えを失えば、世界の修正する力が現実世界でどんな影響を及ぼすかわからないんだ。」

だから、それが完全になくなるまでは僕は戻ることはできないんだ」

「そ、そんな……やつとの事でハッピーエンドを掴めたかもしれないのに！ それなのに！ なんでさくらさんばかりがそんな役割をしなくちゃ!」

今までもずっと孤独の中にいて、ようやく本当の幸せが始まるかもしれないのに。それなのに世界や、運命は尚もさくらさんを不幸にするのかよ！

「大丈夫だよ。今度は、本当に……本来なら、僕は桜と一体化して存在が消えてしまうかもしれないかった。でも、明久君はそんな未来を変えてくれたんだ。それだけで、もう感謝してもしきれない恩を受けたんだよ。だから、本当にありがとう」

安らかな笑顔で、さくらさんがそう言った。

「少し、時間が空くと思うけど……近いうちに必ず戻ってくるから。そしたら……家で、いっぱいお話ししようか」

今までと違う、儂げなものでなく……心の底からの笑顔で、さくらさんは僕の手を握りながら言った。

「……はい。じゃあ、家に帰ってきたら、鍋パーティーしましょうか！
そんなでもって、さくらさんの好きな時代劇を目いっぱい鑑賞して、
いっぱい語り合って、そんなでもって、みんなで何処かに旅行に出かけ
みましょうよ！ あ、その時のために総力あげてバイトでもしてみるか
？ 僕と秀吉と、ムツツリーニでなんとかなるか。雄二は……ああ、
やめとこ。霧島さんとの婚前旅行で手一杯になりそうだし」

「ふふふ……あははははははは！ うん！ 帰ってきたら、絶対ね！」
「はい！ 前情報持っても腰抜かすほどびっくりさせるようなサプライズ用意するのー！」

「うん、楽しみにしてるよ。だから……行つてきます」
「……いつてらっしやい、さくらさん！」

その言葉を最後に、僕の視界が真っ白になった。そして、最後に……さくらさんの笑顔を目に焼き付けた。

深々と……。桜が舞っていた。驚く程ゆったり……音もなく。

見渡す限りの桜が枝になっていた花びらを振り落としているように、桜の花びらが吹雪のように宙を舞い、地面へとゆっくり。

(これは……誰かの夢?)

久しぶりに見るな。他人の夢を見る……それが何故か俺に備わっていた能力みたいなものだった。

しかし、始めて見る夢だ。大抵は妄想じみたものを繰り返し見るものなのだが、こんな不思議な夢は始めてだ。

舞台は初音島のようなが……しかし、初音島なら桜の花びらが散るっていうのは変だな。

いや、よくよく考えれば桜が枯れないというこの島の桜自体が変な

気もするんだが。小さい頃から当たり前のもんとして見ていたために感覚が麻痺しているのかもしれない。

それから辺りを見回すと、一際大きな、枯れない桜が見えた。

そして、枯れない桜の幹でひとりの女性が立っているのが見えた。

そこにいたのは、俺のよく知っている人だった。

「……さくら、さん？」

「にやはは……こんばんは、義之君」

「え？」

おかしい。ここは夢の中の筈だ。夢の中にいる人物が俺の声に応えてきた。

「あの、さくらさん……これは夢……じゃないんですか？」

そういえば、いやに自分の存在がハッキリとしていた。

「うん。これは僕の夢。ていうより、僕の意識の中っていうべきなのかな？」

「意識の、中ですか？」

「うん」

「そうだ……今どこにいるんですか？ ずっと帰ってきてないし、学園にもいなかったみたいだから心配してたんですよ」

「にやはは……ごめんね。でも、よかった。出る前に、義之君に会えて」

「え？ それって……」

「君にね、はなさないやいけない事がいっぱいあるんだ。長くなりそうだけど、聞いてくれるかな？」

いつものさくらさんからは想像がつきづらい……真剣な瞳。

先の言葉の意味も知りたいが、さくらさんの話なんだ。ここで聞かなければいけない気がして、俺は頷いた。

「うん……まず最初に、謝らなくちゃいけないね。ごめんなさい」

「え？ なんでさくらさんが謝らなくちゃ……ていうか、何を？」

「実はね。初音島で起こった事件は全部、僕の所為だったんだ」

さくらさんがいきなり予想外な事を口にした。

「どういうことですか？」

もちろん、いきなり言われてもわけがわからないのでさくらさんに問いかける。

「枯れない桜……あの桜は、本当に人の願いを叶える力があるんだ。昔にも、ここに枯れない桜があった。正真正銘の魔法の木。人が人を大切に想う力を集めて、困っている人のために奇跡を起こす。願えば叶う。祈れば通じる……ひとりひとりの力が足りなくても、たくさんの心があれば、みんなハッピーになれる。」

そんな夢みたいな桜の木があったの」

枯れない桜……小さい頃からよく聞かされていた。願いが叶うと言われる桜の木。

噂の域を出ないものかと思っていたが、本当にそうだったのか。魔法の木……そう言われれば納得できる。

というより、枯れない桜なんて、魔法以外に説明する事などできないだろう。

わかっていながら、俺たちはそれをあえて見ないようにしていたんだ。

「でもね、魔法の桜には致命的な欠陥があったんだ。昔も、今の桜も。だから、枯らさなくちゃいけなかったんだ」

枯れない桜を細い指でなぞりながら寂しそうに呟いた。

「昔の桜が枯れてから……ふと思ったんだ。願えば叶う世界なんて夢物語だけ……世の中には叶わないまま寂しい時を過ごしているような人達がいるから、そんな人達がハッピーになれる力になればいい。あの桜の欠陥を直せば、きつと幸せな世界ができるって思った。そう思っつて、僕はアメリカでずっと魔法の桜の研究をしていたんだ」

それから間を置いてさくらさんは寂しそうな瞳を枯れない桜の木へと移す。

「けど、独り桜の研究を続けているうちに外では時間はどんどん流れていって……ある時、急に寂しくなっちゃったんだ。大好きだった人達は、愛する人と結婚して子供を作っつて、暖かい家族を築いて幸せになっつていくのに、僕は……いつまで独りぼっちでいなきやいけないん

だろうって」

「……………」

さくらさんの言葉に、俺は何も言えなかった。

知らなかった。さくらさんがそんな寂しい想いをしていたなんて。

「そして、本当はいけない事だったんだけど。今ここにある枯れない桜のサンプルを、初音島に持ち帰って……願ったんだ。僕にも家族が欲しいです』って。『もしかしたらあったかもしれない現在の、もうひとつの可能性を見せてください』って。そう願った」

そこで俺の頭にある予感が横切った。

変だと思わなかった事はなかった。でも、今が幸せだったから、記憶の奥底にしまつてずっと目を向けなかった事実。

俺の最初の記憶は、枯れない桜と、さくらさんの笑顔だった。

それ以前の記憶が全くと言っていいほどない。というより、始めから存在していなかったかのように何もなかった。

「そして、その願いから生まれたのが……」

そう言つてさくらさんが俺をまっすぐ見た。

予感がなかったわけじゃなかった。でも、今こうして向き合うまでは確信が持てなかった。

だが、今のでようやくわかった気がした。

「じゃあ、やっぱり俺は……さくらさんの子供って事だったんですね？」

「そう。君はこの桜の魔法が引き起こした奇跡。本来この世界には存在してはいけないものだったの」

「……………」

「桜の魔法が届く範囲でしか存在できない。君がこの世に存在していたのは、魔法の力があつたから」

「……………」

「でも、この桜はオリジナルとは違って、願いを叶えるルーチンに問題があつたんだ。純粹でささやかな願いだけじゃなくて……誰の、どんなに汚れたものであろうと、善悪問わず叶えてしまう」

そういうことだったのか。あの数々の事故はみんな、この桜の……

桜に込められた人々の願いだったのか。

「その所為で、音姫ちゃんや明久君に迷惑かけちゃった……」

「え？ 明久も、知ってたんですか？」

「うん。明久君は偶然だったんだけどね……明久君、すごい友達思いだから……すごい抱え込んだじゃったみたい」

音姉については驚きはしなかった。俺は音姉が魔法使いだというのを知っている。

この島を守る、正義の魔法使いという事を小さい頃に聞いていたから。

でも、明久も偶然にもさくらの事の事を知っていた。これで納得した。

明久にいつものような元気がなかったのはこれが理由だったんだ。だからだったんだな。

あいつが急に何かを抱え込んでるように元気をなくし、誰に対しても無気力なままに、そして白河さえも遠ざけるようになった理由。

こりやあ、簡単に相談できるわけがないわな。

「本当にごめんね。僕の所為で、島みんなに迷惑をかけて。音姫ちゃんにも、明久君にも……義之君にも」

「……さくらさん。俺は、感謝しています。俺、幸せでした。俺は普通よりずっと短い時間でしか生きられなかったかもしれないけど……」

家族や、友達や……かけがえのない大切なものと出会えた事は、本当によかったって思っています。俺にこんな大切な時間を与えてくれた事に感謝しています。

だから、ありがとう……母さん」

そう告げると、さくらさんの瞳から涙が溢れ出した。

「う……はは……明久君の言う通りだよ。本当に、みんな……優しいよ……」

明久の奴も言ったのか。なんだか先を越されたようで釈然としなない感があるが。

それからしばらくさくらさんは涙を流し、それが少しばかり乾いたところで再度俺を見つめた。

「さて……色々話したい事はあるんだけど。そろそろ時間になりそうだから重要な事から片付けていこう」

さくらさんがそう呟くと何も無い宙からそつと光の球を手のひらに顕現させた。

その光はなにやら懐かしい……というより、ものすごい既視感のようなものを感じる。

まるで、その光と自分は同じような感覚がする。

「これは、義之君の存在を確かなものにさせた力の源。義之君の魂と言ってもいいのかもしれないね」

「俺の……存在？」

「うん。元々君はこの島の……枯れない桜の周囲でしか存在できない不確かなものなんだ。そしてこれは君の存在を維持するための力……枯れない桜の中で、

ようやく見つける事ができた」

「これが……」

「これで……君の存在は確かになる。曖昧なものでなく、普通の……ただひとつの命を持つことができる」

そう言つてさくらさんの手から光が離れ、俺の目の前で浮遊した。

俺の心臓の鼓動に合わせるように光を点滅させるとしだいに俺の中へと溶け込んでいった。

「さて、僕は行かなくちゃ」

「え？」

「本当なら、僕はあそこで消えてたかもしれないんだけど。でも……明久君が頑張ってくれたおかげで、君が消えずに済んだし……今はそれだけですごく嬉しいんだ。しばらく会えなくなっちゃうのは寂しいけど……すぐに、戻ってくるから」

「さくらさん……」

話は読めなかった。ただ一言、さくらさんはしばらく出かけるといった感じでそう告げた。

「……じゃあ、戻ってきた時は……いっぱいお話ししましょう。それまで……待ってますから」

それだけ言った。

本当は、もつと話したいことはあつたけど、一緒にいたいけど。今までの事、そしてこれからの事をいっぱい話したかったけど、今それが叶う事はなさそうだ。

だから今は、旅立とうとしてこの人を……俺に命を与えてくれた人の顔を、この目にしっかりと焼き付けておこう。

「じゃあね、義之君」

ただ一言、そう言ってさくらさんは桜吹雪の中へと消えていった。

「……いつてらっしやい、母さん」

それからは底なし沼に入ったように身体が沈んでいく感覚に包まれていき、意識が遠のいていった。

恐らく、深い眠りの底から覚めようとしているのだろう。

俺は夢の世界から覚めていった。

「ん……」

目が覚めると、妙な気だるさが身体を………包んでない。

いつもなら他人の夢を見せられた後はとつもない眠気が襲って大体は二度寝をしてしまうのだが、今回はそれが無い。

というより、身体の底から力が湧いてくるような、そんな感覚に包まれている。

「俺、生きているんだよな……う？」

正直、今まで何も知らないまま日常を過ごしていたので夢の中でさくらさんの言っていた事が実感できない。

もちろん、さくらさんのことだから全部本当なのだろう。だが、それを自覚するには少しばかりな。

「まあ、考えても何も始まらないな」

どうせ今まで普通に暮らしていたんだ。それはこれからも変わら

ない。

あの人がくれた時間を、生きていく。あの人が俺を守ってくれたように、これからはあの人の帰ってくるこの場所を守らなきゃいけないな。

「ん〜……まだちよつと早いけど、朝ごはんの支度でもするか」

俺は着替えると下へ降りて朝食の準備を始めるのだった。

今日はいやにさわやかな気分なので弁当用にも何か作っておこう。

定番に卵焼きを多めに作っておこう。そして野菜にトマトとレタ

ス……キュウリも入れておこうかな。

「ああ〜、おはよう……」

「お、明久か。おはよう」

「おはよう、義之………義之？」

「あ？」

明久が俺の身体を隅から隅までじっくり見ている。一体何だ？

正直気持ち悪いのだが。

「えつと……義之、なんだよね？」

「それ以外のなんだよ？」

「……………しゃああああああああああ!!」

「おわっ!!? いきなり何だよ!!」

他人の事を凝視したと思ったら今度は大声を上げてドタバタしはじめたんだが。

「義之だよね!!? 義之なんだよね!!? そうなんだよね!!?」

「何故3度も聞くんだよ!!? そうだって言っただろ!!」

「いよっしやああああああ! うまくいったんだああああああ!!」

そういえば、さくらさんもだけど………こいつのおかげでもあるんだよな。俺がこうしてられるのは。

いつか何かお礼はした方がいいのか。

「とりあえず………今は静かにしててくれ」

通学路にて……。僕は今大変喜ばしい気分に通学路を歩いていた。
それというのも……。

「おい、さつきから何で俺をチラチラ見てるんだよ?」

「いや、なんでも」

「今朝から気持ち悪いぞ、お前」

義之がちゃんとここにいてるって事だ。

うまくいったかどうかずっと気になってたけど、この調子ならきつと成功したんだろう。

代わりにさくらさんとはしばらく会えなくなっちゃったけど。でも、いつかまたみんな揃って、笑顔でいらればと思う。

そんな事を考えて通学路を歩いていると音姫さんの背中が見えた。

ただ、その背中が非常に寂しく見える。

「音姉、おはよう」

「……うん」

「音姉? どうした? なんだか調子悪そうだけど……」

「うん………えっ!?!」

音姫さんがハツとした表情で義之を見つめて固まっていた。

「な、何だ?」

「お……弟君?」

「そ、そうだけど?」

「ど、どどど、どうして!?!」

「いや、何が——」

義之の言葉は最後まで繋がれることもなく、音姫さんが義之の肩をガバッと掴んだ。

それからマジマジと頭から足までじーっと見つめる。

「お、音姉まで何?」

「ねえ、弟君。どこか痛む所は? 頭とか……目眩は?」

「ないけど」

「ない？ ないって？」

「いや、だから別にどっか具合悪いとかないよ」

「自分の存在が希薄に感じるとか、孤独を感じるとか、手足の先の方の感覚があまりないとかは？」

「いや、そんなの全然」

随分ピンポイントな質問だった。恐らく、義之を支えるものがなくなった時に起こりうる症状なのだろう。

だが、昨日のあの一件でその症状が起こることは二度とないことだろう。

「……………」

「ていうか、俺より音姉の方が大丈夫——」

「具合悪くないの!?! 本当に？ 元気なの!?!」

「ええ？ いや、そりゃ元気だけど……今日は随分と快適な朝を迎えてたけど……」

「っ!?!」

義之の言葉を聞いて音姫さんは信じられないといった風に義之を見る。

「ほ、本当に!?! なんともない!?! 元気なのね!?!」

「いや、本当だって。音姉、いつもにも増して心配しすぎだって」

義之が苦笑を浮かべながら音姫さんをなだめようとしていた。

「……………」

「音姉?」

「よ……………」

「よ?」

「よかったああああああああ!!」

「ぐおっ!?!」

大きな声を出して音姫さんが義之にガバツ、と抱きついた。

「おお……………」

登校時間なのだから結構生徒の目があるというのにも関わらず、音姫さんの大胆な行動に周囲の目が一気に集中する。

「お、おおお、音姉!？」

「ああ、よかったあ! でも、どうして!? ああ、でもでも、そんなのいい! 弟君が、弟君がなんともないんだから、もういい——
——っ!!」

「ぐ、ぐるじい……音姉っ。む、胸が! 胸が当たって……ていうか、
圧迫されてる! 窒息する!」

「よかったよ——っ!!」

「むぎゅっ!」

おお、今度は義之の顔をその胸に押し付けるように抱き寄せてるよ。

「お、音ね……い、息が……た、助け……」

義之が抜け出そうとしてるものの、音姫さんの力が強いのか抜け出せずにいる。

音姫さんの喜びたい気持ちは理解できるけど、これ以上は義之の命が危ないので助けてあげた方がいいだろう。

この後、遅刻寸前まで音姫さんを鎮めるのに苦労したのと……この行動を見てとある女子とゴリラの追いかっこがあったのは余談だ。とにかく、これからまた新しい日常の章へと入るのだった。

これから……後末で、これまた不思議な体験が続く事を、僕はまだ知ることはなかった。

第六十四話

義之の存在が確立した嬉しい朝を迎え、晴れ晴れとした気分で教室へ入った。

「……………」

「……………」

「……………ちやお」

教室へ入るなり、渉と小恋ちゃん、杏ちゃんが僕を見た。

杏ちゃんはいつものように無表情の挨拶を交わしてきたけど、渉と小恋ちゃんは何も言っていない。

多分、さくらさんの事で悩んでる時の事でどうしたものか悩んでるんだろう。

あれは何も言わずに抱えた僕が悪いのだからしょうがない。でも、もう不安を感じるような事なんてないから。

最初はぎこちなくてもいつも通りに戻れるように頑張らなくちゃ。

「Good morning wholly. It is fine today also. (おはよう、みんな。今日もいい天気だね)」

「……………はい?」

「明久君、今度はどうしたの?」

おかしい。何故普通に挨拶しただけでこんな反応に?

「明久、普通を装ったつもりかもしれないが、口に出た言語が英語に変換されてたぞ」

なんてことだ。吉井明久、痛恨のミスだよ。

「ちなみに今のは、『おはよう、みんな。今日もいい天気だね』よ」

「あはは、ごめん。そして杏ちゃん、翻訳どうも。改めておはよう、みんな」

「お、おう……………」

「おはよう……………」

僕が改めて挨拶すると2人もぎこちなさ混じりの挨拶を返してき

た。

「え、えつとき……明久。ちよつと……」

「ん？」

僕が席に着こうとすると渉が話しかけてきた。

「いや、なんつうか……なんともないのか？」

「何が？」

「だから、その……ほら、つい昨日まで何か悩んでた風だったじゃねえか。だからさ……」

ああ……そういえば、まだあの時のことについて謝ってなかった。

何の相談もしてないままだったからいまだに心配しているわけか。

僕の悩みはもう解決したわけだから、もうこれ以上心配をかけるわけにはいかないな。

「ああ、それについてはもう大丈夫だよ。昨日解決したから」

「……へ？」

「心配かけてごめんね。色々相談しづらい事があったから何も言えなかったけど……昨日、ようやく解決したからもういつも通りに戻れるから心配いらないよ」

「……そうか」

それから渉が僕に近寄って肩に手を回し……コブラツイストをかけてきた。……つて、

「痛い痛いいたいいたいいたいたたたたたあ!?! い、いきなり何するのお!?!」

「テメエ、何の相談もなくずっと悩みっぱなしだと思った後でいきなり元気取り戻しましたあ!?! いや、悩みが解決すんのはいい事なんだろうけどな! お前が悩んでる間の俺達の心配とやりきれなさはどこに持っていきやあいんだあ!?!」

「いたたたた! ごめんなさいごめんなさい! 謝る! 謝るから、この技解いてえ!」

美波ほどじゃないにせよ、こういうプロレス技をかけられれば痛いのは当たり前だ。

『何? 明久、もう元気になっちゃったの?』

『まあ……一応な』

『そう……悩んでる明久におもしろ——相談させてあげようと思ったのに』

『お前、今面白いって言いかけてたよな？　面白い、何だ？　何をするともしりだつたんだ？』

『もう過ぎた事なんだからいいでしょ。それとも……聞きたい？』
『……遠慮しておこう』

何だろう？　一瞬、寒気が痛みと共に襲ってきた気がしたけど。
とりあえず、渉のコブラツイストから開放されてほつと一息つく。
「ふう……助かったあ……」

「大丈夫、明久君？　でも、明久君も悪いんだよ。私達に何も相談しないから。ななかだつてすごく心配していたんだから、ちゃんと謝つてね？」

「うん。本当、心配かけてごめん」
小恋ちゃんにまで叱られてしまった。しかし、ななかちゃんにも心配をかけてしまったのはマズイ。

ちよつと謝つたくらいじゃ許さない、かどうかはわからないが。何かしらのお詫びは考えておいた方がいいだろう。
僕がどんな詫びをしようかと考えてる時だった。

「みんな、ちよ、ちよつと、聞いた、聞いたあ!？」
茜ちゃんが騒がしく教室に入ってきた。そういえば、なんか廊下も騒がしくなってる気がするな。

「どうしたの？　茜」
「財布でも落としたのかしら？」
「違うよお！　なんで自分の財布落として『聞いたあ？』なんて騒がなきゃいけないの!？」

おっしやる通りで。
「何かあったの？」

「あ、明久君。元気になったんだ……じゃなくて！　桜が……」
「お、落ち着いて茜ちゃん。桜がどうしたって？」
「枯れだしてるの！」

「ああ……桜がね。……………ん？」

「え？」

「……………え？」

「うそ……………」

「マジ……………」

「本当なんだって！ 島中の桜が一齐に枯れだして……今、桜並木とか公園とかで大騒ぎしてるんだよ！」

「そういえば、ここに来るまでにいやに桜の花びらが舞ってる気がしたけど……………枯れ始めてたってことなのか。」

「……………見に行きましょう」

「え、あ、杏!? 授業はどうするの!？」

「世の中には授業なんかより大事なものがあるの」

「その通り！ というわけで、小恋ちゃんも行くこう！」

「え、ええく!? ちよ、ちよつとく！」

「お、俺も行くぜ！」

「おい、お前ら」

小恋ちゃんが茜ちゃんに引きずられ、杏ちゃんと渉がそれについて教室から出ていった。

まあ、この島の人からすれば年中咲いていた桜が枯れ始めたなんてこれまでの事故や事件以上の大事件に等しい事なのだろう。

その証拠に、この教室だけでなく、学校中の生徒の大多数が外に出ていこうとしている姿が見えた。

外で音姫さんや高坂さん、ムラサキさんなど生徒会のメンバーが出ていこうとしているのを必死に止めている姿が見えるが、人数が多い上には教師までもが混じっているためにくら生徒会のメンバーが有能だとしても圧倒的に戦力が足りないのだろう。

もう何人かが学園外へと脱出する姿が見える。

「うわあ、音姫さん達相当苦戦してるよ……………」

「まあ、この島の桜が枯れ始めたなんて大事件に等しいわけだからな」「うん……………そうだね」

まあ、僕は桜は枯れるのが当たり前だと思ってるし、桜が枯れた理

由は大体わかっているからそこまで驚いていなかった。

「とりあえず、止めるの手伝っていく?」

「そうだな。あの騒ぎじゃ怪我人が出たって不思議じゃないからな」

僕と義之は頷きあい、生徒会メンバーに加担して外に出ていこうとする生徒達を止めに入った。

結局、この日は枯れない桜まで枯れ始めたという騒ぎで持ちきりになって授業どころではなくなった。

放課後になり、桜の様子を見に行った生徒達も戻ってきて色々噂しあっている姿が見える。

「やっぱり何かあるのかな? 天変地異の前触れとか」

「……わからないわ。単に冬に咲いている事がおかしいって事に気づいたって可能性も否めないし……」

「桜が?」

「あ、義之。すごかったんだよ。本当に桜が散っちゃってた」

「そうなのか……? 帰りに俺も見に行くかね」

クラス内でも会話の内容は枯れない桜一本筋だった。

心配かけさせた僕がいうのもなんだけど、これでは今日はバンドどころじゃないかも。

どうせならななかちゃんの所について謝罪をして、そこで侘びを考えていこう。

僕は荷物をまとめて廊下に出るとすれ違う生徒達も皆枯れてしまった桜の話題で持ちきりになっていた。

少しうるさく感じるけど、僕は廊下を歩いてななかちゃんのクラスの教室まで行き、教室の中を覗く。

「あの……ななかちゃんはいるか?」

「む? 明久か?」

教室を覗くと秀吉が僕に気づいて歩み寄ってきた。

「あ、秀吉」

「うむ。今朝はお主があまりにも晴れ晴れとしてたので聞きそびれてしまったが、事はうまくいったのかの？」

「うん。でも、その代わりにさくらさんはちよつと出かけることになったけど」

秀吉には見破られるかもしれないけど、出かけたというのは全く嘘ということでもない。

それに、すぐに帰ってくると言ってくれたんだ。僕はそれを信じるだけだ。

「……………そうか。とりあえずは解決したということでもいいんじゃない」

「うん」

「しかし……………すごい噂になつとるの。皆、桜が枯れたという話題でいっぱいじゃ。原因は……………お主なんじゃろ？」

「直接的かどうかはわからないけど、多分そうだと思う」

「まあ、本来ならこれが普通なのじゃから、すぐにおさまるじゃろう」

「そうだね。……………あ、ところで、ななかちゃん知らないかな？」

「む？ 白河なら放課後になつてすぐに出ていったが……………お主の所には行かなかつたのかの？」

「あ、そうなんだ……………じゃあ、音楽室かな？ ありがと、僕は行くね」

「うむ。とりあえず、白河にはちゃんと謝っておくのじゃぞ。今日も随分思い悩んでいたようじゃからの」

「うん。わかつてる」

僕は秀吉にそう返して教室を後にした。

ななかちゃんのクラスの教室から音楽室へ移動すると、予想通りな

ななかちゃんがいた。

でも、何だろうか？ ななかちゃんの背中が異様に寂しく見える。

「えつと……ななかちゃん？」

「……」

僕の言葉に反応してななかちゃんはこちらを向いた。その表情はすごい無機質なものだった。

「あの……一緒に帰る？ 何か、今日は桜が枯れた事でみんなバンドどころじゃなさそうだから」

「……」

「その……心配かけた事、本当にごめん。何て詫びたらいいのかわからないけど、とにかくごめん」

「……」

何の反応も返ってこない。相当怒ってる……わけじゃなさそうだ。

一体どうしたのだろうか？ ななかちゃんの様子がおかしい。よく見れば何やら顔色も悪い気がする。

「ななかちゃん？ どうしたの？ ひよつとして、どこか具合でも悪い？」

ななかちゃんがゆっくりと顔を見上げ、僕の手を握り、僅かだが震えだした。

震えた手をぎゅつと握り締めながら僕の顔を見て、

「……」

「へ？」

「聞こえなく……なった」

「……えつと？」

それから手を振って思案顔になったと思ったら、

「や、やっぱり……聞こえない……聞こえないよ」

「へ？ えつと……聞こえないって、何が……？」

「心の声、聞こえなくなっちゃったよ……」

「……え？」

ななかちゃん、今なんて言ったの？ 心の声？ 聞こえない？

僕が突然の事に混乱しているとななかちゃんがしがみついていた。

「ど、どうしよう、明久君！ 私……私！ どうしたらいいのっ!？」

「ななかちゃん、落ち着いて。何があったのか、説明して」

「わかんないよ！ 突然、誰に触れても聞こえなくなっただけで、わからなくなっただけ！」

ななかちゃんが必死の形相で僕に訴えかけている。

「明久君、私、どうしたらいいの!？」

「ななかちゃん！」

僕が怒鳴ると、ななかちゃんは身体をびくつ、と硬直させる。

僕はそれからななかちゃんの手を放し、両手をななかちゃんの肩にそっと置いた。

「ななかちゃん……君に何があったのかは、僕にはわからないけど……今まで悩みを隠してた僕がいう事じやないだろうけど、まずは話してみようよ。今ななかちゃんの中にある悩みを、僕に聞かせてくれないかな？」

僕はできるだけ自然で、優しく見えるよう笑顔を作った。ななかちゃんに言い聞かせた。

ななかちゃんもやっと落ち着いたのか、震えが止まってその場に座り込んだ。僕もななかちゃんの隣に座り込む。

それからななかちゃんが動くのを待つ事にする。

「……私ね……」

しばらくすると、ななかちゃんが自分から話し始める。

「すごく、嫌な子供だったの」

「……………」

いきなり何を言い出すのかと思ったが、ななかちゃんが悩みを言ううとしてるのだろう、彼女の目が真剣だった。

僕は最後まで彼女の言葉を聞くことに集中する。

「周りのみんなから、可愛い可愛いって言われてね……何もしなくても周りがやってくれたりね。私も調子に乗っちゃってたんだと思うんだけど……とにかく、ちやほやされてたの」

そりゃあそうだろう。今でさえ相当なモテっぷりなんだ。子供の時だってモテる事は不思議ではない。

「そうやって、何もしなくても世話をされる事が当たり前な子供時代を過ごしてきたの。だから……なんていうか……相手の気持ちからなくてね。よく言えば世間知らずで、悪く言えば嫌な子供だった」

「……………」

「ある日……クラスの子が私の持ち物を隠すようになったの。最初は本当に意味がわからなくて……どうしてそんな事をされなくちゃいけないんだらうって、すごく悔しくてね。でも、それがいじめだったんだ」

「……………」

それは、クリパ前の、ななかちゃんのクラスメートが彼女のノートを破った時のような、妬みによるイジメなんだろう。

「後で気づいて……気づいた時にはもう遅くて……クラスの女子の大半が……私をいじめるようになってきた。私はどんどん独りになっていった。親しかった友達もみんな気がついていたらいなくなってた。いじめられるのが、どうしてだかわからなかった。辛くて……怖くて……自分がどうしてこんな目に遭わなくちゃいけないのか……そればかり考えて。でも、結局答えは見つからなくて」

その頃のななかちゃんは、今よりも女子と話す機会が少なかったのだろう。だから、女子達の取った行動が心から理解できなかったのだろう。

「ある日……思っただの。いじめられないようにするには、どうすればいいのか。それは……相手の考えてる事がわかればいいんだって」

「……………」

ここから先はなんとなく予想ができた。

「触れるだけで……その人の思ってる事がわかりますようになって」

「ななかちゃん……」

「すごく馬鹿げてるでしょ？ そんな事できるわけがないの……思うよね、普通。でもね……願いは叶ったの」

そうだ。ななかちゃんが嫌に鋭いと思った時は、いつもななかちゃんに手を握られた時だった。

でも、それはなんてことない……ななかちゃんが、人の心を読めるからなんだ。

「こうやって……」

ななかちゃんがそつと、僕の手を握ってきた。

「こうやるだけで、その人の考えがわかるようになったの。でも……今は何も聞こえない」

「……………」

「そうやって……この人はこういう事を思ってる、考えてる。なら私はこう返そうって……その人の喜ぶ事を先にやっちゃうの。そうしたら、その人は私の事をいじめなくなった」

「……………」

「私も……相手の考えてる事がわかったから、安心してまたみんなと遊べるようになった。そうやって……明久君にもみんなにも対応してきたの」

「……………」

「…………ごめんなさい。でも、そうじゃないと……私、怖くて……人が怖くて……」

「…………だよ」

「う……………」

「なんて痛恨のミスを繰り返していたんだよ、僕はあ！」

「……………へ？」

「ってことは何!? 僕の今までの君に対する下心は常に見え見えの状態だったってこと!? 本音召喚獣を介する必要もなく僕の心のうちを読まれてたってこと!? そしてそして、僕の今までの秘蔵コレクションの場所も君には既にお見通しだったって事なの!」

「あ、明久君……?」

なんてことだ! もしそうだとすれば、ななかちゃんに僕の趣味嗜好が筒抜けだったってことか!

いや待て! もうあの秘蔵のコレクションは年末明けに捨てたんだ。それについては何も言われる心配はないと思う。

でも、ななかちゃんと一緒にいる時に考えてる事……そう、例えば

ななかちゃんふたりつきりになって家の明かりだけがぼやつと照らす夜道、誰もいない時を見計らってななかちゃんをわつと驚かせてそれから抱きつき、それから他人には絶対見せられない僕だけのアガルタを——」

「えつと……明久君、途中から声に出てるんだけど……」

「ハッ！ 何やってるんだ僕はあああああ！」

なんて事してるんだ！ 心を読まれる読まれない以前に本人の目の前でなんて失態晒してるんだよ！

「ごめんなさいごめんなさい！ いや、本当にごめんなさい！ でもでも、それはななかちゃんが他の人とは比べ物にならないくらい魅力的であることからして、どんな時でもついついあんなことやこんなことを考えちゃうようになって——つて、だから本人の前で何言ってるんだ僕はあ！」

「え、えつと……」

「……………オホン。とりあえず、ひとつ言わせてもらおうと……」

「明久君、誤魔化し——」

「ひとつ言わせてもらおうと！」

ななかちゃんの台詞にかぶせて僕は言いたい事を言わせてもらおう。

これは決して誤魔化してるわけじゃない、断じて！

「人の心なんてね……わからないのが当たり前なんだよ」

「……………」

「そりゃあ……人の心がわからなくて怖いっていうのは、ほんの少しだけどわかるよ。ななかちゃんくらい可愛い娘ならそういう下心持つてる奴だってそりゃあいるだろうからそういう事に関して不安になるのは仕方ないよね。自分を見ている人が自分の事をどう考えているのかわからない時って、結構不安になったりする時もあるよね。でもね……わからないからこそ、人は体を張ってでも伝えようとするものなんだよ」

僕にだってそういう時はあった。僕は元々頭のいい方じゃないから、前置きみたいな台詞や気の利いた台詞も言えない分、心からの言葉と同時に行動で説得をしようとする事がある。

そして、つい昨日の事もだ。雄二は言葉じゃなく、行動によって僕に大切な事を教えてくれた。

いつもバカだバカだとか言ったり、僕の不幸は自分の不幸だとか言ったりして僕を陥れる事も多いけど……本当に大切な時は発破をかけて僕を奮い立たせてくれる。

だからこそあんな歪んだ形で付き合っても僕達は親友を続けていたんだ。

「相手の気持ちが変わらないのなら聞けばいい。自分の思ってる事を思いつき相手に伝えて自分を見せてやればいい。初めから人の心なんて、読めるものじゃないんだよ。ただ……ななかちゃんは過去の恐怖があって相手に自分を見せる事を忘れちゃったんだね。だから、相手も本当のななかちゃんを知ってくれなくなっちゃったんだよ」

「……でも」

僕の言葉を聞いてもななかちゃんは身体を震わせ、首を振って納得する事ができなかった。

本当はななかちゃんもわかってはいるんだよね。でも、本当に怖いんだ。

今までななかちゃんに接してきた人達の心の内をずっと見てきたんだ。そこには悪意や欲望が大半だったんだろう。

だからこそななかちゃんはほとんどの人達との距離を一定に保つたままだったんだ。

「私、怖いよ……どうしたらいいの？ どうしたら……」

「……ななかちゃん」

「っ！ 来ないで……怖い！」

僕が近づこうとするとななかちゃんは僕を避けて隅へ逃げていく。

「………僕の事も、信用できないの？」

「っ！」

「心が読めなくなったら、今までの僕じゃないって思うの？」

「………そうじゃないけど……でも……」

「……ひとつ聞くけど、僕はななかちゃんに嘘とかついてたかな？」

「……ううん。明久君、いつも正直だったから。というより、わかりや

すかった」

ひとつ訂正したい部分があったけど、今は気にしない。

「そうか……でも、それだけじゃダメなら……今ここで僕は本当の事をいうよ」

「……………」

「僕は、ななかちやんと……他人に言えないような事をしたい！」

「……………へ？」

「もう、片時も君を離したくないって思うよ！　なんていうか、独占欲？　そういうのをずっと我慢してるんだよ。僕らクラスが離れちゃってるから僕がいない間にななかちやんが他の男子とどんな話をしているのかなって思ったり、ななかちやんが悪い男に言い寄られてないかなって不安になったり、でも休み時間や放課後になれば会えなかった分ななかちやんとかかなりイチャイチャしたいって思う！」

そしてみんななどの日常を終えてふたりつきりになればもう夜遅くまでデートして、そんなでもって寝る時だって常に傍に置いてななかちやんの匂いとかやわらかさとか堪能しながら安眠したいっていつも思ってる！　そしてそして、ここからが重要……ななかちやんの髪型をポニーテールにすれば僕の人生薔薇色だ！」

「……………」

「……以上が、僕の本音です」

「えくつと……………」

ななかちやんがなんとも微妙な表情になっていた。そりゃあそうだ。僕のありのままの欲望を全て吐き出したのだから。

これが普通に考えれば引かれる事だというのは百も承知だ。でも、これは全て本気だ。

「それでななかちやん……今の僕の言葉を聞いて、どう思うのか、君の答えを聞かせて」

「え？　その……正直、なんかあつて思うけど……………」

うぐ……………わかってたとはいえ、その返しは非常に痛い。しかも、それが恋人なら尚更だ。

「でも……………そう思うくらい、私の事好きなのかなって、ちよつと嬉し

いって思うところも、ちよつとあつたり……」

「……まあ、早い話がそういう事」

「え？」

「相手の気持ちを知りたければ今みたいに自分の本音を曝け出して、そして相手の答えを聞く。これが大切なんだよ。心が読めなくたって、人の気持ちを知る方法はいくらでもある。僕みたいに恥ずかしいのを承知で本音を明かす事もあれば怒りをぶつけて本音を伝える人だっているし、人に何かを与える事で自分の気持ちを表現する人だっている。そんな具合に、ななかちゃんの気持ちを伝える方法だっていくらでもある筈だよ」

「明久君……」

「僕なんかが偉そうに言えるもんじゃないと思うけど……勇気を出してき、人と向き合ってみよう。もちろん、最初は怖いかもしれないけど……そうやって少しずつ、本当の君をみんなに知ってもらおうよ。もちろん、僕も協力するから」

これは紛れもない僕の本心。みんなに、白河ななかという少女のい所を知ってもらいたいから。

「……明久君、ありがと……」

ななかちゃんは瞼からツ―、と涙を流していく。それから僕の手を握って、

「ごめんなさい……私、がんばるから。みんなに……私の気持ちを、伝えたい……今度は、ズルなしで。だから……」

「うん。ちゃんと僕が、ななかちゃんを支えるから。頑張ろう……勇気を出して」

「うん……」

枯れない桜が枯れたという突然の出来事の後にもたもたでもない真実が発覚したけど、それでも……全てを受け止めて前に進む。

彼女の……本当の白河ななかという少女の始まりは、ここからだ。

第六十五話

放課後……ななかちやんの過去と桜が枯れるまで持っていた能力を知った後で僕とななかちやんは水越病院へと足を運んだ。

もちろん、来た理由はここで入院しているゆずちやんの事だ。心を読む力が失った直後でいきなり対人というのはキツイものがあるかもしれない。

でも、純粹に相手を想って話す事を覚えてもらわなくちやいけな。ななかちやん自身のためにも。

「あ、ななかちやんに明久君」

「あ、慎さん……こんには」

「こ、こんには」

「こんにちは。今日もお見舞いに来てくれたのかな。ありがとう」

「いえ」

「えつと……ゆずちやんは？」

「ああ、今は診察を受けているよ。困った事に、今日も診察から逃げ出そうとしていたところを捕まっただつてさ。ハハハ」

どうやらゆずちやんは今診察中のようだ。

診察から逃げるあたりは普通の子供なのだ。いつも元気すぎるくらいに大笑いしている印象が強い所為かイマイチ想像しづらかった。

「ハハハ……本当に困ったもんだよ」

……なんだか、慎さんの表情が暗い気がする。

「えと……慎さん？ 何かあったんですか？」

能力がなくてもこの手の空気に敏感なななかちやんは慎さんに尋ねる。

「あー、うん……さつきお医者さんに呼ばれてね……ゆずの事でちよつと。……2人はゆずのお友達だから、ちゃんと話した方がいいね。実は、ゆずの奴、手術を受けないと治らない病気なんだ」

慎さんは突然そんな風に言い出した。

「え？」

「うそ……」

これには僕もななちゃんも驚いた。会いに行く度にあんなに元気に走り回ったり突撃かましてきたりするゆずちゃんが……そんなに重い病気を抱えてたなんて。

手術をしないと治らない……あれくらいの小さな女の子からすればそれはどんなに恐い事か。

「それと、その手術も……あまりいいとは言えないんだ」

「良くないっていうのは……一体？」

「助かる確率が低いって事さ」

「っ!？」

「そ、そんなに……？」

「こればかりはね……」

慎さんの話じゃ、この水越病院でゆずちゃんのような難病を持った患者が助かった確率が一番高かったらしいと。

だから、本島の病院からこの初音島の病院へと移ったらしい。腕の立つ医者と、なによりこの島ならではの自然な環境が難病を治したとかで。

「そんなに……重い病気なんですか？」

「そ、そんな風には見えないです……だって、ゆずちゃん、すごい元気で……」

ななちゃんも信じられない気持ちが強いのか、声が荒れてきている。

「あの子も、それが全部わかってるから、あそこまで元気でいられるんだ」

「え？」

「元気に笑って、恐い恐い病気を自分で吹き飛ばそうと必死に生きているんだよ」

「……っ！」

「……」

慎さんの話を聞き、廊下に重い沈黙が流れる。どう言葉をかけたら

いいかわからなくなる。

『あははははははははは！』

その時、病室の方からいつもと同じ、元気すぎるくらいのゆずちゃん
の笑い声が聞こえた。

「本当に、あの元気な笑いで病気が逃げていつてほしいよ」

それに関しては僕も同じ気持ちだった。あんなに小さくても、病気の事は嫌でも理解できるはずだ。

それでも、ゆずちゃんはあんなにも元気に笑って病気と闘っている
というのに。

「でも、じゃ、すぐにでもゆずちゃん、手術を受けなきゃ」

「……………」

「今すぐにでもしなきゃ、手遅れになつたら！」

「待つてななかちゃん。その手術だつて助かる確率は低いっていうんだ
だよ？ ゆずちゃん自身の気持ちもつかないまま先走つても…………」

「そうだけどー！」

「…………ごめんね、2人共」

慎さんが申し訳なきように謝ってきた。

「ゆず本人、それを知つて…………手術を受けたがらないんだ」

「…………ゆずちゃんが？」

「ああ。本人も嫌がつてるうちは、無理に手術を受けさせてもいい事
はないだろうって…………今はまだ様子見になつてるんだ。もちろん、す
ぐにでも手術を受けて助かる確率に賭けたいのは山々なんだけどね。
でも僕自身、どうしていいのかわからなくてね」

慎さんの口調はとても穏やかだが、内心ではゆずちゃんに何もでき
ない自分の事がよっぽど悔しいのだろう。

一人娘が泣かずに一生懸命生きてるのに自分は何もできない…………
それが嫌なんだろう。

手術が成功する見込みが高いのならゆずちゃんもすぐに受けてい
ただろう。でも…………そうじゃないから、怖くて…………ゆずちゃんはずつ
と怯えてるんだ。

「ごめんね、お見舞いに来てくれたのに、こんな暗い話をしちやつて。」

診察ももうすぐ終わりそうだけど、行くかな？」

「……お願いします」

正直、辛い事情を聞いて見舞いどころじゃないと思うけど……それらを全部受け止めて、僕らもゆずちゃんと同じくらい笑って、元気をあげなきや。

すぐには無理でも……ゆずちゃんが手術を受ける決心を後押しできればいいと思った。この時は……。

診察が終わってお医者さんが出ていったと同時に僕とななかちゃんはゆずちゃんの病室へと入っていった。

慎さんはお医者さんと病気についての話があるとかでお医者さんについていって席を外している。

ゆずちゃんも最初はいつも通りの挨拶を交わしてきたのだが、今日は何のお遊びもしていない。

見ればななかちゃんの表情が非常に険しいものになっている。ななかちゃんは、ゆずちゃんの手術の事を考えているのだろう。

「ななか、きようはげんきないな。どうしたー？」

あまり喋っていないななかちゃんにゆずちゃんが心配そうに尋ねた。

「そう？ 私元気だよー」

「そうか？ ならいいけど。そうだ、にいちゃん、ごほんよんでー」

そう言つてゆずちゃんは僕に絵本を手渡してきた。なにになに？

題名は、『さくらひめのでんせつ』？

題名からしてこの島ならではのおとぎ話か何かだろう。本が結構古いのを見るとゆずちゃんのお気に入りなんだろう。

「オーケー」

「やったー！」

「……ねえ、ゆずちゃん」

「んー？」

唐突に、ななかちゃんが静かに喋り始めた。もしかしてななかちゃ

ん、手術の事を言うつもりじゃ。

「ゆずちゃんの病気の事なんだけどね」

それを聞くと、ゆずちゃんの表情が一変した。でも、すぐに笑顔になつてななかちゃんを見た。

「あー、ななかもきいたのか」

あははは、と朗らかに笑う。これだけを見るとそんなに大きい病気と理解しているようには見えない。

「笑つてる場合じゃないよ、ゆずちゃん」

「ん？」

「手術を受けないとダメだよ」

ゆずちゃんがそれを聞いて驚いた。いつも和やかに笑うななかちゃんの真剣な表情と言葉に驚いたのだろう。

「どうしたんだ、ななか？」

「どうしたって、心配だから言ってるんでしょ！」

「ななかちゃん、あまり強く言っても……」

「だって……」

ななかちゃんが心配なのはわかつてる。でも、今ゆずちゃんにそれを言つても受け付けてくれるかどうか。

ゆずちゃんは事態が飲み込めてないのか、僕とななかちゃんを交互に見ていた。

「……ね、ゆずちゃん。手術、頑張つて受けよう？」

「それは無理だ」

即答だった。僕らが鉄人に対してあれこれ言う時と同じかそれ以上の速さである意味感心してしまう。

「無理って……どうということ？」

「しゅじゅつ、しっぱいするかもしれないからな」

「で、でもそれは……このまま放つておいた方が悪くなつちゃうよ？」

そんなのダメだよ

「でもしっぱいしたら、とうちゃんひとりになつちゃうからな」

「……え？」

「しゅじゅつ、しっぱいしたらとうちゃんはひとりになる。でも、しゅ

じゅつしなければすぐにはわるくならない。とうちゃんがひとりに
ならなくてもいいように、とうちゃんをささえてくれるひとがでてく
るまで……しゅじゅつはうけない」

「……ゆずちゃん」

「とうちゃん、さびしがりやなんだー。ゆずがないとなにもできな
い」

そう言つてゆずちゃんはいつもと違つて、寂しそうな顔をした。

ゆずちゃん……手術が怖いというのもだけど、君はお父さんの事も
気にかけて手術を躊躇っているのか。

「だめかー?」

ダメと、すぐにでも言いたい。ここでお父さんを悲しませないため
にも、すぐにでも手術を受けた方がいいと言いたい。

でも、ゆずちゃんのお父さんを想う気持ちもわかるから。

「ダメじゃないよ。ゆずちゃんの気持ちは、すごいわかるから」

「なあ?」

「……嘘だよ」

「え?」

「な、ななかちゃん……?」

「嘘だよ……だつて、お父さんはゆずちゃんの事をすごく心配してい
るんだよ。それなのに、お父さんを理由にするのは卑怯だよ」

「ななかちゃん、それは……」

「本当は恐いだけじゃない。手術を受けるのが恐いだけでしょー!」

「……」

ななかちゃんの言葉にゆずちゃんが初めて動揺して、笑顔が崩れ
た。

「お父さんはゆずちゃんに手術を受けてほしいって思ってるんだよ。
それで、早く良くなつてほしいって思ってるんだよ? それなのに、
ゆずちゃんは心配している相手の気持ちもわからないの? 弱虫だ
よ! どうしてわかつてくれないの!」

「……」

ゆずちゃんはななかちゃんの言葉に啞然としていた。

「な、ななかちゃん、落ち着いて……」

「……でけ」

「え?」

「でてけ!」

ゆずちゃんが僕の持ってた絵本を取り上げて投げつけてきた。

「でてけ、でてけ、でてけでてけ——っ!」

ゆずちゃんの顔からは笑みは消え去り、代わりに怒りや悲しみを露わにして傍に置いてあった絵本やぬいぐるみを滅茶苦茶に投げつけてくる。

「ちよっ、ゆずちゃ……」

「ゆずちゃん、待って。話を……」

「でてけ、でてけ! ななかなんかだいっきらいだ——っ!」

「……っ!」

「でてけ——!」

これでは、まともに話を聞ける状態じゃない。僕はななかちゃんを連れて病室を出て行く。

「でてけ! もうくるな——っ!」

ゆずちゃんの拒絶の言葉を背に受けて。

僕は、まだ寒さの残ってる空の下を歩いていった。

あの後、騒ぎを聞きつけた看護師さんにゆずちゃんを任せることになった。

どうにか看護師さんがゆずちゃんを押さえる事はできたけど、ゆずちゃんと僕達の間大きな溝を作ったのは確かだろう。

「……ダメだね、私……」

帰り道の途中、ななかちゃんがポツリと呟いた。

「ゆずちゃんに、早く元気になつてもらいたかっただけなのに」

「まあ……ななかちゃんの言う事が間違いつてわけじゃないと思う

よ。でも、ゆずちゃんの気持ちもわかるんだ。あんなに小さい子に病気の重さを知るだけでもとても恐ろしい事だろうし……それが怖いと思うのは当然だよ」

「……そう、だよね。私……ゆずちゃんの気持ち、考えてなかった……やっぱり、心が読めなくちゃ、私なんて……」

ななかちゃんはゆずちゃんに言った言葉を悔やむように拳を握る。

「私……嫌われちゃったかな」

ななかちゃんが本当に辛そうに呟く。

「……嫌われた、わけじゃないと思うよ。ただ……いきなり言われた事でショックが大きかったんだと思うよ。多分、ゆずちゃんも本当は治すために手術を受けなきゃいけないのは理解してたんだと思うよ。でも……やっぱり病気は怖いから……死ぬのが怖いから、無意識のうちにその事を目に入れないようにしてたんだと思う」

「……………」

「……今日は帰ろう。ゆずちゃんの事に関しては、もう少し時間を置いて考えよう。ななかちゃんも……今は心の整理が必要だろうから」

「……明久君」

「ん？」

ななかちゃんが僕の名前を呼ぶと同時に僕の服の裾を指で掴んできた。

「……明日……一緒に……」

か細い声でそう言った。今日は色々あったわけだし……不安になつてもしょうがない。

「うん。そうしよう」

これからのためにも、今はななかちゃんの不安をどうにかしなきゃね。

枯れない桜が枯れた翌日の週末。外は雪だった。

その中で、僕はななかちゃんとデートしている。昨日、今まで自分の半身とも言える力を失い、ゆずちゃんとも喧嘩をしてみました。

その事から不安になっていいるななかちゃんを少しでも元気づけられればと思った。

そして僕は今待ち合わせ場所であるCDショップの中にいた。

「明久君……」

消えそうなほど小さな声で呼ばれた。振り返ると私服姿のななかちゃんがいた。

「あ、ななかちゃん。待ってたの？」

「……ううん、今来たところ。遅くなった、かな……」

「ううん。僕もほんの数分前に来たところだし」

「……」

昨日に引き続いてななかちゃんの表情は暗いままだった。それから何かに怯えるように僕の服を掴んでくる。

「ななかちゃん、どうかした？」

「………なんでもないよ」

口では言うが、やはり表情が優れていない。

「………何処か、別の場所に移動する？」

僕はななかちゃんに店の外に行く事を促すが、

「……」

ななかちゃんが掴んでいる服を強く引つ張って首を振った。

「……大丈夫？ どこか具合が悪いとか？」

「な………なんでもない……」

「本当に、大丈夫？」

「大丈夫」

不安たつぷりの声で呟いた。とりあえず店の外には出るけど、ななかちゃんの表情は暗いままだ。

「とりあえず………こんなに綺麗な雪なんだし、高台とかに行こうか？」

「う、うん……」

ななかちやんは僕にくつつきっぱなしで、少しも離れようとしなかった。

そして、過剰なまでに周囲を気にしているようだった。

「ななかちやん……」

「……怖いの」

「……………」

「みんなが……私の悪口を言っている気がして……」

「……………」

仕方もない。ななかちやんは今までずっと人の心を読みながら生きていたんだ。

それがななかちやんを支えていた。その支えがなくなった今、ななかちやんの心は今にも崩れそうなほど罅だらけになっているに違いない。

その所為か、僕にくつついて今までの習慣なのか、必死に僕の心を読もうとしているのが表情でわかる。

こうなると人ごみは避けた方がいいのかもしれない。

「それじゃ、行こうか」

「……………」

そして、僕達は高台へ行くために、できるだけ人通りの少ない場所から行った。

高台に着くと、今日の天気が雪だったためか、人がいなかった。

人がいないからか、ななかちやんも徐々に落ち着きを取り戻しているようだ。

ただ……やっぱり不安な表情はぬぐい去れないままになっていた。

「雪景色が綺麗だなあ……今までが桜ばかりだったけど、今は真っ白になつて綺麗だよ」

「……………」

ななかちゃんは僕にしがみついたまま僕と同じ景色を眺めていた。どうにかならないかなと思った所に、甘いクリームと果物の匂いが漂ってきた。

匂いにつられて視線を移すと、クレープの屋台が出ていた。

「ななかちゃん、ちよつと待ってて。クレープ買ってくるから」

「え？」

「味は、何がいいかな？ いちごか、チョコか……………」

「だ、だめ……………」

「ああ、でも…………キウイかパイナップルも捨てがたいし……………」

「だめ…………だめ……………」

「…………って、ななかちゃん？」

「だめえっ！」

突然、ななかちゃんが大きな声を出して僕に強くしがみついた。

「え？ な、ななかちゃん？」

「だめえ…………離れちゃ、だめえ……………」

ひどく怯えた様子で、今にも泣きそうな子供のように言われた。

彼女の不安がここまでひどくなっていたとは。

「わ、わかったよ…………大丈夫。離れたりしないから、ね？」

僕は彼女を包むように抱いてそつと座らせる。

「明久君…………明久君……………」

「大丈夫だから…………何処にも行かないから。もう離れないよ」

僕はななかちゃんを愛惜するように、震えるななかちゃんをずつと抱いたままその場所を動かないまま、その日を過ごした。

ななかちゃんの事…………思った以上に深刻なのかもしれない。

僕ひとりで、いつまでも支えられそうにない。どうにかしないと…………。

「——と、いう事があつてさ」

「ふむ、なるほどの。それほど深刻な事になっておったか」

「随分とキツイな……」

デートを終えてななかちゃんを送り帰した後、芳乃家に戻って秀吉と義之にはななかちゃんの現状を伝えた。

とりあえずななかちゃんの力の事は抜いて過去の事もほんの少しだけ打ち明けた。

「まさか、白河がそのような過去を持っておったとはの」

「まあ、白河が可愛いのは事実だからな。そういうモテモテな事もあるれば嫉妬で苛められるなんて事もあるよな。女の嫉妬つてのは結構怖いもんだしな」

「姫路や島田がこういう時に限ってはいいい例じやの」

「ん？ 何でそこで姫路さんと美波が出てくるの？」

あの2人が嫉妬なんてするのだろうか？ 僕には常に殺気ばかりだったけど。

「……とりあえず、そこは置いとこう。問題はどうかやって白河を立ち直らせるか、だな」

「う、うむ……出来る限り早い方がいいじやろう。お主らは近いうちにオンエアコロシウムというものに出るのじやろ？」

「ああ、そういえばそれもあつた……」

「枯れない桜とななかちゃんの事で忘れてたよ」

色々あつたからイベント事に関しては頭から離れていたよ。

「しかし……いい案が浮かばねえな。あの人に苛められるとかどうなら苛めてる奴にちよつくら説教すれば終わりだろうけど、今回はな……」

「小さな友人を怒らせてしまい、更に小さい頃の嫌な記憶が蘇って他人に対して過剰な恐怖を抱いておる……下手に刺激すれば逆効果になりかねんぞい」

「かといって……人と接しない事には前進は望めないだろうしなあ」

困った状況だ。ただアレコレ説教じみた事を言うだけなら簡単なのだが、ななかちゃんの心に刻み込まれた恐怖はそう簡単にぬぐい去れるものではない。

ちよつと対人方法を享受する程度じゃ回復できそうにない。

「どうにか心の内とか関係なく相手と話せるよう、背中を押せばいいんだけど……」

「今の状態では、それは無理じゃろうな」

困った……人と話すどころか、近づくだけで恐怖心が身体を支配する今の段階ではどうすることもできそうにない。

誰か優秀な精神科かカウンセラーでもいればいいけど、生憎両方初音島にはないようだ。

もう八方塞がりだ。こればかりは時間に任せるしかないのかと思っていた時。

「……何をしてるの？」

「あ、霧島さん。お帰り」

「……ただいま」

「おお、戻っておったのか。して……雄二は何処におるのじゃ？」

「そういえば、いつもくっついてるのに……」

「雄二なら……」

「むく！ むむく！」

「なるほど、いつものですか。では、夕飯までどうぞゆっくり」

「……行ってくる」

「むむく!!」

雄二が僕に向かってアイコンタクトを試みてきた。

えくつと、何々？ 『テメエ、この状態の俺を放っておくつもりか！

このままじゃ俺の人生が終わっちゃう！』か。

うむ、僕もアイコンタクトを返して……『雄二の人生なんて、既に霧島さん色に染まりつつあるんだからもう今更じゃん』。

「むがが——っ!!」

『薄情者お——!』か。『今まで受けた僕の気持ちを思い知れ』。よし、アイコンタクトによる会話はこれで終了。

「ふう……」

「なあ、木下。あいつらはあれだけ通じ合ってなんでお互い見捨てたり陥れたりするんだ？」

「さあの……そればかりは儂にはわからん」

「はあ……白河もあれだけ通じ合える能力でもあれば話は違つただろうけどな」

実はつい最近までなかなかちゃんは人の心を読む能力を有していた、とは言えまい。

普通なら信じられないだろうけど、ここにいる人達って、こういうの信じやすい感じがするからなあ。

にしても、心を読むかあ……。確かに、それだけ気持ちに通じ合えるくらいの間柄を持つ者がいれば話は別なんだろうな。

残念ながら恋人でも僕はそこまでなかなかちゃんの気持ちを感じる事はできても理解するには足りないしなあ。

どうにか相手と向き合うという行為がどういったものかを教えてあげられればいいんだけど。

「……あ」

そうだ。もしかしたらいけるかもしれない方法が、ひとつある。

「どうしたのじゃ、明久？」

「……秀吉、ちよつと協力してもらいたい事があるんだけど」

できるかわからないけど、方法はこれしかない。

「……ふう」

週が明けて学園へと向かう途中の桜並木……じゃないか。もう桜はないから。

桜は枯れて……代わりに週末に降っていた雪が木の枝と道路にまだ積もっていた。

誰も歩いていない通学路をひとり歩いていた。

誰もいないのは人通りの少ない時間を選んでというわけじゃない。もちろん、今日はそうしようとしていた。

でも、今朝早くに明久君からメールが来た。何だろうと思つて携帯を見るとそこには、『大事な話があるから、朝の6時に、学校の屋上に来て』という内容だった。

大事な話か……ゆずちゃんの事？ バンドの事？ それとも、今の私の事？

私だつて……できることなら正面から向き合えるようになりたい。でも……どうしても昔の事とかが頭から離れなくて、みんなの私を見る目がどれも汚く見えちゃう。

どうしたらいいのかという考えを頭の中で無限ループさせながら私は学園へと足を運んだ。

それからは校舎に入り、屋上へ向かつていき、いぎ屋上の入口が見えた時だった。

『……だ？ ……さ』

『ちよつと……しがあ……』

「ん？」

扉に手をかけようとしたところで声が聞こえた。今のは、明久君と……坂本君かな。

何か話してるみたい。でも、何で私を呼びつけておいて坂本君と話してるんだろう。

私は話の内容が気になつて扉の前で聞き耳を立てる。

『……話つて、何のことだ？』

『いや、なんていうかさ……いい加減に素直になれって思つてさ』

『は？ どういう意味だ？』

『どういうつて……霧島さんの事だよ』

『……いきなり朝っぱらからこんな所に呼びつけておいて何だと思つたら、んなくだらねえ事のために呼んだのか？ 悪いが俺は戻るぞ。それに、翔子の事はテメエには関係ねえだろ』

『関係ないわけないだろ！ 初めての試召戦争からずっと霧島さんはお前に好きって言ってるのに、何でお前はずっと答えを言わないんだよ！ 霧島さんはずっとお前の答えを待ってるっていうのに、何でお前は彼女の想いから逃げ続けてるんだよ！』

『うつせえんだよ！ 翔子の気持ちは勘違いだと言ってんだ！ アイツの気持ちは向ける相手が違うんだよ！』

『ふぎけんな！ 霧島さんは小学生の頃からずっと雄二の事を好きだと言ってんだ！ それを勘違いの一言で切り捨てんじやねえよ！』

『どうやら明久君は坂本君と霧島さんの関係について話してるようだった。』

『そういえば、霧島さんはずっと坂本君にアプローチをかけてたんだっけ。ただ、ちよつとそのアプローチのレベルが高いけど。』

『でも、それでも坂本君はずっと霧島さんの想いに応えてなかった。明久君はそれについて問うてるみたい。』

『だあ、うつせえな！ 翔子の気持ちは俺がどう答えようが、テメエには関係のねえ事だと言ってんだろうが！』

『だったら答えろよ、今すぐ！ 彼女の目の前で！ 言えないのか！ 理由が何かはわからないけど、お前は彼女から逃げてるだけの腰抜けだ！ 霧島さんの好意を受け止めるのが怖いだけのただの腰抜けだ！』

『っ！ なんだと、テメエ！』

ドゴツ！ という音と共に誰かが倒れこむ音が聞こえた。

『いちいちうつせえんだよ！ んなもん、テメエに言われなくたってわかってんだよ！』

『だったら！』

『けど、今の俺にはアイツに言う言葉がねえんだ！ 今の俺にはな！』

『アイツに勘違いだとわからせて、別の生き方を与えるには試召戦争しかなかった……。だが、こつちにはそんなシステムはねえ。だからもうアイツに何て言えばいいのかわからねえんだよ』

『……じゃあさ、せめてまずは霧島さんと向き合って考えてみるよ』

『……………』

『それで、改めて自分の心に素直になってみるよ。答えはそれから考えたっていいだろ……』

『……………ふん』

それからしばらくすると扉が開いて明久君が通ってきた。頬を腫らした状態で。

「明久君っ!？」

「あ、ななかちちゃん。来てたんだね」

「そうじゃなくて、どうしたの？ こんなところで坂本君と……」

「うん。いい機会だからななかちちゃんに教えようと思ったんだ。人と正面から向き合うっていうのが何なのかを」

「……………」

「ただ自分の気持ちを言ったって、昨日のゆずちゃんみたいになようになつたり、今みたいに雄二に殴られたりってような状況にもなつたりする事もあるよ。でもね、そうやって喧嘩していく事で、初めて互いの気持ちを理解する事だつてある」

「……………」

「確かに昨日ななかちちゃんが言った通り、ゆずちゃんは手術から逃げるために慎さんの事を言い訳に使ったかもしれない。でも、それが全くの嘘つてわけでもないと思うんだ」

「……………え?」

「そりゃあ、手術が失敗して死んじゃうかもしれないのは本心だろうし……大好きなお父さんをたつたひとりにしちゃうかもしれないってのも、ゆずちゃんなりに色々考えた事なんじゃないかって思うんだ」

「……………」

「ななかちちゃんは、ゆずちゃんの本心はどうなんだって事ばかりに気がいっちゃってゆずちゃんの怖さばかり感じちゃったんじゃないかな？ でもね、本心っていうのは決して一本筋つてわけでもないんだ。怒りを抱いていながらも、深いところではそれは相手を想つての事だつてあるだろうし……人と繋がるのが怖い……それでも、どうにか繋がりたい。人の心つて、そんなもんじゃないかな」

「……………」

「だからさ、ななかちちゃん。歌を唄おうよ」

「え？」

明久君が突然変な事を言った。歌って……何で今そんな事を？

「僕達のバンドで……オンコロでななかちゃんの歌をゆずちゃんに向けて届けるんだよ。ゆずちゃんに向けて、心から声を張り上げて。ゆずちゃんもきつと、聞いてくれるよ。それを信じて、唄うんだよ。そうやって、ななかちゃんの気持ちを全部歌に乗せてゆずちゃんに届けるんだ」

ゆずちゃんに、届ける……。自分の気持ちを乗せて……。

「歌でゆずちゃんに想いを届けて、それからまたゆずちゃんに改めてななかちゃんが、心からの言葉を送るんだよ。また喧嘩になったとしても、くじけずに……。何度だって、ななかちゃんの言葉で、伝えるんだよ」

「……………うん」

明久君の言葉に、頷いた。明久君が教えてくれた……体を張って。

坂本君の気持ちをその身で受け止めて、それを私に見せて、人の想いの伝え合いというものを教えてくれた。

明久君が必死に教えてくれた事を、無駄にしないためにも、私自身のためにも、

「私、唄うよ。それで……もう一度ゆずちゃんとお話したい。謝って、励まして……それから、これからの事を」

「うん、それでいいんだよ。それが、ななかちゃんの気持ち。その気持ちを伝えて、ようやく始まるんだ」

「うん」

「それじゃあ、今日からオンコロに向けて猛特訓だ。随分と休んじやったからね」

「最初は明久君が悩んでたからなんだけどね」

「うぐ……それについては、ごめん」

「あはは」

もう不安なんて消えた。きつと、伝えられる。明久君といれば。

胸の奥に渦巻いていたものが消え、代わりに暖かいものが生まれたのを感じながら私は明久君と校舎を歩いた。

「……やれやれ、ようやく戻ったかの」

「……どうにか白河の不安は取り除けたようだ」

屋上の扉で2人の会話を聞きながら儂らはほっとした。

ちなみにここにいるのは儂とムツツリーニの2人だけじゃ。昨日、明久から頼まれた。

ここで儂が雄二のフリをし、喧嘩を繰り広げる演技を依頼されたのじゃ。白河の元気を取り戻すために。

結果はどうやらうまくいったようじゃの。

「一時はどうなることかと思ったが、これで少しは前に進めるじやろ」

「……乞うご期待」

「うむ」

儂らが頷きあつたところで、

『うおおおおおおお!!』

『……雄二、桜が枯れた今こそ、子作りしてもう一度桜を咲かせる』

『そんなんで桜が咲くわけねえだろお!』

『……できる。私と雄二の愛なら』

『そこに愛なんてねえええええ!』

校外で雄二と霧島がいつもの追いかけてっこをしていたようじゃ。

「やれやれ、さっきの明久の台詞通り、雄二ももう少し自分の心と向き合えぬのかの」

「……素直じゃない」

今度はこちらの方に手を回す必要があるのやもしれん。これからも儂は苦労が続くのじやろうかと溜息をつきながら空を眺めた。

第六十六話

「♪~~~~♪~~~~」

秀吉に頼んで屋上で雄二と喧嘩している演技を手伝ってもらった日の放課後。

僕とななかちゃん、更に義之達を入れたバンドメンバーは今日から音楽室でオンコロの練習を再開した。

間が空いたからみんなは音を合わせる事に集中している。だけど、そんな中でななかちゃんはかなり気合が入っている。

気合を入れてるあまり、たまに飛ばしてるところもあるけど、今までよりもかなり魂がこもっているのがわかる。

やっぱりゆずちゃんのために歌いたいっていう想いが強いからだろう。実はこれでもう十何回も反復して練習している。

何曲か繰り返し返して演奏してから流石に疲れたので少し休憩を挟むことにした。

「っは〜！ 今日はいち早く気合入ったな〜」

「うん……今日のななかの歌、すごい気合入ってたよ」

「おうおう！ 今日の白河、すげえ燃えてたぜ！　なんか、すげえ気持ち抱えてるんだなって感じだったぜ！」

渉、意外と鋭い。ななかちゃんは今まさにゆずちゃんのために改めて唄う事を決心したのだから。

「うん、ちよつとね」

渉の言葉に笑顔で答えるななかちゃん。バンドメンバー達に対してはようやく自然な笑顔で接する事はできるようだ。

リハビリも含めて今こうしてバンドの練習をするのはななかちゃんにとってはいいい傾向だと思う。

こうして少しずつ自分を見せる事を一から覚えなおしていけば近いうちにきつと僕達と同じようになれるはずだ。

「で、明久。実際はどうなんだ？　白河の調子」

後ろから義之が尋ねてきた。少し前までの白河さんの事で気に

なっているんだろう。

「ん……まだ完全とはいかないけど、少しずつ前には進んでいると思うよ」

「そうか……」

僕の言葉に頷いて義之は再び曲の見直しに入った。

まだ心配だろうけど、今は黙って見守ってくれるつもりなんだろう。

親友の小恋ちゃんや渉だってななかちゃんの様子には疑問を感じていただろう。でも、2人共それについては触れない。

きつとみんなななかちゃんを信じてくれるという事なのだろう。ななかちゃんにだって、こんなな想ってくれる人がいるんだ。きつと彼女もすぐに気づいてくれると信じてる。

僕も休憩を終え、その後の練習もかなり気合を入れた。

バンドの練習後、僕達はまたゆずちゃんのいる水越病院へと訪れた。

理由は無論、ななかちゃんがゆずちゃんに謝りたいと言い出したからだ。

もう一度話をして、彼女に今度こそななかちゃんの想いを伝えられるようにと。

……その筈だったんだけど。

「ごめんね。ゆずのやつ、まだ機嫌悪くて」

病室前の廊下には『面会謝絶』の札がかかっていた。

ゆずちゃんの病室には『面会謝絶』の札がかかっていた。

「ゆずちゃん、面会謝絶なんですか?」

「あ……うん。実は……」

「どうして?」

ななかちちゃんの疑問に慎さんは言いづらそうに表情を曇らせてから、

「……実はちょっと、ゆずの病状が悪化してね」
「っー」

慎さんの宣告にななかちゃんが驚愕の表情を浮かべた。かくいう僕も同じくらい驚いていただろう。

僕達の様子に気づいた慎さんが慌てて、

「ああ、いやごめん。もう峠は越したからとりあえずは大丈夫なんだけどね。しばらくは安静だけど。けど、本人はいたって元気だね。早く外であそびたいなんて言ってるくらいだしね」

「はは、ゆずちゃんらしいですね」

「……私と喧嘩しちゃったから、ゆずちゃん」

ななかちゃんは喧嘩したことによるストレスでゆずちゃんの病状が悪化したのではないかと責任を感じていた。

「いや、そんな気にしないで」

「ななかちゃん……」

「……………」

しばらくシユンと落ち込んだななかちゃんは顔を上げて慎さんを真剣に見つめた。

「あの、じゃあこれ、ゆずちゃんに渡してもらえませんか？」

そう言っとななかちゃんは一通の手紙を慎さんに手渡した。

「やあ、手紙だね」

「はい。会えないのならせめて、手紙を読んでほしいなって。私、こんどゆずちゃんの大好きなラジオ番組に出るんです。それを、絶対にゆずちゃんに聴いてほしくて……その事を書いておきました」

「ラジオ番組っていうと……『オンエアコロシウム』の事かい？」

「はい」

「おお、アレに出るのかい？　すごいね、ななかちゃん！」

「もちろん、明久君も含めて5人のバンドメンバーで」

「ああ、そういえばゆずが言ってたよ！　明久君もバンドのメンバーなんだって。いや、すごいね〜！」

「いえ、そんな大したものじゃないですよ。それに、僕もゆずちゃんにはななちやんの歌を聴いてほしいですから」

「これはぜひともゆずに読んでもらわないといけない手紙だね。わかった、これは僕が責任を持って渡します」

「ありがとうございますー！」

慎さんの言葉にななちやんが笑顔になって頭を下げる。

これでやることはやりきった。後は本番に向けての練習に集中するだけだ。

時は流れ、最後に水越病院へ訪れてから10日後……。

遂に時が来た。僕は深呼吸しながら目の前の建物を見上げた。

「遂に来たね……」

「まあな」

今僕達がいるのはスタジオ・ヴォルケーノ。オンコロが開かれる場所だった。

そう、今日が本番の日。参加10組のうち、上位5位に入ることができれば僕達の演奏が島中に流れる。

もし自分達の演奏がこの放送局から電波に乗って島中のラジオに流れ、それが人々の耳に触れるかもしれないという状況に興奮を覚える。

「どうした、明久。緊張してるのか？」

「あはは……それもあるけど、やっぱり本番が楽しみで」

「奇遇だな。俺も同じ事考えてた」

「あ、やっぱり」

僕でも緊張すると同時に感激を覚えてるんだ。元々音楽を志した義之なら尚更だろ。

「ちよつぷ」

「いたっ！」

突如、後頭部に衝撃があった。

「おいっす！」

「あ、ななかちゃん……おいっす」

「こんな所で突っ立って、何してるの？」

「いやあ……ここで僕達、演奏するんだなって。それで、ななかちゃんの歌が電波に乗るんだなって思うと……色々と、ね」

「まだ私達の歌がオンエアされるって決まったわけじゃないのに」

「いや、ななかちゃんの歌なら間違いなく上位間違いなしだよ」

「それに関しては同感だ」

「ふ、2人共……あんまりプレッシャーのかかる事言わないで。そうじゃなくて、昨日緊張してあんまり眠れなかったんだからー」

「実は俺もだ」

「生放送じゃなかったのが救いだっただね」

そう。まずはスタジオ内で一通り参加者の演奏を収録し、そこから選ばれた上位5組の演奏をオンエアするというものだ。

「しかし、白河でも中々寝付けないとなると、小恋はガチガチになって今でもベッドから抜け出せなかったりしてな」

「確かに……」

「むむ、2人共失礼だよ」

僕達が話し合っていると、後ろからととと、と足音を立てながら小恋ちゃんと渉が走ってきた。

「お、ちゃんと来れたな」

「んも、義之じゃないんだから。キッチンと目覚ましをかけて時間通りに起きました」

「俺も俺も。目覚まし5つ程使って起きたぜ」

「数が多すぎるだろ」

「だってよだってよ、今日は夢にまで見たオンコロなんだぞ。それくらいしいてもまだ準備としちや物足りないくらいなんだよ。」

俺だって緊張して寝付けなかったからそんだけ用意したっていう

のに、危うく二度寝するところだったぜ」

バンドメンバーが全員来た事により、僕の中の緊張が少しほぐれた気がする。

「んじや、全員揃ったところで、受付済ませましょか！」

「おう！」

「そだね！」

渉を先頭に、僕達はスタジオ内に入っていった。

中は既に人で溢れていた。お客さんと、演奏する側がロビーにひしめき合っていた。

お客さんの中には応援に駆けつけた人達が多いのか、バンドの人達とお客さんの友達とで親しげに喋り合っている姿が見える。

「なんか、ほんとすごいね」

「うん」

学園祭で見えるものとは違ったテンションに僕達が飲まれそうになる。

「はい、ではこちらが番号札になります」

受付で僕達が渡された番号札は10番。どうやら僕達はオーラス……一番最後のようだ。

「こちらにある番号と同じ番号の書いてある張り紙が張つてある控え室でお待ちになってください」

僕達は渡された番号札を胸につけて控え室へと移動した。

『おまたせしましたー！ ただいまより、第64回、オンエアコロシアルムを開催しま——つす！』

控え室のスピーカーからそんなテンションの高い司会の声が聞こえてきた。

どうやらいよいよオンエアコロシアルムが始まったようだ。

「う、うわ……す、すすすす、すごい緊張してきたよ」

「じ、実は俺も……」

「私も」

小恋ちゃん、渉、ななかちゃんが緊張して椅子に座って縮こまっていた。

「ど、どどど、どうしよう？ 大丈夫だよ？ 大丈夫なんだよね？」

「小恋、落ち着け。大丈夫だって……あんだだけ練習したんだからさ」

「う、うん……」

義之が小恋ちゃんの緊張をほぐそうと喋っていた。

「あ、明久君……」

「ん？」

「手……握っていい、かな？」

「……うん」

僕は頷いてななかちゃんの手をそつと握った。ななかちゃんも僕の手を握り返して、同時に別の意味で緊張してきた。

だけど、さっきまでの緊張とは違って、不思議と落ち着いてくる。

「ねえ、明久君」

「何かな？」

「私ね……今、思ったんだ。バンドをやって、本当によかったって」

少し緊張気味に見つめながらそう呟いた。

「バンドを始める前まで、こんな事になるなんて夢にも思ってた。今までと何も変わらない、平凡な毎日がずっと続いていくもんだって思ってた。他人の心を読んで、上辺だけの付き合いをして、自分が傷つかないように、周りの人の気持ちからずっと逃げ続けて……」

「……………」

もし、もし僕も、ここに来る前の生活が続いていたら……どうなったんだろうって思うこともある。

正直、地獄しか思い浮かばないのが本音だけど……それを抜いて、文月学園を卒業できたら、そしたら僕は何をやるのだろうか。そんな漠然とした別の未来を。

「でもね、今は違う。明久君に出会って、バンドを始めて……小恋や板橋君、義之君にも迷惑かけて、ゆずちゃんのことを傷つけてしまった

けど。でも、同じくらい……すごく大切な事を教えてもらった。本当に感謝してるの。だから、それを伝えたいんだ。私の傍にいてくれた、かけがえのない大切な人達に。こんな卑怯でバカな私の傍にずっといてくれたみんなに、ごめんなさい。そして、ありがとうって。私の気持ちを、歌で伝えたい」

決意の籠った、まつすぐな目で僕を見ながらななかちゃんの心からの言葉を口にする。

僕だって、みんなに感謝している。こうして出会えたのは本当に偶然だった。本来、こうやって出会える事なんてなかったかもしれない。

でも、僕はみんなと出会い、こうして今を生きていられる。大切な人達がいて、それらが僕を支えてくれて……本当によかったって思ってる。

ななかちゃんと同じように、僕もみんなに感謝してるから……ななかちゃんの言葉に強く頷いた。

「じゃあ、今日は最高の演奏と歌を披露しないとね。もう、どんなに遠い所においてもハッキリ聞こえるくらい、ドデカイ演奏をね」

「うんー！」

改めて決意を固めたところで控え室に設置されたスピーカーから音が聞こえる。

『続きましてー、エントリーナンバー9番！』

それが流れると室内の空気が瞬く間に固まるのがわかった。

「つ、次だよ……次になっちゃったよ！ なっちゃったよ！」

「月島、落ち着け！ こういう時は深呼吸しながら素数を数えるんだ！ えつと、1、2、3、4……」

「お前も落ち着け。それただ数字を順番に言ってるだけだからな」

そんな光景を見て密かに心を落ち着けていたところに控え室にスタッフの人がやってきた。

「そろそろ出番なので、ステージ裏で待機してください」

「は、はい」

「すぐに」

「す〜、は〜……」

僕の隣で大きく深呼吸しているななかちゃんを見て、なんとなく可愛いと思ってしまった。

不謹慎にも顔がゆるむのを必死にこらえながら、僕はななかちゃんの背中を押す。

「じゃ、行こうか」

「うんー」

控え室から出ていぎステージを行こうとしたところで、僕のポケットの中で携帯が振動していた。

「ん？ 誰だろう？」

「明久、流石に今日は電源切っておくくらいしとけ。本番で鳴ったら面倒だしさ」

「あ、ごめん。とりあえず」

僕は控え室内に戻り、携帯の通話ボタンを押して耳に当てる。

「はい、もしもし？」

『あ、もしもし？ 明久君かい？』

「あれ？ 慎さん？」

控え室から出たななかちゃんが僕の声を聞きつけたのか、戻ってきた。

『もう出番なのかな？ それとも、もう終わったのかな？』

「いえ。ちょうど次が出番なんですよ」

『そうか、よかった間に合って。実は……今日、ゆずが手術を受ける事になったんだよ』

「え？ ゆずちゃんが、手術——って、あれ？ 携帯が？」

「あの、ゆずちゃん大丈夫なんですか!？」

「あれ、ななかちゃんいつの間に……」

いつの間にやら慌てた様子だななかちゃんに携帯を奪われていた。『あ、ななかちゃん。うん、どうにか説得してね。どうにか昨日の夜、

ようやく手術を受ける事を決心してくれたんだよ』

「よかった……」

『ゆずがね、ななかちゃんと明久君ががんばるんだから、自分も負けな

いって言ってくれてね』

「ゆずちゃん……」

慎さんの言葉を聞いてななかちゃんは嬉しい気持ちと一緒に涙が溢れそうになった。

『ちようどこつちも、今から手術なんだよ。それで、先生にラジオを持ち込んでいいかどうか尋ねたらいいって言ってくれたから。これで、君達の演奏が聞けるって言ったなら、ゆずも安心してくれてね』

「が、がんばるから……私達、がんばるから、ゆずちゃんも！」

『ああ。そう伝えるよ』

それからななかちゃんが携帯を僕に返す。その目に涙を溜めながら。

でも、決して流そうとしない。僕も正直感動して泣きたい気分だけど、そんな場合じゃない。

この涙は……ゆずちゃんが治るまでとっておくんだ。

「僕からも、ゆずちゃんに……僕達の気持ち、全部送ってあげるから、ゆずちゃんも病気に負けないで、頑張って。そう伝えてください」

『ああ。明久君達も、頑張って！』

「ういーっす！」

元気よく頷いてから携帯の通話を切り、電源もオフにすると同時に前の組のバンドの演奏が終わったようだ。

「次の方、準備してくださいーい！」

「はーい！ ただいま！」

スタッフの人の言葉に返事してからななかちゃんへと向き直る。

「……………」

「行こう、ななかちゃん」

「……………うん！」

僕がななかちゃんへ手を差し伸べるとななかちゃんはそれを握り、一緒にステージへと向かって歩みだす。

それから、ステージ裏へ行き、いざ本番が訪れる。

僕達は勢いよくステージへと飛び出した。飛び出して最初に目に

したのは何色にも光るスポットライト。

そして、視界の大半を観客が埋め尽くしていた。

「うへへ……わかっていたけど、やっぱりこんだけの観客がいると緊張するぜ」

「そういえば……バンド組んでステージに立つ事自体、今回が初めてだった」

「俺なんて、バンド組む事がそもそも初めてなんだが……」

「みんな、色々言いたい事盛りだくさんだと思うけど……今日は主役に言わせてあげなつて」

「……おう」

「だな」

僕達は視線をステージの真ん中に、マイクの前に立つななかちゃんへと移す。

「この歌を」

ななかちゃんがマイクを通じて観客席にその声を響かせる。途端、水を打ったように静まり返った。

「私の大切な人のために、私のかけがえないのいない人達と共に歌います。聴いてください。『まぶしくてみえない』」

そして、演奏が始まった。義之のギターが小さく響き、それから小恋ちゃんの繊細なベースが義之のギターと絡み合い、音の波が。次いで渉が派手そうでいて優しいドラムを。そこから僕のキーボードで音に深みを……最後にななかちゃんの歌が僕達の音の波に乗って会場内に響いていく。

僕達のこの演奏が、あの子に届くように。ただそれだけのために、僕達の力の限りを、あの子のために。

第六十七話

「ふう……ちそうさまじゃ」

儂は今芳乃家にてひとりっきりの食事をしておった。

今日は明久と義之が例のオンエアコロシムに出ていったために朝食はレトルトになった。

ちなみに雄二と霧島はというと、朝っぱらから映画に行くと言った雄二をスタンガンで気絶させて引張って出かけて行った。あれはもはや完全に賤奴じゃの。

普通ならツツコミどころ満載の朝じゃろうが、儂らとしてはこれが日常と化しておるからのお。

普段なら音姫先輩あたりが朝食を作ってくれるのじゃが、今日が義之が出かけると言っておったから今日は来ておらん。

音姫先輩や由夢ちゃんがこっちに来るのは決まって義之と過ぎしたいがためじゃからの。わかつてはおるのじゃが、こうなると些か寂しいものじゃの。

「ふう……ひとりっきりというのはやはり暇じゃのう」

ふと呟いたが、儂の言葉に答える者はこの場にはおらんかった。

「……仕方ない。儂もどこか出かけるかの」

このままここにいる暇も持て余すだけじゃからの。儂は部屋に戻って普段着に着替えて軽く身支度を済ませて出かけた。

一応断っておくが、普段着というのは男物じゃからの！ 勘違いのないように言っておくぞい！

「しかし、どうしたものかの……」

暇つぶしに外に出たのはいいのじゃが、どこへ行つて暇を潰せばよいものじゃかわからんのう。

服屋は演劇用がないか島中の店は行き尽くしたからのう。

だからというて、桜が枯れてしまった今、桜並木道や桜公園へ足を向けても特に目新しいものはなさそうじゃし、住宅街を散歩する気分でもないのう。

しかし、学園へ行つても今日は部活はないと言つておつたし……どこかの娯楽施設にでも行くかの。

そう思つて娯楽施設がないか街を歩いてた時じゃつた。

「あれ？ 秀吉君？」

「む？ 花咲ではないか」

街を歩いていたところに偶然花咲と出会つた。

「何してるの？」

「何と言われてもの……見たとおり、暇じゃから出かけたものの、洋服巡りも大体回つてしまつたし、かと言つて他に目新しいものは見当たらないそうじゃつたからどこか娯楽にでも興じようとしたところじゃ」「ふくん……でも、気をつけた方がいいよ。この辺りつてナンパが多いから」

「花咲よ……儂は男じゃ。ナンパなんぞ——」

「おお、姉ちゃん可愛いね。ちよつと俺と遊びに——」

「すみません、私はこれから大事な仕事があります。そう言つたお誘いはまたの機会にということだ」

急に声をかけた男に即座に対応してから花咲を連れてその場を離れ、男の姿が見えなくなつたところで再び花咲と向き合う。

「とりあえず、ナンパなんぞあるわけがないぞい」

「今思いつきりナンパされてたよね？ しかも秀吉君、すごい慣れた感じで断つてたけど……」

「今のは花咲に言つておつたのじゃろ」

「ううん。明らかに秀吉君に向けて言つてたよ」

「まさか、そんなはずないじゃろ。儂は男に言い寄られた事なぞ——」
「文月学園で休日以外ほぼ毎日告白されてたつて、ムツツリーニ君も

言ってたよ」

「……………」

認めたくない現実を叩きつけられたのじゃ。というかムツツリー
ニ…………お主は余計な事を…………。

儂は心を砕かれたように膝を着いた。

「えっと…………とりあえずだけど、秀吉君って、今暇かな？」

「む？ 実際暇しておるから適当にうろろうしておったのじゃが」

「だったら丁度よかったのかな？」

「何の事じゃ？」

「実は、小恋ちゃんから映画のチケットもらったんだ。小恋ちゃん、今日はオンコロでしょ？ このチケット、今日の分だから見ないのもったいないって小恋ちゃんがくれたんだ」

そう言って花咲は映画のチケットらしい紙切れを2枚ヒラヒラさせて見せつける。

「それはわかったのじゃが、それなら雪村と見てもよいのではないかな？」

「杏ちゃんは今日は別の用事があるからパスだって。それで、どうかな？」

「むう…………暇つぶしにはなるし、ある程度代金が浮くのは嬉しいし…………ここはお言葉に甘えてご同伴願おうかの」

「じゃあ、決まりだね♪」

そう言って儂らは近くの映画館へと足を運んだのじゃった。

映画館に着いた儂らは会館になったばかりなのか、かなりの行列の中にいる。

「ところで、つい誘いに乗ってしまったのじゃが、どのような映画なのじゃ？」

「ああ、これ？」

花咲がバッグから先の映画のチケットを取り出す。

『冬花』って書いてある。知ってる?」

「いや、知らんの。あ、じゃが……確か明久がデートでこれ見ようかなと話しておったのを聞いたの」

「じゃあ、ラブストーリーってことかな?」

「恐らくの」

「なるほど、小恋ちゃんらしいね。でも、ちよつと残念だっただろうなあ」

「じゃの。恐らく桜内を誘おうと用意しておったのじゃが、まさかオンコロと重なるとは知らんかったのじゃろ」

「そうだね」

花咲からチケットを受け取って見ると、指定席のチケットらしい。

それと、上映時間を見て、自分の時計を確かめると上映時間までまだ時間はあるようじゃ。

「上映時間まで、まだ30分程あるが、何か暇を潰すかの?」

「そうだね……暖房効いてるかどうかもわからないし、ロビーで温かい飲み物と軽食でも買おうか」

「そうじゃの」

「ふっ……お前達が羨ましいぜ」

何やらすぐく聞き慣れとる声が聞こえたかと思い、声が聞こえた方向を向くと、そこには見慣れた顔があった。

「雄二、何をやっとするのじゃ?」

「見て、わからないか?」

そう言つて雄二の身体を隅々まで見る。

いつものようにライオンの鬘のような赤髪と、少しヤンキー系の服装に、両手に手錠が付けられてるの。

「いつもの光景ではないか?」

「秀吉君、思いつきり手錠をスルーしてる?」

「花咲の言う通り。俺は今手錠で拘束されてるんだよ!」

「雄二……浮気は——」

「これの何処が浮気に見えるんだよ! 俺は今自分の置かれてる状況をこいつらに訴えてるんだよ!」

「あ、霧島さん。こんにちは♪」

「……こんにちは」

雄二が叫んでるところに霧島が割って入ってくると、花咲と霧島は互いに挨拶を交わした。

「もしかして、霧島さん達も映画を？」

「……うん。雄二とデート」

「翔子、何度も言うが……一般的なデートとはこんな風に男の手に手錠をかけて連れ回す事じゃない」

「……雄二、これにする」

「聞けよ！ 他人の話！ 大体それ、思いっきり血みどろの戦争ものじゃねえか！ 更にそれ4時間10分もするじゃねえか！ 映画上映時間の規定軽くオーバーしてるだろ！」

「3回見る」

「12時間半も見られるかあ!!」

「退屈なら……寝てていい」

そう言つて霧島は懐からスタンガンを取り出した。

「つて、それは寝るんじゃないかって気絶つてい——ぎやばばばばばばばばば!!」

雄二の台詞は最後まで紡ぐことなく、霧島にスタンガンを当てられたことにより、黒焦げになつて気絶した。

「……学生2枚。3回分」

「は、はい……学生2枚3枚分ですね。かしこまりました」

霧島の注文を受けて店員は苦笑いしながらも接客をしておつた。

「あの程度で狼狽えるとは、店員としてはまだまだと言つたところじゃの」

「いや、秀吉君……あんなのを見たら普通は悲鳴をあげたっておかしいと思うよ」

そうかの。向こうではこんな光景、文月学園じゃなくともそこらじゅうに溢れかえつておつたぞ。

「とりあえず、儂らも何か注文をして中で上映を待つとするかの」
「そ、そうだね……」

儂らもカウンターで飲み物とポップコーンを注文して劇場の入口でチケットを見せて中へ入っていった。

劇場に入り、儂らはこれから見る映画に期待に胸を膨らませながら待っていた。

「それにしても、結構どきどきするね」

「じやの。明久から聞いたところハートフルラブストーリーと言っておったが」

「明久君達、結構映画館とか行ったりするのかな？」

「いや、まだデートでは行っただことなぞないし、向こうでも明久はまず映画館に金を使おうとはせんぞい。こつちに来た時から映画館には行かんしな。映画と言うと、学園長が借りてきたDVDをみんなで見るとらいかの。主に時代劇を」

「あはは。うちもレンタルが多いかな。でも、たまにはこうやって劇場に来るのもいいかもね」

「そうじやの。家で見る時とは違った楽しみがあるのお」

「私ね、映画館で見る予告編とか好きなんだ」

「うむ、予告が好きとは珍しいのお」

「うん。結構楽しみにしてるんだよ」

「しかし、予告で出る映画は楽しみなものもあるじやろうが、上映期間がかなり先のものが多いからあまり好きではないの」

それに、予告で期待していた場面を楽しみにしてても中身が大した事がなかったり、全く予告通りでない時も少なくはない。

じやから儂からすればこういった時の予告はあまり信用できんのお。

そんな事を考えると劇場内が薄暗くなっていた。

「あ、予告始まるよ」

「うむ」

儂は意識をスクリーンに移し、姿勢をなおして集中した。

予告編も割と面白そうな映画もあったし、楽しみじやった本編も明久がデートの為にチェックしてただけあった中々の完成度じやった。

新しい1年が始まってそんなに経ってないが、もしかしたらこれは相当人気になりそうじゃ。

儂は映画の先が気になって少し前かがみになって集中していた時じゃった。肩に何かが当たるような感触がしたかと思うと、

「すう……」

「うむ？ 花咲……寝ておるのか？」

中盤辺りで花咲が寝てしまいおった。

「むにゃ……」

「……どうしたもののか」

儂は迷った。今は特に大した進展はないが、ここらで花咲を起こしてやった方が良いのか否か。

寝不足だというのならこのまま寝かした方が良い気もするが、折角楽しみにしておった映画なのじゃからこのまま寝かせるのも勿体無い気もするしのお。

……やはりここらで起こしてやった方が良いのかもしれない。

「おい、花咲。起きるのじゃ」

「んく……はれ？ 秀吉君？」

「うむ。起きたか……まだ特に進展はないが、そろそろ起こした方がよいと思ってる」

「……あ、ごめんね。つい」

「ふう……眠気覚まし用にコーヒーでも買うべきじゃったかの……ん？」

「どうしたの、秀吉君？」

「……いや、なんでもないのじゃ」

「ん？」

気の所為じゃろうか？ 一瞬、花咲の様子が何処か変わった気がするのじゃが。

改めて花咲を見るが、特に変わった所はなく、儂も気の所為じゃと思っただけのまま映画に没頭した。

「いや〜……あの映画、すっごく面白かったね。最後、思わず泣いちゃった……」

映画が終わった後、近くの喫茶店で花咲が終了後に買ったパンフレットを開いて溜息混じりに感想を述べた。

よほどあの映画が気に入ったと見える。

「うむ、内容は面白かったのじゃが、抱きつかれた主人公の演技方が少々堅く感じたの。流石に演技とはいえ、あれだけの美女に抱きつかれれば中々集中ができないのかの」

「あはは……秀吉君はストーリーよりも演技の方を重視してたんだ」

「うむ。映画じゃろうと演劇じゃろうと、儂はまず演じ方を見るからの。まあ、あの映画は本当によかったとは思っておる」

「うんうん。あの2人がいつお互いを想ってるのがわかるのかドキドキしてて待ってたんだよ」

「の、割には花咲は寝ておったようじゃが?」

「ああ、うん。今日が楽しみで、昨日小恋ちゃんにチケット渡された時からあの映画見るのが楽しみで眠れなかったんだよね。だから、暗くなったら途端に眠気が……」

「それで途中で遂に力尽きたというわけじゃな。して、眠れたのがどれくらいなのじゃ?」

「うん、一応2時間くらいは寝たと思うけど」

「それでは眠くなるのも無理はないのお」

流石にその時間帯では大して疲れは取れなからう。

「まあ、花咲が寝とる間は大きな進展はなかったが」

「そう。でも、細かい所は後でちゃんと教えてね。できれば図解入りで」

「大体の展開はパンフレットを見ればわかろうに」

「秀吉君の口から教えてもらいたいの!」

「まあ、別に良いのじゃが」

相当1シーン1シーンの展開が気になるようじゃの。

「うんうん。はあ、もう一度見てみたいなく」

「今度はキッチンと睡眠を取っての」

「は〜い」

「……ん？」

「……なくに？」

「いや、なんでもない……と思うのじやが」

はて……時々花咲の様子が一瞬だけ変わるような気がするのじやが。何故かの？

「どうしたの？ もしかして、惚れちゃった？」

「滅多な事を抜かすでない。そうではないのじやが……花咲よ、お主は本当に花咲かの？」

「……何でそんな事を聞くのかな？」

「いや、スマン。大した事ではないのじやが、時々お主の雰囲気が一瞬だけ違ったりする気がするのじやが」

「……」

「ああ、スマン。今言った事は忘れてほしいのじや」

儂の言葉に花咲が思案顔になって何か考え出した。そして数分待つと花咲は少しばかり真剣な顔つきになって、

「……秀吉君、この後予定空いてるかな？」

「うむ？ 今日夕方までは明久達は戻ってこないじやろうから特にこれといった予定はないぞい」

「そっか。……突然なんだけど、ちよつとだけうちに遊びにこない？」

「花咲の家にか？」

「うん。ちようど今うち、私以外誰もいないから」

「ふむ」

「寂しくてたまらないのお。だから、うちに来てよ。ダメ？」

「まあ、いいのじやが……」

平静を装って言ったが、儂も男じや。異性の家に上がり込むというのは少々緊張するのお。

島田の家は存外乙女のものじやったが、葉月ちゃんもおったし、緊張するほどのものではなかったが。

「じゃあ、決まりだね」

とにもかくにも、こうして儂は花咲の家に行く事になったのじゃ。

商店街からバスでいくつか通り過ぎ、少し遠目の住宅街に花咲の家があった。

「ここが花咲の家じゃな……中々に立派ではないか」

儂の目の前には立派な造りをした家が建っておった。

「お褒めの言葉どくも。花咲茜のおうちへようこそ♪」

そういえば、雪村もこの辺りに住んでいると言うておったの。いつか機会があったらそつちにも皆でお邪魔してもいいか聞いてみるかの。

「ささ、いつまでもそんな所でぼーっとしてないで、上がって上がって♪」

「うむ」

儂は花咲の家へ足を踏み入れた。

「お邪魔するぞい」

花咲の家へいざ上がってみると、外見と同じように内装も中々上品なものが揃っておった。

雰囲気は儂の家と少し似ておるな。違うのは、ここに住んでいる花咲が大人っぽいという事じゃな。

少々日常でムツツリーニの生命を危うくしてしまう発言を飛ばすが、姉上のぐーたらな生活に比べれば幾分もマシじゃな。

「それで花咲、何ゆえに儂をお主の家まで誘ってくれたのかの？」

儂は家の内装を一通り見ると、花咲へ視線を移して本題に入ろうとした。

あの時の花咲の表情はいつもとは違う真剣なものがあった。何か大事なことじゃと思つて今まで深く聞かないでおいた。

じゃが、儂を自分の家へ上げたのはそれ相応の事があるからこそじゃと思つておる。じゃから、一体それが何なのかを儂は知りたいと

思っておる。

「……………」

儂が話すと花咲は少し困ったような顔をしてから目を閉じる。それから何秒かすると、表情が一気に真剣なものに変わった。同時に今度こそ花咲に大して違和感を感じた。

何やら、うまく言葉にはできんが、まるで……魂そのものが入れ替わったかのよう。

「……花咲？」

「……秀吉君、聞いていいかな？」

「何じゃ？」

「……茜ちゃんの事、どう思ってる？」

突然の質問に疑問が浮かんだが、すぐに花咲に対する違和感の正体が見えてきた気がした。

「やはり、お主は……」

「ねえ、どうなの？」

儂の言葉を遮って花咲が再び質問を重ねる。真剣な表情で言う事から今儂の抱えとる質問は後回しにした方がいいじやろう。

「儂は、花咲とはそこまで付き合いがあるわけではないが、良き友人だとは思っておる」

「そっか、よかった」

「して、そろそろ聞きたいのじゃが……お主は誰じゃ？」

儂の言葉に花咲は一瞬驚いた表情を見せるが、すぐに笑みを浮かべた。

「あはは、本当にすごいよね、秀吉君って。喫茶店でもあんな事を言われてどうしようかって2人で迷いながら話し合ったんだけど、あそこまで来たらもう私達の事を知っておいてもらった方がいいんじゃないかって」

「ということは、やはり……」

「うん……今ここでこうしている私は、茜じゃないの。私は、花咲藍。茜ちゃんの……お姉ちゃんの妹だよ」

「い、妹……かの？」

「うん」

いや、花咲の様子が時々違ったりする事があるから、もしやと思っ
てたが……まさかこういう事とはの。

普通なら笑いそうな所じゃが、相手が嘘や冗談を言ってるか否かは
見ればすぐにわかる。

「うむ……俗に言う二重人格、と思っておったが……妹、とはの」

「ああ……ある意味そんな感じと言えなくもないと思うけど、でも私
はずっと前に死んじゃって……気づいたら茜ちゃんの中にいたから。
それからたまくに出てきてお姉ちゃんの身体を使わせてもらってる
だけ」

「……ああ、つまり……幽霊が花咲の身体の中に憑依した状態、と言っ
たところかの？」

「ん、どうだろ？ 少なくとも、幽体離脱とか、そういった経験はな
いからなく。私の意識は、あくまであかねちゃんの身体にいる時しか
感じないし」

「ふむ……」

「……あはは。幽霊だとか二重人格だとか当たり前だって感じで話し
てるね」

「まあ……儂も何やつとるのじやろうか感があるが、今までで色々体
験してきたからの。これくらいあってもおかしくないと心底思える
ようになってきてるぞい」

「あはは、本当に色々あったもんね。過去の風見学園とか、文月学園と
か」

「まあ、の……」

文月学園と聞いて、FFF団の事、姉上の折檻の事、そして向こう
での男子からの告白の数々を思い出した。

あれを普段からずっと見続けたからか、この手のドツキリには思
いっきり耐性がついていたようじゃ。

「それで、これから儂はどうしてやればよいかの？ こうして花咲と
――」

「ああ、できれば茜か、藍で呼んでほしいかな？ 苗字だとややこしく

なりそうだし」

花咲……いや、藍の言葉に一瞬迷ったが、こうして秘密を知ってしまったのじゃし、確かにそうした方がよいのかもしれない。

「うむ、茜と藍の秘密を知ったわけじゃしの。儂は茜にどうしてやればよいか……」

「ああ、別に何かしてほしいってわけじゃないの。ただ、これからお姉ちゃんと一生身体を共有しながら暮らしていくからね。でも、秀吉君は勘が鋭いから、いずれバレそうかなって思っ……それで今日思い切って秘密を明かそうって思っ……後で私の事を騒がれたら色々困った事になっちゃいそうだし……」

確かに……茜の中にもうひとり別の人格があるなどと言ったら、明久達はともかく、他がどんな反応をするかわからんしの。

「うむ、わかった。この事に関しては儂らの秘密という事にしておう」

「うん、ありがと、秀吉君♪」

「礼には及ばんぞい。しかし……本当に茜にそっくりじゃの。儂でも少し違和感を持つだけで、確信が持てないくらいの似通いっぷりじゃ」

「ん、それはそうかもね。小さい頃から、一緒に『花咲茜』をやったからね。私は藍だけど、『花咲茜』の一部でもあるわけだから。茜ちゃんと私の仕草で違うところなんて、ぶっちゃけ……ないと思うな」

「うむ。それもそうか」

「でも、秀吉君なら見分けがつくんじゃないかな？」

「む……そうかの？ 今日この時までほとんど確信が持てなかったしの……」

「きつとすぐに確信持てるようになるって。それじゃあ、私は退散するから、後よろしくね」

そう言っ……藍は目を閉じ、しばらくすると再び目を開けた。同時に先程の僅かな違和感も消えた。

「……お話は、済んだ？」

「むう……茜、かの？」

「うん。花咲茜です」

今日の前にいるのは正真正銘儂の知つとる『花咲茜』じゃった。

「藍ちゃんから、聞いた？」

「うむ。まさか、お主に妹がおつたとはの」

「さっきの話なんだけど、信じた？」

「うむ」

儂は演技を人一倍観察する目があるから、他人の嘘には敏感な方じゃと自負しておる。

今日の前にいる少女が嘘を言ってるか否かなど、すぐにわかる。

「さっすが秀吉君、理解が早いね〜」

「その手の適応力は鍛えられておるからの」

主に、明久や雄二、ムツツリーニの繰り広げる日常のおかげでの。

「ふふ、それじゃ……」

茜は笑みを浮かべると手を差し伸べて、

「これからもよろしくね、秀吉君♪」

——ドクン……。

「っ!？」

「……秀吉君？」

「い、いや、なんでもないぞい! よ、よろしく頼むぞい!」

そうやって儂はどうかギリギリで平静を装って茜と握手をした。

むう……今の胸の高鳴りは何なのじゃ? なにやら、心臓の鼓動が

早くなっておるのじゃが。

こうして、色々困惑する一日を終え、儂の新しい日常が幕を開けたのじゃ。

第六十八話

今日は清々しい朝だった。これというのも、オンコロが終わったからだ。

「んく……まだちよつと寒いけど、これが何故か気持ちよかつたり」
オンコロが終わった後、僕達は結果も気にしないままゆずちゃんのいる病院まで駆けた。

そして僕達が着いた頃には既にゆずちゃんの手術が始まっており、僕達は彼女の成功を祈ったのだった。

手術が終わった後、麻酔によって眠ったままのゆずちゃんを見て真つ先に歩み寄ったのはななかちやんだった。

ななかちやんが担当医に問うたところ、ゆずちゃんの手術は見事成功したのだ。

それからしばらくして麻酔から覚めたゆずちゃんはななかちちゃんを見た瞬間、泣きながらお礼を言った。

手術を始める前からゆずちゃんはラジオでオンコロを聴いており、僕達の演奏もちやんと聴いてくれたようだ。

『ななかの声が……みんなの演奏がずつと聞こえてた』と。それからというのも、ゆずちゃんは本格的な療養に入ることになった。

手術が成功したからと言ってもまだ油断ならないし、ゆずちゃんは色々前科とかがあるからお医者さんや看護師さんから注視されるようになった。

もちろん、その待遇にゆずちゃんは唇を尖らせながらつまらないと言ってたが、こればかりはしょうがないと思う。

ななかちやんに聞いただけでも野球とかサッカーとかバレーボールとかやってしよつちゆう病室の窓ガラス割っちゃったりしてたらしいし。

「随分やんちやさんなんだあ……ゆずちゃんも……おりよ？」

通学路を歩いていると、白黒のストライプのニット帽が目に入った。

あんな目立つ帽子を被ってる人と言えば、

「おはよう、天枷さん」

「うおわ!」

「おう!」

「何奴!? ……よ、吉井ではないか。びっくりするではないか」

びっくりしたのはこっちだよ。あまりにも盛大に飛び跳ねるからこっちも条件反射で仰け反ったよ。

「それより、何か真剣に見てなかった? ぶつぶつ呟きながら何か読んだ気がするけど」

「っ!? き、気の所為だ! 美夏は自分の作ったノートを見つめていたわけではない!」

「……………」

語るに落ちるとはまさにこの事か……。

「何だ? 美夏は何か変な事を……ハッ!? おのれ、吉井っ! 誘導尋問とは姑息な!」

「いや、そつちがうっかり口を滑らしたただけだと思うけど……」

「と、とにかく! 美夏の秘密は誰にも明かす気はないからなっ!」

そう捨て台詞を残して天枷さんはドタドタとその場を走り去っていった。

あ、そういえば最近はななちゃんや義之関係で色々あったから忘れてしまったけど……。

「天枷さん……結構変わったよなあ」

そんな事を呟きながら学園へと向かった。

キーンコーンカーンコーン♪

午前の授業が終わり、昼休みに入った。

「昼休み〜、昼休み〜♪」

昼休みになると茜ちゃんが随分と浮かれて小躍りしている。

「何浮かれてるんだ？」

「別に浮かれてなんかないよ？　ただ、お腹がすきすぎたから、お昼が嬉しいだけ。ひっるやつすみ〜♪」

「そういうのを浮かれてるっていうんだろ？」

「まあ、いいんじゃない？　僕達学生にとつちや昼休みが一番楽しめる時間だし」

「確かにそうだがな」

僕達は昼休みに入り、いつものメンバーで集まって机を集めていた時だった。

「やつほく、明久君〜♪」

「おっと、おいでなすったか白河」

もちろん、ななかちゃんもそのメンバーのひとりだ。

「いらつしやい、白河さん」

「はいは〜い♪　白河さんの席もちちゃんと用意してるよ〜♪」

「ありがとう。じゃ、こつちもお昼にしようか」

「おうおう……いつも通り、華がありますな〜」

渉が女子メンバーを見てうんうんと頷いているところで、

「やつほく！　杏先輩、桜内、吉井、一緒にお昼しよう〜！」

「おお、こつちも来たか」

「いらつしやい、こつちよ」

「こつちどうぞ」

「おお、悪いな」

ここ最近、天枷さんはうちのクラスへ来て僕達と一緒に昼食する事が多くなっていた。

最初は杏ちゃんと一緒にお話しながらお昼食べてたところに茜ちゃんが混じり、そこから雪月花、更に僕達も加わって一緒に昼食をするようになった。

杏ちゃんと一緒にお昼食べていた時はちよつと驚いた。まさか杏ちゃんと天枷さんがあんなに仲がいいなんて。

僕達の方が付き合いい長いはずなのに、ちよつと悔しいと思ったり。「いや、しかし腹が減った。空腹過ぎて死ぬところだったぞ」

「あはは、美夏ちゃんたら大げさなんだから」

「大げさなものか。食べたい時に食べられない学校のシステムに問題があるな」

確かに、どうしようもなくお腹がすいて、何か食べなくなる時ってあるよね。

「逆に、月島の弁当は相変わらずちっちゃいなあ。そんなもので足りるのか?」

「そうかな? 普通だと思うけど」

「そんなことはない。花咲のを見る。ゆうに2倍はあるぞ」

確かに小恋ちゃんの弁当と比べると、茜ちゃんの弁当の量はかなりある。流石に男子ほどとはいかないけど、女子にしては多い方だろう。

「まあ、茜は普通の娘よりカロリーを消費する部位があるから」

「その豊満な胸とか、胸とか、胸とかな」

「胸しか言ってねえじゃねえか」

「でも、確かに茜ちゃんの胸って、すごいよね……」

このまま成長すれば下手すれば姉さん以上のものになるのではないかと思う。

「明久君?」

「すんませんでしたあ!」

ななかちゃんに怖い笑顔で見られ、即土下座。

「ダメよ明久。恋人の傍で他の女の子の身体をガン見しちゃ」

「マジですんません……」

「私だって、もう少し努力すれば……」

ななかちゃんがブツブツと言ってるけど、ななかちゃんだって十分いいスタイルしてると思うけどなあ。

まあ、女の子には男にはわからない悩みが多いのだろう。

「やくん。私のここは、エネルギータンクなのよ」

「何っ!? そうだったのか! それで、主な動力源は何なのだ!」

「え?」

「ちよ、バカ……」

「あはは！ 天枷さんって、おもしろい♪」

「ナイスジョークよ、美夏」

「そ、そう……ジョーク！ ジョークなんだあ！」

「何をいうか。美夏はいつだって本気だ」

「いいから、しゃべってばっかいないでとつとと食うぞ！」

義之が会話を強引に切って弁当を食す事に集中する。

もう本当に普通すぎるくらいに対話しているが、天枷さんはロボットのだ。いつくらいに造られたものかは不明だが、今現在流行っているとは違う、特別なロボットらしい。

そして時々一般人が使いそうにない単語を使ったり、自分がロボットだとバレそうな言葉を口走ったり結構危なっかしい子だ。

幸い、みんなはジョークだと受け止めているが、いつ彼女がロボットだとバレたりするかわかったもんじやない。

「しっかし、変われば変わるもんだな〜」

「ん？ 何がだ？」

「いつの間にか、みんなと馴染んでるじゃないか。しかも、こうして毎日弁当を食べるのも当たり前になってるしな」

確かに、最初は険悪だった天枷さんもこうして普通にみんなと会話できるんだからすごい進歩だよ。

「まあ、ここにいる連中は杏先輩の友達だから、信用できる。美夏が来るのは迷惑か？」

「そんなことないよ。天枷さんと仲良くなれるのは嬉しいし」

「でもさあ、お前俺達が修学旅行に行ってる間はどうすんだ？」

「修学旅行？」

「あ、そういえばもうすぐだっけ？」

すっかり忘れてたよ。

「うん。付属の3年生は学年末辺りで修学旅行をやるの」

「うおっほお、修学旅行う！ 修学旅行と言えば、定番の健全な女湯覗きに、健全な女子部屋夜這い、夜を徹して投げ合う恋の枕投げ、そこから実る女と男の恋愛を発展させるための行事に他ならない——」

「といった誤った認識はともかく」

「楽しみだね、修学旅行」

「うんうん、もっちゃん♪」

「せめて最後まで言わせて!？」

ていうか渉……大部分が女子の聖域を侵す事ばかりじゃないか。

「ところで、その修学旅行とはそんなに楽しいものなのか？」

「ああ、天枷さんはそういうのなかったんだ」

「そうだなあ……見知らぬ土地に行ける楽しみがあるのはもちろん、何日か寝泊りするわけだから、友達の普段見れない一面とかも見れて、結構興味深いぞ」

「そう、なのか……」

「まあ、天枷も来年になればわかるって」

「そうだね。その時に友達もいっぴいできるかもしれないしね」

普段交流のない人達ともその時にでもなれば色々話す機会だってあるだろう。

僕だつてこの修学旅行で普段会話のない人達と色々楽しめればいいなと思っている。

「ところで諸君!」

「どわあ、杉並君!」

忘れかけたところで何の前触れもなく出てくる。相変わらず心臓に悪い登場だ。

「修学旅行と言えば、なんでも班別行動スケジュールを提出していないのは我々だけらしい。そろそろ委員長がお冠のようだが、どうする?」

「げ……出していないの、もう俺達だけなのか」

「委員長、怒らせると怖いもんね」

「あはは……」

確かに……行事の内容が中々決まらない時の沢井さんつて、滅茶苦茶怖いからなあ。

「じゃあ、今度の日曜日、みんなが集まって一気に決めちゃわない?」

「賛成。それならついでにお買い物も行きたいなあ」

「旅行になると、色々細かいものが必要だし」

「いいかもね。その手の小物とか、まだ揃えてなかったし」
「なら、今度の日曜の午後1時、時計台の下に集合だ！」

渉の発言で僕達の班別行動決め及び、修学旅行に向けての買い物
が決定した。

「な、なあ……」

「ん？」

みんなが盛り上がってる中で天枷さんが恐る恐る声をかけてくる。

「美夏も、行っていいか？」

「ん？ 別にいいけど、どうした？」

「みんなの話を聞いて興味がわいた。美夏も行く！」

「あ、それなら私も私も！ 明久君とデートしながら♪」

「はい、ごちそうさんつと」

「義之、からかわないで……」

まあ、ななかちゃんの行動も知っておきたいから、僕としては願っ
たり叶ったりだけだよ。

そして、時間はとんで件の日曜日……。

「さつて……待ち合わせ場所はここだね」

「ああ。……ところで、何で由夢までここにいるんだ？」

実は、僕達が修学旅行の準備のための買い物に行くと言うと、由夢
ちゃんもそれに便乗してきた。

「や、私もお買い物とがありますし、天枷さんも来るって聞いたから」
「なるほど」

「ようようよう、義之、吉井！」

「やつほ〜♪」

「ちやお」

「おつまたせ〜」

「おまたせ、義之」

「やつほー！ つと、おお。由夢も来ていたか！」

「ふっ」

「よし、これで全員だな」

「それより杉並君が何処から登場してきたのかが気になる」

今の今まで何処にもいなかったよね？ どうやってこの場所に来たのか？

それから、修学旅行に向けての買い物始めるのだった。

「うっへ〜……結構回ったぜえ〜」

「それに随分買い込んだな」

「なんかこういう時って、ついつい色々な物買っちゃうんだよね」

「なるほど。こうしてあらかじめ旅行に対するテンションを上げていくのだな」

「いや、冷静に分析するなよ」

「確かにこういう時って、テンション上がるけど……」

僕達が買い物してる間、天柳さんは僕達の行動をチェックして修学旅行の楽しみ方を考察していた。

研究熱心なのはいいけど、渉がエロ本を必需品だという発言を鵜呑みにした時は驚いた。

根がまっすぐすぎるからなのか、その手の知識に疎いからか、鈍いからか、彼女の中の誤りかけた知識を修正するのは大変だった。

「いいではないか。おかげで美夏の中の旅行に対する知識が深まった事に変わりはない。来年の修学旅行とやらが楽しみになってきたぞ」

まあ、天柳さんが学園の行事を楽しみにしてくれてるのはなんとなく嬉しくはあるんだけどね。

「その時は、一緒の班になりましたよね」

「うむ。……いや、待てよ。もし本当に、修学旅行というのがクラスの皆と分かり合う機会だというのなら、必ずしも由夢と一緒にの班になる事もない、かも……」

……………へえ、驚いた。あの天枷さんが、そんな風に考えてたなんて。

出会った頃は、ものすごい敵意むき出しだったのに。それが今こうして人間と正面から向かい合おうと考えてくれている。

「それじゃあ、私達は自分の買ひ物がありますので、ここで」

「ああ、そうだったな。気をつけて行けよ」

「うん。行こう、天枷さん」

「うむ。本日は中々に有意義であった。では皆、またな」

商店街を出ると、由夢ちゃんと天枷さんは僕達を別れて自分達の買ひ物へと行った。

「…………『必ずしも由夢と一緒にでなくとも』、かあ」

「ん？」

「いや、本当に変われば変わるもんなんだなって。俺には、最近の天枷があれば嫌っていた人間を、ほんの少しだけど…………理解しようとしてくれているのかなって、思ってたな」

「…………そうだね。僕達にとっては、嬉しい事だよね」

「まあ、好む好まざるに関わらず、彼女はこの世界で生きていかねばならないんだ。俺達をきっかけに、彼女がそう思ってくれるようになったらば。それは俺達にとって、非常に望ましい事ではないか」

「うわ、杉並君また突然。…………でも、そうだよね」

「ああ…………。それはまだ、随分と先の話になるだろうけど」

「でも…………本当に、彼女をきっかけに…………ロボットと、本当の意味で共存できるようにになったらいいね」

「全くな」

僕達は天枷さんの背中を見つめながら、言った。

「さて、俺達も行くか。まだ班別行動が決まってないしな」

「あ、そういえばまだそっち決めてなかった」

「近くに喫茶店があるから、そこで会議と行きますか」

「だね」

僕達は近くの喫茶店で班別行動の会議を開こうとしていた時だった。

ガシャ——ン!!

「っ!? 何だ!？」

突然ものすごい轟音が聞こえた。しかも、距離は割と近い。

「何? 今の音……」

「……結構近いわよ」

「どうしたのかわく?」

「何だあ?」

「明久君……」

「うん、何だろう……」

轟音の原因が気になって僕は周囲の音を真剣に聞き入れようと聴覚を集中させる。

『大変だ!』

『ビルの屋上の看板が落下した!』

『女の子が下敷きになったぞ!』

そんな声がしながら、あちこちの通行人がある方向へ走っていくのが見えた。

「……お、おい義之、あの方向って確か……」

「由夢達の行った……」

「女の子が下敷きって言ってたけど、まさか……」

「っ! くそっ!」

「義之っ!」

義之が血相を変えて駆け出し、僕達もそれを追って走り出す。

女の子が下敷きって、まさか由夢ちゃん達が?

僕達は本能のまま走り、現場へと駆けつけた。そこには確かに大きな看板が落下していた。

看板もその下のコンクリートも滅茶苦茶だった。そしてその傍で、由夢ちゃんが呆然と、腰を地面に落としながら見つめていた。

「由夢っ!」

義之が由夢ちゃんの名前を叫びながら駆けつけていく。

「に、兄さん……」

「由夢！ よかった！ 怪我はないみたいだな！」

義之は由夢ちゃんの身体を確かめ、これといった怪我がないとわかるとほっとした。

「う、うん。私は……でも、天柳さんが私の代わりに……」

「何だって!?!」

「く……天柳さん！」

僕は急いで天柳さんを下敷きになっている看板をどけようと試みる。

「おい、渉！ お前も手伝え！」

「お、おう！」

その後に義之や渉、通行人の何人かが束になって看板をどけ始める。

「行くぞ、せえの！」

「うおおおおおおお!!」

看板の周囲に集まったみんなで看板をどけようと精一杯力を入れ、看板を持ち上げようとする。

何回か同じ事を繰り返し、十数分かかってようやく看板の片方を持ち上げ、どかす事ができた。そしてその下から、ぐったりとした天柳さんの姿があった。

「天柳さん！」

「天柳！」

「おい、大丈夫か!?!」

「天柳さん！ しっかり！」

僕達は声を張り上げて天柳さん呼びかける。

「……………あれ？ みんな？」

「天柳さん！」

「天柳！ 大丈夫か!?!」

「うん？ 大丈夫とは、何だ？」

「いや、だってお前……」

看板の下敷きに、と言おうとしたのだろう義之の台詞を最後まで聞かず、天柳さんはその場で立ち上がった。

「何をオロオロしているのだ。美夏がこれしきの事でくたばるもの

か。ほら、この通り」

そう言つて天枷さんはその場で小躍りをして元気をアピールしていた。

「ま、当然と言えば当然だろう。なにせ美夏嬢は……」

「そ、それもそうか……」

「あまりに日常の一部になっていたから思いっきり意識から外してた……」

言われてみれば天枷さんはロボットなのだ。耐久力なら人間の何倍もあるだろう。交通事故程度で怪我をするかどうかも怪しいところだ。

「ま、そういう事だからあまり大騒ぎにしないでく、れ……あれ？ あれれれれれれ？」

「あ、天枷さん？」

「どうしたんだ？」

突然天枷さんがぐらぐらと身体を揺らしていた。

「な、なんだか、体が……」

しばらく揺れると天枷さんが耳から煙を出した。って、煙!?

「あ、天枷さん!？」

「おい、天枷!」

僕達は慌てて天枷さんに上着をかけて目立たないようにしたが、

『おい、今あの娘……』

『煙、出してたよな?』

『看板の下敷きになつても、びくともしてないし……』

『何なんだ……?』

「桜内、吉井、これは非常にマズイぞ」

確かにマズイ。このままでは、天枷さんがロボットだとバレるのも時間の問題だ。

「早く! こつちです!」

すると、人ごみの中から花咲さんが救急隊員を連れてこちらに駆けつけてくるのが見えた。

「看板の、下敷きになつた娘は!？」

「ごつちです！」

「よし！　すぐに担架に乗せて病院へ！」

病院で、マズイ！

「ま、待つてください！　天柵の事は俺達でなんとかしますんで！」

「何言ってるんですか！　今は一刻を争うんですよ！」

「そ、それは……」

確かに由夢ちゃんの言う通りだけど、この場合はとてもマズイ。

「誰か、知り合いは!?!」

「あ、私が行きます！」

それから由夢ちゃんも天柵さんと同行して救急車で病院へと運ばれていく。

「これは……厄介な事になりそうだな」

「とにかく、追いかけるぞ」

「うん！」

最悪の事態を免れるかどうかはわからないけど、時間をかければマズイことになるのは間違いない。

僕達はさっきの救急車を追いかけて病院へと駆け出していった。

天柵さんが看板の下敷きになってから、天柵さんは救急車で病院に運ばれ、僕達は途中でタクシーを捕まえて追いかけていった。

そして病院に着いたと同時にタクシーから降りて病院内へ駆け込んだ。

「えっと……天柵さんの病室は……」

天柵さんが何処で治療を受けているのか辺りを見回すと、ある一室の前で立ち尽くしていた由夢ちゃんを見つけた。

「由夢っ！」

「あ、兄さん……」

「天柵の様子は!?!」

「それが……」

僕は目の前の一室に目を向けると、そこは外科の診察室だった。義之を目を合わせ、これはマズイのではと慌てて扉を開けた。

「お？ やあ、みんな。どうした、そんなに慌てて？」

診察室では天枷さんはあつけらかなとした様子でベッドに座っていた。

全く怪我らしい怪我が見当たらなかった。

「え……」

「もう、大丈夫なの？」

「ああ。ちよつと当たり所が悪かったみたいだが、もうこの通りだ」

「いや、この通りって……」

「あんなもの下敷きになったら、普通は……」

天枷さんの様子を見て、みんな怪しく思い始めている。天枷さんの診察をした医者達も、ヒソヒソと何かを話している様子がある。

これ以上は本当にマズイかもしれない。

「と、とにかく！ 天枷さんが無事でよかったじゃん！」

「そ、そうだな！ だよな、みんな！」

「桜内君！」

どうにか話題をそらそうとした所に別の声が割って入ってきた。

「水越先生？」

駆けつけてきたのは水越先生だった。事故の事を聞いて駆けつけてきたのだろう。

だが……流石に遅かったかもしれない。

それからは水越先生も含め、他の医者もまた天枷さんの診察に入った。それが終わるまでの間、僕は診察室の前でただ待っていた。

待っていること、数十分過ぎた頃。室内で先生の会話が聞こえてきた。

『はい……はい、もちろんです。わかりました』

先生の声が止まってすぐに診察室の扉が開き、水越先生が出てきた。

その後で天枷さんが数人の男に囲まれながら出てきた。

「あ……」

「天枷……」

「っ……」

天枷さんが僕達の下へ歩み寄ろうとしたが、数人の男に阻まれてしまった。

それから数秒僕達を見てから悔しげに俯き、その場を去った。

「天枷！」

「天枷さん！」

僕達は天枷さんを呆然と見送る事しかできなかつた。

それから水越先生が義之の耳元で何かを囁いていた。

「……君はこつちを優先した方がいい。頼んだよ」

水越先生は義之の肩を軽く叩いてその場を去った。

「……こうなつてはもう、正直に言うしかないだろうな」

「……………」

どうやら、その時が来てしまったようだ。

ところ変わって、芳乃家で……。

「さあ、冷めない内にどうぞ……………え、ええと……………」

音姫さんが気を利かせてお茶を入れてくれるが、この場の空気がかなりしんどいようだ。

今この場には今日出かけたメンバーに雄二、秀吉、ムッツリーニ、霧島さんを加えたみんなが集まっている。

理由はもちろん、今回の天枷さんの件だ。義之はどうしたものかと悩みながらみんなを見回す。

あんな事があったのだから目撃したみんなから質問攻めになると思つたけど、予想に反してみんなは黙つたままだった。

義之からの説明を無言ながら求めているという事なのだろう。

「……………あ、あの……………」

ようやく、義之が口を開いた。

「みんな……………薄々気付いているかもしれないけど……………その、実は……………」

天枷は、その……あいつは、人間じゃない。ロボットなんだ！」

義之の言葉に、全員先程とまではいかないが、驚いた者も何人かいた。

「え？ ロ、ロボット……？ ロボットって、あの……『μ』のような？」

「面白い娘だとは思ってたけど、まさか……」

「兄さんは、最初から知ってたんですか？」

「……ああ。そうなる」

「義之……お前、どうしてそんな事黙ってたんだよ？」

「みんなに事情を話さなかったのは悪かったとは思ってる。だけど、その……色々事情があって言えなかった」

「事情……」

「弟君、説明してくれる？」

音姫さんの要望に義之は困り果てた表情を浮かべる。

「……それが、何処から説明すればいいのか……その、つまり……」

「もういい、桜内」

義之が中々言えずにいたところに、別の声が割って入ってきた。

「あ、天枷……水越先生？」

部屋の前に天枷さんと水越先生が立っていた。

「美夏が、どうしても自分の口から説明したいって聞かなくてね。どうにか、一時的に許可をもらって連れてきたんだ」

「天枷……」

「さて、あたしは席を外しておくよ。後はあんた達でゆっくり話し合いな」

そう言って水越先生は別室へと移動した。

「みんな、桜内が言ったように……美夏はロボットだ。まあ、美夏が造られたのは、かなり昔の話だな。ちょうど、その頃人間達の間で『HM-A06型』……つまり、美夏のような、感情を持つロボットが社会問題になり始めた時期だ。人間社会の混乱を危惧していた研究者達は、それを抑えるため、『HM-A06型』の製造を中止し……美夏

も、その歴史の裏で眠り続ける事になった。だが……最近、ふとした偶然があつて美夏は目覚めた。水越先生と芳乃学園長の便宜によつて、風見学園に通う事になったのだ」

「その偶然の中には、俺と杉並、土屋が関わつてたんだ」

「なるほどな。全校集会の日、ムツツリー二達の様子に変化があつたのはそれだつたつてか」

「……（コクコク）」

「それから、天枷がロボットだつてバレないよう注意してくれつて。そう、水越先生に頼まれたんだ。まあ、あの日の夜に明久達にはバレたけど……」

「あ、あの時の放送……」

由夢ちゃんは思い出したように手をぽんと叩いた。

「……すまない。謀るつもりは決してなかった。だが、謀っていたのは事実だ！ 本当に、申し訳なかった！」

天枷さんは悲痛な表情を浮かべながらこの場の全員に頭を下げる。

「……………」

「ともかく、天枷が感情を持ったロボットだつて世間にバレるのはマジなんだ。みんなも、ロボットに対する世の中の認識は知ってる筈だろう。」

もしこの事が公にでもなつたりしたら……」

「また、眠らされるなんて……」

「……いや、恐らくもっと酷い」

「同土土屋の言う通り。恐らく、不測の事態が起こらぬよう、二度と世間の目に出ないよう処分する可能性も大きい」

「要するに、バレたら良くて永久凍結。最悪、スクラップつて事だな」

「ス、スクラップ……」

「そういうわけだから……この事は、俺達だけの秘密にしてほしいんだ。頼む！」

義之は正座のまま、全員に土下座をした。

「けどな、桜内。出かけた時、もうかなりの人数が天枷の状態を目撃したんだらう？ 正直バレるのは時間の問題だ」

「……情報操作にしても、限界がある」

「それでも、やるしかないと思う。僕達に出来る事があるなら、なんとかしても」

ロボットだけど、天枷さんだって生きてる。ちゃんと心を持って、この世に存在してるんだ。

世間の勝手で天枷さんをいなくさせたりなんてしない。

「それと、もうひとつ頼みがある」

「……何だよ？」

「天枷とは、今まで通り接してやってくれないか？　今まで通り、友達として……」

「とも、だち……」

「……はあ」

義之の言葉を聞いて渉が嘆息すると、義之のもとへ歩み寄る。

それから、義之の前に跪くと、義之の胸ぐらを思いつきり掴みかかった。

「テメエ、どういう神経してたらんな事が言えるんだ!?　何様だよ

……何が今まで通り、友達でいてやってくれたと？　んなもん、テ

メエに指図されるまでもねえ！　美夏ちゃんは既に俺達の友達なん

だ！　ロボットだからなんだ！　あんま俺達を舐めんなよ！」

「わ、渉……」

渉の言葉に、みんな吹っ切れたのか、先程の暗い空気が晴れ始めていた。

「そうだよ！　天枷さんは天枷さんだもん」

「ロボットであろうと人間であろうと、私達の仲は変わらないよ。ねえ？」

「うん、当たり前当たり前」

「そういうこと♪」

「今度くだらないことを言ったら、オシオキよ」

「いいですね、兄さん？」

「みんな……」

やっぱり、ここにいる人達はみんないい人達だよ。

「ま、そういう事だ。ロボットだからって、遠慮することあねえ。また飯食ったり、遊びにいったり……これからも色々やる事は山積みだらう」

「……あ、ああ!」

「よかったね! 天枷さん!」

「う、うむ……正直、戸惑ってるが……とても嬉しい。嬉しすぎて……また、オーバーフローを起こしてしまいそうだ」

「ちよ、それは勘弁してくれ! 大丈夫か!」

そう言つて義之が天枷さんの熱を計ろうと自分の額を無理やりくつつける。

「ちよ、待て! いきなり何だ桜内! 心配はいらん!」

「んなことわかんねえだろ! ああ、動くな! 計りづらい!」

「ええい! や・め・ん・かあ!!」

「ぐぼあ!」

天枷さんがあまりに恥ずかしかつたからなのか、見事な右のアツパークットが義之の顎にクリーンヒットした。

「あ、桜内、大丈夫か? つい、力加減が……」

「な、なんのこれしき……」

「義之、女の子相手にちよつとね……」

「明久君だつて、似たようなもんでしょ? 文化祭の時のお姫様抱つことか、文月学園での告白とか……」

「ちよ、それは今は関係ないでしょ」

「……雄二、私達も負けてられない」

「ちよつと待て、翔子。そう言いながら何故下半身の方に手を伸ばす!?! お前は何をする気だ!」

「そんな事を言わせるなんて、雄二つてば……エツチ」

「公衆の面前で堂々と猥褻行為をするお前に言われたくねえ!」

「ハハハハハハ!!」

僕達のいつもの光景を見てみんなが笑つた。この一日で色々あつちやつたけど、みんなが変わらず、天枷さんと接してくれるのは本当に嬉しい。

でも、本当に大変な事になるのは、もう少し後の事になる。

第六十九話

「弟君、ハンカチ持った？　ちり紙持った？」

「あのな、音姉……」

「生水飲んじやダメだからね？」

「って、何処のジャングルに行くんだっての。行くのは奈良だっつの」
「奈良って言ったら、くずきりに柿の葉寿司に——」

本日、僕達付属3年生は修学旅行に出かける事になる。

そんで、今こうして音姫さんと由夢ちゃんに見送りしてもらってる。

「まあ、別に期待はしてませんけど」

「期待感たつぷりの表情で言うなよ」

「まあ、出来る限り努力はいたしますんで」

「儂らの手持ちで少しずつ出せばなんとかなるかのぉ」

「……でも、食べ物だったらできれば最終日におきたい」

「そうだね。出来る限り新鮮な状態で渡しておきたいし」

「いや、お前ら真面目に土産の事考えなくてもいいから」

僕達が早速土産の事について考えてると義之が止めた。でも、やっぱりお土産は考えてあげないと。

「うくん、やつぱり……お姉ちゃんもついていこうかな」

「勘弁してくれ」

「む……」

音姫さんの提案に義之が即答して断る。音姫さんの場合、本当についていきそうだから反応に困る。

本当にそうになったら僕達は思いつきり注目的になる事だろう。

「じゃあ、行ってきます。……と、2人共……昨日言った通り——」

「わかってる。天枷さんの事はこっちに任せて」

「心配いらなくて。私も一緒にいるんだし」

昨日、義之は僕達がない間、天枷さんの事を出来る限り見てあげるよう音姫さんと由夢ちゃんに頼んでいた。

ほんの少し前にあんなトラブルがあつたんだ。小さい島な上に、その手の噂が大好きな人達がいっぱいなんだ。

あの事故と天枷さんの正体に関しての噂がすぐに広がる可能性は高い。

なので天枷さんに被害がいかないよう、音姫さんや由夢ちゃんを中心に、高坂さんを始めたとした生徒会の一部も天枷さんの擁護に協力してくれることになった。

「こっちの方は私達に任せて、弟君達は思いっきり楽しんで」

「……わかった。じゃあ、行ってきます」

「それでは」

「行ってくるのじゃ」

「……行ってきます」

「んじゃ」

「行ってらっしゃい」

2人の送りの言葉を背に僕達は修学旅行へと繰り出していくのだった。

修学旅行が始まり、まず儂らは船に乗って本島へと向かうのじゃつた。

「いやあく……期待感たっぷりですなあ」

「何がだ？」

「恋だよ、恋」

「なんだ……」

「何時でも何処でも涉は恋まつしぐらだね」

「ったりめえだ。学園から離れて24時間女子と一緒にいられて」

「24時間一緒とは限らんかの」

「このチャンスをものにせんで、どうするよお？」

「どうもしねえだろ」

「かあ……相変わらず蛋白だねえ。ああ、いいよなあ……お前には常に音姫先輩や由夢ちゃんがいるんだからさ」

「何であるの2人が出てくるんだよ?」

まあ、確かにあの2人は常に桜内と一緒にいる事が多いからの。

「それでもって、明久は既に彼女がいるんだからさ」

「あはは……まあ、クラスが違うから自由時間にならないと一緒に出来ないけど。でも、一緒にいる時間は目いっぱい思い出作るつもりだから」

「そっか」

「一応言つとくと明久……これはあくまで修学旅行であって、婚前旅行とか新婚旅行じゃねえからな?」

「わかつてるってば」

「……私は婚前旅行のつもり」

「って、おわ!? 霧島さん!」

「ちよ、霧島さん……杉並みたいに気配けして近づくのはやめてくれ」「ていうか、その引きずってるのは何?」

「……………雄二」

「……………そうですか」

ふう……相変わらずじゃのお。ここでの会話は特に代わり映えはしなさそうじゃし……甲板でも歩きまわってるかの。

そう思つて僕は明久達から離れ、甲板を回っておつた。しばらく歩いていると茜とぼったり会つたのじゃ。

「あ、秀吉君」

「うむ、花……じゃない、茜……でもないの、藍じゃな」

「あつたり〜♪」

よくよく観察してから訂正すると、藍は上機嫌に応えた。

外見はひとつの身体の中に2つの魂があるのじゃから見た目はもちろんのこと、今までずっとひとつの身体を共有しながら生活していたから、口調や仕草まで油断をすれば見逃してしまいそうな程に似通っておるから傍目からすれば見分けがつかんの。

「それで、藍はひとり散歩かの」

「うん。てことは、秀吉君も？」

「まあ。あの空気の中は面白いが、若干色濃いからの」

「あはは。義之君達は相変わらずですか」

「うむ。あやつらは年中バカ騒ぎが絶えんからの」

「こうして藍と2人でちよつとした話を楽しんでおった。

「で、秀吉君は班行動は何処へ？」

「うむ。白河やムツツリー二との班でまずは奈良の大仏からゆっくり見るつもりじゃ。その後で公園で鹿と戯れるそうじゃな」

「鹿かあ。じゃあ、お昼頃に合流になりそうだね」

「そうじゃの。お主らはどうするのじゃ？」

「最初はちよつとしたお寺を回って行って、それから鹿公園」

「ふう……3日もあるというに、隣の京都へは行かんのかの」

「京都……さては、お目当ては映画村ですかな？」

「うむ。儂も一度は行ってみたいと思っておったからの」

「あはは。時代劇の村で秀吉君が袴とか着たらすごい様になりそう。

あ、でも……舞子さんとかも似合うかも」

「儂は男じゃ」

「あはは」

「……………」

何故じゃろうか。今の藍からは何か違和感を覚えるぞい。

「藍……何かあったのかの？」

「へ？」

「今のお主は、何というか……気配が奇薄な気がするのじゃ」

「……………」

「どうかしたかの？」

「……うん、秀吉君には敵わないよね。実は……最近、眠くて怠いの」

「眠くて怠い？ 体調が優れないということかの？」

「そうじゃないよ。身体はお姉ちゃんのためだからいたって健康。問題は私の方」

「藍の方じゃと？」

身体の方がなんともないのなら藍のたるさの訴えはどういう事

じゃ？

「多分なんだけど……私は近いうちに、消えるんだと思うの」

「っ!? なん、じゃと?」

今、藍から信じられない言葉を聞いた。気の所為じゃと思いたかったが、藍はいつもと変わらない口調で堂々と告げる。

「消えるの。違和感を覚え始めたのは、桜が枯れた頃かな?」

桜が枯れた頃から……。もしやとは思っておったが、藍の存在も……。あの枯れない桜の魔法あつてのものじゃったか。

あの桜が枯れた事によつて、あらゆる願いが消えて桜に願いをかけた者達に何らかの影響が出ておるのじゃろう。

思い返してみれば、桜が枯れてから何人かが体調不良になったり、気落ちするような様子を見受けておったが、それらは皆桜への願いが消えていった影響じゃろう。

「……それについて、茜は知っておるのか?」

「まあ、ね。知つての通り、私とお姉ちゃんの身体はひとつだから。それに、最近引つ込んでる時にお姉ちゃんの声が聞こえづらくなつてから」

「……………」

恐らく、願いが消えていくにあたり、藍の存在が消えていつてるがためじゃろう。

「茜は、どうなのじゃ?」

「……正直、結構心配かな……。お姉ちゃん、どうにか平静を装つてるけど、かなり精神にきてるっぽいから」

仕方なからう。死んだと思つて、恐らく戻つてほしいと願つた時に藍が自分の中に来て……。そして桜が枯れた今、その存在が消えようとしているのじゃ。

戻つてきた事が嬉しかった分、その喪失感も大きいのじゃろう。

恐らく今、藍を失えば茜はこれから存分に生きていけるのじゃろうか。それが心配で仕方がないのじゃ。

「藍よ……お主が存在を維持できるのは、どのくらいじゃ?」

ふと、藍の存命期間が気になつて、気がつけばそのような事を尋ね

ておった。

「え？ うくん……わかんないけど、修学旅行の間はどうにか……？」
不安の残るような言葉じゃったが、それくらいの時間があればどうにかなるやもしれん。

「承知した。では藍よ、後で茜にも伝えておいてくれんかの。自由時間でもし暇があれば農と行動を共にしてほしい。農は農なりにお主が……いや、お主ら2人が忘れんような思い出を作るために協力を惜しまんと」

正直、農は茜に何て言葉をかけていいのかが全くわからん。じやが、消えゆこうとしている藍の傍で恐らく茜は嘆いているのじやろう。

大事な家族と金輪際話す事もできなくなってしまうのじやからな。
じやが、どんなに望んでおっても夢は覚めるものじや。茜、お主は今まで夢の中で閉じこもってしまっておるだけじや。

これからの事を考えれば、お主は藍の死と本気で向かい合い、乗り越えなければならなくなるじやろう。

もちろん、お主にとって藍の死を認めるのは何より辛い……藍の事を話しているお主を見ていればそれくらいわかるぞい。

じやから……農が少しでも茜が藍の死という現実を乗り越えられるように後押しできればよいと思っておる。そのためにこうして誘っておる。

農にできることとなると、これが精一杯じや。農は明久のように突飛な行動ができる方ではない。雄二のように頭が回るわけでもない。

じやが、農とて目の前で苦しんでいるおなごをただ黙って見ておることなどできぬのじや。

「……わかった。後で話しておくね」

「頼む」

農は一言そう返し、その場を離れていった。

そして農はそれぞれの班に用意された部屋へと戻り、しおりと奈良の資料を広げて再び旅行先の確認を始める。

農は農にできることを精一杯やる。どうにか茜の元気を取り戻せ

るよう努力するのみじゃ。

儂は本島に着くまで茜と藍と一緒に行く計画を立てていくのじゃった。

本島に着いてすぐに電車へ乗り、奈良へ向かって直進した。

そんでもって、件の奈良県に着いてからは班行動でみんなと別れ、各班で目的の場所へと向かっていく。ちなみに僕達が最初に向かったのは、

「やっぱり奈良と言えば……」

「東大寺の大仏だなあ！」

「おお、見事にでかい」

「「うんうん」」

僕達が最初に訪れたのは東大寺。その中には小さなお子さんも知ってるであろう東大寺名物、盧遮那大仏が僕達の前にどっしりと祀られていた。

「この圧倒的な存在感と言ったら、もう息をする事すら忘れてしまっそうだ。」

僕達は現物の大きさに圧倒されながらも隅から隅まで身体を反らしながら眺めていた。

「いたっ！」

約1名、体勢を崩してコケてしまったが。

大仏を見た後は木造金剛力士像の前で男子でポージング取ってそれを杉並君のカメラで撮影したり、

「あぁくん！ 胸が引つかかる〜！」

「もう！ 自分の体型の事も考えてよ〜！」

「世話が焼けるわね」

大仏の鼻と同じ大きさの穴のある柱……くぐると一年間健康に過

ごせるといいうご利益がある柱をくぐろうとした茜ちゃんだが、案の定その豊満なバストが花咲さんの進行を妨げてしまい、抜けなくなったというオチは想像に難くない。

「義之〜！ 買ってきたよ〜！」

「お、待ってました！」

「あくん！ 可愛い〜！」

「ほら、お食べ！」

「ぎゃ〜！ 何か襲ってくるんだけどお〜!?!」

「ちなみに、鹿は子供に近づくと襲いかかるので、餌をやる時は気をつけておけ」

「杉並君、既に約1名襲われています」

鹿にせんべいやったりしてワイワイ騒いだりもした。

修学旅行1日目はこんな風にいい感じに進んでいった。

時間を飛んで1日目の夜……。

「つはあ！ いい湯だったなあ！」

「うん。こういう古風な風呂って、風流っていうかさ……とにかく最高だよな」

「さあて、身も清めたところで、恒例のアレ行くか！」

「アレって？」

渉の言葉に義之が首を傾げた。うん、なんとなく次の展開が予想できると。

「そりゃ、もちろん。女子部屋訪問！」

『いいね！』

『それ、乗った！』

『やっぱり旅館に来たとなればコレだよな！』

渉の提案に他の男子もテンションが上がって乗っかってきてる。

「はあ、バカバカしい。俺は部屋に戻ってる」

「僕も、流石にね……」

「つて、おいおい！ 女の子と仲良くなる絶好の機会だろう！ 手をこまねいてるわけにはいかないだろう？」

「いいじゃねえか、男同士で騒いでも」

「僕は……ななちゃんに見つかつたら後が怖いから」

「かあ！ 明久の動機はまあいいとして、義之！ このラブルジョワが！ お前がいなくてこっちとしても困るんだよ！」

「はあ？ 意味がわかんねえよ」

「問答無用だ！ 全員、義之にかかれえ！ 強制連行だ！」

『『『しやあああああ!!』』』』

「だああああああ!？」

渉の号令で男子集団が義之へ飛びかかり、義之は呆気無く捕まった。

義之が捕まつて数分後、僕もクラスメートの男子に引つ張られ、女子部屋へと行った。

訪問したのは……小恋ちゃん達の部屋か。部屋の魅の横にあるプレートに名前がある。

「おいおい、本当にやるつもりか？」

ちなみに義之は布団に包まれ、その上にロープでぎっちり縛られていた。

「つたりめえだろ！ ここまで来たらとことんだ！ ていうわけで先鋒行きます！ お邪魔しまあす！」

渉が元気よく、躊躇いもなく女子部屋へと入り込んでいった。

「はあい！ 女子の皆さんにお届けものでえす！ ていうわけで、野郎共！」

『『『おお！』』』』

「だあああああ!？」

『『『そりやあ！』』』』

「ぎゃふっ!?!」

「よ、義之っ!?!」

「というわけで、お邪魔しまあす!」

「お邪魔します、じやないでしょうが! あんた達、女子部屋に問答無用で——」

『『きゃあああああ!!』』』

沢井さんが注意しようとしたところに女子から声が上がった。

しかし、これは悲鳴などではなく、歓声みたいなものだった。見ると女子も決して嫌がつてるわけじゃなく、僕達の来訪を喜んでるようだった。

女子も同性だけでは色々物足りなかったという事だろうか。

「あらあら、思わぬ幸運が舞い降りてきたわね」

「渉君ナイス♪」

「へへっ! だろうだろう?」

杏ちゃんも茜ちゃんもすっかり上機嫌で順応してる。しかも女子のひとりがお茶まで出してってくれるし。

もう、こうなったらこうなっただとことん夜を楽しむとしましょうかね。

「よ、義之……来るなら来るって言ってくれば、こっちだって色々おもてなしとか考えてたのに」

「いや、これは来たっていうか……引っ張られたっていうかな」

小恋ちゃんは突然の訪問に驚きつつも、義之の来訪に喜んでるのか、頬が緩んでいた。

いい雰囲気かなと思ってた時だった。

ドササ——。

小恋ちゃんが来訪時に構えていたバッグの中から何かが落ちた。

見ると……それは絶景かな。女の子の大事な部分を隠すための布……つまり、下着の数々が小恋ちゃんのバッグから出てきた。

『『おぉー!』』』

しかも、どれも中々にアダルテイなもので、更にとてもサイズが大きい。これだけで彼女のスタイルのよさがうかがえると言うものだ。

「あ……」

「あ、あ……ああ……」

突然の状況に義之は縛られているために視線を外す事が難しく、小恋ちゃんに向かい合ったまま固まり、小恋ちゃんもあまりのハプニングに顔を真っ赤にそめ、数秒間硬直してから、

「きゃああああああああ!!」

「ぎゃぶっ!」

悲鳴をあげ、義之の頬に思いっきりビンタをかました。

義之、ドンマイ。

「いてて……」

「大丈夫、義之?」

「ご、ごめんね……」

「いや、いいって……」

義之は頬にできた紅葉型の痣をさすりながら言う。いや、さっきのは見事にいい音がしたね。

みんなはみんなでワイワイ騒いでるし。男子が来訪したのがきっかけなのか、みんなもう歯止めがきかなくなってるっていうか。

まあ、みんなが楽しんでるわけだから何も言わないけど。

「すみません」

部屋の魅が開き、旅館の着物を着た中居さんが入ってきた。

「女子用の大浴場に携帯電話をお忘れの方はいらっしやいますか?」

中居さんが手に持ってた携帯電話を差し出しながら尋ねる。

「あ、それ私のだ!」

どうやら浴場に携帯を置きっぱなしにしてたようだ。旅行となるとこういうのってたまにあるよね。

「ねえ、あの中居さんって……『ム』じゃないの?」

女子のひとりが中居さんを見てそんな事を呟いた。

「え? 『ム』って、確かロボットの名前だよね? ていうか、あの人ロボットなの?」

「こんな古風な旅館に『μ』なんて珍しいね」

「いや、そうでもないさ。旅館の仕事というのは、中々にハードなものだからな。使用している機関は多いらしい」

杉並君が丁寧な説明を入れる。どうやらかなりの頻度で使われているようだ。

「へえ……そうなんだ」

「せっかくの情緒が台無しね」

突然沢井さんがそんな事を言い出した。いや、確かに古風な旅館にロボットつていうのはミスマツチと言えなくも無いと思うけど……。『そうか？』着物も中々似合うし、可愛いじゃん。はくあく、俺ん家にもいてくれたらいいのにな。家事とか色々さ」

「ああ、それは同感かも……」

ああいうのが僕の世界にもあったら、僕も安心して家業を任せる事ができただろうなあ。

姉さんに料理なんてさせるわけにいかないから。

「冗談でもそういう事言わないでー」

僕達の言葉に沢井さんが憤慨したように怒鳴ってくる。

「沢井さん？」

「いや、そんな事言ってもなあ……いたらそれはそれで楽しいじゃん？ ゲームとかしたり、色々話し合ったりとかさ……」

「軽蔑するわ」

渉の言葉をその一言で一蹴し、沢井さんは部屋を出ていこうとする。

「……『μ』なんてロボット……いなくなっちゃえばいいのよ」

「そこまで言わなくてもいいだろうー！」

沢井さんの言葉に義之が怒鳴った。

「よ、義之……」

「別にいたっていいだろう」

「はっ。常識を疑うわね」

……今の言葉には流石にカチンと来た。

「どういう意味なの、それ？ いくらなんでもそんな言い方はないだ

ろう！」

「よ、吉井……？」

「いきなりロボットなんていなくなれだなんて……何でそんな事言うんだよ？ 一体何でそんな風にロボットを嫌うんだよ？」

「つ……あなたには関係ないでしょう！」

そう言つて麩をピシヤリと閉め、沢井さんは部屋から出ていった。それから部屋の中は沈黙に包まれた。

「ふう……折角の宴会が台無しね」

杏ちゃんも溜息混じりに呟き、布団を敷き始める。流石にこんな空気の中で騒ぐ気にもなれないか。

「しっかし、委員長あの怒り方は尋常じゃねえな」

「あいつ、『μ』に恨みでもあるのかよ？」

「さてな。さて、流石にこの時間帯に男子が女子の部屋にいるのはマズイ。今日のところは引き上げるとしよう」

杉並君の言葉ももつともだ。もう11時を回っているし、そろそろ見張りの先生が来てもおかしくない。

僕達は気まずい空気のまま女子部屋を出ていき、自分達の部屋へと戻っていった。

しかし、なんで沢井さんはあんなにもロボットに対して憎しみを抱いているのだろうか？

沢井さんとロボット……『μ』との間で何かがあったのだろうか？ 考えても、確信材料がないのでこの件については戻ってきてからまた考える事にし、僕は眠りについた。

第七十話

「ん……うん………」

カーテンから漏れた光が目に入り、僕は目覚めた。ゆっくりと布団から身体を起こし、背伸びをした。布団………つて、そういえば僕は昨日から修学旅行だったわけ。

それで、ここは旅館の一部屋……僕達の寢床だ。

慣れない場所で眠ったからなのか、時間的に早く起きたものの寝足りないなあ。

まあ、就寝時間が来てもしばらく僕達は部屋でワイワイ騒いでいたしなあ。

「よっ………」

とりあえず、僕は布団から起きて部屋から出る。途中うっかり僕の頭を踏みそうになってしまったけど、うまく足を浮かして飛び越えた。

部屋から出て少し歩き、洗面所まで行って顔を洗う。そして鏡で自分の顔を見る。

うん、今日も黒い整った髪型に少し面倒そうな表情をした自分の顔だ。僕はうんうんと頷いてタオルで顔を拭く。

「あ、もう起きてたんだ………」

声がかかり、タオルを顔から外すと小恋ちゃんの顔が見えた。

「ああ、おはよう。ていうか、そっちも早いじゃん」

「うん。旅館で寝るなんて珍しいから早く覚めちゃった」

「ああ、わかるわかる。こういうところでは妙に目が覚めるのが早くなるよ」

「うんうん」

それから僕はしばらく小恋ちゃんと他愛のない話をした。

「あ、そろそろ起床時間だから部屋に戻ってるね」

「ああ、そうだね。じゃあ、また後で」

「うん。また後でね、義之」

小恋ちゃんは僕にそう言い残してその場を去っていった。僕も部屋に戻ろうと歩みだす。

……ちよつと待つて。小恋ちゃん、僕の事を義之つて言わなかったか？

僕は慌てて洗面所に戻つてもう一度鏡を確認した。

整った黒い髪に、ちよつと面倒くさそうな顔つき……間違いはない。これは、

「義之の……顔？」

今の僕は信じがたい事実直面している。僕は何故か、義之の姿となつていた。

「義之いいいいいい！ 起きろおおおおお！」

部屋に戻ると同時に僕はかつてない程大声で義之……恐らく僕の身体になつてるだろう彼を起こす。

「ん……何だ？ もう起床時間なのか？」

「義之!? 義之なんだよね!」

「ああ、一体何なんだ……？ 明久か？ ていうか、何鏡なんか俺の目の前に構えてんだよ……？」

「寝ぼけるな義之、今の状態をよく確認しろ。僕は今鏡を持つてるか？」

「は？ ……ん？ あれ？ なんで俺が目の前に？」

「それで、鏡を見て」

僕は僕の姿となつた義之に鏡を見せる。

「ん……鏡の中には明久の顔が………○▼♪☆※◇&%#\$*+
〜っ！」

現状を理解すると、義之は声にならない悲鳴を上げた。うん、誰だつてそうなるよね。

「ちよ、ちよちよちよちよつと待つてっ！ 一体どういう事だ!? 一体全体何で俺とお前が入れ替わつてんだ!」

「ごめん、僕にもよくはわからないんだ……」

こんな事態を招くような原因に心当たりなんてあるわけがない。

「ああ……おい、どうした桜内。何別クラスの部屋で騒いでんだ？」

渉が身体を起こして不機嫌そうに呟いた。

「ああ、ごめん。ちよつと今信じられない光景に出くわして……
別クラス？」

渉の言い回しに違和感を覚えた。というか、仕草自体が何か変だ。

「んあ？ 何だ？」

「……………」

まさかとは思うけど……。

「……………ねえ」

「あん？」

「鏡、見てみなよ」

「はあ？ 人の部屋で騒いでいきなり何を……………？@△■×◎#%
\$~~~~つ!？」

義之と同じように声にならない悲鳴を上げた。

「何じやこりやああああああ!？」

しかし、すぐに復活して再び魂の叫びを響かせる。

「おい、どういう事だ桜内！ 何故俺が板橋の姿に!？」

「ひとつ言うと、えつと、雄二だね……僕は義之じゃないからね？」

「は？ 何言って……いや待て。その間の抜けたような口調、お前明
久か!？」

間の抜けたようなは余計だ。

「え？ お前、涉じやなくて……坂本なのか？」

「あ、ああ……んでもって、明久の姿したお前は……桜内か？」

「おう……」

「何ゆえ、そんな事に……？」

「枯れない桜が枯れて以来の大事件だな」

「何故も何もねえだろ。こんな事できるのはアイツしかいねえ……」

「……………ああ、なるほどね」

「え？ お前ら、こうなった原因に心当たりがあるのか？」

まあ、既に一度入れ替わり体験した身なので。

「まあな。その前に現状把握が先だ。こうなってる以上、俺達以外にも入れ替わりした奴らがいなくても限らないしな」

「うん。起床まで時間がないから、まず僕達の身近にいる人達の方から回ろう」

「よし。まずは俺の身体からだ、急ぐぞ」

雄二は自分の身体が心配なのか、速攻部屋を出て自分の身体が眠っている部屋へと向かっていった。

僕達もみんなに気づかれないように渉の姿をした雄二についていった。

「さて、みんな集まったね？」

僕の周りには僕の姿になった義之、渉の姿になった雄二、雄二の姿になった渉。そしてムツツリーニ、秀吉、杉並君がいた。

「色々話し合ってみたところ、どうやら俺達はこんな具合に入れ替わっているようだな」

ムツツリーニ……もとい、ムツツリーニの姿をした杉並君が図を作ってわかりやすく説明した。ていうか、杉並君は一瞬でこの状況をうまく飲み込んでいた。

類まれな根性してるよ君。

つと、今現在、僕達の入替わった人格はというと、

桜内義之↓吉井明久 吉井明久↓桜内義之 板橋渉↓坂本雄二
杉並↓木下秀吉 土屋康太↓杉並 木下秀吉↓土屋康太 坂本雄二
↓板橋渉。

「……と、いったところだ」

「ややこしいー！」

今度も随分大掛かりに入れ替わりが行われたようだ。

「しかし、こうやって入れ替わりを体験するとは……思ってもみな

かったのう」

「杉……じゃない。木下、そんな呑気な……」

杉並君の姿をした秀吉の言葉に僕の姿をした義之が呆れた。……
ああ、言っていると余計ややこしくなるなあ。

「しっかし、何でいきなりこんな入れ替わりが起きたんだ？」

雄二の姿をした板橋君が首を傾げていた。

「原因はなんとなく心当たりがある。恐らく……」

「うん。間違いなくアレだよ……」

一度入れ替わった事がある僕らにはこうなつた原因がアレ以外に
考えられない。

「そういえば、さつきも言ってたが、お前らはこうなつた原因に心当た
りがあるのか？」

「ああ。多分……翔子の奴の仕業だ」

「霧島さんが？」

「板……ではない。雄二よ、ひよつとすると、霧島はまたあの本を使つ
たという事かの？」

「恐らく間違いない」

「あの本？」

僕の姿をした義之と、雄二の姿をした板橋君が首を傾げた。

「多分、あの『実践・本格黒魔術』による効果しか思い浮かばねえ」

「うん、それしかないよね」

「何だ、その暗い雰囲気漂うタイトルの本は？」

僕の姿をした……ああもう、面倒臭いや。義之が本のタイトルを聞
いて怪訝な顔をした。

まあ、いきなり人の持つてる本がこんな荒唐無稽な状況の原因に
なってるって言われても信じないよね。

「ひとつ言つてやるが、事実だ。俺も明久も以前その本の所為で酷え
目に遭わされたからな」

「うん。あんな目に遭うのはもうごめんだって思ってたけど……」

「再びこうして現実に起こるとは思わなかったぜ」

「じゃが、あの本に書かれた入れ替わりに関するページは以前、俺が

破った筈なのじゃが」

「確かに。それに、入れ替わるにはまず葉がないといけねえ」

確かに、以前は秀吉の鋭い観察眼と行動のおかげで元に戻り、あの本のページは一部破れた筈なのに。

「ああ、それなのだが……その本はこちらにもあるぞ。裏世界のたる筋からの秘密の輸入先……しかも特別な手順を踏まなければ手に入らないという幻の本の筈なのだが」

「あつたんかい！」

まさかこつちの世界にも同じ本が存在しているようとは。しかし、霧島さんもよく見つけたね、そんなすごい本。

「まさか、紹介しただけですぐに手に入れるとは、霧島嬢の行動は流石としか言い様がない」

「その本紹介したのはお前かあ！ ていうか、思い出してきたぞ！

昨日また翔子から理不尽なおしおきされてる間にあの本が脳天に向かつて振り下ろされた記憶が……！」

どうやら霧島さんが再びあの本を手にいれたきっかけは杉並君にあつたようだ。

ていうか、また何かやったの雄二。

「とりあえず雄二よ、今はくだらん事を言い合ってる場合ではないのではないか？」

「はっ！ そうだったぜ。とりあえず、隙を見て翔子からまたあの本を奪ってページを破るか葉をでこに張りさえすれば——」

「よし。だったら今坂本になつて俺が霧島に交際を条件に言えば——」

「させるかああああ！ お前が行ったら交際どころか、わけもわからんうちに婚姻届に判を押す羽目になるのがオチだあ！」

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ？」

「それを今考えてんだろうが！」

「全く、雄二にも困ったもんだよね、秀吉……あれ？ 秀吉は？」

「俺は今杉並じゃぞ」

「ああ、ごめん。めっちゃややこしくて……って、そういえば秀吉の身

体の……」

「木下の身体の中身は今は土屋だ」

「ああ、そうだった。それで、ムッツリーニは？」

秀吉の姿をしたムッツリーニが見当たらないので何処にいるかとキョロキョロすると、

「……………」

隅っこで体育座りをして暗い雰囲気醸し出していた。

「…………ムッツリーニ？」

「……………桜…………明久」

「何？」

「…………秀吉は……………男だった…………っ！」

「君はまだ誤解していたのか」

どうやら秀吉の身体になってようやく秀吉が男だと認識したようだ。

ただ、今まで秀吉の事を女だと思っていた分だけダメージが大きかったようだ。

うん。僕も以前女だと思っていたから多少同情はするけど。

「むう…………自分の身体を借りられてようやくというのも複雑な心境じゃが、これでようやくお主も儂を男と認識したじやろう？」

「……………」

ムッツリーニにしてみればかなりショックな出来事だったらしい。こりやしばらくは立ち直れないね。

「ふむ…………法隆寺とは、聖徳太子一族の怨念を封じ込めた、呪術施設と言われ、開かずの門の七不思議などが存在しており——」

とりあえず、今日のところは簡単に元に戻れそうにないのでしばらくは入れ替わったままで修学旅行を続ける事になった。

流石に言いふらしたら混乱しそうだし、何より雄二が必死すぎたから。それにしても秀吉、杉並君の演技うまいな。

「あはは……杉並君、張り切ってるね。ねえ、義之」

「……………」

「義之？」

「(おい、明久。今はお前が義之だろうが)」

「はっ！ あ、ああ……全く、一体どんな事調べたんだかな。小恋ちや

——」

「(明久！)」

「小恋！」

危ない危ない。そうだ、今僕は桜内義之だったんだ。んで、逆に義之が僕だった。

入れ替わったのが僕と義之で助かった。いざとなればこうしてフォローしあえる立場にあるんだから。

「それにしても渉君、何処に行っちゃったんだろう？ 別件の用事があるから私達で楽しんでって言ってたけど。なんでだろう？」

「さ、さあな……………」

「渉の事だし、ナンパなんてね」

「あはは、まさかそんなわけない……………よね？」

「信用ねえな、渉の奴」

「え？ 吉井君？」

「(義之っ！ 口調口調！)」

「あ、いや、なんでもないよ！ あははは！」

「……………」

「あははは……………」

僕と義之で苦笑いしていた。お互いフォローしあえる立場にあるとはいえ、他人になりすますなんてやっぱ簡単にはできないな。

こういう時、演劇のホープの秀吉が羨ましいよ。

あ、ちなみに渉……………この場合は渉になった雄二んだけど、彼は現在雄二になっている渉の監視に行っている。

雄二曰く、自分が目を離しているうちにどんな恐ろしい事になるかわからないからさそうだ。

全く……………どうせならさっさとくっついて僕達の入替わりを解く

ように説得してくれれば万事オツケーなのにさ。なんで雄二はこう
いらないうところで意地っ張りなんだかな。

おかげでいらぬ苦勞を背負う羽目になってるんだしき。

「(で、明久。あれから坂本から何か連絡はあったか?)」

「(うん……多分、まだ霧島さんと渉をつけてるんだと思うけど……ま
あ、今雄二の身体に入ってるのが渉なんだし、霧島さんの誘惑に簡単
に負けてデート気分でも味わってるんじゃない?)」

「(まあ、それはそれで霧島からこの入れ替わりの解除方法とか聞けそ
うなんだが……あいつ、ちゃんと目的わかってんだらうな?)」

「(そ、それは……不安かも)」

そもそも女が全てと言っても過言ではないような性格の渉だ。今
自分の置かれてる状況だけは忘れないでほしい。

「(もし、これが前と一緒ならあの本……本とまでいなくても朧だけ
でも手に入ればなんとかなるけど——)」

すると、僕……の身体の義之の制服のポケットから携帯の着信音が
鳴った。

「お、俺か……えっと、この場合、お前が出た方がいいのか?」

「相手、誰になってる?」

「えっと……『板橋 渉』ってなってるが、今あいつの中身は……」

「雄二だから、じゃあ僕が出るよ」

僕は義之から携帯を受け取って通話ボタンを押し、耳に当てる。

「もしもし?」

『おお、明久……でいいのか?』

「うん。真正正銘の明久。で? そっちはどうなの?」

『ああ、色々危険はあったが、どうにか朧を取る事には成功した。あれ
が俺達の体験した通りなら朧一枚で事足りる』

「オーケー。じゃあ、こっちも隙を見て脱出するから、昼頃に法隆寺の
入口付近で。どう?」

『よし、それなら大丈夫だ。こっちも板橋を連れて向かう』

「了解」

僕は通話を切って義之に手渡す。

「とりあえず、葉を手に入れたみたい」

「じゃあ、元には戻れるんだな？」

「まあ、僕の世界と仕組みが同じならの話だけど」

とりあえず、早く元に戻っておかないと、修学旅行の間に僕達の精神が疲れ果ててしまう。

葉を手に入れた情報を耳にして少し安心できたのか、午前中はそれぞれの身体に見合った特徴を演じるのに集中できた。

「お、いたか明久！ 桜内！ 秀吉！」

「雄二よ、今僕は杉並じゃ！ 言葉に気をつけるのじゃ！」

「わ、わりい……とりあえず、これで目的は達成される！」

そう言っただけで雄二が手に持っているものを突き出してきた。

うん、それは紛れもなくあの本に挟んであった葉と全く同じものだった。

「で、それを使えば俺達は元に戻るって事だな？」

「うん。確か、入れ替わりたい対象者の額に葉をくっつければいいんだっけ？」

「まあ、そういう事だ」

「では、まずは試しとして俺が杉並と、その後でムツツリー二に貼り付けるとしてみよう」

「頼む。俺もまずはちゃんと機能するかどうかを見ないと」

そう言っただけで雄二は秀吉に葉を渡し、まずムツツリー二の姿をした杉並君の額に葉を貼ろうと試みる。

「では、ゆくぞ」

全員が息を呑み、その場の様子を見守る。

秀吉が杉並君の額に葉を貼り、一瞬身体がビクンと跳ね上がったと思えば、

「……………む？ どうなったかの？」

「うむ……入れ替わる感覚としては、もう少しこう……刺激の強いも

のを期待していたのだが」

「あ……」

「ムツツリーニがジジイ言葉で……」

「杉並は……戻ってるな」

「てことは……」

「入れ替わり成功っ！」

「どうやら入れ替わる事に成功したようだ。」

「じゃあ、次はムツツリーニと秀吉だね」

「うむ。では、ムツツリーニよ」

「……（コクツ）」

今度はムツツリーニの身体に入った秀吉と秀吉の身体を借りたムツツリーニが向かい合い、再び秀吉が葉をムツツリーニの額に貼った。

そして再び2人の身体がビクンと跳ね上がり、

「……どうじゃ？ 戻ったかの？」

「……身体の重さはいつも通り」

「2人の口調が戻ってるから……」

「成功だな」

「じゃあ、次は義之と吉井でだな」

「てことで、頼むぞ明久」

「了解」

僕はムツツリーニから葉を受け取り、いざ僕の身体に入った義之の額に葉を貼り付けた。

すると一瞬スタンガンを浴びたような刺激が身体を襲ったかと思うと、視界が暗転した。

何やらちよつとした気だるさを覚えながら目を開けると、目の前には葉を持った義之の姿があった。

「……これは、戻った……のか？」

「僕の目の前には義之がいるよ」

「んで、俺の前には明久がいるから……成功だ」

「つしやあああああああ！」

やっと戻った僕の身体！ やっぱり自分の身体が一番だよね！

「それじゃあ、後は俺と板橋だ！ じゃあ、板橋！ そこに直——」
「させない」

ガシツ、と。渉の身体に入った雄二の手を掴む音が聞こえた。

ふと見るとそこには、

「……しよ、翔子？」

霧島さんがいた。

「……迂闊だった。昨日雄二におしおきしてる最中に、あの本の葉を雄二に叩きつけて、その後で解こうと雄二の部屋に行こうとしたけど……眠かったから所々間違ってた」

あ、それでこんな大掛かりな入れ替わりになっちゃってたわけね。

「みんなには迷惑をかけた。ごめんなさい」

「そ、そうか。うん、自分の悪い行いを詫びるのはいいことだ。だから、ここは俺と板橋を元に戻すために手を放してくれ」

「……それで板橋、これを」

「んあ？ えつと、何だあ？ 『私、坂本雄二は霧島翔子を妻とし、生涯を共に過ごす事を誓います』？ これは……誓約書？ しかも、裏には記入欄に合わせてカーボン紙を挟んだ婚姻届まで!」

「ぎゃああああああ!!」

渉の説明により、雄二が悲鳴を上げた。身体が渉のものなので悲鳴の音がいつもより小さい。

渉の身体だと声量が少ないのかな？

「これ、雄二の実印。それと、隣にこの朱肉に指をつけて、そこに押す」

「板橋！ 記入するな！ 押すな！ そうなれば俺は破滅を……」

「……今度、私のクラスの女子を何人か連れてデートさせてあげる」

「ぜひともー」

霧島さんの提案に渉は一瞬で乗っかり、手際よくサインと実印と指に朱肉を付け、ピタンと契約書類の手続きを済ませた。

「ノオオオオ——ウ!!」

その様子を見た雄二は遂に絶望の悲鳴を上げた。

「……ありがとう、板橋」

第七十一話

「じゃあ、義之。僕は一旦学園に顔出してくるから」

「ああ、こっちは俺がなんとかするよ」

「うん。じゃあ、また後で」

明久はそう言い残して音姉の部屋から出て行き、部屋には俺の音姉だけになった。

静寂の空気の中ではエアコンの音だけが響き、カーテンの向こうから夕陽が漏れていた。

修学旅行の3日目の昼頃、由夢から音姉が倒れたと聞き、俺と明久はすぐさま初音島へ全速力で駆けつけていった。

そして学園の保健室へ駆け込んでみれば音姉がいつにない疲れきった顔でベッドの上に横たわっていた。

水越先生の話によれば、修学旅行初日から天枷のロボット疑惑が既に広まりきっており、数多の生徒からのからかいやイジメを鎮めるのに休む暇もなかったらしい。

いくら音姉やまゆき先輩が一流と言っても、全校生徒相手では対処しきれない。

そこに更に追い打ちをかけるように生徒から……主に天枷のクラスメイト達からロボットが傍にいるなんてありえない、ロボットが人間と暮らす事がどうかしてるなどと、数え上げればキリがないくらいの苦情が押し寄せてきたらしい。

あの事故から何かしらの動きがある事はみんな覚悟の上だったが、休日だったあの日の事故から既に学園中にまで広がったのは予想外だった。

今更ロボットじゃないと言っても、周りのみんなの疑念はなくならないだろうし、かといってばらせば天枷が今度こそ処分されるかもしれない。

そんなこんなで心身共に疲労の溜まった音姉は遂に今日倒れてしまったというわけだ。

「悪いな、音姉……」

俺は申し訳ない気持ちで音姉の髪をそつと撫でた。

「ん……」

音姉の口から声が漏れた。どうやら今ので起きてしまったようだ。

音姉の瞼がゆつくりと開いていき、数秒視線を泳がせて俺の方を向いて止まった。そこから更に数秒かかって俺を認識したらしい。

「……お、弟……君?」

「悪い、起こしちゃったか?」

「え……? 何で弟君が? 修学旅行は……?」

「由夢から音姉が倒れたって聞いたから、明久と一緒に速攻で帰ってきた」

「え、そんな……」

「気にすんなって。どうせ後一日で終わりの旅行なんだ。今日戻ってきたからといって、そう大差ないって」

音姉の気が沈みそうになるのを感じてすぐに気にしないように言った。

水越先生から聞いた事情じゃ、倒れるのはしようがないし、ここに来たのは俺の意思だ。そこは間違わないでほしかった。

「それより具合はどうだ? だいぶ疲れたって聞いたから」

「うん、もう平気。弟君の顔見たからかな?」

「ば、馬鹿言ってるなよ」

いきなり何を言い出すかと思えば、またそんな恥ずかしい事を。

「あく、お姉ちゃんに馬鹿って言った……」

「ん……熱は、ないな」

「風邪なんて引いてません」

「そりやそつか。体調管理しっかりしてるもんな、音姉は」

「……カツコ悪いとこ、見せちゃったね。ここまで運んできて、重かったんじゃないの?」

穏やかな笑顔でそう聞いてきた。

「明日はきつと筋肉痛だな。特に両腕が……」

「む、それは私が重かったって事!」

「さつき自分でそう言ったんじゃないか」

「普通は重くなかったよって言うべきだよ」

「まあ、半分は冗談だけどき。体重はどうあれ、交代でやっても学園から運ぶの相当重労働だったんだぞ」

距離が距離なんだからむしろ感謝してほしいところだ。

けど、体重が重いなどと冗談でも言われたのが気に入らなかったのか、頬を膨らませて抗議していた。

こんだけ普段通りの表情ができるのなら安心だ。

「とりあえず、だいぶ楽になったみたいだな」

「あ、うん……弟君がそばにいてくれたからかな？」

またそんな事を。しかも照れながら視線をそらせる仕草が妙に可愛く感じてしまう。

「しかし、無理しすぎだろ。天枷の事を頼むって言ったのは俺だけど、倒れるまで我慢しなくたって」

「うん、ごめん」

「たく……あんま心配させるなよ」

「心配……してくれたんだ」

「当たり前だろ」

「えへへ……」

音姉は何故か幸せそうな笑みを浮かべる。

「あのなあ、人に心配かけておいて何幸せそうに笑う？」

怒ったフリをりながら、こっちも自然と口元が緩んでしまう。

「ん、ごめん」

「たく……」

「……約束、覚えてくれてたんだ」

「え？」

約束？ 約束って何の事だ？ 旅行前に何か約束なんてしたっけか？

「あ、ううん。なんでもない。ごめんね、変な事言って」

「はあ……まあ、もう平気みたいだし。元気の出るスープでも作っておくか——つと……」

料理をしにいこうと立ち上がると、目の前がぐらりと揺れたような感覚に襲われ、危うく倒れそうになる。

「弟君……？」

「大丈夫……ちよつと、立ちくらみしただけ。音姉の無事を見たら、気が緩んだかな？」

「で、でも……」

「大丈夫だって。大急ぎで帰ってきたからちよつと疲れただけ。じゃあ、また後でな」

俺はそう言つて音姉の部屋から出ていった。

さて、音姉の無事も確認できたことだし、旅行も途中で切つちまったものは仕方ねえ。ここはいつそ開き直るか。

「えつと……それで、どうなんですか？ 天枷さんの方は……？」

僕は音姫さんの事を義之に任せ、学園の保健室に行き、今水越先生と天枷さんの事について話し合っていた。

「正直、かなりしんどい状況だというのは確かね。彼女がロボットではないかという噂がかなり広まってしまった」

「なんとかならないんでしょうか？」

「どうにもならないわ。噂を鎮圧しようとしても、手が回らないし……かと言つて、彼女の正体を明かしてしまえば、

余計騒ぎを大きくするだけだわ」

「でも、このままでも騒ぎは大きくなるだろうから、いつその事天枷さんの事を話して、わかってもらえば……」

「確かに、君達は彼女の正体を知つても、彼女の存在を受け入れてくれた。それには感謝してもらいたくないくらいさ。でもね、誰も彼もがみんな君達と同じ考えだと思わない方がいいわ。君だって、現代社会を学んでいるなら少しはわかるはずでしょ？ ロボットを忌避してる人は少なくないし……中には、憎んでる人だっているわ」

「憎んでる……」

憎しみという言葉で、昨夜の委員長の態度を思い出した。

「こっちとしても、対策は検討しているさ。美夏の事は、もうしばらく待ってほしい。」

その間は、引き続き彼女を頼む。いいかな？」

「……わかりました」

正直言えば、僕も手伝いたいと言いたところだったけど、僕はこういういった頭脳労働なんて向かないし、ムツツリーニみたいに情報操作ができる腕もない。

できる事なんてかなり限られている。こんな時、もう少しちゃんと勉強してればと本気で思う。

なんて言っても結局は後の祭り、だったか。こんな事愚痴っても何も始まらないし、僕は僕のやることを全力でなすのみだ。

「……と、その前に……ななかちゃんに連絡だ」

彼女に何も言わずに、しかも約束をすっぽかす形で帰ってしまったんだ。怒ってるだろうな、ななかちゃん。

僕は恐る恐る携帯のボタンを押して、ななかちゃんにかける。さて、懺悔の時間の始まりだ。

「うん……そう……。……それはわかったけど、せめて一言言っただけじゃなく。……ふくん。その言葉、忘れないで置いてね♪」
明久と別れた後の班行動で、白河の携帯が鳴り、それに出たら明久と桜内が修学旅行をすっぽかして初音島に帰ったという報告らしかった。

なんでも、向こうで音姫先輩が過労によって倒れたらしく、それを聞いた明久達が飛んでいったようじゃ。

まったく、明久らしいというか……しかも桜内までも。仕方のない

やつじや。

白河の奴も、明久から事情を聞いて仕方ないなという風に振舞っている。まあ、明久のお人好しは今に始まった事じゃないからの。

「うん……音姫先輩に、早くよくなつてくださいって伝えておいて。……うん、じやあ」

「どうじや？ 明久の方は？」

「うん、音姫さんの方は大丈夫そうだって。修学旅行の方はもう無理そうだから、こっちは自分に任せてそっちはそっちで自分達の方まで楽しんでいってだって」

「そうか。音姫先輩が倒れたからと聞いて心配する気持ちはわかるから仕方ないにしても、明久が初音島に戻ってしまつて残念じやったの。個人行動の際、デートする予定だったのじやろ？」

明久は特に楽しみにしておつたのに、運が悪かつたのお。

「うん。でも、あれが明久君だから仕方ないなあつて気持ちもあるから……しようがないから個人行動じや私は小恋とのデートに変更しようかな」

まあ、月島も桜内が帰つてしまつたから少なからず残念がつてることじやろう。

「じやあ、そういう事だから私はここで」

「うむ。儂も個人的な用がある故、ここで失礼する」

儂と白河はこの場で別れ、それぞれの行動を取る事になった。

「さて、儂もそろそろ行くかの。時間もそうあるわけではないからの」
時計を見ると、午後2時を過ぎたところ。宿に戻る時間が7時と聞いておるから……そんなに長いというわけにもいかんの。

儂は携帯を取り出して操作をし、ある者へ電話をかけた。

「……む、少しばかりいいかの？ ……うむ、そうじや。時間も時間じやから、なるべく急いで行きたいのじやが。……うむ、少々遠めになつてしまふが、よいかの？ ……うむ。では、すぐ近くの駅で待つておるぞ」

儂は携帯を切つて、待ち合わせ場所へ急ぎ足で向かつた。

「ふむ……では、ゆくとするかの」

「うん」

いざ一番近い駅へ着いてしばらくすると茜……ではなく、藍と合流し、早速出発するとした。

「ところで、ひとつ無粋な質問じゃろうが、体調はどうじゃ？ 何か変化はあるかの？」

「体調は悪くないよ。何しろ、茜ちゃんの身体だもん」

「ああ……言い方を変えるのじゃ。調子はどうじゃ？」

「もう、最悪だよ。なんだか、この世界から存在を拒絶されちゃってるみたい。変な孤独感が私を包んでるっていうか。いっそ、このまま消えちゃった方が楽って感じ」

「それは……大丈夫なのかの？ 茜の身体の方に異常は出ないものかの？」

「や……だから、肉体的苦痛はないんだよ。ただ、今にも消えちやいそうなあやふや感が私を包んでるっていうか……あく、どう言えば伝わるかな？」

藍はどうしたものかと首を横に振りながら悩んでおった。

「無理に儂に付き合わずとも、休んでもよかったのではないか？」

「いいよ。というか、こうして秀吉君と歩いていた方が楽。問題なのは、体の方じゃなくて心の方だから」

「うむ……」

二重人格……というわけではないが、その手の感覚は儂にはわからないの。

藍には身体がなく、今はこうして茜の中におるから存在しておるのじゃが、本来は心……つまりは魂だけの存在じゃな。

それが消えてしまうというのがどんなものなのか、儂にはわからんが、こうしてる間にも藍の存在は徐々に消えつつある。

こんな事で藍の心が元に戻るとは思えんが、儂にやれる事はとこと

んやってみるしかないの。

「それで、どうしたの？ 茜ちゃんじゃなくて、私を指名して誘ってくるなんて」

「……なんとなく、とにかくお主との時間をとことん楽しいものにしてみたいと思ての」

藍の言葉に、儂は正直な気持ちを伝えた。茜のためだという事もあったり、消えてしまいかもしれない藍の心をどうかにかしたいという事もあるが……一番は今この時を、藍との時間を大切に過ごしたいと思っておる。

「……そっか」

儂の言葉で、藍も儂の心の内がわかったのか、それ以上は何も言っていない。こなかった。

「それじゃあ、行くかの」

「うん、それはいいんだけど……この電車の行き先って……」

「うむ、これから儂らが向かうのは……京都じゃ」

そう言っただけで藍の手を引っ張り、電車に乗って京都へと向かっていった。

京都に着いてからは儂はまず、源光庵というところに行った。

そこまでポピュラーなスポットではないようで駅にあったガイドにはちよこつとしか載っておらんかったが、ここにあるものを見て儂は最初にここから行こうと思ったのじゃ。

「へえ……なんか、木とか多いよね。屋根とかあんまり見えなかったし」

「元々は大徳寺の徹翁国師が隠居所として開いた寺らしいからの。さて、こつちじゃ」

儂は藍を引っ張ってある場所へと案内した。

「お、こつちじゃ」

「えっと、この窓は？」

「うむ、四角いのが『迷いの窓』、丸いのが『悟りの窓』というものらしい。別にこの窓自体に意味はないのじゃが、ここから見えるものを眼に焼き付けておきたいと思ての」

「……………」

藍は迷いの窓と悟りの窓から見える枯山水庭園をじっと見つめておった。

「…………よし、ここが終われば次は…………」

儂は引き続き、藍を引つ張っているんな所へと向かっていく。

源光庵の次はピピュラーなスポット、金閣寺へと訪れる。

「はあく…………見事にまっきんきんだね」

「じゃのお」

来てみれば実物は写真で見えるよりも正面が輝かしく見えるものじゃのう。これはなんとも歴史と存在感が伝わってくるようじゃの。

あのような立派なものが池のほとりに建ってるのじゃからの。もはや神秘的な何かさえも感じるの。

「では、次じゃな」

ある程度金閣寺を回ると、次の場所へと少し急ぎ目に向かう。時間も時間じゃからあまりゆつくりとはしていられんからの。

そして次は清水の舞台へと向かった。その途中にある市街地も、本堂に行くまでの景色も中々によかった。

拝観料を払い、断崖の上の本道に行けばそれは素晴らしい眺望であつた。

儂らはその風景をバックに通りすがりの者に頼み込んで記念撮影をしたり、神社でお参りなども楽しんだりした。

「…………ふう」

「結構真剣にお願いしたね。何を願ったの？」

「うむ……………なんてことはない、これからの人生を楽しめるようにといったところかの」

「あは♪ 秀吉君らしいね」

「…………うむ」

その人生の中に、藍もいればと思ったりもした。

藍の存在があとどれだけ保つのかは定かではないが、その期間がずっと続けばと思わずにはいられん。

茜の事もあるし、儂も藍の存在を知ったとなっては茜と同様、消えてほしくはない。

「あ、秀吉君。あそこ、恋みくじだって」

「む？」

儂が暗い考えにふけてると、藍が恋みくじを出してる社務所を指差した。

うむ、割と並んでおるの。しかも、並んでいる者達のほとんどが女子というのが。やはり女子はその手のものが気になるといった

ところなのかの。

「せっかくだし、行ってみよ？」

「流石に、あれだけの女子の中に入るのは気がひけるの」

「大丈夫だって。秀吉君なら傍目から見れば女子にしか見えないもん」

「……その言葉は男として傷つくのじやが」

まったく……。いつもの事じやが、何ゆえ儂はどこに行っても女子に間違われるのじや。

確かに姉上と一卵双生児並みに似ておることは否定せんが、これでも立派に男らしく生きてると自負しとるのじやが。

結局、儂は藍に付き合っつて恋みくじを引く事になった。くじを購入する際、巫女さんからバイトの誘いを受けたが。

うむ……巫女服は中々着る機会がないから試してみたい感があるが、ずっと京都にというわけにもいかんしの。

……今度時代劇やおとぎ話用に巫女服や振袖の購入も考えてみようかの。

「……………ふう」

「む、結果はどうだったかの？」

「それ聞くのマナー違反だよ」

「うむ……それもそうじやの」

確かに、女子におみくじ……それも、恋愛関連のくじの結果を聞くのは野暮というものじゃの。

「それで、秀吉君の結果はどうだったの？」

「お主はダメで、儂はよいのか………まあ、結果だけ述べるなら末吉じゃの」

「これはまた微妙だね」

「うむ……」

儂が引いた恋みくじは末吉。そこにはこう書かれておった。

『このおみくじを引いたものの前に大きな壁が立ちふさがらう。勇気を持って、目の前にいるものの心を救わんがために努力すべし』

……目の前の心を救わんがために、か。おみくじに説かれるまでもなく、儂とてそのために思い出作りを考えた。

今回の事が、藍の……茜の心を救うきっかけになつてくれればと祈っておるが。

この後は流石に時間も迫ってきたので、奈良の宿で戻り、お互いクラス別のスペースへと別れていった。

第七十二話

修学旅行から明けて新しい一日が始まる。

旅行から帰ってきた小恋達からは天枷を心配した声だったり、俺達に対するちよつとした説教だったり、変な土産話もあったりだったが、みんなどうにか修学旅行は楽しめたようで何よりだ。

だが、修学旅行から戻ってきたばかりだというのに心苦しいのだが、天枷の件については音姉や由夢からの聞きかじりで知っていることだけで話した。

天枷の現状についてはみんなも覚悟はしているが、やはり気分のいいものではない。

戻ってきて早々に俺達は今後天枷の周囲の環境についてどう対処していくかを会議したりもした。

結局のところ、下手に騒ぎを起こさずに静観するという、ベストとは言えないがベターな意見をもとに俺達はこれ以上騒ぎを大きくしないように天枷と出来る限り一緒にいて抑止力となるくらいしかできなかつた。

そこで早速今日から天枷と一緒に登校するわけなのだが、

「……明久さん、来なかつたね」

「ああ……」

「どうかしたのかしら？ やっぱり、天枷さんの事について水越先生に相談とか？」

「いや、そりやねえだろ。単に時計の時間設定間違えて遅刻と勘違いしたんじゃねえか？」

「それはいくらなんでもないじやろ。しかし……本当にどうしたものじやろうか？ 家にいなければ、待ち合わせ場所にも姿が見当たらなかつたが……」

そう、今日から天枷と一緒に登校しようという事になったというのに、朝起きれば既に明久の姿はなく、時間になつても待ち合わせの場所に来なかつたのだ。

「まあ、よい。吉井にだって都合というものはあるだろう。それより、桜内や由夢も……何もここまでしなくても、美夏の事は心配いらない」

「そういうわけにいくかよ。今のお前の現状を考えるとひとりにしとくのは危険だ」

「そうですよ。いつまたこの間のような事が起こるか……」

「やらせたい奴にはやらせればいい。美夏はそんな事に腹を立てることはない」

「天枷さんがよくても、私達が許せないんです」

由夢の言う通り、それでは俺達の気持ちがおさまらない。

いつそ俺が天枷にあれこれ好き放題やってる奴を見つけてとっ捕まえて、2・3発ぶん殴って鎮めるってのはどうかと思うが、それを言ったら由夢が呆れた顔でやめてくださいと言った。

天枷も由夢と同様、よしてほしいと言われた。本人にまでそう言われては引っ込むしかなかった。

しっかし……明久の奴、一体どうしたんだろうか？ あいつの事だから、天枷の事が気にならないわけがないし。

だが、今朝から何故姿を現さないのか。あいつが何をしようとしているのか知らないが、とりあえずアイツの事を信じて俺は俺でもしものために天枷の傍にいて様子見とするか。

——ひそひそ。

——ひそひそひそ。

学園にたどり着けば、俺達を……いや、天枷を見るなり周囲の生徒がひそひそと内緒話をする姿が多数見受けられた。

由夢の報告から全知識を入れていたからそこまで驚く事はなかったが、やはり見たり聞いたりして気分のいいものではなかった。

「……気にするな。行こう」

天枷は蛋白な態度のまま校門をくぐっていく。

「こりゃあ、予想以上だな……」

「うむ。彼女がロボットではないかと噂する者が多数おると聞いていたが、よもやここまでとはの」

「……気持ち悪い」

霧島さんの言う通り、正直いってこれは気持ちが悪い。

聞き耳を立ててみれば明らかに『ロボット?』やら『アレが本当に?』などといった言葉がいくつも飛び交っていた。

「こりゃ、相当マズイかもしれねえ……」

「噂してる人……日に日に増えていってます」

由夢からすれば噂している人数がねずみ算式で増えていっているようだ。あの日からどのようにして広まったかは知らないが、広まるスピードは相当のものだった。

「気にするな。美夏は……気にしない……」

気にしてない風を装っているが、天枷の顔には明らかに不安の色が浮かんでいた。

その表情を見て俺はどうにもやりきれないという感情が爆発し、「お前ら、じろじろ見てるなよ! さっさと、自分の教室行けばいいだろ!」

大声を出して言い放った。

『何、あの人……』

『感じ悪い』

大声で言い放てばそんなひそひそ話が聞こえてきた。

感じが悪いだと? そんなの、今のお前達に言われたくない。

「よせ、桜内。ここで怒鳴り散らしてもなんにもならねえ」

「けどよ……」

「桜内、雄二の言う通りじゃ。お主の怒りはわかるが、お主が癩癩を起こしても逆効果じゃ。余計に天枷に当たる風がひどくなる」

「っ……」

木下の言う通り、俺が天枷の状況を悪くしては元も子もない。俺は身体中から溢れる憤りを無理やり抑えて歩き出す。

俺が気持ちを落ち着けようとしたところで、

「ちよ、何やってるんですか!」

由夢の怒鳴り声に振り向くと、由夢と天枷の傍で数人の男子生徒が手を開閉していた。

「なあ、どうだった?」

「ああ、本物そっくりだったぞ」

「それ、マジで言ってるのか? 中身機械だろ?」

どうやら天枷に触れてロボットかどうかと確かめてるっぽかった。

「あなた達——」

「やめておけ、由夢。美夏は気にしてない」

「ですけど……」

「何だよ? ロボットでも怒るのかよ?」

「バアカ。ロボットが怒ったり、悲しんだりしたら……: 気味悪いっつうの」

「そうそう。ロボットは人間の命令だけ聞いてりやいいんだよ」
「……………っ」

駄目だ。いくらなんでも、もう我慢の限界だ。せめて一発殴っておこうかと思つた時だった。

「テメエら、何やってんだ?」

ズドン! という音と共に声が聞こえ、振り返ってみると、そこには鬼のような形相をした明久がいた。

結構恐いな。…………: っていうか、明久今何処から来たんだ?

『おい、今アイツ…………: どっから来た?』

『あれって、確か…………: 3年の吉井って奴だよな?』

『なんか…………: 今、屋上から飛び降りたっぽいんだけど?』

『屋上って…………: 何メートルあるの!?!』

周囲からこれまたひそひそと明久の事についての会話が聞こえてきた。

ていうか、今誰かが屋上って言ってなかったか? 屋上って…………: 2・3階のみならず、今度は屋上から飛び降りたつてのなあいつは? 「で? 今なんか聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしたんだけど

？」

明久は普段から考えられないくらい怒気を纏わせ、冷え切った声を出しながら男子達に近寄っていく。

男子達も明久の纏う雰囲気には圧倒されて後ずさりする。

「に、兄さん……これは流石にマズイですよ。いくら天枷さんの事が許せないからと言っても、ここで過ぎた暴力を振るえば余計天枷さんの状況が……」

そうだ。俺だってできる事なら殴って止めたいと思っではいるが、明久の場合は歯止めというものが全くない。

下手をすれば男子達を病院送りになってしまうくらい殴りつけ、それが天枷のためという事が広まれば天枷への風当たりが悪化してしまう危険性が高い。

どうにか明久を止められないかと駆け寄ろうとした時だった。

「うわ、何かと思えば明久だったのか……屋上から飛び降りるとか、お前はサイボーグか？」

後ろから坂本が呆れたように言ってきた。

「……雄二？」

坂本の登場に明久は一旦怒りを鎮め、坂本に向き直った。

「そういや、こつちでも2・3階から飛び降り……それに続いて自動車にトラックに当るうが、ピンピンしてたし……更に続いて今度は看板の下敷きになったりしてもへっちゃら。もう人間じゃなくてサイボーグって言った方がしっくりくるぜ」

そんな事を言い出した。いや、看板の方は明久じゃなくて天枷……あ、坂本の狙いがわかった。

他にもそれを察したのか、頷きあって坂本の話に合わせてくる。

「うむ。お主の頑丈っぷりはもう人間のそれとはかけ離れておるぞい」

「………人外」

「………あ、うん。さて、どうなのかな？ 本当にそうなのか、確かめてみる？ 握手でもして」

そう言っつて明久は右手を男子集団に向けて差し出した。

いきなり手を差し出された男子達は突然の明久の行動に若干後退した。まあ、今の明久はサイボーグであろうなかろう相手の手を握りつづす気満々だろうからな。

「あれ？ どうしたの？ ロボットかどうか確かめたいんでしょ？
ね？」

明久は笑顔で迫ってくるが、先程の行動と今の明久の背後に修羅みたいなのが見える所為で恐怖を助長させるだけだった。

男子達は舌打ちするとすぐにその場を去っていった。

「さて、お前らも確かめてみるか？ ロボットみたいにバカ頑丈な奴が目の前にいるんだぞ？」

坂本が周囲の生徒達にも声をかけるが、みんな目を逸らしてそのまま校舎内へと入っていった。

「……ほっ。どうにかこの場は収まりましたね」

隣で由夢が安堵の息をついた。俺もどうにか騒ぎが大きくならなくてホッとした。

「大丈夫だった、天枷さん？」

「あ、ああ……というか、美夏よりもお前はどんなのだ？ 屋上から飛び降りてただで済む筈が——」

「ん？ 別に平気だけど？ 文月学園じゃこんなの日常茶飯事だったから」

「……貴様は本当に人間か？ 実は本当に美夏と同じ最新鋭の技術を搭載したロボットではあるまいか？」

「あはは……残念ながらただの人間です」

ただのという部分に激しくツツコミを入れたところだったが、何はともあれ明久の行動のおかげで騒ぎは収まったのだ。

「いや、かなり無茶したけどナイスアイディアだったぞ、明久。あれだけとんでもない所を見せつけければしばらくは天枷への意識も薄れてくれる……と思う」

「そうですね。少なくとも今日くらいはみんなも大人しくしてくれるかと思いますが……けど、あまり無茶しないでくださいね」

「へ？ 一体何の……ああ、うん！ まあ、どうにかなっ

たもんでしょ！ あははははー！」

「……………」

今の長めの間は……………こいつ、何も考えてなかったな。

「こいつにそんな頭脳の行動ができるわけねえだろ。全部咄嗟の思いつきだ」

「考える前にすぐ行動というのが明久じゃからの。なんとも素晴らしいまでのバカじゃ」

「……………吉井は一直線のバカ」

「それで屋上から飛び降りようとするか？」

「それをするのがこの世界一のバカだ」

「お願いだからみんな僕を見てバカバカ言わないで！」

明久は涙目で坂本達に向かって叫んでいた。大した計算もしてるわけでもなし、ただ本能のむくままに屋上から飛び降りて……………。

相変わらず明久の行動は色々ぶっ飛んでるっていうか、何というか。しかし……………、

「本当にたくさんいるんだな……………」

天枷をロボットだと噂し、それを間に受けてみんな天枷を目の敵にしつつある。

その事実が胸に残ったまま俺達は、下駄箱へと向かった。

「それじゃあ、由夢。天枷の事、頼むな」

「う、うん……………」

「何だ、桜内。由夢も……………そう辛気臭い顔をするな。美夏は大丈夫だ」

そう言つて美夏は張った胸をドン、と叩く。

「つ……………げほっ、げほっ！」

「……………大丈夫なのか？」

別の意味で不安になってきたぞ。

「と、ともかく大丈夫だ。桜内達はとつとと自分の教室へ行け」

「天枷の言う通りだ。どっちにしても学年の違う俺達が協力できる時間は限られてるんだ。俺達がここでうだうだしても仕方がない」

「悔しいけど、雄二の言う通りだね。四六時中一緒にいられないけど、その分全力を尽くせるように色々考えておこう」

「ああ、そうだな……」

確かに……不安は多いが、自分のやることをおろそかにしては世話ないな。

「大丈夫。理解ある子も何人かはいるから」

理解のある子がいるのは嬉しい事なのだが……何人か、というのが激しく不安だな。

欲を言えば、何十人と言った人数が望ましいが、今はロボットの事を理解してくれる人がいるだけマシな方か。

「まあ、ここですつとこうしてるわけにもいかないしな。俺はもう行くよ」

「ああ、またな」

「で、お前は何故今朝待ち合わせの場所にも来ないで学園の屋上からアクション映画でもままずないような本気の飛び降りを披露してたんだ？」

時が過ぎて放課後結局ツッコめずにいた明久のあの珍行動について聞いたのだした。

「ああ……ほら、天枷さんがロボットじゃないかってあちこちで疑われてるし、実際いじめも出てきてるでしょ？ だったら登校時にも何かあるんじゃないかと思ってみんなより一足先に学園に来て天枷さんの下駄箱から調べてみたら案の定というか、上履きがなくなってるね……」

「上履きって……」

小学生の発想かよ。しかし、天枷に対するいじめなどにどんどん遠慮がなくなってきたみたいだな。

「そんなで必死に探して焼却炉の辺りでようやく天枷さんの上履きを見つけて元に戻した後で屋上で休んでいた時に……」

「天枷に対して暴言吐いた奴を見て、怒りの向くままに屋上から飛び降りたってか？」

「はい」

「……………はあ」

こいつはなんていうか……あの状況で怒りたくなる気持ちはわかるが、普通屋上から飛び降りてまで割って入るか。

まあ、今更こいつの珍行動に対して文句も言わんし、ツッコむだけこつちが疲れるだけだからな。

それに、今朝はその珍行動のおかげで天枷に対する暴言などは一時的とはいえ収まったわけだから何も言わん。

俺は溜息混じりに荷物を整理して教室をあとにした。

「あ、2人共……………」

「ん？」

「雪村さん？」

教室から出ると、後を追うかのように教室から杏が出てきた。

「2人共、ちよつと待って」

「ん、何か用か？」

「ちよつと付き合ってもらえるかしら？」

「どうかしたの？」

「ん……………ちよつと、気になることがあって」

「はあ……………」

まあ、俺もまだ当分学園にいるつもりだったから別にいいんだが。

「とりあえず、ついてきて」

杏はくるりと踵を返すと廊下を歩み始め、俺達はそれを追って足を動かす。

杏について行ってやってきたのは、2年1組。って、天枷のクラスじゃないか。

まあ、同時に由夢のクラスでもあるけど。

「で、何だってこんな所に？」

「午前中、あの子と会った時に様子が変だったから、ちよつと心配でね……」

表情には出さないが、声は純粹に天枷を心配するものだった。

そして杏は教室の中を覗き込んだ。俺達もそれにならつて中を見た。

教室の中心では今日は教室の担当なのか、天枷がモップを持って黙々と掃除をしていた。

だというのに、他に掃除をしている奴がいない。いや、他の生徒もいるにはいるのだが、皆帰り支度をしていた。

「貴様ら、掃除をしなくてもいいのか？」

「じゃあな、天枷。後はお前に任せた」

「何だと？ 貴様ら、当番をサボる気か？」

「サボるも何も、俺達が必要はないだろう？」

「……どういう意味だ？」

「ははは、皆まで言わせんなよ。じゃ、よろしく」

教室の当番だった筈の男子生徒達は笑いながら、教室を出て行った。

それを見ていた他の生徒達も、注意した方がいいのかと囁き合つてるの見えるが、ほとんど見て見ぬフリをしているようだった。

そして天枷と目を合わせないように、そそくさと教室を出て行った。

「くそ……」

天枷は舌打ち混じりにモップを床に叩きつけ……ようとしてやめた。そして小さな溜息をつく。

「おい、何だよこりや……」

「見ての通り。やっぱりこうなったのね……」

「あいつら……よつてたかって！」

「落ち着きなさい、バカ」

「くぺっ!？」

明久が掃除をサボった奴らを追おうとしたが、杏に襟首を引っ張り

れて止められた。

「あいつらに注意して変な騒ぎにするよりもこつちが優先よ」

そう言つて杏は教室の中へと入つていった。

「美夏……」

「あ、杏先輩……?」

「掃除道具、よろしなさい」

「え?」

杏の突然の言葉に、天枷は間拔けな声を出した。

「よろしなさい」

再度言つて杏は天枷からモップをひつたくると、黙々と掃除を始める。

「や、杏先輩……どうしてここに?」

「そんな事はどうでもいいから、さつきと終わらせる」

「あ、はい……じゃあ、バケツを――」

天枷がバケツの水を替えようとした所で、俺達と目があつた。

「オス!」

「えと……こんにちは」

「杏先輩に加えて、桜内に吉井まで……どうして……」

「まあ、なんつーの? 虫の知らせ?」

「そうそう、インスピレーション?」

「は?」

俺達の言葉に天枷は怪訝な顔で俺達を見た。

「まあ、細かい事は気にすんな。とりあえず、気が向いたから掃除を
にやってきただけだ」

「そうそう。どっか掃除が行き届かない所ないかなと探したところで

天枷さんが大変そうだから来ただけ。ね、雪村さん?」

「ええ、そんなとこよ」

「つうわけだ。さつきと終わらせちまおうぜ!」

「レッツクリーン!」

俺達も教室の掃除用具入れからモップを2本取り出して掃除を始める。

「ほら、天枷！ お前も！」

俺は更に1本取り出してそれを天枷に投げよこした。

「あ……………あ、ありがとう……………」

「ん？ 今、何だって？」

「な、なんでもない。さっさと終わらせるぞ」

「任せとけ。これでも俺は掃除の達人って言われてるんだ」

「それをいうなら、掃除サボリの達人でしょ？」

「はい、黙らっしやい」

普段学校の掃除なんて真面目にやる方じゃないが、こうなつては協力しないわけにはいかないな。

「こうなつたら、とことん綺麗にしてやる」

今日の俺は滅茶苦茶やる気に満ちてるからな。年末掃除後並に綺麗にしてやらあ。

俺達に加わって掃除を始め、しばらくして見事に綺麗に磨けた。

だが、俺達の中の不安はまだ残ったままだった。

第七十三話

「起立！ 礼！」

ようやく5時間目の授業が終わり、僕は椅子に座ったまま背伸びをした。

「はあ……ようやく5時間目終了かあ……」

「午前もそうだけど……午後の授業はいつそう長く感じるよねえ」

季節が冬で気温が低ければ多少は頭もスッキリするんだろうけど、教室内はいい具合に暖房が聞いており、午後の授業も社会とか国語とかがほとんどだから余計に眠くなりやすい。

「ねね、義之君に明久君、今の授業寝てたでしよう？」

「自慢じゃないが、寝てないぞ」

「本当に自慢じゃないわね」

「だまらっしゃい」

「背後から睡眠者の放つオーラを感じたんだけどなあ……」

「んなわけのわからんオーラを出した覚えはない」

「ていうか、それ知覚できるものなの？」

なると思えないけど、眠そうに見えるのはどちらかと言えばお2人さんのイメージのような気がする。

「でも、次は寝るよね？」

「グッナイ、義之、明久……」

「寝ません」

確かにかなり眠くなってるけど、だからと言って居眠りしたいわけではない。

「桜内、吉井……」

そんなくだらないことを考えると唐突に沢井さんが話しかけてきた。

「何だ？」

「ちよつといいかしら？」

何やら誘われてるようで、一瞬義之と顔を見合わせ、すぐに頷く。

「別にいいけど……」

「ここじゃだめ？」

「ええ……というわけで、ちよつと2人を借りてくけど」

「どーぞ……」

「さつさと持っていつちやって♪」

「お前らなあ……」

「僕ら、お荷物じゃないんだけど」

「……来て」

僕らのコントみたいな会話なんて耳に入らないという風に平静に言つて僕らを教室から連れ出す。

おお……建物の中とはいえ、教室と廊下の温度差がすごい。おかげで目が覚めたよ。

この分なら次の授業くらいは乗り切れるかも。

「ところで、何の用だ？」

「何か話でも？」

「ええ」

そう言つて沢井さんは周囲を見回すと声を潜めて話しかけてくる。

「あの娘のことなんだけど……」

「誰のこと？」

「いきなり言われても誰のことを指して言つてるのかわからねえぞ」

「あの娘よ、最近あんた達と一緒にいる1年の……」

1年……由夢ちゃんなら沢井さんも名前を知つてる筈だし、ムラサキさんはあの外見だから名前も知れ渡つてるからもちろん除外。

あの2人を外して他に1年の女子と言つたら……。

「ああ、天枷美夏……」

あ、なるほど。天枷さんか……。

「そうそう、その娘」

「で、アイツが何だ？」

それから沢井さんが更に僕らに近寄ってくる。周囲に人がいないからいいけど、ここまで近寄るといかにも内緒話してます的な雰囲気バリバリ出て逆に目立つと思うのですが。

「その、あの娘が、ロ……ロボットっていうのは本当なの？」

……僕らを連れ出すのだからなんとなく予想はしてたけど、やっぱりその手の話だったようだ。

「誰がそんなこと言ったんだよ……」

沢井さんの言葉に義之が眉を顰めて聞いた。今の現状のこともあつて僕らもストレスが溜まつてる。

できることならあまりその話題には触れたくないのが本音なのだが。そうも言つてられない。

「義之、落ち着いて。で、沢井さん……それ、誰から聞いたの？」

「別に誰からつてわけじゃないけど……割と色々な方面から入ってくるのよ。中には尾ヒレがつきすぎてわけがわからない噂もあるし……中にはあなたの事も混同しててぐちゃぐちゃになってるのよ」

どうやら僕の屋上からの飛び降り騒ぎの中に混じつて天枷さんの印象を多少くらいは薄めてくれたというべきか。

まあ、結局一時凌ぎでしかないだろうけど。

「で、どうなの。ロボットなの？」

「何でそんなことを俺達に聞く？」

「あんた達が親しそうだったからでしょ。よく一緒にいるの、最近みかけるし」

まあ、彼女をロボット疑惑から起きる虐めから守ろうと最近是一緒にいられる時は行動を共にすることが多くなつてきてるしね。

しかし、どうやら沢井さんも彼女をロボットだと疑つてるようだ。

いや、事実ロボットなわけだけど……果たして、彼女に真実を告げるべきなのか。

もう学年の違う沢井さんにまで広まつてるところを見ると、いちいち彼女はロボットじゃないと注意するのも意味なさそうだし、隠したつてあそこまで噂が広がってる以上、隠してもしょうがない気がする。

だが、だからといってわざわざ彼女がロボットですなんて公表してもなあ。義之もそこを介意しているのか、苦慮してるっぽい。

「……仮に、そうだとしたらどうなんだ？」

義之はアレコレ逡巡した結果、YesでもNoでもなく、仮定の話として質問を返す。

これで沢井さんがロボットに対して何を考えてるのか確かめようってことかな。でも、修学旅行の時を考えると……。

「そ、そんなの決まってるじゃない。学園側に報告して、しかるべき処置をとってもらおうわ」

「その、しかるべき処置って何?」

「そんなのわかんないけど……でも、ロボットが学校に通ってるなんて、論理的に考えてありえないでしょう?」

何がどう論理的なのか、全く容量を得ないのだけど。

「早急に処分してもらわないといけないわね……」

「処分……?」

「ええ。退学とか、停学とか……妥当な処分があるでしょう」

「おい待て、あいつは別に何か悪いことをしたってわけじゃないんだぞ」

「そういう問題じゃないでしょう? あの娘の性格や行動はこの際、関係ないの。あの娘がいることで周囲にどんな影響が出るか、わからないわけじゃないでしょう?」

確かに彼女の存在による影響を感じ取れないほど鈍いわけではない。

現に彼女がロボットであるかどうかは確定していない今でさえこんな問題が起きてるんだ。

本格的にバレてしまった時の影響は僕らの想像を上回るかもしれない。

「昔はどうだったかは知らないけど、今ロボットが世間からどういう目で見られているのか、知らないとは言わせないわよ」

「でも、天枷さんは何も問題は起こしてないし、今だってただ僕らと楽しくしているだけでしょ?」

「今まではそうでも、これからはわからないでしょ?」

「……そんな言い方はないんじゃないかな?」

「な、何よ……」

僕の言葉か、つい発してしまった声色に対してか、沢井さんが一歩下がる。

「君が彼女の性格や行動が関係ないって言ったように、僕らだって……彼女がロボットだかどうだなんて、大した問題じゃないんだよ。僕らはただ彼女と一緒に笑って起こつて、バカ騒ぎするだけの日常が好きで、友達やつてるんだ。その友達に対してそういう言い方されれば怒りたくもなるよ」

「ちよつと……そんな怒らないですよ。だって、本当にわからないじゃない。例え彼女が何もしなくたって、すぐに問題になるわよ。あからさまに嫌悪を示している生徒も少数じゃないし、それが伝染しているのか、ここ数日空気が浮ついているもの」

浮つているかどうかはともかく、学園の空気が傾いてることに関しては僕らも重々承知している。

何日かすれば、どこかで巫山戯た行動に出る奴がいたとしても対して不思議じゃない。それだけ空気が澱んでいるんだ。

「ならどうする気だ？ 天枷が何もしなくても何人かはあいつに対して問題を起こすかもしれないだろ」

「とりあえず、生徒会に報告するわ」

「生徒会ねえ……」

「な、何よ。私がびびって報告しないとでも、思ってるの？」

「別に……」

彼女が僕達にびびってようがなかろうが、報告に行くだろうことは彼女の性格がある程度でも知つてれば容易に想像がつく。

それに関しては別に何も言わないが、彼女は忘れてるのだろうか？ 生徒会のメンバーはほとんどがもう天枷さんのことを知ってる。

だからこそ彼女がロボットであるという事に関しては何も言わないし、何よりその生徒会のトップが義之の義姉だということを知ってる。

彼女をロボットだということがバレるのを避けてるために生徒会もあまり天枷さんがロボットであるかどうかを噂している生徒を無闇に取り締まれないからとはいえ、沢井さんが何か言ったところで天枷さんを犠牲にするようなやり方を生徒会が……いや、音姫さんが容

認するとはとても思えない。

だから僕らは何も言わない。

そう思ったのだが、しばらく黙っていた義之が口を開いた。

「……ところで、お前自身はどう思ってるわけ？」

「え？」

「ロボットの……」

義之の突然の質問に沢井さんは一瞬目をふせるがすぐに義之に向き直る。

「え……そりゃ、ロボットなんて、胡散臭くて、いかがわしくて……」

沢井さんがちよつと照れたように顔を背ける。

そういえば、商店街でも時々見かける☒☒なんていう名前のロボットも、大抵の男性はそういつたこと目当てで購入する人が多いって聞いたこともある。

外見が外見だけに、そういう風に見られてもおかしくないのはわかるが、アレと天枷さんを混同されるのはちよつと不愉快だ。

☒☒がどうなのかは知らないが、天枷さんは笑う時は笑うし、怒る時は怒る。あれだけ感情豊かな彼女を見てなんでみんなは何も思わないのだろうか。

「と、ともかく認められない！ ロボットを製造する業者がいること自体、ありえないっていうか、冒涇っていうか……」

「……ふくん」

沢井さんの言葉にどう思ったのか、無感情に溜息混じりの声を漏らす。

「な、何が言いたいわけ!？」

「いや、別に。報告したければすればいいだろう」

「何よ！ もう、知らないからね！」

沢井さんは機嫌を損ねたのか、大股で廊下を歩き去っていった。

「生徒会室に、向かってるのかな？」

「だろうな……けどまあ、放っておいても大丈夫だろう」

「だね。何しろ、生徒会のトップがあの人だから」

「ああ。報告すべき生徒会長が天枷の正体を既に知ってるわけだから

な。とはいえ……噂話と正式な報告じゃあわけが違うしなあ」

「だからといって、今更沢井さんを止めたところで無駄だろうし……」
「というか、委員長はこういった話自体あまり聞きたがらないような堅物だから、あいつは絶対に後発的な方だ」

それに、既に天枷さんに対する虐めは起きているんだ。近いうちに生徒会にせよ、学園側にせよ、何かしらのアクションを起こせざるを得ないだろう。

「悪い方向へ進まんといいいのだがな……」

「いたのか」

いつの間にか背後には杉並君が立っていた。もう今更こんなことで驚いたりはないし、今はそんな余裕もない。

「杉並、お前の力でなんとかできないのか？ その、非公式新聞部の連中の力を使つて……」

「買いかぶるな。俺に学園の政治的なことをどうこうする力はない」

「だろうな……」

ムツツリーニの協力もあればそれくらい簡単そうな気もするけど、根本的な解決にはなりそうにないしなあ。

どうしようかと悩んでいる間に6時間目のチャイムが校内に鳴り響いた。

「おい、授業が始まるぞ」

「そうだな」

「難しいことは放課後になってから考えよ」

とりあえず僕達は教室に戻って授業の準備を始める。

6時間目も終わり、放課後になったところですぐに天枷さんのクラスに足を運べばまたもや天枷さんに掃除を押し付けるバカ共がおり、いい加減殴ろうかと思つたが義之に止められ、以前と同じように僕ら

が手伝うことで天枷さんのクラスの教室を掃除したのだった。

それが終わり、これからどうしようかと悩み、僕らは水越先生に相談を仰ぐことにした。

「そう……もうそんなに」

僕らのここ数日の生徒達の天枷さんに対する態度と行動を報告すると水越先生は溜息をつく。

「2人共すまない……美夏の所為で」

「いや、天枷の所為じゃないだろう」

「そうだよ。天枷さんは何も悪いことなんかしてないし」

「だが……やはり、ロボットと人間が仲良くするなんて、無理な話なのか」

「そんなことないだろう。現に俺や明久に由夢、みんな友達じゃないか」

「そうだよ。そう悲観することないって」

「それは……お前達には確かに感謝しているが……」

僕達が慰めようとするが、中々天枷さんの表情は晴れない。

「それにしても、何だっただよ、たく……委員長だっただよ、何だっただよ、何だっただよ、何だっただよ」

「……彼女の場合は、仕方ないわね」

「え……？」

水越先生の言葉に僕らは疑問を覚えた。

「あの、水越先生……沢井さんがロボットが嫌いな理由を知って……？」

「ええ。前にも言ったでしょ？ 中には、ロボットを憎んでる人もいるって」

「それが……委員長？」

確かに……修学旅行の宿泊宿で☒☒を見た時も、何処か憎しみの感情が見られた。

「彼女の父親である、沢井拓馬は優秀なロボット技術者として、天枷研究所で働いていたの」

「ロボット技術者……」

「それって……」

「ええ。美夏も、~~ム~~も……沢井博士は、彼女達の生みの親ということね」

水越先生の口から明かされた事に僕らは驚きを隠せなかった。まさか、ロボットを否定していた彼女の父親が天枷さんの生みの親だとは。

「これが完成すれば、みんなが幸せになれる。誰もがそう信じて疑わなかった。ところが……人間よりも優れ、感情豊かなロボット達を、人間達は恐れ始めたの。ロボットは人間を超えるものであつてはならない。そんな劣等感と不安が人々を駆り立て、労働者や婦人団体を中心に、世界レベルのパッシングが天枷博士を襲った。彼らの糾弾を受け、追い詰められた沢井博士は……遂に自らの命を絶つてしまった」

「そんな……」

僕はショックを受けた。沢井さんの父親がロボット技術者だということに驚いたのもあるが、沢井博士がただ人々のためにと情熱を注いだ研究がそんな悲劇を呼んでいたなんて。

「ロボットの存在の所為で家庭を壊され、父親も奪われた。彼女は、ずっとそう思ってるのでしょうね」

「……けど、委員長の父親の件……こんな事は言つてやりたくないけど、天枷に罪はない」

そうだ。天枷さんが造られたのがいつなのかはわからないけど、彼女はそれに関与はしていない。

「そうね。けど……彼女の場合、それだけじゃないわ」

「それだけじゃ、ない……？」

父親の件以外に彼女がロボットを嫌悪する理由が存在するのか？「流石にもうひとつの理由まで知つてるわけじゃないけど、沢井博士が丹心込めて造ったロボットがいたの。彼は最高傑作だつてよく研究員たちに自慢してたって聞いたわ。でも、例のパッシングと同時期……それを行っていた者たちのうちの誰かが沢井博士の研究所に飛び込み、そのロボットを破壊したの」

「そ、それで……」

「そのロボットを壊した人は？」

「不法侵入の件も含め、警察に捕まったけど……懲役は短かったわ。理由は器物破損の罪だから」

「器物破損……それだけですか？」

「確かに感情豊かで、人間ともほとんど違いなんてなかった。けど、結局はロボットだものね。人間の法律は当てはまらないわ」

ひどいと思った。天枷さんにしろ当時のそのロボットにしろ、感情は人間と変わらない。

なのになんでそんなことが起こってしまうのだろうか。確かに人間より優れたロボットが人を襲うなんて言われたら怖くないと言えば嘘になる。

でも、彼女を見てればそんな風に思うことなんてない。現に彼女がロボットだって知った時でも驚きこそすれ恐怖するなんてなかった。

きちんと真正面から向き合えばわかりあえる筈なのに。

「それが原因なのかは知らないけど……それからほどなくして沢井博士は命を絶った。それからは前に言ったように、人間たちのロボットに対する暴動を恐れ、当時の研究者たちは深夏を凍結させ、来るべき時まで眠らせることにした」

「……………」

「沢井に、そんな過去があったのか……」

全てを聞いた天枷さんは深く項垂れた。

「深夏は、人間が憎いと思っていた。人間など、勝手にロボットを創っておいて、いざ都合が悪くなれば理不尽に破壊する。そんな悪者だと思っていた。だが、深夏は人間の中にロボットの存在によって自分の生活を壊された者がいるという可能性を全く考えていなかった」

「それは、天枷の所為じゃないだろう。それに当時のロボットが悪いわけでもない」

「違う……そうではない。深夏が思ったのは、どちらが悪いとかいうのではなくて……人間とロボットの共存はやはりできないのかと」

その言葉に喜びと悲しみが混ざり合っていくのを感じた。

いつもぶつきらぼうというか、結構キツめの態度を取っていた天枷さんが、密かに人間との共存を考えていてくれたんだ。

そのことは大変喜ばしいことだが、今の状況を考えると素直に嬉しいとは言えない。

「それだって時代だろ。これから先、いくらでも変わっていく。いや、変えていけるさ」

「桜内……」

「そう、だよ。というか、僕らがそうすればいいんだよね。僕らは天枷さんの友達だし」

義之の言葉で思い直した。そうだ、現状がなんだ。

現状が芳しくないなら僕たちでそれを変えていけばいいんだ。

「ああ。もし、力が足りなくなったら、俺たちが手伝うさ。だろ？」

「……ああ、そうだな」

天枷さんは少し考えると、僕らに向かって微笑みかける。

「そうだ。どんな事になっても、天枷さんを学園から追い出させるものか。」

放課後、僕らは改めてそう誓ったのだった。

第七十四話

いつもの昼休みを送っている最中、思わぬ来客があった。

「あ、これはこれは音姫せんぱーい！　ちよつと待っててくださいね！　あのバカ呼んできますから〜」

教室の扉が開くと、そこには珍しく音姫さんの姿があった。

いや、珍しいといえはそうだし、それでもないといえはそうかもしれない。あの人がここにくる理由なんて義之関連しか思えない。

渉もそう思ったからこそ、義之の所へ向かおうとしている。

「おーい、義之い。音姫先輩がいらっしやってるぞ〜。……
羨ましいんだよ」

渉……今ぼそりと本音が漏れてたよ。

「あ、ごめんね板橋君。私があるのは弟君じゃなくて……」

「え？　じゃあ、明久っすか？」

「ううん、そっちでもなくて……」

そう言いながら音姫さんが教室を見渡す。

「あ、いた。沢井さん！」

「……はい」

どうやら音姫さんが探してたのは沢井さんだったようだ。

「ちよつとお話があるんだけど、いいかな？」

「はい……構いませんけど……」

音姫さんに呼ばれると、沢井さんは彼女と共に廊下へと出ていった。

「一体何？　何事？」

茜ちゃんが珍しい組み合わせだったから気になってるのだろうか。廊下をずつと見ている。

「……例の件ね。美夏の」

「やっぱり杏もそう見るか……」

「当然……」

「そういえば、少し前に生徒会に申し出るみたいなお事言ってたもんね」

恐らく音姫さんの用事はその回答なのだろう。

「へっ、どゆことっ。どゆことっ。」

小恋ちゃんは話が見えないのか、疑問符を頭に浮かべていた。

天枷さんに協力する立場である以上、当然僕らは音姫さんたちの話が気になり、全員廊下に近づき、意識を集中させ、聞き耳をたてる。

それからまず最初に聞こえてきたのは沢井さんの声だった。

『……様子見?』

『はい』

『どういうことですか?』

どうやら音姫さん……もとい、生徒会の出した回答に納得がいかない沢井さんが問い詰める。

『ですからね、生徒会としては現状、大きな問題が出ているわけではないので、このまま様子を見ることにした、ということですよ』

大きいわけではないけれど、問題なら多分現在進行形で多数起こってるだろう。

だが、そのことを公言したところで彼女のロボット疑惑が収まるわけではない、事実ロボットではあるけれど、それで学園での僕らの生活に支障は出るとは思えない。

まあ、今はまずこっちの話に集中しないと。

『なっ?!? せ、生徒会は傍観を決め込むってことですか?!?』

『そういうことを言ってるわけじゃないの。もちろん、今現在発生している問題の対処には取り組んでいきますし……今後発生するであろう大きな問題に対して迅速かつ的確な対応ができるよう、準備は進めていきます。後ほど公文書にて正式な回答を出しますが、沢井さんにはあらかじめ伝えておいた方がいいなと思って……』

なるほど、うまい。流石にこう言われれば沢井さんも反論しづらいだろう。

『う……』

『では、私はこれで……』

会話が終わったのか、音姫さんが去る足音が聞こえた。

僕らはすぐに席に着くと同時に教室の扉が開き、沢井さんが戻って

きた。

その時の彼女の表情は明らかに『納得いかない!』と言いたそうだった。そして僕らと目が合うと、キッ! と睨みつけると、踵を返して教室を飛び出していった。

「何、あれ……?」

「なくんか、感じ悪いねえ……」

「クラスの出し物が難航している時よりもこえくぜ」

「……義之、明久」

「ああ」

「これで終わり……じゃないよね」

彼女の性格だ。これで納得なんてできるはずもないし、彼女の抱えている事情が事情だ。これで終いの筈がない。

妙なことにならないといいのだけど。

放課後、僕と義之は天枷さんを連れて近くのスーパーで買い物をしていった。

これは天枷さんの事を知ってから行っている恒例行事みたいなものだ。週に一度、バナナを嫌いと言っている天枷さんがそれを含んだ料理を食べれるよう僕らが試行錯誤を繰り返し、ようやく僕らが造ったバナナ入りの料理を食べれるようになった。

それからは毎週僕らで天枷さんの買い物に付き合い、彼女の夕食を作るようになったのだ。

「えっと、天枷……台湾とエクアドル、どっちがいい?」

「……………」

「天枷さん?」

「え? あ、何だ……?」

「や、だから……どっちがいいかって話」

「…………どっちでもいい」

「そうか……」

どうもさつきから天枷さんが上の空だ。やはり沢井さんの事情を知ったからか。

由夢ちゃんから聞いた限り、今日の天枷さんは一日中こんな感じだったそうだ。

どうしたものかと思ったとき、ふと後ろから視線を感じて振り向いた。

「沢井さん……」

「え……委員長」

そこにはこちらをじつと見つめる沢井さんの姿があった。

「生徒会にまで根回しして、卑怯じゃない……」

「は？ 何言ってるんだよ、俺は別に……」

まあ、義之と音姫さんは幼馴染だ。その縁を彼女が疑うのは当然かもしれない。

逆の立場だったら僕だってそう思うかもしれない。

「とぼけないで！ いい、桜内が何をしようと、私は諦めない。ロボットなんて、ロボットなんて絶対に認めない！」

「ちよ、ちよつと待ってくれよ！ 認めるも認めないもないだろう！ そりゃ、俺だって委員長の気持ちかわからないでもないけど……だからって、ロボットが全部悪いわけじゃないだろう」

義之の言葉に何を感じたのか、沢井さんの身体が怒りに震えている。

「あんたに、何がわかるのよ……突然父親を失って、辛くて、悲しくて……どうすることもできずに、ただ泣くことしかできなかった私の気持ちだが、どうしたわかるの！」

「委員長……」

「ロボットは、私から全てを奪った。その所為で私は……私たちは……」

当時の記憶が蘇ったのか、今度は悲しみに震え始める。

「……だからって、仮にロボットを取り除いたところで、全部が終わると思ってるの？」

僕の言葉に沢井さんも、義之も驚いた。僕だってちよつと驚いている。

慰めるどころか、逆に怒りを助長するかもしれない言葉を発したんだから。でも、これは言っておきたい。

「沢井さんや沢井さんの家族に何があったのか、それも当人たちの気持ちを理解しろなんてのは僕らにはできないかもしれない。けど、その逆だつてあるんじゃないの？ 沢井さんは自分の気持ちが僕らにわからないつて言つたけど、じゃあ……逆に沢井さんは当時のロボットの気持ちがわかるの？」

「な、ロボットの気持ちつて……」

「あつた筈でしょ。元々天枷研究所で開発されたロボットは、人間と同じ心を持つて、僕ら人間と共存できるように造られたんだから。そしてそれが叶おうとした矢先に人間の勝手な価値観の所為でロボットは一時開発中止なんてなつた。そしてその時に壊されたロボットはどれだけあつたか、そして心を持ったロボットが何を思つたのか……今までずっと眠り続けてきた天枷さんがどんな気持ちで眠り、目が覚めて、どんな風に僕ら人間を見ていたのか、君には理解できるの？」

「つ……」

「結局みんなそんなもんでしょ。本人に聞いたわけでもないのに勝手に悪者だつて決め付けて、相手を傷つけて、そして今度は傷をつけた側がそいつを悪者だと言つてまた繰り返す。これじゃあ、僕らが歴史で習つたことを繰り返すだけじゃないか。これじゃあ、天枷さんが可哀想すぎる……」

今の言い方じゃ沢井さんの家族が崩壊していることは大した問題じゃないと言つてるように聞こえてしまうかもしれない。

「だけど、天枷さんだつて何かしたわけじゃないのに一方的に人間からあれこれ言われて黙つてろなんて無理だ。」

「……だけど、私は……」

「お姉ちゃん！」

すると、少し離れたところから随分と幼い声が聞こえてきた。

何だと思うと、沢井さんの背後に小学校低学年くらいの男の子が
ごを持って立っていた。

「あつたよ、牛乳！」

「……そう、ありがとう勇斗」

男の子がかごにある牛乳を見せると沢井さんがいつもはしないよ
うな微笑みを見せた。

「……お兄ちゃんたちは、お姉ちゃんのお友達？」

「え？ あ、ああ……うん、そうだな」

男の子に問われ、義之がどもりながらも肯定して答えた。

「こんにちは。僕、沢井勇斗！」

沢井さんの弟、勇斗君が挨拶してきた。

「こんにちは。あ、僕は吉井明久ね」

「美夏だ。お行儀が良いのだな」

「さ、行きましょう勇斗」

「うん！」

それから沢井さんは勇斗君の手を取ってレジへ向かって歩いて
行った。

さり際に、勇斗君がこちらを振り返って手をふってきた。僕らも同
じように手をふって応えた。

「驚いたな。まさか委員長に、あんな小さな弟がいたなんて……」

「うん。沢井さんの家族構成なんて、今まで聞くこともなかったもん
ね」

スーパーからの帰り道、僕らは沢井さんの話をしていた。

まさかあんなに小さな弟が家族にいたなんて。随分と無邪気で可
愛げのある子だった。とても純粹な。

「あの子……勇斗君は、父親がどうなったのか……」

「それが何年前の話だと思ってるんだよ。いたとしても、多分その頃

はあの子、赤ん坊だっただろう」

「だよね……」

そもそも、父親の死んだという事がどういうものなのか理解できてるのかすら判断できない。

物心ついた時から父親がいないという現実の中にいたというのなら……。

「沢井が怒るのも無理はない。あんな小さな子供のいる家庭を、ロボットが滅茶苦茶にしたんだ……怒って当然だ」

天枷さんが神妙な顔でそう呟いた。

「……だからって、それと天枷は何の関係もないじゃないか」

「そうだよ。沢井さんの家族に関してはどう言えればいいかわからないけど……少なくともそれは天枷さんの所為じゃない」

「……美夏はこれまで、全ての人間を信用していなかった」

唐突に天枷さんが語り始める。

「憎んでいたと言ってもいい。人間は勝手にロボットを造って、邪魔になればすぐに容赦なく廃棄する。人間こそが悪で、ロボットはいつでも被害者だとずっとそう思っていた。でも……それは大きな間違いだった。ロボットの所為で、不幸になった人間もいる……沢井のように。沢井は人間、美夏はロボット……今の沢井はかつての美夏と、同じなんだ」

「天枷……」

どう言えばいいのかわからなかった。お互い様だとか、どっちがどっちを責めたって何かが変わるわけでもないというのは簡単だが、そんなことを言うのはあまりにも無神経だ。

だが、今の状況が見過ごせないのも事実だ……どうにかしたい。

それから僕たちは天枷さんを誘って芳乃家で夕食を取った。だが、あんなことがあってか、楽しい会話を口にするのがなかった。

翌日の放課後……。

この日も、僕らはいつも通りの授業を進め、ただなんとなくだらだらした日常を過ごしていた。

昨日からいい加減沢井さんの事をどうしようかとか、天枷さんの現状を打開できないかと考えていたのだが、ここまで何も思い浮かばなかった。

中々思うようにはいかないものだな。

「はあ……帰ろ」

ため息混じりに荷物を纏め、いざ帰ろうとした時だった。

——ドガアアアアアン!!

「な、何だ!?!」

突然、ものすごい轟音が校舎まで響いた。しかも、相当距離が近い。方向からして校門の方だろう。現にそっちから人の騒いでる声が聞こえている。

僕はロッカーで靴も変えずに窓から飛び出して真っ先に校門へと走っていった。

駆けつけると人ごみが集まっていた。その中には義之と由夢ちゃん姿もあつた。

「義之!・ 由夢ちゃん!」

「あ、明久……」

「義之、一体何が!?!」

僕は一刻も早く状況を知りたく、義之に詰め寄った。

「あ、さつきちよつと委員長と揉めて……そしたら勇斗君が委員長を迎えに来て歩道を渡ろうとしたらトラックが突っ込んで……」

義之の視線に釣られて僕も歩道の方を見ると、トラックの正面で倒れてる人影があつた。

それはよく見知った姿だった。

「あ、天枷さん……?」

天枷さんがトラックの正面で蹲ったように倒れ込んでいた。

つまり、天枷さんがあのトラックに轢かれたと見ていい。僕は全身から血の気が引くような感覚を覚えた。

その状況があまりに残酷すぎてその場から動けずに見ることしかできなかった。

そのまま数秒がたつと、天枷さんの方から嗚咽が漏れてきた。声か
らしてかなり幼い。

そう思うと天枷さんが身体を動かし、彼女の胸から勇斗君の顔が見えた。

「うあああああん！」

「ほら、もう泣くな。男の子だろう？」

「う、うう……！」

「勇斗……！」

「おねえちやあん！」

勇斗君が涙を流したまま沢井さんの胸に飛び込んできて、沢井さんはそれを抱いて受け止める。

「勇斗……よかった！」

「うあああああん！」

かなりシヨツキングな出来事だったが、どうやら2人共命を落と
たなんてことはないようだ。

『おい……あの娘……』

『ああ。トラックに轢かれたのに……』

『じゃあ、やっぱり本当に……』

『でも、すげえな』

って、ほっとしてる場合じゃない。2人が無事なのはよかったけ
ど、今ので完全に天枷さんがロボットだというのがバレた。

『おい！ 大丈夫か天枷!』

「天枷さん！」

そうだ……今は天枷さんの周囲なんて構ってられない。

いくらロボットだと言ったって、トラックに轢かれて平気なわけが
ないだろう。

「天枷さん、大丈夫!？」

「あ、ああ……これくらい——」

天枷さんが身体を起こそうとすると、途端に天枷さんの身体から力がなくなつたように地面に倒れ込んだ。

「天枷さん!」

「天枷!」

「やばい……やっぱりさっきの自己の衝撃で機能がイカれたかもしれない。急いで水越病院だ!」

「わ、わかりました!」

由夢ちゃんが校舎の方へ向かっていき、すぐに水越先生が駆けつけ、その後で水越先生の手配した救急車によって水越病院に運ばれ、天枷さんはいつぞやの洞窟で見たものと同じカプセルに入つて検査を受けていた。

僕たちは技術者の邪魔にならないよう外にいた。

何時間かたつと、室内から水越先生が出てきた。

「水越先生!」

「天枷さんの具合は!」

「大したことはないわ。沢井さんの弟を助ける時に一気にエネルギーを放出した所為で細部に余計な負荷がかかっただけみたいね」

「ほっ……」

「じゃあ、根元の部分は問題ないわけですね」

「よかつた……」

「まったく……身を挺して子供を助けるなんて、よくやったと言ってあげたい。けど……」

天枷さんを褒めたかと思うと、水越先生の表情がすぐに暗くなつた。

「これでもう誤魔化しがきかなくなつたわね。これからが大変よ」

そうだ。人ごみの中には帰宅前の生徒もたくさんいた。学園で天枷さんの正体をごまかすのはもう不可能だ。

そんな心配を抱えたまままた今日という一日が過ぎていった。

第七十五話

天枷さんの事故の翌日、僕らはいつも通りの通学路を歩いて登校していた。

校門まで行くと、雪月花の3人組と顔を合わせた。

「ちやお……昨日は大変だったみたいね」

杏ちゃんが挨拶混じりに言った。恐らく、昨日の事故のことだろう。

「聞いたよ〜」

「天枷さん、すごいね……」

やはり校門の前であんな衝撃的なことが起こったのだ。その噂はもう校内に広がりきってるだろう。その証拠に……、

『ねえ、聞いた聞いた？』

『ええ、聞いた！ もうびっくりしたわよ！』

『すごいね〜』

『2年の天枷だろう？』

『車に勝ったんだって？』

『あの娘、やっぱりね〜』

『これからどうするんだろ？』

あちこちから天枷さん関連の噂がどんどん耳に入ってくる。

この状態ではもう秘匿なんできようもないだろう。

「おい、義之！ 聞いたぜ……大変なことになってるみてえじゃねえか？」

教室に入るなり、渉がこちらに駆け寄って尋ねてきた。

「ああ……そうみたいだな」

「いや、みたいって……」

「天枷だって、あの状況で黙ってられなかったんだろう」

「そうだね。これは誰にも責められはしないよ……」

僕だって、その中にいたならただ見てるだけなんてできるはずもない。

「今は天枷研究所で寝たきりだけど……どうせならこのまま2・3日大事を取ってくれれば——」

『おい、来たぞ!』

義之の話を遮ってクラスメートのひとりが窓の外を指して叫んだ。見ると、校門の方で天枷さんが登校している姿があった。

周囲の生徒はやはり天枷さんの姿を目で追っていた。

「天枷さん……」

「……俺、様子見てくる」

「あ、待って! 僕も!」

義之が教室から駆け出ていくのを見て、僕らもそれを追って天枷さんのもとへと向かう。

天枷さんの教室へ行くと、ちょうど教室の扉を開けようとしていた彼女の姿があった。

「おはよう……」

彼女が教室へ入り込むのを見て、クラスメートがどんな反応をするかを確かめようとした時だった。

『おい、天枷だ!』

天枷さんのクラスメートのひとりが彼女の名を呼ぶと、途端に教室内から多数の拍手の音が校舎に響いた。

……って、え? 拍手?

いきなりのことに動転している僕らを無視して教室内は更に騒ぎ出す。

『天枷、すげえなお前!』

『本当、すごかった!』

『ごめんね、誤解して。考え方変わっちゃった!』

『今までのこと、ごめんな。許してくれよ?』

『これからは、仲良くしてくれな?』

「あ、あはは……」

何故か今までいじめに関わっていただろう人たちまで急にフレンドリーになって天枷さんを囲っていた。

「な、なんじゃこりや……」

ようやく硬直から抜け出しただろう渉が呟いた。

「なにこれ、みんな掌返して……」

「みんな現金すぎ〜」

小恋ちゃん和茜ちゃんがこの光景を見て頬を膨らませていた。確かに態度が変わりすぎだ。

「まあ、いいじゃない。結果としては美夏が受け入れられたってことでしょ？」

「ふう……怪我の功名ってやつかく」

「そうだね。ちよつと引つかかるところもあるけど……」

「やれやれ、影でコソコソしてた連中が随分と調子のいいことになつてんなあ？」

そんな言葉が廊下に響き渡った途端、一瞬にして歓声が止んだ。

「あ、雄二」

「よお」

先の言葉を発したのはいつの間にか後ろに立っていた雄二だった。

「雄二、お主……この状況下でなんとKYな発言を」

「いくらなんでもここでそれはねえだろう」

隣りに立っていた秀吉と義之が呆れた声でそんなことを言う。

「知るか。ここで黙るくらいなら始めかららんなくだらねえことをしなけりやよかつたんだよ。いじめた側がどうなるうが、知ったことじゃねえしな」

そんな事を言い残して雄二はすたこらとその場を去っていった。

そしてこの場には沈黙が残った。

「あ、みんな……美夏のことともういい。それより、こうしてわかりあえたんだ！ もっと喜ぼうじゃないか！」

最初に沈黙を破ったのは天枷さんの言葉だった。

それから再び天枷さんに向けて歓声が響き、質問責めが始まった。

天枷さんは困ったような表情をしていたが、今までと違ってとても晴れやかな気がした。

「ま、結果オーライってね」

ともかく本当によかった。これで天枷さんが本当の意味でこの風見学園の生徒のひとりになれたんだから。

けど、満開になった桜が散るように……ようやく晴れやかな学生生活を送ろうとした天枷さんに更なる障害が立ちはだかるなんて、この時は思ってもみなかった。

「おーい！ 杏先輩に桜内、月島に花咲と吉井、ついでに板橋！ 一緒にお昼しよう！」

学園内でようやく存在が認められるようになった日の昼休み、その当人たる天枷さんが僕らのクラスにやってきた。

「おー、今をときめくスーパーヒーロイン！ ってか、ついでにはないでしょう！」

「購買に行ったらおばちゃんがこんな差し入れくれたぞ！」

「無視でっすか!？」

「ドンマイ……」

この流れもようやくいつも通りのそれに戻って本当に安心した。

みななどお昼しようと机をいくつか固めていざ弁当を準備したところで思わぬ客が寄ってきた。

「あ、委員長……」

席を立った沢井さんが天枷さんのもとへ歩み寄ってきた。

「沢井……」

「天枷さん……そ、その……昨日、弟を助けてくれて………本当に、ありがとう」

「え……?」

「い、委員長が……頭を下げた？」

沢井さんが頭を下げてきた。

これまた突然のことだが、今沢井さんは天枷さんに確かな感謝を覚

えているのだろう。

「……うむ！ そうだ、沢井！ よかったら美夏たちとお昼しようか？」

「え？ いいのかしら？」

「もちろんだ！」

「……ええ！」

天枷さんと沢井さんが互いに笑みを浮かべて頷きあった。

こつちでもようやくお互いを理解しあって、共存の道がまた一本出来上がったのだった。

「よし！ だったら天気もいいし、会場を屋上に変更だ！」

「いいかもなー！」

「だったら、みんなも連れてくるとするか！」

「じゃあ、そっちは明久に任せた！」

「オツケー！」

僕はすぐさまななかちゃんと雄二のクラスに駆け寄り、みんなを屋上での昼食会に誘った。

それからは今までより更に賑やかな昼食になった。

『2年1組の天枷美夏さん、至急学園長室までお越しく下さい。繰り返し返します。2年1組の天枷美夏さん、至急学園長室までお越しく下さい』

楽しい昼食会に水を差すように放送で天枷さんの名が流れた。

「なんだあ？ せっかくいいところだったのに！」

渉が不満そうに呟いた。確かに、結構盛り上がったのにこんな横槍を入れられちゃいい気分にはなれないね。

「でも、なんででしょうか？」

「まあ、ともかく学園長室に行こう」

そう言つて天枷さんは立ち上がるとスタスタと学園長室へ向けて歩みだした。

「……ねえ、雄二。さっきの放送、どう思う？」

僕は少し声を潜め、雄二に尋ねる。

「昨日の騒ぎの事と、今日の校内の生徒たちの反応から考えると、厄介

なのに目をつけられた……ってどこだな」

雄二がそういうということは、僕の悪い予感も高確率で当たってしまっただろう。

「ごめん……僕、ちよつと席外すね」

「……天枷さんのところ？」

まだ目的を言っていないが、ななかちゃんには全てお見通しのようだ。

「……うん。どうにも胸騒ぎが、ね」

「だったら俺も行くぜ。やっぱ気になるしな」

義之も一緒になって僕は学園長室へと向かっていった。

義之と一緒に学園長室へ足を運び、いざ扉を開けようとした時だった。

「……ん？」

「どうした？」

「いや、何か話し声が……」

「そりゃ、ここに天枷が呼ばれてるんだから人がいなきやおかしいだろう」

「まあ、そうなんだけど。なんていうか、様子が……」

義之を手招きして2人で一緒になって扉に耳をつけると所々途切れてるが、会話が聞こえてくる。

『……ません！……が……いけないんですか!?!』

最初に聞こえてきたのは高坂さんの抗議らしい言葉だった。何か揉めてるのだろうか。

『まゆき……て。先生……もなっ……ん。何故……ですか?』

続いて音姫さんの声。生徒会トップが学園長室で誰かに抗議してるようだ。

「まゆき先輩に音姉まで……何があったんだ？」

「さあ……っ？」

あの2人が揃ってるとなると、いよいよ怪しくなっていき、僕らは引き続き会話を聞き取ろうと耳を扉につける。

『ともかく落ち……高坂さん』

『あたしは……ますー！』

『言いたいことは……けど、これは決定……なの』

うまく聞き取れないが、僕らの知らない所で何か結論づけられ、2人はそれに抗議してるっぽいな。

『だからと言って天枷さんが……退学しなく……ですか!?!』

「……………え?」

僕と義之は同時に声をあげた。

うまく聞き取れなかったが、何故か天枷さんの名前と退学という言葉が聞こえた気がした。

本当にそうなのかは知らないが、僕らの脳内には最悪の展開が浮かんでいた。

いてもたってもいられなくなったのか、義之が勢いよく扉を開けて学園長室へ飛び込んだ。

「今、なんて言ったんですか!?!」

「え……お。弟君!?!」

「桜内君……何で……」

「今はそんなことはどうでもいい！ それより、今の会話はなんなんですか!?!」

「聞き間違いじゃなければ……天枷さんが退学。なんて言葉が聞こえた気がするんですけど」

声を荒げる義之の後ろから恐る恐ると尋ねると、音姫さんと高坂さんが顔を伏せた。

ということとは、やはりさっきのは聞き間違いではなかったのだ。

「……ええ。ついさっきなんだけど……理事会で天枷美夏の退学が正式に決定したんだ」

「な……」

水越先生の口から残酷な言葉が出た。

「な、何で天枷が退学にならなきゃいけないんですか!?!」

「落ち着いて。とにかくみんな座って」

水越先生の言葉に僕は渋々ながらも、先生の前に腰掛けた。

「昨日起こった事故の所為で、各方面に天枷がロボットだという情報が流れてしまった。私たちも努力はしたんだけど、情報の流出を止めることはできなかった。そして最悪なことに、一番耳に入ってたほしくない人たちの所に人民たちの問い合わせが行ってしまったのよ」

「それって……」

「風見学園理事会の方々……」

水越先生の代わりに高坂さんが答えた。確かに、考えうる限りでは最悪な所かもしれない。

「……で、今朝方臨時の理事会があつて、学園長の解任及び該当生徒の退学が決定されたのよ」

「はあ?」

これは声を上げずにはいられない。天枷さんのことだけでなく、さくらさんの名前まで出てきたんだから。

「何でさくらさんまで解任されなきゃいけないんですか!」

「いくら理事会だからって、横暴にもほどがあるでしょ!」

僕と義之は声を荒げて水越先生に詰め寄る。

「残念な事だけど……私たちの意見なんて、向こうからすれば関係ないのじゃないね。」

騒ぎの根源を排除し、自分たちは知らぬ存ぜぬを貫くだけでしょから」

「保身に走った大人たちの、汚い常套手段ってことね」

まさしく高坂さんの言うとおり、我が身可愛さに天枷さんやさくらさんに責任押し付けて自分たちは関係ありませんというふざけた決定だった。

「ふざけるなよ……」

「残念なことだけど、これが現実なの」

水越先生のその言葉が、刃物のように僕に突き刺さった気がした。

第七十六話

「よし……音楽室部隊。扉の前に黒板の粉をぶっかけろ」

「うん……そっちは窓から何か本とかをばら蒔けばいいよ」

「うむ、遠慮はいらん。思いつきりショートさせてしまえ」

「……何がどうなってんだ？」

今、俺の目の前には屋上で金網を背にしながら携帯越しで物騒な事を呟いている明久、坂本、杉並の姿があった。

「何がって……お前たちがあんな話持つてくるからだぞ」

「いや、それがなんだってこんな風になるんだよ……」

「さてな」

何で今こんな状況になってるのか……話は数時間前の昼休み終了直前に遡る。

昼休みだつていうのに、俺の心は全く休まる気がしない。

それというのも、例の理事会のふざけた決定の所為だ。何の権利があつて天枷が退学にならなきゃいけないんだ。

水越先生や音姉たちでもダメとなると、あとの頼みの綱はさくらさんくらいだが……あの人は今いない。

さくらさんさえいれば何か違ったかもしれないが、今それをいったところでしょうがない。

「そういえば、昼休み天枷さんが呼ばれたけど……どうしたんだろ？」

小恋が何気なく聞いてきた。

「あ、いや……」

どう答えたものか……。

「明久君も何か落ち込んでる感じだし」

「あ……」

「学園長室、行ってきたんでしょ？」

突然茜が割って入ってきて核心的なことを突いてきた。

「え、何で知ってるんだよ？」

「噂……聞いたから」

「これまた突然杏が割って入ってそんなことを言い出した。

「えく？ 何の？」

「美夏の退学と、学園長の解任……」

「え？ ええええええくくくく!?!」

「いや、その話聞いたとき小恋ちゃんも一緒だったわよね？」

「難しい話かと思っただけ……それ、本当なの？」

「ああ……本当のことだ」

「ええええええ!?!」

「桜内、それどういふこと!?!」

俺たちの会話を聞いた委員長が割り込んできた。

「詳しく話して」

「……昨日、天枷がお前の弟を助けたときの事故。アレの所為で美夏がロボットだつてことがあちこちに知れ渡った。

そしてその話が学園理事たちの耳にも入って、ロボットと知りながら入学を許可したさくらさんにも責任がある

「みたいなことになって……」

「何それ……」

「横暴ね」

全くその通りだ。

「ふむ……学園の上層部は事なかれ主義の決断をしてしまったというわけか。ま、最初から機体などしてはいなかったが、

なんともヘタレな対応なものだ」

いつの間にか話を聞いていたのか杉並までもが会話に加わってきた。

「どういふこと?..」

「非公式新聞部、及び同土土屋の調査で入った情報によると、学園の理事をしている者たちの中で、重度の差別者は

「そうはいなかったようだ」

「そうなの？」

「それなのに、なんでこんな問題が？」

「明久も話を聞いて会話に加わってくる。」

「ふむ。プライベートシーのため、個人名は伏せるが、μを数体所持しているもの好きな理事もいるくらいだからな」

「ムツツリー二に調べさせてる時点でプライベートシーなんて紙切れのようなものに成り代わったんだろうけど……」

「だが、そんな噂が広まってしまった以上、このまま放置しておけば、我が校がロボット排斥運動の槍玉に挙げられるのは

時間の問題であろう？　だから、当事者と責任者を切った。一番簡単でおかつ無難な選択肢……だな」

「ふざけるな！　そんなの自分の保身に入ったただの逃げじゃないか！」

「まったく、ヘタレなものね」

「納得いかないなあ……」

その通りだ。確かに合法的なものじゃないかもしれないが、だからといって天枷やさくらさんが

悪人というわけじゃない。

当初はともかく、今の天枷は立派な学園の生徒で、俺たちの友達のひとりだ。それにさくらさんだって、ただ

天枷を背中をちよつと押してあげただけじゃないか。

「しかし、対処せずに放置しておけば、世間の目は俺たちに。そして、美夏嬢本人に向けられることになる」

「だからって、芳乃先生や美夏ちゃんがやめさせられるなんてあっていいの？」

「……納得いかないわ」

委員長が怒りを露わにして呟いた。

「私、抗議してくる」

「え？」

委員長の言葉に俺だけでなく、俺たちの会話を聞いていた周囲の奴

らも驚いていた。

「彼女は何もしてないわよ。むしろあの子は私や、私の弟を助けてくれたわ。なのにこんなこと、納得できるわけないわ!」

委員長がそこまで天枷を想ってくれたことに、俺は目頭に熱いものを感じた。

「わ、私も行く!」

「そうね。そういうことなら私もいくよ。杏ちゃんもでしょ?」

「ええ、もちろん……」

委員長が教室を出ていくと、雪月花の3人もそれを追っていく。

『なら、私も』

『だったら、私は隣りのクラスにも知らせてくる』

『なら俺は、2年の後輩共に声かけてみるわ』

『だったら俺は部活の先輩んとこに言ってみる』

『あ、だったら俺は——』

委員長たちに感化されたクラスメートたちが次々と席をたち、教室を出ていく。

天枷のためにここまで一致団結するなんて……。

「へへ……これから大変なことになりそうだよ。義之」

「だな……」

俺はただ、嬉しくてしようがなかった。

そして昼休みが終わっても委員長を含めた数多の生徒たちに質問責めにあつた教師は理事会の決定だからとの平行線。

そこに体育教師が一喝を入れ、交渉決裂。それが火種となって全校規模のボイコットが始まったのだが……

『ぶわっ!! こ、これは……チョークの粉か!?!』

『冷たっ!! なんて古典的な罠を!?!』

『ぐあっ!! 頭があ!?!』

『へっ! ざまあみろ!』

『日頃の恨みだ!』

「それがなんでここまで……」

「ま、当然といえれば当然の流れだな。交渉の余地などいくらでもあつたはずなのに、学園側にそういう選択肢しか

残さなかつた教師側に問題があるな……」

杉並が訳知り顔で頷く。

「おおい、2組の連中、美術室に立てこもってるらしいぞ?」

連絡係みたいな立場になってる渉から報せがきた。

「よし。だつたら石膏像や美術展に出した作品を扉の前に置け。そしてその上に扉が開いたらそれらが壊れるように

仕掛けて教師たちを脅せ。流石に学園を有名にしているものを壊せるほど度胸のある教師なんていねえだろうしな」

「オツケー。ああ、あと2年の奴らは体育館を占拠できたつてよ」

「じゃあ、各出入り口の前に……ムツツリーニ」

「……何用だ?」

「以前防犯用に使つたアレの特大版まだある?」

「……すぐに用意する」

「よし。それじゃあ、できたのを体育館の各出入り口に」

「……了解」

「……かなりの大騒動になつてるな」

まさか天枷の転校の話がここまでの規模に発展するなんて思いもしなかつた。

まあ、それだけ天枷がみんなから信頼されてるつてことを思えば嬉しいのだが。

「いうことを聞かない生徒たちに業を煮やした共闘が生徒会に鎮圧を要請したようだが、生徒会はこれを却下したそうだ」

「ああ、そういえばまゆき先輩も今回の件に納得いかないつて顔してたなあ」

「音姫さんまでこの騒動に加担するようになってるね」

「へえ……今回生徒会はこっちの味方つてわけか?」

「別に味方つていうのとは違つたろうな。ただ教師のふざけた決定が

気に入らないから俺らと一緒に反抗してるってくらいだろ。

ま、向こうがこっちの騒動に加担してくれるっていうんならそつちもきつちり利用させてもらうがな」

坂本が悪役ヅラして眩いた。こいつ、ここまでやってまだ何かしでかす気か。

「こりやあ心強いこつて」

「いずれにせよーこれが付属でかます最後の大花火つてことになりそうだな、桜内よ……」

杉並が校庭を見下ろしながら言う。

「遊び心がないっていうのがちよつとな……」

「心配はいらん。この男杉並、不測の事態に備えて、そこかしこにいるんな仕掛けを施してある。桜内が

言つてくれればいつでも狼煙をあげるぞ」

「……こつちもあらゆる準備は既にできてる」

「お、何だかおもしろくなってきたな。一丁かましたるか!？」

「あのな……」

渉まで乗りはじめ、事態は更に悪化してしまいそうだ。

「ん、どうした桜内？ 臆したか？」

「いや、臆しちやいないけどさ……」

ただ……この状況を当事者である天枷自身が望んでいるかどうかってことなんだがな。

「あ、いたいた」

屋上の扉が開くと、そこから白河が現れた。

「あれ、ななかちゃん」

「お、明久君。今回も派手にやってるね〜」

「いや、ななかちゃん。今回はって、僕はこれまで問題なんて起こしたことなんてないよ」

「しれつと嘘つくな。超問題児が」

「誰が超問題児だ。てか、人の事言えるのか。僕は問題なんて起こしてないっていつてるでしょ。少なくともこつちに来てから……」

「天枷さん、いたよ〜。2人共」

「ああ」

白河が背後に声をかけると、やってきたのは天枷だった。

「ここにいたのか」

「天枷……」

「天枷さん……」

「お、今超絶話題のスーパーヒロインご登場だ」

「今、天枷のクラスはどうなってるんだ？」

「これだけの騒ぎ、当事者のいるクラスが何も無いとは思えないが。

「うむ。由夢が必死に教室へ連れ戻そうとしているが、皆、教室へ戻る気はないらしい」

「そうか……」

「……桜内、吉井。これはみんな、美夏の為にやってるってことなんだよな？」

「……ああ」

「みんな、天枷さんにいなくなってほしくないから。みんななりになんとかしようとしてるんだよ」

「そうか……」

天枷がフェンスへ歩み寄ると、そこから学園中を見渡した。

校庭で教師数人と交渉の真つ最中の光景だったり、職員室の外で生徒たちが座り込んでいたり、

他にもあちこちで籠城している生徒たちを説得しようと走り回る教師の姿も見える。

「皆が美夏のために色々してくれるのはとても嬉しい……。美夏は、本当に幸せ者なのだな。」

だが、こんなことをしたところで、皆が色々な面で不利になってしまふ。違うか？」

「ああ。この学園の生徒の進路にも支障は出るだろうし……。最悪、この学園もなくなるかもしれない」

杉並の言うとおり、この学園の全員に素行不良のレッテルを貼られる上に受験に影響してしまうだろう。

「確かに……この場にいる俺たちは進路がどうなるかが知ったこと

じゃねえが、この学園の奴ら全員がそれを

承知でやってるってわけじゃねえだろうし……いくら数を揃えたところで——」

「美夏の退学処分を覆すことはできない……ということか？」

「……相手が相手である以上、そういうことになるな」

天枷の言葉に、坂本が頷いた。

「そもそも、現行の学校は人間以外の者を入学できるようなシステムが存在しないからな。

ロボットの社会的立場云々以前の話だ」

「それが大丈夫なくらいに法律を変えていけばいいって言うだけなら簡単だが、1日2日でどうにかなる問題じゃないし、

今の俺たちに国の法律をどうこうでできる力なんてないからな」

「だから……美夏は、こんな無駄なこと皆の将来を壊してしまいたくはないのだ」

眼下に見える生徒たちを眺めながら憂い顔で呟いた。

「……そうか。じゃあ、やめさせるか？」

俺の言葉に天枷は顔を上げて俺に詰め寄る。

「どうすればいい？ どうすれば、皆はやめてくれる？」

今回のことで、みんなの気持ちは天枷に十分なほど伝わった。ならば、天枷が如何にしてみんなに気持ちを伝えるかだ。

「みんなに、お前の気持ちを伝えるんだ。どんな方法でも、みんなに伝えれば、みんなお前の気持ちに伝えてくれるはずだ」

「美夏の、気持ち……」

それから天枷はしばらく考え、この場にいるみんな、学園のみんなを見回し、数瞬目を閉じると頷いた。

「わかった。美夏は、みんなに自分の言葉を伝えたい」

「なら、うってつけの場所があるな」

「うん、あそこだね」

坂本と明久が互いを見て頷いた。

「何かあるのか？」

「放送室だよ。あそこからなら君の声を学園中に届けることができる

しね」

「なるほど。校内放送でみんなに伝えるわけだ。オツケ」

「わかった。では、すまないが、放送室に案内してくれまいか？」

「りようか。いい。って、あ……でも私、放送室の鍵を持ってない」

「職員室に行こうにも、この状態じゃ。職員室に取りに行くのは無理じゃろ」

確かに、今は職員室もかなり緊迫した状態だろう。俺たちが行ったところで、他の生徒たちのことで詰め寄られそうさ。

「そこは心配いらねえぜ」

「こつちには開錠のエキスパートがいるんだから。ということ……ムツツリーニ」

「……何だ？」

「実はかくかくしかじか……というわけさ」

「……了解した」

「では、お願いできるか？」

「……鍵をあげるくらい、5秒もあれば余裕だ」

「……それは、普通に犯罪じゃないのか？」

「義之、そこはムツツリーニなんだから」

「……それで納得できるのがなんともな……」

杉並といい、土屋といい、まゆきさんといい、この学園に一体幾人常識から飛び出た奴がいるんだろうか。

「では、美夏は行ってこよう」

「なら、俺もついてくよ」

「いや、桜内たちはここで待っていてくれ。ここは美夏だけでいく」

「……そうか」

何か思うところがあるのだろう。明久たちもどうしようかと思っただけだが、ここは天枷の意思を

尊重して見送ることにした。

天枷は土屋の案内で放送室に向かっていった。

「行っちゃまったな……」

「ああ……」

「なんかあいつさ、この1・2ヶ月で成長したよなあ……」

「うん。本当にね」

「あいつ、本当にロボットか？」

「まずロボットつてもんに対する認識を、俺たち人間の方から変えなきゃいけない」

「うん、そうだよね」

俺たちは校庭を見下ろしながら天枷の放送を待っていた。

何分か待つと、学園中のスピーカーのスイッチが入る音が響き、天枷の声が響き渡る。

『あー、あー……マイクテス、マイクテス。あー、マイクテス……え、そんなのはいい？』

いや、しかし、どうにも緊張してな……』

しよっぱなからしまらない放送だな。

『えー、オ、オホン。本日は、大変お日柄もよく……え？ それもいい？ わ、わかった……』

それからようやく本題に入る。

『えー、風見学園のみんな、せ、静粛に聞いてくれ。2年の天枷美夏だ』
あちこちで籠城騒ぎを起こしていた生徒たちの声がピタリと止んだ。

『知つての通り、今学園中が大変な騒ぎになっている。みんなが、美夏のためにやってくれているということ』

よくわかったし……とても嬉しいと思ってる。そのことに関しては礼を言いたい。本当にありがとう……。

だが、残念だが、理事会の決定は美夏も既に納得していることだ。この決定が覆ることはない』

天枷の言葉にあちこちから『そんなことなんてない！』などの否定の言葉が飛び交う。それに頷く者も大勢いる。

『それに……こんなことを続けているは、周囲の迷惑だけではない。今美夏のために色々してくれているみんなにも

多くの迷惑がかかってしまう。美夏は、美夏のためにみんなが何らかの処分を受けることなど望んでいない……』

みんなただ天枷の言葉に耳を傾ける。

『だから、そんなことなんてしなくていいから……ひとつだけ。ひとつだけ美夏の願いを聞いて欲しい。』

美夏はみんなのいる学校に入れて、みんなと一緒に学生生活を送れて、とても幸せだった。だから、

せめて、あと1日。あと1日だけでいいから、もう一度、その学園生活を満喫させてほしい……』

「あと1日、ねえ……」

「しおらしいことじゃねえの」

『そうすれば、美夏は満足して、この風見学園を去ることができる。明日1日、美夏に普通の……』

普通の楽しい学園生活を、送らせてください！』

もう誰も騒いでいなかった。籠城を行ってる生徒たちも、教師たちも、ただ天枷の放送を聞いていた。

とりあえず、これで天枷の気持ちは間違いなく伝わったはずだ。ロボットが抱いた気持ちを、学園のみんなはしっかりと受け取ってくれたはずだ。

後は、俺たちが天枷に何をしてやれるかだ。

第七十七話

天枷さんの退学騒ぎから日を跨ぎ、彼女の要求通りに今までと同じ学園生活をこの1日だけ過ごす猶予をもらった。

つまりはこれが天枷さんの最後の登校となるわけだが……最後なのは学園の皆がわかっているが、最後だからといって何がどうなるでもなく、いつものようにみんなが挨拶をしながら登校し、友達と会話し、授業を行う。

「やつほー！ 杏せんぱーい！ みんなもお昼しよー！」

そして、昼休みになればいつものように僕たちのクラスに飛び込み、いつもと同じメンバーで固まり、昼食をとる。

昨日のことがまるで嘘ではないかと言わんばかりのいつも通りの学園生活だった。

けれど、永遠に続くのではないかと思えるこんな穏やかな時間も今日だけだ。

それがわかっていのに、僕たちはただいつも通りの学園生活を送り、彼女となんてことない会話を交わし、彼女はいつもと変わらぬ笑顔のまま別れの言葉を投げかけてこの日を終える。

「——なんてことでいいのかわかるか？」

「いきなり俺らをここに呼び出して開口一番から何意味わからない事を言ってる？」

「なんてと言ってるが、一体何の話をしている」

「まあ、大方天枷のことなのじゃろうが……」

「……それ以外に思い浮かばない」

僕は文月でお馴染みのメンバー＋義之を屋上に呼び出した。

理由は言うまでもなく天枷さんのことだ。

「で、こんな寒い場所に呼び出して何だ？ くだらねえことだったらチョコキでしばくぞ」

「いや、なんていうかさ……これだけで本当にいいのかなって話さ」

「だからどういうことだ？」

「天枷さんのことだよ。今日1日だけ今まで通りの生活を送らせてと言ってたけど、ただいつも通りの生活送ってはいさよならなんていうだけでいいのかな？」

「それを俺たちに聞いてどうするんだ？」

「どうするって、それをみんなに相談しようと呼んだんじゃないか」

「そうは言うが、天枷は特に何をしてほしいなんて言っていないだろう？」

「う……」

確かに、彼女は今日だけこれまでどおりの学園生活を送らせてほしいと言ったが、僕たちに何かを求めていたわけではない。

僕たちもそんな彼女の望みを受け入れようとこれまでと同様、彼女に挨拶したりなんてことない会話を楽しんだりもした。

けど、これだけでスッキリできるわけがないじゃないか。

「じゃが、確かにこのままでは胸の内がおさまらんのも事実じゃ。ここはひとつ、彼女に何ができるのかを考えるのもどうじゃ？」

「そうだな。このまま永遠にさよならなんてなりたくないし……」

秀吉と義之は僕の意見に賛成してくれたようだ。やっぱりこの2人ならわかってくれるよね。

「そうは言うが、今更退学を取り消しにしようだなんてのは無理だぞ」「そんなことはもう知ってるから。天枷さんにもうやめてくれと言われてるんだし……ん？」

「どうした、明久？」

今、何かが引っかかった。天枷さん関連で……なんだろう？

僕は集中して脳内に保存されてる限りの記憶を隅々まで閲覧する。彼女は僕たちとの学園せいかつを今日だけ許してほしいと言った。

そして僕たちには天枷さんの退学云々に手出しも口出しもせず、ただ天枷さんの願いを聞き入れてほしいと言った。

けれど、僕たちが僕たちで自由に学生生活を送る分には……？

「……そうだ」

「あん？ 何だ、明久」

「別に天枷さんにあれこれする必要はないじゃん」

「……それって、どういう意味だ？」

「いや、ちよつとね……天枷さんは僕たちに自分との学生生活を最後まで満喫させてほしいって言ったじゃない？」

「言ったな」

「学生生活を最後までだよ？」

「だから、それが何だってんだ？」

「うん。ちよつと思いついたんだけど……」

僕はみんなに自分の考えを聞かせた。僕のやりたいことが伝わっているかどうかはわからないけど、僕は自分が何をしたいのかを精一杯説明した。

「……ていうことなんだけど、どうかな？」

「……」

「……やっぱり、無理？」

いや、僕もどうかなどは思っていたよ。これを実行するにはとても時間が足りない。

「……いいんじゃないか？」

「うむ。それなら儂らも天枷も、悔いは残らんじやろう」

「明久……お前にこんなことを思いつくだけの頭があつたとは」

「……今世紀一番の至言」

「ほ、本当に……？ ていうか、雄二とムツツリーニ。僕を褒めるのか貶すのかどつちかにしてくれる？」

今世紀一番って……僕の活躍は来世紀までお預けだとしても言いたいのかい？

「そういうことならまず杉並にでも言ってみるか。こういうことならあいつが先導してくれんだろ」

「……早速非公式新聞部全員で打ち合わせだ」

「じゃあ、俺は音姉に相談してみるよ。こういうことは生徒会の人たちなら詳しいだろうから」

「儂も可能な限りメンバーを集めて準備に取り掛かるとしよう」

「みんな……」

そうだ。このままでいい筈がないじゃないか。彼女が穏やかな学

生生活を送りたいというのならそれを叶えてあげるのが僕たちの義務だ。

けれど、ただいつも通りの学生生活だけで満足できる僕たちじゃない。

「~~~~っ！　しいっ！　じゃあ、早速作戦開始だあ！　今日はみんな眠れないかもしれないよー！」

「面倒くさそうなことになるなら俺はパスするぞ〜」

「……そういえば召喚大会で撮った雄二の告白の音声データを——」

「おっと手が滑って——」

「霧島さんの携帯に送ったんだったね」

「テメエエエエ!?」

「削除してほしいならうまくやるから雄二も手伝ってくれるよね？」

「ぐ……テメエ、どこで……」

「さて、どこでしょうかな？」

以前雄二の脅しのネタになるだろうと思ってムツツリーニから買い取ったものだけど、結局使う機会がなかったから霧島さんに譲ったんだけど、手元になろうと効果を発揮するとはね。

「……偶にお前らが友人なのか疑わしいときだあるんだが」

「桜内よ、気にははいかん」

さて、これから忙しくなるな。僕らは早速作戦に取り掛かる。

「して……今日はどうしたのだ？　美夏の学生生活は昨日で終えた筈だぞ？」

明久の作戦が始まってからもう1日が経っていた。現在、俺は天枷と一緒に屋上に立っていた。

「まあ、そう言うなよ。何か今日あいつらがパーティー開くなんて言ってたからな」

「パーティー？」

俺の言葉に天枷が首を傾げた。

「いくら天枷が言っても俺も含めてみんなこのままはいさよならなんてのは嫌だからな。」

みんなで囁かながらパーティー開いてお前を見送るって事になったんだとき」

「……そうか」

「まあ、それは少し待つことになるけど。もちろん、参加してくれるよな？」

「……」

天枷はカウ帽子を深く被って表情が見えないようにした。

おかげで表情はよくわからないが、おそらく照れてるか嬉し泣きでもしてるんだらう。

「……桜内は、覚えてるか？ 美夏と会ったときのこと……」

「天枷と……ぶふっ！」

「な、何故笑うのだ!？」

話題を逸らそうと言い出したのだろうが、これまた笑えることを言い出してくれたものだ。

「ハ、ハハハ……忘れようたって、忘れられるわけがねえだろ。あんな強烈なパンチ」

「うぐ……そ、それは……今では悪かったと思ってる。あれ以来、桜内には面倒のかけっぱなしだった。本当に感謝してる」

「……いきなりどうしたんだ？ やけに素直だな……」

「一度ちゃんと言っておきたかったのだ。風見学園の一生徒であるうちにな」

「天枷……」

「そんな顔をするな。別に感傷に浸ってるわけではない。ただ……お前たちがいなくなったら、美夏はどうなっていたのか……そう考えただけだ」

「……そうか」

それから2人で校庭を眺めた。

天枷と出会ってなかったらか……あの時は杉並や土屋に無理やり連れてこられ、洞窟の探検をしていたら何故か天枷が眠っており、ちよつとした弾みで目を覚まさせ、波乱の日々が始まった。

あのまま天枷が眠ったままだったら別になんてことない日常は続いたかもしれない。

俺がやらなくてもいずれ天枷は目を覚ましていたかもしれない。けれど、その時に天枷や天枷の周囲の人たちが今回のように和解できたのかどうかはわからないし、委員長のロボットに対する憎しみが一生消えることはなかったかもしれない。

けれど、そんなことを考えるのはもう無意味だ。だって、今天枷はこうして生きて、長い時間をかけてようやくわかりあえたんだ。

「……美夏はお前たちと会えて、人間も悪い奴ばかりではないということがわかった。由夢に朝倉先輩、杏先輩や花咲に月島、吉井、坂本、木下に土屋、ついでに板橋に杉並も友達になってくれた。そして最後には沢井ともわかりあえた」

「そうだな……」

俺も、こうしてロボットである天枷が何を思っ生きていたのか、彼女と友達になりことができたのが、今で嬉しかった。

「……桜内、美夏は……人間とロボットの架け橋になったのだろうか？」

天枷がそんなことを聞いてきた。

「……お前はどう思うんだ？」

「……そうだな」

そう言っって天枷は懐から何かノートを取り出した。表紙には何か書いてあった。

何だ……『世界制服計画』？

「お前、それは……？」

「……見るか？」

「え、いいのか？」

恐る恐る聞いてみると天枷はいいぞと言わんばかりにノートを差し出した。

俺はノートを受け取ると、ノートのページをパラパラ捲って中身を見る。

「えと、これは……」

中身はなんとというか……：すげえブツ飛んできた。

何か変な建物みたいな絵に、所々機能の説明のような文章に値段らしい数字も書いてあった。

「天枷、これは一体……」

「美夏がロボットののための世界を作るのに必要なものだと思って書いたものだ」

「こ、これ全部……？」

「大体は杏先輩に相談して手伝ってもらったのだがな。杏先輩はすごかった。美夏の夢を笑わずに一緒にロボットの世界を作ることを考えてくれた。ただ方向を考えるだけでなく、それを実行するに必要な予想予算まで計算してくれたのだぞ」

「は、はは……その辺、杏らしいよな」

あいつが考えたとなると、この妙に細かい機能説明や予算も納得だ。ちよつと怖い。

「だが、途中で封印してあるページと、最後の章だけは杏先輩にも見せていないがな……」

確かに、途中ホツチキスで止めてあるページがある。俺はそれを無理やり開くと『HMシリーズと火気管制』、そして最後には『ロボットが管理する平和で住みよい社会』と題された書きかけのページがあった。

「……これは」

「美夏はな、人間がこの世界を取り仕切ってるという現状に、正直我慢がならなかった。だから、どうしたらより良い世界になるのか、模索していたのだ。世界制服だなんて、本当に実行できるかどうかはわからなかったが……考えるだけで楽になれた」

「今は……」

「ん？」

「今はどうなんだ……？」

天枷は俺の質問に答えず、俺の手からノートを抜き取ると、破き始める。

半分に、また半分と繰り返していき、細々と破くとそれを風に乗せて捨てた。

「……美夏の願いは、叶った」

「……そうだな」

天枷の澄んだ笑顔にホツとすると携帯の着信音が鳴り響いた。

「もしもし？ ああ、明久か。……ああ、もちろん一緒だ。……わかった。すぐに行く」

「吉井からか？」

「ああ。準備ができたから体育館に来てくれだつてさ」

「そうか」

俺と天枷はノートの切れ端の散らばった屋上を後にして体育館へと向かった。

「ところで桜内……美夏の事を祝ってくれるのは嬉しいのだが、何も体育館でなくてもよいのではないか？ そもそも、休日とはいえ屋内の部活動だってあるのに、よく許しをもらったものだな」

「そりゃあ、お前を祝うパーティーなんだ。誰も文句なんて言わないだろうさ。ほら、いいから入れよ。そろそろ入場の時間だろうから」
「うむ。……ん？ 入場？」

途中で訝しげな表情を浮かべながら天枷が体育館の扉を開いた。

『卒業生、入場。在校生、起立』

扉が開かれた瞬間、俺たちの视界に入ったのは綺麗に整列されたパイプ椅子の群れと、それに座る大勢の学生たちの姿があった。

そして、天枷が入ったのを認識するとみんなが拍手で迎え入れ、心地よい伴奏が館内に響く。

って、伴奏してるの杉並じゃねえか。あいつ、ピアノなんて弾けた

のな。しかも結構うまい。

「こ、これは……？」

「見ての通り、卒業式だ」

「そ、卒業式……？」

「ああ。明久がお前のための卒業式だってみんなに呼びかけてな。短期間でここまで準備するの大変だったぜ」

「桜内……吉井……みんな……」

「卒業、おめでどう天枷さん」

「沢井……」

入口付近で待っていたのか、委員長が天枷に歩み寄って祝いの言葉を送った。

「ほら、早く入って。みんなが待ってるわ」

「……っ！」

天枷は一瞬涙を流しそうなほど瞳が潤んだが、すぐに堪えると拍手の中をゆっくりと歩み、壇上に立った。

『卒業証書、授与』

壇上で音姉が卒業証書と労いの言葉を送り、天枷が一礼する。そして再び拍手の音が館内に響く。

卒業証書を受け取ると、一步下がって振り返り、みんなの顔をひとりひとり眺めてからカウ帽子を深くかぶる。

「……みんな、ありがとう」

拍手の中で何を言ってるのかは聞こえなかったが、きつとみんなに礼を言ってるのだろう。それは確信できる。

だがな、天枷……まだこれだけで終わりだとは思うなよ。

拍手もおさまると、体育館内のカーテンが全て締め切られ、辺りが暗くなった。

その中で天枷がどうしたのかとキョロキョロしているのがうつすらと見えた。ま、これでこそこのサプライズを催した甲斐があるというものだ。

『レディースアーンドジェントルメン！ 諸君よ！ まだまだお楽しみはこれからだあ！』

杉並のアナウンズと共にドルドルルル！ と、ドラムの音が鳴り響くと共に、壇上にスポットライトが当てられた。

そこには既にスタンバっていた渉、小恋、明久、白河。白河を除いてそれぞれ担当楽器の前で待っていた。

もちろん、俺も既にギターを背負って立っている。

「これは……」

「よっしやあお前ら！ 明るく激しく美夏ちゃんを送り出そうぜえ！」

渉が持ち前のハイテンションで館内の生徒全員を沸き上がらせる。こういう時は本当にいいノリしてるぜ。

「よ〜し……みんな、一生忘れられない卒業式にするぞお！」

明久の掛け声と共にギターを刻み始める。それに呼応するようにドラム、ベース、キーボードの音色と白河の歌声が館内に響き渡っていく。

曲の間はみんな大盛り上がりだった。天柳も、堪えきれなくなったのか、涙を流しながらも最高の笑顔で盛り上がってくれる。

曲が終わると、体育館が崩壊するのではと思うほどの拍手の嵐と、舞台裏の方から光沢のある紙吹雪が舞い、舞台袖からは大量のドライアイスが吹き出してきた。

ていうか、ドライアイスちよつと多すぎね？

「げほっ！ げほっ！ ちよ、ちよつとこれ多すぎない!？」

小恋が咳き込みながら俺の脳内の言葉をそのまま代弁してくれた。

「ちよ、雄二……これちよつとやりすぎじゃ——」

「こるあ吉井い！ いくらなんでもやりすぎよ——」

「ええ!? ちよ、高坂先輩！ これは雄二が……」

『俺は明久に任せられて準備をただけで中身は知らん。だから何かあつたら明久が自ら全責任を負うから』って言ったからにはこれの責任も取ってもらおうわよ!」

「おのれ雄二い！ 面倒くさいことは全部僕に押し付けて自分だけ逃げやがったな！ って、だから誤解ですってばあ！」

「待ちなさ〜い！」

それから当分の間明久とまゆきさんの追いかけてつこが続いた。

感動的な卒業式にする筈だったのに、なんとも締まらないようになっただもんだな。

まあ、みんなも呆れながらも笑ってるし、天枷だって仕方ないといった顔がすぐに安心したようなものに変わっていったし。

天枷を送るには、こっちの方がいいのかもしれない。まゆきさんに絞められてる明久を見ながらそう思った。

第七十八話

「お主、よかったのかの？ 何もこんな街中でなくとも、さくらパークなどそれなりに大きな娯楽施設でもよいのではないか？」

「ううん、いい。それより、初音島をあちこち回りたくて」

茜……ではなく、藍はそう言っただけで微笑んだ。

そう。今、儂の目の前にいるのは茜ではなく、藍じゃ。

そもそも、どうして儂が今こうして藍と街中を歩いておるのかというと、事は少し前……天枷が無事風見学園を卒業して一週間したところからじゃ。

天枷が卒業してから茜はどこか浮かない顔をしておった。儂も最初は天枷が卒業して寂しくなったのではと思っておったが、時折身体を震わせていたことからそれは違うとすぐにわかった。

もしかしたら藍のことかと思っただが、その時はすぐに尋ねることができなかった。

じゃが、それからしばらくして芳乃家に戻ればすぐに茜が大真面目な顔で来訪してきた時は久々に驚いたぞい。それも――

『明日1日、藍ちゃんとデートしてあげてほしいの』

開口一番にそんなことを言うもんじゃから尚の事驚いたわい。

別段断る理由もなかったので、首を縦に振って応えたが、あの時の茜は随分切羽詰った雰囲気じゃったの。

「どうしたの？」

藍の言葉で儂は現在に意識を戻した。

「いや、茜がお主とのデートを頼み込んだ時のことを思い出しての……。あの時の茜はいつになく真面目な顔をしておったからの」

「ああ、それ私が茜ちゃんに頼んだんだよ。1日、秀吉君とデートさせてほしいって」

「うむ……それはまた、何故そのようなことを望んだのかの？」

「んん……特にこれといって理由はないんだけどなあ。単に私が秀吉君とデートしたかったの。」

まあ、茜ちゃんには私の意図は伝わったと思うけど」

「やはりずっと同じ身体で過ごしたただけあって心で通じておるのか」

「あはは、姉妹ですから♪」

「正に一心同体といったかんじかの」

「それを言うなら二心同体だよ」

「魚ではあるまいし……」

「あはは、本当にね〜」

他愛もない会話をして笑うと藍は何気なく手を握ってきた。

その握った手は何故じゃかひどく弱々しく感じるぞい。

「藍、お主体調はどうなのじゃ?」

「体調は至って絶好調です。だって、茜ちゃんの身体だもん」

「ならば言い方を変えて……調子はどうなのじゃ?」

「サイアクだよ。なんか、この世界から存在を拒否されちゃってるみたい。変な孤独感が私を包んでる。

いつそ、このまま消えちゃった方が楽なのかもって感じ」

「それは、大丈夫なのかの……?」

「大丈夫だよ。そんなあやふや感があるだけで、身体自体は健康そのものなんだから。こうやって秀吉君と

歩いてる方が楽なの。大変なのは身体じゃなくて心の方だから」

「うむ、そうか……」

奇妙な孤独感、世界から拒否される……か。そういえば、桜内も元はこの世に存在するはずのない者じゃったな。

もしあのまま存在が消えようとすれば今の藍と同じになっただじやろうか。

いや、今ではもうそんな心配はいらんからここで考えても仕方はないのじゃが……。

しかし、心……もつと言えば魂というべきか。存在を安定させる上で大事なものが今なお消えてしまいそうじゃという感覚がどんなものなのかは、いかに演劇に通じてる者でもその身で体験せん限りはわからんことなのじやろう。

儂とて人並みならぬ努力である程度のことを演じられるようにはなれても、今の藍の気持ちを理解するのは無理じゃ。

それでも、せめて最後まで傍にいるくらいはできるじゃろうと思う。それで茜のためになるならの。

「ん〜、ウインドウショッピングにも飽きてきたかな〜」

「うむ……ただ見るだけなら普段からもしとるからの。どこか普段行かないような場所ならよいのじゃが」

「あ、だったら神社行きたい」

「神社？ うむ……何処かに神社などあったかの？」

「ちよつと歩くけど、ちよつとした山の近くに神社があるんだよ」

「うむ……ならば、一度足を運んでみるとするかの」

儂らは藍の案内のもと、胡ノ宮神社という場所へ向かった。

「ふう……中々に長い階段じゃったの？」

「あれれ〜？ 秀吉君たら息切れ？ ちよつと体力ないんじゃないの？」

「あの急な階段でふざけて体重などかけられればスポーツマンといえど、中々に堪えると思うぞい」

「うふh。おかげで楽チンでした♪」

いたずらが成功して楽しんでいる時の藍の笑顔は茜の時と寸分違わんの。

じゃが、それでも不思議と目の前にいるのが茜なのか藍なのかという区別がついてしまう。

「それよりお参りしようよ」

「う、うむ……」

そういえば、今年の年始は生徒会合宿のスタッフじみたことをやらされたり、年末にできなかった大掃除に枯れない桜の騒動など参拝する機会がなかったからのう。

いい機会じゃし、年始の分も含めて参拝しておくとするかの。

「何お願いしたの？」

「む……そうじゃのう。とりあえず、今年も平和な暮らしができればと願っておった」

「今だつて十分平和でしょ〜?」

「いや、そうじゃが……何分あつちでの暮らしが長かったから、どうにもこの平穏が束の間ではないかという不安もあつての」

向こうでは心休まる時間など、多く見積もっても手の指を使えば簡単に計算できるほどしかなかったからの。

それから参拝を済ませ、儂と藍は境内を見て回った。

「景色もいいよね、ここ……」

「そうじゃの」

割と高いところにある故か、茂みの向こうには海が広がって見える。中々にいい眺めじゃのう。

「……実はね」

目の前に広がる景色に黄昏とると、ふいに藍がしゃべり始める。

「この神社の裏道を抜けた先にね、私のお墓があるんだ……」

「なぬ?」

さざつとすごいことを切り出したために儂は目が点になったと思うほどに驚いた。

「お主らはよく来てたのかの?」

「ううん。私はあまり気にしてないけど、茜ちゃんが頑なにあつちに行きたがらないんだよね」

「まあ、妹がここにいるというのに妹の墓など、あまり来たくはないじゃろうし……ん? おかしいの。ここが寺ならわかるが、何故神社の裏にそんなものを置くのじゃ?」

「あはは。違うよ。単にこの裏手の抜け道から行った方が近いってだけ。お寺は反対側の方だから普通に行こうとするとここからぐるって回らないといけないの」

「ああ、そういうことじゃったか」

確かに遠回りするよりはいいじゃろうが、この地の主はそこをわかっておろうか。

神社のすぐ近くに墓地など、縁起のいいものではなさそうなのじゃが。

「ん……しかしお主、行ってもおらんのによく知っておったな。その

ようなこと」

「んもう、私が死んでからは行ってないけど、お墓は昔からそこにあるんだよ。場所を知らないわけないでしょ」

「それもそうじゃな。」

「まあ、ママたちは正面から普通に行くけどね。裏道は私と茜ちゃんだけのひみつなの。先に着いてパパたちをびつくりさせたこともあったなあ」

「それを語る藍は遠い目をしていった。」

「どうする？ 近くにあるというのなら、お主の墓にも足を運ぶかの？」

「え？ ……ううん、いいよ」

一瞬迷った表情を見せるが、すぐに首を横にふる。まあ、茜が行きたがらないところに意識がないからといえ、本人の承諾もなしに足を運ぶのも忍びない。

「何より今の藍を前に行こうなどとは儂も浅はかじゃったの。」

「そうか……」

「さて、次はどこに行こうか？」

「うむ。こうなればお主の希望を全部述べよ。行ける限り儂もお供しようぞ」

「ふっふっふ。安請け合いましたこと、後悔させてやるう」

「儂を侮るでない。向こうでは姉上に散々こき使われておったからお主とのでかけで参るほど柔ではないぞい」

「あはは……疲れた。秀吉君、以外とタフだね」

「言うたじやろ。そこらの男児よりはいくらか鍛え方が違うとな」

「実際、こちらとは違い、走り回ったりする機会が多い故な。」

あれからは島中のめばしい所をあちこち歩き回った。まあ、小さな島とはいえ、1日だけで全てを巡れるわけではないので、いくらか嚴

選していったのじゃが。

それでも1日中移動ばかりじゃったから疲れは残ってしまうのう。

「ふう……ここらで休憩ついでに飲み物でも買っておこうかの」

儂は近場に自販機がないかと歩こうとしたが、

「ダメ」

突然藍が儂の服を掴んで行かせまいとした。

「行かないで……ひとりにしないで」

「藍……」

今の藍はさつきまでとは違ってひどく怯えるような……かなり切羽詰っておる。

「私、もうダメだ……もう、そんなに時間がない」

「わかるものなのか？」

「うん。なんでか知らないけど、なんとなくわかる……」

「儂は、どうすればよい？」

「どうしよう……」

「うむ……とりあえず、茜を呼び出して何か考え——」

「待って……茜ちゃんに身体の主導権を渡す前に、したいことが……」

「なんじゃ？」

「携帯、出して……」

自分で出そうとしないあたり、もう藍は自力で身体を動かすのも辛い状態なのじゃろう。

儂は藍の言うとおりに彼女のバッグから携帯を取り出した。

「これじゃな？」

「みんなの声が、聞きたいの。お話、させて……」

「……承知した」

それから藍は弱々しい力で一生懸命携帯を操作し、月島を始めに普段一緒に過ごすことの多い

メンバーへと電話をかけていった。

こちらにまで聞こえるほどの音量で他愛もない会話を少々じゃが、藍にとってはそれぞれのこのほんの少しの会話をとても大事そうにおこなっておった。

最後の雪村に対しては幼い頃からずっと一緒だったからか、他のみんなより少し長めじやった。

儂はただその会話を眺めておった。そして、言いたいことを口にしたからか、電話を切った。

「大丈夫かの？」

「うん……ただ、やっぱり雪月花はいいなって」

「……そうか」

月島や雪村は知る由もないじやろうが、藍は茜と共に2人と過ごす日々が長い分思い入れも多いのじやろう。

藍はそつと携帯をしまうと歩き出す。

「何処に行くのじや？」

「最後の挨拶……そのために、ちよつとね」

「目的地は？」

「決まってるじゃない。今の私が生まれた場所だよ」

藍の生まれた場所……藍の命が失い、気がつけば茜の中にいたと言う。つまりは2人の再会した場所とも言える所か。

儂は黙って藍の後を歩いていった。

いくら歩くと、そこはかつての『枯れない桜』のあった場所じやった。

いや、桜の木自体はあるのじやが、そこは前のような桜はひとひらも残っておらなかった。

「今の私の意識って、ここから始まってんだ。お母さんのお胎が最初の故郷だとするなら、ここは第2の故郷なのかも……」

藍はそつと桜の木にそつと触れながら呟く。

「それを言うたら、儂らも似たようなものじやな。いきなり目の前が

真つ白になつたら突然ここに瞬間移動したんじゃないからの」

「あはは……じゃあ、私たちつて結構似た者同士なのかもね。だからかな……安心して茜ちゃんを託していけるのかもなあ……」

言い終えると、藍の身体がふらついた。儂は慌てて藍の身体を支えるが、もう自力で立ち上がれないのか、その場に座り込む。

「そろそろ、タイムアウトみたい。サッカーというなら審判が、時計を見てる頃かな……」

「お主はサッカーのルールを知っておったか？」

「知らなくてもそれくらいはわかるよ……」

「……茜には何も言わなくてよいのか？」

「茜ちゃんとはきいっばいふたりで話したから。それより、秀吉君にもちゃんとお別れしないと……秀吉君と出会ってから、とつても楽しかったよ」

「そうじゃな……こんな出会い方など、そう滅多に体験できることではないぞい」

「うん。この思い出は茜ちゃんも含めた3人だけの共通の思い出だね」

いつもの陽気な会話はなく、まるで絵本やアルバムを見たときの共通の感想を思い出しているようなそんなこともあつたな的な雰囲気じやつた。

まるでこれから息を引き取る人間がするような……いや、実際それに近いものじやろう。

元より彼女の肉体からは生命が消え、魂というか、意思だけという曖昧な状態だったのが戻ろうとしている。

本来ならそれが正しいことなのじやろうが……。

「お主は……まだ生きたいとは思わんのか？ お主は茜が望んでおるからこそ存在しとるのじやろう？ それに、思い残すことだつてまだあろう？」

「思い残す、こと……？」

「ああ。お主ひとりでできることは茜と身体を共有して大体はやつておろう？ じゃが、誰かと何かというのはまだやりきれておらんの

はないか？ 本当の意味で……誰かとうとうしたいものがあるのなら、それをやらんうちに消えるのも……嫌なのではないか？」

悟すように言ってるが、これは単なる儂自身のわがままじゃ。儂とて、このまま藍にいらなくなつてほしくはない。

茜も大事じゃが……藍のことだつて同等に大事に思つておる。

「ひとつだけ……」

藍は小さく呟くと、ゆつくりと手を伸ばし、儂の頬にそつと触れた。何かと思うとそのまま顔を近づけ、

「——っ……」

口づけをした。……とはいつても、口と口というわけでもなく、頬に。

やる人がいれば挨拶がわりにするような行為じやつた。そして顔を離すと、すんと儂の胸に頭を寄せた。

「えへへ……流石にお姉ちゃんがまだなのに私がなんてのはズルいよね。だからほつぺたにしたよ」

そういつてそつと顔をあげる。

「ずつと一緒について、好きな人ができたら……つて、ちよつとした憧れだったんだ。まあ、最初で最後のキスだけど、あつちはお姉ちゃんのためにとつておかなくちゃ」

「藍……」

「ありがと……これでもう、思い残すことは何もないよ」

そつと儂から離れ、ゆつくり桜の木の根元まで行くと、満面な顔をして振り向く。

「じゃあ、花咲藍……旅立ちます」

「藍……」

「秀吉君、約束してくれる？ この先、どんな事があつても、君は茜ちゃんの味方でいて。茜ちゃんの事……好きなんでしょ？」

藍に言われ、儂は考えにふける。

儂は、茜の事は確かに好きじゃ……じゃが、それが恋愛によるものなのか、儂は目を閉じて今までのことを振り返る。

初めて会った時からとんだいたずらっ娘で、時折不思議な雰囲気

醸し出して、そしたら二重人格——というか、ひとつの身体に2人分の魂が入ってた——じゃったり、それが突然消えようとしていると聞かされたり。

出会いからの期間、思い出こそは少ない気もするが……儂はそれをこれまで生きた中で一番、満たされてると思っておらんかったか？

……そうじゃったな。ちよつと振り返れば実に単純じゃった。儂も、明久の事を言えんのももしれんな。

「……ああ。儂は、茜が好きじゃ。じゃからその願い……然と受け取ったぞい」

「えへへ……よろしい。じゃあ、秀吉君。もうひとつお願い」

それから藍は儂にあることを頼み込む。その頼みに儂は首を縦に振って応える。

「じゃあ、お姉ちゃんを……よろしくね♪」

そう最後に言い放ち、藍——いや、茜の身体が、魂が抜けたようによろめき、そのまま倒れ込んだ。

「あ、藍……」

儂は恐る恐ると茜の身体に歩み寄る。まだ藍が残っているのではないかと微かな願いを抱いて。

「おい、大丈夫か……しつかりするのじゃ」

「………藍、ちゃん」

「茜……なのか？」

茜が顔をあげると、その顔は……その眼は涙で溢れておった。

「秀吉君……藍ちゃん、消えちゃったよ……」

「……本当に、消えたのじゃな」

儂の言葉に、茜はただゆっくりと頷いた。

「わかる……もう、藍ちゃん……どこにもいないんだって、わかるの……私、これからどうすれば……」

儂とて、これからどうすればいいのかはさっぱりわからん。

本来ならこれが自然な形の筈じゃが……この島の者たちが桜が枯れたことを異常に感じるように、藍と日常を共に過ごした茜には穴のあいたような空虚な心を残してしまった。

じゃが、だからといってただそれを眺めるわけにもいかん。藍と約束したこともある。

「茜……少し良いかの？」

儂は失意した茜に精一杯穏やかな口調を心がけ、話し始めた。

藍が消え、数日ほど経った休日……。

儂は茜を連れ、ある宿泊所へとやってきた。

「ほれ、ここじゃ」

「ここって……」

「お主なら見覚えがあろう？」

聞くところ、ここは茜と藍が幼い頃に訪れたと言っておったところじゃ。

「なんで秀吉君が？」

「まあ、それは追々説明しよう。それより中へ入ろうぞ」

儂は茜を連れ、中へ入った。そして儂らは旅の疲れを癒すためにそれぞれ温泉へと入った。

「広かったね……お風呂」

「そうかの？ 儂のところはそんなに広くなかったぞい」

「多分、大浴場を日替わりで男湯、女湯って感じに切り替えてるんだよ」

「そうなのかの？」

「男湯行ったのに、知らなかったの？」

「男湯に行こうとしたら、女将たちに止められ、別の浴場に放り込まれたからの……」

「あはは♪ こっちでもおんなじ扱いなんだね」

「全くもって不可解なのじゃ……」

儂は膝を着いた。こんな所でも儂の扱いは変わらんのか。

「ドンマイドンマイ♪ きつといつかわかってもらえるって」

まるで愉快そうに笑う茜じゃった。じゃが……その笑顔はやはり無理をしているのがわかる。

必死に乗り越えようとしているのもわかるが……やはり失ったものが大きいのじゃろう。そう簡単に割り切れるものでもなからう。

「それより秀吉君。どうして、ここに私を連れてきたの？」

茜の素朴な質問にどうしたものかと一瞬考えた。

どうせ後にわかつてしまっただろうが、目的に関しては今しばらく伏せて話すとしてしよう。

「今回の事は、藍との約束なのじゃ」

「約束？」

「藍が消えるより少し前に……茜に見せてあげてほしい景色があったようじゃ」

「……………」

儂も藍を見せてほしいという景色を見たことがないからわからんが、一緒に訪れた茜は臍げにじゃが、わかつておるのじゃろう。

「そこに、茜を連れてやってほしいと……あやつに頼まれたのじゃ。

できることなら3人で行きかけたのじゃろうが、まさかあのようなことになろうとは思わなんだのじゃろう。最後の最後に、儂にそれを

託したのじゃ。儂自身も藍の見せたい景色というものに興味があつたのじゃからお主と一緒に来たわけじゃが。そこに行けばきつとお

主の抱えているものも消えてくれると願つての」

「そう……だったんだ。ごめんね、気を遣わせちゃって」

「気にするでない。これは儂がそうしたいと思つたからじゃ。気遣いだと思うのならそう思えばよいが、

飽く迄儂はただお主と藍の言つてた景色を目にしてみたいだけじゃ」

「そう……………」

「さて、色々聞きたいことはあろうが、明日は日が昇る前に登山するのじゃから、早い内に寝るとしよう」

「うん」

儂らは一言二言言葉を交わしてから寝入った。

そして未明——儂らは欠伸をしたり背伸びをしたり、若干眠気を残しながら旅館を発った。

今はシーズンじゃないからか、儂ら以外の登山者が見えないうえに辺りが薄暗いため、行きは味気ないものじゃった。

じゃが、山道は思ったよりも急じゃった。じゃが、藍が見せたいものを知りたいからか、茜は弱音も吐かず黙々と歩き続ける。

やがて周囲が明るくなり始めた頃、ようやく儂らは頂上にたどり着いた。そして、いよいよ夜明けの時じゃった。

「あ……」

目の前に広がる景色を前に、2人同時に声をあげた。

山すそに広がる雲海。遠くから徐々に昇り始める太陽。まさかこんな景色が見られようとは……。

「藍ちゃん……」

茜はようやく藍の気持ちを受け止めることができたのじゃろう。彼女の名前を呟き、そのまま黙する。

「……藍ちゃん、この景色を私に見せたかったんだね」

「そうじゃな……」

「……見たよ、藍ちゃん。ずっとここを私に見せたかったんだね……。よかった、見られて……来てよかった……」

「……ここだけじゃなからう」

儂は茜の傍に立って言葉を紡ぐ。

「儂らはまだ色々なものを見れるじゃろう。数えきれないほどの景色をこれから見続けることになるう。そしてそれを胸に刻み続ける。もちろんひとりだけではない」

それから茜の方へ向き直る。

「できることな、その……これから見る新しい景色を、共に胸に刻み続ける気はないか？」

儂とお主の、ふたりで……」

「……」

「儂は——」

「……その言葉、藍ちゃんが初めて私の中に現れた日に言ってくれた言葉とよく似てる……」

「む？」

「そうだよね。藍ちゃんが現れてそう言ってくれたから、あの時の私は立ち直れたんだ。明るい子になろうって、頑張れたんだ。そして、今は秀吉君が同じ景色を見たいって言ってくれてる。私って、幸せなんだね……」

「……………」

「藍ちゃんが見られなかった景色、見たかった景色……ひよつとしたら、見たくなかった景色だって見なきゃいけないかもしれない。でも、頑張つて藍ちゃんの分も見ていこうと思う。だから……」

それから茜は儂の方を見て言った。

「これからも、私と一緒に、おんなじ景色を見ていこうね、秀吉君」

茜の顔には黄昏時の陽光のような輝きがあった。もう茜の胸に空いた穴が埋まったのじやろう。

いや、きつと藍が埋めてくれたのじやろう。本当に共有したかった景色を見せることで足りないピースを埋めてくれた。

ここからは何もできてない。真っ白なものを儂らがつくつていかねばならん。じゃから——

「無論じゃ。これからずっと一緒にじゃ。ずっと……儂と共に、数多の景色を見ようぞ」

——これからの景色と、彼女の笑顔をずっとこの胸に刻み続ける。

そして、大切な彼女との時間を……色々な者たちに。そして、儂らにかげがえのないものを見せてくれた彼女に伝えたい。

第七十九話

天枷さんが卒業を終えて数週間……。

3学期も半ばになった日の朝。相変わらず朝は空気がひんやりとする中、僕ら文月メンバーと義之で登校している。

「はあ……温もりが欲しい」

「だったら白河にでももらってこい」

「なら、雄二は私と——」

「俺はいらん。ほら、俺は筋肉質だからな」

「それなら服を脱がせれば——」

「させるか！ 何故にお前のくだらん希望を叶えるために俺が服を脱がにやならん！」

「はあ……本当に温もりがほしい」

「これにもすつかり慣れちまったな……」

「向こうでも3日くらいで慣れてしまったからの」

僕たちは変わりない朝を過ごしている。それにしても、恋人が身近にいるってのは羨ましいことだ。

ななかちゃんとはそこまで近所ってわけじゃないからそう頻繁に登校中に会えるわけじゃない。精々週に3回会えればいいほうだ。

「あ、やつほー！ 秀吉君！」

「うむ、茜か。おはようなのじゃ」

「あ、みんなおはよう」

「ちやお」

雪月花のみんなと合流し、そのままみんなで通学路を歩く。

「あ、秀吉君。実は先週からつくつてた服がようやく完成して——」

「まさかとは思うが、女物ではあるまいな？」

「え？ 秀吉君には女物でしょ？」

「お主までもか!? 儂は男じやと言うておろうに！」

「知ってるよ。でも、秀吉君なら下手な男物よりそっちの方がずっと似合うし♪」

「嬉しそうに言うでない……」

「そういえば、秀吉と茜ちゃんの関係が少し前から変わってる気がするな。」

「そんな気がするだけでそういう関係になったって聞いたわけじゃないんだけど。」

「そういえば秀吉さあ」

「何じゃ、明久」

「いや……茜ちゃんと付き合ってたんだね？」

「ぶっ!? な、ななななな、何を言うておろうか明久は！ 儂が同性の者と付き合うわけなからうに！」

「……うん、ドンピシャだった。まさかいつもの演技ができてないだけでなく、自分の性別までもが正しく認識できてない程とは。」

「まさかこの2人がねえ………まあ、結構似合ってるんじゃないかな。見た感じ仲良くしてるみたいだし。」

「やつほー！ 明久くーん！」

「わぶっ！」

「仲の良い2人を見ると、後ろから不意打ち気味にななちゃんが抱きついてくる。」

「な、ななちゃん……おはよう」

「うん、おはようさん♪」

「うん、いつも通りの花のような可愛らしい笑顔と彼女の柔らかい感触が僕の身体と心に温もりを与えてくれる。」

「ふんっ！」

「ぐはっ!? ゆ、雄二……貴様、何を!?」

「いや、そのだらけ切った顔が心底気に入らないだけだ」

「はっ！ 自分の地位が低いからって負け惜しみとは、大きいのはそのゴリラみたいな身体だけか！」

「な……誰の地位が低いだと!?」

「もちろん雄二じゃないか！ あ、もちろん霧島さんの尻に敷かれてるという意味じゃないよ。それはもう周知の常識だしね」

「待て！ そんなことが周囲で常識になつてるといふ事の方が驚きだ」

ぞ！」

「僕が言いたいのは、僕はもう雄二なんかよりも遥かに高い位置で幸せを築いているということさー！」

「無視してんじゃねえよ！　そしてそのドヤ顔がすげえムカつくぜ！」

「ふっ！　いつまでも自分から向かおうとしない負け犬が何を言ったところでね」

「テメエ……言うに事欠いて誰が負け犬だあ！」

「だってそうじゃないか！　いつも霧島さんに引つ張られてばかりで自分ではロクにリードもできない。オマケに生活の大部分を霧島さんが管理している。負け犬どころか、貴様はヒモだ！」

「何がヒモだ！　そもそも翔子のアレは管理なんかじゃねえ！」

「そんなことじゃ、いつかのシミュレーションの時みたいに半裸の鎖に繋がれた——」

「やめろおおおおお！　その話をするんじゃないやねえ！　もう頭に来たあ！　テメエの幸せをここで根絶やしにしてやろうじゃねえか！」

「上等だ！　僕の幸せがお前ごときに壊されるほど柔じゃないことを証明してやろうじゃないか！」

それから僕らは寒さも忘れ、上着とカバンをそれぞれの恋人に手渡してバトルを開始する。

「ちよつと待て！　今テメエ翔子を恋人扱いしやがったか！」

「雄二と恋人……（ポツ）」

「お前も頬を赤らめんじゃねえ！」

「勝負の最中によそ見とは随分余裕だね雄二！」

「だあ！　この……これじゃあ否定もままならねえ！」

「あいつらのこれも随分と日常化しているな……」

「うむ。通りがかる学生らも一瞥するだけでほとんど気にすることなく通り過ぎていくの」

「……双方子供レベル」

「あ、おはよう土屋」

少し離れた所で義之たちがため息混じりに何か言ってるが、今はそ

んなことは気にしちやいられない。

今はこいつに僕が雄二より上にいる存在だということを教えなければいけないんだ。

「あなた達は朝っぱらから何をやっておられるのですか？」

「あ、ムラサキさん。おはよう♪」

「おはようございます。それで、これは……？」

「ああ、気にしないで。これもうちの事だから……」

「毎回坂本が明久の幸せにムカついては明久はそれを自慢して喧嘩に発展。もう日常の一部と化しているわ」

「なんとも低レベルな……」

なんかムラサキさんも加わってため息をついているが、そっちよりもしつこい雄二を振り伏せなければ。

「うくん……野性的なのも見ていておもしろいけど、なんかもうちよっと華がほしいよね〜」

「華……というと、真面目な男か？」

「うん。金髪でお金持ちで、白馬に跨ってるようなイメージの……」

「そんなの現実にはいないよ〜」

「でも、そんなイメージにピッタリなのはいるみたいよ。ちょうど今校門に」

「え？」

何か人が騒いでいる声が近づいてくる。僕と雄二も流石に騒がれるのは困ると思いい、喧嘩の手を止めるが、いざ辺りを見回すと確かに結構な数の生徒が騒いでいるが、それは僕たちに向けたものではない。

生徒の目は校門の方に向けられており、釣られて僕らも見ると、そこらには見覚えのない男子が立っていた。

見るからにヨーロッパ系を思わせる金髪の男だった。その両脇には風見学園の制服を来た2人の女生徒がついていた。

その光景と男子の容姿が整っているというのも相まって昔の僕ならば舌打ち確実なものだった。

『『ちっー』』』

ちなみに今の舌打ちした中に僕は混ざっていないからね。そんなことをすればななちゃんに怒られるどころじゃないからね。

「うわ、本当に王子様みたいだね」

まさかななちちゃんの方が見とれるなんて思ってもみなかったよ
おおおおお！

「はっ！ バカでブサイクなお前なんかとは明らかに格が違うもんな」

「霧島さーん！ 雄二があの人傍らの女子2人に見とれてたよー
！」

「……雄二、浮気は許さない！」

「ぐあああああ！ 明久、テメエ……！ うぐあああああ！」

ザマア見ろ、ゴリラめ。

「こんな所でまで何をやっとするのじゃお主らは……」

「けど、本当に誰なのかしら？」

みんなが校門にいる男子に見とれている中、ただひとり反応の違う人間がいた。

「に、兄様……？」

ムラサキさんが驚愕に目を見張りながら小さく呟いた。僕は彼女の言葉に驚いた。

「ん、兄様……？」

確かにムラサキさんは兄様と言った。校門にいた男子は視線をこちらに……いや、ムラサキさんの方に向けてとこちらへ向かって歩み寄ってくる。

「久しぶりだな、エリカ」

「ほ、本当に……兄様なの？」

ムラサキさんの言葉に周囲にどよめきが走った。そりやあ校門にいた美男子が自分の学園にいる生徒と兄妹だと言ったらまず驚くだろう。

ムラサキさんの兄だろう男子は周囲の動揺など気にもせずムラサキさんに声をかける。

「私の顔など、忘れてしまったかな？」

「い、いえ……忘れてなど……」

いつもの凜とした態度と違い、少々仰々しい礼だった。

「お、お久しぶりです、兄様。でも……何故兄様がこちらに？」

自分の兄が来るなど全く聞いてなかったのか、動揺も隠せずに兄だろろう男子を呆然を見つめながら尋ねる。

「えつと……ムラサキさん、こちらは一体？」

「……何かな、君は？」

ムラサキさんの兄らしい男子が僕に視線を向けながらムラサキさんに尋ねる。

「あ、あの、私の……友人の方々でして——」

「ああ、吉井明久です。で、こっちにいるみんなは僕の友達で……」

「そうか……」

僕以外の人たちも紹介しようとするが、僕の言葉を最後まで聞かずに僕やみんなをまるで品定めするような視線で僕らを見つめる。

なんか妙に居心地が悪くなってくる。

「ふむ、エリカの友人……ねえ……」

「で、あんたは誰なんだ？ ムラサキの兄だって聞こえたんだが」

品定めをするような視線が気に入らなかったのか、雄二が苛立った雰囲気醸し出すような声で尋ねる。

「あ、こちらは……」

ムラサキさんが紹介しようとしたところを遮るように、本人が口を開く。

「私はリオ・フォーカスライト。エリカの兄だ」

「フォーカスライト……？」

雄二が訝しげな表情を浮かべる。ムラサキさんとリオと名乗った男子の態度から兄妹なのは間違いないとは思いますが、彼は自分の家名をフォーカスライトと名乗った。

何故ムラサキではなくフォーカスライトなのか。まあ、実際ムラサキさんはヨーロッパ生まれだというのにムラサキなんて不相应な家名を名乗っていることから何かしらの事情があるのかもしれない。

「積もる話もあったのだが……そうもゆかぬらしいな。時間だ」

リオさんはそれだけ言い残して学園へ向かって歩みだしていった。

「兄様……」

「何なんだ、あいつは？」

「さあ……？」

「……リオ・フォーカスライト。並びに、傍らにいた女生徒2人……緑の髪の方はフローラ・クエイシー。銀髪の方はジェイミー・ダウンング。3人共今回転校してくる予定だ」

「転校生だと？ こんな中途半端な時期にか？」

確かに、転校生云々は僕らやムラサキさんに天枷さんで慣れたつもりだが、時期が本当に中途半端が故におかしく思えてくる。

「兄様……」

色々聞きたいこともあるけど、ムラサキさんも随分困惑しているようである。そんなことはできない。

妙な胸騒ぎがする。また何か悪いことが起こるんじゃないか……そんな気がする。

そんな予感を胸に抱えながら校門をくぐっていく。

時間は既に放課後。特にすることもなくなっていた僕は校門へ足を運んでいた時だった。

「待ってください！ そんなの納得できません！」

「ん？ 今の声って……ムラサキさん？」

何やら校門の方でムラサキさんが誰かと口論しているような声が聞こえた。

気になって早足で向かうと、ムラサキさんと今朝会ったムラサキさんの兄のリオさんがお供の2人と一緒に向かい合っていたのが見え

た。

「横暴です！ 私は帰りたくなど——！」

「姫様、リオ様のお言葉に反抗なさらぬように」

「そうだ。私の言うとおおり、大人しく祖国に帰るんだ」

……ん？ 何？

今帰るって……ムラサキさんが？ 自分の国に？ ……いや待つてよ。

「それって、どういうことさ！」

つい声を荒げて叫んでしまい、突然の第三者の声に校門に立っていた4人が僕の方へ振り向く。

「よ、吉井!」

「む？ 君は確か、エリカの友人のひとりの……確か、ヨシイ・アキヒサ君だったかな？」

「ええ。……じゃなくて、名前は別にどうだっというんですよ！ それより、今ムラサキさんが国に帰るって——」

「ああ。君が今聞いた通りだ。近いうちにエリカには我が祖国へ帰ることを命じた」

「なっ!」

機械のように淡々と言いのをけるリオさんに驚きを隠せなかった。

「ちよ、ちよつと待つてくさいよ！ 藪から棒に何でいきなり帰国なんてことになるんですか!」

いくらなんでも横暴だと思った。聞かずにはいられなかった。

「何故……と来たか。君はエリカがこの地に来た理由を知らないかな？」

「理由……?」

理由……なんだったか？ 僕は彼女が特別留学生だということしか聞いてないから理由なんて知らない。

「知らないということでは話を進めていいかな？ エリカがこの地に留学させたのは王族としての資質を育てるためだ。庶民の生活を知るためには、庶民の中に紛れ実際に生活してみなければ見えてこないものだ。そして、この地を知るために一番良いことは何だ？ それはこ

の地で生活してみることだ。違うかな？」

いちいちカンに障る口調だが、言ってることはなんとなくわかる。実際にこの目で見たり、耳で聞いたりしなければわからないものだったとたくさんあるわけなのだし……外国の人間の生活だって実際に体験しなければわからないものなのだからムラサキさんの留学だって納得はいく。

「でも、それだったら何で今帰国なんて言葉が出てくるんですか？

ムラサキさんだってまだこの島の全部を見たわけじゃないんだし……ちよつと見渡せばまだ見たことないものだっていっぱい——」

「ふん。こんな愚者ばかりの地にこれ以上何があるという？」

「な……」

「こいつ、今何て言った？」

「兄様！」

「何か違うか？ 聞けばほんの少し前にはロボットが生徒の中に混じっていたというくだらん理由でくだらん騒ぎが起こった。そんな低レベルなこと騒動が起きるようではこの地の人間も底が知れたというものだ」

既に貴族としての社交的な態度が崩れており、口調や姿勢に侮蔑的なものが表立っていた。

「けど！ 最後にはみんな天枷さんとわかりあえた！」

「それは生徒間での話であろう？ だが、教師共はどうだ？ 我が身可愛さのために保身に走り、ロボットの意思を無視してそのロボットを退学へ追いやった。それにわかりあったとはいったが、それまでに連中はそのロボットにどんな仕打ちをした？ 更に今ではなりを潜めたように静かになってるが、随分と事故や犯罪が多かったそうではないか。そんな地が妹に相応しいとでもいうのか？」

「そ、それは……」

この男……リオは随分初音島の事情を調べ上げたようだ。天枷さんのことも確かにそうだし、初音島の事故や犯罪云々も、理由が理由とはいえ多い時期があったのも事実だ。

それを鑑みれば身内をそんな危険な地に置きたくないというのは

理解できるけど。

「理解していただけたかな？　これがこの度得た我々の結論だ。この島の環境は王家の一員たるお前の留学先に適していない。早々に引き払うぞ」

「待つてください！　私は、帰りたくなど——！」

「さつきも言った筈だ。素直に国に戻らなければ……お前が大切だと思ってる人たちに迷惑がかかるかもしれないぞ」

「——っ！」

リオの言葉に息を呑む。

「仲の良い学友もいるのだろうか？　お前の隣にいるその男とて例外ではあるまい？」

「い、いくら兄様でもそんなことなど——」

「いや、可能さ。私には、それを実行に移すだけの実力も権力もある。この兄に刃向かう事など、お前には無理だ」

「そんな……」

ムラサキさんの身体から力が抜けていくのがわかってしまう。

あまりにひどい……明らかにこれは脅迫だ。

「そんなことまでして……ムラサキさんの意思を無視してまで、脅迫なんて卑怯な真似をしてまで彼女を国に帰らせたいのかよ!？」

「何とでも言えばいいさ。ただ、王族には自分の感情よりも優先させるべきものがあるのだよ。背負うべきものが違う。君のような庶民には、縁のない話だと思うが、エリカにはそれが何なのかわかってるはずだ」

「それは……」

「それとも、忘れてしまったのかな？」

リオの言葉にムラサキさんは苦々しい表情を浮かべて受け止める。いや、受け止めるしかないのだろう。あいつの前じゃ。

「忘れてなど……いません」

「それはなりより。庶民にまみれ、王族の誇りを失うようでは本末転倒だからな」

「……っ」

リオの言葉にただ項垂れることしかできないムラサキさん。

無論、僕も何か言つてやりたい。けど、僕には王族というものが何なのか全く知らない。

下手に反論したところで意味はないし、かえって彼女の立場を危うくさせるだけだろう。

「明日まで猶予は与えてやろう。別れを挨拶くらいはさせてやらねばな」

それだけを言い残してリオは背を向けて歩き出す。

何が猶予だ。今はもう夕方。結局はすぐに支度を済ませて帰るぞつて言つてるだけじゃん。

「……………」

「ムラサキ、さん……………」

「……………ごめんなさい」

いきなり謝罪するとムラサキさんは歩みだす。

「ムラサキさん……………その、本当に帰るの？」

どう言つていいのかわからず、そんな言葉が出てしまった。

「……………本当も何も、兄様の命なのよ。従うしか、ないでしょ……………」

その言葉を残して、ムラサキさんは早足でその場を去っていった。

「……………」

なんだろうな……………今年に入ってから自分の無力さを実感することが多い気がするよ。

「どうすりゃいいってんだよ……………」

これは、天枷さんの時よりも厄介かもしれない。僕の心が夕暮れのように消沈しているのを感じる。

第八十話

朝日が昇ろうとする黄昏時。僕は桜公園を歩いていた。

昨日の夕方、ムラサキさんが兄であるリオから帰国命令が下され、今日この島を発つ事になった。

今日の何時なのかは知らないけど、彼女の性格を考えると僕たちに突然の帰国を報告するより、このまま何も言わずにこの時間に去ろうとする気がする。

そんな予感を昨夜から胸に抱き、僕はほとんど眠れていなかった。眠たくて閉じてしまいそうな瞼を必死に開きながら公園を横切っていく。

それから更にしばらく歩くと港が見えてくる。僕らが修学旅行の時に船に乗った時の港だ。

そこではフェリーが朝日を浴びながら輝きを放っていた。

その輝きの中ではただひとり対照的な空気を纏った少女がいた。

「やっぱり、何も言わずに行くつもりだったの?」

「えっ!?!」

僕の声に驚いたムラサキさんが勢いよく振り向き、僕の姿を確認すると同時に申し訳なさそうに目を逸した。

「な、何故……ここに……?」

「外国に発つにはまず本島の空港に行かなきゃいけない。そのためにはまず船に乗る必要がある。そして君の性格を考えればなんとなくこの時間に行こうとするんじゃないかってね」

「……………」

「何も言わずに行くなんて、らしくないじゃん。僕はともかく、生徒会のみんなには礼儀を持って接していた君がさ」

「……………」

僕の言葉に返事もせず、ムラサキさんはただ俯いたままだ。

微かに見える瞳からは光が感じられず、どつぷりとした底なし沼のようにただ濁ったものしか見えなかった。

「このまま……帰っちゃおうの?」

「……ええ」

「それは……君がお姫様だから?」

「私は……自分の感情より優先すべきことがあるの」

それを言われると、僕にはどうしてやればいいかわからなくなる。

「……ごめんなさい」

ぽつりとムラサキさんは謝罪を口にする。

「お別れ……なの? また、会えたりできないのかな?」

「……」

ムラサキさんは僕の疑問に答えない。いや、そもそも答えられないのだろう。

ムラサキさんの国はとてつもなく遠くて、そう頻繁に会える距離でもないし、僕個人の力でどうこうできるものでもない。

今離れてしまえば、恐らく眩暈もしようほどの時間会うことはできないということだろう。

「……うっ」

ムラサキさんから微かにしゃくりをあげる声が漏れた。

やっぱり、本当は彼女だってこの島を離れたくないのだろう。僕だって、こんな形で会えなくなるなんて嫌だ。

でも、僕がいくら我儘言ったところで個人がどうこうできる問題ではない。

なんか、情けないよね。離れたくないと泣いている女の子が目の前にいるっていうのに、僕は何もできやしない。

そういえば、ほんの少し前にもこんな気持ちを味わったんだっけ?

確か、天柳さんが退学すると知らされた時にも。僕だけでなく、多くの生徒たちが束になって抗議しても大人の権力には叶わず、卒業という形で見送ることしかできなかった。

でも、今回はそれすらできない。本当の意味で自分が無力だという現実を突きつけられる瞬間だ。

「……私、この島に来て……よかったって思ってる。あなたとの初会

は最悪だったけど……それでも、退屈はしなかった。面白いことだった色々あったわ。だから、この島に来て、風見学園で生活できて、本当に嬉しい」

何かをこらえ、それでも懸命に笑顔をつくって言った。

嘘……というわけではないだろう。彼女がこの島で得た思い出は紛れもなく本物だろう。けれど……

「お別れ……なのね」

本当はそんな言葉なんて吐きたくないのだろう。相変わらず目は寂しいままだ。

船に乗ろうと足を踏み入れようとするムラサキさんを見て、僕は思わず手を取った。

「あ……吉井？」

「本当に……本当にこのまま別れちゃっていいの？」

「本当もなにも……もう、決まったことなんだから」

「でも、そんなのが君の本心なわけじゃないよね？　こんな形でお別れなんて、納得できるわけじゃないじゃないか」

「そんなの……私だって納得できないわよ。でも、しょうがないじゃない……だって、私が帰らないと……みんなに迷惑がかかるかもしれないのよ？　私の我儘で、みんなを犠牲になんて……できないわよ」

それはそうだろう。自分の我儘で誰かが傷つくのを喜べるわけがない。でも、だからって……

「それでも……やっぱり納得できないや」

「だからって、それで留まれるわけじゃないわ。私が我儘を通そうとすれば兄様があなた達に危害を加えるかもしれないのよ。あなただけならともかく、他のみんなだって危ないかもしれないのよ。それとも、あなたに兄様を止められる？」

それを聞いて僕の心は揺れた。

ムラサキさんの兄さんがどれだけのものを持っているのかはわからないけど、彼女の態度から察するに僕ら庶民の感覚では計り知れないほどのものを有しているのだろう。

そんな奴相手にして僕が適うかどうかなんて、簡単に想像ついちゃ

うよ。悪い方向に。でも……

「みんなには悪いけど……僕はもう、誰かが別れたくないって泣いて叫んでるのにそれをただ見過ごすなんてできないから。だから、みんなを巻き込んででも君を助けようって思うんだ」

「本気で言ってるの？ あなたは本気で兄様に対抗しよう……それも、自分の友人を巻き込んで？」

「うん。これはもう僕個人の我儘だからただ謝るだけじゃ許しちやもらえないかもしれないけど……それでも僕はみんなに謝って、それからみんなを巻き込む。必死に土下座して、例え踏まれても蹴られても……それでも土下座してみんなと一緒にムラサキさんを助ける」

「吉井……」

「自分なんかのために友達を巻き込むなんて……って言いたいのではなくわかるよ。想像でしかないけど、もし僕が同じ立場だったら自分もそうしてたかもしれないしね。でも……それでも僕は、こうして目の前で女の子がみんなと別れたくないって言うなら……例え世界を敵に回しても、友達だと思ってる奴からあれこれ言われても、嫌われても、僕は目の前の人の笑顔を取り戻してやるさ！ もう……もう二度と後悔なんてものを味わうのはゴメンだから！」

「あなたは……」

『そうだ！ やはり貴様はそうでなくてはな、同士吉井よ！』

不意に聞こえてきた第三者の声に、僕とムラサキさんは驚いて振り返る。

「友のために自分が傷つこうと、そして仲間を巻き込んででも友を助けようとする心意気。俺は感動したぞ」

「す、杉並君……？」

な、何故杉並君がここに……？ いや、よく見たら杉並君だけじゃない。

「ムラサキさん……国に帰っちゃうって本当？」

「何にも言わないで帰っちゃうなんて、せっかくお友達になったのに……寂しいなあ」

「そうね。せめて理由を聞かせてほしいわね」

「ああ。別れの一言もなしに行くなんてひでえぜ」

「このまま俺たちに何にも言わないで帰るって言われて、納得できるかよ」

小恋ちゃんや茜ちゃんに杏ちゃん、そして渉や義之もいる。

「別にお前がそれで納得してるってんなら何も言わないが……」

「そんな心情ではないということは儂でなくともわかると思うぞい」

「……目は涙で揺れてる」

「……友達と別れたくない気持ち、よくわかる」

それに雄二に秀吉、ムッツリー二と霧島さんも。

「あなたたち……何故？」

「何故もなにも、私たちだってこのままムラサキさんとお別れなんて嫌なんだよ」

更にななかちゃんまでここにいる。まだ僕以外の人間には言っていない筈だろう、ムラサキさんはこの状況にただ戸惑うばかりだった。それでも少し経って冷静さを取り戻して必死に口を動かそうとする。

「あなたたちは……本気ですか？ 私が我儘を言ってここに留まろうとすれば、あなたたちは……」

「さて？ 仮にそれが本当だとして……吉井よ、お前はそれに屈すると思うか？」

杉並君は僕に視線を移して尋ねてくる。

「そんなの……するわけないじゃないか。ムラサキさんが別れたくないなら、僕はそれを全力で助きたい！」

「まあ、そうだろうな」

「それが明久君だもんね♪」

「俺たちだって、明久と同じなんだぜ」

義之が言うと、全員が笑顔で頷く。

「俺たちを見くびるなって事だよ！ 危害？ 迷惑？ んなもん、関係ないね！ それにな……あんなすかした野郎に負けると思ってるのか？ この俺様が」

「それには同感だ。あの独裁者じみたパツキン野郎は気に食わねえか

らな」

「み、みんな……」

僕は震えた。まさか、僕と同じように思ってる人たちがこうして集まってくれるなんて。

「それに、今ここで明久に手を貸す条件を突きつけてやって俺も当面の楽しみを増やせるからな」

「返せ、僕の感動を！」

雄二の一言でせっかくのいい雰囲気が出無しになった。

「雄二の言うことはともかく……儂らは巻き込まれてもいつこうに気にせんぞ」

「……転校したくないのはみんな同じ。私たちも手を貸してあげる」

でも、これだけ仲間がいるのなら……それはどんなに頼もしいことか。

「みんな……いいの？」

「……でんなくだらねえこと聞くなって！」

僕の質問に涉が笑顔で僕の背中をパンパン叩きながら答える。見るとみんなも同じような顔をしていた。

「……うんー！」

みんなを見て僕も決心を改める。後は、本人がどうしたいかだが。

「ムラサキさんはどうする？ やっぱりお兄さんと一緒に帰りたい？」

「そ、それは……」

「まあ、ここでムラサキさんが帰るって言っても素直に返すつもりはないけど」

「ちよ、質問しといて私の意思は無視するつもり!？」

「だって元々ムラサキさんって、素直じゃないところあるしえぶごお!？」

ちよっとした冗談のつもりだったのに、割と本気めの腹パンを受けた。

「生意気なのよ！ あなたなんか言われずとも、自分の進む道くらい、自分で決められるわ！ 私は……まだここにいたい。みんなの傍

に、これからもです！」

ムラサキさんがいつもの調子を取り戻して宣言した。

「ですから、私は兄様の言葉に逆らいますわ！」

力強い言葉と共にムラサキさんは手を差し出す。

「ですから……私と道を共に歩んではいただけませんか？」

「あつたぼうよ！ 美少女の頼みとあれば例え火の中水の中だ！ 面白くなってきたぜえ！」

ハイテンションな渉を始め、全員が強く頷く。

「任せろ！ 大船に乗ったつもりでいろ！」

杉並君も協力する気満々なようだ。敵となった時はその不気味さ

も相まって学園のあちこちにいた仕掛けによって翻弄されたけど、そ

んな人が味方になるとこれほど頼もしく感じるとは。

これなら例え相手が王族であっても勝機はかなり見えてくるので

はないか。

「そういえば、今思い出したんだけど……なんでみんなここに？ て

いうか、ムラサキさんの帰国のことをどうして？」

「ああ、杉並に呼び出された」

「俺もだが……小恋たちもか？」

「う、うん。ムラサキさんが大変だからすぐここに来てくれた」

「ムラサキさんが帰国するかもしれないって聞いたよ」

「いえ、ですからそれをどこから……？」

偶然あの場にいた吉井以外

誰にも言っていない筈ですが……」

「まあ、考えられるのは……」

雄二が視線をある方向へ移し、僕らもそれに釣られてある方向を見

る。

視線の先では杉並君が不敵な笑みを浮かべ、ムツツリーニはカメラ

の手入れをしている。

「ふふ……非公式新聞部の情報収集力を甘く見てもらっては困るな」

「……この島で俺たちの知らないものなどない」

……どうしよう。この2人が相手では僕も迂闊な真似はできない

かもしれない。

「えつと、じゃあ……今どんな状況かってのはわかる？」

「ふむ……」

「……ムラサキの兄が無理やり帰国させようとしている。その理由も少量だが掴めている」

なんて情報力。この2人が組めば国を滅ぼすこともできそうで怖い。

「……ちなみにもうひとつ情報をくれてやる」

「ん？」

ムツツリーニが僕のもとへ歩み寄るところっそり耳打ちしてくる。

「……お前がムラサキの所へ行っていると聞いて白河が若干不機嫌になってる。宥めるなら早急に済ませておけ」

「え……？」

ムツツリーニに言われ、ななかちゃんの方を振り向くと、ななかちゃんは笑顔のまままだ。

でも、なんでだろう？ ムツツリーニの言葉の所為か、その笑顔が異様に怖く感じるんだけど。

「えつと……ななかちゃん？」

「ん？ 何かな、明久君？」

ななかちゃんは笑顔のまま僕に近づく。けれど、僕は何故か後ずさってしまふ。

「ん？ どうしたのかな、明久君？」

「え、いや……別に……」

「ん〜？」

「その……ごめんなさい！ 決して、決してななかちゃんをないがしろにしてたわけじゃないんです！」

僕は土下座をしながらななかちゃんに謝った。

おかしい……。本当ならムラサキさんのためにと決めてた筈なのに、僕は今なんのために土下座しているのだろうか。

「何で謝るのかな？ 別に私怒ってないよ？」

「そ、そうだよね……うん。ななかちゃんがこの状況で怒るなんて……」

「私には微妙な言葉だったのに、ムラサキさんに対してはあんなに熱い言葉を送るんだくなんて、怒ったりしてないよ」

「本当にすみませんでしたあ！」

僕はコンクリートに穴が空かんばかりに土下座を繰り返した。

「明久……」

「なんとも締まらないのう」

「先程までの雰囲気は何処へ行ってしまったのかしら……」

なんか、みんなから呆れたような視線を送られてる気がするけど、まずはななちゃんのご機嫌を直さなければ。

最後にグダグダとなってしまうたが、僕たちはこうしてムラサキさんを助けようと奮起することを誓ったのだった。

第八十一話

ムラサキさんが、兄であるリオに刃向かって絶対にここに留まることを決心した後で……。

「……なんでこんなところに俺たちはいるんだ？」

「さあ……？」

義之の疑問に僕も首を傾げて答えるしかできなかった。

僕たちはただ杉並君に案内されるままついていっただけだからね。

「ここって……地下でしょうか？」

「見た感じな。最初はどつかの建物に入ったはずがいつの間にかこんな所に来たからな」

「ええ。この気温に湿度といい……地下なのは間違いないわね」

雄二と杏ちゃんの冷静な推察にここが地下だというのが信憑性を帯びてきた。

「ていうか、何ここ？ けほけほっ！ 埃っぽいっ！」

「お掃除しなきゃダメだよ。雑巾とかあるのかな？」

「……ここじやするべきこともできない」

「待て翔子。お前はこんな地下で何をやる気だ……？ そして、お前のその手荷物が妙に気になるんだが」

「……これは雄二を調きよ——お世話をするためのもの」

「……あのリオとかいう奴の前に、こいつに俺の全てを奪われる気がするんだが」

「電気、水道、トイレもあるとは……こちらには小部屋らしいものもあるのよ」

「埃っぽさを除けば結構住み心地良さそうだね」

「でも、お風呂がないのは不便だよ。せめてシャワーでもあればいいのに」

「……確かに。身体を清潔にできないと雄二とできない」

「それは何がだ？ お前は俺と何をやる気だ!？」

女子達の言う通り、身体を清潔にできないのはちよつと不便だね。

特に女の子はそういうのを気にするものだろう。まあ、それでも14畳程度の大部屋と6畳程度の小部屋があるだけでも相当いい所だと思うのだが。

オマケにどこから供給しているのか、電気や水もあるわけだから籠城に困ることはないだろう。困ることはないんだけど……。

「杉並君、言われた通りについてきたらここに来たわけだけど……ここって一体?」

「ふっふっふ……。それでは改めて……。我が非公式新聞部地下アジトによっこそ」

「いや、地下アジトってお前……。悪者っぽいぞ?」

「何をいうか同土桜内。地下アジトこそ男のロマンだろう。秘密裏に計画を運び、そして実行する。組織の必須アイテム、それこそが秘密基地……。否、地下アジトなのだ!」

「いや、やっぱり悪っぽいぞ!」

「なに、要は使い方だ」

「お前の場合、使い方も悪っぽいんだっての……」

「まあまあ、義之く!細かいことは気にすんなよ!」

渉の目は随分と輝いている。男のロマンだというのはやはり根底で共通するのか、渉だけでなく、僕もちよつと興奮を覚えている。

「いいじゃんいいじゃん、こういう隠れ家。スッゲー便利だし、身を隠すにはもってこいだろ?」

「そうね。今の私には必要なものなのは違いないわね」

ムラサキさんが噛み締めるように呟く。実際問題、兄に反抗するとなれば今はみだりに姿を見せるわけにはいかないのだからこういういたものは確かに必要だ。

「兄様が本気になれば……。私たちの身柄なんて、すぐに拘束されてしまう。とりあえず身を隠すのは正しい選択だと思うわ」

兄であるリオの実力をここにいる誰よりも理解しているムラサキさんだからこそその言葉だ。

だからこそ、確実な作戦を考えることができるまでの時間稼ぎとして……。そして、ムラサキさんの意思を示すために身を隠すことを決め

たのただ。

「秘密基地に匿われたお姫様！　くうく、最高のシチュエーションじゃないようー！」

「渉、お前は呑気だなあ……」

「深刻ぶるよりはいいだろう？　大丈夫だって！　絶対なんとかなるってー！」

「お前なあ……」

「まあ、実際なんとかするしかないんだから、せめてポジティブに行こうよ」

「お前もか……まあ、そうなんだろうけど」

「さて、身を隠す所を確保できたところでまずやることと言えば――」

「快適に過ごすためにお部屋のお掃除だね♪」

僕の傍にはいつの間にか掃除道具を持ってたななかちゃん。

「……そうだね」

ただぼうつとしても考えは纏まらないだろうし、しばらくは何かして身体を動かしてからじっくり考えよう。

そんな僕たちはまず部屋の掃除をした。杉並君曰く、『広すぎるのも不便なものだ』らしく、最低限設備の手入れしかしていなかったので部屋の掃除は割と大変だった。

終わった時にはもう時刻は昼を過ぎていた。

「ふうく……とりあえず綺麗にはなったね」

「うん。なんか、いつそう秘密基地っぽくなってきたね」

こうなると不謹慎だが、ワクワクしてしまう自分がいる。

「よおくし、綺麗になったところで……トランプでもやるか？」

渉が学校用のカバンの中からトランプを出して提案してきた。

「やらん」

義之が否定する。僕たちはリオをどうするかを決めるために籠城しているのに、遊ぶってのは。そう考えるが……。

「えく？　いいじゃん、やろうよお」

「あ、さんせー！　じゃあ、ブリッジは？」

「俺ルール知らねえ。ポーカーでよくね？」

「ポーカーならロー・ボールがいいわ。フラッシュとストレート無効のカリフォルニアスタイルで」

「いや、そういう細かいのは……」

「じゃあ、テキサスホールデムで」

「だから知らないって!」

「確か、自前の手札2枚と場の5枚の計7枚の中から一番強い役をつくって競う、本場カジノで多めの人数の時によくやるアレだよな」

「明久はよく知ってるな……」

「ああ、どうせだったらババ抜きにしようよ。簡単だし」

雪月花や渉、ななかちゃんが円をつくって座り込む。

「ふふ、何とも樂觀的だな」

「こいつら……自分たちが籠城してるって自覚あんのか?」

呆れたような、それでいてどこか楽しんでる杉並君と、ただ呆れるに尽きる雄二。

「まあ、リオに反抗するっていつても、具体的にどうすればいいかなんてわからないんだからな」

「そうね。今のところ兄様の出方もわからないし——」

「……現在ムラサキが行方をくりましたと理解したリオがムラサキの搜索に入ったところだ」

「あ、ムツツリーニ。偵察してきたの?」

「……(コクツ)」

「その前に、いつの間に背後に立っていたこの人に何も言わないのですか?」

いやだって、いつものことだし。

「結局今は様子見だってことだな」

「だね。まあ、これだけ頼もしいメンバーが揃ってるんだから大丈夫でしょ」

「そうね。とても心強い味方がついてくれましたわ」

「そいつは照れることを……」

ワイワイとトランプをしているみんなをムラサキさんはホツとした様子で見つめていた。

「……あれ？　そういえば、坂本と霧島さんは？」

「ん？　そういえば……」

『離せええええええ！』

『……雄二、大人しくしてて！』

「……………」

「……うん、とりあえずいつも通りだね」

「いえ、止めなくていいのかしら？」

「大丈夫。少し経てば復活するから」

「そういう問題なのでしょうか？」

しばらくここで過ごして、ふいにチャイムの音が聞こえる。

どうやらここ、風見学園からそう遠くない場所にあるんだろう。

「そろそろ放課後なのかな？」

「結局、学校サボっちゃたね」

リオから身を隠すとすれば、当然授業に出るわけにもいかず、必然サボタージユすることになる。

まあ、遅刻やサボリだなんて言ってられる状況じゃないんだけど。

「そういえば、そろそろ腹減らねえ？」

渉の言葉に全員頷いた。昼はここにあった非常食を食べたが、朝昼晩とぶつ通しでというわけにもいかないし、いざという時に空になったら困るだろう。

まだ余裕がある内は自分たちで用意をする方がいいだろう。

「そうだな。一回買い出しにでも行くか？」

義之も同じ事を考えたのか、買い物を提案する。

「あ、俺唐揚げ弁当が食いたい」

「……行く気はないのか、お前は？」

「買い出しなんぞより、ここに残る女の子たちを護る任務の方が重要だろうが！」

もつともな気もするけど、それって涉がただ女子と一緒にいたいだけなのでは。

「ねえ、だったら、お弁当買ってくるよりここで作った方がいいんじゃないかな？」

「そういえば、小さいけどコンロもあったし。ちよつとした料理ならできるんじゃない？」

小恋ちゃんの提案にななかちゃんが同意するように言う。そういえば、片付けてる間にキャンプ用のテントやコンロに組立式のテーブルまであったな。

「確かに、弁当つてのも経済的じゃないし」

「材料を買うだけ買ってそれを少しずつ使う方がいいかもね」

実際どれだけここにいるのかわからない以上、無駄遣いは控えるべきだろう。

「なら、やっぱり食材の買い出しだな」

「あ、でも……食べ物だけじゃなくて、タオルとかティッシュとか、色々必要なものもあると思うな」

「そうね。ここには必要最小限のものしか用意されてないみたいだし……」

「お布団とか、足りないよね？」

そういえば、小部屋の方に寝具はあったけど、この人数じゃ足りないね。

「……私と雄二は一緒に——」

「そうだな。足りない以上至急揃えるべきだ。うん、すぐに用意すべきだ！」

雄二が切羽詰ったように言うが、いくらなんでも布団は無理じゃないかな？

「心配はいらん。毛布の類ならば小部屋の方に用意してある。ついでに、寝袋なんかもな」

「いつの間に……?」

「……いつ何時、不測の事態に陥るとも限らん。更に密かに、迅速にあらゆる情報を仕入れるために時に過酷な環境の中に身を投じることもある。そのための道具は揃っている」

「お前たちは一体何と戦ってるんだよ? ていうか、杉並の用意周到すぎるバッグの中身……何か大きなものまでついていそうで怖いぞ?」

「ハツハツハ! 人に歴史あり、だよ桜内」

「……さて、買い出しのメンバーだけど。僕と義之、後は……」

「それなら私たちが行くわ」

「はいはい、まっかせて」

手を挙げたのは雪月花の3人とななかちゃんだった。

「え!」

それに驚いたのは渉だ。まあ、女子と仲良くって目的を潰されるわけだからね。

「でも、ここまで女子が多いのはまずくないか?」

「そうだね。もしもの時に守りきれるか怪しいし……ここは男子のみにした方が」

「ダメよ。あんたたちじゃ女子の好みのもなんてわからないだろうし」

「男子じゃわからないものも色々あるしね」

「むむ……」

確かに、僕たち男子じゃわからないものも色々あるだろうし……。

「仕方ない。ここは大人しく女子にもついていってもらおうとしようぜ」

「そうだね……」

不安だが、後で文句を言われるのも怖いし。要は僕たちがしつかりすればいいだけだし。

そんなわけで買い物メンバーは僕と義之にななかちゃん、雪月花メンバーの6人に決まった。

「そういうえば、お鍋やフライパンなんてあつたつげ？」

「ああ、確か小さいのが小部屋にあつた筈だよ」

「コップやお皿も必要だよね」

「ティッシュにタオル……トイレットペーパーも必要だよ？」

「……まるで合宿のノリだな」

確かに。会話だけ見ればとても籠城のための買い出しとは思えないよね。

僕たちは商店街を歩きながらこれから必要になりそうなものを購入していく。

もちろん、リオとその関係者がいないかどうか周囲を警戒している。

「——は、どれにする？」

「やっぱり——は、必要……だよね？」

「んもう、小恋ちゃんったら……当然じゃない。——なしじゃ、困るでしょう。」

「うん。——は絶対必要だよね」

「ん？ 何だ、余計なものは買わないぞ？」

「余計なものじゃないよお、女の子の必需品だよ」

義之の言葉に小恋ちゃんがふくれっ面で答える。

「やっぱりね……これは必要だもん。ね〜？」

「「ね〜？」」

女子同士で頷き合う。

「必要って……一体何が？」

「え、えと……それは……その……」

「……？」

小恋ちゃんがモジモジしてるけど、なんだろうか？

「ふっふっふ。それはね〜……これでした!」

「ななかちやんが元気よく僕の眼前に突き出したのは――」

「……お菓子?」

「うん。こういうのがあると、パジャマパーティーみたいでいいかなって」

「いや、小恋……あんまり余計なものは――」

「え〜!? 女の子に、あま〜いお菓子は必需品だよ?」

「義之が女子に避難がましい視線を向けられる。」

「あ、うん……わかった」

「半ば押し切られる形で買うことになった。まあ、糖分が欲しくなる時はあるよね。」

「一応、それに便乗して簡単に食べられそうなお菓子も買っておこうかな。逃げてる最中にも食べられるように。」

「たくっ……太っても知らねえぞ」

「ちよ、義之! それ女の子には禁句……」

「義之が女の子に言っってはならないことを言ってしまう。」

「え〜? 大丈夫だよ、これくらい。ね〜?」

「「……………」」

「先と同じように同意を求めるような小恋ちゃんの言葉に3人がシン、と静まった。」

「あ、あれ? ちょっと、どうして!?!」

「冗談よ」

「そうそう。私も食べても太らないもんねえ〜。ちやんと、別のところに栄養がいつてるから。ね、2人共……何処だと思おう?」

「茜ちゃんがわざと身体を一部分を強調するように胸の下で腕を組み合わせる仕草をしながら聞いてくる。」

「いくらダメだとわかってても視線は勝手にそっちに行ってしまうわけ――」

「明久く〜ん?」

「――こうなることも必然なわけで。」

「「めんなさい!」」

「僕はななかちやんの前で土下座をする。」

「くすくすくすつ」

「茜、明久をからかかってないで、お菓子選びましょう」

「そうだよ。選ばないんだったら、月島たちの好きなものばかり買っていつちやうよ」

「あ、待って待って！ 私も選ぶ」

「あ、私も！」

女子たちはワイワイと騒ぎながらお菓子を購入していく。

「本当にわかってんのかね、あいつらは……」

「あはは……」

まあ、必要な材料は買ったんだし。後はもう好きにさせればいいかな。

半分呆れながら周囲を見回していると――

「――！」

「あ……」

こんなところでリオと、その付き人2人と目が合ってしまった。

「すぐにダツシュだ！」

「「え？」」

僕の呼びかけにポカンとするのも一瞬。

「逃がすな！」

リオの叫びが聞こえて女子たちもようやく状況を把握した。

「ふえええええええ！ に、逃げなきや！」

女子たちは選り掛けのお菓子を棚に戻して一斉に逃げ出す。

しかし、ここに来るまで結構な量を買ったわけだから女子たちの足は鈍い。

「お前ら、荷物貸せ！ 俺が持つ！」

「こっちも！ 食べ物関係は僕が持つから」

女子たちから奪うように荷物を受け取ってそのまま全力で逃走する。

「向こうです、リオ様！」

「くそ、しつこいな……」

「やっぱ向こうもプロだね。地形はこっちの方が理解してるのに、距

離の詰め方が上手い」

全力で走ってるのに、やっぱり向こうの技量とこっちの手荷物のハンデがあるからか、徐々に距離が詰められてきてる。

「こうなったら、バラバラに逃げるぞ。各々、追つてを振り切ったらアジトに合流だ。いいな？」

「うん。その方が確実だね」

「じゃあ、行くぞー！」

全員が頷いたのを確認し、合図と同時に僕たちは一斉にバラバラの方向へ逃げ出す。

僕は女子たちの方に行かないよう、一瞬姿を見せるようにしてからアジトとは真逆の方向へ走る。

「お待ちなさい！」

「逃がさん！」

うまくいったようで、リオと付き人のひとり僕の方へ向かってくる。

やはり向こうはプロがついてるだけあつて中々しぶとかった。だが、小一時間かかってようやく振り切ることができた。

ここまで苦戦したのは鉄人以来だと疲労感を引きずりながら思った。

第八十二話

リオとの逃走劇の後、僕は疲労感を引きずりながらもアジトへと戻る事ができた。

戻ればななちゃんやムラサキさん、義之たちにも随分と心配をかけてしまったようだ。

義之たちの方はすぐに追手を振り切れたみたいで難なく戻る事ができたようだった。

手勢が少ないというのも幸いしたのか、今回はなんとかなったが、今後もいつそう気を引き締めなければならなくなった。

まあ、とにかく無事だったのだからよかったよかった。

で、心配かけたのと、僕が食材を持って逃走していたので夕飯が随分と遅れてしまったため、侘びとして僕が今日の夕食担当を押し付けられた。

いや、別に押し付けられなくとも夕飯の料理には僕も参加するつもりだったのだから一向に構わないしね。

それに結局義之や小恋ちゃん、ななちゃんも料理に参加してくれたわけだから豪勢にはいかずともそれなりにいい料理を出す事ができた。

「いや、相変わらず義之ちゃんとアキちゃんの料理は最高だよな」

「別に大したもんじゃねえぞ」

「それと、そのアキちゃんって呼び方はやめてくれる？　すごい寒気がするから……」

僕らが用意した夕飯を食べて渉がしみじみと呟く。本当に、その名前はロクな思い出がないからよしてほしい。

「やっぱ、これからは男も家事ができないとダメなのか？」

「その必要はない」

渉が真剣にこれからのために家事の勉強をしようかと悩んだところに杉並君が否定の言葉を投げる。

「そう？」

「――が、色々な面でクラスの男子たちに数歩劣る板橋が、何かしらのアドバンテージをつけたいというのなら、家事習得もひとつの手だな」

「杉並……お前、相変わらず何気に失礼だよな……」

「だが、これ事実だな」

「頼りになれる主夫になれば、引き取り手も現れるかもしれないぞ」「むう……いざとなれば仕方がないか!？」

「だが、そういうのは日々の積み重ねが大事ではないか？ 儂は料理はさほど得意ではないが、家の掃除くらいなら手伝いもするぞい」

「……ちよつと勉強したくらいで習得できるほど、家事は甘くはない」「マジか……」

大した設備も時間もないので、用意できたのは本当に簡単なものだけだが、それなりに好評のようだ。

これでもそれなりに雑談に華を咲かせられるくらいには。

修学旅行みたいな空気に染まりながら笑いあう中でもリオのことは忘れない。

リオが本格的にムラサキさんを探していることはさっきの追いかけてこで十分理解できた。

本当に大変なのはこれからだな……。

「ふん……ん……ん……」

暗闇の中で不意に目が覚めた。

さりげなく携帯を手にして画面を見ると時刻は早朝だった。

地下だから朝日が差し込むことはないのだから、時間の感覚が狂ってしてしまう。

昨日はカードゲームなどをして盛り上がり、その後で誰がどこで誰と一緒に寝るのかを相談してから就寝した。

ちなみに僕はななかちゃんとなので、隣には当然ななかちゃんが今もすやすやと可愛らしい寝息をたてて寝ている。

ななかちゃんの寝顔を堪能しようとするが、部屋の外で物音が聞こえてきたため、ななかちゃんを起こさないようそつとベッドから降りて音をたてずにドアを開ける。

そこではそろそろと外に出ようとする人影があった。僕は何事かと声をかける。

「何してるの？」

「うおっ!？」

「その声……義之？」

「あ、明久……か？　びっくりしたぞ……」

「あ、ごめん。それより、どうしたの？　こんな早くに」

「ああ。さつき音姉から電話かかってきたんだよ。随分心配かけたみたいだからな」

「ああ……昨日は結局連絡入れることも書置きすることもできなかつたからね」

あの人のことだ。昨日から連絡のひとつもよこさずに家に帰らなかつた僕らを心配したんだろう。

どうせなら逃走する前に書置きくらいはしておくべきだったかな。

「だから、音姉に事情説明しに行かなきゃいけないんだ」

「そういうことなら、僕も行くよ。こうなったのは僕が原因だし」

「別にそんなことはねえだろ。この逃走に加わろうって思ったのは俺たちの意思だし」

「そうだとしても、一応僕の口からも説明した方がいいでしょ。ムラサキさんの転校云々は今のところ僕が一番知ってることだし」

「まあ、そうだな。じゃあ、すぐに行こう。音姉には枯れない桜の木の下に行くよう言ってるから」

「オッケー」

僕と義之はアジトを後にして枯れない桜のもとへと向かった。

「んく……早かったかな？」

「まあ、こんな朝早くだしね」

辺りも暗いし、人の気配だって……

「弟君。遅かったね」

「うお!？」

「い、いたのか、音姉……脅かさないでくれよ」

「だって、『人に見られないように』って言ったのは、弟君だよ？ だから、由夢ちゃんにも見つからないようにしてたんだから」

だからって、すごい隠れてたね。全然気配を感じなかったよ。

「あ。明久君、おはよ」

「あ、はい……」

「で……う？」

「え?」

「説明、してくれるんだよね?」

音姫さんは僕たちをじつと見据えて尋ねる。

しかし、どこからどう言えればいいものかと判断に迷ってしまう。

あの時は深く考えなかったけど、これって下手すれば国家レベルの問題だし。

「ああ、音姉。これは、かなり深刻な話なんで……聞けば音姉にも迷惑がかかるともかもしれないんだ」

僕がどう説明すればいいか迷っていると、義之が断りをいれてくれた。

「今更遠慮はなしだよ。お姉ちゃんは、弟君のお姉ちゃんなんだからね? もちろん、明久君たちだってもう家族も同然なんだよ?」

真剣な眼差しで答えてくれる音姫さんはとても頼りになり、安心を覚える。

「じゃあ、僕からいいですか?」

それから僕はムラサキさんのこと、彼女の兄であるリオのこと、この2人が会ってから

今に至るまでの出来事をかいつまんで説明した。

「そうだったんだ……」

「はい。そういうわけで、学校にも行けなかったし、家にも戻れなかったんです」

「そんなことになってたなんてね……」

「ごめんなさい。義之たちを巻き込んでおいて言うのもなんですけど、言ったら音姫さんたちまで巻き込んでしまうかもって思ってた……」

調子のいいことを言ってるかもだけど、流石に音姫さんや由夢ちゃんまで巻き込むことはできない。

「……じゃあ、弟君たちがどこに隠れているか……お姉ちゃんは聞かない方がいいみたいだね」

「うん、できれば」

「わかった。じゃあ、学校関連のことはうまく誤魔化しておくね。そのくらいしか、力になれそうもないけど……」

「あ、ありがとうございます！」

僕は音姫さんに頭を下げてお礼を言った。

「その代わり、無茶なことはしちゃダメだからね。絶対にムラサキさんと無事にみんなまで戻ってくるんだよ？」

「はい！」

「あ、それと……由夢にはやっぱ内緒にしてくれないかな？」

「わかってるよ。由夢ちゃんを巻き込みたくないんでしょ？」

「うん」

できれば音姫さんにも内緒にしておくべきだったんだろうけど、この人は誤魔化せそうにないからな。

「由夢ちゃんの方は、お姉ちゃんに任せておいて」

「頼んだよ。じゃあ、俺たちはこれで。あんまり外をうろつくのはマズイから……」

「うん。じゃあね」

「それじゃあ、絶対にみんなまで戻ってくるので」

「うん。待ってるからね」

僕たちは頷きあい、誰にも見られてないことを確認し、その場を解

散した。

「さて、まずは今後どうするかだな」

上では日が登り始めた時刻。僕らはアジトの大部屋に集まり、杉並君が切り出した。

「どうするかって、ムラサキを匿い続ければいいんだろ?」

「それじゃあ、何の解決にもならないだろ。やっぱり、説得するしかないと思う」

「だろうな。このままただ隠れ続けても意味がない」

「けど、説得って言ったって……僕らはあの人の事知らないし、そもそも説得に応じる人なのかな?」

ムラサキさんの言葉を王族のナンタラだかで切り捨てるような人だし、僕らの意見になんて耳を傾けてくれるとはとても思えない。

「み、みんなでお願いしてみようよ! きつと、ムラサキさんのお兄さんだって、一生懸命お願いすればわかってくれると思うよ」

純粋さ100%の小恋ちゃんの言葉だが、事はそんな簡単じゃないのは僕でもわかる。

「小恋……」

「小恋ちゃん……」

「月島……明久だってそれができないことは理解できてるつつうのに」

呆れたような視線、困ったようなため息が小恋ちゃんい向けられた。

「え? なになに?!? ねえ、何でみんな月島のこと見るの!?!」

「なんか、月島はさ……」

「な、なに?」

「いや、いい娘だよなって思ってた」

「そうね。人の善意を信じきってる今時珍しい娘よね。言うなれば

「……ピユアっ娘？」

「小恋ちゃん……。小恋ちゃんは、ずっとそのままできてね」

「うんうん！ あたしも、そんな小恋が好き〜！」

「な、なにそれ〜!? 何かバカにされてる気がする〜！」

そういうわけじゃないんだけどね。

「まあ、話し合いもひとつの手だが、説得するとなれば骨が折れるな」

「そもそも、話し合いに持ってこさせるのだから簡単じゃねえんだぞ」

確かに。向こうはムラサキさんを追ってるんだ。

ノコノコ出てきたところで、有無を言わさず僕らを捕まえようとするのが目に浮かぶよ。

「じゃあ、いつそのこと、俺らでリオを捕まえて話を無理やりにも聴かせるってのはどうだ？」

「それも悪かねえが、相手は腐っても王族だ。この島でどれだけの権力を発揮できるかは定かじゃねえが、そんな奴を拉致なんてすれば国家問題に発展する可能性もある。下手すれば俺たちに犯罪者の烙印を押されることになる」

「うぐ……話を聞いてもらいてえだけなのに」

「というか、ムラサキさんを匿ってる時点で既に国家問題に発展してるのではないか？」

まあ、昨日うろついていた限り、警察の類の人間は見えないのだから向こうも大きな騒ぎにはしたくないってことだろう。

「本当、偉い立場にいる人って、内々で事を処理しようとする人が多いよね。」

「じゃあ、あの付き人はどうよ？ 仮にも女の子なんだし、リオを狙うよりは楽なんじゃないか？」

「お前な……まず拉致から離れるよ。発想が悪人だぞ」

「うわあ、渉君、サイテー。女の子にひどいことするんだ〜？」

「とんだエロガツパね」

渉の発言に茜ちゃんと杏ちゃんが毒を吐く。同時に小恋ちゃんやななちちゃんも軽蔑の眼差しで渉を見る。

「お、俺様が女の子相手にひどいことなんてするわけねーだろ！ 向

「この大将を引つ張りだすために協力してもらおうだけだ！」

「……人質作戦もありかもしれないが、向こうの付き人も相当にできる。お前の作戦はまず無理だろう」

ムッツリーニの発言で人質作戦も却下された。まあ、王族の付き人なんてやってるくらいだし、生半可な人なんてことはないだろう。

「そういうえば、あの人たちって……そんなにすごいのかな？」

「フローラとジェイミーのことですか？　そうですね……フローラとは、本当の姉妹のように育ってきたこともあって、よく知ってますけど……彼女、性格はとても優しく親切ですわね」

「なら……」

ムラサキさんの言葉に、小恋ちゃんが目を輝かせるが――

「――でも、決して侮れない女性ですわよ。元々フローラのクエイシー家は、フォーカスライト家に次ぐ家柄で、代々フォーカスライト家を支える立場にあるのですわ。その家柄の者が、兄様の付き人をやっている。その意味を考えてもらえばわかると思いますが」

「やっぱり訓練はちゃんと行き届いているわけね」

「ええ。護身術は一通り。でなければ、クエイシーの家名は名乗れませんわ」

まさかとは思ってたけど、あのおっとりした雰囲気とは裏腹に相当のやり手のようだ。

「じゃあじゃあ、もうひとりの……ジェイミー？　とかって女性は？」

「彼女のごとは……私はよく知りませんわ。けれど、兄様が選んだ方です。油断はしない方がいいと思いますわ。ただ――」

「ただ？」

「ただ、ダウニング家は、本来、諜報活動を生業とした一族だと記憶していますわ」

「つまり、スパイ？」

「そう考えてもらってもいいかと……」

「……確かに。奴の姿勢、視線の配り方……どれも一級品だ。フローラ・クエイシーよりも遥かに腕がたつ」

ムッツリーニが言うんだ。あのジェイミーという人を捕まえるな

んて僕らにはまず無理だろう。

「とりあえず、リオや付き人を捕まえるのは難しいってことだね」

「じゃあ、電話とか手紙とかメールは？ 妹の名前なら目を通してくれると思うけど……」

「ななかちゃんが案を出すのが、

「メールは無理でしたわ。『帰ってこい』『大人しく帰国しろ』……その一点張りだ」

「聞き入れる意思のない人間に送りつけるだけ無駄なことだな」

「まあ、それでどうにかなるならとつくに説得に向かっているし、こんな不穏当な会話なんてしない。」

「結局今はムラサキさんがどれだけ本気なのかを示し続けるしかないわけだ。」

「交渉の場に引つ張りだせばいいのだが、それもままならないか」

「手詰まり、じゃな」

「うーん……」

「やはりいいアイディアは中々出てこない。」

「じゃあ、当面は現状維持ってところか」

「それはそれで、色々課題が出てくるわけだが」

「確かに。潜伏し続けるにしろ、行動を起こすにしろ……それなりの準備と道具が必要になる。隠れる時間が増えるにつれ、必要なものは多くなっていく。生活用具もだが、何より……」

「食料、だね」

「昨日も途中で見つかって追いかけられたのだ。のんびり買い物なんてできるとは思えない。」

「でも……必要なのは、そういうのだけじゃないと思うんだけど……」

「その、お風呂……とか」

「汗臭くなっちゃうのは、ちよつと……ねえ？」

「私も……気になりますわ」

「……そうか」

「まあ、女の子だもんね。身体の臭いとかは気になっちゃうよね。」

「お前らな……いい加減自分たちがどんな立場にいるのか理解できね

えのか？」

「えく!? 女の子には死活問題でしょく!」

雄二の発言に小恋ちゃんがふくれっ面で抗議する。まあ、わからないだけだ。

「それに、着替えとかも……ねえ？」

まあ、着替えの類は用意してあるにはあるのだが、それでも限界はすぐに来るだろう。

ここには洗濯機がないから汚れたままになってしまう。

「その辺に関しては、後でなんとかしよう」

「どうにかなるのか？」

「まあ、夜まで待て」

「夜？」

何故夜を待つ必要があるのだろうか？

「そういえば、水だの電気だのガスだの、どっから引いてるんだ？」

「それは秘密だ。まあ、すぐにわかるさ」

「マジで何だよ……」

「まあ、当面の行動指針としては——」

それから数時間に渡り、これからどう行動していくべきかを話し合った。

「さて、そろそろ頃合かな」

時計を確認した杉並君が、嬉しそうに呟く。ちなみに時刻は既に午後10時をまわってる。

「では、問題の一部を解決しに行こうではないか」

大部屋でくつろいでいたところに杉並君が大仰に言い放つ。

「え？ 問題って？」

なんのことがわかってない小恋ちゃんが首を傾げる。

「はあ……月島が言い出した事だろう、これは。確か、風呂……それで

なくともせめてシャワーを

浴びたいと所望していたのではなかったのかね？」

「え!? ってことは、あるの!? シャワーが!」

気だるそうにしていた茜ちゃんも、シャワーがあるかもしれないという事実反射的に飛び上がった。

「シャワー程度だがな」

「それでも大歓迎よ! 杏ちゃんも白河さんも行くでしょ!」

「ふんふんふん……そうね、気になるわね」

「いい加減、身体スツキリさせたいしね」

女子たちが自らの身体の臭いを気にしながら口にする。

「ふむ……では、女子だけでよいのかな?」

「でも、女子ということはムラサキさんも行くんだよね? だったら誰かついていった方がいいんじゃない?」

別にムラサキさんが行くから僕もついていくわけじゃない。いや、結局そうなるが、いやらしい目的ではないよ。

実際ムラサキさんは今追われてる立場なのだから、警戒する人間を傍に置いた方がいい。

深夜に近い時刻だからと言って、追手が来ないという保証もないのだから護衛は必要になるだろう。

「そうじゃな。何処かは知らんが、外に行くようじゃしな。ムラサキでなくとも、女子だけで外を出歩かせるわけにもいかんしな」

「……雄二も一緒に」

「いや、俺はここにいる。手薄になったアジトに侵入者が来ないとも限らないしな」

「……………」

「ぎやあああああ! 何故アイアンクローをしかけるううう!」

「えつと……とりあえず、明久と坂本と木下は行くことになりそうだな」

「となると、桜内に板橋、土屋は留守番ということになるな」

「ま、待て待て! 俺も一緒に行くって! 明久が白河かムラサキに着くにしても、ひとりかふたり足りなくなるだろ!」

「あ、覗く気だ」

杏ちゃんが渉をジト目で見ながら呟いた。

まあ、流石に冗談のつもりだったのだろう――

「ち、ちがつ、違うぞ！ お、俺は別に、の、覗いたりしないからな！」
……………。

「……………。」

この場に沈黙が訪れた。女子一同からは冷たい目線が向けられ、男子からは呆れた目で見られる。

まさに四面楚歌、という言葉が似合う状況だと思う。

「まあ、覗きたくても簡単に覗ける場所ではないがな」

「ほ、ほら、杉並もこう言ってるし……………そんな危ないものを見るような目で見るとよ！」

「……………まあ、板橋のことは置いておくにして……………簡単に覗ける場所じゃないというと、何処なのじゃ？」

「すぐにわかる。では、ついてこい」

嬉しそうにしながら促すと、天井から階段が降りてきた。

「こ、こんなところに階段が……………？」

「そういうことだ。これから面白いところに案内してやろう」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべる杉並君についていき、僕らは外に出た。

一体何処に通じているのかと言うと――

「ん？ この建物って……………」

「まさか、ここは風見学園なのか？」

「ご名答だ」

「うわ、これマジックミラーになってる」

「む、無駄に凝ってますわね」

確かに。まさか学校にたてかけられてる鏡がマジックミラーで、しかもその裏に隠し階段があるなんて普通は思いはしないだろう。

「あれ？ 学校ってことは、シャワーって、学校のを使うってこと？」

ななかちゃんがここまできて思い至ったように言う。

「ま、そういうことだ。運動部が使ってる合宿所のものを利用させて

もらう」

「ああ、そういう」

あそこには洗濯機もあるのでそっちの問題も一緒に解決できるので便利かもしれない。

それから女子たちは合宿所のシャワールームへ行って身体を洗っていく。

僕たち男子一同は外で警戒に当たっている。

「今更だけど、僕たち……すごいことやってるんだよね？」

「まあな。一国の姫を連れ出して逃走するなんて体験、滅多にねえぞ」「だよなく」

僕の言葉に雄二と渉が面白そうに肯定する。

「……………」

「明久、お主……儂らを巻き込んだことを、気にしておるのか？」

……僕って、そんなに顔に出やすいのかな？ それとも、僕の周りにいる奴らが特殊なのか。

「いや、そうじゃないよ。ちよつと申し訳ないとは思うけど、みんなには感謝してるし……。ただ、これからもっと大変なことになっちゃうんじゃないかって思うと……このまま僕の我儘でみんなを振り回していいのかなって」

「はあ……明久よお。あんま俺ら舐めんじゃねえぞ？」

渉がいつになく真剣な顔で僕を見た。

「俺たちはダチがピンチだっていうから助けてんだ。別にお前に振り回されて嫌々付き合ってるじゃねえんだぜ。困ってるダチがいたら助けるのは当たり前だろうが」

「お前の場合、可愛い女の子が……だろ？」

「い、いや……別に、女の子だからって助けるわけじゃ、ないぜ」

いや、いきなり挙動不審になられると色々台無しっていうか。

「と、とにかく……俺たちは俺たちの意思でやってんだ。そこんころ、間違えんじゃねえぞ」

……まあ、そうだよな。ここまでできてみんなは逃げてとか言うのは逆にみんなの信頼を裏切るってことなんだよね。

「じゃあ、とりあえずこれからもよろしくしてもいいかな？」

「たりめえだろ！」

「うむ。ムラサキの転校を必ず阻止してやろうぞ」

「ま、俺はあのパツキン野郎に目にも見せればいいだけだからな」

まだ寒さの残る星空の下で、改めてムラサキさんの転校阻止を決心した僕らだった。

第八十三話

ウー！ ウー！ ウー！

「エエ!? な、何っ!?」

「何の音?」

ムラサキさんを国に帰さないために逃走して2日目の朝、突如^{アラート}警告音のようなものがアジト内に響き渡り、その音でガバツと飛び起きた。

「あ、明久君、これって……?」

「よくわかんないけど、やばそうな雰囲気ではあるね」

現状はよくわからないが、こんな所でこんな大掛かりなものが無意味に鳴り響くとは思えなかった。

僕らは急いで制服姿に着替えて大部屋へと向かった。

そこでは僕らと同じようにこの警告音^{アラート}らしき音で目を覚ましたであろうみんながバタバタと合流してきた。

「おい、杉並！ この音は何なんだ!」

大部屋に来るなり、これを仕掛けた本人だろう杉並君に詰め寄った。

「良くない報せだ。どうやら、侵入者がいるらしい」

杉並君の言葉に驚いたように顔を見合わせた。

「ひよつとして、リオたちか?」

「そう考えるのが妥当だろうな。よもや、こうも易々とここが発見されるとは思わなかったが……。相手にとって不足なし、というわけか……」

「いや、何この状況で楽しそうに言ってるのさ!」

「明久の言うとおりで。バレた以上、ここにいつまでもいるわけにはいかねえだろ」

「無論だ。惜しいが、ここは放棄する他あるまい。各人、最小限必要なものを手に、離脱するぞ」

「ええくっ!? まだ洗濯物乾ききってないのに……シワになっちゃ

う」

「いや、小恋……今はそんなものの心配してる場合じゃないだろ」

「義之の言うとおりね。この際、パンツの1枚や2枚、諦めなさい」

「そ、そんなわけにはいかないでしょお？」

「いつそ目立つところに置いていつちやえば？　そうすれば足止めになるかも」

「いや、んなもんに惑わされるのは——」

雄二が視線を向けた先には……、

「なにっ!?　つ、月島の、ぱぱっ、パンツ？」

「このバカくらいだ」

「んもう、渉くんのエッチー！」

渉の変態っぷりに小恋ちゃん顔が顔を赤くして怒った。

「お前ら、侵入者が来てること忘れてねえか？」

「……急がないと本当にすぐ来ちゃう」

霧島さんの眩きと共に遠くから足音のようなものが近づいてくるのが聞こえてきた。

「い、急いで脱出しましょう。もしかしたら、お兄様の命で既に本国から精鋭隊を招集したのかもしれない！」

精鋭隊つてのはよくわからないが、リオの付き人の2人だけでもかなりの実力者だと言ったのに、この上更に人数を増やされたところに正面から当たるのは自殺行為だろう。

ここは素直に逃走した方が良さそうだ。

「では1分で準備を整えろ。それ以上は、入口が保たん」

「いや、たったの1分かよ!？」

「既にかかなりの距離を詰められているのだ！　悠長にしている余裕はないー!」

杉並君の言葉に全員は慌てながらとにかく手に持てる最低限必要そうなものを確認すると天井からの階段を使う。

『階段で上に逃げるつもりだ！　逃がすな!』

脱出する際、下の方からリオの声が響いた。

「ちっ、踏み込まれたか。予想以上に早いな……」

「……任せろ。ほんの少しだが、時間を稼ぐ」

そう言ったムツツリーニが懐から何かを取り出し、導火線らしい部分に火を点けると、下へ放り投げた。

すると数秒後に眩い光が下から溢れた。

『ぐっ！ 目眩ましか……姑息なことを……！』

どうやら放り投げたのは閃光弾みたいなものらしい。

そういえば、アルミをちよつといじくると閃光弾みたいに使えるつてのを何かで見た気がする。

流石普段から隠密行動をしているムツツリーニ。その手の逃走手段はお手の物だ。

僕らはリオの声を後に、学園の階段へと出た。

「全員、いるか？」

出口に着くと、義之が確認の声をあげる。

「全員、いるようじゃな」

「危機一髪だったぜ……」

渉が安堵したように眩くが、まだ危険は続いている。

「脱出したみたいだけど……多分すぐ追いつくよね」

「ああ……その証拠に」

雄二が出口付近のある方向へ視線を送ると、

『まだそう遠くには逃げてないはずだ。追え！』

もう隠し階段から出てきたのか、リオの声が響いてきた。

「ふあっ!? ど、どうしよう!?!」

「に、逃げなきゃー!」

「どこへ?」

慌てる小恋ちゃんと茜ちゃんの言葉に、杏ちゃんが純粋な疑問を投げた。

確かに、それが一番の問題だ。アジトを抑えられた以上、逃げなきゃいけないけど、計画なしに逃げたところでどこかで数を使った待ち伏せを喰らう可能性だって大きい。

「そう不安そうな顔をするな。俺についてこい」

不敵な笑みを浮かべた杉並君が走り始める。何か策でもあるのだ

ろうか。

不安はあるが、今は杉並君しか頼れそうにないので全員杉並君を追った。

今日も平日ではあるが、今は早朝のため、生徒どころか、職員の間もなかった。

「早朝で助かった。目につくとうるさいことになりかねんしな——」

「って、何で中庭なのさ？ こんな人目につきやすい所、すぐに——」

「慌てるな、吉井よ。確かここに……お、あつた。ここだ」

杉並君が花壇の一面に足を踏み入れたと思えば……中庭の一面が沈み、階段が現れた。

「ええっ!？」

「おお、階段だ」

小恋ちゃんとななちやんが驚きの声を上げた。

「急げ！ 誰かに見られればその時点で終わりだ！」

そんな声には欠片も意に介さず、急かすように手招きしながら杉並君は階段の下へと消えた。

いや、本当にどうやってこんな階段造ったのやら……。

「ここまで来れば、ひとまず安心だろう」

天井から伸びる階段を格納しながら杉並君がのんびりと呟いた。

「ふう……一時はどうなるかと思った」

「ホントホント。いやあ。びびった」

「まさか、あんな所が見つかるなんて思わなかったもんえ」

小恋ちゃんや渉、ななちやんが安堵の声を漏らしながら床に座り込む。

まあ、かなり緊迫した状況だったんだから心身共に疲れきってしまっただろう。

「けど、この場所って……」

「前のアジトと全く同じだよな？」

「ええ。確かに作りは同じだけど、こっちの方が利用頻度が高いみたいだけど」

流石に記憶力のいい杏ちゃんは、この部屋と先程の部屋の微妙な違いがハッキリとわかるようだ。

「まあ、こちらの方が立地がいいからな。非常階段以外にもいくつか便利な場所に出口があるからな」

杉並君の神出鬼没な理由がひとつだけ解明できた気がする瞬間だった。

「大丈夫なのか？ 向こうのアジトは完全に押さえられたみたいだけど？」

義之が心配そうに尋ねる。たしかに、あそこも見つかりづらい場所だったはずなのに、関わらず、簡単に見つけたのだから、ここも短時間で突破されるかもと考えてしまおうだろう。

「なあくに、このタイプの非公式新聞部のアジトは、風見学園の地下を始め、初音島中に全部で52もある。そのうちのひとつを押さえたくらいで、我々非公式新聞部にとっては取るに足らん」

「ご、52!? マジか!」

「そういえば、非公式新聞部のアジトがいくつもあるのは聞いてたが、まさかそんなにあるとは。」

「さて、どうだかな？」

「いや、今自分で言ったよね……」

「ふふふ、諸君らが真の意味で俺たちの同士になる、というのなら詳細を教えてやらんでもない。しかし、いつ敵になるやもしれん男に、手の内は見せられんな」

まあ、義之の傍らには音姫さんがいるしね。

けど、この手の秘密基地が相当数あるのは間違いなさそうだね。

「しかし、便利なのはいいが、こんなもんよく用意できたな」

雄二が部屋の壁を叩きながら感心するように呟いた。

「まあ、一言で言うなら……歴史の積み重ね、とだけ言っておこう」
「ますます謎だ……」

「非公式新聞部、悔りがたしね」

「まあ、便利だからいいんじゃない？ こつちには……色々と道具が揃ってるみたいだし」

早速茜ちゃんが辺りを確認していたようだ。

「どうやら頻繁に使ってるからか、向こうのアジトよりも物が揃ってるようだ。」

「あ、食べ物もあるんだね。レトルトとか、カップ麺とか、インスタント系ばかりだけど」

「まあ、お腹が空いた時には頼れるものだよね」

「それは我らが非公式新聞部の備蓄だ。有料で提供してやる」

「金取るのか？ せこいぞ、杉並」

「我々の資産とて、無尽蔵というわけではない。その食料だって、部員の共同出費によって備蓄しているものだぞ。ただでなんでも済ませうという方がよっぽどせこいぞ、板橋」

「そうそう。ただで寝泊りさせてもらえるだけでも、ありがたいことだしね」

僕らだつてさくらさんの厚意で屋根の下に住まわせてもらってる身なのだから金でなくとも何かしらの返しは常に心がけている。

でも、非公式新聞部がどれだけの組織かは知らないけど、多分名前の通り学園に認められた部活じゃないから部費なんてものはおりないだろうし。かといって、部員からの共同出費だけでこんなアジトをいくつも所有してるなんて、金の集め方がすごいのか、人がかなり多いのか……本当に謎が多いよね。

「そういうえば、杉並君やムツツリー二以外の非公式新聞部の部員って、見たことないんだけど」

「ふふ、この件に関しては俺以外は一切介入してない、という部内での取り決めになってるので、教えるわけにはいかん」

「まさか、敵側についてるなんてことはないよな？」

「それはない。安心しろ」

「どうせ、この騒動が終わったら非公式新聞部の記事にしようとか考えて、どっかに潜伏してるんじゃないのか？」

「ノーコメント」

義之の言葉も知らん顔で躲す杉並君。全く腹が読めない。

「とりあえず、喋るのもいいが……次はもっと手早く脱出できるように荷物の置き場所とかにはきちんときちんと気を使っとけ」

雄二は部屋の隅で荷物の整理を始める。

「まあ、そうだね。向こうのアジトからの脱出はかなり手間取っちゃったもんね」

「次に備えるのは大事だよな」

僕とななかちゃんは共同で使えるようなスペースを取って荷物の整理を始める。

「そうだね。ドタバタしてたから、結構置いてきちゃった物も多いし、ね。小恋ちゃん」

含みのある視線で小恋ちゃんを見ながら茜ちゃんが呟く。

「え？ ふえ？」

「え？ マ、マジで置いてきたのか!？」

小恋ちゃんの反応に何を思ったのか、興奮した渉が問い詰める。

「ふえ!? えっ!? ……わ、渉君が考えてるようなモノは置いてきてないからね! ホントだよ!」

逃げ出す直前にしていた内容を思い出したからか、小恋ちゃんが顔を赤くしながら言い繕う。

呑気だなと若干呆れながら荷物の整理を続けていると――

ウー! ウー! ウー!

再び警告音が室内に鳴り響き、一瞬で全員の会話が停止した。

「なっ!? す、杉並君、まさか……」

「ふむ。そのまさかのような……。立地が良いが、出入り口が多い分、見つかるのも早かったか……」

「いやいやいや、落ち着いてる場合かよ!」

「けど、逃げ込むところは見られてない筈なのに……」

「それだけ向こうが有能揃いだということだ」

向こうは人数も増やしてることも大きいのだろう……仕事早い。

「ふむ……地上への抜け道は封じられたようだな。仕方がない、一旦

中庭に出るぞ」

「ええっ!? また階段登るの!?!」

小恋ちゃんが嫌そうな顔して階段を見つめる。まあ、女子がアレを登り降りするのはかなり重労働だろうしね。

「でも、捕まるわけにはいかないから嫌でも登らないと」

僕らは再び階段を使って中庭へ出た。

「ふう……」

「はあ……はあ……」

「も、もう、だめ……走れないよお」

中庭に出た矢先にまたリオの追手に見つかり、その追手を数十分かけてようやく振り切り、やつとの思いで3つ目のアジトへ逃げ込むことに成功した。

「こ、今度は……大丈夫……かなあ?」

ななかちゃんが息も切れ切れの様子で呟く。

「そうね……一応ここにたどり着くまで、結構入り組んだ地下道を通ってきたから大丈夫だとは思うわ」

杉並君の所有している地下アジトは、地下道で繋がってるものも結構あるらしく、網目状に地下道が張り巡らせてあった。

まさか初音島にこんなものがあるなんて想像もできないだろう。

「俺の知る限り、最も便利で安全な場所を選びはしたが……安心はできんな」

確かに。あの見事な手腕を見た後では、如何に便利な所も心の底から安心はできないね。

「にしても……アイツらすげーなー。こんなにも簡単に見つけ出すな

んて」

「うむ。俺の想定では、もう何日かは潜伏できるはずだったのだがな」
「確かに……1回目はともかく、2回目はいくらなんでも情報が早すぎるな。あんな所を知ってる奴は限られる筈だろ……」

雄二がブツブツと何か言っている。まあ、あの生徒会ですら非公式新聞部のアジトのほとんどを把握していないにも関わらず、リオたちは僅か数日で発見したんだ。

雄二の言うとおり、2回目の方は避難してすぐに見つかったんだ。確かに早すぎる。

「二箇所目のアジトの発見は、こちらとしても予想外だ。少しはゆっくりできるかもと思ったのだが——」

「それは仕方ありませんわ。兄様は優秀ですから」

聞く人によつては身内鼻肩とも取れる発言も、この場においてはみんな納得してしまう。

「ムラサキさんの兄さんを舐めてたってことかな。かなり手勢も連れてきてるし……」

「王族というのも伊達ではないのお」

「こうなったら俺たちも本気でいかねえとな」

しかし、今の僕たちには逃げ以外に何も思い浮かばない。

「……とりあえず、すぐに逃げられるように荷物は一箇所にまとめておいた方がいい」

「ムツツリー二の言うとおりで。それと、余計なものは全部弾いておけ」

「ああ。渉のトランプとかな」

「わかってるよ。流石にあんな目にあっちゃ、持つ気にはなれねえつて。ああ、それと……逃げる時は、俺たち男子だけで荷物を持った方がよくねえ?」

「確かに……僕らはともかく、女の子たちには負担大きいもんね」

「そうだな……女子は必要最低限の荷物だけにしておこう」

僕らは普段から鍛えていたから問題ないけど、こう何度も逃走を繰り返して女子のみんなはかなり疲労が溜まっている。

女子たちの負担はできる限り軽減しておくべきだろう。

「助かるわ。でも、そのまま荷物を持ち逃げしちやダメよ？」

杏ちゃんがからかうような眼差しを渉へ向けると、同様に小恋ちゃんや茜ちゃん、ななかちゃんにムラサキさんまでもが渉へ視線を集中させる。

「だから、なんで俺を見るんだよ！」

「そりゃあ、普段の行動だろ……」

「納得いかねー！」

渉は言うが、誰だつて渉の言動を見ればそう思っちゃうだろう。

「で、杉並。ここのアジトには、何か備品はないのか？」

「そうだな……ここは最後の砦だ。ということ、色々と持ち込んであるが……今、役に立つものがあるかどうかはわからん。とりあえず、水と食料、寝具の類は問題ない、とだけ言っておこう」

最後の砦というだけあつて確かにその手のものは揃っているようだ。

「いつそトラップとか入口に仕込んでみたらどうだ？ 逃げるまでの時間が稼げるんじゃないか？」

「ブービートラップね。作り方なら色々と知ってるわよ」

「いや、杏……どこからそんな知識を？」

「ひ・み・つ」

杏ちゃんの言う秘密というのが、正直怖くて聞けなかった。

「……では、早速取り掛かる」

「了解。いい仕事を期待してるわ」

ムツツリーニと杏ちゃんが組んで作業を始める。この2人に組まれてリオ側の人間たちは無事でいられるだろうか。

まあ、リオの手勢のことを考えると、多少強めのトラップでもそう大事には至らないだろう。

第八十四話

「さて、これからどうするかね……」

「そうだね」

第3のアジトに逃げ込んで数時間が経ち、朝から追いかけられた僕たちはこの日初めてまともな食事をとっていた。

「ここもいつ見つかるのかわからない以上、何か手を打つべきなのじゃろうが……」

「やっぱさ、こっちから討って出るか？ 土屋とかが気配消して押しかければ俺たちだけでもなんとかなるんじゃないのか？」

「ダメだ。あいつの付き人がどれだけの實力を持つてるかが把握できてない以上、下手な行動は却って自殺行為だ」

「なら、夜中に全員で特攻するとか……」

「いくらなんでも——」

無理だろうと続けようとしたのだろうが、その言葉を遮るように声が響く。

「あの方は、そんなに甘い人ではありませんわ」

『——っ!?!』

突然聞こえてきたこの場にいる誰のでもない声にその場の空気が緊張によって固まった。

「この声、まさか……フローラ？」

「姫様」

ムラサキさんの眩きに答えるように、暗がりからひとりの女性が出てきた。

……何故か服を濡らし、ひどくやつれたような雰囲気になって。

「え？ 何で!?! 何も鳴らなかつたよな!?!」

どのアジトでも、侵入者が来れば警報が鳴る筈なのに、それが全く鳴らなかつた事に涉りだけでなく、僕らも驚いた。

「警戒網を突破してくるとは、侮れんな」

「けど、それにしては……」

「フローラ……あなた、濡れてない？」

「え？ ええ……」

「それに、最初に見た時より随分やつれてるような……」

ムラサキさんと小恋ちゃんの言うとおり、フローラさんは服を水で濡らし、最初にあつた時と比べて随分とくたびれてるような感じだ。

「面目ありません。先程、トラップに引っかけまして」

視線を泳がせながらフローラさんは少々恥ずかしそうに告白する。

「トラップって……」

僕は先程トラップを作成していた杏ちゃんとムツツリーニに視線を送る。

「ぶい」

「……完璧とは言えないが、一矢報いた」

「いや、何をしたのさ！」

Vサインを送る杏ちゃんとサムズアップするムツツリーニに思いつきりツツコんだ。

「まさか……あのような原始的なトラップが仕掛けられてとは思わず……油断しました。」

おまけに、あんなおぞましいものまで……」

「トラップの基本は、相手の裏をかくことよ……」

「……アレを見て、平気でいられるものなど、多くはない」

「おみそれしました」

「ムツツリーニ……一体、何を？」

「……肝試しの時の——」

「オーケーわかった理解したもういいよ」

肝試しですぐにわかった。確かにアレを見せられて平気でいられる奴なんていやしない。

フローラさんがやつれてるだけで済んでるのは、リオのもとで精神的にも鍛えられているからその程度ですんでるのだろう。

「で？ 何しに来た？」

雄二が威嚇するような目を向けながら尋ねる。

ついでに視線で何があつても逃げられるよう、常に警戒しておけと

合図を送って。

「エリカさま……」

落ち着いた声でフローラさんがムラサキさんに向けて話しかける。

「リオ様は、本気で皆様を拘束し、エリカ様を……国に連れ帰るつもりでいらつしやいます」

「それは、わかってるわ」

「いいえ。姫様はリオ様の事をわかっておられません。あの方は、とても恐ろしい方なのです」

「フローラ？」

「おい、それはどういう意味だ？」

ムラサキさんと雄二が訝しげに声をあげる。

「リオは、皆様の安全など考えてはおりません！ 相手が姫様であろうと、何をするか——！」

フローラさんの口から強い口調でリオを攻める言葉が漏れ出るといふか、今リオのことを呼び捨てに？

「フローラ」

強いものではないが、フローラさんを諫めるようなムラサキさんの声が小さく響く。

それにより、フローラさんは自分の失言に気づいたのか、すぐに深々とムラサキさんに頭を下げる。

「あ、申し訳ありません、姫様。ですが……私は……そんなリオ様が恐ろしく……また、信用できないのです」

苦いものを吐き出すように、フローラさんは厭悪じみた表情で語る。

「でも、フローラさんはリオの……」

「確かに、私はリオ様の付き人しておりますが、それもクエイシー家の家訓故。私は今でも……姫様の味方です」

言われてみれば、ムラサキさんも彼女の事を実の姉妹みたいだと言っていたな。

「その言葉……信じてもいいんですか？」

フローラさんが僕を一瞥すると、その瞳の中に鋭い何かが見えた気

がしたが、それも一瞬のうちになりを潜め、顔が穏やかなものに戻っていた。

「もちろんです。私は、誰よりも姫様をお慕い申し上げております」「リオの付き人が仲間になってくれるんだったら、すげー心強いじゃん！」

「そうだな……。色々とうごうの動きも知ることができるかもしれないし、逃げる時に手心を加えてもらえるかもしれないな」

渉と杉並君がフローラさんに聞こえるように話し合っていると、

「……姫様のお願いでしたら、喜んで」

すまし顔でそう返した。

「ですが、まずは……。なんとか姫様が、こちらに残れるように私が説得を試みます」

「いえ、フローラに迷惑をかけるつもりはありませんわ。兄様の付き人たるあなたが、兄様に諫言などしたら——」

「構いません。姫様のためでしたら——」

「フローラ……」

確かに、直属の臣下から逆らうような事を言われればどんな仕打ちがくるか。

けど、逆にそれだけ近い関係の人からの諫言は大きな意味を持つとも言える。

「そもそもあの方は、人の上に立つ器ではありません」

「フローラ……そんなことを言うものではありません。兄様は、とても優秀な方です」

「それは私も存じております。あの方は、とても優秀です。恐らく、今の国王以上に賢く強い王となるでしょう」

顔だけでもイケメンなのに、その上頭も良くて運動もすごい。正に非の打ち所がないな。

同じ男なのに、そこまで完璧だと流石に心の広い僕でも嫉妬に駆られてしまうな。

「ですが、あの方は人を統べる者として、最も大切なものを持っていません」

「そうか？ 完璧っぽく見えただけだな」

「渉君から見たら、きつと誰でも完璧っぽく見えちゃうんじゃない？」

「明久からもな」

「うるさいよー！」

「でも、大切なものって？」

小恋ちゃんが尋ねるとフローラさんは目を細めて語りだす。

「リオは、人の心というものを……か論じておられます。いいえ、近いしていないのではないかと感じる時さえあります。常に冷静で利を見て判断をする。けれど、利を取るためなら平気で無情な決断をなすような人間なのです」

「でも、国王って立場なら仕方ないんじゃないのか？ 国のトップが冷静さを欠いたら悲惨だろう？」

義之の言う通り、確かに残忍だと取られることもあるかもしれないが、国の頂にいる人間が頭を働かせなければ国民を守るはずもないのだから、時には非情な判断を下すことも必要なこともあるだろう。「そうだな。それに、為政者たるもの、時には無情な決断を迫られることもあるだろう」

「雄二の卑怯極まりない判断とかね」

「黙れ、捨て駒が」

「確かに、時にはそれも必要でしょう。ですが、人を切り捨てることになんの躊躇も見せないというのは——非常に危険な人物だということですよ」

フローラさんがきつぱりと言い放った。

「つまり、ババア長みたいな奴ってこと？」

「ああ、それは確かに危険だな」

僕と雄二はお互い頷きあった。あれもまた人間を捨てることに躊躇いもない危険な妖怪だからね。

フローラさんの口から聞く限り、かなりの禹行舜趨で国の上に立っているようだ。

「そんな人よりも、私はエリカ様に次の——」

「フローラ！ それ以上、口にするではない！」

強い口調で、ムラサキさんが叱責する。

「姫様が、リオ様を家族として敬う気持ちは存じております。ですが――！」

「私の言うことが聞こえなかったのですか？」

「一国の姫としての威厳を保ちながら、同時に家族に対する愛情も出しながら言葉を紡ぐ。」

「王家に連なる者を、それ以上侮辱してはなりません。それ以上……あなたの口から、兄様を非難する言葉を……聞かせないで」

「姫様……」

そりゃあ、自分の兄が姉も同然の人から非難されるような姿なんて、見たくはないよね。

「わかり………ました。では、姫様………このフローラ、クエイシー家の名にかけて、リオ様を説得してみせます」

「ありがとう、フローラ。でも、あまり無理をするものではないわ」

「お心遣い、感謝いたします」

フローラさんは深々と頭を下げると、くるりと踵を返す。

「ひとつ、質問よろしいかな？」

そこに杉並君が不意に声をかける。

「何か？」

「リオは、この場所の事を、まだ知らないのだな？」

「当然です。知っていれば、すぐにでも追手を差し向けてくるでしょう」

「ふむ、了解した」

杉並君が言うと同時にそれよりも早くフローラさんは部屋を出たと、同時に何かに引っかかったのか、金属がぶつかるような音が聞こえたけど。

「………ブイ」

誇らしげに杏ちゃんがVサインをする。

いや、出ていく時くらい罨を外すか、場所教えてあげなよ。

「でも、これでなんとかなる………のか？」

渉の言葉に、すぐには答えられなかった。

「どうだろうな。簡単に説得に応じてくれるような者とは思えないがね」

まあ、そんな簡単に説得できれば僕らもこんな逃走なんて繰り返したりはしない。

「でも、僕たちよりかはまだ可能性はあるんじゃない？ リオに話を聞いてもらえればもしかしたら」

「本当なら、私が自分で伝えなければいけないのに……」

「この行動だけでもムラサキさんの考えは向こうもわかってはいるだろうし、今はまだこっちから出向く時じゃなし。」

とりあえずは、フローラさんに期待してみよ」

「そうね……」

ムラサキさんの表情は暗いままだ。

まあ、フローラさんがああは言っても、説得に応じてくれる可能性なんてどれほどのものかを

ムラサキさんなら感じ取れるよね。

それからはリオの追手は来なかったため、僕らは束の間かもしれない時間を睡眠で占めることにした。

今日で逃走4日目……。

みんなの顔には疲労が見えていた。そりゃあ、普通は体験することのない逃亡生活を続けているんだ。

昨日は散々追いかけられた上に、ここには簡易的なシャワーと寝具があるとはいえ、十分に疲れを取れるようなものがないのだから、仕方ない。

とはいえ、追手が来れば否応なしに動かなければならないのだから、休める時にはきっちり休み、すぐに動けるようにならなければいけない。

朝食の間も、今それぞれの思い思いで休んでるこの時も、つい追手

を警戒してゆっくりと休むというのは無理な状態だ。

まあ、一部例外はあるんだけどね……。

「……ただいま」

「……戻った」

「ん？ 何処か行つてたの？」

「ええ。ちよつとトラップを仕掛けてみた。今度のは少しばかり……実践的よ」

「じ、実践……？」

「ひとつはロープトラップ。引つかかれば逆さ吊りになるような代物よ」

また古典的なトラップを仕掛けたものだ。

「……それと、軍隊式のトラップも少々織り交ぜてみた」

「だ、大丈夫なのかな？ 主に罠にはまった人」

この2人が考えたトラップとなると、最悪死人が出るのではと思つてしまう。

「ついでに、いくつか嫌がらせに古典的なものもひとつ仕掛けておいたわ」

「古典的？ いや、さつき言つてたロープのも結構古典的だと思うけど——」

「姫様」

僕の声を遮るように、この場にはいない人の声が入ってきた。

「……フローラね。どうしました？」

ムラサキさんが声をかけると、扉からフローラさんがゆっくりと姿を現す。

「リオ様のことで、姫様のお耳にいれておかねばならないことがあります」

今回も警報らしい警報は鳴らなかつたね。ただし——

『『………』』

全員の視線がフローラさんの頭部へと向けられている。

「何か？」

「ああ、えつと……」

「何ていうか……」

何故かフローラさんの頭の上に、黒板消しが乗っかっていた。

多分、あれが杏ちゃんの言ってた古典的なトラップだろう。確かにあれも十分古典的だ。

「……………」

「そ、それで……兄様は一体何を？」

ムラサキさんも頭部の黒板消しは気になるも、見なかった事にして話の続きを促す。

「はい。姫様には残念なお話なのですが……今、姫様が使っておられる、この隠蔽型地下建造物ですが——」

「ふん、地下アジトと呼んでほしいものだな」

「もしくは秘密基地、な」

「お前らは黙ってるよ」

「——その全ての位置を、リオ様がおさえました」

杉並君と渉の言葉を無視しとフローラさんがとんでもないことを口にした。

「は？ 全て……？」

義之も、フローラさんの言葉に信じられないような顔をした。

確かにかなり早い段階で前回と前々回使ったアジトをおさえられたけど、この短期間にその全てをおさえられたのか？

確か、杉並君が言うには52はあつたって聞いた気がしたけど……。

「ひよつとして、ここも……？」

「はい。ここを含めて、全てです」

「ほほう。よもや、全てのアジトの場所をおさえるとはな……」

流石の杉並君も、驚きに目を見張っていた。

「お、おい、じゃ、じゃあ……」

「逃げないとマズイ……ってことだな」

雄二も冷静に言うが、内心どう行動を取ればいいのかまとまりきっていないのだろう。

あちこちに目を泳がせ、必死に何かを考えてるような顔になって

る。

「つて、洒落にならねーぞ、それ！ 早く逃げる準備しねえと。いや、すぐにでも逃げよう！」

「落ち着いてください」

渉が慌てているところにフローラさんが冷静に口を入れる。

「リオ様は、地下建造物の位置を把握しただけにすぎません。皆様の逃げ場をなくすために、一斉に占拠するつもりではありますが、今はまだ体勢を整えている状態です」

「じゃあ、今のところは踏み込んでほくないってこと？」

「それに、全部の地下室のうち、どの地下室に私たちがいるか……とかはわかってないってことよね？」

「そうね。彼女は全部のアジトをおさえたと言っただけ。私たちの位置を特定したとは言っていないわ」

「あ、そういうえば……」

そういうえばそうだったね。

「はい、そうなります。このタイプの地下建造物に潜伏してることはわかってても、そのどれにいるかまではまだ……」

「作戦開始時間は決まってるのか？」

雄二がフローラさんに尋ねる。

「作戦の開始時間は、13:00。ひとさんまるまる 皆様たちは、それまでに安全な場所

にお逃げください」

「安全な場所と言われても……」

「アジトの全てを抑えられておる以上、もう安全な場所など、ないのじゃろうっ……」

「ここ以外に安全な場所って……」

みんな必死に頭を捻るが、それらしい場所は思いつかなかったようだ。

「私からお伝えできるのは……ここまでです」

役目を終えたとばかりにフローラさんは深々と頭を下げる。

その拍子に、彼女の頭の上に乗っかっていた黒板消しがずり落ちた。

「「あ……」」

「……では、姫様。ご武運をお祈りします」

何事もなかったかのようにフローラさんは踵を返した。

「あ、ありがとう、フローラ。働きに感謝します」

ムラサキさんも、ここにいるみんなも何も見なかったことにしてフローラさんを見送る。

「では、失礼します」

フローラさんが出ていってから、室内はしばし沈黙した。

「……しかし、安全な場所ねえ」

義之がどうしたものかと口を開いた。

「ぶっちゃけ、俺たちが逃げ込めるような場所、残ってるのか？」

渉が疑問を投げてからみんなも考えるが、首を捻るばかりで中々思い浮かばないようだ。

地下アジトでダメとなると、リオを追い返すどころかまともな逃走だってかなわない。

「いや、もうひとつ……もうひとつだけ、心当たりはある。确实ではないが……ほかに手はない、か」

杉並君の言葉に全員が視線を集中させる。

「じゃあ……」

「ああ。早速、撤収準備を始めろぞ。今度の場所は期待できないからな。必要なものは、忘れるなよ」

杉並君の号令に従い、自分たちが使っていた小部屋で荷物をまとめていく。

杉並君の言った場所がどのようなものか、そしてリオに見つからない場所なのか不安になりながらついていく。

第八十五話

「よし、上がってきていいぞ」

地下アジトの出入り口のほとんどを失い、唯一の脱出口たる学園内へ続く階段を使い、ようやく外へ出られた。

「……って、ここ焼却炉の裏じゃねえか」

あ、何か見覚えあると思ったら焼却炉だったのね。

「で、あの王様気取りは？」

「……探知範囲内に姿はない。今のところは大丈夫だ」

索敵に優れたムツツリーニが周囲を見回しながら伝える。

とりあえず人の気配がないことを確認した僕らは残ったメンバーを地上へと導く。

「よし、全員上がったな。では、見つからないように気をつけろよ」

杉並君を頼りに、僕らは周囲を警戒しながらゆっくりと歩き出した。

「隠れるところは、かなり離れてるの？」

杏ちゃんが杉並君に問う。あまり離れていては道中で見つかりやすくなってしまう、たどり着く前に捕獲される恐れも出てくる。

「そう遠いところではないが、下手に見つかると色々厄介だな……」

「まあ、また逃げ回るのは勘弁だもんな」

「いや、そうじゃないだろう」

「ん？ どゆこと？」

「見つからずにいれば、向こうは俺たちがまだ地下アジトに潜伏しているって思うだろ？ そう思わせた方が時間が稼げるだろう」

渉の間違った理解に義之が訂正を入れる。

「そういうことだ」

「あ、ああ……そういうことね。最初からわかってたけど……」

いや、絶対嘘だよ。僕でもすぐにわかるよ、こんなの。

それからは全員、慣れない警戒態勢をとりながら歩を進めていく。

道中、見張りなどに見つかつたらどうなるかと緊張しっぱなしだったが、リオの配下の目が皆地下アジトの方へと向いているせいか、

こつちではそれらしい者たちに遭遇することはなかった。

更に何十分か歩き続けると、見慣れない森の中へと足を入れ始める。

「なあ、杉並……本当に大丈夫なのかよ？」

それなりに入り組んだ密林の下草をかき分けながら中腰でこつそりと進んでいく。

「ここ、何処なんだろうね？」

僕の隣でななちやんが不安そうに聞いてくる。

「うくん……普段人が通ってないからか、舗装もされてないけど……」
学園の裏にまさかこんな密林があったなんて思わなかった。
慣れない人がこんなところに入れば遭難してしまいそうだ。

「う……なんか怖いよお……へ、変な生き物とか、お化けとか出ないよね？」

「つ、月島さん、へ、変なこと言わないでください」

「だ、だってえ……なんかその辺の暗がり……」

「や、やめなさい！」

小恋ちゃんはなんとなく予想してたけど、ムラサキさんもホラー系は得意じゃないようだ。

というか、まだ昼間なんだからそんなの出ないと思うけど。それに、怖いなら想像しなければいいのに。

「あまり声を出すな。もうすぐ目的の場所だ」

小恋ちゃんとムラサキさんを諫めると、杉並君の宣言通り、ようやく密林を抜けた。

「……何だ(´▽`)？」

密林を抜けたと思ったら今度はこれまたそれらしい洞穴が佇まんでいた。

断崖にぽつかりと空いたどうけるに、嚴重に築かれたバリケード、更に侵入禁止の立札まであった。

「……やっぱり(´▽`)だったのか」

「ん？ 義之、(´▽`)知ってるの？」

「ああ……(´▽`)、天枷が眠ってた場所だよ」

「ええ!？」

なんとビックリ、衝撃の事実。まさか天枷さんがこんなミステリアスな所で眠ってたなんて。

義之の言葉に、声には出てないものの、驚いた者が大半いた。

「ふふ……隠れるにはうってつけだろう」

杉並君が不敵な笑みを浮かべながら中へと入っていく。バリケードはもちろん、ペンチなどで切断した。

ていうか、こんな簡単に外れちゃバリケードの意味ないじゃん。もう少しバリケードにも気をつかいなよ、天枷研究所。

「で、ホントに大丈夫なのか？」

「そうだな……入口のバリケードが壊されてなかったわけだし」

「あの日以来、誰もこの場所に足を踏み入れてない可能性が高いな」

あの日は、天枷さんが目を覚ました時なんだろう。それからバリケードに何の変化がなかったのだとすれば、まだリオはこっちに目をつけてないということになる。

「では、行くぞ」

杉並君は何処から取り出していたのか、懐中電灯を手にし、明かりを灯した。

その明かりを頼りに進むこと数分……大体20m四方の広い空間にたどり着いた。

そこには明らかに人工的な鉄の壁に高めの天井、その中央にはカプセルのようなものが置いてあり、その周囲にも数多い機械とケーブルが設置されていた。

「ふむ……ここも変わっていないようだな」

「で、これが……?」

「天枷が眠ってたベッドだ」

「へえ、これが……」

みんな天枷さんが眠ってた場所が気になるのか、カプセルを触ったりしていた。

「ああ、下手に機械は弄るなよ。後々面倒になりそうだから」

「以前はお前が天枷の眠りを妨げたのだからな」

「あれも元はと言えばお前の所為だろう！」

ああ、そういうえばクリパよりちよつと前の昼休みに義之が顔を腫らして帰ってきたことがあったな。

あれ、その時にできたやつだったんだ。

「なんか……今までいたところと、似てるね」

小恋ちゃんに言われてなんとなく納得した。

よく見れば今までの地下アジトとこの洞穴のつくりが似通ってる気がする。

「とりあえず、ここなら……安全、かな？」

「まだリオたちに目をつけられてはないと思うけど、改めて探しだされたら厳しいかもな」

「だが、全てのアジトを制圧し、内部の調査を終えるには……それなりの時間を要するはずだ」

「んじゃ、それまではひとまず安全ってとこか？」

「アジトに俺らがない……と確信するまではな」

「それってどれくらいなの？」

約50はあるアジトなんだ。いくらなんでも1日2日で僕らの存在を確認できるとは思えないけど。

「そうだな、恐らく……日没までだな」

「……やっぱり、その程度しか稼げねえか」

杉並君の言葉に、雄二は落胆したように呟き、頭を押さえる。

介帯のものでも贅沢は言えないと思っただけど、本格的にここが最後の砦となったわけか。

「……時間の問題ってわけね」

「だが、時間稼ぎにはなる。その間に対策を練らないといけないがな」

「打開策ねえ……」

それから時間をかけて全員で意見を出し合ったりするが、現状を開けるようなアイディアは結局出なかった。

「……味気ねえな」

渉が不満そうに呟く。

現在、僕らは食事をしていた。ただし、ほとんど手を加えていない缶詰やレトルトで用意されたものだ。

ここには今までのアジトのようにガスも調理器具もないため、これしか用意できなかった。

一応、水周りがあるのは幸いだったが、それもそんなにもたないだろう。

「これから……どうしようか？」

小恋ちゃんがため息混じりに呟く。

「多分、俺たちが地下アジトにいないというのは、もうリオの耳に入ってると思う」

「ここが見つかるのも時間の問題だよなあ」

義之と渉が乾パンや冷えたおかずを口にしながら言う。

「やっぱり、見つかったっちゃうのかな？」

「……恐らくね」

「兄様なら、きつと見つけ出すでしょうね。もしかしたら……本国から配下を呼び寄せていてもおかしくないわ」

ムラサキさんの言葉に女子たちはより不安な空気が強くなった。

「仮に、あいつが配下を呼んだとして……どれだけの時間が必要になる？」

「そうね……フネの状態にもよるけど……無理をすれば2・3日つてどこかしら」

「船？ 飛行機で来ればヨーロッパなら半日で着くだろう？」

「え？」

ムラサキさんの言葉のおかしな部分に渉が指摘するとムラサキさんはキョトンとした表情を浮かべた。

「……あ、えと、そ、そうですね。飛行機でしたらすぐですわ」

「まあ、あいつがどれだけの権力を持つてるか知らねえし、俺たち相手

にどれだけの兵力を使うかもわからねえが、その準備も含めて……つてなところか」

「準備か……それもそーだな」

「ふむ。そうなると、本国から十分に人員と装備をかき集めてる可能性が高いな」

「おいおい、マジかよ。学生相手に」

「少なくとも交代で見張りはつけるべきじゃろうな」

「寝ている間に襲われたら終わりだもんね」

「寝込みを襲うなんて……小恋ちゃんつてば、えっち……」
「え!？」

小恋ちゃんの言葉をそっち方向に受け取ったのか、小恋ちゃんがキョトンとする。

「流石小恋……こんな非常時でもえっちな発想を忘れないなんて、脱帽するわ」

「やっぱりすごいよね、小恋は」

「何でえ!?! 月島、何か変な事言った!?!」

「変じゃないよ。小恋ちゃんの言う通り、危険だよね。ここは個室もないみたいだし……注意しなくちゃ」

「ええ、飢えた狼6人程いるんだから」

冗談めかして言ってるが、杏ちゃんと茜ちゃんの視線はただひとりに集中していた。

「え、どういう……つて、ああ」

小恋ちゃんも時間をおいて2人の言葉の意味理解したのか、同じ人物に視線を向ける。

「いや、何で俺を見るんだよ!?! そんな目で見ないでくれる!?!」

「そんな目つて?」

視線を向けられた渉にななかちゃんがいたずらっぽい笑みで聞く。

「その可哀想な奴を見る目だよ!」

「どちらかと言えば、変質者を見るそれだな」

「尚悪いわ!」

「だが、事実だしな……」

「義之、お前までもか！」

渉が膝を着いて叫んだ。まあ、普段の行動だね。

「ていうか、何で俺ばっかなんだよ！ 義之や杉並……それに明久や坂本に土屋はどうなるんだよ！」

「何で俺まで入れるんだよ……」

義之が不満そうに言う。

「義之は……まあ、大丈夫でしょ。どちらかと言えば、襲われる側？」

「何でそう言いながらこっちを見るのお!？」

ななかちゃんに意味深な視線を向けられ、小恋ちゃんが後ずさりする。

「明久や坂本には、相手がいるしね」

「え!?! 雪村さん!?!」

今度は自分に矛先が向けられ、ななかちゃんが顔を赤くしながら驚く。

「ちよつと待て！ 俺にはそんな相手はいねえぞ！」

「……雄二、私はいつでも歓迎」

「お前はもう黙ってる！」

「というか……なにゆえ、俺はカウントされんのじゃ？ いや、変質者扱いもごめんなのじゃが……」

「……ドンマイ」

何故か混沌としてきたこの場に、笑いがこみ上げてきた。

「ぶっ！ あっはははははは!!」

僕が堪えきれずに笑いだすと、それが伝染したのか、その場にいたみんなも笑い出す。

だが、それも長く続かず、徐々にトーンが下がっていった。

「はあ……」

笑いが止まり、ふいに誰かがもらったため息を最後にこの場が静寂に包まれる。

さつきは笑ってみたが、おもしろそうにしたって楽観できるわけじゃなかった。

既に逃げ場も隠れられる場所もなく、逃げ続けることも困難な上、

打開策もなし。ただいたずらに時が流れるだけ。

まだ時間を見たわけではないが、外はもう既に日没になってるかもしれない。

リオがここにたどり着くまであとどれくらいなのか……そればかりが頭に浮かんでしまう。

「とにかく、見張りは儂ら男子でするとして……ローテはどう組むかの？」

重くなった空気を払拭するためか、秀吉が声のトーンを上げて言う。

「そうだな。最初は俺がやろう」

秀吉の意図に気づいてるのかどうか、杉並君がいつもと変わらない様子で立候補する。

「あ、ズルいぞ！俺だって最初がいい！」

「お前は後でゆっくり寝たいからだろ」

「お前だってそうだろうが！ちやっかり自分が行こうとしやがって！」

「もう公平にじゃんけんで決めたら？」

このままじゃ埒があかなそうなので、横槍を入れさせてもらう。

「じゃあ！だったら義之もだ、じゃんけんじゃんけん！」

「へいへい……」

渉の空元気な声に面倒臭そうな顔で義之も付き合う。

まあ、下手に気落ちするよりはよっぽどマシかな。

僕らは腰を上げ、じゃんけんの態勢に入る。いざ、自分の手を出そうと振りかぶった時だった。

「見張りには及びません」

「！！！！」

大きな洞穴に響く声。影からゆっくりと歩み出てくる物腰のやわらかそうな雰囲気醸し出すシルエツト。

「姫様」

「フ、フローラ……どうやってここが？」

「リオさまを甘く見てはいけません。ここも……決して安全ではあり

ません」

フローラさんがここを見つけてやってきた以上、リオもすぐにこの事を知ってしまうだろう。

「意外と早かったな」

諦めたように杉並君が呟く。かくいう僕も、この場のみんなも同じなんだろう。

「だが、見張りがいらなかったのはどういうことだ？　もう逃げるなとでも言うのか？」

雄二が睨みつけるようにフローラさんに問う。

フローラさんは雄二を一瞥して、すぐに視線をムラサキさんに移す。

「姫様……今夜は私が時間を稼ぎます。けれど、それでも保って早朝まででしょう。明るくなる前に、ここを脱出してください」

「そう……すまないわね、フローラ。あなたに迷惑をかけてしまった……」

「構いません。姫様のためですから」

ムラサキさんの前に跪き、莞爾としながら深々と頭を下げるフローラさん。

「フローラ……あなたには、本当に感謝してるわ」

ムラサキさんはどうしていいかわからなかったんだろう。だが、それでも労いの言葉には一生懸命さが籠っていた。

「リオはたくさんのお報員を本国から呼び寄せたそうです。くれぐれもお気をつけてください」

「わかったわ」

「では——」

「あ、待ってください。フローラさん……その、説得は……どうになりました？」

もうわかっているはずなのに、それでも聞かすにはいられなかった。

「……申し訳ありません。リオ様の考えを変えるには至らず——」

「いいのよ。兄様が簡単に考えを変えないことくらい……私にもわ

かかっていましたわ」

「お力になれず……申し訳ございません」

フローラさんは再び深々と、頭を下げる。

「時間を稼いでくれただけでも、十分ですよ」

「……姫様のためですから」

フローラさんは影の中へと消えていき、再び重い空気が場を支配した。

「……もう、後がないね」

「ななかちゃんが呟く。」

「ここが最後の砦だもんな……打てる手は全部打つとくか？」

「ふむ……立てこもるにせよ、逃げるにせよ……計画がなければ動けんな」

「でも、もう隠れるとこなんてねえんだろ？」

「正直、地下アジト以上に潜伏に向いた場所は他にはないな」

杉並君がお手上げと言わんばかりに肩をすくめる。

「本島に逃げるって手は？」

「確かに搜索範囲が一気に広がる分、逃げやすくもなるだろうが……」

「ツテがない状態で行っても逆に俺たちが行動を取れなくなるだろう」

「ていうか……こんだけ僕たちを追い込めるなら、既に初音島周囲に警戒網張つてもおかしくないんじゃない？」

短時間で僕らの場所を割り出した手腕なんだ。それくらいしたつておかしくない。

「……やっぱ無理か」

「無理ね。現状では、逃走、潜伏の類の案は無視した方がいい」

「それはわかってるんだけどな……」

どうしたものか。逃走関連の方法を取れないとなると……交渉か、降伏。

降伏なんて絶対ダメだ。そもそもムラサキさんにここに残つてもらいたいがために逃走なんてしたんだ。

降伏なんてして諦めたら……僕はなんて嘘つきなんだよ。

だが……ここでいたずらに時間を費やしてもいい考えが浮かぶわけでもなかった。

「……みなさん、いいでしょうか？」

「お？ ムラサキ、何かいいアイディア出たのか？」

「……いいえ。でも、最良の方法だわ」

「最良の方法かあ……できれば聞きたいかな？ ……ただし、ムラサキさんがひとりりでリオの前に出るってこと以外なら」

「……………」

僕が先手をかけてみると、途端にムラサキさんは言葉を失った。

「やっぱりなんだ……」

「まさか、明久がそこまで頭を使——」

「霧島さん、しばらく端で雄二といちゃこらしてて」

「……雄二」

「ちよつと待て！ 誰がいちゃこら——」

「では、ごゆつくり」

「ごゆつくりじゃねえ！」

さて、話の腰をおる男も排除して、僕はムラサキさんに向き直って、「そんな提案を、僕たちが許すと思ってるの？」

「で、でも……これ以上みなさんに迷惑をかけられないわ」

これは退路がなくなつたからやけくそになつたとかいうわけじゃなくて、ムラサキさんなりに一生懸命考えて出した結論なのだろう。

僕らなんかとは違い、頭もいいし、王族としての考え方も持っている彼女の考え方は間違つてはないのかもしれない。

「だから……私が兄様のもとに行くわ。素直に従えば、兄様も手荒なことはしないと——いいえ、手荒なことは、私が絶対にさせません」

それに、僕たちの身を案じてこんなことを言い出したのだろう。

だからといって、そんな危殆を許すわけにもいかない。

「言つたよね？ 僕は後悔したくないから、君を助けるためにここにいる。みんなだつて」

自分の意思で、大切な友達の、ムラサキさんを助けたいから。だから、迷惑だかどうだとか考えなくていいんだよ」

「そうだけ。お前なんかよりこいつに巻き込まれるというのがよっぽど迷惑だぜ」

「あ、雄二。もう戻ってきたんだ……もうちよつとゆっくりしてもよかったのに」

「明久……テメエ、後で覚えてろよ」

さて、雄二は置いといてこの場にいる全員を見回す。

全員僕が何を言いたいのかがわかったのか、全員頷いた。そして、ムラサキさんに手を差し伸べる。

みんなムラサキさんを助けたいがためにここにいるんだ。決して迷惑などではないと……そう語るかのように。

「……………」

「それに、偉そうなこと言ってたけど……俺たち、まだ何もしてないよな」

「そうだよ。ただ逃げ回っていたただけだもんね」

「後手に回りすぎていたわね」

「私たちの——ムラサキさんの気持ち、ムラサキさんのお兄さんになんと聞いてもらわなきゃ」

「うん。ムラサキさんが残りたいっていうなら、それをちゃんと伝えなきゃ」

「そうだな。ムラサキの兄貴に対して、ちゃんと意思を見せてやらないうとな」

「それが例え無理やりになでも……か？」

「当然だろ？」

「……うん。そうしなきゃ……自分の気持ちなんて、相手には伝わらない」

「俺はとにかく、あの野郎に目にももの見せてやりてえだけだからな」

「お主もいい加減に素直になつたらどうじゃ？」

「……丸分かり」

やっぱりみんな、考えることは同じか。

後はどうやってリオにムラサキさんの意思を伝えられるかってことだが。

交渉しようにも、姿を見せた途端に捕獲行動に出かねないし、ただ話しかけるだけじゃムラサキさんはともかく、僕らの言葉に耳を傾けてくれるかどうかもわからないし。

降伏は論外、交渉もダメそうだとすれば……残る道はただひとつだ。

「……こうなったらさ、一丁派手にぶちかましてみる？」

僕がそう言い出すと、全員の視線が僕の方に向いた。

「どうせここで考えても何も浮かばないなら、いつそ何も考えずに突っ込んで、それがダメそうならリオに飛び込みながらも考えて、とにかくドカンと一発って感じで」

「……なんともおめでたい頭だな」

雄二があきれ果てたほうに僕を見る。

「……だが、それがいいのかもな」

雄二がふつと笑みを浮かべる。

「そうじゃの。どうせ退路がないことに変わりはないからの」

「……このくらい、文月学園でも当たり前だった」

「やっぱ、そうくるよな」

「うっひょく。そう言ってくれるのをまってたぜ、明久ちゃん」

「ふっ。やはり吉井はそうでなくてはな！」

「そうだね！ じゃあ、一丁暴れていきますか！」

「そうね。座して待つのは趣味じゃないわ」

「できることは全部しておかないと、絶対後で後悔するもんね」

「月島も頑張るよ！ せっかくここまで来たんだもん。最後まで一緒だよ、ね？」

「んじやま、全員一致ってことでいいな？」

渉の言葉に、全員が頷いた。

「みんな……」

ムラサキさんの瞳が透明な何かでゆらめいた。

「バカね……私に付き合っても、何もいいことなんて……ないのに……」

「そんなこと言わないですよ。みんな仲間なんだし……それに、いいこ

となんて……ムラサキさんの意思を伝えた後でいくらでもやってくるって！」

「全く……本当に、バカなんだから……」

「心外だな。バカはこいつひとりで十分だろ」

「ハッハッハ。何を言うのさ……バカは雄二だけでしょ」

「……………」

「……………」

「やるかコリアー！」

「お主らはこんな時くらい、仲良くできんのか……」

「みなさん……本当に……ありがとう」

ムラサキさんの瞳から、透明な雫がこぼれ落ちる。

誰かを想い、そして嬉しさから溢れ出したそれはとても綺麗だと思っただ。

そんなムラサキさんをあやすようにななかちゃん、小恋ちゃん、杏ちゃん、茜ちゃん、霧島さんがムラサキさんの肩を抱いた。

ここは女の子同士で解決してもらおうとしますか。

「さて、みんな。地獄に落ちる覚悟はできてる？」

「けっ。冗談言うんじゃないぞ……地獄にはお前だけ行つとけ」

「今更そんなものに怖じる儂らではないぞい」

「……地獄を見るのは奴ら」

「俺たちの本気、見せてやろうじゃねえか」

「よっしゃ、一丁派手にぶちかましてやろうじゃねえか」

「では、今日はもう全員休んでおけ。明日は朝から動くぞ」

「おう！」

僕は改めて気合を入れながら頷いた。

もう後戻りはできないんだ。だから僕はただとことん進むだけだ。

ここからが本当の闘いだ。絶対にリオにムラサキさんの意思をわからせて見せる。

第八十六話

時刻は夜明け前……。

まだ日も登らない時間から僕らは風見学園の屋上を陣取っていた。僕らはもう逃げる算段なんてない。故に僕らは見つかりやすいここに立っていた。

ここならリオたちはすぐに見つけてくれるだろう。僕らを見つかりオがどんな態度を取るにせよ、まずはムラサキさんの意思を彼に伝えなければいけない。

決意を心に秘めて佇む仲間たちとその後ろでバタバタと旗がはためく。

「……つて、気になったんだけど杉並君。この旗つて、一体？」

「ふふっ、こんな日が来るかと思つてな。用意しておいたのだ」

しかし、この無駄に装飾の施されたこれなら、遠くからでも一目で僕らがここにいます

ことを知らせてくれるだろう。

「あなた、バカですわね？」

「え？ いいじゃん、格好よくて」

「更にバカがもうひとり」

渉の発言に、杏ちゃんが辛辣な言葉を投げた。

「そう褒めるな。一応、我々の意思を示すためには、これくらい派手な方がわかりやすくいいだろう？ 集え、精鋭たち！ 希望の旗印の下へ！ ……てな」

杉並君が得意げに旗を掲げた。

まあ、確かに僕らに逃走する手段がもうないからいつそ特攻しよう
とアイディアを出したのは僕だし。

だからこうしてわざわざ目立つものを用意してくれたのはありがたい。

まあ、『杉並見参！』なんてのがなければ完璧なんだけど。

「ムラサキさんのお兄さん……来るかな？」

「来てくれなきゃ、ここに来た意味がないもんね」

小恋ちゃんやななちゃんの不安心もつともだ。もしリオが多数のてしたを連れて強硬手段に出たらこの作戦も台無しになってしまう。

「まあ、出てこなかったら、引きずり出すまでだ」

雄二がなんとも物騒なことを言ってくれる。

「ま、そういうことよ」

僕たちはそのままくるべき時を待ち続けた。

時は日の出……。同時に目的の人物たちが現れた。

「随分、手間をかけさせてくれるな」

屋上に来たりオはジェイミーさんとフローラさん、そして何人かの男たちを連れてきた。

「大人しく私と共に帰れ……と言ったところで、従うつもりはないのだな？」

「申し訳ありません、兄様。その命令には……従えません」

「我が妹ながら強情だな。いや、我が妹ゆえ……と言った方がいいのかな」

「そうですね。きっと、兄様に似たのですわ」

2人の間で嵐が巻き怒っているように見える。一食触発、ちよつとした刺激で爆発してしまいそうだ。

「そもそも何故なのです。何故急に帰国しろなどと——」

「伝えたはずだ。この地はお前には相応しくないよ」

「それを決めるのは……見極めるのは私です。そして私は、ここは素晴らしい場所だと、そう感じておりますわ」

「ふん……愚かな」

相変わらず、リオは見下すかのように視線をムラサキさんに向け

る。

「お前の判断など、あてにしてないし、求めてもない。お前は私の言葉に従っていればいいのだ」

「ふざけんな……」

リオのふざけた物言いについ口を挟んでしまった。

「無関係の者が口を挟んでほしくないものだな」

「もう無関係なんかじゃない。ムラサキさんは……僕たちにとって、大事な仲間なんだ！お前の腐った価値観でムラサキさんの行動をアレコレ決めつけんな！」

「そうそう……ムラサキは俺たちの仲間だ。お前の勝手にはさせねえっての」

「無理やり連れてくつていうんなら、俺たちが相手だ」

「そうか。手荒な真似はしたくなかったのだがな——」

リオの言葉に出来るように、後ろに控えていたフローラさんやジェイミーさん、そして男たちが足を踏み出す。

「よく言うぜ。最初からそういう心算だったんだろうに」

「言つとくけど、僕たちだってそう易々とムラサキさんを渡すつもりはないよ」

「……………」

しばらく睨み合いが続くと、不意にリオがフツと笑った。

「なるほどな……」

それから、リオの口から信じられない言葉が吐き出された。

「ひとつ、勝負^{ゲーム}をしてみないか？」

リオの言葉に、全員が『ゲーム？』と、言いたげな表情を浮かべながら顔を合わせる。

「そうだ、ゲームだ。このまま無理やりエリカを連れ帰ったところで、君たちは納得できまい？」

「当たり前だ」

ムラサキさんの実家が何処にあるのかは知らないが、絶対に見つけ出して連れ出すつもりだ。

「私だって、納得できませんわ」

「だから君たちにチャンスをあげよう。我々に勝つチャンスをね」
「それで互いに納得できるんなら願ったりだが……ルールはどう決める？」

「ここで雄二が前に出てリオに問う。」

「この手の交渉は試召戦争で場数を踏んできた雄二に任せの方がいいだろう。」

「そうだな……これからしばしの猶予を与える。その間にこの学園のどこにでも、トラップを仕掛けるなり、エリカを匿うなり、好きにすればいい」

「準備期間を与えてくれるため、随分と余裕じゃねえか」

「渉が気に入らないといった風に言う。」

「これくらいでなければフェアとは言えまい？」

「で、いざ勝負が始まった後で、勝利条件はどうする？」

「日没まで我々の攻撃を退くことができ、エリカを守り通せたら君たちの勝ち……それでどうだ？」

「……いいだろう。その条件で呑もう」

「君たちが勝ったら、エリカの好きにさせよう。ここに残り、学びたいというのなら……好きなだけ滞在できるよう手配しよう。だが……君たちが負けた時は、覚悟してもらおうぞ」

「威圧的な視線を向けてくる。その手のものに耐性のない小恋ちゃんには小さな悲鳴を漏らした。」

「……わかった」

「雄二が勝負に乗った。どの道、僕らにはこれ以上逃走する手段も口々に話し合うこともできないんだ。」

「だったら、この勝負に勝ってしのごの言わせないようにするしかない。」

「こちらとしても、君たちには我々の力というものを知ってもらった方が、素直にエリカを渡してもらえるだろうからね」

「そんな簡単に行くとは思わないでよね」

「では、学園関係者には私から話を通しておこう。無関係な者を巻き込みたくないからね」

事を進めてくれるのはありがたいけど、誰も礼なんて言わなかった。

「では、ゲームの開始時刻は12:00——学園のチャイムが合図でよろしいですね?」

「オッケーだ」

「では……精々君たちの本気とやらを見せてもらおう」

リオは余裕の笑みを崩さず、部下共々屋上を後にした。

「……これで、よかったの?」

ムラサキさんがすまなそうに聞いてきた。

「どうだろうか? だけど、あそこでリオがゲームのことを提案してくれなかったらどうなったか……でも、元々無理やりにも君を連れ戻すつもりだったんだから、渡りに船だね」

「そうそう。結局のところ、勝てばいいんでしょ勝てば!」

「お前、そう簡単にな……」

「妙な展開だが、少なくとも明確な勝利条件が示された分、希望はあるだろう」

見通しもなくただ逃げ続けたり、こちらの意見に耳を傾けない相手をどうこう説得するよりかは確実性がある。

「さて、そうとなれば早速準備に取り掛かろうではないか」

杉並君が不敵な笑みを浮かべる。

ヘッドクォーター

「司令部はここ、屋上でいいな?」

「そうね。出入り口はひとつだけだから護るのに向いているわ」

「バリエードにトラップ……後、何か武器がいるな」

「……スタンガンは常備」

「だから、何で霧島さんはそんな物騒なものを持ってるんだ?」

「……俺も持つてる」

「土屋もか!?!」

「もちろん、俺たちもな」

「文月学園で持ってたものがまだ残ってたから」

「何でお前らは学生の身でそんなもんを持ってんだ……」

義之が呆れた表情で見る。

「まあ、今は使えるものがあるに越したことはないじゃん！ 他には……運動部の何処かから適当なものも拝借して、バリケードは……椅子だの机だの、使えそうなもんはいっぱいあるぜ」

「道具が足りなければ、地下アジトから持つてくるがいい。まあ、残つてればの話だが」

まあ、ほとんどがリオにおさえられてるが、武器やその他に使えるような道具類の全部を

おさえられるとは思えないけどね。

「トラップなら任せて。本格的なものからえげつないものまで、なんでも用意してあげるから」

サデイスティックな笑みを浮かべる杏ちゃんがとても怖い。

「では、トラップの案は雪村に任せるにして——板橋、坂本、霧島は雪村のサブについてやれ。力仕事と道具の調達、トラップの配置云々は任せた」

「OK！ 学園中から道具をかき集めてきてやるよ」

「精々楽しみにしてろ」

雄二が嫌な笑みを浮かべている。こうなった時の雄二は本当に外道なことをする。

「じゃあ、残りはバリケード作りか」

「……俺は通信機器の設置と監視カメラの設置を」

「オツケー。ムツツリーニはカメラと通信機……残った僕らはバリケードで」

「「ラジャー」」

「じゃが、バリケードは良いとして……迎撃時はどうするつもりじゃ？」

確かに、どれだけの人数を投入するのかわからないけど、設置型のトラップだけで撃退できるものか。

僕らの手持ちでも、何人も相手にできるわけじゃないし。

「そうだな……効率を考えれば、ツーマンセルが望ましいな」

「組み合わせはどうすんだ？ やっぱ男女ペアか？」

「となると……まずムラサキは屋上に置いて、他に司令塔を置く必要

があるな」

「ムラサキだけじゃダメか？」

「こいつはまだこの学園の地形を理解できてねえ。かくいう俺もまだ大して知らねえ。できればこの学園の隅から隅まで理解でき、状況を把握しながら指示を飛ばせる奴が望ましい」

「そんな条件を揃えてる奴となると……杉並、頼めるか？」

「同士の頼みとあらば喜んで。では、ヘッドクォーターには僭越ながら、この俺が務めさせていただく」

「ムラサキと杉並はここに残るにして、後の組み合わせだが……」

雄二がしばらく考えた結果、僕とななかちゃん、義之と小恋ちゃん、茜ちゃんと秀吉、杏ちゃんと渉、雄二と霧島さんという風に決まった。「では、チームも決まったところで、急いで作業にかかるとしよう。作戦会議は準備を終えてからだ」

「よっしゃー！ 一丁張り切っていきますかー！」

それからあちこちの教室や部室にまわり、武器やバリケードに使えるような道具を片っ端から拝借してそれらを正面玄関や校舎の裏手、護りづらそうな1階の窓際などをバリケードで覆い、1階からの階段を防ぐ。

2階以降は窓から侵入されないようちよつとした強化と、屋上へ続く階段へ近づけさせないためのバリケードを築く。

更にそれぞれの出入り口付近や階段付近にはムツツリーニの監視カメラを。廊下や階段などの主な移動通路には杏ちゃん及び雄二考案のトラップを仕掛けていく。

着々と準備を整え、いよいよ決戦の時がやってくる。

時間は12時ちょうど。ゲーム開始の合図を知らせる鐘の音が校

舎中に鳴り響く。

「いよいよか……」

窓から外を見ると、グラウンドの隅に天幕のようなものが設営させていた。

多分あそこにはリオや付き人のみんながいるんだろう。

『吉井よ、聞こえるか?』

ムツツリーニから渡されたインカム型の通信機から杉並の声が響く。

「感度良好。それで、敵の動向は?」

『今のところ様子見のようだ。斥候と思しき分隊が2つ。いや、3つか? こちらに接近しているようだ』

「3隊か……随分とまあ」

こちらは2人1組の5分隊……向こうの隊がどれくらいあるのか。

『いや、うちひとつは気にしなくていい。体育館に向かっている』

体育館か……あそこは誰も守っていないけど、誰かが行った時のためにトラップを仕掛けてる筈。

——ドオオオオオオオン! ギャアアアアアアア!!

考えた傍から体育館の方で何かの破壊音と悲鳴が聞こえた。

『ちゃんと作動したみたいね。大丈夫、怪我はしてないと思うから』

通信機から杏ちゃんの声が聞こえた。

けど、本当に安全なものにしてくれたのだろうか。破壊音と一緒に悲鳴が聞こえたんだけれど。

「えつと……残りの2隊は?」

『ひとつは正面——板橋の守備範囲だな。もうひとつは裏手だ。向こうには……桜内たちの範囲だな。板橋の方には木下たちを、桜内の方には坂本たちを向かわせる』

「僕らは?」

『様子を見て漏れ出そうなところを援護しろ』

「了解」

僕は一旦通信を切ってななかちゃんの方へ向き直る。

「とりあえず、5隊のうち1隊はトラップで潰れたから後4隊。義之

たちの方は雄二も加わったから心配ないだろうし、僕たちは渉たちの所へ行こうか」

「了解しました♪」

僕は渉の方へ援護に向かった。

渉たちの護る正面玄関に駆けつけると、敵がバリケードを突破しようとして躍起になってる場面に出くわした。

「秀吉、状況は？」

「今のところ悪くはなさそうじゃ」

「なんてったって、これだけのバリケードだしな」

渉が自慢げに指したバリケードはかなりの力作らしく、斥候だけでは簡単に突破できるつもりではないだろう。

「まあ、放っておけば時間はかかるだろうが、確実に突破されるだろうな」

「だからといって、こっちから出て応戦するのもあれだしね。というわけでななかちゃん」

「オツケー♪」

「ねえねえ、白河さん。そのバケツなに？」

「水だよ」

「いや、そりゃあ見ればわかるけどよ……その水を何に使うんだよ？」

「そりゃあ、こうやって……えい！」

ななかちゃんが力いっぱいバケツを振ると、中に入っていた大量の水が斥候にかかる。

斥候は突然の水しぶきに狼狽するが、すぐにバリケード破りを続行する。だが、それもここまです。

「明久……お主、まさか……」

秀吉は僕の狙いに気づいたようだ。ふふ……そういうことさ。さて――

「いっぺん、地獄を見てこいやあ！」

――バリバリバリバリ！

『『ギャアアアアアアア!!』』』

僕は懐から出したスタンガンを高出力でバリケードに差すと、机の

金属部分から濡れた部分へ、

そしてずぶ濡れになった斥候へと伝導し、感電する。

「よし、これでしばらくは保つてしよう」

「お主も容赦ないのう……」

「いや、ていうかあれ生きてるのか?」

「大丈夫だよ。人間の耐電性だって割とバカにできたもんじゃないから」

「いや、そういう問題?」

渉が呆れた目をするが、結果よければ全てよし。

これでムラサキさんが初音島に残ってくれるのなら、手段を選ばないやい。

「さて、こちら正面玄関の雪村。斥候は撃退したわ」

『了解だ。月島、そっちはどうだ?』

『こちら月島です。こっちも坂本君たちの応援でなんとかなったよ』

『なるほど。緒戦はこちらの勝ちというわけだな』

杏ちゃんがインカムで通信すると、別の方でも斥候の撃退に成功したとの報せが入った。

「なら、僕らは持ち場に戻って再度トラップ及び装備のチェックだ」

「ラジャー♪」

僕とななかちゃん、秀吉と茜ちゃんは最初の待機場所に戻ってゲームを続行する。

勝負はまだこれからだ。

「——で、今度はこいつを使って……だからななかちゃんは僕が合図をしたら——」

「うん。そっちも任せて♪」

「よし」

ゲーム開始からそれなりに時間も経っていき、窓から外を眺めてみる。

正面玄関ではバリケードを突破しようとする男たちが奮闘しているようだが、やはりそう簡単に突破できるものではないようだ。

そこから少し離れて校舎裏の方では進入路を探す斥候の姿が見える。雄二たちが撃退した場所からはもう無理だと踏んだからか、別の場所を探しているようだが、奴がそう簡単に雑魚を入れるとは思えないので大丈夫だろう。

緒戦は大金星と思っていいるだろうけど、まだ日は高いから油断できない。

そう思っていると、インカムから通信が入る。

『うわ、こいつら結構マジだぞ』

『渉、どうしたの!?!』

『正面のバリケード……もう長くは保ちそうにないわ』

『はうう……こつちもまずいよお。人が多すぎる〜』

『小恋!』

『こちら秀吉! 1階で閉じたシャツターが破られかけておる!』

『くそ! こつちも手が足りねえ! このままじゃ、あと数分で突破されるぞ!』

『秀吉、雄二……杉並君! どうすれば!』

『ふむ……どちらも同じレベルでやばいな』

『ああつ、だめつ、は、入ってきちゃうよおつ。いやああああん!』

『……茜、エロい声を出さないで。渉が過剰反応して使い物にならないから』

なんだか、インカムの向こうで渉が鼻血出して天国へ行きかけてる姿が目に見えかぶ。

『だってえ、あ、だめ、入られちゃうう!』

……あの、流石にこれは僕でも……。

『明久君……変な想像してないよね?』

『いえ! 全く! これっぽつちも!』

正気を保たないと、僕まで地獄を見る羽目になりそうだ。

『……花咲、いい加減にしろ。板橋が戦闘不能に陥ってしまう』

『ムツツリーニが反応しないだとお!?!』

ムツツリーニが反応しないことに僕と雄二は驚きの声をあげる。

一体どうしたことだろうか。ムツツリ商会を閉店したとは言ったが、まさか

この手のことにすら反応しなくなったというのか!?

「つて、今はそんな話をしてる場合じゃない！ 杉並君、僕らはどうすればいい!?!」

『とりあえず、2階に迎え。お前たちは桜内たちの援護だ!』

「了解!」

『ああ、ダメえ！ 入られちゃった〜!』

『悪い！ 敵の侵入を許した!』

いざ援護に行こうとしたところでインカムから小恋ちゃんと義之からの悪い報告が届いてしまった。

『まずいな。板橋、雪村、木下に花咲。すぐに2階に撤退だ。このままでは挟み撃ちにあうぞ』

『了解。2階に向かうわ』

『こちらも承知した』

『吉井たちも聞こえたな？ 桜内たちの援護は中止。雪村たちと合流し、階段の死守に当たれ』

「了解!」

杉並君の指示を受け、僕らはすぐに階段に向かった。

どうやら、ステージ2の会幕、といったところか……。

第八十七話

ムラサキさんを護るためにリオとゲームという名の決闘を始め、もう何時間かが経過している筈。

現在、僕らの砦というか、城である学園のうち、1階に侵入を許してしまい、僕らは2階へと移った。

それから各場所の階段にて第2陣を待ち構えた。

そして1、2階をつなぐ階段で新たな攻防が繰り広げられていた。

「ななかちゃん、次の！」

「はい！」

僕がななかちゃんに合図を出してすぐにその手に何かの液体を入れた缶を持ってきてくれた。

僕は彼女からそれを受け取り、中身を階段にぶちまけてやった。

そして、こちらに向かってきた奴らが次々とその液体によって滑り出し、階段から転げ落ちていく。

「流石、杏ちゃんお手製のトラップ。人がゴミのように崩れ落ちていく」

ちなみに中身はグリセリンやらワックスやら、とにかく滑りやすい液体を中心に満たしたものらしい。

確かにそれだけ滑りやすいものがあれば階段なんかを昇るのになり手間取るし、更に妨害なんてすれば普通にあがるだけではまずここまで辿りつけない。

「さて、後はムツツリーニの考えたこのトラップを仕掛けておけば……つと」

僕はムツツリーニが考えたトラップ……といっても、簡単なものだ。

相手が足を踏み入れてくるだろう箇所にスイッチを置き、それを踏んだ時に作動するもの。

作動すれば、アイスピックの雨に大量の水、仕上げにはスイッチを入れっぱなしにしているスタンガンが水によって濡れた床にボトン。

結果、足を踏み入れたものたちは感電する。

その後も、遅かれ早かれ、仕掛けを取り除くには多少の時間はかかるはずだ。

トラップを仕掛けた僕らはいざという時に呼び戻すよう杉並君に言い残し、他の人たちの援護に向かう。

「で、杉並君。今人手が必要そうな場所は？」

『一応、雪村の仕掛けたトラップで大体の人数が脱落しているようだが、すぐに態勢を立て直してきている……来るぞ！』

「何処!？」

『桜内たちのところだな……あそこはトラップが少ない故、使い惜しんでるわけだ』

「了解！ すぐにそっちに向かう！」

インカムを懐にしまい、僕らは義之たちの護る2階渡り廊下へ向かった。

「義之、お待たせ！」

「小恋っ！」

「あ、ななか！ ど、どうしようどうしよう!？」

到着するなり、小恋ちゃんが若干パニック状態になりながらななかちゃんに縋り付く。

「で、今の状況は？」

「壁から直接上がろうとしてきる。しかも数が多いからかなり手間取ってる。杏のトラップも数が少ないから無駄遣いもできないし……」

「そりゃ、なんとも無茶するなあ……」

「トラック追いかけるために3階から飛び降りた明久君が言えたこと

じゃないけどね」

はて、あつたかなそんな……あつたね。ていうか、今はそんなこと
思い出してる場合じゃないね。

まあ、壁を伝ってくるわけだから攻撃する隙はいくらでもあるんだ
けど。

あれを1人1人相手にしなければならぬとなると、こりやかなり
ホネが折れる。

「ともかく、侵入は防がないとな」

「うん。そうだね」

僕と義之はバリケード内に集めておいた消化器を手に取り、ピンを
外す。

「とりあえず、こいつで窓の外の奴らを追い払うぞ」

「う、うん！」

「ラジャー！」

「備品の無駄遣い、ごめんなさい」と

詫びるようにつぶやいてから、窓を開け、それぞれの手近な場所か
ら登ってくる敵に向けて消化器を噴射する。

「ぐっ……この、やめ……！」

敵たちも、学生相手とはいえ、軽装備はしていたのでしばらくは消
化器の粉末に耐えていたが――

「うわあっ！」

やがて手を滑らせたり、粉末によつて視界不良となつて掴み損ねた
ものたちが落下を始める。

何人かを巻き込んだりもしているが、たかが2階程度の高さからの
落下で大した怪我はないだろう。

「ごめんなさああああああい！」

「こつち、来ないで、くださあああああい！」

小恋ちゃんとななちゃんも声を上げながら必死に敵を追い落と
していく。

だが、やはりこちらは数が多い。

「くそ……ここは杏のトラップの出番か」

そういうと義之は懐から握りこぶし大の導火線のついた球状のものであった。

「お前ら、ちよつと離れてろ」

「え？ あ、うん」

義之の言う通りに下がると、義之は例の球状の何かの導火線に火を点けると、窓からそれを真下に振り落とす。

それからしばらくすると——窓の外から眩いばかりの閃光が迸った。

更にその後には次々と落下していく音が聞こえてくる。

「い、今のつて、閃光弾？」

「えっと……らしいな。どうやってこんなもんを……」

「多分理科室からマグネシウムだとか拝借したんじゃない？ あそこにある道具を使えば、目くらましとかに使えそうなものとかもあるし」

「いや、それをなんで杏やお前が知ってるんだよ」

文月学園にいた時だつて、逃走のために敵を離すような状況は多数あったのだからその手の自衛手段はある程度知識として頭に入っている。

大体が雄二やムツツリーニからの入れ知恵なわけだけど。

「あわわ!! か、階段からも来るよー！」

小恋ちゃんが声を上げると同時に、階段からドタドタと慌ただしい足音が聞こえてきた。

「くそ……壁を使うのを諦めたか……」

「あつちもバリケードはあるけど、それもどこまで……か」

「ムツツリーニ……他に武器とか置いてない？」

『……階段の傍の掃除用具入れ。そのケースの裏の壁に空洞を作っている。そこに武器も収めてる』

「なんで学園にそんなものを作るんだお前らは……」

義之が呆れてるが、今はとにかく武器が必要なので急いでムツツリーニの言ったとおりの場所を探してみると、普通のものより少し口径の大きいライフルのような銃が置いてある。

「…………いや、これ…………本物じゃねえよな？」

『…………無論、実弾など入っていない。その代わり、特殊な兵器を装填している』

「特殊な兵器って？」

『…………今にわかる。ちなみに、それを使う時は相手の顔を狙え』

「相手の顔に…………？」

何が装填されてるのかわからないが、すぐに階段から敵が姿を現し、踊り場へ足を踏み入れにくる。

僕と義之は銃を持って構え、敵の顔に照準を合わせる。

「ふう…………射え！」

引き金を引くと、銃口から緑色の何かが飛んでいき、敵の顔にスライムのように付着した。

「な、何だこれは…………!?!」

「べっ…………なんだ、この言語じゃ説明できない味のついた——ぐぼお!?!」

「お、おい！ どうした!?!」

「こ、これは一体…………んごお!?!」

「な、何なんだこれは!?!」

敵に何かが付着すると同時に当たった者は白目をむいて倒れ込んでいく。

「…………ムツツリーニ、これは一体？」

『…………それは、姫路の特性手料理…………のレシピを真似て作った俺の手作りゼリーを弾丸状にしたものだ』

「な、なんてものを…………」

それは確かに兵器といって差し支えないものだ。

いくらムツツリーニが手を加えて劣化しているものとはいえ、慣れてない人たちに姫路さんの手料理はかなり堪えるだろう。

下手をすれば救急搬送しなければならぬ状態になるかもしれない。

まあ、ちよつと痙攣を起こしているが、見た感じそこまで重症ではなさそうなのでこのままこいつを使わせてもらう。

『どうやら第2陣も撤退を始めたようだ。他の皆も無事のようにだ』

「そうか、よかった。とりあえず、今回も凌ぎきれたみたいだな」

「そうだね」

「やったあ！」

杉並君からの報告を聞くと、ななかちゃんと小恋ちゃんは嬉しそうに互いを抱きしめながら喜んでいた。

撃退できたのはいいが、敵の構成人数もまだわからないし、太陽も中心からかなり傾いているが、日没まではまだしばらく時間がかかりそうだ。

日も大分傾き、辺りはオレンジ色に染まりつつあるが、日没までまだ時間がかかる。

今のところ勝ち続けているものの、1階はもう取り戻せないところまで制圧され、2階の方も大半のトラップを使い込んでしまった。

態勢を立て直すために杏ちゃんたちは3階の踊り場に、義之たちは反対側の階段の2階踊り場、秀吉たちは空き教室で待ち伏せさせて構えているが、状況は厳しい。

2階の廊下に残った僕とななかちゃん、雄二と霧島さんは手元にある武器でなんとか凌いでいるが、それもどれだけ保つのか……。

『吉井！ 今何処にいるの!?!』

突然、インカムからムラサキさんの慌てた声が聞こえてくる。

状況の説明は杉並君に任せている筈だが、そんな疑問は置いて僕はインカムを持って応答する。

「どうしたの？ ちなみに今は2階だけど——」

『すぐに白河さんを連れて逃げなさい！ また壁を登ってくるわ！』

どうやらまた壁伝いで敵が来るようだ。それくらいなら壁を登っ

てくる間に叩き落とせば――

――バリーン!!

僕が窓に向かおうとしたところにガラスが砕け散ると、敵がひとり飛び込んでくる。

それを合図に、立て続けに敵が窓ガラスを割って敵が雪崩れ込んでくる。

しかも、動きがさつきまでの連中とは比べ物にならないくらい洗練されたものだった。

「くそっ!」

僕はムツツリーニの姫路さんの手作りクッキー擬きの入った銃を撃って命中させるが、相手は生意気にもマスクを被ってキツチリと対策をしていた。

顔についたゼリーを手で拭うとすぐにこちらに向かって走り出す。

「ななかちゃんは階段つかって上に行つて!」

「あ、明久君は!?!」

「僕はこつちで遊撃する! 今度の奴は固まってどうにかできる相手じゃない!」

「追え! 逃がすな!」

ななかちゃんを逃がそうとするが、向こうも結構足が速い。追いつかれるのは時間の問題だろう。

「とにかく! こつちはなんとかするから!」

「う、うん……でも、絶対に無理しないでね!」

「了解!」

階段の前まで行くと、僕は再び銃を使って敵を迎え撃つが、命中してもマスクについたゼリーを拭ってすぐに走り出す。

だが、一瞬でも視界が潰れればななかちゃんを逃がす時間も稼げる。

向こうの注意も僕に向いていたので僕は敵を引きつけつつ、踊り場から離脱した。

けど、それでも今までと違うのか、このままでは追いつかれる。

「杉並君! 何処か逃げられる場所ない!?!」

『慌てるな。とりあえず、学園長室まで逃げ延びろ』

「学園長室だね！」

僕は階段にいた敵を躲しながら全力で学園長室へ逃げ込む。

一応鍵をかけておいたが、2階にいた時よりも多くの人数を引きつけてしまったた長くは保たないだろう。

「で、このあとは？」

『部屋の隅の床板の1枚だけ色の濃い場所がある筈だ。そこが落とし戸になっている』

「それって、地下アジトの入口？」

『そうだ。いいか、地下に降りたら、B13通路を通って隣の地下アジトに迎え。その脱出用階段を使えば上に出られる筈だ』

「了解！」

僕は杉並君の指示に従い、地下アジトを抜けた後、脱出用の階段を出たわけだが――

「サブターゲット発見！ 標的1！」

『ああ、スマン吉井。上のルートはB29だった』

「このアホ――ッ！」

僕はすぐに脱出用の階段を塞いでから正しいルートに戻って以前の3階のマジックミラーの裏の出口へとたどり着いた。

たく……杉並君、いつか覚えててよ。とりあえず、杉並君への説教は後回しにして状況を聞こうとインカムを出す。

「こちら吉井。杉並君、とりあえず逃げられたけど、その後の状況は――」

『うわああああああ！』

突然、渉の錯乱したような声が響いてくる。

「わ、渉!?!」

『おい、渉！ 何があった!?!』

渉の悲鳴を聞いたのか、義之もインカムに怒鳴りつける。

『吉井、桜内、状況が変わった。本部まで撤退しろ』

「その前に、何があったの!?!」

今の渉の悲鳴はただ事ではなかった。

『あ、あいつら……銃を撃ってきやがった!』

『銃? 土屋たちが用意したようなやつじゃなくてか?』

『マジモンだ! 本物だって! 壁にどんどん穴つくって来てるぞ!』

『正確には暴徒鎮圧用のゴム弾よ。流石に当たっても死にはしないけど』

渉の声に混じって銃声は何発も響き渡るのが聞こえてくる。

まさか、リオの奴……本気で僕たちを潰す気なのか?

とにかく、相手が本格的な武器を持ち出した以上、僕たちのトラップだけで凌ぎきれぬ相手ではない。

僕は全速力で本部へ向かって駆け出していった。

急いで本部にたどり着いて最初に目にしたのは、仲間たちの意気消沈していた光景だった。

まあ、仕方ないと言えば仕方がないところだ。何しろ相手は銃を所持しているのだ。

殺傷能力があるわけじゃないが、あんなものに太刀打ちできる奴はそういるもんじゃない。

僕たちは完全に窮塞していた。

「兄様……まさか、そんなものまで……」

ムラサキさんもまさかというような表情だった。

「ふむ……向こうもとうとう本気になったということか」

「けど、いくらなんでも銃は反則だよお……」

「だが、武器なしなんてルールはいれてねえ。俺たちがあらゆる手段を実行できるようにその辺りをルールに取り入れてなかったが、まさか向こうから物騒なものを用意してくるとはな」

雄二もまさか学生である自分たち相手にプロや銃を取り入れてく

るとは予想できなかったようだ。

「で、どうするよ？ アレをどうにかしないと、どうしようもないぞ」
「けど、もう武器もなければ、トラップだって使い尽くしたんだぞ」
「ああ、早く日没になってく……」

小恋ちゃんが懇願するように太陽の方を向く。太陽が完全に隠れるまであと8割といったところだが、それが今はものすごく遠く感じ
てしまう。

「まだだ……まだ何かあるよ」

「何があるってんだ。もう出せる手は尽くしたってんだぞ」

「けど……ここであんなに諦めるんなら……どんなに格好悪くても僕は最後まで暴れてやるさ。ただでやられてたまるか。絶対に大多数を道連れにくらいはしてやるさ」

「明久……」

「そうだな」

みんなの顔に僅かに希望が灯った気がした。だが、その希望もすぐに打ち砕かれてしまう。

屋上に大音量のローター音が響き渡る。

「へ、へり!？」

僕たちの目の前に大型のへりがゆらりと姿を現した。しかも、ご丁寧に左右に武器が取り付けられた軍用の攻撃へりだった。

「ちよ、ちよっと待てよ、無茶苦茶だぞアイツ!」

「どうやら……これがリオの本気ってことか」

本気になれば、僕たちなんて虫けらも同然だと……そう言いたいってことか。

さっきのは本当にゲーム感覚でやってただけだと、そう言われた気分だった。

「もう……無理ですわね」

ムラサキさんが観念したように呟く。

「ちっ！……どこまでもムカつく野郎だなオイ!」

雄二が苛立ちながら金網を乱暴に殴りつける。その時、ふと目を見開いた。

「……まだだ」

「あ？」

「まだ……終わっちゃいない」

「何言ってるんだ、明久。いくらなんでもへりを用意されたら敵わないだろう。こつちには武器がないんだ。そもそも、へりに勝てる武器を俺たちは持つちゃ——」

「持つてるよ。飛びっきりのやつが」

義之の言葉を遮って僕は雄二の方を指差した。

「あ？ 俺？」

「うん。雄二のソレで」

「ん？ ……なるほど。まだ可能性は残ってるわけだ」

「そういうこと」

僕の言いたい事が伝わったのか、雄二が不敵な笑みを浮かべる。

悪いけどリオ……僕たちはまだ諦めるつもりなんてないから。

「そつちがその気なら……こつちからは、僕だって本気だ！」

拳を握り締め、へりを向いて強く言う。

今度はこつちがそつちに目にも物を見せてやろうじゃないか！

第八十八話

『こちら、空撃A機。目標を捉えました』

『ご苦労だ。これで奴らも観念するだろう』

グラウンドの隅でリオが無線機でヘリの操縦者と連絡を取り合っていた。

これだけのものを用意すれば、向こうは降参せざるを得ないだろうと確信しての行動だ。

あとは向こうが降参宣言するのを待つばかりだと、そう思ってた時だった。

——ブオン！

突如、ヘリが回転を始めて徐々に高度を落としていく。

『ゴ、コントロール不能！ 不時着します！』

「一体何があつた？」

ヘリが不時着しようとしても、リオは至って冷静にしている。

『わかりません。機体に衝撃が走ったと思ったら、急にヘリのコントロールが……』

「わかった。ヘリは諦めて学園内の部隊を急がせて——」

「させると思う？」

背後から第三者の声が聞こえた。振り向けば、そこには屋上にいたはずの明久と雄二がいた。

否、明久の足元に別の……明久をそのまま小さくしたような奇妙な生き物が立っていた。

「ほう。また随分と愛らしいものを連れてるようだが？」

「それはどうも。男に言われてもちつとも嬉しくないけどね」

「ふっ。どうやってヘリを落としたのかは知らんが、こんな所に足を踏み入れて帰れると思うな」

リオが右手を上げると、リオの周囲に控えていた隊が明久たちに向けて銃を向けた。

「遅いよ」

瞬間、ヒュン、と風を切るような音と共に周囲に突風が巻き起こった。

同時に隊の手に持っていた銃がひとつ残らず壊されていた。これにはリオも僅かながら驚きを見せた。

「残念だけど、それは壊させてもらおうよ」

明久の足元では明久に似た何かの木刀を持って構えていた。

「それは……」

さしものリオも、明久の傍らで木刀を構えている生き物の機動性及び、明久の意思によって行動しているという状況にこのゲームで初めて驚愕の表情を見せた。

「ちなみに、さっきヘリを落としたのもコイツだ。コイツにこれをヘリに向けて投げさせてな」

雄二が右手に持って見せたのは細い光沢を放つ糸のようなものだった。

「このかなり頑丈なワイヤーを幾重にも木にくくりつけて、先にも石をくくつて、そいつをヘリに向けて投げとばせば、プロペラが勝手にこれを巻き込んで、木を引っこ抜いてくれるってわけだ。まあ、流石に木を振り回して安定できるとは思えないがな」

雄二はいたずらが成功した子供ののような表情で説明した。同時にリオもなるほどと理解した。

ヘリの力さえあれば木を引っこ抜くなど、容易いだろうが、吊るして飛ばすならともかく、プロペラにワイヤーが絡まった状態ではバランスを保てず、最悪墜落もありえることだった。

「へっ。どう？ 僕の腕前」

「やったのはお前じゃなくて、お前の召喚獣だろうが」

「これ进行操作してるのは僕なんだから、同じことですよ」

今明久の足元にいるのは召喚獣。文月学園で特殊な空間にて呼び出すことのできるもの。

文月学園で受けた上限のないテストで得た点数とその点数に応じた強さを持った存在を戦わせる。

その点数が0に、もしくは特殊な空間を出た時に消える。

なら、何故そんなものがこうして活動できているのか。

「でもまさか、雄二……そんなのまだ持っていたなんてね」

「ああ……翔子から逃げるのに必死でこいつをババアに返すのをすっかり忘れてたぜ」

雄二は左手を揺らしながら答える。その手には白い光沢を放つ腕輪が付けられていた。

雄二の手にあるのは『白金の腕輪』。文月学園のイベントで明久と雄二がトップを勝ち取った際の商品として受け取ったもの。

その腕輪の能力……既に学園長である藤堂カヲルに返却した明久の腕輪は『二重召喚^{ダブル}』。文字通り、召喚獣を二分化させ、同時に操らせるという能力。

大して雄二の腕輪はいわば教師の代理とも言える。召喚獣を呼び出す空間は教師の許可のもとで形成されるものだが、雄二の持つ腕輪は教師と同じようにフィールドを作り出すことができる。ただし、作り出されるフィールドの教科はランダムに設定される。

『科目：現代国語 Fクラス 吉井明久 48点』

「点数は雑魚レベルだが、人間相手ならこの程度でもやれるだろう」

「点数低くても、人間の何倍もパワーあるもんね。ま、おかげで一気に逆転できそうだけどね」

明久が手の骨を鳴らすと、召喚獣をジリジリと前に詰め寄せ、気を伺う。

対してリオは自分の知らないものを目の前にしているというのに、飄々と立ち尽くしたままだった。

明久は無防備すぎでないかと疑ったが、今大将を潰せば一気に逆転できると思いいざ行かんと力を込める。

「いっけー！」

明久の叫びと共に召喚獣が飛び出した時だった。

——ガウン！

一発の銃声が響くと共に、明久の召喚獣が吹き飛んだ。

「ぐああああああー！」

「明久!？」

それと同時に明久が頭を抑えて地面を転がる。

「ん？ どうしたのかな？ まるで自分が撃たれたかのような痛みが
ようだが」

リオは地面に倒れる明久を見下ろして尋ねる。

「ぐ……お前、スナイパーまで用意したってか……」

「私は誰が相手だろうと手は抜かん。そういうことだ」

雄二の言葉に肯定するように答える。同時に周囲を見渡すと、塀の上や茂みの影からいくつか銃口が突き出しているのが見えた。

どうやら明久の召喚獣は銃によって攻撃されたようだ。

「ふむ、理由はわからんが……ソレと彼の感覚は共有しているようだな。人間ではなかったので実弾を撃たせてしまったから、痛みは相当
だろうな」

「な……」

しかも明久の召喚獣を撃ったのは実弾だと言った。

明久の召喚獣から本人に伝わる痛覚はある程度軽減されてるから
大事になるほどの怪我はないだろうが、それでもこの鬨いに本物の銃
弾を容赦なく使ったりリオの気が知れなかった。

いや、それはヘリを用意してきた時点ですでに理解の外にあった。

「さて、いきなりの登場に驚きはしたが、これで君たちも詰みだ。屋上
にいる妹や仲間たちにも、

大人しくこちらに来るよう説得してはくれないかね？」

明久を抱える雄二を見下ろしてリオは淡々と告げる。

明久も痛みには震えてるだけでまだ戦闘不能になつたわけではない
が、これ以上実弾による攻撃を喰らえばいくら痛みが軽減されようと
人が耐えられるものではない。

敵に囲まれてるこの状況では脱出すらままならないだろう。

「……わかった。みんなを呼ぶ」

故に、雄二は降参を宣言した。その足元で、明久は痛みによるもの
か、悔しさによるものなのかわからない涙を浮かべながら地面に倒れ
ていた。

待つ事10分くらいか……雄二がインカムで連絡し、それを受けたみんなが茜色に染まったグラウンドに集まった。

グラウンドの中心で僕ははまだ残る痛みで膝を着いたままだった。

「明久君！」

ななかちやんが僕のもとへ駆け寄って、召喚獣のフィードバックでダメージを受けてるのを考慮してか、声は強いが、僕に触れる手は優しいものだった。

「どうやら、これで全員揃ったようだな」

僕らから少し離れたところでリオは傍らにフローラさんとジェイミーさんを控え、更にその周囲にも取り囲むように黒服の男たちが並んでいた。

「兄様……」

「まったく、無駄な手間をかけさせてくれたものだ」

大した興味も、勝利に対する感慨もないままりオはつまらなそうに言う。

「へりまで落としてくれたのだから、少しは期待していたのだが、存外つまらない幕引きだったな」

「直接じゃないにせよ、実弾なんて持ち出しておいたらもうこうするしかないだろ」

リオの言葉に義之が憤怒を込めて呟く。

第2・3陣が持ち出した特殊ゴム弾、攻撃へり、更にスナイパーのプロに実銃。

僕が召喚獣を使えるのがわかったから、まだ戦えてたけど、あんなの一介の学生でどうにかできる領分を超えている。

「だが、私の力の程がわかっただろ？ 君たち庶民と私たちでは、ステージが違うのだよ」

下賤の輩を蔑むような瞳で僕たちを一瞥する。

「身の程をわきまえろ」

「テメエ……！」

「義之！」

小恋ちゃんが制止しようとするも、義之はそれを振り払ってリオのもとへ駆け寄ろうとするが、周囲に控えていた黒服が一斉に銃口を向けてくる。

それを見てななかちゃんが僕を守ろうとするように後ろから抱き寄せてきた。

「落ち着いてください……ここは、ここからは私が兄様とはなさなければいけません。ですから、みなさんはここで……」

強い決意を込めた瞳で、『ここからは口出しをしないでほしい』と、言う風に僕らを見回す。

今更こいつに何を言っても無駄だと言いたいけど、ここはムラサキさんを信じるしかないと自分に言い聞かせる。

「さあ、約束通り私と来てもらおう。エリカ」

「……………」

リオの言葉に、ムラサキさんは黙って立ち尽くすだけだった。

「どうしたエリカ？ 何を考えている？」

「兄様こそ、何を考えているのです？」

臆した様子もなく、ムラサキさんは正面からリオを睨みつける。

「無理やり連れ帰ろうとするだけならまだしも、フェアな勝負と言っておきながら、攻撃ヘリまで持ち出して……私には、兄様の考えがわかりません」

「お前が私の考えを理解する必要などない」

呆れるでも叱るでもなく、興味も持てないように言い放つ。

「まったく……何故、このようなちっぽけな島にこだわるのか……私の方こそ理解不能だ」

リオは不快そうに呟く。ふぎけるなと思った。むしろ不快なのは僕らの方だ。

「どうして、わかっていただけなの？ この地には、素晴らしいものがたくさんありますわ！」

強い思いを込め、ムラサキさんが必死にリオに訴える。

「私は初音島で……祖国では得られなかったたくさんの大切なものを得ました！　この人々は、私にそれを教えてくれた。私に与えてくれた！　初音島は、そういう素晴らしい場所なのよ！　どうして兄様は、それを見ようとしなの！」

いつもの丁寧な口調も崩れ、ただ純粹に自分の心からの言葉をリオに向けて言い放つ。

「ふん……何をバカなことを……」

だというに、ムラサキさんの必死の言葉をバツサリとリオは切り捨てる、

「兄様だって、きつとわかるはず！　この地で共に生きてみれば……必ず見えてくるはずよ」

「こんな取るに足らぬ者たちを観察していても、得られるものなどあるまい？」

「いいえ、私には——貴重な体験でした。学園生活も……兄様に反抗して、逃げ回っていた時間でさえ、私には大切に、嬉しくて、素晴らしい瞬間でした」

「バカバカしい。現地の野蛮人に何を入れ込んでるんだ？」

「兄様！」

「エリカ……お前がそこまで愚かな妹だったとは……残念だよ。本当に残念だ。蛮族の思想に毒され……お前は王族として大切なものをなくしてしまったようだな」

「果たして、それはどうか？」

リオの言葉に、突然杉並君が横槍を入れてきた。

「本当に大切なものを持つてるのは、姫様と貴公……果たしてどちらなのかな？」

「……貴様、何が言いたい？」

ここでリオの表情が微かに強張り始める。

「確かに此度は俺たちの負けだ。地下のアジトは次々と発見され……このゲームでも圧倒的な力を見せつけられ、我々は完敗した。権力も頭の回転も貴公の方が優れているだろう」

「ああ。それくらいは自負してるよ。それに、王族はかくあるべきだと常々思ってる」

「だが、大切なものに気がつかないで、お山の大将気取ってるのを見るのは——滑稽だな」

ニヤリと、嘲るような笑みを浮かべて言い切る杉並君。

「なんだと!？」

杉並君の言葉にとうとうリオも口調を荒げていく。

「お、おい杉並。あんまり煽るな……」

雲行きが怪しくなったと見たか、義之が杉並君を抑えようとするが、それで止まる杉並君じゃなかった。

「おいおい、同士桜内。どうしたのだ？ それに同士吉井もだ。貴様らは、こんな張りぼての王子様にただ黙っていられるような男ではなかったと思っただが?」

わざと聞こえるように杉並君は声を大にして言い放つ。

「貴様……王族たるこの私を侮辱するのか?」

リオの瞳に剣呑な光が宿る。

「侮辱なんてとんでもない。俺は事実を口にしてるに過ぎない。もしそれを屈辱だと感じているのなら——自覚があるだけまだマシ、という事かな?」

「いい度胸だ……」

リオが声を低くして右腕に何かを握ったかと思うと——

「後悔するがいい!」

鈍色の光沢を放つ銃口を杉並君に突きつけてきた。

「リオ、何を!？」

「杉並!？」

「きやーっ!？」

「兄様!？」

リオが銃を持ち出すと、辺りから驚きと困惑の声飛び交った。

「ほう? そんなものを取り出してどうする? 撃てるのか、貴公に

?」

「私を見くびるなよ?」

怒りに震える双眸と、凶悪な銃口が杉並君を捉える。

「己の手を汚すことができるのかな？」

「私の手はとつくに汚れている。王家を侮辱した罪……己が命で贖え」

リオが言葉を終えると同時に銃声がグラウンドに響き渡り、銃から放たれた弾が杉並君の胸を射抜く。

「なっ……」

杉並君が珍しく信じられないといった表情を浮かべ、自らを打ち抜いたりリオの顔を呆然と見つめる。

それからゆつくりと膝から崩れ落ちていくのが見えた。

「す、杉並!」

義之が杉並君のもとへ駆け寄り、その身体を支えようとするが、その前に杉並君の身体が横向きに傾いていき、やがて地面に倒れる。

「い……いやあああああ!」

「杉並!」

「杉並……おい、杉並!」

「ムツツリーニ! すぐに応急処置を!」

「……ダメだ。今必要な道具を持ち合わせていない……!」

「マズイぞい……杉並の呼吸が浅くなっておる……!」

「おい、嘘だろ! 杉並!」

「揺するでない! 余計に命を縮めてしまうだけじゃ!」

「う……」

「そんな……杉並、君?」

杉並君が打ち抜かれ、更に胸から溢れ出る血潮を見て声をあげる者もいれば、その現実を受け止めきれず、その場に腰を抜かす者も出た。

「兄様……なんてことを!」

ムラサキさんは顔が青ざめ、信じられないものを見る目でリオを睨みつける。

僕も今回は黙ってムラサキさんを信じようとしたが、こんなのもう耐えられるわけがない。

「リオ……お前、お前は……自分が何をしたのかわかってるのか!」

「そいつは我がフォーカスライト家を侮辱したのだ……捨て置けばいい」

「デメエ！」

「明久君！」

僕が身体を起こしてリオのもとへ駆け寄ろうとするが、ななかちやんが後ろから腕を回して恚乱する僕を止める。

「そんな……」

平然と人ひとりを殺して尚眉も動かさない兄に対してムラサキさんは呆然と立ち尽くす。

「エリカ様！」

膝から崩れ落ちようとするムラサキさんのもとにフローラさんが駆け寄る。

「これが——これが、あなたのお兄様の本性なんです！」

「兄様……」

「意にそぐわぬという理由だけで、いともたやすく人の命を奪う。そんな危険な人物に国を……あなたの国を任せることができますか!?!」

「……」

「この先、もしもリオが王になれば、このようなことは何度でも繰り返されることになります！ 王家に逆らう者、自らの意にそぐわぬ者、その全てをリオは切り捨てるような人間です！」

「でも、兄様は……」

「ご学友の命を奪ったのは、リオなんですよ！」

既にリオを名前呼びしているフローラさんの言葉に、思いたゆたうムラサキさんの身体がびくりと震えた。

「民を導くのは——降伏な未来を約束してくださいるのは、姫様しかいません！ それとも、このような事が繰り返されても良いのですか、姫様！」

悲鳴にも似たフローラさんの訴えに、ムラサキさんがゆっくりと立ち上がる。

「そんなこと、させるわけにはいきません」

正面からリオを見据えるムラサキさんの表情は、いつもの凜とした

ものだが……僕たちが知ってるものとは違う、学生としてでなく、王家の者として大きな義務を背負った、一国の姫君のものだった。

「兄様。これ以上、愚かな真似をなさるといふのなら——王家に名を連ねる者として、兄様を止めなければいけません。いいえ……ここで兄様をお止めします！」

「そうか、ならば……」

リオの顔からは一切の感情が抜け落ち、同時に銃を構えた。

あいつ、まさか——!?

リオが何をしようとしてるのか理解した瞬間、僕は動きを止めていたななちやんを振り払って、ムラサキさんのもとへ駆け寄ろうとする。

その時、脳裏にはさつき胸を貫かれ、緋色の鮮血を流して倒れた杉並君の姿が浮かんだ。

このままではまたさつきと同じことが繰り返される。そんなことはさせまいと足腰に力を入れて速度をあげる。

「お前も、死ね」

だが、無情にも僕がムラサキさんのもとへたどり着くよりも先に銃が音を立てるのが速かった。

けど、まだ着弾はしてないと自分に言い聞かせながら僕は足を止めなかった。

「ムラサキさ——」

でも、僕が自身を盾にしようとする寸前にムラサキさんの身体が後ろ向きに反れた。

そしてその身体はゆっくりと落ちていき、地面に倒れた。

「ム、ムラサキ……さん……!?!」

信じられなかった。けれど、今僕の目に映るのは、胸元に真紅の何かが制服を染め上げ、

ムラサキさんはピクリとも動かなかった。

「ムラサキさん!?!」

僕は彼女を抱き上げ、必死に呼びかけるが、意識が全くない。

幸いというべきか、まだ呼吸はあるようだが、位置からして肺を打

ち抜いてる。このままでは本当に死ぬのも時間の問題だ！

「バ、バカな……エリカ様を撃つだなんて……それでは、私たちの計画が——」

僕の隣でフローラさんが呆然と呟いた。

その中に妙に引つかかるものを感じたが、今はそれどころではなかった。

「リオー！」

どうにかムラサキさんを助けてもらおうと動こうとしたところに、突然フローラさんが逆上したかのように叫び声をあげると、彼女は懐から銃を取り出した。

まさか彼女、ムラサキさんの復讐のためにリオを殺すつもりだろうか!?

確かに僕だって、杉並君にムラサキさんの命を奪ったアイツが赦せない。

けれど、今僕がリオを殺したところで、2人が喜ぶのか？

……いや、違うだろ！

「フローラさん、待って！」

「な、何を——」

「僕だって……僕だってリオの事は許せない！　けど、そんなことしたって2人が喜ぶわけがない！　どんな理由でも、どんな相手でも、人の命を奪っちゃダメだ！」

「は、離しなさい！　リオは……リオは私たちの計か——」

フローラさんの言葉は最後まで紡がれず、唐突にその場で倒れこんだ。

見ると、いつの間にかフローラさんの背後にジエイミーさんが手刀を構えていた。

どうやら彼女がフローラさんに当身を喰らわせたようだ。

「残念だろフローラ……君の事は割と気に入ってたのだが」

杉並君やムラサキさんを撃つても顔色ひとつ変えなかった男が、今フローラさんを気絶させただけで哀しそうな表情をしている。

その差に納得のできなかった僕は口を開いた。

「リオ、答えろ……なんで、杉並君を……そして、ムラサキさんを撃つた!? 僕の友達を……何より、自分の家族をなんで撃つたんだ! ムラサキさんは……こんな状況になっても、兄であるあんたを、優秀で、優しい人間だったって、自慢してた。なのに、なんで……答えろ!」

「……私の意にすぐわぬのなら、そんな妹など不要。むしろ王家の血など邪魔でしかない」

「っ! お前え!」

僕はリオのもとに駆け寄ると、怒りに身を任せ、気づけばリオの胸ぐらを掴んでいた。

「血の繋がった妹を……あんたのことをあんなにも信じてた娘を、不要……? 邪魔? 王家の血が邪魔でしかない……お前は、お前は何様のつもりだ!」

「ほう? その震えた手で何をするつもりだ?」

僕がリオの前で握って拳を見ても余裕の表情を崩さなかった。

「私に無礼なことをしたらどうなるのか、もうお前に教えた筈だが。それとも、まだ理解できなかったかな?」

確かに、リオは躊躇いもなく僕の友達を撃ち殺した。後ろにはムラサキさんのことに気を取られて見えてなかったが、フローラさんを一瞬で気絶させたジェイミーさんは間違いなく腕が立つ。

更に周囲には銃を構えた黒服たち。恐らくこの場にいる奴らが持つてるのは全て本物だろう。

僕がリオに危害を加えるか、リオが声をあげるかすればその瞬間……。

「その汚い手をどけろ。下賤の者よ」

……でも、だから何だ?

「何が汚い手をどけろだ……そりゃあ、下賤の者だったのは否定できないかもね。でも、杉並やムラサキさんを……僕の大事な友達を奪ったお前は、絶対に許せない!」

僕は握った拳を振り上げる。

「王族だからって、なんでも自分の思い通りになると思ってるんじゃないやねえよ!」

そして握った拳を力の限り振り抜くと、拳はリオの頬へと吸い込まれ、全体重とあらん限りの怒りと嘆きを込めた拳がリオの身体を数メートル先まで吹き飛ばした。

それでもまだ足りず、再び飛びかかろうと足腰に力を入れたところで――

「まあ、落ち着け、吉井よ」

突然聞き覚えのある声がかかると同時に肩を掴まれた。

「え……？」

「そこまでしておけ」

振り向いた先にいたのは、リオに撃たれて倒れた筈の杉並君だった。

その胸は今もなお血で染まつてるが、彼は何事もなかったかのように平然と立っている。

「いやあ、まさか俺のために、そこまでしてくれるとは思わなかったぞ。うんうん……不覚にも感動してしまったではないか」

「い、いや、杉並君……？」

「ど、どうなってんだ……？」

「杉並、お前……撃たれた筈、だよな？」

「杉並君……平気、なの？」

「え……？ 生きてる……？」

周りのみんなも、何が起きてるのかわからないようで愕然としていた。

「まあ、色々と聞きたいことはあるだろうが……まずはあつちを片付けなきゃだな」

「あつちって……」

「ん……」

また聞き覚えのある声が聞こえると同時に全員が同じ方向を向くと、今度はムラサキさんが不思議そうな顔をして身体を起こしていた。

「ム、ムラサキさん!？」

ムラサキさんの意識が戻ったのがわかるとみんな彼女のもとへ駆

け寄る。

「ムラサキさん、無事なの!？」

「え、ええ……あれ、でも……私は、確か……」

ムラサキさんも、銃で撃たれた筈なのに何故自分は今平気でいられるのか不思議で首を傾げていた。

「おい、これはどういうことだ?」

誰もが思っただろう言葉を雄二が口にしてリオを睨む。

「説明……しれくれるんでしようね?」

ムラサキさんも同じようにリオを睨みつけながら尋ねる。

「そうだな……君たちには、真相を聞く権利がある」

「おや? と、言わんばかりにみんなが目を見開いた。

なんでだろうか……なんか、態度や口調がこれまでとは打って変わって柔らかくなってるとるような。

「ふむ……予想はしていたが、いざ目の前になると中々に心にくるな」

「えっと……リオ、さん?」

「何かな? やはり、先程までとは態度が違いすぎるのに違和感がある?」

僕は言葉も出せずに、ただ頷いた。

「確かにそうだな。だが、これにはワケがあるんだ。今回の計画のためにも、私は『悪役』を演じる必要があったのだ」

「じゃあ、今まで俺たちを見下した態度も全部演技なのか?」

「いや、全部が全部というわけでもないな」

ニヤリと笑みを浮かべた。でも、悪い感情は湧いてこない。

ムラサキさんの言う通り、本当にこの人は本来、優しい人だということなのだろうか。

「で、聞きたいことはそんなことかな?」

「あ、いや……」

「もちろんよ。兄様が何を考えてるか……私には全然わからないわ」

ムラサキさんは一旦リオから視線を外し、気絶したままのフローラさんのところへ歩み寄る。

「フローラ、フローラ……大丈夫?」

ムラサキさんがフローラさんに呼びかけるが、彼女は意識を取り戻さない。

「急所は外しましたが、しばらく起き上がることはできないでしょう」
「気絶させた本人であるジエイミーさんが冷静に言い放つ。」

「どういうことなのか、ちゃんと説明を……」

「まあ、簡単に言うなら、全ては……私と杉並君とが仕組んだ茶番……ってところかな？」

「正確には、俺とリオと……同土土屋と木下だがな」

「は……う？」

急に信じられないことを言われた。

「おい、お前ら……どういうことだ？」

「杉並……言ってることが全然わかんねえぞ」

「ハッキリ言えば、ムッツリー二も秀吉も……グルだったってことだろう」

「う、うむ……」

「……スマン」

「……とりあえず、どういうことか説明してくれる？」

僕は低い声で尋ねる。

「お、落ち着くのじゃ明久。無論、ちゃんと説明はするぞい」

「なら、早速聞かせてもらうぜ。何でこんな手の込んだことを？」

「実は、我が国でクーデターの疑いがあったのだよ」

雄二の質問に答えたのはリオだった。

「エリカが国を出ている間に、私と私の両親、すなわち、現国王と王妃を亡き者にしようという計画がね」

「なんですって!?!」

あまりの内容にムラサキさんが驚きの声を上げる。

だが、それだけでは止まらなかった。

「そして、邪魔者たる私たちを消した後、何も知らないエリカを御輿に担ぎ出して、自分たちが政権を自由に操るといふ筋書きだったらし

い」

「な——!?!」

ムラサキさんはあまりの内容に声を失う。

「……………ひよつとして、フローラさんもそのクーデターに？」

「残念なことに、そうなるな」

「どういうことだ、明久？」

「うん……………さつきムラサキさんが撃たれた——かのように見せかけた時、あの人……………計画だなんて口走ってて」

「……………なるほどな。ムラサキを自分たちが自由に操れるように、俺たちの協力者のフリをして、ムラサキに嘘を吹き込み、あんたに反発するよう仕向けたってわけだ」

「そのクーデターに、クエイシー家が加担してる可能性がある、という情報はかなり早い段階からあった。だが、クーデターの首謀者は不明だったし、フローラ自身が加担してるかどうかも、明確じゃなかった」
「そこで、一計を講じさせてもらった、というわけだ」

「杉並君は黙っててください。あとでじっくりくりお話を聞かせてもらいますから。もちろん、秀吉君もね♪」

「う、うむ……………」

珍しく秀吉が震えている。こりゃあ、後が怖いな。

「私がエリカを早い段階で無理やり連れ戻そうとすれば、きっと反発すると思っただよ」

「クーデターの主犯からすれば、今の王家を排除し、国内での地固めが終わるまでは戻ってほしくなかったんだろうな」

「で、いざ実行してみれば思った通り。中々うまくいった」

満足げに頷くりオだったが、その表情から哀痛を感じた。

王族ともなれば、こういう内部からの反乱だってあるんだろう。抱える苦悩は僕らでは想像もつかないものだろう。

「フローラはこの先、どうなるのです……………」

「……………」

「国家反逆罪の者がどうなるのか、姫様はご存知のはず……………」

黙るリオの代わりにジェイミーさんが返答した。

「……………」

ジェイミーさんの答えにムラサキさんの顔に暗愁の色が浮かぶ。

フローラさんがクーデターの一員なら決して軽い罪では済まないだろう。

けど、姉妹同然に慕っていた人が、クーデターの一員だなんて今でも信じたくないだろうし、彼女が重い罰を受けるだなんていい気分にはなれないだろう。

「あの……クーデターの話ばかりなんですけど……なんで杉並君とムラサキさん……撃たれたのに平気だったんですか？」

「ななかちやんが空気を換えようとしたのか、うやむやになってた疑問を再び浮かび上がらせる。」

「そういえば、まだ聞いてねえ。一体どういうことだ？」

「ああ、それなら簡単だ。私の持っていた銃——アレは、元々空砲だったんだよ。多少の仕掛けはあるがね」

「空砲？　じゃあ、あの血は……」

「……俺の保存していた輸血パックの血だ」

「あ、やっぱり……」

「そして、血を詰めたパックに少量の火薬を傍に置き、タイミングを見計らって

それを起動させることで銃で撃たれた場面を演出させた。そうだな、秀吉？」

「うむ。そのタイミングを調整するのはホネじゃったぞ」

「で、あの銃はそのスイッチってわけ？」

「正解だ」

「じゃあ、ムラサキさんの方は？　杉並君の血の理由はわかったけど、2人も同時にできる仕掛けじゃないでしょう？」

「エリカも同じだよ。ただ、エリカは自分の持つてるものがそうだとは思ってたなかっただろうけど……」

「ま、まさか——」

ムラサキさんは自分の胸元からあるものを取り出した。それは、あの時になのか、壊れたペンダントがぶら下がっていた。

「このペンダントが、そうなのね？」

「ああ。それは私のコントロールで、血潮と音を出すんだけどね……」

ついでに、エリカが気絶する程度のショックも与えるんだよ」

「無駄に高性能な……」

「兄様！　なんてことするんですか！」

ムラサキさんが憤慨した。まあ、いざというときの保険なんだろうけど、流石に有無を言わずに気絶させられるってのは気分のいいものじゃないだろう。

「こ、こんなもの——！」

ムラサキさんが悔しそうにペンダントの残骸を地面に叩きつける。

「悪かった。今度は別のいいものを贈らせてもらうよ」

「結構だわ。またロクでもない機能をつけられたのではたまりませんから」

「あはは……」

結局、最初からリオの手のひらで踊らされてたのか。

「さて、杉並君。君はどこから知ってたの？」

「野暮なことを聞くな、吉井。ほとんど最初からだ」

「……で、あの女がアジトに入り込めるようにしたり、奴らにアジトを見つからせたりしたのもお前か」

「正解だ」

やはり……妙に見つかるのが早いと思ったら、杉並君がリオに情報を流していたからか。

「ふっふっふっ……まずは身内を疑え。生徒会役員の合宿で学ばなかったか？」

「お前が言うな！」

僕と義之が声を揃えて言った。

「ああ、とりあえず話はわかった。他人の国とはいえ、国家レベルの事件が発覚したとなれば、ひとりの人間として動かないわけにはいかねえからな」

「ほう、わかってくれるか。坂本」

「ゆ、雄二？」

「どうしたんだ、坂本？」

雄二がいやに素直に認めたのが気味悪かった。

ん？ 雄二が僕を見た。アレはいつもの合図……？

『至急、釘バットを10本ほど持ってきてくれ』

……ああ、うん。許していいのですね、わかります。杉並君、この話が終わったら全力で逃げた方がいいね。

「なあんか、やりきれねーな。一生懸命やってたことが、全部リオやお前らの思惑通りってのは」

「秀吉君、ずっつと騙してたんだ……私にも相談せずに」

「せめて彼女には話した方がよかつたんじゃない？」

「木下君、さいてー」

「そ、それに関しては本当にスマンかった……というか、雪村よ。それを何処で？」

「本人に聞いたのよ」

「そ、そうかの……」

秀吉も秀吉でしばらくは肩身の狭い思いをしそうだ。

「それに関しては君たちには、本当に悪いことをしたと思ってる。心からお詫び申し上げるよ。すまなかつた」

誠実そうな瞳で深々と頭を下げてきた。まあ、騙されたのは腹立たしいけど、事情が事情だからなあ。

国や家族のためにやったことだから、僕らにそれを責める権利はない。

「本当ならすぐに済ませようとしたのだが、まさかあそこまで手こずるとは思わなかつたんだよ」

今日一日の攻防はリオにとつても予想以上の接戦だったんだろう。

だから予定を早めようとヘリや本物の銃にスナイパーまで用意してきたわけだ。

「いや、中々見事だったよ」

「当然ですわ。私たちの本気を甘くみないでほしいわね」

「まあ、そのおかげで私がどれだけ本気か……どれだけ強引にエリカを連れ帰ろうとしたのかがフロアには伝わったわけだが」

「ってことは、少しは俺たちの行動も役に立ったってことか」

「ああ、君らの頑張りには感謝するよ。と、そうだ……何か私にできる

「ことはないかね？」

「私にできることであれば、なんでも言ってくれ」

「そうだなあ……俺たちが今週休んだ分、学園側に不問にしてもらおうか」

「ああ、それに関してはとつくに掛け合っている。名目は『文化交流』ということにしてる」

「じゃ、俺様専用のメイドさんとかは？」

「渉……」

ある意味予想通りの渉の頼みに僕は呆れるしかなかった。

「うわっ、渉君サイテー」

「いいだろ、男のロマンなんだよ！」

「ふむ……我が家の古株でよければ幹旋しよう。今年で齡50になるが——まだまだ現役だぞ？」

「いらねー！ 全力でいらねー！」

「そういうことなら、俺以外誰も侵入できねえ土地を提供して——」

「今すぐ雄二と結婚させるようにして」

「翔子!？」

「ほう……君たちは恋人かね？」

「……婚約者同士」

「捏造するな！ お前はもうしばらく黙って——」

「雄二は口を出しちやダメ」

「ギヤばばばばば!？」

いつものように霧島さんは雄二を気絶させて結婚を進めようとする。

「……それで、結婚は？」

「ふむ……流石に現時点では無理だが、君たちが高校生くらいになれば我が国でも式を挙げることもできるが」

「あ、そういうえばムラサキさんの国って行ってみたいかも」

「そういうえば、ヨーロッパとは聞いたけど、どんな国なのかは知らないし」

「だったら、いつかみんなで行って見ない？」

「もちろん……旅費はお兄さん持ちで」

女子たちがムラサキさんの国の事で盛り上がっていた。

「そういうことなら、喜んで。いずれ君たちを招待するでしょう」

リオの返答に女子がムラサキさんを巻き込んで更に盛り上がった。

色々ひどい目にも会ったし、やりきれないこともあったし、辛いものを見る羽目になったけど、それでも……ムラサキさんが転校することにならなそうで、彼女に笑顔が戻ってよかったと思っただ。

これでまた僕たちの日々が戻る。

それもまた……欠けてしまったものが、完全に戻るような、そんな予感を抱いて。

第八十九話

霧に覆われた世界に桜の花びらが舞っている。

たくさんの祈りが込められ、たくさんの想いに彩られ、たくさんの希望で満ち満ちた、薄紅色の花びら……。

ひらり、はらりと、霧に霞む夜に舞い、風に踊り、ゆっくりと地上に落ちていく。

世界は、いつだって綺麗で、優しく、楽しいものばかりとは限らない。

辛いことも、苦しいことも、悲しいことも、痛いことも、歯がゆいことも、泣きたいことも、苛立たしいことも、黒いことも。

色んなことがあって、迷い、惑い、戸惑い、間違い、時には立ち止まり、振り返り、引き返し、また迷う。

けれど、ボクたちは前に進み続ける。その先にあるのはきつと希望だから。

楽しいことがたくさん待っているはずだから。だから、前に進んでいく。

そんな前向きな想いが、夢が、ボクの中に入って行って、それが大きな希望の花を咲かせた。

こんなにも大それた魔法を見れたのは、これで2度目。

もういつの話だったか、そんな大それた魔法を使う人だいたな。

その人は魔法使いじゃないけど……その心から発せられる想いはものすごく大きなものだった。

あの優しさで、何人の心を救うことができたんだろうか。

ボクの脳裏には、大切な人の顔が浮かんでいる。ボクの大切な人の笑顔。

彼は、あの笑顔を守ってくれた。そしてボクも、きつとあの子たちに会える。

だからこそ、ボクはこの世界に導かれたのかもしれない。

「さあ、ボクの居場所おうちに帰ろう」

そう声に出した瞬間、ボクの身体がふわっと浮かぶような浮遊感に包まれた。

意識は徐々に薄らいでいく。

最後にボクの目の前に見えたのは、この世界でできたボクの大切な人達だった。

「***、***、***、***、***、***、***、***、***、***、
して***……バイバイ」

みんなと同じ時を共にできないことや、ボクの居場所おうちを見せてあげられないことが残念だった。

でも、これ以上を望むのは贅沢すぎるかもしれない。

それから、ボクの意識が光の中に吸い込まれるような気がした。

意識が薄れていく中、みんなの声が聞こえた気がした。

「ん、んん……」

最初に感じたのは懐かしい匂いだった。

海から運ばれた潮の香りと、地面から立ち上る土の匂いと、春を感じさせる桜の香り。

続いて視界が広がり、世界に色が戻る。音が耳に届く。

足元には地面をしっかりと踏みしめる感触。胸いっぱい空気を感じ込んで、周囲を見回した。

それは見慣れた景色。色んなことがあった、大切な想いの残る、ボクの居場所だ。

桜が多いことで有名な初音島の中でもとりわけ桜が群生しているこの場所。

「どうやら、ちゃんと帰ってこれたみたいだ」

そして、ボクが無事帰ってこれたということは、あっちもうまくいったということなのだろう。

そして不思議に思った。

「あれ？　なんで君はここにいるの？」

目の前には周りのもの比べてひとときわ大きな桜が立っていた。

確かボクはこの桜を枯らせ、更に……って、そうか。あれは飽く迄……だったね。

よく見れば雄大な姿の中にはほんの少し、本当に僅かしか願いを叶える力が残っていなかった。

けれど、ほんの僅かとはいえ、まだ残っていたのか。

この程度で起こせるものはほんの囁かな奇跡だけだ。例えば、春以外の季節にも花を咲かせるだけの小さな奇跡。

でも、それで十分だと思う。一年中桜が咲いているなんてのはやっぱりすごく素敵なことだし。

魔法なんてものに頼らなくても、人が幸せな未来を望む力はとてもすごいことだっていうのは、もう知ってるから。

「もし、いつの日か……あの約束を叶える機会があったら、その時は飛びっきりの花を咲かせてね」

ぽん、ぽんと、優しく木の幹を叩く。それはずっと自分を見守ってくれたこの木をねぎらうように。

そして、弱かった過去の自分に別れを告げるように。

「さてと、ではおうちに帰るとしますか」

そう呟いて振りかえったところでボクは目を見開いた。

遠くから駆けてくる小さな影。何かを叫びながら近づいてくる。

すごく嬉しくて、本当に嬉しくて、ボクは思わず駆け出す。

それが誰だかなんて確認するまでもなかった。一目見ただけですぐに誰だかわかったから。

それはボクがこれまでずっと会いたかった人だから。

「さくらちゃんー」

その人の声がボクの耳に届く。その声を聞いて、近づくにつれその姿がハッキリとわかって、ボクは全身を投げ出した。

ぽん、という衝撃が走ると同時に愛しい温もりと懐かしい匂いを感じた。そして、

「お帰りなさい、さくらちゃん」

優しい言葉が降ってきた。見上げると、眩い夕焼けの光の中で、ボクの宝物の笑顔が輝いていた。

言いたかったことはたくさんある。積もる話も山ほどあるし、たくさんお話もしたいし聞かせてほしい。

でも、とりあえず一言だけ。ボクは万感の想いを込めてその言葉を口にする。

「うん、ただいま。義之君」

この一言で、ようやく戻って来れたんだと実感できた。

——ピリリリリ！

「ん？ こんな時間に電話？」

僕はベッドに置いてあつた携帯を手にとって通話ボタンを押した。

着信相手は……義之か。

「はい、もしもし？」

『よう、明久。今、大丈夫か？』

「うん。これから風呂について思ってたけど。随分久しぶりだね」

『そうか？ えつと……前に電話で話したの、どれくらい前だったか？』

「正月には直接会つたし、由夢ちゃんの卒業は本人宛だったから……電話だと軽く3ヶ月はいつてるね」

『そんなにか……そっちは学生としてだけじゃなくて、腕試しという意味でも時間が取りにくいからな。お前、雑誌にも名前が出てくるくらいだからな』

「そっちの雑誌にも出てるんだ……僕の名前」

『そりゃあ、お前の料理なら当然だと思うぜ。慎さんだって、お前の名前を見る度真っ先に取材に行きたいって言ってたし』

「あはは……そこまで言われると……でも、由夢ちゃんが卒業したってことは、もう僕らは卒業2年か。早いもんだな」

『確かに……』

2年前、僕らは風見学園を卒業した。そして、同時にそれぞれの進路に進むことになった。

親友である雄二は霧島さんと共に本島の一流大学を受験して合格し、そこでかなりの上位を勝ち取ってるもよう。

ついでに言うと、卒業と同時にようやくくつついた。随分時間がかかったじゃないかと思つて雄二に色々言うと本人曰く、『何年も待たせたんだから、告白の手順くらい俺の計画通りにやらせるよ』とのこと。

意外とロマンを大切にしてるんだなと、僕や義之たちもあの時は意外すぎて呆けていたよなあ。

それから2人は同じ大学で経営学を重視して勉強を続けている。どうやらこつちで腕のいい実業家になって大きな会社というか、財閥を築きあげていくと張り切っているようだ。

あの2人ならそこらへん、実現できそうだ。

次に秀吉はやはり演劇専門の学校へ行つた。そつちは入学当初からかなり期待の声が上がっているもよう。

まあ、秀吉ならすぐにでもプロになれそうなものね。

そしてムツツリーニ……こと、康太。あいつは進学はせず、独自に写真を撮つてあらゆる方面で活躍してるようだ。

色んな場所や人々を撮る時もあるれば、事件の証拠になり得るもので撮つて名を上げている。こつちも結構な所からお呼びがかかっていると聞いてる。

他にも色々聞いたりしてるが、今はそこまで多く語るのは断念しよう。

でも、もうひとつ挙げると、今話してる義之の進路は就職。確か、天枷研究所で働いているようだ。

別にそれ関連の役職に憧れてたわけじゃないが、彼はさくらさんが留守中は自分があの家を守ると意気込んで初音島に残る決心をしていた。

それを聞いた水越先生が天枷研究所に口利きをしてくれ、義之を採用してくれたそうだ。

以前の天枷さんをフォローした実績のこともあったからか、承諾は簡単に進んだらしい。

『……と、話し込んでしまったな。今日はビッグニュースがあつて、とりあえず伝えようと思つて』

「ビッグニュース？」

『さくらさんが、帰ってきたんだよ』

義之の言葉を聞いて、僕は一瞬携帯を落としてしまいそうになつた。

「え……？ 帰ってきた……さくらさん、が？」

『ああ。今日枯れない桜の所に行つてみたら、そこにさくらさんがいたんだよ』

「そつか……戻ってきたんだ！ よかつたじゃん！」

『まあな。で、どうする？ 何なら、代わるか？』

「いや、今はいいよ。どうせなら直接顔合わせて話したいから」

『そうか。となると、次これそうなのは……ゴールデンウィークか？』
「そうなるね。その時はななちゃんやみんなも一緒に連れて行くよ」

『ああ。みんなも元気してるか？』

「うん。たまにみんなが集まつて遊ぶ時もあるし。さくらさんが戻ってきたつて聞いたらみんな喜ぶよ」

『じゃあ、次に会うのはゴールデンウィークかな？』

「うん。じゃあ、また。あ、それと……さくらさんが帰ってきたんなら、目いっぱい恩返ししなくちゃだね」

『……ああ。わかつてるよ』

「僕たちも戻ってきたら、さくらさんのお帰りなさいパーティーしなきゃだね」

『さつき音姉にも電話で言われたよ。ついでにビッグニュースなしでも電話してきてくれってな』

「あはは……音姫さんも相変わらずみたいだね」

『音姉も5月の頭に帰ってくるっていうから……帰ってきた時が怖いよ』

「あの人、会えなかつた分を一気に爆発させて甘やかしくくるからね」
以前、長期の休みでロンドンから戻ってきた時は本当にすごかつ

た。

学生時代の時なんて目じやないくらい、些細なことでも世話を焼きたがるから。

掃除や料理に洗濯はおろか、ひどい時は耳掃除や一緒にお風呂なんてこともしたようだ。

「じゃあ、また。さくらさんに会えるの、楽しみにしてるって言つて」

『ああ。それじゃあな』

それから通話を切った。そうか……ようやく帰ってきたんだ。

僕が付属3年の時の3学期辺りか……枯れない桜を枯らせてからその副作用みたいなことの処理のために、長い間僕らのもとを離れてしまっていた。

けど、帰ってきたということは、さくらさんは役目を終えたということだろう。

これからは、家族との時間をゆつくりと過ごせるということだろうか。

「よかったね、義之」

それから僕は風呂に入り、早くゴールドデンウィークにならないかなと期待に胸を躍らせながらベッドに入った。

無論、寝入るのにかなりの時間を要してしまったが、それは仕方のないことだろう。

——ピリリリ！

土曜日の朝、僕の携帯から着信音が鳴り響いた。

着信相手を見ると、相手はなかなかちやんだった。相手を見ると僕はすぐに起き上がって通話ボタンを押す。

「はい、もしもし」

『もしもし、明久君?』

「おはよう。ずいぶん早い時間にかけてきたね」

『もう9時だけどね。それより明久君、ゴールデンウィークの件は知ってるよね?』

「ああ、うん。義之に聞いてからホームページも確認したけど、随分と無茶しようとしたね」

『そりゃあ、芳乃先生が帰ってきたんだもん。明久君だって、家族みたいなもんでしょ?』

「まあね」

『それで、ゴールデンウィークのことであつと話したいことがあるからグループチャット開いてくれるかな? もう小恋に義之君、板橋君も入ってるはずだから』

「了解」

僕は通話を切つてすぐにインターネット電話サービスアプリを起動した。

モニターには既に涉と義之が画面に映つて会話を始めていた。

『無言で電話切るとかひどいから! つか、ボケに対して放置つて一番キツイから!』

『ちゃんと通話切断つてツツコミをしてやっただろ?』

『ツツコミが高度すぎるだろ! それで喜ぶのは俺かドMくらいだろうが!』

それって、自分がドMだって公言してるも同然だよな。ていうか、どんなボケかましたら通話切断なんてツツコミに出るんだろう。

『あはは、相変わらずだね。義之君と板橋君』

『何年たつても変わつてなくて、安心するやら呆れるやら』

次いでななかちゃんと小恋ちゃんが会話に加わってきた。

「まあ、これがいんじゃない?」

『あれ? 白河、髪切つたんだ?』

『そうだよ。つて、髪切つてから義之君と話すの初めてだっけ?』

「ああ、ななかちゃんは顔合わせるの半年ぶりくらいになるっけ?」

『げ……もうそんなに経つのか。でも、なんでいきなり切つたんだ?』

まさか、明久に捨てられたとか?』

「なわけないでしょうが」

冗談でも僕がななかちゃんにそんなことするとでも思うか。

『そうじゃなくて……あたしが看護系の勉強してるのは知ってるでしょ? 当然、実習とかだつてあるから清潔感第一つてわけよ』

「僕も半年前にデートで待ち合わせた時に現れたのがショートカットにしたななかちゃんだったからビックリしたよ」

『あの時の明久君、30分は固まつてたもんね』

『そりゃあ、自分の彼女がいきなり髪短くしてたら驚くわな』

「本人はラクチンになったからつて言つたけど。まあ、それでも似合つてるからいいんだけど」

『そうそう。短くても可愛いからズルいんだよ、ななかは』

小恋ちゃんが羨ましそうに呟いて、ななかちゃんが困つたように笑う。

『逆に月島は、髪が伸びてきたよな』

「うん。随分大人っぽい気がする」

『むく……それつて、あたしがいつまでも子供っぽいってこと?』

「いや、そうじゃなくて。見た目の感じであつてどうか……」

『あはは……周りの友達も、落ち着いた感じの娘が多いから。私もそんな風にしたくなつて。へ、変かな?』

『そんなことない! 月島なら、どんな髪型だつて似合うから!』

渉は相変わらず、小恋ちゃんに猛烈なアタックをかけてるなあ。

『あはは、ありがと。義之はどう思う?』

『うん、似合つてるよ。ちよつと大人っぽくなつたつて思う』

『そ、そっか。よかった』

小恋ちゃんも、義之に対する想いは変わつてない様子。この微笑ましい空気も久しぶりだ。

ていうか、今になつても義之は気づかないのか。

『俺は俺は! 俺もちよつとだけ、髪型いじつてみたんだけどよ』

『見分けつかないし、興味もないから知らん』

バツサリ言つたね。態度が小恋ちゃんに対する時とまるで違う。

『まったく義之ちゃんは照れちゃって。本命だけは素直に褒めることができないとか、本当ツンデレだな』

『で、早速本題に入りたいんだけど』

『つて、スルーかよ！ また俺のボケはスルーなのかよ！』

『ゴールデンウィークの企画でしょ？ 杉並君もまた思い切ったことを考えたよね』

ゴールデンウィークの企画……さくらさんが帰ってきたことを素早く察知した杉並君がゴールデンエイジ時代、僕たちが付属3年の頃に在学していた生徒たちを集めてさくらさんの回帰祝いをしようという企画。

言葉だけいえば魅力的だけど、その際の人数と規模がすごい。

人数もだけど、クリパ並の祭りにしようってんだからそりやまたとんでもない無茶な企画というものだ。

一応みんなの都合もあるから自主参加製つてことにしてるけど。

『つて、白河まで流してるし！』

『渉君、うるさい』

『しよぼーん……』

「あはは、ドンマイ渉」

『俺を慰めてくれるのは、明久だけだぜ……』

この流れも久しぶりだな。みんなこれを楽しんでるだけなんだろうけど……渉の落ち込みだけは本物な気がする。

まあ、話題転換すればすぐに復活するだろうけど。

『で、本当に本題に入るけど、みんな参加してくれるか？ 急に決まったことだから、もしかしたら予定入っちゃってるかもしれないけど』
全く、何を言っちゃってるのか義之は。そう言おうと口を開こうとしたが、

『んなもん参加するに決まってるだろ。こんな面白そうな企画、他の予定キャンセルしてでも参加するよ！』

渉が先行して企画に参加することを告げた。

そりやそうだ。考えたのがあの杉並君だから普通の祭りにできるかどうか不安だが、むしろ逆にそれが面白そうなことになりそうだが

ら参加もする。

大学に入ったり、社会人になったりすれば中高の時のようにバカ騒ぎでできることなんてまずないから、あの時の学生生活が懐かしく感じるからね。

『あれ？ 板橋君にキャンセルするような予定あるんだ？』

「そういえば、たまにみんなで遊ぶけど、渉は基本ひとりブラブラだった気が」

『い、一応あるって。男連中と遊園地行ったり、男連中とカラオケしたり、男連中とゲームしたり』

『『『………』』』

『って、なんでみんな優しそうな目で俺を見るんだよ！ 楽しそうな予定でいっぱいだよ！』

いや、確かに楽しそうと言えばそうんだけど……同時に寂しいものも感じてしまう。

『見事に華の欠片もないな……』

『うるせえよ！』

義之も容赦ないねえ。

『で、小恋と白河はどうだ？』

『私も参加するよ。旅行のお誘いとか色々もらったけど、どれもイマイチ乗り気じゃなかったから。みんなにも会えるし、こっちのイベントの方が断然おもしろそうだもんね』

『うん、私も参加する。杏や茜にも久しぶりに会いたいもん』

『で、明久は？』

『もちろん参加するよ。今度の料理コンテストに参加しようと思ってたけど、参加希望出す前でよかったよ』

『いいの？ コンテスト出てまた上位取れば卒業後とか色々有利になるだろ？』

『コンテストなんてまた次があるんだし。それよりも大事なのはこっちでしょ』

『じゃあ、みんな参加ってことでいいな？』

『『『もちろん！』』』』

『で、更に相談なんだけど、せっかくのイベントで、しかも俺たち5人が久しぶりに集まるんだから——』

『皆まで言うな、義之ちゃん。もちろん、わかってるさ』

このメンツでやることと言ったら、もうアレしかないでしょ。

『でも、私……もう随分と練習してないから、上手にできるかどうかわかんないよ?』

『それは俺も一緒だって。けど、お祭りするんだったら盛り上げないともつたいないだろう?』

『私、人前で歌うのはあんまり得意じゃないんだけどな。まあ、この際仕方ないか。一丁ひとつ、盛り上げるとしますか』

話は決まったようだ。僕たち全員笑みを浮かべ、

『一日限定、俺たちのバンドの復活だ。とびっきりのいいライブにしようぜ!』

「合点だ! 集まったら猛練習だ! 気合入れていくよ!」

『『『『おー!』』』』

僕たちは声を揃えた。さて、次のゴールデンウィークが本当に楽しみだ。

第九十話

「明久くーん！」

ゴールデンウィーク初日、本島から初音島へ通じる港にて、僕はななちちゃんを待ち合わせをしていた。

「いよう、明久あー！ おひきッスー！」

「明久君、久しぶりだね」

ちなみに渉や小恋ちゃんともだ。みんな今通つてる学校が違うとはいえ、初音島に行くにはこの船を使わなければならないわけだから必然的にこうしてみんなと合流する形になる。

「久しぶり。って言ってもモニター越しでは結構会ってるけど。まあ、ななちちゃんとは毎週顔合わせてるけど」

「デートのためにな。くっ……初音島出て進路が分かれてもリア充っぷりは相変わらずか」

目に涙を浮かべながら悔しそうに言う渉。どうやら大学でも女性関係は芳しくないようだ。

「あはは……板橋君も相変わらずですなあ」

「あはは……」

「さて、後ここから行くのは秀吉と……坂本夫婦だね」

「誰が坂本夫婦だ！ まだ結婚しちやいねえよ！」

僕がこれから合流する残りのメンバーの名前を呟くと、後ろから大声で怒鳴ってくる男がいた。

「あ、やっと来たね霧島雄二」

「婿養子にも入っちゃいねえ！ 何であっちでもこっちでもこんな扱い受けなきゃいけねえんだよ！」

「……私は今すぐにも結婚してもいい。いつそ、子供も——」

「作らねえよ！ 今の身分で子供作っても費用がかかりすぎるわ！」

「こっちも相変わらず騒がしいね」

「騒がせた明久君が言うセリフじゃないと思うけど……」

小恋ちゃんが呆れたように言うが、この2人はこうでなければと

すけど。

そりゃあ、僕だつてゆくゆくはななかちやんと幸せな家庭を築いていきたいって思ってるけど。

「まったく、お主らは……騒ぎなしで事を進められぬのか？」

「あ、木下君。久しぶり」

「うむ。お主らも元気そうじゃのう」

恥ずかしさで悶えてると、秀吉がガラガラとケースを引いてやってきた。

秀吉とは日程があまり合わずにモニターでの会話もほとんどないからメールでの会話か、電話でちよこつと声を聞くくらいだったから外見がどれだけ変わったのかは知らなかったが、演劇の専門学校に入ってもその手の役をもらってる故か、初音島にいた時よりも髪を長くしてまるで女性のような顔立ちだった。

「……秀吉。ひよつとして、学校でも女や——」

「すまぬが、その話はせめて向こうに着くまでしないでほしいのじゃ」
女役をやってるのかと聞こうとしたが、最後まで言い切る前に哀愁漂う声で秀吉に遮られた。

どうやら僕の予想は当たってたようだ。向こうに着くまではこの話はしない方がよさそうだ。

「おーい！ そろそろ出航する時間だぜー！」

渉の声で僕たちは急ぎ目に船に乗り込んだ。時間になると船が港から離れ、初音島へ向かって進んでいく。

「……ところで雄二」

「あん？」

「……さっきの話。私たちが学生を卒業したら結婚して、子供も作ってくれるの？」

「げほっ！ げほっ！」

このオチも久しぶりだな。

船に乗った僕らは数時間かけ、ようやく初音島に到着できた。港から見た初音島は以前見た時と変わらず自然豊かな島だった。

この光景を見ると、ようやく戻ってこれたって気がするよ。さて、懐かしの島を見るのもいいが、義之たちがここで待ち合わせている筈だが、迎えの人が結構多く、探すのが大変だなと思ってた時だった。

「お〜い！ みんな〜！」

お、この甘く誘うような声は……。

「やつほー！ 義之！ 杏！ 茜！」

視線の先にいたのは迎えに来てくれた義之と杏ちゃん、茜ちゃんだった。

「みんな、おひさ〜！」

「おうおう、お出迎えご苦労さん」

「……みんな元気そう」

「これを見ると、本当に帰ってきたと言った感じじやのう」

「あれ、杉並もいるじゃん」

「ありや、本当」

どうやらみんなに紛れて杉並君もいたようだ。

「あ、ホントだ。杉並君も来てくれたんだ。やつほー」

「って、坂本。お前、髪型変えたのか……」

「まあ、流石にあの髪型はあそこじゃ変に目立つからな」

「お前もそういうの気にするんだな……」

「おつす。義之、杉並。杏に茜。おひさしぶりぶり！」

「涉、ちょっと古いよそれ……」

その元ネタって、こつちからすればかなり昔のじゃないのかな。

今はもうやってない筈だし。

「えっと、誰だったかしら……」

開口一番、杏ちゃんがそんなことを言った。

「杏、そりゃないぜ。俺の事、忘れちゃったのかよ」

「忘れるもなにも、最初から知らないわ」

「おいおい、相変わらず辛辣だな」

「杏、渉君だよ。思い出して〜」

流石に可哀想だと思っただのか、小恋ちゃんが助け舟を出して杏ちゃんに思い出すよう促す。

「……ああ、なんとなく思い出したわ。興味のないことは記憶から除外するようにしてるから」

そういえば、杏ちゃんはもうかつての記録力を放り出したって言ってたね。

本校に入ってから聞いたことだが、彼女は元々記録力の乏しい子供だったらしいのだが、ある時をきっかけに、常人離れた記憶力を持つようになったと言う。

そして、本校に入ってからそれを手放して生きるようになった。

それからは勉強はおろか、人の名前を覚えさせるのも一苦労だった。わざとかさそうでないのか、渉や沢井さん相手に何度か今のようなやり取りをして落ち込ませたり怒らせたりが多かったのだ。

そして怒った沢井さんに僕か義之が謝るということをしばらく繰り返していた。

「ひでえなあ……。でも、このやりとりそのものが懐かしい」「だよねえ」

「でも、いくらなんでも再会早々それはないんじゃないかな?」

「そうだけ。いくらなんでもえっと、なんだっけか? 雪村流暗記術だったか? アレを放棄したからといって、そんなに忘れっぽくなったら明久にそれを注意されるといいうこの世最大の屈辱を味わうことになるぜ」

「オツケー、お前が喧嘩を売ってることはわかった。そういえば、再会の挨拶もしてないからこころで一丁しておこうか!」

僕は笑顔のまま隣にいる赤ゴリラ目掛けて回し蹴りを放ってやった。

「喰らうか、バカが!」

「甘いわ!」

「うおっ!?! 馬鹿な! なんだ、今の風圧!?!」

「料理人の力舐めるな！ 料理人だからって、ただ鍋掴んで揺すって具材の調子を見るだけだと思っただら大間違いだ！ 日々精進して身体鍛えまくってるからね！ 机に座って恋人といちやこらするだけのお前とは違うんだ！」

実際、北京鍋とかはともかく、本格的な中華料理は調理工程にかなりの握力と腕力を要することもあるらしく、僕も試してみるとかなり疲れる作業だった。

それからどんな料理を作っても大丈夫なように、色々身体を鍛えるようになっただよなね。

「ぐ……上等だ！ 元悪鬼羅刹を舐めんじゃねえぞ！」

それから久々に雄二との喧嘩あいさつを交わしあっていた。

「あれも久しぶりだな……」

「学生を卒業したというに、こやつらのコレは未来永劫消えんのかのう……」

「まあ、いいんじゃない？ これを見るだけでああ、みんな帰ってきたんだな〜って感じで♪」

「まあ、それもそうじゃのう」

「何にしても、久しぶりだな皆の衆。ほれ、歓迎のドリンクだ。飲むがいい」

「あ、助かるよ」

「ちようど喉渴いてたしな」

「お前ら、たったの数秒でどんだけ攻撃を入れたり喰らったりしたんだよ？」

どこから出したのか、杉並君が懐から手際よくドリンクのボトルを差し出して僕らはそれを受け取って栓を取り、口をつける。

「ハツネボトリングのゴラップガラナだ。島の外では手に入らんだろう？ 味わって飲めよ」

「うわあ、懐かしい。ありがと〜」

「そういえば、あったね。こんなものが」

「ああ、これこの島でしか売ってないのか。道理で見かけないと思った」

「……はあ！ 喉が潤う……」

「……のはいいんだが、相変わらず微妙な味だなコレ」

喉は潤ったが、代わりになんとも言えない微妙な匂いと味が口に広がる。

「でも、懐かしいよなあ。本当帰ってきた感じがするぜ」

「うんうん」

「久しぶりだけど、あんまり美味しくないよね♪」

「うん。でも、なんだか微妙にヤミつきになるんだよね」

「そういうもんかのう」

「……懐かしいのはいいけど、荷物が重い」

「そうね。帰省組をここで立ち止まらせるのもあれだし、どこか落ち着ける場所に行きましよう」

霧島さんと杏ちゃんの言葉にみんなが頷き、とりあえず学生時代によく通っていた喫茶店へと向かった。

「はあく……こうやって地元に戻ってくると、意外と便利な町だったって実感するな」

「ああ、わかるわかる」

「初音島の偉大さが身にしみるよ」

「そうなの？」

僕らの言葉に茜ちゃんが疑問符を浮かべる。

「ああ。田舎だ田舎だって思ってたけど、本島の学校に通ってみたら、特に都会でもなんでもねえの」

「そんなもんだよ」

僕らよりも本島暮らしの長い小恋ちゃんがフォローするように言う。

何故僕らより長いなんて言うのと、彼女は本校に上がるよりちよつと前に親の都合上、初音島を離れて暮らすことになった。

それを知った幼馴染の義之やななちやんはもちろん突然のことに驚きを隠せないし、杏ちゃんだって珍しく表情に出るくらいだった。

茜ちゃんは泣いちゃったし、渉もそれ以上に号泣して自分もついていくなんて言い出す始末だし。

まあ、結局親の都合なら仕方ないわけで、せめて小恋ちゃんを明るく送ってやろうってことで島を出る前に、あちこち遊びに行ったりして思い出作りをした上でみんなで見送った。

でも結局、本校を卒業してからは僕らも本島に出るという進路を決めたから島を出る僕らはそれほど寂しいということもなくなったけど。

「そりや、駅周辺は栄えているけどよ、うちの学校の周りなーんもねえの。脚がないと、遊ぶことすらできねえんだぜ」

「確かに。そういうところに行くのに必ず電車とか使うし。しかも人が多いわ、乗る度にお金がかかるわで。それでバイクの免許も取ったんだよね」

バイクを買う時はかなり金をかけたけど、この世界のこの時代の交通規制が若干緩くなってきたからか、免許を取ってから大した時間もかからずに2人乗りもできるようになったからデートする時の気分は電車よりずっと上回ってる。

「うちの学校の周りはそれほどでもないけど……でも、それと比べると、初音島は充実してるよね」

「そりやそうよ。一年中桜が見れなくなった今でも、そこそ有名な観光土地だし」

「テーマパークとか、遊ぶ場所とかも結構あるし」

「天枷研究所を始めとした、学術機関や研究機関も点在してるし」

「……何より、政財界に幅を利かせる名家のいくつかが、この島に拠点を構えているのが大きい」

「うわ！　こ、康太……いつの間？」

「……ついさつき着いた」

「お前、相変わらず気配消して出てくるのをやめろ」

「……そんなことでは、密着取材はできん」
「犯罪になるようなことはしてないよね？」

本校に上がる前にムツツリ商會を閉店してからはその手の写真も取らなくなったけど、

この隱密性は相変わらずだった。

「そう考えると……島を出たのは早まったかな、と思わなくもないんだよな……」

「そう？ 私は、私の将来のことを考えたら一択だったんだけど」

「ななかちゃんは看護一筋だったからね」

「ななかの学校の看護学部、有名だもんね」

「それを言ったら、明久の料理学校も結構すごいんだがな。しかもそこに通いながらコンテストで上位ランキングキープしてるし」

「いや、別に大したことは……」

「こんなバカにも取り柄のひとつくらいはあるもんだな」

「うん。喧嘩売ってるなら表出るや」

「いい加減にせぬか、お主らは」

「秀吉君の学校も、いい役者さん輩出してるつので有名だしね」

「そうじゃが、ゆくゆくは儂も音姫みたく、海外留学もしてみたいと思つてるしのう」

「あ、あたしもちよつと憧れてるなあ」

秀吉とななかちゃんは、ロンドンに留学している音姫さんに憧れの念を抱いていた。

「え、私は海外留学なんて、ちよつと怖いな……」

「あはは、小恋らしい。うちの家系は、芸術肌の人が多かった所為か、海外留学する人、結構いたみたいお父さんの話では、手品しの修行をしにヨーロッパまで行って、そのまま現地で恋に落ちて、結婚しちゃった人もいたらしいよ」

「わ、まるで映画みたい」

「へえ……ななかちゃんの一族にそんな実態が」

僕が付属3年の頃、過去にタイムスリップした時に会ったことりさんも歌が上手いってことを知ってるからか、ななかちゃんの家系の話

はかなり納得がいく。

「まあ、そういうロマンスに憧れながらも、日本でせつせと学業をこなす白河ななかさんなのであります♪」

「頑張ってるんだな」

義之が感心するように頷く。

「まあね。板橋君だって、口では文句言いながらも勉強とか頑張ってるんでしょ?」

「勉強ねえ……」

「違うの?」

「正直な話、俺が進学した理由はただひとつだからな」

「なに?」

「学生気分を味わいたかったんだよ。ナンパなサークルに所属して、夏は高原でテニス合宿、冬はスキー。遊びたい遊びたい遊びたい……ってね」

「その志の低さが涉って感じね」

「典型的な遊人の発想じゃのう」

「いいだろ、別に。夢だったんだから」

「まあ、学生気分をずっと味わいたっていうのはわからなくもないんだけど」

「ま、精々モラトリウムを愉しむがいいさ」

「ん? モラ……? なんだ、それ?」

「知らないならいいさ」

「あはは……」

「でも、いいじゃない。実家が初音島にあるってだけでも、私は羨ましいよ」

「ああ、そっか。小恋の家、まだ人に貸してるんだっけ?」

「そういえば、小恋ちゃんが引っ越してから彼女の家には別の人が越してきたんだっけ。」

「うん。お父さんも、ゆくゆくは初音島に戻りたいって言ってるけど、いつになることやら」

「まあ、俺たちは初音島どころか、こっちの日本にはねえし、戻りたく

もないがな」

「雄二は余計な口を入れない」

まあ、確かにもう今更戻りたくはないけどさ。

「もう、小恋ちゃんったら。久しぶりに帰ってきて早々しんみりした顔しないの〜」

「きやあ！ 茜、変なところ触らないで〜」

茜ちゃんがいつの間小恋ちゃんの背後に回って彼女の胸を掴んでいた。

「茜必殺、懐かしのおっぱいアイアンクロー！」

「ちよ、ちよつと、茜……掴まないでよ！ うう、こ、こんなこと、本島じゃされたことないのに……」

「ふっふっふ、これが初音島の洗礼よ。っていうか、小恋ちゃん、また大きくなった？」

彼女の胸を掴んだだけでなく、とんでもないことを公言しました。っていうか、小恋ちゃん……まだ育ってたのか。

「明久く〜ん。何を考えてるのかな〜？」

「い、いえ！ 何も考えておりません！」

久々に味わった、彼女のセクハラによって撒き散らされる火の粉。いや、この場合は吹雪かな……。

いや、本当に久しぶりだこの寒気……。

「雄二、見ちやダメ！」

「グオオオオオオ！ こつちも久々に来やがったあああああ！」

「おお……この修羅場も久しぶりじゃのう」

「ふふ……。久々に見ると、このじゃれあいも新鮮ね」

「思えば、風見学園時代はこういう光景が当たり前だったんだよなあ……。離れてみて初めてわかる、当時の自分のリア充っぷり……」

君たちはいいいね。所詮第三者なんだから。

「しんみりしてないで助けてよ〜」

小恋ちゃんが困ったような顔で助けを求めていた。

でも、この状況に身を置くと、本当に帰ってきたんだなあって実感する。

第九十一話

「ふんふふふくん、ふつふふふくん♪」

「この光景も久しぶりだね〜」

「ああ。朝倉姉の料理している時の光景は安心するからなあ」

「……雄二、浮気は——」

「違うからな。元はと言えば、お前が今まで散々俺の食う料理に妙なモノを混ぜ込むから女性の料理に一時恐怖を感じるようになったんだからな」

「ちなみに言うまでもないじゃろうが、それ以外にも約1名の料理にもの……」

「怖いことを思い出させないで、秀吉……」

久しぶりに芳乃家に上がり、居間に入れば以前と変わらない姿をしたさくらさんがいた。

いや、確かに外見はあまり変わってないが、雰囲気は少し違う。幼い外見から想像できない大人っぽさはそのままだが、以前のような内面に秘めた儂げなものがなく、今はひたすら満開に咲き誇るかのような笑顔を見せていた。

僕らの知らない間に何があったかは僕たちには理解できよう筈もないだろうが、さくらさんが吹っ切れて、そしてこの家に戻ってきてくれたのが本当に嬉しい。

僕たちは今まで会えなかった分、色々な話をした。

義之や僕たちの卒業までに戻ってこれなかった事が一生の不覚だったとか、義之がこの家を守るために残ってくれたことが嬉しいだとか、自分がいない間に時代劇の新シリーズが出たので早く見たいだとか、大半が義之で時々時代劇の話をしたくらいだが、こうして話すとか今まで足りなかったものが満ちていくような心地よさを感じた。

話をしていると、ようやくさくらさんが戻ってきたんだなと改めてほっとしたひとときだった。

「お〜、明久。料理の盛り付けと運ぶの手伝ってくれるか？」

「あ、了解」

義之に呼ばれて台所へと足を運ぶと、テーブルの上には香ばしい牛のステーキと、味噌汁、フィッシュ&チップス、煮物、シエパーズパイなど、和洋関係ない見事にバラバラな献立だった。

「ず、随分多いね……」

「やっぱ、そう思うよな」

「大丈夫だよ、弟君がいっぱい食べてくれるもん」

相変わらずの善意100%の笑みで酷な事を言う音姫さん。いや、いくら義之が食べる方だからってこれをひとりで平らげるのは流石に無理なのでは？

こんな量、燃費の激しい雄二でさえ苦しい気がする……。

「いや、流石にこれを義之ひとりですべてっていうのは……」

「大丈夫だよ、弟君がいっぱい食べてくれるもん」

「……えっと、音姫さん——」

「大丈夫だよ、弟君がいっぱい食べてくれるもん」

義之が食べることに前提ですか。まあ、単純に義之に食べてもらいたいからこそ、自分でこれだけ作ったのだろう。

由夢ちゃんが手伝おうとした時も、僕が久しぶりに作ろうかなと言い出した時も、台所に入るのを頑なに許可してくれなかったのだから。

「……まあ、今日は張り切って食べるとするか。せつかくの音姉の料理、残したらもったいないしね」

「えへへ〜」

義之の決心の言葉に、音姫さんがデレデレになった。義之、以前よりも音姫さんに甘くなった気がする。

まあ、気持ちにはわからんでもないけど。

とりあえず頑張れ、と義之の胃袋に向けてエールを送ってやった。

僕は久しぶりに学生時代に使わせてもらっていた部屋に布団を敷き、いざ寝ようとした時だった。

ドアからノックの音が聞こえ、声がかかる。

『明久、まだ起きてるか?』

声の主は義之だった。

「義之? うん、起きてるけど」

僕が返事をする、ドアが開いて義之が入ってくる。

「はあ、よかった。まだ起きてたか」

「……なんか、随分げんなりしてない?」

義之の顔はついさっきまで風呂に入ってた筈なのにも関わらず、疲労の色が濃く広がっていた。

普通風呂はリラックスするためと、身体の汚れを払うための所だ。それが何故入る前よりも疲れが溜まっている?

「いや、風呂に入ってたら……急にさくらさんが入ってきて……」

「ああ、そういう……」

なるほど、納得した。たまにさくらさんは突然風呂に入ろうとしたり、寝床に侵入するということが学生時代たまにあった。多分、今回は久しぶりに義之が戻ってきたのが嬉しくなっただけで一緒に入りたくなっただけだろう。

「そして、その後で音姉と由夢が——」

「ここで死んどけやあ!」

「待て待て! 何でそこでキレル!?!」

さくらさんのことはまだいい。あの人の性格を考えれば、そういうことがあったっておかしくないし、僕も学生時代そんなことがあったから許せる。

しかし、さくらさんだけでなく、音姫さんや由夢ちゃんも一緒とか、どこのPCGの主人公だよ!

「お前、どんだけハーレム人生満喫してるんだよ! 涉じゃないけど、これは僕だつてキレたくもなるわ!」

「お前には白河がいるだろ！ もう何年も付き合ってたんだから、一緒に風呂ぐらい——」

「それができる環境にいると思うか!? お互い学校違うし、別の学生寮に住んでるんだから、異性との付き合いなんかかなり制限されて一緒にいられる時間が思いつきり限られてんだよ！」

「……なんか、スマン」

「謝るな！ 余計に虚しくなるわ！」

くそお……理解はしてるけど、恋人がいる身で異性との付き合いが制限されるというのは中々に地獄だ。

好きな人と思う存分触れ合うことができないなんて、聖典が目の前にあるにも関わらず、魔王が間に入っている所為で手に取れないよりも残酷だ。

「……で？ 義之は自分のハーレムっぷりを自慢しに来たわけ？」

「いや、違うからな。そうじゃなくて今回のイベントの件についてだ」「んと……バンドのこと？ それならもう曲は決まってるから……もしかして、何かアレンジでも入れるとか？ 流石に時間も無いわけだから、大それたアレンジは避けた方が——」

「いや、バンドのことじゃない。その……ちよつと、個人的なことなんだが」

「個人的？」

義之が個人的な頼みごとをするなんて珍しいな。

いつもなら、自分が何かをしたい時はできるだけ他人に頼らずにしようって気が強いから尚更だ。

個人的な事で他人を頼るなんてことは、自分ひとりではまず成し遂げられない事……だよな。

「……まさか、恋愛なんてことは……」

まあ、もし誰かに告白されたなんて言ったら、義之なら相談に来そうだ。

既にモテてる癖に、何故か告白なんてイベントがあったなんて聞かないから勝手がわからないなんてありそうだしな。

「ああ、その……うん。そうだ」

「あ、やっぱり」

どうやら想像通りだ。され、誰に告白されたのやら。これを音姫さんたちが聞いたら心中穏やかではいられないだろう。

「で？ 一体誰に告白されたわけ？ YESかNOかは、まず義之自身から聞かないことには——」

「いや、告白されたわけじゃなくて……俺からどう告白しようかなって、相談なんだ」

「あ、されるとかじゃなくて、告白する側なんだ」

そっか。ようやく義之も自分から好きな人を決められたというわけか。よかったよかった。

「……………ん？」

待つんだ。今何かすごいことを言われた気がする。

「えっと、告白……する？」

「あ、ああ……」

「……………ちなみに、誰か聞いても？」

「……………音姉だ」

……………音姫さん。義之が、音姫さんの事を……………好き？ 愛してる？

……………LOVE？

「……………ええええええええええ!! 音姫さんのことを——」

「バカ！ 声がデカイ！」

「あ、ゴメン……………」

あまりに突然のことだったので、夜中になろう時間だということについて大声を上げてしまった。

「……………それで、どう切り出そうと？」

「何故音姉を、とは聞かないんだな」

「まあ、気になるって言えば気になるけど……………それをいきなり聞くつてもね」

実際は、もう誰とくつついてもおかしくないというのが本音だ。

まあ、まさか誰かに告白する前に義之自身が相手を決めようなどは思ってたからさつきは随分と驚いたが。

「……………ああ、さんきゅ。何故音姉なんだって聞かれても、言葉で言い表

せる自信ないからな」

「まあ、人を好きになるってそんなもんじゃないの。僕だって気がついたらそうなってたって感じだし」

「やっぱ経験者が言うといっそうそう思うな」

照れるって。

「で、相談に来たのは……どう告白するかってこと？」

「ああ……この気持ちに気づいたのだから、去年天枷研究所に入っ飛ばらくしてようやく気づけたところだから音姉に言う機会も中々なかったからな」

「ありやりや、それは……」

せめて卒業前に気づいていれば色々気を回せたかもしれないなかつたが。

「だから、今回のイベントの後で……音姉がいる内にこの気持ちに決着をつけたいって思ってる」

「そっか。……って、もう決めてるなら相談いる？」

「ああ……まあ、お前にも感謝してるからな。お前の耳には入れておきたいって思ってたんだ」

「そう、なんだ……」

なんか、妙にこしよばゆくなってくるなあ……。

まあ、こうして自分の人生のパートナーを選んだことを知れただけでも今日は大収穫だよ。

「じゃあ……今日はそれを言いたかっただけだから」

「うん。あ、そういえば……告白はどう切り出すつもりなの？」

「あ、んと……いや、まだ具体的にどうすればってのは決めてないんだ……」

「あ、そうなの……」

まあ、どうしたら気の利いた告白ができるかなんてそう簡単に思い浮かぶ筈もないよね。

雄二は小学生の頃からずっと模索してたから風見学園を卒業すると同時にできたわけだけど。

「まあ、イベントを進める中で並行して考えるつもりだ。じゃあ、おや

すみ」

「おやすみ」

義之は僕の部屋からそっと出て行った。そして僕の部屋には沈黙が残された。

「……さて、僕も寝るかな」

随分衝撃的なことを聞いたからすぐに寝られそうにないけど、僕は布団に身体を預けた。

ああ、この布団も懐かしい。昔はここで毎日寝ていたんだよなあ。久しぶりの寝床の感触に安心した中で僕は先程の義之の好きな人のことについて考えていた。

義之は理由らしい理由はないと言っていたが、なんとなく何故音姫さんを選んだのかはわかる気がする。

風見学園にいた頃からずっと義之のことを気にかけてくれて、日本から発った後もよく義之の様子が気になっていた。

長期の休みに帰郷した時は顔を見れなかった間のことを随分聞いてくるし、義之が社会人になろうとした時も随分義之の務める職に関して調べてくれたりもしたようだ。

まあ、卒業する少し前に天枷研究所に入るということに決まったからその情報はあまり意味なかったが、それでも義之はそれに感謝したと言つて音姫さんがデレデレになったのは想像に難くない。

とにかく、いつでもどこでも音姫さんは義之のことを想っていて、義之はその愛を誰よりも感じていたからこそ、音姫さんを選んだんじゃないだろうか。

あくまでそういつた予想であつて、実際は違うかもしれない。けれど、あの2人はくつつきあつて当然な気もする。

それくらい、あの2人は絵になるし……それが運命だつて思える。

いやあ、卒業式には間に合わなかったけど、義之の人生で一番大事なものがかかつてる時にさくらさんが戻つてこれたのはよかつたんじゃないだろうか。

「……あ、そうだ」

僕の中で何かが閃いた。そうだ……これならさくらさんにもうひ

とつサプライズなプレゼントを加えられるかもしれない。

そう思ったら僕は身体を起こして自分の荷物からメモを取り出すと、ペンを走らせ、一文書き残すと、すぐに寢床に戻る。

よし、大事なことは書き残したから後のことは明日から考えるとしてよう。そう決意しながら目を閉じた。

快晴の朝、僕たちは澄んだ空の下を歩いていた……。

「おい、明久。普段からバカそうな顔が余計にひどくなってるぞ」

「台無しだな!」

隣で晴れ晴れとした気分を台無しにしてくれる赤髪ゴリラに怒鳴った。

「だって、嬉しいじゃん? 僕らの世代の風見学園のみんなが集まって祭りしようってことになってんだから」

「確かに心躍る行事であるのは否定せんが、少々浮かれすぎではないか?」

「そんなことないと思うけどなく。久しぶりの学生気分だし」

「お前は今でも学生だろうが」

社会人1年の義之からツツコミが入った。

「まあ、でも当時のみんなと泊まりながら準備できるんだから、嬉しくもなるって」

「明久さんの場合、みんなよりも白河さんと一緒にいられる方が嬉しいんじゃないんですか?」

「う……それは、否定できないけど……」

由夢ちゃんから鋭い指摘をされる。

「とか言いながら、お前だっけかなりワクワクしてるだろ。メチャメチャ楽しそうな顔してるし」

「や、それはまあそうかもしれないけど……」

義之に言われ、由夢ちゃんも素直に認める。

「けど、一番楽しそうなのは——」

由夢ちゃんが別の方向に視線を向け、僕らもそれに釣られてある方向を見ると、

「ふん、ふふふくん、ふっふふふくん♪」

「音姉、だな」

うん。朝起きてから現在まで鼻歌混じりに手足を動かしてる。

「だってだって、みんなで学校に集まってお祭りの準備するんだよ？
しかも泊りがけで！」

それにこうして弟君や由夢ちゃんたちと一緒に通学路を歩いているだけでも嬉しくなっちゃうし。由夢ちゃんもそうでしょ？」

「それも否定しませんけど、大丈夫かな？」

「ん？ 何か心配事でもあるのか？」

「これですよ、これ」

そう言つて由夢ちゃんは自分の制服のスカートの裾を摘みみ上げる。そう、制服のスカートだ。

「健康的な足じゃないか」

「いや、そうじゃなくて。制服だよ」

「似合ってるじゃないか」

「や、だってもう本校卒業して一ヶ月も経ってるんですよ？ それでこの格好って……」

「お前はたったの一ヶ月じゃねえか」

まあ、僕たちなんてもう1年近くは経過してるしね。それで中等部時代の制服なんだから、かなりキツめに感じるし。

「ふくん、由夢ちゃん。それはお姉ちゃんに対するあてつけかな？」

笑顔で躰り寄り寄る音姉さんが異様に怖い……。

「や、そ、そういうわけじゃ……ただなんか、卒業してからまた着るっていうのは、恥ずかしさがあるっていうかなんていうか」

必死に否定するが、全くもってフォローになってないね。

「そんなの私だって恥ずかしいよ……。だってねえ？ ほんと、何年

ぶりかしらこの制服」

「……私は雄二が望むならどんな格好だつていい」

「そうか。だが俺は中高生の制服姿なんて求めてねえからな」

「……うん。雄二が求めるのは裸Yシャツに裸エプロン、浴衣に猫耳——」

「ちよつと待て、翔子！ 前半2つは以前バレたからいいにしても、他2つはお前には告げてない筈だ！」

前半2つはバレたんだ……。

「……雄二の部屋に入ったら、またそういう本があつたから」

「いや、待て。あの本にしたつて警戒に警戒を重ねて嚴重に保管した筈だし、そもそも今俺の住んでるのは学生寮だ！ なんで女のお前が侵入できる!?!」

「……雄二の婚約者で届け物があるつて言ったら『こんな可愛いお嫁さん候補がいるなら入れないわけにはいかないでしょう。後で彼の秘蔵書の隠し場所を教えてあげるから行っておいて』つて言つてたから。あの本もその時に隠し場所を教えてもらったから」

「あんの寮長つ！ 自分が独身で婚期逃したからつて、学生相手に八つ当たりか！ それでもいい歳した大人か！」

「……そして、その本は大事な部分だけ切り取つて後は燃やした」
「ちくしよおおおお!!」

雄二の魂の叫びが天空に響いた瞬間だつた。やはり雄二の私物は未来永劫、霧島さんに管理される運命にあるようだ。

「はいはい、みなさま！ お元氣そうで！」

雄二が血の涙を流していると、背中から声をかけられた。

「オッス、渉」

「おはよう」

「おう、おはよう。ところで、坂本がなんか血の涙流してんだけど、何かあつたか？」

「ああ、うん……男の大事な参考書をちよつとね……」

直にエロ本なんて女の子の前じゃ言えないので、少し婉曲的に言つた。

「ん？ ……ああ、そういうことね。坂本も災難だなあ……」

僕の言ってることがわかったのか、雄二に向けて同情の視線を送る。

「で、義之。お前、ニヤニヤして。何か良いことでもあったのか？」

「ん？ そう見えるか？」

「そりゃあ、そんだけニヤニヤしてりやあ——あ、わかったわかった！

そりゃあ、そうだよな。そうに決まってるよなあ」

「何だよ、気持ち悪いな……」

渉が何か納得したようにうんうんと頷いていた。それから視線を義之から外すと音姫さんに寄っていく。

「おはようございます、音姫先輩」

「おはよう板橋君。今日も元気だね」

「はい、それがこの板橋渉のアイデンティティーですから！ それにしてもいやはや、お美しい。やはり音姫先輩にはこの制服がよくお似合いですねえ！」

「え、そうかな？」

渉の言葉に音姫さんが照れる。それを見て義之が若干ムツとした表情を浮かべるのが横目で見えた。

いや、嫉妬ですか。義之も男らしい感情を持つようになったものだ。

「そして由夢ちゃんもおはよう！ やっぱ可愛いなあ、付属の制服。毎日その格好でもいいんじゃないか？」

「や、それは流石にちよつと……」

「専門学校にひとりだけ制服で通ったら浮きまくって速攻で噂になるわ」

それでも、可愛いのは同意できるので渉の言うこともわからなくはない。

「おおい、義之よう！」

そして渉は突然義之に絡んでくる。

「そりゃそうだよなあ、お前はニコニコもするよ、ニヤニヤもするよ。俺だってそうなるさあ！」

「いや、なんの話だよ?」

「かーっ! 相変わらずお前はラブルジョワ野郎なまんまだよ! 音姫先輩と由夢ちゃん、掟破りのワンスモア制服姿を両手に抱えて好き勝手できるんだからな!」

「人間き悪いことを言うな。大体俺は——」

「俺は、何だ?」

「……いや、なんでもない。お前の脳内も全く進歩がないようで、ある意味安心したなって」

渉の言葉に反抗して咄嗟に告白じみたセリフが出そうになったのだろう。

流石にこんなところでこんな形の告白なんて義之も望んでないだろうし、僕もそうなってもらいたくはない。

それではこちらが困る。

「これでもしクールに落ち着いて、『恋愛何それ美味しいの?』や、『女の子には興味ありませんから』とか言われたらどうしようかと思っただぜ」

「そんなの俺じゃない! ていうか、後半はただのホモじゃねえか!」

「あら、違うのかしら?」

「違う! って、おお、お前らも久しぶりだなあ! なんだよ相変わらずだな」

「ふふ、そっくりそのままお返しするわ」

「渉君も全然変わってないもんね」

「久しぶりって、一昨日会ったばかりじゃない」

ここで雪月花の3人も揃った。

「ていうか、おい杏よ。さっきの違うのかったのはどういう意味だよ? 俺は純粹に可愛い女の子しか興味ねえよ!」

「あら……でも、確か中等部卒業した時に後輩の男の子からラブレットもらってたわよね?」

「やめろおおおおお! 余計なもん思い出させないでくれる!」

渉が頭を抱えながら叫んだ。ああ、そういえばそんなことがあったなあ。

付属卒業と同時に渉のロッカーに手紙が入ってたんだって聞いて、僕らは遂に渉にも春が!? なんて驚いたんだよなあ。

そしていざ、渉に手紙の中を読ませてもらって、前半は本格的だなと盛り上がりつつたが、最後の一文には『俺のアニキになつてください』なんてあつて、おかしいなと思つたら、その手紙の送り主はなんと男だったのだ。

その事実を知った渉はこの世の終わりだともいうような顔で真っ白に染まったのはいまだ記憶に新しい。

「ああ、それ月島も聞いたよ。なんか、すごい情熱的だったって」

「月島にまで!? 言つたの杏と茜だろ絶対!」

「ついでにななかにも……」

「白河に言つたのは明久、オメエだろお!」

「あ、あはは……」

僕は苦笑いでごまかすしかなかった。だってななかちゃんがキラキラした目で何があつたのつて尋ねてくるんだもん。

「えつと、名前は確か……当時、2年3組の『アオヤマタケシ』だったかしら?」

「杏……俺の顔と名前うろ覚えで何でそういう所はキチンと覚えてるのかなあ!?!」

そうして賑やかな会話が続いていく。いや、単に渉がぎやあぎやあ」と抗議してるだけなのだが。

「おっはよく、明久君♪」

「あ、ななかちゃん。おはよう」

渉の抗議している状況を眺めてるとななかちゃんとも合流できた。うんうん、久しぶりのななかちゃんの付属の制服姿。可愛い……目の保養になるよ。

「それにしても、久しぶりだなあ。この光景」

「あはは……まあ、これを見るとあの頃に戻つたみたいだね」

「うんうん」

「……あ、そうだななかちゃん」

「ん?」

「それ……髪短くした今でも、すごい似合ってるよ」

「え、ええ……そうかな？」

僕がななかちゃんの制服姿を褒めると、照れくさそうにモジモジとする。その姿が余計可愛く見える。

「明久君が気に入ってくれるならいいんだけど……久しぶりに着たからか、結構キツく感じるんだよね」

まあ、本校のならともかく、付属の頃の制服だもんね。その頃から比べたらななかちゃんだっけ結構成長してるわけだから。

身長もだけど、主にある一部分が。どこが、とは言えないけど……。「明久くん。何処見てるのかな？」

すっかりバレてるし！ 顔がすごいニヤけてる！ 絶対僕の視線が何処行つたのかわかって言ってる！

「ほらほら。何処見たのか言つてごらうん？」

「い、いや別に何処も……？」

「ほら。怒らないから正直に言つてごらうん？」

「え、えつと……」

「素直に言つたらどうかなく？ それとも、確信がないなら実際に確かめるとか？」

「た、確かめるって……？」

「そりゃあ……触って？」

「ぶっ!？」

ななかちゃんのトンデモ発言に僕は吹き出した。

「いや、無理無理無理！ 人前でそんなの恥ずかしいから！」

「あれれ？ 別に触るなら頭や肩でもいいけど、人前で触るのが恥ずかしいなんて……明久君は何処を見て言つたのかな？」

「♀□◎▲※√†⇄■~~~~!!」

わかつてる！ 絶対この娘わかつて言ってる！ この状況楽しんでるよ！

ななかちゃんって、偶にこうして僕の恥ずかしがるところを愉しむ時がある。楽しむではなく、愉しむ。こゝろ、重要。

そんなこんなで、朝の登校の道中が賑やかなものとして過ぎていっ

た。

「……ちなみに雄二、私の胸……ようやくEまでいった」

「いらねえからな、そんな情報！」

後ろから妙な会話が聞こえた気がするが、記憶に留めてはいけない気がしたのは余談だ。

第九十二話

僕たちは久々の風見学園へと足を運んだわけだが――

「それにしてもこいつは……」

「随分、多いね……」

校門に着けば、既に多くのOBやOGで溢れかえっていた。その数軽く300はいっている。

「想像してたよりもずつと多くないか？」

「それも当然のことだな」

渉の言葉に同意するように第三者の声が割って入る。

「おお、杉並！」

「で、当然というのはどういうこと？」

「……俺たちの世代は漫画にありそうなネタに事欠かさなかったからな。卒業してから物足りないと思う人間も多い。更に当時はレベルの高い美少女も多いため、その女子たちの顔を再度見ようと戻ってきた者たちも多い」

康太の説明になるほどと納得できた。確かに僕たちの世代はアイドルと言われていたななちゃんはもちろんのこと、音姫さんや由夢ちゃんに雪月花の3人……他にもレベルの高い女子はたくさんいたからな。

風見学園を卒業していった先に華やかな未来があるとは限らないわけだし。行った先がハズレだった者は尚更ここに通っていた時代が恋しくなるだろう。

故に、目に見える人だかりの大半が男子だというのも頷ける。もちろん、女子だって大勢いるのですが。

「で、話を戻すけど、これだけの人だかりってことは、当然在校生も参加してるといわけね？」

仕切りなおすように、杏ちゃんが切り出した。

「その通りだ。基本、今回のイベントは俺たちが付属3年時に在籍していた全校生徒に声をかけたのだが――その噂があつという間に広

がったようだな。そんな楽しいお祭りがあるなら是非俺たちも参加したいと立候補する者が後を絶たなかったらしいのだ」

「まあ、当時の風見学園は杉並を筆頭に大盛り上がりじゃったからの」
まあ、それを生徒会メンバーが聞いたら不本意も甚だしいと言うだろうけど。

「で、イベント当日の来場者としての参加はもちろん、希望者は手伝いとして準備期間から参加できるように生徒会が取り計らったらしい」
「なるほどな。それでこんなに多いわけか。流石風見学園の生徒、みんなお祭り好きだな」

「もちろんお祭り好きってのもあるだろうけど……今回はそれだけじゃないのよ」

「って言いますと、音姫先輩？」

「さくらさんをお祝いするんだったら是非参加したいって人がたくさんいたの。私たちの代も、それよりも前の代の人たちからも連絡があったりして、さくらさんの人望があったから、これだけの人が集まってくれたんだと思う」

確かに、明らかに僕らより年上だというのに、一度も顔を見たことのない人も何人かいる。

まあ、学年や校舎が離れてれば一度も会わない人だっているかもしれないけど、これでも休み時間や放課後には散歩にいたりして色々な人の顔を見てきたんだ。それを差し引いても、かなりの数がいる以上、僕たちの想像を遥かに越えた人数が集まっているのがわかる。

「流石、芳乃さくら嬢といったところだな」

杉並君の言葉に全員が同意するように頷いた。それだけさくらさんはこの学園に必要な存在だったのだ。

代理として学園長になった人も良い人物ではあったのだが、やっぱりさくらさんが抜けたことで気分が半減したという感じの人もかなりいたからな。

「あ、いたいた。おーい、音姫ー！」

「ん？」

随分懐かしくも僕の内から恐怖を引きずり出すような声を聞いて

音姫さんがキヨロキヨロと辺りを見回す。

「こつちこつち！　ここだって！」

声と同時にこちらに駆け寄る足音。

「おはよ、音姫。弟君も、それに見慣れた面子が勢ぞろいのようなね」
「……誰だ？」

雄二が首を傾げた。出てきたのは、紫がかった黒髪をポニーテールにまとめた女性だった。

あれ？　こんな人、先輩にいたっけか？

「ほぅ？　坂本、在学時からあんなだけあたしに世話かけさせておきながら、もう忘れたとく？」

笑顔だというのに、何か恐怖を感じるこの表情……まさか？

「えつと……ひよつとして、高坂さん？」

髪型が大分違うけど、この有無を言わせないような迫力はあの人以外考えられない。

「へっ？　吉井……あんたも、この数年であたしの事なんて記憶から外れてしまったと？」

しまった……余計な疑問を口にしてしまったか。

「朝倉先輩、皆さん、おはようございます」

よかった。ムラサキさんが姿を現してくれたおかげで意識がそれた。

「エリカちゃん、今回は色々ありがとね。エリカちゃんの協力がなかったら絶対に実現できなかったから」

「い、いえ……私は……」

「いや、そんなことはないぞ。本当にムラサキの力は大きかった」

確かに。ムラサキさんの統率力と情報伝達力がなければここまで多くの人はこない筈だ。

「流石、風見学園の長い歴史の中で、最も長期に渡って生徒会長の座についただけのことはあるわ」

「それを主導した黒幕がよく言うぜ」

杏ちゃんが生徒会長を引退する時期、杉並君を加えて大騒ぎをして、ムラサキさんがその騒ぎを沈めたのが彼女が生徒会長になるきつ

かけになった。

「そりゃ、そうかもしれないが……」

「その件に関しては未だに少し根に持っている部分はありますが――」

そりゃあ根にも持つわ。全て杉並君や杏ちゃんの手のひらで踊らされたようなもんだし。

まあ、それでも彼女が生徒会長の座に送ったのは正解だと僕も思うけど。

「ですが一応、先輩方にはお世話になっていましたし、前学園長には本当にお世話になりましたから」

そう言っつて爽やかに微笑んだ。

「んまあ、それにしてもさあ、コレ。どうなんだろうね。大丈夫だよね？　ギリギリ」

高坂さんが制服の裾を摘みながら苦笑いを浮かべて言った。

「ま、まゆきまでそんなこと言わないでよ！　大丈夫、きつと大丈夫よ！」

「ど、どうしたの、そんなに熱く」

「な、なんでもない、なんでもない。全然、うん。誰もコスプレの心配なんてしてないって」

「はあ？」

ああ、そういう心配ね。別に似合っつてれば問題ないと思うけどなあ。

「まあいいわ。音姫、そろそろ準備。体育館の方へ。先に軽く打ち合わせもしたいし」

「あ、うん、そうだね。それじゃあ私は行くけど、久しぶりの学校だからってあんまりハメを外しちゃダメよ？」

「あんたもよ、杉並！」

「ふっ、何を言う。我々は成長したのだ。後輩たちにもつともない姿を見せたりはせんさ」

「ならいいんだけど……」

「では先輩方、参りましょう」

『さて、今回の趣旨は説明した通りですが、風見学園の電灯に則って、芳乃前学園長を一番喜ばせる

ことができたクラスには——』

音姫さんが溜めをつくると、打って変わってシンと静まる。

『豪華賞品を贈呈したいと思えます！』

賞品と聞くと皆、一気に歓声を上げ、体育館内の空気が震えた。

みんなこのイベントに参加したいと思ってる以上、同時に見返りも期待していて、それがわかっているからこそ生徒会もその期待に応えるという姿勢を持つてるからこそ、そういう信頼関係が表れてるのだろう。

「当然ね、ふふふ」

近くでは杏ちゃんが悪い笑みを浮かべていた。

ちなみに音姫さんが代表として壇上に立っているのは杏ちゃんがムラサキさんや音姫さんに働きかけ、当世代一番人望の厚い生徒会長だった音姫さんを推薦したからだ。

それにはムラサキさんやまゆきも大賛成だったし、音姫さんもそれなりの人数から推薦されればあの人の性格上、断れないので若干渋りながらも了承したらしい。

『みなさん、静粛に。静粛に！ 本日、こうして体育館や校舎の使用、また今回のイベントそのものの開催に尽力してくれた現在生徒会役員のみなさんには感謝に堪えません』

音姫さんの言葉に舞台の脇で控えていたムラサキさんが顔を赤くしながら俯いていた。もしなしくなくても照れてるのだろう。

『ですから、在校生や教員の方々に迷惑にならないよう、先程も申しましたように協調と自制を持って盛り上げていきましょう！』

再び上がる歓声と共に、音姫さんの挨拶が終わった。

「懐かし〜！」

所変わって僕らのかつての3年3組の教室。そこに入るなり、小恋

ちゃんが喜びの声を上げる。

「付属の教室は俺たちでも懐かしいよ。な？」

「うん」

「これで一気に戻ってきたな〜って感覚が強くなるよ」

「……既に、記憶がぼんやりしているわ」

「俺、間違つて本校3年の時の教室に行きそうになつちやつたよ」

杏ちゃんや渉にとつてのこの教室は単なる過去のものという認識が強いようだ。

「今回は芳乃嬢が学園長だった頃の再現だからな。俺たちはあくまでチーム付属3年3組、ということになる」

「そうでないと、困るよ。本校時代のクラス分けで考えると私が所属するチームがなくなつちやうでしょ？」

小恋ちゃんが島を出たのは本校に上がる前だから、それ以降のクラス分けになつたら行く場所に困っていただろう。

「はいはい！ 無駄話してないで、一旦席の着いて〜！」

久しぶりに委員長だった沢井さんの声で騒がしい教室が静かになる。

「そういえば委員長、どの席に座つたらいいんだ？」

そういえば、当時のクラスに分かれたものの、1年の間には席はいくらかわ変わるもんだし、さくらさんが行方知れずになるまでの間にも席替えはあつたからどういふ風に座ればいいのか判断に困る。

「桜内、委員長って呼ばないでって何回言つたらわかるの？」

「いや、それはわかつてるんだけど……つい癖だな」

「そういえば、僕や一部はちゃんと名前か苗字で呼んでるけど……みんなはなんで沢井さんを委員長呼ばわりしてたんだっけ？」

「ああ、委員長はもう入学から卒業まで6年……うち5回は俺と同じクラスになつて、その度にクラス委員長してたから自然とな」

「なるほど、それで……でも、もう卒業して同じ職場にいるっていうんだから少しは治そうとすれば？」

「そうなんだけど、やっぱり委員長は委員長だからな〜って」

僕の言葉に小恋ちゃんが困つたような顔を浮かべながら言う。

「ま、やっぱりあいつは『エターナル委員長』ってことで。ていうか、お前だつてえつと……西村先生だっけか？ あの人のこと『鉄人』なんて呼び続けてただろ？」

「え？ あの人の名前は鉄人じゃなかったっけ？」

「お前なあ……」

僕の言葉に義之が呆れた目を向けた。まあ、わかつて言ってるだけなんだけどね。

あの人の名前は西村鉄人ってことですよ？ あれ？ そつちであつてたっけ？

「つて……こんな話してたら時間がなくなっちゃうから。さあ、みんな席について」

委員長呼ばわりを嫌がっておきながら、ちやつかりみんなを統率するあたり、義之たちが彼女を委員長と呼び続ける理由がなんとなくわかつてしまう瞬間だった。

「いや、結局どこに？」

「付属3年の頃の席でいいでしょ？」

「でも、何回か席替えはあつたよな？」

「じゃあ、冬休み入る前の席でいいんじゃない？」

「……杏、その時の席順覚えてるか？」

「全然……」

どうやら今の杏ちゃんにはかつての記憶力を期待することはできないようだ。

「なんか、他の学年の時の記憶が混ざって、いまいち臙げだよね……」

「あ、私が覚えてるから、えつと義之がここで、それから……」

付属3年の頃が最後の風見学園生活だったからか、小恋ちゃんが当時の席を覚えていたようで、彼女と沢井さんの指示を受けながら5分かかつて、ようやく当時の席に着けた。

「席に着きましたね？」

沢井さんが教壇に立って、教室内を確認する。

「出席率は、9割つてとこかしら……。都合が悪くなつてこられなかった人たちも、参加したがつてみたいですから、彼らの分まで頑

張りましょう」

「あ……そういえば、山田くんがいないね」

小恋ちゃんが空席を見て眩く。

まあ、みんなも大学生か社会人なんだ。全員が都合よく集まれるわけでもないのだろう。

「ああ、山田の奴は、仕事が休めないからって連絡もらってたんだ」

連絡係の義之がみんなに聞こえるように言った。

「仕事？ 山田の奴、進学したんじゃないかなかったつけ？ アルバイトか？ バイトくらい休めるだろう……」

「いや、なんでも……学校に通いながら、常連だった模型雑誌の編集部とかで働かせてもらってるとかなんとか、言ってたような……」

「……なんだよ、充実してんじゃないか」

「なに、俺たちは俺たちで、これから充実すれば良いだろう？ とにかく、俺たちは来れなかった奴らの分まで楽しめばよいのだ」

「そういうことね」

「わかっているじゃない。そこまでわかってるなら簡単よ。うちのクラスは何をやるか、ささつと決めちやい——」

いいかけて沢井さんが頭を抱えた。どうした？

「おい、どうしたんだ委員長？」

「ううん……出し物って、中々決まらないのよね。委員長の仕事の中で、これが一番苦痛だったのを思い出して……」

ああ、そういえば僕が付属3年の頃からこの出し物決めの度に沢井さんが頭を悩ませてヒステリック起こしてたのを思い出した。

やる気がない時も多ければ、各々の意見が突拍子もなく大半を却下させたり、まとめられなかったり、沢井さんにはかなりの気苦労をかけてしまった。いや、本当に彼女が委員長だったからこそ、彼女のいるクラスはどうかまともなことができたのだろう。

今になって彼女に感謝の心が芽生えてきた。

「ようやく開放されたと思ったのに、なんで私はまた出し物決めなんてやってるって思ったら、頭痛が……」

「まあまあ、委員長。落ち着いて」

「委員長って呼ばないで。月島さんが転校していった後も、色々大変だったんだからね」

そう言っただけで沢井さんは恨みがましい視線を小恋ちゃんに向ける。

「あ、あはは……そうだろうね……。それは、想像に難くないです」

実際、僕たちがいるクラスの人間は一筋縄ではなかった。そんな人達をまとめ上げたのだから沢井さんは本当にすごい人なんだと思う。

「ともかく、今日はさくつと決めるからね!」

「って言われても……文化祭にクリパに卒パを6年間繰り返したわけだろ。もうネタなんてないぞ?」

「ん……別にもう新しいものを求める必要はないんじゃないかな?」

「ん? そりゃあ、どういうことだ?」

僕の呟きに渉が反応して尋ねてきた。

「いや、6年間っていうけど……僕が来たのは付属3年の時だからね。それに本校からは小恋ちゃん転校してたわけだからそういった一部の人を知ってる部分に限りはあるでしょ?」

「うんうん」

僕の言葉に頷く小恋ちゃんを横目で見ながら話を続ける。

「今回はただのパーティーじゃなくて、さくらさんの回帰を祝うための祭りなんだから、

あの人が求めそうなものにしたらいんじゃないかな?」

「そうだな。同士吉井の言う通り、俺たちが今考えるべきは目新しさでなく……懐かしさではないか?」

「それって……付属3年の頃の出し物を再現しようってこと?」

「完全再現とはいかないまでも、そこから考えをスタートさせるものも悪くない、と思うな」

「付属3年の頃の出し物ってえと、何だったっけな?」

渉が当時の出し物を思い出そうと頭をひねっていた。

「確か、文化祭はフランクフルト屋さんをやったよね?」

「卒パの時は、コーヒー屋台だったよね。それは覚えてる」

「どっちも無難な食い物系だったじゃないか。攻めてねえな、当時の

俺ら……」

「でも、クリパの時は盛り上がったたでしょ？　正直、あそこで全力使い果たした感があったのよ」

「クリパって、何やったかしら？」

「いや、発案者が忘れないでよ。人形劇でしょ？」

「ああ、人形劇。あったあった」

「ああ、そういえばそうだったわね」

　　ようやく思い出したのか、杏ちゃんがうんうんと頷いていた。

「あれ、いいお話だったよね。エト、エト」

　　主役のお姉さん役だった小恋ちゃんが当時の劇を懐かしむようにかつて練習していたセリフを繰り返す。

「でも、あんなにメルヘンチックな脚本を書いたのは、後にも先にもあれつきりだったよな」

　　そういえば、あれからは何本かは手がけてたけど……あれ以降は少々リアルな作風なものが多かった。

「あれは、特別だったから」

「ねえ、どうやったらあんな話が思いつくの？」

「……あの話はね、子供の頃から何度も見た夢がモデルになってるの」

「それって、いつの頃？」

「いつの頃だったかしら？　確か、雪村流暗記術を覚えた頃だったと思うけど……」

「じゃあ、私が知り合った頃？」

「多分」

「へえ、夢であんな物語を見るなんて、杏ってば、意外とロマンチストだったんだね」

「まんまじゃないのよ？　ちよつと悲しい夢だったから、それが子供の頃からずーつと納得いかなくてね……。だから、夢はあくまでモデル。内容は、自分流にアレンジしてみたのよ」

　　そういえば、結末のあたりで悩んでたって言ってたっけ。それで最終的にはハッピーエンドにするって言ってたんだった。

「いいんじゃない？　あの人形劇、再演してみるとか」

「義之、小恋。台詞、思い出せる……?」

「え?」

「えっと……」

杏ちゃんの疑問に義之と小恋ちゃんの表情が渋いものになる。

僕も役はなかったとはいえ、話の大雑把の流れは覚えてるものの、どの役がどんな台詞を言うのかまでは覚えちゃいない。

「今の私じゃプロンプは出せないわ。これから台本渡して、明後日までに覚えきる自信……ある?」

「やれと言われれば頑張るけど……なあ、小恋?」

「う、うん……」

「これから演出つけて、対応できる?」

「ああ、えっと……」

「頑張ります」

「……無理ね。演劇をやってる身としては、そんな程度の低いクオリティーのものを人前で演じさせるわけにはいかないわ」

杏ちゃんのプロ意識は高いようだ。もう何年もブランクもあつて台詞も思い出せない中、残り時間も少ないこの状況では無理と判断したのだろう。

僕が同じ立場でもあまりオススメはできない。

「それに、人形はどうするの? 前の人形を補修して使う?」

「あ、そういえばエトの人形、どこにしまったっけ?」

「あ、違うよ義之。エトのお人形もシャルルのお人形も……私のおうちに飾ってあるの」

だとしたら、今更取りに戻っても間に合わない。

「今からセットに新しく人形を作ろうとすると、準備だけで数日はかかるだろう」

「明後日までとなると、かなりやつつけの仕事になっちゃうわね」

「じゃあ、尚更ダメね」

「だったら、どうすんだよ……」

渉が肩を竦める。

「かと言って、ここで無難な食べ物屋にしてもね……」

インパクトも弱そうだし、これでさくらさんの事を祝えるとも思えないし。

「だったらさ、杏たちが企画してたセクシーパジャマパーティーなんてよくね？ 俺、ああいうの大好き」

そういえば、本校の1年辺りだったか、ななかちゃんも同じクラスだったということもあって、人気が出そうだったからと杏ちゃんや茜ちゃんがそういった企画を持ち出したんだっけ。

確かに圧倒的な人気を誇ったものの、結局終盤辺りで生徒会に取り押さえられたんだけどね。

「でもなあ……今更、パジャマってのも、ちよつとマンネリだよね……」

「そうか？ 俺は大好きなんだけど……だったら、他の衣装にしてみるとか？」

「かといって、水着ってのもマンネリだし」

「パジャマもダメ、水着もダメ……他に何か意見はないのか？」

「メイド服……てのは、なんか違うかな……」

「杉並、お前はどうかんだ？」

「もう少し板橋が頭を抱えている様を見るのを楽しむとしよう」

杉並君含め、他のみんなも『見守りモード』に入っている。

何度もこのメンバーが同じクラスになって、同じように出し物決めしている時にわかったが、僕らが同クラスにいる場合は僕たちに好き勝手意見を述べさせてそれを見るのを楽しむらしい。

「あ、そうだ。マージャー様あー！」

いきなり渉が突拍子もないことを叫んだ。

「な、何急に……」

「ほら、本校1年の秋季体育祭でさ、いいんちよ、変なコスプレしてたじゃん。悪の秘密結社の女幹部みたいなやつ！」

そういえば、そんなことがあったっけ。その時の沢井さんの姿がすごくインパクトがあって、教頭先生もお気に入りになったようだ。

それから僕もいつも真面目な姿を見てるからか、ものすごくギャップを感じて思わず見入ってしまったってななかちゃんにすごく怒られて、

機嫌を取るのが大変だった。

「俺、いいんちよのマーヤー様、もつかい見たい！ 見たいーいー！」

「ダ、ダメよ！ 変なこと言わないでよ！」

「ついでに他の娘たちの色んなコスプレも見たいーいー！」

「板橋！」

渉のスイッチが入って変なテンションになってしまった。

けど、渉の言葉にみんなもいいかもという反応が見受けられる。

「あ、だったらセクシーコスプレパーティーってことにしたらどうかな？ それならパジャマや水着がいても可笑しくないし」

「いいね、いいね。それいいね。ただし、いいんちよだけはマーヤー様限定だけだな」

「そ、そんなの許さないわよ！ ていうか、もうそんなのできる年齢じゃないでしょ、みんなも……」

「そんなことないと思うけどね」

杏が周囲を見回すと、割とみんな乗り気になっているようだ。

「ちよ、ちよつと……つ、月島さんは反対よね？」

沢井さんは最後の砦である常識人の小恋ちゃんにすがるように言う。

「えー、うん。反対は反対だけど……」

「けど……？」

「……た、多分、もう私じゃ止められないと思うよ？」

「……………」

小恋ちゃんの言葉に沢井さんは肩を落とした。このクラスの大半が騒ぎだせば、これを止めるのは不可能に近い。

「ふふふ、沢井よ。諦めるのだな。今回の我々の出し物はセクシーコスプレパーティーだ！」

「観念なさい、委員長。みんなあなたのマーヤー様が見たいのよ」

「よー！ 人気者！」

「い、嫌よ！ 私は絶対に嫌だからね！」

教室に委員長の声が、虚しく響き渡る。凶らずも僕たちの出し物はセクシーコスプレパーティーに決まったのだった。

「お、来た来た。待ってたよ、みんな」

ところ変わって音楽室。そこには別クラスで既に出し物を決めた後だろうななかちゃんが待っていた。

「悪い、出し物の件で長引いて……」

「義之たちがヒートアップするから」

「いや、あれは主に渉と杉並がだろ」

「だってさ、コスプレだぜ？ 女の子に合法的に色んな格好させられるんだぜ？ ヒートアップするに決まってるだろ！」

渉はいまだに嬉しいのかハイテンションの状態が続いていた。

「あはは、そっちのクラスは相変わらずだね」

「まあ、確かに懐かしいけど……こんな時までああだとね」

「おかげで私とか委員長が苦労してばかりなんだけどね」

小恋ちゃんがため息混じりに愚痴る。本人に言ったら怒りそうだけど、それが小恋ちゃんや沢井さんの宿命だとしか言えない。

「けど、またこのメンバーでこの音楽室に集まったのはちよつと嬉しいね」

ななかちゃんの言葉にみんなが同意して頷くが、

「あ、いや、そうでもないかな」

言った傍からいきなり自分の言葉を否定する。

「いや、なんでさななかちゃん」

「ちよつとじゃなくて——かなり嬉しいかも」

いたずらっぽく言葉を付け加えた。

「あはは、そういうこと……」

「それは私もだよ。なんていうか、私たちの青春っていうのかな、これ……」

「だな。クラスとはまた違った、このメンバーはこのメンバーならではの思い出つてのがあるしな」

最初はちよつと合わせてと頼まれてなんとなく参加してみれば、急にオンコロに出るなんて言い始めて、驚きながら参加することになって、バンドができあがった。

練習して、楽しいこともあつて、途中悲しいことにぶつかった時もあったけど、それを通じてメンバーの仲が深まったと今なら当時の出来事がいい思い出に思える。

「だから、ちよつとじゃ足りないね」

「うん。僕もそう思う」

「さて、暖かい思い出話もここまでにして、早速ライブの打ち合わせしようぜ」

「賛成！」

「異議なーし！」

昔の出来事を思い返すのもいいけど、ライブのことも考えないかね。

「でも、ステージとか大丈夫なのか？」

そういえば、バンドのことは僕たちの間で決めたことでまだ生徒会には申し出てないからな。

「心・配・ご無用！ その辺のネゴはできてるから安心してくれ！」

「へー、やるじゃん」

「仕事早いねー」

「ま、バンドに関しては俺に任せてくれていいってことよ」

渉は昔から音楽に関しては本気だったが、それは今でも変わらない。い。

「こういう時の渉は頼もしい。」

「なら、時間も惜しいし、早速合わせてみるか」

「うん、そうだね。1分でも多くみんなで練習しよー！」

「合点ー！」

それからやる気に満ちたまま練習を始めたものの――

「や、やばいな。全然指が動かないぞ……」

「私もだよ。長い間触ってなかったから、かなり練習しないといけな
いかなあつて思ってたけど、想像以上だった……」

「俺もだぜ。てか、ドラムが安定しないとみんなも困っちゃうよな」

「僕も……料理のことばかりでゲームもほとんどやらなくなったから
なあ……」

競う相手もないから音ゲーはおろか、アクションもRPGもやら
なくなったからな。

おかげでどんだけミスしたか。まあ、ななかちゃんの歌は相変わら
ずうまいけど。

「だいぶ、下手つぴになってるな……」

「でも、歌っててすごく楽しいよ？ 久しぶりにセッションできる
だけでこんなに楽しいと思わなかった」

「そうだね！ それに、みんなやればやるほど少しずつ勘を取り戻し
てる気がするし」

「おうよ、この調子でやってればきつと間に合うぜ」

「まあ、俺たち自身が楽しむのが重要だしな。そうすりや聞いてくれ
る人たちも楽しんでくれるさ」

「そうだね。じゃあ、このまま本番向けて楽しくいきますか！」

「「おう！」「」」

それから僕らは身体がガタガタになるくらい練習を続けたのだっ
た。

第九十三話

パーティーの出し物を決め、バンドの練習を重ね、更に当時のクラスのみんなで出し物の準備に勤しみ、時間はもうすっかり夜になったこの頃……。

「えー、それではただいまより、第……んと、何回目だっけ？」

「別に何回目でもいいだろ。とりあえず、真に男を虜にするのは誰か……最強料理対決、ここに開催だ！」

「「イエー!!」」

「……ドンドン、パフパフ」

「ひゃっほー！ 待ってました！」

「待ちかねたぞ」

雄二の開催宣言に僕たちはノリよく口笛や拍手を家庭科室に響かせる。

「わーわー！ パチパチパチ」

「お腹がすきましたわ」

「私もお腹空いたわ」

「みんな、はしたないなあ。美夏なんかこれっぽっちも、お腹なんか空いてな——」

——ググウ~~~~~!

「なんだとっ!？」

言葉とは裏腹に、天柵さんはとても空腹だったようだ。

「おやおや？」

「これは何の音かな？」

天柵さんの空腹を訴える音が聞こえると、ななかちゃんと高坂さんがからかいに入る。

「ち、違う！ これは違う！ 別の音だ！ 腹の虫ではない！」

「別にそこまで否定せんでも……」

「つか、思いっきり空腹じゃねえか」

「それよりも、そろそろ始めた方が良くないのかの？」

「……料理が冷めてしまう」

「それもそつか。というわけで、選手の入場です！」

それから選手の紹介に入る。

「エントリーナンバー一番！ 料理をさせたら右に出る者なし！ 音

姫シェフとは私のことだ！ 朝倉音姫——っ！」

「シェフじゃないよ」

「シェフならここに最有力候補がいますけど」

義之が僕を指して言った。

「既に雑誌とかに出てる吉井は論外。というか、この料理対決は女子限定だし」

「なんで女子限定なんですか……」

「いいじゃねえか！ 明久の料理も食ってみてえけど、俺はもうこの女神たちの料理だけ食べれば何もいらねえ！」

大げさな、と雄二が呆れた顔して言うが、渉の気持ちもわからないでもない。

まさかこうしてみんなの手料理を食べる機会を得ようとは思わなかったからね。

「続きまして、エントリーナンバー2番！ あたい、お姉ちゃんを越えたい！ 健気な妹が苦手な料理で一念発起っ!? 朝倉由夢え——っ！」

「なんで、あたい……」

「いつの時代のスケバンですか……」

「いいぞいいぞ——！」

「ある意味、一番の楽しみだな」

そういえば、この場にいる人のほとんどは由夢ちゃんの料理はいつでもどの料理対決以来だったからな。

あの時は突然今回と同じような料理対決を催されて急な展開にテンプった由夢ちゃんがペースを乱して僕が教える前の腕前を発生してしまい、ちよつとした惨事を起こしてしまったのだ。

いや、あの時は本当に大変だった。由夢ちゃんの料理を食べた義之と渉を蘇生させるのに苦労したよ。

「さてさてお次はエントリーナンバー3番！ 癒し系アイドルは料理も上手だったあ！ 朝倉音姫の対抗馬、月島小恋おー！」

「お、音姫先輩の対抗馬なんて、滅相もないですっ！」

「月島あああああつ!!」

「板橋、少しうるさいぞ」

「あい……」

小恋ちゃんの登場に渉が雄叫びを上げるが、天枷さんのお叱りを受けて一気に落ち込んだ。

「続きまして、エントリーナンバー4番！ その悩殺ボディに負けず劣らず、料理もボリユームで悩殺だあ！ 花咲茜えええっ！」

「うふふーん♪ とろける美味しさだよー！」

「ぬああああああ、茜ええええええ！」

「板橋、今度そのような奇声を上げれば、即座に貴様を斬る」

「あ、はい……」

再び雄叫びを上げる渉に秀吉がとても低い、ドスの効いた声を使って渉を黙らせた。

雰囲気もまるでヤクザの纏うそれだ。流石演劇のエース。その腕前は留まる所を知らない。

「そしてラストはこの方！ エントリーナンバー5番！ 心当たりがある奴は、悪い事は言わん。素直に彼女に謝っておけ！ 雪村杏うううううー！」

「うふふ……今回の犠牲者は誰かしらね」

「怖いよ」

「くれぐれも、料理に変なもの混ぜないでね？」

「ど、どどどどうしよう？」

「いや、何でそこまで震えるんだよ？」

「ここに、心当たりがありすぎて……」

「一体今までお前は何やったんだよ」

震える渉を置いて、紹介後の料理のお披露目に入る。

「各選手、それぞれ自慢の家庭料理を作って持ってきてくれました！」

この教室は既にいい匂いで満たされております！ あー、お腹減っ

た！ さつさと食べちゃいたいところだけど、とりあえず審査員の紹介ね。まずは、タッパー持参は当たり前！ 永遠の非モテ男子、板橋渉うろうう！」

「基本だから！ タッパー持参は基本だからね、みんなあ！」

「誰に言ってるの、渉……」

「必死すぎ」

「まるで節約マニアの主婦ね」

「そんなだから永遠の非モテ男子なのですわ」

「ああ、みんなの蔑む視線がイイツ！ もっと見てっ！ 俺のことをもっと見下して！」

「そして久しぶりのM開花だし……」

その様子を見て女子のほとんどが引いてるし……。これでは本当に一生非モテもままになりかねない。

「はいはい、バカは放置することにして、続いてはあたしの永遠のライバルで、何故かグルメな舌を持つ男お、杉並——！」

「スクイズイート！ デリツイオーゾ！ グストーゾ！ オツティモ

！・セ・ボーン！」

「何故最後だけフランス語なんだよ……」

「次はまとめて一気に色気より食い気な娘たち！ 白河ななか、エリカ・ムラサキ、沢井麻耶、そして天枷美夏うろうううう！」

「ち、違います！ くじ引きの結果、食べる側になっただけですわ！」

「そ、そうよ！ 私だって料理くらいできます！」

「んー、私は色気より食い気かもー♪ 明久君の料理、美味しいから！」

ななかちゃん、嬉しいことを言ってくれる。

「さあそして！ この男が勝敗の行方を握ってると言っても過言ではない！ ご存知、弟君こと桜内義之！」

「なんで俺がそんな重要ポジションにいるみたいに！」

でも、実際そうだと言っても過言じゃないのは確かだからね。

「弟くん！ よろしくね〜！」

「兄さん、わかってますよね？」

「義之くくん！ 私に清き一票を入れてくれるよね？」

「義之……無事明日の朝日を眺めたいなら、誰を選択するべきか、言うまでもないわよね？」

「最後が怖いよ！」

杏ちゃんのはもはや脅迫だ。

「ほら、小恋ちゃんもアピールアピール」

「え、えつと……あは……義之、美味しいと思うから、たくさん食べてね」

「お、おう……ありがとう」

わあ、小恋ちゃん……あのもじもじした仕草で上目遣いのあの言葉はとんでもないコンボだ。

例えば心に決めた人がいようと、あれで靡かない男はいない。現に僕も結構クラッと来たし。

「明久くん？」

「僕はななちちゃんしか見てません、はい！」

してない。僕は決して目移りなんかしてないからね！

「私は色気より食い気じゃないのに」

「沢井、まだ言ってるのか？」

「だ、だって！ そういう高坂さんだって、食い気の方でしょ！」

「当たり前よ。何もしないでみんなの美味しい料理が食べられるんだから、断然そっちの方がお得じゃない！」

「うわあ……」

あまりにもハッキリ言うから、呆れを通り越して感心すら覚える。

「色気より食い気、万歳だコンチクショウ！ 毎日毎日陸上陸上で大學生になってもまだ彼氏がないのよ、文句あるかー！」

「す、すいません、もう言いません」

高坂さんの気迫に沢井さんは気圧された。

「まゆき、逸れてる逸れてる」

「落ち着いてください、まゆき先輩」

「はっ！ ごほん、んんんっ！ えつと……なんだっけ？ あ、そうだ

！ それでは、今から魅惑のお食事タイムとさせていただきます！

審査員の皆さんは試食をして、どの料理が一番美味しかったのか、しっかりと吟味して投票してくださいね！」

高坂さんの言葉に審査員メンバーが拍手で応え、それぞれ審査員という文字と名前が書かれた席に座る。

「それではまず最初は、音姫の料理から！」

「はい！ えっと、いつもの和食に少しアレンジを加えてみました！ 肉じゃがカレー風味と手ごね豆腐ハンバーグ、それを根菜たっぷりの味噌汁です」

「うわ、うまそう……」

「いったただきまーす！」

「最初からあまり飛ばして食べるなよ。最後の方、腹に入らなくなるぞ」

「大丈夫、大丈夫。とにかく今、腹ペコなんだから！ はぐはぐあむっ！ ん……うんめええええええ！」

某作曲家の第五番が流れるようなノリで美味しいという表現をする渉。

しかしこれはすごい。カレー風味の肉じゃがに使ってるスパイスの量は少なめなもの、カレー特有の香りを放ちながらそれぞれの材料の持ち味を引き出してるし、ハンバーグもヘルシーなものを使いながら、ポリユームは大きい。けれど、決して飽きない旨さ。

そして根菜の味噌汁も、渋みと甘味が協奏曲を奏でるように口の中に広がって……とにかくすごい！

「弟君、どう？ おいしい？」

「うん、いつ食べても音姉の料理は美味しいよ。ほっとする味で、もう俺の家庭の味って言ってもいいかもしれない」

うん。それ、下手すればプロポーズだから。もう、ここで告白してもいいんじゃないか？

いやいや、まだだ。まだ早い。

「はうーっ！ 家庭の味って。お、弟君！ いっぱい食べてね！ たくさんあるから、好きだけ食べてね！」

「いや、まだ料理はあるから」

「やばいわよ、小恋ちゃん！いきなり最初から高評価よお！」

「音姫先輩だからね〜」

「お姉ちゃん、ロンドンに行ってからますます日本食に凝りだしたんですよねえ」

まあ、イギリスじゃ環境の違いや文化の違いもあるからか、日本の食材は中々入らないもんね。

「でも私たちも早くご相伴に預かりたいわね。音姫先輩の手料理、久しぶりに食べてみたいわ」

「うんうん……」

「あー、美味しかったあ……みんなしつかり吟味したわね!？」

「たりない！もうちよつと食べたかったあー!？」

「俺も、イマイチ満足感ねえな」

「全員の試食が終わったら好きなかだけ食べていいから、もうちよい我慢しなさい。てなわけで、お次は由夢ちゃんだー!？」

由夢ちゃんの名前を聞いてこの場にいる何人かが冷や汗を流した。自宅の方では僕が本島に行くまでは先生じみたことやってたからいいけど、前は突然の事に動揺してちよつとした事件を引き起こしちゃったのがまだみんなの記憶に残ってるのだろう。

「だが、由夢は変わった」

「え、どんな風に?」

義之の呟きに反応して沢井さんが問うと、由夢ちゃんがこほん、と咳払いをする。

「今は私、料理の専門学校に通ってますから」

「そうなのですか?」

ムラサキさんや他のメンバーも驚く。僕は義之と本人から進路を聞いてたから知ってたけど、

他のメンバーは卒業生故、あまり伝わっていなかったのだろう。

「由夢の料理は美味いぞ。美夏も、桜内のお弁当で食べたことがあるな、桜内!」

「ああ、由夢が作ってくれたお弁当、美夏にほとんど食べられたけどな」

「それくらい美味しかったということだ！」

「えへへへ」

「そういえば、妙に凝った弁当が偶に来ると思ったら……」

同じ職場の天枷さんと沢井さんの評判を聞いて由夢ちゃんが照れくさそうに頬をかく。

「こいつは期待できるぜ、由夢ちゃん！」

「ほほう、その腕前が楽しみだ」

「前のような惨事にならないでくれよ……」

「こら、雄二」

失礼ながら、僕もそうならないことを内心願っていたけど……。

「はいはいみんな落ち着いて。では由夢ちゃん、料理の説明お願いしますー！」

「はい！ 今回は中華にチャレンジしてみました。若鶏の唐揚げと海老チリソース、それと手作り鉄板焼き餃子です」

「おお、頑張ったな」

「はい、学校で習ったところなので」

確かにこれは中華の基本料理の一部だ。ちなみに本格的な中国料理となると、具やソースに中国産地の香辛料などが使われ、結構辛味のあるものも多い。

特に四川料理となると、辛味の強いものが多くなる。

僕もいつペン、四川料理店の料理を食べたことがあるけど、あれは本当に辛かった。しばらく舌がヒリヒリしっぱなしだったし。

「んじや、こつちもいただきまーす！」

「んぐ……ほう、これも美味しいなあ」

「んんー！ 鉄板餃子美味しいー！」

「うまい具合に底面がパリっとしておるのお」

「おお、この海老も美味しいな！」

「唐揚げもジューシーですわ！」

「ほう、これはなかなか」

「んんまあいい！ 店で食べてるみてえ！ 米おかわり！」

「涉、まだメンバー残ってるからもう少し抑えて」

「でもすごいわね。あの腕前からこんなにも美味しい料理が作れるようになるなんて……」

「や、あれは……その、緊張して……」

まあ、いきなりあんなことになれば誰だってテンパるだろうね。

「はうく……すぐく美味しそうだよ」

「月島も、そろそろ食べたいです」

「高坂先輩、がつつり食べてないで先に進めてください」

「んぐ！ ふあいふあい、たらいま！」

「食べるか喋るかどっちかにしてくださいよ」

高坂さんは水を口に流し込み、一気に料理を喉に送った。

「えー、ではどんどん行きますよー！ 次は月島の料理です！ どんな内容ですか？」

「えっと、私も基本和食なんですけど、お弁当風にしちゃいました」

「おう……」

「ギター！ 月島のお弁当おおお！」

「これは懐かしい」

「付属の時からだね」

お弁当にぎっしり詰め込まればお弁当は付属の時の昼休みの光景を思い出させてくれる。

僕たちは早速弁当に箸を伸ばして試食に入る。

「ん、これだ！ 卵焼きのこの味！」

「えへへ」

「くっ……ふうああああああ！ あぐっ！ んむうええええ！」

「板橋よ、泣くか食べるかどっちかにせんか……」

渉がものすごく涙を流しながら食べてる。あれ、涙の味も染み込んじゃってるんじゃないかな。

「うるへえ、しばらく感動させてくれ！ はああああ、月島の、月島のお弁当うううう！」

「お前、普段ごんだけ女子の弁当に飢えてんだよ……」

なんだか、ごんごん肌にツヤがかかっている気がするし……ごんだけ女の子の料理に飢えていたんだか。

でも、本当に美味しい。各々の好みに合うように火入れにも気を付けてるし。

素朴だけど、こういう気遣いのある料理ってホツとする。

「なんだかあたしも昔にタイムスリップしたみたい。月島のお弁当はノスタルジーに浸らせてくれるおふくろの味ね」

「まゆきく……私も早く食べたいってばー!」

「お腹空きました」

「あの人、まだあと2人残ってるんですけど〜?」

「高坂先輩?」

「はっ! そうだった! えー、次は花咲の料理だー! どういった料理なの?」

「はい! 私の料理は、ザ・アメリカン! 直径25cm、高さ30cmの巨大ハンバーガーです!」

「でかつ!」

目の前に出された巨大ハンバーガーを見て僕と雄二が同時に驚きの声を上げる。

「うおお……」

「で、でかすぎる……!」

「これは、巨大じゃのう……」

「中に2枚の巨大ハンバーグと、牛肉ステーキが1枚挟んであります。大きいので切り分けますね〜」

「あ、あたしは……このままかぶりつきたいんだけど」

「俺もこれくらい食えそうなんだがなあ」

「まあまあ、ひと切れの大きさも尋常じゃないので、はいどぞー」

差し出されたハンバーガーの一部は、切り分けられたにも関わらず、確かに尋常じゃない大きさだった。

そこらにあるハンバーガー店のよりも2倍はある。

「い、いただきます……!」

圧倒的なボリュームを前に戦慄しながらも、みんな一斉にハンバーガーにかぶりついた。

「……んん!」

「うんめええええええ！ 肉汁すげえええええええ！」

「こりやあ……肉の弾力もだが、このソースもすげえなあ」

「これは、うーまーいーぞー！ー！！ あたし好みのいい肉加減だわー！」

高坂さんが口から光線でも吐かんほどの叫びを上げて好評した。うん、確かにこれはすごい。

「気に言ってもらえて何よりです」

みんな満足したのが嬉しそうで、茜ちゃんはお辞儀をする。

「まゆきー、早く雪村さんの料理を紹介して！」

「私、もう耐えられません」

音姫さんと由夢ちゃんもそろそろ我慢の限界のようだ。さつきからお預け喰らってるしね。

「はぐつ、そうだった！ さーそれでは皆さん、最後のエントリー、雪村の料理だー！」

「和食に中華にアメリカン……みんなだいぶ胃が疲れてるんじゃないかと思って……私の料理はすっぽん鍋」

「な、なにー!? すすすす、すっぽんー!?」

「斬新だな」

「流石雪村。メは鍋ときたか。しかもすっぽんとは……そのセンスは全く錆び付いていないようだな」

「うふふ、心ゆくまで温まりなさい」

「こ、これはなに？ すっぽん食べて、ここにいる女子たちとハアハアしてもいいってこと？ ねえ？ でゆふふふふー！」

「んなわけないでしょうが！」

確かに、すっぽんが精力剤の材料として使われることもあるけど……。

「これは、初めて食べましたが……」

「うまいのお」

「……いい出汁が出てる」

「ん……翔子の家で食ってたのと大差ねえな」

「……雪村、中々やる」

「ああ、これもいい。メとしては最高の一品だわ。雑炊にしてもいいかもー」

「もう我慢できない！ 私も食べちゃうんだからねー！」

「って、こりや音姫。まだ審査の途中でしょ」

「だつて〜……」

「まあまあ、これで料理は出揃ったわけですし、みんなで一緒に食べましょうよ」

「そう？ 弟君が言うならまあ、それでいいけど」

「やったー！」

「やつと食べられます」

「わーい、いただきまーす！」

お預けを喰らつてた音姫さんたちもようやく料理にありつけ、賑やかな夕食になった。

「あ、そういえば忘れてたわ！ みんなの投票も終わったみたいなので、ここで結果発表ね〜！」

「げ……」

高坂さんの発表宣言に義之の顔が引きつった。

「まさか、義之……」

「あはは……」

僕が問い詰めると、義之は目を泳がせた。てことはやっぱり……。「ん？ まだひとり投票してないよ？」

高坂さんの言葉を聞いて本人を除いて全員が義之に視線を向ける。

「まさか、また弟君？」

「兄さん？」

「ちゃんと投票しなきゃ、審査員の意味がないよ〜」

「え、えつと……みんな美味しいから決められないって理由は……」

「「却下」」

満場一致で義之の提案は却下された。

「だめだよ義之君。ちゃんと投票しないと」

「そうだぞ！ 俺だつて、辛いけど散々悩んで投票したんだからな！」

「数秒悩んでさっさと月島に入れたがな」

「へーほー」

「渉は小恋に投票したと。これはいいことを聞いたわ」

「あーん、言っちゃやだあ」

「で？ 誰に投票する気じゃ？」

「……審査員になった以上、義務は通すべき」

「さつきと決めろ。自分の一番好きな料理に票入れりゃいいだけだろ」

「さあさあ、票なんてまどろっこしいことしなくていいから、この場でさつきと言っちゃいなさいよ」

「ぐ……わかりました。では、言います」

「おお……」

遂に義之の口から今回の勝利者の名が告げられるか。いや、現時点で誰が一番なのかもわかんないけど。

「……ドキドキ」

「わくわく♪」

「……えつと、やっぱりどれも美味しくて最高です！ 以上！」

そう言つてすぐに脱走しようとした義之だが、

「それで納得できるか！」

先回りした僕と雄二のダブルラリアットで床に沈めた。

「ぐふっ!？」

「なんと優柔不断な……」

「……進歩してない」

「てか、何よ！ さつきの思わせぶりな間は！」

「いい加減にしなさい！」

「義之君のバカー！」

「期待してたのにー！」

「兄さん、最低です！」

「あんたにやあ、乙女のプライドがわからんのかあ！」

「ぎゃあああああああ！」

床に沈めてから女子たちの猛攻に義之は悲鳴を上げた。

「……さて、こつちも用意しなきゃね」

「お？ 明久、なんだそれ？」

「ん……女子たちが作ってる間に学園にいるみんなの夜食としておにぎりをね。あと、デザートにパンケーキを大量生産して」

「いつの間に用意しておったのか」

「……用意周到」

「まあ、中には学園で夜を明かす人もいるからね」

「どれどれ……ほう、割と美味しいな」

「ああ、待ってよ。どうせなら好みでアイスとかメープル、チョコソースとか色々用意しておいたから」

「ほう……それはいいの」

「……吉井、私はいちごと生クリーム」

「はいはい」

「吉井！ 美夏にはバナナとチョコソースだ！」

「了解」

「——って、こっちも助けてくれないかあああああああ!？」

義之の悲鳴を背に、僕たちはデザートを楽しんでいた。後、食べ終えたらすぐにななかちゃんや他数名の手を借りて、学園のみんなにおにぎりを配布した。

ななかちゃんや女子がいたため、みんなが自然と群がっておにぎりの配布は結構早く済んだ。

「……ん？」

準備も大分進み、キリのいいところで解散したところで義之がこっそりとどこかに行くのが見えた。

「なんだろう？」

僕は気になって後をつけてみた。どうやら行き先は屋上の上のようだった。

「来たか」

義之が屋上へ入ると、僕は壁越しから耳を澄ますと、杉並君の声が聞こえた。

「どうやらいつも通り、彼がこのパーティーで何かしようと思ってるのだろう。」

「何だ、また変なことでも企んでるのか？」

「当然だ。この祭りのクライマックスは俺たちが持つていく。それは当然のことだろう？」

杉並君がニヤリと笑ってる姿が容易に目に浮かぶよ。

「けど、具体的に何するつもりだよ？」

「計画は既に考えてある。この文書にまとめておいた」

文書にして纏めるとか、どこの組織ですか君は。

「……へえ、中々面白そうじゃん」

義之が面白そうな声を出してるあたり、さくらさんも喜びそうなのだろうか。

「それぞれ別件での準備もあるだろうが、この計画も手を抜くことは許されん。」

「だから今のうちに可能な限り動いておくぞ」

「オーケー、準備しよう」

「やっぱこうでなくっちゃな！」

「さて、計画を進めるが……そちらの者はどうするかな？」

「げ……」

「どうやらこっちに気づいているようだ。」

「あつははは……」

「明久？」

「うおお!? お前、いたのかよ!?!」

「いや、義之がこっそり出ていくのが見えたから」

「き、気づいてたのか……」

「まったく……あれほど傍聴や追跡には注意せよと念を押したのだがな。して、吉井よ。お前はどうするっ!」

「どうするって……そういえば、何を計画していたわけ？」

「ふむ……ここにるのがバレたとはいえ、計画を止めるわけにもいかんが……かと言って、今吉井に生徒会共に我々の計画を告げられるのは都合が悪いな」

「えっと、これなんだが……」

杉並君がブツブツ言ってる間に義之が杉並君の計画書を見せてきたのだが……へえ。

「これ、いいんじゃない？」

「だろ？」

「こういうことならさ、僕も手伝ってもいいかな？」

「む？ それは本当か？」

「うん。これならさくらさんも喜ぶだろうし、ね？」

義之を見ると、頷いて応える。

「ふむ……これは上々。思わぬ助っ人が入ったか。やはり同士吉井もこちら側の人間だったか！ 結構結構！」

「その代わりちよつと僕のお願いをね」

「む？ 吉井が俺にか？」

「うん、実は……」

それから杉並君を引っ張って端っこで僕の考えた計画を話してみた。

「……で、どう？」

「……ふむ。それも中々面白そうだ。そうになると、この計画と並行し、相応のメンバーを集う必要もあるな。そして過去のデータから見て一番盛り上がりそうな構成となると……」

僕が計画を話すと、杉並君も面白そうに乗ってくれたのか、何か計画を練ってるようだ。

「……うむ、いいだろう。これは今までで最高の祭りとなりそうだな。同士吉井の計画の進行は任せておけ。必要なものは追々伝えておこう。では、諸君！ 祭りの準備を始めようじゃないか！」

「「おうー！」」

杉並君の号令と同時に、僕らは闇に紛れ動き始めた。

第九十四話

5月5日……。今日がやつと祭りの本番だ。

ここまで本当に大変だった。自分のクラスの出し物の準備、バンドの練習やサプライズの準備など。

ほんの数日だったので、外観の出来はそんなにいいものではないが、どうにかさくらさんを迎えても恥ずかしくない程度にはできあがったと思う。

後は義之が今回のパーティーの主役を連れて来るのを待つばかりだ。

そう思っていると、校門の方が騒がしくなってきた。

見ると、義之がさくらさんを連れてきてるのが見えた。ようやくおいでなすったか。

その様子は瞬く間に全員に知れ渡り、すぐに校庭へ集合がかけられた。そしてグラウンドには到底収まりきららないほどの人で溢れかえり、その分は階段や空き教室などにも待機してもらったりもしていた。

ここまで来ていよいよ主役の登場。朝礼台の上にはちよこんと、昔と変わらない姿のさくらさんが立っていた。

『えー……。ホーン……。実は、ついさっきこのことを知らされたばかりで何も心の準備ができていませんでした』

さくらさんのスピーチが始まり、ゆつくりと間を取りながら紡がれていく言葉をみんな静かに聞き入っていた。

『連休中の……。本当に短い期間なのに、パッと見ただけでもみんながものすごく頑張ったのが良く判るよ！ みんな、すごいね！』

「「おおおおおおお！！」」

さくらさんのお褒めの言葉に、全校から大歓声が湧き上がる。

『ボクのために、ありがとう！』

さくらさんがペコリ、と頭を下げる。

『今日は、思いっきり楽しませてもらうよ！ パーティーは、みんなで

作るものだからね。みんなも、盛り上がってね!」

「「おおおおおおおおお!!」」

『レッツ スタート ザ パーティー!』

「「おおおおおおお!!」」

さくらさんの言葉と再び上がる大歓声を合図に、さくらさんの回帰祝いのパーティーの幕が上がった。

「お疲れ様です。大盛り上りですよ」

俺は挨拶を終えたさくらさんを迎えにいった。

「ボクもすぐくワクワクしてるからさ。みんなと分かり合いたいしね。もう美味しそうなものや楽しそうなものがそこかしこにあるよ! 全部全部、ひとつ残らず見て回りたいから、ほら行こう行こう!」
そうして俺はさくらさんに引っぱられながらも、今日の主役のエスコートを始める。

「うわー、本当にすごいねー。短期間でこれだけ準備するの、かなり大変だったでしょ?」

「大変は大変でしたけど……でも、それ以上にみんな楽しそうでしたよ。さくらさんのためになって気持ちもありましたし、久しぶりに学生時代の気持ちにも戻れましたから」

まあ、本当に学生時代に戻ったように、羽目を外して昔みたいに杉並を捕獲せんと生徒会との奮闘もあったし、また懲りずに『空飛ぶ自転車』を飛ばそうとするのを生徒会に止められたりと、ここまで学生時代を再現せんでもよかったのだが。

「にやはは、そうなんだ。楽しんで準備してくれたんだね、よかったあ」

さくらさんがくすぐったそうに笑う。その笑顔のためにここまで

準備したつてもんなんだ。

これを見れば例え今までの労働に不満だった奴がいても、祭りをやった甲斐があると言うだろう。

「で、色んな出し物があるけど、義之君のクラスは何してるの？」

「あゝ、えつと……うちのクラスはですね……」

今になって思えば、勢い任せで『セクシーコスプレパーティー』にしちゃったけど、あそこにさくらさんを連れて行っていいのだろうか？

内容だけでもかなりレアな上に、『私たちももう大人なんだし、学生時代よりもっとアダルトに攻めないかね』なんて言い出したので、内容が更にグレートアップされてもおかしくない。

俺は生徒会の手伝いやバンドの練習に、秘密の作業に集中してたおかげで内容の変わりようは知らない。

これはしばらく様子見た方がいいかもしれない。流石に健全な道から大幅に外れることはしないと思うが、あいつらのことだからここは慎重にいった方がいいだろう。

「まあ、見に行くのが早いかな。じゃあ、早速行こう行こう！」

「え、マジですか!？」

「マジだよ、早く早く！」

さくらさんに引つ張られ、俺はかつての教室へと連れていかれたのだった。

「いややっぱその、もうちょっと様子を見てからの方が……」

「あはは、おもしろそうだからいいじゃない！ えーつと、この辺だったかな？」

「そ、そっちより、最初は屋台を見て回りませんか？ チョコバナナとか、甘いお菓子のお店がたくさんありますし！」

「くつくつく……旦那ア……ウチの店を素通りするたあ、随分と罪だねえ？」

どうにかここから離れられないかと策を弄しているのに、背後から渉が現れて悪質な客引きを始めやがった。

「い、いや、俺たちはしばらく……」

「ちいつと覗いてつてくださいよお！ 旦那好みのいく娘が揃ってやすからー！」

お前はどこのヤクザだよって思ったが、こっちは今それどころじゃない

「ええい、知らん！ 悪いが、ここはしばらくナシで——」

「よーこそ、芳乃さくら嬢。お待ちしておりましたよ」

ここで更に厄介な奴が来やがった。

「あー杉並君！ にやはっ、来ちやっただよ♪」

「芳乃さくら嬢は実に運がいい。ちょうど今からスペシャルタイムが始まるところだったんです」

「本当？ やったー！ 義之君、入ろう、入ろう♪」

「いや、その前にスペシャルタイムって何だ？」

そんなサービスを導入したなんて、俺は聞いてないぞ？

「いいから、たつたと入る！ ご新規2名様お入りー！」

「「いらっしやいませ〜〜〜♪」」

「うおう!？」

コスプレするとわかつてはいたが、こうして並ぶとなんとも壮観だ。

着てるものがバラバラだからなんとも言えない鮮やかさが眩しいくらいだ。

「あははは、みんなすごい格好してるねー！」

「はいー♪ コスプレパーティーですから〜♪」

「う〜〜…こ、こんな格好で芳乃学園長にお会いすることになるなんて…〜くう〜」

「委員長、それ言わないでよ。余計恥ずかしくなるからー」

「月島さんは上着た状態の水着だからまだいいでしょ！ 私の格好なんか最悪よー！」

「そんなことないわ。見事な女王様の雰囲気は全身から溢れ出てるわ」

「私からすれば、それ褒め言葉じゃないから！」

「にやはは、みんなすごい似合ってるよ。かわいいー！」

「あはは、ありがとうございますー」

「芳乃先生、ゆつくりと楽しんでいってください。これは来店記念のクッキーです」

「わー、ありがとうー!」

「デザートや飲み物メニューもありますから、好きなものを選んでください」

「ただいまスペシャルメニューとなって、すべて無料となっておりますので」

「わ、タダなの? すごいね、義之君」

「そ、そうですね」

なるほど、さくらさん限定のサービスだったのな。店員の格好以外は大丈夫そうだ。

まあ、思わず身構えちゃったけど、今回はさくらさんが主役のパティリーなので、さくらさんに対しては全てが無料で楽しめるというサービスを導入してるわけなので金欠で特定の店のメニューが楽しめるようになるようなことはない。

「メニューも美味しそうなのがいっぱいある。ここは……カフェ屋さん?」

「いえ、マッサージュ屋さんです♪」

ちよつと待て! そんなのはこれっぽちも聞いてないぞ! ていうか、マッサージュ屋だったらこの種類豊富なメニューは一体何なんだよ!

「では、早速当店スペシャルマッサージュに2名様ご案内です♪ では、サービスお願いしまーす♪」

「は〜い!」

それから奥からメイド服を着た美人が出てきた。なのだが……。

「あれ? うちのクラスにあんな人いたか?」

よくよく思い返してみるが、全く思い当たる人物がない。いくら年を経たからって、学生時代から思いっきり顔貌が変わるなんてまずないと思うが。

「ん〜……どっかで見たようなく」

「さくらさんも小首を傾げながら記憶を辿ってるのだろうか、思い当たる人がいないようだ。マジで誰なんだ？」

「ほらほら〜♪ この際、ぶっちゃけたら〜？」

「……………僕です」

そう言つて美人さんは自身の長い髪の毛を取った。否、あれはカツラか。ていうか…………。

「…………明久？」

「…………あい」

「えーっ!? 明久君だったの!? ビックリ!」

さくらさんが大きさに両手を上げてびっくりの度合いを表現した。俺も、度合いを表そうとすればそうしていただろう。

「お、お前…………何で、女装？」

「…………セクシーコスプレパーティーなんだから、素質ある奴は女装してサービスしろって杏ちゃんが…………」

「そ、そうか…………」

そういえば、こいつの女装の素質はかつての体育祭で実証済みだったな。

「すごい! とっても可愛いよ、明ひ——明子ちゃん♪」

「わ〜♪ 明子ちゃんですか〜!」

「じゃあ、あなたはここでは『吉井明子』で決定ね」

「やめてええええええ!!」

明久が頭を抱えて悲鳴を上げた。ああ、その…………ドンマイだ、明久。俺は床に泣き崩れる明久に合掌した。

それからさくらさんとはあちこちの店を回ったりした。

由夢や音姉のクラスの出し物など、身内や知り合いのいるクラスを中心に回り、バンドも終えた。

いやあ、またギターやろうかと本気で思った。何処でミスるか生き

た心地がしなかったし。さくらさんは満足したようだが……。
バンドも終えてようやく体育館から出ようとした時だった。

『レディース・アード・ジェントルメン！ 卒業生及び、在校生の
皆々様、大変長らくお待たせしました！』

体育館に杉並の声が響いた。遂に動き出したか……。

あいつ、今度は何を始める気だ？

『皆さん、このパーティーを楽しんでおられるでしょうか？ 芳乃さ
くら嬢の回帰、進路の都合上別れた仲間との再会、告白せずじまいの
あのひとの運命の再会など、淡い色の青春の再来に歓喜の声を上げる
者もいよう！』

スピーカーからそんな話を聞かされ、体育館内に残ってる生徒たち
がバンドの時と同様に盛り上がる。

『だが、皆々様！ これでもまあだあ、足りないとは思わないか！ 気
の合う共と語らい、話に華を咲かせるのもいいが、このパーティーに
も華を咲かせたいとは思わんか！』

杉並のまどろっこしい言い方に館内の生徒たちが何だ何だと囁き
始める。

『特に男子諸君は思うだろう。かつてこの学園に咲いた花々を……色
とりどりの衣装に身を包んだ乙女たちを！』

その言葉に会場内にはまさか、という空気が広がった。

『そう！ 今、ここに再び開こうではないか。風見学園の祭典のメイ
ンイベントと言っても過言ではない……卒業生及び在校生を交えた
奇跡のイベント、飛びつきりスペシヤルなミスコンを！』

『『うおおおおおおお！』』』

『では、ミスコンを始める前に司会の板橋渉からの選手紹介を始めた
いと思います！』

「はい！ バトンタッチされて、じゃじゃじゃやん！ 司会を
任されました、自称風見学園の夢見るロマンチックイケメンボーイ、
板橋渉！ みんな拍手！」

『『うおおおおお！』』』

夢見るっていうか、お前の場合は妄想だろうが。

「さあ、始める前に質問ひとつ！　こんなのは聞くまでもないだろうが……みんな、綺麗な女の子は好きかぁー!?」

『『好きだああああああ!!』』』

渉の質問に、館内の観客全員が声高らかに応えた。

「だろだろ！　そして今回ここに、みんな大好き、綺麗で、可愛い、時に妖しい……そんな様々な女性がこのステージに上がるんだ！　みんな……嬉しいだろぉー!?」

『『当然だああああああ!!』』』

「さて、前置きはここまでにして……今世最大のイベントと言っても過言ではない、卒業生と在校生全ての可愛い女の子をお呼びしました。守ってあげたくなる可愛いあの子、お姉さまにしたい理想の年上の女性。時々キツイけど、根っこは優しいツンデレの彼女。それぞれ違ったタイプの女性が大勢参加しますので、みんな盛り上がってこうぜー!」

『『おおおおおお!!』』』

「さてさて！　もう、みんな待ちきれないだろうからとつと参加選手の紹介に移りましょいや!」

観客の熱を煽るだけ煽ってようやく紹介が始まる。これだけの熱は当分冷めることはないだろう。

アイツをこの手のイベントの司会にしたのは適材適所だな。アイツ、こういったイベントめっちゃ好きだし。

「ではでは、ミスコン参加者の紹介いきまーす！　まず一人目！　卒業しても尚、その名を残している風見学園を代表する才色兼備を体現する完全無欠の元生徒会長、朝倉音姫——っ!」

『『うおおおおおお!!　生徒会長おおお!!』』』

「あはは、もう生徒会長じゃないけど……よろしくお願ひします」

「——っつて、音姉っ!?!」

「あらら……音姫ちゃん、出るんだ」

最初からまさかの紹介メンバー……音姉がミスコンに出てるなどとは。

このミスコンが開催されることだっけかなりの驚きだったという

あの人がミスコンに出たら誰が騒動を止めるんだよ。

「さて、今代在校生にとつて真打ちとも言える、絶対可憐のお姫様、エリカ・ムラサキ——っ！」

『『姫様ああああ!! 是非俺たちをしもべにいいいい!!』』』

『『とうか、わたくしめをお城にご招待してええええええええ!』』』

『うふふ、皆さん、よろしくお願ひしますわ』

「現生徒会長まで参加って……本当にどうなるんだ、このミスコン……」

それからもかつてのミスコン経験者の名前がどんどん並んでいく。もう30人は越えたな。

「そして最後に……和服の似合う黒髪ロング、寡黙な絶世の美女、霧島翔子おおおお！」

『『うおおおおおお!!』』』

「……は、『雄二にしか興味がない』とのことで、残念ながら不参加でしたあ」

『『ええええええええ!!』』』

霧島が参加しないことがわかったら、会場から一気にブーイングの嵐だ。

「だが、これだけでもう腹パンクするだろう! この女性の方々が、その美貌をお前らに見せつけてくれるぜえ! どうだお前ら、嬉しいかあ!」

『『当然だあああああ!!』』』

「さあさあ! 選手紹介も済んだところで、いよいよ皆様お待ちかね! ミスコンの始まりだあ! ちなみに審査は2回に分けられ行われます! 2回に分けられると言っておりますが……審査はどちらもファッションアピール! ただし……1回目が通常のファッションに加え、特技かチャームポイントのアピールときまして……1回目の投票で厳選され、勝ち残った女性たちは、2回目で……なんと水着だあああああ!」

『『おおおおおお!!』』』

「もう水着の審査が待ち遠しいか、みんなあ! だが、物事には順序が

あんだ。ここはみんなも観客として真面目に魅力溢れる女性たちのためにじっくり待つて、華を着飾った女性の姿を眼に焼き付ける準備をしてろ！」

『『『うおおおおおおお!!』』』』

「つうわけで！ 早速、くじ引きで順序を決めたところで、なんと最初から大本命と言つても過言ではない！ かつて我らが誇り、学園のスーパーアイドルの白河ななかだあ！ やっぱりこの子がいなきやミスコンは始まらねえ！」

「こんにちはー！ 白河ななかでーす！」

なんとも白河らしい軽い挨拶だった。ちなみに衣装は和服だった。

「なんと！ 和服！ 和服です！ ザ・和服！ 日本が誇る清楚で慎ましい晴れ晴れしい衣装で登場です！」

『『『な・な・か！ な・な・か！ な・な・か！』』』』

自然と湧き上がるななかコール。まだ登場したばかりだというのに、盛り上がりは既にトツプスピードだ。

「えへへ。これ、両親が正月の時に用意してくれたものです。いやあ、着物つて、正月以外に着ることつて中々ないんですね。で、そのままつてのももつたいないので今回着てみました。でも、ちよつと帯が苦しい」

『ジャパンビューティー！』

「さて、ここで問題です。この審査で私がアピールするのはなんでしようか？ 正解は歌です！」

観客が答えるのも待たず、本人が正解を言った。それに観客たちがドツと笑った。

「では、時間も押しているので早速今日のサポートをしてくれる方を呼びましょう！ マイダーリンこと吉井明久君でーす！」

「ちよつとななかちゃん！ その紹介は恥ずかしすぎる！」

舞台の脇から顔を赤くした明久がキーボードを引きずつて出てきた。

『『『死ね！ 吉井明久あ！』』』』

『よくも俺たちのななかちゃんを独り占めしてくれたなあ！』

『ななかちゃん、よこせえ!』

「ゴラア! 今言つたの誰だあ! 喧嘩なら買つてやるからこつち来いやあ!」

明久が登場して会場の男子たちからブーイングの嵐。そして、喧嘩売つてるし。

「にやはは……相変わらず賑やかだねえ、明久君は」

「あはは……」

賑やかで済ませていいものかどうか。

「明久君、準備はいいかな?」

「いつでもどうぞ!」

「ていうことでみんな! 最初から飛ばすから、ついてきてね!」

『『おおおおおお!!』』

「では、聞いてください! 『きらきら星をあげる』!」

それから明久のキーボードから流れる旋律を始め、白河の歌声が館内に響き渡る。

「みんなー! ありがとう!」

歌声がなり止むと同時に今度は拍手の音が響き渡り、ななかのアピールタイムが終了する。これじゃあ、ミスコンというよりもライブだな。

拍手の音と共に白河と明久が舞台袖へと引つ込んでいった。

序盤からかなり盛り上がってるな。これなら次のアピールタイムも楽しめそうだ。

「白河ななかさん、ありがとうございます。それでは、熱狂冷めやらぬ中ではございますが、次の方に登場していただきましょう! ところで皆様あ……可愛い女の子は好きですかあ?」

『『好きだああああ!!』』

「毒舌な女の子は好きですかあ?」

『『好きだああああ!!』』

「このミスコン、様々な趣味嗜好をお持ちの皆様のご期待に応えるべく、色々なタイプの女性をご用意させていただいております! それでは、2番手はこの方。ミスティアスな毒舌美少女、雪村杏さんのご

登場です！」

盛り上がった観客の拍手と共に杏が舞台袖から飄々と現れた。

「雪村杏です」

「なんと！あの悪魔も真つ青な毒舌を発する雪村杏さんが、まさかの天使の衣装!?!」

『杏様ああああああ!』

なんだかんだで、杏も結構人気あったんだよなあ。しかし、まさかあいつが天使とは……あいつの性格を知ってる故にとんでもないギャップ感が。

「好きにアピールをしていいとのことだけど、私が好きにやると生徒会とかに怒られそうなので今回は控えめに」

『『ええええええ!?!』』

観客席から残念そうな声が響く。ていうか、止められなかったら何をやる気だったんだ。

「だから、今日は普段あまりやらないことに挑戦してアピールをしたと思うの。てことで渉、例のものを」

「ほ、本当にいいのか?」

どっから用意してきたのか、両手に何かを持った渉が恐る恐る杏に問う。

「ごちやごちや言ってないで、早く持つてきなさい」

「ははっ!かしこまりました!」

あのやりとりは仕込みなのか、素なのか、ともかく会場にまた笑いが溢れた。

そして、渉が持つてきたもの。それは……

「激辛カレーよ」

何故にカレーだという疑問と見た目からして辛そうという疑問が会場内で浮かび上がっていく。

「実は私、辛いものが苦手なの。普段は食べないこの激辛料理を食べべ、普段は見せないギャップ萌えてやつを感じてもらおうわ」

杏にしてはドMな挑戦だった。

「では、いただきます」

会場内の杏に対する心配そうな視線を他所に、杏がカレーを一口。
「あむ……むぐ………っ！ もう……無理」

あの杏が涙目になっていた。

『『ふおおおおおおお!?』』

『『可愛い可愛い!!』』

「い、以上……雪村杏でした」

「雪村杏さん、ありがとうございます！ いやあ、学生時代でも見せたことのない貴重なシーンを見せてもらいました！ 彼女の勇気に、今一度。盛大な拍手をお願いします！」

会場内に再び拍手の音が響いた。あれはすごい。

狙ったとはいえ、自分の身を削るようなアピールをよく選んだものだ。その甲斐あつてか、かなりの人気を集めた。

天使の衣装にしたのはあのギャップ萌えを狙ったからか。俺も一瞬クラッと来たぞ。

「さて、お次は何が来るのか。その豪快な走りごとごとく女心を虜にした学園きつてのスプリンター及びハイジャンパー！ 高坂まゆきさんだあああああ！」

「いよっ！ お待たせしましたあああああ！」

「なんとおおおおお！ 紹介のまんま、彼女の衣装は陸上のユニフォームだあああああ！ なんと爽やかなスタイル！」

『『きゃあああああ！ お姉様あああああ!!』』

「おっとー、一気に女子からの黄色い歓声だー！」

白河や杏たちとは違う、女性人気が高いのが彼女の強みだろう。

「えー、今回の衣装なんですけど、色々悩んで、結局これにしました。やっぱり、こういった格好が一番自分らしいっていうか、素の自分でいられるんで。ま、ミスコンで着るには色気はないけどね」

『『カッコイイからいいんです——っ!』』

「あはは、ありがとう。さて、アピールの方なんだけど……ここじゃあ、棒高跳びも100mはおろか、50mもできないしね。だから、ちよつとした体操技でも披露することにしました」

「おお！ なんと高坂まゆきさんらしいアピールポイント！ 女子

たちから高い期待が寄せられること間違いなし！」

確かに、会場内の女子たちが思いつきり期待の眼差しを舞台に向けている。

まゆき先輩は舞台袖まで移動すると、数メートル助走をつけ、両足でダン、と踏み込み、勢いを殺さないまま側転、バック転、三宙半ひねりを披露した。

「お見事！ 皆様、ダイナミックな技を披露した高坂まゆきさんに盛大な拍手を！」

会場が震えんばかりの拍手の嵐が鳴り響いていく。

「ありがとー！ 以上、高坂まゆきでしたー！」

女子からの黄色い声援を受けながら舞台袖へと引っ込んでいくまゆき先輩。

「すごい人気だったなあ、まゆき先輩」

「うむ。制服でなく、あの姿で追いかけてたら……すぐに掴まっ
てしまいそうな気がするの、何故だ」

いつの間にか隣に来ていた杉並がそんなことをつぶやいていた。

「ははは、何気にすごい効果だな。まゆき先輩に伝えておくよ」

「余計なことと言わんでよい」

もう、卒業してるんだから時効だと思っただけだなあ。いや、まだパーティーは終わってないんだからまだ有効期限かな。後でこっそり教えてやるかね。

「さて、皆さん。そーろーそーろー、セクシーな美女を拝みたいと思いませんか？」

『『『思う思う！！』』』』

幾人かの女子を紹介してから渉がまた観客の心を誘導して盛り上げる。

「特に男子生徒はそう思ってますよね!？」

『『『当たり前だあ!』』』』

「では、行きましょう！ お次は、我らが男子の理想のボディを持つ美少女、花咲茜さんに登場していただきましょう！ では、花咲茜さん。オン・ステージ！」

「はいは〜い！ 花咲茜でーす！ 今日にはよろしくね〜！」
『『わ————っ!!』』』

「なんとっ！ 花咲茜さんはチャイナドレス！ それも、ミニスカ
バージョンツ!!」

あちこちから黄色い歓声が。あいつも、男女問わず人気者だな。

「本来なら、ここで勝ち残るために水着っていうのが定番なんだろう
けど、それは2次審査までお預けなんだよねー」

『『そんなああああああ!!』』』

男子たちが嘆いているが、どうせあいつが残ればまた見られるん
だ。

こういったイベントであいつが予選落ちみたいな場面が想像でき
ない。

「ちくしょう……誰だよ。審査を2回に分けた奴……」

なんで司会のお前が悔しがつてるんだよ！

「実は、こう見えても私ってお料理とか裁縫が得意なんだよ？
知ってた?」

『『もちろん、知ってまーす!』』』

「本当かな〜?」

そんなやり取りもあって、会場内の空気がまた沸騰する。

「だから今日は……お料理を作ってきました〜。みんな、食べたい〜
?」

『『食べたーい!』』』

「それじゃあ、代表として私の愛しの秀吉君に食べてもらいま〜す!」
『『何iiiiiiii!?!』』』

茜が愛しのという言葉を発すると、男子たちの怒号が乱れ飛ぶ。

「では秀吉君、どうぞ」

「う、うむ」

木下が舞台袖から出ると、会場内が一気に静まり、代わりにヒソヒ
ソと話し声が聞こえてきた。

『あれ? あの人の……女?』

『いや、制服は男子のだし……』

『そういえば聞いたことあるぞ。少し昔、演劇部のホープってた超天才の部員が演劇部を引っ張ってたって……』

『その人の役は常に女性で……下手な女優よりよっぽど演技力あるって評判だった』

『それが……彼、いや……彼女?』

「待つのはじゃ! 話が思いつきり聞こえとるぞ! 儂は正真正銘の男じゃー!」

木下の女性疑惑は未だ根強く残っているようで。同情するぜ。

「では花咲茜さん、お持ちいただいた料理の発表をお願いします!」

「じゃじゃーん! 肉じゃがです!」

そうして登場した肉じゃが。端っこのここにまでその匂いが漂ってくるぜ。

「うおおおおおおお! これはまたうまそうな匂いだあ!」

「で、では……いただこう」

そして木下は用意された箸で肉じゃがを一口食す。

「……うむ!? これは……肉とじゃがいもに少々たまねぎというごく普通の料理構成じゃというに、このうまさはなんじゃ!」

「これは、花咲茜さんの料理大絶賛! つか、俺も食いてええええええ!」

「もしも私がこのミスコンで勝った暁には、皆に私の手料理を食べさせてあげるから、応援よろしくね♪」

勝たせたかったら、自分に投票しろっていう魂胆か。流石茜……抜かりない。

「以上、花咲茜さんありがとうございます! 司会の立場でありながら、彼女の手料理を食べるために彼女に投票したくなっちゃいますなあ! くうううううう!」

ちゃんと司会の仕事しろよ、渉。

「さてさて、ミスコンもいよいよ中盤戦……だなんて思ってる方がいらっしやいますか?」

言っておくが、まだまだ序盤だあ! プロローグなんだよ! みんな、わかってるよな!」

『『当然だあ』』

『この風見学園のミスコンがこれで半分も言ったなんて言う奴はいねえ！』

『まだ俺の推しの人が出てないのに、そんな寝言抜かすかあ！』

「結構っ！ ではお次に移りましょう！ ……とやりたいとこだが、参加人数が多いからなあ。それに、時間もお昼に差し掛かる頃。まだ祭りの店回ってない奴もいるだろうし……腹が減っては戦はできねえからな。参加する女子たちの英気を養う意味でも、ここらで一旦休憩を挟みたいと思います！ 続きは、午後の1時からスタートとします。それまではみんなもメシ喰って次の闘いに備えろ！ まだまだミスコンの本当の素晴らしさはこれからだ！」

『『おおおおおおお！！』』

この調子じゃ休憩でもみんなの熱は冷めそうにないな。

俺も続きが見たいって思うし、次まで俺たちも何か食べとくか。まだ先は長そうだし。

俺はさくらさんを連れて再びセクシーパジャマパーティーへと足を運んだ。あそこのマッサージはリラククスに丁度いいとのことだ。

さくらさんはそうなんだろうけど……俺にとってあそこはもう地獄なんですよ。

食事をしてからのマッサージ中、俺は杏と茜の手による足裏グリグリと背中サスサスという天国と地獄の板挟みを味わった。

第九十五話

午後になり、サプライズな卒業生及び在校生を交えたカラフルキラキラミスコン（渉命名）は更に盛り上がりを見せる。

「さあ、みんな！ 昼飯喰って、エネルギー補給を終えたところで、ミスコン第一次審査の続きと行こうやあ！」

『『わああああああああ!!』』』

相変わらず、会場内は人口密度が高く、出入り口からはみ出てしまう人も出てくる。

ちなみにそれを見越したムツツリーニが空き教室でライブビューイングならぬ、ミスコンビューイングという名目で、スクリーンを設置し、このイベントを絶賛生放送している。

そんでもって、僕はななちやんの出番が終わってから裏方で音響の担当。

「さてさて！ 午後一番からいきなり真打ち登場か！ 歴史に残る生徒会長！ 朝倉音姫え！」

お、どうやら早速音姫さんが登場……って!?

「あははは……みなさん、こんにちは〜」

「なんとっ!?! なんとなんとなんと！ 音姫先輩、まさかの付属の制服で……登場だあ！」

『『おおおおおおおおお!!』』』

「お、お姉ちゃん……似合いですぎ」

近くに控えていた由夢ちゃんが呟いた。確かに、とてつもなく似合う。

普段真面目な人なのに、どこか幼さを感じる音姫さんに初々しさ漂う付属の制服……抜群の組み合わせではないだろうか。

「これは現在校生にとっては嬉しいフアッション！ もう成人いつてる筈なのに、全くもって違和感がねえ！ その姿で隣を歩かれれば学園の男子連中は過ぎた幸福で天に召されるだろうぜえ！」

『全くだあ!』』

『俺、生徒会長の付属制服姿、初めて見た』

『学生時代でも見たことのない姿を、ここで拝めるとは……』

『この卒業生で良かったあ』

『くあああああああ！ それ、反則——っ！』

会場内では音姫さんの付属制服姿に悶絶する男子連中急増中。本当、ノリのいい人たちだよ。

「あはは、ちよつと照れちゃうというか……」

「照れるのはこつちです……」

音姫さんのコメントに由夢ちゃんが恥ずかしげに呟く。確かに、あんな姿だからか、見てることちまで照れてしまう。

「ちよつと恥ずかしいけど、頑張つて着てみました。少し懐かしい感じがします。その、似合ってますか？」

『『もちろん、似合ってます——す!!』』

「だから、似合いますぎだつてば……」

「あはは、ありがと〜〜♪」

「しよつぱなから大絶賛ですね！ 新しく解説に加わった土屋康太君、どう思いますかね！」

「……普段才色兼備を貫いていた彼女だが、顔立ちは元々幼いところがあつた故、付属制服に身を包まれることで年齢の差から来る感覚を一気に霧散させ、親近感を誘つた見事なコンビネーションとも言える。しかし、彼女の場合、そんなものは狙つたない。全くの天然によるもの。そんな要素が更に幼さを際立たせ、学生男子の支持を大きく集めているものかと思われる」

「はい、俺みたいなバカでもわかる解説をありがとうございますう！」
康太っ!! 一つの間解説に入つたの!! 全く気づかなかつた。

「あはは、この格好、好評みたいなので……今度は弟君の前だけで、してあげるねー♪」

『——って、うおい!!』

流石音姫さん。義之個人に対するアピールも忘れていなかった。

ああ、義之がいるだろう方向に男子連中の視線が一気に集中した。こりや義之、無事に帰れる保証がないね。

「お姉ちゃんのバカッ！ どさくさに紛れて何言ってるのよ！」

まあ、由夢ちゃん……あれが音姫さんなのだからしょうがないというか。

「さてさて！ 補給したばかりのエネルギーがいきなり枯渇なんて事態になる前に次いつちやいましょう！ それでは次の方、風見学園の男子みんなの妹とも言える美少女、朝倉由夢え！」

「よ、よろしくお願いします」

「おっとー!? 由夢ちゃんは着ぐるみパジャマかあ！ モデルは猫か！ ぼんやりしている目元が猫らしさを際立たせてる〜！」

『可愛い可愛い！』

『撫でてええええええええ!!』

『愛でたい！ もう、お持ち帰りしてええええええええ！』

「……朝倉由夢は学園ではしつかり者だが、家では学園にいる時ほど活力はなく、自宅ではベッドの上で……もしくは芳乃家でテレビの鑑賞するかの2択」

「ちよ、土屋さん！ 他人のプライベートを勝手に公開しないでくださいー！」

「おお！ 思わぬところで優等生の意外な素顔が暴露された！ なんて言ってますが、みなさん。そんな彼女は好きかな!?」

『もちろんだ!』

『自宅でのんびりな由夢ちゃんも絶対に可愛い!』

『なんなら俺が一生面倒見るぜえ!』

由夢ちゃんも多くの男子生徒に愛されてることで。

「はーい、朝倉由夢さんありがとうございまして。では、まだまだ女の子はいっぱいいるんだ。どんどん盛り上がって行こうぜー！」

『『わああああああああ!!』』

「続いてはあ！ 卒業して初音島から離れた人たちが戻ってくるんだから当然この娘が戻ってくるのも当たり前！ 月島あ、小恋さんですー！」

「え〜つと、月島です」

「はい月島さんの服装は、私服の上にエプロンという、なんていうか若

「しようがないわね」

「うん、本当に小恋ちゃんはしようがないんだから〜」

杏ちゃんと茜ちゃんが突然そんなことを言い出した。

「ん？ どったの？」

「久しぶりに、雪月花の出番ね」

そう言うと同時に、2人はステージへ向かって歩き出した。

「どーもー！」

「ちやお」

『『『おおおおお!?』』』』

突然の2人の乱入に会場に驚きの声が轟いた。

「杏!?! 茜!?!」

無論、ステージに出ていた小恋ちゃんですら驚いている。

「おーっ?!?! ここでもまさかのサプライズが発生しました! 月島小

恋の窮地に親友である雪村杏、花咲茜の両名が再びの登場だー! こ

れで雪月花そろい踏みです!」

『『『雪月花! 雪月花! 雪月花!』』』』

会場の盛り上がりは更にヒートアップしていく。

「助けに来たわよ、小恋」

「う、うん……ありがと、ふたりとも」

「私たちは小恋のアピールポイントを知ってるわ」

「え? そうなの?」

「小恋ちゃんは、弄られ役っていう素敵すぎるアピールポイントがあ

るでしょ?」

「それ、褒められてる気がしないよ……」

そんなコントみたいなの会話を続けると、会場に笑い響いていく。

「ていうか、それ……私ひとりじゃアピールしようがないんじゃない?」

「だから私たちが助けに来たんでしょ」

「ま、まさか……ひゃあっ!?!」

2人は急に小恋ちゃんに抱きついた。それを見た男子たちが興奮

の声を上げていた。

「私ほどじゃないけどお、すごいものを持つていうのもアピ―

ルできる部分かな〜」

「最高の抱き心地ね。みんなにも分けてあげたいくらいね」

「ちよ、ちよつとやめてよふたりとも〜!」

有言実行というか、衆人環視の中でセクハラして弄られ役の真骨頂を見せつけざるを得ない状況を作って会場みんなにアピールしまくった。

『『ありがとうございます! ありがとうございます!』』

それを見た男子たちは何度も感謝して頭を下げていた。いや、失礼かもしれないけど僕からも。ごつつあんです。

「あ!? 私、アピールできること思いついたよ!」

「逃げようとしても無駄よ」

「違う違う! 本当なんだってば! だから、いつまでも触ってないでちゃんと聞いてよ!」

小恋ちゃんは2人の抱擁から脱して難を逃れた。

「えつとね、私がアピールできることはね……こんなにも素敵な友達がいること、かな」

小恋ちゃんの言葉に会場がしん、と静まった。

「小恋らしいわね」

杏ちゃんの言葉に会場の全員が頷くのが雰囲気でわかる。

「あくん! 小恋ちゃん大好き〜!」

「そんな微妙な私だけどね、今度初音島に帰ってくる時は、すごい奴になって帰ってくるから! あ、でも……私たち、もう卒業してるからみんなの前で披露する機会って、なくなっちゃうんだよね……」

「うん……」

「そうね……」

「あ、えつと、ずっとここにいたら、しんみりする話しかできそうになるので、月島は誰が優勝するのか楽しみにしながら退散するとします! ううん、雪月花は退散するとします!」

「月島小恋さん、いえ……雪月花の皆様、ありがとうございました!」

みんなの拍手を受け、雪月花のみんなは舞台袖へと去っていった。

それからミスコンの第一次審査はどんどん進んでいった。

天枷さんのブルマ姿、沢井さんの魔女姿、ムラサキさんの本場プリンセス姿など……ハイレベルなファッションとアピールポイントが盛りだくさんの第一次審査もいよいよ大詰めだった。

「では皆様、第一次審査も先の選手でようやく終わりました！」

『『ええええええええ!!』』

「はいはい、そう落胆せずにい！ まだミスコンは半分しか進んじやいませんよー！ この前半でアピールした女子たちの中で選ばれた10名が、次の水着審査に出られるんだぜえ！」

『『わああああああ!!』』

「この会場の両サイドに机が並んでるのが見えますかなあ!? そこに用意されてる用紙に自分が一番だと思った女子の名前をひとり書いて隣に置いてある箱に投票してください！ ちなみにひとりですよ！ みんな可愛いなどと思うみんなの気持ちはよくわかるが、あくまでもミスコン。女子たちの勝負なんだから、俺たちも厳正なる精神で心に決めたひとりに投票しようぜ！」

渉の説明を受けて会場のみんなが一斉に動き出した。一応僕もなかなかちゃんのサポートしたとはいえ、観客扱いとなっているので、投票しなければならぬ。まあ、投票する相手は決まってるけど。

それから30分ほどかかって投票及び集計が終わり、会場にいる人たちが元の位置に戻った頃を見計らって渉は再びマイクを掲げる。

「えー、お待たせしましたあ！ ただいま届いた集計の結果！ この中から選ばれし10名が、水着審査でみんなを悩殺しまくるぞお！」

みんな、覚悟して聞いとけ！」

『『わああああああ!!』』

いよいよ発表される、一次審査を通過した強者たちの名が。

「まずは皆さんもご存知、当学園の歴史に残る元生徒会長、朝倉音姫え！」

ひとりめ、音姫さんはまあ、当然か。というか、そうでなくては困るんだけど。

「次に、その妹の朝倉由夢え！」

由夢ちゃんも残ったか。まあ、結構愛くるしいアピールだったし。「そしてえ、白河ななかあ！」

ななかちゃんは当然上位に決まってるよね。

「まだまだあー！ 月島小恋っ！ 雪村杏っ！ 花咲茜っ！ 雪月花3人共上位入りだぜえ！」

あの3人も当然といえはそうだろう。それに、3人で同じステージに立ってたからそれだけ評価されたのだろう。

「一気に行くぜ！ 高坂まゆきっ！ 天枷美夏っ！ エリカ・ムラサキ！ そして、委員長ことマージャー様あ！」

「ちよつと！ なんで私だけそんな紹介っ!？」

「以上、10名が！ みんなの前で水着を披露してくれるぜえ！」

「ちよ、こら！ ちゃんと名前で紹介しなさいよお！」

沢井さんのツツコミを無視して渉は強引にイベントを進めていく。

「おらあ、みんな！ 心の準備はできてるかあ！」

『『『おおおおおおお!!』』』

「これからみんなの前に来るのは制服というヴェールを脱ぎ捨てた、地上に舞い降りた天使たちの水着姿だ！ そんなのを直視してお前ら、タダで済むと思うか？」

『知ったことかあああああ!!』

『あれだけの美少女の水着姿を見られるなら、この命……燃え尽きようと悔いなどないわああああ!』

『死ぬ覚悟なんて、とっくにできてるわあ!』

なんかこの光景……すつごくデジャヴを感じる。いや、僕も内心みんなと同じ気持ちだったりするけど。

「いい覚悟だ。お前らの気持ちか聞けたと同時にこつちも準備ができたようだ。みんな気を引き締める！ いよいよ来るぜえ。皆様お待ちかねの！ 水・着・審・査だあ！」

いちいちオーバーなアクションを入れながらスピーチする渉。こういう時、本当に輝くね。これ、もしかしたらバンド以上かも。

「いぎ、刮目してみよ！ 風見学園の誇る10人の美女の水着姿を――！」

渉が叫ぶと同時にステージの幕が上がった。

「おお……！」

僕は思わずステージ上のみんなに魅入ってしまった。

「どうだ！ ビキニ！ パレオ！ スク水！ あらゆる水着姿を用意してやったぜ！ 全員、その目に焼き付けろ！」

『『おおおおおお!!』』

『音姫さん……可憐な』

『由夢ちゃん……生きててよかった』

『ななかちゃん、やっぱり可愛いぜえ!』

『ていうか、花咲さんのアレ……ただの布だろ！ 布だけ!』

『ムラサキさんの着こなしも、すげえ！ 流石は姫というべきか、まるでモデル……いや、それ以上だ!』

『沢井さんのあの水着……まるでマージャー様だあ!』

ステージのみんなを見る生徒たちが口々に感想を言い合っていた。

これは圧巻というか、百花繚乱という言葉が浮かび上がってくる光景だ。

ななかちゃんはやはり可愛いが、他の人たちも上位に残ってるだけあって、魅力的な姿だった。

『ああああああ!!』

みんなの水着姿を見つめると、会場内の何処かから悲鳴に似た叫び声が響いた。

「おや？ 何やら騒がしいですねえ。どうしました?」

『大変です！ 鼻血を出したり、股間を抑えている男子が急増中です!』

『こっちも！ スマホを構えたまま横転している女子が急増中です!』

「ありやりや。来るだろうとは予想してたけど、こいつは計算以上だな」

『ダメです！ 手が足りません！ 誰か応援を!』

「そう来るだろうと思って既に準備は進めていましたよ！ つうわけで、出番だぜ野郎ども!」

はいはい、わかりましたよ。

渉の言葉を聞いて僕は傍に置いてあつた道具を持って会場へと躍り出た。

「康太はすぐに輸血の準備を！ 秀吉は止血と気付けを！」

「……合点！」

「承知した！」

僕と康太、秀吉はかつての経験を活かし、ミスコンの裏方を務めると同時に、この手の緊急事態にすぐに対処できるようステージ裏に控えていたのだ。

「いやあ、やっぱこの子たちに任せると作業が捗るわあ。この子ら、今やってる職よりうちの病院に務めてほしいわ〜」

「水越先生！ 感心してないでこっちもお願ひします！」

「はいはい」

こうして倒れた生徒たちは僕らや保健委員たちの手によって速やかに会場から救急搬送されました。

「ふ〜……ちよつとしたトラブルもありましたが、第二次審査も無事に終えることができました」

出場者はいいけど、観客は無事じゃなかったけどね。

「みなさん、女の子たちの水着姿……バッチリその目に焼き付けたか？」

『『『おおおおおお!!』』』』

「そうか！ ですが残念な事に、女の子たちのアピールタイムはこれでおしまいです」

『『『ええええええええ!!』』』』

「打ち合わせをしたかのような素敵な反応、ありがとうございます！ ですが、まだ完全に終わったわけではありません！ 我々はこのミスコン優勝者を決めなければならぬのです！」

渉が言うと同時に、会場が再びガヤガヤと騒ぎ始める。

「ミス風見学園コンテストミラクルキラキラ、卒業生と在校生の夢のコラボレーション！ 優勝者は、いったい誰なのでしょうっか!?!」

それから再びあの子がいい、あの子も捨てがたいなど、誰に投票す

るかの談義が始まった。

僕はやっぱりななちゃんに投票するかと、用紙に名前を書いてる途中、ふと義之の姿が見えた。

何やら悩んでるようだが、頭を何回かかいたかと思えば、用紙をポケットに入れて会場を後にした。

おい、まさか義之……誰にも投票しないつもり？ 君は音姫さんが一番じゃなかったのかい？

まあ、料理対決でも全員美味しかったなんてことを宣った奴だ。これも予想は出来る。

それにしても、誰にも入れないとは……まあ、結果がどう転がっても義之にはもうひとつ仕事が残ってるしね。

僕も最後の仕事に入るとしますかね。そう思ったところでポケットに入れていた携帯が震えた。相手は……杉並君か。

「……もしもし？」

『俺だ。例の作戦の最終準備に入る』

「了解。こつちもすぐに出るから」

『悟られるなよ？』

「当然」

僕は携帯を切ると、体育館を後にした。さあて、本当の祭りはこれからだ！

時間はあっという間に過ぎるもの。祭りや、ミスコンもあって、大騒ぎしたあの時間が嘘のようだ。

今の時刻は夜。昼間とは対照的に辺りは静まっている。いや、静まっているわけではない。

まだ昼間の興奮冷めやらぬという感じで、はしゃいでいる奴も多い。

けど、このイベントに満足しているのか、感慨深い思いがこみ上げ

て校舎やグラウンドを見回しながら黄昏てたり、涙ぐむ者も多い。

無茶なスケジュールに無茶な計画。みんな、本当によくここまで付き合ってくれたもんだよ。

俺は感謝の気持ちで胸がいっぱいだった。みんな、さくらさんのためにこんなにも呼びかけに応えてくれて、さくらさんが帰ってきたことを祝ってくれた。

俺も、目頭が熱くなってきた。

「気持ちにはわからなくてもないが、感傷に浸るのは少々早すぎるというものではないか、同土桜内よ」

背中から声をかけられる。

「そういうことだぜ、義之ちゃん。俺たちの最大の見せ場を残したまましんみりしちゃうってのは、ちよーつと気が早いってもんだ」

「そうそう。泣くのは全部終わってからね」

振り返ると、そこには杉並に涉、明久が立っていた。

「……誰が泣くって？」

学生の時と同じように悪い笑みを浮かべながら好き勝手言ってくる。

本当、いい親友を持ったよな。おかげでこんなことを全力で楽しめるんだから。

「そうだな。これからが俺たちのショーの始まりだからな。びしつと気合入れていかないとな」

「おうよ。ってことで、俺は早速スタンバイしてくるぜ」

「僕も、そろそろ行かないとね」

「タイミング、トチんじやねえぞ？」

「そんなハマするわけねーだろ？ お前たちこそ、ちゃんと盛り上げてくれよ」

「任せておけ。今までの祭りがただの前座に過ぎなかったってことを見せつけてやるさ」

「僕たちが全力込めて練り上げた作戦なんだからね」

「じゃあ、一丁ぶちかますか！」

「「おうー」」

俺たちが行動に移ろうとしていた時だった。

「——つと、桜内。お前には別の役目を受けてもらいたい」

「あ？ 何だよ、急に。俺も準備が」

「桜内の代役はすでにこちらで用意している。貴様には別の役目を負ってもらいたい」

「別の役目？」

「ああ。お前にしかできない大事な役目だ」

こいつがこういう時は何か怪しい気もするが、今回の大事は本当に純粋な意味の気がする。

「……わかった。俺はどうすればいい？」

「俺が支持するまで会場の一番後ろで待機してもらえばいい」

「了解だ。ちゃんとうまくやってくれるんだろうな？」

「当然だ！ 俺を誰だと思っっている！」

「だったな。じゃあ、頼んだぜ」

「任された！」

そう言つて杉並も作戦のためにこの場を去っていった。

『それでは、ここで本日の最優秀クラスの発表を行います』

閉会式を兼ねたグラウンドでのキャンプファイヤーの中、音姉のアナウンスが流れる。

『今日の主役であり、審査委員長の芳乃さくら学園長、よろしくお願ひします！』

沸き起こる拍手と大歓声の渦。その中をさくらさんが歩き、朝礼台の上に立った。

そして、夜の筈なのに、眩しいものを見るように目を細め、周囲の生徒たちを見渡す。

『みんな、今日はありがとね。こんなに素敵な生徒たちに囲まれて、ボクはホントに幸せ者だよ。クリパ、卒パ、文化祭に体育祭、今まで風見学園でたくさんのお祭りをボクは見てきました。今日のお祭りもそれらと比べて、何の遜色もない……ううん、それ以上に素敵なお祭りだったと思います！ みんな、すごいっ！』

『『『おおおおおおお!!』』』

生徒たちの歓声がグラウンドに響く。

『このお祭りを大成功に導いたのは、間違いなくここにいる全員です。だから、ボクとしては本当はみんなに最優秀賞をあげたい気持ちなんだけど……音姫ちゃんに選んでもらえないと困りますと怒られちゃったので——あ、ここだけの話だけど音姫ちゃん、怒ると怖いんだよ。ニコニコ笑いながらね、人の最も嫌がる所を的確に攻撃してくるの。それも、絶対に逃がさないようにしながら』

確かに……俺も、秘蔵のコレクションが見つかった時にも同じようなことをしてきたからな。

『もうね、その時の恐怖感と言ったら、他に例えようのないくらいにね——』

『さ、さくらちゃんー！』

耐え切れなくなったのか、音姉が声を上げて抗議してきた。そのやりとりにとっとと観衆が沸いた。

『にやはは。これ以上言っていると、後で音姫ちゃんに本当に怒られちゃうので、それでは、本日の最優秀クラスを発表したいと思います！ 本日の最優秀賞は——』

さくらさんがタメを入れると同時に、シンと静まり返るグラウンド。

さくらさんは幸せそうにぐるりと周囲を見回して、発表しようと大きく息を吸い込む。そんな絶妙のタイミングだった。

『ちよおお——つとまったああああ!!』

静まり返った空気が切り裂くが如く、別のマイクに乗せた杉並の声が響き渡った。

『芳乃嬢の言う通り、本日のこのイベントは大成功。大いに盛り上がったことに間違いはないと思う。それもこれもみんな、突然の発案であり、更に短い準備期間にも関わらず、全力を尽くしてくれた皆様の協力があったからこそそのもの！ そのことに関しては、俺からも感謝をすると共に、心より健闘を讃えたいと思うー！』

杉並の言葉と共に大きな拍手と歓声が沸き起こった。全くというわけでもないだろうが、もうさくらさんの存在が薄くなっている

る。

『だが、しか——しつ！ まだ何か物足りないと思ってるのでは
ありませんか、皆の衆！ 今宵の祭り、未だ真打ちが登場していな
いのではないかと考えてはおりませんか？』

みんながガヤガヤと騒いでいく。さくらさんはその様子はただ面
白そうに見つめるだけ。

『あまりにも我々非公式新聞部が静かすぎると、そんな風に感じてい
るではありませんか？』

みんな思ってるだろう。『いや、そんなことはないだろう』と。

どんな手を使ったのかは知らないが、音姉たちを巻き込んで大規模
なミスコンを開催したりとか。

『もし、ミスコンのことを考えてるようなら、それは大きな間違いだ！
それを実行したのは確かに俺だが、別に非公式新聞部の手を借りた
わけではないし、それは俺の発案ではない！』

杉並の言葉に再びみんなが騒ぎ出す。アレが杉並の発案じゃな
いって？

じゃあ、一体あのミスコンは誰が考えたというのだ？

『だが、今はそんなことはどうでもいい！ 我々は今ここに見せつけ
て差し上げよう！ この祭りのフィナーレに相応しいとびっきりの
演目を！』

まあ、ちよつと疑問が残るが、予定ではここで俺たちが毎晩仕込ん
だあの仕掛けを発動させれば——

『ここで！ まずひとつ、皆様に大事なお知らせがございます！』

——ん？ あれ？ なんか、予定と進め方が違う気が……。

『皆さん、忘れてらっしゃるようですが……我々はまだ、昼間開催した
ミスコンの頂点の集計を発表していませんでしたよね？』

杉並の言葉にそういえば、と周囲のみんなが口々に言っていた。

『今、この場を借りてその集計の結果を発表しておきたいと思いま
す！』

『『わああああああああ!!』』

いきなりこの場を使ってなんで今更ミスコンの結果を発表するつ

もりなのか、杉並は俺の不安に目もくれずどんどん進めていく。

『では、発表いたしましたよう！ ミス風見学園コンテストミラクルキラキラ、卒業生と在校生の夢のコラボレーション！ その頂点を制したのは——』

ドウルルルルル！ と、趣向を凝らしたのか、本格的なドラムの音がしばし響いた。

『……………っ』

この場にいる全員が息を飲む音が聞こえた気がした。そんな緊張感が漂って更に数十秒。

『……………全員』

『……………は？』

杉並の言った事が呑み込めないのか、全員が間拔けな声を出す。

『全員っ！ 集計の結果、トップ10に残った女性全員が同数の票を勝ち取り、全員が同1位という結果になった！』

『『ええええええええええええ！』』

ま、まさか、そんなミラクルがここで発揮されるか？

「えく？ じゃあ、結局優勝はく？」

「私たち全員ってことになるけど、何か納得いかないわね」

「あはは……………すごいことになったね」

まあ、若干納得できてない者もいるみたいだが、それだけみんなが甲乙つけがたいほど魅力的だったということだろう。

『たあだあしっ！ これが本当に全員から得た投票だった場合だがな！』

「ん？」

何か、杉並が思わせぶりなことを言ってるのだが。

『時に、桜内義之！』

「な、何だよ……………マイク越しで、フルネーム叫ぶなよ」

『桜内……………ひとつ聞くが、貴様は誰かに投票したのか？』

「……………へ？」

『貴様は特定の女性に票を入れたのかと聞いているのだ』

「……………あ」

そういえば、結局みんな魅力的だったから、誰にも票を入れてないんだった。

「え？ 義之？」

「まゝさるか、義之君？」

「また票を入れなかったの？」

「弟君？」

「兄さん？」

ミスコンで勝ち残ったトップ10の皆様、そしてグラウンドに佇んでいる皆々様に、さくらさんの視線が一齐にこちらに集中する。

「あ、ちよ……」

『さあさあ、桜内。後は貴様だけなのだぞ？』

「ちよ、ちよと待てよ！ 別に俺だけじゃなくて、他にも票入れなかった奴はいなかったんじゃないのか!？」

『確かにそんな奴もいたにはいたし、接戦は予想していたが、よもやこのような結果になるとは思わなかった。無論、俺としてはこのまま全員優勝というのも考えてはいるが、それはトップ10の皆さんは納得いかないようだが？』

杉並の言葉にトップ10のみんなが頷いた。こんな所でこいつに加担しなくても！

『とのことなので……これからのためにも、お前に選んでもらった方が都合なのでな』

「意味がわからん！ 何で俺なんだよ！」

『それは桜内……貴様にはここで言うことを言ってもらわなくてはならんからな！』

「は？」

今度こそ意味がわからん。何だ、言うことって？

「さあ、早くしないか！」

「ちよ、いつの間に!?! っていうか、引っ張るなよ！」

いつの間にか俺の傍に来たのか、俺の手を引っ張ると、朝礼台に無理やり連れてかれた。

「すみませんが、芳乃嬢。この度はしばらくこの場を貸してはもらい

「ませんかな?」

「にやはは……よくわかんないけど、なんか面白くなりそうだからいいよ♪」

さくらさんは喜んで杉並に従って朝礼台から降りた。

「杉並……一体どういうつもりだ? 予定じゃ、これからさくらさんを祝うために……」

「それもそうだが……芳乃嬢に送るスペシャルプレゼントには桜内の協力が不可欠なのだ」

「いや、だから俺も手を貸して——」

「時に桜内」

「聞けよ、他人の話」

俺の話も聞かず、杉並がずい、と俺に肉薄してくる。

「今この場で……お前の内なる想いを口にすべきではないのか? お前のその情熱を」

杉並が煽るように言う。ていうか、内なる想い……情熱?

……ちよつと待て。まさかと思うが……。

「おい、杉並。何でお前がそれを知ってる?」

「俺を誰だと思っている同士桜内。それくらい察しがついている……と言いたいところだが、これはとある密告者の協力があってな」

密告者だど? 俺のこれを知ってるのは……まさか。

『……(グッー)』

明久だったのかああああああ!! サムズアップしてガンバとエールしてるが、あいつよりにもよって最悪な奴に密告していやがったのかああああああ!

てことは、この状況もミスコンの発案者つてのもあいつか!

「さあ、桜内。さっさと決めた方がいいぞ! ……吉井が与えた最高のシチュエーションとサプライズプレゼントなんだぞ」

最後にひつそりと耳打ちされた。

なんてことしてくれたんだという気持ちもあるが、確かにどう告白したものかどずっと考えてみたが、どんなシチュエーションでつてのはずっと思ひ浮かばなかった。

せつかく告白しようものなら、一生心に残るような衝撃的なものにするのもいいだろう。

まあ、衝撃的なら明久の告白も大概なんだが。

「えっと……では、発表します！」

『『おお!』』』

う……やるぞ、と思ってもこの視線は流石にキツイ。

「ん、んんっ! あ、あ……この度のミスコンの優勝者は……」

俺が辺りを見回して特定の人物を探し、数回深呼吸を繰り返して心を落ち着ける。

「……音ね、じゃない。……朝倉音姫さんです！」

『『おおおおおおおお!!』』』

「……え? え、え? わ、私……?」

当の本人は自分が優勝者だというのを受け止めきれないのか、呆然としている。

「さあさあ! その手……もとい、美貌で優勝を勝ち取った朝倉音姫さん! 表彰を始めますので、朝礼台に移動願います！」

「え? あ、はい……」

音姉はいまだ混乱したまま朝礼台へと移動した。ちなみに表彰なんてものはない。

これは最初からあいづらが仕組んだものだったんだから。集計だって本当かどうかもわからん。

「え、えっと……弟君?」

俺の正面に来た音姉が目をパチクリさせながら互いに向き合う。

「えと、音姉。優勝おめでとう」

「あ、うん。ありがとう、弟君♪」

俺が労いの言葉をかけたら一気に実感したのか、いつもどおりの声色に戻った。

「あー、表彰に移る前に、音姉に言っておきたいことがある」

「ん? はい」

それからは周囲から音が消えた気がした。いや、実際みんなが口を閉ざしたのだ。

いきなり静まった中で、聞こえてくるのは俺の心音だけ。その音を聞くだけで、緊張がどんどん膨れ上がっていく。

今にも逃げ出したい気分にもなってしまうが、俺はここで音姉にちゃんと伝えなければならぬ。

親友たちが用意してくれたこの舞台上で、俺のありつただけの気持ちを。

とても勇気のいる言葉。とても覚悟のいる言葉。それでいて自分の正直な気持ちを。

「あ……俺は、音姉が好きだ！」

俺の口から、そんなシンプルな……けれど、ありつただけの勇気を絞り上げた言葉が出た。

「……え？」

音姉がポカンとした表情を浮かべた。状況を理解できてないのか。

他の奴らも俺がこんなことを言うとは思わなかったのか、静まり返っている。

いや、まあ……俺も同じような状況下で告白されたら同じことを思うかもしれないけど。

「あ、えと……ごめん。もう一度言っていていいか？」

「あ、うん……」

「世界で一番、音姉のことを愛している。俺と、結婚を前提に付き合っていただけませんか」

一瞬の静寂の後だった。

「そ、それ、本当……？」

音姉は掠れるような小さな声で訊いてきた。

「そりゃ、こんな時にこんな言葉を冗談で言わないよ。こんな、大切な言葉……。俺は、本当に音姉のことが大好きだ。一生守りたいし、一

生……音姉を愛し続けたい」

だから。

「俺と、結婚してくれませんか」

頭を下げた。ちよつと最後の言葉は早い気もする。

けれど、俺は自分の想いを打ち明け、深々を頭を下げながら音姉に

手を差し出した。

「はい」

音姉が涙を零しながら俺の手を静かに取った。

「うれしい……ありがとう、弟君……」

「音姉、泣かないでよ」

「だって、すごく嬉しいから……。それに泣かせたのは、弟君だよ……」

そこを突かれると痛いな。

「音姉は笑顔が似合うんだから……。俺に笑顔の音姉を、見せてほしい」「うん！」

そして、音姉は今までの人生の中で一番の笑顔を浮かべてくれた。

『会場の諸君ら、晴れて恋人……否、夫婦となった桜内義之と、朝倉音姉に盛大なる拍手を！』

拍手喝采。そんな言葉が浮かんでくるような大量の拍手が次々に鳴り響く。

『おらー！ 桜内——っ！ 羨ましいんだよこの野郎——！』

『俺たちの音姫さんを攫いやがって——っ！』

『けど、なんか泣ける……！』

『涙が……溢れてきやがる！』

『おめでとう！ 音姫さん！』

『ありがとう——！』

『お姉ちゃん、か……。うん。お似合いだよ！』

『わわわ……。生のプロポーズ、聞いちゃった』

『予想外の展開ね……。先、越されちゃったわね』

『あはは、しようがないよ……。でも、あの2人で良かったかも、だって、すごく幸せそうだもん』

『おお——っ！ 桜内、音姉先輩、2人共幸せになーっ！』

『おめでとう、義之君！』

色んな人から送られるからかいの言葉と祝いの言葉。次々と胸が満たされていく気がする。

『さてさて、会場にいる諸君ら。まだやり残していることがあると思

わないか?』

「ん? やり残したこと?」

「ここまで来て、あいつは何を言ってるのだろうか? もう、俺の想いは全部言い切ったと思うんだが。」

「あ、はいはいはーい! 私、わかっちゃった!」

『では、そのやり残したことを花咲に答えていただくでしょう!』

「キ・ス♪」

『正解っ!』

なるほど、キスカ。確かにこの場でまだやってなかったな。

「——って、なるほどじゃねーよ!」

つか、この公衆の面前でキスしろってのか!?

『『キース! キース! キース! キース! キース!』』

もうみんなノリがよくなって、口々にキスコールを連発しやがってるし。しかも、さくらさんまで。

「どうするの、弟君?」

どうにも音姉は嫌がってるようには見えない。まあ、学生時代も散々人前で過剰なスキンシップを取った彼女だ。

むしろこの状況を楽しんでいるようにも見える。

「ああ、音姉が嫌だっていうならやらないけど……その感じだと違うみたいだな」

「私はいつでもいいよ?」

『『キース! キース! キース! キース! キース!』』

「ええい、喧しいわ! やりやあいいんだろ!」

もう、こうなったら覚悟を決めるしかない。

「ん……」

こうなれば、緊張感も何も今更関係ない。できれば音姉との時間をゆつくり楽しみながらしたいものだが、この状況ではそんなことはできない。

なので、みんながするかと凝視させる間もなく音姉の唇に自分の唇を重ねた。

『『おおおおおおお!!』』

まるで結婚式のノリみたいに歓声が湧き上がり、もう初音島中に響いたのではないかと思った。

「えっと、こういう時のキスって……なんて言うんだろうね」

「誓いのキス？」

「いや、それは結婚式の時のやつだろう……これはちよつと違う気がする」

「じゃあ、特別なキスじゃないか……でも、すつごく幸せなキスなのかも」

「……そうだな」

その時見せた音姉の顔があまりに魅力で……俺はもう一度音姉とキスをした。

再び上がる大歓声。鳴り止まない拍手。祭りのファイナーレとしては最高だろう。

なんか、さくらさんを祝うパーティーの筈だったのに、いつの間にか俺たちが主役になっちゃってるような。

「あはは……義之君、立派になっちゃったね。しばらく見ない間に、本当に大きくなったんだね」

さくらさんが眼に涙を浮かべながらこちらを見ていた。

まあ、あの人が喜んでるなら、それもいいかもしれないな。

俺をこの世界に生み出してくれた……俺をずつと見守ってくれて……俺と音姉たちを引き合わせてくれて……そして、呼び戻してくれて……。

「……ありがとう、母さん」

本当に、さくらさんにはいくら感謝してもしたりない。本当にありがとう、母さん。

『では、両者の愛を確かめ合い、芳乃さくら嬢にとって最高のプレゼントを渡せたところで、ここからが我々非公式新聞部&我が同土桜内義之、板橋渉、吉井明久からのもうひとつのサプライズプレゼント！』

これからは本当に予定通りのイベントの始まりだ。杉並が踊るように手を校舎の方へ差し出す。

『渉！ このタイミング！』

『オツケー！ 一丁ぶちかましたるぜ！』

明久や渉のテンションの高い声が響くと同時に変化は起きた。

『夢の夜に舞う桜の花びら。光と音がしのぎを削る春色の交響曲。名づけて『桜風のアルティメットバトル』でございます！』

壮大な音楽が鳴ると共に夜空に次々と打ち上がる花火。そして、学校の屋上の金網に仕込んださくらさんの帰りを祝うネオンメッセー
ジ。

伝わっただろうか。俺たちの言葉を……。

そしてみんなはどうだろうか……今この瞬間を、どれだけ幸せだと思ってくれてるだろうか。

この初音島でみんなに会えてよかったと……俺と同じ気持ちを、みんな分がち合えてるだろうか。

「弟君」

「ん？」

「みんな……すごい幸せそうだよ」

「……そうだな」

考えるまでもない。みんなを見れば……同じ幸せの色が溢れてることがわかる。

隣にいる音姉、ずっと俺のことを見てくれてありがとう……。

由夢、ぐーたらだけど……いつも傍にいてくれて、ありがとう……。

渉、杉並……バカやってばかりだけど、いつも大事なところで俺の背中を押してくれて、ありがとう……。

小恋、杏、茜……主に2人からかわれ、小恋に慰められたりの毎日で、だけど……そんな日常を今では楽しかったと思ってる。俺の学園生活を明るくしてくれて、ありがとう……。

明久……異世界から来た時は驚いたし、腰を抜かすほど大それたことを平気でやってこっちは度肝を抜かれる日々だったが、いつもみんなのために行動してくれていた。俺の存在が消えそうな時も助けてくれたと聞いた時は本当に嬉しかった。ありがとう……。

他にも、いろんな人たちからたくさん思い出してもらった。そしてこれからも同じようにそれを受け取って、助けられて、これからの日

常に色が浮かんでいく。
みんな……本当にありがとう。

エピローグ

「ああ、疲れた……」

僕は今までで最高と思えるほどの疲労感を抱いて屋上にヘタレこんでいた。

それというのも、今回のサプライズに使った仕掛けの後始末をしたからだ。

まあ、それだけでなく、高坂さんやムラサキさんからもかなりのお叱りをもらったからだ。

『あたし、あんたのこと信じてたんだけどな』とか、『今まで従順だと思えば、影でこっそりと私たちを嘲笑っていらしてたのですね』とか、笑顔で詰め寄ってきた。もちろん、眼はちつとも笑ってないけど。

そんな形容し難い恐怖感に包まれながら数十分の説教をくらって精神的に参った上に、この重労働。

そりゃあヘタレこんだっておかしくない。

「あはは、お疲れさま♪」

屋上で寝そべっていると頭上から聞きなれた声が聞こえた。

「つて、ななかちちゃん？ まだ残ってたの？」

「私以外にも残ってる人いっぱいいるよ。実家での時間もいいけど、進路の関係で別れたお友達とここで語りつくそうって子もいっぱいだから」

「ああ……」

僕や雄二たちは芳乃家に戻って明日になったら二次会って決めてたけど、思えば本島で

散り散りになった人はたくさんいるんだ。

「ななかちちゃんは？」

「私は実家に帰るよ。ちよつと遅くなるって言ったけど」

「そう？ まあ、小恋ちゃんたちと久しぶりに会ったんだもんね。気の済むまで語り合うといいよ」

「違うよ。私は明久君とお話したかったんだな」

「え？ 僕と？」

頻繁にはないけど、週に1・2回はデートに行ってるんだし。それに対して小恋ちゃんとは月に1回会えればいい方だ。

「もう、大好きな人と一緒にいたいって思う女の子の気持ちわかんないかな？」

「えっと……その、ごめんなさい」

「まったく、恋人になっても女の子の気持ちに鈍感なのは変わらないんだから」

もう、全く返す言葉もございません。自分じゃそんな鈍感だとは思ってないんだけどなあ。

「でも、本当にいいの？ やっぱり小恋ちゃんたちと久しぶりに会ったんだから、会えるうちに色々話したりとか」

「いいの。というか、あんなの見てたらなんか対抗意識燃やしちゃって……」

あんなのって……ああ、あのサプライズか。

「もう、びつくりしたよ。義之君があそこでプロポーズするなんて」

「あはは、告白させるつもりではいたけど……アレは僕も予想外だったよ」

告白するシチュエーションを与えただけで、まさかプロポーズまで行くとは思わなかったし。

「ところで、あのミスコンって……元々あのために？」

「まあ、どんな結果になろうと杉並君が臨機応変に義之が出られるようにはからったんだろうけど……集計の段階でまさかあんなミラクルが出るなんて思いもしなかったけど」

集計を確かめてみればまさかの全員同票だったから、本気で驚いたよ。

まあ、そのおかげで盛り上がる展開に持ち込めたわけだけだ。

「ちなみに、明久君は誰に入れたのかな？」

「もちろん、ななかちゃんに」

「うん、よろしい。それで、私のファッションはどうだった？」

「できれば近いうちにまた」

「水着ならいいけど、着物は来年の正月までお預けだね」

「ちくしよく……」

流石に時期が時期なんだから、わかっていたけど。それでもちよつと残念に思うのは仕方なからう。

「はく、今日は本当に楽しかったなく。学生時代に戻った気分♪」

そう言っとななかちゃんは僕の隣に座り込んだ。

「……ななかちゃん」

「ん？」

僕はななかちゃんを見つめ合い、口を開く。

「僕と、結婚してください」

「……」

屋上から音が消えた気がした。

「いや、義之があんなこと言うもんだから、僕も対抗心がっていうか……いや、元々それは将来的について考えていたよ。でも、いつ言おうかって思ってたら今日あんなことがあったわけだから」

言い訳気味に言葉を並べてるが、本当のことだ。実際いつこの話を持ち込もうかというのは結構前から考えていた。

でも、成人いつてるとはいえ僕らはまだ学生だ。結婚しようといつて、仮に承諾したところでそれからどうするのかという考えも纏まってない段階で言うべきかどうか悩んでいた。

でも、義之のプロポーズを聞いてから僕も真剣に向き合いたいって思った。

「だから、えと……僕もななかちゃんもまだ夢に向かっている最中だからすぐにとってわけにはいかないだろうけど、今の学校を卒業して……また同じ場所にいられるようになったら、その時は……結婚してほしい」

「……」

僕はできる限り真剣な気持ちを含め、頭を下げて言った。

「……どうでしょうか？」

疑問を投げると、僕の視界に手が伸ばされた。

「ちゃんと……ちゃんと、白河ななかを愛してくれますか？」

ななかちゃんは笑顔で僕を見つめた。

「……もちろん。これからもずっと、ななかちゃんを、世界中の何よりも愛し続けるさ！」

僕は迷わずその手を取って宣言した。そして、ななかちゃんが僕の胸に飛び込んできた。

それから互いに見つめ合い、互いに唇を重ね合わせた。

誰もいない屋上、星が散らばる空のもと、ひとひらの桜の花びらが舞った。

これからも、嬉しくて、ちよつぱり照れくさい……桜色の日常が続いていく。

その日のうちに喜びや幸せを奏で、1日を終え、また繰り返す……ダ・カーポのように。

「ぎゃあああああああ！ 遅刻だあああああ！」

初音島の住宅地にある一軒家……。

そこから響く叫びから一日が始まった。

「ほら、あきみつ明光。弁当は置いといたからちゃんと持って行ってね。お父さんが作ってくれてんだから」

「そんなのはいいから！ 母さんも父さんも何で起こしてくれなかったのさ！」

今大慌てで身支度を整えているのは息子の明光。今年で風見学園付属に上がった。

「起こしたけど……全く起きないんだもん。だから夜中までゲームするなって言ったのに……学生時代から睡眠不足が続くと健やかな成

長を妨げて——」

「ごめん！ 医学的な説教はまた今度で！ じゃあ、行ってきますー！」

「あ、こら明光！」

明光は妻のななかちゃんの声を無視して急いで家を出た。

あはは……随分と騒がしい息子だ。

「もく、明光つたら〜」

「あはは、我が息子ながら忙しいね」

「そういう落ち着きのない所、明久君に似たんじゃない？」

「う……でも、勉強に不真面目なところはななかちゃんに似てるじゃん？」

「それは明久君も同じだったじゃん」

はい、その通りでした。

「あ、私はそろそろ病院の方に行かなきゃ」

「じゃあ、僕はさっさと家事を片付けなきゃね。昼近くから忙しくなるし」

「あはは。お店のオーナーは大変だ♪」

「そつちほど引つ張りだこじやないけどね」

僕らは互いの学校を卒業してから2年ほどで結婚した。

いや、色々大変な日々だったよ。まず結婚に当たって、ななかちゃんの両親の説得。

ななかちゃんの親にはあいさつできても、僕の両親というか、家族はこつちにはいないから色々怪しまれるところもあったし。

まあ、そうでなくても、ななかちゃんのお父さんから無言のプレッシャーをかけられて胃が痛くなったけど。

そして結婚してからも最初はマンションでそれぞれの仕事をこなすだけでも大変だったけど、何年か経ってようやく落ち着き、ななかちゃんは今じゃ児童を専門とした看護師。

僕は商店街に店を出して、そのオーナー。ちなみに店の名前は『July Rainbow』。

七月の七光りという意味でつけた。なんでこの名前か？
それは察して欲しい。

とまあ、とにかく僕もなかなかちゃんも互いの夢を実現し、今では子供もいて毎日賑やかな日々さ。

ちなみに義之や親友たちも初音島で暮らしてるが……それはまたいづれ話すとするかな。

「さて、今日も忙しくなるな」

僕はいつもと同じ日常を歩み始める。

これからもきつと同じ日々が続く。それはダ・カーポのように。いつまでもこの時間を奏でていく。